日本戯曲全集
第四十七卷

久米正雄
横光利一
邦枝完二
北尾龜男
鈴木泉三郎

現代篇第十五輯

東京
春陽堂版

「歸去來」の伊澤・御橋公

「地藏敎由來」鎌會にて里見氏久米氏等演

「安政小唄」新國劇の 久松 中井

「安政小唄」の舞臺面

「食されたもの」畑中一座演

「谷底」の花柳・藤村

「次郎吉懺悔」澤田正二郎の次郎吉

「生きてゐる小平次」の守田勘彌・尾上菊五郎

久米正雄

邦枝完二

北尾龜男

鈴木泉三郎

日本戲曲全集　第四十七卷　目次

久米正雄篇

北尾龜男篇

久米正雄篇

地藏敎由來（喜劇一幕）

人物

彌三郎　漂ひ人。後に敎祖。

嘉平
源次　}村の博徒。後に使徒。
勘吉

村の人々多勢　跛者、盲者、啞者を交ふ。

時代

今は過去となれる明治の末葉

場所

東北地方なる山中の僻村

舞臺

村端れなる小さな廢祠の前。街道を前にし、杉の木立を背にす。祠はもと地藏尊を安置したるものにして、古びたれど戸扉破るゝに至らず。

第一場

或る村の博徒、嘉平、源次、勘吉の三人は、各々祠の段に腰をかけ、柱に凭りかゝり、及び地上に蹲つて、話をして居る。

嘉平　何しろ飛んだ目に會つたなあ。

源次　此の賭場初まつて以來の事だ。

勘吉　考えるだけでも胸糞が惡い。

嘉平　今朝彼奴が行つちまふ時、何故一と思ひに殺つちまはなかつたかなあ。

源次　さうよ。此の××村で名うての博奕打が三人も揃つてゐ乍ら、名前も知れねえ通りがゝりの旅人風情に、さんざつぱら賭場を荒らされて、有り金殘らずふん奪くられちやあ、賣つた顏が立たねえや。

勘吉　俺も實は口惜しいから、一つ此奴を……と思つたんだが、何しろ向うは會體が知れねえし、餘り手際が甘えもんで、すつかり氣を吞まれて了つたのさ。

嘉平　何しろ箆棒に甘え奴だつた。

源次　賽ころにかけちやあ天狗さま見てえな奴だつた。

勘吉　ことによると地藏さまの生れ返りかも知れねえ。

嘉平　全く人事とも見えねえ奴だつた。かぶせた茶碗の瀬戸を透して、中に賽ころの星が見えるつて云ふ俺の目さへ、血走つて見別けがつかなくなる程、彼奴のやり方は素早かつた。

源次　いつも俺の振り上手で、今度こそは丁にと振つた積

りでも、彼奴が乍と云やあ全く乍だ。俺あ一昨年北の國へ行つたが、どの漁場でもあんな奴にあ會はなかつた。

勘吉　今度こそ今度こそと思つて、盛り返さうと焦つてる中に、とう／＼朝になつて了つてから、氣が附いて見れあ俺たちの金あ、一文殘らず彼奴の膝許だ。俺あ奴が「氣の毒」だとか何とか云ひ乍らざら／＼錢を搔き込むのを、餘りの事でぼんやり見てゐたよ。ことによると口が開いてたかも知れねえ。

嘉平　ぼんつくのお前の事だからその位の事はあつたらうよ。

源次　さう云ふ哥兄の顏も餘り冴えてなかつたぜ。

勘吉　敗けたつて元氣を落した事のねえお前が、まだそんなに落膽してるぢやねえか。

嘉平　實を云ふと俺もちと驚いたよ。――一體彼奴あ何者だらう。

源次　ほんとになあ。――一體彼奴の來たのは午の刻を廻つてゐた。丁度俺のいつもの勝負運が盡きる時刻だつた。此の社の中でやつてゐると、不意に此處の戸を開けた奴がゐる。俺あ勝負に氣を取られてる暇に、駐在所の手でも入つたか、夜廻りの火の番にでも見つかつたかと、吃驚敗亡して逃げかゝると、奴あ厭に落着いた手附きで俺達をとめやがつて、その言ひ草がかうだつた。「まあ皆さん。さう驚きになるにや及びやせん、わしは御覽の通り旅の者です。只今此處を通りかゝると、丁度お堂がありますので、ことによつたら軒下で、一夜の雨露を凌がうかと、暫く休んで居りますと、何處やらでころ／＼と賽の音がしますので、わしも元來が大好きな道ですから、思はず入つて來てあなた方をお驚かせ申しました。どうか續けておやんなせえまし。而して見物させて下せえまし。」

嘉平　「そんなにおめえ好きなのか。好きと聞いちあ賴もしいや。それぢやあどうだい、見てゐるより一つ入んねえ。おめえぢきに面白くなるぜ」と。俺あ直ぐさう云つた。あの時あ一つ甘え鳥が引掛つたつもりだつた。而して一昨日の藥賣り見てえに、まんまと捲き上げてやるつもりだつた。

勘吉　つゞいて俺もかう云つた。「勝負は時の運だ。おめえがすつかり勝たねえとも限らねえ。一つやつて見たらどうだ。」俺もあん時あうまく口車に乘せた氣だつた。

源次　すると奴あ「敗けると路用がなくなつちまつて、乞食にならなきあならねえから」とか、「ひどく皆さんが甘さうだから」とか、しぶ／＼云つた揚句の果に、やつと仲間入りをしたつけが、三四囘勝たしてやつて、又一二囘取つちめてやつたと思ふ間に、奴あにや／＼笑ひ乍ら

ぐん／＼勝ち出すと來るぢやねえか。

嘉平　野郎いつか運がぐれるだらうと、一生懸命で突つかかつたが、とう／＼今朝まで勝ち通しよ。

勘吉　餘り馬鹿げた敗けやうなんで、俺あ腹も立たなかつた。

嘉平　全く一體何處の野郎だらう。

源次　ほんとに天狗見てえな奴だ。

勘吉　ことによると此處の地藏尊の使ひかも知れねえぜ。あれ位なら神業と云つて差支ひはねえ。

源次　さうよなあ。俺達に毎晩お社を荒らされるんで、懲らしめの爲にお姿を現したのかも知れねえ。

嘉平　馬鹿云ふな。あれあ正銘の人間だよ。高が賽ころが甘えだけぢやねえか。俺だちだつて素人から見れあ、神業位の事はすらあ。

源次　でも餘り甘すぎたぜ。何だか三人とも魔法にかゝつたやうな敗け方だつたからなあ。

勘吉　さう云へば眉つきが何處か地藏樣に似てゐたやうだ。

嘉平　嘘う吐け。おめえのぼんつくな眼で見れあ、地藏さまよりあ、町の私窩(ぢごく)に似てるだらう。——馬鹿め。あれあ人だ。人に違ひねえぢやねえか。今時地藏尊の生れ返りなんぞがあつて堪るかい。馬鹿も休み休み云へ。

勘吉　哥兄さう怒るなよ。今なあ冗談だあな。誰も心から地藏樣だとなんざ思つちやゐねえ。

源次　まあ默つてゐろよ勘吉。哥兄あ、ちと斜めなんだ。然しそれも無理あねえや。

嘉平　おめえこそ餘計な事云ふな。默つてゐろ。

源次　おいよ。默つてゐるよ。

（沈默、三人ともせう事なしに煙草を吸ふ。）

勘吉　何か昨夜の金をとりかへすやうな、甘え事はねえかなあ。

源次　さうよなあ、俺あ あれが無けれあ、今日から商賣に出られねえや。

嘉平　默つてゐろ。俺が今考へてる處だ。

（又沈默、勘吉と源次煙草を吸ふ。）

勘吉　どうだ哥兄、うめえ考へはねえかな。

源次　ほんにどうか考へ出して呉れろよ。

嘉平　（ふと顏をあげて）ふむ、さうだ。うめえ事を考へ出した。

勘吉　どんな事だい。

嘉平　おめえ達あ今地藏尊のお使はしの話をしてゐたな。俺あそれから思ひついたんだ。

源次　ついたつてどう思ひついたんだ。

嘉平　地藏尊のお使はしを見附け出さうと思ひついたん

だ。

勘吉　では昨夜の奴を追ひかけるのか。

嘉平　さうぢやねえ。新らしく地藏尊のお使はしを作るんだ。

源次　どうして作るんだ。

嘉平　此處に待つてゐて、通りすがりの馬の骨をたぶらかして、地藏尊の化身だと祭りあげるんだ。厭應なしに地藏樣にして了ふんだ。而して村の人たちに地藏樣の生れ返りが現はれたと云つて布令廻るんだ。さうすれば馬鹿な百姓共は、有難がつてきつと賽錢を投げるに違ひねえ。たとへ賽錢を投げねえとした處が、奴等を一時でも馬鹿にしたと思やあ、いゝ娯みだ。

勘吉　だがどう云ふ風にして見知らぬ男を地藏樣に祭り上げるんだい。もつと詳しく聞かなきあ、どうも腑に落ちねえ。

嘉平　それあ俺が此處に待つてゐて、よさゝうな奴が通りかゝつたら、かう云つて其奴を誑らかすんだ。昨晩俺が此堂にお籠りしたら、此處の地藏が夢枕に立つて、今日已の化身が前を通るから、その人に村のいろ〳〵な難儀を救つて貰へつて云つたつて、どうしても拜み倒して了ふのさ。

勘吉　併し其奴が自分でさうだと思ふかね。

嘉平　さうかも知れねえ位に思ひ込ませるのさ。先づ俺が僞盲目になつてゐて、其奴に撫でゝ貰ふと忽ち癒つたふりでもすれあ、奴あ自分にそんな力があるのかと、やつと思ひ込まねえ事もあるめえ。そこらは俺がうまくやるよ。

源次　して村の人に信用させるにはどうするんだ。

嘉平　それにあおめえ達の手を借りなくちやならねえ。なに雜作もねえ事なんだ。先づ俺がうまく男を地藏尊にして了つたら、急いで村中を布令廻るから、おめえ達も其時全く知らねえ振りをして皆の後からついて來ねえ。而すれあ俺が皆集つた所で、御利益を述べ立てるから、其時はなあ源次、おめえ急に「嘘だ、嘘だ」と叫び出すんだ。すると俺は神樣に云ひ含めて置いて、「そんな事を云ふ奴には神罰立ろに下つて啞となるぞ」と云はせるのだ。そしたらおめえは急に啞になつた振りをしなくちやいけねえ。いゝか、解つたか。而して先づ神樣の靈驗を示すんだ。

源次　うむ。そいつは面白い。宜しい。引受けた。

嘉平　それから勘公。おめえは又暫らくして、「詐欺だ、瞞りだ。警察樣へ行つて云ひつけて來る」つて驅け出すんだ。すると又俺は神樣に「そんな事を云ひ附けに行く奴の足は跛になれ」と云はせるから、其時おめえは急に躄になつた振りをするんだ。さうすれあ村の奴等あ驚いて

了つて、僞神樣が何を云はうと、きつと信用するに違えねえ。而して信用しちまへば、俺が賽錢を上げろと云へば、神佛が欲しくてならねえ連中のこつたから、きつとばらばらと來らあ。さう來れあ〆めたもんぢやねえか。僞神樣にその中僅かのお供へをして、あとは俺達が着服するさ。

勘吉　成程、そいつは面白さうだ。餘りよくねえ役廻りだけれど、どつちへ轉んでも損はしねえ。一つやつて見るとしようか。

嘉平　さうと定まつたら、早速仕事に取りかゝるとしようぜ。愚圖つくなあ俺あ大嫌えだからな。

源次　よし來た、合點だ。

勘吉　哥兄、先づおめえ甘くやつて吳れろよ。

嘉平　俺あ大丈夫だ。細工は粒々仕上げを見るがいゝ。鎌で燈心草を刈るやうにうまくやつて見せるから。

源次　(下手の方を見て)　あれ、さう云ふ中に向うから一人やつて來たやうだぜ。

勘吉　何だか林の中を縫つて來るんでよく見えねえが、ちらと見えた頭と手の邊りが、朝日で金色に光つたぜ。

源次　今から後光がさす譯でもあるめえが、神樣にはいゝかも知れねえ。

嘉平　兎に角おめえ達は見つけられちやあ、具合が惡るい。社の後ろに隱れてゐて、俺の手際がうまく行きさうだつたら、何食はぬ顏で村へ歸つてゐな。いゝか。

源次　よし來た。

勘吉　うまく賴むぜ。

(二人は社の後ろへ入る。嘉平眼がつぶれた振りをなし、そこの祠前につくばひて、人の通りかゝるのを待つて居る。間。遠くから手風琴を鳴らす音が近づいて來る。やがて賣藥商登場。金モール附の帽子と洋服を着て、手風琴を肩から下げてゐる。)

藥賣　(ゆるやかに手風琴をひき、且つ唱ふ)「濟生藥館目藥は、一度ひさせば跡もなく、……オイチニ……」(嘉平に一瞥を與へて)やれ／＼、盲目さんか。おまへさん早く俺の目藥で癒しやあ、さうはならなかつたらうが、可哀さうに……(行き過ぎる。嘉平何もせずに嘲笑ふ。やがて藥屋は唱ひつゝ去って了ふ)「逆上目爛れ目トラホーム、一夜に潰れる風眼も　……オイチニ……」

(唱聲遠ざかり行く。嘉平くつ／＼笑ひ出す。二人社の後から出て來る。)

源次　哥兄、どうした。

勘吉　何故笑つてるんだ。

嘉平　だつてあんな金モールの藥屋を神樣にするなあ、土龍を豚にするより六ヶ敷いや。あいつ等の藥で、この俺

樣の目が癒つて堪るかい。
源次　さう云へば彼奴の顏からして、僞の廢兵にもなれさうがねえ。神樣にしても、まあ貧乏神位だ。外の神樣になるにや、鬚があんまり土手の芒だ。
勘吉　（下手を見て）さう云ふ中に又一人やつて來たぜ。何だかひどく草疲れた歩きつきだなあ。
源次　さうよなあ、丁度おめえが首をくゝられに行く時見てえだ。
勘吉　緣起の惡るい事あ云ふなよ。俺あこの上惡るくなつても、蹇になるだけの事だからな。まさかに首はくゝられめえよ。
源次　まあ俺も直ぐ啞になるんだから、今の中に減らず口を叩いて置くのさ。
嘉平　餘計な事を云はねえで、さつさと隱れろよ。もう愚圖愚圖してると見附かるぢやねえか。
源次　よし來た。行くよ。
勘吉　こん度こそうまく賴んだぜ。
（二人は又社の後に隱れる。嘉平も亦僞盲目となり、社前に這ひつくばふ。間。日が影つてくる。やがて一人の漂泊者（彌三郎）、重たい足を曳きずり乍らやつて來る。一癖ありげな顏付、そのくせ何處となくオヅオヅした所のある若い男。通りかゝつて祠を見、嘉平には目も吳れず、その段の所へさも疲れたと云ふ風に腰を下ろす。）
彌三郎　（ほつと息を吐いて）あゝ疲れた、疲れた。それも其の筈だ。今朝から一粒の飯も食はないで、十里近く步いたんだもの。もう此先き一足も步けやしない。
嘉平　（進み寄つて）もし〳〵、あなた樣。
彌三郎　何だ、盲目か。何用があるのだ。
嘉平　あなた樣は只今南の方からおいでになつたのでございますか。
彌三郎　うむ、さうだ。わしは南から來た。
嘉平　それから只今は朝の辰の刻でございませうな。
彌三郎　わしは知らん。辰の刻と云ふと今の時間にして何時頃の事だ。
嘉平　左樣でございます。今の時の十時で。
彌三郎　ではまあそんなものだらう。
嘉平　さやうでございますか。では、あのあなた樣が、辰の刻にお一人で南から此の社の前をお通りになつた方でございますな。
彌三郎　左樣、わしの外にはないやうだな。
嘉平　それでは貴方は紺の盲縞の御衣裝を纏うておゐでゞせうな。私は御覽の通り盲目で、少しも見えないんでございますが。

彌三郎　(苦笑して自分を顧み)　ふむ、いかにも紺の盲縞の襤褸を着てゐる。

嘉平　お年の頃は三十位でございませうか。

彌三郎　まあそんな所だが、厭に精しく問ひ訊すね。まるで仙臺の控訴院さま見たいだ。

嘉平　(急に飛びすさつて平伏する)　では貴方さまに間違ひございません。どうぞ實をお知らせ下さいまし。貴方さまは私の待つてゐた御地藏様の御化身でございませう。どうぞさう仰しやつて下さいまし。

彌三郎　わしが地藏尊の化身？　妙な事を云ふね。どこからそんな事を考へるのか。わしにはさつぱり譯が解らん。大方小松原に生えた夢茸でも食つて、醒め乍ら夢でも見てるのだらう。

嘉平　いえ〳〵どう致しまして。貴方様は全くそれに相違ございません。

彌三郎　何を云つてるんだ。お前は今朝蓴菜沼の濁り水で顏を洗つたんで、まだ昨夜の夢の殘りが醒めないんだよ。

嘉平　いえ〳〵昨夜見た夢は夢で、夢に違ひありませんが、今此處においでの貴方は貴方で、御地藏様に違ひありません。

彌三郎　益々妙な事を云ふね。おまへは向ひ山の白狐にでも憑されてゐるんだよ。でなきあほんとの氣狂ひだ。

嘉平　いえ〳〵、憑されてもゐなければ、氣狂ひでもありません。私の申す事はすつかり筋道が立つて居ります。

彌三郎　ちつとも立つちやゐないぢやないか。人を捉へていきなり地藏だの何だのつて、地藏様に鴉がとまれあ、十八島田が花嫁になるつて云ふが、鑄掛屋の息子が草疲れたからつて、石頭が圓くなるて云ふ話は扇屋の爺さまにも聞いた事はないよ。

嘉平　まあお聞き下さいまし。(間)　私はもと此近在きつてのあぶれ者で、此間迄あ神佛のかの字も云つた事はなし、今考へれあ勿體ねえ話ですが、此處の地藏だつて石ころ同然に考へてゐたものですから、二三日前ふと此處を通りがゝりに面白半分お地藏様へ小便をおひつかけ申しやした。すると其晩から不思議にも急に其處へ熱が出やして、七轉八倒の苦しみをした末、眼迄がこんなに潰れました。それでこれあきつと地藏様の罰が當つたに違えねえと、急に神罰が恐ろしくなり、それから七日と云ふもの、此の堂にお籠りしてお詫びを致しやした。すると昨夜と云ふ滿願の晩でございます。

彌三郎　(話に非常な興味を感じて)　ふむ。滿願の晩に。――何かあつたかな。

嘉平　はい。ございました。私は腹が減つたのと疲れたので、此處の柱に凭れたまゝ、ついうと〳〵と寢入つたも

のと見えます。すると眞夜中頃頭の上にぼんやり明りがさすので、驚いて眼を上げて見ますとその緣とも白ともつかぬ御光の中に、一人の眉毛の白い老人が立つて居りました。而して私を見ると急に進み寄り乍ら右手に持つてゐた通草の杖で、したゝか打ち据ゑるのです。私は一目でそれが御地藏様だと解りましたから、平に恐れ入つてお打ちになる儘にお罰を受けて居りました。只不思議な事にはあれ程打たれても、少しも痛くないのです。で暫らく打たれて居りますと、その老人が仰しやるのです。

彌三郎　ふむ。

嘉平　「嘉平、おまへは眞に悔悟したと見ゆるな。善哉善哉、おまへの心栄えに愛でゝ、わしは罪を許して遣はす。おまへの眼も、明日わしの身代りをやつて癒してやるぞよ。その身代りと云ふは年の頃三十前後で、盲縞の衣を纏ひ、辰の刻に御堂の前を南から北へ通る筈ぢや。その人に頼んで、眼を撫でゝ貰へば、今迄の盲目は九月の沼の霧のやうに散るは必ずぢや。その人或ひは言を他に外らして、わしの身代りぢやとはえ云ふまい。されど心をとめて欺かるゝな。その人には誠に神の力が在つて、數數の不思議を現はすぞよ。何事もみ心の儘ぢや、何事も見透しぢや。而しておまへの眼を癒すばかりか、村の難儀も救うて下さらうぞ。よくお頼み申せ。ゆめ〱怠つて見失ふな。」と云つたかと思ふと、老人の姿は夕方に飛ぶ五位鷺のやうに、ふは〱と中空へ消えて了ひました。ふと我に歸つて見ますと、私は矢つ張りお堂の中に寢てゐて、老人の消えた方には、もう明け近いと見える節穴が仄やり白く見えました。それで私は起き上るなり、今か今かと貴方様のお通りを待つて居りました。どうぞ御本身をお明しになつて私の眼をお癒し下さいますやう、どうぞお願ひ申し上げまする。

彌三郎　はゝゝ。馬鹿を云つては困る。わしにお前さんの眼を癒す力なぞがあつて堪るものか。そんな力があるなら、今朝からかうして空腹をかゝへて、當もなくほつき歩いてなぞ居りはしないよ。私は地藏様の身代りなぞではないよ。私は此處から三十里西南の、柳津から來たものだ。

嘉平　さう〱、夢の老人もさう仰しやいました。

彌三郎　しかも貧乏な鑄掛屋の息子だ。

嘉平　それも夢知らせの通りでございます。

彌三郎　昨日親父と喧嘩をして家を飛び出した野良息子だよ。

嘉平　その親父様と云ふのが、氣の荒い廬遮那佛さまで、貴方様を此處にお寄越しになるため、わざと辛くなすつたのでございます。それもみんな貴方をお遣はしになつ

て、村を救つて下さる有難い思召なのでござります。

彌三郎　俺あ毎日居酒屋に入り浸つてゐて佛様の話は聞いた事がないよ。

嘉平　いえ滅相な。ちやんと三世相にも書いてあります。そんな事をなさるのは、すべて凡夫と見せかける上邊だけの事で、あなた様の父御様もそれなのでござります。それも夢知らせに御座りました。

彌三郎　もつと何か無かつたかな。

嘉平　貴方様に仰しやられると思ひ出しますので、へえそれからと……えゝ……ございました。何でも、思ひ違ひかは知りませんが、その居酒屋と云ふのは、村端れの椎の木の傍でございませう。而してそこにはまだ水氣のある後家さんが確かおゐでゞせう。

彌三郎（少し驚いて）へゝえ。それぢやその夢知らせつて奴も、本當だと見えるな。成程その通りだ。

嘉平　それに貴方さまも、へゝえ、あの、お惚れなすつた筈ですがな。

彌三郎　まあそんな所だつた。こいつよく知つてやがるな。

嘉平　それから又盧遮那佛さまもお惚れでございましたな。それが親子喧嘩の基でございませう。

彌三郎　おまへそこ迄聞いたのか。そいつは益々やり切れないな。（頭を掻く）

嘉平　さうお恥ぢなさるには及びません。あの女の方は、あれで又、觀音様でございますよ。

彌三郎　どうだか知らねえが、全く觀音様と云はれても恥しくないやうな女だつた。

嘉平　それもみんな貴方を此處へ救ひにお遣しになるためだつたのでござりまする。

彌三郎　何だか知らねえが、餘計な事を知らして歩く奴がゐると見える。何だか少し薄氣味が悪くなつて來た。こんな處にあ長く居られない。さつさと行つて了ふとしよう。（立ち上る）併し腹は減るし、足は痛えし、一足も歩けさうもねえ。おいお前さん、何か食ふ物は無いかね。

嘉平　今ぢきに差上げますでございます。が、どうかその前に鳥渡私の眼をお癒し下さるやう、偏へにお願ひ致しまする。

彌三郎　そんな力は俺には無いよ。

嘉平　いえ只觸つた丈で宜しいんでございますから。

彌三郎　ぢや觸つてだけはやるが、癒らうが癒るまいが私は知らないよ。いゝかい。

嘉平　はい結構でございます。

彌三郎　其代り觸つたお禮には何か食ふ物を持つて來て呉れないか。握飯でいゝ。

嘉平　はい。畏りました。いくらでも差上げます。

彌三郎　そんなに澤山はいらねえが、二つ三つ。——いかい、それは眼が明かなくつたつて持つて來て呉れろんだぜ。

嘉平　宜しうございます。

彌三郎　よし、その約束は濟んだと。（近よつて）ぢや觸るよ。いゝかい。ほらこれが私の手だ。

嘉平（手を押し頂き）へえ、有難うございます、まるで鬼ヶ嶽の谷間の水晶のやうに涼しいお手でございまするな。

彌三郎　水晶だとすれあ、餘り出來のよくねえ、罅入り水晶だ。——いゝかい、さあ觸るよ。（彌三郎何氣なしに嘉平の眼に手を觸れる。間）

嘉平（突然目を開く。而して立上つて四邊を見廻す。大歡喜）あ、開いた。あ、開いた。すつかり見える。何でもかんでも見える。（急に彌三郎の前に跪いて）難有うございます。難有うございます。生神樣、生佛樣。

彌三郎（呆然と見とれて）ほんとに開いたか。（自分の手を見る）變りはない。不思議だなあ。

嘉平（何も四邊を見廻し乍ら）すつかり見える。あれ、村長さまの白壁から、向ひ山の杉の穗先まで見える。遠くは南に晴れ渡つた那須の烟りも見える。近くはお種婆が作つた、十六提豆の蔓まで見える。（再び跪いて）難有うございます。難有うございます。

彌三郎（猶も考へ込んで）俺はいつこんな力を得たのだらう。不思議だ。不思議だが事實に違ひない。夢でもない。狐に憑されてるのでもない。して見ると事實、俺には不思議な力が在るのかしら。それを今迄氣がつかず、使つて見もしなかつたのかしら。

嘉平　生神樣、ではお約束通り、早速御禮に差上がります。どうぞ暫らくお待ち下さいまし。村の人たちにも知らしてあげます。而して生神樣の御來仰を拜ませてやります。どうぞこの御堂の中で、暫らくお休息下さいまし。そこの御地藏樣には、白い衣が着せてある筈でございます。夢知らせではそれを着せ申せとの事でございました。どうぞお召しなすつて下さいまし。では行つて參ります。他へいらしては困ります。

彌三郎　行きたくても、このすき腹では行かれぬわ。ぢや待つてゐるぞよ。

嘉平（堂扉をあけ）さあどうぞ此の中で。

彌三郎　何でもいゝから握飯を早くして呉れ。（堂内に入る）

嘉平　畏りました。では御免下さいまし。（堂扉を閉める。而して恭しく一拜して、立上る。後ろを向いて赤い舌を

べろりと出す）

源次／勘吉（堂の後ろから出て小聲に）哥兄！　甘く行つたな。

嘉平（二人を制して、猶も小聲に）まだゐたのか。それぢや早く。いゝか。

源次／勘吉（よし來た。賴むぜ。

（三人急いで其場を去る。長い間。閑古鳥鳴く。）

彌三郎（戸を開けて、身を現はす）俺はほんとに神樣になつたのかしら。

（それに答ふるやうに閑古鳥の聲。）

——幕——

第二場

同じ場面。一二時間後のことなり。嘉平先頭に立ち村人多勢を引連れ來る。

嘉平（皆を顧み）さあ、活神樣の居らつしやるのは此のお堂の中だ。先刻わしが御休息をお願ひ申して置いた筈だから、確かにおゐでになるだらう。今、嘉平が皆の衆に拜ませ申すから、そこに跪かつしやい。

（皆々跪く。）

嘉平（堂扉の前にて）もし／＼活神樣、中におゐでゞござりますか。嘉平只今戻りました。

彌三郎（中にて）おう歸つたか。して約束の物は忘れまいな。

嘉平　へえ／＼、忘れる段ではござりませぬが、村の婆たちに話した處、さう云ふ靈驗な神樣に上げるのでは、普常の米では不可めえから、お祓ひをした新穗を拔いて搗き、鎭守樣の御神木を伐つた薪で焚いて、やがて持つて來る筈でござります。どうぞ少々お待ち下さいまし。

彌三郎（中にて）それには及ばなかつたぞ。

嘉平　でももう少しの御辛棒でござりまする。で、どうかそれ迄の間に、もう一度村の人達の前で、御奇蹟をお見せ下さるやう、改めて私からお願ひ致しまする。

彌三郎　わしはもうその不思議を現したくない。今日は許して呉れ。

嘉平　いえ、ほんの鳥渡で宜しうござりまする。先刻のやうにして下されば大丈夫でござりまする。嘉平が身を以て請合ひまする。決して御迷惑をお掛けしません。

彌三郎（中にて）ではどうともお前の好きにするがいい。

嘉平　難有うござりまする。（皆を顧み）さて皆の衆。神樣は今日はお力を見せるのに氣が進まぬと仰しやるが、嘉平がたつてのお願ひで、三つだけ見せて下さるとの仰せだ。その一つはもう嘉平の風眼を癒したによつて、あ

とたつた二つだ。氣をとめてよく拜み見なされ。
人々（口々に）難有うござりまする。
嘉平　では活神様、只今お扉をお開き申し上げます。皆の衆頭を下げさつしやい。
（人々低頭する。嘉平扉を開く。堂内より白き衣を纏ひて、出來るだけ威儀を整へたる彌三郎、しづ〳〵と現れる。皆は仰ぎ見る。）
源次（群集の中より突然進み出でゝ）はゝゝゝ。これあ何の事だい。嘉平おめえ冗談も大概にしろよ。神様々々ちうから、どんな偉い物が出る事かと思へば、高が只の人間でねえか。これで身體が金色だとか、額が夜光の石見たいにでも光つてれあ格別、それと俺達の相違は白い衣を着てるだけぢやねえか。
嘉平　馬鹿を云へ。神様が凡夫の姿でお現れになつたのだ。そこが活神様たる所なのだ。馬鹿を云ふと神様にお願ひして、おまへの減らず口を啞にして見せるぞ。
源次　これあ面白い。さあ、するならして見ろ。村一番の口達者で、喧嘩口論揚足取りで、町の議員様さへ敗かした俺だ。その口が塞がるものだか、やれるものならやつて見ろい。
嘉平　神さま、彼奴めあんな事を云うて居ります。どうか神様のお力で、一つ懲らしめのため啞にして下さいまし。
彌三郎　神は人を啞にするやうな事は好まない。神の力はいつも善に働く。
嘉平　いえ、惡を懲らしめるのは、卽ち善ではござりませぬか、お躊躇なくお罰し下さい。
源次　やい。間抜神、屎神、あんぽん神。貴様の通力では出來めえ。今の世の中にそんな事があつて堪るか。やれるものならやつて見ろい。（喚く）
彌三郎（試めしにやつて見ろと云ふ風で）神を疑ふ不屆者、まだ喚き居るか。おまへの口は啞にならうぞ。
源次（今迄喚いてゐたのが、急に聲を吞み、只管悶くのみ）うゝゝゝゝ。
嘉平　それ見ろ、神罰思ひ知つたか。どうだな、皆の衆こんなに靈驗あらたかなのだ。（皆々驚嘆する）神様難有うござりまする。
彌三郎（おのが力に驚きて、呆然うなづくのみ）
嘉平（源次に）どうだ恐れ入つたか。
源次（跪坐低頭、手を合して頻りに許しを乞ふ）
嘉平　悔悟の實が見えたら、俺からお願ひして許してやる。それ迄はそこで拜んで居ろ。おまへは毎も賽ころの振り方を誤魔化すから、そんな目に會ふのだ。何なら一生さうしてるがいゝ、村中すつかり靜かにならあ。
勘吉（急に群集の中から叫び出す）飛んでもねえ奴等

だ。魔法使ひだ。それに違えねえ。やたらな魔法は御法度だ。俺は警察さまさ行つて訴へてやる。兄弟を啞にされて默つちやゐられねえ。さうだ。すぐ駈けてつて云ひつけてやる。（走り出す。皆々其の方を見る）

嘉平　又あんな事を云ふ奴があります。どうぞ早速御罰しなされて、走つて行く處を蹇になすつて下さいまし。

彌三郎　（今度は遲疑せず）そこに走りゆく者走ることならぬ。蹇にならうぞよ。

村の人々　（口々に）蹇になつた。ほんとに蹇になつた。神罰だ、ざまあ見ろ。今になつて頻りにあやまつてゐる。やあ〱此方へ這つて來るぞ。

勘吉　（這ひ乍ら入り來る）どうぞ御許し下さいまし。もう決してお疑ひ申しやせん。心を入れかへました。どうぞお許し下さいまし。（手を合せて賴む）

嘉平　おまへも源次と同じく、暫らくそこに拜んで居れ。悔悟の實が見えたら、俺から許しを願つてやる。おまへは一體平常から町の私窩女を張る癖がある、その罰としては少し永く蹇でゐてもいゝ位なんだ。

勘吉　飛んでもねえ。あれあ皆さん噓でございますよ。神樣、これから心を入れ替へますから、どうかお許し下さいまし。

嘉平　いゝから默つて神妙にしてゐろ。でねえとおめえも啞にして貰ふぞ。

勘吉　へえ〱。（皆に向ひ）全く神樣に違えねえ。私がいゝ例だ。うつかり疑つちや不可ませんぜ。

嘉平　全くだ。貴樣達二人が餘計な疑ひを起したんで、神罰をお下しになるため、今日の奇蹟は三つ濟んで了つた。折角此處へ集つた皆さんの中にあ、ほんとの盲目や蹇がゐて、嘸癒して貰ひたかつたらうが、おめえ達が橫合からそれを奪ひ取つたやうなものだ。皆さんにもお詫び申すがいゝ。

源次　（手眞似で詫びる樣子をする）

勘吉　全く濟みやせんでした。

嘉平　では活神樣、今日はこれだけでござりましたな。

彌三郎　おまへの心通りに致せ。

嘉平　はッ、では御疲れで御座りませうから、これだけに致しまする。（皆に）さあ皆の衆。今日の御靈驗はこれだけだ。でも神樣の力があらたかでゐらせられる事は解つたらう。明日お祈りをして貰ひたい人、後生を賴む人などは、今から賽錢を上げてゆかつしやい。今日の集りはこれきりぢや。

少女　（一人の盲目の老婆の手を曳いて、群をかき分けそこへ出る）あのもし嘉平樣、どうぞお願ひでございます。神樣にお賴みして、私の婆さまだけ特別に目をお癒し下

さいまし。

嘉平　いや駄目ぢや、明日にさつしやい。

少女　いえ、どうぞお願ひでございます。お婆さまはお年ぢやから、明日と云はずに今夜にでも、一目此の世をお見せ申したうございまする。さあお婆さま、活神さまぢや。あなたからもお願ひなされ。

盲目　どうぞ神樣、わしは外に望みはねえだ、やつと育つた此の娘の顏が一目見て死にてえでございますだ。赤ん坊の時見たつきり、十五年見た事がありましねえだ。どうぞ一と目見せて下されや。

嘉平　（當惑して）いくら云つても今日は駄目ぢやよ。

少女　いえ〳〵、神さまぢやなら、お力が限りがある譯はございますまい。又出し吝しみなさる譯はございますまい。お願ひ申しまする。どうぞなう嘉平さま、もう一度ぢや。

嘉平　駄目ぢやと云うたら駄目ぢやと云ふに。

彌三郎　（既に大なる自信を得た態度で）これ〳〵嘉平。見れば可哀さうな親子ではないか。折角の賴みぢや、きいて遣はせ。わしが癒して進せる。

嘉平　えッ、それあ貴方さま大丈夫でございまするか。

彌三郎　おゝ大丈夫とも。（低く獨語のやうに）三人まで力が及んだからには、わしに備る何かゞあるのぢや。わしはわしの力を信じ出した。大丈夫ぢやとも。さゝ娘、婆御を此處へ連れて來るがよいわ。

少女　難有うございます。婆さま、神さまの前でございますぞい。

老婆　（彌三郎の前に額づく）南無阿彌陀佛……。

彌三郎　（老婆の眼に手をふれ）可哀さうに昔亭主を亡くした時、餘り泣き過ぎて瞼が附いたのぢやらう。わしが手で撫でたからには、もう涼しうなつた筈ぢや。さあよいか。わしが此の手を三つ叩くと、三つ目に眼があくぞよ。さあ、一イ二ウ三ッ！（手を叩く）

老婆　（急に目開く。呆然として四邊を見廻すのみ）

少女　婆さま。あれ目がお開きなされた。そのやうにぱちぱちして。私が見えまするか。私の顏が見えまするか。

老婆　おゝ見える。おゝ見える。そなたの美しい木槿のやうな顏が見える。これが目ぢや。澄んだ淸水に木欒樹實を落したやうな目ぢや。これが鼻ぢや。雪の岡に兎が蹲つたやうな小高い鼻ぢや。これが脣ぢや。古り沼の隅に咲く睡蓮の花片のやうな脣ぢや。おゝおゝ娘や。わしはもういつ死んでもいゝぞや。

少女　婆さま。（縋りつく）嬉しい。

老婆　わしもぢや。皆んな神樣のお蔭ぢや。

二人　難有うございまする。（皆々感動する）

嘉平 （驚嘆してゐたが、やつと吾に歸り） さあ〳〵これで濟んだ。もうお終ひだ。あとは誰が來たつて駄目だぞよ。

白痴女 （愛らしき乳呑兒を擁へて、群集を掻き分け〳〵出て來る） どいた、どいた、どいた。

其母 （あとから止めるやうについて來る） これどこへ行く。見境もなくどこへ行くのぢや。

白痴女 （彌三郎の前へ進み出で） いゝ子だろ。いゝ子だろ。誰れの子だ。わしの子だ。

嘉平 これ〳〵何で出て來るんだ。こゝは神樣の前だぞ。おつ母あ、早くつれて行け。

其母 はい。さあ叱られるから、こつちへ來いよ。その子をそんなに見せんでもいゝわ。

白痴女 （尙も兒をつきつけて） いゝ子だろ、いゝ子だろ。

彌三郎 一體これはどうしたのぢや。

嘉平 どうしたのでも御座いません。かまはず置いて下さいまし。

彌三郎 かまはうとて、白痴はわしにもどうもならん。白痴は患ひではないのぢや。神の惠みぢやからな。白痴が一番幸せぢや。わしも是より此の女を幸せにする事は出來ん

其母 それは私も望みませぬが、只神樣のお力によつて、此の子の父親が知りたうござります。この娘に聞いても解らず、子供に似よりの男は澤山あつて、どこの誰やら解りませぬ。白痴にもせよ子が出來たのは、大方誰かのいたづらと思ひまするが、一體誰でござりませう。

嘉平 （又心配して） これ〳〵そんな事を神樣に伺ふのではない。

其母 でもあなたは神樣が、村一統の六ケ敷い事は、何でも知らして下さると云つたでないか。神樣が知らんお筈はない。

嘉平 でももう今日は時間外だと云ふに。

彌三郎 （すつかり自信を以て） これ〳〵嘉平、よいわ、よいわ。わしが代つて詮議して遣はす。（間。瞑目して後） 先づ其男と云ふのは、此處に集つた人の中に居る。（皆顏見合す） 其人はもう旣に心の中でひどく苦められてゐる筈ぢや。名を指すは容易いが、罪を輕うするために、わしは其人の名乘り出るのを待たう。さあ早う出ぬか。（皆顏を見合すのみ） では其人に就ての事柄を少しづつ云はう。先づ其男の家は西の方にあつて、南を向いてゐる。而して八輪ぼうの方に松の木がある。親はないが、若い男ぢや。さあこれ迄云うたらもう出ぬか。出ねば名を云はうか。云はれた後の罪は重からうぞ。

嘉平 （そつと傍に蹲つた勘吉に） 誰れもなければあ、おめ

え出ろよ。

勘吉　（同じく小聲で）　おら厭だ。もうこんな役目をしてるんだからな。おめえ出ろ。おめえが罪を脊負ふ番だ。

彌三郎　さあ出ぬか。出ぬのは耳が聞えぬふりをするのぢやな。ほんとに聾にするぞよ。

嘉平　（愈々となれば自分が出る氣で）　誰もないか。無けれあ……。

若者　（群集の中から轉び出て、彌三郎の前に手をつく）　濟みませんでした。

彌三郎　お前だと云ふのは、先刻から解つてゐた。後悔したか。後悔したら改めて此の女に詫びて、子を引取れ。白痴にからかふなぞは惡るいぞよ。其上默つて知らぬふりをするとは猶の事ぢや。

若者　全く申譯ございません。醉つぱらつた紛れについ、その、からかつたので。

嘉平　おめえがそんな事やつたたあ思はなかつた。役場の書記もやり、青年會の幹事もやつたと云ふおめえが。——一體どこでどうしたんだ。

彌三郎　場所は南北の低い所だらう。

若者　はい。さう見透されちやあ、敵ひません。いかにも村端れの屠殺場の窪地でした。高槻の親類へお通夜に行つた歸りの事です。私はぐでん／＼に醉つぱらつてゐました。何から何まで酒の爲めです。丁度薄ぼんやりした月が出てゐました。わつしは街道を何氣なくぶら／＼やつて來ますと、窪地の藁塚の陰で女の唄ふ聲がするぢやありませんか。時節は春で、榛の木の芽の匂ひがして、穴虫も出るちう土がむつと蒸れるやうな晩だつたので、つい誘はれて行つて見ますと——。

嘉平　それからどうした。

若者　なあに、それだけの話ですよ。それつきりなんです。

白痴女　（谺のやうに）　なあに、それだけの話なんだよ。それつきりなんだ。

嘉平　ぢや兎に角おまへは神樣の云ふ通り、罪亡ぼしに其子を引取れ。子まで白痴とは限るまい。引取つて育てゝやれ。

若者　はい。（白痴に）　おい、其子を俺に渡さねえか。

白痴女　厭だよ。厭だよ、私の子だよ。（逃げる）

其母　どこへ行くんだ。お淺、お淺つ子。

（母と若者と女の後を追うて退場する。）

嘉平　（彌三郎に）　いや、色々と難有うございました。では今日はこれ丈に致しまするで御座いませう。

彌三郎　さうか。ではわしは堂に入るぞよ。

嘉平　はツ。（平伏する）

（皆も嘉平にならつて、平伏する。其間に彌三郎は飽く

迄自信ある態度で、堂内に入る。嘉平扉を閉づ。）

嘉平　さあ、皆の衆、賽銭を上げたら退散するがよい。後生を願ふ人は、決して喜捨を忘れまいぞ。

（村の人々、口々に念佛を唱へ、賽銭を投げて去る。遂に嘉平、源次、勘吉のみとなる。）

嘉平　さあもう皆行つて了つた。うまく行つたものだなあ、おい。が、もう芝居をやめてもいゝぞ、二人とも。誰も見てゐる者あねえ。源次も云へ、勘吉も立て。賽銭集めでもしようぢやねえか。

源次　（口をもぐ／＼させるのみ）うゝゝ。

勘吉　哥兄、立てねえ。どうしても立てねえ。

嘉平　何だ。どうしたんだ。巫山戯るなよ。

源次　（頻りに手眞似をし、地面に字を書く）

勘吉　ふざけてるんぢやねえ、全く立てねえんだ。

嘉平　（讀む）何だと、どうしてもくちがきけねえ。ほんとにきけねえのか。

源次　（涙をこぼして點頭くのみ）

勘吉　（泣きさうな聲で）哥兄、俺あどうなるんだ。どうしても立てねえや。おめえどうかして呉んねえ。

嘉平　ふゝむ。さうすると彼奴あ、ほんとの神様かも知れねえ。こりや飛んだ事をしたぞ。

勘吉　ほんとの神様なら、俺あもう一生立てねえだらう。哥兄どうかお願ひだ。早く神様にお願ひして、もう一度もとへ返して呉れ。

源次　（嘉平の裾を捉へ頻りに手眞似にて訴ふ）

勘吉　神様がゐなくならねえ中に、早くお願ひ申して呉れ。俺あほんとに心から後悔しただあ。もう決してこんな眞似はしねえだ。

嘉平　（急に社の扉を開き、其前にひれ伏す）神様。悪うございました。全くお見外れ申しやした。どうぞ其罪は御勘辨下さいまし。而してあの通り悔い改めてゐるのですから、二人をもとにお返し下さいまし。お願ひ申上げまする。

彌三郎　（靜に立現れ）やつと私の本體がわかつたか。

嘉平　はい。わかりました。（平伏する）

彌三郎　では心から悔悟したと云ふのぢやな。

嘉平　あの通り手を合せて拜んで居ります。

彌三郎　では以後その方どもはわしの弟子となつて、わしの爲めに盡すと誓ふか。

嘉平　何でも致しまする。

彌三郎　では許し遣はす。源次も云へ。勘吉も立て。

源次　（急に喋り出す）あゝあゝ、飛んだ目に會つた。天罰たあ全くこの事だ。自分の方で計つた積りが、神様に會つちやあ敵はねえ。うつかりこんな事をやるもんぢや

ねえ。神さまはほんとにゐるんだ。しかもどこにでもゐると見える。

勘吉　（一二度跳ね上つて）もと通りの足だ。これなら縣知事さまの人力車と馳けつくらだつて出來る。東京まで十日で繭賣りに出掛ける事も出來さうだ。俺あやつと安心した。

（三人よろこぶ。間。）

嘉平　（急に手をついて）神樣にお伺ひ申し上げます。貴方さまはもとからお生れ代りで、あんな奇蹟（ふしぎ）をなさる御力があつたのですか。

彌三郎　わしは昨日まで、いや、先刻までそれを知らなんだ。けれども先刻から、自分で自分を信ずるやうになつた。おまへ達がさう信じさせて呉れた。信ずる事を敎へて呉れたのぢや。今わしはわしに力があると信じて居る。卽ち力がある所以ぢや。人々も又わしに力があると信じて居る。卽ちそこにも又在る所以ぢや。信ずる事は在ることと同じぢや。わしは神ぢや、おまへ達の言葉に從へば地藏尊ぢや。明日からわしはわしの力を以て、世を救へ又救ふのぢや。わしは其敎へを、此處の地藏に因んで地藏敎と名附ける。わしは其地藏敎の敎祖ぢや。さあみんな來て、この新らしい敎への主、救ひの主を拜むがいい。わしは神の子ぢや。佛の子ぢや。あらゆるものゝおん主（あるじ）ぢや。救ひを求むるものは來て、わしに聞け。わしを信ずるあらゆるものに、わしは祝福（さいはひ）をさづけてやる。わしは今こそ其力を得たのだ。さあ來れあらゆるもの！來りてわしを拜せよ。

（三人感に打たれて跪拜す。舞臺一面快き綠の光りに包まれ、百舌鳥急に鳴き頻る。一旦歸途に就きたる村人は、握飯を恭しく捧げたる老婆を先頭として再び登場し、堂前にひれ伏す。老婆握り飯を神前に供ふ。皆々跪拜。彌三郎その間に握り飯を一つ取つて頰張り、後ろを向きて靜々と堂内に入る。雉、山鳩、閑古鳥、其他百舌鳥の囀りの中に。）

――靜かに　幕――

心中後日譚（室内劇三幕）

人物

江藤利太郎　實業家

同　ひで子　その妻（もと藝妓）

川田新吉　ひで子の知人

おたみ　ひで子の實母

溫泉宿主人。番頭。女中。按摩。洗濯婆等。醫師。看護婦。巡査等其他。

時代

現代。——第一幕及び第三幕は現在。第二幕はそれより二十年前の過去に屬す。

場所

東京に近き或る有名なる溫泉宿。三幕ともすべて其溫泉宿の一室にて起りし出來事。

第一幕

或る有名なる溫泉宿の古びたれど瀟洒なる一室なり。

正面は廊下を隔てゝ欄干、晝ならば欄干を越えて、前山の風色を見るべし。今は其處の閾に硝子をはめたる障子を閉づ。右手は床、違ひ棚など宜しく、左手は襖にて限らる。靜かなる秋の夜なり。遠く水音聞ゆ——幕あきたる時、舞臺には人無く暗し。やがて一人の女中急いで入り來り電燈を點し、四邊を見廻して去る。しばらくして此家の番頭、年老いたる夫婦の客を案内して來る。客は江藤夫婦なり。

番頭　（襖をあけて導き入れる）ではどうぞこちらへ。

江藤　（後ろに居るひで子を顧みて）さあ、そんな處に愚圖愚圖してゐないで、おまへから先にお入り。

ひで　（默つたまゝ入り來る）

番頭　二階の端の座敷と申しますと、先づ此處でございますが、誠にむさ苦しくてお氣の毒さまでございます。それでも此處は手前共の方で宜しい方の座敷になつて居りますので、へい、もつとも何でしたら、あちらの離屋の方に宜しい部屋もございますが……。

江藤　いや、此處で澤山。こゝが望みなのだ。それでわざわざ二階の端と指定したのだよ。

番頭　へえ、左樣でございますか。それならどうぞ御我慢遊ばして下さいまし。

江藤　（四邊を見廻して）此の家も昔と餘り變りはない

ね。

番頭　左樣でございます。此の舊館の方はなるたけ手を入れずに、增築の方を多く致しますので、此家も大分古びて參りました。

江藤　時代がついて却つてよくなつたよ。（妻に向つて）ねえおまへ。おまへもさうは思はないか。

ひで　（ちつと物思ひに沈み乍ら）　さやうでございますね。（物倦げに四邊を見廻し）　昔とちつとも變りませんね。

江藤　變つて行くのは人の方が早いわけだね。

ひで　（淋しく微笑むのみ、答へず）

番頭　では旦那樣は昔から此家を御贔屓下さいましたので。――

江藤　うむ。俺たちのもつと若かつた時代にな。此のお婆さんも其時分は美しかつた。――さうだ。もうざつと二十年も昔になるからな。ねえおまへ。

ひで　さやうでございますね。――

番頭　へえ、左樣でございましたか。毎度どうも難有うございます。で、其時は御新婚旅行とでも云ふやうな譯でございましたのですな。

江藤　（淋しく笑つて）　まあそんな處さ。

番頭　新婚旅行においで下すつた方は、後々にもよくおいで下さいます。矢張りあの時分の事が、一番忘れられないと見えますな。

江藤　樂しくつても、樂しくなくつても、ね。俺達のは樂しいと云ふ譯には行かなかつた。

番頭　御冗談でございませう。はゝゝ。――で、早速お湯は如何でございます。お浴衣はすぐ後から持たせて參りますから。

江藤　さうだね。入つてもいゝね。

番頭　では御ゆつくり。御免下さいまし。（出て行く）

江藤　秋もそんなに深くない癖に、冷々するぢやないか。矢張り山の中だね。

ひで　此處の障子を閉めませうか。

江藤　もう少し靜かな夜景色を見てゐようよ。星が一ぱいだね。

ひで　河鹿はもう鳴かないのでせうか。

江藤　何も聞えないから鳴かないのだらう。（耳を傾けて）餘り四邊が靜かすぎるね。何だか心の中までしんとして來る。秋は老人の季節だと云ふが、全くほんとだ。――おまへ今日の運動で、いつものリョーマチは起りやしないかい。

ひで　何だか左の二の腕が硬ばりますけれど、お湯にでも入つたら癒るでせう。――お湯と云へば浴衣はどうした

のでせう。氣がきかない家ですわね。
江藤　吾々が泊るには丁度結構だ。(ごろりと横になつて)　湯から出たら久しぶりで三味線でも引かないかい。
ひで　厭ですわ。そんな氣になれやしませんもの。――ほんとに何をしてゐるのだらう。早く浴衣を持つて來ればいゝのに。
江藤　さう急がなくてもいゝぢやないか。どうせ此處へ來て泊ると定つた以上は。――氣を落ちつけて靜かに昔の事でも思ひ出すのさ。もう吾々も慌てないで濟む年になつてるのだからな。
ひで　誰も急いてやしませんわ。
江藤　そんならそれでいゝけれど。――俺はおまへを苦しめに連れて來たのぢやないのだからな。只昔の記念の場所を、二人で靜かに眺めて見たいばかりなのだ。
女中　(入り來る)　お待遠さまでございました。少し今夜は冷々致しますので、どてらも持つて參りましたから、どちらでもお召し下さいまし。
ひで　それはどうも難有う。早速着ますよ。
江藤　老人だと思つて大變氣をつけて呉れる譯だね。
女中　いいえ。どう致しまして、誠に氣がつきませんで。
江藤　時に姉さんは此家へ來てから何年になるかね。
女中　もう六年になります。
江藤　六年か。短いやうで長いものだね。姉さんなぞも此家では古い方だらう。どうだい、此家に二十年も前にゐた人が有るだらうかね。
女中　さうでございますね。二十年前と申しますと、只今の旦那の代にならない前でございますからね。
江藤　あゝ成程、主人が代つたのだね。さうだらうね、もうあの時分年輩だつたから。いつ頃亡くなつたのだね。
女中　もう十三回忌が來年とやらでございます。
江藤　ほう、それも一と昔の事だね。――さうかい。ふうむ、物の解つた、親切な、いゝ主人だつたがね。あの人もそんなに昔死んで了つたのかねえ。
ひで　あの人には隨分世話になりましたつけねえ。
江藤　併し俺にはどうしても顏が思ひ出せない。何しろ二た昔も後だからなあ。――で、その頃の事を知つてゐる人は誰もゐないだらうかね。
女中　左樣でございますね。洗濯番のお粂婆さんは先の旦那の時分から女中をしてゐたさうでございますから、ひよつとしたら知つて居るかも知れません。何なら、お呼び申しませうか。
江藤　いや、別にわざ〳〵呼ばなくてもいゝ。たゞ明日にでもゆつくり會つて見たいと思つたのさ。

女中　ではあとでさう申し傳へて置きませう。

江藤　わざ〳〵さうして呉れるには及ばないが、手隙だつたら話をして見たいつてね。

女中　畏りました。（女中去らうとする）

江藤　鳥渡待つて下さい。まだ用があるのだから。（妻に向つて）お前按摩を頼んぢやどうだい。その方が疲れもよく取れるぜ。

ひで　さうですね。お湯から上つたら、一つ揉んで貰ひませうかね。

江藤　ぢや一つ按摩を呼んで置いて下さい。それからもう湯から出たら休みますから、そこらを片附けて、床を敷いといて下さい。

女中　畏りました。では御緩り暖まつてゐらつしやいまし。お湯壺はお解りでございますか。

江藤　さあ、忘れて了つた。おまへ知つてるかい。

ひで　私も忘れて了ひましたわ。

女中　では御案内致しませう。

江藤　ぢやざつと浴びて來るとするかな。

（女中に伴はれて二人廊下へ出て行く。長い間。女中一人で再び登場。そこらを片附け、寢床を敷く。それから欄干の外の雨戸を閉める。だん〳〵閉てゝ行くに伴れて、其戸の軋る音が遠ざかつて行つて、遂に聞えなくなる。再び長い間。どこやらで時計が眠たげな十時を打つ。）

江藤　（手拭をさげた儘再び入り來る）

女中　（あとから從いて來て）大變お早うございますね。お湯はいかゞでございました。

江藤　いゝ湯だつた。浸つてゐると疲れが指の股からぬけて行くやうだ。底冷えのするこんな晩の湯の味と來たら全く忘れられないものだよ。温泉は秋に限るね。今も湯壺から硝子戸越しに眞つ白い天の川を眺めて、つくづくさう思つた。温泉は全く秋に限るね。

女中　ほんたうでございますわ。ほんたうのお湯治は何と云つても今頃でございますよ。夏は賑かなばかりで、少しも實になりや致しません。

江藤　もう雨戸を立てゝ了つたのだね。

女中　あら、もつと開けて置くのでございましたか。氣が附きませんで、つい――。

江藤　なにいゝよ。閉てたら閉てたでいゝんだ。

按摩　（老いたる盲人、靜に入り來る）今晩は。按摩でございます。お呼びはこちら樣で。

女中　さうですよ。按摩さん。今夜はよく早く來られましたね。

按摩　難有うございます。此頃は滅切りお客さまが少くな

りましたので、私の身體もひどく暇でございますよ。

女中　ではゆつくり揉んで上げて下さいよ。ようございますか。では御免下さいまし。（出て行く）

江藤　按摩さん、こんなに晩くどうも御苦勞だつたね。揉んで貰ふのは私の家内だが、お湯から上つて來るから、暫らく待つてゐて下さいよ。

按摩　これは旦那樣ですか。どうも毎度難有う存じます。こちらへは長く御滯在でございますか。

江藤　いや、直ぐ歸るつもりだ。別に身體がわるいと云ふ譯でもないのだからな。

按摩　もう二三日で紅葉も染まるだらうと云ふ話でございますから、御ゆつくり御逗留なすつておいでになつたら宜しうございませう。紅葉の何のと申した所で、私どもには何の係りも御座いませんが、之から少し奥の湖の方へ入りますと、大變美しいんださうで御座いますよ。

江藤　おまへさんは兩眼とも全く見えないのかい。

按摩　左樣でございます。

江藤　いつ頃から潰れて了つたのだい。

按摩　私が十五六の時ですから、もうかれこれ四十年にもなりますかな。

江藤　それでいつ頃から按摩になつたのだい。

按摩　さうですな。二十五の時ですから、もう三十年も此商賣で暮しました。

江藤　ずつと此溫泉場にゐたのかね。

按摩　はい。ずつと此處で商賣をして居りました。

江藤　さうかい。ふうむ。さうすると儂どもが此前に來た時も、おまへさんは此處にゐた譯だね。

按摩　考へて見ますと、隨分古いものでございますよ

江藤　さうだらうねえ。一所に三十年もゐれば、古いものだからねえ。だが三十年の間には此處も隨分變つたらう。其間には面白い話もあつただらうね。いろ／＼なお客が來るだらうから。

按摩　あると云へばある、無いと云へば無いやうなものでございますねえ。世間話なんてものも、聞いて見れあ大抵同じやうなものですよ。

江藤　たまには變つたお客もあるだらう。

按摩　さう。無いこともありませんね。

ひで　（靜かに入り來る）只今。

江藤　よく暖まつて來たかい。

ひで　えゝ、大變いゝお湯でしたから、いつもよりもつい長湯をして了ひました。

按摩　今晩は。奥さまで御座いますか。毎度御贔屓に預ります。

ひで　おや、按摩さんですか。もう來て下すつたの。ぢや

早速横にならうかね。

按摩　へえ、此の湯の後の按摩と云ふのは、特別に效くものでございますからな。どうぞ早速揉ませて頂きます。

ひで　ぢや、あなた御免なさいよ。

江藤　あゝいゝとも、勝手におやり。

ひで　ぢや按摩さん。お頼み申します。

按摩　へえ、湯上りですから、一つ輕く揉んどきませう。

（ひで子は横になり、按摩にかゝる。間。）

江藤　（按摩に話しかける）ほんとに靜かな晩だね。此頃はいつもかうかい。

按摩　今晩は特別に靜かでございますよ。山に風のないせゐでもございませう。

江藤　若い男女同志ででもあれば、心中でもしたくなるやうな晩だ。

按摩　全くさうした晩でございますな。――當節は諸所方方で心中々々つて行早りますが、此の界隈では近年とんと噂を聞かなくなりました。あの心中にも矢張り流行地があると見えますな。

江藤　さうかも知れない。

按摩　只今の心中といふ言葉で思ひ出しましたが、此處にも大分昔の心中話がございましたよ。何でも二十年も昔のことですがな。處は、旦那方は氣味惡くお思ひなさるか知りませんが、丁度此の家でしてな。――今でも秋になると私はちよく／＼その話を思ひ出しますよ。まだ私も若い時分でした。

江藤　ふむ。どんな心中だつたのだね。

按摩　どんな心中つて、心中に別段な變りはございませんでしたが、――これは奥さんはひどく左の肩が凝つてゐでゞすな。――何しろ心中なんて事がまだ私には珍らしかつた時分なので、まだ覺えてゐるのでございませう。（間）女は何でも藝妓上りの美しい女で、其時はある商人に落籍されて、いづれ正妻になるのだつたさうです。所がその女がまだ藝妓でゐる時分に、固く云ひかはした一人の男があつたのださうです。

江藤　ふむ。よくある話さね。

按摩　何でも小さな呉服屋の若旦那とかで、色の白いすつきりした若い男だと云ふ話でした。

江藤　如何にも心中するにはお誂向きの男だね。それから。――

按摩　私は眼で見た譯ぢやありませんから、一々保證は出來ません。只女中や其他の人たちから聞き合せたばかりなんですからな。――が兎に角、さう云ふ繪のやうな男女が、今日のやうな晩に、此處へ泊り込んだとお思ひなさいまし。

江藤　ふむ、それから。――

按摩　帳場の人たちから見れば、眞正の夫婦づれだかさうでないかは、一目見れば直ぐ解ります。しかし其男女はそれ迄も度々此處へ泊りに來たのださうで帳場ではまだ普通の藝妓とお客の遠出だとばかり考へてゐたものですから、まさかに心中までしようとは夢にも考へてゐなかつたのださうです。

江藤　それがどんな風にして心中したのだね。

按摩　心中の仕方は何でもありません。いづれ湯からあがると女は綺麗に身仕度でもして、二人で別れの盃でも交した事でせう。惚れた同志の事だから、さう云ふ場合の可哀さうでもあり、又憎らしい情様は、いゝ加減に想像されますさあ。先づ酒を呑んでも醉つては來ず、話は益々滅入るばかり。いつ迄經つても名殘は盡きないから、人目にかゝらぬ今の中に早く、――と云ふやうな事で、二人の身體をつなぎ合せ、持つて來た毒藥を二人でぐつと飲んで了つたのです。――二人はやがて苦しみ初めました。通りがゝりの番頭さんが此の有様を見つけたのはそれから三十分許りの後の事だつたさうです。

江藤　可哀さうに。二人は死んで了つたらうね。

按摩　いえ。いろ／＼と手當をした結果、二人はやつと其場の生命だけは取りとめましたが、男の方は藥を多量に飲んだせゐか、翌朝にならぬ中に死んで了つて、女ばかりが殘つたのです。

江藤　はゝあ、女だけが殘つたのだね。

按摩　話と云ふのは是からです。――其中に電報に接して東京から女の旦那がやつて來る。女の母親がやつて來る。と云つたやうな騷ぎでしたが、此の旦那と云ふのが一風變つた人でしてな。

江藤　ふむ。その旦那こそいゝ面の皮だね。さぞ間拔けた顏をしてゐたらうな。

按摩　でつぷりした赧ら顏の、仕事にかけては可なり働き手らしい人だつたさうですが、此人が餘程女に惚れてゐたものと見えましてな。女にそんな踏付けな眞似をされても、腹を立てゝ緣を切ると思ひの外、女が生き殘つたのを大變喜んで、猶其上の介抱を加へ、恢復するのを待つてすぐ家へ引き取つたのださうです。何しろ餘り男の威嚴にかゝはる仕草だてんで、暫らく此處らの評判でした。私共それを聞いて世の中には餘つ程の馬鹿もあるものだと思ひましたよ。

江藤　それから先はどうなつたらう。

按摩　どうなつた事ですか解りません。が、そんな男の事ですから、又女房に間男でもされて知らないでゐるかも知れませんね。

江藤　さうかねえ。其男は餘程鈍馬らしく見えたと見えるな。

按摩　馬鹿でなけれあ、普通の人にあ解らない偉物(えらぶつ)だつたのでせうな。偉物でも何でも、さう云ふ亭主にはなりたくないものですね。

江藤　全くさうだよ。はゝゝゝ。（間）

按摩　奥さん。いかゞでございます。こゝはもう少し強く揉んで置きませうか。もし〳〵、奥さま。（返事なし）揉んで居る中にお眠(やす)みになつたと見える。では今日は此位にして置きますかな。（按摩をやめる）

江藤　御苦勞だつたね。まあ一ぷく付けて行きなさい。今夜はお蔭で面白い話を聞いて、旅の憂さを慰められたと云ふものだ。有難かつたよ。

按摩　どう致しまして。お禮なんぞ仰有られちやあ恐れ入ります。

江藤　（財布から金を紙へ包んで）　之は今夜の療治代だよ。みんな取つて置いてお呉れ。

按摩　（受取つて調べてみる）　こんなに澤山頂いては濟みません。

江藤　まあいゝさ。またこれから何度も厄介になるのだから。

按摩　では難有く頂戴致します。では晩くなりますから、これで御免を蒙ります。どうぞ奥さまにも宜しく。

江藤　左樣なら。御苦勞さまでした。一人で行けるかね。

按摩　永年馴れて居りますので、少しも心配はございません。では左樣なら。ごゆつくりお休みなさいまし。（廊下へ出てゆく。しばらくたど〳〵しい足音聞ゆ）

（江藤獨り燈下に坐り居る。煙草に火を點じ、靜にそれをふかす。長い間。按摩の笛聞ゆ。）

ひで　（そつと首を上げて）　あなた、まだ起きてゐらつしやるの。

江藤　おまへも起きてゐたのかい。而して今の按摩の話を聞いたかい。

ひで　いゝえ。初め少し聞いてゐたやうでしたが、餘程疲れが出てゐたと見えまして、ついうと〳〵寢入つて了ひました。按摩が何か話して行きましたか。

江藤　聞かなければそれでいゝよ。なあに、よくある世間話と云つたやうな物さ。

ひで　さうですか。（間）　あなたもうお寢なさいよ。大分晩いでせう。

江藤　さうだね、ぢやあ俺も寢るとしようか。電氣は消さうかね。點けて置かうかね。

ひで　眩しいから消して下さいよ。

江藤　ぢや消すよ。いゝかい。

（江藤電燈をひねる。室暗くなる。闇の中に。）

——幕 下りる——

第 二 幕

二十年前の出來事。——

舞臺は殆んど前幕に同じ。只室の造作のまだ新らしきと、諸調度の變れるのみ。

幕あくと舞臺は暗黑、やがてだん〱光りを増し來り、遂に次の場面を現出する。

第 一 場

前の幕と同じやうな靜かな秋の夜。座敷の中には洋燈が寂しく點つてゐる。而して既に夜具が敷かれてある。初め舞臺は空虛。やがて湯から上った二人の若い男女が入り來る。これがそのかみのひで子と其情人川口とである。

川口　大分夜も更けて來たやうだね。

ひで　まだそれほどでもないのでせうけれど、四邊が靜かだから、更けたやうに思はれるのですわ。先刻お湯に行く時帳場の時計の鳴るのを聞いたら、やつと九時でしたもの。

川口　まだそんなかしら。（床の間に置いた自分の時計を見て）ほんとにまだ十時にならないんだね。早いねえ。

ひで　時間の經つのは成るたけ遲い方がようござんすわ。どうせ私共の樂みは今夜一晚なんですもの。

川口　（歎息をして）さうだね。短いねえ。

ひで　いくら無理をしたつて、會へないんですもの。厭になつて了ふわ。一緒に泊るのはこれが初めてぢやなくつて。

川口　さうだ。おまへがあそこへ行つて初めてだね。

ひで　今日だつてやつとこさと口實をこしらへて出て來たのよ。實家の七週忌だからつて、やつと一晚泊りのお暇が出たのよ。ほんとにもつと會へるといゝんだけれど。——

川口　旦那が出來て了つちやあ、さう自由にできないのは知れた事さ。會にでもかうして會へれば、俺なんざあ本望と云はなくちやなるまいよ。

ひで　あら又そんな厭味はよして下さい。私にして見れば、おまへさんにそんなことを云はれるのは、身を切られるより辛いんだからさ。

川口　此處で辛くても、あとで家へ歸ると旦那が撫せて吳れるだらうよ。あゝ考へるとつまらない。俺はおまへがさうしてゐるのを見ると、何だか身體中が自烈つたいも

のでーぱいになるやうな氣がするよ。

ひで　（身をすり寄せて）ぢやどうすればいゝつて云ふのよ。

川口　どうもかうもない、俺一人のものにしたいと思ふだけの事だ。

ひで　なつてるぢやないの。

川口　駄目だ、駄目だ。そんなことを云つたつて。俺は永久に俺のものにしたいんだから。

ひで　ぢやどうすればいゝのさ。

川口　どうするつて、外に道はないよ。

ひで　だからどうするのよ。わたしこれでもあなたのために隨分盡してゐる積りだわ。

川口　それはさうだけれど、私にはそれで滿足が出來ないんだ。因果な男心さね。私はかうしてゐると自分の嫉妬や、會ひたい一念や、會はれない事情やらの責め苦で、燒き殺されるやうな思ひだよ。

ひで　と云ふのは私に今の旦那と緣を切れと云ふことなの。

川口　さうぢやないんだけれど。――

ひで　だつておまへさんは家の都合で、私がたとへ自由になつた所で、一緒に世帶を持つ譯にゆかないと云ふぢやないの。

川口　だから何もそんな事を要求しちやゐない。僕の云ふのはそんな些細な事ぢやないんだ。もつと大きな、――何と云つたらいゝかねえ。――まあ二人の心も身體もぴつたり一つになつて永久に離れないと云ふやうな事なんだよ。

ひで　それは私も、そんな風になれたら、いくらいゝか知れないと思ふけれど。――

川口　おまへもほんとにさう思つてお吳れかい。

ひで　えゝ、さう思つてよ。思つたつてなれないんだから仕方がないわ。ほんとに世の中つて云ふものは、つまらない處だわねえ。

川口　（決然と）　ひでちやん。――

ひで　なあに？

川口　おまへと僕と一緒に死んでお吳れでないかい。一そ此の場で一と思ひに。――

ひで　（蒼ざめて唇をふるはすのみ）

川口　強ひてとは云へた義理ぢやないけれど、どうせ添はれぬ身體なら、俺は一人でゞも死ぬ氣だつたのだ。おまへが一緒に死んで吳れたら、俺あどんなに嬉しいだらう。

ひで　（突然泣き崩れる）

川口　（冷かにその樣を見乍ら）　ひでちやん。俺は今迄すぐおまへが承知をして吳れるかと思つてゐたよ。

ひで　私だつて、……私だつて。……いつでも死ぬわ。いつでも……死ぬわ。
川口　死んで呉れるかい。
ひで　えゝ死にますとも、あなたと御一緒なら、いつでも死んでよ。
川口　今夜一緒に此處で死ぬのだよ。
ひで　えゝ、ようござんすとも。
川口　ひでちやん難有う。私はお禮を云ふよ。
ひで　いゝえ、私こそ。それほど思つて下さるのが、いくら嬉しいか知れませんわ。
川口　だがね、ひでちやん。おまへほんとに死ぬのが厭ぢやなからうね。
ひで　えゝ。――
川口　厭かい。
ひで　厭ぢやないわ。
川口　嘘だ。――おまへはきつと私に無理强ひにされて、でなければ私が氣の毒だからと云ふので、死にたくないのを死ぬんだらう。きつとさうだよ。――いゝえ、それなら遠慮に及ばない。どうか構はないで歸つてお呉れ。
ひで　今になつてまだそんな事を疑つてゐらつしやるの。いくら私だつて生きてゐられゝば生きてゐたいわ。而して今あなたに死ねと云はれた時は、一時死にたくないと思つたに違ひないわ。けれどもそれはあなたを思ふ心が薄いからぢやなくつてよ。人は誰れだつて生き度いと思ふのが眞實ぢやないの。けれどもそれを思ひ返して、死なうと決心するのは、たとへ人の本心に逆つた嘘にしたところが、當人に取つては眞劍だわ。死にたいといふのは、それはあなたの云ふ通り、嘘かも知れないけれど、當人にとつては眞劍の嘘だわ。――それを疑はれては立つ瀨がないぢやありませんか。私ほんとは生きてたくなくはないけれど、眞實死ぬ氣ですわ。えゝ、立派に死にますわ。あなたの爲ならきつと死んで見せますわ。無理强ひをしたなんて、全くあなたの僻みよ。二人は死ぬんですもの。死ぬ前に何の思惑もないぢやありませんか。只あなたに死ねと云はれて、私も死ぬ氣になつた迄だわ。それでいゝぢやないの。――男つてものは何故さう邪推深いのでせう。
川口　これは俺が惡かつた。成程嘘にしろ一緒に死んで呉れると云ふのを、疑つちや濟まなかつた。――だが俺は何だかおまへを手にかけて、殺すやうな氣がしてならないんだよ。何だか二人で一緒に死ぬのだと云ふ氣がしないんだ。
ひで　いゝぢやありませんか。殺して下さい。それがわたしも本望だわ。

川口　ぢや濟まないが甘んじて殺されてお呉れ。——（獨言のやうに）どうせ何の心中でも、主になる者と從になる者とがあるのだらうからねえ。こんな事にくよ〳〵迷ふだけが弱いんだ。だが何だかおまへを道伴れにするのが、濟まないやうな氣がしてならない。

ひで　又そんな事、今更何を云つてるのよ。

川口　だが全く濟まないものは濟まないよ。俺はどうせ小さな吳服屋の次男ぼうで家の金も大分費ひ込んだし、そろそろ借金で責められかけるし、此先き生きてゐたところがさう幸福はありさうもない。思つた人とかうして死ねれば、冥加に餘る身の上なんだ。がおまへは決してさうぢやないからな。なるほど此處で死ぬのも幸福かも知れん。俺はさう思ひたい。けれども此處で死なくたつて、此の世の幸福が待つてゐる身體だ。現に立派な旦那があるんだから、そつちへ行つて安樂に世を送る事も出來る身體だ。

ひで　厭だわ。誰があんな人と。猫可愛がりにばかり可愛がつて。——厭なことだ。あんな人と一生暮らすなんて。

川口　いや、さう惡口ばかり云つたものでもない。死ぬ前なんだからお禮の一つも云つて置くさ。

ひで　もうあんた人の事を云ふのはよして頂戴。私ほんとに厭なんだから。

川口　おまへもひよんなキッカケで、こんな俺のやうなやくざ者と云ひ交したのが、身の誤りさなあ。考へれあ全く濟まないよ。

ひで　もう、解りましたつてばさあ。——そんな事よりか、もつと昔の話でもしませうよ。（戀に強ひて醉ひたいやうに）二人が初めて會つた時分の。——

川口　さうさねえ。酒でも飲んで少し浮々して見ようか。

ひで　それがようございますわ。私も三味線でも引きませうか。

川口　だがよさう。そんな事したつてつまらない。それより話でもしようよ。

ひで　さうですねえ。——（間）時にあなた取つておいくつでしたつけねえ。

川口　俺か。俺は子の七赤で、二十九だ。おまへは確か二十二だね。

ひで　えゝ。——あなたは男の厄年だわね。何故私になんぞ思ひついたの。

川口　何もかも緣だね。——おまへ何か書置きでもしなくていゝのかい。

ひで　私、私はいゝわ。誰にも云つて置く事はないわ。

川口　でも今の旦那に一言位ゐ何か云つた方がいゝね。

ひで　さうでせうか。でも書く事がありませんもの。

川口　さうかい。ぢや僕も別にないから、只此の宿の主人に一言お詫びをして置かう。鳥渡そこの硯と料紙を取つておくれ。
ひで　（渡す）　これでようござんすか。
川口　もうそろ／＼お前も支度をしてお呉れ。
ひで　はい。ですけれど。一體どうして死ぬの。
川口　（書きながら）　薬を持つて來たよ。
ひで　あなた今日はもとから死ぬ氣で出て來たのね。
川口　あゝさうさ。
ひで　それで毎ものやうに浮々なさらなかつたのね。さうとは知らずに、汽車の中であんなにはしやいだりして、私濟まなかつたわねえ。勘忍して頂戴。（着物を着かへる）
川口　あゝいゝよ。何もおまへは知らなかつたのだ。（手紙を書き終へて）先づこれでよしと。――おまへの方の支度はいゝかい。
ひで　待つて頂戴、着物をちやんとしますから。
川口　（カバンから紙包をとり出して）　薬と云ふのはこれだ。白いちか／＼した粉だ。
ひで　效かないやうな事はないでせうね。もし效かなかつたらいゝ恥さらしだわ。
川口　そんな事は萬々ない筈だよ。ちやんと分量を聞いて置いたのだから。おまへが半分、俺が半分。おまへの方は女だから少し輕目にして置くんだ。――支度はいゝかい。
ひで　もう飲むのですか。
川口　どうして。氣遲れでもするのかい。
ひで　でも……いゝえ。
川口　ぢや此方へおいで。此の洋燈の傍に來て、もう一度顏を見せてお呉れ。
ひで　はい。（二人はお互の顏をぢつと見合ふ）
川口　おまへの左の眉毛の中に肉黑があるね。今初めて見つけたよ。
ひで　あら、あなたの右の眉毛にも在つてよ。不思議だわねえ。
川口　二人は前世から死ぬやうに出來てゐたのかも知れない。
ひで　あなた。――
川口　何だい。――
ひで　いゝえ。何でもないの。只悲しくて。
川口　泣くのも今の中だよ。――さあ、薬を飲まうか。二人の身體を離れないやうに結びつけて、飲んだら直ぐ床の中へ入らうね。
ひで　はい。――
川口　もう何も云つて置く事はないね。

ひで　ありません。
川口　ぢや飲まうか。
ひで　鳥渡待つて頂戴。少し前がはだけてゐるから。
川口　もう心殘りはないね。
ひで　えゝ。――あの人は今時分どんな顏をしてゐるでせう。
川口　あの人つて。
ひで　私の旦那よ。どんな顏をしてゐるか見たいわ。
川口　さあ。どうしてゐるかね。
ひで　わたし今ふいとあの人が寢乍ら穩な顏をして煙草を吹いてゐる樣が浮んだのよ。
川口　そんな事どうでもいゝぢやないか。今になつて。もう飲んで了はうよ。
ひで　さうだわね。ぢや皆さん左樣なら。
（ひで子先づ飲み、ついで川口も無言で飲む。それから燈火をふき消す。舞臺暗くなる。長い間。遠く夜の鳥が啼いて渡る。しばらくして廊下の方に足音聞え、番頭が室の外から話しかける。）
番頭　（室の外から）御免下さいまし。もうお休みでございますか。晩く誠に相濟みません。どうか鳥渡お起きを願ひたいので。まだお宿帳をつけ忘れて居りましたので、鳥渡お記しを願ひたいのでございますが。――もし／＼折角お休みの處をお起し申して濟みません。もし／＼。――よつぽどよくお眠りになつたものと見える。もしもし、お客樣恐れ入りますが鳥渡――變だな。もし／＼。――（戸を開ける）もし／＼。鳥渡お起きなすつて下さいまし。（答なし）――變だぞ。ひよつとすると、（愕然として）――（手を叩いて）おうい。お瀧どん鳥渡灯りを持つて來な、早く、早くだよ。
（遠く「はーい。」と云ふ返辭の聲。暗がりの中に）

――急に幕下りる――

第二場

直ちに幕あがると、第二場となる。初めは例によりて舞臺暗黑、やがて脚光の光りと共に此處にその翌朝の場は初まる。室の中には今は只ひで子のみ横臥し、絶えず譫言(うはごと)を吐きて、苦悶する體なり。ひで子の枕頭には醫師、看護婦等附添ひたり。醫師は色々と手當を施す。番頭入り來る。
番頭　先生いかゞでございませう。一命は取りとめましたでございませうか。
醫師　さうだね。まだ何とも云へないが、ひよつとすると大丈夫かも知れない。此の人事不省の狀態が長く續くと、まづ駄目だが――。

番頭　併しこゝで死んだ方が當人のためですね。なまじ生き返るのは可哀さうでさあ。
醫師　さうかも知れんね。併し吾々の職務は職務だから、心情を汲み分けて殺すと云ふ譯にも行かない。まあ成るやうに成らして置くのだな。
番頭　さうですな。此儘殺して了ふのも惜しいし、生かすのも可哀想ですからね。併し私共の商賣から行くと、なるたけ死なしたくはないものです。
醫師　此度の事は君の處の迷惑にもなる事だが、又廣告にもなるだらう。何しろ評判にはなるだらうからな。
番頭　さうなつて呉れなくては、ましよくに合ひやしません。心中されたからつて、餘り無慈悲な眞似も出來ませんしな。――併し男女とも綺麗なので、私共も何だか小説にでもありさうな氣がして、厭な氣はしませんよ。
醫師　全く鳥渡綺麗だね。
番頭　相手の奴あ、うまくやつてますよ。何でも前からの情夫だつて云ひますがね。
醫師　さうかい。それは一種の果報だね。――相手と云へば男の方はどうしたい。
番頭　向う座敷に寢かしてありますが、相變らず苦しがつて居ります。
醫師　男の方が多量に飲んだらしいから、どうも助からないかも知れんな。
番頭　先生、助けるなら兩方助ける。殺すなら兩方殺すつて工合にやつて頂けないものですかな。
醫師　醫術ではさう甘くは行かんね。人情で處方箋は書けないからね。
番頭　それもさうですねえ。
（主人、臨檢の巡査を伴ひて入り來る。）
主人　こゝです。
巡査　（皆に會釋をした後、四邊を見廻して）ふむ、こゝだね。（手帳に書きとめる）それからこゝにゐるのが本人だね。
主人　はい。女の方でございます。
巡査　（興味を以てちらと瞥見し乍ら）ふむ。（醫師に）まだ生きてゐるのですな。
醫師　えゝ、人事不省ですが、命脈は保つて居ります。
巡査　癒りますかな。
醫師　そこの處はまだ請合ひ兼ねます。
巡査　で、男の方はどうした。
主人　向うの室に移しました。醫師の勸告に從ひまして。
醫師　精神上又治療上其方がよからうと存じましたので。
巡査　あゝさうですか。宜しい。――で、その情死遂行の時間は何時頃だつたかね。

主人　昨夜十時頃でございます。さうだつたなあ善吉。
番頭　はい。私の起しに參りましたのが、十時半頃でしたから、多分そんな見當と存じますので、へい。
巡査　（手帳へ書きとめ乍ら）で兩人の宿泊したのは何時頃か。
番頭　左樣。かれこれ五時頃かと存じます。
巡査　泊つてから別に異狀はなかつたかな。
番頭　今から考へて見ますと、普通の連れ込みにしてはどうも樣子が變だとは思ひましたが、これ迄もよくいらしつた方で、少し見覺えもございますものですから、又だなと萬事飲み込んだ積りで通しましたのが、此の座敷でございます。今度と云ふ今度は私の眼識も全く失敗りやした。
巡査　それから十時まで何をしてゐたかな。
番頭　いつもの通り夕飯を上つて、――尤も酒は僅か一本でおよしになりました。――お湯に入つて、靜にお話をしてゐた位で、私どももつい粹をきかせた積りの遠慮をしてゐたものですから、別に變つた樣子も見受けませんでした。
巡査　さうか。で、どうして又その情死を發見したのかね。
番頭　それも私の落度でして、へい、實は昨夜も申上げた通り、宿帳を附けるのを忘れましたので、それを書いて頂くために、遲くなつて此室へ來て見ますと、どうも樣子が變だから、女中を呼んで燈をつけさせて見ると、まあ此の始末なのでございます。
巡査　うむ。さうか。だから宿帳は注意しなくちやいかん。で、本人たちの宿所姓名は解つてゐるだらうな。
主人　はい。それは此處に私へ宛てた遺書がございまして、兩人の身許が簡單に書いてあります。
巡査　どれ、見せろ。……えゝ何だと、死なねばならぬ事情有之と……色々御世話に相成り……ふむ、こんな處はどうでもいゝとして……あゝさうか。男は芝區新錢座町十三川口新吉、（手帳に書く）女は、麻布區笄町二十六番地江藤利太郎方ひでと、（書く）――この各々の實家へはそれぞれ知らせでもしたか。
主人　昨夜の中に電報を打たせました。やがて誰かゞ來るでございませう。
巡査　さうか。では追つて其時調べるとしよう。
（女中急いで入り來る。）
女中　あの先生。あちらの病人の樣子がどうも變でございますから、すぐいらしつて下さいつて。
醫師　さうか。（立上る）男の方は危いかも知れないのです。
巡査　さうですか。ぢや向うへ行つて見ませう。

主人　ではどうかこちらへ。

（主人、醫師、巡査、番頭、女中皆出て行く。長い間。暫くすると、女中に伴はれてひで子の旦那、江藤が急いで入つて來る。）

女中　こちらでございます。

江藤　（いきなり枕許に近よりて）おゝ、まだ息があるのだな。助かりますか。看護婦さん。

看護婦　先生は助かるかも知れないと仰有てでございます。

江藤　何か云つてゐるやうですね。唇を動かしてゐますよ。

看護婦　何も仰有てゐるのではございません。尤も先刻までは色々な譫言(うはごと)を仰有いましたが。――

江藤　（少し躊躇して）ど、どんな事を申しましたか。

看護婦　川口さんとやらの名を呼びつゞけてでございました。

江藤　さうでしたか。

看護婦　それから旦那樣に濟まない〳〵と時々仰有つてゐた樣でございます。

江藤　さうですか。濟むも濟まないも、こんな事をして呉れた後では、仕方がありませんよ、ねえ。

看護婦　ほんとに御氣の毒樣でございます。お心持はお察し致しますわ。

江藤　皆さんさう仰有つて下さいますけれど陰では嘸や間拔けた男だと、嗤つてゐることでございませうな。が、併し、それも仕方がありません。かう云ふ女を棄て得ないのが私の因果で、惚れた男心の馬鹿らしさですからな。

看護婦　さぞ憎らしいとお思ひでせうね。

江藤　それが恥かしい話ですが、私はどうしても此の女を憎めないのですよ。成程、初め知らせを聞いた時には、出し拔かれて腹も立ちましたが、どう云ふものだかそれつきり憎く思へないのですね。男の甲斐性がどこか缺けてゐるのかも知れません。汽車で此處まで來る道々も、憎い、踏みつけても飽き足りない、と云ふやうな心持を引立てゝ、恨みつらみの數々を云ふ氣でゐても、此處へかうして來て見ると女の生きてゐた事が、何より嬉しいと云つた始末です。いやはや、吾乍ら腑甲斐なさに腹が立ちますよ。

看護婦　御尤もでございますね。

江藤　かう云ふと何だか一種の負け惜しみのやうですがね、看護婦さん、私は一體これが今の男と出來てゐるのは、前から承知してゐたのですよ。承知はしてゐたが、そこは私の度量で許してゐました。實は今に目がさめて、私のほんとの愛情に歸るだらうと、たかを括つてゐたのです。まさかこんな事にならうとは、全く思ひもかけなか

つたのですが、こんな洒落た眞似をするといふのは、ちよつと小憎らしいぢやありませんか。だが私は何だか憎いよりは、却つて可愛らしい氣がしてならないのです。これと云ふのも惚れぬいた、男心の馬鹿らしい處なんでせう。はゝゝゝ。

看護婦　（仕方なしに）　さやうでございますかねえ。

江藤　まあいゝ、他人は何と嗤つても、私は此の女の主人に違ひないんだから。

（間。女中入り來る。）

女中　（小聲で）　看護婦さん。あちらの男の方はたうとう駄目でございました。只今息を引きとつたらしうございます。

看護婦　まあさうですか。（黯然とする）

江藤　死んだのかい。さうかい。可哀想だね。（間）　おひでは死なしたくないものだ。今死ぬ方が當人に幸福かも知れんが、私はもう一遍生かしたい。そして立派に江藤の家のものとして死なしたい。

看護婦　この方はきつと助かりますわ。

江藤　（獨語のやうに）　さうだ。きつと生かして見せる。生かして、やがて私のほんとの愛を受けさせてやるのだ。

―― 舞臺暗くなり、速に 幕 下りる ――

第 三 場

幕直ちに上がる。暗の中から徐ろに次の場を照らし出す。

前場から數日を經たる、よく晴れし秋の晝にて、室中の病床は既に撤せられあり。

舞臺には、ひで子の實母おたみ、一人で物など縫ひ居る。女中茶器を持ちて入り來る。

女中　奥さまはどちらですか。

たみ　お湯に行きましたよ。二三日前までは人に顔を見られるのが恥かしいなどと云つて、夜晩くか何かでなければ、お湯に入るのさへ厭がつてゐましたが、今日はどうしたのか、いゝ鹽梅に一人で行つたのですよ。

女中　おや、さうでございますか。それは結構でございますね。何しろこんなに早く快くおなりになるとは思ひませんでした。

たみ　ほんとですねえ。正氣づいてからはめそ／＼泣き續けで、此分なら又すぐ死んで了ひでもするかと思ひましたつけが、皆さんの御親切な介抱で、もう大丈夫でございます。

女中　もうお身體の方は大丈夫ですけれど、お心持から申しましたら、さぞお辛いことでせうねえ。

たみ　何もかも忘れて了へばいゝのですよ。本人もやつとその氣になつて呉れたやうです。これで尼寺へ入つて尼になるなぞと云はなくなれば、もう大丈夫ですがねえ。矢張り死んだ男の事が氣になると見えます。

女中　それも無理はありませんわ。いくら忘れろと云つたつて、忘れられるものぢやございませんもの。

たみ　でもその忘れられないところを忘れなければ、これからの境涯は生きられませんよ。

女中　だからなほお可哀さうですわねえ。

たみ　それでもよくあなた方は、あれの方に同情して下さいますのねえ。私不思議でなりませんわ。私は心中した二人よりも、江藤の旦那が一番お氣の毒に思ふのですけれど。――

女中　旦那様と云へば旦那様も變つた方でございますわねえ。さう申しちや失禮でございますけれど、よほどあの方を深く思つておゐでだと見えますね。でなければあゝ平氣でお許しになる譯がございませんもの。

たみ　ほんとに旦那様はお心の廣い方ですよ。ひでなぞも初めから大人しくあの方に頼つてゐればよかつたのです。あゝ云ふ方がほんとの男ですよ。

女中　さうでせうかねえ。

たみ　さうですとも。

女中　で、奥様は又あそこへお歸りになるのでございますか。

たみ　それを何とも云はずに歸らして下さるから、お偉いと申すのですよ。

女中　さう云へばさうですけれど。――で、奥さまもお歸りになる氣でせうか。

たみ　さあ、それが困りものですよ。大人しく歸つてて呉れゝばいゝと思つてるのですがねえ。

女中　さうですねえ。（間）

たみ　二三日の間にこゝらの山もすつかり紅葉して了ひましたね。

女中　さうですね。それにいゝお天氣ですこと。――あゝつい長話をしてお邪魔致しました。

たみ　いゝえ、どう致しまして。私も退屈してゐるのですから。又お話にでもいらして下さい。

女中　難有う存じます。では御免下さいまし。（去る）

（入れ違ひにひで子登場。）

たみ　割りに早かつたね。

ひで　だつて人が入つて來るんですもの。

たみ　でもお湯に入ると、いくらかさつぱりおしだらう。

ひで　えゝ今日は大變氣分がいゝの。

たみ　さうかい。それはよかつたね。お母さんもおまへが

さうして早く元氣になつて呉れたので、大變安心しましたよ。
ひで　あのねえお母さん。
たみ　何だい。
ひで　私もうよくなつたから、早く此處を去きませうよ。私もう今にもどこかへ行きたいの。――どこか人の知れない處へ。而して百姓でも內職でも何でもして、人手を借りずに食つてゆくのよ。ね、いゝでせう、お母さん。
たみ　おまへの今の心持では、そんな事も考へられるだらうけれど、迚も出來る事ぢやないよ。それよりか又思ひ直して、もう一度江藤さんへ歸る氣はないかい。わたしは此間からさう思つて、おまへに勸めよう〳〵と思つてゐたのだよ。
ひで　だつてお母さん、いくら何でも歸れないぢやないの。そんな事をする位なら死ぬ方が増しだわ。
たみ　と云ふのは江藤さんが死ぬほど厭だと云ふのかい。
ひで　いゝえ、さうでもないけれど。今更のめ〳〵歸るなんて、そんな圖々しい眞似をするのが、いくら何でも私には出來ませんわ。
たみ　それぢや江藤さんが許して下すつても、歸る氣はないのだね。
ひで　許して下さるつたつて、心から許して下さる譯がないぢやないの。もしか許して下さると云つても、それは今迄の意地か、それでなければ計略だわ。許して私を歸らして置いて、きつとひどい目に會はせるのだわ。――どうしても私行かなくつてよ。
たみ　さうおまへも強情では困るねえ。どうせ死んだ身だと思つたら、もう一度歸つたつていゝぢやないか。
ひで　どうせ死んだ身だと思へば、どんな苦勞をしてゞも獨りで生きて行けてよ。
たみ　そんなに厭ならたつて勸めはしないけれど、――まあよく考へてお呉れよ。
ひで　幾度考へたつて同じですわ。
（二人は思ひ〳〵の沈默に陷る。長い間。暫くすると廊下に足音聞え、女中入り來る。）
女中　あの只今江藤の旦那がお着きでございます。
たみ　おや、さうですか。
ひで　あら、どうしませう。わたしお目にかゝりたくないわ。お母様、どうしませう。
たみ　そんな事云つたつて仕方がないぢやないかね。一と思ひに會つてお詫びをして了つた方が、いくらいゝか解らないよ。おや、さう云ふ中においでのやうだよ。
（ひで子、行き場を失してうつむいた儘坐つて了ふ。江藤、快活に入り來る。）

江藤　いや、今日は。急に思ひ立つてやつて來ました。
たみ　ほんとによくいらつしやいました。
ひで　（默つて下を向いた儘お辭儀をする）
江藤　ひで子もうすつかり快くなつて結構だね。どうだい。もう家へ歸れるだらう。お母さん、私は今日何ならひで子を連れて歸らうと思つてやつて來たんですがね、どうでせう。山の中にくよくよして許りゐたつて初まらないし、東京でも何やかやで矢張り不自由ですからね。歸れたら歸つて貰ひ度いんだがなあ。どうだいひで子。
ひで　私お宅へは歸れません。
江藤　なぜ。
たみ　そんな強情をお云ひでないよ。
ひで　でも私歸れません。
江藤　そんな事云はずにお歸りよ。私が賴むからさ。どうか歸つてお吳れ。私が可哀想ぢやないか。
ひで　…………。
江藤　此の通り手をついて賴むよ。どうか歸つてお吳れ。おまへがゐなくては、私は生きてゐられないやうな氣がするんだ。
ひで　（決然と）　ぢや今迄の事は何とも仰有らないで下さいますか。
江藤　そんな事を私が氣にかけるものかね。
ひで　私はあの事を詫まりも何も致しませんよ。それでようござんすか。
江藤　いゝともさ。
ひで　そしてあの事のために、これから身がひけるやうな事があつちやあ厭ですよ。
江藤　そんな事があるものか。決して無いよ。私はもと通りお前を待遇するよ。
ひで　ほんとですか。
江藤　ほんたうとも。まだ疑つてゐるのかい。お前ももつと素直になつて吳れたらいゝぢやないか。而してもつと素直に人の親切を受けて吳れたらいゝぢやないか。おまへはまだ僕のこの心持に、何か魂膽があるのだとでも思つてるのだらう。それでこの男の心と云ふものが、どんなに大きいものだと云ふ事が解らないのだらう。下らない邪推や、見えを棄てゝ、素直な心に歸つて私の腹を見てお吳れ。そしたらそんな下らないさぐりや、條件なぞは入れられない筈だよ。
ひで　濟みませんでした。私、生れ返つた積りで、もう一度お傍へ歸つて見ます。
江藤　さうか。歸つて吳れるか。それで私も安心したよ。歸つて厭だつたら又出るさ。尼になるのはそれからでも遲くはない。

たみ　やつとこれで私も安心しました。

ひで　けれどもまだ、ほんとに私にはお心持と云ふものが解りません。

江藤　なあにもつと後になつて見れば解るさ。――さうさな。もう二十年も經つたら、おまへにも少しは飲み込めるだらう。其時になつて初めて、どつちが眞實の勝利者だつたかゞ解るのだからな。

（二人の女は江藤の言葉を解し兼ねて、ぼんやり男の顔を眺むるのみ。）

――舞臺だん／＼に暗くなりゆき、暗の中に幕下りる。――

第三幕

舞臺は第一幕と同じ。時は第一幕の翌朝。幕あくと江藤夫妻は茶を喫しながら話をしてゐる。

江藤　昨夜はよく寢られたかね。

ひで　そんなによくは寢ませんでした。

江藤　私はよく寢た。久しぶりでよく寢たせゐか目がはつきりして、遠くの山まであり／＼と見えるやうな氣がする。

ひで　まさか。――朝で空氣が澄んでゐるせゐでせう。

江藤　大方さうだらう。がわしにはどつちでもいゝ。――此分では今日の湖水行は大當りだぜ。紅葉はまだ淺く染まりかゝつただけで、毒々しい色はないし、空が澄んでゐるから、水も澄んでゐるだらうし。今日は一つ思ひきり澄んだ心持になり切るかな。

ひで　人間いつもさう云ふ心持でゐられたらようございませうねえ。

江藤　なか／＼さうは行かんて。――が、さうは行かない處が人間の味だ。人間はいくら年をとつても、矢張り煩悩は脫れられないよ。いくら靜かな心でも曇る。

ひで　だから私をこんな處へ連れて來る氣になるんだわねえ。あなたはこんな處へ來て、それで氣持がよくつて。

江藤　さうさな。實を云ふとさういゝと云ふ譯ではない。

ひで　それ御覽なさい。

江藤　だが俺はもうすつかり靜かな氣持で、此處が見物できるやうになつてゐたと思つたのだ。老將軍が古戰場を見舞ふやうな心持でな。

ひで　ところがさうなれなかつたのでせう。

江藤　まだもう少し。――このもう少しがなか／＼だ。

ひで　でもよく寢られゝば結構だわ。

江藤　寢られると云つても、老人の眠りは淺いものだからね。朝方になつてから、下の溪川の音が耳について困つ

た。

ひで　水の音位で寢られないなら結構だわ。

江藤　ぢや矢張りおまへは昔の幽靈に惱まされたのだね。

ひで　だつて女ですもの。それにあなたと違つて、私はあんな事をした當人なんですもの。

江藤　昨日の按摩の話は面白かつたね。俺はまるで他人(ひと)の事のやうに聞くことができたよ。

ひで　わざと白ばくれたりなすつて、悪い冗談ですよ。私のやうに、嘘にでも寢て了つた方がいくら罪が輕いか知れません。

江藤　それもさうだね。さう云へば此處へ來てからの勝負では、俺はどうやらおまへに敗けてるやうな氣がする。矢つ張り俺は弱かつた。强ひて虚勢を張つてゐても、張り通す譯には行かないらしい。俺はもつと勝利者の快感で、此處の景色が眺められるつもりで來た。

ひで　あなたは昨日私を此處へ連れて來るのを前から計畫してゐらしたのね。

江藤　いや、昨日の朝ふいと思ひついたのだ。一つ老後の冒險をして見ようとな。

ひで　なぜ來る前に私にさう云はなかつたの。

江藤　云ふと面白くないと思つたからさ。

ひで　いゝえ。云へなかつたのでせう。でなければ云ふと私が來ないとでも思つたのでせう。

江藤　なか〳〵機鋒鋭くやつて來るね。そんな事どつちでもいゝぢやないか。

ひで　いゝけれど、あなたの遣口(やりくち)が少し卑怯めいて見えますからさ。

江藤　これは一本參つた。

ひで　だからもうこんな老人(としより)の冷水はおよしなさい。あなたは矢張り宅で碁でも靜かに打つてるに限りますよ。——私だつて何だか心の底を試めされてるやうで無意味ですわ。

江藤　ぢや序にもつと試めしてやらう。——おまへはまだあの男の事を思ひ出すかね。

ひで　（わざと白ばつくれて）あの男つて誰。ちやんと名をお云ひなさいよ。

江藤　あの川口とか云つた男さ。無遠慮に云ふと、おまへが心中して殺した男さ。

ひで　やつと今になつて二十年來の本音が出たのね。あなたはあれ以來一度もあの人の事をきゝなんぞしなかつたわ。心では矢張り聞きたかつたでせうね。

江藤、死んだんだから氣にもしなかつたさ。生きてゐりやあ無用心だがね。

ひで　死んだんだから、私は氣にしたわ。

江藤　矢つ張り滋々と思ひ出したかい。

ひで　えゝ滋々思ひ出してよ。町の人混みで似た人を見つけたり、夢の中で會つたり。

江藤　そんなに度々會つたのかね。

ひで　あの一二年後は暗がりをぢつと見凝めてさへゐれば、あの人の顏が浮んで來ました。此頃ではすつかり忘れて了ひましたけれど。――

江藤　昨夜は見なかつたかい。

ひで　見ようとして見ましたが、忘れたと見えてどうしても思ひ出せませんでした。私も耄碌しましたわね。

江藤　何しろ古い事だからねえ。俺たちは先づ平氣で話が出來る位古い事だからねえ。

ひで　一體私はあの時死んで了つた方が幸福だつたのでせうか。かうしてあなたと一緒になつてゐる方が幸福だつたでせうか。

江藤　さあ、俺にはどつちだか解らないね。おまへはどう思ふ。

ひで　私にも解りませんわ。――人の一生なんて解らないものだわね。けれども解らないなりに、いろ〳〵な思ひをして來たから、それでいゝのかも知れませんわね。そこが幸福と云へば幸福ですわ。

江藤　先づさう諦めて置くさ。ずつと通り過ぎて見れば、不幸も不幸でないし、幸福も幸福ぢやない。

ひで　ほんとですわねえ。

（洗濯婆お傘、廊下より入り來る。）

お傘　御免下さいまし。今日はよいお天氣でございます。私が二十年前にこゝにゐた者でございますが。何か御用でもございますか。

ひで　あら、お傘さんぢやないの。

江藤　あの時の女中さんぢやないか。珍らしいね。まあお入んなさい。

お傘　あら、あの時の、まあ、旦那さまでゐらつしやいましたか。奥さんも。ほんとにまあお珍しい。

ひで　さあそんな處にゐないでまあお入んなさいよ。でもよくまあ思ひ出したわねえ。

お傘　いえ〳〵、忘れるものですか。餘り突然なので、ちよいと解らなかつたのでございますよ。覺えて居りますとも、はい、よく覺えて居ります。

ひで　あなたも隨分變つたわねえ。それでもどこかに昔のお傘さんが殘つてますよ。

お傘　あなた方こそお變りなさいましたよ。名乘つて頂けばさうと解りますけれど、道でお出會ひしたつて迚も解りやしませんわ。

江藤　俺たちも年を取つた。取りすぎる位取つた。

お俤　それでもよくいらつしやいましたねえ。お二方揃つていらつしやるなんて。——
江藤　不思議に思ふ位だらう。
お俤　全くでございますよ。
江藤　昨夜按摩が來て俺たちの事を話して行つた。まるで他人事のやうだつた。
お俤　まあ左樣でございますか。
江藤　そして俺たちの事を、どうせ末永く添ひ遂げやしなかつたらうと云つて行つた。——おまへさんもあの當時、さう思つたらうね。而して俺を此上ない馬鹿な男のやうに思つたらうね。
お俤　さうでしたね。そんな風に思つたかも知れませんね。私も若うござんしたから。
江藤　今の俺たちを見てどう思ふかね。
お俤　おしあはせな方々だと思ひますわ。
江藤　人が幸福と見て吳れゝば、それで俺の本望は達したわけだ。
ひで　ではあなたは二十年前の汚名を雪ぎにいらした譯だわね。
江藤　さう見てもいゝさ。
お俤　二十年振りで御覽になつたら、此處の景色も格別でございませうね。
江藤　悲痛な意味で曾遊の地だつたのだから、少くとも俺だけには意味が深いさ。
お俤　どんなお心持でせう。
江藤　さあ、說明が出來ないね。敗軍の將があとで戰爭の在つた場所を見渡すやうなものかね。
ひで　噓仰有い。凱旋の將がでせう。
江藤　それでも同じことだ。この場合昔の勝敗は問題ぢやないからな。
お俤　なぜもつとお早くいらつしやらなかつたのでございますか。
江藤　來たいけれど來られなかつたのだよ。やつとの思ひで昨日來た譯だ。これでも少々早過ぎたと思ふ位ゐだ。まだ悟りが足りないのだよ。
ひで　でも來てようござんしたわ。幾分か私も人間と云ふものゝ悟りが開けたから。
江藤　漫然と景色だけ見て歸つたにしても、來たゞけの事はあらうと云ふものさ。
ひで　是から私も落ちついて山でも見ませう。
お俤　あの今日は湖水の方へでもいらつしやるのでございますか。
江藤　あゝ行く。先刻駕を賴んどいたから、もう來る筈だ。
お俤　今度は長く御逗留でございませうね。

ひで　いゝえ。すぐ歸る積りですよ。此處でするだけの事はしたのですから　もう澤山なんです。

江藤　いづれ又五年も經つたら來るからね。その時は大いに昔話でもしようや。

お糸　昔話はようございますね。

江藤　その中にあんな事も立派な昔話になるよ。さうすると本卦歸りをした子供が、それを聞き乍ら安らかな眠りに就くんだ。――むかし／＼或る處に若い男と女とが居りました。するとその女にもう一人の男が思ひついて、金の力で自分のものにして了ひました。さあ思ひ合つた同志は其儘別れてはゐられません。或夜二人は相談して、或る温泉場に參りました。而してたうとう毒藥を飲んで心中して了ひました。

ひで　それから。――

江藤　ところが氣の毒にも、意久地のないのは第三の男でした。そんな踏み付けな行ひをされても、惚れた弱味で怒ることも、憎むこともできませんでした。男はすぐに女の罪を許しました。いや、許したのではなくて、罰することすら出來なかつたのかも知れません。兎に角意久地のない腑ぬけな野郎でした。

ひで　それから。――

江藤　まあお聞きよ。――彼は却つて願ふやうにして女に歸つて貰ひました。而して前にも増して女を可愛がりました。がたうとう女もその男の愛が解(わか)つて逆に惚れて來るやうになりました。而して不思議な事には、その意久地のない男が、最後の勝利を占めて了ひました。話と云ふのは是でお終ひ。

ひで　まあ馬鹿々々しい。

江藤　このお終ひの方は少し誇張があるがね。それはお伽噺の性質上さう云はなければ「落ち」にならないのだ。

ひで　そこが落し噺と眞實の話との違ひですわね。

江藤　（笑ひ乍ら）何とでも云へ、おたふくめ！

お糸　まあ、あんな事を仰有つて。――

江藤　どうだい。いゝお噺だらう。

お糸　ほんとに結構なお噺でございますわ。

江藤　（妻に）それ見ろ。おまへなぞにはかう云ふ噺の有難味が解らないのだ。

ひで　なぜでせう。

江藤　女だからさ。（もう一度力を入れて）女だからだよ。

（番頭急いで入り來る。）

番頭　どうもお待遠さまでした。只今お駕が參りました。

江藤　さうかい。――どれ、一つ湖水でも巡つて來ようか。今日はいゝ天氣だなあ。

番頭　全く御見物には持つて來いのお天氣でございますよ。へい。

江藤　ぢやあおひで、おまへも支度をおし。

ひで　（おとなしく）はい。

（二人は徐ろに立ち上がる。）

——靜かに　幕——

夏の日の戀（悲喜劇二幕）

人物

水木辰雄　醜男の脚本作家
成田浩一　その友。若き法學士
同　道子　浩一の妹。女學生
櫻井英子　道子の友。同
小林靜枝　同
松本　守　浩一の友。富豪の息子

時代

現代――或る年の八月頃

場所

湘南の某避暑地にて

第一幕

實業家成田氏が別莊の庭。一面の芝生。左手寄りに小高くなつた所に四阿(あづまや)がある。四阿の中には鳥渡した木の卓、籐椅子など適宜に置いてある。左手は繁つた檜葉か何かの植込にて劃らる。正面奥は低い垣のある築地。それを越えて海の水平線が見える。正面の右手奥には、海岸へ下りる小さな門がある。右手は生垣(いけがき)にて劃らる。

八月の或る晴れた朝で、爽な潮の香と共に、どことなく花卉の匂がする。時々静な波の音を縫うて、小鳥の聲も聞える。幕あくと、成田浩一、四阿の中の籐椅子に坐つて、朝の新聞を讀み耽つてゐる。彼はごく人のいゝ、物解りのする圓滿な法學士タイプ。そこへ妹の道子が入つて來る。

道子　兄さん。
成田　うむ。
道子　何か面白い事があつて？
成田　何にもない。よくもかう平凡で退屈な記事ばかり集つたものだ。
道子　（兄の傍の椅子に坐る）　あら。兄さんも岩見武勇傳を讀んでゐらつしやるのね。
成田　讀んでゐちや惡いかい。
道子　だつて妙だわ。
成田　何も妙な事は無いぢやないか。これが所謂避暑地情緒と云ふものだよ。東京にゐちやあ迚もこんな講談物なんぞ、讀む氣持にはなれやしない。だから今の中にせつ

せと讀んで置くんだ。だが可笑しなものだね。讀み出したら不思議に後が待たれる。朝、新聞が來ると何よりも先に、そこを見るんだが面白い。僕は今にして初めて、講談が新聞の賣行に關係があると云ふ事を、事實に於て信ずるやうになつたよ。

道子　今日の所はどうなつて？　愈々山寨へ乘り込みましたか。

成田　いや、今日はまだ山道にさしかゝつたら、向うの松の木の根元で、一人の男が大の字なりになつて、鼾をかいて寢てゐる所でお終ひだ。

道子　まあ。だん／＼佳境に入つて來るわね。

成田　なんだ。おまへも讀んでゐるんだな。

道子　えゝ、それは讀んでゐますわ。私にだつて避暑情緒ぐらゐありますもの。

成田　おや／＼。それぢやあ僕は明日からよさう。さう皆(みんな)讀んでゐるんぢやあ。

道子　水木さんも讀んでゐるらしいのよ。昨日の朝も笑ひ乍ら高潮に次ぐに高潮(クライマツクス・アフター・クライマツクス)だつてさう云つてたわ。

成田　それあ水木の芝居どころぢや無いからね。あいつの戲曲も隨分、山があつたり川があつたりするが。

道子　(急に嚴肅な顏をして)　それはさうと兄さん、水木さんにあの話をして下すつて？

成田　(同じく眞面目に歸つて)　いや、まだしなかつた。昨夜も丁度二人きりになつたから、おまへの話を切り出さうかと思つたが、あの顏を見ると急に云へなくなつて了つた。

道子　早く云つて下さらないと、私心苦しくて仕方がありませんわ。

成田　一體お前から云ふのが正當(まつたう)なんだ。問題はお前自身の事なんだもの。

道子　だつて、私になんぞ迚も云へやしませんわ。現に兄さんだつて云ひ出せない位ぢやありませんか。だから私お願ひするのよ。

成田　今日はきつと云つてやるよ。――併し可哀さうな男だなあ。――どうだい。お前もう一度考へ直して見ちや呉れないかね。

道子　だつて、もう仕方がありませんわ。私だつてあの人には同情してゐるんですけれど、苦しみに苦しんだ揚句、たうとうかう云ふ決心をしたんですもの。もうどうにも仕やうがありませんわ。だからどうぞ兄さんから、ようくあの人にお願ひして下さいな。

成田　で、水木がもし肯(き)かなかつたらどうする？

道子　さうなつたらさうなつたで矢つ張り、私の決心通りにする積りです。

成田　お前はあいつに大恩があるのだつけね。
道子　ですからかうして苦しんでゐるのです。
成田　此度の事は俺もほんとに困つた。一體こんな始末になるのなら、初めから僕やお父さんたちが、水木にお前をやるなんて約束するんぢや無かつた。
道子　だつてあの時は私まで、水木さんの所へ嫁く氣でゐたのですもの。
成田　それにつけても松本君が、此處へ現はれて吳れなかつたら、何事もなく濟んだらうになあ！
道子　どうかそれは仰有らないで下さいまし。少しもあの人が惡いのぢやないんですから。
成田　さうだ。みんなお前が惡いのだ。僕も自分は道德的無能力者だと思つてゐるから、おまへの行爲を攻擊する譯には行かんが、僕らにまで苦しい思ひをさせると云ふ點で、今度のお前の仕打を怨むよ。
道子　怨まれても仕方がありません。
成田　お前は一昨年こゝの海で、波に攫はれた時死んで了へばよかつたのだ。そしたら水木や俺にまでこんな苦しみは與へないで濟んだのになあ！
道子　私もあの時水木さんなどに救はれないで、死んで了へばよかつたとつく〴〵思ふ事もあります。
成田　女のロマンチシズムでか？　それとも氣まぐれのセンチメンタリズムでか？　それよりかお前は松本君と新らしい生の悅びに夢中になつて、死なんぞの事は考へもしない筈だがね。
道子　兄さん！　それは餘りな事を仰有います。（泣き出す）
成田　道子！　俺は泣きたくても泣けないのだよ。――併し俺は何もお前を責める積りぢやなかつた。只かう云ふ具合に流されて行く、お前の自由を束縛する心算ぢやなかつた。おまへの自由を束縛する心算ぢやなかつた。只かう云ふ具合に流されて行く、惡戲極まる運命を呪ふんだ。
道子　（猶ほも泣き乍ら）いゝえ、どうぞ私を責めて下さい。もつともつと私を責め苛んで下さい。私はそれに慣してゐる女なんですから。
成田　いや、又さう感情的になつて了つて、泣いて吳れては猶ほ困るよ。さあ〳〵もう泣くのはおよし。――幾らお前がとめようと思つたつて運命の力はどうなるものでもない。俺はお前の苦しさだつて察してるんだよ。お前の云ひ分だつて少しも無理だとは思ひやしない。水木は、可哀さうに誰が見たつて、橫からも縱からも醜い男だ。いくら才能があり心が美しくても、若い女であの外貌に逡巡しない者は無いと云つてもいゝだらう。永年親しくしてゐる俺だつて、時にショッキングな感じを受ける事があるのだもの。

道子　わたし何もそんな不足を云ふんぢやありません。

成田　併しお前の潛在意識の中には、きつとあの男の醜さを嫌ふ感じがある。いや、それは嫌ふまいとする努力で消されてるかも知れない。併し兎に角、あの男が醜いから、厭になつたと云ふ方が正直な申譯なんだ。僕だつて時とすると、あの醜男と一生を共にして、あたら美しさを墓に葬つて了ふお前の不幸を思はない事もなかつたからな。だからお前にも十分同情はしてゐる。けれども又水木にも更に又二倍の同情をせずにはゐられないのだ。――何だつてあの男はあゝ醜く生れついたのだらう。あいつはあの爲に一生を苦しみ通さなくちやならないんだ。

道子　もうそんな事は云はないで下さい。私はそこまで云ひたくはありません。あの人だつてそんな風には考へて下さるまいと思ひますわ。

成田　いや、水木は必ず自分の醜さ故だと考へるだらう。そして更に自分の醜さを怨むだらう。あゝそれを思ふと、僕には迚もこんな事が云へさうもない。

道子　兄さん、まことに濟みません。どうぞお願ひです。

成田　併し俺は思ひ切つて今日こそ云はう。一刻の遷延は一刻の苦痛を延べるに過ぎない。おまへのためにも水木のためにも。

道子　さうですわ。私も此上は一刻でも長く、あの人を欺いてゐるに堪へません。あの人のお心に對しても。

成田　繰り返して云ふが僕はお前を怨むよ。

道子　えゝ仕方がありません。私は怨まれる覺悟をして居ります。

成田　これを人生の試練だからと一口に云つて了ふにしては、少し悲慘の分量が多過ぎるやうだね。水木はほんとに可哀さうな男だ。

道子　私もお氣の毒とは思つてゐます。が、繰り返して申し上げたやうに、もうどうにも仕方はございません。

（不安なる沈默。）

成田　水木はまだ起きて來ないかい。

道子　まだお起きにならないやうです。

成田　又昨日あたりから新らしい脚本にとりかゝつた樣子だね。昨夜もそれで遲くまで起きてゐたらしかつた。

道子　何だか二時頃庭へお出なすつたやうでしたわね。

成田　お前も氣が附いたかい。あれは泣きに出たのだぜ。

道子　泣きにですつて？

成田　さうだ。泣きに出たのだ。僕も不思議だと思つて、實は階下まで跡をつけて來て見たのだ。すると彼奴は、この四阿の所で只一人、泣いてゐるのが月の光で見えたのだ。

道子　なぜ泣いたりしたのでせう。
成田　大方自分の脚本を書いてゐる中に、感激して了つたのだらうよ。
道子　(吐息をして)　それならばよう御座んすけれど。——ほんとにさうでせうか。
成田　さうだらうとも、あいつは自分の作中の人物の爲に、涙を落すほど氣が弱いのだ。
(道子痛ましげな顔をして默り込む。間。靜な波の音が聞えて來る。正面の海岸へ通ずる門から、松本守入り來る。髮を美しく分けた美貌の青年。)
松本　(入つて來乍ら)　やあお早う。今日はよく起きてゐたね。(と道子を認めて、微笑み乍ら輕く會釋する)
成田　あゝお早う。(少しぎごちなく)　君はいつも早いね。
松本　もう早いと云ふ程でもあるまい。——どうだい。散歩に出ないかい。暑くならない中に。
成田　うむ。僕はよさう。今朝は少し用事があるんだ。何しろ昨日親父や阿母なぞが、急に東京へ歸つたのでね。
松本　さうだつてね。昨夕、道子さんに聞いたよ。
成田　(鳥渡不快な眉をひそめて)　さうかい。(と妹の方をちらと見乍ら鳥渡皮肉な微笑を含んで)　どうも君たちも油斷がならないね。

松本　いや。そんな事はない。海岸で鳥渡お會ひしたゞけだよ。さうですね。道子さん。
道子　(少し赤くなつて)　さうだわ。
成田　なあにさう眞面目になつて辯解する必要はないよ。誰もそれ以上君たちを疑ひやしないから。
松本　君はちくり〳〵と妙な事を云ふね。
成田　氣に障つたら失敬、實は鳥渡こいつが　(と顔で妹を指し)　兄貴を出し拔いて散歩でもしたんぢやないかと思つて、ひよつとからかつて見たくなつたのだよ。これも一種の嫉妬だね。
道子　まあ！
松本　時に水木君は？
成田　まだ寢てゐる。昨夜晩くまで仕事をしたものだからね。
松本　それぢや誰も一緒に海岸へ出る人はないんだね。
成田　道子がゐるぢやないか。
松本　道子さん一人ぢや少し、……
道子　私も後にしますわ。
成田　だつてお前は每朝、散歩する事にしてゐるんぢやないか。
道子　でも、今日はよしますわ。
成田　まあ行つておいでよ。僕は先刻のやうな冷たい皮肉

でこんな事を云つてるんぢやあない。
松本　成田君、僕は一人で行くよ。
成田　僕の前でさう恥かしがつたり、芝居をするのはよし給へ。君たちの言葉は君たちの愛を裏書してゐる。僕はあらゆる愛の動く所に同情してゐるんだからね。僕のやうな氣のいゝ男は、どこへ行つても愛の仲介者なんだ。そして永久にそれで止まるのだ。（道子に）さあ行つておいで、兄さんが許してあげるよ。
道子　兄さん！
松本　成田君、難有う。どうか許して呉れ給へ。僕は水木君にほんとに濟まないんだけれど、……
成田　まあそれは云はずに置き給へ。自分々々で生きて行く上には、少し位他の犧牲を無視しなくちやならぬ事ぐらゐ、僕だつてちやんと解つてるよ。いゝから君は默つて君の道を行き給へ。それが君に取つて唯一の眞實なら、神の前でも恥ぢる必要はないんだ。只僕は水木の一個の友人として、彼に君たちの凱歌を聞かせたくないんだ。
松本　よく解つた。いつも乍ら君の好意には濟まなく思つてゐる。——ぢや道子さん、二人で葉山の方へでも行つて見ませうか。
道子　えゝ、行つても宜しうございますわ。
成田　行つておいで。先刻の話をするのにも、お前のゐない方が都合がいゝから。
道子　はい。では行つて參ります。
松本　すぐ歸つて來ますよ。

（二人は前後して門口から出て行く。道子は門の處で鳥渡兄を振り返つてみる。それから松本の夏帽と道子の大きな海水帽が、睦じさうに築地の蔭にかくれて了ふ。成田は複雜な感情を顔に浮べて、暫らくぢつと見送つて立つ。やがて吐息を一つして、椅子にすつかり沈み込んでゐたが、やがて思ひ出した樣に卷煙草に火を點ける。間。海の音やゝ激しくなる。）

（暫くして彼等の去つた其門口から、水木辰雄、寧ろ快活に入り來る。醜き容貌を持てる二十七八歳の青年。）

水木　やあお早う！
成田　やあ、君はもう起きてゐたかい。
水木　起きてもう裏から一廻り散歩して來たよ。例の深呼吸の癖をつけたいと思つてね。
成田　そして海岸の方から來たのかい。
水木　うむ。さうだよ。
成田　さうか。（表情を抑へて）それぢや道子たちに會つたらう。
水木　うむ。會つた。
成田　會つて何とも思はなかつたかい。

水木　あの二人に對してかい。

成田　さうさ。あの二人に對して。――一體君は此頃の道子をどう思ふ。君はまだ道子らに起つてる動搖に、少しも氣がつかないかい。

水木　（靜かに）僕はもうとうに知つてゐた。

成田　知つてゐたとは？

水木　あの人の日記を見たのだ。一昨日君たちが皆海へ行つた留守に。――君どうか僕のそんな卑劣な行爲を咎めないで吳れ給へ。

成田　何の咎めるものか。――（低く）ふうむ、さうか。知つてゐたのか。（いくらか感激に滿ちて）君はなかなか勇者だね。

水木　お世辭はよして吳れ給へ。僕は此際勇者であり得たいと思ひ乍ら、少しもさうで在り得ないのだから

成田　僕は君のその態度に對しても、君の前ですべてを云はうと思ふ。實は僕も昨日から、妹の君に對する使命を持つてゐるんだ。

水木　（陰鬱に）實は僕もそれを待つてゐた。云ひ給へ、聞かう。（二人正面に向ひ合つて坐る）君の云はうとする事も、大抵は解つてゐるのだが、僕は正面からそれに面して見たいからね。

成田　では改めて云ふ。妹は、君に對する婚約を取消して貰ひたいと云ふのだ。

水木　（自分に飲み込ませる樣な態度で）うむ。

成田　それは君に今更こんな事を云へた義理ぢやない。義理ぢやないが賴むと云ふのだ。

水木　（寧ろ器械的に）そんな義理なんぞありはしない。

成田　いや。君と妹との婚約は、決して普通一遍の許婚關係ではなかつた。君は妹の恩人だ。妹の生命を救うて吳れた大恩人なのだ。一昨年の夏、あれが此處で波に攫はれた時、君が見附けて助けて吳れなければ、今日まであゝして生きてゐる事が出來ない身なんだ。その大恩を思つたら、決してこんな事を君に言ひ出す義理はないんだが、それを强ひてお願すると云ふのだ。――

水木　いや、待つて吳れ給へ。君の方でさう迄云つて吳れるなら、此處で僕にも云ふだけは云はして吳れ給へ。實は僕は昨夜から、こんな場合に云ふべき言葉を考へてゐたのだ。それは現在ちつとも役立ちはしさうもないが、それでも云ふだけは云はして吳れ給へ。（改まつて）僕は今道子さんとの關係に於て、第一、あの人を救つたと云ふ事に關しては、何の報酬も要求しはしないよ。僕が救つたがために、あの人の身心の自由を束縛するなんて事は、僕として絕對にしたくはないんだ。僕はひねくれて云ふのぢやないが、恩人なぞと呼ばれる必要は全くない

んだ。僕はたゞあの時道子さんが波に引かれたのを見て、救はなければならんと思つたから、身命を賭して救助に從事したのだ。只それだけの話なのだ。たゞあの後、君や君の兩親たちが、僕の心持に同情して吳れて、恰もその報酬のやうに道子さんを下さると云つた時は、僕は白狀するが、あの道子さんを危險に陷れた波に感謝した。併しそれが自分の救助に對するやむを得ぬ報酬だと考へると、僕は自分の心の中で、面を赤らめずにはゐられない或物が在つた。僕のやうな醜い男に、道子さんのやうな美しい人が妻になると云ふ不自然な關係は、あゝ云ふ事件が無ければ永久に起らないで濟んだらうと思ふと、僕は道子さんを默つて得々と許婚にして置く事が、何となく濟まぬ氣ばかりして今日まで暮して來た。謂はゞ道子さんと僕の關係は、單に外部的の事變によつて結合されたゞけで、何ら內的必然性もないと云ふ事を、寂しくも思ひ恥かしくも感じてゐたのだね。ほんとに外部から促迫させれもずに、誰がこんな醜い男の所へ、甘んじて一生を託するものか。——

成田　それは君の偏見だよ。さうまで道子を皮相に考へて吳れ給ふな。あれだつて君の「內心の美しさ（インネン・シエーンハイト）」が見えない程の女でもないだらう。少くとも嘗て君を愛してゐただけは事實だよ。

水木　それは僕と雖も認める。その點に於ては僕は常に感謝してゐる。そしてそれあればこそ此の不自然な關係も思ひ切れずに續けて來たのだ。それあればこそ二人の間に、幾らかの光明も認めてゐたのだ。僕としてはそれが假令無理に作り上げた愛にもせよ、愛である事に變りはないのだから、心から其愛の成長を願ひ、其愛の光りが溢るゝ靈土を夢想してゐたのだ。併しもと〱不自然な愛は、どんなに手を盡してもさうなるものではない。矢つ張りかうなるのが當然だつたのだ。けれどもこれで僕もあの行爲から他人を束縛する心苦しさも解け、道子さんも外的事情に煩はされず、內心の赴くまゝに行動し得る自由を得たのだ。道子さんも僕も眞に解放されたのだ。だから道子さんにはどうか、僕が喜んで承知したと傳へて吳れ給へ。そして心から道子さんの新しい幸福を願つてゐるとさう云つて吳れ給へ。

成田　水木君。難有う！　よく承知して吳れた。妹に代つて僕が感謝するよ。僕は君の立派な態度に對して恥ぢ入るよ。

水木　立派も立派でないも僕の取り得る態度は、これより外にあり得ないぢやないか。——僕は實は先刻までは、自分の下らない誇りを保つために、僕の方から破談を申し込まうと思つてゐた。僕の方から云ひ出しさへすれば、

結果として僕が嫌はれたと云ふ事にはならないからね。併し先刻海岸であの人たちに會つてから、僕はその考へを止めて了つた。そんな痩我慢があの人たちには、嘸卑怯に見えるだらうと思つたからだ、そして僕自身としても此際、できるだけ苦しみに面接して、いやが上にも苦しみたいと思つたからだ。而して自分の苦しみの底から、あの人たちの幸福を祈つてやらうと、これでも勇猛精進の氣を起したのだよ。

成田　それもこれも君の純一な淨い心から出たのだ。

水木　下らないお世辭はよし給へ。これはそんな美しい心からなんぞ出たのではないのだよ。凡ては僕の外貌の醜さから出たのだ。僕の醜さがあらゆる屈辱を忍ばせ、それを積極的の好意に變へるのだ。あゝ僕は今自分の醜さを、呪つていゝのだか祝福していゝのだか解らない。（急に感情が込み上げて來て、殆んど泣きさうになり乍ら）併し、今更祝福する事も出來ないのだ。さうだ。矢つ張り僕はそれを呪ふしかない。心から呪ふしかないのだ。（狂ほしく叫び乍ら、椅子の上に泣伏す）

成田　水木！　許して呉れ。ほんとに許して呉れ。

水木　（突然立ち上つて、一種自棄的な哄笑をしながら）はゝゝ。嗤つてやれ！　嗤つてやれ！　この醜男が又振られたぞ！　（と云つて又卓子の上に打伏して了ふ）

成田　水木！　（と云つたまゝ、痛ましげにその態を見てゐる）

（長い沈默。靜かな波の音に交つて、水木の堪へ切れぬ嗚咽が聞える。成田ももう慰むべき言葉がない。と暫らくして俄かに海岸の方から、賑かな人聲が聞えて來て、やがて松本と道子とが、他の二人の女友、櫻井英子と小林靜枝とを伴うて來る。英子は派手な近代的の美貌、靜枝は靜かな古典的な美しさを有つてゐる。（水木は人に知られぬやうに、そつと涙を拭いて立上る。）

道子　（門口から入り乍ら）兄さん珍らしい方にお會ひしたのよ。それで散歩はおやめにして、直ぐお伴れ申して來たのよ。

成田　さうかい。それはよかつたね。

道子　みんなで面白く遊びませうよ。（と云つて人々を見まはし乍ら、ふと水木の樣子を見て、急に嚴格な顏をして默り込んで了ふ）

成田　（二人の女に）よくいらつしやいました。（二人お辭儀をする）確かに初めてお目にかゝるのだと思ひますか。……

道子　（わざとらしい程快活に歸つて）あら兄さん。お忘れになつたの。厭な人ね。櫻井さんと小林さんぢやあり

ませんか。お兩人とも櫻山に來てゐらつしやるのですつて。

英子　私はよく存じて居りますわ。去年も丹羽さんの歡留多會でお目にかゝりましたから。ねえ靜枝さん。

靜枝　えゝ。

成田　あゝさうでしたね。さう云はれると思ひ出しましたよ。道理で一度お目にかゝつたやうな氣がしました。さうさう、さうでしたね。（雄辯に）僕は大抵の美しい人を見ると、初めてお目にかゝつた時でも、一度見たやうな氣がするものだから、逆につい貴方がたも、一度お目にかゝつたやうな氣はし乍ら、初對面の方ぢやないかと思つたのです。さう〳〵確かに覺えてゐます。あの時はお二人とも紫の羽織を着ておゐでゞしたね。あの時から見るとずつと大きく且つお美しくおなんなすつたので、……（二人笑ふ）それにあの時分は顏のどこかに、まだ子供々々しい可愛いところがありましたが、今ではもうすつかり輪廓がお整ひになつて。……

道子　まあ兄さん。失禮な事を仰有るのね。お目にかゝる早々から、お顏の事なんぞ仰有るものぢやなくつてよ。

成田（幾らか超然と）さうかい。それは惡かつたね。

水木（皆の後から皮肉に）美しいお顏の事なら、幾ら云つたつて關はないぢやありませんか。云つてならないのは、醜い奴の前で醜い顏の話をする事です。（皆々吃驚して水木を見る）

松本（何か云はなくちやならぬやうに感じて）さうだ。全くさうだね。

成田（初めて氣附いて）あ、君を皆さんに紹介するのを忘れてゐた。君は初めてだらうね。

水木（默つてうなづく）

成田　これはお二人とも妹の友人で、この方が櫻井、……えゝと、……

道子（引取つて）英子さんよ。そしてこちらが小林靜枝さん。私の昔からの親友ですのよ。（と水木の注視に會うて思はず下を向く）

成田　それから此の男は、（と笑ひ乍ら）新進劇作家として有名なる水木辰雄君です。本人の考へてるほど天才でもないが、世間で云ふほど馬鹿でもない、……まあ謂はば才人でせうな。

水木（苦笑し乍ら）成田。よせよ。下らない。（成田恐縮する）

英子（道子に小聲で）あなたの許婚（フィアンセー）の方ね。

道子（顏を赤くしてそつと）いゝえ。

松本（傍から幾らか嫉妬めいて）さうです。道子さんの將來の良人（ハズバンド）ですよ。

水木　（少し憤つた表情で）　誰？　僕がですか、どこから聞いてそんな事を云ふのです。――私は恥かしいから匿すのでも何でもない。誤解がないやうにはつきり申しますが、實際僕は道子さんとそんな約束はしてないのです。勿論これからだつてしません。私と道子さんは單なる友人で、それ以上の何ものでもないのです。一體誰がそんな事を云ふのですか。

英子　だつて私はさうとばかり承つてゐたものですから。

靜枝　私もそのやうに存じて居りました。

水木　そんならそんな噂は信じないで下さい。全然根據のない噂に過ぎないのですからね、――「噂の花婿」――か。さしづめモリエル風の喜劇ですね。はゝゝゝ。（少し妙な笑ひやうをするので、皆々默つて其顏を見てゐる）

松本　（獨言のやうに）　ほんとにさうだつたのかい。ふうむ。

道子　（すつかりうなだれて聽いてゐる）

成田　（道子に近づき小聲で）水木によくお禮をお云ひよ。

道子　（かすかに頷をあげて、成田へともつかず、水木にともつかず、低く云ふ）　濟みませんでした。

水木　あなたも飛んだ噂を立てられて、さぞ御迷惑だつたでせう。こんな醜い男と一生を共にするなんて、噂だけ立てられても隨分不幸ですからね。

道子　（默つてゐる）

英子　まあ！　そんな事仰有るものぢやございませんわ。噂だけでも不幸だなんて、誰がそんな事を思ひませう。

靜枝　不幸だなんて、そんな事がありはしませんわ。

水木　だつて考へて御覽なさい。――

成田　水木。もう大概にしてよして呉れるのだね。餘り云ひ過ぎると妙に聞えるよ。

水木　あゝ、さうだね。つい失敬した。（低く）　僕も弱くて卑怯な奴だな。云ふまいと思つてゐ乍ら、つい。……どうか勘辨して呉れ給へよ。

成田　いゝさ、いゝさ。そんな事は。――それより芝居の話でもしようや。（英子らに）　貴方がたも御存じでせう。去年舞臺に上つた水木の「牧場の二人」つて云ふ脚本を、

水木　舊惡を發(あば)くのはよせ。つまらないから。

英子　（成田に）　えゝよく存じて居りますわ。（水木に）私よくは解りもしないんですけれど、家で皆が新劇好きなものですからね。（少し媚を含んで）　あなたのやうな劇作家にお目にかゝれたのは、ほんとに嬉しうございますわ。ねえ靜枝さん。（靜枝うなづく）　靜枝さんは大變文學がお解りになるのよ。そして貴方がお書きになつた

ものは、みんな讀んでおゐでになるのよ。

靜枝　あら噓！　あなたこそ！

道子（やつと會話に加はつて）兎に角お二人とも、讀んでゐて下すつた事は事實ですわね。

松本　文學者つて云ふものは、或意味で確かに幸福だね。

成田　水木には思ひの外同情者があるよ。

水木　それも顏を見ない中の話でせう。大抵の人に會ふと僕はさう云はれるんです。「へゝえ、貴方が水木君ですか。」それから仕方なしに笑ひ乍ら、「想像してゐた君とは大變違ひますね。」と、かういつも來るんです。あなた方だつてきつとさうお思ひだつたでせう。

英子　そんな事は少しも思ひませんわ。（媚を含んで）私保證しますわ。そんな事はありませんわ。それは貴方のお僻みですわ。殊に私たちまでさうお考へになつては、私お恨み申しますわ。

靜枝　私もですわ。――

水木　でもひどい奴になると、あの面で脚本を書くも凄じいなどと云つて歩くさうです。それから此間はかう云ふ落首がありました。下駄面やビタ一面の炎の痕。……

松本　文學者仲間なんてものには、ひどい事を云ふ奴がゐるものだね。君はそれでも默つてゐるのかい。

水木　默つてゐるもゐないもありませんよ。蔭へ廻つちや誰だつて其位な事は云ひます。

英子　それが貴方のお僻みよ。考へ過す御病氣ですわ。わたしに慰める力があるなら、きつと貴方を癒してあげるんですけれど。

成田　どうして、なか／＼病膏肓に入つてゐるらしいからね。櫻井さんの御手腕でもどうだか。

水木　實は僕自身もそれを心配してゐる。何しろ、是が本ものゝ神經衰弱になつちや困るからね。（英子をぢつと見乍ら）が、案外早く癒るかも知れないよ。癒し人に依つてはね。

英子（話題を作らうとして）初めて貴方のお作が舞臺にのつた時は、どんなお心持でした。

成田　さう／＼。その本論に立戻ることだ。

水木　初日の道具裏で寂しい拍子を聞いた時は、何とも云へぬ妙な氣持になつて、謂はゞ「輝かしい心細さ」とでも形容しませうか、思はず鳥渡涙ぐんだものでした。ただそれつきりでしたよ。

英子　でもさう云ふお心持は、私たちには永久に經驗出來ない事ですから、貴方がたはほんとに幸福ですわ。

水木　その代り此の人生に於ては、餘りに不幸を閱し過ぎますよ。

成田　あゝ又話がそこへ行つたか。（水木に）もういゝ加

減に勘忍して呉れよ。（と話題を變へるために）どうです、皆さん。話は此邊で切り上げて、一つ庭へ出ようぢやありませんか。今日は人數も多いししますから、組でテニスをやりませう。

松本　贊成！（女たちに）貴方がたもおやりになるんでせう。道子さんのお友人（ともだち）なら。

道子　英子さんは大變お上手よ。學校でも一二と數へられる選手よ。

英子　あら噓ばつかし。私もつとお話を伺つてゐたうございますわ。

水木　不平を云へとでも仰有るなら、幾らでもお話し申しますがね。又此の次に致しませう。貴方とももつと親しくなつてから。

英子　ぢやあ此次にはきつとね。

水木　えゝ、きつと。――

成田　靜枝さん、貴方テニスは？

靜枝　私出來ませんけれど、お遊びになる所を拜見して居りますわ。

成田　おやコートの方へ行かう。水木。君も來るだらうね。

水木　僕は鳥渡此處へ置いて呉れ給へ。

成田　又新らしい戲曲の構想でもするのかい。

英子　何か書き初めて居らつしやるのですか。

成田　昨夜は盛んに書いてゐたね。隨分興奮してゐたらしかつたぜ。

水木　それは君の思ひ違ひだよ。僕は何も書いてやしない。

道子　二時頃お庭へお出なさいましたわね。

成田　君は此處の四阿（あづまや）の所で泣いてゐたね。

水木　君らまでそれを知つてゐたのか。あゝ君らがその理由を知つてゐたらね。（低く呻く）あゝ。……

成田　（打切るやうに）ぢや水木には此儘脚本の筋でも立てさせるとして、僕たちは向うへ行きませう。

松本　行かう。今日の天氣具合では、僕はきつと球の當りが素敵だぜ。

水木　それぢやお言葉に從つて、あの人生喜劇（ヒユウマン・コメディ）の一節でも考へるとしようか。

（成田皆々を促して去る。水木一人殘る。彼は皆を見送つて了ふと、ほつと椅子に腰を下ろし、ぼんやり前方を見つめて、長い間動かない。彼はもう泣いてゐるのではない。海の音。向うで皆の騷ぐ聲がする。ふと彼は眼前の足許に落ちてゐる手帛に目をつける。それを拾ひ上げてぢつと見る。靜に四邊を見廻して、そつとそれに接吻する。それから丁寧に疊んで懷に藏ふ。櫻井英子入り來る。水木を見て鳥渡微笑み、四邊を探すやうに見廻す。）

水木　どうなさいました。
英子　あの、此邊に手帛が落ちてゐませんでしたか。
水木　（微笑み乍ら懐から出して）あゝこれは貴方のでしたか。私は又道子さんのかと思つて、藏つて置いてやらうと思つた所でした。
英子　あらさう。鳥渡拜見。（手に取つて見る）何だか私のぢやないやうだわ。だから是は貴方が藏つて置いて下さいな。（と手帛を返す。而して水木が受取るのを見て）ほんとは私のよ。私のだけれどいゝでせう。持つてゐて下すつたつて。（水木答へず）貴方も向うへいらつしやいな。後からきつとね。ぢや御免なさい。（さつさと出て行く）

（水木呆然と後を見送る。しばらくして又そつと手帛を取り上げる。前のやうに接吻しようとする。その時向うの方で賑かな笑聲がするので、恰も嘲笑されたやうにやめて了ふ。而してもう接吻はしないが、ゆつくり疊んで懐に入れる。それから靜に立ち上る。）

——幕——

第二幕

舞臺は第一幕に同じ。

時は第一幕より十日程經た、ある美しい夏の宵。月光が一ぱいに輝いてゐる。
幕のあいた時舞臺には誰もゐない。暫らくして成田と水木とが、海岸の方から入つて來る。二人は默つて四阿の處まで來て、同時に腰を掛ける。

成田　僕に願ひがあると云ふのは、一體どんな話なのだい。まさか妹の一件ぢやあるまいね。
水木　道子さんの事ぢやない。別な人だ。實は僕、あの英子さんに申込しようと思ふんだが、どうだらう。
成田　ふうむ。君もたうとうさう云ふ氣になつて呉れたかい。實は僕も薄々察してゐて、君のさう云ふ決心に立至るのを待つてたんだよ。
水木　ぢやあ君も贊成して呉れるのだね。
成田　贊成どころぢやない。とうから君の逡巡してゐるのを、齒痒い位に思つてゐた處だよ。
水木　逡巡するもしないも、あの人と會つてから僅か十日しか經つてないぢやないか。櫻の木は古い葉が悉く落ち盡してからでなくては新らしい芽が出ない。それには幾ら短くても十日間位は要るよ。
成田　僕らは一日も早く君のためにも、僕らのためにも、その新らしい芽の成長を望むよ。
水木　それは僕とても望む所だ。僕はあの古い葉を振り落

すために、努めて新らしい芽を出さうとしたのだから。それで僅か十日ばかりの間にでも、こんな心持になり得たのだから。

成田　さうだらうとも。僕にもその心持はよくわかる。

水木　君は英子さんの僕に對する態度をどう思ふ。第三者の公平な眼で見たら。

成田　お世辭つ氣のない所、それは極めて明白だよ。あれだけ好意を見せてゐる以上、疑を容れる餘地がないぢやないか。

水木　さうだらうかね。僕も少しはさう云ふ氣にもなるが、何だか不安を感じないでもない。あれがあの人の單なるコケットリイだつたら大變だからね。

成田　單なるコケットリイにしては餘りに念が入り過ぎてゐる。

水木　君もさう思つて吳れるかね。

成田　併し何か具體的な證據のやうなものは、少しも君にないのかい。

水木　少しはある。僕に手帛を吳れたり、僕の所からわざわざ本を持つて行つて、其間に押し花を挿んでよこしたりした。

成田　それぢやもう大概大丈夫だよ。その他の微細な心の動きでは、妹さへそれと氣付いて、僕から君に薦めたらどうだと云つた位だからね。

水木　（鳥渡不快な顏をして）道子さんがかい。

成田　あゝ。

水木　道子さんはどんな氣持で、僕に英子さんを薦めたのだらう。どんな心持で二人を見てゐるのだらう。

成田　それは僕にも解らない。別段惡氣はなからうと思ふがね。

水木　うまく後任を推薦した積りなんだらうかね。

成田　僕は君が正當に彼女の心持を、酌んでやつてもよささうに思ふよ。

水木　いや、これは僕が惡かつた。――で道子さんは、英子さんの僕に對する心持を知つてゐるのだらうかね。

成田　そこ迄立入つて知つてはゐないだらうが、何なら妹にそれとなく聞かせて見ようか。

水木　道子さんにかい。

成田　さうだ。さうすれば直ぐに解るよ。

水木　それは少し困るね。他の人なら兎も角、道子さんには――。

成田　さうかい。君がさう思ふなら、たつてさうしようと云ふんぢやない。

水木　どうだらう、甚だ蟲のいゝ頼みだが、君自身で聞いちや吳れまいかね。僕の賴みと云ふのは實はそれなんだ。

成田　うむ。僕でよければ僕が聞かう。君のためなら其位の努力は吝まないよ。
水木　ぢや機を見て聞いて呉れ給へ。
成田　かう云ふ事は延ばして置くと、いつ迄も機會が見つからないものだから、何なら今夜の中に聞いて了はう。なあに雑作もない話だ。要するに君の意志さへ傳へれば、事は直ぐ定るに相違ないよ。
水木　君がさう保證して呉れるのは嬉しいが、實際君はあの人が、僕のやうな男を愛してゐると思つてゐるのかい。
成田　君の第一に棄てなくちやならないのは、英子さんも嘗て云つた通り、さう云ふ引込み思案な僻みだよ。
水木　只の僻みで止まつて呉れゝばいゝが、僕はまだ不安でたまらないのだ。
成田　すべては一時間後に解るよ。そして其不安だつた事さへ、其時は一つの甘い思ひ出となるんだ。
水木　もう一時間か。愈々待つとなると永過ぎるね。――あの人たちはまだ海岸にゐるのだね。
成田　もう歸つて來る時分だ。
水木　ぢや凡ては君に賴んだ。
成田　宜しい。引受けた。――ぢやかうしよう。歸つて來たら早速、英子さんの意嚮を此處で訊いてみるから、君はそこの木の蔭で聞いてゐ給へ。
水木　木の蔭で立聞きするのかい。
成田　さうさ。その位の勇氣がなくちや駄目だよ。
水木　何だか少し卑劣な氣がするね。僕はそんな事をしたくない。僕は萬事を君に委して、遠く離れて待つてゐたいよ。
成田　君も臆病だね。それぢや君の好きにし給へ。僕はどつちでもいゝんだ。只君は君自身の運命を、立聽きし度い興味はないかと思つたのだ。
水木　僕はそれほど強い人間ぢやない。立聽きするにしては餘りに怖ろしい事だからね。
成田　なあに心配する事は少しも無いよ。
（二人は思ひ／＼にしばらく沈默する。）
水木　君は英子さんをどう思ふ。
成田　僕も美しい人だとは思つてゐるが、僕に取つては少し派手過ぎるね。そして僕には靜枝さんの方が、美しくもあり好きでもある。
水木　さうだ。併しあの人の美しさは、寧ろ天上的で近づき難い所がある。
成田　美の性質から云へば寧ろ、君は靜枝さんを好きさうだがね。
水木　僕もそれはさう思ふ。併しあの人は僕に取つて餘り美し過ぎるのだよ。この心持は僕自分でも不思議に思つ

てゐる。今若し假りに二人の美しい女性を伴つれて來て、僕にそのいづれかを戀人として選べと云つたら、僕はきつとより美しくない方を採るね。つまり美しさが少なければ少ない程、僕には安全なやうに考へられるのだ。僕は戀愛に於ては一種の可能論者だからね。殊に英子さんと靜枝さんの場合に於ては、英子さんの幾らかインヴアイテイングな所に引かされざるを得ぬのだ。靜枝さんは徹頭徹尾望みはないからね。

成田　それは君の謙遜と云ふものだ。僕から見れば靜枝さんだつて、何も及ばぬ戀ではなさゝうだよ。

水木　さう云ふ自信を持ち得る人は、それだけでも十分幸福だね。

成田　君は強ひて自分自身を、惱めにして喜んでゐる傾向はないかい。

水木　それはあるかも知れない。併し此の心持は全く眞實ほんとうのだよ。

（海岸の方から長く引いた口笛が聞える。）

成田　（立上つて）松本だ。皆が歸つて來たらしい。君はそれぢや場を外し給へ。

水木　ぢや宜しく賴んだよ。（と云ひ乍らまだ逡巡してゐる）

成田　どうしたんだ。

水木　今日はあの話はやめようぢやないか。此儘苦しくともいゝから、何だかもう少し延して置きたくなつた。

成田　そんな事云つてたんでは初まらない。いゝからどこかへ行つてゐ給へ。すぐ吉左右を知らせるよ。

水木　さうだ。もうどうにもならない。屑く一か八か定めるとしよう。ぢや宜しく賴むよ。（急いで植込の方へ去る）

（松本、道子、英子、靜枝ら、海岸の方より入り來る。）

道子　まあ兄さん。こんな處にゐらつしつたのね。

松本　水木君はどうしたい。

靜枝　ほんとにあの方はどうなさいまして？　先刻から沈んでゐらつしやいましたが。

成田　水木は家へ歸つてるでせう。何だか仕事がありさうでした。

英子　みんな私たちを置いてきぼりにして、ほんとに惡い人たちですわね。貴方はこゝで何をしてゐらつしつたの。

成田　なあに鳥渡哲學を考へて見たくなつたものですからね。今、丁度月光と戀愛との關係に就て、小さなエッセイでも書かうと思つてた所でした。

靜枝　まあ！

道子　平凡ですわね。

英子　それでもうお考へつきになつたの。

成田　まだ結論に到らない中に、君たちが來て靜思を妨げて了つたのですよ。
松本　どうりで君のさう月に照らされた顏付が、哲學者じみてると思つたよ。
成田　で此上のお願ひには、どうか此哲學者を、暫らくかうして一人で置いて呉れないか。それに先刻から女中が買物に出たがつてるのに、家の留守居がなくて困つてゐるんだ。
松本　ぢや、向うで君の來るのを待つてゐるよ。
道子　兄さん。哲學を考へるのはようございますが、悲觀して狂人にならないやうになさい。
成田　それはどうとも保證が出來ないよ。
松本　ぢや僕ら凡人は向うへ行きませう。そして今夜と云ふ今夜は、道子さんの月光曲を聽くんだ。（皆々行きかける）
英子　（一番遲れて成田に）ほんとに哲學を考へてゐらつしやるの。
成田　（微笑む）えゝ。――どうしてゞす。さうは見えませんか。
英子　えゝ。哲學ぢやないでせう。あの人の事でせう。ほほゝゝゝ。御免なさい。（と笑ひ乍ら皆の後を追はうとする）

成田　（きつぱりと）英子さん。
英子　（立佇つて振り返る）なあに。
成田　忘れてゐましたが、貴方の所へ來たお手紙を預つてゐるのですがね。
英子　あらさう。どこに御座いますの。
成田　こゝに持つてゐるんです。
英子　（戻つてくる）ぢや下さいな。（道子が奥で英子さんと呼ぶ）今すぐ參りますわ。（成田に）どなたのお手紙？
成田　さう容易くは差し上げられません。まあそこへお掛けなさい。――（英子の近よるのを見て）手紙と云ふのは實は嘘なんです。實は貴方に是非お話ししなくちやならぬ事があつて、そこで嘘を吐いて引止めたのです。
英子　まあ！（いたく激動した樣子）
成田　さう驚いて立つてゐないで、まあそこへ坐つて聞いて下さい、なあに何でもないのです。僕が二言三言云へばそれと解る事なんです。
英子　（非常な喜悦に興奮した樣子で腰をかける）それは何でございますか。
成田　あの失禮な事を聞くやうですが、貴方はもうどなたかと、御婚約をなすつてゐるやうな事はございますまいね。

英子　（顔を上げて）　え丶、そんな事はございませんわ。

成田　では貴方が心の中で、この人と思つてゐるやうな方がございますか。

英子　（首を垂れて默つてゐる）

成田　實はある男が貴方を慕つてゐるのですが、その人のために貴方は、一生を託して下さる譯には行きませんでせうか。

英子　（顔を上げてぢつと成田を見る。答なし。間）

成田　かう云へばもうお解りでせうが、……

英子　（突然感激に滿ちて）　え丶、解りました。（殆んど泣かぬばかりに）　私もうすつかり申上げて了ひます。私もとうから貴方をお慕ひ申して居りました。只私には、今迄どうしてもそれが申し上げられなかつたのでございます。今お言葉を承るまで、こんな事が信じられなかつたので、私はもう殆んど思ひ切つてゐたんで御座いますけれど、今こそはつきり申し上げます。

成田　（吃驚して聞いてゐたが、急に狼狽し出して）　いえいえ。鳥渡待つて下さい。貴方は思ひ違ひをしてゐらつしやるのです。僕の云つてゐるのは、――

英子　（殆んど成田の言葉を聞かずに）　いえ〱。私はもうすつかりお打あけをして了ひます。あの歌留多會で初めてお目にか丶つた時から、私はもう貴方を忘れられない方だとお思ひ申して居りました。かうまで申し上げて了へば、私はもう貴方のもので御座います。

成田　（益々狼狽して）　まあどうか、さう激さないで聞いて下さい。僕の云つてるのはさうぢやないのです。僕は水木の事を云つてるんです。水木は、……

英子　えツ、水木さんですつて。水木さんがどうしたと仰有るのです。

成田　水木が貴方を愛してゐるのです。そして結婚して頂き度いと云ふのです。

英子　水木さんが！　まあ！　（急に感情を昂めて）　いえいえ水木さんなんぞは厭です。私は厭でございます。貴方は私がこんな事まで申上げた後に、急にそんな事を云ひ出して下さるなんて、それは餘りに殘酷でございます。私は貴方をお慕ひ申して居るのです。水木さんなんぞは厭でございます。貴方より外の方は誰も厭でございます。

成田　（殆んど度を失つて）　だつて水木が、……

英子　水木さんの事なんぞ、どうだつて關はないぢやありませんか。あの人が何だと云ふのです。私に結婚を申込みたいのですか。あのお顔で私に妻になれと仰有るのですか。厭です。厭です。それはあの方は可哀さうな、氣の毒な方だとは思つて居ります。そしてその點に同情して、親しくお話もして上げれば、御一緒に散歩も致しま

した。けれどもそれは只あの方に對する私の憐憫で、それ以上の何ものでも御座いません。私の思つてゐるのは貴方きりで御座いました。外の誰人でもございません。――かうまで申し上げて了つたからには、私は、もうどうにも仕方がございません。どうか私を愛して下さいまし。私を拒絶なさらないでくださいまし。お願ひでございます。

成田　それは僕とても、あなたのお心は嬉しいと思ひますし、私も貴方を此上なく好きですが、……私よりも前に水木が貴方を愛して居るのです、そんな事をしては水木が可哀さうです。どうぞ貴方はあの男の所へ行つて下さい。改めて僕からお願ひします。お頼みします。（手をとつて）ね、さうして下さい。ね。

英子　（とられた手を強く握つて）いゝえ、そんな事はもう出來ません。もう水木さんの事なぞ仰有つて下さいますな。私はあんな方の女王になるより、貴方の奴隷になり度うございます。

成田　そんな事を仰有つては私が困ります。

英子　では貴方は私を可哀さうだとは思つて下さらないのね。

成田　いゝえ、さう云ふ譯ぢやないんですけれど。

英子　貴方は私にこんな恥かしい事まで云はせて、棄てゝ行かうとなさるのですか。それではあんまりです。餘り殘酷ですわ。（手にもたれて泣く）こゝで貴方に棄てられましては、私はどうなるのでございませう。もう死ぬより外はございませんわ。

成田　まあ〳〵そんなに泣くのはおよしなさい。泣いたつて仕方がないのです。僕だつて泣ける位なら泣き度いのです。（ぢつと英子の顏を見て）貴方と御一緒に泣き度いのです。――あゝ僕も水木の事さへなければ、實はほんとに嬉しいのですよ。僕の胸はこんなに躍つてゐるのです。あゝ、いつそ此儘どこかへ行つて了ひたい。誰もゐない遠い世界へ。

英子　さうなつたらどんなに嬉しいでせう。連れて行つて下さい。どこまでも行きますわ（と寄り添ふ）

成田　（急にふりほどいて）併し僕にはそんな事はできません。――辛いけれども失敬して向うへ行きます。併し僕だつて貴方を愛してる事に變りはないんですよ。（急いで去らうとする）

（水木、樹の蔭から急に出て來る。）

水木　成田君！

成田　（振返つて驚く）あゝ君がゐたのか。（歸つて來て）君、濟まない事をした。濟まない。

水木　いや。――どうかもう一度此處へ來て呉れ給へ。三

人で改めて御相談しよう。

成田　（四阿の所へ歸る）君はすつかり聞いてゐたのかい。

水木　（うなづく）

英子　貴方は思ひの外卑劣な方ね。

水木　非難はまあ後にして下さい。それよりも、（と急に二人の手を取つてつなぎ合せる）ねえお二人とも、どうせ一度他人の幸福を願つたんだから、もう一度僕のこんな氣まぐれも、甘んじて受けて呉れ給へよ。（二人はうなだれる。二人とも暫く無言）

成田　水木、許して呉れ。

水木　なあにそれは僕こそだ。

英子　いゝえ、私こそお許しを願はなくちやなりません。（泣き乍ら）ほんとにどうぞお許し下さいまし。

水木　そんな事があるものですか。貴方はもう泣かなくてもいゝのです。そして泣くなら僕のゐない所で泣いて下さい。

（奥で又「英子さん、英子さん。」と呼ぶ道子の聲がする。）

水木　あ、向うで貴方を呼んでゐる樣子です。餘り永くゐて怪しまれるといけませんから、もうあなたがたはお歸りなすつて下さい。そして暫らく僕を一人置いて下さい。すぐあとから僕も參ります。

成田　それぢや英子さん、僕たちは向うへ參りませう。

英子　えゝ。

（二人は相共に家の方へ去る。水木獨りとなる。こみ上げて來る涙を抑へて、しばらくぢつとしてゐる。涙の雨頰に傳はるのが、月の光りに照り出される。たうとう耐へきれなくなつて、卓上に伏して嗚咽を續ける。長い間。）

（靜枝、家の方より出て來る。そして靜かに四阿の方に近づく。水木を見出して、暫らくその傍に立つてゐる。）

靜枝　水木さん。どうなさいましたの。

水木　（打伏したまゝ）何でもないんです。どうか此儘放つて置いて下さい。

靜枝　何をそんなにお悲しみなさいますの。

水木　（猶も打伏した儘少し激しく）何だつていゝぢやありませんか。どうか打棄つて置いて下さい。僕は何も悲しんでゐるんぢやないのです。

靜枝　（もう一度）ほんとにどうなさいましたの。

水木　（同じく）どうもしないのです。いゝから行つて下さい。自分勝手にかうしてゐるんですから。

（間。靜枝はなほ去らず。）

靜枝　（もう一度）ほんとに何故そんなにお悲しみなさる

の。

水木　（やうやく嗚咽をやめて、靜に首を上げ、靜枝を不審さうに見ろ）　貴方はまだ此處にゐらつしやるのですか。此の僕のやうな男の傍に。

靜枝　だつて何だか私心配ですから。そんなに辛い事がおありでしたら、私のやうなものでもお宜しければ、どうぞ其譯を聞かして下さいましな。云つて了へば幾らかお胸が霽れるでせうから。

水木　貴方はそんなに御同情して下すつて、後から悔いるやうな事はありますまいね。僕のこの心持を聞いてから、驚いて逃げ出しては下さいますまいな。

靜枝　そんな事ありませんわ。どうぞ聞かせて下さいましな。

水木　（デスペレートな心持になつて）　それならば幾らでも聞かせて上げます。えゝ聞かして上げますとも。聞いて吃驚なすつてはいけませんよ。――實は僕はあらゆる人から棄てられた後、最後に殘つた貴方一人を思つて泣いてゐたのです。ようございますか。貴方を戀して苦しんでゐたのですよ。さうです。貴方をです。僕は初めて貴方にお目にかゝつた時から、ひそかに貴方を戀してゐました。けれども色々な外面の事象に欺されて、私の心は貴方の方へ眞つ直に流れて行かなかつたのです。けれども今はもうそんな雜念は悉くなくなりました。而して殘つたのは貴方一人です。その貴方に私は今戀をお打明けします。それに對してあなたはどうお考へですか。どうお思ひになつて下さいますか。さあ御返事をなすつて下さい。お聞きします。

靜枝　（答へず。ちらと水木を見て、下を向いて了ふ）

水木　（益々デスペレートに）　さあどうか御遠慮なく刎ねつけて下さい。さあどうかひどく私を拒絶して下さい。――なぜ默つておゐでになるのです。茲で餘計な思はせぶりなぞは要りやしませんよ。どうかさん／＼に振つて下さい。罵つて下さい。輕蔑して下さい。唾を吐きかけて下さい。どうせ苦しみ序なのです。此上に幾ら苦しみを重ねて下すつてもいゝのです。――なぜ默つておゐでになるのです。私はこの醜い顏を以て、厚かましくも貴方を戀してゐるのですよ。貴方にそれが怖ろしくはないのですか。お厭ではないのですか。

靜枝　（又ちらと顏を上げて、何か云はうとしたが默つて了ふ）

水木　あゝ解りました。貴方は私がこんなに激してゐるので、うつかりひどく拒絶しようものなら、どんな事をされるか解らないと思つて、それで只默つておゐでになるのですね。併しそれならば無用の心配ですよ。僕の言葉

はかう自棄的でも、僕の心は冷靜なんです。どんな事を云はれても平氣なんです。さあ遠慮なく仰有つて下さい。

靜枝　（堪へられなくなつて、かすかに泣く）

水木　泣いた位では拒絶にはなりませんよ。ようございますか。僕はあなたのはつきりした答へ、きつぱりした拒絶が聞き度いのです。僕は昨日までその言葉を聞くのが怖ろしかつた。併しもう今は少しも怖れてやしません。（訴へるやうに）僕はほんとに貴方に會つたあの日から、深く〳〵貴方を愛して居りました。けれども僕はその當然の結果である失戀を怖れて、抑へに抑へて今日に及んだのです。が、もうそんなものは怖ろしくはありません。さあはつきりと仰有つて下さい。

靜枝　（やうやく）あの、その言葉はほんたうでございますか。

水木　えゝ、ほんたうですとも。少しも怖れはしないのです。

靜枝　いえ、私のお伺ひ致しますのは、あの、それよりも前に仰有つた事は、私を愛して下さると仰有つた事は、それはほんたうでございますか。

水木　ほんたうですとも。眞實過ぎる位眞實なんです。僕は色々な嘘にぶつかつて、今こそやつと眞實が云へるやうになつたのです。貴方は私の口吻が、眞實を語るにしては餘りに憤慨に近いとお思ひでせう。さうです。私の態度は餘りに自棄に類してゐます。けれども其底を流れてゐる眞實は、僕がかうして眞つ裸になつた爲に、やうやく云へるやうになつた眞珠のやうな眞實なのです。――今はもう貴方のお答を待つ許りです。さあ仰有つて下さい。なぜ默つておゐでになるのです。

靜枝　（言を發する能はず。只表情をこめて見上ぐるのみ）

水木　（もう一度）なぜ默つてゐるのです。

靜枝　（彫像のやうに同じ姿勢でゐる）

水木　（一歩近よつて、もう一度）なぜ默つてゐるのです。（もう一歩近よつて）何とか云つて下さい。（それから何かに吸ひ寄せられたやうに、默つて靜枝の手を取る。そして二人は泣き乍ら寄り添ふ。水木は猶も器械的に云ひ續ける）云つて、云つて、云つて、云つて、下さい！　云つて、云つて、云つて、云つて、云つて、下さい。

（この自棄とも歡喜ともつかぬ低い叫びの中に、靜かに。）

――幕――

三浦製絲場主（社會劇四幕）

人物

三浦淳吉　製絲場主（三十歳）
同　淳藏　その父（五十七歳）
同　ふさ　その母（五十一歳）
同　とし　その從妹（二十歳）
關口ひで　女工、後に淳吉妻（二十一歳）
國分寅治　職工長（三十三歳）
太田俊三　醫師（三十一歳）
町田源吾
中村五郎
三瓶清治
岩田勇作　職工（三十歳前後）
安藤權平　老職工、權爺と呼ばる（七十歳位）
同　つな　その娘、寡婦（二十七歳）
田村さだ　看護婦（二十三四歳）

給仕。女中。及び職工女工貧民等の群

時代

現代　事件の經過は約半ヶ年に亙る

場所

東北地方の一小都會

第一幕

職工長國分寅治の家。

街外れの暗く小さい長屋の内部。左手には街道に面する入り口があつて、そこを入ると三尺ばかりの土間、その土間から更に一段高い疊敷へ上るやうになつてゐる。正面及び右手は、煤けたる壁又は障子にて適宜に劃られ、貧しき家具、厨具の類が室の隅々に置いてある。而してそれらの不整頓によつて、此處が男の獨身居たる事が歴然と示されてゐる。右手の隅に床を敷いて、女工關口ひでが病臥してゐる。彼女は製絲工場の機械に觸れ、過つて片腕を傷けたが、不完全な療治と身體の衰弱のため、餘病を併發して苦しんでゐたのを、一時、寅治が引取つて介抱してゐるのである。

幕があいた時、寅治は遲い晝食を濟まして、片づけかけた食臺の上に肘をつき乍ら、呆然と物を考へてゐる。

一と所にぢつと見据ゑられた彼の眼は、それ自身「反抗」であるかのやうな輝きを見せてゐるが、蒼く削げた兩頬は、ストライキの首領として闘して來た、此の數日間の心勞を物語つて餘りある。彼は身動きもしない。暫くして近くを汽車の響が此沈默の中に傳はる。……

ひで　（ふと顔を上げて四邊を見廻す。亂してゐる病髪の間から、彼女の整つた顔の輪廓と、頼りなげなる眼が見える。さうして明瞭な聲音で呼びかける）國分さん。

國分　（默想から我に歸つて）何だい。

ひで　一體わたしはどうなるんでせうねえ。

國分　又初めたね。いゝから心配はよしなよ。おまへの身の上に就いてなら、ちつとも案じる事はありやしない。

ひで　だつて、いつ迄もかうして御厄介になつちやゐられませんわ。

國分　そりあ俺だつて行末永くおまへの世話をする譯にも行くまいけれど、決して此の儘おつぽり出すやうな事はしやしないよ。ちやんと會社の方から、おまへの怪我に對する正當な療治金と、たとひその片腕が無くなつても、末々一人で暮して行けるだけの、賠償金は十分取つてやるから、それまで安心してゐるがいゝよ。

ひで　でももうあの時三十圓出して貰つたんですもの。社長さんの方ではもう出して呉れないでせう。

國分　おまへもよつぽど馬鹿だなあ。その三十圓ばかりの金が何になつたと云ふんだい。もう疾うの昔費ひ盡してゐるぢやないか。そしてその三十圓の療治金で、おまへの傷がもう癒つたとでも云ふのなら兎も角、まださうして益々惡くなる一方ぢやないか。一體全體三十圓ばかりの端た金で、折れた片腕がもとへ戻るものかどうか、鳥渡でも考へて見るがいゝんだ。

ひで　でも私の不注意で、器械に引かゝつたのですから。

……

國分　さうおまへ一人であきらめて、默つて死んで了ひたいと云ふのなら、それもかまひはしないけれども、かう云ふ事はおまへ一人の問題ぢやないんだぜ。吾々職工全體、勞働者一般の問題なんだ。もし此儘おまへが泣寢入りにでもなつて見るがいゝ。それこそ會社側に取つちや此上もなく都合のいゝ先例を殘す事になるんだ。さうして之から其先例を楯に、どんな事を云ひ出すか解つたものぢやないんだ。片腕は愚か、片足をもぎ取られても、三十や四十の端た金で、どん／＼突つ離される事にでもなつたら、どうして俺たちが安心して、何千ボルトとかの電力で調べ革が行つたり來たりする中を、平氣で歩るいてゐられるものか。——そりやあおまへの怪我だつておまへの不注意には違ひないが、三十圓ばかりの包み金

で其儘放つて置くなんて、どこの國のどんな工場にもありやしないよ。

ひで　でも私のために皆さんが、仕事を休んでまで懸合つて下さるなんて、あんまり皆さんに濟みませんわ。

國分　おまへも解らない女だなあ。先刻から俺が云つてゐる通り、このストライキは決しておまへ一人の爲ぢやないんだよ。みんな職工自身のためにやつてゐるんだ。それあ成程此の直接の原因は、おまへのその怪我に在る。併し俺たちのストライキの目的は、何もおまへ一人のために會社から金を取つたり、又萬一俺たちが負傷した時の先例を造つて置くばかりぢやないんだ。實はこれを機會にして戰爭以來一度も上げた事の無い工賃を、三割増にしようと企てゝゐるんだよ。

ひで　ではようございますが、わたしの爲ばかりだとすると、ほんたうに心苦しくつて……

國分　實は俺たちはもう疾うから機會を狙つてゐたんだ。長い年月の間に少しづゝ溜めて來た不平が、俺たちの體の中でうづ〳〵し切つてゐるんだ。さうして其捌け口を求めに求めてゐた所へ、丁度うまくおまへの事件が持上つたんだ。おまへは俺たちに只機會を與へて呉れただけなんだよ。

ひで　（少し身を起して傾聽してゐる）

國分　（興奮した調子で）職工と工場主との間柄は、底を割つて云つて見れば、恰度睨み合つてる猛獸のやうなものだ。双方が互に飛びかゝる隙はないか、乘ずる機會は無いかと狙つてゐるんだ。さうして鳥渡でも隙が見えたり、機會が出來たりすると、猛然と襲ひかゝるものなんだ。だから俺たちは一刻だつて油斷しちやゐられないんだ。さうして常に彼等に對する反抗心を鋭くして置いて何か鳥渡でも觸れるものがあつたら、容赦なく吾々の權利を主張しなければならないんだ。

ひで　（了解したと云ふよりは、國分の興奮に對して、何とか調子を合はせねばならぬと云つたやうに點頭く）

（一人の老いたる職工權爺、此の談話の途中頃より戸口の外に立つて、ぢつと中の樣子を伺つてゐたが、此時靜かに障子を開いて入來り、かすかな會釋をして上り框に腰をかけ、國分の話を默つて聞いてゐる。）

國分　（老職工を顧み同情を求むるやうに）なあ權爺さん。俺たちは何も事を好んで、他人の爲にストライキをしてゐるんぢやないんだなあ。――かうして幾日もの賃金を犧牲にして、妻や子供に苦しい思ひをさせてゐるのも、みんな俺たち自身が可愛いゝからだ。俺たちだつてみんな人間なんだ。資本家たちと同じやうに、みんな幸福を望んでゐる人間なんだ。しかも吾々だけが工場の塵と埃

を吸つて、毎日骨と身を削り乍ら、ただ得る處は額の皺を増したり、深くしたりするだけなんだから堪らないよ――。俺たちだつて彼等と同じ人間なんだ。たつたそれだけの事が、誰にでも解り切つてゐる事が、彼等にはほんとに解つてゐないんだ。俺たちはせめてそれだけでも彼等に思ひ知らしてやりたいんだ。

ひで （少し起き直つて） ほんとにさうですわねえ。

權爺 （答へず。ぢつと貧治を見るのみ）

國分 なあ權爺さん。おまへさんの其齡になつたら、俺たちのやるこんなストライキなぞは、下らねえ騷ぎに見えるかも知れねえ。併し俺たちは決して、一時の血氣にばかり驅られて、こんな事をしてゐるんぢやねえんだぜ。それやあの社長が憎いと云ふ、小さな感情問題もあるには違ひねえ。が併し少くとも俺だけは、根本的にもつと大きな事を考へてゐるんだ、俺はこれを將來の人間のため、未來の勞働者のために犧牲になつてやつてる積りなんだ。どうも此の資本家と勞働者の階級戰は、もう百年や二百年はどうしても續くだらう。俺たちの生きてゐる今日までに、もう何百年と云ふ鬪ひを續けて來て、此の先まだ何年かゝるか解りはしないんだ。だから假令、俺たちが今力がなくて敗れたにした所で、今からやつて置いた事は決して無駄にはならない。將來きつと俺たちの死屍を乘り越え、俺たちの大切に養ひ育てゝ置かうとする、此の尊い職工の團結心と反抗心を以て、きつと資本主と對抗する人が出て來るに相違ないんだ。さうしたら世界は平等に利益を配分するやうになる。世間は口先ばかりでなく、心から勞働の神聖を認めて、勞働者をほんたうに尊敬するやうになる。俺はさう云ふ世界を夢に見てゐるのだ。吾々が大手を振つて街道を歩けるやうな時代を心に描いてゐるのだ。あゝ、さうなつたらどうだらう。もう町裏の汚ない溝地に、煤けた長屋も見當らなくなるし、夕方場末を歩いても、母の貧しい乳を求めて泣く赤子の聲も聞えなくなるんだ。あゝさうなつたら……ほんとにさうなつたら、どんなに俺たちは嬉しいだらう。なあ權爺さん。

權爺 （低く） あゝさうなつたら……ほんとにさうなつたらなあ！ （立上つてそろ／＼出て行く。そして戸口の處でぢつと振り返り） だが、さうなるまで俺は生きちやゐられねえだらう。（出て行く）

國分 （默つて見送つてゐたが） 一體何をしに來たんだらう。

ひで （感動して身を起さうとして、傷める片腕に觸れ、痛さに思はず聲を立てる） あいたたた……。

國分 おや、どうしたんだ。……

ひで　いゝえ、今起きようとしてつい、……あいたたた。

國分　（傍に寄つて）起き上らうとなんぞするからいけないんだ。さあ、ぢつとして寢ておいで。（と抱くやうにして横にする）

ひで　ほんたうにいろ〳〵濟みません。お話を伺つてゐる中に氣が立つて、思はず起き上らうとなんぞしたものですから。……

國分　さあ、かうして靜かにしてゐなくちやあ。――もうこれでいゝかい。（と床につける）

ひで　えゝ、有難うございます。

國分　（抱へてゐた手を離さうとして、再びぢつとひでの顏を見る。突然激しい情熱に驅られて、急に熱い接吻を與へようとする）

ひで　あら、いけません。（男の顏を拂ひのけようとする。此努力が又左腕の傷の痛みを引起す。叫ぶ）あいたたた……。

國分　（手を離しておど〳〵し乍ら）どうした、どうしたんだ。

ひで　いえ、何でもないんです。けれども、いけません。さうお寄んなすつちやいけません。（と咽び泣く）ほんとにいけないぢやありませんか。

國分　俺が惡かつた。勘忍してお呉れ。許してお呉れ。ほんとに俺は恥知らずだ。一時の感情に驅られて、又こんな事をするなんて、……あゝ。……

ひで　そんな事をなすつちやあ、わたし此處に居られなくなりますわ。お世話になつてゐる譯には參りませんわ。昨晩だつてあなたは、あんな事をなさるのですもの。……

國分　あゝもう昨晩の事を云ふのはよしてお呉れ。俺はどうしてあんな氣になつたか解らないんだ。――ほんとに俺は心から悔いてる。どうかおまへも惡い夢だと思つて、すつかり忘れて了つてお呉れ。

ひで　それは私も忘れたいと存じますけれど、二度とあんな事をして下すつては、御恩になつてゐる事が出來ませんわ。あなたはあんな事をなさる爲に、私を此處へ引取つて下すつたのぢやないでせう。

國分　さう云はれると俺は恥しくて、ほんとに穴へでも入りたい位だ。俺は自分の高潔な主義を實行する必要上、おまへを此處へ連れて來てゐながら、あんな汚ない事をして了ふなんて。――ほんとに許してお呉れ。おまへが許して呉れると云はない中は、心苦しくて堪らないんだ。さうして俺はもう決してあんな事はしないから、安心して此處にゐてお呉れ。

ひで　わたしが許すの許さないのつて、そんな事をいつま

で怒つてやしませんし、かへつて嬉しく思ふ位ですけれど。どうぞあなたも淸いお心で、私を此處に置いて下さるやうにお願ひしますわ。私はもう別に行き處つて無いんですもの。

國分　そんなら此處にゐて吳れるのだね。

ひで　えゝ、それは私の方からお願ひするのですわ。

國分　それで俺も安心した。

ひで　ほんとに御世話になつてゐながら、我儘ばかり云つて濟みません。

國分　いや。そんな事は決してないよ。――けれどもねえひでちやん。おまへがかうして俺の家にゐるのも、或ひはもう僅かな時日かも知れないよ。おまへにはまだ話さなかつたが、實は遲くも今夜中には、どつちともすべての解決がつく筈なんだ。町會議員の田中さんの口ぎきで、今日の五時には此方の委員が、向うの人と會見する事になつてゐるんだが、何でも田中さんの話によると、今日東京へ行つてゐた息子が歸つて來て、內外の事情を調べて見て、此方の要求を聞きたいと云ふんだ。けれども、どうせ橫暴社長の息子だから、一筋繩ぢや行かないだらう。だからうまく行つたにした所で、もう一二度の折合はつけなくちやなるまいが、それにしてもおまへの事は、近い中にどうにかなるだらう。居辛くてもそれまでの辛棒だよ。

ひで　あら、又そんな事を仰有つて。――けれども私の事が早く定れば、あなたにも此上御迷惑をかけずに濟むし、私も安心致しますわ。ほんとにその息子さんとやらが、物の解つた方だとようございますねえ。

國分　さうさ。それなら少しも文句なしに、吾々の事も早速定つて了ふんだ。此方の要求には一つだつて無理はないんだからな。

ひで　矢つ張り今の社長さんのやうに、情知らずだつたらどうしませう。

國分　なあに此方からは一歩も引かないばかりさ。どんな事があつたつて、此方の要求が徹らない上は、此のストライキはやめやしない。

ひで　（暫らく沈默してゐたが決然と）　ねえ國分さん。

國分　何だい。

ひで　あの、私の事なんぞはもうようございますし、皆さんも大變困つておいでのやうですから、もう會社ともいい加減な所で折合つて、仕事をお初めになつて下さる譯には行きませんか。

國分　又かい。馬鹿！　いくら云つて聞かせても解らないのだね。いゝからおまへは默つておいで。

ひで　はい。

（二人暫らく沈默して了ふ。そこへ權爺の娘のおつなが入つてくる。おつなはもう二十七八の寡婦で、見窄らしい服裝の割りに元氣な顏色と聲とを持つてゐる。）

つな　（外から）御免なさい。

國分　誰だい。

つな　（戸を開けて）わたしよ。

國分　おつなさんか。まあお入んなさい。

つな　（入つて來て）今日は。――おひでちやんの今日の御加減はどう？

ひで　難有う。大へんいゝんですの。

國分　まあ腫れだけはどうやらかうやら引いたやうですが、どうせ元通りには癒りますまいよ。

つな　どうしても切らなきやいけないんでせうかねえ。

國分　さうでもないんでせうが、少し手遲れになつてるんで、實は少々心配してゐるんですよ。

つな　ほんとに萬一片手が不自由にでもなつたらお困りですわねえ。

ひで　大丈夫ですわ、おつなさん。

國分　私も大丈夫とは思つてるんですが、何しろ傷が傷ですからねえ。

つな　ほんとに大切にしなくちや不可ませんわ。こちとらの命は手一本にあるんですからねえ。

國分　だから私共はかうして、ひでちやんの一生の保證になるやうな金を要求してゐるんですよ。

つな　ほんとにねえ。全くさうなくちやなりませんわ。

（間。）

あの、先刻うちのお爺さんが參りませんでしたか。

國分　えゝ、來ましたよ。何か用だつたんですか。

つな　いゝえ、別に何でも御座いませんが、何かこちら樣へ參つて失禮でもしやしなかつたかと、それで私も心配して參つたんですが。

國分　いゝえ、別に何でもありませんでしたよ。たゞ何にも云はずにふら〳〵と入つて來て、私が丁度このおひでちやんに話をしてゐたのを聞くと、何かぶつ〳〵口の中で云ひ乍ら、又ふら〳〵と出て行つて了ひました。出て行つてからもう十分位は經ちますよ。

つな　まあ、さうでしたか。――實は今日空きつ腹に御酒を頂いたんで、すつかり醉つて此方へ參つたのです。何でもストライキを止めさせるやうに云つて來るつて、大變な勢で家を出たんでしたが、ぢやあ此處でお話を伺つてゐる中に、醉が醒めて何とも云へずに歸つたのでせう。ふだんはあの通りおとなしいのですが、酒を呑むと乍に似合はず氣が立つて困るんですの。

國分　あゝそれで來たんですか。それぢや何とか云へばい

いのに、たゞ默つて入つて來て、又默つて行つちまつたので、どうしたのかと思つてゐましたよ。

つな　私はほんとに又何か失禮を申上げやしなかつたかと、早速お詫びに參つたんですが、それでやつと安心しました。

國分　(輕い吐息をして)　ほんとにあなた方のお苦しみもお察しするんですけれど。……

つな　いゝえ。私共でも決してこちらに對して、そんな不平を申してゐるのぢやないんですけれど、親爺も酒を少少頂き過ぎましたので、ついそんな氣を起したのでございますよ。

國分　お互ひにいろ〳〵云ひ分はあるでせうが、これも他人の爲ぢやないんですから、――それにもう少しの辛棒です。明日と云はず今夜の中に、向うと協定をする筈になつてゐますから、いづれにもせよ近日中には解決がつくんです。ですからもう少しの間辛棒して下さい。もう少しこらへてゐさへすれば此方の勝利になるんです。もう少しの間です。こゝで弱身を見せちやあ、今迄の苦心が水の泡になります。だからどうかお爺さんにも、苦しいでせうがもう少し辛棒するやうに云つて下さい。お願ひします。

つな　はい。よくさう云つて宥めます。そして私共はいつ迄でも辛棒致しますが、親爺はあの通りな舊弊者ですから、又何かと失禮な事を申しに參るかも知れませんが、どうぞ惡くお思ひにならないで下さいまし。

國分　惡く思ひなんぞ致しませんが、あんな御老人にまで心配をかけるかと思ふと、何だか濟まないやうな氣が致します。――(低く呟くやうに)　併し吾々の將來を思ふと、まだ〳〵これ以上の犧牲と忍耐とが要るんです。まだまだ強く吾々仲間の弱音を、壓服しなければなりません。――何しろもう少しの間です。もう少しです。

(三人思ひ〳〵の無言に陷る。突然戸を開けて工場の給仕入り來る。)

給仕　(少し息を切らして)　國分さん。おうちですか。

國分　うむ、ゐるよ。――何の用だ。

給仕　社長さんの言傳を云ひに來たんです。

國分　何だつて云ふんだ。

給仕　あのね。社長さんはね、今夜五時に皆さんと會ふ約束だけれど、急に思ふ仔細があつて、今すぐ此處へおいでになるから、あなたに其積りで待つてゐて下さいつて。

國分　今すぐ來るんだつて？　あの社長が自分でかい？

給仕　えゝ、あの若い方の社長さんが。――

國分　社長つたらあの胡麻鹽頭一人ぢやないか。若いも古いもあるもんか。

給仕　ぢやあの今日東京から來た、息子さんの方の社長です。
國分　さうか。息子が向うから來るつて云ふのか。それから？
給仕　それから、なるたけ職工の重だつた人を集めて置いて呉れつて。
國分　うむ、よし／＼。それで？
給仕　それつきりです。ぢやようございますね。（歸らうと身構へる）
國分　鳥渡待て。向うの用向はそれで解つたが、おまへに此方の用を賴みたいんだ。歸る序でに濟まないが大町裏の町田の所へ寄つて、すぐ來るやうに云つて呉れないか。急用が出來たから直ぐ來るやうにつて。
給仕　えゝ、承知しました。ぢや左樣なら。（と行きかゝる）
國分　おい、鳥渡待つて呉れ。もう一つ賴みたい事があるんだ。どうせ序でだから北町端れの中村の所へも寄つて皆を誘ひ合して來るやうに云つて呉れないか。
給仕　だつてあつちは廻り道だから厭だよ。
國分　廻り道だつて一町とないぢやないか。
給仕　（行きかけつゝ）厭だよ、厭だよ。（と急いで去る）
國分　おい賴むよ。……線香花火の畜生？　たうとう行つちまひやがつた。
つな　（立上つて）國分さん。あの私でよければ中村さんの所へ行つて上げませう。どうせもうお暇しようと思つてゐたんですから、これからすぐ向うへ廻つて、皆さんに來るように言傳して上げますわ。（土間に下りる）
國分　さうですか。そいつは濟みませんな。では御厄介ですがさうして下さい。お願ひしますよ。
つな　えゝお安い御用ですとも。では左樣なら。おひでちやん御大事になさいよ。
ひで　有難うございます。左樣なら。
國分　どうか呉々もお爺さんに宜しく。
つな　えゝ、歸つたらよく申しますわ。ぢや御免なさい。
（おつな退場する。寅治戸を閉めて戻つて來る。）
國分　さあいよ／＼おまへの事も俺たちの事も、もう二三十分の中に決まるんだぞ。
ひで　よく行つて呉れるとようございますわねえ。わたしさつき權爺さんの事を聞いて、心で泣いてゐましたわ。
國分　甘く行きやあ何もかももう一時間と經たねえ中に解決がつくんだ。何だかさう思ふと俺は心細くなつて來た。
ひで　あら、どうしてですの。
國分　なあにさう思ふだけだよ。
ひで　向うで又何か六ヶ敷い事なんぞ云ひ出しやしないで

せうねえ。

國分　それあどうだか解らないが、かうなつてみると俺の今の心持は何だか氣持がいゝやうな惡いやうな、かう大きいものを待つてゐるやうな、一種妙な心持がするよ。何だか神さまがあつたら、禱りたいやうな氣がするよ。

ひで　五六日の間でしたけれど、御心配は容易ぢやありませんでしたからねえ。

國分　（妙に感傷的になつて）ひよつとするとおまへと俺とが、かうして一つ屋根の下にゐるのも、もうあと一時間とは無いかも知れないぜ。妙な緣だつたが、こんな事も忘れられない思ひ出の種となるだらう。ひでちやん。何だか少し殘り惜しいやうな氣がするぢやないか。

ひで　ほんとにねえ。私もさう思ひますわ。

國分　おや、おまへ泣いてゐるね。

ひで　（淋しく笑つて）いゝえ。

國分　さうか。ぢや明りの加減で目が光つたんだらう。まだ三時だつて云ふのに、厭に暗くなつて來やがつたからな。

（と二人は顏をそむけて、暫らく沈默に陷る。間。戸を開けて職工町田入り來る。）

町田　やあ今日は。

國分　庄八さんか。さあどうかお上んなさい。急に招んで濟まなかつたな。

町田　なあにね、丁度此方へ樣子を聞きに來ようとしてゐた所だつたから、早速やつて來た譯さ。――おひでさんの工合はどうだい。

國分　うむ、今日は幾らかいゝやうだ。

町田　さうかい。それあいゝね。――それはさうと社長の息子が急に此方へやつて來るつて話だつたが、――

國分　うむ、さうだ。今夜まで待ち切れないと見えるんだ。

町田　一體あやまりに來るのか、小言を云ひに來るのか。

國分　さあ、それはまるつきり解らねえんだ。が、いづれ一と談判しなくちやなるまいから、その前に此方の腹を十分に決めてかゝらうと思つて、急いで君たちを招んだのさ。

町田　うむ、それは此方の出やう一つで、今日の話はどつちにでも決まるんだから、打合せて置かなくちやなるまいが、一體他の連中はどうしたんだい。

國分　中村の所へ云つてやつたから、いづれ三瓶と岩田とを連れて來るだらう。それだけ揃へば頭株はすつかりだから、今日こそ胡麻化されねえやうにしつかりやらう。

町田　一體向うは何人來るだらう。

國分　さうさな。親爺と息子と會計と、此の三人はきつと來るだらう。

町田　息子つて奴に物が解つてゐるといゝが、會計と來ちやあ海千山千だからなあ。

國分　なあに、今度こそ瓢簞鯰は許さねえ。

（職工中村と三瓶入り來る。）

中村　やあ今日は。

三瓶　どうしたんだい、急に又、——

國分　うむ。向うからもう直ぐに此處へ來るつて云つて來たんだ。

中村　さうかい。向うから來るつて云ふのは、もう既に七分の弱味が見えてるね。ぢやあ一つうんと強く出てやらうぢやねえか。

町田　それで今どんな態度を取つたものか、皆の膽を決めときたいと思つてるんだ。岩田はどうしたい。

三瓶　すぐあとから來る筈だ。

中村　態度つて今更決める迄もないぢやねえか。此處まで來た以上一歩だつて引かれやしねえ。

三瓶　でも君、そこは向うの樣子次第で、臨機應變に少しは讓步しなくちやあ。泣き言を云ふ譯ぢやないけれど、職工連中もう大抵心の底では折合がつくやうに望んでゐるんだからな。

中村　だつて君、此處で鳥渡でも弱味を見せちやあ、何時迄たつたつて俺たちの要求は通らないぜ。

三瓶　併し、向うも十分折合をつけたいと云ふ氣合を見せてゐるんだから、此方で穩に出てやれあ、此際何とか收まりがつくと思ふんだ。此方で強く出れあ向うも意地だ。きつと頑固に出るに違ひないよ。どうせこんな爭ひなんてものは、もとを質せば感情づくなんだから、そこを出來るだけ忍ばなくちやあ、……

町田　なあに向うぢや算盤づくなんだ。

中村　たとひ感情づくでも算盤づくでも、此處まで曳いて來た車は後へは曳けねえ。今更弱音を吹くのは意氣地なしだ。

三瓶　と云つて無暗に頑張るのは猶馬鹿だ。

町田　おい〳〵、二人とも下らねえ云ひ合ひはよせよ。見つともない。

國分　（默つて此樣を見てゐるのみ）

（職工岩田急に入り來る。）

岩田　遲くなつて濟まなかつたな。——何だかそれらしい人が向うからやつて來るやうだぜ。

町田　（戶の處へ出て見る）うむ、さうらしいな。——所で今の問題は。

國分　（決然と）それは俺に任して呉れ。

町田　それあ任せるが、どう云ふ態度を取るのだい。

國分　（力強く）勿論强硬に出るばかりさ。それでいゝだ

らう。

町田　（鸚鵡返しに）うむ、いゝだらう。

中村　（大きく點頭いて）いゝとも。

岩田　（次いで點頭く）よからう。

三瓶　（力に壓されて仕方なく點頭く）……。

（暫らく緊張した期待の沈默に陷る。）

町田　いよ〳〵來たやうだぜ。

（三浦淳吉、一人の子供に導かれて入口に現はる。）

三浦　（導かれて來た子供に）こゝだね。どうも難有う。（と入口の戸を開け、丁寧に帽子を脱いで）御免下さい。國分寅治さんのお宅は此處ですか。

國分　左樣でございますが、あなたは？

三浦　私は三浦です。

國分　あゝ左樣でございますか、お待ちしてゐた所でした。さあどうぞこちらへ。御覽の通り穢苦しい所ですが。――

三浦　では少々御免下さい。（と上つて適當の座につく）（職工らも各々適宜な位置に密接して座を占める。しばらくは不安なる動搖が見える。）

町田　あの、あなたお一人きりですか。外には誰もおいでにならないのですか。

三浦　えゝ、わたし一人きりで上りました。却つて其方がいゝと思ひましたので。（と一度ずつと職工を見渡して後、最後に寅治に向ひ）失禮ですが、あなたが國分さんでございますか。

國分　はあ、私が國分です。以後どうぞよろしく。（兩人强ひて丁寧なる禮を交す）それからこれが町田で、（と一人々々指し紹介する）中村、三瓶、岩田、と云ふ仲間です。集めて置いて吳れといふお話でしたから、重だつた者だけ招んで置きました。

三浦　それはどうも御苦勞樣でした。（皆々に禮をする）

國分　それからこれが關口ひでで。――

ひで　（半ば身を起して禮をしようとする）

三浦　はあ。（點頭いて）あゝ、どうか其儘にしてゐて下さい。どうか。――

ひで　ではどうぞ御免下さい。（と打臥して了ふ）

三浦　（少し改まつて）私は御承知でもございませうが、淳吉と申す淳藏の長男で、今迄ずつと東京に居つたものですから、つい皆さんにお近附を願ふ機會がありませんでしたが、これからはどうぞ宜敷お願ひ申上げます。確かどなたも初對面だと存じます。――

三瓶　（少し進み出て）あの、わたしは三瓶ですが。――

三浦　三瓶さんと仰有ると、あの中町にあつた陶器店の息子さんの、……（とぢつと顏を見乍ら）あの三瓶淸治君ぢやありませんか。

三瓶　え丶、さうです。昔あなたと御一緒に遊んだ、……

三浦　さうですか。（思ひ出すやうに）確か高等二年まで貴方と一緒でしたつけねえ。――あなたも隨分變りましたねえ。

三瓶　何しろあれからすぐ親爺が亡くなつて了ひましたので、……

三浦　さうでしたか。それは又、……で只今は、……何だか大變顏色が惡いやうですが、どこか御病氣ぢやないんですか。

三浦　い丶え、別に、……

町田　（皮肉に）なあに飯をたんと食はないからですよ。唯それだけの事なんです。それが病氣だと云やあ、わし共はみんな病氣なんですよ。

中村　これこそほんとの慢性病なんです。

三浦　……（ちつと下を向いて默つて了ふ）

（しばらく沈默。此時一人の職工らしき男、入口から默つて覗きゐたりしが、以後對話の進むにつれて、一人二人づ丶附近の貧しき男女、子供など入口に集り來り、だん／＼其數を増し來つて、曲の終る頃には、土間入口は貧しき群衆によつて塞がる。此等の人物は互に私語き又は唸るのみにして、對話の中には交渉し來ることなし。）

國分　（膝を進めて）で、今日急にこちらへおいでになつた御用向は？

三浦　え丶、それは只今申し上げます。――先づ何よりも前に皆さんにお話申上げて置きたいのは、私は何も一時的な仲裁に此方へ參つたのでなくて、云はゞ永久にあなた方と、行動を共にしようと云ふ決心で參つた事でございます。

國分　（少し呆氣に取られて）はあ、……

三浦　私は大學を出て兩三年と云ふもの、東京の方に就職して居りましたので、此方の會社に就ては殆んど知る所がなかつたのです。すると突然此度の同盟罷工が起つたので、初めてそんなに惡い事情があつたのかと、大へん驚いたやうな次第なんですが、何分向うには仕殘した用事があつて、それを片づけぬ中は來る事もならず、一人でやきもきしてゐたのですが、やうやく昨日それも片附いたので、急いで歸つて參りまして、實は今日一と先づ事情を調べて見たのです。

町田　尤も會社の帳簿だけでは、此の事情はよくお解りにならないと思ひますが。――

國分　まあ餘計な事は云はないで、默つてお話だけは聞いて了へよ。

三浦　や、お說の通り、確かに帳簿だけでは解りません。

のみならず、あなた方の事情に就いては、私は精神的にも物質的にも、殆んど何も知らないと云つていゝ位です。けれども會社側の方は、果して不當の利得を貪つてゐたかどうか、ようく調べた積りです。而して其結果は、不幸にして諸君の云つて居られる通りなのを發見しました。私はそれを茲で具體的に申し上げる勇氣はありません。たゞ私は今迄父の取つて來た態度を、情けなく感じたと諸君に申し上げれば足ると思ひます。私は實際皆さんに對して恥かしいのです。

（皆々顔を見合せる。）

三浦　それは又あの舊弊な父に云はせれば、父らしい申譯があります。けれども公平に見て私さへ、會社の施設は惡過ぎると思ひます。殊に關口……ひでさんとやらの場合でも、決して正しい賠償をしてゐるとは云へません。ですからそれを根據にして、職工の待遇を改善せよと迫られても、それは全く正當な要求なのです。これで私は今日から斷然、父に向つて今迄の態度を改め、それと同時に責を引いて、父に社長の職を引退するやうに勸めたのです。もう年齢も年齢ですし、場合も場合だししますから、世間への手前、又あなた方との折合の上から云つても、父が直接工場の管理にあたる事は遠慮して貰ふやうに勸めたのです。

國分　けれども、社長さんはそれを聞入れましたか。

三浦　父も意地でやめたくなかつたやうでしたが、たうとう説服して了ひました。

國分　では其後任にはどなたがなりますので？

三浦　それは私が引繼ぎます。甚だ氣を負うてゐるやうな形ですが、あの工場を父から受け繼ぐのは、子たる私の責任だと思ひます。私は御覽の通り年が若くて、實地の經驗とてはありませんが、理想と信念だけは持つて居ります。全力を盡してあの工場をよくして見せます。斷じて私利私慾を營んだり、人道に悖るやうな事は致しません。而して昨日まで埃と血にまみれてゐたあの製絲場を、輝くやうな「理想の工場」にして見せます。それが私の抱負なのです。

國分　それではもう今日から、あなたが社長さんなのでございますな。

三浦　さうです。此處へも社長の責任を以てやつて來たのです。

國分　では改めて社長さんの口から、はつきり承りたいのですが、御抱負などは兎も角として、第一手近な私共の問題はどうなるのでございますか。それを何より眞つ先にお伺ひしたいので。――

三浦　それは、私も只今申上げようと思つてゐた所でした。

では改めてはつきり申します。――賃金三割増と云ふあなた方の要求は喜んで私の方から應じます。猶其上によく私共の方の利潤を調査して見て上げられるものならもつと引上げようと思つて居ります。（群集私語し交す）ですからどうでせう。あなた方も明日からすぐに工場へ出て働いて頂けないでせうか。

國分　吾々も元通りの職務についてゞすか。

三浦　勿論さうです。元通りに一人も洩れなく、――

國分　するとあなたは吾々に對して少しも含む所がなく、此儘使つて下さると云ふんですな。吾々のやうな所謂危險分子をも。

三浦　吾々は寧ろあなた方を尊敬したく思つて居ります。さうして先程も申上げた通り、あなた方のやうな自覺した勞働者諸君と共に、相携へて「理想の工場」を作り上げようと思つてゐるのです。

國分　さうですか。あなたの御心はよく解りました。――おいみんな！　此の新らしい社長さんが仰有るには、明日から、賃金は三割上げて下さるし、これ迄通り一人も洩れなく使つて下さると云ふんだ。別に異議はあるまいな。

（皆々點頭き又は「無い、無い」などゝ叫んで同意を表す。）

町田　それはいゝが、おひでさんの事はどうなるんだい。

（皆々ひでを顧みる。）

三浦　關口さんの事も惡いやうにはしない積りです。さうして差當り先づ其傷が全癒するまで、私の手で太田病院へ入院して頂かうと思つてゐたのです。あそこなら私の友人の經營でもあり、設備も割合に整つてゐますから。あそこで十分療養させた上、猶其上の御相談に致したいと思ひますが、どうでせう皆さんの御意見は。尤も本人がお厭だと仰有れば又何とか別な方法も御座いますが。――

國分　さうですな。私共はこの人の幸福を願つてるばかりなんですから、それに勿論不服のある筈はございません。――尤も療治さへ行屆けば、入院する程のこともありますまいけれど。――おひでちやん、どうだいおまへの考へは。

ひで　（目を瞬つてゐるのみにて答へず）

三浦　どうです。一と先づ太田病院へ入院して呉れませんか。（近よつて）まだ餘程痛むんですか。

ひで　それほどでもありませんけれど。――

三浦　（靜にひでの顏を見乍ら）ひどく衰弱してゐるやうですが、毎日熱でもあるんですか。

ひで　（涙ぐましく）いゝえ。

三浦　（何となく可憐さに引込まれて）痛い方の手と云ふ

のはこちらですか。
ひで　あら。（低く）よごれて居りますから、お觸りになつちやいけませんわ。
三浦　（ちつと見て）どうです、私の云ふ通りにして下さいますか。
國分　どうだね。それとも此處で療治するかい。
ひで　あのわたし……そんなに迄して頂いていゝんでせうか。
三浦　いゝえ、なあに、私の方からお願ひするんですよ。
ひで　ではどうぞ宜しく。……
三浦　さうですか。早速御承知下すつて難有う。ではすぐ入院するやうに取計らひませう。（國分らに）それで宜しうございますね。
國分　（强ひて冷淡に）えゝ異存はありません。
町田　あゝ、これで一と先づ決まりはついたな。
三浦　さうです。これから初めて、吾々は建設の時代に入るのです。及ばず乍ら私も獻身的に努力しますから、一つお互に信賴し合つて、共同して模範的な工場にしようぢやありませんか。物質的に工場の規模は小さくとも、精神的には立派な大工場にしようぢやありませんか。私は一生懸命模範的な工場主たることに努力します。諸君もどうぞ模範的な職工となつて下さい。さうしてお互ひに燦然たる模範工場を樹立しようぢやありませんか。
（群集の中で誰かゞ「アーメン」と叫ぶ。抑へ切れぬ哄笑。）
國分　（群集に向ひ）何を云ひやがるんだ。社長さんは折角模範工場を立てゝ、縣廳からでも表彰されてえと仰有るんぢやねえか。それを茶化してどうするんだ。馬鹿め！
三浦　（此の暗諷に思はず眉をひそめたが、强ひて不快な心持を抑制して默つてゐる）
（此時、國分の叱咤にやうやく靜まりかけた群集を掻き分けて、先刻のおつなが顏色をかへて入り來る。）
つな　國分さん、大變です。うちの親爺が死にました。
町田　何だつて？
つな　親爺が裏の路次で首をくゝつたんです。大變です、早く來て下さい。
（群集動搖する。）
國分　（寧ろ平然と）さうか。たう〳〵やつたか。
三浦　一體どうしたんです。誰が死んだんです。
國分　權爺と云ふ老人ですよ。此の結果が待ち切れないで、たう〳〵死んで了つたんです。此のストライキの唯一の犧牲です。
三浦　（獨り言のやうに）さうか。矢つ張り俺の來ようが遲かつたか。

（皆々無言で、折から赤くさし込む路次口の夕日を氣味惡さうに眺める。）

――幕――

第二幕

太田病院の一室。

質素であるが居心地よげなる洋風の病室で、正面には廊下に通ずる戸(ドア)、右手壁には稍々大きな窓がある。室の中央に白い衝立があつて、部屋は二つに切られてゐる。

其右手の方には、窓の下に病床を据ゑて、關口ひでが横はつてゐる。窓からは明るい日光がさし入つて、病床の白いシーツに注いでゐる。

左手の方には一脚の卓子があつて、其周りに椅子が二三脚、病室用の器具などが置いてある。幕あくと看護婦の田村が、病床の傍の椅子に坐つて、雜誌か何かを讀んでゐる。ひで子は病床から默つて雲を見てゐる。

ひで　（靜な物倦げな聲で）田村さん、もういゝでせう。まだ不可なくつて。

田村　（雜誌を伏せて時計を見る）さうですね。もう七分過ぎましたからいゝでせう。

（看護婦は立上つて病床に寄り添ひ、ひでの懐から驗溫器を取り出して、明りにすかして度盛りを讀む。）

ひで　熱があつて。

田村　いゝえ、六度五分きり、（體溫表に記入して）全く平溫ですわ。

ひで　いつになつたら退院できるのでせう。

田村　もうすぐですわ。だからそんなに御心配なさらなくてもよくつてよ。

ひで　別に心配は致しませんけれど。……

田村　もうお體の衰弱の方も、切開した痕も大抵癒つたんですから、安心して退院を待つてゐらつしやいよ。

ひで　お蔭さまでほんたうに難有うございました。

田村　いゝえ。ほんとにお世話が行き屆きませんで。――

ひで　ほんたうにあなたのやうな御親切な方が、此處にゐて下さらなかつたら、わたしどんなに心細かつたでせう。社長さんは毎日御見舞に來ては下さいますけれど、長くて一時間とは居て下さらないんですものね。

田村　あら私の親切なんて、これが職業ですから何でもありませんけれど、社長さんの御親切なのには私共でさへ感心して居りますのよ。あゝして毎日お見舞ひに來て下さるなんて、外の方には迚も出來やしませんわ。

ひで　あなたはさう思つてゐて下すつて。

田村　えゝ、何故。
ひで　でも外の方は、さうばかり取つて下さらないんですつてねえ。
田村　ではどんな風に思つてゐるんでせう。
ひで　外の人々はね。社長さんが私の所へいらつしやるのは何か下心があつての事で、只の親切ばかりではないと云ふんですつて。社長さんと私とがをかしいと云ふんですつて。
田村　まあ、ほんたう。
ひで　ほんとに私位不幸な女はありませんわ。一生日蔭者になつて了つて、人の御親切を受けるのさへ氣兼ねしなくちやならないんですもの。
田村　隨分ひどい事を云ふ人たちねえ。――でもそんな事をどなたからお聞きになつて。
ひで　社長さんからお聞きしたのよ。昨日おいでになつた時に、さう云つてゐらつしやつたわ。――あの、自分は今迄毎日のやうに、此處へ訪ねて來たけれども、此頃世間の噂を聞くと、何だか妙に誤解されてゐるやうだから、これから少し來るのを遠慮するが、決して惡く思つて吳れるなつて、吳々もさう仰有つたわ。それあどうせそんな事を云ふのは、ごく僅かな馬鹿者ばかりだらうから、別に氣にしてゐる譯ではないが、そんな所から自分の親切が却つて無になつては、お互ひにつまらないからつて、目に涙を溜めて仰有るのよ。わたしも泣いたわ。だつてあんまりなんですもの。そんな事を、……ねえ。あんまりひどい事を世間の人が云ふんですもの。
田村　ほんとにねえ。お察し申しますわ。では今日から社長さんは、御見舞に來ては下さらないのですか。
ひで　えゝ、ですから今日はもうおいでになるまいと思ひますの。わたし、だから先刻から悲しくて悲しくて、心で泣いてゐたんですわ。
田村　ぢや淋しうございますわね。――でも職工長の國分さんて方は、今日あたりおいでになる時分ぢやなくつて。
ひで　あの人は忙しい身體ですから、來ても一週間に一度位ですわ。それに見舞ひに來て下すつても、何だかあの人怖いやうな氣がするんですもの。
田村　さうねえ。男らしい方ですけれどねえ。
ひで　あなたは社長さんお好き？
田村　えゝ。――あなたは。
ひで　わたし？　わたし何とも思つてやしないことよ。
田村　あらさう。だつてそれぢや社長さんに濟まなくはないの。あんなに御親切に面倒を見て下さるんですもの。あなたはほんとに幸福よ。わたしだつてあなたのやうに幸福になれるものなら、いつでもあなたと同じく片腕位

切つてもかまはないと思ふわ。

ひで　あら、何故。

田村　だつてあなたが苦しんでゐらつしやれば、皆さんがすつかり同情して下さるし、今度は又あゝ云ふ親切な社長さんが、かうして病院に入れて、始終見舞ひに來て下さるんですもの。

ひで　そりあかうしてゐる中はようございますけれど、もうこんな片輪になつちまつちやあ人さまが相手にもして呉れないでせうから、此の先どうして暮らして行けるか、わたしその事を考へると、いつそ此儘死んで了ひたうございますわ。

田村　だつてそりあ社長さんの方で、又どうにかして下さるんでせう。いくら世間の人は殘酷でも、あなたのやうな素直な氣立と、いゝ御器量とをもつてゐらつしやれば、きつと捨てゝは置きませんわ。

ひで　いくらさう仰有つて下すつても、私考へると心細くて心細くて、……（と涙を溜める）

田村　まあさう御心配なさらない方がよくつてよ。ね。（傍へ寄つて）もうこんな話はよしませう。――あなたのお髮はほんとにいゝのねえ。御病氣上りの人とは見えませんわ。もうお身體の方は大丈夫なんですから、明日お髮をお上げなすつちやあどう？　きつと氣分がせいせいしますわ。束髮ならわたしにも出來ますけれど、あなた髮は何がお好き。

ひで　（少し晴々と）わたし矢つ張り銀杏返しよ。

田村　さう。きつと似合ふわね。

ひで　さうでせうか。いつか社長さんも銀杏返しが一番似合ふだらうつて仰有つてよ。男の癖に妙な事を仰有るのね。

田村　きつと丸髷もよく似合ふつて、仰有りたかつたのかも知りませんわ。

ひで　まあ厭な田村さん。あなたまでそんな事を仰有るの。

田村　あら御免なさい。怒つちや厭よ。――でもほんとに銀杏返しに結つて御覧なさいな。きつと似合つてよ。

ひで　けれどももう今日は遲いから駄目だわね。今日はこれから何をしませう。

田村　ぢやあ又聖書でも讀みませうか。

ひで　あの本はわたしにはよく解らないんですけれど。

田村　でも折角社長さんが讀むやうにつて、置いて行つて下すつたんですから。

ひで　さうねえ。ぢやあ少し讀んで下さいな。

（看護婦卓子の上から革表紙の聖書を持ち來り、椅子を病床に近く引寄せてページを繰る。）

田村　どこまで讀んだのでしたつけねえ。

ひで　わたしも覺えてゐませんわ。

田村　（頁を繰り乍ら）路加傳第六章と、あゝ此處からだわ。

（形を直して讀み初めようとする。途端に戸を輕く叩く音がする。看護婦は本を伏せて立上る。）

田村　あら誰方かしら。（立つてゆき乍ら振返つて）きつと社長さんよ。（急いで戸を開ける）

（三浦淳吉の從妹とし子入り來る。手に水菓子の籠を携ふ。現代的な美貌。美しき外出着。）

田村　（少しどぎまぎして）あの、どなた樣でゐらつしやいますか。

とし　わたしは三浦俊子でございます。今日は兄がこちらへ參れなくなつたものですから、かはりに私が御見舞に上つたのでございますが、……

田村　あゝ左樣でございますか。ではどうぞこちらへ。

（椅子を薦める）

ひで　私が關口でございます。わざ〳〵どうも難有うございます。

とし　兄から始終お噂は承つて居りました。どうぞ以後は宜しく。（と丁寧に挨拶し合つて後、田村に水菓子の籠を差出し乍ら）あの、これは誠に有りきたりの品ですけれど、御病人には何がお宜しいか解らなかつたものですから、……どうぞそちらへお納めなすつて下さいまし。

田村　左樣でございますか。まあこんなお見舞まで頂戴しては、ほんたうに恐れ入りますわ。（ひでに）あなた、こんな結構な御品を頂いたんですよ。

ひで　まあ、ほんとに濟みませんわ、そんなにまでして頂いては。

とし　いゝえ、決してお禮を仰有るほどの物ぢやないんでございますよ。――今日は何か兄に用事があつて行かれないから、是非代りに行つて來いつて云ふものですから、急に參ることになりましたので、……却つて御邪魔ぢやありませんでしたかしら。

ひで　いゝえ、どう致しまして。

田村　今も二人で退屈し切つてゐたんでございます。（椅子を薦めて）まあどうぞお掛け遊ばして。

とし　難有うございます。では失禮いたします。（腰をかける）あの、御氣分はいかゞでございますの。

ひで　お蔭さまで大變宜しうございます、もう少ししたら退院が出來るかと存じますが、ほんとに何から何までお宅のお世話になりつゞけで、……

とし　いゝえ、そんな御心配は要りませんが、御不自由なお體におなりなすつては、嘸お心細くいらつしやいませうね。

ひで　でもみんな運とあきらめて居りますの。
とし　ほんとに御不運でしたわねえ。
（しばらく沈默。）
ひで　あの、誠に妙な事をお伺ひするやうですが。お宅の皆さま方は私の事は、憎い女とお思ひになつてゐらつしやいませうねえ。
とし　まあ、どうしてそんな事をお聞きなさいますの。そんな事がある位なら、かうして兄や私なぞがわざ〳〵參る譯がないぢやございませんか。
ひで　でも私のためばかりに、いろ〳〵な事が起つて、御迷惑を掛けたのですもの。先の社長さんなどはさぞお怒りだらうと存じますわ。
とし　先の社長つて叔父さんの事ですか。叔父さんならあんな人ですから、何と思つてゐるか解りませんが、わたし共はみんなあなたに同情してゐるんですよ。叔父さんは別ですわ。
ひで　叔父さんつて、先の社長さんはあなたのお父さまぢやないんですか。
とし　えゝ、叔父さんですわ。なぜですの？
ひで　だつて、あなたは今の社長さんと御兄妹でゐらつしやるんでせう。
とし　あら淳吉さんとはね、ほんとは從兄妹なんですけれど、兄さんと呼んでるんですわ。小さい時からさう云つてるんですもの。
ひで　まあさうですか。わたしはほんとの御兄妹とばかり思つて居りました。――ではあの、小さい時からのお許婚でゐらつしやるんでございませう。
とし　（赧くなつて）あら、そんな事知らなくつてよ。決してそんな事はありませんわ。
ひで　まあ、わたし飛んだ失禮な事を申し上げて、どうぞ御勘忍なすつて下さいまし。
とし　いえ、何とも思ひはしませんわ。
（しばらく沈默。此の間に看護婦は水菓子二三個を剝いて皿にのせて持ち來る。）
田村　（皿を枕許のサイド・テエブルの上へのせて、先づとし子に向ひ）早速頂いた林檎を剝きました。どうぞ一つ召し上りなすつて。
とし　難有うございます。勝手に頂きますから。
田村　ではどうぞ。（ひで子に）あなたも召し上れ。
ひで　えゝ。
とし　（歸るそぶりを見せて）ではわたしこれで失禮しますわ。あの何か兄に言傳でも御座いましたら、私からさう申しますが。……
ひで　あら、まだお歸りなさらなくても宜しいぢやござい

ませんか。まだお話もよく承らないんですもの。もう少しゐらしつて下さいましな。

田村　ほんにもつとごゆつくりなすつたつて宜しいぢやございませんか。關口さんも退屈し切つてゐるんですから。

とし　でも之からはちよく〳〵お邪魔に上りますから、今日はこれで失禮致しますわ。これから琴の御師匠さんの方へ鳥渡お廻りする事になつて居りますので。……

ひで　まあ左樣でございますか。ぢやあ又ごゆつくり。……

とし　では御免下さいまし。（田村に）左樣なら、お大事になさいまし。

田村　さやうなら。どうぞ社長さんに宜しく。

（とし子會釋して去る。看護婦見送つて戸口まで行き戸を閉めて歸つてくる。）

田村　まだほんの御孃さんねえ。

ひで　さうねえ。――あの方の締めてゐた帶は何て云ふんでせう。あなた知つてて。

田村　厚板織とか云ふんぢやなくつて。

ひで　さう。いゝわねえ。

田村　わたし共には、呉服屋の店に並べてあるのしか見られないものよ。

ひで　いゝ御器量だわねえ。

田村　さうねえ。でも髮が少し赤うございますわ。

ひで　社長さんはどうして又あの方をお見舞によこしたのでせう。

田村　あなたが淋しがつてると思つてゞせう。

ひで　社長さんは今迄に一度も、あの方の事はお話しなさらなかつたわ。そして今日不意にお寄越しになるなんて、どう云ふお積りか解らないわ。

田村　從兄妹同志だつて云ふのに、お顏はさう似ちやゐませんわねえ。

ひで　（獨りで）さうだわ。きつとさうだわ。――

田村　あら、何がさうですつて。

ひで　いえ、何でもないのよ。只ね。……きつとあの方は社長さんの奧さんにおなりになるのだわ。きつとさうだわ。

田村　さうでせうか。さうならお似合だわね。お二人とも御立派でゐらつしやるから、……ねえ。――でもさつきさうぢやないつて云つてゐらしつたわね。だからほんとに從兄妹同志だけなのかも知れませんわ。

ひで　さうねえ。（氣をかへて）もうこんな話はよしませう。他人の事を心配して見たつて詰らないわ。それよりかさつき讀みかけた御本を又讀んで下さらない。

田村　ぢや少し讀みませうか。

ひて　解らないけれどそれを聞いてるといゝ氣持よ。

田村　（前のやうに座を占めて）　ぢや讀みますよ。

（看護婦澄んだ聲で聖書を讀み初める。ひでは靜かに聞いてゐる。しばらく讀む。）

田村　聞き取りにくゝはなくつて。

ひで　（ものうげに）　いゝえ。

（續いて可なり長い間、――實演の際は五分間位――讀みつゞけてゐる。ひでは初めから眼を瞑つてゐたが、やがて寢入つて了ふ。靜かな寢息の音がする。看護婦は餘りに聽者が靜かなのに氣附き、讀みやめて靜かに「關口さん」と呼んでみる。返事がないので近寄つて顏を覗き乍ら「まあ」と云つて微笑む。そこで彼女は本を伏せてしばらくぢつと寢顏を見てゐる。それから枕許の藥罎を取り、行きがけに音のせぬやうに窓掛を引いて、そつと室から出て行く。長い間。外で戸を輕く叩く音がする。しばらく經つても返事がないので、そつと戸を開けて三浦が首を出す。さうしてひでの寢てゐる外、誰もゐないのを見て入つて來る。先づ病床に近寄つてひでの顏を覗き込み、しばらくぢつと見凝めてゐたが、惱ましげな吐息を一つして枕許を去り、衝立で仕切られた方の卓子の所へ來て、靜かに椅子に腰を下して懷中より煙草を出して點火する。しばらくして太田醫師が戸口から首を出す。）

太田　（覗き込み乍ら）　三浦君。こゝかい。

三浦　しつ！　靜かに！　御覽の通り寢てゐるんだ。まあ入つたらどうだい。

太田　うむ。（入り來る。而して聲を低めて）　よく寢てゐるな。君何なら僕の室へ來ないかい。病室で雜談も出來ないぢやないか。

三浦　さうさな。でも何だか此處が一番居心地がよくつてね。まあ眠りの邪魔にならぬ程度で、靜かに話をしようぢやないか。僕は其方が話しいゝんだ。

太田　一體君の話つて云ふのは何だい。

三浦　まあゆつくり話すから、（ひでの方を覗き見て）　此方の隅の方へ來ないか。

（二人は左手の隅の卓子の傍へ腰を下ろす。）

太田　何か込み入つた相談かい。

三浦　まあさう急ぎ給ふな。さう改まつて聞かれると恐縮するんだ。まあ煙草でも一つ取らないか。

太田　難有う。（一本煙草を取る）

三浦　時に――君の方の仕事は呑氣でいゝね。

太田　どうして／＼呑氣どころか。今やつと廻診を濟まして、鳥渡一と骨抜いた所さ。これから又一時間も經つと大忙しだよ。

三浦　まあそれは何より結構だね。

太田　それよりか君の會社の方はどうだい。うまく行つてはゐるらしいが。……

三浦　まあ着々歩を進めてゐる。まだ〳〵改良したり、新設しなくちやならぬ事も澤山あるが、初めから、迚も完全は望まれないからねえ。何しろ、今迄が謂はゞ惡德の巣窟とも云ふべき程だつたのだから、僕の理想の實行も容易ぢやないが、それだけ又張り合があると云ふものだ。而してまだいろ〳〵内部に反對はあつても、いつか必ず僕の精神のある所が認められて、僕の思ふやうになる時代が來るに違ひないから、根氣よく少しづゝ改革して行つてるのさ。

太田　僕らから見ると君のやり口は、少し淸敎徒過ぎるとは思ふが、まあ一つ思ひ通りにやつて見るのもいゝさ。

三浦　いゝさなんて云ふ手緩い事ぢやなくて、實際せずにゐられないのだ。――まあ親爺のやり口なぞを見ると、こんなのは無論一例に過ぎないが、少なからず心を寒くするものがあるからねえ。かうだ、まあ聞いて呉れ給へ。此處に一人の美しい女工がゐるとするね。さうすると親爺なんぞのやり口では、そいつを數ある女工の中から拔擢して男工の所へ絲取り枠を運ばせる役に使ふのだ。すると自然男工の間には、一つでも多く自分の所へ枠を運ばせたい希望から、猛烈な勵精の競爭が初まるんだ。――とまあかう云つたやうな事でばかり、工場の能率を増進させようと計るんだからねえ。

太田　ふうむ、中々うまい事を考へるものだねえ。

三浦　ところがそれは何も親爺の妙案ぢやなくて、どこでも普通にやつてゐる手段なんだから驚くねえ。

太田　けれどもそれ丈の事ならば、別に大した罪惡でもないだらうがね。

三浦　それはさうかも知れない。併し其弊の及ぶ先を考へると、由々しい人道問題にもなると思ふんだ。――まあいつまでも枠の數位で競爭してゐれば無事だが、やがてもつと猛烈な裏面の競爭が行はれる。仲間同志が反目する、嫉妬する、時とすると黨に分れて奪ひ合ふ。而して其結果は多くの場合、渦中に立つた可憐なる女工を悲慘な運命に陷れて了ふんだ。

太田　ふうむ成程、それはさうだらうね。

三浦　此處にゐる（とひでの方を見やつて）關口ひでなぞも、危ふく其一人になる所だつたのだ。今でこそ此處にあゝして白い毛布に包まれて安らかに寢てゐるが、嘗てはあの女の周圍に誘惑が渦を卷いてゐたのだ。怖ろしい惡魔が爪を磨いで待つてゐたのだ。僕は幸にして彼女をさう云ふ狀態から救ひ出すことが出來たのを、今尙一つの誇りにしてゐる。さうして假令會社の方の改革が、

どんな反對に遇つて挫折しても、あの女を救ひ得たと云ふ事實は、僕には實に最後の慰めになるのだ。あの女を救ふことが、僕の理想を實現する第一の階段だつたのだ。あの女は謂はゞ僕の理想主義の象徴なんだ。あの女が再びもとの境遇に落ちて、身を亡ぼすやうな事があつたら、其時こそ僕の理想は悉く破産したのだ。だから僕は何處までもあの女を守り立てゝ、決して又もとの悲慘な狀態に歸らせたくないと思つてるんだ。

太田　ふむ、それで。――

三浦　そこで僕が先刻から、君に話さうと思つてゐた問題になるのだが、實は僕この關口と結婚しようかと思つてゐるのだ。結婚して永久にあれを救ひたいと思つてゐるのだ。君のお蔭で幸に切開の痕も癒り、身體も見違へるやうによくなつて來たから、もう近日退院してもいゝ事になるだらうが、退院してもさしあたり何處へ行つたらいゝか、どうして暮して行つたらいゝか、それは彼女の重大な問題なんだ。それは金で片が附くなら、あの女の一生の保障になるやうな額を與へてもいゝが、それとて限りのある金錢では、忽ち行きつく先きが見えてゐる。其上たつた一人の女の身では、此の誘惑の多い世界で、どうして身を誤らずに居られるものか。墮落は目に見えてゐる。それだのに僕はみす〳〵あの女を棄てゝ他人に汚させるのに忍びないんだ。だから僕は結婚して、彼女を完全に救はうと思つてるのだ。

太田　うむ。それは理窟としては僕には異論はない。が、併し君、君にはその理窟以上に、關口さんに對する愛を感じてゐるかい。それが何よりも第一の問題だと思ふが。――

三浦　それは勿論感じてゐる。今僕は心からあの人を愛してゐるのだ。尤も昨日まではそれをはつきりとは感じなかつた。が、偶然ある所である噂を聞いてから、我れと我心にも反省してみて、初めてそれに氣が附いたのだ。僕は君も知つてゐる通り、殆んど每日のやうに此處へ來てゐる。それも初めは幾らか義務的に足を運んだ傾きもあつたが、其中にだん〳〵來ることが樂しくなつて來て、たう〳〵今では來ないではゐられなくなつて了つた。無論昨日まではそれほど自覺してはゐなかつたが、昨日偶然あそこの控所を通り合せに時、君の助手や看護婦たちが、僕の噂をしてゐたのを聞いて以來、改めて自分の身を振り返つて見て、少し恥かしい所があつたから、昨日も當人に理由を話して、世間の口が五月蠅いから來るのは遠慮すると云つて置いたのに、今日になつてみると此處へ來たいと云ふ心が、可なりな强さで湧いて來るのを感じたのだ。而してやつとそれを堪へて、わざと他の用

なしたり、とし子を代理に來させたりして見たが、考へれば考へる程、僕にはあれと會ふことが必要になつて來たのだ。僕は今迄無意識にではあつたが、可なり激しい愛を彼女に對して持つてゐたのだ。さう覺つたらもう一刻もぢつとして居られなくなつた。それで急いで此處へやつて來て了つたのだ。

太田　成程、それで一通り君の心持は解つた。理性的にも感情的にも、此結婚は君に取つて合法なんだね。併し君は、……あのとし子さんと結婚する約束になつてゐたのではないのかい。さうだとすると此問題も、鳥渡考へ直さなくちやならないが。――

三浦　家ではどう思つてたか知らぬが、僕にはそんな約束は斷じて無かつた。

太田　ふうむ。さうかい。僕は今迄とし子さんと君とは、將來一緒になるものだとばかり思つてゐたが、――で君は今の關口さんの事を、一應家の人たちに相談してみたのかい。

三浦　いや、それはまだだ。するのは君が初めてだよ。

太田　君は家族の反對を豫期しないかい。

三浦　それはきつと在るだらうと思ふ。併し僕はそれを排して、決行するだけの勇氣もあると信じてゐるよ。今の決心はどんな反對に會つても枉げないつもりだ。

太田　うむ。君にそれだけの決心があるなら、僕も不肖ながら君の味方となつて努力しよう。

三浦　君が贊成して呉れたのは、僕に取つて何よりも心丈夫だ。ぢやあどうか宜しく盡力を頼むよ。

太田　それはさうと君はもう、關口さんの意向は確かめて見たのかい。

三浦　いや、それもまだだ。實は之から確めようと思つてゐるのだ。

太田　（更に聲を低めて）たゞ僕は凡ての前に、醫師として一應君に警告を與へて置くが、あゝ云ふ階級に屬する女は、あの年までには大概もう處女ではないと云ふ事だけ、はつきり考への中に入れて置き給へよ。

三浦　難有う。併し僕の愛はそんな事位、許すだけの力を持つてゐるつもりだから。――

太田　それはさうだらうが、得てそんな所から結婚後の破綻が起り易いからね。

三浦　もしそんな事が起るやうだつたら、僕の志は全然無になる譯だから、誓つてそんな結果には陷らせないよ。

太田　宜しい。それなら先づ何よりも當人の意志を確め給へ。事はすべてそれからだ。（時計を出して見て）ぢや僕は失敬するよ。（立上る）

三浦　あゝ、ぢや何分宜しく頼む。

（醫　は通りがかりに一度ひで子を見、戸を開けて去つて了ふ。三浦あとの戸を閉めかけて見送つてゐる。突然ヒステリカルな涕泣が、ひで子の病床から起る。三浦驚いて振り向き、急いで病床に近寄る。）

三浦　どうした。どうしたんだ。夢にでもうなされたのかい。

ひで　（切れ〴〵に）いゝえ。いゝえ。わたし、……あの、……いまのお話を聞いてゐましたの。

三浦　えつ。ぢや今の話をすつかり聞いたのかい。

ひで　えゝ。少し、……

三浦　さうかい。それは猶よかつた。僕も實は聞いて貰ひたかつたのだ。（興奮を抑へて）では改めて僕から云ふが、僕はおまへに結婚を申し込むよ。おまへそれを承知して呉れるかい。それとも何か異存があるかい。

ひで　（かすかに）いゝえ、異存なんぞございませんが、わたしのやうなものが、……

三浦　ひでちやん。今はそんな事を云つてる時ぢやないんだよ。僕はおまへを心から心から愛してゐる。おまへの方でも僕を愛して呉れる事ができないかい。

ひで　いゝえ。わたしとうからお慕ひ申しては居りましたわ。けれども、……けれども、結婚なんて事は、……一度も考へやしませんでしたの。……ですからあんまり急で、……わたし何と申上げていゝか解りませんわ。

三浦　ぢや愛して呉れると云ふのだね。それをはつきり云つてお呉れ。

ひで　えゝ、それは、愛しますわ。

三浦　それならいゝぢやないか　二人はもう一つの心になつてゐるのだもの。もう結婚するより外に道はないぢやないか。それともおまへは他に約束した人でもあるのかい。

ひで　あら、そんな人はひとりもありやしませんわ。

三浦　ぢや他に君を思つてゐる人でもあるのかい。

ひで　（鳥渡躊躇した後）いゝえありやしませんわ。

三浦　そんなら承知して呉れるね。承知して呉れるだらう。ね、ね。（と一方の手を取つて打振る）

ひで　（かすかに嬉しさを包んで）えゝ。

三浦　難有う。――これでやつと僕は安心したよ。おまへを全く救ふことが出來たのだからね。

ひで　（默つて男の手に縋つた儘、喜びに泣き入つてゐる）

（二人はしばらく同じ狀態で、歡喜に醉うてゐるやうに見えたが、やがて女は涙にぬれた顏を上げて、ぢつと男を見上げる。男もぢつと上から目と目を見合つた。この戀のポーズは暫らくつゞく。）

三浦　（やうやく我に返つて）大へん顏が涙でぬれてゐる

よ。拭いちやあどうだい。
ひで　（微かに笑つて）　さう。汚ないでせう。（拭ふ）　まだですか。
三浦　あゝ綺麗になつた。それでいゝ、それでいゝ。ぢや又來るからね。靜かにしてお寢みよ。
ひで　（おとなしく）　えゝ。
三浦　いろ／＼な邪魔は入るだらうが、どこまでも二人は一緒なのだからね。いゝかい。
ひで　えゝ。
三浦　ぢや左樣なら。
ひで　左樣なら。
（三浦戸を開けようとする時、急に戸は外から開かれて、職工長國分寅治と行き會ふ。）
國分　（少しく驚いて）　あゝ社長さんですか。只今お歸りでございますか。
三浦　えゝ。――君もお見舞ですか。
國分　えゝ、さうです。
三浦　さうですか。それは御苦勞ですね。ぢや失禮。（去る）
（國分禮を返し、戸を閉ぢて入つてくる。）
國分　社長は毎日來るのかい。
ひで　（默つてゐる）………
國分　社長が毎日來るんなら、俺も毎日來なくちやならないからな。
（と反抗的に三浦の去つた戸の方を眺める。）

――幕――

第三幕

三浦淳吉の家。
稍々廣き日本間。正面には右に床の間があつて、違ひ棚など宜しく、左に襖を立てた出入口が奥へ通じてゐる。右手は張り出し窓、障子等にて緣側と限られ、左手は襖が立て切つてあつて、それから玄關口へ通ずるやうになつてゐる。座敷の中央には紫檀の机と、陶器の火鉢とが置いてある。
幕あくと從妹のとし子が、床の間の前で活花を直してゐる。そこへ母のおふさが奥から出て來る。
ふさ　おや、おまへ一人かい。おひでは。
とし　髪結が來ましたので、お部屋で髪を結つてるんでせう。何か御用ですか。
ふさ　いえ、用といふ程でもないんだけれど、お父さんの羽織を疊んで貰ひ度いと思つてね。
とし　そんな事ならわたし致しますわ。こゝは今すぐ濟み

ますから。鳥渡待つてゝ頂けないこと。

ふさ　あゝいつでもいゝのだから。お急ぎでないよ。——よく活かつたねえ。

とし　（活け乍ら）五日も活け放しにして置いて、餘りみつともないんですもの。

ふさ　さうだねえ。

とし　此頃はすつかり怠け癖がついちまつて、何をするのも氣が進まなくて困りますわ。

ふさ　（默つてる）

とし　ねえ叔母さん。

ふさ　なんだね。

とし　わたしあの、叔母さんに御相談しようと思つてた所なんですけれど、今丁度いゝ折ですから、聞いて下さらない。

ふさ　あゝ、聞きますともさ。

とし　あのね。此間兄さんからあつた太田さんの縁談ね。あれを私お斷りしようかと思つてゐますのよ。私もう暫らく獨身でゐたいんですもの。

ふさ　もう暫らくもう暫らくつて、いつ迄さうしても居られまいがね。

とし　わたしならう事なら、一生獨身でゐたうございますわ。

ふさ　さう云ふおまへの心持は、私にもよく解つてゐるんだけれどねえ。おまへにさう云はれると、私はほんとに氣の毒でならないのだよ。わたしの考へでは、おまへも知つての通り、どこまでも淳吉と一緒になつて貰ふつもりだつたのだけれど、あれがあんな我儘を云つて、どうしてもおひでを貰ふつてきかないものだから、たうとうこんな事になつて了つたんだけれど、私はほんとにおまへには濟まなくて濟まなくて、……

とし　あら叔母さん。濟むの濟まないのつて、そんな事を仰有つちや困りますわ。

ふさ　いゝえ。ほんとに濟まないのだもの。——だから私もあの時一生懸命云ひ張つたのだけれど、……

とし　ですから叔母さんの難有いお志は、わたし一生忘れやしませんわ。けれどももうそんな昔の事、云つたつて仕方がありませんし、又兄さんにしました所が、ほんとにお愛しなさる方を奥さんになさるのが當り前ですもの。それを今度のわたしの結婚をお斷りする理由のやうにお取りなすつては、わたし却つて心苦しうございますわ。

ふさ　それはさうだけれど、私としては心に濟まなくてね。

とし　それは私にしましたつて、此儘こちらに置いて頂ければ此上もない幸福とは存じますし、おひでさん位のお世話は出來ると思ふんですけれど、……

ふさ　ほんとにこれがおまへだつたら、みんな水入らずで暮して行けただらうし、いろんな世話ももつと行屆いただらうがねえ。あゝして片手が無い上に、何にも家の事を知らないんだもの、私は人さまにこれが伜の嫁ですつて、ちやんと引合せる事も出來ないんだよ。
とし　でももう仕方がありませんわ。あゝして正式に御結婚なすつて、兄さんが可愛がつてゐるでなんですもの。
ふさ　私も今ではさうあきらめて、何にも云はないでゐるけれど、あゝ云ふ素性の賤しい女だから、何か家名に障りでもするやうな悪い事でもなければいゝと思つて、ほんとに心配でならないのだよ。
とし　ほんたうよ。叔母さん。それだけはよく氣をお附けなさらないと、飛んだ事になりますわ。（急に聲をひそめて）ほんとはね。わたし少しあの人の事で訝しいと思ふ事があるのよ。あの人前に何かあつたんぢやないでせうか。
ふさ　何かつて。
とし　男の人か何かよ。
ふさ　それはわたし淳吉にも念を押したのだけれど、……おまへ何かそんな證據でも見たのかい。
とし　いえ、證據つて程の事ぢやありませんけれど、少し變ですわ。

ふさ　何が變なのだね。
とし　あの、おひでさんは姙娠してますわね。
ふさ　あゝそれは私も氣がついてゐたがね。
とし　兄さんと結婚なすつてからまだ三月ですわね。
ふさ　あゝさうだね。
とし　三月にしちや少しお腹が大きいとはお思ひなさらなくつて。
ふさ　さうさねえ。さうかしら。
とし　ぢや氣を附けて御覽になるといゝわ。わたしにはどうもさう思はれるのよ。
ふさ　家へ來る早々から、しよつちゆう身體が悪い〳〵つて云つてゐたから、ひよつとすると身持ぢやないかと思つてゐたが、ぢや矢つ張りさうだつたのかねえ。さうとすれあ此儘ぢや置かれない事だね。
とし　わたしもさう思ひますわ。兄さまの爲にも、お家の爲にも。
ふさ　ぢや私もよく氣を附けて見るからね。
とし　わたしの氣のせゐばかりぢやないと思ひますわ。わたしのお友達にもお嫁に行つて、もう姙娠した人がありますけれど三ケ月位であゝ目立つものぢやありませんわ。
ふさ　さうだねえ。併し肝心の私がうつかりしてゐて、年

齡のゆかぬおまへに教へられるなんて、私も年を取つたねえ。

とし　いえ。わたしだつて此間おひでさんと、御一緒にお風呂に入らなかつたら、氣が附かなかつたかも知れませんわ。でも、よく〳〵調べた上でないと解らない事よ。だから私も今迄幾度か申上げよう〳〵と思つてたんですけれど、證據もないのにそんな事を云つては、わざとおひでさんを陷れるやうに思はれますから、今迄默つてゐたんですわ。叔母さんも之からよく氣をお附けになつて御覽になると宜しうございますわ。

ふさ　その外に何か氣附いた事はないかえ。

とし　えゝ、たゞそれだけですの。

ふさ　此後ともよく氣を附けてお吳れよ。――こんな事があるから私は反對だつたのさ。

とし　わたしだつて何も探偵のやうに、あの人の事を彼是目をつけたりしたくないんですけれど。もしそんな事だつたりすると、あんなに愛してゐらつしやる兄さんが可哀さうでございますからね。

ふさ　もしさうだつたら。淳吉がいくら許すと云つても、わたくしが承知しないからいゝ。

（玄關の戶の鈴の音がする。）

とし　おや、どなたかいらつしつたやうよ。――ぢや今の事は、よく調べた上でないと解りませんから、叔母さんもまだ默つてゐらつしやる方がいゝと思ひますわ。

ふさ　あゝさうともさ。

（女中左手の襖をあけて登場。）

女中　あの、國分さんて方がいらつしやいました。

ふさ　まだ淳吉は歸らないつてさう云つたのかい。

女中　はい。さうしたら奧さまでも宜しうございますから、お目にかゝりたいと仰有いますので。

とし　國分つて、職工長の國分寅治かい。

女中　左樣でございませう、きつと。――何でも奧樣をよく御存じのやうな口振りでございましたから。

とし　さうかい、それぢやあ（と意味ありげに）ねえ叔母さん。私たちは向うへ參りませうよ。（女中に）そして其方を此處へお通しして、おひでさんにさうお云ひな。

女中　はい。（去る）

（つゞいて女二人も急いで奧へ去る。やがて國分寅治、女中に案內せられて左手より登場。）

女中　只今奧樣に申上げますから、どうぞ暫らく。

國分　はあ、御無理を願つて濟みません。

（女中去る。國分あたりを見廻してゐる。女中再び入り來り茶を薦めて去る。しばらくして初々しい丸髷に結つたひでが奧の襖をあけて靜かに出てくる。さうし

て二人は顔を見合せる。）

ひで　（少し胸を轟ろかした様子で、坐り乍ら）　あなたでしたか。

國分　え丶、私です。

ひで　（强ひて冷淡に）　何か主人に御用がおありになるとかでございますけれど、わたしが代りに承りましても、よくは解らないだらうと存じますが、……

國分　いえ、その用も用ですけれど、實はそれはどうでもい丶んです。（聲を低めて）　たゞ私は鳥渡あなたにお目にかゝつて、色々お話し申上げたり、お聞きしたりしたいと思つたものだから、思ひ切つて圖々しく上り込んだのです。社長のゐないのは勿怪の幸と思ひましてね。

ひで　まあ、では初めつからそんなお積りだつたのですか。

國分　え丶、少し冒險過ぎましたかね。

ひで　では甚だ失禮ですけれど、どうぞ直ぐお歸りなすつて下さいまし。私はあなたとかうして用もないのにお話をしてゐる譯には參りませんわ。

國分　まあ。さうまで仰有らなくたつてい丶ぢやございませんか。――そんなに御迷惑なんですか。

ひで　でも家の人も聞いて居りますから。――

國分　い丶ぢやありませんか。別に惡い話をするんぢやなし、昔の友達が會に訪ねて來て、世間話の一つもして歸らうと云ふだけなんですからね。――それも外の人なら兎も角、あなたと私とは一つ釜の飯を食つて、一つ屋根の下に十日近くも居た間柄なんですからねえ。

ひで　どうかもうそんな前の事は仰有らないで下さいまし。そんな事を仰有つて、私を苦しめないで下さいまし。

國分　（皮肉に）　は丶あ、するとあなたのやうな女でも矢張り、見捨てた前の仲間の事を考へると、心が苦しくなると見えますね。――資本家の奴隷に身を賣つた罰です。身分不相應な結婚をした酬いです。

ひで　わたしもうあなたの仰有ることをお聞きする事は出來ません。どうぞお歸りなすつて下さい。お歸りなすつて下さい。（涙を溜めて）　あんまりですわ。あんまりな事を仰有いますわ。

國分　さうまで仰有るなら歸ります。（と立ちかけて）――が、どうかそれならもう一言だけ云はして下さい。――今、私はついこんな惡口を申し上げましたが、併し、これで何もあなたを苦しめに來た譯ではなかつたのですよ。それどころか私はいつも、あなたの幸福を願つてゐるのです。而してあなたが一刻も早く、かう云ふ奴隷同樣な境遇を脱して、再び故郷の吾々の所へ歸つて來るのを待つてゐるのです。――では左樣なら。（と去らうとする）

ひで　國分さん、鳥渡お待ち下さい。
國分　何ですか。
ひで　わたし共中にぜひ一つ、あなたにお話しなければならぬ事がございます。いづれ其時が參りましたら、聞いて頂きたいのでございますが。——
國分　何ですか知りませんが、私に關係のある事ですか。
ひで　え丶、さうです。
國分　ではいつでもお聞き申します。
ひで　では左樣なら。（氣を取り直して）おせきさん、おせきさん。
（女中登場。）
ひで　あのお客樣がお歸りだから。
國分　ではどうか社長さんに宜しく。
（國分女中に導かれて退場。ひでは暫らく後を見送つて、ぢつと物思ひに沈んでゐる。とし子奥から出て來る。）
とし　あらもうお客樣はお歸り。
ひで　え丶、あの何ですか、矢つ張りわたしでは解らない事だつたものですから、又お留守でない時に來て下さるやうに、さう云つて返して了ひましたの。
とし　さう。——あの方は職工長の國分でせう。
ひで　え丶、さうでございますわ。
とし　あなた前にあの方の家にお居でなすつたのぢやなくつて。
ひで　え丶。あのストライキの時分少しばかり。……
とし　あの人お幾つ位？
ひで　わたしよく存じませんわ。
とし　まだお獨りなんでせう。
ひで　さうらしうございますわ。——でも、どうしてそんなにあの人の事をお聞きなさいますの。
とし　だつて、……あの人はストライキの首領だつたのですもの。わたしどんな人かと思つてゐましたの。そんなに怖くもない人ねえ。
ひで　さうでせうか。
とし　さうぢやなくつて。わたしもつと髯の澤山な人かと思つててよ。だけど眼だけは少し怖いわねえ。
ひで　（興味なげに）さうですねえ。
とし　あの人あなたの恩人ですわね。
ひで　……と云ふ程でもないでせうけれど、……。
とし　だつてあの人がさきだちになつて、あなたの爲に色色して下すつたのでせう。（ひでの顏を讀むやうに）あなたあの人に感謝してゐなくつて。
ひで　それあ難有いと思つて居りますわ。
とし　たゞそれだけ？

ひで　あら、どうして？

とし　いえ、何でもないんですけれど。――

（しばらく不安なる沈默。玄關の方で戸の鈴の鳴る音がする。）

ひで　あら、お歸りのやうですわ。（急いで立上る）

とし　さうね。

（二人は急いで玄關の方へ出て行く。「お歸んなさいまし」と口々に挨拶する聲が聞える。やがて淳吉を先にして、ひで、とし、女中ら出で來る。）

三浦　（ひでに外套を渡しながら）今日は歸りに太田の所へ寄つて來た。おまへが毎日工合が惡いやうだから、來て診て吳れるやうに云つて來た。だからもう直ぐ來るだらう。來たら早速一つ診て貰ふがいゝ。

ひで　（少し狼狽して）あら、だつてわたし何でもないんですのに。あれほど何でもないと申上げてゐるのに、そんな御心配には及びませんでしたわ。

三浦　何だか毎日顏色がよくないやうだから、まあ見て貰つて置くがいゝよ。

ひで　何でもないんですもの、ほんとにいゝんですもの。

（外套を女中に渡す。女中それを持つて退場）

とし　（つゞいて奥へ行かうとする）

三浦　あゝとしさん、おまへに鳥渡話があるんだが。

とし　さうですか。

三浦　矢つ張り太田の事だがね。今着物を着換へて來るから、此處に待つてゐて吳れないかい。

とし　その事なら私も申上げたいと思つた所ですから、お待ちして居りますわ。ではごゆつくりお着換へなすつていらつしやい。

三浦　ぢやそれから寬いで話さう。（ひでに）今日は之から又鳥渡、町長さんの處へ行かなくちやならないから、いゝ方のを出してお吳れ。

ひで　はい。（行きかけて）あの、わたしどうしても太田さんに診て頂かなくつてはなりませんの。

三浦　さうして僕に安心させて吳れるのだよ。（とし子に）ぢやすぐ來るからね。

（二人は奥の間に入る。とし子獨り殘つて呆然と物を考へてゐる。しばらくして玄關の方に俥の來た音がして、つゞいてベルが鳴る。とし子立つて出て行く。「まあよくいらつしやつて下さいました」と云ふやうな挨拶が聞える。やがてとし子、太田醫師を伴うて登場。）

とし　さあ、どうぞこちらへ。

太田　（少しはにかんで）さつき三浦君からお話がありましたので、今丁度手隙だつたものですから、早速こちらへさし上りました。

とし　ほんとにお早々と、難有うございました。兄も只今歸つた所で、奥で着換へをして居りますから、どうぞ暫らくお待ち遊ばして。

太田　はあ。――何だかひで子さんがお惡いやうな話でしたが。――

とし　えゝ、少し惡いのかも知れません。

（しばらく沈默。二人は顏を上げて、偶然視線を合せ、あわてゝそれを外らして了ふ。）

太田　（思ひ切つて）あの僕の事はもう三浦君からお話があつたと思ひますが。……

とし　（惡びれずに）えゝ、承つて居りました。

太田　それで……？

とし　それで、……私のやうな不束者でも、それまでに仰有つて下さるのにつけ上つて、我儘を申すやうな譯ではございませんが、わたしも、……わたし相應にいろ／＼考へたい事がございまして、今迄のび／＼に御返事も致しませんでしたが、どうぞお心に背くやうな事を申上げても、お許しなすつて下さいまし。

太田　いゝえ。それあなたの一生の大事なんですから、どうぞよく／＼お考への上、どちらとも御返事下されば、私も彼是思ひ殘しは致しません。それに又實際にして見ますと、あなたの良人になる資格があるかどうか怪しいもので、……只もし資格が少しでもあるとすれば、それはあなたを愛する點に於て、どこの誰にも劣らないと云ふだけの事なんですから。――

とし　あら、そんな事を仰有つては、私なんぞ何と申していゝか解りませんわ。私なんぞにはほんとに分に過ぎ過ぎてゐるのは解り切つてゐるのですけれど、――あら、御免下さいまし。こゝでこんな事を申し上げるのではございませんでしたわ。

太田　僕もこんな話をする積りぢやなかつたのですが、厚顏しい事ばかり申上げて失禮しました。

とし　いゝえ、私こそ。どうぞ御免遊ばして。

太田　ではあの私にはおかまひなく。

とし　いえ、あの、……兄も直ぐですから。……それにわたし別な話ですけれど少々あなたにお願ひがございますので。……

太田　改まつてお願ひと云ふのは何ですか。私で出來る事なら何でも致しますが。……

とし　あの妙なお願ひですけれど、今日あなたはおひでさんを御診察下さるのでせう。

太田　えゝ。そのつもりで上つたのです。

とし　あの、おひでさんは確に御病氣ぢやないと思ひますのよ。わたし確に姙娠だと思ふんですけれど、……

太田　はあ、僕もそんな事だらうと思ひました。それで？

とし　それであの妙なお願ひですけれど、御診察なすつた上で、何ヶ月位におなりだか、教へて頂く譯には參りますまいか。

太田　そしてどうなさるんです。

とし　わたし叔母さんに頼まれましたの。

太田　あゝさうですか。そんな事ならお易い御用です。尤も診察したばかりでは、確とした所は解りませんから、御本人にお聞きなさるが一番ですよ。

とし　えゝ、それもさうですけれど、あなたの方からもお伺ひしたいのですから、どうかほんとの所をお聞かせなすつて下さい。

太田　えゝ、畏りました。

（三浦淳吉、奥より出で來る。）

三浦　やあ、もう來て呉れたのかい。知らずに茶を一ぱい飲んでたものだから、待たしてどうも濟まなかつたね。

太田　うむ。丁度手があいてゐたんで、取るものも取り敢へず來た譯さ……どうだね、御病人は。今とし子さんに伺ふと、さう大した事ではなささうだが、……

三浦　うむ。別に悪いと云ふぢやなからうが、どうも樣子が尋常ぢやないと思ふから、まあ一つ診てやつて呉れ給へ。さうすれば僕も安心するから。

太田　ぢや早速拜見するとしよう。お部屋においでなのかい。

三浦　うむ。今女中に案内させるから待ち給へ。

とし　あのわたし御案内しますわ。

太田　それは恐縮ですな。

三浦　だがとしさん。おまへは僕と、……

とし　いゝえ、あの事なら今も太田さんとお話したんですけれど、もう少し考へさして頂きたいのよ。いづれ猶お歸りになつてからね。

三浦　さうかい。（太田に）それぢや君どうぞ宜しく。

とし（太田に）ではどうぞこちらへ。

太田　どうも恐れ入ります。

（二人奥へ入る。三浦一人殘つて二人を見送り、少し笑を含んでゐる。そこへ奥から父の淳藏登場。）

淳藏　淳吉。おまへ一人か。

三浦　えゝ、さうです。

淳藏　どうだな、近頃會社の方は　相變らず職工に耶蘇教の說教をしてゐるかい。

三浦　（苦笑して答へず）

淳藏　昨日もある處で、倉庫會社の前島さんに會つたが、あの人もかう云つて嗤つてゐたぜ。おまへの遣り口はまるで、飼犬を座敷に上げて置くやうなものだつて。犬つ

て奴は幾ら食つても、滿腹するつて事を知らないから、飼主が呉れゝば呉れるだけ食つて了つて、別に難有かつたと云ふ顔もしないんだ。そして終ひにはそれにつけ上つて、ちつとやそつとの事をしたんでは、却つて手を嚙むやうになるだらうつてな。

三浦　喰ふ奴には喰はして置くがいゝです。どうせそんな頑固な人たちには、僕の考へなんぞ解るもんぢやないんですから。

淳藏　そこだて。わしもさう思つてるんだ。まつたくおまへの考へは高遠過ぎて、俺たちには解らないんだよ。俺たちどころか誰にも、肝心の職工にも解らないんだ。

三浦　それあ今迄職工と工場主の間には、色々な惡い牆壁があつた爲に、僕の赤心から盡してゐる事も、一時は諒解されなかつたでせうけれど、幸に此頃は職工も私に信頼を持ち初めた樣子です。これから私の理想も、着々實現の緒につくに相違ありません。もう大抵今までの施設で惡い所は除いたし、新しい設備はそろ／＼效果を擧げて來るし、私は此頃心から嬉しく思つてゐるんです。

淳藏　それあ大變結構だが、どうも收入は餘り思はしくないやうだね。どうせその理想とか何とか云ふやつは、金には縁の遠いものなんだらうが。……

三浦　まあ今に御覽なさい。私の心がすつかり職工に解つて、すべての職工が私と一つになつて、ほんとに精神的に働いて呉れる時が來れば、生產高はきつと今の倍位に上りますから。

淳藏　さうなつて呉れゝば俺も文句はないが、それが駄々つ子の夢でなけれあいゝがね。

三浦　何でも宜しうございます。私の手に社長の權利がある間は、私の好きにさせて頂きます。而して、どうしても私の考へが行はれず、叉その爲に惡い結果にでもなつたら、その時改めてお父さんのお指圖を仰ぎます。今そんなケチをつけて頂かなくともようございます。

淳藏　それあ好んで俺も云ひたくはないが、おまへのやり方が子供じみてゐて、先が見えてるから心配してゐるのだ。

三浦　子供じみてゐても何でも、私はやるだけやり通して見せます。御心配をして下さるにしても、まだ早過ぎるかと存じます。

淳藏　それあやるだけやるのはいゝさ。たとへそれが駄目だつたにしても、おまへ一人の修業になるんだから。——兎に角おまへももう少し經てば、仁慈一點張りでは行かない事が解るよ。

三浦　でもお父さんのやうに暴虐一點張りでは猶更行きますまい。

淳藏　まあさうは云はぬものだて。今にわかるからなあ。
（と立上る）

三浦　さうですとも。きつと今に解ります。

（父嘲笑を浮べつゝ、退場。入れちがひに太田醫師登場。）

三浦　あゝ濟んだかい。どうも御苦勞だつたね。それで樣子は。

太田　（妙な笑を含んで）なに心配することはない。ありや病氣ぢやないよ。却つてお芽出度だぜ。

三浦　そりやあ僕も感づいてはゐたが、……

太田　幸に外には何處も惡くないから、まあ精々大切にし給へ。猶少し君に話したい事があるから、暇だつたら今夜にも來て吳れないか

三浦　それにとし子の事もあるから、今夜町長の處の歸りに寄らう。あれの返事を齎らして行くよ。

太田　どうも色々濟まないね。ぢや是非來給へよ。今日はゆつくりしてゐられないから、僕はこれで失敬する。

三浦　さうかい、忙しい所を御苦勞だつたね。

太田　ぢや大切にし給へ。あとで健胃劑か何かよこすから、まあそんなものでも服用させときやあ、顏色なんざあ直ぐ癒るよ。ぢや失敬。

（太田醫師玄關の方へ退場。三浦見送つて出る。とし子奥から登場。）

とし　（見送つて戻つて來た三浦に）太田さんはもうお歸りになつて。

三浦　あゝ、今歸つたよ。ぢや約束によつて話を聞かうかね。

とし　あの、わたしその前に一つ兄さんに是非伺ひたい事があるんですけれど、聞いて下すつて。

三浦　改まつて何だい。

とし　兄さんは嘸お厭でせうけれど、おひでさんの事に就いて是非お耳に入れとかなくちやならない事があるのよ。

三浦　どうしておまへはさうおひでの事ばかり氣にするんだい。

とし　わたし何も氣にする譯ぢやないんですけれど、――みんなあなたの事を思ふからばかりですわ。あなたのお身に、惡い事がないやうにと思ふばかりですわ。

三浦　それなら難有く聽くよ。一體何だい、その話つていふのは。

とし　（改まつて）兄さん。あなたは心からおひでさんを愛してゐらつしやるわねえ?

三浦　それは云ふまでもない事だ。

とし　ではあの方は兄さんを、それだけ深く愛してゐらつ

しやるでせうか。

三浦　勿論愛して呉れてゐると思ふ。

とし　ほんとにさうお信じになつて？

三浦　うむ。さう僕は信じてゐる。

とし　どこまでもおひでさんの愛を純潔だと？

三浦　さうだ。

とし　もしこゝに兄さんのその考へを、裏切るやうな事實が在つたらどうします。

三浦　そんな事實は絶對に在り得ないよ。

とし　でもあつたらどうします。あなた以外に愛を注いだ證據があつたらどうします。

三浦　そんなものはあり得ないと云つてるぢやないか。

とし　ぢや申しますがね。これは勿論證據と云ふ程のことでないかも知れませんが、私どもにはどうも不思議でならない事があります。聞いたら兄さんもきつとお驚きなさるに違ひありませんわ。

三浦　何だ。云つて御覽。

とし　兄さんがあの方と結婚したのは、やつと三月ばかり前ですわね。

三浦　さうだ。が、それがどうしたのだ。

とし　あのおひでさんは只今姙娠してゐらつしやるわね。

三浦　それは薄々僕も知つてゐた。

とし　太田さんによくお聞きなすつて？

三浦　別に精しく聞かない。只姙娠だとは云つて行つた。それで？

とし　あのおひでさんの姙娠は、どう見てももう五ッ月位なお腹ですよ。

三浦　五ッ月位だつて？

とし　それ御覽なさい。その通りお驚きなすつたでせう。やつと三月前に結婚なすつた方が、五ッ月位なお腹をしてゐらつしやれば、誰が見たつて不思議ですわ。

三浦　でも確にさうとは解らないぢやないか。

とし　太田さんも其位だつて仰有つてよ。――五ッ月前つて云へば、丁度あのストライキの時分か、遲くてもあの方が病院にゐらした時分ですよ。

（しばらくの間。とし子勝誇つたやうに見守る。）

三浦　（少し悲痛な聲で）ぢや別に不思議はないぢやないか。

とし　どうして不思議ぢやないんですの。

三浦　その頃から僕はあれを愛してゐた。

とし　ではあなたに覺えがあるんですか。

三浦　（低く、併しはつきりと）恥かしい話だが、ある。

とし　（意外な答に驚いて）まあさうですか。

三浦　（蒼白な顏を上げて）話はそれだけかい。

とし　えゝ。では、もう申し上げる事はありません。

（二人ともしばらく沈默。各々ぢつと考へ込む。）

とし　（突然ヒステリカルに）兄さん。疑つて濟みませんでした。どうぞお許し下さい。そして存分に叱つて下さい。わたしほんとに心まで醜い女なんです。手柄顔におひでさんの缺點を探し立てゝ、それであなたの愛を動かさうなぞと思つたのは、ほんとに何と云ふ淺ましい心根だつたのでせう。わたしには今やつと兄さんのおひでさんに對する深い愛が解りました。そして私なんぞは到底、兄さんの愛を受ける資格のないのを知りました。私が今まで太田さんの縁談を延び〱にして承知しなかつた心の底には、いつかあなたの愛を受ける機會があるのを、ひそかに信じてゐたからでした。併しもうそんな事は思つても恥しうございます。あなたのおひでさんに對する愛は、ずつと〱深いんですもの。

三浦　さうおまへが打あけて呉れると、却つて僕が恥しい位だ。

とし　わたしもう決心しました。そして兄さんのお勸め通り、太田さんの所へ嫁ぎます。あの人はあれほど迄に仰有つて下さるのですから、私も出來るだけの愛をあの方に献げます。ですからどうぞ今迄の事はお許し下さい。

三浦　それぢやさう決心して呉れたかい。それで僕もやつと重荷を下したやうな氣がするよ。

とし　兄さん！　お許し下すつて。

三浦　あゝ、僕の方こそ！

（二人は感激の眼を見合せる。しばらく間。奥で母のとし子を呼ぶ聲がする。）

とし　はい。（立上る）

三浦　ぢや今夜太田へさう云つていゝね。太田もきつと喜ぶよ。

とし　（微笑して）どうぞよろしくね。（退場）

（三浦一人になると氣が弛んで、思はず悩しげな吐息をなし面を伏せて思ひに沈む。やがて氣を取り直して、微かに「さうだ。矢つ張り許さなくちやならない」と獨語する。しばらくして手を叩いて女中を呼ぶ。）

女中　（登場）何でございますか。

三浦　あの奥さんにね。これからすぐ出掛けるから、羽織と袴を持つて來るやうに云つてお呉れ。

女中　はい畏りました。（退場）

（しばらくしてひで子、羽織と袴を持つて靜かに登場。）

ひで　もうお出掛けでございますか。

三浦　あゝ鳥渡行つて來る。

（二人は默つて著せたり著たりする。）

ひで　（著せ終ると共に、決心した語調で）あのお出掛けになる前にわたし是非お話しなくちやならない事があるんですが、……

三浦　（ある豫期の心持を匿して）何か大切な事でもあるのかい。

ひで　えゝ。是非申し上げなくちやなりませんの。あの、……私の身に就いての事なんですけれど。

三浦　そんな事なら歸つてからゆつくり話しちやどうだい。

ひで　いえいえ、只今是非申上げなくちやなりませんわ。もう此儘一刻でも默つてゐる事は出來ませんわ。――あの、わたしあなたに對してほんとに濟まない事を致しました。（泣き乍ら）申し譯のない事になつて了ひました。

三浦　（悲痛な面持で）濟まないつて云ふのは、ひで子、おまへの腹の子の事を云つてゐるのかい。

ひで　あの、……それをもう……？

三浦　おまへが身持だと云ふ事は、さつきある人から聞いて知つてゐた。

ひで　では今日太田さんから、すつかりお聞きなすつて。

三浦　いや、太田からではない。が、とに角おまへの姙娠が、五ツ月位だと云ふ事は聞いて知つた。おまへそれはほんたうかい。

ひで　はい。（泣崩れる）どうも濟みませんでした。わたしもとからあなたの妻になれる身體ぢやなかつたのです。

三浦　ぢやあそれが初めから解つてゐたのかい。姙娠してゐるのが解つてゐながら、僕の所へ來たのかい。

ひで　いゝえ、いゝえ、いくら恥知らずの私でも、まさかそんな事は出來やしませんわ。あの、見えるものは見えませんでしたが、ほんの一時の障りだと思ひまして。そんな事よりもわたし、あなたのお傍へ參れると思ふと、胸が一ぱいだつたものですから。――それだけは眞實(ほんたう)でございますわ。

三浦　さうかい。――だがその相手は誰だい。併しこれは何もおまへを咎めるために聞くんぢやないんだよ。たゞ念のために聞いとくだけなんだ。

ひで　國分さんです。

三浦　そしていつ頃。

ひで　あの人の家にゐた時分ですの。ある晩夜中にふと眼をさまして見ますと、いつの間にかあの人の身體が私の傍にゐたんで、わたしはほんたうに吃驚しましたの。わたしそれつきり何も覺えちやゐません。

三浦　さうかい。僕はおまへがさう打ちあけて呉れたのを感謝するよ。

ひで　いえいえ。どうぞそんな事は仰有らずに下さいまし。もう何もかも申し上げたからは、わたしもうお家にはゐられないものと決心して居ります。ですからどうぞ御存分にお責めになつて、どこへでも突き出して下さいまし。どうぞお心の癒えるまで、打つとも蹴るともなすつて下さいまし。それがわたしのお願ひでございます。せめてあなたに叱つて叱つて責めさいなんで頂ければ、この心が幾分でも霽れます。而してどうぞ御離縁なすつて下さいまし。

三浦　(決然と)　おひで！　おまへは何を云つてゐるのだい。おまへは俺の愛を信じないのか。俺の心がおまへにはまだ解らないのか。

ひで　(男の威嚴に打たれて額を上げる)

三浦　おひで。おまへは僕が先刻ある人から、おまへの姙娠五ケ月にも係らず、知らずに捨てゝ置くのかと云はれた時、僕が何と答へたと思ふ。僕は其時卽座に、おまへが病院にゐた頃から、おまへを愛した覺えがあると答へた位だよ。たとひおまへの身の過去に暗い所があつても、僕のおまへを愛する心に變りはないんだ。僕はもとよりおまへの過去をすつかり許してゐるのだ。

ひで　(肩をふるはして泣きつゝ)　濟みません。濟みません。

三浦　おひで。考へて見ると僕たちも、初めから幸福な一對ではなかつたねえ。世間の人からは嗤はれ、家の者からは反對されて、やう〳〵此處まで切り拔けて來ると、又こんな試錬が待つてゐたんだ。が、僕はこんな事に敗けはしないよ。もつと〳〵苦しい事でも耐へ忍ぶよ。僕らは旣に萬難を排して結婚したのぢやないか。この後とても萬難を排して一緒にゐなければならないんだ。いゝかい解つたかい。

ひで　はい。――ですけれどもわたし、……

三浦　僕のやうに遠く理想を目ざして、絕えず進まうと云ふ人の道は、どうせ酬いられない淋しい道なんだ。僕はもとよりそれを覺悟してゐた。併し僕はおまへを得た時、天が僕に僕の覺悟を嘉して、おまへといふ道連れを授けて下すつたのだと思つた。そしておまへを理想實現の象徵のやうに思つて、どんなに辛い時でも慰められて來たのだ。何に破れ、何に失敗しても僕にはおまへがある。おまへがある中は、僕の理想も破產しないと思つてゐたのだ。――おひで。おまへがさうして僕に離婚を要求するいぢらしい心根は、僕も泣きたいやうな思ひで察してゐる。併しこんな事で二人は離婚なんぞ出來やしないぞ。そんな風に考へたらおまへは僕の愛を見違へてるのだ。

ひで　それは解つて居りますけれど、……

三浦　おひで。おまへからそんな事を云ひ出さないで、どうか僕と一緒にゐてお呉れ。今おまへに去られたら僕はどうなる。僕の生活は、僕の事業はどうなる。僕の献身の事業が、僕に最も近い、足許の家庭の破綻から初まつて、すべてが根本から覆されたらどうなる。おまへは僕の理想の柱石なんだ。中心なんだ。だからどうか居て呉れ。僕にはまだ〱こんな事を忍ぶ力があるんだ。まだ〱大きな苦しみに堪へる力があるんだ。おまへの心は解つてゐる。だからどうかゐて呉れ。ね。ね。解つたかい。

ひで　（微かに）わかりました。

三浦　ぢや決して捨鉢な心を起しちやいけないよ。いゝかい。その腹の子は飽く迄僕の子なんだからね。

ひで　ほんとに、ほんとに濟みません。

三浦　ぢや僕は行つて來るからね。涙を拭いて、安心してゐるんだよ。いゝかい。（時計を見て）あゝ遲くなつた。ぢや行つて來るよ。

ひで　では行つていらつしやいまし。

（二人は玄關の方へ出て行く。やがてひで子は獨り涙を拭き乍ら歸つて來る。脱ぎすてた衣物を疊みかけて、思ひ出したやうに嗚咽する。夕闇が室内に忍び入つて隅々はもう物色し難いほど暗い。）

ひで　（泣き乍らかすれ〱に口走る）あゝは云つて下さるけれど、……此儘居ちやあどうしても濟まない。……どうしても濟まない。（と泣き崩れる。やがて決心したやうに顏を上げて）さうだ。……矢つ張りさうしよう。……此儘居ちやあどうしても濟まない。

――幕――

第四幕

職工長國分寅治の家。

舞臺は第一幕に同じ。時は前幕より數時間後の夜。――幕あくと寅治微醉を帶びて、例の如く凝視の姿勢を續けてゐる。其眼は相變らず「反抗」に輝いてはゐるが、其姿にはうら淋しげな影がある。おつながそこへ訪れる。

つな　（戸を開ける）今晩は。

國分　あゝ、おつなさんか。丁度淋しがつてた所だ。まあ入つて話して行かないかい。

つな　（入り來る）まあ、今夜は珍らしくお酒を飲んでるのね。一體どうしたの。

國分　（二合入の銚子を示して）なあに僅かこれだけよ。鳥渡人眞似をして飲んでみたが、ちつとも面白くなりやしない。

つな　何かお酒でも飲まなくちやならない譯があつたの。――又おひでちやんの事でも思ひ出したんぢやなくつて。

國分　馬鹿あ云ふない。おひでの事なんざあ、何とも思つちやあゐないよ。あいつあもう今ぢやあ、立派な社長の奥さんぢやないか、こちとらは人種が異ふんだ。御立派な玉の輿にお乘んなすつたんだからな。

つな　何とも思つちやゐないつて云ひ乍ら、あんな厭味を云つてるよ。そんな廻りくどい事を云はないで、いつそ未練があるならあると、はつきり白狀してお了ひよ。其方がよつぽど胸が霽れるわ。

國分　何を云つてやがるんだ。未練なんぞあつて堪るものか。もう顏を見るのも厭だよ。

つな　顏を見るのも厭だつて、おまへさん其後あの人に會つたの。

國分　うむ。實はな。今日あいつの家へ行つたんだよ。而して鳥渡會つて來たんだよ。

つな　まあ、おまへさんが出かけて行つたの。

國分　なあに社長の所へ用が有つてね。出かけて行つてみると、これが留守なんだ。そこでふいと思ひついてね。留守を幸ひと、奥さんにお目にかゝり度いと申入れたのさ。

つな　で、おひでさんは出て來て。

國分　うむ。出て來たには出て來たが、いやはや、劒もほろゝの御挨拶さ。さすがに社長の奥さんになつて了ふと、見識が違つたものだと思つてねえ。

つな　まあそんなに高ぶつてゐるの。

國分　當人高ぶつてゐる積りぢやあるまいけれど、餘りそつけなく歸れ／＼と吐しやがるんで、俺も少々腹が立つたから、二三言惡口を叩きつけてやつた。

つな　そしたらどうして。

國分　なあにそれだけの事だがね。――さうして歸れ／＼つて追ひ歸し乍ら、いづれ話さなくちやならぬ事があるから、其中に行くつて御挨拶なんだ。

つな　隨分威張つたものねえ。話つて何があるんでせう。

國分　大方一生俺に來ないで吳れとでも云ふんだらう。でなきやあ昔の事を口止めでもするんだらうよ。――此の俺の口が一つ辷れやあ、大きな面をして社長の奥さんでござい、と云へなくなるかも知れないんだからな。思へばあの社長つて奴も馬鹿な奴よ。他人のお古を頂いて、難有がつてゐるんだからな。

つな　大さう家では強いのね。さう面と向つて云つておやりになればいゝのに。

國分　ほんとに今考へると云つてやりたいやうな氣もする

が、まさか俺だつてさうは云へないからな。
つな　矢つ張り弱味があるからでせう。
國分　何の弱味が？
つな　惚れた弱味さあね。
國分　馬鹿あ云ふない。誰が。――
つな　いゝえ、きつとさうよ。さうに違ひないわ。
國分　何を云つてやがるんだ。
つな　さうだわ。さうだわ。きつとさうだわ。
國分　うるさいなあ。餘り餘計な事を云ふと追出すぞ。
つな　ぢやわたし歸るわ。だけどおまへさん嘘をついても駄目よ。ちやんと未練が顏に出るんだから。（立上る）
國分　まだべら／＼云つてやがるのかい。
つな　もう何にも云はずに歸つてよ。左樣なら。（戸口の處で）だけど國分さん。おまへさん自暴酒(やけざけ)だけはおよしよ。見つともないし、體にさはるからね。左樣なら。
（戸を急に閉めて去る）
國分　餘計なお世話だ。馬鹿め！
（彼は又おつなの言葉に胸中の悶えを大きくして、殘つてゐた酒を續けざまに煽る。さうして又もや例の凝視の姿勢に歸る。長い間。戸の外で女の聲がする。）
ひで　（外から）御免下さい。
國分　誰れです。お入んなさい。

ひで　（戸を開けて入り來る。蒼白な顏をしてゐる）わたくしでございます。
國分　おやあなたは、……あなたでしたか。（强ひて驚きを隱して冷淡に）何か此處に御用があるんですか。
ひで　はい。今日先刻もお話し申上げた通り、少々あなたに聞いて頂かなくちやならぬ事がございまして、それでわざ／＼參つたのです。いよ／＼お話しなくちやならぬ時が來たのです。
國分　はゝあ、さうですか。それは又餘りに早く來たものですね、先刻はあんなにまでして追ひ歸した位だから、まだなか／＼御光來にはなるまいと思つてゐましたよ。
ひで　私もこんなに早く上らうとは思ひませんでした。けれど、是非がない事だから仕方がありません。
國分　是非がないと仰有るからは、餘程重大な御用だとは思ひますけれど、社長の奧さんともあらう者が、今時分一人でこんな處へおいでになつては、お家に濟まなくはございませんか。幸ひ誰も見てゐるものがございませんから、今の中に、默つてお歸りなすつたら如何です。誰かに見られて知られでもすると、お家の方が不首尾になりやしませんか。
ひで　わたしもう家の事なぞは考へては居りません。たゞ是非一度あなたに聞いて頂きに參つたのですから。

國分　一體あなたが私に用のある筈はないんですがね。
ひで　申し上げる前にお斷りして置きますが、わたしはそれをあなたにお話したからつて、別段その償ひをして頂かうとか、後始末をして下さいとか云ふのぢやございませんから、そこは御心配下さらなくても宜しうございます。たゞわたしはそれを申し上げないと、どうしても自分の心に濟みませんし、思ひ殘りになるからでございます。
國分　妙に改まつた前置なんぞして、一體それは何だと云ふのです。
ひで　（低く、併し明瞭に）わたし姙娠して了ひました。お腹にゐるのはあなたの子です。
國分　何だつて。（急に荒々しい言葉になる）俺の、……俺の子を孕んだつて。馬鹿あ云つちやいけない。そんな話があるものか。いくら天道樣が惡戲好きだつて、そんな筈があるものか。
ひで　でも事實ですから仕方がありません。私のお腹は五ヶ月です。あれから丁度五ヶ月になります。
國分　併しそれが確かかどうか解らんぢやないか。
ひで　いゝえ私が第一さう思ひますし、お醫師樣もさう仰有つたさうです。其上家の人までさう氣附いてゐます。
國分　ふうむ。眞實かい。（と考へ込んでゐたが、突然奇妙な笑聲を擧げて）はゝゝゝ、皮肉な天だなあ！　俺の子を持つて、社長の處へ嫁に行くなんて。勞働階級から資本家に持つて行くにしては、まるで結構過ぎる位結構な持參だ。はゝゝゝ。
ひで　（顏をそむけて聞いてゐたが）まあ、よくあなたはそんな事を云つて居られますのね。――それは成程あなたのお言葉の眞似をすれば、持つて行く時には結構な持參金でせうけれど、持つて歸る時には猶更結構な手切金でせうからね。
國分　何？　それぢやおまへは離緣されて來たのだな。
ひで　（冷然）いゝえ。
國分　ぢやあどうしたんだ。家の人は何と云ふんだ。
ひで　あの人は立派に許して下さいました。私が何もかも打開けたのに對して、一言も咎め立なんぞせずに許して下さいました。
國分　ぢやあもう俺の事も云つたのだな。
ひで　えゝ、眞つ先きに云はなくちやならぬ事ですもの。
國分　それでも許すと云ふのか。おまへを元のまゝに妻として置くし、俺の子を自分の子として育てると云ふのか。
ひで　えゝ、さう確かに仰有いました。
國分　それぢやおまへは此處へ何しに來たのだ。
ひで　ですから先程も申し上げた通り、只それだけの事を

聞いて頂くためにです。

國分　おまへが此處へ來る事は、家へ云つて來たのか。それとも家では知らないのか。

ひで　家では知りません。默つて出て來ました。

國分　ぢやあ家へ知れたらどうするのだ。そのため折角許されたものを許されなくなつたらどうするのだ。おまへが今時分此處へ來たと知つたら、いくらお人好しの社長でも、二度は許さないかも知れないぢやないか。

ひで　ですからそれも先刻申し上げた通り、仕方がないと覺悟して居ります。さうなつたら家へ歸らないばかりです。

國分　而して此處にゐようと云ふのか。それで俺の處へ來たのだな。

ひで　いゝえ、それも先刻申し上げた通り、……

國分　（皆まで聞かず興奮して）併し俺の處へ尻を持ち込んだつて、今更俺の知つた事ぢやあ無いよ。先刻はおまへの家を出る時、いつでもおまへが歸つて來れあ、喜んで迎へるやうな事を云つたが、あれあ當座の御座なりだよ。誰が一旦他人の妻になつた女を、難有がつて頂戴するものか。俺はあの甘い社長とは違つて、おまへに惚れちやあ居ないんだからな。今更身持ちのお世話なんざあ、眞平御免を蒙るよ。

ひで　だからあなたのお世話なんぞお願ひしません。

國分　ぢやあ何處へ行くんだ。

ひで　どこへでも參ります。

國分　どこへでもつて？

ひで　どこだかわかりません。たゞ行く處まで行くでせう。

國分　おまへどうかしてるね。

ひで　どうもしてやしません。

國分　おまへまさか死ぬ氣ぢやあるまいね。

ひで　（淋しく笑つて）わたしに死ねますかしら。

國分　そんなら何故家を默つて出たりするのだ。許して呉れたのを何故又壞さうとするのだ。おまへは第一此處へ來るのが間違つてゐる。だから早く家へ歸るがいゝ。許して呉れたものならば、平氣で許されてるがいゝぢやないか。

ひで　あの人が幾ら許して下すつても、わたしの心が許して頂けません。あの人の博い愛の心につけ入つて、わたしはこの汚れた身體を許して頂くに忍びないのです。あの人はそれでなくとも、色々な苦勞が多過ぎるのですもの。わたしは其上に忍ぶことの出來ない苦しみを持ち込む事は出來ませんわ。

國分　併し、それは當然あゝいふ種類の人間の、脊負はなくちやならない重荷なんだ。いゝから苦むだけ苦ませて

やるがいゝ。さう云ふ事でゞも苦まなければ、贅澤すぎる輩なんだ。いゝから歸れ歸れ。さうして幾らでも苦ませてやれ。俺には今、あれがおまへを許すと云つた苦しい心持がよく解るぞ。苦しがれ、苦しがれ。これがおまへたちの天刑だ。資本家階級に居るものゝ天罰だ。さあおまへは歸れ。眞つ直に三浦の家へ歸れ。

ひで　あなたの只今のお言葉で、あなたのお心持はよく解りましたわ。あなたは御自分の主義のためには、どんな酷い事でも平氣でなさるお方なのね。私は勿論歸ります。到底あなたの處になんぞ居られませんわ。そしてお言葉通りに歸りますわ。けれどもあなたのお望み通り、あの人に苦しみを與へるために、歸るかどうかは解りません。（立上つて）では左樣なら。

國分　あゝ左樣なら。――もうこれつきり會はないから、おまへもたつしやでゐるがいゝ。

ひで　難有う。あなたこそ御機嫌よう。

（ひで影のやうに出て行く。國分しばらく呆然として、閉めて去つたあとの戸口を眺めてゐる。）

國分　（一つほつと吐息をして）あゝあ、又酒が醒めちまひやがつた。（と殘つてゐた酒を煽る）

（何となく不安な間、職工中村入り來る。）

中村　國分さん。お家かい。

國分　やあおまへさんか。まあ入らないか。

中村　（入つて來て）今あなたの處から出て行つた女の人は誰ですい？

國分　おまへ會つたのか。どつちへ行つたんだい。

中村　そこの處で會つたが、向うの踏切の方へ行きましたよ。

國分　ふうむ。少し訝しいな。

中村　どうしたんですい、一體。

國分　なに、ありやあ通りすがりの女なんだがね、今道を聞いたから敎へてやつたのだが、……（獨言するやうに）それぢや暗いんで間違へたんだな。

中村　さうですかい。

國分　（凡てを拂ひのけんとする如く盃の滴を切つて）どうだ。一盃やらないか。

中村　やあ、今夜は珍らしい御馳走ですな。ぢやあ一ぺえ頂きませうかな。（盃を取る）

國分　（注ぐ。酒僅かしか無し）やあこいつは濟まなかつたな。――ねえおい中村。濟まないが、濟まない序にもう一つ濟まないで吳れないか。

中村　どうするんですい。何を云つてるんですい。

國分　（德利を振つて見せて）どうかこいつを一と走り賴みたいんだ。少し遠いけれど端れの三河屋まで行つて、

俺からだと云やあ、通ひで寄越して呉れるんだ。一升ばかり頼む。俺はもう一二合で澤山だから、あとはみんなおまへさんに御馳走すらあ。祝ひ酒だか自暴酒だか、弔ひ酒だか知らないが、兎に角一ぱいやらなくちやならない譯があるんだ。

中村　へゝえ。さうですかい。そんなら一つ行つて來て上げやせう。

（中村徳利を下げて出て行く。やゝ長き間。夜のやうやく更け行く氣配がする。暫らくして三浦淳吉、蒼ざめたる顔と血走れる眼にて、戸口の處へ急ぎ現はれる。）

三浦　失敬。（入つて來て見巡し乍ら）早速だが、此處へ僕の妻が來はしなかつたかね。

國分　あゝ、誰方かと思つたら社長さんですか。まあどうぞお上りなすつて。

三浦　いえ。さうしちや居られません。――あの、ほんとに妻が此方へは來はしませんでしたかね。

國分　（云つたものかどうかと思ひ煩ひ乍ら）奥さんですか。さうですね。

三浦　（强く）來ませんでしたかね。

國分　いえ、えゝと、もう少し先刻、鳥渡おいでになりました。

三浦　（急き込んで）そしてどうしました。

國分　（もうすつかり決心して）何だか私の子を孕んで、あなたに濟まぬとか何とか云つてゐましたが、私は諭して歸しました。おとなしく歸つて行きましたから、もう彼是お宅へ著いた時分と思ひます。

三浦　いえ併し、確かに宅へは戻つて來ません。眞つ直ぐに歸つたならぶつつかる筈ですが、中途でも會ひませんでした。あれはきつと何處か外にゐるのです。

國分　ではひよつとすると、――（と顔を見合せる）

三浦　さうです。多分。さうだらうと思ひます。私もそれを恐れてゐるんです。――ではかうしちや居られません。私は一と通り探してみます。失禮します。（慌しく去らうとする）

國分　（鳥渡考へてゐたが）三浦さん。鳥渡お待ち下さい。

三浦　（振り返つて）何ですか。

國分　私あなたに一言云ひたい事があります。かう云ふ機會を利用するのは、少しく殘酷な態度のやうに見えますが、丁度好い折だから一應お聞き取り下さい。

三浦　何ですか。早く云つて呉れ給へ。

國分　三浦さん。よくお聞き下さい。若しこゝであの關口ひでが、悲慘な結果に陥るやうな事があつたら、それは全くあなたの責任ですよ。あなたのやくざな仁慈と、わ

ざとらしい寛大との罪ですよ。、、、あなたがなまなか彼女を救はうとして、却つて彼女を苦しめたのです。强ひて彼女を許さうとして、實は却つて彼女を責めるのです。あなたはまだそれに氣が附かないのですか。こゝでもあなたの仁慈主義は、——温情主義は破綻を起してるのです。

三浦　何ですつて。——

國分　まあお聞きなさい。ひとり此の關口ひでの場合ばかりではありません。あなたはもうとうに、吾々に對するあなたの仁惠的態度から、温情主義から目醒めてゐなければならなかつたのです。あなたは吾々に取つて、ほんとにお情け深い工場主でした。常に吾々に對して、温情を以て臨んで吳れました。併しあなたのその態度には、丁度慈善を施す人のやうな、恩惠を與ふる人のやうな、喜びと誇りとが含まれてゐます。工場主の仁慈を只管難有がるのは、封建時代からの遺物です。今日では恥づべき奴隷根性です。吾々覺醒した勞働者は、それを却つて侮辱に感じます。吾々は工場主と自分らとの間を、常に正當な對等關係に置きたいのです。正當に要求するものを正當に與へて吳れゝばいゝのです。餘計な「お情」や「御恩」は要らないのです。關口ひでの場合を一例に取つて見れば、彼女の治療代と扶助料とを正當に出して下さればそれでよかつたのです。小說的な結婚なんぞに依つて、「救つて」なんぞ頂かなくてもよかつたんです。どうです。お解りになりましたか。

三浦　（默つてゐる。）…………。

國分　かう云ふ匆卒の場合ですから、よくお解りにならなかつたら、いづれお宅へお歸りになつてゆつくりお考へなすつて下さい。而してあなたの非をお覺りになつたら、これは甚だ差出がましい忠告ですが、僅かに態度なんぞを改めて下さるよりは、一刻も早く社長をおやめなすつてもとの東京へお歸りなさる事をお勸め致します。あなたが此儘仁慈を施せば施すだけ、職工らは益々反感を持つだらうと思ひます。もうたゞでさへあなたは甘く見られて居ります。ですから此上凌辱を受けない中に、その「理想」とやらの旗を捲いてお歸んなさい。それが何よりもあなたのお爲めです。

三浦　（猶も默つてゐる。）…………。

（此時突然家を搖する汽車の響がして、汽笛がけたゝましく鳴り響く。）

三浦　（ある豫感に戰るへて）おや、……（と耳を欹てる）

國分　（同じく）何だらう、急に汽笛なんぞ鳴らしやがつて！

（不安なる沈默の中に、兩人眼と眼を見合はす。外を驅けてゆく人の足音がする。）

行人の聲　轢死だ！　轢死だ！

近所の人（戸口から）國分さん。又誰か鐵道往生をしたやうだつたぜ。（馳せ去る）

三浦　なに、轢死？（急いで出て行く）

國分（呟く）ぢややつぱり、……やつぱり、……やつて了つたのかな。（行かうか行くまいかと煩悶する體）

（中村息せき切つて現れる。）

中村　國分さん。大變だ。あすこで社長の奥さんが死んだぜ。あのおひでさんが轢死したぜ。今踏切の傍で鐵道の人が、大變騷いでゐるから行つて見たら、おめえ轢かれてゐるのはおひでちやんぢやねえか。俺あびつくりしちまつて、いきなり此處まで驅けて來たが、――おい國分さん行つて見よう。おまへに急いで知らせに來たんだ。さ、早く行かう。――あ、酒は此處へ置くよ。おめえ行つて見ねえのか。（國分が默つてゐるので）ぢや俺あ一人で行くぜ。（中村不思議な面持で、併し足早に退場）

國分（酒を二三杯續けざまに煽つて）俺のせゐぢやないぞ。……ほんとに俺のせゐぢやないぞ。……みんなあいつ等が惡いんだ。……あいつ等が苛め殺したんだ。……（と切れ〱に呟く）

（三浦淳吉再び登場。彼の眼は黑くうるみを帶び、顏は嚴肅なるまでに蒼白である。）

三浦（靜な聲音で）國分君。おひではたう〱死んだよ。君の言葉の通り悲慘なる最期を遂げた。而してこれは成程、僕の「やくざな温情主義」の結果かも知れない。併し、それと同時に君の「反抗のための反抗」も、多分に責任を頒たなければならぬ事を、お互に考へようぢやないか。――兎に角僕は葬式の濟み次第、君の忠告に從つて東京へ歸る。だから最後の敗け惜みかは知らぬが、一言君にも反省を促して置くよ。では左樣なら。僕はこれから、僕らの犧牲に供したあの可哀さうな女の、引きちぎれた死體を運ばなくちやならないから。（靜に退場）

（國分答ふる所なし。三浦の足音とぼ〱と遠ざかり行く）

――幕――

牧場の兄弟（社會劇三幕）

人物

岩木源吉　兄（三十七歳）
同　源二　弟（三十三歳）
かね　兄の妻（三十二歳）
ひさ　弟の妻（二十六歳）
ぎん　姪（十八歳）
伊東正治　搾乳夫（二十五歳）
三瓶清藏　配達夫（二十七歳）
池田武
山田五作　配達夫搾乳夫（廿歳前後）
佐藤佐吉
七海力　搾乳見習の少年（十五歳）
國分熊四郎　三原馬車會社の馭者（三十歳位）
相樂一郎　村の巡査（四十歳位）
田中修　獸醫（卅四五歳）

第一幕

景

東北地方のある小都會から、約半里程離れた牧場内の一牧舎。舞臺の左半は流し場になつてゐて、其中に押上ポンプ付の井戸がある。右半は土間、土間の中央には粗末な爐が切つてある。まはりに手製のベンチ様の腰掛があつて、爐には火が弱つてゆるい煙を立てゝゐる。

右手に入口が一つある。左手の井戸から次の貯乳室や殺菌室に通じてゐる。正面の壁を穿つて一つの秣納屋へ通ずる入口があるけれど、重さうな板戸が閉つて錠がかけられてある。人物が主として出入するのは右手の戸であつて、戸には硝子がはめてあるし、又右手の壁には大きな窓があるから誰が入つてくるかすぐわかる。

その窓からは十月の日光を浴びた牧場の一部が見える。

幕あくと少年が、寂しげに盆唄を口ずさみ乍ら爐の傍に腰をかけて、火箸で爐火を弄んでゐる。そこへ岩木の姪おぎんがバケツを下げて入つてくる。おぎんは此

戯曲の人物中最も都會の洗禮を受けたハイカラ娘で、女ざかりのはち切つた健康な體と十人並の容貌とを有つてゐる。小瀟洒した平常着に純白なエプロンを掛けてゐる。

少年　(他の配達夫などの口吻を眞似た大人びた感嘆詞で冷かすやうに)　よう！　よう！

ぎん　(笑ひながら挑戰的に)　何だね、ちびの癖に！

少年　ちびだつていゝやい！　おまへさんのお世話になりやしないや。

ぎん　ふん。さんざ威張つといて、又晩に風呂から歸れないなんて泣かないやうにおし。臆病者の癖に！

少年　風呂場へは正治哥兄に連れて行つて貰ふから大丈夫だい。

ぎん　正治にさういつて置いてきぼりにしてやるから、いいかい。

少年　うむ！　さうだつたつけなあ、正治哥兄はおぎんちやんの云ふことなら、なんでも聞くんだつけなあ！　あれでおぎんちやんとは十六錢だからな。

ぎん　馬鹿におしでないよ。何だい其十六錢ていふのは？

少年　アイボレ石鹸は十六錢だとさ。

ぎん　まあ厭だ。ちびの癖にほんとに隅にはおけないよ。だけどわたしと正治が相惚れだなんて誰が云つたい。

少年　おぎんちやん、さう嬉しさうな顏をするもんぢやないよ。誰だつて皆んな知つてらあ。

ぎん　力！　それあほんたうかい。だけど誰が正治になんぞ惚れるものかね。馬鹿々々しい！

少年　口でけなして心でほめて――。

ぎん　まあ、お前までそんなことを云つてるね。ほんとに皆んなそんなことを云つてるのかい。

少年　あゝ、皆んな云つてるよ。それで毎晩正治哥兄は淸ちやんなんぞに冷評かされたり、おごらせられたりしてらあ。だもんだから此頃は俺とロク／＼將棊もさゝなくなつたよ。

ぎん　(物案ずるさまにて)　力！　おまへはもう云はないだらうね。其代りわたしが胴着を縫つて上げるから。

少年　だつてほんとなら云つたつていゝぢやないか。

ぎん　嘘なんだよ。正治なんか思つてやしないんだよ。や、お前だからほんとの事をいふがね。わたしもとからあの人に惚れたりなんかしないんだよ。只ちつと可愛いと位思つたことはあるけれど……。

少年　どつちでも同じだい！

ぎん　まあお聞きよ。だからわたしそんなにつん／＼もしなかつたんだけれど、今度はもうわたしもお嫁に行くんだからね。

少年　どこへ？　正治哥兄のとこへかい。
ぎん　いゝえ、お前も知つてゐるだらう、ほら、町の津野屋へ。
少年　ふうん。あの金持呉服屋の津野かい。あの先に、嫁をなくした若旦那の處へゆくのかい。
ぎん　まあ大概さうと定まつたの。だけど、此事はお前誰にも云つちやいけないよ。
少年　あゝ云はない。それぢや正治哥兄の話は嘘なんだね。おらすつかりほんとだと思つてゐた！
ぎん　お前津野の若旦那つてどんな人だか知つてゐるの。
少年　あゝ、蒼い顏をして店に坐つてゐらあ。正治哥兄よりあの若旦那の方が、よつぽど品が落ちるな。
ぎん　でも町の人は垢ぬけがしてゐるからね。
少年　へへへん……だ。
ぎん　まあ厭な力。――あ、お前のお蔭ですつかり喋つちまつたよ。
少年　俺だつてまだ秣をやらねえんだもの同じこつたい。
ぎん　（抑上ポンプを二三度試みて）ちよいと力！　お前後生だから汲んでおくれな、ポンプの皮がすつかり斷れてるもんだから、水が中々出て來ないんだよ。
少年　（爐の傍を去らず）おいらあいやだ。ポンプが悪けれあ、旦那に云つてなほして貰ふが一番だからな。何だつて一體井戸を早く直さないんだらう。
ぎん　叔父さんだつて容易ぢやないんだよ。お前考へて御覽、いくら子供だつて解るだらう。先月から炭疽病でうちの牛が五頭も死んでるんだらう。それも又普通の病氣ならいゝけれど、傳染病だといふんで一箇月間も乳を賣ることを禁められたんだもの、井戸なんか直して居られるものかね。
少年　おぎんちやん！　何時から牛乳が賣れるの。
ぎん　發病が先月の三日で、一番おしまひに相生號が死んだのは九月十日と……十一日だつたから、もう此月の十日から賣つてもいゝんだよ。
少年　さうすると又忙しくなるし、乳もがぶ／＼飲めなくなるなあ。
ぎん　うちでは大損をしたのだから、お前もしつかり稼いでおくれよ。ね！
少年　だけれど何だつて、黴菌の無いのがわかつてるのに賣らせないんだらう。
ぎん　それあもう炭疽病の毒は、すつかり無いのはわかつてるけれど、萬一あると困るからなんだよ。
少年　萬一だつてあるもんか。
ぎん　だけど世の中つてものは みんなそんなもんなんだよ。萬一を警戒してるんだからね。御覽！　萬一戰爭が

あるときの爲に高いお金で軍艦を作つたり、二十師團の兵隊を只で食はして置いたり、萬一としたら惡者が出やしないかつて宮樣のお通りには、百人も巡査が目をまるくしてゐるぢやないか。

少年　あゝわかつたよ。何も學問する氣で聞いたんぢやないんだから……。

ぎん　又喋つたわね。だけど後生だから汲んでおくれな。

少年　(冗談に)正治哥兄に賴むといゝや。

ぎん　また云つたね。約束をお忘れでないよ。

少年　はい〳〵！　ぢや仕方がねえ。女王樣のいふことを聞くとしようか。

ぎん　力はほんとにいゝ子だね。

(少年は笑ひ乍ら押上ポンプを上下する。おぎんは呆然立つて見てゐる。左手の窓から搾乳夫正治の聲がする。)

正治　力！　ちび！　どこにゐるんだ。まだ犢に乳をやつてないやうだぞ！

少年　あゝ、來た！　來た！　ぢやあ此段は正治哥兄に賴むかな。(聲高く)哥兄！　今すぐやるよ。

(正治左手の窓から上半身をあらはす。)

正治　何だつて又……(と云ひかけておぎんの居るのを知り、急に言葉を歛くする)さつさと早く汲んで上げるんだ！　やおぎんちやん、今日は馬鹿に甲斐々々しい扮裝だね、敵打でも行かうつていふのかい。

ぎん　よくつてよ。誰がエプロンをかけて敵打に行くもんかね。

正治　なあに、おぎんちやんは此間からハナで負け通しだといふからね。

ぎん　氣樂にハナなんぞ引いちやあ居ないんだよ。

少年　さう〳〵、お嫁の口を探してるんだからな。ね！　おぎんちやん！

ぎん　餘計なことをお云ひでないよ。

正治　なんだつて何時までポンプに粘り着いてるんだ。汲んだら早く持つて行つてあげるんだ。

少年　へん、おらおぎんちやん處の下男ぢやねえんだよ。おぎんちやんだつておめえの嫁ぢやあねえんだ。

正治　何だと、解つたらしい事をぬかしやあがる。

少年　おや〳〵、哥兄笑つてるな。おらあおめえを冷評かしたんぢやねえんだぜ。

ぎん　力！　べら〳〵喋るのはおよしつたらねえ。

少年　あ、さう〳〵！　胴着を縫つて貰ふんだつけなあ。

(正治は窓の處から身を引いて、笑を浮べながら入つて來る。どつちかといへば潑剌たる若者で、髮は角刈、髯は無い。紺股引を穿いて、眞白なフランネルのジャ

ツを着込んでゐる。手には脱いだ柔かなソフトを握つてゐる。）

正治　力！　おめえは秣の方をさつさとしろ。

少年　其方がおいらにも好ささうだ、ぢやあおぎんちやんのお傅りは哥兄に任すせ。

正治　きいた事をぬかすない。さつさと行け！

少年　（行き乍ら戸口の處で）おぎんちやん、おめえうまく嘘をついてるぜ。（指で嚇しながら退場する）

ぎん　馬鹿お云ひでないよ。（笑ふ）

正治　（少しく決然と）おぎんちやん、僕は少しお前に訊きたいことがあるんだが……。

ぎん　（正治の話しかけるに頓着せず、水を滿したバケツの方へ行き、バケツの蔓に手をかけ乍ら）何なの。

正治　おまへ近頃厭に落着かないね。

ぎん　それがどうしたの。

正治　何か、おまへあるんぢやないか。

ぎん　何もありやしないよ。

正治　あるならあるとキッパリ明してお呉れよ。おまへの心配事で、おれ達が出來ることなら、何でもしてあげる積りなんだからね。おまへにそは〳〵してゐられると、何だか働き甲斐がないやうな氣がするんだ。え、さう俺に他人行儀にする仲でもないぢやないか。

ぎん　正治、おまへは獨りでわたしを情婦か何かのやうに思つて、そんな口をおきゝだけれど、今日からもうそんなことを云ふのはきつぱり止しておくれ。

正治　さうツン〳〵しなくても好いぢやないか。

ぎん　いゝえ、ツン〳〵するともさ、誰がおまへ……。

正治　ほうら又お始めなすつたね。さう怒つといて後から笑つて呉れると、有難味が倍になるといふものだからな。

ぎん　ぢやあ勝手におし。（バケツを持つて行きかゝる）

正治　（行く方にふさがり）まあ待つてお呉れよ、まだ話があるんだからさ。ね、さ仲なほりをしよう。怒つたまんまで別れちやあ一日氣が滅入るから。

ぎん　厭だよ！　おどきつたら。

正治　いゝやどかない。仲なほりをしない中は。

ぎん　おどき！　どかなきや大聲を立てるよ。

正治　仕方がねえなあ。（道をあけて爐の方へくる）あーあ。（誇張的に）わるい御機嫌の時にぶつつかつたもんだ！

ぎん　（戸口の處で正治を見、默つて強く戸をしめる。さうして窓の處から首を出す）正治、おまへとはもう話だつてしやしないから其積りでおゐで！（去る）

正治　何！　おぎんちやん！（窓から）待つておくれよ、も一つ話があるからさあ。（窓から眺めてゐたが、ヤケ

に身をひいて帽子をベンチへ投げつけ、又急いでそれを拾つて塵をはらふ。而して低い吐息と共に頭をおさへて腰掛へ腰を下ろす。それから立上つて、のろ〳〵と暈乳室の方へ入つてゆく)

(間。――暫らくして大勢の雇人等話し乍ら外より入り來る。)

清藏　正治はどこへ行つたんだらうな。

五作　さつきまで秣小屋にゐたやうだつたが、おめえの行つた時は見えなかつたか。

佐吉　ゐなかつたよ。戸が閉まつてちやんと旦那の錠が下りてゐた。

清藏　武、もう一度あとで探して來い。

武　おらあいやだ。もう。

五作　そんなことをいつたつて正治がゐなけれあ仕方がねえ。肝心の當人が。(と暈乳室の戸の處へ來て中を覗き込んで驚く) やあ正治哥兄はこゝにゐたんだ。

清藏　さうか。そいつは丁度いゝ處だつたな。おい正治!

正治　(出て來る) 何か俺に用があるのか。

清藏　うん、少しおめえと相談してい事があるんだ。おい皆此方へ來い。(皆々爐の廻りに腰をかける。正治だけ立つてゐる。雇人等は或は紺股引に印半纏又はシヤツを着てゐる)

清藏　力はどうした。

五作　小僧はいゝぢやねえか。

清藏　あいつだつて俺達と同じ傭ひ人だぜ。

五作　あいつにあ、事が定まつてから教へてやるのが一番だぜ。

武　さうだ。事があんな子供の口から發れても見ねえ。

清藏　ぢや、あれにはあとから佐吉が云つて聞かせろ。あいつはおめえの稚子だからな。

佐吉　馬鹿いふない。

武　佐吉は內心嬉しいんだぜ。

五作　おめえも一時はこれに、(掌を重ねる) 氣があつたんだつけなあ。今ぢや一人前の白首買ひだけれど。

武　ぶんなぐるぞ!

清藏　喧しい、よせ! (窓枠にもたれて物思はしげな正治に向ひ) おい正治、鳥渡相談があるんだから此處へ掛けねえか。

正治　話はこゝでもよく聞えるよ。(手近なる古桶の上に腰をかける)

清藏　おめえ近頃厭におれ達の仲間に入りたがらねえな。

五作　思はせ振りはよす事だぜ。

正治　おれがいつ思はせぶりをした。

五作　今だつて、呆やり外なんぞ見てゐやがるぢやねえか。

武　はゝあ、おぎんちやんの一件なんだな。

正治　何とでもいふがいゝさ。然し話つていふのは一體なんだ。俺にでも文句があるつていふのか。どうせおまへ達とは、俺は性が合はないんだ。

武　おいらおめえがさういふ風にきめてかゝつてるのが、第一氣に入らねえんだよ。いくら家柄や教育があるからつて、おれ達の仲間に入つたら……。

清藏　武！　よせよ。話はそんな小せい事ぢやねえんだ。

正治　（膝を進めて）それぢやどんな大きい事なんだい。

清藏　實はな、俺達四人は、もう昨夜から此仕事をやめる事に定めたんだ。……やめるといつたつて、別に旦那をいぢめてえんぢやねえが、いくら財政が困つたつて、給金も三月も滯らされちやあ立つ瀨がねえからな。

正治　それあ君、普通であれあさうも云へるけれど。炭疽病で牛が五匹も一度にやられてるんだから……。

清藏　それあ俺だつて知つてる。けれどあんまりぢやねえか。俺達はそれあ今迄は成程恩にもなつたし、親爺が養鷄で失敗した時なんざあ、金まで用立てゝ貰つた旦那だけれど何も旦那と一緒に干乾しにならなくたつていゝぢやねえか。俺達は何も身内のもんぢやねえんだから、もうこゝで仕事賃が貰へねえのを默つてゐなくたつていゝ筈ぢやねえか。

正治　それあ、おまへ方のいふのも無理はないけれども、俺だけはどうもそのストライキに入るのはいやだよ。

清藏　だけど、皆んなもうさう心を決めたんだから、おめえ一人ぐづ／＼いふのはやめて男らしく賃金を貰ふまで仕事をやめて吳れねえか。

正治　いくら云つたつて、俺はそんな眞似はしたくないよ。

清藏　どういふ譯で。

正治　考へても見るがいゝ、第一旦那が可哀さうぢやないか。

五作　おい／＼正治。おめえの旦那にとり入る理由はわかつてるんだぜ。おめえおぎんちやんが欲しいんだらう。

佐吉　だけど、おめえそれなら思ひ切つてしまひねえ。おめえがいくら旦那に忠義をしても、おぎんちやんはおめえのものにならねえんだぜ。

正治　おれは何もおぎんちやんをどうかしようといふんぢやない。

五作　噓をつけ、尻はかり追ひ廻して。……秋の鎭守樣の時、醉つたまぎれに旦那が固えと見たら、おぎんちやんを吳れてもいゝと云つたのをほん氣にしやがつて、もう婿かなんぞのやうに思つてゐた癖に。

正治　何だと、（怒る）此野郎、云はせて置けば好い氣になりやがつて！

清藏　まあ正治、さう怒るなよ。だが、おめえほんとにおぎんちやんに氣があるんで、俺達のストライキへ入るのが厭なんなら、忠告してやるが、おぎんちやんはもう外へ嫁の口が定まつたんだぜ。
正治　だますのはよせよ。
清藏　嘘ぢやねえ。町の津野屋へゆくんだとさ。
五作　若旦那になめて貰ふんだとよ。
正治　清哥兄。それあ、おめえ……ほんたうか。（つめよる）
清藏　おい〳〵。……目の色をかへるにあ及ばねえ。ほんたうでなくつてどうするんだ。
五作　だからおめえももうそろ〳〵旦那への忠義面はやめて、俺達の仲間へ入りねえ。
武　さう〳〵。人の娘つ子なんざあ狙ふもんぢやねえ。
佐吉　（おとなしく）正治哥兄、おめえ考へ直した方がいいぜ。
清藏　どうだ贊成しねえか。
正治　（語なし。下唇やゝふるふ）
清藏　どうするんだ。おめえ涙が出てゐるぜ。おめえもよつぽどどうかしてるな。
五作　正公、どうしたんだ。贊成か。不贊成か。
正治　おれは、（傑へ聲で）いやだよ。

清藏　まだおめえは……いやなら勝手にしろ。
五作　ほんとにあとで後悔するな。
清藏　ぢやみんなかうと定まつたら早速やつゝけようぢやねえか。
五作　おい正治、おめえどうしても承知しなけれあ、おれ達の方だつて覺悟があるんだぜ。
正治　（默してゐる）
清藏　くどい様だが不贊成なんだな。
正治　あゝ……どの道おれはいやなんだよ。
五作　それぢやあ最後の手段だ。（皆んな立つ）
正治　（同じく立つて）どうするんだ。（睨み合ふ）
（此時隣りの量乳室の外の戸が開く音がして、岩木源二の咳の聲がする。）
清藏　惡い處へ來やがつたな、源二旦那か！
五作　もう四時だ。歸つて來たんだ。
清藏　（正治に）おめえ今迄の事を一言でもいふと承知しねえぞ。
正治　いひたくもない事だよ。
源二　（隣りの室で）おい！　誰かゐるか。
五作　はい。皆んな居ります。
源二　（量乳室の戸を開いて首を出す）清藏は？　（源二は縞ラシヤの半ズボンとフランネルのシヤツを着て、其

上にチョッキをつけてゐる）

清藏　何んですか。

源二　（入つてくる）　おまへに鳥渡用があるんだ。外の者はぐづ／＼してゐないで稼いでくれ。まだ爐ばたにかぢりつく程の事はないぢやないか。

五作　ちよつと譯があつたもんですから。

源二　又喧嘩でも始めたんだらう。だが喧嘩も今の中にして置いて與れ。もう十日すぎて乳を賣るのが許されたら、目が廻るほど忙しくなるんだから。

正治　なあに喧嘩といふ程のことぢやないんです。鳥渡話をしてゐた許りなんです。

源二　さうか、そんならいゝが餘り閑だとよくねえ事をするからな。

五作　（顔を見合せ乍ら）　それぢや一ト廻り片付けるとしようよ。

清藏　（意味ありげに）　さうだ、明日から片付けなくつたつていゝやうにしつかりやるんだ。

五作　おい。行かう。（と佐吉、武を伴ひ去る）

源二　正治。兄さんがおまへを探してたが、もう今日の買入れはいゝのか。

正治　キラズをさう云つて置きましたが、もう屆いたかしらん。ぢや私も鳥渡往つて來ませう。

源二　それから駐在所へ屆けるやつも書いて置いてくれないか。俺は鳥渡手を離せないから……。

正治　はあ、畏りました。（去る）

清藏　（直覺的な良心の豫感に不安の眼を光らせ）　あの私の用といふのは？

源二　まあ話すから此處へ掛けなさい。

清藏　何ですか一體？　（立つてゐる）

源二　さう逃げ腰をしなくてもいゝ。（清藏坐る）　おまへに取つちやよくないことだ。どうだ、もうわかつたらう。

清藏　（さあらぬ體で）　私にとつてよくないこと……。何ですか私にはさつぱり解りません。

源二　よく胸に手をあてゝ考へて見ろ。自分の心によく聞いて見ろ。

清藏　（平靜を裝ひつゝ）　私によくない……はゝ又牛の糞を大新田まで運ぶんですか。

源二　おまへしらばくれちやいけないよ。

清藏　ぢや何です。私にはちつとも解りませんが……。

源二　どうしても俺の口から云ひ出さない中はきかないのだな。清藏！　おまへ全く自分で天道樣に恥しい處が無いんだな。

清藏　何をおつしやるのか私には少しもわかりません。

源二　ぢやあ云はう。實はな近頃あの裏の納屋へ置く生麩（しやうふ）

滓(かす)の俵がよく無くなるんだが、おまへぢやあるまいな。なあに、一俵二俵の處なら一圓二圓で濟むことだから、私も咎め立てしたくはないんだが、近頃ぢやもう十俵ほど煙になつてるぜ。

清藏　へえ、無くなつてゐるんですか。

源二　おまへ毎朝入る癖に氣がつかなかつたのか。

清藏　いや、わしはあつちの納屋へは滅多に行きません。

源二　さうか。他の人の話では、おまへが生麩滓を車で運ぶのを見たといふ人があるんだが、おまへもしか、……

清藏　旦那それや餘りです。誰だか知らねえが、そんな事は決してありません。

源二　清藏！　おまへ餘り强情を張るのはよした方がいゝぜ。何も一時の出來心でわるかつたとあやまれあ、それで事はすむんだから。

清藏　ですが旦那、しもしないものは覺えがあるもねえも御座いません。

源二　それぢや訊くが、おまへ一昨日の晩何處へ行つた。

清藏　どこへも參りません。只鳥渡獸醫さんの處へ遊びに行きました。

源二　嘘を吐け！　おまへが十時頃に町へゆくのを見た人がゐるんだぞ。しかも町の新地の新布袋樓へ上つたのをちやんと見た人がゐるんだよ。

清藏　(頭をかき乍ら)　實は上つたのですが、恥しいので申しませんでした。

源二　そんな金はどこから出たんだ。

清藏　獸醫の田中君に借りました。

源二　すると獸醫も一緒に行つたのか？

清藏　さうです、あの人のは花鳥といふ花魁です。

源二　馬鹿！　さうすると獸醫とおまへと共謀(ぐる)なんだな。

清藏　あなたは隨分なことばかり仰有います。私は全く覺えがありません。其上獸醫さんまでそんな風に……。

源二　默れ！　嘘をつくな。(懷より一本の手拭を取出す)　これでもまだおまへは白狀しないか。

清藏　えゝ。何です。

源二　これがわからないか。おまへの昨夜まで使つてゐた手拭だよ。俺はふとした事から、昨夜おまへが風呂へ來て、茶の間で話をしてゐた時に、この菊水の紋に見覺えがあるんだ。今朝起きぬけに納屋へ行つて見たら、藁の間に落ちて居たんだ。これでもおまへは强情を張るか。どうだ！

清藏　(語なし、うなだれてゐる)

源二　それとも巡査をよんで搜査させるか。さうするとおまへ事が大きくなるぜ。

清藏　(間、しばらく考へてゐたが後翻然と)　私が惡うご

ざいました。
源二　ぢや矢つ張りおまへが盗んだんだな。
清藏　はい。私が盗みました。
源二　さうしてどうした？
清藏　賣りました。
源二　どこへ賣つた？
清藏　獸醫の手でもつて町へやりました。その先はわかりません。
源二　よし、獸醫と一緒に告發してやる。おまへ一人ならどうにでもなるが、さうと知つた以上わしは許して置けない。おまへは共積りでゐなさい。
清藏　ですが旦那。それはひどいぢやありませんか。
源二　何がひどい。生麩滓を十俵もなくして默つてゐられると思ふか。あの平凡獸醫の畜生！　初めの札幌號が炭疽病になつたとき、病氣がわかりもしねえで風邪だなんぞと胡魔化して置いたくせに炭疽と解つたら法外の金をふんだくつて、おまけにそんな……。
清藏　ですが旦那、田中君はちつとも罪がないんです。あの金は皆んな私が使つたんです。只田中君は私の賴みをきいて賣つて吳れたばかりなんです。
源二　立派な故買犯ぢやないか、獸醫學校の免狀を持つてゐる一本立のあいつが、そんな法律を犯したことをやつてゐるのは、第一村の爲にもならん。おまへには氣の毒だが、男らしく覺悟をして貰ひたい。
清藏　旦那はどうしても警察へ出るつもりなんですか。
源二　どうも仕方がない。（戸口まで大股に行きかゝる）
清藏　（考へてゐたが）旦那鳥渡待つて下さい。
源二　（入口の處でふりかへる）何だ！
清藏　警察へゆくのは旦那の方でも藪をつゝいて蛇を出すやうなものですぜ。
源二　いくら事件を捏造しても證據があるから駄目だ。
清藏　旦那、私の事を云つてるんぢやありません。旦那がそのやかましく云ふ法律の網をくゞつて、不正事をやつてる人が他にあるんです。それまで發れてもいゝんですか。
源二　法網をくゞつてる……。誰が法律を犯した？　自分の罪をかくす爲に嘘を云ふときかないぞ。
清藏　嘘だと云ふなら警察を呼んでおいでなさい。私より先に共人が繩付で出る處をお目にかけます。私は逐一事情を白狀してやります。なあに、生麩滓の五俵や十俵の事ぢや無えんです。許されもしねえ牛乳を大きな顏で賣り出すのは、立派な罪になるでせうからな。
源二　許されない牛乳を賣る？　それは眞實か。（戻つてくる）一體誰だ。それは？

清藏　あなたの兄さん。大旦那です。

源二　何、兄さんがそんなことをした？

清藏　さうです。大旦那はもう一週間も前から、三原馬車の馭者と結託して、牛乳を菰包みにして毎日三原へ送るんです。三原牧場の主人の奴まで金に目がくれて、どんどん殺菌した上、自分の乳へ混ぜて大きな顔で賣るんです。なあに、もう黴菌はありはしめえけれど、法律上の禁止は未だ解かれてゐませんからなあ。

源二　おまへ何時それを知つたのだ。

清藏　なあにとうから氣が付いてるんですが、旦那だつて五匹も牛にくたばられたり、一ケ月も乳を賣るのを禁められたりした苦し紛れなんだから、私だつてどうのかうのと云ふつもりはなかつたんです。

源二　だが兄さんはどうしてそんな情けない事をする氣になつたんだらう。おまへ、念を押すやうだが。ほんたうだね。

清藏　一言だつて噓はありません。それなら明日の朝、氣を付けて御覽になれば、少し眼のあいた人間には誰にだつて解ります。

源二　この事を知つてるのはおまへ一人だらうな。

清藏　他のぽんつくにどうしてわかるもんですか。

源二　さうか……よし。おまへもしばらく默つてゐて呉れ俺は十分處決の方法をとるから。（戸口の方へ歩む）

清藏　（追ひかけて）旦那それで私の方はどうなつたんです。

源二　（行きかけて戻つてくる）それもしばらく默つてるんだ。（間）それからおまへの知つてることを詳しく一一話してくれないか。（腰をかける）

清藏　（腰をかけて）私が初めてそれを見つけたのは……。

源二　シッ！　誰か來たやうだ。

（戸外で佩劍の音がする。やがて窓の處へ相樂巡査が現れる。）

巡査　やあ、源二さん、此處においでゞしたか。いゝ天氣ですな。

源二　左樣ですな。まあお入りなさい。（巡査入り來る）巡囘はもう？

巡査　南だけ巡つて道順だから寄りました。牛に異狀はありませんかな。

源二　お蔭さまで注射をしてからすつかり撲滅されたやうです。もう大丈夫です。

巡査　もう十日たてば賣乳が許されるですからよく氣をつけなさるがいゝです。

源二　有難う。さ、こゝへ腰をおかけなさい。

巡査　時に兄さんは？

源二　母屋にゐませんでしたか。

巡査　ゐなかつたやうです。實はその……あなたでも宜しうございますが……實は昨日私の留守にとんだ頂戴物をいたしまして。

源二　へえ、さうですか。あなたには度々御足勞をかけましたので、兄が志だけを差上げたのでございませう。

巡査　どうも難有うございますが、お菓子折だけなら辭退せずに頂くのですが……。

源二　へえ。何か粗さうでも致しましたか。

巡査　いえ、粗さうなどゝいふ譯ぢやございませんが。

源二　へえ、あゝさうですか。（傍にぼんやり立つてゐる清藏に）おまへはもう用がないんだからしばらくあつちへ行つてゐろ。

清藏　ぢや、旦那あつちへ行つてゐます。巡査さん御免なせえ。（と顧み乍ら出て行く）

巡査　實は頂いた菓子折の中から、かういふものが出ましたので。（ポケットより紙幣を包める紙包を出す）かういふものを頂く譯がありませんから。

源二　へえ。兄がそんな事を致しましたか。

巡査　ですから、これはそちらへお收めかへします。

源二　いや。何にもせよ、兄が折角の志なので別に惡い意味の……賄賂とか何とかいふ譯でなく、ほんのお禮なのでございますし、それに、全く相樂さんにはお世話になりつゞけて居りますで、どうかそれは私に免じてお收め下さい。

巡査　いや全く頂く筋がないんですから、お世話と云つて全く職務上やるに過ぎんですから。

源二　さう仰有られると困りますが、どうぞ私に免じてお收め下さい。私もこれで村會の議長までやつた男です。貴方がたの事情まで知らぬと云ふ譯でもなし、それに全く大したお禮でも何でもないですから、品物だと思つてお收め下さい。兄へは私からよく云ひますし、兄だつて一旦差上げたものを戻されちやいゝ氣もしますまい。どうか私に免じてお收め下さい。

巡査　では頂く譯はないんですが、あなたがさうまで仰有るなら、一と先づ頂戴して置きます。どうも有難うございます。

源二　お禮はいたみ入ります。（間）それから例の選擧の紛擾は片がつきましたかな。

巡査　やつと町の金森さんの口入で收まりました。

源二　さうですか。私は又村中の喧嘩にでもなるかと思つて心配して居りました。もう家の事が忙しいものですから……あ、こんな處で立話もなんですから、あなたはお先に私の家の縁へでも休んでゐて下さい。私は少しこゝ

を片づけてすぐ行きますから。

巡査　さうですか。あの話で是非申し上げたいこともありますから、ぢや向うで待つて居ります。

源二　さうして下さい。（巡査去る。源二はほつと吐息を吐いて）牛乳の密賣と巡査へ賄賂！　情けないなあ！　兄さんは！　（腰を下ろして思ひに沈む。やがて思ひなほして量乳室へ行く）

（そこへ源二の妻のおひさが入つてくる。おひさは淺黑いけれど、田舍人には珍らしいきりゝとしまつた顏立の女で、年より老けた地味なふだん着で米研ぎ笊に米を入れてかゝへてゐる。）

ひさ　（量乳室の物音を聞いて）あなた！　あなたぢやありませんか。

源二　（量乳室から顏を出す）俺だよ。何か用か。

ひさ　お客さまが來てますから、うちへ行つて下さい。

源二　おまへお客樣をほつたらかして來たのか。

ひさ　おぎんちやんに賴んで來たの。あのひとだけだわ。わたしたちとつき合つて吳れるのは。

源二　又すぐ愚痴だな。いゝぢやないか、兄さんの家の人が何といつたつて。

ひさ　えゝ、だけど……さうだわ、誰が何んといつたつてかまはないけれどおぎんちやんはほんにいゝ人よ。（間）あの助役さんが來て待つてるんですよ。巡査さんと話をしながら。

源二　ふむ。さうか。俺は巡査だけかと思つた。助役がやつて來てるのか。

ひさ　えゝ、今來た處なの。あたしすぐ米を研いで行きますから、あなた早くいらつしやいよ。

源二　よし〳〵。（一旦量乳室に入り又出て來て右の戶からゆく。おひさは水を汲んで米を研ぎにかゝる。）

（入れちがひに岩木源吉（兄）の妻おかれが拔きたての大根を携へて入り來る。やゝ醜き容貌と臨月に近き腹を抱へてゐる。嫂は妹の姿を見るとすぐ憎惡の眼を光らせる。さうして無遠慮なイヤミを浴びせかける。）

ひさ　まあ嫂さん、いゝ大根ね。

かれ　欲しけれあ自分でとつておいで。お前なら旦那だつて小言は云はないよ。

ひさ　あら、すぐそんな風に氣を廻しちや困りますわ。私なにも欲しいなんぞ思やしなくてよ。

かれ　すぐ中譯だね。それよりか私に水を汲んでおくれでないか。

ひさ　（あわてゝポンプにゆき水をくむ）氣がつかないで……どうかかんにんして下さい。

かれ　汲んで吳れてあやまらなくたつていゝぢやないか。

どうしておひささんは、さうあてつけばかり云ふのかねえ。

ひさ　嫂さんあんまりだわ。わたしちつともあてつけなんぞ云やしないのに、なんでも惡くばかり取つて下さるんだもの。

かね　さうさね。どうせ、わたしはすべたで、おまけにこんな身體ぢやひがみ根性になるだらうね。

ひさ　（益々困つて）わたし何もそんな、……

かね　おまへさんのやうな美人で旦那が一人で足りなくつて、私の旦那までどうかしようと思ふやうな強い人とは異ひませうよ。

ひさ　わたしが、いつ兄さんをどうかしようとしましたつて、……嫂さんあんまりですわ。

かね　思ひあたらない事もありますまいよ。

ひさ　隨分だわ、わたしそんな女だと思はれるなんて、……（泣く）

かね　（大根を洗ひ終り滴を切り乍ら）　おひささんもいろんな手管がお上手ですこと、どうも有難う。

（嫂は去る。おひさは一人でしく／＼泣き乍ら米を研いでゐる。左の搾乳室の戸がそつと開いて源吉（兄）が顔を出す。さうして自分の妻の去つたのを見濟して入つて來る。源吉は岩疊な身體を有つた男で、傭人と同じく紺股引と白いシヤツ。其上にチヨツキを着てゐる。）

源吉　おひさ！　泣いてゐるね。

ひさ　（驚いて立上る）あら兄さん。びつくりしたわ。私何も泣いてなんぞゐやしません。

源吉　すつかり聞いてゐたぜ、隣りで。おかねの厭味もおまへの泣くのも。

ひさ　まあ、いつから。

源吉　おまへ、あんな事をおかねに云はれたつて怒つちや困るよ。怒りやしないだらうね。

ひさ　私がみんな惡いのですもの……。

源吉　俺は全くそのやさしい心根に同情してゐるんだよ。俺はおまへのやうに女らしい、優しい女を見たことがない。おかねのやうな獸か、おぎんのやうなハネツカヘリか、みんな男を虐めようとかゝつてる女しか見たことが無いんだ。

ひさ　まあ兄さん。そんなことを云ふもんぢやないわ。

源吉　おまへがその優しい心で此處へ來てからといふものは、俺は何だか暗い世の中から明るい世間へ出たやうな氣がしたんだ。噓ぢやない。いくら弟の妻だと思ひなほしても、矢張りお前の姿ははつきり心の中にうつるし、胸の思ひはつのるばかりだ。此間の晩だつておれがおまへに打あける迄の心の中を察してくれ。おれは不倫とい

はれようが、何と云はれようが、戀しいものは仕方がないんだ。

ひさ　（答に窮して）まあ、いやよ。

源吉　（近よつて）いつその事、おまへはあの晩何故もつと手強くおれを撥ねとばして吳れなかつたんだらう。考へてから返事をするなんて云つてくれたもんだから、俺は狂人のやうにお前の事ばかり考へてゐたんだ。さうして、一體いつになつたら返事をしてくれるんだい。（だん〲激してくる）

ひさ　だつて、あゝしか返事のしやうがなかつたのですもの。

源吉　もう俺の思ひは深く深くなつて、どんなことをされても思ひ切れなくなつたんだ。（急に正面の秣納屋の處へ行つて錠をこぢあけて戸を開く）さあ、今日はもう俺の行ける處まで行くんだ。

ひさ　（この熱力に魅せられてかすかに）だつて行ける處まで……、行けやしないわ。

源吉　おひさ。おまへはまだ俺を信じないね。このやうに悶えてゐる俺を、救つてくれようとしないね。おれの心はまだおまへにすつかり解らないのか。

ひさ　だつてあなたはほんとに……ぢやなくつて、おかねさんがみもちだから、……わたしをそんなに……

源吉　まだそんなことを云つてるのかい。おひさ。まだそんな風に考へて、おれの云ふ事を聞かないのかい。

ひさ　だつて、あなたがさうでないといふ證據を見せて下さるつて云ひ乍ら、見せないぢやありませんか。あなただつてどんなつもりで、わにしを思つてるかわかりやしないわ。口でいふことなんぞ何だかわかりやしないわ。

源吉　證據つてどうすれあいゝんだ。

ひさ　わたしにもわかりませんけれど、まあ時の來る迄待つて下さるのが一番よ。

源吉　おまへは俺を愚弄してるね。一體おまへはおれをどう思つてるんだ。

ひさ　兄さんですもの。

源吉　もし源二がゐなくなつたら。

ひさ　まあ、あなたはそんな事まで考へていらつしやるの。

源吉　馬鹿いひなさい。誰が弟を……、なあに私のいふのは、假りに源二をゐない、……無論自然に死んだとしたら。

ひさ　矢張り兄さんです。だつて怖いんですもの。

源吉　怖い！　世間がかい？

ひさ　いゝえあなたが怖ろしいのです、ほんとにあなたは恐ろしい人なんですもの、獨りで熟して來て盲目のやうになるんですもの。

源吉　おひさ、何でも俺の云ふ通りに行ける處まで俺と一緒に行かないか。さうさへすれあ、俺だつてやさしくなるんだ。おまへのその手で、俺の心を溫めてくれりあ。俺は生れ更つたやうにおとなしい人間になれるんだ。怖いのは今の中だよ。

ひさ　あなたはいゝでせうけれど、わたし源二さんをどうすればいゝのでせう。

源吉　それだから、あれにもわからないやうにうまくやるんだ。

ひさ　だけどきつとわかるわ。あなたのおかねさんさへあんな事を云ふ位ですもの。それにわたしはそんなことをしちや源二さんに濟まなくて、死ぬより外はあるまいと思ふんですもの。

源吉　おひさ、おまへは俺と源二とどつちが可哀さうだと思ふんだい。

ひさ　それは……あなたです。

源吉　どつちが可愛いと思ふのだい。

ひさ　だつて、神樣があの人を可愛いと思はせるやうに定めたんですもの、もう仕方がないわ。

源吉　矢つ張り俺は思ひ切らなくつちやならないといふのか。

ひさ　え、私お願ひしますわ。

源吉　だけども、思ひ切れないんだよ。俺はもう氣が狂ひさうなんだよ。色々な事で頭腦が、もうわからなくなつてゐるんだ。何もかも一度に押しよせて來てるんだ。牛は五頭も死んだんだ。乳は一ヶ月も公らに賣れないんだ。おまへも源二も一緒に俺を苦しめに來るんだ。（だんだん興奮する。しまひには氣狂のやうに頭の毛をかきむしり乍ら）世間は皆んなでよつてたかつて俺をいぢめようとしてるんだ。一體皆はそんなにして俺をどうするつもりなんだ。……一體俺をどうするつもりなんだ。

ひさ　兄さん、（近よつて）あなたどうなすつたの？

源吉　（いきなりひさの手をとる）ひさ。あそこへおいで！さ一緒においでよ。おれはもうおまへを離さないよ。

ひさ　兄さん！　いけません。あなたは妾まで氣狂ひにして了ひます。

（猶無言に反抗するひさを捕へて秣納屋へ連れ込まうとする時、右の量乳室の戸が開かれる音がして誰かが入つて來たので源吉は驚いて手を離し、本能的の羞恥に驅られて獸のやうに右手入口から去つて了ふ。やがて靜かに量乳室の戸が開いて源二が蒼白な猜疑に滿ちた顏を出す。二三歩妻の方へ步み寄つて。）

源二　どうしたんだ。誰かゐたやうだつたね。兄さんぢやないか。

ひさ　あなた後生ですから何も云はないで下さい。何も云はないで。（と慇懃まつて取すがり泣く。）何にも……何にも……。

源二　うむ泣く事はない。誰もおまへを疑ひやしないから安心をおし。だが兄さんは、餘りやる事が多すぎるやうだね。おまへからよく忠告しておやり。

ひさ　あなた！（泣き乍ら感謝の眼光を以て源二の顔をぢつと見つめる）

――幕――

第二幕

同じく岩木牧場内のある秣納屋の內部。三方の壁側には藁が一杯積み込まれて、舞臺の中央に方二間ほど土間が露出してゐるばかりである。左手の殊に高く積み重ねられた壁側の藁の中には牛酪を作る器具や、出來上つた牛酪や、乳を入れた鑵などがかくされてある。此處で源吉は腹心の正治と禁賣の牛乳で牛酪密造をしてゐるのである。

幕のあいた時此舞臺には誰もゐない。只宵の青い月光が右の高窓からさし入つて藁が青く鍍金されてゐる。遠くで野良戻りの鄙唄がして又遠ざかつてゆく。牛の啼く音が寂しく聞える。しばらくして外面で低い男女の爭ふ聲がする。つゞいて表の戸の錠を開ける音がして戸があくと正治がそこへ現れる。

正治　（外面の女に向ひ）鳥渡きゝたい事があるんだからお這入りな。手間はとらせやしないよ。

ぎん　（つゞいて現れる）こんな暗い所でどうするの。わたしは未だ臺所がすつかり片づいちやないんだし、風呂の火も見て來なくちやならないんだからね。

正治　鳥渡入つて呉れりやいゝんだから、なあにすぐわかることなんだ。

ぎん　おまへ、力づくで手荒なことをすると承知しないよ。

正治　馬鹿な。そんなことをするもんか。

ぎん　ぢやあ。鳥渡だよ。（入つて來る）

正治　實はね。（といひ乍ら戸を閉めようとする）

ぎん　いけない！　戸はこのまゝにしてお置き。わたしはまだあの晩のことを覺えてるんだよ。おまへは又……。

正治　おぎんちやん。成程、あの晩にあ、俺はおまへに亂暴もしたけれど、おぎんちやんだつて、その亂暴を默つて受け入れたぢやないか。初めはおれの方が上手だつたが、あとでおまへの方から求めて來たんだぜ。

ぎん　嘘お云ひでないよ。他人をあんな目に合せて置き乍ら、今になつて私まで罪に引入れようとしてるんだね。

正治　そんなことはどうでもいゝけれど、戸はしめなくちやあ。
ぎん　きつと亂暴はしないね。
正治　しないつたら。たゞちよつと話があるだけなんだよ。
ぎん　でも暗いぢやないか。
正治　今カンテラを點けるからお待ち。（正治入口の柱に懸けてあるカンテラに點火す）
ぎん（やうやく戸を閉めて、兩人は適宜の間隔を保つて藁の束に腰をかける。貧しいカンテラの光が二人を見下ろしてゐる）おまへの話つていふのは、大概もうわかつてゐるよ。だけどおまへの口から一應聞いて置きませうね。
正治　實は今朝ある人からきいたんだが……。
ぎん　鳥渡お待ち。その話の前に、是非是だけは私から云つて置かなくちやならないわ。でないと話が行違ひになるからね。
正治　それはどんな事だい。
ぎん　私はお前と是まで、一度も約束めいたことをしなかつたといふこと。だからおまへは、私のすることに少しも束縛を加へる權利もないこと。それからおまへと私は全く他人同志で、關係なんぞ爪の垢ほどもなかつたことこれだけは承知しておゐでだらうね。

正治　だつてそれあ……。
ぎん　だめよ。おまへいくら云つたつて、そんなものは噂に過ぎないつて、事をもみ消すだけの强味は持つてるんだからね。そこが女の强味なんだよ。
正治　ぢやおぎんちやん。今朝のあの話は初めつからほんたうなんだね。
ぎん　どんな話だか未だきかせないぢやないの。
正治　おまへさんが津野屋へ嫁くつていふ話よ。どうせ今のやうな前置きをする以上眞實には違ひないんだが、男つて奴は未練なもんで、當人の口から眞實だといはれない中は、まだ噓だと思つてるんだからね。
ぎん　だつてその話なら、もう定まつたんだもの仕方がないわ。
正治　今になつて、俺がどうかういふのは間違つてるかもしれないけれど、何故前に俺に云つてくれなかつたんだ。
ぎん　何もお前に相談する必要はないぢやないか。
正治　それや、理窟でいへば必要はないだらうけれど、二人の間は、全く一遍の理窟ですんでゐたかい。おれはおまへさんに馬鹿にされてゐたのかもしれないけれど、そんなものぢやなかつたらう。
ぎん　それは、よしんば二人が假りに……。
正治　假りにだつて？

ぎん　えゝ假りに戀してゐた所で、何も結婚問題とは全く別だわ。おまへも今まで一度だつて、そんな事を私に云つた事もなし、私だつて誰がおまへとそんな事をするものかね。

正治　おめえもとからさういふ積りでゐたんだな。（立ち上る）

ぎん（同じく反抗的に）だからどうするの。話はもう濟んだからね。

正治（强て平靜につとめつゝ）話はすんだが事は濟みはしないから、そのつもりでゐて貰ひますよ。

ぎん　いくらおどかしたつて、もう定まつた事だもの仕方がないわ。だけどおまへだつて、さう未練がましいことを云はないで、もう此儘にしておくれでないか。綺麗さつぱりと。ね、かうなつたら我を折つて私から賴むよ。お金が欲しいなら、……どうでもするからね。

正治　おまへは實にあきれた女だなあ、おれが何時手切金をねだらうとした。俺は金なんぞ欲しくはないんだ。

ぎん　ぢや何が欲しいの。

正治　おまへの元どほりの心よ。俺は何にもこゝでおまへの體が要ると云ひやしない。今度の結婚だつて俺とすれば馬鹿な男心から、おまへが厭々乍ら義理で承知したのかと、そればつかりを賴みに今日もこんな處で聞かうとしたんだ。俺だつて恩になつた岩木の家の爲とあればおまへが立派な金持へ緣づくのだつて、妨げはしたくないんだ。おまへの體は先方にあつたつて、心は始終俺と一緒にゐてくれると思へば、男らしいあきらめもつく、綺麗さつぱり生れ返つて働けると思つてゐたんだ。それをおまへがそんな心でゆくんなら、俺だつて男だ。いゝかげんに馬鹿にされて、默つてゐろと云はれたつて默つてゐたくはない。おまへが切れるつもりでゐても俺はどうしても切らせない。

ぎん（だん〴〵氣味がわるくなつてくる）おどすのはよして、ほんとに賴むから思ひ切つておくれよ。ね。

正治　おまへに賴まれる譯がねえよ。

ぎん（心機一轉して正治の恐喝を斥くる方策を思ひついたやうに）ぢや勝手におし。誰がおまへの云ふ事なんぞほん氣にするものかね。

正治　どうだか見てるがいゝ。

ぎん　見てゐますともさ。（戶の方へ行き、戶をあけて出て行かうとして閾の處で立止まる）正治、おまへ無分別だけはおよし。いゝかい。

正治　御忠告には及ひませんよ。未だ〳〵生き甲斐がありさうだからね。

ぎん（又入つてくる）だけど、こゝで綺麗に別れようぢ

やないか。その方がお互の爲だと思はない？

正治　どうぞ御勝手に、二人はもとから別れるも別れないもない間柄ださうだからね。

ぎん　（思ひ切つて）　今のその言葉をお忘れでないよ。

（出てゆく）

正治　（呆然としてゐたが）　もうかうなつたら、どうしたつてやつゝけるんだ。（あちこち眼を光らせ乍ら考をまとめる人のやうに歩き廻る）

（源吉（兄）豫定の時間なので此秣納屋へやつてくる。）

源吉　（とがめるやうに）　正治！　今こゝから出たのはおぎんのやうだつたが、さうぢやなかつたか。

正治　えゝおぎんちやんです、それがどうかしましたか。

源吉　おまへと一緒にこゝにゐたのか。

正治　えゝ。（反抗的に）　それが惡いんですか。

源吉　あれも嫁入り前の大切な體だから疵でもつかないやうにと思つたのよ。

正治　へゝえ。妙なことをきゝますね。疵でもつかないやうにといふと大分立派のやうですねえ。

源吉　正治、おまへは今夜は餘程どうかしてゐるな。言葉つきが荒々しくて目が血走つてゐて、……どうかしたのか。

正治　旦那、今夜は牛酪作りは止めませうよ。

源吉　どうして？

正治　そのかはりきゝたい事があるんです。

源吉　牛酪を作り乍ら話したつていゝぢやないか。

正治　えゝ、ですが、事によつたら、もう明日からこんなことを、お斷りしようと思つてゐたんです。

源吉　どうして急にそんなことを云ひ出すんだ。俺はおまへを手足と頼んでゐるんだぜ。

正治　旦那は一體、今までどうお考へでした。私がかうして旦那の腹心のやうになつて、一生懸命忠實に働いて來た事を、惡遊びの一つもせず、人の目をぬすんでのらくらもせず……。

源吉　若い者に似合はず感心な者だと思つてることは、幾度も話した筈だ。始終おまへにも感謝してゐた筈だがな。

正治　そんなことぢやなく、私がどんな處からかう正直に働いてゐるとお思ひです。

源吉　どんな處つておまへの心立が佳いからさ。

正治　只それだけでせうか。

源吉　さうだとも。わしはそれ以上に考へもしない。何もおまへ目的があつて金が欲しいとか、家が欲しいとかいふやうなさもしい根性から、働いてるんぢやないつて事は見ぬいてゐるんだよ。

正治　さうでせうかね。全く赤の他人が何かの利害關係な

しに、こんな風に密接に結びつくもんでせうかね。

源吉　ぢやおまへは、何かの利益の爲めに今までこんなに働いてゐたといふのか。

正治　えゝさうです。それが又あなたにもわかつてゐた筈です。

源吉　おまへは、そんなさもしい人間だつたのかい。

正治　さうです。さもしいかどうかは解りませんが、どうして譯なしにあんなことが出來ませう。私はそれがあるばつかりに、朝はもう三時十五分前には必ず起きました。さうして奴等を起す前に、もうちやんと一ト通りの道具は整理しました。又それをするのが愉快だつたんです。一つの牛乳罎を念入りに洗ふのでも、これが私の憶つてゐる目的に達するためだと思ふと、獨りでに精神がこもりました。その目的なしに、どうしてこんなにびくびくし乍ら法律上の犯罪をやりませう。

源吉　ふむ。さうしてその目的といふのは何だい。

正治　あなたはもう解つてゐる筈です。あなたが不用意に發した言葉かもしれないけれど、秋の鎭守祭の晩におつしやつた事は一々よく覺えてゐます。

源吉　あゝさうか。それぢやおまへはおぎんが欲しいのだな。

正治　さうです。そのおぎんちやんが私の目的だつたのです。あなたはあの晩私に少しの見込がついたら、おぎんをやつてもいゝと云ひましたね。私はその空な言葉に釣られて馬鹿らしい忠義者になつたのです。いや、あなただつて、初めは私に呉れる位の心はあつたかもしれん。しかし、今になつてあなたは世間並に金が欲しくなつて、素寒貧の私にやるのが惜しくなつたんだ。さうして、私はもうさんざ働かせて了つたから、どうなつてもいゝといふんでせう。

源吉　おまへがあれに氣があつたとすれば、いかにも私は氣の毒だが、おまへも十分働かせて了つたからなんて、さう氣を廻しちや困るよ。

正治　ですが、私にはさうとしか取れないぢやありませんか。あなたは初めは殆んど默許の形で居り乍ら、近頃になつて妙に白ばくれ出して、今私の戀に氣がついたやうなふりをなさるんだもの、一體あなた方は卑怯だ。

源吉　(少し怒る)　正治!　聞いてゐれば何だと、何をぐづぐづ云ひ出すんだ。何が卑怯だ。平常おとなしいおまへだから蟲を殺してゐれあ、おぎんを思つてるの何のつて、いつあの子をおまへにやると約束した。

正治　それはきつぱりとはしません。

源吉　おぎんだつて おまへと約束なんぞした ことがあるか。俺は此話の初めに、念の爲めと思つて、おぎんに訊

いたんだ。あの子はきつぱりと何もないと立派に云つたんだぞ！
正治　何もない？
源吉　うん。さう云つた。立派に云つたんだ。誰がおまへのやうな……つて一言の下に否定したんだ。それを元から約束でもある情婦か何かのやうに、一人極めに極めやがつて何を云ふんだ。馬鹿め！
正治　旦那、全くおぎんちやんとの中は、そんなだと思つてるんですか。
源吉　何だと。
正治　私はいくら馬鹿でも、未だおぎんちやんの婚姻を打ちこはす位な事實はちやんと握つてるんですからね。
源吉　おまへは破談にさせる氣だな。
正治　えゝ、あなたの出方一つで立派に破談にして見せます。
源吉　ぢやどうすればいゝんだ。
正治　あなたから破談にするんです。さうしておぎんちやんを取戻すんです。
源吉　馬鹿をいへ、何の爲めにそんなことをするんだ。おぎんはおまへにやらなければならん理由がどこにある。
正治　宜しうございます。では私一人で方法をとります。それだけ承れば澤山です。私は烏渡行つて參ります。

（立上る）
源吉　（いきなり正治の首を捕へる）貴樣は飽くまで妨碍する氣だな。
正治　（挑戰的に押しかく）あなたはもう一應考へなほしなさい。私はあなたと密造を一緒にやつたんですからね。
源吉　それをおまへは告發するといふんだな。
正治　御安心なさい。今すぐは警察には云ひやしませんよ。私は只おぎんちやんが欲しい許りなんですからね。
源吉　（鋭く）正治！（猛然と捕へる）
正治　何をなさるんです。（强く源吉を刎ねのける。さうして素早く外へ出る）
源吉　誰が貴樣等に……。（戶をヤケに閉ぢ舞臺の中央へやつて來る。しばらく唇を嚙み乍ら憤怒の餘勢を抑制しようとしてゐる。やがて戶に心張棒をかひ、のち左手の器具をかくしてある方へ行つて牛乳の罐を藁の間から取出す、それを舞臺の中央に運んで來て据ゑる。つゞいて製酪器を持つて來て置く。やがて仕事を初めようとしてうとしない。長い間。遠くの方で人聲がする。しばらく藁束の上に腰をかけたまゝ呆然と器具を眺めて取かゝらうとしておぎんの聲がはつきり聞える）
ぎん　（どん〳〵戶を叩いて）叔父さん！　叔父さん！　こゝぢやないのかしら、叔父さん！　叔父さん！

源吉（耳を聳てゝ、猶は無言）
ぎん　叔父さん！　ゐませんか！
源吉（急いで立上る）何だ！　ゐるよ。
ぎん　あけて下さい。早く來て下さい。叔母さんが急に産
　氣づいたんです。早く來て下さい。
源吉（急いで心張棒を外づして戸を開ける）どうした
　と。
ぎん　叔母さんが蟲をかぶつたんです。早く來て下さい。
源吉（急にカンテラの火を消すと舞臺暗黑。月光靜かにさ
　し入る）さうか。よし、すぐゆく。（戸を閉ざしておぎ
　んと共に出て行く。又長き間）
　（低い聲が又聞えて、正治が弟の源二を連れてくる。）
正治（聲ばかり聞ゆ）此處です。
源二　うむ。戸をあけて見ろ。
正治（戸を開く）此處でやつてゐたんです。
源二（入りくる）まつ暗だな。兄さんはゐないぢやない
　か。
正治　今までゐたんですが……。
源二　いや。どうせ今でなくともいゝんだから。かへつて
　いゝ。その道具の置いてあるのはどこだ。お前マッチを
　持つてゐるか、
正治　ある筈です。（探す）おや。さつきの騷ぎにおとし
　たな。
源二　そいつは困つたな。
正治　なに、ようございます。大抵わかりませう。
源二　どこに置いてあるんだ。
正治（左手の壁の方へくる）この藁の下です。
源二（進みよらんとして牛乳の罐につまづく。乳こぼる。
　罐は轉びて丁度洩るゝ月光の注ぐ處へ出る）やあ、罐が
　あつた。
正治　ぢやあ、取り出したんでせう。
源二　うむ、今夜もやりかけたんだな。一體いつから始め
　たんだ。
正治　さう、密造を始めたのは丁度一週間になります。出
　來たバタはみんなこつちの藁の下にかくしてあります。
　もうよほどありますが、旦那が賣乳禁止が解けてから公
　然に賣り出さうといふんです。
源二　おまへは初めから一緒にやつたんだな。
正治　初めから一緒でした。
源二　かういふ惡いことを主人のするのを、おまへは默つ
　て加擔してゐたんだな。
正治　私も惡いとは思ひましたものの、それよりも先に、
　私は旦那の氣を損ねないやうにしなければならなかつた
　んです。

源二　すると、おまへはおぎんちやんの事でこれを警察に訴へると、兄さんとおまへは共謀といふことになつてくるが、それでもお前は訴へるつもりなのか。

正治　何も訴へるのどうのと云ふのぢやありませんが、私は只おぎんちやんを、どの位深く思つてゐるかをお察し下さればいゝんです。私は先程申し上げたとほり、今おぎんちやんが無ければ、もう命だつていらないんですから、もしどうにかして頂かなければ、自棄でやけですからやくざ共謀で罪人になつてもかまひません。

源二　(しばらく考へてゐた後)　正治。おまへ幾つだ。

正治　えゝ、何です。

源二　おまへの歳はいくつだときいたんだ。

正治　五でございます。

源二　うむ。それぢやお前はもう少し考へがあつたつていゝ年頃だぜ。これが十八十九の無分別盛りならいゝが、おまへ程の大男が、女々しい色戀で、自暴自棄を起して了ふなんて、それや餘り思慮が無さすぎるぢやないか。よく考へて見ろ。兄さんもそれや、一時の氣まぐれにせよおぎんを吳れるといつたのは惡からうし、おぎんがおまへの云ふ事をきいたのも、惡いには違ひないが、おぎんとおまへでは誰が考へたつて第一人間が違ふではないか。おまへは實直な田舍者だし、あの子は東京でさんざん惡い事をして、大きな聲でいへないけれども女學校を退校されて歸つて來たといふんぢやないか。土くさい此田舍者の中で男を選むとすれば、まあ誰が見ても若くて元氣なおまへだらうから、そこであいつはおまへを鳥渡弄んで見たんだ。お前だつて中學の三年までやつた男だといふからにあ、その位の事はわかる筈だ。

正治　(只首をうなだれて聞いてゐる。初めは何の說法といはぬばかりの態度だつたが、だん〳〵折れてくる)

源二　(益々說敎師のやうな口調になつてくる)　俺も實は、とうから折を見ておまへに忠告をしてやらうと思つて居乍ら、たうとうこんな事になつて了つたのだが、正治もう少しは考へ直してもいゝぜ。たとへおぎんが假りに今おまへの嫁になつた處で、おまへにあれが統御して行けるか。どこまでも上に立つて抑へて行けるか怪しいものだよ。おぎんはどうして決しておまへ位の男で滿足しやしない。こんな田舍で燻ぶる氣なんぞ毛頭無いんだ。おぎんと一緒になつた處で、全く尻に敷かれ通しだつたら、苦痛は今に十倍するんだぜ。自分の妻の貞操位ゐ氣にかゝることはないものだから、おまへは何も好んでわかり切つた苦しみの中へ、入らなくつたつていゝぢやないか。

正治　それは世間並に考へれば、あなたの云ふ通りでござ

いますが、私としては、もうあれがゐなければならないのですし、又たとへ下男のやうにこき使はれても、それがせめてものなぐさめです。

源二　それは一圖に思ひつめると、女の前に御辭儀したつていゝと思ふこともあるさ。けれどそれは全く空想で、事實出來ることぢやないし、又やつちやならないことなんだ。お前のやうに女に對して下手に出るのは、女を獲るまでの政策として好からうが、女てものは一度自分の物になれば、あとは禮拜する必要なんぞなくなるものだ。いゝから今度はだまされたと思つて、私のいふことを聞いてくれ。

正治　それが出來ます位なら、初めからこんなことはしやしません。私はどうしても初めの考へ通りにしたいんです。やむを得なければ最後の手段に訴へるばかりです。

源二　おまへもほんとにわからないねえ。お前は好んで自分の身を棄てゝかゝつてるのだ。まだおまへは若いんだから、今にこんなこともあつたつけていふ經驗の一つになつて了ふんだよ。

正治　あなたこそお解りにならないんです。

源二　困つたなあ。さう激して來ると話にならない。ぢやかうしよう。さうまで思ひつめてゐるんなら、まあ私が兄さんに說いて見るから、此話は明日まで私に任してくれないか。決してお前にとつて惡いやうなことはしないから。ね。兄さんの事もしばらく默つてゐてくれないか。

正治　私は只あなたから旦那に考へなほすやうにして頂けばいゝんです。それ以上何もいたしません。

源二　ぢやさうしてくれ。又よくおまへも考へなほして見るんだな。どんな結果になるだらうといふことをおまへは勘定の中に入れてないやうだ。だからよく思ひかへして、又元氣よく働いてくれ。おまへは自分でおぎんの爲ばかりに働いたのだと云つてるが、おまへの心の素直な處がなければ、どうしてあゝは働けるもんぢやない。どうだ一つその心にかへつて働いてくれ。な。

正治　ですけれども私は全く……全く……生き甲斐もないんです。私は何もいひません。（かすかに泣く）

源二　いゝ。いゝ。泣くにあたらぬことだ。おまへは今激してゐるんだ。さあ、こんな暗い所にゐるのはよさう。（窓を見上げて）　月が又冴えて來たやうだ。（二人は無言で窓を見る）

（このとき外で妻のおひさの聲がする。）

ひさ　あなたこゝにいらつしやつたの。大變なことが出來たんです。（入つて來る）まあ暗い！　大變なんです。嫂さんが難產で息をひきとりさうなのです。早くあなた行つて下さい。嫂さんは死に際になつても妾が傍へ行く

のを厭がつてるんですもの。

源二　嫂さんが難産で死にさうだと？　ふうむ。（間）　正治務してやれ！　俺が兄さんだつたら氣狂になつて了ふだらうよ。

正治　私だつて同じ事です。

ひさ　まあ、正治さんもゐたのかい。（と闇をすかして見る）

（皆々無言。月光やゝ薄くなる。三人の、おのがまゝなる佇立の姿はしばらく續いてゐる。遠く牛の呻る聲。）

――幕――

第　三　幕

舞臺は第一幕と同じき牧舍内。翌日の朝で同じやうに晴れ渡つた日光を浴びた牧場が見える。が出てくる人人はみんな沈み込んでゐる。幕あくと、そこには搾乳夫等を相手に獸醫が昨夜の噂をしてゐる。

獸醫　（一人爐に坐つて）　それはほんたうかい。

佐吉　ほんたうとも、現にお隣の宇津木のおすゞが見たんだよ。昨夜丁度おかみさんが亡くなる時分のことだ。いつものとほり二階の雨戸をしめようと思つて、何氣なくこつちを見たんだとよ。さうすると面白いぢやねえか、青白い火の玉がすうつとこの母屋の屋根から浮き上つて、ふら〳〵二三度行きたくねえやうな樣子をするかと思ふと、其儘ふは〳〵源二旦那のゐる隱居の方へ飛んで行つたんだとよ。

武　（飼料桶を洗つてゐたのを休めて話をきいてゐたが、小聲で少年力に向ひ）　力！　晩にあ又出るぞ……。

少年　嘘だい！　みんな嘘だい。

獸醫　それからどうしたんだな。

佐吉　さうして、二三度ぐる〳〵屋根の上でとび廻つたと思ふと、眞靑な尾を曳いて、こんどはすつと浮き上つて、どことも知らず飛んで行つたんだとよ。

五作　（水で足を洗ひ乍ら）　なあんだ。それつきりか。

獸醫　ふうん。よつぽどおかみさんは源二さんの家が憎かつたと見えるね。

佐吉　何しろ人魂になつてまでも、いがみ合ふなんて作り話にありさうぢやねえか。

武　（猶も少年をからかひ顔に）　おめえもおかみさんのいふことをきかなかつたから、今夜はきつと來るぜ。

少年　嘘だい。みんな嘘だい。佐吉哥兄の話も嘘だい。宇津木のおすゞ下女は佐吉哥兄の色女だから何をいふかわからねえや。

佐吉　こん畜生、いつおすゞが噓を吐いた。
少年　つかなくつてよ。あいつ位の噓つきやねえ。いつかもおれがちやんと牛乳を持つて行つて置いたのを、自分で沸かさうと思つて、鍋へ入れといた中に、うつかり狆になめられて了ひやがつて、奥さんに「近頃。あのちびが持つて來る牛乳は、入れ方がどうも少しになつたやうでございます」なんて平氣な顏で云つてやがる。その癖佐吉哥兄に傳言を頼む時だけ俺をいゝ子にしやがつて、此盆にあシヤツを買つてくれるつて、十遍もいつた癖にまだ呉れねえんだ。
佐吉　べら／＼喋ると叩き殺すぞ。
少年　やい噓つき。おめえ方はみんな噓つきなんだ。昨日おれになんと云つた。今日からみんなで仕事はしなくてもいゝことになつたんだから、おめえも一緒に給金の下るまで遊んでろつて云つた癖に、今日だつて朝つぱらから稼いでるぢやねえか。
武　力！　何を云やがるんだ。氣をつけろ！
五作　此野郎。おかみさんが死んだから、働かなくちやならねえんだ。おめえだつてその位のことわかるだらう。
少年　だから、いつもおいら本氣にしねえや。
佐吉　ちびの癖に一人前の事をいつて仕方のねえ野郎だ。云つてきかせるからよくきけ！　今日かせぐのはな、これあ旦那への香奠だ。線香代に働くんだ。
少年　ふうん。あんなことを云つてらあ。
佐吉　ほんとに仕方のねえ野郎だな。いゝから晩に見ろ。レコ（手を揃へて幽靈のまねをする）が出たつてかまはねえから。
少年　又幽靈だ！　噓だい、噓だい。
佐吉　噓でもいゝから泣かねえやうにしろ。昨夜もな、源二旦那のおひささんが寢ようとすると戸口を音もなくすつとあけて入つて來たとよ。（身ぶりをする）から髮を亂して、青い顏をして、大きな腹して……。
獸醫　はゝゝ……、幽靈になつてもはらんでゐたかい。
（皆哄笑す）
佐吉　さうしてかういつたんだ、「うらめしや、よくもおれの旦那を寢とつたな。」
獸醫　その話もほんたうかい。
佐吉　ほんたうだとも。
獸醫　ふうん。ぢやおひささんと大旦那との仲はほんたうだつたのかい。
武　なあにおひささんから體のいゝレコ（肘をつき出す）を喰つたんだよ。それでもまだ、母屋のおかみさんは執念深く疑つてたんだね。何でも死ぬまでおひささんを傍へよせつけないで、私が死んだらきつと旦那がおひ

ささんを引入れるだらうつて云ひつゞけて死んだんだとさ。

獸醫　へゝえ。女つてものは隨分執念深いもんだなあ。

武　全くだよ獸醫さん！　全く頭の毛の長い獸にかゝつちやかなはねえや。女と女同志ばかりぢやまだ〳〵いゝんだが、男にとりついた日にや、もつと始末に終へねえ。まあこれを御覽なせえ。これがその佳い證據でさあ。（傍にある腰掛の上にあつた正治のソフト帽を出す。）

獸醫　何だ。誰のだ。

武　正治の帽子だよ。御覽なせえ。あいつあおぎんちやんですつかり參つちまつて、さつきものそ〳〵入つて來たかと思ふと、一言も云はねえで帽子を忘れたまゝ、出かけていつちまつた。只の一言もいはねえで……。

五作　さつき、あいつは牧場の隅の梨の木の下で、首を垂れてゐたが、ひよつとすると首をくゝるかもしれねえぞ。

獸醫　へゝえ、そんなになつてゐるのかい。

五作　昨夜もたうとう眠らねえでゐたらしいが、考へて見ればあいつも可哀さうだよ。

佐吉　正治哥兒こそ死んだら化けて出るぜ。

武　（又少年に）ほうら、又おめえの處へ出る人が殖えた。

少年　なあに、正治哥兒なら一緒に將棋をやらうつていふと逃げて了ふから大丈夫だ。

武　うまく考へやがつたな。（皆々笑ふ）（間）

獸醫　時に淸藏はどうしたい。

少年　淸藏兄は、今日は母屋にゐて、おくやみにくる人に挨拶をしてゐたつけ。

五作　いゝやさつき源二旦那と裏の納屋の方へ行つたよ。

獸醫　裏の納屋へ？　ふうむ。（考へる）淸藏に就いて何か變つたことがなかつたか。

五作　何にもねえやうだつたな。

佐吉　だが、何かあつたかもしれねえぜ。今朝になつてから、昨日の約束をやめた樣子で見ると……。

獸醫　うむ。さうして誰かに怒られたやうなことでもなかつたか。

五作　そんなことはあるめえよ。

獸醫　ほんたうになかつたらうな。

佐吉　なんだつてさう氣にするんだ。おめえさんどうかしたのか。

五作　金でも貸したんだらう。

獸醫　は……何でもないんだ。

（しばらく皆沈默す。此時弟源二が淸藏と私語し乍ら右手の窓へ現れる。）

少年　あゝ淸藏哥兒だ。

（二人入り來る。）

源二　やあお早う。（皆々會釋す。小聲で清藏に）もう濟んだんぢやないか。

清藏　何、まだです。大丈夫です。さつきから氣をつけてたんですが、まだです、まだあいつがやつて來ません。

（獸醫に目をつけ、互に輕く笑む。）

源二　さうか。

獸醫　（立上り）やあ、源二さんお早うございます。此度は飛んだ事になりまして。ほんとにお悔みの申しやうがありません。

源二　御丁寧にどうも有難う。嫂さんのあゝなつたのも天の宿命でせうから、今更仕方がありません。

獸醫　さうあきらめるより外ないですな。

源二　（笑ひ乍ら皮肉に）時に田中さん。生麩滓は一俵どの位に上りましたかな。近頃は高くなつたさうですが。

獸醫　えゝ？（驚いてひそかに清藏の方を見る。清藏は傍を向いて知らぬふりをしてゐる）生麩滓ですつて。（少し狼狽して）私はどの位ですか少しも知りません。

源二　さうですか。が、あなたは獸醫さんなんだから、牛の食ふ生麩滓の値段位知つてゐたつていゝですな。

獸醫　御冗談でせう。はゝゝゝ。

源二　いや全くです。それでなくても獸醫さんでもしてる中には、あなたへ賣却方を賴む人だつてありませうからね。

獸醫　（益々狼狽して）まさかそんなことはないでせう。

源二　でも、牛か馬が死んだら殘つた飼料が要らなくなりますからね。

獸醫　（ほつと息づき、冗談で紛らさうとする）ですが、私の手にかければ牛だつて馬だつて滅多に殺しやしませんよ。はゝゝゝ。

源二　さうすると、うちの牛の五頭だけが例外になりますかな。いや失禮。はゝゝゝ。

獸醫　（しかたなしに頭を掻いて笑ふ）はゝゝゝ。

源二　（清藏に）ぢや、おれはあつちにゐるよ。（搾乳室の方へ去る）

清藏　はあ、（皆々に）ぢやあ皆んな來い。これから水を汲んだり、いろ／＼葬式の用意をしなくちやならねえんだ。

皆々　ぢや行かう。

少年　おいらもかい。

清藏　おめえは隣り村の知り合ひへ知らせに行くんだ。

少年　つまらねえな。

五作　葬式の仕事でつまるのがあるもんか。

少年　佛樣だけつまらあ！

佐吉　逢ひねえ。（皆々哄笑し乍ら出てゆく）
獸醫　（一番あとになつた清藏に向ひ）　おい。發(は)れたな！
清藏　（手を振り乍ら）　なあにいゝんだよ。大丈夫なんだ。
獸醫　どうして？
清藏　あとで話さう。あつちへ行つてから。（兩人續いて去る）

（非戲曲的なる長き間。觀客の倦怠を招かざる程度に於いて長きほどよし。）

（牛の鳴く聲。どこかで時計が八時をうつ。）

（やがて正治が右手の入口からのろ／＼入つてくる。首はすつかりうなだれて、眼ばかり異常に光つてゐる。入つて來て誰もゐない室を見廻し、やうやく自分の帽子を腰掛の上に見出して靜かにそれをとつて見る。さうして爐傍に腰をかけてぢつと考へ込む。やがて又長い吐息と共に立ちあがつてのそ／＼出て行く。）

（搾乳室の戸が靜かに開いて源二が首だけ出す。さうして名狀し難い表情で正治の後姿を見送つてゐたが、又靜かに戸をとぢる。又長き間。前の間に劣らざるほど長く、觀客の倦怠を招くも妨げなし。）

（陰鬱な人聲が聞えてくる。さうして馬車會社の馭者と源吉が無言で入つてくる。）

源吉　（小聲で）　今日は遲かつたな。
馭者　へえ、もう一人の野郎が、急に病氣になつたもんですから、二人分の仕事をしなくちやならなかつたんです。遲れるかと思つて隨分心配しました。どうやら間に合ひませうから、すぐ買つて參りたいんで……。
源吉　實はおれも心配してゐたんだよ。
馭者　今日は何か旦那の家にとりこみがあるやうですが。
源吉　うむ。たうとうおれの犢が産で死んだよ。
馭者　へえ。さうでござえますか。それは又とんだことで。……どうもかう災難つゞきでは、氣丈な旦那もさぞお力落しでせう。
源吉　なあにさうでもないさ。もう今年は厄年なんだとあきらめて、乳が賣れるやうになつたら、うんと働いてうんと儲けるさ。俺がしつかりさへすれあ、又昔通りになるにあ譯はねえんだ。もう災難も俺の犢まで祟つたらおしめえだらうよ。（寂しく笑ふ）
馭者　ほんとに大抵ぢやございませんな。
源吉　（正面の秣納屋の戸を鍵であけ乍ら）　時に町の愛乳舍では、俺の方の災難をあてこんで大分業務を擴張したといふ話だな。
馭者　へえ、何でも牛も六頭ほど買入れたやうで、昨日はわざ／＼町中を牽き廻した位です。
源吉　さうか。なあに今にすつかり又華客をとりかへして

やるから見てゐろ。
馭者　全く早くさうしたいもんです。
源吉　（戸をあけ中へ入つて菰づつみの乳の大罐を二つ持ち出す）ぢやあ、すぐ裏まで俺も一つ運ぶから、あいつもの車につけて持つて行つてくれ。
馭者　へえ。（馭者は乳罐の一つを背負はんとす）
（此時急に量乳室の戸を蹴開いて源二が出てくるので二人は大に驚く。）
源二　おい熊四郎！　鳥渡待つてくれ。
源吉　（源二に）何だつてあわてゝ出てくるんだ。さあ熊四郎、いゝから持つてゆけよ。
源二　（熊四郎を捕へる）いゝから貴様にあ用がない、さつさと行け！
馭者　併し、私は此荷物を持つてゆかなくてはなりません。
源吉　さうだ。（源二に）何だつて邪魔するんだ。
源二　それはあとで言ひます。（熊四郎に）さつさと行かねえか。ぐづ／＼すると警察へ引渡すぞ。
馭者　私は何も警察へ渡される覺えはありません。
源二　まだ口答へするんだな。行かないとつまみ出すぞ。
源吉　熊四郎！　いゝからかまはず持つてゆけ！
源二　（又罐を荷はんとする熊四郎を捕へて力任せにつきはなす）何するんだ。行けつたら行け！

源吉　（猛然と源二の方へ進む）おまへ何しに來た。
源二　何しに？　何しに來たとは何です。兄さんこそこゝで何してゐたんです。
源吉　何をしようと勝手ぢやないか。
（熊四郎は此間に這々の體でのがれ去る。）
源吉　おい待て！　おい！
源二　兄さん。何をとめるんです。
源吉　やかましい。（跡を追はんとする）
源二　（戸の處へ立塞がる）いけません。
源吉　何がいけないんだ。どけ！
源二　いゝえ、どきません。
源吉　（いきなり飛びかゝつて弟の喉を押へつける）何！
源二　（其の手をとらへ爭ひ乍ら）兄さん。何をするんです。（二人は激しく爭ふ）
（二人は爭ひ乍ら舞臺の中央へ來る。さうして兄は遂に弟の爲に押へつけられ、激しく突き離されたハズミに爐に近い土間に尻をうちつけて倒れる。弟もやつと身をポンプに支へる。）
源二　（激しく）兄さん！　何をするんです。そこの椅子へ腰をかけなさい。
源吉　（息を切らし乍らやうやく憤怒をしづめて）源二！おまへは俺をどうするつもりなんだ。

源二　まあ穩かに話しませう。さあ、そこへおかけなさい。私もかけますから。（爐の處へくる）

源吉（だまつて腰を下ろす）

源二　兄さん！　あなたは私にかくして何をなさるんです。此の孤包みは一體何です。

源吉　乳だ。

源二　どうするおつもりなんです。

源吉　どうもしない。三原へ送るんだ。

源二　あなたは、何といふ情けないお心なんでせう。乳は法律上の規定で、一箇月間發賣を禁止されてゐるぢやありませんか。それをいくら金に迫られたかつて、密賣をやらなくつたつていゝぢやありませんか。

源吉　しないでゐられなかつたのだ。又した處で實際害にならないものならいゝぢやないか。賣るのが禁められたのは毒があるからとめられたんだらう。だから毒があればこそ賣つちやいけないが、病毒がないことは醫者も警察も是認してゐる以上は、賣つて差支ないぢやないか。

源二　ですが、法律上の規定した所はどうしても守らなければなりません。

源吉　だから、公然と賣りはしない。買ふ人も飲む人もわからない、普通の牛乳と同じく滋養になつてるならいゝぢやないか。

源二　それは理窟をつけて行けばどうにでもなります。それあ一斗にしろ二斗にしろ空になる牛乳を賣つて、少しでも金になるんだから、富國の道からいつても、寧ろ、かなつた事なのでせうけれど、兄さん！　あなたは金以上に貴いものがあるのを忘れてゐるんですか。人間として持たなくつちやならぬ道徳感情や良心を、お忘れなのですか。

源吉　せつぱつまつた場合には仕方がないぢやないか。法律や良心は死んだ五匹の牛の代價を出してくれやしないからな。

源二　然し、あなたがいくらこゝで小さな密賣なんぞしてもがいても、いくらとれるのでせう。さうしてどれだけの效能があるでせう。いくら商賣根性に墮落しても、お互に武士の流れを汲んだ士族ぢやありませんか。あなたは百二百の目腐れ金に目がくらんで、名を忘れたんだ。商賣に必要な信用を忘れたんだ。あなたはこんな淺墓な密賣が、すぐ世間に知れ渡るのに氣がつかないで、目の前の僅かな金を欲しがるやうでは、迚もう此牛乳屋としては成功する道がありません。

源吉　どつち道沒落するなら、出來るだけのことはして見たいからな。

源二　さ、そこです。たとへ沒落はしても、岩木耕牧舍は

苦しまぎれの密賣をしたと後指さゝれるよりいくらいゝかわかりません。悪事千里でこんなことはよくばれて了ひます。

源吉　知つてゐるのは熊四郎と三原の主人だけだ。

源二　さううまく世の中がいけばいゝのですが、現在こゝでわたしが見てゐるぢやありませんか。

源吉　おまへは他人とは違ふ。まさか兄の罪惡を數へ立てるやうな事はしまい。

源二　いゝえ、私は兄さんの御心次第で、一個の國民として兄弟の私情にからまるやうなことは斷じてしません。それに此のことを知つてるのは、親身の私ばかりと思ふと間違ひますよ。私も實は他の奴から聞いたんです。

原吉　正治の奴だな。

源二　いゝえ、清藏です。あれはとうに感づいて、今にも警察へ行かうものなら、あなたは立派な罪人です。

源吉　おまへはそんなに俺を罪人にしたいんだな。

源二　いゝえ、兄さん、落着いて聞いて下さい。所が幸に、私が又あいつの弱點を握つてるんです。だからあなたがいさぎよくこゝで、こんなことをやめると私に誓つて下さればそれでいゝんです。

源吉　今になつて止める。――そんなことがあるものか。清藏が云はなければそれでいゝぢやないか。よし云つたにしろ十分手を廻しておけば……。

源二　兄さん。あなたは何といふ御心になつたんでせう。實に見下げ果てたことをなされるんですね。何です、一體相樂巡査へ送つた金包は。あれで露見したときの揉み消しにしようと思つたんですか。あなたがいくらあんなことをなすつても、さうなれば私が承知しませんよ。國家の定めた法律を破つて不正な金を貪り合ふなんて、人道の爲めに私が承知しません。

源吉　おまへはあれも知つたのか。

源二　いゝえ。そればかりではありません。

源吉　然し、あんなことは何でもないことぢやないか。現におまへのやつた村會議員でさへ、平氣でやつてゐることぢやないか。たゞ違ふのはあいつらは吝嗇でちび／＼やるだけだ。

源二　それは私も腐敗した社會の常態として知つて居ります。けれども、他人がやつてゐるから俺もやるといふのはいけません。もし他人がやつたら盜人もしますか、人殺もしますか。腐敗した社會の眞似をしてどうするんです。

源吉　腐敗した社會にゐる以上は、その腐敗を適宜に用ゐるのが最上の方法ぢやないか。收賄はいくら事を圓滑に行はしてゐるかわかりやしない。

源二　それは手數料などのやうな場合は幾分恕せないこともありません。ですけれど惡事を湮滅させる爲にあんなことをするなんて、あなたの根性は底から腐つてゐます。

源吉　何とでもいへ。俺は自分の家の事しか考へられなかつたんだ。

源二　えゝ云ひますとも、今日はもうすつかり云ひます。さうしてあなたに反省して頂かなければ、私は弟として又國民としてすまないんです。兄さん。あなたがあの裏の納屋でこしらへてゐるのはあれは何ですか。正當な牛乳からこしらへた牛酪ですか。

源吉　正治があれを云つたのだな！　畜生覺えてゐろ！

源二　正治を恨むより御自分をお恨みなさい。私は今朝行つて、みんなあの不正な牛酪は棄てさせましたから、あなたの犯した罪は、一週間賣つた牛乳だけです。こゝであなたは、もういさぎよく悔悟して下さらないと大變です。どうか兄さん、もう前非を悔いて善心に立ちかへつて下さい。弟が頼みます。手を合せて頼みます。

源吉　（無言でゐる）

源二　さあどうです。兄さん。今日からやめると誓つて下さい。さうして九日すぎたら、大手を振つて賣り出せるんです。さうしたら大にやりませう。ね。きつぱり法網をくゞるやうなことはしないで下さい。

源吉　おい。（陰鬱に）奪られた華客をとりかへすにはどの位要ると思ふ。それからさしあたつておかねの葬式の金はどこから出す。

源二　（意外な申出におどろき乍ら）少しもないんですか。

源吉　あるなら俺だつてこんなにまで、おまへに侮辱はされやしないんだ。牛の療治や牛舍の消毒で、あつた田地はすつかり失くなしてしまつたし、此上どこに出處がある。

源二　だつて不正な手段で儲けた金でどうしませう。

源吉　ぢや、どこから出るんだ。

源二　ぢやあなたはどこまでも不正な金をとらうといふんですか。

源吉　（答へず）

源二　兄さん。（立上つて手をとる）これほど云つてもわかりませんか。

源吉　やかましい。（自暴自棄になる）もう澤山だ！　俺は俺の好きにしか出來ねえ性分なんだ！　おめえは俺を罪におとしさへすれあ、それでいゝんぢやねえか。もう云ふことがなかつたら、さつさと歸つて仕事をしろ！

源二　いゝえ、まだいふ事があります。私にだつて兄さんがそんな心算なら、いくらでもいふ事があります。（共

に激して）一體平常のあなたの行爲は何です。あながち牛乳の密賣やバタの密造ばかりぢやありません。一體あなたが私の妻に對して取つてゐるあの態度はあれあ何です。一體おひさをどうなさらうと云ふんです。立派な申譯があるなら承りませう。

源吉　それで貴樣は、どこまでも俺を苦しめようと云ふのだな。

源二　いゝえ、きつぱりした御返事が欲しいのです。さあ、お答があるなら云つて御覽なさい。假りにも弟の妻を捕へて、不倫な事を强ひようとなさるなんて、言語道斷です。

源吉　貴樣はどこまで俺を苦しめようといふんだ。一體俺をどうしようといふんだ。

源二　私も、もう此處まで云つて了つた以上は、一歩も引きません。さ、きつぱりした御返事をして下さい。答へられるなら云つて御覽なさい。

源吉　どこまでも、……俺を……（何も云へなくなつて、よろ〳〵納屋の中へ入つてゆく）

源二　（追窮して入る）はつきりお答へなさい。一體どこへ行くんです。兄さん。（全く入る）

源吉の聲　（納屋の中にて）何しに來やがるんだ！

源二の聲　兄さんこそ何うして逃げるんです。

源吉の聲　いゝから行け。

源二の聲　いゝえ。行きません。責任のある御答へを得ない中は決して行きません。

源吉の聲　出て行け！

源二の聲　ぢや、返事をなさい。

源吉の聲　（大聲に）どうしても行かないな。

源二の聲　だから返事を……。

源吉の聲　貴樣が行かなくたつて、己が行かさずに置くものか。（物をはねのけて飛びかゝつたやうな音がきこえる）

源二の聲　何をなさるんです。（二人の激しく爭ふ音がする）何を亂暴をなさるんです。（物を擲つ音がする）

源吉の聲　畜生どこまでも、……俺を馬鹿にしやがるんだ、……畜生。行きやがれ！（爭ふ音）（しばらく爭つてゐる間に誰かゞ投げつけられた音がする。）

源吉の聲　畜生！　俺を投げやがつたな。

源二の聲　あなたから初め飛びかゝつたんだ。一體あなたが惡るいんだ。

源吉の聲　何だと！　俺がどうするか見やがれ。（何物かにて飛びかゝりたる樣子）

源二の聲　あーッ！　兄さん！　何をするんです。そんな

もので私をどうするんです……。あーッ、いけません。
(源二慌しく舞臺へ逃げてくる。手には負傷して鮮血が流れてゐる。)

源吉 (源二を追うて納屋から現はれ、闇の處で源二を目がけて手にせる鎌を投げつける。鎌は幸に源二を傷つけずに牛乳罐にあたつてけたゝましい音を立てる) 失せやがれ! 畜生! さつさと行きやがれ!

源二 (恐怖と激昂とで蒼白となつてゐる) 兄さんは亂暴だ。ぢや私は行きます。そんな亂暴をなさるんなら私は……もう、……(戸口から出て行き乍ら) そんな亂暴されるる譯はないんだ。(戸口にて) ぢや兄さん。よく考へて返事をして下さい。落着いて私の云つた事をよく考へて下さい。

源吉 わかつた! くどいッ!

源二 まあさう激昂しないで、……考へなほして下さい。
(去る)
(源吉陰慘たる眼を光らして源二の後姿を見おくる。さうして戸口へ行つて其行くへを見屆けると、激越した足どりで戸口から退いて傍の腰掛の上に身を下ろす。)

源吉 畜生。誰が貴樣の世話になるもんか。俺がやる分にや俺一人で處分すれやいゝんだ。馬鹿め!
(さうして不意に立上つたが、よろ〳〵した足どりで納屋の中へ入つてゆく。中から戸を閉める。舞臺は一瞬間靜寂を以て滿たされる。)
(やがて微かに異樣な叫聲が洩れると同時に藁の燃える音がして煙が濛々と納屋の戸口から洩れ出る。煙がやうやく濃く火の音が稍々激しくなる頃、そつと左手の量乳室から源二が此光景をのぞき込んで大に驚き、急いで柵を跳ね越えて納屋の戸口へゆき、戸を開けようとするけれど開かない。源吉は中から心張りをかつたのである。)

源吉 (激しく戸を叩き乍ら) 兄さん! 兄さん! どうしたんです。兄さん! あなたはとんでもないことを……兄さん! 開けて下さい。開けて下さい!
(舞臺を罩むる煙は益々濃くなつてくる。遠く牛の啼聲が藁の燃える音に交錯する。此時狂氣の如く連呼せる弟の姿を蔽ふべく靜かに……………)

——幕——

阿武隈心中 （農民劇三幕）

人　物

阿久津留藏　農　夫（五　十　歳）
同　留　吉　その長男（二十六歳）
同　留　二　その次男（二十三歳）
お　　豐　その姪（十　九　歳）
今泉猪八　その兄弟　博勞（三十五歳）
高橋七藏　留吉の友　村役場書記（二十五六歳）
伊東作太郎　隣村の人　農夫（四十歳位）
三瓶久作　阿久津家の作男（六十歳前後）
僧侶。隣人。村の娘。郵便夫。葬儀屋の人夫。村人等。

時　代

現代。事件の起れるは或る年の秋の末

場　所

東北地方の或る農村

第一幕

阿久津留藏の家。舊く暗い百姓家の內部である。左半は土間で、そこの壁側には色々な農具類、筵、臼などが置かれてある。その正面に出入口があつて、そこからは庭の葉鷄頭や鳳仙花などの、秋の日を浴びてゐるのが見える。右半は一段高い筵を敷いた板敷で、その上り端には、大きな爐が切つてある。而してそのあたりに厨具が散在してゐる。庭に面した正面は暗い障子で立て切つてある。右手は鏡戶で劃られてゐて、奧の座敷へ通ずる。

凡ては、煤けた乍らに、田舍の舊家である。

幕あくと、此家の息子たちには從妹にあたるお豐が、正面の出入口から明りを取り乍ら、觀客に背中を向け、繭を煮て、糸を繰つてゐる。

繭釜からはゆるい煙がのぼつてゐる。懶い紡車と共に、程近い阿武隈の瀨鳴りが聞える。そこへ更に一里ほど離れた町の、紡績の汽笛が鳴る。丁度十二時である。

彼女はそれを聞くと、立つて爐に火を焚きつけ、その雁木に鍋を掛ける。而して戾つて來て、又繭の糸を取らうとする。

そこへ役場の書記の高橋が、古びた紋付に髪を分けて所謂田舎の青年會員顔で入つて來る。

高橋　やあお豐ちやん。おめえ一人かい。

お豐　あい。皆んな畑さ行つてるわい。何か用があんのかい。

高橋　いんにや。用なんて何にもねえけんぢよ、あの、留吉つあんが歸つたちふから、會ふべと思つて來たんだわい。歸つたつてほんたうかい。

お豐　ほんたうだわい。昨日の晩げ歸つて來たの。

高橋　さうかい。そんぢや矢つ張り歸つて來たんだなあ。俺あもうあの人は東京さ行つた切りで、死ぬ迄歸つて來めえと思つて、心配してたんだ。ほんとに佳つく歸つて來たなあ！　お豐ちやん、おめえも嬉しかんべな。（少しからかふやうに覗き込む）　死ぬほど待つてゐたんだもの。な。

お豐　（赤くなつて）　やんだおら。知んねえぞい、そんな事！

高橋　満更さうでもあんめえ。留吉つあんが出て行つたのもおめえの爲め、歸つて來たのもおめえの爲だべからな。

お豐　なんでそんな事あつぺ。留吉兄にやは早あおらの事なんど、忘れてゐつぺもの。東京にやなんぼ愛んげえ人がゐつか、解んねえもの。

高橋　なあにそんな事あつぺ。今度歸つて來たんだつて、おめえを思ひ出したから、歸つたんだべからな。

お豐　何んでそんな事あつぺ。おらなんて見向きもしねえんだもの。

高橋　そんぢや、何だつて歸つて來たんだべな。おらあ留吉つあんも身が定まつたもんで、嫁探しに來たんだと思つた。

お豐　東京で何してたんだか、何しに戻つたんだか、ちつとも云はねえんだもの。昨日から只默つて、下ばつかし向いてるんだぞい。

高橋　ふうむ。父にも何も云はねえのか。

お豐　あい。それに叔父さんはあゝ云ふ默りんぼだもんで、きゝもしねえし、糺しもしねえで、二人ともしんねりむつつりと坐つてるばかりなんだわい。

高橋　そんぢや親父は怒つてゐるんかい。

お豐　さうでもねえやうだげんぢよ。別に悦んでもゐねえやうだない。

高橋　一體歸つて來た時あ、どんな風だつたい。

お豐　おら丁度町さ行つてゝ、わかんなかつたけんぢよ、久作爺やに聞くと、晩方人の顏が見えなくなる頃、ひよつくら若え人が入つて來て、「父、今歸つた。どうか今迄の事は何にも云はねえで、堪忍して呉んちえゝ。」つて

云つたんだとい。

高橋　そしたら父は何て云つたい。

お豐　暗くなりしなだつたもんで、叔父さんも誰んぢやか、ちよつくらわかんなかつたつけが、留吉つあんだとわかると、只「留吉か。まあ入れ。」つて云つたきりだつたとい。

高橋　ふうむ。それからどうした。

お豐　默つてそこに出してあつた飯を食つたんだとい。

高橋　さうして？

お豐　それつきりだわい。

高橋　留二さんにも何とも云はねえのかい。

お豐　さうだわい。

高橋　おめえさんにも何とも云はねえのかい。

お豐　（少しは嬌態を見せて）あい。

高橋　おめえが此處にゐたんで吃驚しつぺなあ。

お豐　はじめおらが誰んぢやか解んなかつたやうだつたわい。

高橋　さうだんべとも。おめえも三年前とは變つてつし、此の家さ來てつぺとは、夢にも思ふめえからな。

お豐　おらだつて父とおつ母あとが、去年の夏赤痢で死なねえければ、こゝへ一生來なかつたべにない！

高橋　ほんたうだ、ほんとに世の中て解んねえもんだない！　あん時あ、留吉つあんがおめえを嫁に欲しいつて云つたら、親父がたつた一言で刎ねつけつちまつて、「一人前の働きも出來ねえ中に、嫁どころであつか」つて怒つたつけが、あれが原因で留吉つあんは家出をしつし、三年經つ中にあ、おめえの兩親が死んでおめえは此處さ引取られつし、ほんとに緣ちふもんは奇體なもんだなあ！　どうせおめえをかうやつて引取つて置くんだら、あん時留吉つあんの嫁に貰つたらよかつたべに。

お豐　さうも行かねえんだわい。

高橋　それに何だちふでねえか、父はおめえを今では留二さんの嫁にしつぺと思つてるちふでねえか。

お豐　（伏目になつて）留二さんが此間そんなこと云つてたけんぢよ……。

高橋　今になつて留二さんの嫁にする氣があんなら、あん時なあ！

お豐　おら何んだか留二さんなんか——。

高橋　厭だと云ふんかい。

お豐　いんや。さうでもねえけんぢよ……。

高橋　留吉つあんが歸つて來たからにあ、そつちの方がいいつて云ふんかい。

お豐　……（點頭く）

高橋　でもおめえは留吉つあんがゐねえ間は、留二さんの

嫁になるつもりだつたんだべ。

お豐　そんぢやつて、仕方がねえもの。

高橋　何が仕方がねえもんだ。さういふ事を云ふ女ろつ子の方が、よつぽど仕方がねえ。（間）　どうだい。留吉つあんは立派になつて歸つて來たかい。

お豐　米澤紬とか何とか云ふんだべて。ぴか／＼する着物を着て來たわい。もとよつかずつと顏が白くなつて。——

高橋　東下りだもん、色男にもなつぺえよ。そんぢや又村の女ろつ子が騷ぐこんだべ。おめいに若え衆が騷ぐやうにな。

お豐　（怒つたやうに）　あらら又、知んねえぞい！

高橋　知んねえこともあんめい。この罪作りが。（近よつて）　この顏で！　（頰べたをつゝかうとする）

お豐　やんだつてば。

高橋　あ、誰か歸つて來たやうだ。留吉つあんかな。（出入口から外を見る）　留吉つあんぢやねえ。皆が畑から歸つたんだ。

お豐　さうかい。（紡車の處を去つて、爐にかけたる鍋を見る）

（父留藏、弟留二、雇人の老農夫久作共に入り來る。）

高橋　今日は。いゝ天氣だない。

留藏　（挨拶をするのをちつと見やり乍ら）　何か用かい。

留二　（傍から）　何か役場の用でゞもあんですかい。

高橋　いゝや、留吉つあんに會ひに來たんだわい。歸つたちふ話を聞いたから。

留二　（或る皮肉を以て）　そして其暇にお豐ちやんでもからかはうつて云ふんですばい。

久作　事によつと、そつちの方が本業かも知んねえな。

高橋　馬鹿な事云つちやあいけねえよ。なんでそんな眞似しつペ。お豐ちやんに聞いて見れあ解るわい、なあお豐ちやん。

お豐　（まるで知らないふりをしてゐる）

留二　ほら、見つせえ。

久作　かう云ふ處さ來つと、女子の方が割りに正直だて。

高橋　へん、とんでもねえ寃罪ちふもんだ。

久作　そんぢやから扇屋の爺さまは云つたで。人間は一度惡りい事をしつと、しもしねえ二度目のも背負ひ込まなくてはなんねえつてな。

高橋　おらおめえ達に兎や角う云はれるやうな事は、一ぺんもしたことあねえよ。

留二　しなけれあ猶のこつた。どうかこれからはお頼えだから、お豐ちやん一人ん處へ、愚圖々々してゐねえで貰ひやせう。

高橋　（一種の反抗を以て）　そんなにお豐ちやんが心配な

のかい。大丈夫だよ。お豐ちやんは、昔から留吉つあんのものと定まつてるんだもの。側からどんな手出しをしたつて、ちよつくらでも靡くもんぢやねえわい。

お豐　（怒つて）何云ふんだべ、此人は。もう澤山だぞい。そんな事！

高橋　だつておめえ先刻云つたでねえか。留吉つあんの外は誰れでも厭だつて。留二さんなんて、死んでも厭だつて。

留二　（蒼くなつてお豐の方を見る）

お豐　（泣きさうになつて）嘘！　嘘！　なんぼ何だつて、あんまりな事云ふもんでねえわい。

久作　（頭をふり乍ら）かうなつちや老人は傍さ退いてべえ。

留藏　（今迄むつつり樣子を見てゐたが急に高橋を捉へて入口の方へ突きやる）高橋さん。又來て貰ふべ。

高橋　（出て行き乍ら入口の處で惡丁寧に）いや、お邪魔しやした。（留二に向つて、もう一度）お豐ちやんは御心配には及びやせんよ。（去る）

留二　（默つて高橋の去つた後を睨んでゐたが、つかつかとお豐の方へ進みよつて）お豐ちやん。先刻高橋の云つた事あ、あれあ嘘だべな。

お豐　（泣いてゐる。點頭く）

留二　きつつと嘘か。え、え、え。

留藏　留二、よせ！　何馬鹿を訊くんだ！

留二　はい。（離れる）

留藏　お豐。早く晝飯だ。

お豐　はい。（爐の方へ來て、鍋を下し、膳などを揃へる）

留二　ほんに仕方がねえ野郎だ。あの野郎がゐるために、何ぼ村の若え衆が惡くなつたか、解つたもんでねえ。兄にやだつて、あいつが附つ突いたもんだから家を飛び出したんだ。鍬も手に持てねえ癖しやがつて。

久作　あいつばつかしぢやねえ。今の若え衆と云ふ若え衆は、大概あゝだ。おらあ見てえに、土の上さ生れて、土と縁がきれねえやうに育てられたもなあ一人もゐねえ。ほんとの百姓つてもんは、おら等が代でお終ひだんべ。

留二　おれが立派な百姓になつて見せる。そして兄にやが棄てた此家で、立派に父の後を嗣いで見せるわい。

留藏　（爐の向うに坐つて、默々と聞いてゐる）

久作　おめえさん一人位ぢや、時世には勝てねえ。留吉つあんだつて、もともと此家が厭なんぢやねえんだ。みんな時世の故なんだわい。何と云つても時世がかうなつて行くんだもの。土に噛ぢりついて水薯ばつかし食つてゐるよりか、町へ出れあ煙草專賣所で一日八十錢取れる時世だもの。ちよつくら東京さ行つて來れば、お蠶ぐるみ

の着物で歸つて來られる時世だもの。かうなつて來れあ、俺なんざあ默つて引込んでゐるより外あねえんだ。默つてどうなつてゆくか、見てゐるより外はねえんだ。時世をとめるの何のたつて仕方がねえ。

留藏　そんなら愚痴を云ふな。

（皆默る。）

お豐　さあお膳ができたぞい。

（皆默つて爐端に置いた黑い古風な腰高膳につく。）

留藏　（お豐に）留吉はまだか。

お豐　今朝出たきりですわい。

留藏　そんぢや初めろ。

（皆々食ひ初める。）

留二　それはさうと兄にやは、歸つて來てどうするつもりなんだべ。（答なし）なあ、父（ちやん）。

留藏　解らねえ。おめえ聞きたけれあ聞いて見ろ。

留二　はい。

久作　此頃の時世にあ、解んねえ事ばつかしだ。

留二　お豐ちやん。おめえにも何とも云はねえかつたかい

お豐　あい。なんにも。——

（沈默。皆々飯を食ふ音だけが聞える。しばらくして留吉入り來る。頭を角刈りにした蒼白い青年、服裝によつて商家の番頭であるのが知れる。）

留吉　只今戻りました。遲くなつて濟みません。

留藏　うむ。早く飯を食へ。

留吉　はい。

久作　若旦那、お先きに頂いてやした。

留二　野良へ出てつと腹が減つてなんねから、待つてねえで初めてゐたわい。

留吉　いや。遲くなつて濟まなかつた。

（留吉は、お豐がいそ〱と取揃へて呉れた膳へ坐る。）

久作　若旦那、今朝はどつちさおいででした。

留吉　墓參りをして來た。お母さんの墓だの、あの、（ちらりとお豐を見やり乍ら）お豐ちやんの兩親の墓だの。

お豐　あら、どうも……。（お辭儀する）

久作　若旦那はまだ先のお母あさまのゐた時分の事を覺えておゐでゞすかい。

留吉　あゝ覺えてゐるよ。

久作　あの時分はまだ阿武隈川にも鐵橋はかゝんなかつた。まだ村にあ青年會なんちふものもなかつたけんぢよ、みんなは仲よく暮らし合つたもんだ。考へて見れあ、をかしなこつたが、俺（おら）にあ何だか、あの時分の方がお天氣が毎日好かつたやうな氣がする。

留二　俺の少（ちん）こい時分には、家ももつと賑（にや）かだつた。

久作　ほうだ。おらと同じやうな雇ひ人が、あと三人もゐたつけ。それが一人減り二人減りして、今あおらだけになつちまつた。時世がおらだけ取りのこして、ぐんぐん行つちまつたんだ。おらにあもう用は無えだ。けんぢよも用が無えからつて死にも出來ねえ。死ねんだら、死んだ方がなんぼいゝか解んねえけんぢよも、おら達にあ、死ぬ力せえ無くなつちまつたんだ。

留吉　（ふと思ひついたやうに）何かの本で讀んだことがある。東北と云ふものが、丁度さうなんだ。立ち遅れて進みも出來ないし、一と思ひに死にも出來ない。止むを得ず、愚圖々々と現狀維持をして行く、最も憫れむべき狀態にあるんだつて。

久作　六ケ敷い理窟は俺にあ解んねえ。一體(てえ)あんたは學問があり過ぎたんだ。けんぢよも、そんなことはどうでもいゝ。おらはおらでかうやつて愚圖々々してるより外はねえんだからな。

留吉　それが一番いけないと云ふんだ。かうして愚圖々々してゐるのが。いつそ一と思ひに、どつちかへ片付きやあまだいゝんだけれど。――

留二　（幾分かきつとなつて）ぢや兄(あん)にやは此家なんぞも、一と思ひに潰しつちまへばいゝと思つてんだない。

留吉　一概にさうとは云はない。けれども他に榮える方法があるんなら、今、なまじひに愚圖々々してるより潰した方がいゝだらうと云ふのさ。

留二　（險しく）兄にや。おめえ、此家を潰しに來たんぢやあんめえな。

留吉　此家を潰しに來た？　そんな事を思ふものか。俺だつて生れた家を忘れはしない。

留二　勝手な時だけ考へ出すだべ。弟の俺の口からこんなことあ云へるこつちやねえが、勝手に飛び出して、勝手に歸つて來て。おら今迄默つてゐたけんぢよ、おめえさんにや色々な云ひ分あるんだぞい。おらばつかりぢやねえ。何も云はねえが、父だつて、おめえにや云ひてえことも澤山(たんと)あつぺと思ふんだ。

留藏　留二、よけいなことを云ふな。

留吉　（沈み込んで）それあ俺の身勝手なことは俺だつて知つてる。お父つあんだつて、おめえだつて云ひ分はあらう。そして俺の悪い所は幾重にも詫まる。詫まるからどうか勘忍して吳れ。

留二　（少しくてれて）おら何も兄にやに詫まらせてえつて云ふぢやねえんだよ。

留吉　（改めて父に）それからお父さんも、どうか許して下さいまし。

留藏　そんなことはどうでもいゝがな、留吉。一體おま

へこれからどうする心算なんだ。

留二　さうだ。それを先づ聞かして下せえよ。

留吉　かうなつた以上は、どの道申し上げずにはゐられません。實は僕、改めて父さんにも、留二にもお願ひがあるんです。

久作　（食ひ了つて）　おら畑さ行つてべ。（一人でさつさと下りて出て行く）

留吉　お願ひと云ふのは他では御座いませんが、私お金を少々拜借が願ひたいと思つて、それで歸つて來たんです。一體なら成功でもしてからでなくちや顏向けも出來ないんでございませうが、據ん處ない用事で、是非三百圓ほど入用に迫られたものですから、此處へ來てお願ひするより外に道がなかつたんです。

留二　三百圓。

留藏　三百圓と云へば大金だ。

留吉　はい。それが是非商賣上必要なんでして、それさへあれば此際十分商賣の方も見込みがつくんですから。

留藏　商賣つて何だ。

留吉　あの……呉服屋をやつて居ります。

留藏　その資金にいると云ふのか。

留吉　はい。いゝ品物を見つけましたので、それさへ仕入れとけば、賣込みの方は確實なんですから。

留藏　それは解つた。が、おまへ此家させえ歸つて來れあ、三百圓なんて金がそこらにごろ〳〵轉がつてると思つてるのか。

留吉　いゝえ。決してそんなことは思ひやしません。

留藏　ではどうするんだ。

留吉　お願ひと云ふのは實はそこなんですが、一時此家邸を私に貸して下さると思つて、抵當にするのを許して下さい。どうかお願ひです。（父答へず）　留二。どうかおまへにも賴む。兄さんを助けると思つて許して呉れ。

留二　おら厭だ、そんぢや餘り勝手過ぎるでねえかい。おら等が折角かうやつて汗水垂らして働いてる土地を、いくらなんだつて抵當に入れるなんて、俺あ厭だ。誰がなんちゆたつて厭だ。父！　おめえさうやつて默つてんのは、兄にやの願ひを承知するつもりなのか。そんぢや餘りひどかんべぞ！　父だつておら等があんなに一生懸命稼いで來たのが、何のためだか忘れはしめえ。みんな此家をもと通りにしつぺと思ふ一心ばかりでねえか。よ、父！

留藏　（沈鬱に）　抵當にしたくも、する土地が無えよ。留吉。おめえはまだ子供の時の夢を見てゐんのか知んねえけんぢよ、もう此家について田畑と云ふのは、たつた百歩ばかりになつて了つたんだぞ。

留二　その百歩だつて食ひとめたのは誰れの力だ。

留吉　（必死になつて）ぢやあそれだけでようございますから。どうかお願ひです。お願ひです。

留藏　（それを耳にもかけず立上る）留二、久作が待つてる。畑さ行くべえ。

留吉　待つて下さい。お父さん。

お豐　（思はず留めるやうに）叔父さん！

留藏　（支度をし乍ら）何んだ。

お豐　……（てれる）

留二　（お豐にやさしく）おめえなんぞ心配することたあ無えよ。

（留吉下を向いてる。二人は出て行かうとする。出合頭に隣村の人、伊東作太郎入り來る。）

伊東　今日は。（二人立止る）丁度ゐてよかつた。鳥渡くら待つて呉んちえゝ。

留藏　（不機嫌に）何か用かな。

伊東　何か用かつて、留藏さん、おめえ解つてるでねえか。俺の顔を見てゐ乍ら、さう白ばくれなくつてもよかつぺえ。

留藏　だから何だ。

伊東　いつかの桑の代金よ。返えす返えすつて云つて、一體何時返して呉れるんだ。さあ今日はきつぱりした返事を聞くべえ。

留藏　錢なら今日はねえよ。

伊東　おめえの方でさう出るんなら、俺の方でも云はなくちやなんねえ。一體おめえは川向ひのお定婆あ家さ、ちやんと桑の代を拂つたちふでねえか。

留藏　あつたから拂つた。

伊東　そんぢやなんで俺の方を後廻しにしたんだ。

留藏　廻りきらなかつたんだ。あつたら拂ふよ。

伊東　そんなこと云はねえで、たつた十圓ばつかりでねえか。困つてんのはおめえばかりでねえ。俺だつて馬羅市さ行つて、一儲しなくてなんねえちふに、錢が足りねえくつて困つてんだ。返して呉んちええよ。

留藏　留吉。聞いたか。（留吉顏を伏せる）

伊東　（留吉の方をちらと尻目にかけて）それに東京から息子さんが歸つて來たちふでねえか。俺は今日はどうしてもとるつもりで來たんだから、愚圖々々しねえで渡して呉れちえゝよ。

留藏　無え！

伊東　そんぢや出來るまで此處で待つてらあ。俺あ今日は覺悟をきめて來たんだ。貰はねえ中あ、一歩も此處あ退かねえんだ。（腰をかける）

留二　伊東さん。今日はね、父が少し機嫌が惡りいんだし

ほんとに錢もねえんだから、さう云はずに歸つて呉んちえゝ。おらが頼む。長えことは云はねえ。もう五日待つて呉んちえゝ。

伊東　聞き飽きたよ。五日待つんだら、此處さ坐り込んで待つてら。これが水呑百姓ぢやあんめえし、立派な阿久津の大盡さまでねえか。十圓位の金はねえ筈はねえ。出されえんだ。

留藏　おめえ、いつまでもそこにゐる氣か。

伊東　さうとも。

留藏（沈鬱に）出て行け。

伊東　そんぢや錢をよこせ。

留藏　出て行かねえか。

伊東　受取るまでは出て行かねえよ。

留藏　出ろ。（答なし）出ねえな。よし、出ねえたつて貴樣を出さずに置くもんか。（近よつて襟首をつかまへる）出て行け。

伊東（振りもぎる）何をするんだ。

留藏　野郎出て行かねえと……（と云ひ乍ら壁側にあつた薪をとりあげる。而して沈鬱に近づかうとする。留二、お父ら急いでそれをとゞめる）離せ、離せつたら。（伊東を陰鬱な眼で睨む）

伊東　打つんだら、打つて見ろ。誰が威かされるもんか。

留藏　野郎、まだぬかすな。（猛然として留二を振りほどいて、飛びかゝらうとする。留吉も急いで中へ入る）

（此の騷ぎの中に叔父の猪八が入つて來る。博勞で、田舍の遊び人らしいなりをしてゐる。）

猪八　何だ。大變賑かだな。どうしたんだ。

留二　あ、叔父つあん。いゝ處さ來た。今伊東さんが貸金を促りに來たもんで、父が怒つて手がつけられねえんだ。

猪八　さうか。哥兒、何だつてさう怒るんだ。おめえにも似合はねえぢやねえか。

留藏　うむ。（又沈鬱に返つて、薪を留二のとる儘にまかす）

猪八　一體何だつてこんな事になつたんだ。留藏兄にやの怒るつてからにや、よつぽどの事があつたんべな。

留吉　いゝえ、叔父さん、かう云ふ譯なんです。

猪八　やあ吉か。矢張り歸つたちふのはほんたうだな。うむ、それで……。

留吉　前に私が面白くない事を父に云つて、機嫌が惡い時に、此人が來て金を返さなければいつ迄も坐り込んでると云ふもんだから、それで父が怒つたんですよ。

猪八　さうか。（伊東に）ぢやあ伊東さん。おめえ坐り込んだんだな。

伊東　そんぢやつて、俺も、猪八つあんの前だが、勘忍袋

の緒が切れたんだわい。
猪八　一體貸つて云ふのは幾何(なんぼ)だ。
伊東　十兩だわい。
猪八　十兩か。――ちつとおめえに呉れてやるにあ高えが
　よし、俺が出してやらあ。(皮財布から金をざら〱と
　出して) 今日は俺あ金持なんだぞ。これから馬驪市(うまぜり)さ
　行くんで、資本を少つと持つてるんだ。さあ、十兩だ。
　取つてつて貰ふべ。
伊東　いや。これあ難有うございます。これさへ貰へば文
　句なしだ。ではこれあ受取りです。
猪八　ぢやさつさと行つたらよかつぺ。
伊東 (金を收めて) いや、大きにお喧しうござりやし
　た。(去る)
お豐　今泉の叔父さん。どうも難有う。おらやつと安心し
　たわい。
猪八 (お豐をちつと見乍ら) おめえがさう云つて禮を云
　つて呉れれあ、俺あ本望だ。(一種の好色な眼で) おめ
　えいつ見ても愛(め)んげえなあ!
お豐　あら厭(や)んだ、叔父さん。
留二　ほんとに叔父(おつ)つあん、あんなに出していゝですかい。
猪八　なあに、驪市さ行けば、五兩や十兩どうにでもなら
　あ。

留二　さうですかい。
留吉　でもほんとに濟みませんでした。
留二 (默つて立つてゐる留藏に) 父(ちやん)も一言(こと)お禮を云つて
　呉んちえゝな。
留藏 (默つてゐる)
猪八　なあに、そんなことあ云ふにや及ばねえや、俺あ哥
　兄の氣性は呑み込んでるんだ。哥兄はこれで俺が餘計な
　ことをしたと思つてるんだ、でも、俺が金を出すのを止
　めなかつただけ、今日は穩かだよ。はゝゝ。
留藏 (突然に) 留二。畑さ行かう。
留二　はい。
猪八　ぢや行つて稼ぎなんしよ。俺あ鳥渡(ちよつ)くら留吉が歸つ
　た顏を見て、馬市さ行くんだから。明日は又寄らあ。
留二　そんぢや一と稼ぎして來べい。
　(留藏と留二は行く。お豐は膳などの後片附をする。)
猪八　どうだ吉、久しぶりだつたなあ。
留吉　御無沙汰して申譯ありません。
猪八　おめえも俺も、眞當な百姓が出來ねえんで、お互に
　困つたもんよ、なあ。そんでもおめえは、立派になつて
　よかつた。
留吉　立派どころですか。失敗して歸つたも同樣です。
猪八　そんなことはあんめえ。おめえが失敗(しくじ)る譯がねえよ

東京では何をしてたんだ。

留二　あの、株屋の番頭をしてゐました。

お豐　（ふと顔をあげて不審な顔をする）

猪八　さうか。あれあ面白いもんだつてな。俺も一生に一度はさう云ふ事がして見てえ。田舍で馬を牽いて歩いたつて、根つから初まんねえからな。

留吉　（話頭を轉じようとして）耀つて云へば、昔と變りはありませんかねえ。

猪八　うむ。厩が縣の費用で立派なのになつたきりだ。それをぬかして、變つたことはねえ。

留吉　さうですか。僕も子供の時あ、よく行つたもんでした。埒の內を持主がぐる／＼引張り廻すと、四方に見てゐる博勞が、てんでに「五兩と云ふが――」「十兩は如何に――」なぞと値を耀上げたものでした。

猪八　さうだ。叔父さんなんぞもあれをやるんだ。

留吉　而して夕方になると、博勞が買ひ取つた馬を十四も一緒につないで、今迄の飼ひ主を慕つて嘶くのを、すかし／＼連れて行つたものでした。

猪八　馬つて奴はあれで可愛い奴よ、なあ。親馬と仔馬が買ひ離される時なんぞ、ほんに人間みてえに嘶（な）きやがる。

留吉　叔父さん。儲かりますか。

猪八　うむ。ちつたあ儲けなくては好きな酒も呑めねえからんな。（煙草入れを收めて）どれ、そんぢや一と儲け目論んで來べえかな。

留吉　もう行くんですか。

お豐　あら叔父さん、まだゆつくりしたらよかんばい。

猪八　おめえにさう云はれると、千年でもゐてえが、さうすれあ商賣がすたらあな。ぢや歸りに又その愛（め）んげえ顔を見に寄つぺえかな。左樣（き）なら。

留吉　左樣なら行つていらつしい。

猪八　あばよ。（お豐の頰を鳥渡つゝいて）留吉！　この子をおめえに預けて置くのは、猫に鰹節みてえなもんだな。

留吉　冗談いつちやいけません。

（猪八、笑ひ乍ら去る。二人も顔を見合せて笑ふ。）

留吉　お豐ちやん。叔父さんの今云つた事を聞いてたかい。

お豐　はい。いつでも今泉の叔父さんは冗談ばかし云ふんだもの。

留吉　それも惡りいことぢやないよ。冗談から駒がでるつていふぢやないか。ね。だからおまへもそんなに遠くにゐないで、鳥渡此處へおいでよ。

お豐　はい。（從順に近くに坐る）

留吉　歸つてもまだおまへさんと沁々話もしなかつたな

あ。此の三年間どうしてゐたい。俺の事も時々あ思ひ出したかい。
お豐　それどころでねえぞい。一生懸命で待つてゐたわい。
留吉　でも三年の間にあ。誰か他の男に、何度か此頰ぺたを觸られたらうなあ。
お豐　そんな事。――
留吉　ぢや留二には何度も甞めて貰つたらう。
お豐　あら、あんな事云つて。おら一遍も無えぞい。一遍もねえぞい。
留吉　嘘だらう。だつて二年も同じ家にゐて、留二がこんな可愛い人を放つておくもんか。
お豐　だつて眞實だもの。眞實に無えだもの。誰が留二さんなんかと。――
留吉　嘘をついたつて駄目だ。ちやんと顏に書いてある。
お豐　どこに書いてあるい。有りもしねえ。
留吉　だつて留二はさう云つたぜ。
お豐　嘘。嘘。そんぢやあの人いゝ加減な事云つたんだ。
留吉　ほんとに無いのかい。
お豐　そんなに疑ぐんだら、どうでもして見つさんしよ。
留吉　眼をお見せ。やましく無ければ　ちやんと僕の方が見てゐられる筈だ。
お豐　（眞面目になつて見る）
留吉　（ちつと見合つてゐたが、急に）ね、お豐ちやん。どこか二人きりで會へるやうな處はないかい。
お豐　あの裏の納屋がいゝわい。
留吉　おまへ見つけて置いたのか。
お豐　はい。
留吉　そこで今迄留二か誰かと……。
お豐　あれ又――
留吉　もうからかふのはよさうな。（間）併しおめえはほんとに納屋へ行く氣かい。
お豐　（がつくりうなづいて、男の顏を盜み見る）
留吉　さうだ。忘れよう。忘れよう。おまへの顏を眺めてゐてすつかり何でも忘れよう。今分ぢやそれが唯一の逃げ道だ。
（お豐は何の意味だか分らず、猶もぼんやり留吉の顏に浮んだ歡喜と苦痛の表情を眺めてゐる）

――幕――

第　二　幕

納屋の前。正面には低い納屋の入口が見える。そこには大小の藁鳰が所狹きまでに積まれてある。而して

それを統べてゐるかの如く柿の木が一本。
前幕の翌日。同じく秋の日の薄暮、前庭は一面に赤い夕日を浴びてゐる。
渡り鳥が啼いて過ぎる。阿武隈川の瀬鳴りが聞える。
幕あくと、舞臺はしばらく空虚。やがて右手から、今洗つたばかりの鍬を擔いで、父の留藏と久作とが歸つて來る彼等は默つて通り過ぎる。間。
左手から留吉、思ひに沈み乍ら出てくる。同時に右手から留二が、同じく二三の農具を肩にして、出て來る二人は舞臺の中央で出合ふ。

留二　あ、兄にや、何處さ行くんだい。
留吉　なに、そこらを鳥渡歩いて來ようかと思つて。――
留二　別に用があるつて譯でもねえんだない。
留吉　うむあると云ふ程の事は無い。
留二　そんぢや丁度いゝ。おら兄にやに鳥渡話があるんだげんぢよ。今聞いて貰へめえか。
留吉　（少し逡巡して）うむ、聞いても差支ないが。――
留二　丁度誰も居ねえから、是非聞いて貰ひてえよ。まあ、手間は取らせねえ。鳥渡くら、そこの藁の上へ、腰を下ろして呉んちえゝ。
留吉　（適宜な藁の上に腰をかける）それで話と云ふのは。――
留二　（同じく腰を下ろして）實は弟の口から、こんなことを云へるこつちやあんめえけんぢよ、そんぢや又何時まで經つたつて果てしが無えかち、今日は思ひ切つておらあ云ふ。話つて云ふのは外でも無え。おめえ……その、一日も早く東京さ歸つて貰へめえか。
留吉　うむ。それあ俺も歸る氣だが。――
留二　歸つて來て一日か二日にしかなんねえのに、こんな追ひ立てるやうなことを云ふのは、何ぼ何でも非道いとおめえも思ふべげんぢよ、ちつとは先づ俺たちの身にもなつて呉んちえゝ、さう云つちや氣を惡くするかも知んねえげんぢよ、此家のことにして見れあ、おめえが來てから面白くねえ事ばつかしだ。父は父で昨日から一言も口を利かねえ。おめえはおめえで嘆息ばかり吐いてゐる此頃ぢやお豐ちやんまで妙にそは〳〵と落着かねえし、お喋りの久作まで默り込んでゐる。折角一日稼いで家さ歸つても、お互に他人みてえに向ひ合つて、まるで砂を嚙むやうに飯を食ふ。――それはつて云ふのもみんな、兄にや、おめえが來てからの事なんだぞい。
留吉　それあ俺も濟まないとは思つてる。これで內心どれだけおめえ達に謝罪つてゐるか。
留二　おらあ何もおめえが謝罪るの謝罪らねえのつて、そんな事を云ふんぢやねえ、おめえに全くそれだけの心

があるんだら、お願ひだ。もう一足だけその心持を進めて、東京さ歸つて吳んちえゝ。賴む。おらが賴む。此上齡取つた父やおら等に累れえを掛けねえで、此家は此家の儘で置かして吳んちえゝ。それあおめえも折角資本を探しに來たんだべから、それが出來ねえ中は歸らねえつもりかも知んねえげんぢよ、此家を抵當にするなんてことは、先祖樣に對して迚も出來た義理ぢやねえよ。それに父があゝ一旦不承知を云ひ出したからにあ、何て云つたつて駄目だ。だからそいつは諦めて早く東京さ歸つた方が、おらおめえの爲だと思ふんだ。

留吉　それはおまへの指圖を受ける迄もなく、俺もとうから考へてはゐるんだ。

留二　そんなら何故さうして毎日愚圖々々してんだ。

留吉　いろ／＼口で云へない譯もあるから、一日延ばし二日延ばししてはゐるんだが、さう云はれて見れば、思ひ切るより外には仕方がない。おまへの云ふ通り、俺は歸るよ。

留二　そんなら何時歸つて吳れる。

留吉　明日。

留二　明日何時。

留吉　夕方まで待つて吳れ。俺もまだ會つて行きたい人や、話したい人もあるんだから。

留二　(間)　おめえ、それほど迄にお豐ちやんが思ひ切れねえのか。

留吉　(立上つて)　何を下らない！

留二　お豐ちやんの事なら、改めておらおめえに斷つて置くが、あの子は俺が貰ふことになつてんだから、ちつとは氣を附けて吳んちえゝよ。

留吉　(强ひて冷靜に)　ふうむ。おまへの嫁と定まつてるのか。いつ誰が定めたんだ。

留二　親父も俺も疾うからさう定めてるんだ。

留吉　そして本人は。

留二　本人も無論承知してるとも。

留吉　ほんとに承知してるんだな。

留二　嘘なんて云ふもんか。(間)　言葉ばかりぢやねえ。兄にやの前だげんぢよ、あの子はとつくにおらが物なんだからな。

留吉　おまへの云ふ事を聞いたことがあると云ふのか。

留二　(固まつたやうな薄ら笑を浮べて)　まあ、そんなことだな。永い間一つ家にゐれば、その位え當り前ぢやねえか。何もそんなに目の色を變へて、驚くにも當るめえよ。

留吉　ふうむ。さうか。(間)　併しおまへとそんな關係になつた更に以前に、俺と關係があつたとしたらおまへは

どうする。

留二　どうもからもねえ。おらはどんな事があつたつて、お豐ちやんを貰ふことに定めてる。

留吉　併し問題はおまへと俺との心にあるんぢやない。おまへがいくらさうと決めたつて、あの子が不承知なら仕方もないぢやないか。前にあつた關係とか何とかは、少しだつて、此場合あの子の所有權を定める問題にはならない。あの子がおまへのものになるか、俺のものになるかは、現在のお豐ちやんの心一つで定まるんだ。

留二　ぢや兄にやは、あの子がおめえに惚れてるとしたら、此處から連れてゆくつもりか。

留吉　あの子にその決心さへあれば勿論連れてゆくかも知れない。併しまだ眞にあの子の心を聞いて見た事はないんだから、おまへがそれ程まで云ひ張るんなら、どうだい。一つ此處へ呼んで聞いて見ようぢやないか。おまへを取るか、俺を取るか。

留二　兄にや！　おめえもうお豐ちやんと隱れて約束でもしたな。そしてお豐ちやんと二人で俺に恥を搔かせようと云ふんだな。おめえは自分の勝つのが解つてるもんだから、それでそんな事を云ふんだべ。

留吉　ぢや一體どうすればいゝんだ。

留二　（泣きさうな聲で）　これほど云つても兄にや、おめえは聞いて呉れねえのか。おめえだつてそれぢや餘り非道かんべぞ！　おめえだつてまさか俺の幸福と云ふ幸福を、みんな叩き壞さうと思つて、歸つて來たんでもあんめえ。（殆んど泣いて）どうか賴む。賴むから大人しく此儘歸つて呉んちえゝ。おまへが行つてさへ呉れりあ、お豐ちやんだつて、もと通り俺が嫁になるのを、否とは決して云はねえんだ。こんなことを云ふのは男らしくねえ、身勝手な事かも知んねえけんぢよ、俺あかうして手をついて賴むよ。

留吉　（長い間默つてゐる。ふと閃電の如く）　留二、それぢや俺の望も聞いて呉れるか。

留二　おめえの望とは。

留吉　家を貸して呉れ。（留二呆然として語なし）　それあこんな際どい談判で、殊に自分の女との交換條件に出すなんて、俺も考へれば恥しい話だ。けれども俺だつて、どうしても金が要る必死の場合なんだ。おまへの生活にお豐ちやんが要る以上に、俺の生活には金が要るんだ。俺は女を賣るやうなことはしたくはない。けれども、おまへも俺の心持を、少しは察してかなへて呉れ。兄さんも賴む。な、な。

留二　（沈鬱に）　それぢやお豐ちやんを俺に呉れるから、家を抵當に貸して呉れと云ふんだない。

留吉　さうだ。おまへ先刻俺がおまへの幸福をみんな壞すと云つたな。併し今俺が此儘歸つたとしたらどうだらう。俺は俺の希望を二つとも壞されて、生きてゆく空は無いんだぜ。だからどうか承知して呉れ、頼む、頼む。

留二　(顏を上げて) 兄にや。おめえ眞實に商賣にや見込があんのか。

留吉　(悲しげに) うむ。きつとどうにかなると思ふんだ。

留二　さうすれあ、借金の方は直ぐ返せるんだな。

留吉　さうだ。だから諾いて呉れ。

留二　ぢや間違ひのねえやうに、きつと返して呉れるんだな。

留吉　うむ。潰すやうな事は決してしない。

留二　兄にや、仕方がねえ。おらおめえに家を任せべえ。

留吉　貸して呉れるか。有難う。有難う。兄さんは此の通り拜むよ。それでやつと助かつた。有難う。有難う!

留二　おめえはそんなに嬉しいべけんぢよ。俺あ餘り心持がよくねえ。兄にや、おらこんなことまでして、お豐ちやんを貰ふのかと思ふと、おめえを恨まずにやゐられねえよ。

留吉　勘忍して呉れ、なあ留二。此償ひはきつとするぞ。

留二　(立上つて) そんぢやあ、早く父ん處さ行つてその事を相談して見べえ。

留吉　さうして呉れるか。おまへも一緒に願つたら、お父さんだつて貸して呉れないこともあるまい。ぢや頼む。(立上る)

留二　一緒に行つて頼んで見べえ。併しお豐ちやんの方は大丈夫だべな。

留吉　うむ大丈夫。おまへのものにする。

(二人は左手へ退場する。しばらく舞臺空虚となる。渡り鳥頻りに啼き、瀬音の夕鳴りが其間にはつきり聞える。)

(やがて左手から久作爺が首を振り乍ら出て來る。彼は何かとつぶやき乍ら、柿の木の下に干した豆類を片付け初める。)

(そこへ隣人登場。三十を越した實直さうな農夫である。)

隣人　やあ久作さん。お稼ぎだない。

久作　あんまり稼えでもゐねえよ。

隣人　どうだい。旦那は、機嫌がいゝかい。

久作　餘りよくねえ。よくねえつたつて、俺あ馴れてつからかまあねえけんぢよ、馴れねえ人にあ何んだか怖かなかつぺな。

隣人　そんぢや今日は行かねえ方がよかんべか。

久作　何か會はなくてなんねえ、用でもあんのかい。

隣人　用つちふ程の事あねえ。只、今日糶市であの博勞の猪八さんから言傳を頼まれただ。

久作　さうか。そんな事だら、おらが聞いとくべえ。今丁度村屋では、内輪の相談みてえなものがある模樣だつたから、それで俺も此處さ逃げてゐるのよ。うん。今日はおめえ糶はどうだつたい。

隣人　毎年變りもねえけんぢよ。今年は一匹すてきもねえいゝ馬が出た。あゝ云ふのをアラビヤ馬つてでも云ふんだべて。あんな馬め。御料地の牧場でも出來めえつて、評判だつた。その値がよ、三千兩たあ、魂消るでねえか。

久作　他人の馬に魂消たつてしようねえ。三千兩が五千兩でも、俺たちあ係はりのねえこつた。

隣人　さうおめえ一概に云つちめえば、世の中にあ俺たちの面白えものあ、無くなつちまふべ。おめえみてえに、何でもかんでも、見てえとか聞きてえつちふ氣を起さなくなるのは、あんまりいゝ事でもあんめえがな。

久作　それあさうだ。おらだつてそいつあ解つてるんだ。けんぢよも仕方がねえ。日にち毎日、のんべんだらりと成るやうになつて行くのよ。此頃あ糶だなんて、見る氣もしねえ。

隣人　毎年同じやうなもんだけんぢよ、あれで俺たちにあ面白えよ。今年は馬の數も澤山出た。儲けた博勞もあつたんべ此方の猪八つあんも大した景氣だつた。

久作　さうかな。してその言傳ちふのは。

隣人　今日はもうすぐ歸つから、此家さ泊めて呉れるやうに、お豐ちやんに頼んで置いて貰ふべえちふ事だつた。

久作　なんだ、わざ〳〵そんなことかい。

隣人　あの端れの田中屋で、べろんべろんに醉つぱらひ乍ら、云つたんだから、當にもなるめえけんぢよ、俺あ頼まれただから、云はなくてなるめえと思つて。——

久作　いや、さうかい。それあ御苦勞だつたない。そんぢや言傳は確かに聞いときやすから。

隣人　そんぢや何分お頼み申しやす。左樣なら、お稼ぎなんしよ。

久作　左樣なら。有難うごわした。

（隣人退場する。間。やがて又久作も片付けて終つて、そこを去る。長い間。夕日がだん〳〵薄れる。）

（お豐、そーつと出て來る。四邊を見廻して柿の木へ藁を結びつけ、そつと納屋の中へ入る。長い間。しばらくして、留吉、以前よりもつと物思ひに沈み乍ら出てくる。而して柿の木の下まで來て、ふと合圖の藁屑に目をとめる。悲しげに微笑む。それから輕く二つほど咳をする。納屋の戸口にお豐あらはれそつとさし招く。留吉、行かうとして、一應あたりを見廻す。ふと何かな

認めて、急いでお豐に匿れるやうな合圖をする。）

（書記の高橋、右手から出てくる。）

高橋　あ、留吉つあん。いゝ處にゐて呉れた。おらおめさん家さ來つと、きつと又何か云はれつぺと思つて、家の人にわかんねえやうに、どうかしておめえさんに話ができる法はねえかと、それぱかり工夫してたわい。

留吉　僕あ鳥渡用事があるんだがね。一體話つて何んだい。何なら、又晩にでも僕が君ん處へ行くからそん時にして呉れないかい。

高橋　いや、すぐ解ることなんだ。實は、昨晩の君の話しだがない、高利でも出來るんならいゝつちふ譯だつたが、俺の知つてる金貸が、今日ふいと役場さ登記に寄つてない。それから話してみたら、模樣に依つて相談に乘らうちふんだ。それで向うでも一應あんたと會ひてえもんだから、そこまで連れて來たんだがない。出來る出來ねえに係はらず、鳥渡くら會つて見ねえかい。

留吉　併し君高利でも抵當か何かは要るんだらう。

高橋　それあ有るに越した事はあんめえけんぢよ、表向き無くつても、長男なら親爺か誰かの連判があればいゝんだとか云ふ話だぞい。

留吉　高橋君、僕あもう絕望だ。抵當も無けれあ、何にも無いんだよ。親爺が到底許さないんだ。いや許さないのぢやない。許したくても無いてんだ。もう去年の養蠶の大失敗の時、農工銀行から借りた金の抵當に大半入つてゐるんだとさ。

高橋　まあさう氣を落しなさんな。さうならそれで又覺悟の極めやうがあつぺでねえかい。まあ兎に角會つて見なせえよ。今日は只會つとくだけでもよかんべ。どんな時のたしになるかも知れねえから。

留吉　さうだねえ。

高橋　鳥渡顏を合せてだけ呉れ給へよ。でねえと、俺がいい加減な嘘を云つたやうで、惡いから。ほんとに鳥渡くらでもいゝから。

留吉　ぢや兎に角お目にかゝるだけかゝらう。どこにゐるんだい。

高橋　あの土橋の處に待つてるんだから。すぐだわい。

（二人右手へ急いで去る。長い間。お豐入口からそつと現れて戸外の樣子を見送る。しばらくぢつと立つてゐる。やがて遠くから醉つぱらひの聲が聞えてくる。だん／＼近くなるとそれが猪八叔父の叫び聲であるのがわかる。お豐急いで姿をかくす。）

（博勞猪八、泥醉して右手より入り來る。）

猪八　（舌のまはらぬ大聲で）さあ歸つたぞ……お豐……出て來い、……女ろつ子！　水持つて來い……叔父さん

のお歸りだ。……約束通り寄つたんだ……お豐！……出て來い……出て來ねえな女！…………（藁の上に倒れたまゝ喚いてゐる）

（其時、納屋の中にゐたお豐は、あまりの見幕に恐れをなして、内から納屋の板戸をそつと閉める。）

猪八（ふと納屋の戸の動くのを見つける）おや、獨りでにあの戸が閉りやがつたぞ！　不思議なこともあれば、あつたもんだなあ。誰だ、そこにゐるのは。誰だ。（答なし）誰だ！（猪八猛然と起き上つて納屋の方に走り寄り、戸をあけようとする。あかず。更に力をこめてぐつと半ば開ける。そこから覗き込んで）やあ、お豐か。何んだつてこんな處にゐるんだ。（身をひるがへして、全く中に入る。而して一瞬の間に戸を閉める）

（夕日は全く影を收めて、薄闇が蒼茫と漂つてくる。しばらくして留吉、左手より現はれ、又四方を見廻す。而して又誰かを見出して、立佇つて心急き乍ら待つてゐる。）

（郵便夫、同じく左手より入り來る。）

留吉　手紙ですか。

脚夫「阿久津留吉殿」、あなたですか。

留吉　さうです。（受取る）御苦勞さま。

（郵便夫退場する。留吉急いで裏を返して見、慌てゝ封を切る。讀む。讀み進むに從つて彼の動作には明かに驚愕の樣子が現れる。絶望の表情をする。彼は殆んど叫びを發せんばかりになつて、手紙を握りつぶしたまま、頭髮をかきむしる。）

（その時、納屋の戸を押し開いて、猪八お豐を捉へたまゝ出て來る。留吉それを見ると、驚いて藁鳰の陰に隱れ、樣子を窺ふ。）

猪八　さあ來い、一緒に來い、一緒に來て俺の嬶になれ。約束でねえか。おめえまさかあの八朔一日の晩の事を、まだ忘れはしめえな。あん時から、もうおめえは俺のものなんだぞ。だから俺ん所さ來て嬶になれ。……何、厭だ。厭だつてしやうがねえ。俺あどうしてもおめえを嬶にするんだから、何でも彼でも一緒に來い。留吉になんぞやつて堪るものか。さあ來い。來い。（と猶も引き立てようとする）

（留吉堪らなくなつてつかつかと進み出る。）

留吉　叔父さん、何をしてゐるんです。何を云つてゐるんです。

猪八（驚いて手を放す）む。おめえ、そんな處にゐたのか。さうか。俺あ何にもしてねえ。何にもしてねえよ。（とぶつぶつ云ひながら、逃れる如く退場する。）

（留吉呆然その後を見送つてゐたが、直ぐ氣づいて其

處に泣き伏してゐるお豐に近寄り、引起すやうにする。)

留吉　(きつとなつて)　お豐ちやん、おまへ何してゐた。(答なし)　叔父さんと何してゐたんだ。何を云はれてゐたんだ。(答なし、泣くのみ)　泣いてたつてわからないぢやないか。何をしてたか訊いてるんだよ。(急に狂はしく)　何をしてた。云へ、云へ、云へ。(襟を捉へて突き倒す)　賣女！　云ひたくつても云へめえ、どの口でおめえは昨日嘘を吐いた。どの口で男を知らねえなんて吐かしたんだ。どの口で留二とは何の關係もねえと白らばくれたんだ。叔父さんの云つた事は、あれやみんな本當だらう。さあ返事をしろ、云ひ譯があるんなら云つて見ろ。

お豐　(泣き乍ら)　留吉さん、それあんまりひどい…………いくら何だつて、そんな事はねえ、そんな事はねえぞい！

留吉　駄目だ、駄目だ。口で打消したつて、現在の證據があるから駄目だ。俺あおまへのやうな淫賣婦に、今までかうしてかゝり合つてたかと思ふと情なくなるよ。おめえのやうな獸に、今の今まで心を引かれて、恥を忍び乍ら此處におめ／＼と殘つてゐた俺は、何と云ふ馬鹿だつたんだ。(泣き聲で)　かう云ふのも未練のやうなけれどもな。お豐、俺はたつた今まで何を失くしてもおまへだけはまだ殘つてゐると思つてゐたんだ。それがどうだ。俺にはもう何にもない。全く何の希望もなくなつて了つた。(ふと聲を低めて)　俺はもう行くんだ。此家にも、穢れたおまへにも用はない。(行かうとする)

お豐　留吉さん、待つて下さい。

留吉　何を云ふんだ。

お豐　おらが心はきつとあんたにお目にかけます。きつとこの申譯は致します。

留吉　そんなことは聞きたくもないよ。そんな必要はどこにあるんだ。俺はもう行つて二度とは歸つちや來ないんだ。おめえは留二の嫁になるなり、猪八叔父の嬶になるなりして、立派に暮して行つたらそれでいゝぢやないか。俺はおまへに思ひ殘りも無い。おまへだつて俺に思ひ殘しをして吳れるな。ぢやほんとに俺は行くからな。おまへから皆に宜しく云つて吳れ。左樣なら。

(お豐泣き伏す。留吉思ひ切つて行きかゝる。而して舞臺鼻の所まで來て立佇る。ぢつと遠方の空を眺めるやうな眼で、眞向うを見る。それから靜かにお豐の泣き倒れてゐる所へ歸る。)

留吉　お豐ちやん、俺はおまへにだけ云つて置くがね。俺は到底東京へは歸れないんだよ。俺はな、ほんとは此處

へ資金を調達に來たんぢやないんだ。實は主人の金で株へ手を出して、三百圓ほどすつて了つたんだ、そして其才覺に來た譯なんだ。だから其金が手に入らない中は、東京へ歸る譯には行かないんだよ。（間）殊に今來た手紙で見れあ、どうやら主人も感づいたらしい。だから愈愈外(ほか)で金を才覺しなくちや歸れないんだ。

お豐　では東京さ歸らなければどこさ行くの。

留吉　解らないんだ。どこか友人でもたよつて探して見るんだ。（間）でも大方、行きつく所へ行くだらうよ。ぢや左樣なら。俺のことを時々は思ひ出してお呉れよ。

お豐　では、おたつしやでゐて下さい。此お詫びはきつとしますぞい。

（留吉右手へ退場する。お豐一人殘つて泣いてゐる。）

（四邊には闇が迫つてくる。阿武隈の瀨音がはつきり聞える。長い間。母屋の方で留二が「お豐ちやん、お豐ちやん」と呼ぶ聲が聞える。その聲を聞くとお豐はきつと立上る。而してぢつと耳を澄ます。それから四邊を見廻して、同じく右手へ去る。）

（留二の「お豐ちやん、お豐ちやん」と呼ぶ聲。――）

（つゞいて留二、左手よりあらはれる。）

留二　（納屋の中や又四邊を見廻し）お豐ちやん！　兄(あん)にや！　二人とも一體(てえ)に何處さ行つたんだらう。

（彼は不安の面持でぢつと耳を澄ます。）

――幕――

第三幕

再び阿久津が家の内部。舞臺は第一幕に同じ。只上手に壇を設けて、白布を掛けた二個の棺が飾られてある。その邊香華の諸具よろしくある。

前幕の翌晩で、暗い家の中には、煤けた洋燈(ランプ)が二つ三つ點(とも)されてある。

家には留藏、留二を始め、隣人、村人、村の娘などが四五人、通夜に集まつてゐる。幕のあいた時、佛前には僧侶が禮拜してゐる。丁度今枕經を終つた所なのである。

僧侶　（禮拜し終ると佛前を退き、皆に鳥渡會釋して座につく）

留藏　（沈鬱に）御苦勞さんでした。

僧侶　いゝや。かう云ふ佛は近頃珍らしい事で、儂(わし)も功德だと思ひやすから、念入れにお經を上げやした。

留藏　難有うござりやした。

僧侶　留藏さん。あんたもかう一度に二人お取られなすつちや、淋しうごはせうな。

留藏　いや。別に。――腹が立つ位なものですよ。死んだ不所存者は何にも知らずに往生しやせうが、後に殘つたわし共は、これから下らねえ噂話を聞かされるんですからな。死に恥を晒すなんて、考へて見れあ馬鹿な奴等です。

僧侶　死なずに濟まなかつたんでせうかな。

留藏　それでさあ、何も死んで恥を晒さなくちやなんねえ譯が解んねえんでがすよ。尤もあの野郎の心持は、もとから少とも解んなかつたんですけんぢよもな。

僧侶　矢つ張り若氣の過失かな。ほんに若え人たちには困つたもんだ。（娘たちを顧みて微笑する）

留藏　（娘たちに）さあ〳〵。おめえさん達、折角來て呉つちやんだから、線香でも一本づつ上げて行つて呉んちえゝ。而しておめえさん達も、よくおら家のお嬰を見せしめにするがいゝ。

僧侶　さうだ。全くだ。そして平生のお嬰ちやんを見習つて、みんなおとなしくするんだ。

娘一　でもおら等だつて、一緒に死んで呉れる人があるんなら、死んでもいゝと思ふわない。

娘二　さうだわ。ほんとだわない。（互にうなづき合ふ）

娘三　だけんぢよ。死ななくては、一緒になれないなんて、何て因果なんだべない。ほんとに可哀さうだない。

留藏　さあ〳〵、いくらそんな事云つたつて初まんねえ。それよつか早く線香でも上げて呉んちええよ。

娘一　ではおら等が先に線香を上げてもいゝんですかい。

僧侶　さあ〳〵遠慮しねえで上げなんしよ。

（娘等點頭き合つて、交る〳〵、佛前へ進み、禮拜する。）

僧侶　どれそんなら出掛けべえか。

留藏　もうお出掛けですか。留二、提灯をつけてあげろ。

僧侶　では皆さん。お先きへ左様なら。（默つて留二が差出す提灯を受取つて）いや、どうも難有う。留二さん。おめえも力を落しなさんなよ。人それ〴〵の壽命てえものは仕方がねえもんなんだからな。いゝかな。（留二默つてうなづく。それを見て出口から外へ出る）ほう。天の川が眞つ白だ。だん〳〵秋も深くなるて。左様なら。（去る）

（沈默。――）

（やがて娘たちもめい〳〵に挨拶して歸つてゆく。）

（留二、默つたまゝ佛前に坐り、長い間瞑目してゐる。

久作、歸り來る。）

久作　只今戻りやした。

留藏　あゝ久作か。どうした用は。

久作　すつかり足して來やした。あの町の葬具屋では、丁度出來てた花があつたから、今夜の中に屆けるちう事で

がした。それから此方の墓地のことも、お豐ちゃんの墓地のことも、よつく役場さ頼んで來やした。

留藏　掘り人も頼んで吳れたか。

久作　爲若兄に萬事頼んだから、心配ありやせんわい。

留藏　さうか。御苦勞だつたな。まあ早く上つて飯でも食へ。

隣人　久作さん。御苦勞さまだつたなあ。

久作　やあ、新吉つあんか。三次郎さんもよく來て吳つちやなあ。お通夜は賑かな程いゝて。

村人　所が無口な俺達ばつかしでは、淋しくなつちまふだけのこつた。

隣人　時に今話してた墓掘りだがなあ、俺等も明日はそつちの方さ手傳ひに廻つぺ。二つの棺を入れるにや、墓穴も大きく掘らざなるめえからな。

村人　俺もそつちを手傳ふべ。

久作　いや、そつちの手は澤山なんだから、矢張りおめえさん達あ此處で色々な用をして吳んちえゝ。墓穴は別に二つ掘るんで、一つ一つ人を頼んで來たんだから。

隣人　そんぢや別々に埋めんのかい。

久作　お豐ちゃんはあの人の兩親の埋まつた墓場さ埋めんだとい。

隣人　ふうむ。留藏さん。ほんとにさうするんですかい。

留藏　うむ。それが當り前だかんな。

隣人　それあ可哀さうだよ。留藏さん。一緒に埋めてやんなせえな。ちつたあ死んだ佛の心持も酌んでやんなせえよ。

留藏　おまへさんに死人の志が解るのかい。

隣人　だつて心中する位でねえか。

留藏　どうしておめえに心中だと解るんだい。

隣人　だつて一緒に死骸が上つたでねえかい。

留藏　あの小泉の堰は、どんな水死人だつて、あそこで上るんだ。一緒に上つたつて、一緒に死んだとは云へめえ。

隣人　おや留藏さんは心中でねえと云ふのかい。

留藏　ねえとは云はねえが。心中だとも云へねえ。俺には何だか此事にあ譯がありさうに思ふんだ　心中にしても、何か變つた譯があつたに違えねえ。餘り樣子が變だものな。

隣人　さう云へばさうだけんぢよ、二人が惚れ合つてたのは紛れもねえ眞實だもの。矢つ張りさうと見てやるのが尋常だよ。だから一緒に埋めてやんなせえ。其方が功德だよ。

留藏　いや、たとへ心中にしても、家にはそれ〴〵の墓があんのだからな。

留二 （此時まで佛前に瞑目してゐたが突然） 父！ お願ひだ、おらも頼む。どうか兄にやとお豐ちやんを一緒に埋めてやつて呉んちえゝ。それでねえとおらあどうしても氣が濟まねえだ。一緒に埋めてやつて呉んちえゝ。頼む。な、父！

留藏 おまへまで何でそんなことを云ふんだ。

留二 父、おめえは何も解んねえから、心中でねえのかんのつて云ふけんぢよ、俺あ二人の心持はよつく解つてんだぞ。心中に違えねえ。きつと此世で一緒になれねえと思つて、一緒に死んだに違ひねえんだ。（泣いて） 父、今だから俺云ふがな、あの二人の仲を邪魔したものは此の俺だ。俺あ兄にやがこれほどまでに思ひつめてるとは思はねえから、お豐ちやんに横戀慕をして、無理矢理に兄にやから奪つぺと思つたんだ。そして兄にやを追ひ出すべと思つたんだ。それで兄にやは死んだんだ。お豐ちやんを殺したのは俺だ。俺あ今更何ちうて佛樣に詫びたらいゝか解んねえ。せめて二人の死骸を一緒にしてやるより外はねえだ。父、頼む。どうか一緒に埋めて呉んちえゝ。頼む、頼む。おら一生のお願ひだ。さうして呉んねえとおらどうしても氣が濟まねえだ。

留藏 （默然としてゐる。皆々も沈默）

留二 父！ ほんとに俺どうすれあいゝんだらう。俺は二人を殺したも同樣なんだ。（身を悶えて） 濟まねえ、濟まねえ。

留藏 （靜に） おまへはおまへとしてさうするより外なかつたんぢやないか。なつた事は仕方がない。心配するな。

（一座は又痛ましげに沈默にかへる。此時遠くから誰やらの喚く聲が聞えてくる。やがて猪八が、さきのやうに泥醉して喚き乍ら入り來る。）

猪八 さあ誰だ。出て來い。お豐を殺したのは誰だ。出て來やがれ。一と叩きに叩き殺して呉れつぞ！ お豐を殺したなあ、誰だ。畜生！ 出て來い。（上り框に腰を下ろす）

留二 （血相を變へてつめよる） 叔父さん。それは俺の事ですか。その殺したのは俺だと云ふんですか。俺に出て來いと云ふんですか。

猪八 なに、おめえが殺した？ 馬鹿野郎。殺した奴あ神樣が御存じだ。ふん。面白え。おめえが殺したのか。面白え。殺したと云ふんだな。畜生。何だつてあの子を殺した。云ひ譯が立つなら云つて見ろ！

留藏 猪八！何だ、そんなに醉ひ狂ひやがつて。

猪八 醉ひ狂つた？ ふん、今朝からの葬ひ酒だ。醉ふなあ、あたりめえよ。醉つて惡いのか。

留藏 皆さんも來てゐて下さるんだ。ちつと靜かにしろい。

此處を何處だと思つてゐんだ。貴樣の目にや、二つの棺が見えねえのか。

猪八　ふん。棺が二つか。解つてらあ、吉公とお豐坊とのよ。洒落くせえ、心中なんぞしやがつて。馬鹿な野郎だ（間）併しこれにや何か譯があんだべ。さあ出せ。かう人間がぽか〱死んで堪るか。一體誰が殺したんだ。どこのどいつが殺したんだ。（皆々沈默。叔父吾れと吾が聲の反響におびえる。低く）みんな神樣が御存じだぞ。

留二（進み出て）叔父さん。濟みませんでした。勘忍して與んちえゝ。俺が惡かつたんです。俺が側からお豐ちやんに惚れてゐたのが惡かつたんです。お豐ちやんを兄にやの手からとつて、自分のものにしつぺと思つたのがわるかつたんです。

猪八　ふうむ。それぢやおめえもお豐を取らうとしたんだな。ふうむ。而してそれが惡かつたと解つたのか。（叱るやうに）惡いに違えねえ。惡いと解つたか。

留二　えゝ、解りやした。全くそれがなけれあ兄にやもこんな事に、ならなかつたかも知れねえんです。

猪八　さうか。よし、さう男らしく後悔すれあ俺だつて許してやる。もう一度あやまれ。

留二（眞面目に手をついて）濟みやせんでした。

猪八（ぢつと其樣を見てゐたが、急に狂ほしく笑ひ出す）はゝゝゝゝ。おまへ眞面目であやまつてるのか。馬鹿めはゝゝゝ。これぱつかしの事に、何をさうくよ〱してるんだ。それつぱかしの事情で、何を詫まらうてんだ。なあ、おい。奴等の死んだのは、奴等のせゐで、誰の惡い爲でもねえ。てめえが惡いの、俺が惡いのつて、そんなことはねえんだぞ。世の中には惡人はゐねえや。なあ、みんないゝ人ばかりだ。惡いことをするのは、何にも知らねえで、ついうつかりやるんだ。だから心配するこたあねえ。なあ留二。決して心配する事あねえぞ。

留二　いくらさうは思ひなほしても、心の苛責はぬけねえんです。

猪八　はゝゝゝ。おめえみてえに氣の弱え奴にあ、何よりも藥は酒だ。酒だ。おい久作。酒を出せ。酒を持つて來い。お通夜に酒は附きものでねえか。愚圖々々しねえで持つて來い。この臆病者に呑ませるんだ。

留藏　おい猪八、おまへもういゝ加減にしてよさねえか。

猪八　哥兄。おめえ酒を呑ませねえと云ふのか。

留藏　もう澤山だ。大抵にして歸れ。

猪八　あいよ。歸るよ。歸るなつて云つても歸らあ。併しなあ、歸る前に一言恨みを云ふからよく覺えて置け。一體あいつら二人を添はせめえとしたのは誰なんだ。仲を裂いた親玉は誰なんだ。死なして了つた張本人は誰なん

だ。

留藏　俺だと云ふのか。

猪八　さうよ。今やつと氣が附いたのか。

留藏　（沈鬱に）おめえがさう思ふんなら、さうでもいゝ。恨みを云ふならいくらでも云へ。併しあとで正氣になつたら、誰が惡いか考へて見ろよ。

猪八　何云つてやがるんでえ、老耄れ！　正氣になつて考へたつて、惡い奴はちやんと定まつてるんだ。神樣がすつかり御存じだあ！

留藏　さうとも。神樣も許して下さらあ。

留二　（無意識に）神さまも許して……下さる……。

猪八　（急に）おい久作。濟まねえが水を一杯呉れろ。

久作　はい。水だら何んぼ飲んでもよかんべ。水にやちつとも障りはねえ。（茶碗を渡す）

猪八　（受取つてぐつと飲む）それでは俺も愈々行くかな。

留二　（叫ぶ）あゝほんとに俺はどうすれあいゝんだ！

猪八　どうもかうもねえ。生き度けれあ生きる、死にたけれあ死ぬのよ。（立上つて）さあ、俺あ行くぞ。（蹌踉と出てゆく）

留藏　（あと見送つて）醉ふと仕方がねえ奴だ。

隣人　ほんとに今夜はどうしたんですかない。

留藏　氣の知れねえ奴ばかりゐて困つて了ふ。

留二　併し叔父さんの云つた事あ、あれやみんなほんたうだ。

留藏　馬鹿を云へ。あんな醉つぱらひの云ふ事を聞いて耐るものか。人にあ一人づゝ生きてゆく道があるんだ。そして其道でてんでに生きてゆかなくちやなんねえんだ。留二、もういゝ加減にしてお豐の事は忘れて了へ。すつかり忘れて働けば、明日から又お天道樣が照らあ。なあ久作。

久作　さうですとも、おめえさんはまだ若いんだもの。まだ〳〵いゝ日は續くべえ。

留二　さうだ働くべえ。そして淋しくても生きてゐべえ。

（葬儀屋の人夫ら白い葬用の造花を擔ぎて入り來る。）

人夫　へい、今晩は。葬儀屋でござりやす。花を持つて參りやした。

留藏　あゝさうかい。御苦勞だつたな。ぢや休んで一服つけて行きなさんしよ。

人夫　へい。これで御註文の二對です。

（皆々花を受取つて、飾りつける。舞臺は急に白く、寂しい色調が漂ふ。沈默。）

人夫　（ふと阿武隈の瀨音を聞きつけて）あの音は何ですかい。

久作　あれあ阿武隈川の音だわい。
人夫　へゝえ。（煙草を吸ふ）
（皆々沈默して、瀨音に聞き入る。この時一人の村人入り來る。）
村人　御免なんしよ。又大變なことが出來やした。何だか此方の猪八さん見てえな人が、川さ陷つて了つたぞい！
留藏　何、猪八が？　そいつは醉ばらつてゐたが。
村人　はい。わしが投網を打つべと思つて、すぐそこの川緣にゐると、何だか猪八さんみてえな人が、高聲で何か云ひ乍ら土堤の所まで來たつけが、其儘眞つ直に川ん中さ落ちて了つたんだわい。
留二　それで。――
村人　可怪しいと思つたから、急いで行つて見たけんぢよ、闇をすかして見ても、はあ水の上には浮いてゐなかつたわい。
留藏　ふうむ。さうか。――
村人　あれあ何でも過失で陷つたんであんめえて。何しろ、早く行つてお哭んなんしよ。早く。おらこれから警察つ樣さ行つて來つから。
留藏　………。
留二　よしすぐ行く。おい皆んな行かう。飛んでもねえことになつたなあ。人違えであれあいゝが。――

（皆々急いで出てゆく。後には只留藏と久作と葬儀人夫だけが殘る。）
人夫　どうしたんですい。一體。――
久作　又一人川で死んだのよ。どう云ふつもりなんだか俺あ知らねえ。これも時世のせゐだんべ。此頃のやうに軋み合つては、生きてられねえ人も出來るんだべえよ。

――靜に　幕――

金井博士父子（家庭劇三幕）

人　物

金井愼太郎　醫學博士（退職病理學教授）（六十二歲）
同　美代子　夫人　後妻（三十五歲）
同　巴　子　養女（十八歲）
林　音　彥　博士と先妻との間の子（二十歲）
杉田敏郎　法學博士　先妻の友人（五十三歲）
藤井俊二　博士の助手（二十七歲）
高瀨　勇　醫師。博士の友人（五十歲位）
し　げ　金井家に長くゐる召使の老人（五十歲位）

時　代

一九一―年代

場　所

東京市の一部

第一幕

金井博士の書齋。質素ではあるが快げな洋風の一室で、全體の色調は暗紫色の陰影に富んでゐる。左右の壁に戸がある。右は玄關からの廊下に通じ、左は居間に通じてゐる。正面には大きな窓があつて、半ば黃ばんだ梧桐の立木を透して見ることが出來る。其窓下に書寫机を据ゑ、其邊を中心として、書架、椅子、ソーファ、其他の家具等が適宜に配置されてある。

時は晩秋。雨が寒く降り濺いで、梧桐の頻りに散る音がする夜のこと。電燈が靜やかに點いてゐる。

夫人美代子、齡は三十五歲を超えたけれど、整つた外貌は彼女に三十前後の「成熟したる婦人美」を與へてゐる。幕あく時夫人は室の左手に据ゑられたソーファに坐つて、近着の婦人雜誌を漫讀し乍ら、折々人待ち顏に四邊を見廻し、耳を澄ましたりなどする。云ふ迄もなく良人金井博士の歸宅を待ち佗びてゐるのである。

しげ　（召使の老女。右手より入り來る）奥さま、あの林さんへお電話をかけてお聞き申しました。

美代　どうだつたえ。

しげ　御法事はもう疾うに濟んで、こちらの旦那樣は四時頃お歸りになつたさうで御座いますよ。

美代　まあさう？　もうかれこれ八時だから、さうするとお歸りになつてから四時間も經つてゐるんだよ。何處へいらつしやつたのかねえ。（間）あの林さんから何處かへ寄るとでも仰有らなかつたかい。

しげ　はい。何も仰有いませんでした。

美代　病院ぢやないだらうかね。今時分までおいでになる譯はないんだけれど、ひよつとするとさうかも知れないから、おまへもう一度電話をかけて見てお吳れ。

しげ　はい。（行きかけて）下谷の二九六番でございましたね。

美代　厭なばあや！　いつでも病院の番號つて云ふときつと忘れるのね。下谷の三三二九番だよ。「みみつく」と覺えてゐるといゝんだよ。そら、「みみ」が「三三」、「つ」が英語の「Two」、「九」が「く」とね。

しげ　まあ、さうでございましたつけねえ。私「ふくろ」と考へ違ひをして居りましたの。（つゝましく笑ふ）

美代　成程「ふ、く、ろ」だから二九六番！　厭だよ、ほんとに婆やは！　（同じく笑ふ）

しげ　では掛けて參ります。

美代　間違はないでね。

（召使右手へ去る。しばらく間。夫人又雜誌を讀み初める。雨の音やゝはげしくなる。夫人頭を上げて窓外を眺め、立上つて窓掛を引く。通りがゝりにテエブルの上に置いた花瓶を嗅ぐ。再びソーフアに歸つて雜誌を讀み續けようとする。再び召使入り來る。）

美代　（すばやく）おゐでなさらない。

しげ　はい。今日はあちらへお寄んなさいませんさうです。それでさつき助手の藤井さんが何か御用でこちらへおでかけになつたさうですよ。留守と知らずにもう少ししたらきつとおいでになるでせうよ。

美代　さう？　それは生憎だつたね。ぢや旦那樣はどこへおいでなすつたのだらう。私には先の奧樣の十三年忌とかで林さんへ行つて來ると仰有つただけだが、お前にもさうだらうね。他に何も云はなかつたかい。

しげ　はい。別に仰有いませんでした。けれどお出ましになる時、私に向つて久しぶりで又輝子のことを思ひ出したよとさう仰有り乍ら寂しくお笑ひになりました。

美代　そんなことを仰有つて？　私にはどうも先の奧さんの事を仰有るのを避けてるやうだわ。私だつて別に聞かうとは思はないけれど。（不安なる間）ねえ婆や。先の奧さんを御離緣なすつてから何年になるのかねえ。

しげ　さやうでございます。もう十九年目でございませう

よ。御離縁なさると七年目にお亡くなりなすつて、今年が十三年忌で御座いますからね。ほんとに月日の經つのは夢のやうでムいますよ。

美代　全くさうだねえ。私が嫁てからさへもう十二年にもなるんだから。（間）婆や、其時分のことを覺えてゐて？

しげ　えゝえゝ覺えて居りますとも。まるで昨日のやうな氣がしてゐる位でムいますよ。其時分はまだ私なぞも二十代の若い時でムいましてな、まだお嫁の口なぞも心懸けてゐた時代ですよ。（少し雄辯に）えゝよく覺えてゐますとも、丁度あれは春のことでムいました。其時分はお庭に澤山木蓮の花がムいましてな。夕方なぞは此窓からぼんやりお庭が白く見える位でしたよ。それを又先の奥さまは大變お好きで、いつも此處でぢつと見てゐらつしやいました。一度なぞは泣いてゐらつしやるのぢやないかと思ふ程靜かにぢつと見てゐらつしやいましたよ。

美代　まあ、さうした方だつたのねえ。

しげ　一體お淑かなお方でしたが、丁度其時は御產後だつたのでムいますよ。二月に月足らずのお子さんをお產みなすつて、產後のお肥立ちもよく、お子さんもお丈夫でしたのですが、どうした譯がおありなのか、何もかも滯りなく濟んだ處で急に御離縁になつたのでムいます。私共は下女風情でムいますから事情は少しも解りませんでしたが、其月足らずのお子さんと云ふのが基だつたのでムいませうよ。何しろ旦那樣は其時陸軍の方へ出てゐらつしやつたので、日清戰爭から歸つて來た八月頃だつたのでムいますからねえ。

美代　さう〳〵。その噂なら薄々は私も聞いてゐるよ。で、そのお子さんて云ふのは今も生きてるの。

しげ　えゝ生きて居りますとも、あなた。もう數へて二十といふ生意氣盛りで高等學校へ行つてゐらつしやいますよ。

美代　その方はほんとに良人の子ぢやなかつたのかねえ。

しげ　そんな事は私どもの口を入れる事ぢやございません。神さまが御存じでムいませう。兎に角御不運な奥樣でございました。併しもうあの世へ行らしつてから今日で十三年にもなります。

美代　十三年つて云ふと一と昔だねえ。それでもよく旦那樣は思ひ出して御法事においでなすつたこと。私が此處へ嫁てから、三年忌も七年忌もあつたんだらうけれど、今迄一度もそんな事でおいでなすつた事がなかつたよ。

しげ　それは左樣でムいますとも。旦那樣はお亡くなりなすつた時さへ、わざと御旅行においでなすつて御會葬をなさらなかつた位ゐですもの、三年や七年の中は、未だ

お悄しみが解けなかつたのでムいませうよ。

美代　それで十三年目に又お慕はしくでもおなんなすつてから遲いのかしら。ほんとにどうしてるのだらうねえ。

しげ　まさかそんな事はムいますまいけれど、もうお歸りになりさうなものですねえ。（間）あ、何だかお玄關の方で足音がするやうですよ。

美代　ぢやお歸りかしら。（立上る）

（玄關で鈴の音がする。）

しげ　あゝ、お客樣ですわ。

美代　どなただらう。さつきの藤井さんが來たんぢやなくつて。

しげ　でもあの方ならいつも鈴を鳴らさずに入つて來ますわ。

（急いで玄關の方へ去る。）

（夫人身粧ひを烏渡なほす。そこへしげが笑ひ乍ら助手藤井俊二を伴つて入つてくる。助手は二十六七歳位の理智的な青年である。茶のオーヴアーを脫ぐと、下に同じく茶の輕快な背廣服を着てゐる。）

藤井　今晩は。奥さん！（外套をしげに渡し乍ら）このおしげ君が僕の鈴(ベル)を鳴らしたのを不可(いけ)ないと云ふんですがね。僕も會には一人前のお客扱ひがして貰ひ度いんです。

しげ　ぢやいつも鳴らすことになさればいゝんですよ。庭口からなんぞお入んなさらないで。

藤井　何もさう僕だつて庭口から入りはしないよ。特別の場合一二度ぢやないか。

しげ　（にや〳〵笑ひ乍ら）さう〳〵。お特別な場合でしたよ。（外套を持つて廊下へ去る）

美代　藤井さん。今日はあなたの方でも例外な訪問をして下すつたんで、此方にも例外な事が起つてるんですよ。實は主人が未だ歸らないのです。

藤井　へえ？　一體どちらへお出でになつたのです。

美代　先の奥樣の十三回忌で林さんへ行つたのですがね。……

藤井　先の奥さんの十三回忌？　そいつは又先生にも珍らしい古い事を思ひ出したもんですね。

美代　それで中々戻れないんでせう。

藤井　では法事がまだ濟まないんぢやありませんか。僕も一度田舍の親類の法事に行つた事がありましたが、朝の十時頃から晩の十時位までかゝりましたよ。

美代　いゝえ法事はもうとうに濟んだのです。電話で問ひ合はしたらもう四時頃に林さんの家をお出になつたさうですよ。

藤井　成程。（指を折つて見て）四時間。そいつは少し遲

すぎますな。併しまさか迷子になつて居る譯もないでせうからね。きつと何處かの屋根の下には居ませう。こんな天氣には犬だつてほつつき歩いちやゐません。私も途中で寒い雨に遭ひましたよ。冷たい雨が頬邊へ落ちるとメスを當てられたやうな感じがします。尤も無理はありません、もうぢき十二月ですからなあ。

美代　まさか私だつて外にゐるとは思つちや居りませんがね。今迄こんな事がなかつたゞけに心配してゐるのです。御承知かも知れませんが、主人も近頃はめつきり弱りましたからね。それに大變ひどい神經衰弱を起してゐるんで鳥渡した刺戟がすぐ障るらしいんです。

藤井　それは私も存じて居ります。だからあの病理學の著述が終つたら、すぐ南の方へでもお出掛けなさるがいゝのです。

美代　あの人はやり初めたら一國ですから、今云つたのでは駄目ですが、私もあの御本が書けたらさう勸めるつもりです。あなたもよく勸めて見て下さいよ。

藤井　えゝ。僕はいつも先生に自重する事を勸めてゐるんです。

美代　あの本はもう大分進みましたか。

藤井　御安心なさい、もう峠だけは越しました。

美代　あなたも毎日大變ですねえ。主人も大變あなたのやうないゝ助手の方を得たのを感謝してゐますよ。

藤井　さう眞向(まつかう)からお褒めにあづかつては恐縮します。私も手傳ひをさせて頂くのを名譽に思つてゐます。非常に嬉しく感じてゐるのです。(少しセンチメンタルに) 僕は實際先生を崇拜してゐるのです。先生の傍で仕事をしてゐる事それ自身が嬉しいのです。あの薄暗い研究室で、先生は向うの隅、僕は此方の隅に坐つてゐます。ぼんやりした窓の明りが先生の横顔に當つて、銀色の交つた髯が光つて見えるのです。さうすると私は又力を得て勉强にとりかかります。時々先生は顯微鏡や試驗官や黴菌養殖床(ネエアボーテン)から目を離して、瞑(ねむ)つたやうに考へ込んでゐらつしやる時があります。その時は私は泣きたいやうな思ひで寂しいが尊い學者の生涯を考へます。殊に嬉しいのはあの病理學の原稿を書く時です。先生はそこに坐つて重々しい寂しい聲で物を噛むやうにゆつくりお述べになるのです。私はそのすぐ前に坐つて一言も間違のないやうにそれを筆記するんですが、書いてゐる中にいつも私は一種の靈感狀態に陷つて了ふのです。而してそこに云つてゐるのが、先生ではなく、此處に書いてゐるのが自分でなくなつて了ふのです。先生と私とが一つの魔法の輪にかけられて、同じく喋り同じく書き同じく呼吸をしてゐるんです。與

さん。この話を私のいつもの誇張だと思つて下さいます
な。僕は實に幸福なんです。あゝ！（少し興奮して室内
を歩く）

美代（思ひ掛けない感傷的の調子に動かされて）あなた
方の御仕事はほんとに羨ましいのねえ。私なぞは主人と
十餘年も一緒になつてゐて、さう云ふ風に一體になつた
ことは一度もありませんわ。

藤井（突然歩くのをやめてつぶやく）さうだ！（美代
子に）奥さん。では又參ります。何だか急に歸つて勉强
しなくちやならないやうな氣がして來ましたからこれで
失禮します。ぢや左樣なら。お歸りになつたら先生に宜
しく。

美代 あらもうお歸り？ さうお？ 何か急用ぢやなかつ
たのですか。

藤井 いゝえ。なあに例の病理學のノオトの疑問なんです。
先生も此頃は少し神經衰弱がおひどいと見えて時々重複
したり、前後の連絡がなかつたりするんですよ。では左
樣なら。

美代 ほんとにお氣の毒でしたわね。

藤井 いゝえ。どう致しまして。僕は只お宅へ上つて事
それ丈でも嬉しいんですからね。（行きかゝる）

美代（追ひかけるやうに）巴子には會つて行かないんで
すか。

藤井（振り向いて）又お目にかゝりませう。宜しく仰有
つて下さい。

美代（少しいたづらな微笑を浮べて）あなたはあの子に
會へるのが嬉しいんぢやなくつて。

藤井（同じく微笑して）さあ！ それもあるかも知れま
せんね。

美代 お氣をおつけなさい。あなたはあの子を逆上させて
了ひますよ。

藤井（赤くなつて）私が？ まさか！ 冗談仰有ちや困
ります。奥さんはあんな事を平氣で仰有るんだから僕ら
のやうな科學者も敵ひません。あゝ何しろ早く歸く方が
安全だ！ では左樣なら。

美代 お待ちなさい。もう一言！

藤井 いゝえ。奥さん。あなたはもう僕に三度左樣ならを
言はせましたよ。

美代 では四度目の左樣なら！

藤井（笑ひ乍ら默つてお辭儀をして退場する）

（夫人送つて出る。暫くして歸つてくる。居間の戸を
開いて養女、巴子が入つてくる。年齡十八歲位。鳥渡
見た處では眞の母子かと思はれる位夫人と似てゐる。
無論美貌。手に一册の教科書らしい本を持つてゐる。）

巴子　お母樣！
美代　えゝ？
巴子　今迄此處に居らつしやつたのは藤井さんぢやないこと？
美代　あゝさうだよ。
巴子　もうお歸りなすつたの。
美代　今歸つたばかりなの。何だか大變興奮して話をしてゐたが急に勉強したくなつたからつて止めてもきかずに行つて了つたの。
巴子　さう。ぢや母樣早く知らして下さればいゝのに。
美代　おまへ何か用があつたの。
巴子　わたし心理をお復習してゐたんですけれど、解らない處が澤山あるから藤井さんに敎へて頂かうと思つてたのよ。
美代　そんならおまへこそ早くあの人の居る中に出て來ればいゝのに。
巴子　だつて私、あの人がこんなに早く歸らうとは思つてゐなかつたんですもの。私に默つて歸るなんて藤井さんも隨分だわ。今度來たらさう云つてやるからいゝ。
美代　だけれど歸る時おまへに宜しくつて云つて行つたよ。
巴子　（子供らしく）あらさう。ぢや少しはまだ良心があるのね。
美代　（さつき藤井に云つたときと同じ調子で）巴さん！
巴子　なあに、母樣。
美代　お氣をお付けなさい。おまへさんは藤井さんを擒にして了ひますよ。
巴子　（寧ろ無邪氣に）あらさう。
美代　（少し意外な感をして）まあ！　おまへさんは未だほんとの子供なのね。
巴子　いゝえ。わたし大人だわ。
美代　ぢやもう少し蓮葉な言をお愼みなさい。おまへさんは一體藤井さんに少し巫山戲すぎます。おまへさんの方ぢや子供らしい親しみでやつてゐても、あの人の方ぢやさう取りませんからね。わたしだつて何もおまへさんに小言は云ひたくないんだけれど、おまへさんももう自分のやる事がそろ〳〵解つて來ていゝ時分ですよ。
巴子　私わかつてよ。
美代　ぢやおまへ藤井さんをどう思つてゐるの。
巴子　どうつて、私わかつてゐるわ。
美代　おまへさんあの人に戀をしてゐるのね。
巴子　わたしが？　まあ！
美代　いゝえ。さうですよ。だからお氣をお付けと云ふんです。おまへ位の歳の時分は最初にぶつつかつた人が一

番いゝ人なんです。選擇なんぞ無いんですよ。だからうつかり其人の事を思ひ込んで、其の人の云ふ事を聞くときつと後で後悔するやうな事になりますよ。おまへは今その危險な位置にゐるんです。だからね、呉々も氣を付けておくれよ。私はおまへさんが子供のやうに無邪氣で、大人のやうに悧巧なだけ、それを心配してゐるのですよ。それに私はおまへさんの眞實のお母さんぢやないんだからね。もし萬一お前に間違でもあると、みんな私の躾がわるかつた事になつて了ふんですからね。

巴子　まあお母樣！　あなた考へ過ぎてゐらつしやるのよ。

美代　いゝえ。

巴子　（おしかぶせるやうに）さうよ。さうよ。考へ過ごしてゐらつしやるのよ。だからもうそんな話はよしませう。（低く獨語するやうに）私びつくりしちやつたわ。今夜はよつぽどどうかしてゐらつしやるのね。急にあんな說敎じみた事を仰有るなんて。（間）それよりかお父樣は未だお歸んなさらなくつて。

美代　未だ歸らないんだよ。ほんとにどうなすつたんだらうねえ。

巴子　で母樣はいつもと異つていらつしやる

美代　まさかさうでもあるまいけれど、何だか私は不安な豫覺に襲はれてゐるのだよ。

巴子　又母樣が御自慢の直覺が始まつたのね。併しいつも御自慢なさる程當つた事がないぢやありませんか。

美代　だけどどうも何か起つたやうな氣がしてならないの。（間）それに此雨だらう。何だか妙に便りのないやうな、恐ろしい事を待つてるやうな氣がしてならないんだよ。

巴子　神經だわ。全くの神經だわ。

美代　だからねえ。おまへ此處へ本を持つて來て私の傍でおさらひをしてお呉れでないかね。そしたら少しは紛れるだらうからね。先刻なんざ藤井さんと態と冗談なんぞ云つて見て、附元氣をした位だつたんだよ。

巴子　ぢやさうしますわ。鳥渡待つてゐて頂戴ね。

（巴子は一旦居間の方へ去り、しばらくして二三册の書籍類を携へて入り來る。而して窓下の書寫机の處へ行つて坐る。）

巴子　母樣。こゝでいゝ？

美代　あゝいゝともさ。（間）何のお復習。

巴子　今度は國語。

美代　さう。（氣のない返事をして默つて了ふ）

（二人はしばらく默つて、巴子は敎科書、美代子は先刻の婦人雜誌に沒頭したやうに見える。しばらくして

美代子が突然立ち上る。）

美代　お歸りぢやないかしら。何だか玄關の戸の音がした樣だよ。聞えなかつたかい。

巴子　えゝ何にも聞えないわ。お父樣ならもつと大きな音をおさせなさるわ。

美代　さうねえ。ぢや氣のせゐだつたかしら。

（二人は再び讀書にかゝる。間。雨の音はつきり聞える。しばらくして靜かに玄關の方からの戸を開いて、博士金井愼太郎が入つて來る。頭の帽子から外套まですつかり雨に濡れて、しづくが垂れてゐる。無言でぢつと立止まる。）

巴子　（ふと顏を上げて父を見）あらお父さん！

美代　（同じく吃驚して）まああなた！

金井　（悲しみを帶びた聲音で）今歸つたよ。

美代　まあそんなに雨に濡れて、どうなすつたのです。

金井　雨の中を歩いて來た。

美代　こんなに外套までぐつしよりになつてゐますよ。（急いで召使を呼ぶ）しげや、しげ！　旦那樣のお歸りだよ。

しげ　（急いで登場）まあ旦那樣！

美代　いゝから早く外套をそつちへ持つて行つてお呉れよ。

しげ　こんなにお濡れ遊ばして、どうなすつたので御座います。ほんとにこんなことをなすつちやお體に障りますよ。大變お顏色もお惡いやうですが。

金井　心配するな、何でもない。いゝからお前はあつちへ行つておいで。あつちへだよ。

しげ　はい。（不安さうに見かへり乍ら外套と帽子を持つて去る）

金井　それから巴。お前も鳥渡向うで勉强して居て呉れぬか。いづれお前にも話をするが、お母さんに少し相談があるのだ。

巴子　（今迄驚いたまゝ默つて父を見てゐたが、毎もに似げない嚴かな父の口調に壓伏されて）はい。（と去らうとする）

金井　鳥渡々々。（と云つて戸口の處で巴子を止めて、自ら近より、低く）お前は家族がもう一人位殖えたつて差支あるまいな。お前の兄さんに當る男の人が一人來るんだが……。

巴子　（一旦は不意な申出に驚いたが、平氣に復つて）ええ。私かまひませんわ。

金井　さうか。宜しい。ぢや行つてい丶。

巴子　（不審さうに父に一瞥を與へて去る）

美代　あなた、すぐお召替なすつたら如何です。

金井　うむ。それより先にお前に是非話をしなくちやならん事があるんだ。まあそこへお坐り。

（美代子ソーフアに腰をかける。博士は考へを纏めるために、靜かに歩き廻る。）

美代　話と仰有るのは矢張り今日の御法事に關係した事ですか。

金井　まあさうだ。

美代　あなたは今迄何處にお居でなすつたのです。あんなに雨に濡れて——

金井　外を歩いてゐたのだ。

美代　お身體に障るぢやありませんか。何だつてこんな日にそんな事をなさるのです。

金井　（陰鬱に）しないでゐられなかつたのだ。

美代　何故そんな事を……。

金井　その理由は今俺が云ふ、聞いて吳れ。まあ話と云ふのはかうなのだ。事の起りは無論今日にある。俺は今日先の妻だつた輝子の十三回忌に行つた。それは出かける時おまへにも話したつけね。

美代　えゝ、それだけは伺ひました。

金井　併し先の妻に關する事はお前には直接少しも話して置かなかつたね。

美代　えゝ、私何はうとも思ひませんでした。

金井　併し今夜は厭でも先妻の話をしなくちやならん時が來たのだ。十三年も後になつておまへと平和に暮してゐる今日になつて、こんなつまらぬ波瀾を平地に起すのは俺としても實に堪らない、苦しい事だが先妻に對する俺の今の感情がどうしてもさうさせずには措かぬのだ。おまへも定めし厭な思ひをするだらうが、今の俺には極めて重大な事で從つておまへにも非常な關係を持つてゐるのだから、どうか終ひまで冷靜に聞いて吳れ。俺はお前の前に跪いて懺悔をし、改めて謝罪しなくちやならないのだ。而して先妻に對しても感情の負債の總勘定をするのだ。どうだ聞いて吳れるかね。

美代　えゝ、伺ひませう。

金井　美代！　妻を離別した男が何かの機會で後悔する事になつたら悲慘だよ。

美代　（悲痛な調子に引入れられて）あなた！

金井　今日俺は法事の席で誰に會つたと思ふ。

美代　先の奧樣のお子さんでせう。

金井　さうだ。晉彥に會つたのだ。あれに會つたのが此生涯の一轉機を作つて了つた。あれが今迄崩しかゝつてゐた俺の後悔の念に火を點けたのだ。

美代　そのお子さんがどうかしたのですか。

金井　いや、晉彥が何かしたのではない。彼は只會つて話

をした丈だ。けれども彼が俺の……此の俺の子だつたと解るにはそれで十分だつた。美代子！　俺は十三年目で會つた疑問の子に俺自身の俤を見たんだ。二十年前は私は彼の父だとはどうしても信じられなかつた。所がどうだらう、今日では彼が火のやうな明かな事實で俺に似て來るぢやないか。

美代　それがどうしたと云ふのです。

金井　考へても見て呉れ。私はあの子が自分のでないと思つた許りに離婚を決行したのだ。所が、今日になつて見ると其離婚の原因が揺つき出してるぢやないか。どうしても彼の父は俺らしい。いや確かに俺だ！　俺に違ひないのだ！

美代　どうしてさう確かに解つたのです。

金井　怖ろしい程似てゐるんだ。俺の身體の特徴といふ特徴が惡魔のやうにのり移つてゐるのだ。早い話がこの爪を見ろ。而して彼奴の爪を見て呉れ。俺は何氣なしに彼の手を見て驚いた位だ。

美代　併し他人の空似と云ふ事もありますからね。

金井　俺も出來るならそんな風に信じたいんだ。併しそんな安價な打消しで消えるには、餘り事實が大き過ぎる。(間)　俺はそのために立つても坐つてもゐられない程煩悶を感じたのだ。而して法事が濟んで家を出ると眞直に谷中の墓地へ行つて輝子の墓の前に跪かうと思つた。併しどうした譯か墓はどうしても見つからなかつた。俺はあの黒ずんだ要目垣の小徑を幾度か行つたり來たりして、夢中に墓地の中を歩き廻つた。その中に雨と一緒に薄闇が四邊を襲うて來たので、驚いて歸りかけたが、幾度考へなほしても俺の此の胸が鎭まらないのだ。而して此の胸を鎭めるには俺はどうしてもあの音彦を自分の手へ戻す事が必要だと感じて來たのだ。で俺は其足ですぐ音彦の居る高等學校の寄宿舍を訪ねて、俺の心情の一伍一什を話し、改めて此家族の一員となることを願つて來たのだ。彼は兎に角今夜一應此處へ來る事になつてゐる。喜んで俺の申出を承知して呉れたのだ。

美代　ではもう其音彦さんとやらは今夜にも此處へ來ると云ふのですか。

金井　さうだ、俺はおまへに一言の相談もなく、突然こんな事をしたに就ては濟まないと思つてゐる。併し一刻も早くさうせずにはゐられなかつた俺の心持も察して呉れ。俺は今改めてお前にそれを願ふ。

美代　あなたは物好きです。好きで自分から苦んでゐらつしやる。あなたは少し物事を大袈裟に考へ過ぎてゐます。而して必要でもないことをなさるのです。あなたは一箇の氣まぐれから、さうさう事件を進めて來ては私共が困

ります。あなたは自分一箇の感情から勝手な事をして、そして其上私共に同意を強ひるのです。私は厭でございます。此上同情を御要求なすつても、私にはできません。

金井　俺が好きで苦んでゐるのだと？　おまへにはまだ俺の位置が解らないのだな。俺は敢て同情は要求しないが、まあさう結論を急がずに俺の話を初めから聞いて呉れ。而して其上で冷靜に判斷して呉れ。其上でおまへが厭なものなら私もどうする事も出來ない。不幸だが今夜がおまへの去就を決する夜となるのだ。

美代　あゝ私はそれ程迄に先の奥さんがあなたに勢力を持つてゐる、とは思ひませんでした。聞かして下さい。聞かして下さい。あなたは先の奥樣をそんなに深く愛してゐたのですか。

金井　さうだ。愛してゐた。

美代　でも憎んでゐたのでせう。

金井　さうだ。憎んでもゐた。愛してゐた丈憎んだのだ。併しまあ初めから彼女との關係を話すから、さう激さずに聞いて呉れ。（間）　俺が彼女と結婚したのはまだ俺が三十を出た許りでまだ陸軍にゐた時だつた。俺はこんな職業であり乍ら、珍らしくその時まで眞の女と云ふものを知らないでゐた。それで俺の輝子に對する愛はまるで初戀のやうに熱烈だつたのだ。而して輝子も俺を愛して呉れた。二人の幸福な生活は暫らく續いた。併しどうしたものか、子供が出來なかつたのだ。そのうち戰爭が始まつて俺は先刻も云つた通り醫務局に奉職してゐたために、從軍する事になつたのだ。

美代　（大きく點頭いて）　それで……。

金井　二人は是非共離れてゐなくちやならない事になつた。俺は陣中で働いてはゐたが、獨習で佛蘭西語を覺える程暇だつた。その陣中に同僚で宍戸といふ軍醫がゐたその男が俺の「災害の箱（パンドラボックス）」だつたのだ。と云ふのは俺は暇に任せて其男から今迄俺の未知の世界だつた愛の冒險の話を聞いたのだ。聞いた事は皆んな想像に餘る事ばかりだつた。よくは覺えてゐないが中には同僚の宿直の晩に其細君を訪問した話もあつた。患者の某婦人と關係したのもあつた。主人筋の愛妾と旅行した話もあつた。少しは誇張もあつたらうがどれもこれも驚くべき怖ろしい話ばかりだつた。此話が俺の女性觀をすつかり替へて了つた。そして其上此男の我々に與へた怖ろしい暗示は、國に殘して來た自分の妻が果して二年の歳月を默つて待つてゐるだらうかどうかと云ふ疑問だつた。殊に其男が妙な笑を含んで「金井君なんざ歸つたら愛妻を十分氣をつけて見るがいゝぜ。」と云つた言葉は俺の頭に消し難い印象を殘した。

美代　………。

金井　其中に愈戰爭が濟んで俺は家へ歸つて來た。而して何氣ない愛情の中にも妻の看視を怠らなかつたのだ。而して運惡くも戰役前後から妻の客間へ出入する若い法學士が目につき出したのだ。併し俺はそれを徹頭徹尾打消してゐた。或る時なぞは俺が役所から歸つてくると、客間で二人が狼狽した笑を取つくろつた情景を見たこともあつた。俺は今でもあの時の妻の凝り固つたやうな顏面筋肉の表情をはつきり覺えてゐる。けれども俺はまさかと疑ひを殺しに殺してゐたのだ。すると其中に妻が姙娠し出した。今迄俺と數年間同棲して殆んど絶望してゐた子が出來ることになつたのだ。それが俺にかすかな疑ひを與へた。それから妻の云ひ分では月がちやんと會つてはゐたが、それにしても受胎は僕の歸つた其月に辛うじて當つてゐたのだ。これが俺に不安を感じさせた。併しそれでも俺は打消してゐた。その中に幸か不幸か俺の歸つてから八月目にその子が產れたのだ。いゝか八月目の月足らずの子を產んだのだよ。

美代　えゝ。解りました。

金井　產婆も本人も月足らずだと云ふ。併し俺があの薄暗い產室の中で、無心に瞑つてゐる月足らずの子を產婆から双手で受取つた時、どんな事を考へたと思ふ。其子こそ呪はれたのだ。天は吾々の運命に狂ひを作るために殘酷極る惡戲をして、疑問の子を俺の手に殘したのだ。俺は昏疲して眠つてゐる美しい產婦の顏と、永久の疑問である嬰兒をしばらく見比べて、默つて部屋を出た。今でも覺えてゐる。二月だつた。戸外には冬の終りの風が吹いてゐた。その音が書齋に歸つて懊惱してる俺を一層不安にしたものだ。

美代　それからどうしました。

金井　それでも俺はこらへてゐた。その位俺の愛は深かつたのだ。俺の苦惱を外に產婦は肥立ち生兒は生長して行つた。併しその中に最後の日が來た。丁度赤子の一百日で、春の末だつた。其日妻はお祝ひのつもりか赤子に美しい着物を縫ひ終つて着せた。それが忘れもしない杉田といふ法學士の――今は博士だが、出產の祝ひに送つて呉れた布だつたのだ。俺はそれを見てはつと思つた。而してすべてがはつきり解つたやうな氣がした。そこで俺は氣を沈めて妻に「此は杉田君が呉れた布だね。」と云つた。俺は自分乍らその時の嗄がれた聲に驚いた位だつた。すると妻は平氣で「えゝ、大變いゝ柄ですのね。」と云つたものだ。俺はそれを聞くとすぐ室へ歸つて、其儘家を出て友達から金を借りて旅に出て了つた。そして旅先から妻と妻の家へ手紙を書いた。離緣狀には理由は妻に聞

いて呉れと簡單に書いただけだつた。それが凡てのお終ひだつた。

美代　奥さんは其儘默つて歸つたのですか。

金井　あとで解るから何も云ひませんと云つて歸つたさうだ。而して俺はすぐ官を退いて獨逸へ行く用意をして、二箇月後にはもう歐洲への船中にゐた。向うでは古傷を忘れるために死物狂ひで勉强し通した。五年目に再び日本の土を踏んだ時はさすがに涙が出た。併し名譽が俺を待つてゐた爲めに割合に輝子の事は思ひ出さずに濟んでゐた。尤も少したつと彼女が死んだといふ通知を受取つて、その時は鳥渡動かされたが、其後自分ではもう忘れたつもりでゐた。そこへおまへが現はれたのだ。

美代　で話はもうそれだけですか。

金井　いやまだある。これからがおまへに取つて重大なのだ。俺はおまへに初めておまへの兄の家で會つた。あの時はお互に幸福だつたねえ。俺は蘇つた心持でおまへを愛し出した。そしてたうとうお前を貰ふことになつた。私は先妻にかかはらずお前を愛してゐた。先妻のことはすつかりお前で忘れてゐる心算だつた。處がある日ふと妙な事を思つた。それは實は俺がお前を愛してゐるのは、お前自身を愛してゐるのぢやなくて、お前を通じて先妻を愛してゐるといふ事を覺つたのだ。あゝ、俺のやうな男に取つて初戀の女といふものは强く働くものだよ。俺はおまへを愛してるのぢやなかつた。おまへによみがへつた先妻の心の姿を愛してゐたのだ。おまへに現はれた先妻を愛してゐたのだ。僕が一目でお前に戀したのはおまへが輝子によく似てゐるからであつた。俺は結局おまへを手段として先妻を愛してゐた事に氣がついたのだ。

美代　（立上つて）私が……あゝ……まあ苛い！　あなたは。……

金井　まあさう驚かずにもつと聞いて呉れ。己の罪はまだそれだけぢやないのだ。おまへはいつか俺がおまへに話し乍ら左手で耳朶を押へる姿勢をした時、それを續けさせてぢつと見てゐたのを覺えてゐるだらう。

美代　（思はず左手を耳朶にやる）

金井　それだ。その癖だ。それが先妻の癖だつた。それを何喰はぬ顏で時々おまへにさせ乍ら俺は默つて輝子の事を思つてゐたのだ。さうするとお前が輝子と少し違ふ顎の線が消えて、彼女そつくりになるのだ。

美代　まあそんな事とは知らずに私……あなたが喜ぶものだから、わざとしてゐたんですのに……まあ！

金井　まだ幾つもある。珈琲を飮む時俺はおまへに左手で茶碗を持たせたり、一口呑んでは上眼使ひに俺の顏を見る事を要求したゞらう。あれもみんな輝子の癖だつたの

だ。

美代　あなたがそんな方とは私は少しも知りませんでした。あゝ私は欺かれてゐたんですね。

金井　もうすつかり俺は云ふ。おまへばかりぢやない。巴子もさうだ。俺はおまへと暫らく一緒にゐる間にだんだんおまへが年と共に個性を出して來るのを見た。而してもう今では輝子の似顔がおまへの眼と口元だけに止まつて來たのを悲しんでゐた。處へ恰度あの俺の親類の巴子が現はれたのだ。あれはおまへも知つてる通り俺の遠縁に當る沒落した家の娘だつたが、俺はあの子の顏に又輝子の姿を見つけ、うまくおまへを同意させてあれを養女にしたのだ。

美代　まあ！　あなたは卑怯です。詐欺です。

金井　何と云はれてももうかうなつた以上は仕方がない。私はおまへにない輝子の姿を今では巴子で補つて樂(たのし)んでゐた。あの子は輝子が嫁いで來た許りの姿を俺に見せて呉れる。俺はそれ丈で滿足してゐた。（間）さうして先妻の本體を憎み乍らも、お前たちの中にある先妻の俤を愛してゐる間に二十年近くの月日が經つた。そして今日になつて其憎んでゐた本體さへ憎めない迄に悔恨させられて了つた。私は罪なき吾子と罪のなかつたかも知れぬ先妻を放逐した。その罰が今日になつて酬いるのだ。さあどうともして呉れ。俺は第一におまへ達の前に過去を懺悔して、潔くお前の處罰を受ける。

美代　（蒼白く興奮して）解りました。宜しうムいます。仕方がございません。私はまだ自分の自尊心を少しは持つて居ります。それだけ欺かれ、それだけ侮辱されてゐれば澤山です。私は十二年間といふものをすつかり欺かれ通したのです。私は馬鹿でした。あゝ、さう思ふと堪まりません。もう何も仰有る事はありませんか。

金井　ない。

美代　さうですか。（立上つて居間の方へ行かうとする）

金井　どこへ行くのだ。

美代　支度をしなくちやなりません。

金井　ではどうしても行くのか。

美代　えゝ。止むを得ません。

金井　あゝどうしても行つちまふのか。（間、突然大聲で）美代子！　ゆるして呉れ。思ひなほして此處にゐて呉れ。お前に見棄てられては俺が堪らない。願ふ。改めてお願ひをする。どうか俺の罪をゆるして、此處にゐて呉れ。俺は弱いのだ。

美代　あなたは今になつてそんな泣言を仰有るのですか。もう欺かれるのは澤山です。（去る）

金井　（獨り言ひつゞけて）あゝ俺はもう弱つてる。もう

いくらも生きられない。併しあの病理學が完成しないうちは死に切れないぞ。それに輝子の事もある。……彼女(あれ)の罪の有無も確と知らなくちやならない。彼女に罪があつたらよし。無かつたら自ら俺の賠償の道も定まるのだ。あゝ、今となつちや彼女に明白な罪があつて呉れゝばいいなあ。さうすれば俺は、もうこんな悔恨をする必要なんぞがなくなるのだ……。

巴子　（居間より出て來る）　お父樣。何を獨りで云つて居らつしやるの。それに一體どうなすつたの。母樣がお部屋で實家へ歸るつて云つてゐらしてよ。

金井　あゝ巴子！　おまへか。母樣はほんとに歸るのだ。併しおまへはいつ迄も居て呉れるだらうな。おまへは俺の寶玉だ。俺の可愛い娘！

巴子　えゝ居りますわ。いつ迄も居りますわ。

金井　ゐて呉れ。ゐて呉れ。お父さんは寂しがりだからな！　（巴子の手をとつて激しくうち振る）

（間。鈴の音。召使のしげ入り來る。）

しげ　お客樣で厶います。音彦樣がいらつしやいました。

金井　うむ來たか。すぐこゝへ通せ。

しげ　はい。（去る）

金井　（巴子に）　先刻話したお前の兄さんだ！

（しげ、林音彦を導き入れる。どちらかと云へば不良少年型の美男子で、其賢明過ぎる容貌は非常に早熟といふ事を示してゐる。世紀末の子でなければこんな型はあり得ない。）

音彦　今晩は。どうも遲くなりました。

金井　よく來て呉れたね。

音彦　えゝ喜んで來ましたよ。お父さん――もうお父さんと云つても宜しいでせうな。

金井　あゝいゝとも。ではもう永久に此家にゐてくれるのだね。

音彦　えゝ、さうです。（巴子をぢつと見乍ら）　處で此の可愛い女の人は僕の妹といふ譯ですか。

金井　あゝさうだ。巴子といふのだ。巴子！　これがおまへの兄さんに當る音彦だ。

巴子　（少しおど〳〵して）　あの……どうぞ宜しく。

音彦　いや僕こそ。併しまあそんなに世間並な改まりやうをするのはおよしよ。僕もおまへのやうな可愛い妹を持つてほんとに嬉しい。おまへだつて僕のやうないゝ兄さんが出來たのを嬉しがらなくちやいけないよ。

巴子　まあ！

音彦　僕は何だかお前をたゞの妹にしては置けないかも知れないよ。おまへだつてさう思はないかい、お前は一體どつちを取るの。僕に妹として取扱はれたいか。それと

も戀人になりたいか。

金井 ｝（同時に）｛（少し困つて） 音彥！
巴子 ｝　　　　　｛（顏を赤くして） わたし知らないわ！

音彥 （父の非難を抑へて） いゝえお父さん。こんな問題はひよいと心に浮んだ時、すぐ定めて置かないと困るんですよ。僕はまあ謂はゞ一目で此人の可愛らしい處が氣に入つたのです。（巴子を見て） 少し僕の母さんに似てゐる所があるやうな氣さへしてゐるんですよ。

金井 （强く打消して） そんな筈はない。そんな筈はない。

音彥 お父さんにはそんな筈はなくてもいゝが、僕にはあるのですよ。で巴さん。君はどつちをとりますか。

巴子 私妹にして頂くわ。

音彥 宜しい。まあ〳〵それも無難ですね。（間） ところでお母さんはどうしたのです。

金井 ｝（同時に） お母様は……（と云ひかけて口をつぐむ）
巴子 ｝

（次の瞬間の不安なる沈默の中に、居間の戶を開いて外出の支度をした美代子が靜かに現はれる。沈默。）

音彥 （つか〳〵と進みよつて） あゝお母さん。此處にゐるでしたか。（返事なし） 一體どこへおいでになるのです。（更に返事なし） 僕がどうかしたのですか。僕の來たのが惡いのですか。僕と一緖にゐられないのですか。あゝ解つた。あなたは僕のために此處を出て行くんですね。さうでせう。さうでせう。

美代 （冷かに） 理由はあの人に聞いて下さい。では皆さん、左樣なら！

音彥 （急に嘲弄がこみ上げて來る） はゝあ解りました。いづれ和製のイブセン婦人といふ處ですね。

美代 あなたもお若いのに世間並の批評家のやうな事を仰有いますのね。

音彥 まさか。私が老人の辭色を使ふのが反語と取つて下さらないのは遺憾ですよ。

美代 下らない事を！ あなたもよほど馬鹿ですね。自由な孤兒の境遇から、こんな牢屋につながれに來るのさへいゝ加減に馬鹿な處へ、そんな下らない言を云ふとなほ嗤ひますよ。

音彥 おや〳〵。これは御挨拶だ。併しまあ此家へ僕が來て何をするか見てゐらつしやい。その上で馬鹿云々の返事をしますから。

美代 （音彥を尻目にかけて） 皆さん、左樣なら。（去る）

巴子 （追つて行かうとする） お母樣！

金井 （初めて我に歸つて） 巴子。よせ！ 去る者を追うてどうするのだ。

巴子　でも……。

金井　いゝから此處へ來い。（巴子、博士の側にくる）　それから音彦も。（音彦側に寄る）　さうだ。（二人を兩脇に抱きかゝへて）　かうして三人で暮らさう。三人ゐれば寂しくはない。おまへたちはほんとの俺の子だ。あゝ俺のほんとの子！　俺のほんとの子！

音彦　（アイロニカルに）　僕のほんとの父！　僕のほんとの父樣！　（併し博士は興奮してゐて、足下より起る此叛逆の聲をも聞き入れないのである）

——幕——

第二幕

金井邸の客間。書齋と比すれば割合に明るい色調の洋室。正面の壁には大きな硝子の双戸（ダブルドア）があつて、そこから庭へ出るベランダに通じてゐる。庭には小春の日光を浴びた花卉が見える。左右の壁に各々出入口。右は玄關の方へ、左は居間書齋の方へ通ずる。煖爐。餘りに贅澤ならざる裝飾器二三、洋畫などが適宜に配置されてある。室の中央に圓い卓。それの周圍に數箇の椅子。室の右手隅にソーフアなどが置いてある。

前幕から數日を經過した或る初冬の晴れた日の午後——。弱いけれどもパツとした日光が、正面の硝子戸を斜に透して居間に射込んでゐる。

幕あくと養女の巴子は半開の戸（ドア）に凭れて庭の方を眺めてゐる。息子の音彦はソーフアの上に腰をかけて暫らくそれを見てゐる。

音彦　巴さん何を見てゐるんだい。

巴子　あてゝ御覽なさい。

音彦　さうさね。巴さんの事だから美彌子張りに「雲を見てゐるの」とでも云ふ所だらう。

巴子　美彌子つて誰れ？

音彦　そら、三四郎の中の美彌子さ。

巴子　あゝあの美彌子なの、私あんなにえらい女ぢやないわ。

音彦　又あれ程馬鹿でもないだらう。

巴子　どうして。

音彦　思はせ振りをする女は大抵馬鹿なんだよ。だからあなたそんな處へうつとりして立つてると莫迦に見えて來るんだよ。一體何をそんなに一生懸命で見てるんだい。

巴子　だからあてたらいゝぢやありませんか。

音彦　呑氣だなあ。ぢや眞赤な庚申薔薇でも見てるんだらう。でなけれあ「十一月の後園に音無く亡びる綠の聲」でも聞いてるのかね。

巴子　違ふわ。わたしお父さんを見てるの。
音彦　なにお父さん。お父さんが庭に出てゐるのかい。
巴子　えゝあすこの梧桐の下にさつきからぢつとしてゐらつしやるの。ほんとに寂しいのだわ。
音彦　おまけに苦しいのだ。
巴子　今日は大變ふけて見えますわ。お父様も此頃はお弱りなすつたわねえ。
音彦　老人(としより)をさう長く見てゐるものぢやない。見てゐる間に刻々と年をとつてくるのが讀めて氣の毒になる。だからもうそんなものゝ見物はやめて此處へおいで、少し齒が浮く猿之助流の臺辭(せりふ)だがお互に若いんぢやないか。そして老人を憐む程にはまだ人生の幸福を味つてゐないのだ。巴さん、此處へ來てお坐り。
巴子　（默つてソーファの端へ腰をかける）
音彦　僕等がかうして並んで腰をかけてゐるのも、考へて見れあ實に運命だね。
巴子　あら又哲學のお話？
音彦　さう話の腰を折つちや不可ない。君たちのやうな女の人は何でも解りのいゝ事を解りにくさうに云ふと哲學だと思つて了ふが、それは全然反對だ。が併しまあそんな高等學校式の話はよしにして、全くの所、僕は今の自分の位置が不思議で堪らないんだよ。母があゝなつたのも運命なら、僕がかうなつたのも運命なんだ。今の僕の此位置を母に見せてやりたい位だよ。
巴子　あなたお母様をまだ覺えてゐらつしやる。
音彦　あゝ。覺え過ぎる位覺えてゐるよ。母は寂しがつてゐた。あれから見れば今のお父さんなんぞの寂しさなぞは比べ物にはならない。母は苦しんでゐた。あれから見れば今のお父さんなんぞ未だ未だ苦しみ足りやしない。其上物質的にも貧しかつたのだ。
巴子　いつ頃お亡くなりなすつて。
音彦　僕が八つの時鬪ひ疲れて死んだのだ。
巴子　何かお筐みがあつて。
音彦　一揃の衣裳と一册の手帳とが今でもとつてあるよ。
巴子　手帳には何か書いてあるの。
音彦　怖ろしい事が澤山書いてある。あれを見ると僕なんぞはぢつとして此家にゐられない事が澤山あるんだ。（立上つて）さうだ。あれが僕に何事かしろと唆かすのだ。
巴子　着物はどんなのがあるの。
音彦　此處へ嫁に來た當座の着物だ。あれを嗅ぐと母の若い時の匂ひがする。僕はよく嗅いだものだ。仄かな樟腦に交つて懷しい母の匂ひが今でもするやうに思へるんだ。あれはきつとお前にも似合ふよ。お前を見てると僕

は母の若い時を考へさせられるからな。いつかあれを着て御覧。僕の行李の隅にあるんだ。

巴子　さうお。ぢやいつか着せて見て頂戴。

音彦　あゝ。きつと似合ふよ。

巴子　何かもつとお母様のお話が無くつて。私伺ひたいわ。それにあなたはお母様のお話をなさる時大變活き〳〵となさるのね。

音彦　いや。もう母の話は大抵にして置かう。話せば限りがない。僕は考へ過ぎる程母の事を考へてゐるんだからね。

巴子　あなたお母様の事で、お父様を憎んではゐらつしやらない？

音彦　（ぎくりとする。間）　さあ……どうだかね。（間）兎に角憎んでいゝ譯だね。憎むのが正當な譯だね。憎まなくちやならない譯だね。

巴子　併し憎んで下さらない樣に私からお願ひしてよ。

音彦　憎むといつても僕のは個人的の感情からではない。一箇の妻と夫、親と子の間の社會問題として、普遍妥當性を與へて見た上、憎むものは憎む、憐むものは憐むんだ。離婚と云ふ事は實に立派な社會劇のモーチヴになるからねえ。殊に其間に子がある場合はだ。（青年に有勝な一種の社會的義憤を燃やして）　さう云ふ場合に子は大抵幼いために自分の意志を發表する能力がない。それに親たちはてんでに自分達の感情の打算に急で、子の意志を尊重するのを忘れてゐる。もし親が親の權利として離婚したとして、そのために子が兩親のある場合に享け得べき幸福を享け得なかつたらどうだらう。成長した後、子は子としての權利を主張する理由はないだらうか。自分の受けた不幸を只運命として盲從する外、恨みの持つて行き處がないだらうか。嘗て閑却された自分の意志を明白に發表して、兩親に反對する權利はないだらうか。僕は「子」の立場からもう少し離婚問題を考へて見たい。いづれ自由戀愛とか、自由結婚とかはそれ〳〵人が考へて呉れるだらう。そして奴等が愛がさめた夫婦なら其間に子があつても離婚しろと云つたりするやうな、親としての極端な個人主義を許すとすれば、僕は子として極端な個人主義を實行するのだ。

巴子　極端な個人主義を實行するつてどうなさるの。

音彦　具體的な復讐さ。

巴子　復讐つてどんな事をなさるの。

音彦　方法迄はまだ考へてない。兎に角親と云ふ名義になんぞ捉はれずに自分の受けた感情を清算するのだね。

巴子　まあ！　ではあなたはお父様に對してもそんなことを考へてゐて。

晉彦　さう具體的の問題に入つて來ちや困る。
巴子　だつてあたし心配だわ。
晉彦　なあに今云つたのは理論だけだから、安心してゐるがいゝよ。理論なんてものはいざと云ふ場合には何にもならないものだ。そら僕の親類のメフイストフエレス君がさう云つてるぢやないか。「すべての理論は灰色で、緑なのは黄金なす生活の木だ」とね。だからもうこんな話はやめて、もつと我々の生活を緑にしよう。ショウの臺辭ぢやないが吾々は森の小鳥だ。さあ唱つた、唱つた。(答なし) おやどうかしたのかい。厭に考へ込んぢやつたね。
巴子　(靜に) わたしあなたが怖いわ。あなたは何かしさうな方ね。
晉彦　おや〳〵。僕がそんなに不良少年に見えるかい。僕は是れでも造物主が作り損なつたハムレットの戯畫(カリカチユア)位な處だぜ。何の怖ろしい事が出來るものか。僕は全くお笑ひ草に世の中に產れて來たのだよ。だからもうそんな沈思默考はよして、もつと浮き立つてお呉れ。
巴子　だつて。ほんとに何もしなくつて。
晉彦　した處がおまへに接吻する位な處さ。
巴子　あら！
晉彦　さあ占めた。さう云ふ快活な感嘆詞を出しやあ此方のものだ。さあもういつもの巴さんにおなり。僕は催眠術師なんだから、もう僕の云ふなり放題におなり。いゝかい。何か別な話をしようかな。(巴子澁々うなづく) ええと、何にしようかな。うむ。ぢや僕が昔話を一つするから、君は跡からついて繰り返すんだよ。何でもさう云ふ景(シーン)はアナトオルの中にもあつたつけな。一つあれで行くとしよう。いゝかい。
巴子　(まだ落着かずに) えゝ。
晉彦　ぢや初めるよ。(間) 昔々ある處に爺さんと婆さんが居りましたとさ。
巴子　(少し釣り込まれ乍ら不精無精に) 爺さんは山に柴刈りに婆さんは川へ洗濯にゆきましたとさ。
晉彦　すると其留守に其息子と娘とが……。
巴子　(少し快活に) 留守をいゝ事にして惡戯をし出しましたとさ。
晉彦　(挑戰的に) 其のら娘の云ふ事には……。
巴子　(負けぬ氣になつて) 其のら息子の云ふ事には……。
晉彦　おまへは私の兄ぢやない……。
巴子　おまへは僕の妹ぢやない……。
晉彦　二人は森の小鳥だから……。
巴子　歌でも唱つて遊びませう……。
晉彦　(笑ひをこらへて) 所が妹は胴間聲で……。

巴子　（笑ひたさを抑へて）おまけに兄が聾なので……。
音彦　何を云つてもとんちんかん。
巴子　かにを云つてもとんちんかん。
音彦　たうとう二人は怒つて默りこんで了ひましたとさ。
巴子　（堪らなくなつて笑ひ出して了ふ）
音彦　さあもつと先をおつゞけよ。（と云ひ乍ら同じく釣り込まれて笑ふ）
（此賑かな笑の中に、助手の藤井が靜かに庭の方から訪れる。彼の顏には今は仄寂しい陰影が見えてゐる。）
藤井　（かすかに微笑して）大變お賑かですね。
音彦　大變寂しさうですね。
藤井　さう見えますか。
巴子　さう見えてよ。
藤井　いや。あなた方だからさう見えるのです。まあ、いはゞあなた方の調子が賑かすぎるのですね。
音彦　こいつは少し手嚴しいですね。併しまあ僕のやうな位置にゐちやかうせずには居られないのですよ。あなただから云ひますが、あなたもこれを戀の勝鬨（トライアンファント・ソング・オブ・ラブ）だとは取つて呉れぬでせうね。
藤井　（鳥渡暗い顏をしたが、すぐ）でも孤獨の悲歌（ソロフル・ソング・オブ・ソリチユード）だとは受取れませんからね。
巴子　お二人で何を仰有つてるのよ。
音彦　高等女學校用の英語讀本（リーダー）にはない事さ。
藤井　さうしてあなたに關係のない事です。
巴子　噓よ。私知つてるわ。
音彦　ぢや何だい。
巴子　きつと私の惡口だわ。
藤井　いゝえ。實はあなたの讃美歌ですよ。
音彦　實は君をナタアシヤにたとへたのさ。
巴子　ナタアシヤつてどんな人。
音彦　初めはアンドレー公の戀人だつたが、アナトールに魅されたのだ。
藤井　（嚴しく禁めるやうに）音彦君！
音彦　いや僕が惡かつた。君、氣を惡くして呉れ給ふな。
藤井　（微笑を以て）君はさう勝利を急ぐ必要はないんだよ。
巴子　あなた方の云ふ事は少しも解らないわ。
藤井　（語調をかへて）所で、僕の肝腎の用ですが、お父さんはどうしました。
巴子　お庭にゐてよ。あなた會はなかつたの。
藤井　へえ、見かけませんでしたね。
巴子　ぢや向うの植込の方にいらつしやつたのだわ。わたし呼んで來てあげませうか。
藤井　いやそれには……。

音彦　なあに君僕らは庭へ下りようと思つてゐた所なんだよ。
巴子　呼んで來てあげませうね。
藤井　ぢやさう申し上げて下さい。私が仕事をしに上りましたつてね。
巴子　兄さん行つて見なくつて。
音彦　うん。（急に氣を變へて）僕は又あとにしようよ。
巴子　さうお。（去る）
（二人は殘つてしばらく默つてゐる。）
音彦　君。突然妙な問ですが、父の存在は學界にどれ丈存在の理由があるのですか。
藤井　存在の理由と云ふのは。
音彦　つまり早い話が父の病理學ですが、一體どの位の權威があるんです。まあ僞りのない處を聞かして呉れ給へ。
藤井　僕なんぞは幾分狂信的ですから、公平な批判は下せませんが、先生の思つてゐらつしやる程價値は高くないにしても、世間で思つてゐる程、遲れたものでもありません。兎に角病理學界の泰斗には違ひないんですからね。
音彦　一體君たちの助けてやつてゐるあの病理學の本は完成しますかね。
藤井　えゝ無論です。
音彦　いや僕のいふのは父が死ぬ迄にやれるかと云ふんです。
藤井　私はやれると考へたいのですよ。
音彦　でも研究室でやれなくなつて、此家で仕事をするほど弱くなつちや父もお了ひですよ。
藤井　いゝえ、なあに先生のお惡いのは神經衰弱だけですよ。研究室から此家へ移つたのは、あそこがどうも落着かぬと仰有るから移しただけのことなんです。そんな心配はありません。
音彦　併しもし萬一出來なかつたら。
藤井　西洋流に何代も繼ぐのですな。併し今そんな事を考へたいとも思ひません。
音彦　もし父で駄目だつたら、君がやりますか。
藤井　それはやれたら喜んでやります。何しろ私はこれで幾分先生の系統を呑み込んでゐますから。
音彦　有難う。妙な事をきいて失敬な奴だと怒り給ふな。
藤井　いや。どう致しまして。
音彦　ぢや失敬します。（玄關の戸口へ去る）
（藤井はあとを見送つてから、手近な椅子に身を下ろして、暫くぢつとしてゐる。金井博士庭から入つてくる。）
金井　藤井君。君も寂しさうだね。

藤井　（微笑して立上り）　先生こそ寂しさうですよ。

金井　僕の方は老人（としより）だから仕方もないが、君はどうしたのだね。

藤井　餘りレントゲンを覗き過ぎたのです。あの光線で實驗をした時はきつと氣が滅入ります。あれはきつと眼の神經をどうかして了ふのですね。あれを日に二三度も覗くと恐ろしい程鬱ぎの蟲を起して了ひます。

金井　若い人でもさうだつてね。

藤井　えゝ、あれをつゞけて覗き過ぎると衝動（トリイブ）がなくなると云ふから悲慘ですよ。

金井　學問をする者は可哀さうだ。

藤井　全くレントゲンを覗く者で、寂しくない人はありません。

金井　さうだね。（間）　ぢやそろ／＼書齋へ行つて仕事を初めることにしようか。

藤井　はい。

金井　今日は實はもう少し後で、客が來る筈だから、仕事は休みにしようかと思つてゐたんだが、君の顔を見たら急にやりたくなつた。十分でも二十分でも手をつけて見よう。書齋へ來給へ。

藤井　先生。その前に一つお話したいんですが……。

金井　何だね。

藤井　奥さんの事です。

金井　奥さんとは。

藤井　美代子さんです。其後少し差出がましいとは思ひましたが奥さんに二三度お目にかゝつて意向を伺ひました。先生、奥さんはこちらへ歸り度いらしいのですが……。

金井　（陰鬱に）　うむ。

藤井　私がお連れ申しても宜しうムいませうか。

金井　俺はかまはない。俺とても美代子のためにもと通り平和な幸福を返してやりたい。けれどももうそれが出來ないのだ。蟲のいゝ話だけれどそれさへ承知してゐて呉れゝば……。

藤井　先生はまだ先の奥さんの事を考へてゐらつしやるのですか。

金井　うむ。さうかも知れない。俺は今だにあれの事を夢に見ないからな。眞實（ほんと）に思つてる人の事は夢に見ないさうだよ。併し時々醒め乍ら幻影を見ることがある。僕が書齋に一人で坐つてゐると、そつとうしろの戸をあけて入つてくるのだ。それが机に向つてゐ乍らよく解るのだよ。あ、來たなと僕はさう思ふ。すると身體中が硬ばつてくるのだ。併しやつと勇氣を鼓して後ろを向いて見る頃にはもうそれがゐなくなつてるのだ。

藤井　全く先生は苦しみ拔いておゐでゞすね。
金井　まあそんな同情は云はずに措き給へ。それより少しでも仕事をやらう。（書齋の方へ進む）
藤井（跟いて行き乍ら）　さうですね。仕事はすべてを忘れさせます……。（二人去る）
（しばらく間。日が陰つて來て、うすら寒い影が舞臺を滿たす。やがて玄關の方の戸が開いて、しげが先妻の友人だつた法學博士杉田敏郎を導き入れる。髯の黑い、男壯りの學者である。黑い洋服。）
しげ　只今旦那樣に申し上げますから、しばらくどうぞ。（と椅子をすゝめる）
杉田　いや。（と會釋して卓子の傍に腰をかける）
（しげ書齋の方へ去る。杉田煙草に火をつける。四邊を見廻して點頭きなどする。間。しげ戻つてくる。）
しげ　あの只今書き物をして居りますので、區劃りがついたらすぐお目にかゝりますさうで厶います。どうぞ少々お待ち遊ばして。
杉田　うむ。どうかごゆつくり。
しげ　では御免下さい。（去らうとする）
杉田　あ。婆やさん。たしかあなたはおしげさんと云つたつけね。僕をまだ覺えて居るかい。
しげ（意味ありげな笑を帶びて）　はい。存じて居りますとも。はい……。
杉田　さうかい。（間）　いや別に何でもないんだがね。何か此家に變つた事でもあるのかい。
しげ　はい。いろ〳〵變りましたよ。
杉田　實は昨日不意に金井君から御手紙があつて、話があるから是非來て呉れと云ふんだがね。僕に用つて云ふのは可笑しいね。何か先の奥さんの事でゞもあるんぢやないか。
しげ　晉彥樣が只今こちらにおゐでゞ厶います。はい。その外のことは私どもに少しも解りませんのでございますよ。
杉田　晉彥つて云ふのは確かあの時生れた子だつたね。
しげ　はい。
杉田　ふうむ。さうかい。（間）　いやお忙しい處を引とめて氣の毒だつた。まあ昔馴染で許してお呉れよ。
しげ　どう致しまして旦那樣。（玄關の方へ去る）
（しばらく不安の面持で杉田博士は坐つてゐる。そこへ晉彥庭の戸口から入り來る。）
晉彥　御免下さい。召使の者から承りましたが、杉田さんでゐらつしやいますか。
杉田　さうです。あなたは――。
晉彥（低く强く）　あなたの晉彥ですよ。

杉田　僕の音彦と云ふのは――。
音彦　よく御存知の筈ではございませんか。母がさう申しましたよ。
杉田　併し……。
音彦　（抑へて）あなたが僕の父でないとどうして云ひ斷れますか。
杉田　（ひどく狼狽して）そんな事は考へられん。それは嘘だ。
音彦　兎に角僕は母の言も少しは信用してゐますからね。
杉田　輝子さんが何と云つたか知らないが、僕があなたの父だなんて、そんな……。
音彦　嘘は云ふまいと云ふんですか。それは間違ひですよ、杉田さん、女は死ぬ迄眞實の事は云へぬものです。だから今の事も嘘は嘘として、嘘だけの價値があるのです。つまり嘘でも僕はあなたの子になりたいんですよ。
杉田　馬鹿な。冗談を云つちや困る。一體あなたは眞面目なのですか冗談なのですか。
音彦　これほど嚴肅(シーリアス)な問題を不眞面目に取扱へるでせうか。僕にとつては少くとも父が確定しようと云ふのですからね。
杉田　その問題なら確言する。僕は君の父ぢやない。
音彦　あなたは實際さう強く云ひ斷れますか。あの明治二十八年八月十四日の事實をどうするのです。
杉田　（驚いて立上る）八月十四日！
（此の瞬間の緊張を破つて召使がコーヒーを持つて出る。二人しばらく白けたまゝ默つてゐる。しげ卓上にコーヒーを置いて去る。）
音彦　（召使の去るのを見きはめ少し冷笑を帶びて）宜しうございます。兎に角今あなたが示して下すつたそれだけの御態度で、母の日記の大抵は事實だと云ふ事を悟りました。併し杉田さん、私からは母に代つてよく御禮を申して置きますよ。あの當時惡夢のやうだつたあの事實も、死際には母に可成スウイートな思ひ出となつたらしうムいますからね。人間は死ぬ間際になるとどんな事でも淨化するものです。
杉田　お母さんは私をどう思つてゐました。
音彦　好意をもつて死にました。それだけは事實ですよ。併し母はあなたを戀してゐませんでしたよ。
杉田　それは私もよく知つてゐました。
音彦　ではなぜ母にあんな關係を强ひたのです。
杉田　それは私がひどく戀してゐましたからね。それに金井君への嫉妬もあつたのです。
音彦　ではなぜ其後も續けなかつたのです。あの離婚はあなたに絶好の機會だつたでせうに。

杉田　僕は怖くなつたのです。自分で作つた運命に戰慄したのですよ。だから逃げたのです。
音彦　あなたは卑怯だが、悧巧だ。
杉田　さうだ。さうも云へる。併し二十年前の事事が今こんな形で僕に襲ひかゝるのを見ても、運命ののがれ難いのを知りましたよ。併し惜しい哉事實はもう「時效」にかゝつて居ます。僕はもうあれを悉く客觀視し得るやうになつて居りますからね。
音彦　あなたはうまく遁れた人です。併しまだあれを遁れられぬ人がゐますからね。
杉田　それは誰です。
音彦　僕の今の父、金井愼太郎です。（間）今日あなたを父がお呼びしたのも、此事實からばかりなんです。父は今だに母の純潔に疑ひを抱いてゐるのです。而して可笑しい事にはそれが、却つて此頃は純潔を肯定するやうに傾いて來たのです。母に罪がなかつたと思ふ念の方が强くなり出したらしいのです。今日の用と云ふのは今迄あなたの口から事實を聞く程大膽でなかつた父も、愈々母の純潔如何を面と向つて定めようと云ふのでせう。
杉田　では僕に事實の自白を迫るのですね。
音彦　大方そんな所だらうと思ひます。所でどすね杉田さん。一つそこは問題ですが、もしさうだつたらあなたはどうなさいます。
杉田　さあ。どう云つたものでせうな。勿論事實を打あけても僕には平氣だが……。
音彦　ですが杉田さん。そこで私は母のために一つあなたにお願ひがあるんですよ。
杉田　お願ひと云ふのは。
音彦　母の純潔を力說して貰ひ度いのです。事實を飽く迄否定して頂きたいのです。どうせ過ぎた事實なぞは父にとつてどうなりませう。併し私は死んだ母のためにある事を目ろんでゐるんです。母はいはゞあなたのためにあれ迄に苦しみました。今あなたは母の純潔を一言で定める役を握つた場合に、これ位の事をして下すつてもいゝと思ひます。
杉田　宜しい。雜作もない事です。併しあの當時の事態を何と云つたものでせう。一言で打消すには餘り明白な事がありますからねえ。
音彦　自分のかなはぬ戀のために父の疑ひを摘發させたとでも仰有ればいゝでせう。
杉田　ではそんな事を云つて見ませう。併しそれは私が自分のためにするのぢやなくてあなたのお母さんのためにするのだといふ事を知つて下さい。
音彦　さうしてそれが結局父のためにもなるのです。父と

ても母の不純潔を喜ぶ譯がありませんからね。今更ら恐ろしい事實を聞くには父は弱り過ぎてゐます。眞實を語ればきつと惡い結果になりますよ。

杉田　さうですね。では愈々さうする必要があります。

晉彥（書齋の方に近よつて物音を聞き）もう父が來る時分です。では私はあちらへ行つて居りますから、何分お頼み申します。私の事は全然知らないふりをしてゐて下さい。

杉田　宜しい。

（晉彥庭の方へ去る。杉田博士少し居ずまひをなほす。足音と話聲が聞えて、書齋の戸を開けて金井博士助手と共に出て來る。）

金井（杉田に）いや。お待たせしました。

杉田（立上つて）どう致しまして。

金井（藤井に）では御苦勞だつたね。

藤井　御免下さいまし。左樣なら。（二人に挨拶して去る）

金井（椅子を勸め乍ら）どうぞお掛けなすつて。（杉田坐る）助手が來たものですから、鳥渡仕事にかゝつてゐて、飛んだ失禮をしました。

杉田　いゝえ。（間）あなたにも暫らくでお目にかゝる譯ですなあ。何年になりますかしら。

金井　左樣、此前は確か岡崎教授の歡迎會の時でしたね。

杉田　いゝえ、あの後、日獨協學會の十週年記念大會で鳥渡お會ひしましたよ。

金井　するともう三年越しになりますかな。

杉田　大變お老けなさいましたね。

金井　さうでせうか。自分ぢやそんなでもないつもりですが……。

杉田　いやお互に古くなりましたよ。此頃は後進が所謂雲のやうに出て來たんで今更ら振り返つて年を數へる始末です。

金井　あなた迄がそんな事を仰有つちや困ります。

杉田　いや老人同志でゐる時は、敗惜しみさへ出ませんよ。

（金井博士わざとらしく笑ふ。響のない笑ひがしばらく室を滿す。間）時に私に御用と云ふのは。

金井　まあゆつくりお話しします。なあに極くつまらない事ですよ。（卓上の鈴を鳴らす。召使登場。召使に）あのお酒でも持つておいで。（杉田に）あなたはキユラソーはお厭ぢやあないでせうな。

杉田　いゝえ。どうかおかまひなく……。

金井　では兎に角持つて來てお吳れ。（召使去る。間。博士少しく坐りなほして眞向ひに杉田に對す）あの。此間輝子の十三回忌がありまして、鳥渡行つて見ましたよ。

杉田（固くなつて）はあ、もう十三年になりますかね。

私は此頃あちらの方へすつかり御無沙汰をしてゐるものですから。

金井　（對手の顏色を讀むやうに）　席上であなたのお噂なんぞも出ました。

杉田　さうですか。それあ私も行くんでした。

金井　あなたはあれの事もまだ覺えておいでゞすか。

杉田　（わざと笑つて）　忌日を忘れるやうでは全く面目がありませんね。

（召使酒を持つて出る。卓上に置いて主人の顏色を伺ひ退場。博士酒をつぐ。）

金井　一つ如何です。

杉田　（すなほに）　有難う。（二人盃を合せる）

金井　（盃を鳥渡嘗めたゞけで下に置いて）　此頃どうも心臟を惡くしてますんで、失禮しますよ。

杉田　それは不可ませんな。

（不安なる沈默。）

金井　（嚴肅に）　時に先刻の輝子の話をもう少ししたいと思ふのですが、どうでせう。

杉田　どうぞ御勝手に。私は今となつてはあの人の話さへ他人事(よそごと)のやうに聞かれるのですから。

金井　さうです。お互にもうあの頃の事を正直に話しても直接の利害關係はなくなりましたね。

杉田　あなたもですか。

金井　私には別に重大な意味を持つてゐますが、兎に角あなたから事實を正直に伺つても、お互に危險な關係に陷る事はないと云ふのです。つまり私はあなたから輝子に對する事實をはつきりと聞き度い。あなたも今となつては匿す所なく話して呉れられる時期に達してゐる。あなたは私が願つたら匿さずに話して下さいますか。

杉田　（鳥渡思案して）　答へられる限りお話しませう。尤も私は精細(デテイル)に亙つては忘れました。いや、寧ろ忘れたいと思つてゐました。

金井　間違ひなく話して下さいますね。私にはあなたのお言葉が致命的(フェータル)な影響を與へるんですからね。今の場合あなたは事實を云つても嘘を吐いてもどの道同じ事です。けれども僕には事實が聞き度いんだからね。

杉田　其點は僕を信用して呉れ給へ。

金井　ではお尋ねしますが、（まじめに）　實際君は輝子と肉の關係があつたのですか。

（不安なる緊張がしばらく兩人を支配する。）

杉田　それは殘念ですが　そこ迄進み得なかつたのです。僕は今だから云ひますが、實は何もなかつたのです。

金井　何もなかつた！

杉田　さうです。何もなかつたために、あるらしく裝うた

ものです。あゝ云ふ場合の男の心ほど汚ない物はありません。僕は希望（ウォルレン）の形を事實（ザイン）の形にして見せてゐたのです。肉の關係は、勿論僕の要求する處でした。そしてある時には眞にもう一歩の問題でした。

金井　どうして君はそこを進まなかつたのです。それ程君は臆病らしくもなかつたが。

杉田　いや。輝子さんの眼の光の中にそれを禁止するあるものがありました。成程。輝子さんの眼には一方禁止し乍らも誘ふやうな惡魔的な力がありました。あの方にも人生の遊戯をする本能があつたのです。只あの人は遊戯が眞劍になりかゝつた場合に、ふみ止まる勇氣があつた人です。

金井　では君は輝子をどこ迄も正しかつたとするのですか。

杉田　えゝさうですとも、勿論あの人は正しいのです。人生の遊戯本能は本能ですからね。さう云つては失敬だが輝子さんの境涯も退屈な眞の人生から暫らく隔離して遊戯をしたかつた時期もあつたでせうよ。あなたはこの遊戯本能を寛大に見てやれなかつたのです。あなたの近代的神經質がこの遊戯本能を是認ができなかつたのです。

金井　ではどうして輝子はそこを僕に抗辯しなかつたのでせう。

杉田　それはあの女（ひと）が淑（おとな）し過ぎたのです。そしてあなたの見幕に押されて自らその遊戯を罪惡だつたと思つたからでせう。あの人には勿論罪の自覺はなかつたに違ひない。只あなたが罪だ罪だと大呼したので、何も知らぬあの人はあれが罪なのだと思ひあきらめたのです。

金井　杉田君。では君は絶對に輝子に罪がないと云ふのですね。

杉田　えゝさうです。僕には異性の遊戯本能を是認（ジャスチファイ）出來ますからね。僕にはストリンドベルヒ流の近代的神經は無いのです。

金井　くどいやうだが、君は實際肉的關係がなかつたのか。

杉田　（きつぱりと）　二度繰り返すには及びません。

金井　（低くうなる）　あゝ！

杉田　どうしたのです。

金井　（かすれた聲で）　杉田君！　君は何故あれと關係して呉れなかつたのだ。なぜ肉まで進んで呉れなかつたのだ！

杉田　（意外な言に驚いて）　では君は輝子さんの罪惡を望んでゐるのだね。

金井　さうだ、僕にはあれに罪が無かつたと聞くのが恐ろしい。あゝ僕はあれにもつとひどい惡行があればいゝと望んでゐたのだ。あれに相應な罪があつて呉れゝば今の

俺の此の悔恨の苦しみは幾分輕減できると思つてゐた！

杉田　では君は今更加へた罰が罪に相當しなかつたのを後悔してゐるのだね。

金井　さうだ。あれが所謂「むじつの罪」だつたとすると堪らない。

杉田　では君は僕の口からあの人の罪を聞いて、自分の後悔を輕くしたかつたのだね。寧ろ僕の口から肉的關係のあつた事を聞きたかつたのだね。

金井　さうだ。（間）何故君は關係して置いて吳れなかつたのだ。關係はしなくとも何故關係があつたと嘘をついて吳れなかつたのだ。あゝ僕にはさう嘘を云つて貰つた方がどんなによかつたか知れやしない。あゝ。（呻る）

杉田　（恐ろしい苦痛な色を浮べて）さうか……。

金井　（默つて慄へる手で前に置いてある盃を取つてぐつと呑む）

杉田　金井君！

金井　何だね。

杉田　（沈痛に）君は可哀さうな男だ。

（次の瞬間の沈默の中に、庭の方で音彥の高聲で笑ふのが聞える。それが二人の耳にはまるで先妻輝子の凱歌としか取れないのである。）

――幕――

第三幕

舞臺は第一幕と同じき金井博士の書齋。只違ふのは書寫机がもう一つ增えてゐるのと、置煖爐のある事とである。時は前幕から數日を經過した冬の夜、戶外には風雪が暴れてゐる。

幕のあいた時、舞臺にゐるのは巴子一人である。巴子は爐の火にぢつと見入り乍ら何事か考へ込んでゐる。やがてそこへ湯を湛へた金盥を持つておしげが入つてくる。而して默つて居間の方へ行かうとする。

巴子　おしげ。もう診察は濟んだの。

しげ　いゝえ。これからで御座いませう。今迄はお二人でお話をしてゐらつしやつたやうですよ。

巴子　さうかい。ぢやまだ中々ね。

しげ　何しろ表べはどこ迄も高瀨さんに遊びに來て頂いたやうにして、御診察を願ふのですからね。なか〳〵で御座いますよ。

巴子　ほんとに婆やはよく〳〵氣がついてお吳れだつたよ。默つて放つて置いた日にはお父さんはきつとほんとに氣狂ひになる所よ。

しげ　まさかそれほどお惡くはありませんがね。奧さんもおいでなさらず、何かにつけて手が廻りません所ですか

ら、まあこんな時が私の奉行時でございますよ。

巴子　ばあや。ほんとに私感謝してよ。そこへ行くと私なんぞ氣をもむばかしで何もしてあげる事が出來ないんだもの。

しげ　まあさう御心配なさらずにおゐでなさいましよ。

巴子　何かわたしに出來ることはないかい。お父さんの爲なら何でもするわ。

しげ　今まで通り慰めておあげ申して下されあ結構でございますよ　春にでもなれば旦那樣の御病氣はきつとおなほんなさるに違ひありません。冬のからびた時は誰でも逆上ますからね。ほう！　これはもう少しでお湯がさめて了ふ所でした。では御免なさい。（居間の方へ去る）

（巴子は後を見送つて又物思ひに耽つてゐる。音彥登場。）

音彥　巴さん。君は此處にゐたんだね。

巴子　えゝ。何か御用？

音彥　いゝや、何でもない。（同じく爐の傍の椅子にかける。）お父さんの樣子はどうだい。

巴子　今お友達の方に診察して貰つてるのよ。お父さんはどうしてあゝ急にお惡くおなんなすつたんでせう。

音彥　色んな原因があるらしいね。

巴子　丁度杉田つて云ふ人がいらしつたあの日からですよ。何かあの人がお父樣の氣に障るやうな事をしたんぢやなくつて。

音彥　さうかも知れないね。

巴子　ほんとにあの日が惡かつたのよ。私吃驚したわ。お客樣が歸つてから客間へ行つて見ると、まだお父樣はそこにぢつと坐つてゐらつしやるんでせう。眼から涙ので居るのが夕闇の中で光つて見えたわ。私どうしたのかと思つて訊くと、いきなり私の手をつかまへて「輝子免して呉れ。」つて仰有るのよ。ほんとに私吃驚しちやつたわ。

音彥　うむ。輝子免して呉れつて云つたのだね。

巴子　併し、すぐ私だと解ると、「あゝおまへか。おまへは俺の子だ。」つて、私の手をそれは固くお握りなすつたの。

音彥　ふむ。それから……。

巴子　それから私そつと額へ接吻してあげたわ。

音彥　おまへがかい。そいつは氣障だつたね。

巴子　あらさうお思ひなすつて。ぢやもう今度からよすわ。

音彥　何あによすにも及ばないさ。どうせ先の長くはない老人だからね。

巴子　ほんとにお父さもんお可哀相だわ。あんな年寄でゐ乍ら妙な事ばかり仰有るのだもの。私あなたにももう少し慰めてあげる義務があると思つてよ。

音彦　おや〳〵、御忠告だね。それあ僕だつてどうにかなるものならどうにかしてあげたいさ。實は僕も此頃考へてゐるんだよ。
巴子　考へてるつて、何を？
音彦　お父さんの頭腦をもとへ戻す方法をさ。今のまゝでずん〳〵進まして置くとそれこそ正銘の氣狂ひになつて了ふよ。
巴子　ではどうして癒すんです。
音彦　だからさ。僕はいつか中から考へてゐて、お前にも是非相談しようと思つてゐたんだがね。それを一つやつて見ようかしら。
巴子　それつてどんな事？
音彦　それには是非お前の手を借りなくちやならないんだが。どうだらう。君はやつて見て呉れるかい。
巴子　どんな事だか知らないけれど、私にできる事なら何でもするわ。一體どんな事なの。早くそれから聞かして頂戴よ。
音彦　おまへ先刻お父さんが輝子免して呉れとおまへに云つたと云つたね。
巴子　えゝ。それがどうなの。
音彦　おまへだから云ふが實はそれがお父さんの病氣の原因なのだ。お父さんは僕のほんとのお母様に對して濟まない〳〵と思ひ詰めてゐらつしやるのだ。輝子免して呉れと云ふのがお父さまのほんとの聲なのだ。お父様は「許す」と云ふ一言が聞きたくて悶えてゐるのだ。
巴子　だつてもう死んだ方がそんな答をする筈がないぢやありませんか。
音彦　だからかはりにおまへが云ふのだ。
巴子　私がどうして代りに云ふの。
音彦　それは方法がある。それを僕が考へ出したのだ。兎に角お父さんは許すと云ふ一言さへ聞けば安心してきつと舊通りの頭に歸るに違ひない。どうだね君はやつて見て呉れないかね。
巴子　ぢや私が只さうさへ云へばきつとお父様はお癒りなさると云ふの。
音彦　よし失敗つたにした所で何でもないからね。
巴子　併しどうしたら私先の奥さんの代りになれるでせう。あれつきりお父様は私を間違へて輝子免して呉れなんぞと仰有りはしなくてよ。
音彦　それには一つ方法があるんだ。（立上つて）　鳥渡お待ち。今其材料を持つて來るから。
（音彦急いで去る。巴子半分疑はしいやうな氣持で見送る。居間の方よりしげ來る。）
巴子　もう濟んで。

しげ　えゝ只今高瀬先生が何か訊いてゐらつしやいます。
巴子　先生は何とか仰有つて。
しげ　いゝえ。あとで伺ふつもりですの。
巴子　さうお。御苦勞だわね。
しげ　いゝえ。どう致しまして。（去る）
（しばらくして晋彦、手に母の遺品なる衣類を持つて入り來る。）
晋彦　これだ。
巴子　これは何。
晋彦　いつか話した母の着物だ。これをお前が着るんだ。
巴子　着てどうするの。
晋彦　實はね。お父さんが僕に話した幻覺から考へ附いたのだがね。お父さんは此頃頻りに母の幻影を見るらしいのだ。父がよく獨りで此處に（書寫机を指して）坐つてゐる事があるだらう。あの時ひよつと一種の幻覺に襲はれるのださうだ。物を書いてゐると靜かにうしろの戸が開いて僕の母がそつと入つて來るのださうだ。それが見ないでゐてもよく解るんだとさ。先づ戸外で足音がする。今閾の外に來た。今、戸を開いた。今中へ入つたと云ふやうな具合に、妙な想像を起すことがあるんださ。
巴子　まあ！　ほんとの神經ね。
晋彦　さうさ。それはと云ふのも結局母に「許す」の一言を得たいと悶えてるためなのだ。だからね。一つそれに乘じてやつて見ようぢやないか。
巴子　だけどそんな事しても大丈夫？
晋彦　大丈夫とも。先刻も云つた通り失敗つた所が笑ひ話さ。少し位叱られたつて僕がすつかり責任を負ふから大丈夫だよ。
巴子　ぢややつて見ませうか。私も何だか少し面白くなつて來てよ。
晋彦　さうさ。僕も實は半分興味が手傳つてるんだよ。此處の生活も實に單調で堪らないからねえ。（間）ぢや一つこれを着て見給へ。
巴子　（衣類をとり上げて）だけど私そんなに似てゝ。
晋彦　あゝほんとに似てゐるよ。それに父の見る幻影もどうしたものか新婚當時の若い母の姿だと云ふから、今の君ならきつとそつくりだよ。
巴子　（自分の着物の上から羽織つて見て）昔風だけれどいゝ柄ねえ。
晋彦　（少ししんみりと）僕の母にもさうした時代があつたのだ。
巴子　ゆきたけもすつかり合ふやうだわ。（少し身體を斜に媚びさして）似合つて。

音彥　あゝ。
巴子　だけどあなたのお母樣は、きつとこんなに見つとも
　なくはなかつたわ。
音彥　なあにおまへの方がずつと綺麗だよ。
巴子　嘘よ。
音彥　ぢや少くとも僕には可愛いね。
巴子　あら。（衣類をとる）そんな事云ふんなら、私やめ
　るわ。
音彥　ぢや何も云はないからね、一つやつて見てお呉れ、
　ね。
巴子　何日？
音彥　今日もう少しあとで。僕がうまく時を見はからふか
　らね。
巴子　ぢや向うへ行つてこれを着て見ませう。此處ぢや着
　られないわ。
音彥　さうだね。
巴子　芝居をするやうで何だか六ケ敷さうだわね。
音彥　何にも六ケ敷い事はありやしない。只お父樣が一人
　でこゝにゐらつしやる時、あそこの戸をそつと開けて入
　つて來たらそれでいゝのだ。
巴子　そしてお父樣が間違へたら、「免しますわ」と云へば
　いゝのね。
音彥　そしてなるべく本體の解らぬ中に室を出て了へばい
　いんだ。
巴子　解つたらどうしませう。
音彥　「お父さん、ばあ！」とでも云ふさ。
巴子　さうね。笑つて了へば叱られやしないわね。一つ此
　處で練習して見ませうか。
音彥　うむ。それも面白からう。ぢや僕がお父さんになる
　から、おまへは入つておいでよ。
巴子　（笑ひ乍ら）えゝ。（戸の外へ去る）よくつて。
音彥　（正面を向いて誰れに云ふとなく）さあ諸君！　こ
　の人形芝居がどうなつてゆくか見ものですよ。（皮肉な
　微笑を湛へ乍ら、父の机に向つて椅子に坐る）もういゝ
　よ。
　（巴子そつと戸をあけて入り來る。音彥俄く迄幻覺に
　襲はれた心持で、ふいにふり返つて巴子をみつめる。
　そして「輝子、ゆるして呉れ。」と云ふ。巴子「許しま
　すわ。」といふ。二人は眞面目な顏を見合ふと、思はず
　笑ふ。この景は極めて印象的に演伎されねばならない。
しげ　（入り來る）何をなすつてゐらつしやるんです。
音彥　うゝむ。何でもないんだよ。
しげ　（子供を叱るやうに）又お悪戯はおよしあそばせ。
巴子　何でもないのよ。何でもないのよ。

（二人は退場する。しげ呆やり二人の後を見送つてゐたが居間の方へ行く。一旦入つて又醫師高瀬勇と一緒に出てくる。）

しげ　（戸を閉めて了ふと）　先生。

高瀬　ふむ。

しげ　如何でございませう。

高瀬　先づひどい神經衰弱とでもいふ外はないね。それに心臓が大變弱つてゐるらしいから、氣をつけなくちやいけないよ。何より安靜が一番だ。

しげ　出來るだけ氣をつけます。

高瀬　精神を激動させるやうな事をすると、危險な事が起らないとも限らないからね。

しげ　そんなにお悪いですか。

高瀬　いや。今の所は何でもないんだ。けれども進むと困るからね。一體何が原因だかはつきりした所を云はないから解らないが、此際與さんでも歸つて來れば、却つていゝかも知れない。

しげ　私もさう思つてゐるのでございますよ。

高瀬　なるべくおまへもさう盡力をするんだね。

しげ　はい。

高瀬　ぢやあとで薬をよこすから、取りに來てお呉れ。

しげ　どうもいろ／＼有難うございました。

高瀬　呉々も氣をおつけよ。（聲をひそめて）　どうも俺にはあの晉彦と云ふ息子さんが危なつかしくていけない。二人ともさう親切ではないやうだね。

しげ　いゝえ。まだお若くて、ほんの子供ですからね。

高瀬　とに角、おまへが氣をつけてゐて呉れさへすれば心配はないんだ。では失敬。（出てゆく）

（しげ醫師を見送つて玄關の方へ去る。それから又戻つて來て、居間へ去り、金盥を持つて歸つてくる。別な戸口から晉彦と行き合ふ。）

晉彦　お父さんはどうしたい。

しげ　只今よく休んでおゐでゝすよ。

晉彦　さうかい。醫師は何と云つたい。

しげ　矢張り神經衰弱の強いのですつて。

晉彦　ふむ。

しげ　それに心臓も弱つてゐらつしやるから安靜にして置かないといけないのですつて。

晉彦　うむ。それから。

しげ　あなた方さへ氣をつけて下されば何も、心配な事はないんですつて。

彦晉　それあ氣をつけるよ。

しげ　（戸口の方へ歩み乍ら）　では氣をつけて留守居をしてゐて下さい。私は今の中に鳥渡薬を頂きに行つて參り

ますから。

彦吉　心配しなくつてもいゝよ。

（二人は共に同じ玄關の方の戶口へ去る。長い間。遠くで、さびしい汽笛の鳴るのが聞える。一としきりの靜寂に次で風雪の音又起る。しばらくして金井博士居室より入り來り、書寫卓に坐つて、原稿、ノォトなどを取出し、陰慘たる眼を光らして何事か書き始める。長い間。風の音益々激しく、これより曲の終るまで、絕えず會話の間を點綴する。戶をたゝく音がする。博士少しぎよつとして立上る。）

金井　（標へ聲で）おはひり。

（思ひがけなく夫人美代子が入つて來る。）

美代　あなた！

金井　（ぢつと見定めて）あゝ、おまへか。どこへ行つて來たんだ。

美代　兄の家にゐました。

金井　兄さんは朝鮮から歸つたかい。

美代　（不審な面持）いゝえ、兄は朝鮮へなんぞ行きやしません。

金井　さうだつたかねえ。時におまへは僕の賴んだ用をして來て吳れたらうね。

美代　何でございます。

金井　ヂギタミンを取つて吳れる事さ。

美代　いゝえ。知りませんよ。おしげにお賴みなすつたんでせう。

金井　あゝさうだつたかも知れん。

美代　あなたは御病氣は如何ですの。大變おやせなすつたやうですよ。

金井　うむ。兎に角丁度いゝ時に歸つて來て吳れた。呼びにやらうと思つてた所だつたよ。早速だが俺がかうしてゐる間に一つ枕をなほして吳れ。あれは左の方へ心が凹まつて痛くて眠られないんだ。

美代　それは不可ませんね。

金井　早くなほして吳れ。その間に俺は第五篇を訂正して了ふ。

美代　（不安な感じて）あなたそんな御無理な御勉强をなすつてもいゝのですか。

金井　うむ。今日は大變工合がよく捗るよ。

美代　おしげはどちらへ行きました。

金井　彼女は庭にゐる。

美代　庭ですつて。

金井　（何か書き乍ら）さうさ。兎に角早く枕をなほして吳れ。あれが氣になり出すと仕事が出來ないよ。早くなほして吳れ。

美代　どこにあるんですの。
金井　どこにつて室さ。お前さつき置いたぢやないか。
美代　あなた！　私がおわかりにならないのね。
金井　(首をあげて)　おまへか。おまへは美代子だ。(じろ／＼見て)　今日は藤色のお召を着てゐないね。
美代　藤色のお召？
金井　そら、裾に車の形のある……。
美代　いゝえ。存じませんよ。
金井　さうだつたかな。兎に角その着物は少し似合はないね。行つて着かへるがいゝ。
美代　えゝこれは雪で少し濡れましたから。では御免を蒙つて着かへさして頂きます。(去らうとする)
金井　烏渡お待ち。
美代　何でございます。
金井　左の手で左の耳朶を抑へて御覽。
美代　(悲しさうな顔をして)　まだあなたは……。
金井　美代子。一度して見せて呉れ。頼むよ。
美代　よろしうございます。私は何でも致しますよ。(さうする)　そんなことをする自分より、あなたの方がよつぽど可哀相ですからね。
金井　(ぢつとしばらく見てゐる)　もう少し横を向いて呉れ。あゝよし。うむ。もう行つて呉れ。そして向うの室に待つてゐて呉れ。俺もすぐ行く。何しろよく歸つて來て呉れた。俺は嬉しいよ。併しまづ之れを片づけなくちや。昨日は一日怠けて居たからな。少しやり出すと後ろの戸をあけてあいつが來るのだ。
美代　あいつつて誰です。
金井　藤色のお召を着た奴さ。
美代　だれでせう。
金井　そうつと後から入つて來るんだ。あの女が……。
美代　あゝ巴子が悪戯をするんですね。
金井　(低く)　あの女だよ。
美代　それは不可ませんね。
金井　今日はまだ來ない。だから今の中にして置くんだ。おまへは向うへ行つてゐろ。用がないのに來ちやいけないよ。
美代　はい。(少し不審な面持で居間の方へ去る)
(しばらく間。晉彥入り來る。)
晉彥　お父さん。
金井　(首をあげて)　うむ。おまへか。(又書き初める)
晉彥　お母さんが歸つて來たやうですね。
金井　うむ。(書きつゞける)　奧にゐる。
晉彥　(近よつて机上を見る)　お父さん。何をしてゐるんです。あなたは書いた字の上へ何か書いてゐますよ。そ

んな事をなすつちや皆んな解らなくなるぢやありませんか。

金井　うん。これか、これは俺が福岡にゐた時分のノオトだ。馬鹿な事が書いてあるからなほしてゐるのだ。此時分は俺も馬鹿正直だつたものだ。見ろ、此處にこんな事が書いてある。「九頭のモルモットに試みしも九頭とも斃死せり」だとさ。こんな事を書いて置いたノオトが殘つて居ちや、俺の仕ごとはいつになつても出來上りやしない。（ぐつと力を入れて棒をひく）

音彦　あゝお父さん、そこぢや無いぢやありませんか。違ひますよ、そこは。それは藤井君の書いた方ですよ。（大聲を立てる）

金井　（怒つて）おまへは仕事の邪魔に來たのか。出てゆけ。何をぐづ〳〵してゐるんだ。折角捗つてる處へ來て。今日はあれが來ないからいゝと思つてゐたら、貴樣が來て妨げるんだな。

音彦　いゝえ、お父さん。妨げなんぞしやしませんよ。

金井　いゝから行け。輝子とおまへは一緒になつて俺の仕事を邪魔をするんだ。

音彦　（冷かに）さうですかねえ。お父さん。あとで母が來たら訊いて御覽なさい。母は今日もきつと來ますよ。藤色のお召を着て……。

金井　おまへはあれを知つてゐるのか。

音彦　だつてお父さんの口からきいたんですもの。

金井　あゝもう行つて呉れ。行つて呉れ。

音彦　行きますとも。（出てゆき乍ら）いづれ母がよくお禮を云ひませうからね。（退場）

（金井博士低く呻つて後を見送り、頭を兩手で抑へてゐたが、やがて氣を鎭めて又仕事にかゝる。眼が輝いてくる。風の音。次で大沈默。博士ふと筆をとゞめる。しばらくして靜かに戸を開いて巴子、藤色の着物を着て入つてくる。戸の處でぢつとしてゐる。）

（博士幻覺になやまさるゝ體。やがて思ひ切つて後ろをふりかへり、巴子を見る。いたく驚きたる樣子。）

金井　（立上つて、手を伸ばし乍ら）あゝ輝子か。――（と云つて、歩き出さうとすると、忽ち異樣な呻りを發して、眞直に床の上に倒れる）

巴子　あつお父さま！　（驅けよつて）兄さん！　大變です。大變です。お父さまが……。

音彦　（後から戸を開けて入り來り）どうした。どうした。

巴子　お父さまが氣絶なさいました。どうしませう。どうしませう。（博士の體の上に泣き伏す）

音彦　うん。たうとうからなつたか。

美代　（聲に驚いて居間より入り來る）どうしたんです。

（金井博士を見て）あつ！（駈けよつて）あなた！
どうしたんです。急にこんな……あなた！　あなた！
（と呼び立てる）

しげ　（次で聲を聞いて入り來り）まあ皆樣！　一體これは……。あつ！　旦那樣が……（駈けよつて）旦那樣！　旦那樣！　あゝもう息が絶えてお了ひなすつた。

巴子　お母樣、どうしませう。どうしませう。

晉彥　（脈を見て）あゝもう脈も止まつてゐる。

美代　おしげ！　早くお醫者樣を呼んで來ておくれ。早く――。

しげ　（あたふたして）はい。（去る）

巴子　兄樣。どうしませう。どうしませう。

晉彥　もうおそい！　仕方があるまいよ。

美代　晉彥さん。あなた一つ人工呼吸をして見て下さい。

晉彥　僕どうするんだか知らないんです。

（此時急に助手の藤井が入つてくる。）

藤井　どうしたんです。あつ！　先生が倒れておゐでゞすね。（近よつて診る。皆々無言）これはいけません！
どうも心臟痲痺らしい。（靜かに四邊を見廻し）一體どうしたんですどうしてこんな事になつたのです。

巴子　みんな私のせゐなんです。私がわるいんです。私をどうともして下さい。（泣く）

藤井　解りませんな。奧さん、一體どうしたんです。

美代　私にも解らないんです。私は今歸つて奧の間で着かへをして居りますと、急にこゝで大聲がするものですから、來て見ると此始末なんです。私は何が何だか……さつぱり解りません。

晉彥　藤井君！　それは僕が知つて居ります。これはすべて僕のした事です。巴さん。まあさう泣くのはおやめ。これは一つも君のした事ぢやないのだ。

巴子　（泣き乍ら）いゝえ私がしたのです。私がわるいのです。

晉彥　いや。みんな僕が畫策した事だ。おまへは只僕の手先に使はれた道具に過ぎないのだよ。此恐ろしい人形芝居の幕內には黑衣を着た恐ろしい惡魔がゐるのだ。それは外でもない、此俺なんだ。

藤井　で君がどうしたと云ふんです。

晉彥　君は父のよく見ると云ふ幻覺の話を知つてゐたね。
（藤井うなづく）僕はあれを利用して、巴子さんを唆かし、死んだ母のやうに裝はせて父と對決させたのだ。

藤井　何のためにそんな事をしたのです。

晉彥　父の母に對する煩悶をいやが上に大きくするためにさ。

藤井　では君はあの上弱つた先生を苦しめる氣でしたので

すね。

音彦　さうだ。

藤井　あなたは先生が心身共に弱つておゐでの事を御存じでしたらうね。そんな事をして精神に激動を與へると危險な效果になる事位ゐ御存じでしたらうね。

音彦　えゝ。満更知らない事もありませんでした。

藤井　ではあなたは初めからかうなる破局を豫想してしたのですね。

音彦　いや。まさかかうまで激しい效果があらうとは思ひませんでした。それは天の仕事です。僕は只父の悔恨のさまを少し精しく見たいばかりだつたのです。

藤井　併しそれは辯解にはなりません。法律の罪こそ受けないけれど、これは立派な殺人です。あなたは恐ろしい下手人です。

音彦　さうです殺人です。而も立派な殺人です。併しさう云へば父は母を殺しました。而して私をも殺す處でした。嘗つて父の犯した殺人が道德的にも罪にならぬなら、勿論今の私にも罪はありません。僕は法律上は勿論道德的にも公明正大です。

藤井　ではあなたはあの離婚は罪惡だとお考へなのですね。私の聞いた處では確かあの離婚は双方合意の上なすつた正當なものだつたと云ふぢやありませんか。

音彦　成程母も同意しました。併し同意するより外に道がなかつたのです。あの場合つまらぬ抗辯は只父の疑惑を大にするに過ぎませんからね。母も日本の女性として最も賢明なる泣寢入をしたのでせうよ。

藤井　では內心はともあれ、あなたの母にも科(とが)はあります。

音彦　さうです。私は父の罪を憎むと同時に母の罪をも恨んでゐます。併し母は背負へるだけの罰を負うてもう地獄へ行きましたからね。

藤井　では君は天に代つて父に罪を加へると云ふのですか。あなたにそんな權利がありますか。

音彦　ありますとも、立派に正當な理由があります。嘗て父は、自ら一個の感情のために私を犧牲にして顧みませんでした。私の意志を全然度外視して、氣儘に親たるの權利を揮つて私の前途を暗くしたのです。成程私には當時親の個人主義に反抗して子たるの權利を主張する意志がありませんでした。併し、あの時の父の行爲があなたの云ふ通り正當であるなら、今日僕が成長して來た子たるの權利を主張し、嘗て受けた不幸のために、自分の感情の清算をするのに何の不都合があるのです。嘗て父は父で十分父の權利を揮ひました。今は子が子で子の復讐をするのです。

藤井　復讐ですと？

晋彦　さうです。これこそほんとうのベラ・ヴェンデタです。あゝ、これこそ親たちの離婚によつて不幸の限りを嘗め盡した子にとつての福音です。親親たらずんば子も子たらず。これが吾々の銘言です。どうです解りましたか。

藤井　君は恐ろしい事を云ふ。

晋彦　兎に角僕はもう此家でするだけの事はして了つた。では左様なら。いづれ廣い空間と、永い時間の間にはあなた方と公園か街頭で會ふ事もありませう。よし會はぬにしても、離婚によつて逆境に立つた子のために此の主張を傳道して歩く男の話を聞いたら、それが僕だと思つて下さい。

藤井　では君は此儘すぐ出て行く氣なのか。

晋彦　(之れには答へずに)　左様なら、皆さん。(父の死屍を指して)　皆さんで此人のために祈つて下さい。此人も私同様不幸な人だつたのです。今となつては私さへ此人のために祈つてやりたい氣がします。併し私の手は祈るには餘りに汚れ過ぎてゐますからね。左様なら。

(唖然としてゐる三人を殘して出て行く。)

藤井　(やがて吾に歸つて)　怖ろしい男だ！　(外で口笛の聲が聞える。藤井急いで窓の處へ行き、窓をあけて戸外を見る。吹雪が激しく吹き込む。藤井はぢつと見てゐる。)

美代　もう行きましたか。

藤井　(戸を閉めて)　眞つ直に、吹雪の中を口笛を吹き乍ら驅けて行きました。

(皆々無言。藤井痛ましげに死屍を凝視する。吹雪の音。)

――幕――

歸去來（田園劇四幕）

人物

三瓶覺右衛門　老農小地主（六十歳位）
同　あさ　その妻（五十五六歳）
同　覺江　その長男（二十六歳）
同　覺次　その次男（二十三歳）
伊東德次郎　叔父海員（四十五六歳）
佐久間よね　隣家の寡婦（四十歳位）
同　さよ　その娘（十九歳）
相良賢造　村役場書記（二十三四歳）

時代

現代。正確に云へば明治四十年頃。時日の經過は、第二幕と第三幕との間に、七年を要す。

場所

東北地方。ある小都會より、約一里を離れたる農村。

第一幕

小地主三瓶覺右衛門が家の裏手。納屋の前。

正面には長く軒低き納屋。其軒下に材木、梯子、唐箕、農車の毀れ、等其他、積まれ又は立てかけられあり。納屋の一方の端には、更に低き孫庇ありて、其軒は地上より高さ三尺を出でず。

左手は少しく淺黄ばみたる竹藪にて限られ、其間より隣家へ小徑を通ず。

右手にはやゝ大なる柿の木あり。それを中心として、丈高き稻架を作り、三段ほど一面に稻を架け連ぬ。柿の葉は殆んど散り盡して、空を絡るが如く屈曲したる枝々には、點々と木醂しの實を見るのみ。

納屋と稻架の間より、僅に榛の木立を透して、收穫時の田野見ゆ。

晩き午後。深く、悲しきまでに明るき日ざし、地上一面に沁み渡りて、物の影やゝ長し。

渡り鳥の聲も聞えず。竹の葉すら戰ぐ音なし。しんと靜なる中に幕あく。

弟覺次、低き納屋の孫庇に半ば腰かけ、半ば凭れて、わざとらしき迄に物思ひに沈み居る。髮を少し長く伸ばしたる瘦形の青年。手に會話の獨習書を持てり。長き間。

そこへ村役場書記相良、右手稻架の前より入り來る。

髭も髪を長く伸し、薄髯を蓄へたる角顏の青年。

相良　(覺次を認めて) あ、覺次さん、其處に居たのかい。

覺次　(夢より覺めたやうに身を起し、少し不興げに) うむ。何だい。どうしたんだい。

相良　今母屋の方さ行つたら、貴方ア背戸に居るつちふから、廻つて來て見たんだわい。そんぢえも直ぐ會へてよかつた!

覺次　(わざと白ばくれて) 何か急な用でもあんのかい。

相良　急な用ちふ譯でもねえけんぢよ、覺次さん。俺ア鳥渡貴方の事に就て、ヘンな話を聞いたもんだからない。そんで眞實か嘘かと思つて、貴方に聞きに來たんだわい。

覺次　ふうむ。何だい。其ヘンな話ちふのは?

相良　ヘンちふ譯でもねえけんぢよ、何だか貴方ア急に東京だか横濱だかさ行くんだちふでねえかい。それア一體眞實かい。

覺次　うむ。其話だら、まア眞實だわい。――だけんぢよ、どうしてそんな事が解つたい。誰から聞いたんだい。

相良　あの、小使ひの爺さんが、お隣りのおよね婆さんに、聞いて來たつちふんだけんぢよ、話が餘り急なんで、何かの間違えでねえかと思つて、そんで俺ア聞き糺しに來たんだわい。遠藤助役なんぞも嘘だべつて云つてゐたからない。――さうかい、そんぢや矢つ張り眞實かい。ふうむ。――だけんぢよ、何だつて又、そんなに俺等に匿して、そんな遠くさ行く氣になつたんだい。

覺次　別に匿してゐるつちふ譯でも何でもねえけんぢよ、急にさう云ふ事になつたもんだからない。面倒だからいつそ此儘誰にも知らせねえで、行つちまふべと考へてたんだわい。けんぢよ、貴方に知れつちまつたんだら、はア仕方がねえ。――實はない。一昨日から三春の叔父さんが、自家さ歸つて來てゐてない。

相良　うむ。さうだつてない。

覺次　其叔父さんちふのが、西洋料理の料理人になつて、今は亞米利加通ひの汽船に乘つてゐるもんだからない。色々船の話や横濱の話を聞いてゐる中に、何だか急にさう云ふ處さ行つて見たくなつてない。急に、叔父さんが歸る時、一緒に連れて行つて貰ふ事になつたんだわい。

相良　ふうむ。さうかい。そして一體、何日發つんだい。

覺次　叔父さんは明日歸るちふから、明日一緒に行くべと思つて。――

相良　え、明日?

覺次　うむ。明日朝早く。

相良　それやア又えらい急でねえかい。明日なんて。ほんとに飛んでもねえ。そんな急な話て在つかい。――どうにかもうちつとゆつくり、二三日先さ延ばせねえのかい。

覺次　うむ。そんぢやつて、叔父さんに頼んで、歸る時無理に一緒に連れてつて貰ふんだもん。そんな勝手な事は出來ねえわい。それに叔父さんと一緒に連れてつて貰はねえと、横濱の町の樣子もよく解んねえし、汽船なんて寫眞で見たつきり、一度も本物を見た事せえねえんだからない。どうしたつて、明日一緒に行かなくつてなんねえんだわい。

相良　それはさうだべげんぢよ、そいつは又困つた話だなア。そんぢやアもう送別會一つ出來ねえでねえかい。實はない、貴方が遠方さ行くちふ噂を聞いた時、助役とも相談して話を決めたんだがない。若しそれが眞實だつたら、一つ村の青年會で盛大な送別會を催して、首途を祝はうちふ事になつてるんだけんぢよ。それぢや廻状一つ廻す事も出來ねえでねえかい。

覺次　いや、そんな事だら、どうかやめにして下さんしよ。俺アそんな事をして騷いで貰ふのが厭だから、誰にも云はねえで、こつそり行つちまふべと思つただから。（感傷的に自棄な口調で）俺が今度出かけるのなんざア、そんなに青年會の人達に、首途を祝つて貰ふやうな、大した事でも何でも無えんだから。……

相良　そんぢやつて村の若え手合も、貴方に挨拶一つしねえで、遠くさ行かれつちまつたら、餘りいゝ氣持はしねえべでねえかい。貴方だつて何も、そんなに夜逃げ同樣に、發つて行かねえだつていゝでねえかい。

覺次　（少し激越に併し又冗談らしく）いや、夜逃げに違ひないんだもん。尤も村に見棄てられたんだか、村を見棄てゝ行くんだか、俺にも分らねえけんぢよ。……

相良　馬鹿な事云ふもんでねえわい。貴方のこつたもの、どうせこんな白壁の土藏一つねえ、開墾の痩せ村に居たつて初まんねえから、いづれ横濱なり東京なりで、一と旗上げて歸る氣だつちふ事は、ちやんと俺には分つてゐるぞい。だけんぢよ、向うさ行つて一體何になる積りなんだい。そこは貴方の事だから、間違えはあるめえけんぢよ。

覺次　さア、何になんだか、はつきりとは俺も考へてゐねえんだわい。――さうだなア、まア兎も角も横濱つちふ所さ行つて見て、惡く行けア波止場人足か、うまく行つたら船に乘せて貰つて、ボーイでも何でもする積りなんだげんぢよ。……まア其中にア何かうまい仕事にぶつかつて、成功して歸つて來られりやア儲けもの、成功しなけれやア、一生歸つて來ねえで、何處かで野倒れ死をする覺悟なんだもん。

相良　そんな事。貴方の事だから、成功するには違えあるめえけんぢよ、よくまア一人で思ひ切つて、さう云ふ所

さ出掛ける氣になつたもんだない。其意氣に對しても、皆で一つ首途を祝ひてえもんだ。――どうだべ。そんぢやア一つ是から、俺ア直ぐ役場さ歸つて、助役ともよく相談の上、何とか馳け廻つて皆に知らせる事にしつから、今夜一つ心ばかりの送別會をするやうな都合にして呉んにえゝかい。そんなら好かんばい。

覺次　いや、その事なら何ちゆつたつて、止めてお呉んなんしよ。そして俺が發つた後で、貴方から宜しく村の手合に云つて下さんしよ。それに今夜は家の者だけで、何だか送別會みてえものをするつちふから。

相良　さうかい。それやアどうも殘念だない。

覺次　なアに、送別會なんぞして貰ふよりは、後で皆に名殘り惜しがつて貰つた方が、何ぼ氣持がいゝか知れねえからない。そして若し成功でもして、錦を飾つて歸つて來たら、其時こそ歡迎會でも、祝賀會でも何でもして貰ふべ。だから其時まで、どうか待つてゝお呉んなんしよ。ひよつとすれア、一生そんな時は來ねえかも知んねえけんぢよ。……

相良　さうかい。貴方がさう迄云ふんだら、貴方も忙しかんべから、今日お互に無理をして、氣ぜはしねえ送別會なんぞするより、貴方が成功して歸る日を、樂しみに待つてる事にしやすべえ。ほんとに心殘りだけんぢよ。なア。

覺次　どうかさう云ふ事にしてお呉んなんしよ　其代り歸つて來る時にア、此方から頼んで花火でも何でも上げて貰ふから、――どうか助役さん初め、青年會の人たちには宜しく云つてお呉んなんしよ。ない。さう云ふ俺が氣持だけは、他の人だら兎も角も、貴方にはよく分つて居つぺから。俺アかうして發つ前に貴方に會へて、幾分か心持を話しただけで、もう滿足なんだから。ない。（感傷的に）貴方もはアどうか是で、後何にもしねえでお呉んなんしよ。そして俺が發つ迄、貴方一人で默つて居てお呉んなんしよ。皆がわや／＼來ると困つから。ない。頼んだぞい。いゝかい。

相良　はい。そんぢやら俺も、今夜だけまア知らねえふりをして、皆にア默つて居るわい。後で恨まれつぺけんぢよ。でも、さう迄貴方が云ふんだから、此處ん所は俺が青年會の代表をして、今夜お別れに來た事にして置くべえ。――だが、貴方が居なくなると、青年會の文化部も淋しくなつて困んなア。あの回覽文庫の方は、どうかしてやつて行けつぺけんぢよ。文化講演會の方は、俺達にアうまく出來れやアいゝが。……

覺次　でも、今度小學校へ來たあの今井先生が居つから、まアあの人でも中心にして、何とか續けて行つたら好かんばい。折角一と月おきに玆まで二年も續けて來たんだ

から、
相良　まアそこらは何とか、俺も一つ骨を折つてやつて見やすから、安心して成功しておいでなんしよ。其頃はひよつとすると青年會でも、一つ理想的な公會堂でも建ててゐるか分りやせんぞい。
覺次　建てゝなかつたら、其時ア俺が一つ寄附して、建てる事にするわい。
相良　そんぢやア、まア其時まで建てねえで待つてゐるかな。
覺次　ほんとに其時にやア、學校でも避病院でも公園でも競馬場でも、何でも建てゝ寄附しつちまふわい。何ぼ金なんぞ儲けて來たつて、結句そんな事でもしなけれやア、仕方がねえからない。
相良　そんぢやらば猶の事、早く成功して歸つて貰はねえとなんねえ。其時は俺ア何よりも村の收入役にして貰つて、寄附金の鞘を取つて暮してえもんだ。はゝゝは。
覺次　そんな事になると不可ねえから、まア當分は成功しねえ事にするかな。
相良　いや、ほんとに當にして待つてゐるぞい。其方が俺が福島さ行つて、普通文官の試驗を受けるより、まだしも見込があるちふもんだからない。はゝゝは。
覺次　そんぢやまア當にして待つてさんしよ。（淋しく笑ふ）　何年先の事だか知んねえけんぢよ……。
相良　全くそれ迄は、俺も淋しいなア。是でも俺ア、本當の話相手ちふのは、貴方の方ではさうでもあんめえけんぢよ、覺次さん一人きりだからなア。ちやんと高等小學を卒業したのは、貴方と俺と、大新田の吉田きりなんだもん。
覺次　淋しいて云やア。俺が方がよつぽど淋しいわい。
相良　そんぢえも、貴方の方は張合があつからいゝわい。當分は殘つた人の方が餘計に淋しいに違えねえ。――貴方ん所の哥兄さんなんぞも、さぞ淋しがつてべ。あゝして貴方を頼りにして、自分は學問が出來ねえ代り、貴方を中學校さまでやつた人だもん。
覺次　（少し暗い顏をして）なアに、それ程でも無かんべわい。――それに哥兄には嫁まで定つて、家の田畑を耕してれやア何の苦勞も無えんだもの。
相良　さうだつてない。隣りのおさよつぽう、たうとう矢つ張り貴方ん所の哥兄さんさ、嫁に行く事に定つたんだつてない。覺江さんも、黙つてツけんぢよ、あんでなかなか隅にやア置けねえんだたい。――消防の小頭にやア選擧されるし、いゝ嫁は貰ふ事になるしするもんだから、婚禮の晩にやア、二人が床入りになるつ頃、何處かの藥塚さ火でもつけて、半鐘を打つ叩いて吳れべつちふ相談

を、内々若い手合でしてるちふ話だぞい。

覺次　（浮かぬ苦笑をして）　そんな目に會つちやア哥兒も堪らねえな。

相良　ほんに。全くやり兼ねねえ手合が揃つてるからな。俺だつて其時ア、喞筒の筒口位、貴方が家さ向けねえとも限られねえ。

覺次　（淋しく笑つて）　ふん。まア俺は明日發つちまへば、そんな惡戯騷ぎの飛ばつちりを受けねえで濟むわい。――（音を變へて）　そんなら相良さん。どうか村の手合には宜しく頼んだぞい。今夜は默つてゐて、明日俺が發つちまつてからない。

相良　えい。それやア確に引受けやした。

覺次　そんぢやらこれで、貴方とも當分永い間の別れつちふ事にしやせう。俺も是で貴方と是だけ話して別れゝば、もう本望ちふもんだから。

相良　さうだない。そんなら俺も、これで名殘り惜しいけんぢよ、別れるつて事にしつぺ。明日の朝は何時頃なんだい。せめて俺一人でも、明日の朝見送りてえんだけんぢよ。……

覺次　いや、ほんに其心配だけは、お願えだから、しねえで下さんしよ。何にもかも叔父さん次第なんだから、時もよく決つてゐねえし、なまじ、未練が殘るやうなもんだから。……

相良　さうかい。それぢや俺も是で、貴方が成功して歸るまで、當分會へねえちふ譯だない。――（近寄つて）　そんぢや是でお別れにしやす　せい／＼身體を大切にして、まアア一生懸命お稼ぎなんしよ。左樣なら。丈夫で行つておいでなんしよ。

覺次　左樣なら。呉々も後で皆の人に宜しく。

相良　畏りやした。左樣なら。

覺次　左樣なら。

相良　（行きかけて）　そして俺だけにも、時々は便りをしてお呉んなんしよ。

覺次　えい、暇があつたら貴方も、でも俺が方にはそんな餘裕があつかどうだか。……（打切るやうに）　ぢやア左樣なら。

相良　左樣なら。父や哥兒さんに宜しく。

（相良見返りながら、來た方向へ去る。風少し出で、、日影きらつき、竹藪戰ぐ。覺次、さすがに長い間、相良の去つた方を見送つてゐたが、吐息を一つふーつと吐き、先刻急いで懷中した會話書を取出し、心落着けて讀み初める。間。）

（左手、母屋の方より、兄覺江、鍬を背にして出て來る岩疊な、寡默らしい青年、野良着を着てゐるので、

すつかり百姓じみて見ゆ。）

覺江（弟を認め）おい。まだこんな所に居んのか。

覺次（浮かぬ顏で）あゝん。

覺江　まあちつとおッ母アん側さ、行つて居ねえでもいゝのか。

覺次（少し自棄氣味に）俺もう厭だ。何かッちふておッ母ア泣いたりしてばかり居るんだもん。

覺江　仕方あんめえ。今夜つきりでねえか。

覺次　そんぢやつて、もう話す事もねえし、くどく、何だつてそんな遠くさ行く氣になつたつて、何度も／＼聞かれッと、何ぼおッ母アだつて、俺ア厭になつちまふわい。

覺江（點頭いて、それから島渡思案した末）だがなア覺次。ほんとに俺も、おッ母アとは違ふけんぢよ、何だつてこんなに急に、お前が亞米利加さ行く氣になつたか、ようッく聞きてえと思つてゐたんだがな。俺もまだ得心がいかねえんだ。ぢやから、お前は厭だべけんぢよ、俺に一つ此處で、本心を聞かせて與んねえか。一體、何してそんだ氣持になつたんか。どんな見込があんのか。——

覺次（さう云ひ出した兄の顏を、初めは少し怒つたやうな恨めしげな眼で見返したが、強ひて輕蔑するやうな、淋しい微笑を浮べて）ふうむ。哥兄もまだ、そんな事云つてるんかい。それやアない、幾度も父やおッ母アの前で云つた通り、俺だつて、何日までこんな村に、燻ぼつても居たくねえからない。折角、中學校さまでやつて貰つたりして、英語の一ッ二ッも覺えたんだもん、ちつとはそれも實地に試さねえと、甲斐がねえちふもんだからない。……丁度三春の叔父さんが、あゝやつて來て、船さは只で乘せてやるつちふし、亞米利加さ行けば、何ぼでもいゝ事があるつちふから、急にそんだ氣になつたんだわい。

覺江（ちつと沈鬱に弟を見凝めて）其話は何度も聞いたけんぢよ、俺アどうもそれだけでは、何だか得心がいかねえ。何だか、まつとお前の心に、奥があるやうな氣がしてなんねえ。——お前、何か俺に不足でもあんでねえのか。

覺次（下を向いてゐたが、ちつと正面から兄を見返して）そんだ事はねえよ。そんだ事は。——

覺江　いゝや、そんでねえけれやア、何か父のやり口に、不足でもあるでねえのか。田地田畑をみんな俺に與れて、お前にやア學問もさせたし、學校の先生でも專賣局の役人でも、何にでも成れるやうにしてやつたから、家も土地もやんねえなんて云ふのを、お前恨んでんでねえのか。

覺次（頭を急に振つて）いゝや、そんだ事アねえ、そんだ事ちつともねえぞい！

覺江　いや、ひよつくらして、そんだ事をちつとでも思つてんだつたら、俺にだけでも打明けて呉んろ。俺だつて、お前とは兄弟ちゆつても、不思議な位、本氣で口を開いた事も尠ねえし、俺は父に可愛がられ、お前はおッ母の可愛つ子で、そんだに仲はいゝつちふ譯でもなかつたけんぢよ、俺だつて是でも矢つ張し、兄弟の情合ぐれえは持つてる積りなんだ。だから、お前が父のやり口に就いて、何か不足があつか、家も土地も呉れられねえんで、此處の家を追ん出されるやうに思つてんだつたら、どうかさうだ事は思はねえで、何時までも此家に居て呉んろ。父の云ふ通り、家も田畑も、すつかり俺の物になつたつて、俺ア決して俺だけのものにやアしねえ。決してお前を邪魔になんてしねえだから、どうかさうだ氣を起さねえで呉んろ。父だつて、決してさう思つてる譯でねえだ。俺はヅブの百姓だし、お前は會社員か役人が向きだから、田地なんて無駄だつて思つてんだ　父には父の考へがあるんだ　決して依怙贔屓ちふ譯でねえだ。

覺次　(たうとう堪らなくなつて、激しく)　哥兒。それは何ぼ俺だつて、中等教育を受けたもんだ。それ位な事、分つてるわい。そして、そんだ事、決して思つてなんて居ねえぞい。俺決して、そんだ事で行く氣になつたんでねえんだ。此の家さ不足があんでねえだ。それよりも矢つぱし、どうしても他所さ行つて、一旗擧げて來てえだ。何か成功して、歸つて來てえだ。

覺江　さうか。そんぢやほんとに、何も俺らに不足があつて、亞米利加さ行くつちふ譯では、決してねえんだな？

覺次　無え！

覺江　ほんとだな？

覺次　ほんとにねえわい。

覺江　(ちつと顔を見てゐたが)　さうか。ほんぢやら、俺、つまんねえ事邪推して、惡かつただ。お前があんまし、浮かねえ顔をしてつから、俺アついさう思つただ。堪忍して呉んろ。

覺次　いや、さうだ事。……何とも思つてはゐねえわい。たゞ、やつぱし明日で家にも別れるとなつと、淋しいやうな氣がするもんで、沈んで見えるんだべわい。

覺江　さうだべなア。……そんぢやらまアいゝ。……だけんぢよ、もうちつとおッ母ん所さ行つて、まつと勢のいい顔を見せてやつて呉んろ。

覺次　あん。後で行くわい。

覺江　父にもなア。

覺次　あん。

覺江　そんぢや一とさくり切つて來つからな。(鍬を肩にする)

覺次　……。

（覺江、右手の稻架の後ろ、畑道の方へ去る。覺次其影を見送りもしないで、地面の中程をぢつと見凝めたまゝ、何事か思ひ沈んで立つてゐる。間。）

（左手、隣家に通ずる篁の間より、娘おさよ出で來る。色黑けれど目鼻、整ひたる村娘。覺次を認めると、鳥渡手拭被りを外しながら、そつと近づく。）

さよ　少し不意に呼びかける）覺次さん。

覺次　（吃驚して振向く。無言。取繕つたやうな淋しき笑顏）

さよ　（すつと近づいて）こんな所で何してんの。

覺次　何にも。

さよ　（覺次の顏をぢつと見て）そんぢやつて、泣いてたんでねえのかい。

覺次　まさか。――

さよ　（しんみりと）ほんにない。まさか、泣きもしめえけんぢよ、……貴方がかうしてゐんのも、今夜つきりだもんない。

（四邊を見巡す。）

覺次　（話題を轉じて稍々皮肉に）あゝ、哥兄かい。哥兄だつたら、今畑の方さ行つたから、行つて見さんしよ。

さよ　あら、厭だ。哥兄さんなんぞ見付けてんでねえわい。厭だア。

覺次　（勇を鼓して、弄戲ふやうに）あんな事云つて。……哥兄に會ひに來たんだばい。

さよ　あらゝ、ほんとだぞい。哥兄さんなんぞでねえぞい。おら……

覺次　まア、俺が此處にゐたつて、別に關所をかまへて、邪魔してんでねえんだから、遠慮しねえで行つて來さんしよ。何も、俺が前で、そんなに惡びれつ事アねえぞい。

さよ　（顏を赤くして、激しく打消し）厭だ。何を云つてんだい、覺次さん。厭だぞい、おら。――（下を向いて）おら、貴方が居たら、貴方と話しつぺと思つて、此處さ來たんだぞい。貴方と話し出來るのも、今日つきりだもん。

覺次　そんぢやつて、俺にやア何にも、話はねえでねえかい。――

さよ　それやア、別にねえつちゆへばねえけんぢよ、……何だか、訊きてえ事があつて。……

覺次　そんな胡麻化し云つてねえで、早く哥兄の方さ行きなさんしよ。

さよ　（眞顏で）哥兄さんの方こそ、話する事はねえでねえかい。おら、哥兄さんと話すんのも、何だか氣がつまつて、恐えんだもん。

覺次　恐えけんぢよ。恐えのを通り越すと、ほんに抱きしめられてえやうな、頼りになる所があんだつてない。貴女も、其處ん所さ惚れたんだべ。

さよ　厭だ、又。そんな事云つて、おら、知んねえぞい。おら、別に哥兒さんに、惚れてなんぞゐねえだもの。

覺次　そんぢやつて、嫁に來んでねえかい。

さよ　（急に下を向いて）仕方ねえだもの。惚れてるつちふ譯でもねえけんぢよ、厭な所もねえだもの。——覺次さんは、おらが貴方家さ、嫁に行くのが不足なんだべない？

覺次　え？　何だつて？　そんな事あつかい！

さよ　でも家のおッ母アが、何でも彼でも承知しつちまつて、さう云ふんだもん。おらだつて、厭なことはねえし、仕方がねえでねえかい。——そんぢえ、貴方とは、ほんとの姉弟になんだない。こんな姉、貴方にアほんに不足だべげんぢよ。……

覺次　そんな事はねえ、俺決してそんな事思はねえぞい！

さよ　そんぢやら、そんなに色々云はねえで、今日つきりだもん、じんみり話して呉んさんしよ。お別れでねえかい。

覺次　（すつかりしんみりして了つて）それやアさうだない。

さよ　（進み寄つて）ない、覺次さん。おら、昨日貴方が亞米利加さ行ぐつちふ話を、聞いた時からさう思つてたんだけんぢよない、どうしてそんなに思ひ切つて、遠い所さ行ぐ氣になつたんだい。どうか聞かせて呉んさんしよ。

覺次　（ぢつとおさよを見返して、さりげなく笑つて）皆が皆、さう云つて、俺に聞くけんぢよ、そんなに俺が渡米しんのが、不思議なんかい。

さよ　そんぢやつて、何ぼ叔父さんが來て、ちよつくら勸めたからつて、あんまし急でねえかい。それに、何だか樣子が變だもん。

覺次　さうかない？

さよ　何だかおらにやア、さう見えてなんねえんだわい。何か、あんでねえかつて。——

覺次　俺にだつて、もつと出世してえつ位の、野心はあつぺでねえかい。それに、何ぼ行く氣になつても、悲しいにやア違えねえでねえかい。急なのは、前から思つてたんだけんぢよ、折が無かつたのを、叔父さんが船から歸つて來たんで、不意に燃えついたんだわい。——それよか外の事は、何にもねえでねえかい。

さよ　いや、いくらさう云はれても、何だか、おらにやアもつと、貴方のさう云ふ心の裏に、考へ事があんでねえ

かと、思はれてなんねえんだぞい。尤もそれやア、おらばつかりの氣持かも知んねえけんぢよ。だからどうかおらだけにも、よウく得心が行ぐやうに、まつと詳しく打明けて呉んにえゝかい。そしておらが氣を霽らして呉んにえゝかい。何だか貴方家の事か、おら等が事で、面白くねえ事があんでねえのかい。

覺次　哥兄もそんな事云つてゐた。

さよ　そんな事があんだら、どうせ貴方も、はア行つちまふんだし、おらは他人だけんぢよ、却つてから云ふ他人の方が、云ひいゝ事もあつぺから、おらに打明けんて呉んにえゝかい。それに他人ちふても姉妹になんでねえかい。おらだつて、默つてろつて云へば、口は固えぞい。何もおら等に云つたつて、役には立ちもしめえけんぢよ、何かさう云ふ風な事だら、誰かに云つちまつた方が、却つて氣が霽れるもんだから、なア。

覺次　（鳥渡默つてゐたが、つい其氣になつて）そんぢや貴女は、おらが渡米に就ては、裏にきつと何か別な理由があんだと、どうしても思つてんだない？

さよ　あん、さうだわい。どうしても。……在んだはい？

覺次　そんなに思つてんだつたら、仕方がねえ。俺、貴女にだけ云ふべ。誰にも云ふめえと思つてゐたし、貴女にやア、猶更云ふめえと思つてたけんぢよ、思ひ切つて云つちまふべ。

さよ　おらにやア、猶更云ふめえと思つてたつて、どうして？　矢つ張し、おら等の事が不足でかい。

覺次　いや、それを云つたら猶の事、貴女に厭がられつぺと思つて。――

さよ　どうして？

覺次　どうしてつつて、俺、（下を向いて思ひ切つたやうに）貴女が事でさう氣になつたんだもん。

さよ　え？（何となく氣配を感じて、少し退く）

覺次　おさよちやん。おめえ此の話を聞いても、ほんとに厭だとも、怒つたりもしめえなア。

さよ　しねえぞい。……

覺次　そんぢや云ふけんぢよ、俺アない。ほんとは貴女が、哥兄ん所さ嫁に來るつちふから、行ぐ氣になつただ。――俺、貴女に惚れてただ。可愛くつて可愛くつて、なんねかつただ。

さよ　（下を向いて、固くなつて了ふ）

覺次　（立ち上り、少しおさよに近づき、興奮した樣子で）そんぢえも俺、そんな事改めて貴女に、口では云へねえかつたし、又、嫁に欲しいなんちふ事は、迚もおッ母にも云ひ出せなかつただ。――それだのに哥兄と　いつか話が決まつて、今年中には祝言するつちふんだもん。ど

うして俺、我慢して居られつぺ。――それやア、俺は哥兄と違つて、年も若えし、まだ一人前の働きも出來ねえし、貴女を嫁に貰ふ資格なんて、ずつと無えには定つてんだけんぢよ、何ぼさう思つて諦めつぺと思つても、俺にやア、此處に居ては迚もそれが出來ねえんだ。何處か遠い所さでも行かなくつては。だから、亞米利加さでも、何處さでも行く氣になつたゞ。そして貴女らの事を忘れて、働くべと思つたゞ。……

さよ　（すつかり俯垂れたまゝ、何も云へないでゐる）

覺次　（結論するやうに）理由つちふのはそれだけだ。そんぢやから貴女が、何か陰に在んだべと、思つたのも無理はねえかも知んねえ。そして聞いてから、驚いて、猶厭になんのも無理はねえかも知んねえ。たゞ、俺、貴女が聞かせ／＼つちふから、思ひ切つて云つたゞ（絶望的に）そんぢやから、貴女も、はア得心が行つたべ。ない？

（暫らく間。覺次、半ば怒つたやうな顏で、下を向いて詞無さおさよを見返してゐる。）

さよ　（急に蒼白さ顏を上げる）覺次さん。それやア眞實かい。

覺次　眞實とも――。

さよ　貴方はどうせ行く序に、おらを揶揄つてんでねえのかい。

覺次　馬鹿な！　揶揄ふ氣で、こんな事が云へつかい。

さよ　（間。突然、覺次に縋りついて、泣いじやくるやうに）覺次さん。貴方何だつて、まつと早くそれを……まつと早く云つて呉んにえかつた！

覺次　え、何だつて？

さよ　おらも、貴方が好きだつたゞ。哥兄さんよりも貴方が好きだつたゞ。

覺次　（少し動轉して）何？　何云つてんだい。

さよ　そんだら、早く云つて呉れゝばいゝのに、おらも貴方が好きだけんぢよ、貴方ん方で、おらなんて相手にしねえやうに思つてゐたんだぞい。そんぢやのに今つ頃。

……

覺次　いや、何云つてんだおさよちやん。貴方、おらが急にこんな事云ひ出したんで、何か慰めるやうな事云はなくてなんねえと思つて、そんな事云ひ出したんでねえのか。そんな事だつたら、はア、どうか云はねえで呉んせえ。――うつかり本氣にして、未練でも出したら、どうしんだい！

さよ　いや、嘘でねえ、本氣だぞい。だから貴方も本氣にして呉んちえヱ。――そして眞實に、そんな事思つて、亞米利加さ行くつちふんだつたら、行がねえで呉んちえ

エ。――おら、はア、さうと聞いたら、貴方をどうしても、そんな遠い所さやられねえわい。おらが爲に、身體の弱え貴方が、そんな所さ行ぐなんて。そんな事させて默つて居られねえぞい。おら死んでも、貴方を遣んねえ！

覺次　そんな事云つたつて、はアもう遲い。（氣を落着けて）俺が云ひやうも遲かつたべけんぢよ、兩方とも遲くつて、どうにもせうがねえんだ。それやア、今になつてでも、さう云つて吳れる貴女の氣持は、俺ア死ぬほど嬉しいけんぢよ、はアもう仕方がねえ。

さよ　いや、仕方がなくはねえぞい。貴方はまだ行がねえし、おらだつて、まだはつきり、覺江さんの嫁と、定つたちふ譯でねえ。おッ母アと貴方ん家の父が、さう內々で定めただけだもん。貴方は行がなけれやアそれでいゝし、おらもまア一邊、おッ母に云つて見るわい。そして二人で、はア、前に約束が出來てんだからつて、皆にさう云つて、願つて見つぺ。――おら、はア、さう心を決めたぞい。

覺次　そんぢやつて、哥兄が承知しめえ。

さよ　哥兄さんだつて、仕方がなかんべでねえかい。もともと、おらも、あの哥兄さんとは、さう大して惚れ合つてんでねえだもの。哥兄さんだつて、女子に惚れるなんて事は、もと〳〵なかんべもの。おらが事だつて、たゞ隣でよく氣心を知つてつから、嫁に欲しいと云ふだけだべもの。……

覺次　いや、決してさうでねえだ。

さよ　さうでなくても、仕方がねえでねえかい。貴方とおらとがはア思ひ合つてゐて、約束までしてるちふたら。――そんぢえも、貴方はどうあつても、おらにこんな事まで云はしといて、遠くさ行つちまふちふのかい。おらを棄てゝ思はねえ人にやつて。……そして行つちまふちふのかい。

覺次　いや。決してさう云ふ譯でねえけんぢよ。萬事すつかり決つてた事を、根本から引くり返すんだから。……

さよ　それも二人で、一生懸命やつたら、出來ねえ事はなかんべ。それでも若し出來ねえ事だつたら、そん時ア、おら、はア死んでもいゝぞい。

覺次　ほんとにさう迄、思ひつめて吳れんのか！

さよ　あい。（取縋る）ほんに！

覺次　よし、そんぢやら、死ぬ氣で、初めつからやり直して見つぺ。俺も思ひ切つて、亞米利加行きはよした。叔父さんには、今夜はつきりさう云つて斷る。父にもすつかりさう云ふ。哥兄にやア、どんなに恨まれたつて仕方がねえ。貴女ん爲に此處に居るわい！　さうして一生懸

命、二人が夫婦になれるやうに、やつて見つぺわい！

さよ　ほんとにさうして呉れつかい！

覺次　するわい！

さよ　さうして呉んさんしよ。おらも一生懸命おッ母に願ふから。……

覺次　さうと決まれやア、こんな所に愚圖々々して居て、今の中人に見つかつてはなんねえ。向うの竹藪の裏の、誰も來ねえ方さ行つて、まんだよツく相談しつぺ。かうなつたら、手筈はちやんと整へて置かなくてなんねえから。……

さよ　さうだない。そんなら、早く行んべ。

覺次　（急に血を燃やして）それに、俺、貴女がさう云ふからにやア、口さきだけでなく、どうしても固え約束の、證據を見せて貰はねえとなんねえ。

さよ　證據つて？　おら、何でも見せるぞい。

覺次　哥兒ん所さ嫁に行かんにえやうに、俺が云ふ事聞いて呉んちえゝ。二人でさうしちめえば、何ぼ哥兒だつてどうしても取るつては云ふめえから。ない。

さよ　（男の顔をちつと見返して、其意のある所を知ると、眞赤になつてゝ向きながら）おら、はアかうなつたんだもん。どんな事でもするわい。貴方となら、どんな所さでも行ぐわい。

覺次　そんぢやら、俺と一生離れねえつちふ、固え約束をしんだぞい。（顔を窺く）

さよ　……（點頭く）

覺次　そんぢやら、早く行んべ。來さんしよ。

さよ　あい。

覺次　（歩き出しながら）こんな事になつぺえとは、ちつとも思はなかつたのに。……

さよ　御免なんしよ。みんな、おらが所爲だから。

覺次　いや、かうなれやア、やる所までやるだ　二人が其氣だら、何にも怖え事はねえ！

さよ　さうだぞい！　ほんにさうだぞい！

覺次　さうだ。――行んべ。

さよ　行んべ。

（二人興奮して、竹藪の方の徑へ姿をかくす。）

（日やゝ傾き、何處やらに渡り鳥の啼く聲聞ゆ。間。）

（覺江、稻架の陰より、つか〳〵と納屋の前まで出て來り、二人の去れる方向をぢつと見送る。苦痛の表情。）

覺江　（肩にせる鍬をどんと下し）さうか。――（微かに點頭く）

（黄ばみたる夕日、彼の黒く威つい額を掠める。……）

――幕――

第二幕

三瓶覺右衛門が家の内部。古びたれど、やゝ大いなる百姓家。右手の大半は、一段高き疊敷となり居り。其上り框の中央に、大きな爐を切る。其上に燃木、鍋、其處を中心に厨具等を置く。
正面奥は、戸外に向き居る面にて、障子、壁にて仕切られ、右手は岩疊なる鏡戸にて、奥座敷へ通ず。
左手は土間。正面に車戸の出入口あり。左手は壁にて限られ、農具類を隅々に立てかく。
凡ては東北農家の常式。
夜。戸外は既に眞暗く、部屋の中は、疊敷の中央に吊りたる大洋燈にて照らさる。
蟲の聲。　時々婆娑たる竹藪の音。……
座敷には、洋燈の下を中心に、爐を半圓に圍んで、古風な足高膳が、五つ並べられて、其上には、既に出來上つた食物が、二つ三つ皿小鉢に載せられてある。
母おあさ、爐の邊にて働きながら、大鍋の蓋を取つて見てゐる。濛々たる湯氣。
兄覺江、車戸を開けて、默つて入り來る。

あさ　(それを認めて、忙しげに)　あゝ覺江。皆、御馳走が出來るちふに、何處さ行つてたんだ。
覺江　納屋。
あさ　德叔父つあんは、はア、据風呂から上つたやうか。
覺江　あゝ上つたやうだぞい。
あさ　さうか。そんだや、はア薩摩汁も煮えたし、酒も燗さへつけれやアいゝやうになつてつから、ようやらやつと、膳さ坐つて貰ふべ。暗くなつて、いつでもより遲いから、皆、腹減らしてつへからな。――覺江。お前は隣さ行つて、およねさアとおさよつ子に、知らして來て呉んろよ。
覺江　俺何だか厭だなア。
あさ　厭だなんて、云つてる時であつか。行つて來んだ嘸、腹減らして待つてべえ。
覺江　待つてつぺか。
あさ　何でさうだ事云ふだ。待つてつぺとも。早く行つて、おさよつ子にさう云つて來んだ。
覺江　そんだやつて、先刻おさよつ子は、裏の方さ出て行つたやうだつたぞい。何か用でもあつたんだべか。
あさ　そんな事あつか！　今の先刻、おらが水汲んでる時、歸つて來たもん。
覺江　(稍々元氣づいて)　さうかん、そんだやらまア行つて云つて來つぺ。

あさ　はア支度出來てんだから、直ぐにつて、さう云ふだぞ。
覺江　あん。（出て行く）
あさ（見送つて）はア恥しだつ事もあんめえに、をかしな餓鬼だなア、ほんに。（氣を變へて、奥へ向ひ）さア、父、叔父つあんを御案内して、此方さ出て來て與んさんしよ。何にもねえけんぢよ、出來ただから。（酒の燗をつける）
親爺（奥にて大聲に）さうか……
（それから、覺右衛門を先に、叔父徳次郎、奥より出で來る。親爺は頑固で、骨張つた老農。叔父はでつぶり太つて、赤ら顔の巨漢、黒い、海員らしい二重釦の洋服を誇らしげに着て居る。）
あさ（指圖して）あゝ、今日は叔父つあんが御正客だから、眞ん中へ坐つて與んさんしよ。そして父は其右さ。……左さは覺次に坐らせんだから。
親爺　あん、此處か。――そんぢや徳次郎。
叔父　高上りで濟みやせんな。（座につく）
あさ（既についた酒の燗を、一本取出しながら）あらゝ叔父つあん、はア、洋服着つちまつたゞない？　窮屈でねえかい。
叔父　いいや、馴れつとさうでもねえ。此方が却つてきつちりして、氣持がいゝ位だ。それに今日は、他家のお客さまもあんだちふから。……
あさ　他所のお客つちゆつても、お隣の事だし、どうせ、はア直ぐ緣がつながる家だもん。遠慮しつことア無かつたに。
叔父　でも、まアいゝさ。（半ば覺右衛門に話す如く）洋服ちふものも、着馴れつと、不思議なもんよなア。船に居る中は、バス、――風呂の後なんて、何だか窮屈で、浴衣で疊の上さ寢つ轉がりてえと、そればつかり思つてるがなア、いざ陸さ上つて、一二度さうして見つちふと、又、洋服でなけれやア、身が緊らねえやうな氣がして、つい着るんだからなア。
親爺　うむ。――さうかな。
叔父　船ちふものも、海ちふものも、まアそんなもんだ乘つて行つて、馴れつちまふと、海に居る時は陸が戀しいけんぢよ、暫く陸に上つてつと、又向うが戀しくなる。
あさ　覺次も、さう云ふの着せて貰へんのだべか。
叔父　うん。まア船さ乘つちめえばな。――尤もこんな着物ア、眞實の船員のでねえから、横濱さ行けば、誰でも買つて着られるけれど。……
（覺江、戸を開けて入り來る。）
あさ　どうだつた。皆居たべ。

覺江　あん。二人とも、直ぐ來るつて。
あさ　ほら見つせい。おさよつ子も、はアちやんと支度してたべ。
覺江　知んにえゝ。
あさ　覺江。お前は此方の端さ坐つせい。
覺江　(默つて上る)
親爺　覺江、覺次はどうした。
覺江　何處さ行つたか。
あさ　村の主だつた若え手合ん所さ、知んねえふりして別れに行ぐちゆつてたから、何處か廻つてんだべ。そんぢえも、はア歸つて來るに違えねえだ。——どうだん、叔父さん一ぺえ。飲む方は遠慮しねえで、はア初めたらよかんべ。
叔父　(杯を取上げて)そんぢやら、折角ついてる燗だから、さうしつかな。(ついで貰つて飲む)
あさ　どうですかい。工合は。
叔父　結構。飛び切り上的と來てやがら。——此の地酒の味つてものも、忘れられねえものよなア、これは山口屋の山櫻かい。
あさ　よく覺えて居んない。
叔父　覺えるも覺えねえも、初めて知つた酒の味だもんな。
親爺　どうだ。此頃はどの位行ぐ。
叔父　船に居つとなア、つい強くなるて。——哥兄さんは？
親爺　おらか？　おらは近頃めつきりだめだ。少しやり過ごすと、野良がだるくていけねえ。今日も大概にしとくべ。
叔父　まアさう云はずと。可愛え息子の送別會だ。
あさ　船さ乘つと、覺次も飲むやうになつぺかない。
叔父　いや、それやアさうでもねえ、人次第さ。まア、あん姉もさう心配しつ事アねえよ。船ん中は二十日ばつかしだし、向うへ着きやア、さう飲む折は無え。向うぢやア、酒よつか、支那博奕の方が怖えよ。折角稼ぎ蓄めた奴を、みんな叩いつちまふ奴も居るんだからな。覺次なら、そんな心配はねえ。
あさ　そんぢやらいゝけんぢよない。……
(裏戸を明けて、隣家の母子。およね、おさよ、小ざつぱりした裝をして入り來る。およねは寡婦らしき締巻き。おさよは少し白粉をつけてゐる。何となく取亂したる、落着かない樣子。其爲に却つて毎もより美しく見える所もある。)
よね　今晩は。——御辭儀なしに、御馳走になりに來やした。
さよ　(默つて後ろからお辭儀をする)
あさ　よく來て吳つちやない。さア〳〵、此方さ上つさん

しよ。叔父つあんなんぞは、はア初めてつから。
よね　（叔父に）今晩は。――これが娘ですわい。何分どうか宜しくお願ひ申しやす。
さよ　（默つてお辭儀をする）
叔父　いや。此方こそどうか宜しく。――お先に失禮してゐやす。どうか此方さ。（席へ招じる）
あさ　およねさんは此方さ。おらと並んで與んさんしよ。（と、自分の席の方を指し）それから、おさよさんは其方さ、覺江の傍がいゝべわい。
さよ　（小聲で）あら、おら厭だぞい。おッ母ア、お前が傍さ一緒に。――
あさ　まア、そんな事云はねえで。――
さよ　そんぢやつて、厭だもの。……そんぢやおら、歸るぞい！
よね　又、さうだ事云ふ！
叔父　（やゝ好色的に、眼を細めて此樣子を見てゐたが）そんぢや、娘つ子の云ふ通り、此方さおッ母と並ばしたらよかんべ。どうで是からは厭でも應でも、覺江と並ばなくてはなんねえんだ。それに向ひ合つた方が、よく顏が見えるちふもんだからな。
覺江　（苦り切つて、默つてゐる）
さよ　（恥らひながら、おど／＼と座につく）

叔父　かうして見つと、ほんに可愛え娘つ子だな。覺江にやるにやア、惜しいつ位だ。
覺江　（少し憤然と）叔父つあん、はア澤山だぞい！
叔父　まア、さう怒んなよ。――時に、肝心の覺次はどうしたかな。
あさ　（よねに）お前さん家の前、通らねかつたかい。
よね　氣がつかなかつたない。
覺江　（出來るだけ輕く）おさよちやん、お前知つてねえかい。
さよ　（鳥渡狼狽したが、小聲で一生懸命に）いんや、先刻、納屋の前でちよつくら會つたけんぢよ、それから知んねえわい。
親爺　困つた野郎だな。
叔父　いや、かうしてる中に、歸つて來つぺ。まさか、家を忘れもしめえから。それとも、急に亞米利加さ行ぐの厭になつて、何處かへ突つ走つたかな。はゝゝは。――（およねに杯をさし）では一つ、どうです。
よね　は。（丁寧に辭儀し）そんぢや一杯だけ。
（裏戸を開けて、覺次、靜に入り來る。）
あさ　あゝ覺次か。皆、待つてたぞ。
覺次　遲くなつて、惡かつたない。
覺江　今頃まで、何してたんだ。

覺次　ちよつくら、相良君家さ行つたり、いろ〱。……
親爺　まア早く坐れ。お客さまもはア疾ッくに待つてんだぞ。
覺次　（およねにだけ）今晩は。――お待たせしやした。
よね　（會釋して）どうしやした、そんな事ねえぞい。
さよ　（默つて、顏も見ずに、お辭儀をする）
叔父　主賓が居ねえでは、開會も出來ねえ譯だが、此方ははア初めてゐただ。
あさ　お前は今日は送られんだから、叔父さんの傍だぞい。
覺次　あん。（何故ともなく、頭を掻き〱座につく）
あさ　さア皆、はア揃つただから、遠慮なしに上つて呉んさんしよ。何にも甘えものはねえけんぢよ。
叔父　（早速杯をさして）ところで、駈けつけ一杯。――お前のために、プロージちふのをする所だけんぢよ。――
あさ　覺次ばかりでねえぞい。貴方に御馳走しつぺと思つて、拵へたんだぞい。
叔父　いや、俺なんて船さ歸るだけだから、何にも關はねえけんぢよ、覺次は是で、一大決心を以て亞米利加さ行ぐつちふんだから、健康の盃ちふのを擧げなくてなんねえ。
覺次　（默つて凭垂れながら、盃の酒をぐつと飲む）
親爺　それはさうと、お前の力で、間違なく行かれんだべな。
あさ　萬一、見つかつて追つかへされるやうな事はあんめえない。
叔父　ねえとも。まア大概大丈夫だ。それは俺が受合ふよ、――何だつて、素人とは譯が違ふわい。俺ははア昨日其話があつと、横濱さ用事序に手紙出しといたから、間違えなく船さ乘せて貰へつぺと思ふんだ。是が何の緣もねえ、ツブの素人の密航だと、まア横濱さ行つて、ボーレンちふ宿屋に、ごろ〱轉がつて居ながら、うまく水夫か何かに化け込む、糸口を見付けねえとなんねえ。が、覺次なんて、そんな奴らから比べつと、極樂さ行ぐ見てえに雜作もねえ。料理場の人數を、たつた一人増やしとくだけだからなア。知んねえふりして、料理人の一人になつてれば、船の中はそれでいゝんだからなア
あさ　でも、名前だけでも料理人になつて、覺次に煮焚きなんて出來つぺか。
叔父　なアに、俺がついてつから、忙しい時だけ、ボイルの番でもしてゝ呉れゝばいゝんだ。
あさ　そして、向うの陸さ上つ時は？
叔父　其處が一番六ケ敷いんだけんぢよ、まア何とか隙を見て、うまくやんだな。間が惡けれやア、其儘暫らく叔父つあんと一緒に船にゐて、片手間に船乘りを覺えたつ

て、いゝでねえか。それに是が非でも、渡りてえちふんだつたら、泳いで渡る人せえある。……

あさ　覺次はちつとも泳げねえぞい。

叔父　まア〱、さう心配しなさんな、物は喩だわい。――それつ位の覺悟があれば、何でもねえつちふ話だぞい、まア普通の人だつたら、船へ乘るのが、けア餘つ程六ケ敷いんだけんぢよ、覺次にはその心配が割合にねえちふたけでも、安心してゐていゝわい。

あさ　何分ほんとに頼むぞい。

よれ　ほんにない、おあささんにして見たら、さぞ心配だべない。けんぢよから云ふ叔父つあんがついてんだもん、それこそ大船に乘つた氣で居つさんしよ。

親爺　まアやれるだけやつて見んだな。一旦思ひ立つただから、其氣になれやア、何でも出來つペ。――おッ母アも、はア心配する事アねえ。首途に、そんな事云ふもんでねえだ。

あさ　あん。ほんにさうだない。だけんぢよ、覺次は身體も弱えししつから、氣だけはよく付けて吳んろよ。

覺次　曖昧に點頭いて　あん。（が、それまで堪へに堪へてゐたのか、云ひ出す機會を得たとばかりに、屹と顏を上げ、それから兇乖れて）だがない、おッ母ア。父も、それから叔父さんも、改めて聞いて吳んせい。――俺、叔父さんと一緒に、亞米利加さ行ぐのやめただ。我儘云つて惡りいけんぢよ、俺、決心を變へただ。

（一座驚愕。暫らく語なし。）

覺次　（更に）だからどうか其積りで、此處さ置いて吳んさんしよ。今になつて急に又、心を變へたのを勘辨してお吳んなんしよ。

叔父　だがなア覺次。何だつてお前、急にさう心を變へたんだ。

親爺　どうしてそんな事云ひ出しただ　お前、氣紛れ云つてんであんめえな。

覺次　いや、急に心を變へたのは、叔父さんや皆に對して濟まねえけんぢよ、俺怖くなつただ。密航ちふのが、恐ろしくなつただ。ひよつと見付かつてもそれつきりだし、見つかんねえで、向うの陸さ上つても、暫らくびく〱してゐなくてはなんねえ。それよりも俺、どうせ亞米利加さ行ぐにしたつて、ちやんと旅行劵を貰つて、渡りてえと思ふんだ。旅行劵は二三月待つてれやア、下附して吳れるつちふし、それさへ貰へば、トラホームででもなけれやア、直ぐに渡れるつちふでねえかい。――俺、いろいろ話を聞いてゐる中に、急にさうしたくなつただ。

叔父　うむ、成程、今になつて臆病風に吹かれたたな。

あさ　だけんぢよ。それもさうだない。……

叔父　だが覺次、お前、さうして正式の手續で、ゆつくら渡米すんのはいゝが、さうなると旅費がかゝるぞ。叔父さんと一緒に、船乘りとして行かれねえと。――

覺次　仕方がねえわい。まアゆつくら貯めて、出來たら行ぐ外。……

叔父　其上、俺はもう、お前が是非一緒に連れてつて呉れちふから、船の方さは宜敷賴んで、料理人を一人增やして貰ふやうにして置いたんだぞ。それを今更になつて、怖えなんちふんでは、ちと此の俺に濟むめえ。

覺次　それやア叔父さんに對しては、重々惡りいと思つてんだげんぢよ。……

親爺　覺次。手前一體どうしたちふんだ。急に行ぐの、急に止めるのつて。――氣紛れ云つては濟むめえぞ。

あさ　父、まアさうツケ／＼云はねえで。――

叔父　それだつちふて、たゞ怖えから止めるちふんだつたら、話は聞えねえぞ。

覺次　實は其外にも、ちつと理由はあつけんぢよ。今は云へねえ。――叔父さんも父も、どうか俺が我儘を勘辨して、何にも聞かねえで、此儘此處さ置いて呉んさんしよ。

親爺　何だ。其理由ちふのは？

覺次　それは云へねえ。今はどうしても云へねえ。――けんぢよ、俺が只一人の心持の事だから、どうか深く訊かねえで呉んさんしよ。云ふ時にならら、俺、改めて云ふだから。

覺江　（今まで默つてゐたが、突然沈鬱な聲で）父、それから叔父さんも、覺次が行がなくなつた事は、はアそれより上深く訊き糺さねえでもいゝ。そして其代り、俺を亞米利加さ連れてつてお呉んなんしよ。父も、俺が覺次の代りに、渡米しんのを許して呉んさんしよ。

叔父　え、何だつて？

親爺　何を云ひ出すだ。二人とも、まさか氣が狂つたであんめえな！

覺江　いんや、氣なんて狂はねえ、正氣だ。しかも本氣で、俺、お願ひしんだ。どうか、さう云ふ事にして、俺を亞米利加さやつて呉んさんしよ。

親爺　そんな事云つたつて、お前は此の家の後嗣でねえか。

覺江　それやア覺次に讓つたつてよかんばい。それも駄目だら、五年か十年の間でいゝから、歸つて來て後を嗣ぐ迄、向うさやつてお呉んなんしよ。

親爺　そんな事ア出來ねえ。それにもしか出來たにしたつて、お前、おさよつ子の事。どうするんだ。まさか此儘、放つて行きも、連れて行きも出來めえ。

よね　ほんにさうだぞい。そんな事になつたら、お互ひに困つぺでねえかい。

覺江　（首垂れてゐる覺次と、おさよとを怨めしげに見やりながら）けんぢよそれは何でもねえ。おさよちやんは、覺次ちやんと思ひ通りに、夫婦になつたらよかんべでねえかい。

親爺　（何、何云ふだ？

あさ　（何だつて？

よね　ほんに何云ふんだい！

覺江　いんや、何でも彼でもねえ。覺次とおさよちやんとは、もとからはア、思ひ合つてるだ。はア、固え約束しつちまつてるだ。そして覺次が行がなくなつたのは、おさよちやんが止めたからだ。俺それ知つてるだ。そんぢやから、俺は此家を二人に譲つて、代りに亞米利加さ行ぐべと思つたんだ。父、お願ひだ。どうかさうさせて與んせえ。

親爺　何だつて？　――覺次。手前、哥兄の云ふ事、眞實か。

覺次　（首垂れて、面目なげに肯く）

親爺　さうか。（怖い顔をして考へ込む）

よね　おさよつ子、おめえ、今覺江さんの云つた事、眞實なんか？

さよ　（堪へられなくなつて泣き出す）

よね　泣いたんでは分んねえ。ほんとに覺次さんと、はアそんな約束したのか。覺江さんの話があんのに、そんだ親の目を忍んで？

さよ　（小言で）おッ母ア、勘辨して與んちえゝ。

よね　ぢやア眞實なんだな。

さよ　（辛うじて肯く）

（間。）

親爺　（呻るやうに）いや、さうだ事ア出來ねえ。さうだ事は許す事ア出來ねえ。

（間。）

覺江　父、だがなア、はアかうなつては、仕方がねえでねえか。父が許すの許さねえのッちゆたつて、話はもとさ戻る譯でねえし、俺だつてはア、おさよちやんを貰ふ事も出來ねえ。それやア是でも當にして、待つてゐた御祝儀だつたけんぢよ、はア諦める外ねえんだ。そして諦めたにしたところが村の手合に合せる顔もねえし、又俺が居たんでは、二人も氣持がよくあんめえから、いつそ思ひ切つて、丁度入れ代りに、叔父さんに伴れてつて貰ふべと、たつた今思ひついたんだ。――さうしたら一番よかんべ。八方圓く治まつて。なア叔父さん。是が一番いいやり口でなかんべえか？

叔父　ふむ、さう聞けば成程、さうかも知れんなア。

覺江　叔父さんもあゝ云ふでねえか。ぢやからなア父。ど

うかさうさせて呉んろ。せめて俺だけにも、さうさせて呉んろ。なア父。

覺次　哥兄、濟まねえ。どうか勘辨して呉んろ。

叔父　哥兄さん。どうだな。傍から聞いてつと、覺江の云ふのが、一番いゝかも知んねえぞい。だからさうさせてやつたら。――

あさ　ほんになア。――父、さうしてやる外なかんべえ。

親爺（やうやく）さうだ事、俺知らねえ。（急に立ち上つて）さうだ事だつたら、俺が居ねえ所で、皆が定めたらよかつぺ。俺知らねえ。俺たゞ、はア隱居する外ねえだ。

あさ（顏ふやうに）父！

親爺（およねに向ひ）お先に御免なんしよ。（親爺さつさと奥へ入つて了ふ）

覺江（其後ろ姿を見送つて、又氣を取り直し）なア叔父さん。そんぢや貴方は、俺を連れてつて呉れつぺた？

叔父　うむ。かうなつたら、出來るだけ盡力して見べえ。

覺江　難有う。そんぢやどうか。さうして呉んせい。それから覺次、お前も此事に就てア、異存はあるめえ。

覺次　哥兄、ほんとに濟まねえ。

さよ（小聲ながら堪へ兼ねたやうに）ほんとに勘辨してお呉んなんしよ。……

覺江　よし、そんぢやら、事は決つた。お隣の叔母さんも、そんぢやア其積りで、父が又いろ／＼云ふべけんぢよ、二人を一緒にしておやんなんしよ。それが俺の望みでもあんだ。ない。

よね　はい。仕方がねえ事になりやしたない。

あさ　そんぢえもまア、覺江がよく考へて呉つちやんで、是でもまア、四方どうやら納まつたちふもんだわい。

よね　それにしても覺江さん。貴方は身體は丈夫だけんぢよ、氣をつけて行つて來さんしよ。

覺江　あん、一生懸命、稼いで來るわい。

叔父　さア、さうと定まつたら、姉さア、もう一本、酒た、是からは覺江が送別會だからない。熱くつけて下さんしよ。話が理におちたんで、ちよつと醒めつちまつただ。（自分の前に置いてあつた盃を、ぐつと一煽りに飲んで、强ひて勢ひよく覺江にさしつけながら）ちつと冷めてつぺけんじよ。熱いのが來る迄にまア一杯。――

覺江（默つて受取る）

叔父（傍の銚子を取つて注ぐ）

覺江　默つてぐつと一息にそれを飲み干す）

（皆々白けたやうな沈默の中に。）

――幕――

第 三 幕

再び三瀬が家の内部。
もと〻同じき農家なれど、七年の歳月を隔て、覺右衛門より覺次が代に移り居る事とて、家の中の樣子にも何となく變化あり。總じて純朴なる百姓の風を失ひ、稍々知識階級？ 化して見ゆ。例へばもと繪暦を貼りたる所には、雜誌の口繪か新聞の附錄と覺しき、美人畫を掲げ居る如し。土間にも農具類の數少く、蠶業用品の類を增す。而して全體の上に、やゝ荒頽の色あり。
ある晩春の一日。懶げに倦れる午後。
今は覺次の妻なるおさよ、生後一歳ほどなる嬰兒を背負ひたる儘にて、圍爐裡に近き臺所にて、食器や厨具類の後片付をなし居る。彼女はもうすつかり世話女房になり居る事とて、髮もぐる〱卷にしたまゝ、身なりもかまはない爲に、ずつと老けて見える。何となく疲れて、物憂げな樣子。
暫らく立働いてゐる中に、背中の子供、眼を醒ましたと見えて、突然泣き出す。……

さよ　（背の子を搖りながら）あゝよし〱。はア眼を醒ましたんか。泣くんでねえ。泣くんでねえ。もうちつとで濟むだから。そしたら乳をやつからな。……
（赤兒益々泣く。）

さよ　あゝ、さうか〱。待つてゐられねえちふのか。おめえも腹減つてんのか。そんぢやら仕方がねえ。乳、飲ませてからにしつぺ、な。――あゝ、よし〱。
（おさよ、臺所の片付をやめ、背中の赤兒を爐端に下ろして、乳を啣ませる。）

さよ　ほうら、ほら、早く、たんと飲めよ。
（赤兒泣きやんで、乳を飲み初める。）
（おさよの母よれ。奧より赤兒の泣聲を聞きつけ、出で來る。年は老りたれど、殆んど衰らぬやうに見ゆ。）

よれ　どうした。又泣き出したのか。

さよ　あん。朝からまだ、一ぺんしか乳をやんなかつたもんだからない。

よれ　うんう、甘さうに飲むわ〱。

さよ　おつ母ア、おめえ此子が乳一ぱい飲んぢまつたら、ちよつくら守をしてゐて吳んにえか。

よれ　あゝ、えゝとも。何ぼでもしてゝやつぺ。

さよ　おらア、臺所を片付けたら、米も磨いどかねえとなんねえし、お襁褓もちつと溜つてつから。――

よれ　さうか〱。（赤兒の方へ手を出し）さア〱明、明。乳一ぺえ飲んぢまつたら、お祖母さんが方さ來んだ

そ。戶外さ行つて、又、鷄見つぺな。
さよ（乳を飮み終つた赤兒を、胸から離して）そんぢや賴むぞい。（渡す）
よね（又少し泣くのを其儘受取つて）おゝよし〳〵。泣くでねえ、泣くでねえ。おつ母アはちつと用があんだからな。お祖母と一緒に、おとなしくして居んだ。――（と抱きあやしながら、土間へ下り）ねんねんころりこ、ねんころり。……乳飮んぢまつたらねんころり。……（と、出鱈目な子守歌を唱ひながら、戶外へ出て行く）
（おさよそれを見送り、ほつとしたやうに息を吐いて、臺所道具を急ぎ片づけ終る。それから、米櫃から米を笊に取り出す。そこへ、前に書記をしてゐた相良、妙に低級な田舍紳士の成り損ねと云つたやうな服裝にて、鞄なぞを抱へ、入り來る。）
相良（入口にて）あ、おさよさん。今日は。――覺次さんは？　はア何處かさ出掛けつちまつたかい。
さよ　いんや、奧に調べ物が在つとか何とかちゆつて、引込んで居るわい。そして先刻から、貴方の來るのを、待つて居たやうだつたぞい。
相良　さうかい。ちつと遲くなつたからない。そんぢや早速、儂が歸つて來たつて、さう云つて與んつあんしよ。
さよ　はい。（と、奧へ行かうとして、鳥渡思ひ直し、心配げに相良に近づいて、小聲に）だけんぢよ、相良さん。又何か組合の方の事で、心配事があんでねえのかい。
相良（鳥渡狼狽して）いや、別にさう大した事でもねえけんぢよ。鳥渡、ない。なアにここさへ切り拔けつちめえば、何でもねえ事だわい。貴方らが心配しつことアねえぞい。
さよ　そんぢやつて、貴方は何時でも、そんだ事ばつかし云つてゐつけんぢよ、此頃の良人が方と來たら、隨分心配があんのか何があんのか、變つてるぞい。ふだんは面白くなさゝうに默つてるし、口をきくと八ッ當りに突劍貪で、おらはア、つく〴〵厭になつちまふぞい。
相良　まア、さう云ふもんでねえわい。
さよ　いや、ほんとだぞい。何も貴方を捉へて、恨みを云ふ譯では決してねえけんぢよ。良人もあんな仕事を初めてから、ほんとに變つちまつたぞい。おら等が事なんて、ちつとも考へて與んにえゝやうになつちまつただ。
相良　さう云ふ譯では決してあんめえ。（說明するやうに）たゞ此家の父は死ぬし、哥兒は居ねえし、一人で家を引受けてるからにやア、何かしねえとなんねえと思つて、製絲の方さ手を出したんだもん。覺次さんにやア。此家の田地を守つて、ただの百姓で暮らすなんて。迚も出來ねえ事なんだから、仕方がねえわい。それも甘く行きさ

へすれア、今の頃は身代が五倍にも十倍にもなつて居るんだげんぢよ、運が惡く、絲が下つたり、繭の思惑が違つたりしたゞから、仕方がねえわい。

さよ　さう云へばさうだげんぢよ、運ばかりが惡かつたで無えわい。餘計な事しつから、そんな事になつたんだわい。

相良　いや、運さへよけれやア、まんだ、是からだつて盛り返せるだ。

さよ　けんぢよも、家の田地田畑まで、みんな抵當にしつちまつて、若し惡かつたら、どうしんだい。是つきりで濟まねえでねえかい。おら、今日にも此家が、他人手に渡るやうな事にでもなりやしめえかと思つて、此頃、氣が氣でねえんだぞい。若し、そんな事にでもなつたら、どうしんだい。死んだ此家の父に對して、どんな申譯があんだい。亞米利加さ行つてまつてる哥兄さんに、どんな顏が合はせられんだい。

相良　そんぢやから、俺も及ばずながら心配して、盛り返すべと盡力してんでねえかい。

さよ　いや、そんな事云つて、貴方らは責任がねえから、何したつて關はねえべけんぢよ、おら、はア信用しねえぞい。惡く行つても、紡績が買收に來んの。横濱さ直接に出すのつて、一度でもさうなつた事はねえでねえかい。

相良　いや、これでもう少し持ち堪へさへすれやア、どうにでも成んだ。それやア眞實だわい。だから、貴女も餘計な心配しねえで、待つてゐて吳んつあんしよ。大丈夫なんだから。——まア、兎に角そんな事云はねえで、覺次さんに早く俺が來たと、さう云つて吳んつあんしよ。

さよ　（少しまだ言ひ足りなさうに、右手奥の鏡戸の方へ行きながら、聲をかける）貴方、貴方！　相良さんが來たぞい。

（二三度呼ぶと、奥で何か答へる聲がして、やがて、蒼い心配げな顏をした覺次、懶げに現れる。）

覺次　（不興氣に）やア、今來たのかい。俺は又餘り遲いんで、心配しながら待つてる中に、つい、うとうと寢つちまつただ。（淋しい苦笑）果報は寢て待てちふから。……

……爐の所へ來る）

相良　（少し皮肉に）いや、それでも此の晝日中、寢られれやア結構だわい。（同じく爐端の、上り框に腰をかける）

覺次　どうも此頃は、夜になつと寢られねえ癖に、眠たくつて困るわい。子供はぎやア〳〵泣きやがるし。……（おさよを見返つて）おい、おめえは何處かさ行つてろ。少し相良さんと話があんだから。

さよ　（默つて米の笊を抱へ、外へ出て行く）

覺次　（其後ろ姿を見送つて）時に、話はどうだつた。

相良　うん。どうも矢つ張りうまく行かなかつた。
覺次　どうしても聞かなかつたんか。
相良　うん。俺あ今朝十時頃から出かけて行つて、色々譯を話して見たけんぢよ。何しろ向うではぷんぷん憤つてるんで、何と云つて辯解しても、どうしても聞かねえんだ。二重抵當ちゆつても、一方はたゞほんに形式だけだから、決して貴方の方は惡くはしねえ。第一に責任は履行するだからつて、何ぼ口を酸つぱくして、了解を求めても駄目なんだ。向うは此方を信用して、無けなしの金を貸したんだから、さうだ詐欺みてえな、二重抵當に入つてゐるんだつたら厭だちふんだ。どうしても元利を直ぐ拂つて貰ふか、いきなり他が手を出さねえ中に、向うで此の家邸を差押へつちまふか、どつちみち、證書の書換は厭だつちゆつて、一歩も動かねえんだ。
覺次　ふうむ。（頭を抱へて）解んねえ奴だなア。
相良　何しろ、二重抵當になつてるのを、不意に見付けたもんだから、詐欺にかゝつたと思ひ込んぢまつてるんで、何とも始末に終へねえわい。
覺次　それやアまア、此方も惡いにやア惡いけれど。――どうしたもんだべなア。
相良　此上は何處かで借り變へて、拂つちまふ外無えわい。それでねえと、松村の方で訴へ出るか何かして、此方の信用がぱつたり落ちつちまつたが最後、製絲場は閉鎖しなくてなんねえし、借金は其儘殘つて、此家なんぞは勿論人手に落ちつちまふぞい。――今も其件に就て、おさよちやんから搔ッ口說かれたけんぢよ。
覺次　まつたくそんな事になつたら、大變だ。
相良　なつたらどころでねえぞい。放つて置けば成るに定つてる。
覺次　そんぢやら、どうしても借り替へて、松村の方は一旦拂ふんだない？
相良　さうだ。かうなつたら、しやうがねえ。高步でも何でも、一時借りなくてはなんめえと、俺、思ふんだ。
覺次　高步でも、無抵當で借りられつ所があつかい。又、二重抵當つちふ譯には、前の事が自然解つぺから、駄目だばい？
相良　さうだない。――けんぢよ覺次さん。貴方家には、まだおさよちやん家の、佐久間家の田地があんでねえのかい。あれは貴方の自由になんねえのかい。おさよちやんが此方さ來て、およねさんも引取つてんだから、貴方のものになつてんでねえのかい。
覺次　うん、佐久間の田地ちふのは、まだちやんと在るには在んだけんぢよ、俺が自由にはなんねえだわい。それやア俺だつて、其事は前から考へてたけんぢよ。あれは

おさよを貰ふ時も、決して俺家の物にしねえで、俺とおさよとの間に子供が生れたら、其子に嗣がせる約束で、貰つたんだ。そしておよねおつ母アも、俺が方の父とおつ母アが續いて死んぢまつたんで、俺家さ引取るちふよりは、來て貰つてる譯なんだ。だから、あの田地は俺家とは全く別物で、手もつけられねえんだ。

相良　さうかい。そんぢえも、かう云ふ場合でねえかい。一つ、抵當の種にするだけなんだから、名儀だけでも借りる譯には行かねえのかい。

覺次　さうだない。背に腹は替へられねえ場合だけんぢよ、およねおつ母アにさう云ふのは、何ぼ何でも義理が惡いんでない。

相良　一體、何ぼあんだい。

覺次　確か畑だけだけんぢよ、二反歩は在つぺと思ふんだ。

相良　そんぢや、それだけでも二千圓位、何とかして借りられつでねえかい。義理が惡いの何のつて云はねえで、思ひ切つて、さうしつさんしよ。さう云ふ風に願つて見つさんしよ。さうすれば、みんな助かるだから。小さくても、あれだけ立つてる製絲場だし、俺らだつて、彼處が駄目になつちめえば、貴方と一緒に 殉死しなくてなんねえ。

覺次　併しもとはと云へば、貴方に勸められて、片棒かついだ仕事だつたんだぞい。それが初め鳥渡うまく行つたもんだから、つい、かうして深間へ入つちまつたんだ。――今更そんな事云つたつて、仕方がねえけんぢよ。

相良　何を云つてんだい。貴方が何か仕事をしてえつて、口癖のやうに云つてたから、俺ア貴方の爲を思つて、勸めたんでねえかい。そして是が運惡く行つたからだけんぢよ、景氣でも直つて儲かつてゐたら、貴方一人が大福福でねえかい。

覺次　いや、是は俺が惡かつただ。つい、こんな事になつたもんだから、愚痴が出ただ。俺だつて何も貴方に恨みを云ふ筋はねえだ。それよりも實際、一緒に此處迄働いて來て、いろ／＼心配して貰つてるのを、濟まねえと思つてるだ。

相良　いや、さう云はれつと困つけんぢよ、俺だつて決して、貴方を利用して、遺産をすつかり費はせつちまふ氣なぞは、初めつから無かつただ。先刻も、おさよちやんにちくり／＼と、さうだやうな事を云はれたけんぢよ、さう思はれつと心外だわい。

覺次　いや、決してさうは思はねえ。おさよは女で分らねえだ。ヒステリーでさうだ事云ふだ。どうか惡く思はねえで呉んちえゝ。

相良　そんな事はどうでもいゝけんぢよ、先刻の問題ない。

俺決して貴方に、尻の毛まで拔けつちふでねえけんぢよ。こゝさへ通り拔けれやア、何とでも成んだから、一つさうして見て吳んつあんしよ。他人でねえでねえかい。

覺次　(考へ込んで) 他人でねえだけに、まつと辛い義理があんだげんぢよ、仕方がねえ、一つ願つて見つぺ。――意氣地なしつて、罵られるか、助けると思つて聞いて吳れつか、そこは分んねえけんぢよ。……

相良　さうして吳んつあんしよ。貴方からさう云やア、何も是が抵當流れになつて、他人手に渡つちまふつちふ譯でなし、婿姑の仲だもん、きつと肯いて吳れつぺわい。

覺次　それがどうだかない。――もと／＼おッ母は、俺がこんな仕事を初めんのに、大反對だつたんだもん。それに家邸を抵當に入れるなんて事は、先祖に對して眞實に濟まねえ事だと、固く思つてんだもん。俺實は、此の家を抵當にしてる事だつて、およねおッ母には隱してる位なんだからない。

相良　さうだべけんぢよ、今の場合だ。思ひ切つてやんなさんしよ。――尤も俺も是から、高步でも無抵當で借りられるやうな口があつかどうか、一生懸命當つて見つから。是からもう一度町さ出掛けて、鈴木辯護士ん所さでも行つて、猶よく相談して見る事にしつぺ。――でも、およねさんさへ肯いて下されやア、それに越した事はねえから、ない。

覺次　(決然と) 承知したわい。

相良　そんぢやら何分宜しく。――(立上つて) 俺、直ぐ町さ行つて來つから、夕方までに、又吉報を聞きに來るぞい。

覺次　そんぢや左樣なら。――

相良　左樣なら。――

(相良鞄を抱へて、そゝくさと出て行く。)

(覺次、殆んど見送りもせず、爐端に坐つたまゝ、ぢつと考へに沈んでゐる。間。)

(おさよ。米笊を下げたまゝ、そつと入り來る。そして笊を流しの傍に置き、靜に覺次の方に近づいて立つ。)

覺次　(やつと氣づいて) あ、お前か。――

さよ　(突然、强ひて冷靜な聲で) 貴方。あの、此の家が他人手に渡るんだつて、眞實かい？

覺次　(顏を上げて、ぢつとおさよを見ながら) お前、聞いてたんか。

さよ　聞いてゝ惡かつた？

覺次　惡いとは誰もいはねえ。

さよ　そんぢやつて、米はア、疾つくに磨げつちまつたんだもん。

覺次　そんなら、後の話も聞いてゐたべな。
さよ　後の話つて？
覺次　（思ひ切つて）あの、お前の實家の田地を、一時抵當に借りてえつちふ話よ。此の家邸が差押へになるのを、金を借り換へて助けて貰ふために、あれを代りの抵當に入れさせて貰ひてえつちふ話よ。
さよ　その話だら、よく分んなかつたげんぢよ。うすく〳〵聞いて居たわい。
覺次　そんぢや、お前、あの話どう思ふ。――おつ母は承知して呉れつぺか。
さよ　おら、そんな事分んねえ、おつ母に聞いて見ねえ中は。
覺次　そんぢや一つお前から、おつ母に譯を話して、當つて見て呉れる譯には行くめえか。
さよ　そんな事厭だぞい、おら。そんな話、おつ母が承知すると分つてたつて、おら厭だ。――そんな遣繰りして、お前さん、怖ねえとは思はねえのかい。
覺次　そんぢやつて仕方がねえ。
さよ　（ヒステリックに）仕方がなくても何しても、おらそんな話に係るのは厭だ。お斷りするぞい。そんな話をする位だら、此の家邸を人にやつちまつて、何處かの竹藪の中さでも炭燒小屋さでも、引込んだ方がまだいゝわい。
覺次　（少し憤然と）そんぢやら、お前にやア賴まねえ。賴まねえから、此家を棄てゝ、何處さでも好きな所さ、行つちまつたらよかんべ。
さよ　何だつて？　そんぢや、おらがおつ母にさう云つて、あの田地を抵當に入れなけれやア、此處を出て行げつちふのかい。
覺次　いや、さう云ふ譯でねえ。さう云ふ譯でねえけんぢよ、亭主や家の心配事を、何とも思はねえんだつたら、出て行つて貰つたつて同じだと云ふんだ。
さよ　それやア出て行げちゆふんだつたら、何時でも出て行ぐわい。行ぐけんぢよ、お前さん、假りにもそんな事云つて、おら等に濟むかい。無理云つて、一緒になつた手前、世間樣に濟むと思つてんのかい。
覺次　濟むも濟まねえもねえ。俺はお前を、そんな情なし女だとは思つてゐなかつただ。
さよ　おらだつてお前さんを、かうだ意氣地なしだとは思つてなかつただ。
覺次　何だと、まゝ一度云つて見ろ。
さよ　云つて見つとも。立派な意氣地なしでねえかい。人の口先さ乘つて、家も田地も抵當にして金なんぞ借りて、ロクな事一つしねえばつかりか、後仕末さへ出來ねえだ

もん。

覺次　生意氣云ふな。貴様みてえな賣女に、俺の心持が分るか！　出て行け。そんな事まで云ふんだら、直ぐさつさと此處を出て行け。

さよ　あゝ、行ぐとも。お前みてえな男の傍さ居る位だつたら、何處さでも行ぐだ。――あゝあ、こんな目に會ふんだつたら、哥兄さんと一緒になつた方が、どんなによかつたか知んなかつた！

覺次　何だと！　畜生！（猛然立ち上つて、おさよを毆りつける）

さよ　ひーッ（と泣き倒れながら）さう云はれて口惜しかつたら、何ぼでも打て！　さア打て！　打て！（泣き喚く）

（およれ、喚き聲を聞きつけ、急ぎ戸口に現はれ、驚いて中に入り來つて、赤ん坊を其處へ置くより早く、二人の間に割つて入る。）

よれ　（双方をなだめるやうに）あゝこれ〳〵。何をしてんだ。何だつてかうだ喧嘩なんて初めたんだ。

覺次　（陰鬱な顔して默り込み、腰をかける。）

さよ　（訴へるやうに）おつ母ア、まア聞いて呉んつえゝ。

よれ　うん。一體どうしたつちふんだ。

さよ　此家が借金の抵當流れになつて、差押へられつちまふんだとよウ。そして其借金を借り替へる爲に、おつ母が地所を抵當に貸さなけれやア、おらを追ん出すんだとよウ。

覺次　何を云ふんだ。

よれ　（娘に）何だつて、（覺次に）どう云ふ話なんだつて。

覺次　（氣を落ち附けて）いんや、實はない、いづれ其經緯は詳しくお話しやすけんぢよ、俺らがあの製絲組合の資金を借りたために、此の家と田地田畑が、或る金貸の抵當に入つて居てない、其奴が元利共直ぐに拂つて呉んねえと、訴へるの差押へるのつちふもんだからない。其金を外から借り替へて、其奴と綺麗に縁を切つちまひてえと思つたんだわい。ところがそれには、もう一つ別な、確な抵當が要るんでない。一時ほんの名義だけ抵當にすんだから、貴方家のあの田畑をない、ちよつくら借りられるもんだらお借りしてえと、其話をおつ母にして見て呉れるやうに、おさよに相談したんだわい。すると此ん畜生、それが厭だと云ふばかしならいゝけんぢよ、人を意氣地なしだの、何だのつちふもんだから。……

さよ　そんぢやつて其方も、直ぐ出て行けの、良人の心配を知らねえのつちふんだもん。……

よれ　ふうむ、さうかい。さう云ふ譯だつたのかい。（長

大息するやうに）此家邸までが、さうだ事になつてつぺとはちつとも知らなかつた。

覺次（思ひ切つて）そんぢえ、どうだべない。一つ此處で、此の難場さへ切り拔けれやア。今年は生絲の景氣もいい見込だから、後で何ともなく、お返しが出來るんだけんぢよない。あれを抵當に貸して貰へやすめえか。

よね　さうだない。（深く考へ込んで）ほんに大丈夫なんだべない。一旦抵當に貸すはいゝけんぢよ、人手に渡るやうな事はあんめえない。

覺次　俺もはアそれだけは、生命にかけても保證しやすわい。

よね　そんぢやら仕方がねえ。何だか不安心だげんぢよ、お貸しする事にしつペ。

覺次　さうかい。それは難有う。おつ母のお蔭で助かりやす。

よね　だけんぢよない、そんな遣繰りをしねえで、やつて行ける道は無えのかい。

覺次　おつ母にかうだ心配までかけて、全く濟まねえ譯だげんぢよ、外にどうにもしようがねえだ。此儘だつたら、此家は確に差押へになつちまふだ。

よね（嘆くやうに）かうだ事を死んだお前の父やおつ母が、草葉の蔭からどんな顏して見てつぺなア。それに亞米利加さ行つてる、哥兒が聞いたら何て云ふべ。

覺次（悲痛に）おつ母ア、どうかそれだけは云はねえで呉んちえゝ。それだけは云はねえで。……

さよ（何にも云はずに、泣き出す。……）

（三人思ひ〳〵に默り込む。間。）

（突然、戸口の所へ一人の村人、立ち現はれる。）

村人（中を覗き込むやうにして）今日は。御免なんしよ。

覺次　今日は。何か用かい。

村人　あ、覺次さん。俺、今、町で、ひよつくら此の家の覺江さんから言傳賴まれて來ただ。停車場前で、覺江さんに會つてない。

覺次　何、哥兒に！

村人　えい、さうだわい。俺も吃驚しただ。そんぢや此の家さも、歸るつちふ事ちつとも知らせねえで歸つて來たんだない。

覺次　そして何ちふ言傳だつたい。

村人　町でちつと用を足して、あと一時間ばかりしたら、此處さ來つから、俺に序に家さ立寄つて、さう云つといて呉んちえゝつて。――それから彼是、はア一時間近くなつから、其中に俥でゞもはア來るぞい。

覺次　ふうむ。こんなに不意に、どうしたんだべなア、おつ母。（およね、おさよの方を見廻す）

よれ　そして覺江さんの恰好は、どんな風だつたい。まさか人違えや、幽靈に會つたであんめえな？
村人　立派な洋服着て、汽車から下りて來たわい。何でもちよつくら日本さ歸つて來たつちふ話だつた。――ほんに立派になつて來たぞい。
覺次　さうかい。それはどうもわざ〳〵、難有うがした。
村人　そんぢや確に言傳しやしたぞい。――左樣なら。
覺次　左樣なら。
村人　（少し行きかけて、遠く街道の方を望み）あゝ、さう云つてる中に、はア倅が見えるやうだぞい。（去る）
覺次　さうかい。（戸口の所まで出て見る）ほんたうだ。はア沼の縁まで來た。（引込む）
よれ　どれ。そんぢや迎ひに出なくてなんめえ。（行きかける）
さよ　あらゝ大變だ、こんな髪をして。……（身じまひを直す）はア、顏、洗へめえか。
覺次　それよつかおつ母も、おさよも、哥兄が歸つたつて、今の話は俺が云ふ迄、默つてゝ異んろよ。
さよ　あい。――
よれ　だけんぢよ、哥兄が成功して來さへすれやア、はア此家も大丈夫だ。いゝ時に歸つて來て異つちやなア！
覺次　（少し苦しげに）けんぢよおつ母ア、此方の事に就ては、餘計な事は云はねえで異んちえゝ。歸る早々から要らねえ心配かけつとなんねえから。
よれ　あゝ云はねえ。はア大丈夫だから何も云はねえ。
さよ　そんぢや來ねえ中に、おらちよつと、上つ張りだけでも引かけて。――（赤兒を抱いて奥へ入る）
よれ　あゝ、倅の音が其處迄來た。（いそ〳〵と門口の方へ出る）

（覺次、土間の眞ん中に立ちつくしてゐる。倅の音、いよ〳〵近づく。……）

――幕――

第四幕

同じく三瓶が農家の内部。

舞臺面其他には殆んど變化なし。たゞ土間座敷はやゝ片づき、上り框の所に、覺江が持ち歸れると覺しき、スーツケース、土産物らしき箱包みなど、二三積み置かれあり。

前幕より一時間ほど經ちたる後。曇りを洩るゝ午後の日ざし、戸外にやゝ明るし。

爐には湯釜掛けられ、煙ゆるく上る。……

幕あくと、母およれ臺所の方にて、新しく取出したる

膳碗の類ひを、拭き揃へ居る。やがてそれを終つて、爐端の方へ來り、火の工合をなほす。

奥より、おさよ出で來る。彼女は髪をなでつけ、小ざつぱりした物に着換へ居る。

よれ　嬰つ兒ははア寢たか。

さよ　あん。やつと寢ついたわい。哥兒さんが餘り急に歸つて來たんで、家ん中がどさくさして居んのを、嬰つ兒でも分ると見えて、ちよつくら癇が高ぶつてんのか、毎もよりなかなか寢つかなかつたけんぢよ。……

よれ　さうだべな。何しろ見馴んねえ人が、洋服なんて着て入つて來たんで。……

さよ　先刻はおら、ほんとに困つたわい。哥兒さんを見つと、火がついた見てえに泣くんだもん。

よれ　それに覺江さんが、あやすやうに顏を寄せたら、猶泣くんでなア。

さよ　ほんにない。

よれ　そんぢえも覺江さんは、俺が顏餘つ程怖なく出來てつと見えるなんて、笑つて居たからよかつたけんぢよ、いゝ氣持はしなかつたかも知んにえゝ。

よれ　おらもあの爲に、碌すつぽ挨拶も出來ねえつちまつた。

よれ　まアよかんべ、ゆつくらで。——

さよ　（戸外を見るやうにして）それはさうと、哥兒さんはお墓から、なかなか歸んねえない。

よれ　あゝ。父やおつ母アの墓さ取つついて、まだ泣いてつかも知んにえゝ。何しろ居ねえ間に、知らせる事も出來ねえで、死んぢまつただから。續けざまになア。

さよ　さうだない。——それとも何處か他さ、挨拶にでも廻つたかも知れにえゝ。

よれ　さうかも知んにえゝ。けんぢよ覺江さんと道で會つても、村の人もちつくら分んねえで、挨拶されたら驚くべなア。

さよ　何しろ、餘り歸り方が不意なんだもん。誰だつて、吃驚するわい。あんでは哥兒さんも、おらゝを不意に驚かせつぺと思つて、惡意に歸つて來たつちゆはれても、仕方がねえでねえかい。

よれ　行ぐ時も不意だつたから、歸つ時も不意の方がいゝと思つたんだべ。

さよ　（話頭を轉ずるやうに、臺所の方を見廻しながら）そんぢえおッ母ア、はア、膳の方は濟んだのかん？

よれ　あゝ、空拭きまで、すつかり終つちまつただ。暫く使はねえかつたんで、何だか埃つぽいかつたから、裏の隅つこまで、丁寧に拭いといた。こんぢえはア覺江がいつ何時、何人歸つて來たつて差支へはねえ。

さよ　さうかん。それやアえゝ鹽梅だつたない。
よれ　おら、あの膳を出してゐる中に、覺江さんが發つ前の晩の事を、すつから思ひ出しただ。――七年ちゆふと隨分永い前だけんぢよ、不思議によッく覺えて居る。お前とおらとお客に招ばれて來て、あの膳の前さ坐つたつけが。……
さよ　（浮かぬ顏で）さうだつけない。
よれ　（感慨深く）あん時から見つと、變んねえのは膳だけかも知んにえゝ。
さよ　（話頭を更に轉じようと思つて）そんぢや、晩げの用意は、はアいゝんだない。
よれ　大抵いゝけんぢよ。なアおさよ。おめえ赤飯は焚くんでねえのか。おら、炊いた方がいゝと思ふんだけんぢよ。
さよ　さうだない。けんぢよ、赤豆（あづき）もまだ浸（うる）かしてねえし、いづれ明日にでも、お祝えに强飯を炊かねえとなんめえから、今日はたゞちよつくらした物で、酒でも出しただけでいゝでねえかい。
よれ　さうだなア。だけんぢよさう手數でもねえんだから、炊いたらどうだべ。小豆を浸かすんだつたら、おら、是からしてやつから。
さよ　いや、焚くんだつたら、おらがするわい。何でもねえだから。――そんぢやら炊くとしつぺ。
よれ　氣は心だ。さうしたらよかんべ。
さよ　（立上つて臺所の戸棚をあけ、赤豆の袋を探す）それはさうと赤豆はあつたべかなア……何しろ急なんで、何が何だか分んねえ。……
よれ　（少したしなめるやうに）おさよ、おめえたち、何だか覺江さんの歸つたのを、喜ばねえやうに見えつけんぢよ、そんぢやア濟むめえぞ。
さよ　え、何だつて。おッ母ア。變な事云はねえで呉んちえゝ。おら、たゞ餘り哥兄さんの歸りやうが急だつて、云つてるきりでねえかい。
よれ　さうか。そんぢやらいゝけんぢよ、何ぼ急だからつて、さうぶつ／＼云はねえで、働いて呉つちやらよかんべ。
さよ　（少し膨れて、赤豆を笊に入れ）そんぢやら、早く井戸端さ行つて、洗つて來つとしつぺ。

（おさよ笊を持つて出て行く。およれも不興げに其後を見送り、思ひ直して爐火をつぐ。）

（覺次、奥より出で來る。手鞄を携へ居る。）

覺次　あ、およねおつ母。哥兄はまだ歸んねえんだない。
よれ　あゝ、はア、小一時間になつけんぢよまだだわい。きつと何處かさ寄つたんだべ。それとも今もおさよに云

つてたんだけんぢよ、墓さ向つて積る話があんだべ。
覺次　それぢや兎に角、哥兄が歸つて來ねえ中に、ちよつくら出掛けて、用を片づけて來つからない。
よね　何處さ出掛けんだい。
覺次　ちよつくら事務所さ行つて、相良君に話をつけて來ねえと、どうも氣が氣でねえから。
よね　さうかい。そんぢや哥兄さんも居んだししつから、成るべく早く歸つて來て吳んちえゝよ。
覺次　あん、直ぐだ。哥兄さんが墓參りから、歸つて來ねえ中にと思つてる位だから。——それはさうとないおよねおつ母。先刻の貴方家の田地の件ない、宜しく賴んだぞい。俺、是から相良君と會つて、はつきりさう定めて來つから。
よね　そんなに急いでんのかい。おら、丁度覺江さんも歸つたししつから、哥兄さんとよく相談して、それからにしたらよかんべと思つてんだけんぢよ。哥兄さんに話しても見ねえのかい。
覺次　そんな事は出來ねえ。歸つて來たばつかしの哥兄に、そんな心配掛けられねえでねえかい。それにあれやア俺等がした事で、俺等だけが責任を持つてる仕事なんだもん。俺、哥兄の耳さ、ちつとでも入れたくねえから、かうして一刻も早く、話だけつけて置きてえと思つてんだ。
よね　でも覺江さんとは兄弟でねえかい。
覺次　兄弟だつて、かう云ふ話は違ふわい。兄弟だから猶更出來ねえわい。俺、意地でも出來ねえ。——だからおツ母アもそんな事、一言でも云つてはなんねえぞい。俺等が事は、俺でちやんと片は付けつから。貴女家の田地だつて、一時名儀だけ借入れるつきりで、心配はねえだから。いゝかい。
よね　そんぢやらせうがねえ。貴方のいゝやうにしつさんしよ。おら、何だか一度、哥兄さんに相談して、どうにかして貰つた方が、いゝと思つてたんだげんぢよ。
覺次　貴女もはア一旦、承知して吳つちやんだから、今更そんな事誰にも云はねえで、話をつけさせて吳んちえゝ。いゝかい。云つてなんねえぞい！
よね　そんぢやア仕方がねえ。覺江さんにも誰にも云はねえわい。
覺次　賴んだぞい。——そんなら、ちよつくら行つて來つから。（立上る）
よね　行つて來さんしよ。
（覺次出て行く。暫らくしておさよ、笊を持ちて入り來る。）
さよ　一匹虫が入つてたんで、澤山喰はれちまつたかと思つたら、そんなでもなかつた。（臺所へ持つて上つて、

水桶の中へ淺す）
よれ（ぼんやり考へ込んで居る）　さうかい。……
さよ（爐端へ來て）今、覺次は出て行つたやうだけんぢよ、何處さ行つたんだん。
よれ　相良と話を付けにだとよ。――おさよ、おめえどう思ふ。あのおら家の田地、大丈夫だべかなア。
さよ　まさか間違ひはあんめえと思ふけんぢよ。……
よれ　ひよつとして、あれまで人手さ渡るやうな事があつたらどうしッペ。――覺次さんもいゝけんぢよ、年を取つたおらに迄こんな心配をさせて。……
さよ　おつ母ア、ぼんに勘辨してお呉んなんしよ。
よれ　あゝあ、初めつから此家に、覺江さんが居て呉れたらかうだ事にならなかつたべに、なア。
さよ　おつ母アー　それだけはどうか云はねえでお呉んなんしよ。
よれ　そんぢえも、まださう身代限りをしねえ中に、覺江さんが歸つて來て呉れたから、是からはどうにかなつペけんぢよ、覺次はまだ哥兄さんには、ちつとも相談もしねえ積りなんだもん。
さよ　今更哥兄さんに、相談して心配かけるよりか、吾が手で出來るだけの事ア、して見てえんだべわい。そんぢやからどうかおつ母も、覺次が好きにさせて呉んつあんしよ。おらもお願するわい。
よれ　それやアさうしてやんのはやつけんぢよ、やらずに濟む事だつたら、心配な事アさせたくねえから。
さよ　覺次だつて男だわい。さう信用出來ねえ事もあんめえわい。
よれ　……
さよ　それは覺江さんが、ずつと此家さ居んだつたら、後はおつ母も安心だべ。
よれ　だけんぢよ覺江さんは、どうしんだべ。はア歸りつきりに歸つて來て、いつまでも此家に居んだべか。
さよ　さうだべわい。金もはア餘つ程溜つたんで、此處で安樂に暮してえと思つて、歸つて來たに違えねえわい。
よれ（獨語のやうに）して見つと結句、哥兄さんの方が仕合せだつたのかな。
さよ（つと不興げに）どら、嬰つ兒の顏でも見て來つペ。（立去る）
（戸外より相良入り來る。）
相良　今日は。――あ、およねさん。貴女つきりかい。
よれ　あい。覺次は今の先刻、出かけたぞい。貴方に會ひに行ぐちふて。
相良　え、俺に會ひに？
よれ　あい。さう云つて行つたわい。

相良　さうかい。そんぢや丁度行き違えになつただ、俺、ちよつくら佐吉つあん家さ寄つたもんだからない。――まアいゝだ。覺次さんも向うさ行つて、俺が此方さ來たの分つたら、戻つて來つぺから。じたばた又戻つて、ま一度行違ひになつと詰んねえ。それよつか此處に待つてべ。

よれ　それもさうだない。尤も向うでも、貴方を待つてつと困つけんぢよ。

相良　なアにそれやア大丈夫たわい。――それに話で聞くつちふと、覺江さんが歸つて來たつちふでねえかい。眞實かい。

よれ　眞實だわい。ほんに思ひがけなく、急に歸つて來てない。おらも嘘かと思つたわい。

相良　さうかい。何時つ頃？

よれ　つい一時間か二時間前だわい。

相良　そして今は何處さ行つたんだい。

よれ　歸つて來つと直ぐ、おら等と挨拶もそこ／＼に、兩親の墓參りさ行つたんだわい。そしてまだ歸つて來ねえんだぞい。はア歸つて來る頃だげんぢよ。――

相良　さうかい。そんぢや俺も兎も角、此處に待つてゝお目にかゝつぺ。――覺江さん、どんな樣子で歸つて來やしたい。

よれ　洋服なんて着てない。其上、頭ア伸ばして分けたりしてんで、顏はもとゝさう變りもしねえけんぢよ、ちよつくら會つたんでは、分んねえ位だわい。

相良　そんぢや覺江さんも成功して、故郷さ錦を着て歸つたんだいな。

よれ　どうだか分んねえけんぢよ、ちつとは金も貯めて歸つたんだべ。そんぢえねえと歸られねえもの。

相良　亞米利加で何してたんだべ。

よれ　おら、よく分んねえ。今までだつて、便りもさうなかつたし、まだそんな話聞きもしねえから。

相良　何にしても覺江さんは、たうとう成功しただなア、亞米利加さ行けば、金は取れつけんぢよ、ほんとにそれを蓄めて成功して歸るのは、難かしいちふ話だのになア。

よれ　それやア覺江さんにしては、隨分辛い目をしたに違ひあるめえわい。ない。

相良　ほんに人間の運つちふものは分んねえ。覺江さんなんて、まア地道に稼ぎためて來たんだべけんぢよ、あんな事さへなかつたら、矢つ張したゞの百姓だつたかも知んにえゝ。――ほんに人間は七轉び八起きだない。

よれ　さうだない。――だけんぢよ、貴方らの方の仕事はどうだい。早く八起きちふ譯に行かねえかい。

相良　まア／＼待つて居て見つさんしよ、此處せえ切りぬけれやア、先が見えてんだから。――それにしても覺江

さんは、ほんにいゝ時に歸つて吳れたもんだない。

よれ　さうだわい。おらも何だか、あの人が歸つて吳れたんで、實は一と安心したわい。

相良（戶外を振り向いて）あ、さういふ中に、覺江さんが歸つて來たやうだぞい。

よれ　さうかい。

（覺江、鬱然たる樣子にて入り來る。）

相良（戶口の近くまで出迎へて）あゝ、覺江さん。よくお歸りになりやした。お芽出度うがす。

覺江（ちつと見て、淋しき微笑を洩らし）あゝ、相良さんだつたない。貴方も變りなくて。およねおつ母、只今。どうも遲くなりやした。

よれ　お歸んなんしよ。

覺江　墓地の草ア、すつかり拐つて來やした。

よれ　それやア大變だつたない。

覺江　なアに。——

相良　ほんに貴方の留守中に、御兩親ともお亡くなりになりやして、さぞ貴方もお力落しだべない。此處さ來てから、初めて分つたんですかい。

覺江　何だか、そんなやうな覺悟は、してやしたけんぢよない。——（およねに）それから歸りに石屋の爲さん家さ寄つて石塔誂へて來やした。

よれ　さうかい。それやアいゝ鹽梅でしたない。

覺江　爲さん、吃驚して居たつけ、そして言葉なんて急に丁寧にしたり、ぞんざいにしたり。……

相良　さうだべない。ほんに俺だつて、さうと聞いて居ねえけれやア、分るめえもの。でも、立派に成功してお歸りになつて、何よりですない。

覺江　成功して歸つたなんて、そんな事ねえぞい。たゞ七年も向うに居つと、どうも矢も楯も溜んなく、歸りたくなる時があるんでない。五六七年目あたりが、誰でも日本の土を、一度踏んで見たくなる、いけねえ時期なんだとい。——其處を過ぎて、まつと永くなつと、さう歸りたくなくなるさうだけんぢよ。

相良　さうだべない。七年つちふと何でもねえやうだけんぢよ、向うに一人で居つと、ない。

覺江　丁度隣り地の人で、矢つ張し歸る人があつたもんでない。つい勸められたから、其氣になつたんだわい。今年の作物は種も蒔いて、はア芽が出たのを見たまゝ殘して。——

相良　さうかい。そんぢや貴方は此方さ、歸りつきりでねえ積りなんですかい。

覺江　さア、そこは都合でどつちにもするとして、まア一度歸つて見つぺと思つてない。——時に覺次は？

れよ　ちよつくら用があつて、出掛けたんだわい。直ぐ歸つて來つぺ。

相良　なアに俺等が一緒に、やつて居る仕事があんでない。其用で俺と會ふ筈になつてんだけんぢよ、行き違えになつたんで、俺もかうして待つてんですわい。其序ッちゆッては悪いけんぢよ、是非貴方にもお目にかゝつて、向うの話でも伺ひてえと思つてない。

よれ　（茶を注いで出しながら）哥兄さん。まア此方さお坐んなんしよ。そして相良さんも、此處さ掛けてお呉んなんしよ。

（二人、爐ばたの程よき邊に座を占める。奥よりおさよ出て來る。）

さよ　あ、哥兄さん。お歸んなさんしよ。

覺江　いや、ゆつくらだつたばい。――嬰つ兒は？

さよ　（何故となく眞つ赤になつて）寢かしつけやしたわい。ほんに喧ましい餓鬼で。――

覺江　あんまり怖い叔父つあんなんで、蟲でも起さなければアいゝと心配しやした。

さよ　まさか。――疳性で誰を見ても泣くんで、困りやすわい。

相良　覺江さんはまだですかい。

覺江　まだつて？

相良　いえ、……よく有んでありやせんかい。向うさ行つてる人が、寫眞結婚ちふて。――

覺江　馬鹿云はねえでお呉んなんしよ。そんなもの向うで貰ふつたつて、野原ん中の百姓屋へ、誰が來つかい。

相良　（座を直すやうにして）一體貴方は、彼方さ行つて、何ちふ所にどうして居たんですい。失禮だけんぢよ。よかつたら、どうか俺等にも、向うの話を聞かせて下さんしよ。

覺江　さうだない。着いた時一度手紙をよこしたつきり、誰にも便り一つしねえで、居所も知らさなかつたけんぢよ、俺今迄、コロラドちふ所に居たんだわい。亞米利加もずつと奥で、ロッキー山つちふ山の麓でない。あんまり人の行がねえ、廣い開墾地なんだわい。

相良　矢つ張り其處で、百姓して居たのかい。

覺江　さうだわい。――丁度、向うのシャートルから陸さ上つて、ボーデング・ハウスちふ宿屋にごろ／＼して、鐵道工夫にでもなつぺかと思つてつ所さ、丁度コロラドから農夫募集が來てない。直ぐ行つちまつたゞわい。

相良　其處で矢つ張り米を作んのかい。亞米利加でも日本村ちゆふて、此方から行つた人が米や馬鈴薯なんて作つてんだつてない。

覺江　いや、俺らが所は北の方の、ずつと奥だからさうで

ねえだ。主にシュガー・ピーツちゆツて、砂糖大根を作るだ。それは日本の大根と蕪を一緒にしたやうなもんでない。廣い／＼畑を馬で耕して、一里も二里もある畝さ、一面にずつとそれを作るんだわい。

相良　ふうむ、砂糖大根……？　矢つ張り甘えのかい。

覺江　さうだわい。向うではそれから砂糖を取んだわい。

相良　さうかい。そしてそれを作つてゐる所さ、雇はれて働くんだない。

覺江　まア初めはさうだけんぢよ、それでも此方の作男とは少し違ふんだわい。——まア初め向うの土地さ行ぐとする、ない。廣い／＼開墾地の中さ、ポツリ／＼と立つてる小屋があんだわい。其處で俺等は其小屋さ入つて、其處について居る土地を、まア借りて小作するちふ譯になんだ、ない。向うの土地の廣さは、エーカーちふのが此方の歩合で、一エーカーが日本の二町歩もあるんだぞい。それを一人で二十エーカーから四十エーカーまで借りて、今の砂糖大根を作るんだわい。大抵の人は初めは二十エーカーだけんぢよ、俺は一生懸命働くべと思つて、初めつから三十エーカー作つて見たゞ。

相良　一エーカー……とかゞ二町歩だと、三十エーカーなんて、大變だない。

覺江　それやアない。先刻も云つた通り、さうなつと一本の畝が、ずつと一本で二里の餘りもあるわい。

相良　ふうむ。それを一人でやんのかい。

覺江　尤も耕すのは馬を使つて、どん／＼やつちまふから此方の畝りのやうではねえけんぢよ、後は種蒔きから、何までずつかり一人でやんだわい。

相良　ふうむ。大變だない。

覺江　なアに此方の百姓に慣れてれば、それ程でもねえわい。廣いつたつて、順々にやつて行ぐと。——先づ一番先は春早く種を蒔いて、一面に芽が出る、ない。するとその一寸位に育つのを待つて、四月の初め頃から、シンニングちふて、一尺位に一本づゝちやんとうろ拔くんだわい。それが西洋の百姓だと、立つて居るまんまで、長い鋤鍬で拔き取つては、一本ちやんと殘さなくてなんねえんだが、立つて居るまんまだもんだから、なか／＼六ケ敷いんだわい。ところが日本人だと、腰が強いんで、しやがんでうろ拔くと、何でもなかんべ。鍬の柄を短くして、かう云ふ風に、一尺位づゝ掻き取つては、一本だけ殘す。……さう云ふ所で日本人は重寶がられんだわい。

相良　成程、ない。

覺江　それは四十日位で、すつかり濟ますと、今度は一尺位づゝ育つた大根の、草取りにかゝるんだ、ない。ホーイングちゆつて。是が六月一杯位かゝる。——それから

後は、默つて放つとくちふと、十月頃、すつかり出來つちまふんだわい。それを今度は拔き取つて、タツピングちふて頭の葉つぱを切り落しては、其處へ積み並べるんだけんぢよ、その拔いて、頭を刎ねて、並べるのが又日本人でねえと、器用に行がねえんでない。たゞかうして、（と形で見せ乍ら）拔いて庖丁みてえなもので、ぱつと頭を切つて、ぽんと其處さ置くだけなんだけんぢよ。——から云ふ風に、ない。

相良　所程。——

覺江　たゞそれだけなんだけんぢよ、それが初めの小作みたいな契約でも、一エーカーの間引が十ドル、草取りが五ドル、タツピングが十ドル、まア一年に一エーカーで二三十ドルは取れるんでない。

相良　一ドルちゆふのは確か二圓だから、一エーカーで五六十圓、二十エーカーで五十圓として千兩！　ほゝう、さうかない。

よね／よさ　まア。（先刻から感嘆して聞いてゐる。）

覺江　それが小作だからだけんぢよ、今度は其翌年から、地主にでも信用されれやア、ハーフ・シヤーちゆて、道具や馬を借りる代りに、收穫の半分々々を分ける事にすれやア、まつと金になつし、それで少し金を貯めたところで、今度はキヤツシ・レントちふ、地代を拂つて土地だけ借り、此方で馬や道具を買つて、自分だけで作る段になれやア、もつと倍も入るつちふ譯で、淋しくつて辛えけんぢよ、身體がよくて少し辛棒せえすれやア、後で磨(す)つちまはねえ限り、誰でも少しは殘せるんだわい。

相良　ふうむ。さうしつと貴方は七年居たから、はア彼是、一萬兩も貯めた譯だない！

覺江　（淋しく笑つて）いんや、さうは行がねえわい。まア、話半分として三千ドル在つかねえか。旅費だの何だの、いろ／＼費つたゞから。

相良　そんぢえも大變だない。三千ドルつちふと六千兩。……

覺江　けんぢよ、此の面白え盛りを、一人で働き暮らした油汗の代だと思ふと、俺、何だか情なくなる。……廐いもんだわい。高くていゝと思ふんだら、貴方、まア行つて、向うで一人で働いて見つさんしよ。

相良　いや、俺も身體が丈夫だら、何だか直ぐにでも行ぎてえ位だぞい。

よね　相良さん。ほんに貴方が渡米して呉れつと、村中が靜かになつていゝかも知んにえゝぞい！

相良　いやア、これやア飛んでもねえ所で、一本參りやした。はゝゝは。

（皆々妙に淋しく笑ふ。間。）

覺江　ところで、俺が方はもうはアそれで、大略話しつちまつたゞから、今度は此方の方を、いろ／＼聞かせて貰ふべ。——其間に此方で、貴方らがどうだに仕合せに暮したか——。父やおつ母アの外には、皆、變りもねえんだべない。（皆を見廻す）

相良　貴方が行つてから村には、是と云つて別に變りもねえけんぢよ、……あゝさう／＼。助役をして居た遠藤さんが、卒中で死んだぞい。貴方家の父が死んだ一年ばかし後。——

覺江　さうかい、酒を飲んで、元氣過ぎる位だつたが、たうとうそんな事になりやしたかい。

相良　ほんに人間つて、分んねえもんですない。午後俺らと役場で話をして、其晩なんだからない。

覺江　ふうむ。そんぢえ今助役は誰なんだい。

相良　なか／＼後任が定んねえで、少し紛めやしたけんぢよ。たうとう穀屋の齋藤さんが成りやしたわい。其時一部の人の中には、俺に成れつちふ話もあつた位だつたけんぢよ。……

覺江　そんぢやえ失敬だが貴方は？　今、役場に出てねえんですかい。

相良　（頭を掻いて）　えゝ、まア、そんな事だのこんな事だので、時々は名譽書記ちふやうな格で、顔だけは出しやすが、ない。——

よれ　（傍から少々意地惡く）　相良さんは今は覺次と一緒に、組合みてえなものを作つて、製絲工場をやつてんだわい。

覺江　へえ、さうかい。

相良　なアに此方の覺次さんを頭に、合資組織で小せえ絲繰り場を拵えて見たんだわい。

覺江　そしてそれは甘く行つてんのかい。

相良　（頭に手をやつて）　それがない。今の覺江さんの話と違つて、年々不運續きだつたもんだからない。此處さへ越せば、まアどうにかかうにか、やつて行けつぺと思ふんだけんぢよ、丁度、資金や何かゞ盡きて、今が苦しい頂上なんでない。困つてんですわい。

覺江　ふうむ。苦しいつてどうなんだい。

相良　（少し容を改めて）　實は今日も其問題で、覺次さんと相談に來て居んですけんぢよ、眞實の事を云ふと、少し財政上の遣繰が過ぎやしてない。或る債權者が妙な事を云ひ出して、直ぐ借金を拂ひ戻すか、それでなけれやア、抵當に入つてゐる此の家邸を、差押へつちまふつて訊かねえんですわい。

覺江　え、何だつて？

さよ　（傍から）相良さん。そうだ事云つて關はねえのかい。

相良　いや、どうせ哥兄さんが歸つて來たからにやア、一度は御相談も申し上げた方が、却つていゝと思ひやすから、まア內輪の事まで云つちまひやすけんぢよ、今、俺らはたつた二千圓の金の爲に、信用を失ひかけてるつちふ譯なんですわい。

覺江　ふうむ。二千圓で、此の家邸が抵當に入つてるつちふんだない。

相良　さうだわい。今、二千圓さへ別な方から借りるか、どうかして出來せえすれやア、何でもねえんですわい。それで俺らも色々心配して、いろ／＼と工面して居んだけんぢよない。――

覺江　さうかい。――さうだ事とはちつとも知らねえかつた。さうかい。それやア困つたべない。（何となしに立上つて）いや、そんぢやアいづれ、俺もよつく覺次と相談して見なくてはなんねえ。そして何とか及ばず乍らも、心配して見なくてはなんねえ。……（土間の方へ步き出す）

さよ　（傍から）でも、覺次の方では何だか、話がついた樣子で、哥兄さんにそんな心配をかけては、困るつて云つてゐやしたぞい。

相良　いや、それもさうだべけんぢよ、俺、覺江さんに相談して、かうして話を聞いて頂いただけでも、心丈夫だからない。

よれ　（傍から）それやアさうだない。

覺江　（妙に嬉しげに考へ込んで、獨語する）ふうむ。さうかい。……

（戶外より覺次急いで入り來る。）

覺次　（入り來るや否や）あ、相良君！　此處に居たのか。（と、土間に離れ居る覺江を認め）あゝ哥兄さんもお歸んなつて居やしたない。鳥渡用が在つたもんで。出かけて濟みやせんでした。

覺江　いゝや、そんな事。……

相良　丁度行き違えになつたんで、覺江さんのお話を聞きながら、お待ちしてたわい。

覺次　俺、さうとは知らねえかつたもんだから、お前さんの後ばつかし追つて、佐吉つあん家さ行つたり、役場さ行つたり隨分探し廻つたぞい。

相良　それやア濟まねえかつたない。

覺次　そんで兎に角、話しだけは早く付けて置かねえと、後で困ると思つてない。

相良　俺も其件で、かうして待つて居たんだけんぢよ。――

覺次　あれやア兎に角、二人で相談して定めて了ふべ。（覺江の方を向き）哥兄には濟まねえけんぢよ、ちよつくら

話をつけて了ふ間、もう少し此處に待つてゝ貰ふとして。
――奥さ行つて定めつぺ。

相良　けんぢよ其件に就いては、ない。俺今實は覺江さんにも、相談に乘つて貰つた方がいゝと思つて、大略話して了つたわい。だから此處で覺江さんの前で、猶貴方から事を分けて話して呉れる方が、いゝと思ふんげんぢよ。――

覺次　えつ!? 何だつて? 哥兄にはア話した?

相良　さうだわい。そして一緒に心配して頂きてえと思つて。――

覺次　相良君! お前何だつてさうだ事、……さうだ餘計な事をして呉れんだ!

相良　そんぢや話して惡かつたのかい。

覺次　惡いちふんでねえけんぢよ、餘計な事でねえか! 何も哥兄に對して、俺ア隱し立てをしてえちふんでねえけんぢよ、歸つて來る早々から、さうだ事を聞かせて、心配させねえだつて、俺だちのやつてる事ア、俺だちで片をつけて、それから話をしたつて、遲くねえでねえか。――お前、何もかもみんな話しつちまつたのか。

相良　(少し權幕に悄氣て) さうだわい。

覺次　何もかも、借金の事もか!

相良　(肯く) ………

覺江　(靜に二人の間に進み出てゝ) 覺次。俺は大略、確に相良さんから聞いたゝ お前、今二千圓どうかしねえと、此の家邸が差押へられるつちふのは、眞實か。

覺次　そりやア眞實は眞實だけんぢよ、其事に就いてだら、俺、哥兄の心配は受けねえたつていゝんだ。其事だら、話ははア定つてるだ。

覺江　さうか。そんぢえも今相良さんに聞くと、さうでもねえやうだが。――

覺次　いや、其件に關してだら、哥兄の心配は要らねえ。此家を抵當に入れたつちふ事は、それやア父や哥兄には濟まねえ事かも知れねえけんぢよ、哥兄が亞米利加さ行つて、俺が後を預つて居る以上、責任を以て處置して居るんだから、まだ潰しでもしねえ限りは、心配して貰ふ必要はねえだ。

覺江　さうか。そんなら俺だつて何も、心配はしねえけんぢよ、相良さんがさう云ふもんだから、つい口を出しただ。(相良の方を見る)

相良　それぢやつて覺次さん。貴方、話はついたつちふけんぢよ、どう云ふ風に付いたんですい。

覺次　それやア君、先刻君が云つた方法で、あの別な方の抵當で、借り變へたらそれでいゝでねえかい。(およねの方をちよつと見て) あれははア、此方では承知して貰

つてるだ。いつでもさうしていゝ事に定つてるだ。

よれ　（張り疲れたやうに）だけんぢよ覺次さん。おら、はア厭だぞい。あんな事厭だぞい。

覺次　厭だ?!

さよ　（傍から）何云つてんだおッ母ア、今更になつて、何云ひ出すだ。

よれ　（半ば泣き訴へるやうに）そんぢやつておら、先刻はあゝ云はれて、仕方なしに承知したけんぢよ、厭だぞいおら、おら家の田地を抵當にして、此上借金を借り變へるなんて、どうしても厭だぞい！

覺次　おつ母ア、お前まで今更さうだ事云ひ出すのか?!

さよ　子供みてえに、今更さうだ事云つて、おら等に濟むのか。おつ母ア。何云ふだ。

よれ　覺江さん、どうかして呉んちえゝ。おら等を助けて呉んちえゝ。おらが先祖からの田地を何ともねえやうにして呉んちえゝ。

（およれのヒステリックな訴に、皆々默つて首垂れて了ふ。）

覺江　よし、分つた、おつ母ア、心配しつ事アねえ。（突然立つて行つて、其處の荷物の所に、置いてあつた手提鞄をあけ、中から紙幣束を取出すと、靜に覺次に近づいて）さア覺次。此處に二千圓ある。取つて呉んろ。

覺次　（兄の顏を恨めしげに見、紙幣を見、それから頭を激しく振つて）厭だ。俺、哥兄にさうだ事して貰ふ譯はねえ。厭だ。

覺江　どうして？

覺次　どうしてゞも厭だ。今更、哥兄に助けて貰ふ義理はねえだ。俺、死んでも厭だ。

さよ　（傍からヒステリックに）さうだ！　覺次さん、死んでもおら達は、さうだ金貰つてはなんねえ。おらも厭だぞい。死んでも厭だぞい。（泣き伏す）

（間。）

覺江　（二人をぢーつと見廻して）さうか。そんなに迄おめえ達は、受取つて呉んにえゝつて云ふのか。――（間暫らくして、憤るよりも、涙聲にて）だがなア、覺次。それからおさよちやんも。おめえ達は俺が此の金を出すのを、七年前の仇を打たれるやうな思ひで、厭なんだべげんぢよなア。併し今はさうだ事思はねえで、素直に取つて呉んにえゝか。――それやア成程、俺だつて、あゝ云ふ事があつて家を出て見れやア、見返してやるつちふ氣はねえ迄も、何か金でも持つて歸つて、おめえ達に顏を合せてえと、思はねえではなかつた。そして、確にさう云ふ積りで、一生懸命稼いで、金だけは蓄めて歸つて來た。けんぢよ俺ア今何もそれで、かう云ふ折にぶつつ

かつて、お前たちに金で面を張るつちふ氣は、更にねえんだぞ。――いや、さう云ふ氣はあつかも知んにえけんぢよ、さう云ふ氣があれやア、かうして仇打ちをした氣でゐる俺の方が、神様の目から見れやア、餘つ程、可哀さうな人間なんだぞ。俺は何ぼ金をためて、かうして歸つて來たつて、仕合せな成功者でなくて、まつと〳〵七年前より、ずつと不仕合せな男なんだぞ。――眞實だ。幾ら金を蓄めて歸つて來ようと、どんなに偉え人になつて來ようと、決して見返した事にはならねえ。――若しお前たちが是で、見返されてると思つたら間違えだし、見返してやつた氣だら、俺は猶の事馬鹿野郎だ！――だから若しお前たちが、さうだ風に考へて、意地で受取りたくねえと云ふんだつたら、どうか思ひ直して素直に納めて呉んろ。なア。俺が頼む。どうか受取つて呉んろ。

（皆々首垂れて答なし。相良のみ時々、顏を上げて覺江の顏を仰ぐ。……）

覺江　おめえ達が俺の其氣持を察して、氣持よく受取つてせえ呉れゝば、俺、はア直ぐ是れから、又亞米利加さ歸る。俺にやア、矢つ張りコロラドで、一人で砂糖大根を作つてる方が、小金なんぞ持つて歸るより、よつぽど分に合つてるだ。――だから俺がたつた一度の、それつきりの志だ。受取つて呉んろ。なア。

（覺次まだ答へず。）

覺江　それにたとへ、仇を打たれるにしろ、見返られるにしろ、俺がやつと遂げたばかりの、小せえ、淺はかな思ひでねえか。たまにやア俺が志も、ちつとは叶へさせて呉んろ。な。

（覺次益々深く首垂れる。）

覺江　是ほど云つても、受け取つて呉んにえんだら、仕方がねえ。俺、出した金は、兎に角、此處さ置いてくだ。だから、それ迄は止めねえで呉んろ。そして後で厭だつたら、火さでも何さでもくべて呉んろ。そんならよかんべ。なア。（紙幣を其處に置く）

（覺次もさすがに、それを拒絕する力もなく、猶俯向いたまゝ。……）

覺江　それからない、相良さん。貴方は幾らかまだ役場に關係があんだべから、一つ頼みやすが、此處に後現金で、三千圓ある筈だからない。これを一つ村さ、寄附する事に取計らつて呉んつアんしよ。お墓參りの歸りに、見て來た所では、何だか村の學校も、大分毀れかゝつてるやうだから、あれの修繕費にでも建築費にでも、何にでも費つて呉んつアんしよ。いゝかい、頼んだぞい。金は此處に在つから。（別な札束を鞄の中から差出す）

相良　（驚いて）さうだ事して、みんな村さ寄附して、い

いのかい。

覺江　いや、まだ少し殘つてるし、亞米利加さ歸る旅費は十分あつから、ちつとも關はねえわい。それに又彼方させえ行けば、又どうにでも成るんだから。――持つて歸つたつてせうがねえ金だわい。

相良　さうかい。それ程迄に云ふんだら、確にお引受けしやした。早速、さう云ふ風に取計らひやすべ。役場でも何ぼか喜びやすべい。何つ處も財政窮迫中だから。

覺江　宜しく賴みやしたぞい。（と鞄を閉ぢ、それから荷物を見渡して、およねに向ひ）そんぢやらおよねおつ母。俺はア是から直ぐ、出掛ける事にしつからない。此の皮鞄の外のいろ〳〵な紙包みは、まア土産代りに持つて來た物だから、貴女たちで何とか貰つて置いて呉んつあんしよ。

よね　（顏を上げて）　ほんにはア行ぐのかい。

覺江　（冗談らしく笑つて）　あん。――向うにやア砂糖大根が、首を長くして待つてつぺから。是から直ぐ歸つと、エレゲーションつちふ畑に水引きをしなくてはなんねえ時分だ。

よね　そんぢやつて、餘り早えだねえかい。

相良　ほんにもうちつと居て、村の人達にも會つて行つたら。――

覺江　いや、俺が歸つた事なんぞ、成るべく知らせねえで、此儘歸して呉んちえゝ。其方が俺面倒臭くなくて、氣持がいゝだ。そしてほんのちよつくら、横濱さ移民でも連れに來た序に、寄つたちふ事にして置いて呉んちえゝ。

相良　さうかい。

よね　そんぢえもほんに、御飯一つ上げねえだ。

覺江　いや、却つてさうだ心配をかけては成んねえ。ほんに、俺、是だけでも大變人騷がせをして了つたゞから。どうか惡く思はねえだ呉んちえゝ。なア、覺次も、おさよちやんも。

覺次　（苦しげに、やうやく）　哥兄！俺、どうしたらいゝだ?!

覺江　どうもかうもねえ。此處さ居て、おさよちやんと仕合に暮して呉んろ。それが一番俺に對する道だ。何ちゆつたつて、お前たちの方が、俺なんぞよりずつと仕合せな、神さまに選まつちや人間なんだからな。壯健で暮らせよ。いゝか。

覺次　（俯向いて肯く）　哥兄、濟まねえ。……

覺江　おさよちやんも、なア。はア、俺が事なんぞ、惡く考へて呉んにえゝだな。

さよ　（泣きながら）　はい。――

覺江　そしてあの可愛え嬰つ兒に、怖え叔父つあんが宜し

くつちふて呉んなんしよ。

さよ　(合點くのみ)

覺江　そんぢや、皆さん左樣なら。又行つて來やす。(スーツ、ケースを取上げる)

よれ　さうですかい。そんぢやら何しても又お別れかない。――あ、だけんぢよ、さうだ重い鞄持つて、大丈夫かい。

覺江　なアに大丈夫だわい。亞米利加の百姓は、この位え、兩肩に擔いで十哩位平氣だぞい。

よれ　さうかい。そんぢやお壯健で。――

覺次　そんぢやら哥兄。……

さよ　(口の中で)　左樣なら。……

相良　そんぢやら俺、其處まで御一緒にお送りしやす。

覺江　いや、それにやア。……

相良　なアに道順だから、送らして呉んつあんしよ。

覺江　いや、もう澤山だわい。――そんぢやら左樣なら。

皆々　左樣なら、……御機嫌よう。

(覺江一人で鞄を提げ、相良を待たずに出て行く。)

相良　(追ふやうに)　そんぢや、兎も角其處まで、――皆さん、ちよつくら送つてつて來やす。

(相良そゝくさと出て行く。)

(およれも戸口から、覺江の行つた方を見送つて出る。……)

(舞臺には覺次とおさよのみ――。)

さよ　(何とも堪へ兼ねたやうに)　覺次さん！　……

覺次　さよ！　……

(二人は少し近寄つて、顏を見合せたが、やがて互に首垂れて了ふ。)

(日再び曇りたりと覺しく、室内やゝ暗む。……)

――靜に　幕――

安政小唄（新世話物三幕）

人　　所

川崎屋喜兵衛　　質屋の主人。後に鳥追ひの男
同　お千世　　その妻。後に淸七の妻
柳川淸七　　お千世の前の約婚者。歸り來し玉商人
山口屋源助　　別な質屋の主人
巽屋のお嘉代　　水茶屋の女。後に鳥追ひの女
番頭。小僧。子守。他の水茶屋女等多勢

時　　代

安政二年十月二日、及び翌年にかけて

場　　所

江戸、日本橋及び兩國近邊

第　一　幕

日本橋區南傳馬町附近。質店川崎屋の店先。安政二年十月二日、夕刻七ッ過ぎ。

小僧　（店口より空を仰いで）番頭さん。何だか厭な天氣だねえ。雨が降るつもりなんだらうか。
番頭　（帳場の所から外を透し見て）さうよなア。冬の初めに似合はず、少し蒸々し過ぎるやうだから、いづれ宵からかけて、ぱらッと來る氣だと見えるが、かう雲脚の早いところを見ると、吹き拂はれて了ふかも知れない。
小僧　何だか厭に暗いねえ。
番頭　滿更曇りのせゐばかりぢやない。もう暮近いからだ。そろ〳〵燈火の支度をして置きな。又旦那が歸つてでも來ると、喧しく急き立てられるからな。
小僧　ほんとに家の旦那位、何から何までこせ〳〵する人はありやしない。人は好いんだけれど、細か過ぎるんで、厭になつて了ふなア。
番頭　これ〳〵。又生意氣な事を云ふな。何でもよく氣のつく、いゝ旦那ぢやないか。店の始末も細かい代りに、俺達の事もよく氣を付けて下さらア。そこはそれ、元は吾々同樣、番頭上りの御主人のいゝ所でもあり又惡い所でもあるつて譯さ。
小僧　でも、此間暖簾を分けて貰つて、馬喰町の方へ出て行つた、一番番頭の源助さんなんざア、いつもさうは云つてゐないよ。俺達と同じ番頭から成上つた癖に、いやに主人風を吹かして、何やかやと威勢を見せたがるつて。

番頭　それやアお前、源助さんは源助さんさ。あの人は又あの人で、間がよく行きやア今の旦那の代りに、この家の主人ともお内儀さんの聟ともなれた人だ。さう云ふ人の云ふ事は、又幾らか底に色があらアな。だからお前もそんな事を考へないで、今からしつかり働く工夫でもしろよ。お前だつてしつかり地道に働きやア、此家の今の赤ちやんは女の兒だから、これから男が生れなけれア、お聟さんに成れないものでもない。丁度今の旦那のやうな。

小僧　だつて番頭さん。お美代ちやんはまだたつた二つぢやないか。それに俺ア、あんな泣蟲のお聟さんなんぞに成りたかないや。

番頭　又生意氣云つてやがらア。お聟さんに成れても成れなくても、お前位の年頃には、働けるだけ働いて置くものだ。さうすれアきつと何かには成れる。

小僧　そして番頭さん位の年頃にア、使へるだけ人を使ふものかい。

番頭　何を生意氣な減らず口！　行燈の用意が億劫なら、早う門口でも掃いて置け。

小僧　はい、はい、辛氣臭くないだけでも、其方がまだしもいゝや。

（小僧店先より下りて、箒を取り、門口を開ける。丁度それと出會頭位に、此の質屋の分店、山口屋の源助入り來る。）

小僧　（素早く認めて）やア源助さん。今日は。おいでなさいまし。今もお噂をしてゐたところでございましたよ。

源助　（鷹揚らしく笑つて）何だつて。お前達が噂をしてゐたつて、それぢや大方、又俺の惡口だらう。

小僧　いゝえ、飛んでもない。其反對でございますよ。とても事に此の店を、貴方に持つて頂きたかつたたつて、番頭さんとさう申して居つたところでございますよ。

源助　（怒りもやらず苦笑して）それこそ飛んだ惡口だ。以後そんな事を云ふと、前のやうに頬つぺたを斑にしてやるぞ。

小僧　おゝ恐。おゝ恐、大明神。（とおどけ乍ら、避けるやうに表へ出て了ふ）

（源助、内へ入る。）

番頭　やア、源助さん。又何ぞ用でございますかい。

源助　いや、三吉どんか。今日は喜兵衛さんはおゐでなさるかい。

番頭　いゝえ、旦那は又例の河岸用で、先刻日本橋までお出かけになつたきり、まだ戻つて見えませんがねえ。

源助　はう、さうかい。それはちと困つたな。

番頭　何ぞ急用でゞもございますかい。

源助　急用と云ふ程でもないが、鳥渡差し迫つてお願ひしたい事があるんでね。それで駈けつけて來たんだが、又來ると云ふのも時の無駄だし、……こんな用事は却つて喜兵衛さんの居ない方が、うまく運ぶかも知れないんだが、……三吉どん、それぢやアお内儀さんはおゐでなさるかい。

番頭　えゝ、奥におゐでになりますよ。何ならお招び致しませうか。

源助　さうだな。さう云ふ事に願はうかな。何にしても家付のお内儀さんの方が、矢つ張り大家の娘御だけあつて、却つてかう云ふ話は物分りがいゝだらうから。――

番頭　ぢやアお招びして參りませう。

（番頭奥へ入る。源助店へ上る。小僧怠り勝ちながら、門口を掃き初める。そして次の對話の間。彼にも時々聞えるらしく聽き耳を立つることよろしく。）

（やがて奥よりお千世、此の家の内儀、入り來る。二十四五歳。可なり美しい爲に、ずつと若く見えるところもあり、又年に似合はず尾鰭が付いて、如何にも質屋の内儀らしいところも見える。黑襟、地味で仇な柄の着物。稍々毒婦めいた險のある眉と眼。――）

お千世　（一種の格を保つて）おや、源助さん。おいでだね。

源助　へえ。（と追從的なお辭儀をして）實は少々お願ひがあつたものですから。……

お千世　（座につくなりわざと簡單に）何ぞ用かえ。

源助　さう直ぐ仰有られると、どうも直ぐには私の方も、切り出し難いやうな事なんでございますが、實は喜兵衛さんがお留守と聞き、かう云ふ話はお内儀さんにお願ひした方が、却つて埒が開くと存じやしてな。それでわざわざお呼び立て迄して、お願ひ申すやうな次第なんでございますよ。へい。

お千世　（きつぱりと大風に）ぢやア、何かお金のことかえ？

源助　へえ、左樣でございます。さう迄仰有つて了はれると、尙更申し難いやうな、又申しいゝやうな仕儀でございますが、實は不時の事組で、商賣の資本に差當り、百兩ほど拜借が願ひたいのでございますが。――

お千世　ふうむ。それやアまア、暖簾まで分けてやつたお前の事だから、百兩二百兩の話なら、私が直ぐに出して上げまいものでもないけれど、どうしてそんなお金が要るのだえ。まだ、資本と云へば相應にあるだらうがねえ。

源助　それでございますよ。決して悪い所へ、使ふとか何とか云ふのではございません。實を申せば質でない商賣の、矢つ張り資本にはするんでございますがね。店にも

其位の金高は、どうやら在るには在るんでございますが、それを其方へ向けましては、店の質金の方が差支へるかも知れませんので。へい。それでわざ〳〵お借り申しに上つたんでございますよ。それも決して後々で、御迷惑になるやうな品ではなく、少し時を見さへすれば、大した儲けにならうと云ふ、仕入れ甲斐のある物なんでございますから、一つ玆はお内儀さんの一存で、是非にも用立てゝ頂きたいのでございます。御迷惑をかけるどころか、お内儀さんが後から聞けば、お喜びになるやうな物ばかりでございますから。へい。なに、全くでございますよ。きつと、後から筋が分れやア、私にお禮をお云ひなさるかも知れない事でございます。

お千世　一體何だえ、そのくど〳〵お前の自慢する品つて云ふのは。

源助　或る近頃歸つて參りました玉商人が、遠くで仕入れて來たとか申しまする、唐や天竺南蠻の、玉石類なんでございますがね。折角仕入れて來ましたところ、又急に用事が出來て、故鄕へ歸らなければならないとかで、投げ賣りに私へ讓りたいと申すんでございますよ。

お千世　ふうむ。それやお前、確な品かえ。

源助　品は確かでございますよ。何しろ其仕入れ主は、私が昔から知つて居た、確かな人でございますから。

お千世　さうかえ。それなら耳寄りな話だが、何て云ふ玉商人だえ。

源助　それは鳥渡仔細がございまして、私に名を隱すやうに申しますので、今はお聞かせする譯には參りませぬが、いづれ取引が濟みましたら、すつかりお話申上げた上、品物をお目にかけませう。何しろ南蠻の紅玉などは、眩いやうなものがございますぜ。

お千世　名を云へないつてお前さん。まさか辰巳の髮の長い、白い顏の玉商人ぢやありますまいね。

源助　冗談云つちやアいけません、お内儀さん。眞實でございますよ。（とふと氣がついたやうに財布の中から小さな紙包みを取出し）まア、これを御覽下さい。これは其商人からお土產に、貰つた小粒の夜光珠でございますがね。噓でない證據に、これを差上げましても宜しうございます。これでも平打の簪の、何處ぞへお嵌れなされたら、ちよつと變つて見られますよ。（と差出す）

お千世　（受取つて見て）まア、ほんとに質のいゝ夜光珠だねえ。（と見惚れてゐたが、鳥渡考へて、其玉を下に置き）こんなものは要らないけれど、お前がそれほど迄に云ふのなら、大抵間違ひはあるまいから、こゝは私の一存で、貸して上げる事にしよう。だが、きつと迷惑は懸けまいね。

源助　有難うございます、いゝえ、決して御迷惑をかけるどころか、きつと儲けて、二十兩や三十兩の御禮は、默つて持つて上がる積りでございます。

お千世　ぢやアきつとだね。利息なんぞは要らないけれど、私や喜兵衞に相談せず、ほんの一存で貸して上げるんだから、その積りでゐてお呉れよ。

源助　畏りました。それや喜兵衞さんがお聞きになれば、却つてそんな投機はよせと云はれないとも限りませぬが、そこはお內儀さんの大きいお計らひで、ほんとに仕合せでございますよ。

お千世　さうだねえ。ほんとに內の人も、あんまり氣が小さ過ぎるんでね。

源助　其代り又お店の方は、大盤石の堅さでございますよ。

お千世　さう云へばさうだけれどねえ。(と、考へに沈んだが、考へても詮ないと云つた風に、ふいと立ち上つて)ぢやア直ぐお金を持つて來て上げるから、此處で待つてゐてお呉れよ。

源助　難有うござります。どうも恐入りまする。

(お千世、一旦奧へ入る。源助、其處に出てゐる寶石を、自分の方へ藏つたらいゝか、どうしようかと迷つてゐたが、結局又紙に包んで、收めたやうに其處へ置く。小僧入り來る。)

源助　やア金どん。まだ戸外にゐたのかい。

小僧　いゝ間だと思つて、ちよいと遊んでゐましたよ。

源助　どうだい、近頃は。お客樣が澤山あるかい。

小僧　割りにございませんよ。それに近頃は宵の中がから暇でございましてね。何でも下の方より上の方の方々が不景氣で困つてゐるとかで、夜晩くなつてからのお客樣が、不思議に多うございますよ。

源助　さうかい。矢つ張り老舖だからねえ。

小僧　(鳥渡皮肉に) 源助さん。いや、山口屋の旦那、旦那の方は如何でございますね。

源助　(わざと大風に) 店か。却々繁昌だよ。

小僧　へゝゝへ。何か當つたと見えて、大變御機嫌でございますね。

(と云ひ棄てゝ小僧奧へ入る。間。お千世再び出て來る。)

お千世　ぢやア此處へ、百兩だけ出して來たゆゑ、間違ひなく受取つて行つてお呉れ。

源助　ほんにこの御禮はきつと致します。が、取敢へず、こんなつまらない物でも、差出したものでございますから、まア玩具だとお思ひなすつて、お納めになつて下さいまし。(と先程の寶石を押しやる)

お千世　そんなもの要らないよ。何も私は御禮が目的で、

お前に貸して上げるんぢやなし、……
源助　まアさう仰有らずに、これでも所に依りますと、十兩から二十兩までする事があるんださうでございます故、まア御手許にお預りになつて下さいまし。
お千世　さうかえ。ぢやア證文代りにでも、まア預つて置くとしようかねえ。
源助　どうぞ。……では早速ながら、拜借して失禮致しまする。實は其玉商人と云ふのが、私の家に待つて居りますんで。……
お千世　さうかえ。そんなら、まア精々うまくおやりよ。
源助　難有うござりまする。では、どうぞお歸りになりましたら、喜兵衞さんにも宜しう。
お千世　あゝいづれ家の喜兵衞には、よう話して置きますよ。
（源助厚く禮して去る。お千世、その後見送つて、再び夜光珠を取上げ、そつと懷に藏つてぼんやり猶も立つてゐる。夕暮の色急に迫る。）
（子守唄聞え、泣く子をあやしながら、下手より一人の子守出で來り、益々赤兒の泣くのに、急ぎ門口を驅け込む）
お千世　（迎へるやうに）おゝ坊や、どうおしだえ、そんなに泣いて。

子守　あの、先刻迄は大變機嫌よう、遊んで居つたのでござりまするが、何に怕えましたのか、急に泣きだして止まないのでございますよ。今日は何時もより澤山笑ふと、角の酒屋のおかみさんなんぞも、大變あやして與れた程なんですのに。どうしたんでございませう。お天氣のせゐでございませうか。今夜何かあるのではございませんでせうか。
お千世　（氣にも止めず）あゝ、よし、よし。きつとお乳が戀しうなつたんだよ。さアさ、それなら此方へおいで、お母さまが上げる程に。（と子供を受取り、あやしながら）おゝ、よし、よし。（赤子泣き出す）ほんとにお前はいゝ子だね。だが、お前のお父さまは、どうしてゐるんだらう。けれど、もういゝ、坊やがかうして居て與れゝば。私は坊やさへ居れば、それで澤山なんだから。さアさア、早う奧へ行つて、乳を上げるとしようねえ。
（お千世子供を抱へて去る。子守も一緒に後から奧へ入る。番頭奧より入り來り、再び帳場に坐る。小僧燈火の點いた行燈を持ち出で、店の中ほどに据ゑ、門口の店行燈にも灯を入れ、默つて去る。七ツか六ツの鐘。夕暮の色益々濃し。少し異樣な服裝したる、長崎よりの玉商人、柳川淸七出づ。三十前後の立派なる男。）

清七　（戸口を開けて）今晩は。川崎屋さんは確か此方でございましたな。

番頭　（迎へ立つて）へえ、川崎屋は手前どもでございますが、どう云ふ御用でございますか。

淵七　御主人の嘉右衛門さんは、御在宅でございますか。

番頭　嘉右衛門と申しますと、先代の主人でございますが。――

清七　ほう。それではもう、御隱居でもなされたと見えますな。私のお尋ねするのは、今年たしか七十六におなりの、當家の御老父でござるが。――

番頭　それなれば、確に先代に違ひございませぬ。が、その大旦那さまは、一昨年の秋お亡くなりなされました。

清七　えッ？　亡くなられた？　さうとは少しも知らずにゐました。それは、お氣の毒でございましたのゥ。大そうお達者な、元氣の方でございましたのに。遠く海山隔てゝゐたとは云へ、今まで少しも知らずに居たのは、誠に失禮至極でござりました。

番頭　では貴方さまは、先の主人の深い御知合でゞも御座りまするか。

清七　左樣、知り合と云ふは僭上なれど、幼き頃より二十三の歳まで、一方ならぬ御愛顧を受けたものでござりまする。が、七年前に長崎へ參りまして以來、絶えて音信も致さずに打過ぎました故、今更合はす顏とてない身でござるが。――

番頭　え？　それでは若しや貴方さまは、柳川屋の若旦那さまとやらではござりませぬか。

清七　いかにも、わたしは柳川清七と申す者だが、貴方は又どうしてそれを？

番頭　へえ、左樣でございましたか。それならばあのお内儀さんの幼な馴染のお許婚、七年前に長崎とやらへお出でなされて、それつきり音信不通のまゝ、御歸りになる樣子もないので、もうお亡くなりなされたものと、諦められなされた方でございますな。私もちらとお噂を聞いてお名前だけは承つて居りましたが、へへえ、左樣でござりましたか。それは又意外のことで、早速奧へお知らせ申しませう。お内儀さんもどんなにお驚きなさるか！（と、立たうとする）

清七　いや、鳥渡お待ち下され。ではあのお千世殿は、まだ達者でゐなさると見えるな。そしてあの、變りもなくて居なさるかの。

番頭　へえ。變つたと申しますれば、變りましたかも知れませぬが、達者は達者でおゐでなされます。まア、直ぐにもお知らせ申しませう。

清七　でも、お前さまのお言葉では、どうやらお内儀と呼

ばれて居る様子。ではもう然るべき筈がねをお迎へなされたと見えますな。
番頭　へえ、それはあの、三年前でござりましたか、とうとう家に居りました喜兵衛殿に嫁せられ、内を嗣ぐ事になりましたので。……
清七　あの喜兵衛どのに？　左様でござつたか。
番頭　今ではお二人の間に、子まである女夫仲でござりまする。
清七　ふうむ、いかにも。――七年の間唐、震旦、南蠻などを渡り歩き、音信とてせず打過ぎました故、さもあらうかと存じて居りましたが、矢つ張り左樣でござりましたか。
番頭　（少し困惑して）何でござりまするか私共には、其の邊の事情もよく分りませねば、兎も角も直ぐお内儀さまにお會ひなされて、お話なされては如何でござりまする。此方にも色々積る話がござりませう故。
清七　いや、左様なれば會うても詮ない事。殊には婿殿もおゐでの事なれば、お千世殿には却つて迷惑であらう。わしは此儘立ち歸りますれば、どうぞ後にて宜しきやうお傳へが願ひたうござりまする。
番頭　いえ、鳥渡お待ち下されませ。折角お出でがありながら、此儘お歸し申しましては、後でどのやうに私が責められるやも分りませぬ。兎も角も私から、一應奥のお耳に入れまする故、其上お會ひなされうとも、此の儘お別れなされうとも、御都合のよいやうになされて下さりませ。それでないと、私の落度になりまする。幸ひ、と申すのも可笑しうござりまするが、主人の喜兵衛も留守でござりますれば、一と目なりとお會ひなされるのに、却つて折がよいかと存じまする。
清七　御主人がお留守とな？　では、益々會ひ憎うござるが。――
番頭　まア鳥渡お待ちなされませ。お立歸りになりましては私が困りまする。鳥渡、直ぐお知らせして參ります程に。……
（番頭急ぎ奥へ入る。清七稍々困惑らしき體、が、又喜ばしげなる様子にて、暫らく立つてゐたが、やがて思ひ切つたやうに上り框へ腰を下ろす。）
（近處の何處やらにて稽古三味の音がする。――奥よりお千世登場。慌てゝはゐるが、妙に落着いた風。）
清七　（と見るより立上つて）お千世どの。
お千世　（はたはたと驅け寄り、坐つて）まア、ほんとうに貴方さまは！　清七殿に違ひはない！　どうして此處へ。どうしてお歸りなされたえ？
清七　七年前にお別れしてより、當座一二度の音信の外、

其後絶えての御無沙汰は、どうぞお許し下されませ。聞けばわたしの留守の間に、父さまもお他界なされたとの事、知らぬ外國に居たとは云へ囘向一つ思ひ寄らずに、打過ぎました思知らずは、改めてお詫び申しまする。改めてお悔み申しまする。

お千世　はい、父さまと云へばお前が長崎へ立つた翌々年、かりそめの風邪からいたく衰へ、病ひの床に臥り勝ちで、ぶら〳〵し過して居りましたが、一昨年の暮に持病の中風で、とう〳〵亡くなりましてござりますわいなア。

清七　左様でござりましたか。世が世なら、わしも心から死水を、一滴でも取つて上げられたものをのウ。

お千世　父様とてもお別れしてより、貴方さまのお歸りを、日に月に數へて待つて居りましたが、それから足掛け五年と云ふもの、風の音信さへござりませぬので、お亡くなりになる前後には、迚も貴方さまは此世に居ぬと、自分も諦らめ此の妾にも、云つて聞かせて居りましたが。……

清七　實はわしも今日歸ると、直ぐに此家を訪ねる前、あの番頭の源助に出合ひ、其邊の事は大略聞き知りました。そして此儘そなたにも會はず、又長崎へ歸らうかと、一旦心を決めたものゝ、折角此處迄戻つたからは、せめて他處ながらでも一目見たく、たうとう門口まで立寄つて了つたのでござりまする。――お千世どの。七年の間と云ひながら、さすがそなたも變られたのウ。

お千世　ほんに貴方さまに對しては、何と申上げたらよいやら、かうなつて見ますれば、只々濟まぬと云ふ外はない。……でもまアこんなに年も老け、世帶の風に染み放題では、今貴方さまがお會ひなされても、口惜しいとはお思ひなさんすまい。

清七　何の、それは此方で申す言葉。永い間の九州旅から、果ては異國を經巡つて、南蠻の日に焦け、唐の水に染み、さぞや異樣な風體は、そなたにも愛想を盡かすであらう。が、そんな事は今更云うても歸らぬ事。七年の間音信もせず、生死の程さへ知らさぬ上は、外に聟がねを迎へなされて、樂しい暮しに入られても、恨みに思ふ術はござりませぬ。只一つ此のわしの方では、そなたの事のみ思ひ續けて、異國の馴れぬ旅の空、江戸へ歸る日を樂しみに、富を漁つてさまよひ續けたと、知つて下されば思ひ置く事もござりませぬ。

（この前後より、主人喜兵衞。氣弱く實直さうなる商人の拵へ、下手より出で來り、店口より入らんとして、中の人聲にふと氣付き、一旦手にかけた戸を開きもやらず、内外を窺ひ、其儘腕組みしつゝ立聽きする。）

お千世　まア、左樣でござりましたか。でもそれは此方とて同じ事。貴方の歸りを明け暮れ待ち侘び、喞ち暮らさぬ日とてなかつたものを、とう／＼父さまが死ぬ前に、最早亡きものと云ひ含められ、番頭喜兵衛と婚せられて、此家を嗣ぐ事になりましたが、そなたの事はまだ一日とて忘られた事はござんせぬ。して濟まぬ事とは思ひながら、喜兵衛殿には祕し隱して、父さまの位牌の裏に、そつと貴方の戒名を書きつけ、朝夕父さまを拜む時には、心でそなたにも手を合せて居りました。が、月日と云ふは妙なもの。其中喜兵衛殿との間に、一人の子供さへまうけ、知らず／＼女夫の愛着に牽き入れられて、かうして日を送つては居りまするが、矢張り心の奥底では、貴方を忘れうとて忘れられぬのでござりまする。それにつけてもどうした事ゆゑ、貴方は音信一つ寄越さず、七年過ごしてゐなさんしたえ？　妾や今更かうなつても、それを恨みに思ひますぞえ。

清七　そなたの恨みもさる事だが、まア一と通り聞いて下され。知つての通り、此のわしが、そなたと固く後を契つて、西長崎へ旅立つたのは、二十三の秋も深い頃、その時の立志の心持では、どうせわしは小さな袋物屋の次男、そなたと一緒になると云つても、一人立ちになれない身では、入聟になるのも耻しく、又そなたの父上から、わしが身分違ひの小さな店の、のらくら次男の分際で、此方の身上を狙ふやうに、思はれさうなが氣に懸り、長崎先に知人があつて、唐船商賣をして居るのを幸ひ、吾から進んで向うへ下り、一旗擧げて歸つたなら、大手を振つてそなたを貰へると、勇んで出立したのであつた。されば向うへ行つて小半年は、時々そなたにも便りをしたやうに、商事見習ひを續けてゐたが、其中にふと機會あつて、沖にかゝつた唐船へ、乘せて貰つたが身の誤り。船の荷役や唐言葉を、面白半分敎へて貰つてゐる中、或日ふと其船長に、連れて行んでは呉れまいかと、冗談云つたを眞に受けられ、其儘船に留め置きの、そなたに便りをする間もなく、まゝよ一年か二年の間と、馮港さして行つて了うた。が、どうで此處まで來たからには、何か大きな儲けをして、眞に唐錦を飾りたく、いろ／＼企てが迷ひの種、それから震旦南蠻へも、生命を的に押し渡りいつか覺えた玉の交換、更紗の値踏みも習ふより慣れて、やうやく二三千兩引つ摑むと、喜び勇んで歸り路についたが、よく云ふ南船北馬の道中。日に夜を繼いで來ては見たが、月日は疾くに過ぎ果てゝ、早いやうだが七年越し。……これではそなたも變りはせぬかと、案じながらも思ひ直して、若しやをたよりに歸り着いたら、やつぱりそなたは人の女房。あゝ。我から招いた運命ゆゑ

誰を恨みる術もないが、そなたの顏を一と目見ては、思はず愚痴となり申した。

お千世　まア、飛んでもない。そんな事と少しでも、風の便りに知つてゐたなら、十年はおろか一生でもお待ち申して居りましたものを。ほんとに返らぬ事を致しましたわいなア。

淸七　したが、それぱかりは何度云うても返らぬ事。過ぎた事は詮ないゆゑ、そなたもわしを亡い者と思ひ、わしもそなたとの事は忘れて、今日より他人同志の知り合、たゞそれだけに思ひ諦め、喜兵衞殿と安穩に、不足なく日を送つて下され。わしも折角江戶表へ、一旦草鞋は脫いだものゝ、やはり此地は心迷ひゆゑ、又長崎へ立戻りまする。このまゝ默つて歸るところを、それでもそなたに一目會うて、心の丈を云ひ殘したが、望外の仕合せと云ふもの。もう思ひ殘すことはござりませぬ。兎かう云ふ中夜にもなる。御主人の歸りもあらう程に、わしは是にて失禮しまする故、くれ〴〵も身を大切にして、喜兵衞殿と安穩にお暮しなされ。……

お千世　いえ、鳥渡お待ち下さりませ。それでは餘り本意ない別れと云ふもの。如何に喜兵衞殿と女夫とて、そなたとは前よりの深い馴染。それも最早浮世の運命で、親しい他人と決つたからには、もう一兩日の逗留を、此家でなされて差支ござんすまい。喜兵衞殿とてそれまでをまさかに咎めも致しますまい。私も喜兵衞殿によう云うて、改めてそなたを引合せよう程に、せめて喜兵衞殿の歸る迄なりと、草鞋をお脫ぎなされて下さりませ。でないと番頭小僧の手前、却つて妙でござりませうぞえ。それに一と言交せばよいとお云ひなさんすが、私の方にもいろ〳〵積る事を、猶よう聞いたり聞かせたりしたうござんす。のう淸七殿。さうなされては下さりませぬか。お互にもう只の知り人となるからは、何の差支がござりませうぞえ。たつてもさうなされて下さりませ。

淸七　左樣さのウ。それも未練のやうなれど、云はれて見れば道理もある。……

お千世　それに最早夕餉時、振り拂つてお歸りなさるのは、旅の人にも似合ひませぬ。それでは却つてお互に、未練が妙に殘りますぞえ。

淸七　左樣なれば喜兵衞殿とも、滿更知らぬ仲ではなし、一と言挨拶した後、綺麗に別れ去るとしようか。

お千世　それがようござんす。其方が內の人とても、きつと快う思ひますぞえ。

淸七　では兎も角も密事でなう、御主人のお歸りなさらう迄、お邪魔致すと致しませう。

お千世　どうぞさうなされて下さりませ。私もいつそ嬉し

うござんす。

清七　どれ、それならば。失禮して。――

（と、清七草鞋を脱ぎにかゝる。お千世手傳はうとして思はず近寄り、ふと氣づいて、妙に氣のある科し。微笑。）

（戸外に立聞し居たる喜兵衛、此樣子を見て、更に深き思ひ入れ。其儘家へは入らずに、元來た方へ首垂れたまゝ。……）

――拆無しで　幕――

第　二　幕

兩國附近。水茶屋「巽」の奥座敷。庭に面した、離室めきたるところ。安政二年十月二日、夜、戌の刻頃。

川崎屋の主人喜兵衛。座敷の中央なる餉臺に凭り、酒を飲むともなく、ぼんやり物思ひに沈み居る。やがて、思ひ出したやうに手を叩く。間、

茶屋女お志津、奥の襖を開いて出て來る。

お志津　まア喜兵衛さん。折角、珍らしいお出でだのに、まだお嘉代さんは見えぬのでござりまするか。

喜兵衛　うむ。先刻からかうして、飲めぬ酒を嘗めながら、せう事もなく待つて居るものゝ、何時歸るやら分らぬ故、わしはもう去なうかと思ふ。矢つ張りかうしてゐては、何やら心落着かぬでのゥ。

お志津　まア、そんな事仰有らずに、もう少しの間、お待ちなされたらどうでござんす。お嘉代さんも外でなう、行き先まで分つてゐる事ゆゑ、もう直ぐお歸りは知れたこと、折角一ト時もお待ちなされたのぢやもの、もう少しの辛棒が肝心ぢやぞえ。ほんにお嘉代さんの方とても、お前が來て居ると知つたなら、淺草から飛んででも歸らうものを。一年に一度か二度、まるで七夕さまかお前さまかと云ふ程の人ゆゑ、逢はせずに此儘返しては、後の恨みが恐ろしうござんす。

喜兵衛　何の。まこと一年に一度か二度、時候の變り目に挨拶に來る、昔の幼馴染と云ふだけの客。お嘉代が何と思うて居る譯もあるまい。今日は只宵の口から、何となう氣が落着かず、心淋しうてならぬ故、ふら／＼と此處へ遣つて來たものゝ、遊び場慣れぬわしが心、どうやら歸りたうなつて來たのぢや。何だか逢はず此儘に、家へ歸れとの天の指圖のやうに思はれて來たのぢや。

お志津　では又あの喜兵衛さまの十八番、いつものお内儀が戀しうて、里心がついて來なすつたのかえ。

喜兵衛　いや、今夜と云ふ今夜は、決して左樣な譯ではない。此處に居るのも家へ歸るも、兩方ともに面白うはな

い故、是から隅田の川風に、吹かれて足の向く方へ、行つて見ようかと思つてゐるのさ。

お志津　まア、何を仰有います。なんぼお嘉代さんの歸りが遲いとて、それや又きつい棄鉢といふもの、まア〳〵もう少しお待ちなされて、その恨み言を聞かせて上げたがよいではござりませぬか――（表ての方にて人の騒ぐ音）烏渡お待ちなされませ。今この御銚子を取り代へて參りますほどに、そしてお嘉代さんの御樣子を、烏渡見て來て上げますほどに。

喜兵衛　したがお嘉代は歸つたとて、いづれ馴染との淺草詣で、戻つても直ぐ此の座敷へは、來られぬ仕儀であらうがの。

お志津　いえ〳〵。さうまでお歎きなさらずともようござんす。お嘉代さんと一緒のお客は、別に深い仔細はない人、只賑やかしのお伴ゆゑ、戻つたら直ぐ見えるでござんせう。又假令どんなお客にもせよ、珍らしい貴方さまの御出でと聞いたら、何を置いても拔けて來る筈。萬事は私にお委せなされて、お待ちなされたがようござんす。先刻何うやら表ての方で、人の出入りがあつた樣子、丁度お歸りかも知れませぬ故、見て來て上げませうほどに――

（お志津立ひ來てゝ入る。喜兵衛又深く考に沈む。遠き絃歌、拍子木の音など。やがて再びお志津入り來る。）

お志津　まア喜兵衛さん。お喜びなされませ。お嘉代さんは只今、戻つて見えましたぞえ。そして着物を着換へてゐる故、すぐ此方へ參るでござんせう。あゝあ、これでもう私は用のない身。すつかり貴方の御悋氣の、厄のがれをさせて貰ひますわいなア。

（お志津持つて來た銚子を、わざとぞんざいに置き棄て、逃げるやうに去る。喜兵衛きちんと坐り直す。間。）

（お嘉代奥の襖を開け、靜に情を含みて入り來る。）

お嘉代　まアほんに喜兵衛さん、お珍らしい。今時分どうなされたのでござります。

喜兵衛　おゝお嘉代どのか。きつう待つて居ましたぞ。

お嘉代　それは大變氣の毒でござりました。つい他のお客に誘はれ、觀音さまへお詣りに參つてゐた故、折角早うからのお出でを、無駄に過させ申しました。したがもう貴方さまには、お歸りなさらねばならぬ時刻ではないかえ。お店の手前、お内儀への務め。――

喜兵衛　いや、それが氣になる位なら、わしはもう疾うに去んでゐる。今日は家へ歸りたうない故、かうして今頃まで愚圖々々してゐたのぢや。

お嘉代　それや又どうして。

喜兵衞　少し深い仔細があつて。——これお嘉代どの。たまに來て浮かぬ顏の、此身の愚痴ばかり聞かせるやうぢやが、此の儘暫く相手になつて、わしの氣持を紛らして與りやれ。たまに來て無理を云ふやうぢやが、そなたとわしとは客と女でなうて、幼な馴染の友達ゆゑ、どうか許して下さらぬかえ。

お嘉代　何云うてゞござんす。それは外ならぬ貴方さまの事、今迄にそんな契りは無うても、どんな急がしい中ぢやとて、お相手はして上げますぞえ。たまに〳〵と云ふけれど、たとひ一年の間は置いても、忘れていゝ人と惡い人とある。今日も淺草寺のお參りに、何やらよい人に合はせて下されと拜んだ心も通じたさうな！　私やいつそ嬉しうござんすぞえ。

喜兵衞　そなたこそ又何を云やる。そなたがわしのやうなお店者の、しかも氣まゝさへ出來ぬ男を、そんなに思ふ譯はない。

お嘉代　それや又貴方さまの方こそ。只僅かな昔馴染の緣で、盆暮思ひ出したやうに、安否を尋ねて下さんすが、それこそほんの浮世の義理。家には美しいお內儀のみか、今では可愛らしいお子もある身、それに大きな店の主となつては、いつそ私のやうな幼馴染が、こんな所に居る事さへ、氣がひけるでござんせう。何と云うても貴方さまには、戀しいお內儀がついておゐでぢやもの。……

喜兵衞　（悲痛な顏になり）それアそなたも知つての通り、わが身に過ぎた主筋の女房。娘の中より戀しうは思ひながら、及ばぬ戀と諦めてゐたものを、御主人さまのお眼識やら、いろ〳〵な事情に緣あつて女夫にさせて貰つた事ゆゑ、いとしうない事はないけれど、のうお嘉代どの、わしは今この淋しい身を、どう處置したらいゝのやら、分らぬ羽目に落ちてゐるのぢや。

お嘉代　え、何でござんす。それでは何かお內儀と、仲違ひでもなされたのでござんすかえ？

喜兵衞　いや、仲違ひと云ふ譯ではなけれど、ちと面白うない仔細の程を、まア馴染甲斐に聽いて下され。と云ふのはな、わしも前から知つての事ぢやが、現在わしが女房お千世には、昔云ひ交した男があつたのぢや。柳川屋と云ふ袋物店の、次男の淸七殿と云ふての、七年前に志を立て、三年ほどの期限を切つて、お千世と固い約束の下に、長崎へ身を立てに行かれたのぢやが、其後四年經つても五年過ぎても、風の便りさへ無くて、歸る樣子も見えぬ故、舅御さまも又お千世も、もう淸七殿は此世に居ぬものと諦め、そのためわしを婿になされた。ところが七年たつた今月今夜、その淸七殿がふいに歸つて來られたのぢや。

お嘉代　まア！　左樣でござりまするか。して、貴方さまのお内儀は、それにどうなされたのでござりまする。

喜兵衛　丁度わしが外から歸つて、門口へ入らうとした折、ふと何やら變つた男と、譯ありげなるお千世の聲音　質入れ容とも思はれぬため、悪い事とは知りながら、つい聞き耳立てゝ中の樣子を伺つたところ、お千世の心もその男の心も、うす〳〵洩れて聞えたのぢや。

お嘉代　お内儀はどう云ふ心だと云ふのでござんすえ。

喜兵衛　お千世はわしと女夫になつて、今では子まである仲ゆゑ、今更切るにも切られぬけれど、此の七年の間と云ふもの、やはり心の奥底では、淸七殿を思はぬ日とて無かつたと云ふのぢや

お嘉代　まア、左樣でござりますかえ。して又其男の心は。

喜兵衛　淸七殿もかうなつては、もうお千世をも又わしをも、恨みる筋はない故に、この儘昔の事は諦め只の知り人の仲となつて、交際ふ事にせうとの話ぢやが、口では云へど心の中は、どうやら諦め兼ねる樣子。それにお千世も未練はたつぷり。それもこれも無理はない。七年の間その爲に、異國へさへも押渡つて、金銀を積み歸つて見れば、さう云ふ事になつてゐるのぢやもの。のう、お嘉代殿向うも向う此方も此方。かう云ふ妙な間に立つて、わしやどうしたらよいのであらう。淋しいやら又口惜しいやら、思案に餘つた心持で、其儘家へは入りもやらず、ぶら〳〵歩き暮した末、ふと又足の向くまゝに、そなたの事を思ひ浮べて、心のまゝを打明けたら、相談相手にもなつて異れるかと、こゝまでかうして來たのぢやが、ほんにわしの此の身の處置は、どうしたらいゝものぢやらうのウ。

お嘉代　まア、左樣でござりましたかえ。それは又お可哀さうな。どうやら顏色も勝れぬ樣子ゆゑ、何でおゐでなされたかと、一と目見た時から案じて居りましたが、さう云ふ仔細でござりましたかえ。

喜兵衛　さうぢや。わしは初めは憤ろしく、又悲しうてならなかつたが、今ではいつそ淋しいより、苦しい氣がしてならぬわい。

お嘉代　左樣でござりませうのウ。したがさうした心の中を、折角私に打明け下されても、私とてもかうしたら穩便と云ふ。世上の道さへ分りませぬ。ましてお進めするやうな思案は。――ほんにどうしたものでござりませうのウ。

喜兵衛　このまゝ何も知らぬ顏を、家へ歸つて淸七殿に合せ、たゞ尋常に挨拶して、お千世の素振りも見て見ぬふり、名ばかり女夫の境涯を、續けて行けぬこともなけれど、それではわしが慘めなばかりか、お千世が餘りに可

哀さうぢや。

お嘉代　何の、又そんな弱いこゝろ。先きの約束がどうあらうと、今では貴方とちやんとした女夫仲、そんな人が歸つて來たとて、指一つさゝすは愚ろかなこと、傍へも寄せず斷るが通常。……

喜兵衛　さうは思はぬ事もなけれど、此身に過ぎた思ひの女房、強くも云へぬわしが弱味、嗤うて哭りやれ。その上如何に關を設けて、二人の仲を分たうとて、一旦契合うた二人の心、放さうとて放れようぞ。思へばわしがさうする事は、苦しい中にも苦しい立場ぢや。

お嘉代（ぢつと考へてゐたが突然）そんならいつそあの家を出て、何處ぞへおゐでなされまするか！

喜兵衛　え?!

お嘉代　私がこんな身でなうて、何處へ行かうと自由な上に、もつと淸く美しい、立派な身柄であつたなら、さう云ふ話を聞くよりも、すぐさま貴方を引取つて、何とでも暮して行かうもの。そんな事は適ひませぬし、……

喜兵衛　そなたの身柄に不足はなけれど、又此のわしの方から云つても、此儘不意に妻子を捨てゝ、家出などしたと在つては、世間の手前店の汚れ。舅御さまに濟まぬのみか、殘されたあの二人に取つても、さぞや寢醒めが惡いであらう。それに世間も事情を知つては、いろ〳〵口がうるさい程に、あの二人とてうま〳〵と、一緒になるのも心苦しいであらう。……居るに居られず、出るに出られず、ほんにどうしたらいゝであらうのウ。

お嘉代　ほんにかう云ふやうな時には、何ぞ天地が引くり返つて、互の身も世も自由に解かれる事でも起ればようござんせうに！　浮世の色々な絆と云ふものは苦しいものでござんすなア。

喜兵衛　さうよなア。いつそ誰彼の遠慮なく、互ひに思ひ切つて自由な所へ、氣儘に行つていゝものならば、思案も何もない譯ぢやからのウ。殘る人にも去ぬ人にも、悲しい心遣をさせずに、かう云ふ難を捌く手段は、どう考へてもないものかのウ。

お嘉代　それや神佛のやうな者の間なら知らぬ事、浮世の人の淺墓さでは、どうやら在らうとも思はれませぬ。いろいろ考へあぐねた末が、矢つ張り互に恨みを結ぶ、悲しい破局に成るのでございませうのウ。

喜兵衛（淋しく笑つて）ほんにのウ。さう思ふと何だか浮世が厭になつた。

お嘉代（突然思ひついたやうに）かう云ふ時に貴方と私が、幼な馴染と云ふだけでなうて、もつと深い仲だつたなら、心中を云ひ出さないとも限りませぬぞえ。

喜兵衛　何を馬鹿な。此間首を縊つた戯作者の十月鳥山と

やらではあるまいし、死んで後腐れがないものなら、それも時にはよからうけれど、わしのやうな臆病ものが、死ねるものなら迷ひはせぬわ。はゝゝゝ。

お嘉代　ではそれも取止めと致しますかえ。

（二人淋しく笑ひ、考へに沈む。間。遠い絃歌。拍子木の音など、やうやく冴ゆ。）

（突然『天地自ら聲あり。がら〳〵ひし〳〵と、千萬の雷鳴り渡るやう』に、屋鳴り犇めき初む。）

喜兵衛　地震ぶりぢや！（色を變へて立上る）

お嘉代　まア大變！（と思はず喜兵衛に縋りつく）

（二人は一瞬間寄り添うて、四邊の様子を眺めてゐる中、震動益々激しくなる。）

喜兵衛　これや大地震ぢや。早う！

（二人縺るゝやうにして、外へ出ようとする。歩取らぬ足取り。其中に更に激しき震動と共に、柱倒れ軒落ちて、屋根は二人を蔽ふやうに潰え塞ぐ。）

（天地晦冥。稲妻の如きもの、轟々たる響と共に空を掠む。）

（阿鼻叫喚。やがて、遠近に赤き火の手上りしと見え、輝凄凄慘たる暗紅色を帶び來る。）

お嘉代　喜兵衛さま！　喜兵衛さま！

（潰えし屋根の横手より、お嘉代這ひ出すやうに出で來り、尙も呼ばふ。）

喜兵衛　（の聲、屋根の中より）お嘉代どの。おうい。此處ぢや。助けて呉れ。此處ぢや！

（お嘉代狂氣の如く、今出で來りし屋根の間より、瓦や板を必死にめくりながら入り込む。暫らくして引ずるやうに、喜兵衛を連れ出し來る。）

お嘉代　（喘ぎながら）喜兵衛さま。どこもお怪我はござりませぬか。

喜兵衛　（鳥渡跛を引いて片足を撫でゝ）おゝ、此方の足を何やらに挾まれ、幾ら焦つても出られなかつたを、そなたに思ひ切つて引出されて、やうやく命拾ひを致した。が、そなたもよう無事でゐやつたのウ。

お嘉代　私や倒れて轉んだまゝ、うまく隙間へ隙間へと持つて行かれて、思ひの外容易う出られました。さア、一刻も早う逃げませうわいなア。

喜兵衛　さうぢや。かうしてはゐられぬ！　わしやこれから直ぐ家へ！（と駈け出さうとする）

お嘉代　えッ！　まア待つて下さりませ。どこへおいでなさるのでござんす。

喜兵衛　家もどうなつたか分らぬ故、少しも早う行つて見ねばならぬ。

お嘉代　それや、私を此儘置いてかえ？

喜兵衞　うむ、それは。……そなたを棄てゝではないけれども。……

お嘉代　そりやあんまりぢや、喜兵衞さま！　そなたはつい今の先刻、家へ歸りたうないが、歸らでも濟む工夫があらばと、云うてゐたではござんせぬか。この恐ろしい大地震は、そなたと私には天の助け、かうして共に潰されながら、生命冥加に助かつたのも、みんな何かの因緣事。かう云ふ稀有の大變事ゆゑ、そなたが死んで了つたと思へば、家へ歸らずともよいであらう。二人とも一緒に死んだ證にして、此處から何處ぞへ遠く落ちのび、一緒に暮さうではござりませぬか。

喜兵衞　うゝん。成程さう云はるれば、これこそ思はぬい機會なれど、大事の際に見棄てるのも、どうやら心に懸つてならぬ。

お嘉代　又何を餘計な氣迷ひ。そんな心配してゐる間に、きつとそなたのお內儀も、淸七殿とやらに手を取られて、何處ぞへ難を逃がれたか、それとも二人諸共に死なばと梁に押し潰されたか。……もし。喜兵衞さま。お前は私と一緒が不足かえ。

喜兵衞　何の不足どころではないけれど。……（と、ふと向うを見やり）やア、眞近に上つたあの火の手。これやかうして居られぬ。お嘉代どの。さア、早う一緒に！

お嘉代　そんなら連れて逃げて下さりまするか。

喜兵衞　おゝ、さうぢや！　何事も天に任せて。……

（二人手を引いて遁れ去る。まだ聞ゆる阿鼻叫喚。遠く二三ヶ所の火の柱。近く迫れる焰の色、だん〳〵紅く舞臺に滿つ。）

――騷擾の中に　幕――

第　三　幕

再び元の日本橋傳馬町附近。質店川崎屋の假普請。前よりも狹く、低く、淺き店構へ。

安政三年、卽ち翌年同じく十月の二日の事。宵、酉の刻半過ぎ。帳場には今の主人淸七坐り居る。もとの小僧、第一場の時と同じやうに、門口を開けて空を眺め居る。

淸七　どうだな、金どん。去年と同じやうな空模樣かな？

小僧　南も北もからりと霽れて、星が靑々と光つて居りますよ。だが、何だかあんまり霽れてゐるので又何かありさうでござります。

淸七　（冗談に）ぢやア、地震も暴風ももう一度づゝ、續けざまに來て了つたから、今度は饑饉かな。

小僧　（同じやうに笑って）すると今度は焚出しの黑い飯

さへ食べられなくなるのでございませうね。
清七　若しそんな事にでもなると、潰されて一と思ひに死んだ方が、生き殘つてぢり／＼餓死するより、苦しみが少なかつたかも知れないぜ。
小僧　あゝ厭々！　冗談にもそんな事云ひつこなしにしませう。折角かうして生き延びて、兎も角も一年經つたんでございますからね。
清七　さうよなア。お前やお千世や俺たちが、一緒になつて上野のお山へ、火の粉を浴ひて逃げたのはつい此間のやうでもあり、遠い昔のやうでもある。が、かうして一年經つて見ると、もう世の末だと思はれた、江戸の繁華も元々通り、どうやら復つて來るやうだし、わしだちとても此のやうに、店を張つてゐられるのだから、考へると夢のやうだ。
小僧　ほんとにさうでございますなア。それにつけても先の旦那はやつぱりあの日の地震で、お亡くなりなされたのでございませうなア。
清七　（少し顏を曇らせたが、さりげない調子で）どうしてもさうだらうなア。かうして一年も歸らない所を見ると。――俺はあの時十日經つて、まだ消息の知れなかつた時から、どうもさうだと思つてゐたよ。探しても無駄だと云ふ氣が、初めからしてならなかつた。

小僧　ほんにあの後十日と云ふもの、私も足を擂古木にして、小旗を立てゝ呼び歩いた時は、厭な氣持でございましたなア。何處をどう探しても姿は見えず、地震の二た時ほど前に、兩國の方へ行かれた影を、ちらと見かけたと云ふ人があるきり、皆目行方さへ知れないでございますもの。今考へるとあの河岸の、潰された倉の前構に、どうやら旦那の着物によく似た、一人の死骸を見つけましたつけが、ひよつとするとあれが矢つ張り、本當の旦那だつたかも知れませぬなア。どうもよく似たとは思ふが、何處やら違ふところもあり、まさか死んだとは思はなかつたので、その儘他處を探し廻り、翌日お內儀さんにさう云はれて、も一度念のため見に行つたら、誰か心當りの引取り人があつたとかで、取り片付けられてありましたが、矢つ張りあれがさうぢやなかつたかと、時々今でも思ひ出すんでございますよ。
清七　今まで歸つて來ないからには、いづれ何處かで亡くなつたに違ひないが、骨も遺品も見つからないと云ふは、よく／＼不運な事だつたのゥ。だが、……、逝つて了つたものは仕方がない。死んで了つた方が仕合せだか、生き殘つた方が不仕合だか、神佛より外知つてゐるものはないんだからのゥ。
小僧　ですが、旦那とお內儀さんとは、ほんとにお仕合せ

だつて、近所では皆がさう云つて居りますぜ。
清七　馬鹿な事を云ふ、生き殘つて行き場のない者同志が、賴り合つて又もとの枯木へ、小さな巢を作り始めただけぢやないか。此店とてもわしの身についてゐた、僅かな資本があつたばかりに、どうやら一番早う店開きが出來ただけぢやないか。
小僧　ほんに近所などゝ云ふものは、口が五月蠅いものでござりますなア。あの地震ぶりの當座こそはお互に賴りになり合つて、仲よく暮して居りましたが、少しかうして店構へでも出來たり、繁昌らしく見えたりすると、いろいろ云ふんでございますからねえ。
清七　云ふものには云はせて置くのさ。生き殘つてから安穩に、其日々々を過してさへ行ければ、此方は誰を羨む事もない。さう云へば確に仕合せかも知れぬがのウ。……(微苦笑)
(お千世奥より出で來る。湯上りのやうな姿。)
お千世　どうだえ。地震はありさうかえ。
小僧　いえ、空一ぱいの星でございます。
清七　今もその話をしてゐたんだが、一週忌になるとまた來ると云ふのは、どうやら嘘の流言らしい。
お千世　(清七の傍近く坐つて)　さうでございませうなア。あれから五日十日置き、半月一月とだん／＼に、數少うなつた名殘れ地震も、どうやら久しう收まつて、ごとりとも來ぬ今日此頃、二度とあんな大きな奴が、在る道理はござんせぬわいなア。
小僧　地震ふつて地固まる。……と云ふのが雨より先だとは、本當でござりませうか。
清七　ほんにさうかも知れぬ。地震ふつて身固まる。……ぢや。はゝゝは。
お千世　ほんにのウ。恐ろしうて悲しかつたも、何やら分らなかつたあの一頃。今は何うやら心落着いて却つて地震の前頃よりも、沁々仕合せらしい氣持。ほんに死んだ人には濟まぬ。……今も今とて奥の佛間で、死んだ喜兵衞どのや三吉に、手を合せて拜んで來ました。何やらあの人たちの亡くなられたは、私たちにかうした仕合せを、殘して置いて吳れるため、とさへ思はれてなりませぬゆゑ。……
清七　さうぢや。さう云へば死なれた喜兵衞さんには、御恩になつたも同じ事。……
お千世　(ふと氣付いて)　金どん。お前も鳥渡奥へ行つて、線香の一つも上げておいでよ。
小僧　へい、へい。
(小僧奥へ入る。後にて二人は顏見合せ、何の意味もなく微笑む。)

清七　わしは線香を上げずともいゝのかえ。
お千世　お前がお上げなさるも差支はないが、ちと可笑しうはござんせぬかえ。
清七　したが天命と云ふものも、よう出來上つてゐるものぢやのウ。一年前の今時分は、とてもこんな事になれぬと思うて、諦め切つてゐたのにのウ。
お千世　ほんに私もかうなることゝは、夢にも思うて居なかつたのに。――
清七　わしはあの時喜兵衞殿の、行衞知れずに居る間、そなたと共に心を痛めて、探し合うては居たものゝ、どうやらこれが天命で、喜兵衞殿が歸らずに吳れたならと、惡い事とは知りながら、思はず祈るやうな心にさへなつた事もある。――
お千世　それや私とて同じやうな、……現在あの人の子を抱いて、出澁る乳をふくませながらも、足らぬ假小屋の起き伏しに、お前が親切に世話して吳れるのを見ては、お前の方さへよかつたならと、直ぐ思はぬではなかつたぞえ。
清七　どうせそなたも此のわしも、來世はよくはあるまいのウ。
お千世　來世などはどうあらうと、現在かうして居られるのが、私や何よりも嬉しうござんす。それを誰に憚りませうぞ。
清七　さうぢや。誰に濟まぬでもない。誰に遠慮するでもない。二人はほんに元々通りの、仕合せに復つたと云ふだけぢや。それもわしらが手を下さず、天の定めで得たと云ふものぢや！
お千世　ほんにさうでござりますのウ。

（この少し前あたりより、遠く胡弓の音聞え、やがて下手より男女の鳥追ひ二人、五六人の子供や見物につき纏はれながら、唄ひうたひつゝ出で來る。そして店の横なる空地に立佇つて、節を改めて唄ひ出す。）

鳥追ひの唄。――
〽わしは野末の一もと枯れ穗
　そなたもやはり立ち枯れ穗。
いかに二穗が靡き合うたとて、
　花咲く日とてもない枯穗。
〽たとひ花咲く日はないとても、
　風の寒さにさそはれて、
靡き合ふのに何咎あらう、
　枯穗に心無いぢやまで。……

お千世（ふと聞傳へて）おや、又あの祐穗節が參りましたのウ。
清七　うむ。何となう厭な節なれど、又かうそつと胸を締めつけられるやうな所もある。卑しいけれど捨てがたい流行唄ぢやのウ。
お千世　したがどうやらあの文句は、私たちの事を唄つてゐるやうでござんせぬか。
清七　それは向うの鳥追ひ夫婦も、自分の事ぢやと思うて、唄つて居るのかも知れぬわい。はゝゝは……。
お千世　ほんにのウ。（聞入る）
（奥より子守、唄聲を聞きつけてか、子を負へるまゝにて出で來る。）
子守（半ば背の子に）おゝ、お美代さま、祐穗節が來ましたぞえ。
お千世　おや、まだ起きて居るのかえ。（立つて子の顔を窺き）まア、こんなにぱつちり眼を開いて、子供でも去年の今夜だつたと、地震を知つてゐるのでござりませうか。
清七（立つて）まさかのウ。世間が氣を立てゝ居る故、起きてゐるのぢやらう。（吾子の如くあやして）およしよし。――さア父さんが此のお鳥目をやる程に、これを持つて外へ出て、あの鳥追どのから二三枚買うてやり、もう坊やもねんねぢやゆゑ、成るたけ遠くへ流して行つて下されと、さう云うてやるがいゝ。
子守　はい、畏りました。さアお美代さま。お手々にようお持ちかえ。……
お千世　餘り永う居てはいけぬぞえ。
子守　はい。――
（子守いそ／＼と門口を出でゝ、鳥追ひの傍へ行く。）
子守　あの、もうし鳥追さん。このお孃さんが持つてゐるだけ、唄の版を買うて上げます故、向うへ流して行んで下されと。
鳥追ひの女（實はお嘉代。進み出て）それは有難うござります。してお前さんは、此の前のお家の子守どのかえ。
子守　あい、さうだよ。
お嘉代（自分の後に、編笠を更に深くして、胡弓を彈き居たる男を、それとなく顧みながら、改まつたやうに訊ね出す）では、あの、川崎屋さんと云ふのは、お前さんの所でござんすね。
子守　あい、さうだよ。
お嘉代　それでは、鳥渡序にお訊ねしたい事がござんすが、御主人の喜兵衞さんと仰有る方は、今でも無事でゐなさるんすかえ。

子守　いゝえ、鳥追さん。それや此家の先の旦那樣。其人ならば去年の地震で、お亡くなりなされましたぞえ。では鳥追ひさんは、何か先の旦那樣のお知合でゞもござんすかえ

お嘉代　いえ、知り人と云ふ程ではござんせぬが、國が同じ所だに依つて、蔭ながら此處に居なさると、小耳に挾んでゐたゞけの事でござんす。でも、まアお亡くなりなされましたかえ。それはまアお可哀さうに。――して今は、誰方が御主人におなりなされましたえ？

子守　生き殘られたお內儀さんが、淸七樣と御一緒におなりなされて、元通りお店を張つておいでゝござります。

お嘉代　まア左樣でござんしたかえ。それならば安心でござんすのゥ。――したが又其の喜兵衞さんには一人お子さんがあられたとか。その子と云ふのが此のお子さんかえ。

子守　あい。さうでござんす。

お嘉代　まア、矢つ張りさうでござんしたかえ。ほんによう似た面ざしの可哀いゝ子。御主人夫婦は可哀がつて下さりまするかえ。

子守　えゝそれはもう、旦那樣も吾が子のやうに、可愛がつて居られますわいなア

お嘉代　それならば喜兵衞さんは死んでも仕合せ。思ひ殘すこともござんすまい。――さゝ可愛いお子さま。そなた樣の小さなお手から、その難有いお鳥目を、あの叔父さんの持つてゐる錢籠へ、入れてやつて下さりませ。おお悧巧なお子ぢやのゥ。

（子守何の氣もなく近寄り、背の子の持てる錢を鳥追の男の籠へ入れさす。男、默つて受取る。）

お嘉代　ほんとに難有うござりました。それでは此處に新版の唄が添へて四枚、確に差上げますぞえ。

子守　あい。そんならやがて向うへ、流して去んで下されませ。

お嘉代　（男を促すやうに）さア、お前、もう去なうではござんせぬか。

（鳥追ひの男、遂に一言も發せず、默つて合點きつゝ、胡弓を取り上げる。一曲、步き出しつゝ彈いて、唄になる。低く、淋しく、沁々と。――）

〽死のと生きよといづれは一如、
　隅田の水と人の身は。
流れ〳〵て果なく行こと、
　此處にたゝへて澄もとまた。……

（子守不審と云ふほどの心なく、たゞ何となう後見送

ろ。遠ざかりゆく胡弓の音の中に。――）

――又柝無しで　幕――

横光利一篇

笑つた皇后（三幕）

ローマ時代

ネ　ロ
オ ソ ー
ホッピーア
其他數十人

第一幕

ネロは手帖を持つたまゝ、庭園の池のほとりで狼狽へながら何者かを捜してゐる。オソーが現れる。

ネロ　たうたうアクテの奴を、俺はあの橄欖の木の下で見つけたぞ。あ奴の足は、夜の鹿のやうにすらりとしてゐた。俺は息がつまつて逃げて來たのだが、おい、オソー、何か良い趣向はないか。

オソー　ローマの皇帝が息がつまつたと仰有いますのは、ゴールの蠻族だけでございませう。

ネロ　いや、あのアクテの眼は、あれは酒の中へ投げ込んだ眞珠のやうに光つてゐた。俺は、こら、このやうに轉びながら詩を作つて來たのだが、聞いてくれ。（せき込みながら手帖を讀み出す）ああアクテよ、お前のその眼は天蓋から覗いたエヂプトの月のやうに光つてゐる。俺を三度も池の水に顏を映させた白い孔雀よ。俺の手を惑はすローマの新しい竪琴よ。エヂプトの月よ。（ページをくりながら、讀みやめる）うむ、俺はここまで作つたのだ。この詩はアクテに見せて良いかどうかと迷つてゐる所だが、オソー、お前は此れをアクテに渡してくれぬか。

オソー　陛下、それは近頃の名吟でございますが、高が奴隷の女ではございませんか。陛下の名吟では恐れ入つて、逃げ出して了ふかもしれません。

ネロ　いや、あのアクテの眼つきなら、詩の分つてゐる奴に相違ない。あ奴は俺の詩にびつくりするにちがひない。そしたら俺はどうすれば良いか、今夜ひと晩ゆつくりと考へやう。

オソー　恐れ入りますが、それは入らぬ御苦勞でございませう。シーザーさまがゲルマンの城をお落しになつたときでさへ、たつた一夜お考へになつただけでございます。

ネロ　お前は俺をからかつてゐるのだな。だが、オソー、ゲルマンとアクテとは、ちと違ふではないか。俺はシーザーが一枚の詩を書いて、ゲルマンを落した話はまだ聞

かねが、あのアクテの眼を見れば、シーザーとて二晩三晩は眠れぬだらう。

オソー　では、陛下が御熟睡遊ばすやうに、これからアクテをここへ連れて參りませう。いかがでございませうか。

ネロ　いや、それは暫く待つてくれ、俺は此のままでは、皇帝とは見えぬではないか。おい、オソー、そこから俺の姿をよく見てくれ。どうぢや、俺の姿は立派かな。

オソー　（少し放れてネロを見る）さうでございます。少し御立派すぎて、アクテはとても近寄りにくからうと存ぜられます。

ネロ　では、もう少し近う寄つて見てくれぬか。うむ、そこらだ。そこらが良い。どうだ。そこらあたりだと、俺はかう云ふ風に笑へば良からう。

オソー　さうでございます。もう少し大きくお笑ひにならなければ、陛下はお羞しさうに見えていけません。

ネロ　では、これではどうだ。これでは、俺の寛仁大度が見えぬかな。

オソー　結構でございます。でも、それでは、ひよつとすると、アクテは陛下にあまり近寄り過ぎるやうになるかと存ぜられます。

ネロ　おい、オソー、お前は俺をからかふ癖がつき過ぎてゐていかぬ。アクテが俺から放れてゐては、月のない庭を覗いてゐるやうなものではないか。

オソー　でも、もしアクテの眼が、エヂプトの月のやうにお見えになり出しましては、オクテビヤさまに申譯がございません。

ネロ　オクテビヤは、今頃は晝寢をしてをる最中であらうが、いや、あ奴のことを思ふと、俺は玉座を壁のやうに蹴りたくなるのだ。あ奴はローマに反亂を起させないのを、自分の德だと思つてをる。此のネロが、あの豚のやうなブリタニカスの一黨を、鎭めることが出來ぬと思ふか。

オソー　陛下は、今のアクテのことをお考へになつてゐたのではございませんか。

ネロ　うむ、さうだ。俺の考へてゐたのはアクテのことだ。あの女の眼は、まるで百合の花束の中から覗いた兎のやうだ。あッ、これはよい詩を考へついたぞ。（手帖へ書き込む）

オソー　では、陛下、アクテをこゝへ呼んで參りませう。

ネロ　うむ、早くアクテを呼んで來てくれ。俺が良い詩を書いたと云つてくれ。

オソー　承知いたしました。では、暫くお待ち下さいませ。

ネロ　いや、オソー、ちよつと待つてくれ。俺はアクテに逢つたとき、何と云つて良いのかまだ考へついてをらぬ

のだが、お前には覺えはないか。

オソー　陛下ともあらうお方が、そんなことを仰言いましては、此のローマの行末も偲ばれます。もしもゴールが北からローマへ攻めかかれば、陛下はいかがなさいます。

ネロ　お前はひどくゴールを恐がつてをるが、俺にはアクテの方が恐いのだ。お前はゴールを滅ほすやうに、アクテにローマの軍隊をさし向けよと云ふのだな。

オソー　いえ、そんなことをなさいましては、アクテは城のやうに思はれます。私は陛下が、先づアクテの髮の中に指先をお入れになつて、お前の髮は水に映つた葡萄のやうだと仰言るのが、御賢明かと存ぜられます。

ネロ　うむ、さうだ、俺はアクテの髮を歌ふのを忘れてをつた。あ奴の髮は、水に映つた葡萄のやうだ。

オソー　それから、陛下はアクテの肩をお撫でになつて、お前の肩は明け方のベスビアスのやうだと仰言いませ。

ネロ　いや、それでは、俺の作つた詩の句をいつになつたら使ふのだ。俺の詩の句は、眼が第一番に歌つてあるのだ。

オソー　陛下、眼のことをいきなり申されては、女は俯向くものでございます。陛下は先づ髮から肩へとお手先を移されて、最後に陛下御得意のエヂプトの月のことをお話しなさいませ。

ネロ　うむ、それが良い。俺はアクテに、お前の眼は天蓋から覗いたエヂプトの月のやうだと云つてやらう。それから、あ奴の足は、すらりと投げた夜の鹿のやうだと云つてやらう。

オソー　しかし、陛下、陛下は手帖をお隱しにならなければいけません。ローマで手帖を持つてゐるものは、裁判官ではございませぬか。

ネロ　いや、此の手帖は、アクテに讀んで聞かすのだ。俺はアクテを詩人にするのだ。あのアクテは俺のことを何と歌ふか、俺は早くあの女に逢つてみたい。

オソー　陛下、それにしましても、アグリパイナ太后のお怒りは、お覺悟の上でございますか。

ネロ　母上か。あの母上は俺をいつまで子供だと思つてゐられるのだらう。のう、オソー、俺はローマの皇帝ではないか。もう俺は昔のドミシヤスではないのだ。それに母上は俺のする事毎に手を出される。これでは、俺は皇帝として、毎日何をしてをれば良いのか分らぬではないか。たつたひとりの元老院を變へるときでも、俺に饒舌らせたことがない。一人の死刑囚でも、俺に相談せられたことがない。まさか母上は俺をあの馬鹿なクローヂヤスだと思つてゐられるのではないだらうが、俺の皇后を撰ぶときにも、何もわざわざあのオクテビアを俺の横に

坐らせなくとも良いではないか。俺はオクテビアのことを思ふと、腹の中で毛のない毛物が暴れ出すのだ。のう、オソー、俺がアクテを可愛く思へば、母上の毒は今にアクテの身の上にも來るだらうな。

オソー　陛下、陛下はローマの皇帝ではございませんか。陛下は何事をもお恐れになつてはいけません。先づ陛下は陛下に代つて執政せられる太后さまとお闘ひなさいませ。何事にも今は勇猛果斷が陛下のお爲めかと存ぜられます。

ネロ　うむ、さうだ。俺は勇猛果斷が何より好きだ。俺はもうドミシヤスではないぞ。俺は大ローマ帝國の皇帝だ。俺の意志に逆らふ者は、草のやうに踏みにじつて殺してやらう。俺には三十萬の軍隊がある。俺には五千頭の獅子がある。俺には東はペルシヤから西はスペインに跨がつた領土がある。のう、マーカス、俺はローマの皇帝ネロではないか。俺は三萬八千の眞珠を持つてゐる。俺は八十石の香水を持つてゐる。俺の軍艦は八百艘だ。これでも俺をドミシヤスだとまだ云ふのか。俺をブラゼンバードだとまだ言ふのか。

オソー　陛下、陛下はそれに、二十五貫のお身體を持つてゐられます。

ネロ　いや、マーカス、お前の伴奏はナポリの樂器のやうに優れてゐる。俺の身體はスケーラスの浮き袋を食つてから、二十七貫にもなつたのだ。俺の音量はペロポネサスの俳優よりまだ大きくなつたのだ。俺の肺臟は昨日から、五貫目の鉛板をハンカチのやうに持ち上げ出したのだ。

オソー　恐れ入つたことでございます。陛下はそのお聲でローマを叱咤なさいますれば、ゴールは愚か、あのアクテと云へども慄へ上ることでございませう。

ネロ　おい、マーカス、お前は俺を喜ばせてゐるのか。俺を喜ばすつもりなら、アクテの好むやうな俺の良い所を云つてくれ。

オソー　陛下にはその御心配は御無用のことと存じます。陛下は最早や、女の好む何事をもお備へなされてゐらせられます。陛下の御足は、アントニアのやうに逞しゆうあらせられるではございませんか。陛下のそのお肩は、アクロポリスの山のやうに頑丈でゐられます。ただ私の一番御心配申し上げることは、陛下が私をお好き下さいますよりも、女をお好みになることだけでございます。

ネロ　こら、オソー、お前は俺を上げたり下げたりして喜んでをるのだな。それは皇帝のすることだぞ。だが、俺はお前の勳章みたいになつてやるのも、こりやちよつと新しゆうて面白い。俺は新しいことは何んでも好きだ。

ギリシヤのソロンの親爺めは、人は權勢の地位に立つてその性を表すとぬかしたが、いや、あ奴はなかなか上手いことを考へさらした。俺も皇帝になつてからは、古くさいことは何んでも嫌ひだ。

オソー　いや、陛下とて、時には古めかしいことも御尊重なさらなくてはいけません。もしも陛下が、皇帝の御位までお嫌ひ遊ばしては、臣下一同を初めとして、あのアクテまでさぞ困却いたすことと存ぜられます。

ネロ　お前はさきからアクテ、アクテとばかり云つてをつて、一向にアクテを呼びに行かうとせぬではないか。俺は早くアクテの足が見たいのだ。あ奴の足は、まるで香油の噴水のやうに光つてゐた。

オソー　陛下、陛下は私の嫉妬も御存知にならなければいけません。あのアクテの胸は、まだ頭を落さぬ枕のやうに福やかではございませんか。あの頭に上げた兩腕は、船首を抱いたカルターゴの龍のやうでございます。殊に陛下、陛下はあのアクテの巧みなエシオピヤ語をお聞きなさいませ。あの女は、ヘブライ語とトログロダイチーの言葉を、ローマ語のやうに話すばかりではございません。あの女の聲は、百挺の拍子を揃へた白銀の櫂のやうに響く筈でございます。

ネロ　マーカス、もうその邊りでやめてくれ。俺はアクテに逢ひたくてならぬのだ。さア、呼べ。あのアクテを連れて來い。

オソー　承知いたしました。では、お暫くお待ちなさいませ。

（オソー、去る。その反對の路から、オソーの妻。ホツピーアが現れる。）

ホツピーア　まア、そこにゐらせられますは、陛下ではございませんか。

ネロ　うむ、お前はホツピーアか。お前の良人は、今小アジアから來た奴隷の顏を見にいつたのだ。もう直ぐに戻つて來るだらうが、何をぐづぐづしてゐるやら。おい、ホツピーア、もう少しこちらへ來ても良いではないか。

ホツピーア　陛下の御健全なお顏を拜見いたしますことも、お久しいことでございます。あの六月の御饗宴にお招き下さいました時以來、陛下のお姿をお忘れ申したことはございません。

ネロ　うむ、俺もあのときのお前を覺てゐるぞ。お前は香水の雨の下で、榻にもたれて孔雀の扇を使つてをつたな。俺は管絃樂のやむ度にお前の方を見てゐたのだが、あの人魚の假裝隊に邪魔されてお前の扇の羽根だけが見えてゐた。

ホツピーア　あのときは、陛下は香の煙りに良くおむせび

なさいましたでございませう。豕の胴をミナヴの楯にお盛りになつて、高高とお捧げなさいましたときは、丁度首を斬り落したコロシヤムの勇士のやうでございました。それから、陛下は獅子の鍍金した爪を頰におあてになつて、パシアスの詩をお讀み下さいましたでございませう。あのときは、陛下のお膝の上へ、紫色の衣を着た貴婦人がおもたれになりましたのね。

ネロ　いや、あれは熊ではないか。俺の傍には貴婦人の衣を着せた三疋の熊と、辯護士に仕立てた象の子供とを置いといたのだ。

ホツピーア　でも、あの熊を拂ひ落してやりたくなりましたのは、わたくしだけではございませんわ。あの熊は長上被の袖を陛下のお肩におかけして、メッサライナさまのやうに業々しく陛下のお耳に讒誣申し上げてゐたではございませんか。

ネロ　うむ、あれか。あれは讒誣ではない。あ奴はいつも兎とばかり踊らせられるので、此の次のアリーナの闘ひには、豹と組打ちをさせてくれと云つたのだ。あ奴でもローマに來れば、天晴れ勇士になりたうてならぬと見える。俺は今度は、あ奴を五十疋の象の隊長にしてやらうと思つてゐるのだが、それならお前も、俺を赦してくれるだらうな。

ホツピーア　いつもながら、陛下の御風雅なお心使ひは、臣下一同の者のお喜び申し上げる所でございます。でも、此の次のお催しには、是非とも御婦人の熊だけは、こちらの方へお廻しを願ひたう存じます。

ネロ　いや、よしよし。だが、ホツピーア、お前はローマ第一の美人ではないか。良人のオゾーが婦人に心を奪はれたならともかくも、此の俺が熊に肩を攫まれたとて、お前は怒ることもないではないか。

ホツピーア　いえ、あの日はあまり天蓋に香の煙りが溜りましたので、陛下のお姿をよくお見受けすることが出來なかつたからでございます。それに、あのシシリーから來た太鼓打ちの一隊が、私の耳の傍で、まア、闘ひのやうな音を立てるのでございます。

ネロ　お前はペルシヤの王のやうに、賑やかな所より靜な所が好きだと見えるの。それではお前の美しさは、陽の光りを受けぬ薔薇のやうになるではないか。

ホツピーア　マーカスは陛下の詩に御堪能であらせられることを、リユーカンとても及ぶまいと申してをりましたが、わたくしのごとき賤しい者が、そのやうに陛下のお眼をお煩しいたしましては、恐れ入りますでございます。

ネロ　いや、お前のその姿は、前から俺には水に映つた葡萄の房のやうに見えるのだ。お前のその肩は、明け方の

ベスビアスのやうに淑やかだ。それから、お前のその眼は、天藍から覗いたエヂプトの月のやうにきらめいてゐる。お前の足は、夜になつて噴き上げるあの香油の噴水のやうに美しい。おい、ホツピーア、お前は俺と一緒に、今夜はアニシータスの後園へ來てくれぬか。俺はお前の耳の中へ、アラビアから獻じた眞珠の玉を入れてみよう。俺はお前の貝のやうなその耳から眞珠の溶けたメヂヤの酒を飲んでみよう。

ホツピーア　まア、陛下はわたくしを、アントニアのやうにお惑はせなさいます。もしわたくしが陛下の仰せのままになりますれば、オクテビアさまのお歎きはどれほどでございませう。

ネロ　云ふな、ホツピーア。オクテビアのことは、母上に聞くが良い。あの女は母上と一緒になつて、俺の權力を砂のやうに思つてゐる。俺があ奴の兄のブリタニカスの勢力を、いつまで恐れてゐると思ふのだ。俺はローマの皇帝だ。俺の意に逆ふ奴は、首と胴とを放してやらう。うむ、お前の良人のマーカスは、俺に勇猛果斷が何よりだと教へたぞ。來い。ホツピーア、俺はこれから宮殿をぬけ出して、お前をアニシータスの邸宅へ連れて行かう。

（ネロ、ホツピーアの手を持つ。）

ホツピーア　まア、陛下、お靜かになさいませ。今はあんなに、石榴の花の明るいお晝ではございませんか。

ネロ　お前は晝が恐いのか。ローマの晝を恐がる奴は、イエスを拜む邪宗徒だけだ。俺はお前を晝でも夜でも、カルターゴのマントのやうにかかへてやらう。

（ネロ、ホツピーアを連れて去らうとする。）

ホツピーア　でも。あのマーカスが。マーカスが來るではございませんか。

（二人、消える。）

第二幕

ホツピーア、蠟燭の灯つた部屋の中で、ひとり鏡に向つて化粧をしてゐる。窓からは宮殿の灯が見える。帷幕の間から、良人のオソーが現れる。彼は妻の後姿を物音立てずに眺めてゐる。

ホツピーア　（振り返る）まア風かと思つてゐたら。

オソー　お前は鏡を見てゐたくせに、俺の來たのも知らないのか。

ホツピーア　もう此の頃は髮が脫けるので、それ所ではございませんわ。

オソー　お前にはオクテビアさまの髮がそんなに恐くはない筈だが、さてはアクテにそろそろ恐れを抱いて來たな。

（椅子に腰を降ろす。）

ホッピーア　あなたはあたしが陛下を、そんなにお慕ひ申してゐるとお思ひになつて。

オソー　ネロか、ネロの好きなのはアクテでもなければオクテビヤさまでもない。あれの好きなものは、煽てられることだけだ。

ホッピーア　あなたは陛下の先生だけあつて、もう何もかも御存じでゐらつしやいますのね。

（ホッピーア椅子に腰を降す。）

オソー　俺をネロの先生だと云つたのはお前だけだ。俺とネロとは同じ年で三つのときからの友達だが、あれに色戀の教師をしたのは、成るほど俺にちがひない。流石はオソーの妻、ホッピーアだけあつて、お前の腕は美事なものだ。俺とネロとの癖は似てゐるだらう。

ホッピーア　あなたはあたしをお賞めになりたいなら、もつと良いことが澤山ある筈でございますわ。

オソー　うむ、ある。お前は性來、人眞似をすることがなかなかうまい。お前の先生はメッサライナだが、あの女は良人のクローヂヤス皇帝を眼前に置いて、悠々とシリヤスと戯れたほどの手腕家だ。そればかりではない。毒藥を合せることもローカスタのやうに優れてゐた。だが、惜しいことには殺された。俺もあれだけには賛成出來ぬわ。おい、ホッピーアもう毒藥を合せることは覺えたかい。

ホッピーア　そんないつものお癖では、もう間に合ひませんわ。あたしは髪の毛の脱けるのが、こんなにも氣になつて、まア、どうしたと云ふんでせう。

オソー　俺は毒藥のことを教へてゐるのだ。お前は俺がネロとの間を突ついてゐると思つてゐるんだろ。馬鹿な。お前がネロを遊ばせることの出來るのは、誰のお影だと思つてゐる。よいか、ホッピーア、此のオソーの目的は、お前をネロの皇后にすることにあつたのだ。俺はネロにアクテを落すことを教へてやつた。俺は數限りのない女官達の身體を利用して、ネロの馬鹿さを磨いてやつた。その間に俺はこつそり、お前の身體がネロの下劣さを引き摺るやうに光らせておいたのだ。

ホッピーア　おや、あなたはあたしを、前から釣針のやうに思つて下さいましたのね。

オソー　うむ、お前は元來から曲つてゐた。俺はお前の曲つた針で縫はねばならぬものがいつぱいだ。先づお前は、その針でネロを縫へ。良いか、曲つたものを縫ふには曲つた針でなければ縫へぬのだ。

ホッピーア　あたしはあのネロさまが、此の頃それはお慕はしくつてなりませんの。まア、あの方の眼と云へば。

オソー　さうだ、あの眼は穴のあいた柄のやうだ。

ホッピーア　あなたはネロさまにだけは、お怒りになつてはいけませんわ。

オソー　俺がネロに怒る理由はどこにあるのだ。俺の教へた腕前で美事に俺の妻を奪つてのけたのは、あのネロだ。これほどの秀才が俺の門から出たとは、流石はローマだ。おい、ホッピーア、毒藥は覺えたかい。

ホッピーア　陛下は昨夜アグリパイナさまにお怒りになつて、階段の彫像をお突き飛ばしになりましたの。まア、あの方のお強かつたことと云へば、まるでセルサスのやうでしたわ。

オソー　アグリパイナの彫像なら此の痩せた俺でも倒すが、ネロとあの母親との間を裂いたのは、此の俺だと云ふことはお前も知るまい。あのアグリパイナは、今にネロに殺されるだらうが、それもひよつとすると、お前の毒藥が殺すのかもしれないぞ。

ホッピーア　あなたはあたしをまだ一度だつて、ネロさまのやうにお愛し下すつたことはありませんでしたのね。

オソー　お前はもうそろそろ俺まで殺す仕度をしてゐるな。ネロの奴に氣に入られれば、俺ほどのものを殺すのは左程むづかしいことではない。しかし俺を殺す前にお前の手にかからねばならぬ奴が、三人ほどゐる筈だ。どうだ、ホッピーア、俺はお前に教へてやるが、先づあのアグリパイナを殺してやれ。阿奴は良人のクロージアス皇帝を毒殺して、己れプロータスと戯れながら、ローマの正義を感じる大官を幾人殺した奴かしれないのだ。

ホッピーア　あなたはあたしがオクテビアさまに代つて、もう皇后にでもなつたやうに思つてゐらつしやいますのね。

オソー　お前か、お前は良人オソーを突き落して皇帝ネロを籠絡し、太后アグリパイナと皇后オクテビアを毒殺しなければならぬのだ。

ホッピーア　あなたはあたしがあなたの御命令に從つて、もしそんなことでもしたとしたら、どんなお顏をなさるかしら。

オソー　お前は俺がネロとお前との腹の底を見拔いてゐるので、今からお前に命請ひをするつもりで、こんなお前を喜ばすことばかりをべらべら饒舌つてゐると思つてゐたんだな。

ホッピーア　あたしがあなたのお考へになつてゐるやうなそんな恐ろしいことをどうして出來るとお思ひになつて。

オソー　何も恐るることではないではないか。ローマの皇后で、代々毒藥の效能を知らなかつたものは誰もゐない

のだ。あの聖君オーガスタース大帝でさへ、皇后のリヴヤに毒殺されたではないか。しかし、ネロは誰に殺されるか、これは俺もまだ聞かぬ、いやなかなかローマの皇帝ほど命知らずのものは、ペルシヤにだつてゐなからう。

ホッピーア　でも、ネロさまだけは、あの立派なセネカさまがお傍にゐらつしやるから、大丈夫でございませう。

オソー　うむ、あのセネカか、あのセネカはお前かネロかどつちが手出しをするかそれは知らぬが、いづれ生れたやうには上手く死ぬまい。ネロの方がセネカかより長生するだけは確かな所だ。

ホッピーア　あなたはネロさまを、そんなに惨酷な方だとお思ひになつて。

オソー　ネロの惨酷なのはローマが惨酷なほどでもなからうが、あれの頭は惨酷なことを慈悲だと云ふ。あれだけは俺が教へてやつたことぢやない。俺の教へてやつたのは、ネロが皇帝として知らねばならぬ樂しみなんだ。だが、ローマの惨酷さを癒すためには、ネロを煽て一層惨酷にするに限るのだ。

ホッピーア　でも、惨酷なのはネロさまだけに限つたことぢやありませんわ。

オソー　俺はお前が惨酷な奴だとは、まだ云やしない。俺はローマが惨酷だと云つてゐるのだ。オーガスタス皇帝が殺されたと思つたら、タイビリヤス、タイビリヤス皇帝が殺されたと思つたら、カリギユラ、カリギユラ皇帝が殺されたと思つたら、クロージヤス、クロージヤス皇帝が殺されたと思つたら、今度はネロだ。ネロはさて誰に因縁をつけるのか分らぬが、ローマの皇帝とは王冠を冠せられた死刑囚だ。おい、ホッピーア、だが、ローマの皇后だつて同じだぞ。お前はオクテビア皇后が誰に殺されるのか知つてるだらう。いや、俺はお前が俺を欺いたのを嚇してゐるわけではない。

ホッピーア　あなたはあたしをネロさまの皇后にして、あたしが人手にかゝるのを、喜んでやらうと思つてらつしやいますのね。

オソー　俺にはお前が殺されるより、俺の殺される方が恐いのだ。俺はお前の殺されるのを喜んだら、今にお前に殺されると云ふことぐらゐは知つてゐるのだ。

ホッピーア　では、もしネロさまがお亡くなり遊ばしたら。

オソー　いや、俺はネロよりも誰よりも、今は此の身の方が危いのだ。俺の今迄お前に饒舌つてゐたことは、みんな俺の遺言だ。

ホッピーア　あなたはそれでも、まだあたしに一言もお怒りにならうとはなさいませんのね。

オソー　うむ、さうだ、俺はお前に怒るのを忘れてゐた。

これもお前の仕つけが良かつたからだ。だが、ホッピーア、お前が俺を殺すときには獅子にだけは食はしてくれるな。良いか。ネロの奴は、獅子に食はれるあのガリガリと云ふ音を、俺にいつだか、音樂だと云つたことがある。きつと今に、俺を殺すときにも、獅子に食はすにちがひなからうが、そのときはもう俺には音樂は聞えぬからな。

ホッピーア　ネロさまはあなたをセネカさまの代りに、宰相にしたいと云つてゐられましたわ。でも、それはあなたの名譽にはならないつて申しましたの。

オソー　お前も良人の前で、つけつけとさう云ふことが云へると云ふのも、俺のお影だ。俺を殺すときにはネロにさう云へ。俺は音樂が嫌ひだから毒薬にするやうにつて、ネロはお前の云ふことなら何んでも聞くんだ。まさか阿奴はお前が獅子と毒薬とを取り替へることを提議したつて、お前に妬きもちを燒くやうなこともしなからう。

ホッピーア　あなたはネロさまからそんな目にお合ひになりたいために、あたしに陛下の御機嫌をお伺はせになりましたの。

オソー　お前は俺がそれほど死にたい男だと思つてゐたのか。俺はギリシヤの哲學者ではないのだ。俺はお前がローマ第一の美人だと己惚れてゐるのを見抜いたときから、俺の運命がどんなになるのか知つてゐたのだ。

ホッピーア　ではあなたはあたしがそのときからネロさまをお慕ひ申してゐたとお思ひになりまして。

オソー　俺はお前がネロが皇帝だと云ふことに眼をつけたのか、ネロが俺より五寸も太つてゐると云ふことに眼をつけたのか、どつちかは分らぬが、お前にとつては、いづれ俺よりもネロの方が似合つてゐるのだ。ネロはお前の首の廻りから、今に一つぐらゐは名詩でも作るだらう。

ホッピーア　あの方はあたしの髮の中に指をお入れになつて、お前の髮は水に映つた葡萄のやうだと仰言いましてよ。それからあたしの肩の格好を明け方のベスビアスのやうだつて。

オソー　ネロの嘘つきなのは今に始つたことではないが、阿奴は明け方なんかに起きたことがあるものか。アクテを落したときも、ベスビアスがどうだとか、葡萄の房がどうだとか云つてをつたが、あれはみんな、此の俺が敎へてやつたことなんだ。だが、あれにベスビアスの話を聞いた奴は、どいつもこいつもころころと沈んで行く。ベスビアスもあゝなれば、ローマの軍隊のやうに亂暴だ。

ホッピーア　あなたはネロさまが皇帝におなりになつたので、怨んでゐらつしやると云ふ評判ですわ。少しお愼しみにならなければ、お身のためにもなりませんわ。

オソー　それはお前でなければあのタイヂエリナスの云ふことだ。ネロが皇帝になつたのを馬鹿にしてゐるのは此のローマでは俺ばかりではないだらう。お前は俺がネロの悪口を云ふ度に前から肩をペスビアスのやうに震はせて怒つてゐるが、あのネロの馬鹿に出來ぬ所は、人の煽てに乗るとこだけだ。阿奴は玉座に乗るのを、煽てに乗ることだと思つてゐる。今に阿奴は元老院の者共を盡く聲樂家にして了ふか、さもなくば墓石にして了ふにちがひない。いつだか俺が阿奴の咽喉を賞めてやつたら、いきなり俺に、シシリアの國をやらうと云ひ出した。阿奴は昔から皇帝になるよりも、名優になりたがつてゐた男だが、たうたうそれも叶はず、皇帝になりさらした。

ホツピーア　あなたはお小さい時から、何んでも陛下と競爭なさるお癖をつけてゐらつしやいましたから、そんなことを仰言るのでございませう。それがいつの間にか、あなたの御不幸になりましたのね。

オソー　俺が不幸になつたのは、お前がネロに瞞されたからだ。俺が皇帝になれなかつたのはネロに負けたことだと思つてゐるのか。

ホツピーア　でも、あなたは皇帝にだけは、おなりになれませんでしたのね。

オソー　何だと。俺が皇帝になれぬと云ふのか。あの馬鹿めに負けたと云ふのか。俺を負かした奴は、ネロではないのだ。貴様だ。貴様が、（急に立ち上りホツピーアに詰め寄る）

（侍臣、オノマスタス、現る。）

オノマスタス　閣下、陛下からお使者でございます。

オソー　（默る）

オノマスタス　いかがいたしませう。

ホツピーア　陛下から來たの。

オノマスタス　はい。

ホツピーア　お通し申しておくれ。

オノマスタス　閣下、いかがいたしませう。

オソー　通せ。阿奴は俺にどんなお世辭を云ふか聞いてやらう。

（オノマスタス退く。ネロの使者、三人現る。）

使者の一人　陛下には、これを閣下にお渡し申すやうとのことでございます。

（オソー、書狀を受け取つて讀む。）

オソー　委細、承知いたしましたとお告げ申してくれ。

（使者一同退く。オノマスタス、馳け出て來る。）

オノマスタス　閣下、何事でございます。

オソー　いや、何事でもない。ネロは俺に戯れてゐるだけだ。お前は下つて直ぐチチヤナスを呼んで來てくれ。

（オノマスタス退く。）

オソー　おい、ホッピーア、お前には残念だらうが、俺もたうとう殺されずにクリートへ流された。これはお前の仕業か何か知らぬが、もうお前を見るのもこれで了ひだ。よく此の俺を見といてくれ。

ホッピーア　まア、クリートと云へば、遠い所ではございませんか。

オソー　うむ、お前の噂を聞かうと思へば、白髪の十本も生えてる所だ。もうこれで、お前の皇后になる姿も見なくてすませるだらう。俺は此の家で生れて、此の家で結婚して、それから俺はお前を愛してお前をとられて流されるのだ。此れはローマの習慣だ。俺は悲しんで良いのか喜んで良いのか分らぬが、かうぶつぶつ云ひたい所を見れば、こりや俺は怒つてゐるんだ。お前は前から俺の怒るのが好きだつたが、お前に欺かれた此の俺が、まだ最後の今でも、お前に怒つて喜ばしてやらねばならんとは。どこまでお前は勝ちたい奴だ。

ホッピーア　マーカスさま、そんなにお怒りになつてはいけませんわ。あたしはあなたとお別れしなければならないと思ふと、それは悲しくつてなりませんの。

オソー　ホッピーア、お前は俺を、クローヂアスと間違へてゐるのか。俺はこれでも貴様を妻だと思つたことのある男だ。

ホッピーア　まア、もう少し落ちつき遊ばして。あたしはこれでも、マーカスさまの家内でございますのよ。あなたのお取り亂しになつたお姿を見てゐると、あたし、何を申し上げていいのか分りませんわ。

オソー　貴様は、まだ俺を怒らしたいのか。俺が貴様を皇后にしなかつたのが、それほども怨めしいのか。

ホッピーア　何を申し上げてもお分りにならないなら、今に御納得のいくときがございませう。あなたはそのときになつて、お膝をお叩きになつても、もうあたしは此の世の中にはをりませんわ。

オソー　お前の先生のメッサライナは、クローヂアスを瞞すときにもその手を使つたが、何とか他に仕方もあらう。俺は今は流されるのだ。遠く海を渡つて行くものを笑はすのは、まアその邊の所も格好であらう。

ホッピーア　あなたはタイビリアス皇帝がカリギユラ陛下をお世嗣になすつたのを、お賞めになつた方でございましたわね。あなたのお話では、あのお方は御自分の悪徳をお消しにならうと思つて、御自分よりなほ悪いカリギユラさまをお選びなすつたさうでございましたのね。

オソー　お前は何を云ひたいのだ。俺はお前が皇后にならうとするのを、これほども助けてやつてゐるではないか。

ホッピーア　でも、それはあたしだつて同じことでございますわ。あなたが皇帝におなりにならうとするのを、これほどもお助けしてゐるんぢやございませんか。

オソー　お前は俺を皇帝にするために、ネロの皇后にならうと云ふのか。いや、良人を喜ばすのもそこまで奥の手があらうとは、メッサライナでも知らなからう。

ホッピーア　あなたはあたしをネロさまの皇后にして了へば、ローマの者がどんなに騒ぐか、ちやんと御存知の筈でございませう。あなたはネロさまに變つて皇帝におなりになる筈の、あのブリタニカスさまが、どうして不慮の御最期を遊ばしたかお氣附きになりまして。あれはあたしがローカスタに云ひつけましたのよ、あなたは、もしブリタニカスさまがお亡くなりになつたら、ネロさまのお次ぎにどなたが皇帝におなりになるかと云ふことも、御存知ぢやありませんか。

オソー　おい、ホッピーア、俺はお前を貰つてまで皇帝になりたい男だと睨んでゐたのか。俺も放蕩無頼の良人には相違ないが、まだ俺でも妻は妻だと思つてゐたのだ。

ホッピーア　あなたでも、さてお流されになると云ふと、日頃の御元氣もなくなつて馬鹿なこと仰言いますのね。もとはそんなお優しいことなんか仰言つた方ではございませんわ。あなたをお流ししたのも、みんなあたしだとお思ひになれば、そんな御不覺もなさらずにお出かけになれましてよ。

オソー　うるさい奴だ。俺がまだお前の云ふことを聞いて、何になるのだ。お前が白くならうと黒くならうと、此のマーカス・オソーには變りはないのだ。

ホッピーア　あなたは、あなたが皇帝におなりになつたとき、あたしが殺されたくないためにこんなことを云ふんだと、思つてゐらつしやるんでございますのね。

オソー　お前のやうな奴でも、まだ命が惜しいのか。命が惜しければ俺の命を奪ふが良い。俺を殺さずに流しておけば、いづれお前の命はなくなるのだ。

ホッピーア　あたしの身體は、もうあなたに差し上げてある筈でございますわ。あなたがそんなことを仰有るのも、まだあたしを惡者にしてお置きになりたいからでございませう。でも、よく御自分のお胸にお聞きなさいませ。あたしがあのネロさまと御一緒に我ままをしてゐましたら、ローマには反亂が起るに定つてゐるぢやございませんか。そしたら、ローマの人々はどんなにあなたの御代をお慕ひするかしれませんわ。あたしとネロさまとは殺されて、あなたがネロさまの惡德を利用なすつて、人望をお收めになつて、それから、それからはどうなることですか、あなたの皇后さまにお訊ねしなければ分りませ

んわ。

オソー　お前がそれだけ分つてゐるなら、定めし、ローマの國は良くなることであらう。ネロの人殺しを唆のかすには、お前の慘酷な性質が一番だ。お前はなるだけローマの奴を、今からびくびくさせてやれ。俺はすることだけはしてやつたのだ。俺はもう旅の用意をすればそれで良いのだ。おい、ホツピーア、早くネロの所へ行つて來い。俺はクリートの島の中で、お前が幾人人殺しをするか見てゐてやらう。

（ホツピーア、立ち上ると、默つてにやりにやりと笑ひ出す。）

オソー　おい、行け。何をお前は笑つてゐるのだ。

（ホツピーア、なほも無氣味に笑つてゐる。）

オソー　おい、ホツピーア、何をお前は笑つてゐるのだ。

（オソー、默つてホツピーアの微笑を見詰めてゐる。ホツピーア、笑ひながら帷幕の方へ行き、帷幕を掴みながら振り返る。）

ホツピーア　（艶然として）マーカスさま。

（オソー、ホツピーアに脊を向ける。）

ホツピーア　マーカスさま。

（ホツピーア、帷幕をだん／＼にせばめながら、やがて笑顔を帷幕の中へ隱す。オソー、ひとりになると急に恐怖を顏面に現し出す。）

第三幕

夜、段階のある城壁の裾。降りしきる雨。集つた市民達の暗い中に、窶れたオソーが人知れず混つてゐる。松明を翳した市民達が四方からだん／＼報告を持つて馳けて來る。

市民一　ガルバは二十萬人の軍隊をひきつれて、カンパニアまで來たさうだ。ネロは今頃、タイヂエリナスと一緒に慄へてゐるにちがひない。

市民二　今日はオスチヤ港へ三百艘の戰艦が停つてゐた。明日こそはネロの宮殿へ、軍隊が殺到するに定つてゐる。

市民三　ゴールのヴインデツキスの叛軍は、海嘯のやうだと云ふではないか。

市民四　ローマの軍隊は、何をしてゐるのだ。ガルバとヴインデツキスが連合しては、もうローマもお了ひだ。

市民五　いや、ローマの軍隊は、親衛兵まで一人殘らず、ガルバの軍になつたのだ。元老院は盡くガルバを新皇帝にしたさうだ。ローマは明日から安全だ。

市民三　では、オソーは皇帝にならぬのか。

市民五　オソーは流されたまま行衞不明だ。

市民六　ニンフイヂヤスが、新皇帝になつたと云ふではないか。
市民三　ネロの次ぎにローマの皇帝になるものは、オソー以外にないではないか。
市民七　オソーを立てよ。
市民八　ネロを殺せ。
市民一　オソーの家内を奪つた奴は、あのネロだ。
市民二　ガルバはシーザーの門ではないか。ガルバが皇帝になるのは當然だ。
市民四　ガルバを立てよ。
市民九　ガルバを立てよ。
市民三　オソーを立てよ。オソーはローマ第一の名門だ。
市民八　オソーを捜せ。
市民七　オソーを立てよ。
市民五　ガルバを立てよ。
市民三　オソーを立てよ。
市民四　ガルバだ。
市民三　オソーだ。
（市民、二派に分れて暫く喧騒を極む。）
市民十　（階段の上に飛び上つて叫ぶ）われわれを苦しめたあのネロは、まだ宮殿の中に生きてゐるではないか。われわれのローマを燒いた奴は、誰だと思ふ。
市民一同　ネロだ。ネロだ。（と叫ぶ）
市民十　われらの食糧を奪ひ、われらに重税を課した奴は、誰だと思ふ。
市民一同　ネロだ。
市民十　われらの愛したセネカを殺し、太后を撲殺し、皇后オクテビアを蒸殺し、オソーの妻を奪つて蹴殺した奴は、誰だと思ふ。
市民一同　ネロだ。ネロだ。
市民十　われらはわれらの執政官、ベスチナスを愛した。われらはわれらの詩宗、ペトロニヤスを愛した。われらはわれらの勇士、ルウフアスを愛した。然も彼らを殺した奴は、誰だと思ふ。
市民一同　ネロだ、ネロだ。
市民十　ネロはわれらのフレギヤスを殺した。ネロはわれらのパイソーを殺した。ネロはわれらのリユーカンを殺した。然も、倦くことなくして、彼はわれらの美しきローマを殺した。ネロを殺せ。（と飛び降りる）
市民一同　ネロを殺せ。（と叫びながら城門の方へ殺到する）
（オソー、ひとり殘つてゐる。彼はにやり／＼と笑ひながら、城壁の階段から立ち上る。）
オソー　ホツピーアの奴も、酷いことをしやがつた。

（オソー、眞暗な中を疲れたやうに歩き出す。前方から布を冠つたネロが乞食の服裝をして逃げて來る。オソー、立ち停つてネロの近づくのを見詰めてゐる。ネロ近づくと、オソーは面をネロの顔に近づけて覗く。）

オソー　（小聲で）　お前はネロではないか。

（ネロ、急に逃げ出さうとする。オソー、その手を持つ。）

オソー　お前は乞食の風をしてどこへ行くのだ。

ネロ　俺は詩を書きにギリシヤへ行くのだ。俺はローマが嫌ひになつた。（去らうとする）

オソー　（ネロの手を放さず）　お前はもう皇帝はやめにしたのか。

ネロ　ローマの奴は、俺を殺さうとしてゐるのだ。そこを放してくれ。

オソー　お前は俺に殺されると思つてゐるな。俺がお前を殺して何になるのだ。

ネロ　オソー、放してくれ。俺はお前をローマの皇帝にしてやらう。

オソー　さう急がなくても良い。俺も皇帝になりさうで弱つてゐるのだ。俺はお前の姿を見てからは、もうローマの皇帝は嫌ひになつた。

ネロ　（急いで逃げやうとする）

オソー　ドミシヤス。恐わがることはないではないか。今に俺が皇帝にでもなつて了つたら、もう俺とお前は話すことも出來ぬだらう。俺とお前は、今は昔のやうに友達だ。お前が俺のホッピーアを奪つたのを忘れてやらう。

ネロ　俺はそれ所ではない。俺はかうしてはをれぬのだ。逃がしてくれ。

オソー　お前ひとりで逃げたつて、ここから逃げられるものではない。あのタイチエリナスはどうしたのだ。

ネロ　あ奴は肺病で咳いてゐた。

オソー　ヒーリヤスは？

ネロ　あ奴も分らぬ。

オソー　フエーオンはどこへ行つた。

ネロ　いや、俺は誰も知らぬのだ。

オソー　お前は毎日何をしてたのだ。お前を助ける奴は、一人もゐないのか。

ネロ　もう良い。マーカス、お前だけでも、放してくれ。

オソー　俺だけがお前の味方ではないか。俺が今お前を放しては、お前は殺されるに定つてゐるのだ。

ネロ　いや、俺は殺されるやうな惡いことはしてゐない。俺は良いことばかりをしてゐたのだ。それに、俺が眼を醒したら、宮殿の中はからつぽだ。

オソー　お前の親衛兵はどうしたのだ。

ネロ　俺は奴らに金をやつた。俺は奴らに酒を飲ました。所が、奴らは、俺が自殺しようと思つて持つてゐた毒藥の壺まで、ガルバの所へ持つていつた。俺はもう死ぬことも出來ぬのだ。

オソー　ドミシヤス、靜にせ。あそこへ來たのは駐屯兵だ。お前は俺の横へ立て。

（ネロ、狼狽へてオソーの周圍をぐる／＼廻る。）

（ローマの駐屯兵三名、松明を翳して馳けて來る。）

兵一　ネロが此處を通つただらう。

兵二　どつちへ行つた。

オソー　ネロはタイチエリナスと一緒に、シルヴーナスの方へ逃げていつた。

（兵一同馳け去る。）

オソー　あ奴らは、昨日まではお前に食はして貰つてゐた奴だ。それに今夜は、あの醜態だ。ローマの軍隊は、皇帝を品物だと思つてゐる。

ネロ　おい、マーカス、俺を逃がしてくれ。

オソー　さうお前が摑えては、ネロだと云ふことが分るではないか。俺はお前を逃がしてやるが、いま逃がしてはお前を殺すのと同樣だ。

ネロ　俺はお前の傍にゐる方が恐いのだ。放してくれ。

オソー　俺がそんなに恐いのか。俺はお前を守つてゐてやるのではないか。おい、ドミシヤス、俺にホツピーアのことを聞かしてくれ。あ奴はどうした。

ネロ　あ奴は死んだ。

オソー　どうして死んだ。

ネロ　俺はあ奴を蹴殺した。

オソー　何ぜお前は殺したのだ。

ネロ　俺は忘れた。放してくれ。

オソー　あ奴はお前の皇后になつたのか。

ネロ　うむ、俺は皇后にしてやつた。放してくれと云ふに。

オソー　さう狼狽へては、詩は書けぬぞ。お前もローマの藝術家ではないか。もう少しゆつくり落ちついて、ホツピーアのことでも話してくれ。

ネロ　俺は夜の明けぬ間にギリシヤへ行くのだ。ギリシヤへ行つたら、俺はお前に詩を送らう。

オソー　お前はリユーカンのやうな詩の名人だつたが、俺はお前のから云ふときの詩がみたいのだ。今は手帖は忘れただらうな。

ネロ　（急に喜び出す）ローマの奴は、俺を惡人だと思つてゐる。俺が奴らのためにしてやつたことを、誰も知らぬのだ。おい、マーカス、お前はこれから元老院へ行つて俺が世界の大藝術家だと云ふことを云つて來てくれ。俺はギリシヤへ行つて、ローマの名譽のために、千八百

の月桂冠をとつて來てやつた。俺はローマのために世界のあらゆる樂器を集めてやつた。俺はローマのために、キリスト教徒を一人殘さず火炙りにしてやつた。俺はローマのために、三千枚の名詩を作つてやつた。おい、マーカス、お前は俺の、トロイの燒討と云ふ詩を知つてるだらうな。あれは俺がローマの燒けたときに作つたものだ。あれは俺一生の傑作だ。俺はあのときアンシヤムの別宮にをつたのだが、あの素張らしい火の海を見たときは俺の頭はホーマーのやうになつたのだ。俺は直ぐ手帖へ書きつけておいたのだが、その句はかうだ。あゝ、汝今や焰の虎に食ひ殺さるる可憐の乙女。猛獅の群と鬪ふ勇士、黃金の焰を戴けるローマの王冠。煙の翼さと閃めく億萬の怪鳥よ。

オソー　おい、ドミシヤス、お前は氣が違つたな。

（ローマの駐屯兵三人、松明をかゝげて急ぎ足で通る。）

兵四　まだネロの奴は生きてるだらうな。

兵五　俺がもしネロの首でもとつたら、明日から俺は隊長だ。

兵六　ガルバの卽位のときは、ネロの卽位のときより澤山金をくれるだらうな。

兵四　いやガルバはスペインでも名高い吝嗇坊（けちんぼう）だ。

兵六　それなら、また直ぐ叛亂だ。

（兵士達、去る。）

ネロ　あ奴らまで、俺を殺しに來たのか。

オソー　お前の賴ることの出來るのは、もう此の世界では俺だけだぞ。俺はお前の無茶な所が、今になつて好きになり出した。お前はだいぶ、ローマの奴を殺したな。

ネロ　ローマの奴は卑怯な奴らだ。百萬人もをる癖に、俺ひとりを殺さうと喚いてゐる。おい、マーカス、お前はガルバの所へ行つて、皇帝にするから俺の命を救へと云つてくれ。

オソー　お前は前から新しいことが好きだつたが、それはあんまり新しすぎるではないか。

ネロ　俺は昔、オスチヤの水夫共を兵士に取り立てゝやつたことがある。あ奴らはきつと、俺の恩を感じてゐるにちがひない。お前はこれからオスチヤへ行つて、あの水夫達を呼んで來てくれ。

オソー　お前はそれまで、ひとりこゝにぼんやり立つてる考へか。

ネロ　そんなら俺は、どこへ行くのだ。

オソー　お前は、まだ自分の行く所も知らぬのか。

ネロ　マーカス、お前は俺をびくびくさせて、弄り殺しにするつもりか。

オソー　さうびくびくするなと云ふのに。こゝは人の集る所だ。人の集る所にをれば疑はれる恐れはない。こゝを出れば直ぐ森だが、今頃森をぶらぶらしては、火を點けて歩いてゐるやうなものではないか。

ネロ　お前は殺される心配ない。だが、俺は見つかれば直ぐ殺されるのだ。俺はお前のやうにぐづぐづはしてをれぬわ。

オソー　お前も人を大ぶ殺した男ではないか。良い加減に腹を据ゑろ。俺だつてクリートへ流されるときには、途中でお前の刺客に殺されかゝつたのだ。あれはお前が送つたのかホッピーアが出したのか。

ネロ　あれはホッピーアが出したのだ。

オソー　嘘を云へ。ホッピーアは俺を皇帝にするつもりでお前の皇后になつたのだ。あ奴が俺を殺さうとする筈がないではないか。

ネロ　いや、あの女はお前を殺せと俺に云つたのだ。嘘ではない。あ奴は俺を愛してをつた。俺はあ奴のことだけは今も思ひ出して仕方がない。

オソー　あ奴は賢い奴だから、お前の手前に、俺に殺されるやうな弱い刺客を出したのだらう。

ネロ　いや、違ふ。俺はあ奴にお前を殺すなと云つたのだ。

オソー　お前が殺すなと云ふのに、あ奴がわざわざ刺客を送る筈がないではないか。あ奴はお前と俺との皇后にならうと思つてゐた奴だ。あ奴は俺を愛してをつた。

ネロ　それは嘘だ。あ奴は俺を愛してをつた。

オソー　そんなら、何ぜあ奴を殺したんだ。

ネロ　もううるさい。俺はギリシヤへ行くのだ。そこをどいてくれ。

（ネロ、去らうとする。一團の市民達が騒ぎながら近づいて來る。ネロ、再びオソーの傍へ馳け戻つて小さくなる。）

市民一　ネロの奴はフエーオンの家で、殺されたさうではないか。

市民二　それでは明日は、ジュピター殿のお祭りだ。

市民三　ローマは奴隷から解放された。（と叫ぶ）

市民四　新皇帝ガルバ萬歳。

市民一同　萬歳。

市民五　ローマの軍隊はどうしてるんだ。ネロのために働く奴は、一人もゐない。奴らはローマ人の重税を、ひとり懷へ貯め込んで、皇帝を變へる度に、また金を貯め込むんだ。奴らは皇帝を殺すことを、貯金することだと思つてゐる。

市民四　此奴はネロの間諜だ。殺せ。

（市民一同、間諜だ間諜だと叫びながら、市民五を叩

き殺す。）
市民二　俺達は、ネロの間諜を殺したと、ガルバに云はうではないか。
（市民の半數、ガルバに云へガルバに云へと叫びながら去る。）
市民一　ガルバも今年は七十三だ。それに子供が一人もゐない。ガルバの次の皇帝は誰だらう。
市民三　次は、われわれローマの名門、マーカス・オソーだ。
（市民一同、オソーだオソーだと叫ぶ。）
市民三　ローマ人、マーカス・オソー萬歳。
市民一同　萬歳。
市民三　オソーを捜せ。（と馳け出す）
（市民一同、オソーを捜せと叫びながら續いて去る。）
（後には階段に倒れた一人の死骸と、ネロとオソーの三人が殘つてゐる。）
オソー　あ奴らは俺を捜して皇帝にしようと思つとる。だが、ローマの皇帝ほど馬鹿なものはない。おい、ドミシヤス、お前はローマの皇帝が面白かつたか。
ネロ　（默つてしきりに周圍を見廻してゐる）
オソー　（倒れた市民の死體の傍へ蹲む）　此奴は本當のことを云つた。此奴はソクラテスみたいな馬鹿な奴だ。おい、ドミシヤス、お前はいつも本當のことを云つた奴を殺しただらう。ここへ來てみろ。お前のために死んだ奴は、ローマでは此の男一人だぞ。俺が皇帝になつたら、此奴の紀念碑を立ててやらう。
ネロ　マーカス、お前も俺のやうに乞食の風をしてくれぬか。俺だけが乞食の風だと、直ぐ見つかるではないか。
オソー　お前が俺のやうな風をすると良い。乞食の風だと見つかるぞ。
ネロ　お前は俺を弄るのが上手だつたが、まだ俺を弄るのか。
オソー　いや、お前は一度皇帝になつたのだ。だが、俺はまだこれからだ。お前は今度は、俺の云ふことを聞くが良い。お前は俺の家内を奪つて俺を流したが、俺はお前の家内を奪はうと思つても、もうお前にはゐないぢやないか。俺はお前に、家内を盜られただけが此の世の負けだ。これだけは、俺がどう藻搔かうとお前には勝てぬのだ。おい、ドミシヤス、此の上俺を乞食にすることだけは、赦してくれ。俺は乞食になるほどなら、ローマの皇帝になる方がまだましだ。さうすると俺には三十萬の軍隊が出來る。八十石の香水が這入つて來る。お前のやうに殺されるのも雜作がない。
ネロ　俺には、もう一人も味方がゐないのか。ローマは俺を捨てたのか。俺を亡ぼした奴はマーカスだ。

オソー　お前は俺にそれほど腹がたつなら、何故俺を生かしてをいたのだ。

ネロ　お前は俺をぢりぢり停めて、俺を殺さうと思つてゐるのだ。俺はお前が嫌ひになつた。

（ネロ、ひとり去らうとする。）

オソー　ドミシヤス、お前は俺から放れていつたら、殺されるぞ。こゝにをれ。

ネロ　俺はお前が嫌ひだ。お前は猾い。俺はホツピーアの方がまだ好きだ。

オソー　おい、ドミシヤス、もう少しここにをれ。俺にホツピーアの話を聞かしてくれ。

ネロ　お前は俺を殺して皇帝になりたいのだ。俺はお前の傍よりギリシヤへ行く方が安全だ。俺はギリシヤへ行つて詩を作らう。

（ネロ、闇の中に消える。オソー、立つたまゝネロの消えた方を眺めてゐる。）

（暫くすると、突然、闇の中でローマの駐屯兵の叫びが上る。）

兵一の聲　ネロだ

兵二の聲　ネロだ。

兵三の聲　ネロだ。

兵四の聲　ネロを殺した。

（松明を持つた駐屯兵がオソーの前を、聲の方へ、脱兎のごとく一人づつ馳けて行く。オソー、やがて再びひとりになる。）

オソー　たうたうネロの奴も殺されたか。此の次は、ガルバ。その次は俺だ。

（オソー、ネロとは反對の方へ沈みながら去る。いつまでも、白い市民の死體だけが、一個階段の上に斜めに横たはつたまゝぢつとしてゐる。）

帆の見える部屋（三幕）

第一幕

洋室にして正面に大きな窓がある。窓からは港の船舶のマストや帆檣が見えてゐる。暖爐の上の古風な置時計は午後を廻り、横の花瓶にダリアは首を垂れてゐる。白い彫像は裸身を延ばし、室内には數個のアームチエアーとソフアー。それに包まれてテーブルあり、左右の壁には隣室へ通ずるドアーがある。

ピアノが隣室で鳴つてゐる。ホフマンの船歌。

三池（此家の主人山村の友）ひとり窓の近くのソフアーに沈み、默つて眼を瞑つてゐる。

…………　……

船の號笛が聞えて來る。

…………

山村、帽子を冠つたまゝ左手のドアーより這入つて來る。

山村　今日は君、すつかり瞞されちやつた。

（三池、冷たく默つて山村の顔を眺めてゐる。山村、ソフアーへ腰を降ろす。）

山村　君、女の子がね、街を歩いてゐたら、向うからひとり跛足をひいてやつて來るぢやないか。まア可哀相に、と思つてゐたのさ。所が君、半町あまり僕は立ち停つて見てゐたね。すると、急にその子は足がしやんと癒つて驅け出して了つたよ。はゝゝゝは。ありや罪惡だ。

三池　…………。

山村　どうしたんだね。いよいよ出帆となると、矢張り淋しくなるものかね？

三池　うむ。

山村　コーヒーでも飲まないか。

三池　…………。

山村　おい、おい。（と大聲で呼ぶ）

（ピアノがやむ。）

山村　おい。

（右手のドアーが開き、山村の妻、房子が顔を出す。）

房子　何アに？

山村　コーヒーだ。

房子　はい。

山村　それから何か美味い菓子を持つて來てくれ。果物がいゝ。
房子　何がいゝでせう？
山村　ピーチはないかい。
房子　はい。それから、さきほど甲谷と云ふ方がいらつしやつてよ。
山村　女かい？
房子　まア、もう直ぐさう云ふ訊き方をなさるのね。
山村　ぢや、何んてんだ。
房子　あんまりですわ。私の手前もあるぢやありませんか。
山村　だつて客が來たら、男か女かつて訊いてみなくつちや、判斷に苦しむぢやないか。
房子　それだつて、女かねつて、女の方をさきにお訊きになるのが、怪しいわ。さう云ふ疑問になるやうな方がいらつしやるの？
山村　どうだつていゝぢやないか。所で、その客は女かい？
房子　いやよ。その返答を訊かなきア云はなくつてよ。
山村　それよりコーヒーだ。コーヒーだ。
房子　そんな風に私をゴマカさうと思つて、そりや狡いわ。
山村　うるさい奴だね。
房子　そりやうるさい奴よ。だけど、私だつて、うるさがられると、なほ訊きたくなるわ。

山村　もう、よせつたら。
房子　ね、そんな女の方がいらつしやるの？
山村　ゐたらどうする？
房子　そりやもう……。
山村　俺になほ愛を感じると云ふのかい。
房子　えゝ、えゝ。
山村　ぢや、これからどしどし女をひつぱつて來てやるぞ。
房子　（三池の顏を見て）かうなんですからね。
（三池、立ち上つて右手のドアーの方へ進む。）
山村　どこへ行くんだ。
三池　一寸、外を歩いて來る。
山村　いや、君、あまり羨ませた所ぢやないぢやないか。これでもなかなか、ひかへ目にしてゐるんだぜ。
（三池、出て行く。房子、山村の傍へ來る。）
房子　あの方は、私が來ると直ぐ何處かへ行つてお了ひなさるのよ。
山村　あの男は、女が嫌ひなんだよ。お氣の毒だが、道を一緒に歩いてゐたつて、女の顏を見たことがない。をかしな奴だ。
房子　いゝわね、そんなかた。
山村　うむ、困り物だ。
房子　あなたのやうに、女と見ればぢろぢろ見るより、ど

んなにいゝか知れないわ。

山村　そりや間違ひだよ、男が女をぢろぢろ見ると云ふのは、それだけ男が男性的なんだ。女にしたつて、戸口を出りや、もう男に見られることを、神樣にでも見られるやうにありがたがつてゐるんだからな。

房子　それは嘘よ。

山村　お前だけは、まア嘘だ。

房子　それはあなたのやうな男の云ふことよ。

山村　俺のやうな男は、つまり愛情が深いんだね。譬へば向うから二人の女がやつて來るとする。すると俺は、その二人の顔を等分に眺めてやる。一人の方をより多く眺めてやると云ふやうなことはしないのさ。さう云ふことをすると他の方が可哀相だからね。他人を悲しい目に逢はすと云ふのは、とにかくいけないことだよ。

房子　あなたのやうな方を良人に持つたら不幸だわ。

山村　何せだ？

房子　自分の奥さんと、他の女とをいつも等分に見られてゐちや、たまらないわ。

山村　おい、コーヒーだ。

房子　負けたと仰言い。

山村　（妻の肩を搖すり乍ら）コーヒー、コーヒー、コーヒー。

房子　私、不愉快になつたの。

山村　良人に飲ますコーヒーいつぱいが、つまり、惜しくなつたと云ふんだな。

（房子、默つて卓子の上へ指で字を書いてゐる。）

山村　しかし、三池の奴、氣がどうかしてゐるんぢやないかね。一體外國へなんかどうして行く氣になつたんだか、分らないね。ほんとうに、一寸此の頃あの男はをかしいぞ。今頃外國へなんか行つたつてつまらないんだが。

房子　何か考ふる所があるんでせう。

山村　さうだ、考ふる所か。考ふる所と云ふ所には、いつでも鼠一匹さ。

房子　あなたなんか、考ふる所もないんですもの。

山村　俺なんか、その考ふる所なんて云ふものは、不必要なんだ。

房子　必要だわ。

山村　いや、われわれは、實に幸福ではないか、幸福だらう？　（にやにやと笑ふ）

房子　もう少し私を愛して下さればよ。

山村　幸福と云ふものは、大體からわれわれの幸福である間、幸福なものなんだ。

房子　そんなこと、定つてるわ。

山村　所が、不幸にして、幸福と云ふものは、女のやうに

直ぐ逃げて了ひやがる。

房子　男のやうによ。

山村　女のやうだ。

房子　男のやうだわ。

山村　女の中でも、殊に房子の如し。

房子　馬鹿らしい。

山村　かくして、われわれは爺さん婆さんになること、依つて件のごとし。

（房子急に立ち上つて右手のドアーの方へ歩む。）

山村　コーヒーかね？

房子　もつと大切なものなの。すつかり忘れてゐたわ。

（房子、消える。）

山村　（大きく欠伸をする）あゝあ、退屈だ。

（周圍を見廻し。）

はてな。幸福と云ふことは、こりや退屈と云ふことに定つたぞ。

（立ち上り、ぐるぐると歩きながら窓際へ行き、港を眺めながら口笛を吹く。）

（房子、隣室から「お蝶夫人」を唄ひながら近寄つて來る。）

（房子、一通の手紙を持つて這入つて來る。）

山村　誰からだ。

房子　さつき來た方が置いてゐらつしやつたの。

（山村、手紙の封を切り、讀む。房子は横眼で良人の顔を眺めてゐる。）

（山村、讀み終つて手紙を卓子の上へ投げ出す。默つて暫くテーブルの上を眺めてゐる。）

房子　何んて書いてあるの？

山村　美代子が死にかゝつてゐるんだつて。

（山村、再び窓の傍へ行き、港の船を眺めてゐる。）

（房子、その手紙をとつて讀む。）

（「まア、」と云ふ。）

（また讀み續ける。苦痛の表情。後、手紙を投げて、暫く良人の後姿を眺めてゐる。怒りを壓へて。）

房子　それで、あなた、行らつしやるおつもり？

（山村、默つてゐる。）

房子　行らつしやるの？

山村　來いと書いてあるね。

房子　失禮だわ。

山村　…………。

房子　でも可哀相ね。

山村　本當だ。

房子　行つていらつしやいな。

山村　うむ。

房子　喜んでよ。
山村　うむ。
房子　きつと喜ぶわ。
山村　（房子の方を向き）お前はね？
房子　知らない。
山村　今日は幾日かね？
房子　二十四日。
山村　…………。
房子　どうして、あんな男の方がいらつしやつたんでせう？　此の手紙もきつと噓だわ。
山村　…………。
房子　コーヒーを持つて來ませうね。
山村　着物を出してくれ。
房子　行らつしやるの？
山村　うむ。
（房子、良人を睥んで默つてゐる。）
山村　今、幾時だ？
房子　そこに時計があるぢやありませんか。
山村　（置時計を眺め）もう四時か。
房子　ほんとうに行らつしやるの？
山村　一寸行つて來やう。
房子　いや。
山村　行つたつて、いゝぢやないか。
房子　いけないわ。
山村　何せだ。
房子　そんなこと、分つてるぢやありませんか。
山村　馬鹿な奴だね。
房子　馬鹿に誰だつてなるわ。
山村　俺が美代子を捨てたのも、お前のためだ。
房子　そんなことなんか、私、知らないわ。私が捨てたんぢやないんですもの。
山村　分らない奴だね。俺は美代子より、お前の方が好きなんだ。
房子　方が好きぢやつまらないわ。
山村　行くよ。
房子　勝手に行つてらつしやいよ。
山村　だつて、もう死ぬつて云ふときぢやないか。可哀相ぢやないか。
房子　私には、ちつとも可哀相ぢやないんですもの。あの方が死んでくれゝば、どれほど私、助かるか知れないわ。あの方がゐるために、どんなに私、心配だか知れないわ。私、胸が晴々して來た。
山村　美代子はあいつは俺の許嫁だつたんだ。それに、俺はお前のために、美代子から放れて了つたんだ。それに、

あの女はまだ始終俺を愛してゐたんだ。

房子　だから、行くと仰言るの？

山村　うん

房子　分らない方ね。男のくせに。

山村　お前が分らないんだ。俺が行くと云ふのは、あの女を愛してゐるからぢやないつて云ふのだ。たゞ苦勞をかけてすまなかつた、安心して死んでくれつて、たゞそれだけ云ふために行くだけぢやないか。さうぢやなくつちや、あんまり俺はひど過ぎる。お前もだ。

房子　もうあなたは、私を嫌つてる證據だわ。愛してない徴よ。

山村　いけないね。お前は。

房子　さうぢやないの。どれほど美代子さんが綺麗な方だつたか知らないけれど。行つてらつしやいよ、行つてらつしやいよ。

山村　そりやお前だつて、お前が前に愛した男が今死ぬんだと分つてりや、俺に默つてゞも逢ひに行くだらう。

房子　行くものですか？　私、あなたのやうぢやありませんわ。

山村　さうは云へないよ。今は俺の番だからお前はそんなことを云ふんだ。お前の番だつたら、こんなときにはきつとお前でも公平になれないんだ。こんなときには、公平でない方がいゝ。俺なんかは、まだこんな場合お前の前でそれを平氣で云ふことの出來るほど、正直なんだ。お前を愛してるんだ。

房子　平氣で云ふほど、圖々しいのよ。

山村　手に負へない奴だね。もつと靜かに考へるがいゝ。かう云ふときには自分一流の考へ方をしない方がいゝ。俺はお前に相談をしかけてゐるのだ。もし今行つておかないと、俺は多分一生氣がとがめて苦しいにちがひないんだ。思ひ出したとき俺は苦痛になるに定つてるんだ。俺はお前と暮して行く以上は、なるだけさう云ふ他人のために苦しむと云ふことはしたくないのだ。分つてくれると非常にいゝのだが。こゝはなかなかむづかしい所だから。つまり、今行つて俺は、心をさつぱり綺麗に洗つて來たいのだ。多分、氣持ちが晴々とするに定つてゐんだ。

房子　悲しんで、泣きに行つてらつしやい。

山村　そりや、暫くは俺は泣くよ。

房子　早くお泣きなさいよ。私、笑つてあげるわ。

山村　さて、困つた。こんなにならうとは思はなかつた。ね。いゝか。

房子　えゝ、えゝ。どうでも。

山村　待て、いゝかと云ふ意味は、俺に暫く行つて悲しませておいてくれと云ふのだ。さうすると、自然にだんだ

ん俺は最後の計算をして了つて、すつかり愉快にはれば
れとなつて了ふのだ。だから、俺に今暫く、俺ひとりの
時間をくれておいてくれと云ふのだ。その時間の中で俺
は、うまく二人の生活にもつと都合のいゝやうなことを
し始めるのだ。
房子　どうぞ。
山村　何んだ、まだ怒つてゐるのか。
房子　怒つてなんぞゐませんわ。
山村　ぢやいゝ。早く用意をしてくれ。
房子　そんな用意だけは御免を蒙りたいわ。
山村　馬鹿ッ！
房子　だつて、あなたは美代子さんに濟まないと思つてら
つしやつたつて、私まで濟まないと思はなくちやならな
い理由はないわ。もしさうだつたら、私、そんなことを
思はす方なんかと結婚したのが不幸だつたのよ。私、自
分が惡いとはちつとも思つてゐないことよ。
山村　よし、もう分つた分つた。
房子　あなたは私を馬鹿にしてらつしやるのね。
山村　まア何んとでも云つてくれ。今はとにかく俺の方が
惡い。
房子　御自分が惡いとお思ひなさるのなら、行らつしやら
ない方がいゝわ。
山村　もう死ぬのぢやないか。
房子　死んであなたを取り返せるものなら、私だつて死ん
で見せてよ。
山村　もう二度とこんなことはないんぢやないか。
房子　だから、お行きなさいよ。
山村　いや、お前が怒つてゐては、どうも俺は氣樂に行く
ことが出來なくなる。
房子　氣樂に行かうなんてあんまり虫が良すぎるわ。
山村　もう怒らないでくれ。怒られると俺は困る。
房子　行らつしやるの？
山村　うむ、行く。
房子　ぢや早く行つてらつしやいつてば。
山村　俺を可哀相に思つてゐてくれ。すると、いゝ。愛し
てゐない者の所へ、愛する者を殘しておいて行かねばな
らんと云ふことが、第一可哀相ぢやないか。
房子　お愛想云つて下すつても、ちつともありがたかない
のよ。
山村　まアいゝ。直ぐ歸つて來るよ。
房子　どうぞ御ゆつくり。
山村　どうも俺は、人があまり良すぎて困る。
房子　虫も良すぎるわ。
山村　早く羽織を持つて來てくれ。

（房子、立つてぷんとしながら右手のドアーの方へ消える。）

（山村、煙草に火を點けて煙を吹かす。）

山村　うるさい、うるさい。どうも此奴にや、頭が上らん。

（暫くして、房子、羽織を持つて這入つて來る。）

房子　はい。（羽織を良人の膝の上へ抛り落す）

山村　行きたかないね。困つた。

房子　今、泣いてらつしやつたんでせう。

山村　泣きもするよ。

（山村、羽織を着る。左手のドアーより、三池が歸つて來る。）

山村　君、美代子が死にかゝつてゐるんだつてさ。

三池　美代子さんが？

山村　うむ。で、これから一寸行つて來るんだ。弱つた。君にはすまないが、他のことでないから。待つてゐてくれないか。

三池　……　……。（ソフアーに腰を）

山村　今丁度、こいつの忠告を受けてきり拔けて了つた所さ。君、どうも濟まないが、待つてゐてくれ給へ、君の出帆の前までには歸つて來るよ。

三池　行かない方がよくはないのかね。

山村　いや、君、苦勞人には苦勞人の惱みがあるのさ。それで困るんだ。ぢや君。

（山村、三池に向つて手を一寸上げ、右手ドアーから出て行く。）

（房子、その後から從ふ。）

（三池、ひとり眼を瞑つて考へ込む。暫くしてソフアーから立ち上ると部屋の隅の小トランクの中からピストルを取り出す。暫くそれを眺めてゐてまた仕舞ふ。）

（船の號笛響く。房子、部屋へ歸つて來る。三池、窓の傍へ行き、船の帆檣を眺めてゐる。）

（房子、肘掛椅子に沈んで、深く考へ込む。その後ろを、三池はひとり靜かにこれまた考へ込みながら歩き出す。）

（號笛また響く）

三池　（立ち停り）房子さん。

房子　まア、すつかり默り込んで了ひまして、御免なさいな。今、山村とそれはひどい喧嘩をしましたの。私、腹が立つて了ひまして。あなたでもゐらつしやつて下されば良うございましたのに。

三池　あなたには、僕が昔とは變つたやうに見えますか？

房子　いゝえ。だけど、山村はそんなことを云つてゐましたわ。此の頃よくお眠りになれまして？

三池　どうも。

房子　山村なんか、あまり早く眠つて了ひますので腹が立つほどですの。
三池　昔、山村が僕を連れてあなたの所へ遊びに行つたのを、まだあなたは覺えていらつしやいますか？
房子　えゝ。あの頃は面白うございましたのね。
（三池、スーツケースの傍へ行き、中からピストルを取り出す。房子平氣でそれを眺めてゐる。）
三池　僕、近頃かう云ふものを買ひました。七十圓もしたんですよ。
房子　まア、ピストル。
三池　ええ。
房子　外國へなんかいらつしやるのには、さう云ふものも入りませうね。
（房子、ピストルを手にとつて眺めながら卓子の上へ置く。）
三池　さつきあなたの彈いていらつしやつたのは、あれは？
房子　あれお好きですの？
三池　美代子さんが良く彈きましたね。それで知つてゐます。
房子　あなた、美代子さんとも親しくしてゐらつしやいましたの？
三池　えゝ。
房子　美代子さんは幸福な方ですわね。
三池　あなたがゐらつしやらなければ、幸福だつただらうと思ひますね。
房子　でも、山村はまだ愛してゐると思ひますわ。
三池　さうお思ひになりますか？
房子　えゝ。
三池　あの人は、僕が愛してゐたんですよ。
房子　あら、さうでしたの！
（三池、房子の傍のソフアーへ腰を下ろす。）
房子　そのこと、山村も知つてをりますの？
三池　知りますまい。僕も、美代子さんが山村の許嫁だと知つたので、もうそれからは逢ひませんでした。だから、問題はおこらなかつたんです。
房子　それはお困りでしたのね。少しも知りませんでしたわ。ぢや、今直ぐお逢ひしにいらつしやればいゝぢやございませんか。
三池　あなたもさうお思ひになりますか？
房子　そりやいゝと思ひますわ。
三池　しかし、もう行く理由がないんです。
房子　どうしてですの？
三池　行く氣持ちなんか起りませんよ。

房子　それぢやお可哀相ですわ。あなたが愛してらつしやつたと云ふことを、ひと言美代子さんにお傳へしたら、きつとお喜びなさいますわ。
三池　そんなものですかね。女の人は？
房子　そりやもう、きつと。
三池　でも、それは、遲すぎると思ふんです。
房子　遲くつても、さうお云ひになる方が云はないでゐるよりも、どんなにいゝか知れませんわ。
（三池、急に頭髪を片手で攫む。苦悶の表情。）
房子　ね、さうなさいましな。それに、もうあなたも外國へ行つてお了ひになるんですし。
三池　僕はもう、歸るまいとは思つてゐるんです。
房子　ぢや、なほお云ひになる方がいゝと思ひますわ。
三池　こんなときには、さう云ふことを云ふ方がいゝんですか。
房子　そりやもう。その方が。
（三池、突然、房子の顔を強く見詰める。）
房子　どうなさいましたの？
三池　僕は……實はこんなピストルをあなたにお見せするのではなかつた。しかし、これには理由があるんです。實はこれで、僕は外國へ行く前か船の中でか……。
房子　まア！
三池　房子さん。
房子　そんなことをなすつては。
（房子、ピストルを取り上げてどこかへ隱さうとする。）
三池　房子さん、そんなことをしないで下さい。どうも僕は、芝居をやつてゐるやうな氣がしてならないんです。だけど、これは芝居ではないんですよ。何て云つていゝか。房子さん、僕は云つてはいけないんだが。
房子　どうなさいましたの！
三池　（頭をかゝへ）もう遲すぎるんですよ！
房子　遲いことなんかございませんわ。行つていらつしやいな。美代子さんだつて。
三池　あなたは、誤つてゐます。さうぢやない。僕は、そんなことに困つてゐるんぢやありませんよ。
（房子、立ち上り、三池の顔を驚いて眺めてゐる。）
房子　お眠みになりませんか、お身體が惡いのではございませんか？
三池　あなたは、僕が氣が違つたと思つてらつしやるんでせう。さうぢやありません。
（房子、右手のドアーの方へ歩まうとする。）
三池　どこへ行くんです？
房子　お眠みになりませんか。お眠りがたらないんですわ。

よく一度お眠みになつてからお考へなすつては。

三池　頭はもう慥かなんです。それより、僕は……。

（房子、困惑した様子にて、ピストルを持つたまゝ部屋の中を眺め廻す。）

房子　山村が今頃行つて了ふものだから。……何かお藥を召し上りませんか？

（房子、部屋を出ようとする。すると、三池は突然ソファーから飛び立ち、出て行かうとする房子の前へ駈け出すと、彼女の行く手に立ち塞がる。）

三池　行つてはいけません。出て行かないで下さい。

（房子、愈々困惑する。三池、房子を見詰めながら、ぢりぢりと詰め寄る。）

房子　（後へおもむろに退きつゝ）ほんとうにどうなさいましたの？　お醫者さまをお呼びしませうか？

三池　恐わがらないで下さい。僕は、今あなたに傍にゐて貰はなければ……

房子　えゝ、をりますわ、だから、お靜にしてゐらつしやいましな。

三池　あなたは、僕を病人だと思つてゐるんですね。

房子　いえ、さうぢやございませんの、私。あなたが何んだか急にお惡くなつたやうな氣がしただけですの。ですから……。

三池　あなたは、僕の傍から逃げようと許り考へてゐらつしやるんですね。

房子　（恐ろしさうに）そこへおかけなさいましな。まア、あの海の色が、美しくなりましたこと、ごらんなさいましな。（海を指差す）

三池　房子さん。あなたは、僕のピストルを取り上げてゐるんです。早くそれを返して下さい。

房子　（驚愕しながら）ね、あの燈臺の所を御覽なさいまし。そら、あれは警邏船でございますよ。まアあの靜な……

三池　あなたは、僕を馬鹿にしてゐる！

房子　どうして馬鹿になんぞ！

三池　房子さん、僕は、あなたを、

（房子、默つて驚いたやうに三池を眺めてゐる。）

三池　何か云つて下さい。ね、僕は、何か云つて下さい。さうでないと僕は、

房子　私、何が何だか分りませんわ。

三池　僕はあなたを、非常に、いつも、

房子　そんなことをお仰言つちやいけません。

三池　分つてゐます。だけど、もう僕は仕方がありません。云はないでゐられるほどなら、云ひはしません。

房子　でも、さう云ふことを今頃仰言いましては、私、困つて了ひますわ。

三池　…………。（苦悶の情一層增す）

房子　あなたは、美代子さんを愛してゐらつしやつたんぢやありませんか。

三池　それはほんとうなんです。

房子　それだのに、あなたがそんなことを私に仰言るのが、私には分りませんわ。

三池　僕は美代子さんを今愛してゐると云つた口で、直ぐあなたにこんなことを云ふのが、何せだかお分りになりませんか？

房子　えゝ、私、あなたをお信じすることが出來ません。あまりおからかひになるのはよして下さい。

三池　からかつてゐると思つてゐらつしやるんですか。

房子　でも、さうぢやございませんか。私には男の方つて、何せさうなのか分りませんの。

三池　ぢや僕は山村の惡口を云つて了ひます。もしこのまゝ僕が默つてゐたら、僕はいつまでもあなたに誤解されるにちがひないんですから。

房子　…………。

三池　一寸でいゝんです。だから一寸聞いて下さい。僕は山村より前から美代子さんを愛してゐて、山村と美代子さんが許嫁だと分ると、山村のために美代子さんのことを思ひとまつたんです。所が、僕はそれだけ、あなたにいつの間にかひかれて了ひました。するとどうです。山村はまるで僕を追つ馳けるやうに、今度はあなたを愛し出しました。もう僕は、また美代子さんを愛し直さなければならないなんて、そんな規則なんか不愉快です。僕はそれで、

房子　もうよして下さい。分りました。

三池　僕も默つてゐたのが惡かつたんです。だけど、山村はさう早く美代子さんを捨てゝ了つてあなたと、

房子　どうぞもう、そのことは、

三池　いや僕は云つて了つた以上默つてはゐられません。あなたは今さき、かう云ふことは云ふ方がいゝと仰言つたぢやありませんか。僕はあなたをどんなに愛してゐたか。長い間あなたを一心に思つてゐて、そして、

房子　（苦しげに）私、もう失禮いたしますわ。

三池　房子さん。

房子　御免なさい。

（房子、お辭儀をして右手のドアーの方へ進む。）

（三池、その前を塞ぐ。）

三池　房子さん。

房子　どうぞ私を出して下さい。

三池　僕が山村のやうな男だつたら、

房子　そこをおのき下さい。

三池　山村のやうに、愛すると云ふことを、ラッパでも吹くやうに云へたなら、僕はこんなに、

房子　私、もうあなたにはお逢ひいたしませんわ。

三池　いや、僕もお逢ひしません。だけど、僕は山村みたいに、手毬の様に轉がつて行く性格が憎らしいんです。さういふ性格がいゝか惡いかはそれは知らない。だが、僕はさう云ふ性格の男には、もう裏から今のやうに攻めかけてやるんです。さうでないと僕のやうな男は一生あんな男のために不幸ばかりの見續けなんです。あいつの性格は、僕には敵だ。あいつは、僕から美代子さんをうばひ、あなたを取つたのだ！　僕はあなたを取り返すのだ！　僕はあいつを滅ぼすために、長い間今迄待つてゐたんです。

房子　でも、山村はそんなことを知らなかつたんぢやありませんか。私、山村が可哀さうでなりませんわ。

三池　あなたは僕が山村を追ひ出すために、今日美代子さんの手紙を僕が持たしてよ來したやうに思つてるんですね。

房子　まア！　あなたが、そんなことをなすつたの！

三池　僕は山村の惡口を云ひたくはないんです。だけど、これ以上山村があなたと生き續けて行けば、僕は生きてる氣がしないんです。僕にとつては、今死ぬか生きるかの瀬戸際なんです。僕は山村を殺してやりたい！　僕はもうめちやくちやなんです。

房子　あなたが、あんな作り事をなすつたの？

三池　そんなことを、誰がするもんですか。だけど、僕はもつとひどいことをしてやりたい。もつと。

房子　私、あなたをお氣の毒に思ひますわ。でも……。

三池　それだけですか？

房子　もう遲うございますわ。

三池　たつた、それだけですか？

房子　私、これ以上何も申し上げることが出來ません。

（房子、左手のドアーの方へ進む。）

三池　房子さん。

房子　……………。（歩み續ける）

三池　房子さん。

房子　……………。（ハンドルへ手を掛ける）

三池　房子さん、待つて下さい。そのピストルを置いてつて下さい。そ奴だけは、僕の物なんですよ。

（房子、振り向いて三池の方を見る。三池、房子の傍へしつかりと進んで行く。）

（房子、ピストルを後へ廻して三池の進んで來る方向を脫しながら窓の方へ廻つて行く。）

三池　それだけは返して下さい。僕はそれを七十圓も出し

て買つたんです。僕はもうこゝにはゐたかありません。

房子　…………。（首を垂れてゐる）

三池　あなたは、もう僕を誤解してゐて下さらないでせうね。僕はいくらか氣が樂になりましたよ。では、もう失禮しませう。たゞ、僕はあなたよりも前に、美代子さんを愛したことだけは赦して下さい。それも、あなたがそのときから居て下すつたら、そんな失禮なことはしなかつたと思ひます。

（三池、房子の傍へ行き、ピストルを取らうとする。房子、渡すまいとして苦しむ。）

房子　どうぞ、これを私に下さいましな。

三池　さうですか。……おや、これで失禮します、三日も留めて貰つて山村君には失敬ですが、宜敷く云つておいて下さい。では。

（三池、スーツケースを下げて部屋を出て行かうとする。）

房子　待つて下さい。私……。

三池　（振り返る）

（房子、首を垂れて默つてゐる。）

（三池出て行く。）

（房子、ピストルを暖爐の上へ置くと、三池の後から馳けて行く。）

（暫くすると、房子、再び悄然として這入つて來る。ソファーの頭に手をついて身を支へる。）

房子　もうあたし、駄目なんだわ。（獨白）

（三池、スーツケースを持たずに這入つて來る。）

三池　（喜ばしく生々として）房子さん、さア、逃げて下さい。

房子　…………。

三池　（房子の肩へ手をかけ）今から、上海まで行きませう。さうしたら、後は僕が引き受けます。

（房子、三池を避けて窓の傍へ歩む。三池、その後を追ふ。）

三池　ね。さうして下さい。僕は直ぐこれから、あなたのキップを買ひに行つて來ますから。僕はもう全く嬉しいんです。ね、もう何も考へないやうにして下さい。あなたが悲しむと、僕まで悲しくなつて了ふんです。氣をはり詰めてゐて下さい。お願ひです。

房子　…………。（袂を顔に當てゝ泣く）

三池　折角僕が、こんな喜ばしい目に出逢つたのに、悲しまれては……ね、元氣を出して下さい。山村のことは考へないで下さい。僕が長い間苦しんでゐたことを考へて下さい。ね、宜しいですか。僕は直ぐ切符を買ひに行つて來ますから、その間、待つてゐて下さいませんか……

ぢや、あなたも僕と一緒に行つて下さいますか。

（房子、横に首を振る。）

三池　ぢや、待つてゐて下さい。

房子　そんなにお急ぎにならなくつても、いゝぢやありませんか。

三池　いや、急がなくちやいけません。僕の恐れるのは、あなたの心變りなんです。山村なんか僕は恐れてゐるんぢやありませんよ。だけど、山村が歸つて來ては、直ぐあなたの心が變つて了ひさうな氣がするんです。だから、

房子　私、もう決心してをりますわ

三池　いや、そんなことなんか信用してをられません。ね、一寸待つて下さい。僕らはあの腹の赤い船に乘るんですよ。僕はこゝにゐる間、あの船に乘つてあなたと逃げて行く所を、どれだけ想像したか知れませんよ。だけど、たうとうそのときが來た。僕は、房子さん、待つて下さい、一寸行つて來ます。

（三池、周章てゝ左のドアーの方へ行く。）

三池　（振り返り）待つてゝ下さい、直ぐですから、その間に用意しといて下さい。考へちやいけませんよ。あの船ばかり見てゐて下さい。分りましたか、用意をお願ひしますよ。

（三池、外へ出て行く。）

（房子、ソファーに倒れて泣き沈む。）

（空がだん／＼と暮色に變り、港の上には火が點々と見ゆ。）

（房子、顏を上げて港の上を見續けてゐる。が、また顏を袂で蔽つて泣き崩れる。）

（左のドアーより、突然山村が歸つて來る。）

山村　おい、もう行くのは止しちやつた。

（房子、顏を上げる。驚きの色。默つて良人から眼を外らす。）

山村　歩きながらよく俺は考へてみたんだが、どうも今行くのは、良くないやうな氣がして來たのさ。（ソファーへ赴く）

房子　…………。

山村　俺は美代子が死んだなら、そのとき葬式に行つてやらうと思つてるんだ。ね。その方がいゝね　そのときまで待たうと思ふんだよ。

房子　…………。（立つて窓際へ行き外を眺めてゐる）

山村　おい、まだ怒つてゐるのかね。もう怒るのはよしたらどうだ。うん？

房子　…………。

山村　さて、かう落ちついて見ると、コーヒーが欲しくなる。おい、コーヒーだ。

房子　…………。

山村　おい、さアこゝへ來た。もう仲なほりをしようぢやないか。あゝ、さう／＼、さつき丹三郎氏に逢つたよ。先生、暫く顔を見せないと思つたら、道理で、ちやんとまた一人出來たんだつて、男なんだとさ。何かやらなきやなるまいね。(煙草を吹かす)

房子　…………。(せき上げる苦痛を嚙み殺す)

山村　俺とこのは、遣つてばかりゐて、どうも甚だ經濟に惡い。どうだ、一つ、今度ア取り返す工夫でもしてくれよ。

房子　…………。

山村　おい、もう怒るのは止せよ。お前を怒らせると、明る日、俺は一貫目減つて了ふんだ。

(房子、急にしやくり上げて泣き出す。)

(山村、驚いて房子の傍へ寄る。)

山村　おい、勘忍してくれ、俺が惡い。勘忍してくれ。

房子　私が、私が……惡いのよ。(益々激しく泣く)

山村　いや、俺だ、俺が惡い。

房子　…………。

山村　お前は今、病氣だな？　(首を傾ける)

(房子、山村の胸へ顔をつけて泣く。)

(三池、左のドアーより這入つて來る。二人を見て立ち停る。)

山村　君、また、これなんだ。(笑ふ)

三池　…………。

山村　房子、コーヒーを持つて來てくれ。どうも咽喉が渇いた。(三池の方を見て)　君待たせてすまなかつたね。美代子の所へ行くのは、止したんだよ。

三池　…………。

山村　君、一寸待つてくれ給へ、咽喉が渇いてやりきれないや。

(山村、右手のドアーから急がしさうに出て行く。)

三池　房子さん、さア、早く。山村の姿が見えたものだから、急に僕は引き返したんです。

(房子、しきりに泣く。)

三池　今ぢやなくつちや、駄目ですよ。

房子　どうぞ私を、捨てゝ行つて下さい。美代子さんの所へ、行つて上げて下さい。

三池　どうしたんです？

房子　私、山村に濟まなくつて。私、どうしても……。

(三池、暫く呆然として房子の顔を見詰めてゐる。と、默々としてひとりそのまゝ部屋から去つて行く。房子、三池の後を追ひ、ドアーを開けようとしてハンドルに手をかけたまゝ、その戸にもたれかゝつて泣き崩れる。)

山村　（右手より現はれる）おい、さア、房子、こゝへ來た、こゝへ。

（房子、ドアの方を向いたまゝ動かず。）

山村　何んだつてんだ。また一貫目、減らすつもりか。もうよしてくれ。

房子　………。

山村　おい、房子、をかしな眞似は、よすがいゝ。

（房子の後姿を見詰めながら、だん／＼と險しい表情に變つて行く。）

山村　三池はどこへ行つたんだ？

房子　………。

山村　おい、三池は？

房子　私、存じません。

（山村、部屋の中を見廻し、暖爐の上のピストルを見つける。）

山村　こりや何んだ？

房子　（窓の方へ歩いて行く）

山村　おい、此のピストル、どうしたんだ？

房子　それは、三池さんから、いたゞきましたの？

山村　三池はどこへ行つたんだ？

房子　フランスへ行くと仰言つてゐましたわ。

山村　それで、此のピストルをお前にくれたのか？

房子　えゝ。

山村　ぢや、俺の留守に、一芝居あつたんだな？

房子　………。

（山村、ピストルを驗べてみる。）

山村　何んだか、あ奴、臭いと思つてゐたら、こんな所へ、彈丸を入れておきやがつた。

房子　………。

山村　おい、もう芝居がすんだのなら、こつちを向いてもいゝだらう。

房子　私、あなたが嫌ひです。

山村　お前は俺の留守に、そんなことを覺えたのか？（ソファーに腰を降ろす）

房子　………。

山村　俺は、また美代子が好きになつて來た。

（房子、山村の方をきつと見る。）

山村　あ奴は、今頃、死んでるだらう。

房子　あなた。

山村　………。

房子　あなたは、さつきの美代子さんのお手紙を、三池さんが書いたのだとはお思ひにならないのね。

山村　お前は、それを知つてるのか。

房子　知らないこともないわ。

山村　よしッ。（ピストルを取り上げる）
房子　あなた、駄目よ。
山村　俺は、あ奴を。
房子　でも、美代子さんは、ほんとうにお悪いのかもしれなくつてよ。
山村　お前は三池に、何をされたのだ？
房子　何んにも。
（山村、默つて房子を睨んでゐる。）
房子　いやだ。あなたも、三池さんのやうな顔をなさるのね。
山村　云へ、云へ。
房子　何を云ふの？
山村　何を三池にされたのだッ？
房子　をかしな方ね、何んにもされないぢやありませんか。
山村　…………。
房子　私は、三池さんのやうに、そんな顰め面をなさる方は、嫌ひです。
山村　……　……。
房子　あなたは、一寸美代子さんの所へ行らつしただけで、もうそんないやな顔におなりになつたのね。
山村　……　……。
房子　美代子さんは、きつとぴん／＼してらつしやるから、早く行つて來てお上げなさいよ。
（房子、右手から出て行く。）
（山村、ぶら／＼歩き、鏡に映つた自分の顔を見て立ち停る。）
（出帆の汽笛が響いて來る。）
山村　あ奴も、俺のやうな顔をしてやがつた。

——幕——

第二幕

房子、山村、二人は默つて新聞を讀んでゐる。同じ部屋。夜——テーブル、ソファー等。

房子　もうお眠みにしませうか。
山村　うむ。
房子　翌日の朝は、幾時にお起ししたらいゝの。（新聞を放す）
山村　八時。
房子　八時？
山村　八時。
房子　そんなにお早くお起しして、まだぷん／＼當られるのではないでせうね。
山村　それは知らない。

房子　ぢや、あたしも、知らないわ。

山村　まア、默つて起してくれ。

房子　あ、さう〳〵、夕べ、あなた、庭の方で何だか人の足音がして、あたし、ちつとも眠れなかつたわ。

山村　眠れなかつた奴が、惡いのさ。

房子　あたし、初めは犬だらうと思つてゐたの。でも、犬にしては、あまりじめ〳〵した歩き振りなんですもの。

山村　（突然、新聞を放す）おい、子供はまだかい？

房子　子供つて、何アに？

山村　子供は子供さ。

房子　まア、何ぜ急にそんなことを仰言るの？

山村　もう、一人位ゐ出來たつて、羞しくない頃ぢやないか。

房子　あたしは、犬の話をしてゐますのよ。

山村　俺は、子供の話をしてるのさ。

房子　子供なんか、あたしには出來やしませんわ。

山村　どうも、俺は此の頃、子供が欲しくて仕方がない。

房子　だつて、仕方がないわ。

山村　そりや、仕方がない。しかし、それだからつて、何もわざ〳〵犬の話なんかしなくても良ささうなもんだ。

房子　でも、夕べはあたし、ほんとに恐かつたわ。あれは、きつと犬ぢやなくつてよ。

山村　犬でなかつたら、泥棒だらう。

房子　さうだわ、泥棒よ。

山村　今度は、泥棒の話か。

房子　あたし、恐いわ。

山村　そんなら、子供の話をするがいゝ。

房子　あなたは、あたしに子供が出來ないもんだから、……よくつてよ。

山村　子供が出來ないから、俺に泥棒の話をきかすのか。

房子　あなたは、美代子さんのことでも、思ひ出していらつしやい。

山村　そんなら、お前は、三池のことでも思ひ出してゐるんだな？

房子　えゝ、そりや、とき〴〵は思ひ出してよ。

山村　三池と一緒にゐたら、今頃は、と思つてゐるのかい？

房子　そりや、あなたのことよ。美代子さんとでも一緒にゐらつしやれば、きつと、もう今頃は、と思つてゐらつしやるんでせう？

山村　そんなことを云つて了へば、どつちも白状したと同じぢやないか。

房子　さうだわね。

山村　さうだ。

房子　その方が、あなたには、いゝでせう。

山村　お前にも、いゝだらう

房子　えゝ、惡くはないわ。

山村　ぢや、それでいゝわけだ。俺が美代子のことを思つてゐるし、お前はお前で、三池のことを思つてゐる、と、さうまア、きりをつけるためにして置かう。

（二人、暫く默つてゐる。）

房子　愛なんて、をかしなものだわね。

山村　をかしなものだ。まるで、

房子　まるで、飴みたいね。

山村　犬みたいだ。

房子　あなたと、あたしとが一緒になつて、美代子さんと三池さんとが悲しんだと思つたら、今度は、あなたとあたしとが一緒になつたために悲しんで、

山村　喧嘩ばつかりし續けて、

房子　愛なんて、ほんとに、いやね。

山村　いやだ。こんなものは、ない方がいゝ。

房子　（ヒステリカルに）あゝ、いやだ。

山村　俺も、いやになつて來た。

房子　あたし、どうしようかしら。

山村　だから、子供の話でもするがいゝ。

房子　あたし達は、幸福になつたお蔭で、不幸になつたのね。

山村　みんな、さうだよ。

房子　さうぢやないわ。

山村　もう云つちやいかん。

房子　美代子さんは幸福だわ。

山村　云ふなと云ふのに、

房子　でも、あたし、不幸なんですもの。

山村　不幸なら、不幸でいゝぢやないか。

房子　いやよ。

（二人、默つて了ふ。）

山村　三池の奴は、うまいことをしやがつた。

房子　美代子さん、どうしてゐらつしやるかしら。

山村　今頃は、お前を殺してゐる夢でも見てゐるさ。

房子　夕べのあの足音は、美代子さんのかしら？

山村　そりや、分らないね。

房子　まア、あたし、つまらないことを云つて了つて。あたし、何んだかあの足音が、急にそんな風に思へて來たわ。

山村　いや、ひよつとすると、三池かもしれないぜ。あ奴は、お前のことを思ひ切れずに、上海（シャンハイ）あたりから、舞ひ戻つてゐるに定つてゐるんだ。

房子　美代子さんよ。あの方は、あなたの後を、病み犬みたいに追つかけてゐるんだから。

山村　ぢや、今晩あたり、庭の戸袋の所で、二人はぶち當つて、苦笑ひするだらう。
房子　あなたは、ほんとに呑氣な方ね。
山村　うむ、もう俺は、くしやくしやしたことには懲りたのさ。
房子　だつて、こんなにくしやくしやさしたのは、あなたぢやありませんか。あなたが、美代子さんを愛してゐらつしやつたくせに、またあたしをこんな目に逢はして。
山村　だつて、仕方がないぢやないか。
房子　仕方がないことはありませんわ。あなたが、ちやんと美代子さんを愛してゐらつしやれば、こんなにならずに濟んだのです。
山村　所が、濟まなかつたのだから、仕方がない。
房子　仕方がないでは濟みませんよ。第一、あたしが、こんなくしやくしやした目に逢はされたりして、いやぢやありませんか。
山村　そりや、お前が悪いのさ。
房子　あたしのどこが悪いのです。
山村　お前は俺の云ふまゝになるから、悪いのだ。お前さへしつかりしてをれば、美代子は不幸にならずに濟んだのだ。それに、お前は、下らぬ俺の云ふことを信用して。
房子　まア、ぢや、あなたは、あたしを瞞すつもりで、一緒におなりになつたのね。
山村　いや、待つてくれ。瞞されたのは、俺なんだ。
房子　あたしが、あなたを瞞したの？
山村　そりや、さうだよ。
房子　まア。
山村　お前ぢやないか。何も、俺がお前に瞞されないで、わざ〳〵美代子を捨てる筈がない。美代子は俺の許嫁だつたんだ。俺は、あの女を愛してゐたんだよ。
房子　あたしも、あなたにかゝつては、何も云へなくなつて了ふ。
山村　そりや、お前は云へなくなるだけ、どこか必ず悪い所を持つてゐるんだ。
房子　あたし、きつと、あなたにさう云ふ調子で、瞞されたんだわ。
山村　ぢや、思ひ出してみるがいゝ。お前は、あんな美しい顏をして、あんな首の曲げやうをして、ひどいぢやないか。
房子　あら、だつて、あなたがあたしに、あんなことをお云ひになつて、あんな、
山村　俺がどんなことを云つたつて？
房子　そりや、あたし、委しいことは忘れたけど、あたし、あなたのお手紙をちやんと皆持つてゐますから、見せて

上げるわ。それは美しい文章で、お上手なことばかり、どつさり並べてありましてよ。

山村　何んだつて俺たちは、こんな大きな聲を出してゐるんだろ。もう人の寢る時間ぢやないか。馬鹿々々しい。

房子　あなたが、あたしを瞞したからよ。

山村　俺は、子供の話をしてゐた筈だ。瞞す瞞さないなんて、だいたい、瞞された奴が、いつでも瞞した奴より馬鹿なのに定つてゐるぢやないか。

房子　だから、さつきから、あたしがあなたに瞞されたのだと云つてゐるんぢやありませんか。

山村　それで、どうしたつて云ふんだね。

房子　あたし、美代子さんが羨しいの。

山村　成るほど、それで分つた。お前は、美代子々々と云へば云ふほど、腹の中で、三池のことを思つてゐるのだ。さうだらう。

房子　あたし、あの方にも逢ひたいわ。

山村　いまに逢へるよ。もう暫く待つがいゝ。多分、今夜あたり、こつそり戸袋の所へ忍び込んで來るだらう。それから、明日になると、お前は俺に、夕べの足音は、犬なのよ、なんて白つぱくれて、一日ぢゆう有頂點でピアノでも叩きまくつてゐるにちがひない。

房子　でも、あの方は、お氣の毒な方ですわ。

山村　今頃から、そんなことを云はなくつたつて、もう直き、云ふときがあるぢやないか。

房子　もうないわ。あの方は、美代子さんを愛してゐらしつたのに、あなたが美代子さんを愛してゐらしつたものだから、御自分がお引きになつて、そしてあたしを愛して下すつたら、今度はあなたが、美代子さんをお捨てになつて、あたしみたいなものにあんなことをなすつて、ほんとに、三池さんもお氣の毒よ。少しは、あの方のお淋しさも考へてお上げなさいよ。

山村　馬鹿な奴だね。俺がそんなことを考へ出したら、三池にお前をやりたくなる。

房子　でも、少し位は、そんなことも考へておくものよ。

山村　だいたい、お前は、三池に逢ひたくて逢ひたくて、仕方がないと見えるね。俺はいつでも逢はしてやるよ。遠慮しなくたつて、いゝんだよ。俺は、野暮なことはだい嫌ひだ。逢ひたい奴を、逢はさないなんて、そんな馬鹿げたことは出來ないんだ。

房子　あなたは、三池さんがあたしを思つてゐて下すつたと分つたとき、あんなにお怒りになつた癖に、いまはもう、さう云ふことを仰言るんだから、だいたいが分りましたわ。

山村　分ればいゝ。俺は、お前の喜びさうなことばかり、

やつて來てたんだ。あまり、贅澤を云ふのは、やめてくれ。

房子　そりや、あなたは、御自分が美代子さんに逢ひたいものだから、あたしにも三池さんに逢ふやうにお仕向けになるんでせう。

山村　夫婦なんて、こんなことを云ひ合ふやうになるもんかね。もうよし／＼。俺はもう、何もかもがいやなんだ。

房子　あたしもお嫌ひになつたのでせう？

山村　うむ、嫌ひだ。

房子　ぢや、有り難いわ。

山村　なぜお前は、直ぐさう云ふことを云ひ出すのだ？

房子　だつて、あなたは、あたしがお嫌ひになつたんぢやありませんか。

山村　俺はお前が、直ぐさう云ふことを云ひ出すのが、嫌ひなんだ。

房子　あたしもさうなの。何も、あたしをお嫌ひになつたからつて、さう直ぐ嫌ひだなんて、仰言らなくつたつて、いゝと思ふわ。お嫌ひだつたらお嫌ひで、默つてゐていたゞきたいの。

山村　嫌ひだから、嫌ひだと云つてゐるんだ。

房子　だから、あたしも、有り難いから、有り難いと云つてゐるのよ。嫌ひだなんて云はれて、悲しさうな顏なんか、出來るもんですか。あたしは、子供ぢやありませんよ。

山村　子供でないから、いゝ加減に子供でも産んでくれ。

房子　あたしは、冗談を云つてるんぢやありませんよ。

山村　俺は、冗談を云つてるんだ。

房子　冗談なら、冗談らしく仰言いませ。人を怒らせるのも、怒らせやうがありますわ。

山村　そりや、お前の云ふことは、冗談ぢやないよ。冗談で、三池に逢ひたいなんて、お前は云へる柄ぢやない。

房子　何ぜ、あなたは、さう三池々々と仰言るの。

山村　お前は、三池が好きだからさ。

房子　好きな方なら、まだ他に、いくらだつてありますわ。

山村　よし、分つた。覺えて置く。だから、もう尋常にしてゐてくれ。俺は、とにかく、子供が欲しくて仕方がないんだ。

房子　あなたは、此の頃、いやたことはつかり、仰言るやうになつたわね。

山村　うむ、もうそろ／＼、そんな頃になつたんだらう。俺とお前とは、何か喧嘩と云ふと、子供のことから始まり出す　どうも、子供と云ふ奴は、禁物らしい。これで子供でも出來たら、毎日とつ組み合ひの喧嘩だね。

房子　あなたは、ほんとに勝手な方よ。

山村　お前も、だいぶん、勝手な奴さ。

房子　初めは、あなたは、子供を產むな產むなと仰言つて、そろ／＼あたしにお倦きになると、今度は、子供々々と仰言つて、

山村　お前は何んだ。初めは、子供を產みたくない產みたくないと云つてゐて、さて產めないと分り出すと、今度は、犬だ犬だと云ひ出して、第一俺たちは、犬を產むために結婚したんぢや決してない。

房子　だつて、子供を產むために、結婚したんでも決してないわ。

山村　それなら、何のために結婚したんだ？

房子　あなたが、結婚しように仰言るからよ。あなたは、何のために結婚なすつたの？

山村　俺は、結婚するより仕樣がなかつたから、しただけさ。

房子　それなら、あたしが子供を產まなくつたつて、いゝ筈よ。

山村　子供を產まない女なんて、そんな恐ろしい話はよしてくれ、と云つたのは、こりやショペンハウエルだが、まア、そんな恐ろしい話はよしてくれ。

（二人、どちらも默つてゐる。）

（房子の眼に、だん／＼涙が浮んで來る。）

房子　あたし、そんなに恐ろしい女かしら。（と呟く）

山村　もつとも、俺にはさう恐い女とも思へないが、しかし、何んだかお前は、もう直き恐ろしいことをやつてのけさうな氣もするね。

房子　あたしには、もう子供が出來ないのかしら。

山村　そりや、俺も知らないね。

房子　あたし、子供がほしい。（と萎れ込む）

山村　さう俄に、萎れなくつたつて、いゝだらう。何も、子供が出來ないと云つたつて、お前が惡いとは限らないさ。

房子　（急に、頭を上げて元氣良く）さうよ、あたしが惡いんぢやないわ。あなたよ、あなたよ。きつとあなたにちがひないわ。

山村　俺が惡い？

房子　えゝ、さう。あなたよ。あなたに定つてゐるわ。

山村　俺は、お前が悲しんでゐるから、慰めてやつたんだよ。

房子　いゝえ、違ひます。あなたは、今迄御自分の惡いのを、あたしに冠せようとしてたのよ。定つてゐるわ。あなたのことだから、そんな上手いことを考へて、まア、憎らしい。あたし、長い間、あたしが惡いのだとばつかり思つてゐて、損をしちやつたわ。さア、あやまりなさ

いよ。
山村　俺が、どうして、馬鹿な。貴様は、
房子　何も仰言る必要はありません。さア、手をついて、あやまりなさい。長い間、濟みませんでしたつて、さア、こゝへ、手をおつきなさいよ。
山村　冗談云つちやいけない。俺が、何故、どうして、悪い。馬鹿なことを云ふのは、よしてくれ。
房子　あやまらないなら、良くつてよ。
山村　女と云ふ奴は、どうしてそんなに、狡いんだらう。
房子　狡いのは、あなたぢやありませんか。あなたは、獨身時代に、さんざ放蕩した癖に、子供が出來ないと、みんなあたしの故にして了つて、こんな狡い人つて、まアないわ。あゝ嬉し、あたし、これからはあなたを、虐めて、虐めて、虐めぬいてやれるんだわ。あたし、胸が晴晴して來た。あゝ、嬉し。あたし、あなたに復讐してやれるんだわ。
（房子、踊るやうに席を蹴つて立ち上ると、右手のドアーから出て行く。）
山村　俺は、馬鹿なことを云つちやつた。阿奴は、何をし出かすか知れない奴だ。

第三幕

三　池　山村の友人
房　子　山村の妻

帆の見える部屋

山村と房子、左手のドアーから出て來る。山村は外出姿。
房子　歸りには、どこかへお廻りになるんでせうね。
山村　うむ、廻る。
房子　どこへ？
山村　おい、買物は何んだつたけ。電池と、レコードと、オレンジと？
房子　矢車草。
山村　そんなもの、俺は買へないよ。少女みたいに、今頃花束なんか持つて歩いてゐられるものか。
房子　もう一度思ひ出に、花でも買つてお歸りになつたつていゝわ。
山村　それも、さうだ。
房子　前には、あなたは、いつでもあたしん所へ、せつせと花を持つて來て下すつたくせに、此の頃つてば、
山村　前は前、今は今さ。
房子　理窟ばつかり云つてないで、早く行つてらつしやい

よ。

山村　何んだか、お前は、俺を早く追ひ出さうとばかり考へてゐやがるな。前は、さうぢやなかつたが。

房子　前は前、今は今よ。

山村　今は何んだ?

房子　そんなこと、どうだつていゝわ。それより、早く行つて、早く歸つていらつしやいよ。

山村　(右手のドアーの方へ歩いて出て行かうとし、急に振り返つて)今は何んだ?

房子　まア、お馬鹿さんね。(と良人を押し出す)

山村　(出て行く)

房子　(良人を送り出して戻つて來ると、暖爐の上の雛罌粟の種子袋を取り上げ、栽培法を小聲で讀む)

纖々たるか弱い莖に、蕾の時には首をうなだれ、物思はしげにしてゐたのが、何の憚りもなく直立して咲き匂ふ。……(微笑しながら)まア、生意氣な花だわね。

(種子袋を暖爐の上へ投げ、何心なく窓から下を覗く。と、急に蒼白となり、狼狽へて窓から身を引く。)

あたし、どうしたらいゝかしら。あの方、きつとここへいらつしたんだわ。

(急いで右手のドアーから逃げようとし、また立ち停る。)

あたし、困つたわ。どうしようかしら。(迷ふ)……咲や、咲や。(と女中を呼ぶ)

女中　(右手のドアーを開ける)お呼びでございますか。

房子　あのね、お前、もう直き、三池さんつて方がいらつしやるかもしれないから、そしたら、お通ししちやいけないよ。

女中　はい。(退かうとする)

房子　あの、咲や。

女中　はい。

房子　(默つて一寸考へ込む)

女中　あのう、お通ししちやいけないのでございませう。

房子　えゝ、だけど、お前、失禮なことを云つちやいけないよ。

女中　はい。あのう、何と申し上げませう。

房子　あたしがゐるかと仰言るにちがひないから、そしたらね……。

女中　いらつしやいませんつて、さう申し上げれば宜しいんでございませう。

房子　えゝ、さう云つてよ。

女中　はい。(退く)

房子　あの、咲や。

女中　はい、(と云つて再び顏を出す)

房子　ぢや、お前、こゝへお通ししておくれ。
女中　お通し申すんでございますか。
房子　えゝ、お通ししておくれ。
女中　はい。
房子　だけど、あたしがゐるかつて仰言つたら、ゐないつて云つといて頂戴な。
女中　はい、さうして、お通し申すんでございますね。
房子　さうしてよ。
女中　はい。（退かうとする）
房子　あの咲や。
女中　はい。（とまた覗く）
房子　それより、あたしが出るわ。いらつしやれば、直ぐあたしに報らせて頂戴な。
女中　はい。
房子　それから、お前、あたしの傍に、いつでも従いてゐて頂戴。よくつて。
女中　はい。
房子　ぢや、早くお前、見て來てよ。
女中　はい。（退く）
房子　あたし、お逢ひしない方が、いゝんだけど。……
（左のドアーが開き、突然、三池が現れる。）
房子　あら。

三池　默つて上つて來て、失禮いたしました。
房子　………。
三池　こんなことをするのは、失禮だとは重々心得てゐるんですが、山村がゐるときでもかうだつたんですから、今更あらためるわけにもいきませんから、
房子　でも、あたしひとりのときは、そんなことをなさらない方が、有り難うございますわ。
三池　もつとも、今日は、僕は山村の出たのを見はからつて來たんですから、初めから、あまりいゝことをしてゐるんではありません。
房子　あたしは、今日はお逢ひしたかございませんわ。
三池　そんなことは、僕はどうでもいゝんです。だいたい、僕はあなたに、好意を持たれてゐると思つてゐませんし。
房子　ぢや、何にしに、默つて上つていらつしやいましたの？
三池　それは、僕だつて知りませんよ。しかし、上つて來ては、そんなにいけなかつたんですか。
房子　えゝ、一應、女中にさう云つてからにしていたゞきたうございますわ。
三池　そんなことをしては、あなたにお逢ひ出來ませんよ。僕は、あなたにお逢ひするために、はる〴〵日本へ歸つて來たんです。女中なんかに逢ふためぢやありません。

房子　……………。
三池　僕がこの部屋で、あなたとお別れしてから、どんなことを考へ續けてゐたか、どんな生活をして來たか、そんなことをお話するために來たんでもないんですが、しかし、そんなことを話し出すかもしれません。あなたは、僕と一緒に、こゝから逃げ出さうとなすつて、結局、僕があなたに瞞されて、ひとりぶら／＼させられたんですから、
房子　そんな前のことは、もう仰言らないで下さいましな。
三池　しかし、今のことを話すのは、僕は不愉快ですよ。あの頃は、まだあなたが、僕に靡くだけは靡いて下すつたんだから、あの頃の方が面白いんです。僕は、もう一度あなたを連れて、こゝから逃げ出すためにやつて來たんぢやありません。僕は、あなたが、その後どんな顔をして生活してゐらつしやるか、ちよつと覗きに來ただけです。山村だつて、そんなこと位、辛抱出來る筈ですよ。あの男が僕を苦しめた程度を考へたら、こんなこと位、何んでもないんです。
房子　それなら、山村のゐるときに、來て下さるといゝと思ひますわ。
三池　そりや、さうです。しかし、山村のゐるときよりも、ゐないときの方が、僕には都合がいゝんです。（ソファーに腰を下ろす）
房子　あなたに都合がお良ろしくつたつてあたしに都合が惡ければ、少し位はさしひかへ下すつたつて、
三池　房子さん。あなたは、僕をどんなに苦しめなすつたか、少し考へて下すつたら、そんなこと位、我慢が出來ないことはありますまい。僕は、あなたのお顔を見たいのをもうどれほど辛抱してゐたか、お分りにはならないんです。あなたは、僕があなたを嚇しに來たとばかり思つてらつしやるんですね。そんな風にだけは、思はないで下さい。もつとも、今頃になつて、あなたの所へやつて來たのは、嚇かす結果にはなりさうですが、しかし、あなたは、僕を愛すると仰言つたことが、たつた一度あるんですから、僕だつて、それを嘘だとは思へないのです。
房子　あたし、そんなことなんか、申し上げたことはございませんわ。
三池　そりや、そんなことを仰言りたいのは、分つてゐますよ。しかし、僕ははつきり覺えてゐるんです。さうでなくつて、どうしておめ／＼、あなたの傍へかうして舞ひ戻つて來るものですか。
房子　いえ、あたし、そんなことなんか。
三池　いや、もうそんなこともどうでもいゝんです。あなたが、僕を愛すると仰言らうが仰言るまいが、だいいち、

今あなたは僕を愛してゐては下さらないんだから、同じことですよ。

房子　でも、あなたは、そんなあたしの云はないことを、云つたと仰言つたりなさるなんて、随分失禮だと思ひますわ。

三池　それなら、僕は申しますが、あなたは、僕と一緒に逃げようとなすつたとき、何と仰言いました。

房子　あたし、何んと申しました？

三池　愛すると仰言いました。

房子　あたし、そんなこと。

三池　ぢや、あなたは、よほど昂奮してらつしやたんです。だけど、僕は、あなたが昂奮してゐらつしたかどうだか、そのときは分りませんでしたよ。分つてゐたら、あんな馬鹿な目には乗らなかつたんだが。

房子　あのときは、あなたが、あたしに、あんな出鱈目を仰言つたものだから、それで。

三池　それで、誘惑されかゝつたと仰言るんでせう。

房子　えゝ、それに、あのときは、あたしも若うございましたわ。

三池　いまはお幾つです。あのときから、たつた三年よりたつてはゐませんよ。

房子　三年なんて、もう一昔でございますわね。

三池　なるほど、あなたも、よほどお上手になりましたね。それで結構です。もう、どうか、愛するなんて、仰言らないで下さい。今度仰言つたつて、僕は、あなたが昂奮してらつしやるんだと思つてゐますから。

房子　（笑ふ）まア、ぢや、もう一度云はせていたゞきませうか。お宜敷つて？

三池　どうぞ、御自由に。しかし、僕だつて、あれから三つも年をとつてゐますから、そのおつもりで願ひます。

房子　でも、三つもお年寄りになりますと、黙つて、他人(ひと)の家へお上りになるやうになりますのね。

三池　はつはつはつはつは。いや、こりや、僕の愛人の家なんです。昔から、戀してゐるものは、勝手口か、さもなきやア、窓から忍び込んだものですよ。

房子　まア、面白くおなりになりましたわね。前には、むづかしいお顔ばかりなすつてゐらつしやいましたのに。

三池　これも、あなたのお力ですよ。僕は、かうして、三つ年をとつても、八つ年をとつても、いつまでも獨り者で、あなたの窓から忍び込んで、一生あなたに叱られて、歸り續けてゐるにちがひないんでせうが、その中に白毛が生えて、今度は窓から落つこちるやうになるんでせうね。

房子　………。（急に悲しげな顔になる）

三池　まア、これも、仕方がありません。せめて、山村のゐないときだけでも、かうしてちよつと、休ませておいて下さいませんか。僕は他の慾は云やしません。これだけで結構です。

房子　(ちつと三池を眺めてゐる)　ほんとに、あなた、お變りになりましたのね。

三池　さうですか、自分でも、何んだか、こりや、ちよつと俺も變つたなアと思ふときがありますよ。もつとも、あなたのことを思ひ續けてゐることだけは、一向に變りませんが、これも何とかしないと困りますからね。だいいち、こんな風だと、僕が困るだけぢやありませんよ。あなたもお困りになるだらうし、山村だつて困るだらうし、皆、誰も彼も困るんだから。

房子　ほんとに、あなた、いゝ奥様をお持ち遊ばしたら？

三池　あなたから、そんなことを云はれると、あまり嬉しかありませんが、しかし、さうする方がいゝですね。あなたなんかに、一生思ひをかけてゐたつて、つまらないんだが、どうも此奴だけは、はつはつはつは。

房子　ほんとに、さうでございますわ。あたしなんかを、そんなにお思ひ下すつたつて、つまらないんですもの。そりや、あたしは、嬉しいには嬉しゆうございますけど、あたしなんかより、もつといゝ方が、いくらだつて、ごろごろしてゐるんですもの。

三池　いや、さうでないから困るのです。何も、好きこのんで、わざ〳〵、こんな馬鹿な眞似をしてゐるものですか。

房子　でも、美代子さんだつて、まだ結婚なすつていらつしやいませんし。

三池　あゝ、さうでしたね。しかし、僕と美代子さんが結婚したとしても、幸福になるためしがありませんよ。

房子　どうしてゞございますの。あんなにいゝ方ぢやございませんか。

三池　いや、僕があなたに失戀し、美代子さんが山村に失戀して、その二人が結婚したとしたら、いつたい、そこから、どんな花が咲くと思ひます。きつと眞黒な花が咲くでせう。

房子　でも、あなたは前に、美代子さんを愛してゐらしたんぢやありませんか。

三池　そりや、僕だつて、とき〳〵は美代子さんのことを思ひ出すこともありますよ。しかし、それは思ひ出すと云ふ程度のもので、こんなに窓から忍び込んでまで、逢ひたいと思つたことはありませんね。

房子　山村は此の頃、美代子さんのことばかり申してをりますの。

三池　そりや、山村が云ふんでせう。僕は云つたことはありませんよ。
房子　（笑ひながら）山村つてば、何かと云ふと、もう直ぐ美代子さんのことですの。
三池　そんな風になりましたかね。
房子　えゝ、もう、初中終（しよつちう）なんでございますよ。もう、仕舞ひには、傍で聞いてゐたつて、をかしい位なんですの。
三池　ぢや、その半分でも、あなたが僕のことでも云つて下されば。
房子　えゝ、ですから、あたし。
三池　云つて下さるんですか？
房子　えゝ、あたし、腹が立つもんですから、いつもあなたのことを云ひますの。
三池　ぢや、何んにもなりませんね。あなたが僕のことを云ひ出して、それで山村が腹を立てゝ美代子さんのことを云ふんだと、これはちよつと目出度いことになるんですが。
房子　でも、此の頃は、あたしからも申しますわ。
三池　いや、それは信用出來ません。
房子　いゝえ、さうぢやございませんの。あたし、あなたのことを、時々思ひ出して困ることがございますわ。
三池　それは、昂奮してゐらつしやる時のことですよ。
房子　あら。
三池　でなきア、あなたは、山村と僕とを間違へてゐらつしやるんです。
房子　まア。
三池　もう、そんな話はよさうぢやありませんか。僕はもう歸らなきアなりません。こんな所にぐづ／＼してゐれば、また山村にでも歸られたら、周章てなきやアなりませんからね。
房子　いゝんでございますよ。山村は、今頃はきつと、美代子さんの所へ行つてゐましてよ。
三池　山村は、美代子さんの所へ出かけることがあるんですか。
房子　えゝ、えゝ、もうこの頃は。
三池　どうも、をかしな男だな。
房子　あら、あたし、お茶も差し上げませんで、御免下さいませ。
三池　いゝんですよ。僕はもう歸らなけりやならないんですから。
房子　でも、もう少しゐらつして下さいましな。あたし、何もすることがなくつて淋しくつて、仕樣がないんですから。
三池　しかし、僕は、そんなことはしてゐられなくなつた

んです。何んだか、急に落ちつきがなくなり出して、さやうなら。

房子　まア、いゝぢやございませんか。

三池　しかし、僕が、これ以上こゝにゐたつて、何んにもならないぢやありませんか。

房子　いゝえ、そんなことはございませんわ。あたし、あなたにゐて戴くと、たいへん心丈夫でございますわ。

三池　いけませんよ、僕がこゝにゐては。

房子　いゝんですの。いゝんですの。

三池　あなたは、何んだか、昂奮してゐらつしやるんです。

房子　だつて、もうあなたは、來て下さらないんでございませう。

三池　えゝ、多分、來られないと思つてゐます。

房子　ぢや、どうぞ、もう暫く、あたしと一緒にゐらして下さいましな。

三池　（暫く考へて）　いや、失禮いたしませう。さやうなら。

房子　あら、どうしてゞございますの。

三池　いや、何んでもありません。

房子　あなたは、美代子さんの所へ、お行きになりたがつて、ゐらつしやるんですのね。

三池　どうしてそんなことが、お分りになりました？

房子　だつて、あたしが、美代子さんのことを云ひ出してから、急に御樣子がお變りになりましたわ。

三池　いや、僕は、山村が美代子さんの所へ行くと聞いたからには、承知が出來ないんです。

房子　でも、それは山村の勝手ですわ。

三池　勝手ぢやありません。それは、あまりに勝手すぎる。

房子　だつて、行きたいものは、行かしておかなければしやうがありませんわ。

三池　房子さん、あなたは、そんなことを云つて、平氣でゐられるんですか。

房子　えゝ。

三池　所が、僕は默つてゐられませんね。あの男は、僕から美代子さんを奪ひ、あなたを奪ひ、それから、また、僕がたゞ一人の結婚の可能性のある美代子さんを奪はうとするなんて。僕は、今度こそ、美代子さんを阿奴から取つてやる。

房子　三池さん。

三池　さやうなら。

房子　待つて下さい。

三池　いや、僕は、もうこゝにゐたつて、始まりません。

房子　あたし、あなたが行つてお了ひになつちや、いやでございますわ。

三池　しかし。
房子　どうぞ、こゝにゐて下さい。
三池　………。
房子　もう、いらつしやらないのでございませう。
三池　………。
房子　ね、あたし、あなたに、お詫びいたしますわ。
三池　あなたは、僕を、愛してはゐらつしやいません。
房子　いゝえ、違ひます。
三池　ぢや、あなたは、僕を愛してゐて下さるんですか？
房子　………。
三池　ぢや、さやうなら。
房子　あたし、あなたを、どんなにお慕ひしてゐましたか、ちつとも御存知ないんですわ。
三池　前にも一度、僕はそんなことを、あなたから云はれたことがあつたんです。
房子　でも、あのときは、あたしだつて、どうしていゝか分らなかつたんですもの。
三池　ぢや、今は、お分りだと云ふんですね。
房子　えゝ。
三池　それなら、あなたは、僕をどうして下さるおつもりなんです？
房子　あたし、あなたのお傍へ、參らせていたゞきますわ。
三池　僕には、もうそんなことは、信じられなくなつてゐるんです。
房子　でも、あたし、こんなに申し上げるまでには、いろいろ迷ひもいたしましたわ。
三池　前のときは、僕から逃げて下さいとお願ひしたのに、今度は、あなたから、そんなことを云ひ出すなんて、山村もよほどあなたを虐めたものと見えますね。
房子　えゝ、山村は、あたしを、そりや虐めましたわ。でも、あたしがあなたと一緒に、逃げようとしたのを知つたからですわ。
三池　ぢや、矢張り、あなたと山村とを、こんなにして了つたのも、僕の罪だと云ふんですね。
房子　そりや、少し位は、そんな風にお考へ下すつたつて……。
三池　僕は、自分を今迄可哀相な奴だと思つてゐたんですが、しかし、良く考へてみると、山村も氣の毒な男だつたんですね。
房子　………。
三池　山村だつて、あなたを愛してゐるにちがひはないんですよ。
房子　いゝえ、山村は、もうあたしを、愛してゐてはくれませんわ。

三池　あなたが、そんなことを仰言る所から見ると、何んだか、口惜しまぎれに、僕と一緒に逃げようとしてゐらつしやるやうで、僕には、ちつとも有難くはないんです。

房子　あなたは、卑怯な方ですわ。

三池　そりや、僕だつて、卑怯にはなりますよ。前には、あれほどの覺悟で逃げようとしたのに、あなたに瞞されて了つてからは、空氣の脱けた風船みたいになつて了つて、ぶらりぶらりとやつてゐるんです。もう、膨らみはしませんよ。

房子　もう、お歸り下さいまし。あなたは、あたしを、侮辱しにいらつしやつたのです。

三池　さうです。僕は、僕を瞞したあなたを、侮辱しにやつて來たのです。

房子　お歸り下さい。

三池　歸ります。しかし、あなたは、今僕を歸しては、完全に侮辱されるんですよ。僕は、山村から、あなたを今日は取り返したのと同じ結果なんですから。

房子　あなたの誠意は、そんな所にございましたのね。

三池　いや、僕には、もう誠意なんか、そんなものはありません。あなたは、僕から、誠意までとつて了つたんだから。

房子　あなたは、あたし達の家庭を、お壞しになつた癖に、まだあたし達を笑はうと思つてらつしやいますのね。

三池　そんなことは知りませんよ。しかし、僕が今日あなたを侮辱しに來たために、あなたは、破れかけた山村との愛を、また繋ぎとめることが出來たでせう。山村が歸つて來たら、さう云つておやりなさい。今日、三池がやつて來て、いろいろなことを饒舌つていつたが、あたし、みんな跳ねつけてやつたつて。

房子　あなたは、どうしてそんなにまで、お變りになつたんでせう。

三池　あなたは、そろそろ、僕に同情し始めたんですね。

房子　あたし、ほんとに、御同情申し上げますわ。

三池　いや、もう結構です。ぢや、さやうなら。

房子　…………。

三池　（左手から出ようとする）

房子　三池さん。

三池　（振り返る）

房子　あたし、あなたの所へ、一度參らせていたゞきますわ。

三池　いけません。

房子　いやです。

三池　いや、來ちやいけません。

房子　でも、あたし、一度お伺ひしたいんです。

三池　ぢや、山村と一緒にいらつしやい。

房子　…………。

三池　（出て行く）

房子　（ぼんやりと立つてゐる。間）

女中　（左から現れる）奥様、三池さまは、ちつともいらつしやいませんが、どうなすつたんでございませう。

房子　あ、もう、いいのよ。

女中　さうでございますか。（退かうとする）

房子　あの咲や、あたし、直ぐこれから出かけるから、下駄を出しておいて頂戴な。

女中　はい。（退場）

房子　（窓から外を覗き三池の行衛を眺めてゐる）

――幕――

愛の挨拶

ある協會の應接室。
テーブル。
長椅子。
麻雀臺。
窓。
庭。
校正係甲乙、二人。甲が聲を上げて校正刷りを讀み、乙が原稿を見詰めてゐる。

甲　爛子は尖鋭な病人だつた。彼女は朝起ると爪を磨いた。彼女は一日に一足づつ新らしい足袋を取り變へた。彼女は自動車の警笛と犬の鳴き聲とに敏感だつた。彼女は化粧をすると名妓のやうに冴え始めた。彼女は耳を磨くのに專念した。彼女は果實と菓子とを常食した。彼女は機械のやうな速力で讀書した。
乙　をかしな女だね。（と笑ひ出す）
甲　奇拔な女だね。
乙　こんな女はゐるものか。
甲　此の小說のモデルは、さつき二階へ來てゐたよ。
乙　ははア、あれか、斷髮だろ。
甲　違ふ。
乙　斷髮だよ。
甲　違ふ。
乙　斷髮だ。
甲　ぢや、もう、直き、こゝへ現れるから、見てるがいゝ。
乙　斷髮と云ふのは、髮を切つてあるんだぜ。
甲　定つてらア。
乙　それなら、あの女は斷髮だ。
甲　違ふ。
乙　ぢや、俺が見て來てやる。
（乙、退場。）
（甲、ひとり校正刷りを默つて讀み、途中、大聲で笑ひ出すとまた讀み續ける。）
（一人の男、突然、空氣銃を持つたまゝ、一匹の雀をぶら下げ、庭の中から飛び込んで來る。）
男　雀がとれたッ。
甲　とれた？
男　とれたッ。
甲　どら／＼。
男　とれた。とれた。（と叫びながら、椅子を突き倒し、

（右の入口から飛び出て行く）

甲　馬鹿な奴だ。雀が何んだ。あんな奴は、鳩でもとつたら、狂人になる奴だ。

（乙、右の戸口から飛び込んで來る。）

乙　斷髮だ。

甲　斷髮だ？

乙　斷髮だ。

甲　噓を云へ。

乙　髮が切つてある。

甲　ぢや、俺が見て來てやる。

（甲、退場。）

（乙、甲に代つて校正刷りを眺め出す。途中、急に、大聲で笑ふ。）

（女中、左手からお茶を持つて這入つて來る。）

女中　（暫く、ぼんやり立つてゐてから）お客さまは？

乙　知らないよ。

女中　ぢや間違ひかしら。どうしたんでせう。

（乙、また校正刷りを見ながら、噴き出して笑ふ。）

女中　こゝへ、お客さまが來てゐらつしやつたんでせう？

乙　知らないよ。

女中　でも、こゝにゐるつて仰言つたんですが。

乙　（急に女中を仰ぎ）僕は默つて君を愛してたんだが、君はちつとも、何とも云つてくれないね。

女中　あのう、もうお客さまは、お歸りになつたんですか。

乙　おい君、冗談ぢやないんだよ。

女中　あなた、さつきからこゝにゐらしやいましたの？

乙　お茶は僕が飲むから、心配しなくつたつていゝんだよ。

（女中の茶をとつてぐつと飲む。）

（二人の青年作家が煙草を吸ひ乍ら左手から這入つて來る。）

A　とにかく、あの男の書くものは、古くさくつて、新らしくつて、古くさい、と云ふ所があつて、一寸面白い。

B　それに、あの男は、どこか親父も阿母もゐない所から、生れて來た、と云ふ感じがするね。

A　さうだ、さうだ。確にあの男は、親父も阿母もゐない所から、出て來たんだよ。

（A、B、同時に聲高く笑ひながら、庭の方へ去る。）

（右手から、甲、駈け込んで來る。）

甲　斷髮ぢやないぞ。

乙　斷髮だよ。

甲　斷髮ぢやない。

乙　斷髮だ。

甲　あれは、一寸、前の髮が切つてあるだけさ。

乙　そら見ろ、だから、斷髮だと云ふんだ。

甲　断髪ぢやないぢやないか。断髪と云ふのは、前も後も、全部すつかり切つてあるのが断髪さ。

乙　いや、断髪と云ふ字は、髪を切ると書くんだよ。

女中　お客さまは、こゝへゐらつしやるんでせうか。

甲　お客さまつて、誰のこつたい？

女中　私、知らないんですが。

甲　君が知らなきや、僕だつて知らないさ。

女中　さうですわね。

甲　そりや、さうだよ。

（女中、空虚の盆を持つたまゝ退場。）

甲　断髪と云ふのは、かう前も後も、すつかり切つたのが断髪を云ふんだよ。そんなことも知らないで、断髪の女を見に行くなんて、図々しいね。

（甲、乙、再び校正にとりかゝる。）

甲　さア、やるよ。

乙　よし来た。

甲　（読み上げる）私、あなたと結婚したら、房々した二疋の大きな猛犬を飼つて、それから九官鳥を一疋と、あなた、あなたは羊がお嫌ひなの。私は私の所へ来る戀文を、一日に三つづつ羊に食べさせて、それから私はあなたの傍で編物するの。私はフランス語を勉強しなきアならないわ。私は辞引を読むのが大好きなの。私は假名使ひの名人よ。あゝさう、私は聲楽のお稽古に通はなきアならないんだわ。私はアルト、私の聲は一番有望だつて、先生が賞めるのよ。カッコ、カッコ、君でも嫣てに乗るのは好きですね。カッコ、えゝ、さう、私、先生が私に戀をしてゐてくれるといゝと思ふの。私はあなたを愛しながら、先生の所へ行つてゐて、先生から怨まれて、歌を唄はせられるとするでせう。私は肺が悪いから、歌へば歌ふほど死んで行くの。さうして私、死にたいの。ね、私には劒難の相があると思はなくつて。私は誰かにきつと殺されると思つてゐるの。

（そのとき、前髪を切つた嫺子が右手から這入つて来る。）

（甲、乙、同時にその方を向き、一寸辞儀をする。）

（嫺子は會釋を返すと椅子に腰を降ろし、傍にあつた新聞を読み始める。）

（甲、乙、校正を続けて行く。）

甲　秋が来ると、嫺子は小聲で淋しい歌を歌ひ出した。彼は亡くなつた妻の温さを一層深く思ひ出した。嫺子は彼の憂欝な顔に敏感になり出した。彼は嫺子の默つて爪を磨いてゐる様子が重苦しくなつて来た。

（嫺子、新聞から眼を上げ、甲の聲に敏感に耳を傾けてゐる。）

甲　彼は坂道の頂上にある彼らの窓で、秋風に吹かれながら、爛子とそれ以上ゐることは、とても我慢が出來なくなつた。
爛子　ちよつと、あのう、それ、木山さんの小説でございますの？
甲　えゝ、さうです。
爛子　おや、その校正、私にさせて下さいませんか。
甲　でも、これは初校ですから、大變免倒なんです。
爛子　いゝの。私、間違ひなくやつておみせしましてよ。
甲　おや、もう直ぐこれを濟ませて了ひますから、さうしたら、もう一度見て下さい。
爛子　いえ、私、その初校の方を見たいんですの。
甲　さうですか、では、濟みませんが、一つお願ひしませうか。
（甲、乙、校正刷りを爛子に渡して右から退場。爛子、ひとり校正を讀んでゐる。離れの方からスパニシユ・セレナードが聞えて來る。爛子、時々校正刷りに手を入れる。）
（間。）
（左手から編輯主任が昂奮しながら、女優につきまとはれて這入つて來る。）
主任　勝つたぞ。勝つたぞ、滿杆だ、萬通パイで、チンイツソーさ。カンチヤンカイホと來た。親で一千、どうだい。おごれ。（と肩を叩く）
女優　あなたがおごりなさいよ。私、今夜、あなたに、ホテルインペリアルを觀に連れてつていたゞく約束よ。
主任　俺の滿杆も半年振りだ。總ポンのチンイツソーなんて。俺は今日は、こりや、どうかしてゐるんだ。カンチヤンカイホと來た。いゝか、親で一千、おごれ。
女優　あなた、そんなに狂人みたいになつちや、奥樣に叱られてよ。
（右手から庶務係が這つて來る。）
主任　おい、今日は滿杆だ。
庶務係　滿杆だつて？
主任　うむ、萬通パイで、チンイツソーさ。カンチヤンカイホと來た。親で一千。
庶務係　俺も今、大澤をやつつけて來た所さ。敵飛車の頭へ桂と打つて、角道を塞いでおいて、王手と來た。所が、王の頭に、
主任　それも俺のは、總ポンなんだ。後四つで流れる奴を、ツーモでやつて、
女優　あなた、ホテルインペリアルを御覽になつて？　とても素敵なんですつてね。
庶務係　所が、向ふは王の頭に桂があつて、こつちの桂が

食へないのさ。後へ引けば、飛車が効いてゐる所へ持つて來て、角道が塞がれてゐると來てゐるんだから。

主任　何しろ、俺のは總ポンのチンイッソーで、親と來てゐて。

（女中、右手から。）

「河野さん、お電話でございます。」

（主任、周章てゝ右へ退場。）

庶務係り、左へ退場。）

（女優、どちらへ行かうかと暫く迷ひ、右へ退場。）

（空氣銃の音。自動車の警笛。）

（左手から俳優一人、セリフを呟きながら俯向いて這入つて來る。）

「なアに、腹の中では、世間並に結婚したくつて溜らないのかも知れませんよ。上べでは超然としてゐてもね。なアに、腹の中では、世間並に結婚したくつて溜らないのかもしれませんよ。上べでは超然としてゐてもね。なアに、腹の中では、結婚したくつて……」

（左手へ退場。）

（庭の方から、青年作家、Aが這入つて來る。燗子を見ると、つかつかと傍へ寄る。）

A　やア。

燗子　あら。（一寸周章てる）

A　暫く。

燗子　どこへ行つてらつしやいましたの？

A　一寸旅行をしてたんです。

燗子　さう。今日木山さんにお眼にかゝるなんて、隨分不思議ですわね。

A　どうしてです？

燗子　あなたは、不思議ぢやなかつたのかもしれないけど。

A　僕は、あなたが來てゐらつしやるだらうと思つて、來たんぢやないんですよ。

燗子　そりや分つてゐましてよ。だから、不思議だと云ふんですわ

A　その後、あなたはお達者ですか？

燗子　まだあなたは、私の健康なんか、氣にしてゐらつしやいますの？

A　これは、僕の挨拶なんですから、今頃から、そんな所へ引つかゝるもんぢやありませんよ。

燗子　ほんとに、さうでしたわね。あなたも、その後お達者ですの？

A　有り難う。

燗子　御元氣らしくつて、何よりですわ。

A　有り難う。あなたと別れてから、もう幾月になるんですかね。

燗子　私、もう此の頃、それは忘れつぽくなりましたのよ。
A　ぢや、僕と競爭してゐたわけですね。
燗子　あら、さうでしたの。
A　いまさら、そんなことに驚かなくたつて、いゝですよ。
燗子　驚いたんぢやありませんわ。これも、御挨拶の代り位にはなりますわ。
A　有り難う。
燗子　どちらへ御旅行していらつしやいましたの？
A　もうそんな挨拶をするのは、濟みましたよ。
燗子　あら、さうでしたわね。御免なさい。
A　あなたも、隨分忘れつぽくなつたもんですね。
燗子　えゝ、お蔭さまで。
A　結構です。
燗子　まア、今日は久し振りにお逢ひしたのに、どちらも挨拶ばつかりで。
A　あなたもですか。
燗子　御覽の通りですわ。
A　それで、まア無事に、どちらも此の日が過して行けると云ふものですよ。しかし、あなただつて、僕を愛してゐなすつたんぢやないんだし、さう／＼僕に、氣恥しい思ひをさせなくたつていゝでせう。
燗子　それは、私の云ふことですわ。
A　しかし、僕が云つたつていゝぢやありませんか。何か、お差し閊へがあるんですか。
燗子　そんなこと、今頃申し上げたつて、何んにもなりませんわ。
A　ぢや、もう何もかも、一層のこと、今日は挨拶ばつかりにしときませう
燗子　えゝ。その方が結構よ。
A　さてッと。
（ふと燗子の前の原稿を見、一寸取り上げ。）
あなたは、此の僕の小説を讀んだんですか。
燗子　えゝ、校正させていたゞきましたの。
A　（苦笑しながら）どうも、それは、すみませんでしたね。何か御感想はありませんでしたか？
燗子　あなたは、私を、こんな女だとお思ひになつてゐたと云ふことだけが、はつきりいたしますわ。
A　しかし、僕があなたを、そんな風なあなただと思つてゐたッて、別にあなたを不幸にしたわけではないでせう。
燗子　あなたは、さうお思ひになつてゐるらしゆう見えますのね。
A　ぢや、あなたは、これを讀んで、不幸をお感じになつたのですか。
燗子　もう今日は、どちらも御挨拶だけにしとく筈だつた

A　のよ。

A　あなたは、これを讀んでも、挨拶だけでお濟ませになれますね。

爛子　えゝ。だつて、あなたが、お書きになつたものなんですから、私がとやかく云つたつて、どうにもならないぢやありませんか。

A　その程度なら、僕はこのまゝ出してしまひませう。

爛子　どうぞ。

A　校正まであなたにさせて、どうも少し、あなたはたゞり過ぎた傾きがありますね。もう直ぐ、あなたも幸福になりますよ。

爛子　その御挨拶だけは、恐れ入りますわ。

A　その小說の中に、誤植が幾つほどありました？

爛子　此の小說は、私には皆誤植なんですから、幾つだなんて、そんなことは分りませんわ。

A　しかし、あなたが校正をなすつた以上、誤植の罪はあなたの方にあるんです。その責任だけは、あなたが持つのが當然でせう。（右手から不意に女優が現れる）

女優　あら、木山さん、いついらつしやいましたの。私、それは澤山々々お話したいことがありますの。ホッホッホッホッホッ、あのね、今、お電話をある所からいたゞいたのよ。それはそれはいゝ所からなの。あゝ、嬉し。ホッホッホッホッ。

（笑ひながら、急に右手の方へ引き返す。とまた急にくるりと木山の方へ向き返る。）

女優　あのね、木山さん。それはそれは面白いお話がありますの、あのね、夕べお友達が私の所へ來ましたの。所が、その人のお羽織の背中に、誰かに抱かれた跡がくつきりついてゐるんでせう。私、默つてお羽織を脫がせて默つてアイロンをかけてやりましたの。さうしたら、まア、その方の赤い顏つたら、ホッホッホッホッホッ。

（首を縮めて笑ひながら右手へと引き下る。）

A　あの女優について、何か御感想がありましたか？

爛子　何だか、あなたは、あの女優に火を點けられてゐらつしやるやうな形跡が見えましたわ。

A　その感想は平凡ですよ。

爛子　もつとも、あなたが、火をお點けになつたのかもしれないけど、

A　いや、女優と云ふものは、火を點ける練習を、いつでもやつてゐなければ、さアと云ふときの間に合はないものなんですよ。だから、あの女優は、あゝしてマッチをいつでも袂の中へ入れてゐて、男と見ると、煙草だと思つて了ふ練習をやつてゐるのです。

爛子　ぢや、あなたも、煙草にされたわけなのね。

A　そりや、いづれ、煙草ぐらゐには思つてゐてくれますよ。それより、あなたは、僕を何んだと思つてゐたんです？　まさか、僕を、此いつは、いゝ自動車だと思つてゐたんではないでせう。

燗子　えゝ、えゝ、そんな御勿體ないことを、私がどうして思ふもんですか。

A　ぢや、あなたは、あれでも、まだ僕を愛してゐたんだと仰言るおつもりなんですね。

燗子　えゝ、さう申し上げたつて、別にあなたのやうに、さう私は困りはいたしませんわ。

A　僕のやうにつて？

燗子　えゝ、あなたのやうに。

A　なるほど、あなたは、僕があなたを愛してゐたと云ふことを、そんなに僕に云はせたいと云ふお氣持ちだけは分りますが、しかし、まア、今日は、此の位ゐな挨拶にしときませう。いまさら、僕があなたを愛してゐたと云つたつて、始まらないぢやないですか。

燗子　そりや、さうですわね。でも、私があなたを愛してゐなかつたと、さうきつぱりあなたがお思ひになりたいお氣持ちも、よく私には分りますわ。

A　ははア。そりや、何んですか。僕があの女優の煙草になりたいからだと、あなたは仰言りたいんでせう？

燗子　まア、そんな聯立方程式も造つておいたつて、いつかはあなたのお役にたちましてよ。

A　所が、此の男、元來殺風景な代物で、あなたの愛の方程式さへ解きかねたほどの頭の悪さと來てゐるんだから。

燗子　でも、私の方程式は、ちよつと、あなたに難かし過ぎたのかも分りませんわ。

A　さうなんだ。あなたの方程式は、いつでも間違ひだらけで、僕にはさつぱり分らなかつた。第一、愛してもゐない癖に、愛、愛、愛と云ふやうな、そんな答への出て來る方程式は、きつとどこかに間違ひがあるに相違ないのです。しかし、今から、その檢算をやることだけは、御免ですよ。

（女中左手から顔を出す。）

「木山さん、お電話でございます。」

A　さうら、君、方程式がかゝつて來た。

（A、右手から笑ひながら退場。）

（アニトラダンスが聞えて來る。）

（燗子、淋しげに沈み込む。）

（間。）

（B、庭の方から現れる。）

燗子　いらつしやいませ。

B　いつから、お待ち？

燗子　さつきから、私、あなたにお電話をおかけして、それから、直ぐこゝへ參りましたの。

B　さう、お疲れになつたでせう。少し顔色がいけませんね。

燗子　私、二日ほど風邪をひいて寢てゐましたの。多分、それでだらうと思ひますわ。

B　ぢや、今日なんか出ていらつしやらなくても、いゝんですのに。

燗子　でも、もう隨分お待たせしたんですもの。もうすつかり良くなりましたのよ。

B　また、さう云つて、どつと寢るんぢやないでせうね。

燗子　大丈夫ですわ。それより、私、いま木山さんに逢つて了つて、困つて了ひましたの。

B　矢張り、木山と逢ふのは、いけませんか。

燗子　そりや、ちよつと不愉快ですわ。

B　しかし、此の間、木山は僕とあなたとがこんなになつたのを、喜んでくれましたよ。

燗子　ぢや、木山さんは、もう知つてゐるんですか。

B　そりや知つてゐますとも。

燗子　でも、さつき、そんなことはちつとも顔色に出しませんでしたわ。

B　あなたの前では、あ奴はそんな顔をしないかもしれませんね。でも、僕にはよくあなたのことを云つてひやかしますよ。

燗子　まア、面白いわね。

B　お困りでせう。

燗子　あら、いやだ。私、木山さんのことなんか、今日逢つたからこそ思ひ出したやうなものゝ、別にとりたてゝ云ふほどのことでもないぢやありませんか。

B　僕には、さう思へませんね。

燗子　いやな方ね、あなたは。

B　だつて、そりや、さうでせう。

燗子　もう木山さんの話はよしませうよ。木山さんは、ただ私を愛してゐなかつたと云ふだけぢやありませんか。

B　そして、あなたが、愛してゐたと云ふだけでねえ。

燗子　えゝ、そりや、あのときは、愛してゐたこともありましたわ。

B　今もだ、と仰言つちやどうですか。

燗子　私、前もつて申し上げておきますが、私は、いたつて健忘症なんですから、そのことだけは、記憶しておいて下さいましな。

A の聲　おい。

B　おい。

A の聲　もう這入つても、いゝのかい？

B　もう一寸、待つてくれ。
Aの聲　よし來た。
B　ああ云ふ奴だ。
燗子　木山さん、聞いてゐたのかしら。
B　あの男は、聞きもしませんよ。
燗子　ぢや、失敗つたわね。
B　君も、さう云ふ人なんだから。
燗子　だつて、私にしてみれば、聞かれる方が面白いわ。
B　ぢや、こゝへ、木山を呼びませうか。
燗子　そりや、あなたのお勝手よ。
B　ぢや、呼びますよ。
燗子　どうぞ。
B　おい、木山、木山。（と呼ぶ）
A　おい。（と云つて這入つて來る）
B　失敬したね。
A　うむ、時間は、大切にするがいい。
燗子　お電話はどこからでしたの？
A　自分の愛人の前で、さう云ふことを氣にする人が、ありますか。僕の仕込みのほども、知れるぢやありませんか。少しはお愼しみなさるがいゝ。
燗子　だつて、私だつて、時には照れることがありましてよ。さう〳〵あなたのやうに私を惡く思はなくつたつて、いゝでせう。
A　君が、照れるなんて、そんな優しい所を見せられては、困りますね。
B　今度はほんとに愛し出すか。
A　さうだ。だから、君は用心をするがいゝ。
燗子　そんなことになり出したら、それこそ私、方程式の立て方がなくなるわ。
A　いや、君の方程式は、初めから間違つてゐるんだから。
燗子　だつて、私には、もうちやんと、立派な答へが出て來てゐますのよ。
A　檢算は、もうする必要がありませんね。
燗子　ええ、どうぞ、いつでもなすつて下さいまし。
A　ぢや、ひとつ、麻雀でもやつて祝はうか。
A　よし、やらう。
燗子　だつて、これだけぢや、ひとり足りないわ。
A　ぢや、電話で、僕も呼び出すかな。
燗子　え、さうなさいまし。お呼びなさいな。
A　いや、それより僕は、かうして二人の邪魔でもしてゐる方が、いいらしい。
燗子　そんなことをなすつては、なほ二人の仲が良くなつていきましてよ。
A　もうそんな說明はしなくつたつて、ちやんと方程式に

出てゐますよ。さア、もういゝ加減に、こゝから二人とも出て行つてくれ給へ。

（女優、右手から現れる。）

女優　木山さん、今日はお稽古はありませんの。

A　あ、さうだ。あるよあるよ。準備にとりかかつてくれ給へ。こゝでするから。

（女優、去る。）

爛子　ぢや、私たち、これで失禮しましてよ。

A　どうぞ、御自由に。しかし、これからこゝで、僕と君との前の生活を書いた芝居の練習をやるんですが、良ければ、お二人とも見ていつてくれ給へ。いま來た女優が、爛子さんになるんだから。

爛子　あら、さう。ぢや私、拜見さしていただくわ。

B　しかし、僕がそれを見せられるのは、因果だね。

A　いや、少々は、こんな辛抱もしとくがいゝさ。前の轍の跡を踏まないやうにね。

（女優、再び男優と一緒に蓄音器を持つて右手から現れる。）

A　さア、ぢや、やり出してくれ給へ。

（女優と男優と、夫々Aの方を向いて椅子につく。A、蓄音機をかけ始める。カンツォネッタ。）

女優　もう秋になつたのね。

男優　うむ。

女優　あたし、輕井澤の霧のいつぱいに擴がつた中で、あなたと一緒に暮してみたいわ。

男優　僕は、北京へ行きたくなつた。

女優　もう輕井澤の避暑客も歸る頃ね。

（間。）

男優　雨かな？

女優　雨よ。

男優　何んだか、ぞく／＼寒くなつて來た。

女優　私、あなたと結婚したら、房々した二疋の大きな猛犬を飼つて、それから九官鳥を一疋と、あなた、あなたは羊がお嫌ひなの。それから、私の所へ來る戀文を、一日に三つづつ羊に食べさせて、それから私はあなたの傍で編物するの。私はフランス語を勉强しなきやならないわ。私は辭引を讀むのが大好きなの。ああ、さう、私は聲樂のお稽古に通はなきアならないんだわ。私の聲は一番有望だつて先生が賞めるのよ。

男優　君でも煽てに乘るのは好きですね。

女優　えゝ、さう、私、先生が私に戀をしてゐてくれるといゝと思ふの。私はあなたを愛しながら、先生の所へ行つてゐて、先生から怨まれて、歌を歌はせられるとするでせう。私は肺が惡いから、歌へば歌ふほど死んで行く

の。私、さうして死にたいの。ね、私には劒難の相があると思はなくつて。私は誰かにきつと殺されると思つてゐるの。

男優 あゝ、あゝ、今夜の煙草は、何んて不味い煙草だらう。

女優 あなた。（と男優を睨みながら） あなたは、私を愛してゐて下さるの？

男優 いや、僕は、今夜は、此の煙草が不味いと云つてゐるんです。

女優 あなたは、私を愛してはゐないんです。

男優 僕には、あなたの愛と云ふことが分らないんだ。

女優 噓よ、噓よ、あなたは、私を愛してはゐないのよ。

男優 愛とは何んです。僕には分らん。一體どれだけの程度の愛を、あなたは愛と云ふんです。

女優 ………。

男優 だいたい君だ、愛なんて云ふのが生意氣ですよ。愛、愛、愛、つて、君は何んでも二言目には愛の話だ。君は、僕をたつて愛してはゐますまい。

女優 もう分りましたわ。

男優 いつたい、愛とはどんなことです？

女優 愛が分らなければ、愛のことなんか云つたつて、分らないぢやありませんか。

男優 そりや、卓見だ。しかし、愛と云ふことの分つてゐる奴は、僕の前へ出て來るがいゝ。僕はその者に向つて、愛とはいつたい、何事だと訊いてみる。ね、君、愛とはいつたい、何事です？

女優 愛とは、愛よ。

男優 愛とは、愛か。

女優 愛とは、愛だわ。

男優 そりや、さうに違ひない。愛とは愛だ。しかし、愛とは、いつたい何事だ。

女優 （立ち上つて窓を見る） 私、どうしてこんな所にゐたんでせう。不思議だわ。

男優 全く不思議だ。君と一緒にゐる男は、車曳きのやうに、一日中、愛、愛、愛と云つてゐなければならない筈だが、こゝの車曳きは、どうもあんまり冷淡過ぎていけません。

（A、蓄音機にカンツオネッタをかける。）

（間。）

女優 私、鄕里へ歸らうかしら。

男優 さう、それなら、一番都合がいゝ。

女優 私は、あなたのために、鄕里へ歸つて上げるのよ。

男優 それはどう云ふ意味なんです？

女優 そんなことは、もう說明申し上げる必要はないでせ

う。

男優　それも分る。しかし、説明しなければ、あなたは納得しないでせう。

女優　ぢや説明してあげるわ。私は、愛されないと分つてゐる所に、もうそれ以上ぐづぐづしてゐることは出來ないの。

男優　あなたは、僕とあなたとの生活を、愛で説明しなければすることの出來ないほどそれほどセンチメンタルだつたのです。

女優　あなたは、あなたの亡くなつた奥樣のことより考へられないほど、それほどセンチメンタルだつたのです。

男優　いや、だいたい、男と女とが、二人ゐると云ふことがセンチメンタルさ。われわれはいつたい、何の眞似をしてゐたんだろ。夫婦でもなければ、他人でもなし、友人でもなければ、戀人でもない。たゞ、分れて行く人間と云ふものは、こんなものだと云ふ説明をしてゐたやうなものですね。

女優　さう。ぢや、あたし、これで失禮しましてよ。さやうなら。

男優　さやうなら。

（女優、右手の方へ急ぎ足で去つて行く。）

燗子　（Aに）ぢや、私も、これで失禮しましてよ。さやうなら。

A　さやうなら。

（燗子、左手から去る。）

B　ぢや、僕も一寸。

A　うむ。失敬。

（B、燗子の後からついて出る。）

（男優、ひとり默つて淋しさうに部屋の中を歩き廻る。）

A　もつと、愉快さうに歩いてくれ。

（男優、急に輕い調子で歩き出す。）

A　いや、駄目だ、そこで煙草を吸つて、もつと、蓄音機に調子をとつて。

（男優、ダンスの眞似をやりながら煙草を吸ふ。）

A　いや、いけない。ぢや、いつそのこと、今の僕のかうしてゐる所を、やつてみてくれ給へ。

（男優、Aと向ひ合つて椅子にかける。二人ぢつと見合ふ。カンツオネツタ、蓄音機の上でくるくる廻つてゐる。）

（女優、右手の入口からAの樣子を眺めてゐる。）

閉らぬカーテン

夜

スタンド

食後

良人（椅子に寄り、爪を剪つてゐる）

細君（しきりに窓のカーテンを閉めようとしてゐる。カーテンは何かに引つかかつて、半分締つたまま引き切れない）

良人　馬鹿に腹がふくれたもんだ。

細君　ああ、いやだ、此のカーテン。

良人　今夜は、何を食つたのかな。もう忘れたぞ。

細君　いやだわ、ちよつとも閉らないわ。あなた、どうかして頂戴よ。

良人　此の頃、俺はどうしてから忘れつぽくなつたのかな。何んでも忘れる。これぢや。

細君　あなた、此のカーテン、閉めて頂戴な。

良人　そんなもの、閉めなくつたつて、いいぢやないか。

細君　だつて。

良人　閉めなくつたつて、いいさ。

細君　閉めるものは、閉めておくものだわ。

良人　だから、開けるものは、開けておけ。

細君　カーテンは、閉めるものよ。

良人　馬鹿なことを云へ、カーテンは、開けたり、閉めたりするもんさ。

細君　ああ、いやいや、知らない。

（うるさそうに、カーテンの裾を窓枠に投げつける。）

良人　しかし、何んだぜ、カーテンを閉めたつて、今頃、俺は接吻するのは御免だぜ。

細君　いいわ。

良人　良けりや、無難だ。

細君（ぷんぷんして椅子に坐す）

良人（自分の指を眺めながら）俺の、此の中高指の格好は、いつ見ても素敵なもんだ。

細君　もうあなたも、だんだん不親切になつたわね。

良人　俺の中高指の格好は、これは、先祖代々から傳はつて來てゐるんだよ。俺の親父も、かう云ふ高貴な指をしてゐたし、俺の妹だつて。

細君　ぢや、あなたの前の奥樣は？

良人　馬鹿を云へ、あ奴は俺の家の系統ぢやないぢやないか。

細君　でも奥様と云ふものは、そこの御主人に似て行くものよ。
良人　ぢや、お前だつて、前の良人に似てるんだらう。
細君　私なんか、ちつとも似てゐやしませんわ。
良人　しかし、俺の前の家内が俺に似てゐる筈だと思ふのなら、お前はひそかに、お前が前の良人に似てゐると思つてゐる筈だ。參いつたろ。
細君　でも、あたし、前の良人はちつとも愛してゐなかつたんですもの。
良人　そんな古くさいことを云ふのは、やめて貰はう。
細君　だつて、それが本當なんですもの。
良人　俺は、そんな甘いことでは、接吻はしたくはないぞ。
細君　いやだ。
良人　ぢや、そのカーテンを閉めてくれ。
細君　あなた閉めて頂戴よ。あたしには、どうしても閉らないんですもの。
良人　一體、あのカーテンの閉らないと云ふのは、俺を助けてくれてゐるのか、お前を苦しめてゐるのか、向ひの獨身者を喜ばせてゐるのか、どつちだ。
細君　そりや、あなたを苦しめてゐるんだわ。
良人　いや、俺は今、自分の中高指を觀賞してゐる所だよ。
細君　だつて、さうだわ。私なんか、あなたに、今頃唇なんか濡らされたくない方よ。
良人　それや都合がいい。俺も、そんなことは、されたくない方だ。第一、いま俺の腹の中には、オムレツと鰻と、キヤベツと飯と、それから、隣りから貰つたお萩とが這入つてゐる。
細君　私もさうよ。私には、鮪も這入つてゐるわ。
良人　さうだ、それに、まだ、前の亭主も這入つてゐる。
細君　知らないわ。あなたぢやありませんか。あなたのお腹の中には、前の奥様が這入つてゐるわ。
良人　いや、俺の腹は、お前の腹ほど大きかないよ。お前の腹は、何んでも這入る合切袋だ。
細君　あなたは、ほんとに下品な方ね。
良人　下品なのはお前ぢやないか。俺の中高指は、こりや高貴な品性を表してゐて遺憾がないんだ。
細君　そんな指なんか、馬鹿らしい。指なんかに、高貴もへちまも有るもんですか。
良人　馬鹿を云へ。指にはその家代々の最も優れた特長が現はれるのだ。お前の指なんか、その指は何んだ。まるで、接吻ばつかりしたがつてゐるお前みたいだ。
細君　そりやあなたのことだわ。私に最初接吻なすつたのは、あなたぢやありませんか。
良人　お前さ、お前が最初にしたんぢやないか。

細君　あなたよ、あなたよ。

良人　もつとも、一人で接吻は出來ないが、とにかく、最初に誘惑したのは、お前にちがひないんだ。

細君　あーら、あなたが、私をあんな所へ呼んで、あんなことをなすつて、そして、何んと仰言つたか御存知ですの。あなたのことだから、もうお忘れになつたのね。

良人　うむ、忘れた。何と云つた？

細君　まア、ひどい、あんなに優しいことを云つといて。

良人　何と云つた？

細君　そんなこと位、御自分で考へなすつたらいいわ。

良人　所が、それが忘れたのさ。

細君　いやいや、あなたは。

良人　しかし、忘れたと云ふことは事實なんだ。とにかく、俺は忘れつぽくつて仕方がない。待てよ、俺は、今朝は幾時に起きたかなア。

細君　そんなことなんか忘れたつていいわ。その代り、あなたが最初に私に云つて下すつたことだけは、覺えてゐて頂戴。

良人　だから、敎へてくれと云ふんぢやないか。時々敎へて貰はないと、俺は駄目なんだ。すつかり忘れて了ふんだ。

細君　私、あの時のことを考へると嬉しいわ。私、あなたが私を抱いて下すつて、あんなことをお云ひになつて、……まア、私、此の頃あのときのことばかり頭に浮んで來て仕方がない。あの頃は、私、なんて幸福だつたでせう。

良人　俺は忘れた。

細君　知らないッ。

良人　俺の覺えてゐるのは、お前がどこだかの高い二階から、俺に笑ひかけたことだけだ。

細君　嘘、仰言い。私、そんなことなんかしなくつてよ。

良人　いや、したのは確かなことなんだ。

細君　私、私のしたことは何もかも覺えてゐるつもりよ。そんなことなんか、したことないわ。きつとあなたは、前の奧樣のなすつたことを、覺えてゐらつしやるんだわ。さうだわさうだわ。ね、さうでせう。

良人　そんな筈がない。どうも、二階から笑ひかけてゐる顏は、お前の顏だ。

細君　私、二階から笑ひかけるなんて、そんな下品なことはいたしませんよ。

良人　しかし、俺の頭に浮んでゐるのは、お前の顏だから仕方がない。

細君　そんな下品なことなんか、忘れて頂戴。それより、私のやうに、あなたが私に最初云つて下さつた事を、覺

えてゐて頂戴な。

良人　何と云つた、何と？

細君　こんな優しい顔をなすつてね。

良人　どんな顔だつて？

細君　いやだわ、良く見てゐらつしやいよ。

良人　もう一度してみてくれ。

細君　こんな顔よ。（と優しげな顔をする）

良人　馬鹿な、そんな甘い顔なんか、俺がするもんか。

細君　だつて、あの時は、今のあなたのやうな、そんないやな顔ぢやなかつたわ。

良人　そりやもう、お前の前の男より、俺の顔の方が少しはよかつたかも知れないね。

細君　だつて、あなたは、前の私の良人を、御存知ないぢやありませんか。

良人　いや、そんなことは、見なくとも分るもんだよ。第一、お前が俺のやうな男を愛し出したなんて云ふ事實から見ると、定めし、その男は醜男だつたに違ひないんだ。

細君　まあ、馬鹿にしてゐらつしやるわ。

良人　そりや、そんな男は、元來馬鹿にして貰ふやうに出來上つてゐるものなんだ。

細君　私、あなたが私を馬鹿にしてゐると云つてるんだわ。

良人　今更、お前を馬鹿にしたつて始まらないぢやないか。

細君　さうよ、だから、出來るだけ私を馬鹿にしてゐらつしやるといいわ。私だつて。いつまでもさうあなたの馬鹿にはなつてゐなくつてよ。

良人　そりや面白くない。

細君　あたり前よ。（と怒り出す）

良人　カーテンを閉めてくれ。

細君　知らない。

良人　（立ち上つてカーテンを閉めに行かうとする）

細君　（良人の腕を持つたまま）閉めちやいや。

良人　閉けておくのか。

細君　ええ。

良人　閉めなけりや、向ひの男が不眠症になるぢやないか。

細君　いやいや、閉めちや。

良人　さては、見られたつて、かまはないと云ふ意氣込みだな。

細君　馬鹿らしい。

良人　（細君の額に接吻しようとする）

細君　いやよ。（と良人の胸を突き飛ばす）

良人　實は、白狀するが、俺もいやなんだ。（坐る）

（良人、夕刊を見始める。）

細君　あーあ、私、あの頃のあなたが良かつたわ。もうかうなつちや駄目よ。

良人　（無言）
細君　（ちつと一と所を眺めながら恍惚として）あんな優しい顏をなすつて、あんなことをお云ひになつて……。
良人　俺の腹の中には、鰻とオムレツと、お萩とキヤベツが這入つてゐる、と。
細君　（急に不快な顏をして）ああ、いやだいやだ。
良人　（大きな聲で）締めた。俺はまだ覺えてゐるぞ。
細君　何にさ？
良人　俺の腹の中には、オムレツと、鰻と、お萩とキヤベツが這入つてゐる。
細君　（輕蔑した顏をして）そんな大きな聲をしなくたつて、もう鰻は逃げやしませんわ。
良人　しかし、鰻とオムレツと、お萩とキヤベツとを並べて、いささかの間違ひもなく暗記してゐられると思ふと、俺は嬉しくなるんだよ。
細君　あなたは、氣が違つてるんだわ。
良人　さうかね、俺は氣が違つてゐるんかな。待てよ。俺の今晩食つたものは、と、オムレツと、鰻と、それから、お萩と、……。
細君　キヤベツよ。
良人　さうだ、キヤベツだ。
細君　（一寸恐わさうな顏をして）あなた、ほんとうに氣が違つたの？
良人　それが分らないんだよ。氣が違つたと云ふのは、一體どう云ふことを云ふんだらう。
細君　あなた。（と見詰める）
良人　何んだ。
細君　そんなことを、あなた、眞面目で云つていらつしやるの？
良人　眞面目さ。
細君　いやだ。（と、驚いた顏になる）
良人　何ぜだ？
細君　あなた、しつかりなさいよ。
良人　お前は、眞面目でそんなことを云つてるのか。
細君　あゝ良かつた。私、びつくりしたわ。
良人　俺もびつくりした。
細君　馬鹿にしてゐるわ。そんな下らない眞似なんか、およしなさいよ。
良人　何も下らぬ眞似ぢやないぢやないか。俺は、今夜食つたオムレツとキヤベツと鰻とを計算してみた丈さ。
細君　何んてつまらない人でせう。
良人　もう俺はつまらない奴なのだ。やつと俺は、鰻とキヤベツと、オムレツとお萩とそれだけより覺えてゐられなくなつたのだ。こんな俺ぢやなかつたんだ。俺はもと

は、頭腦明晰で、一晩に羅典語の單語を二三百は暗記したものさ。それに今は、お萩とオムレツと鰻と、ああ、つまらない。

細君　私もつまらないわ。あなたはもとは、外へ出ると、きつとあたしにお土産を買つて來て下すつたし、私のお誕生日だつて、ちやんと覺えてゐて下すつたわ。

良人　お前の誕生日は、幾日だつたつけ？

細君　さうれ御覽なさい。

良人　二月の廿七日だつたかな。八日だつたかな？

細君　それは前の奥樣のよ。

良人　いや。

細君　さうよ。

良人　前の奴は？　と、待てよ、此奴も忘れた。とにかく、そんなことはどうでもいいさ。大體、誕生日なんか覺えてゐる奴は、まだ至らない奴なんだよ。

細君　あなたにかかつちや、今に私まで忘れて了つてよ。

良人　うむ、それが此の頃は、一寸恐いのだ。今に俺は、何もかも忘れて了ふに定つてゐるんだ。しかし、さうなると、俺は俺まで忘れて了ふから都合がいい。

細君　かう陽氣が悪いと、狂人がふえるばつかしだわ。私、ピアノでもひかうかしら。

良人　しかし、俺は、かう何もかも忘れつぽくなつたことは、感謝すべきことかもしれないね。もと／＼、俺はお前に前の良人があつたと云ふことを忘れようとして、何んでもいいから忘れることばつかり練習したものさ。所が、その練習がつんで來て、結局、何もかも忘れて了ふ癖がついた揚句の果に、たつた一つ、今でもはつきり覺えてゐるのは、お前に良人があつたと云ふことだけだ。

細君　あなたは、どうしてそんなことばかり仰言るの。

良人　俺はかう云ふ話を聞いたんだ。ある日本の女が西洋人と結婚して、その西洋人が死んで了ふと、今度は日本の男と結婚した。結婚して二三年たつてから、ひよつこり子供が生れたんだ。所が、その子の頭も顔も、西洋人そつくりだつて。

細君　それで、どうしたと仰言るの。

良人　それで、俺は忘れる練習をやり出したと云ふだけさ。

細君　もうあなたと私とは、駄目だわね。

良人　何が駄目なんだ。

細君　あなたがそんなことばかり考へてゐらつしやつては、もう駄目よ。

良人　さうだ、もう駄目だ。あんなカーテンなんか、ひきち切つて了へ。

細君　男の人は本當に得だわね。自分の悪いことはちつとも考へないで、相手の悪いことばつかりひき摺り出して、

それで納まつてゐられるんだから、都合がいいわ。
良人　所が、お前が子供を生んだなら、俺の忘れたがつてゐるものが、また初中終眼の前にゐるわけだ。これなら、俺も定めし、覺えがよくなるだらう。(立ち上る)
細君　あなたは、本當にそんなことで、一生を苦しめなさるおつもりなの。
良人　それがどうだか分らぬから困るのさ。しかし、此の頃俺は、かう云ふ一つの事實を發見し始めたのだ。ある男が鷄を一生懸命大切にし始めた。すると、その男の顏が、だんだん鷄に似て來出したと云ふことだ。これは俺を助けてくれたんだ。お前の子供が前の男に似たとしても、お前が愛してゐたからだと思つて了へばそれまでだ。つまり、人間が鷄に助けられた話つて云ふわけさ。
細君　さう云へば、あなたのお顏は、何んだかだんだん前の奥樣に似て來てよ。
良人　俺の顏か、俺の顏は、だんだんお前の前の男に似て行くんだ。
細君　まア。いやだわ、ほんとにあなた、前の奥樣に似てゐるわ。まア。(と良人の顏を見詰め出す)
良人　もうかうなれば、誰に似てたつてかまふもんか。俺は何もかも忘れて了ふだけなんだ。俺の覺えておけばいいものは、鰻とお萩とオムレツと、それから、おい、(と細君の方を振り返る)俺の顏は、鰻に似てゐやしないかね。
細君　ああ、ああ、私何もかも忘れて了ひたい。あなたのお顏は、前のあなたの奥樣そつくりよ。いままで氣がつかないなんて、私もよつぽどお人好しだわ。
良人　お前も一そのこと、鮪だけ殘しておいて、何もかも忘れて了へ。
細君　だつて、私はつまらないわ。あなたはもう忘れる練習ばかりなすつたんですもの。私はこれからよ。これから忘れる練習をするなんて、あなたに追つつくまでには大變よ。
良人　おい、立て、これから二人で忘れる練習だ。
細君　ええ、いいわ。(立ち上る)
良人　さて、つと。
細君　私、何から忘れるの?
良人　思ひ出すものから忘れるんだ。
細君　ええ、忘れるわ。
良人　何を思ひ出したんだ?
細君　私、あなたが、私に一番最初、あんな優しいお顏をなすつて、そして、あんなことをお云ひになつて。
良人　そんなことなんか、忘れて了へ。
細君　だつて、思ひ出すんですもの。

良人　思ひ出すから、いけないんだ。

細君　だつて、仕方がないぢやないの。

良人　だから、忘れろと云つてるんだ。

細君　私、あなたのあのときのお顏だけは覺えてゐたいの。あんなお優しかつた顏を忘れて了つたら、私、もう生きてゐる氣がしなくなるわ。私、あのときは、本當に幸福だつたわ。毎日々々、あなたは。

良人　もう、やめてくれ、俺も思ひ出して來た。

細君　あなたは私のここの肩の所へ一寸お手をおかけになつて、そして、お前は今日は何んて美しいんだらうつて、仰言つて、ああ、さうさう、矢つ張りそのときも此處の部屋だつたわ。あのカーテンだつて、あなたがいつも御自分で閉めて下すつたし、それから、

良人　おい、カーテンを閉めてくれ。

細君　だつて、閉らないんですもの。

良人　閉めたら閉まるさ。

細君　あなた閉めて頂戴よ。

良人　お前が閉めろ。

細君　あなた、お閉めなさいよ。

良人　俺は閉めたくないんだ。

細君　あたしだつて、閉めたくないわ。

良人　どうも不思議だ。前には向ひの奴が邪魔になつたのに、今度はカーテンが邪魔になり出した。

細君　もういつまでも、あのままに捨てておきませうよ。

良人　いつたい、カーテンと云ふ奴は、閉めるものか開けるものか。

細君　そりや、あなたのお心次第だわ。

良人　それなら、俺は、だいたい、あのカーテンを閉めようと思つてゐるのか、開けようと思つてゐるのか、どつちなんだ？

細君　あなたは御自分で御存知ないの？

良人　うむ。俺はもう何もかも忘れてるんだ。お前はどつちだ？

細君　私は、あなたに閉めていただきたいの。

良人　いや、俺はもう閉めまい。俺は此のカーテンを自分で閉める癖がつき出してからは、お前が增長して仕方がなくなつたんだ。

細君　まだあなたも長生きなすつてよ。

良人　何故だ？

細君　そんなことまで覺えてゐらつしやるやうでは、あなたも、まだまだ鰻のやうな顏にはならないわ。

良人　うむ、實は、俺は、鰻のやうな顏にはなりたくないんだ。

細君　ああ、ああ、私、また下らないことを考へ出した

わ。あなたの前の奥様の顏が目について、（顏が顰む）
良人　よしてくれ。お前のその顏は、前の男の顏だ。
（互に顏を恐わさうに見詰め合ふ。）
細君　（顏を振りながら）いやだ、いやだ。早く何もかも忘れたい。
良人　俺もだ、もうかうなれば、自棄糞だ。
細君　私だつて自棄糞よ。
良人　どうだ、ひとつ、自棄糞で、もう一度カーテンを一緒に閉めようか。
細君　ええ。閉めたつていいわ。
良人　ぢや來た。
（良人と細君は一緒にカーテンの傍へ行く。二人がカーテンを引かうとする。カーテンはまた引つかかつて揺れてゐる。）
良人　いつたい、此奴はどうしたんだ。
細君　だから、あなたに手傳つて頂戴つて云つてるんぢやありませんか。
良人　呆てな。カーテンが閉らないとすると、ちよつと、こりや俺とお前の生活も新鮮になつて來た。
細君　もう少し強くひつぱつて御覽なさいよ。
良人　いや、俺はもう閉めるのはやめにした。
細君　どうなすつたの？
良人　此のカーテンが閉まらなけりや、外から見えない所は、此の三角形の隅だけだ。此處の三角形の中で、俺とお前は自棄糞になつて、また新らしく生活をやり直すのだ。
細君　いやよ。そんな暑い所は、まつぴらだわ。
良人　（部屋の三角形の隅へ立ち、大手を擴げ、妻に向つて）さあ、來い。憂鬱でも退屈でも、鰻でもオムレツでも、何でも來い。俺はどいつもこいつも食つてやる。
細君　（しきりにまたカーテンを引つ張る）私、箒を持つて來るわ。上の釘が邪魔なのよ。
良人　そんなカーテンなんか、忘れて了へ。
細君　（箒をとりに二三歩歩み出してから立ち停り、良人を眺めて、クツと笑ふ）

――幕――

食はされたもの（一幕）

二軒の農家が左右より村道を挾み、向ひ合つて立つてゐる。村道は右の家の軒より來り、正面奥へ通つて大きな池の縁へ突きあたり、更に池に添つて左手家の軒へ折れ曲る。どちらも家の軒には杉の木が立つてゐる。池の向ふには低い山脈が連り、夜なれば黑けれど、やや月が高い（お富――牛助の妻、お園――久助の妻）久助、無言にて、旅裝のまゝ、人眼を氣遣ひつゝ池の方の道から現れ、右手の家の壁板に寄り添ひ、中の樣子を暫く窺ふ。家の中からは子供の聲がする。

お拌ア、ランプがぢいぢい泣いとるわ。

お富の聲　まだ寢んとゐるのか。早く寢んと、天狗さんが眼玉むいてござるぞ。

（久助はその壁板から離れると、また足を忍ばせて左手の家の戸口まで來り、一寸中を窺ひ、顏を曇らせながら周章てて來た道を引き返し、軒へ隱れる。）

（遠くより法螺貝の音が聞えて來る。）

（左手の家の入口から風呂敷包を持つて、その家の主婦、お園が出て來ると、向ひの家の入口の所から呼ぶ。）

お園　お富さん。

お富　はア。

お園　今、幾時頃かいな。

お富　さア、何時やらう。さつき八時半の混合が通つたと思うたが。

（お富、入口の所へ出て來る。）

お富　もう九時頃やらう。今頃から何處へ行くのや？

お園　一寸、砂糖を買うて來うかと思うてゐるのやが、もう良人のは歸る頃やのに、まだやがな。

お富　久助さんは今夜歸つて來るのか？

お園　はア、終列車になるやらう。

お富　さうか、終列車か？

お園　はつきりしたことは分らんけど、歸るなら今夜やらうと思うてるのや。

お富　（暫く考へる）さうか。えらう早いのやな。

お園　早いことはないわさ。昨日歸らんならんのやが、どないしてるやら。

お富　久助さんも、今度は弱つたやらうな。

お園　弱つたかて仕樣がないわな。自業自得やさ。

お富　あの人は氣が弱いで、あんたも心配やらう、ほんとうに。

お園　何もあんなことにさへ手出しせんだら良かつたのやけど、馴れんことをしたもんやでな。
お富　それもさうやが、あの山崎は口ばつかりの奴やでな。わしも、うすうす久助さんが株へ手出しをしたつて聞いたときにや、まアと思ふたわ。
お園　山崎つて云ふ奴は、ほんとに喰はせ物や。
お富　喰はせ物や。そやけど、まだ山だけで良かつたのやぞ。
お園　何んの、山だけなら我慢が出來るわいな。屋敷も田もや。
お富　まア、さうかいな。そんなひどい目に逢ふのか？
お園　まだ歸つて來にや、はつきりしたことつて分らんけど、都合によつたら此の村にもゐられぬやらうと思うてるのやわ。
お富　他愛もない。何も居ようと思うたら、どないにしてたかてゐられるわ。
お園　さうかて、あんまり格好が惡いわ。
お富　阿呆らしい。（と少し笑ふ）
（法螺貝の音だんだんと近くなる。）
お園　（音を聞きながら）あれは、半助さんの貝やなア。
お富　ああ。良人のや。
お園　息がよう通るな。
（二人暫く默つて池の方を向きながら、法螺貝の音を聞いてゐる。）
半助の聲　明日の三時に寺で集會がありますぞオ。集會は明日の三時に寺でありますぞオ。
お園　何の集會やろ？
お富　さア、何んぢやろな？
（半助、法螺貝を小脇に抱いて、唇を撫でながら池の方の道から現れる。）
半助　（お富に近寄り）おい、水いつぱくれんか。
お富　もう廻つて來たのかな？
半助　まだぢや。これから前川へ廻りやそれでええのぢや。
お富　家へ這入つて飲んだら良いやないの。
半助　寄つてゐられるかい。
（お富、家の中へ這入る。）
お園　集會があるつて、何の集會やな？
半助　奧の山へ、杉苗でも植ゑる相談やろ。久助さん歸つたか。
お園　まだやぞな。終列車やらうと思うてるのや。
半助　遲いな。もう今日で十日位たつやないか。
お園　今日で十二日にもなるのや。
半助　そないになるかいのう。何してるのや。
お園　さア、何してるやらな。銀行の人と一緒に來るやろ

で、またごてごてするわな。

半助　困つたことやのう。

（遠く山の裾の方から汽車の音がする。）

お園　（池の方を向き）あれは終列車やろか。

半助　あれや貨物や。

お園　貨物かいなア。（列車の音を聞く）

半助　さつき踏切りで、犬が轢き殺されとつた。半分首のち切れてる中へ、片足突つ込んで、こないにして死んどつたが。（と眞似す）

お園　まアどうや。

（お富、茶碗に水を入れて持つて來る。半助、咽喉を鳴らしてそれを飲む。）

お園　お富さん、わし砂糖を買ひに行つて來るでな。

お富　はア。

お園　良人のが歸つて來たらさう云うておくれんか。

お富　よしよし。

お園　風呂も沸かしてあるでな。

お富　はア、ゆつくり行つといで。

お園　直ぐ戻つて來るわな。

（お園、池の方の道へ消える。）

半助　（茶碗をお富に渡し）辰は寢とるのか？

お富　もう寢とる。

半助　（空を仰いで）何んと仰山星さんが出てござるわ。明日もこりや上天氣ぢやぞ。

（お富、家の中へ這入る。半助はまた法螺を鳴らしながら右手の家の軒を通つて消える。）

（暫くして、池の方の道から再び久助が現れ、靜にお富の家の中を覗いてゐる。）

久助　お富さん。（あたりを氣遣ふ）お富さん。

（お富、手拭で手を拭きながら出て來る。）

お富　（喜ばしさうに）あら、久助さんか。

（久助、默つて半助の去つた方を眺めてゐる。）

お富　遲かつたな。

（久助、少し池の方へ歩む。）

お富　お園さんは今がた砂糖買ひに行つたぞな。ひどう心配してやつたが、模樣はどうぢや？

（久助の顏は益々暗くなり、默つてゐる。）

お富　山だけで濟んだのか？　お園さんの話では、村にゐられんつて云うてやが、本當かいな？

（久助、無言、腕組みをして一層沈む。）

お富　（久助の方へ近より、手拭を圓めて彼の顏をぢつと見てゐる）痩せたなア、どこぞ惡いのかいな？

（久助、だんだんとお富から離れながら池の方へ歩く。）

お富　夕飯は濟んだのか。まだやらう？
久助　………。
お富　どこへ行くのかな。
（久助、初めてお富の顏をぢつと見る。）
お富　默つてばつかしゐて、どうしたのや？
久助　………。
お富　疲れたやらう。（久助の傍へ寄る）
久助　何もかも仕舞ひや。（奥の方へぢりぢりと進む。お富續く）
お富　ええやないか。まア一寸、家の中へ這入りいな。終列車で歸つたのか？
久助　（動き停り、お富の方を向く）　俺はもう生きてるのがいやになつた。
（お富、默つて久助の顏を眺めてゐる。）
久助　俺はもう歸らんとかうと思ふとつたのやが、また舞ひ戻つて仕舞うた。阿呆らしい。
お富　何を云ひ出すかと思うたら、そんなこと云ひ出して。まア家の中へ這入らいせ。良人(うち)のは今ゐやせんのやわ。
久助　俺は、もうお前にも逢はん。
お富　（驚く）　何ぜや！
久助　ちよつとお前を見に歸つて來ただけや。もう逢へりやこれでええわ。

お富　あんた、何處ぞへ行くつもりか？
（久助、默る。）
お富　ほんとに何處ぞへ行くつもりかな？
久助　お前もたつしやでゐてくれよ。
お富　阿呆らしいこと云はんと、早よ家の中へ這入らいせ。
久助　俺や、矢つ張りお前と逃げてる方が好かつたのや。
お富　今頃、何を云うてるのや。このままでゐたら、良(え)えことやないか。何もわざわざ人に知らさんかて、誰も知りやせんのやし。なア、知らん顏して、今迄みたいにしてたらええやないの。
（久助、顏を曇らせたまま、默つてゐる。が、またそろそろと池の方へ歩む。）
お富　（久助の手を持つて引き留める）　あんたも氣の小さい人やな。何もこのままゐたて良(え)えやないの。
（久助、手を持たれたまま、お富の顏を悲しさうに眺めてゐる。）
お富　なア、このままゐておくれ。わしが可哀想やと思うたら、ゐておくれえな。
久助　お前、俺の行く所へついて來るか？
お富　そんなこと、どうでも良(え)えやないの。ぢつと前のやうにしとりや良(え)えやないの。そしたら、あんたかて私(わて)かて助かるのや。なア、さうしておくれ。

久助　一緒に行つてくれ。
お富　行きたい云うたかて、直ぐにや行けへん。わし、辰
　もをるし。早よまア家の中へ這入りいな。
久助　前に俺が逃げようと云うても、お前は同じことを云
　ふとつたのや。俺はもう、決心しとるのや。此のままに
　ゐても、また前のやうにづるづるやし。もう俺や、この
　世が面白う無うなつた。
　（お富、一寸手拭で眼を拭く。久助はだんだんと池の
　　方へ近寄る。お富も少しづつ近寄つて行く。）
久助　お前たつしやでゐてくれ。そしたらええわ。半助さ
　んにも、俺は罪なことをしてたが、これも罰や。これか
　ら半助さんには、良うしてやつてくれんか。
　（久助俯向いて歩く。）
お富　ほんとに行つて了ふのか？
　（久助、默つて靜に歩く。）
お富　一寸、久助さん。（久助に近寄りその片手を持つて）
　あんたはびつくりしてるのや。一日二日、ゆつくり寢て
　みると癒るぞ。早よまアいつぺん家の中へ這入らいせ。
　お園さんが、そりや待つてゐやしたぞな。もうちやんと
　風呂まで沸いてるのや。冷めたうなつてるやらうで、わ
　しが焚くわな。さア、いつぺん戻らいな。終列車で歸つ
　たのか。疲れが出たやらうな。

久助　（少し怒り）お前も俺も良えことしてたのやない
　ぞ。
お富　今頃、そんなこと云ふのは止さえつて。
久助　（お富を見詰め）お前は……。
お富　早よさア。夕飯はな？
久助　まだ瞞してるつもりか！
お富　こんな所で立ち話してたら、誰がきいてるか分らへ
　んわ。
久助　俺は……お前のやうな奴は！（突然詰め寄る）お
　い、俺と逃げてくれ、逃げてくれ。
お富　阿呆らしい。何も家屋敷が無うなつたと云うて、そ
　ないに急にびくびくし出さんかてええやないの。
　（久助、お富の手を振り切つて、默つたままひとり池の
　　道へ消えて了ふ。お富は暫くぼんやりと立つてゐる。）
お富　久助さん。
久助　…………。
お富　久助さん。
久助　…………。
　（お富、久助の後から驅けて行く。）
　何處か遠くの方で、車の轍の音がかたかたとする。
　暢氣に人の笑ふ聲が幽かに聞える。續いて唄が聞えて
　來る。）

色の黒いのはねえ、
男らしゆうて、
強さうで、
ひとに盗られる苦勞なし。

(別の聲で、)
ちよいちよいかア。
アははははは。
アははははは。

(なほ轍(わだち)の音だけ暫く續き、軈て消える。)
(暫くして、半助、右手自分の家の横の道より、空氣の脱けた自轉車を持つた若者と一緒に來る。半助は、片手に一握の桑の葉を握り、片腕に法螺貝を抱へてゐる。)

若者　蠶はやめか。
半助　うむ、もう今年は飼はんのぢや。うるさうてのう。お前とこは何枚飼うてるのや？
若者　二十一枚や。
半助　少いのう。そりや手がはぶけて良いわ。
若者　良う賣れて、二十圓やな。お母アのお賽錢や。
半助　それでも結構ぢや。
(二人、半助の家の前まで來る。)

半助　どうぢや、一寸寄つて行かんかな？
若者　さうやな、自轉車、置かしといてくれんかなア？
半助　ああ、寄らんのか？
若者　直ぐ戻るで、歸りに寄せて貰ふわ。
半助　ぢや歸りに寄れよ。
(若者は池の方へ消える。半助、自分の家の戸口から呼ぶ。)
半助　お富、おい。……お富？
(半助、家の中へ這入つて行き、再び表へ出て來るとあたり處を見廻す。)
半助　をらんなア。(と呟く)
(半助、そのまま股引を脱ぎ始めると、片足の股引をそのままに殘し、脱いだ片足のを肩に抛りかけ、向ひのお園の家の戸口まで行つて中を覗く。)
半助　お園さん。……お園さん。……をらんなア。
(半助、お園の家の中へ這入つて行く。中で猫を追ふ半助の聲、こりや、こりや。と聞ゆ。暫くして、半助、お園の家の中から出て來ると、また周圍を見廻す)
半助　ああ腹へつた。くそめッ！　お富、お富。(と大聲で呼ぶ)
(お園、池の方の道から、風呂敷包(ふろしきづつみ)を持つて、歸つて來る。)

半助　お園さんか？
お園　はア、わしや。
半助　猫が鰯を食ひよつたぞ。
お園　食うたかな。仕樣のない奴や。
半助　うちのお富知らんか？
お園　お富さん、ゐやせんのか？
半助　どこへ行きさらしたやら。俺や晩飯まだ食はんとゐるのやが、腹へつて腹へつて。
お園　どこぞそこらにゐらるのやぞ。わしとこのは、もう歸つてゐるかな？
半助　まだや。
お園　まだかいな。
半助　踏切りで犬が死んどつたやらう？
お園　さうかいな。知らなんだわ。
半助　こないにして死んどつたが：（と手を首へ差し入れゐるやうな眞似をする）
お園（池の方を見て）もううちの人は、歸らんならんのやがなア。
半助　そりや明日や。お富の奴め、どこへ行きさらしたやら。あゝ腹へつた。（股をばちばち張りながら自分の家の中へ這入る）
（お園も少し淋しげな顔をして自分の家へ這入る。）

半助の聲　お富……お富。
お園の聲　あんた……あんた。
（暫くして、お園は半分食ひ散らした鰯を、猫の首でも摘まみ上げるやうに下げながら出て來る。）
お園（半助の家の入口まで來て）半助さん、この鰯、あんたんとこの猫にやつておくれんか。
半助の聲　そりや御馳走やな、どうせわし所の猫が食ひよつたのやわ。あはゝゝゝゝ。
お園の聲　あはゝゝゝゝゝ。（半助の家の中へ消えて行く）
お園の聲　夕飯のこしらへは、まだかいな。
半助の聲　いや、何アに一寸食やアもうええのやが。
お園の聲　うちの食べたらええわ。その代り、鰯は猫の食ひかけやぞな。あはゝゝゝゝ。
半助の聲　あはゝゝゝ。食ひかけでも結構やが、士臺から腹がへると、もう食ふのもうるさうてさ。あはゝゝゝゝゝ
お園の聲　あはゝゝゝ。ほんとに、食ひかけでも良けりや持つて來るぞな。
半助の聲　いやもう、お園さん、入らんぞ入らんぞ。
（お園、半助の家から出て來る。そのとき、遠くから下り列車の響が聞えて來る。お園、立ち停り列車の音に耳を傾ける。）

お園　半助さん。
半助の聲　何んぢやな。
お園　あの汽車、終列車やらうか。
半助の聲　待てよ。
お園　終列車やなア？　大分早やさうな音や。
（半助、腿引をすつかり脫いだ裸體の足で戶口へ立つ。）
半助　をかしな音やな。混合かな。
（半助、ひとり池の方へ步み、お園の家の端から遠く池を越して斜めに左へと眼を放つ。）
半助　あれは貨物やわ。
（お園、半助の傍へ行く。）
半助　眞黑や。
お園　ほんに貨物やな。
半助　今頃、貨物が來る頃かいなア。
お園　もう幾時頃やろ？
半助　さうさなア。十時廻つてるかもしれんぞ。
お園　それぢや、もう終列車は通つて了うたのや。
半助　そりや通つた。
（お園、默つて汽車の方を眺めてゐる。）
半助　久助さんは明日やぞ。こんねに遲うなつてから歸るものか。
お園　さうやろか。今晚歸つて來にや、歸る日がないのやがなア。
半助　歸る連れがあるのやらう。
お園　はア、銀行から田を驗べに來るやろで、そしたら一緖に來るのやと思うてるのやが。
半助　そんなら明日や。來るのなら夜さり來るもんか。
お園　それでも、銀行の人は泊ると旅費が出るもんで、夜さり來るかもしれんわ。
半助　何アに來るもんか。
お園　さうやろか。
（半助、ひとりお園を殘し自分の家の方へ步いて來る。）
お園　（ひとり線路の方を眺めながら）半助さん、半助さん。
半助　（聞えぬらしく）ほんとに、腹すかしやがるな。（と獨語）
お園　半助さん、一寸。
（半助、お園の方を振り向く）何んぢや？
お園　一寸。
半助　俺やもう腹へつてさ。
お園　をかしなものが浮いてるわ。
（半助、なほ家の中へ這入らうとする。）

お園　（強く）早よ、半助さん、一寸來て見いつて。
半助　（立ち停る）何んや？
お園　奇妙な物が浮いてるわ。
半助　お月さんが映つてござるのやぞ。
（半助、お園の傍へ戻り、斜めに左方池の水面を透かして見る。）
お園　なア、をかしなものやろ？
（半助、無言。）
お園　何んやらう？
半助　丸太や。
お園　丸太やろか。
（半助、無言。）
（半助、ひとり池の道をその方へ歩いていつて消える。
暫く靜か。）
お園　何んぢやな？
（返事がない。）
お園　丸太かいな？
…………。
…………。
半助の聲　土左衞門や！
お園　お〻恐は。（肩を縮めて後へ一寸退く）
…………。

半助の聲　土左衞門や！
お園　いやらしい！　早よこつちへお出んかいな。
半助の聲　お園さん。提灯と竿と持つて來てくれんかな。
お園　わしら恐いわ。早よこつちへお出つてば。
半助の聲　こりや、このま〻にしとけんわ。
（お園、ひとり默つて慄へてゐる。半助、池の方から驅けて來る。）
半助　縁起たれの惡い晩ぢや。土左衞門が浮きやがるなんて。
（半助、そのまま自分の家の中へ驅け込む。）
（お園、その間、半助の家の戸口まで來て慄へてゐる。間もなく、半助は物干竿を持つて驅け出て來る。）
半助　お園さん。提灯持て來てくれんかな。
お園　わしら恐うてよう行かんわ。
（半助、池の方へひとり驅けて行き、消える。お園、再び自分の家の端まで行き、立ち停つて半助の方を眺めてゐる。）
お園　もう提灯、入らんやろ？
…………。
お園　半助さん、え〻加減にしといて、早よこつちへお出んかいな。
…………。

お園　何してるのや。もう提灯もつて行かへんえ。

…………。

半助の聲　アッ！（と叫ぶ）

お園　どうしたのや？

半助の聲　お富や！

お園　お富さんや？

（お園、池の方へ驅け出す。）

（暫く沈默。）

お園の聲　まア、お富さんどうしたのやろ。

半助の聲　何をさらすやら！

お園の聲　お富さん、お富さん。

半助の聲　お富、お富。

お園の聲　まだ今やつたら助かるぞ。

半助の聲　することがないと、こんな眞似さらしやがつて！

（半助、水に濡れたお富の胴を抱き、お園、お富の足を持つて、兩人池の方の道から現れる。）

お園　ほんとにお富さん、どうしたのやろ？

半助　阿呆ぢや。

（お園と半助の兩人はそのまゝ半助の家の中へ這入つて行く。）

お園の聲　まだ助かるかもしれんわ。逆さにして振つたらええ。

…………。

お園の聲　舌を引かにや。

…………。

お園の聲　さつきまでゐたのやで、まだ半時間もたつてまいに。助かるわ。

…………。

お園の聲　まア、澤山水が出るわ。

半助の聲　火を焚いてくれんかな。

（驅け廻る足音がする。）

半助の聲　裏や裏や、藁は裏や。

…………。

半助の聲　あつたかな？

お園の聲　あつたあつた。庭で焚こか？

半助の聲　ああ。

（間もなく、半助の家の入口は焚火のために明くなる。）

半助の聲　阿呆ぢや！

お園の聲　辰つアんは寢てるのか？

…………。

半助の聲　何をさらすやら、阿呆めが！

お園の聲　こりやまだ助かるわ。

…………………。

…………………。

（暫くすると、半助と一緒に來た前の若者が池の方から驅けて來る。）

若者（半助の家の入口で立ち停り、大聲で呼ぶ）半助さん。

（返事がない。）

若者　半助さん。をらんのか。

お園の聲　何んぢやな。

若者　提灯もつて、來てくれんか！

お園の聲　何んぢやな！

若者　池に土左衞門が浮いてるわ！

お園の聲　またか！

（若者、池の方へ急いで驅けて行く。）

半助の聲　誰や！（と怒氣を含む）

お園の聲　誰でもええやないの。

半助の聲　見て來てくれ。

お園の聲　そんなこと、してゐられるかいさ。

（半助、憤怒の形相で入口へ現れる。）

お園の聲　半助さん。早よ、こつちへお出んかいな。

（半助、池の方へ驅け出す。）

お園の聲　半助さん、半助さん。

半助（お園の家の端まで來る）誰や！

若者の聲　アツ、こりや、久助さんや！

半助（立ち停り）何にツ、久助や！

若者の聲　早よ來てくれ！

（半助、急にくるりと後へ戻り、唇を咬み絞めながら自分の家へ大股に引き返す。戸口の所から。）

半助　久助の我鬼や！

お園の聲　えツ、うちの人か！

（半助、家の中へ這入る。それと同じく、家の中から、お園、顏面蒼白となりて飛び出て來る。）

半助の聲　食はしやがつた！　食はしやがつた！

（お園、自分の家の端まで來たとき、再び池の方から若者がひとり驅けて來る。）

若者（狼狽しながら）お園さん。わし、お醫者呼んで來るで、家の中へ入れとかえ。道へ出しといた。

（お園、默つて池の方へ驅けて行く。若者は半助の家の前を驅け過ぎて消える。）

（暫くすると、半助はお富を横に抱きかかへたまま戸口から現れ、池の方へ荒々しく歩いて行く。すると、池の方からは、水に濡れた久助を重さうに横抱きにして、お園現れる。その二組が道の中央で出逢ふ。）

（お園、お富を見て）どうするのや？
半助　抛り込んでやるんぢや。
お園　まだ助かるやないの。
半助　こんな我鬼や、死にさらせッ！
お園　阿呆なことせんと。
半助　久助も抛り込め。
（半助、久助の片腕を引っ張る。）
お園　何をするのやな！
半助　放せ、放せ。
お園　（久助を渡すまいと努めながら）そんな無茶苦茶せんとかいな！
半助　ぐつぐづ云ふな！　抛り込め！　抛り込め！
お園　これ、止さえつてば！
半助　ええい、此の我鬼ッ！　（と久助を蹴る）
お園　（久助を抱いたまま倒れる。泣きながら）そんな、そんな、佛さんになつてるものを、荒つぽい！（と云ひつつ自分の身體で久助の死體を守らうとする）
半助　食はしやがつて！　食はしやがつて！（と久助を蹴り續ける）

――幕――

男と女と男（一幕）

春。森の中の樵夫場である。ここだけは樹々の隙から落ちる太陽の光りで明るい。中央に丸太を組み合せた仕事場あり。二人の若い樵夫は右を向き、鋸を持つて各自の木を挽いてゐる。下には挽き粉が高く積つてゐる。仕事場から左の方奥へ、細い路が一條谷間へ向つて下つてゐる。

――登場人物三人。晋、彌、お里。晋は少しハイカラな色白の男。彌は武骨な醜男。お里は二人のゐる田舍宿の女中である。――

暫く無言。鋸の音だけ調子を合せて鳴つてゐる。遠くで雞が鳴く。

晋　おい。

彌　…………。

晋　俺ア、商賣變へしようかと思ふとるのや。

彌　何せや？

晋　こんな商賣、もう阿呆らしなつて來た

彌　何せや？

晋　お前、考へてみい。俺ら一日、汗水たらして氣張つてゐるのに、それにお前、電氣の奴ア俺らのすること、たつた五分間でして了ひやがるが。阿呆らしい。

彌　しやうがないわ。

晋　しやうがないで、阿呆らしいのぢや。もう直きにうかうかしてたら、俺ら上つたりや。

彌　さうかて、他に何んにもすること、ないぢやないか？

晋　俺アひとつ、役者になつてやろか思ふとるのや。

彌　…………。

晋　良えぜ、役者は。

彌　阿呆らしい。

晋　遊んでて、女にもてて、第一鋸のやうなもの持つこと入らんわ。（突然芝居口調になり）そこへ行くのは、おかるぢやないか。さう云ふお前は勘平さん。つてなこと、云うてりや良えのぢや　面白いのう。あはははははははは。

（彌、默つて微笑してゐる。晋、鋸を木の挽き口に突き刺したまま、立ち上つて腰の手拭で汗を拭く。遠くで鷄が鳴いてゐる。）

（晋、手拭で鉢卷きをなし、顔をひきしめ、ひとり挽き粉の上で立ち廻りの眞似をし出す。）

えいツ、やツ、はツ。

(とかけ辭をかけ、敵に肩口を斬りつけられた表情に落ち、苦悶の後、背後へどつと倒れ、兩足を跳ね上げ、俄に兩手を擴げると大の字に寢そべる。)

音　あーあ樂ぢや。樂ぢや。(空を動かずに眺めてゐる)

兼　いつぺん、鯉を食ひたいのう。

音　………。

兼　鯉も、夏にならんと美味(うま)うないのう。

音　(森の梢の方を指差し)　あつこの、山雀(やまがら)の雛つ子の奴ア、お前の鋸が光るので、びつくりしとるが。

乘　この間、一疋落ちよつた。

音　親鳥やをるのかいなア?

兼　そりやをるさ。二時間目位に歸つて來とる。

音　さうかいなア。(立ち上り、暫く頭の上を仰いでゐる)あの巣を取つてやろかな。

(音、小石を捜すやうにして、森の中を奧の方へうろうろと廻る。)

兼　お里はまだ來よらんかい?

音　(谷の方を見下ろす)　まだや。今頃は辨當の中へ、らつきようを入れとるわ。

兼　今日は遲いのう。

音　まだ來るもんか。

兼　もう正午(ひる)になつてるやろが?

音　寺の鐘や鳴つたかなア?

兼　鳴つたさ。

音　あつこの、次郎兵衞さん所の櫻の花は美しいのう。まるで雲みたいなア。寺の櫻よりや、美しわ。

(遠くで牛の鳴き聲がする。)

音　(谷間を見降ろしながら、舊劇の臺詞を口詠む)　ハテ絶景かな、絶景かな、春の眺めは價千金とは、や小せえ、小せえ、この五右衞門の眼からは萬兩、くれの櫻もまた一しほ、ハテうららかな、眺めぢやなア。(口づさみつつ中途でくるりと向き返り、挽き粉の上まで來ると、まだ木を挽いてゐる兼を見て)　おい。そんなこと、やめつちまへ。阿呆くさい。

(兼、鋸を木の挽き口へ差し込んだまま、汗を拭く。)

音　(挽き粉の上へあぐらをかく)　そんなこと、電氣に頼んでして貰へ。くるくるつと廻つたら、それで了ひぢや。阿呆くさい。俺アもう阿呆らしなつた。東京へ行かうかな、東京へ。東京へ行きアのう、自動車に乘つて、横つちよへ、一寸女の二人位ゐ乘せて、ポーツ、ポーツぢや。良(え)えぢやないか。おい、兼公、東京へ行かんか、うん?東京は良えぞ。こんな山ん中で、鋸(もの)持つてらつきよ食はされて、本當(ほんと)に阿呆らしゆうて言葉が言へんわ。阿呆くさい。

（爺、ひとり默つて森の奥へ行き、小路の端から谷の方を見おろしてゐる。薪を割る音がする。）

（牛が鳴く。）

爺　菜の花は大分良う咲いて來たなア。

晉　（爺の方を一寸振り返り、にやにや薄笑ひを洩し乍ら）お里はまだ來んわ。

（爺、再び晉の傍へ戻つて來る。）

晉　お里は來たかい？

爺　中の谷にや、良え草が生えて來たなア。

晉　おいおい、他人事いふなよ。

晉　何にい？　（と笑ふ）

晉　角力とらうか？

（爺、默つて坐らうとする。）

晉　（急に立上り）ヤツ。（と聲をかけて爺に組みつく）

爺　よせよ、よせよ。（よろよろとして踏み堪へる）

（二人はだんだんと本當の角力をとり始める。そこへ、右手の森の奥から、お里、辨當を下げて樵夫場へ來る。二人はお里の來たことに氣附かない。お里、暫く二人の角力を默つて眺めてゐる。二人は一緒に轉がる。晉、ひとり起き上る）

晉　（お里の立つてゐるのに氣がつくと、芝居の口調で）そこにゐるのは、お里ぢやないか。

（爺、勢ひよく起き上つてお里を見る。）

（お里、二人の方へ近よつて來て辨當を挽き粉の上に降ろす。）

晉　今日はえらうお化粧してるなア。

お里　知らん。

爺　遲かつたのう。

お里　（爺を見て）遲い？

晉　今日の辨當は、何が這入つてるのや？

お里　知らん。、、、、

晉　またらつきようか？　俺アもう、あれにや閉口やぜ。第一、がりがり鳴りさらすことからして、氣に食はんわ。

お里　見てからお云ひ。

晉　（辨當の傍へ近寄り、風呂敷を擴げながら臺詞で。）待て、まて／＼家來共、とかく戰さと云ふものは、腹の空いては出來ぬもの、ここらの茶屋で、ちよいと飯食つて。（急に普通の言葉になり）どうぢやお里さん、俺ア、芝居の役者にならうと思ふとるのやがな。本當やぜ。俺アもう木挽や嫌ひになつた。ねえ、一日せつせと汗水たらしてさ、たつた一圓五十錢はちや貰へやせんしさ、お負けにお里さんにや、嫌はれるし。電氣でくるくると木い挽いてみい、そんなもん、俺のすることたアたつた一分間や。そこへ行くと役者は良え。らつきよは食は

いでも良えし。アツ、こりや今日は蓮根や。おい兼公、今日はめづらしい蓮根やぞ。

（兼、音の傍へ行き辨當をとる。音、ひとりさきに辨當を食べ出す。次いで、兼食べる。鶯が梢の方で鳴く。お里、挽き粉の上へ坐る。）

音　お里さん、今日はひどう沈んでなはるなア。めづらしことや。それに蓮根や。こりや雨が降らにや結構やが。

お里　鶯が鳴いてるわ。（と梢の方を仰ぐ）

兼　（箸で梢を指差し）あつこに山雀が巣をしときよるわ。

音　お里さん、お前、賢いでなア、谷へ降りて、水いつばい汲んで來てくれんかな？

お里　山雀の巣つて、どこに？

兼　そら、あつこの木の叉の所や。赤い葉があるやろ。

お里　はアはア。

兼　あの横つちよの、その上の。

お里　アツ、鶯が飛んでるわ。

兼　ありや眼白や。

音　お里さん、水、汲んで來てくれよ。

お里　私ら、もう澤山飲んで來たわ。

音　言かしやがれ。（と笑ふ）こんねに辛い蓮根食はしときアがつてな。

お里　あんたら、辛い物の方が良かろが。

音　何せい、俺ア酒飲みやないぞ。

お里　さうかて辛い物の方が勢がつくわ。

音　そりや反對や。氣いきかせて水の一ぱい位ゐ、汲んで來てくれ。

お里　私、椿の花が欲しいわ。

兼　何するりや？

お里　私、歸りに八幡さんへお參りして來たいのや。

音　えらう殊勝なこと云ひ出したものやなア。

お里　どこぞに椿の花、無いやろか？

兼　森の奥へ行きやあるわ。ほしけりや後で取つて來てやろか

お里　はア、取つて來ておくれんか。

兼　辨當食うたら行つて來う。

音　椿の花は、もう皆、首がとれてるわ。

（暫く三人は默つてゐる。お里は挽き粉を弄びながら、谷間の方を眺めてゐる。鶯と眼白がしきりに鳴く。）

お里　私、こんな所で一日遊んでゐたいわア。

音　安い女子やのう。

お里　何せ？

音　遊ぶことばつかり考へてゐやがつて。

お里　私、もう御飯炊きやら、洗濯するのがいやになつた

のやもん。それより、前のおれんさんみたいに、朝早うから山へ草刈りに行く方が良えわ。毎日お陽さんの出んうちに山の霧吸うて、草刈りしてたらきつと長生きするわ。

晋　お前らに草刈りや出來るかい。指ばつかり斬つてら。

お里　私、故郷の田舍にゐたときや、毎日これでもしてたのえ。あんたら、馬を良う使ひなはらんやろが、私ら馬の三疋ぐらゐなんでもないわ。

晋　豪さうなこと云ふな。鼠が出りや、飛び上つてるくせになア。

お里　私、これから歸つたら、また晩の準備せんならんのや。もういややわア。一年中こんなことばつかりしてるのやもの。

（晋、綵、二人は辨當を食べ終る。）

晋　お里さん、蓄音機聽かしてやろか。うん？　なかなか上手いぞ。勸進帳や。（唸り出す）

「それつらつらおもんみれば、大恩教主の秋の月は、涅槃の雲に隱れ、生死長夜の長き夢、驚かすべき人もなし。爰に中頃の帝おはします、御名を聖武皇帝と申し奉り、最愛の夫人に別れ、戀慕の情止み難く。」（突然どつと立ち上ると、お里の方へ馳け寄り、その肩を脊後から抱きすくめる）

お里　いややわ、いややわ。

晋　何がいやや、戀慕の情やみ難く、これお里どの。（とお里の顏を覗く）

お里　阿呆らしい。

綵　（苦き顏をする）お里さん。椿や今の方がええか？　歸りでええか？

お里　（綵の方を向き）大きに、取つて來ておくれるか。

綵　澤山入るのか？

お里　一寸で結構やわ。ほんの奉げるだけありや良えのやわ。

綵　ぢや取つて來う。

お里　濟まんなア。

（綵、ひとり森の奥の方へ消えて行く。）

晋　（お里を抱いたまま）今度は何を聽かしてやろ？　新派の方が良えか？

お里　私、何んにも聽きたうないわ。（と沈み込む）

晋　まア聽けよ。俺ア役者にならう思ふとるのや。

お里　（晋の顏を仰ぎ）本當う？

晋　噓云ふかい。

お里　私、いや。

晋　いやかて、仕方あるかい。こんな樵夫みたいな商賣してたら、いまに上つたりや。

お里　(愁ひ氣に)　役者になるの？

音　定つてら、ひとつ、今からうんと稽古しといてやるんぢや。新派が良えか、新派きかしてやろか。ドラマぢやぞ。ドラマつてお前ら知るまいが？

お里　もう良えわ。

音　まア聽いとくもんぢや、稽古臺になつてくれよ。金色夜叉を聽かしてやろ。(聲色)「宮さんお前でも泣くほど酷いと云ふことを知つてゐるのかい。貫一は、貫一は、大馬鹿者にされて仕舞つた。僕は血の涙を流しても足りはせんよ。出し拔に家を出るばかりか、何んの一度の便をせぬ處を見ると、始めつから富山に出合ふ手筈が出來てゐるのだ。それとも一緒に來たのか知れないお前は奸婦だよ。淫婦だ、云はば。」

お里　もう結構やわ。

音　あかん、腹ふくれたら、上手いこと、ドラマも云へん。今度はひとつ好え所を聽かしてやろな。浪さんや、良からうが？

お里　いや、いや。

音　何せや、今日に限つて、どうしたのや？

お里　私、考へごとがあるのやわ。

音　くよくよしたこと云うてくれるない。陰氣くさい。浪さんでも聽けよ。ええか、浪さんが。

(と、聲色を一言云ひかける。)

お里　もうえつたらえ。

音　お前、俺の浪さんやないか。

お里　うるさいわ。

音　武雄さんの云ふこと聽いとれ。そやなけりや、そんなもの浪さんぢやないぞ。

(お里、静に首を垂れてゐる。)

音　(再び聲色で)　浪さんが亡くなれば、僕も生きちや居らんよ。(普通の聲になり)　おい、お前浪さんみたいにせんかい。ドラマやないか。泣かにやあかん。ええか？浪さんが亡くなれば、僕も生きちや居らんよ。

お里　音さん。(と見上げる)

音　(聲色を續ける)「もし私が死にでもしましたなら、あなた、時々思ひだして下さるでせうか。……ああもう、こんな話は止さうぢやないか、それよりか浪さんは、早く養生をして、癒くなつてねェ浪さん。」

(お里、何か云ひたさうに口を動かす。)

音　(續ける)「此のままわたしは死んでもあなたの妻ですわ。未來の未來の後まで、わたしは良人の妻ですわ。」

お里　音さん。もうやめて。

音　聽いとれ。(聲色を續ける)「あなた、もう行らしやるのですか。ああ直ぐと歸つて來るよ。浪さんも充分に注

意して、早くよくなつてゐなさい。ぢや浪さん、行つて來る。ぢや早く歸つて頂戴ナ。直ぐ歸るよ。早く歸つて頂戴ナ、ねエ、早く歸つて頂戴ナ。」
お里　音さん、本當に役者になるの？
音　本當さ。
お里　私、いやわ。
音　良えぢやないか。
お里　私なア。（と、音の顏をぢつと見る）
音　妙な顏するな。
お里　私……。
音　何んぢや？
お里　私これえ。（と下腹に手をあてる）
音　（驚愕……）本當か！
お里　本當う。
音　嘘つけ！
お里　嘘云ふかいな。
音　（お里を突き放す）俺ア、知らんぞ！
お里　まア！（悲痛な顏）
音　そんなもの、知るかい！（立ち上る）
お里　本當うえ、本當うえ。
音　本當でも嘘でも、そんなもん、俺知らんわ。
（お里、挽き粉の上へ顏を伏せて泣く。）

音　下ろして了へ。
お里　（再び顏を上げ、音を睨みながら）あんた、私を瞞したのか！
音　何が瞞した！
お里　瞞したのやないの。瞞したのやわ。私、あんたをそんな人やと思うてなんだ。
音　勝手に言かしなよ。
お里　嘘つきッ、嘘つきッ！
音　何が嘘つきや？　俺やお前に子供産んでくれつて賴んだか！
お里　そんなこと仕方ないわ。
音　それ見よ。
お里　あんた、勝手者や。さんざ甘いことばつかり云ふといて。
音　そりや手前ぢや。
お里　あんたやないの！
音　勝手にぶつぶつ云うてやがれ。俺や、お前みたいな女に惚れたかい。
お里　あんたからやないの。あんたが上手いこと瞞したのやないの。
音　手前が俺をひつぱつたのや。俺は、すまぬけどな、まだ女子みたいな代物に惚れたことがないのぢや。阿呆ら

しい。
お里　役者ッ。
音　へん。役者でも、お前みたいな女に誰が惚れる！　痩せても枯れても、まだ俺や音さんぢや。
（お里、挽き粉を摑んで音に投げつける。音、足で挽き粉を投げ返す。）
お里　嘘つきッ、色魔ッ、阿呆ッ。
音　くやしけりや、泣けッ。
（お里、立ち上り、音を目がけて飛びつく。音、お里の肩を突き飛ばす。お里、ばたりと倒れ、しやくり上げて泣く。が、再び起き上ると、急に悲しげな顔をして音を見詰める。）
お里　音さん、私を捨てたらいやえ、捨てたらいやえ。
音　（笑ひながら）捨てるも糞も、ないぢやないか。
お里　私、捨てたら、私……。
音　もう、やめてくれ。なさけない！
お里　あんた、私を捨てるつもりか？
音　俺や、知らんて。
お里　音さん。
音　俺は、明日から東京へ行くんぢや。
お里　本當か！
音　さうとも。

お里　私を捨てて行くの！
音　捨てるも糞もないぢやないか。お前、俺に惚れてゐやしようまい。
お里　いやや、私。（蒼白となる）
音　もう、なさけない聲出さんといてくれつたら、お前らに相手になつてゐられんわ。
お里　東京へ本當に行くの？
音　本當さ。こんな木挽してたら、十年たつたら飯が食へんやうにならア。
お里　ひとり行くのか？
音　定つてらア。
お里　私も連れてつて。
音　お前、東京へ行つて何にするのや？
お里　何んでもするわ。
音　何が出來るい。それこそ、お前ら淫賣にでもならア。
お里　あて、こんなに頼んでるのに聞いてくれんのか？
音　谷へ行つて、水でも飲んでくるわ。
お里　私を捨てるの！
（音、默つて谷の方へ歩く。）
お里　（膝を立てて）音さん。
（音、谷の方へ消える。）
お里　（立ち上り）音さん……。

お里（默つて音の降りた谷の方を見ながら）阿呆ツ！　阿呆ツ！（と叫ぶ）

（お里、再び挽き粉の上へ坐り込み、顔を伏せる。鶯が鳴く。眼白が鳴く。暫くして、粂、花の咲いた椿の小枝を持つて、森の奥から歸つて來る。お里の泣いてゐるのを見て、暫く立つたまま彼女を眺めてゐる。）

（お里、顔を上げる。）

粂　どうしたのや？

お里（小さな聲で）綺麗なこと。濟まなんだわなア。

粂　お里の傍へ近寄る）どうしたのや？

お里（笑ひながら）何んでもないの。さつきから頭が痛うてな。もう歸ろかと思うてるのやけど、ひどう痛んで來たものやでな。

粂　ひどう痛むのか？

お里（頭に手をあて）いいえ、何んでもないのやわ。（谷の方へ眼を外らす）菜畑は綺麗やなア。櫻の花より、私（あて）菜の花の方が好きえ。（急に思ひついた如く）ア、せつかく椿とつて來てもろといて忘れたわ。大きに。大分（だいぶん）奥の方まで行つたの？

粂　いや。音公はどこへ行つたのや？

お里　谷へ水飲みに降りて行つたわ。

（粂、椿をお里に渡す。）

お里（椿の花を眺めながら）これ、單重椿（ひとへつばき）やな？　蜜があるやろか。私（あて）、小（ち）いちやい時によう椿の蜜を舐めて鼻を眞つ黄にしたわ。

（粂、お里の傍へ腰を降ろす。）

（お里、また沈み込む。）

粂（自分の膝を兩手で抱き）あつこにゐる牛は、ありやどこの牛かいな？

（お里、粂の見てゐる前方を見る。）

粂　ええ牛や、なかなか。

（お里、また沈み込んで默つてゐる。）

粂（お里を見て優しく）まだ頭痛（あたまいた）いのか？

お里（粂をなまめかしく見上げるやうにして）もう癒つたの。

粂　音公が何んどしたのか？

（お里、椿の花瓣を弄びながら）あの人、私（あて）、大嫌ひえ。

粂　何（なん）どしたのか？

お里　ううん。（と頭を横に振り）あの人うるさうて。

粂　音公どないしたのや？

お里　何んにもしやへんけど、ドラマやたら何んやたら云うて、芝居の眞似ばつかりしてるやもん。私（あて）、いやらしゆうて、いややわあんな人。

粂（谷間の方を眺め）もう上つて來よるやろか？

お里　粂さん。（あたりを見廻す）
粂　何んぢや。
お里　あんたなア。
粂　うん。
（お里、益々なまめかしく）・私……。
粂　何んぢや？
お里　羞しわ。
粂　何んぢや、云はんか？
お里　あんた、私、ほんとに好き？
粂　うん。
（お里、沈む。）
粂　好きや。
（お里、默る。）
粂　俺や、好きやが……。
（お里、なほ默りながら嬉しさうに媚ぶ。）
粂　何んぢや？
お里　私、ほんとうに嬉しいわ。
（粂、喜はしげに、片手をお里の肩にかける。）
お里　粂さん、私な。
粂　うん。
お里　………。
粂　何んぢや？

お里　さうかもう云はんとかう。
粂　云へよ。俺ア……。
お里　怒るわ。
粂　怒るかい。何んぢや？
お里　………。（俯向いてゐる）
粂　（にじり寄り）どうしたのや？
お里　（益々なまめかしく粂を見詰め）私、これえ。（と片手で自分の下腹を持ち上げるやうにする）
粂　（氣附かぬらしく）これつて何んぢや。
お里　これ。（と前と同じき眞似をする）
粂　そりや、どうしたのや？
お里　子供が出來るのやわ。
粂　（爆けるやうに喜ぶ）本當うか！
お里　ええ。（微笑）
粂　本當うか！
お里　ほんと。
粂　さうか。本當うか、嘘云へ！
お里　嘘云ふかいな。
粂　いつや？
お里　もう三月。
粂　うまい。本當うか。嘘云ふなよ。
お里　（喜ばしげに）本當うやつてば。私、そやで今日も

歸りに八幡樣へ參つて、椿を奉げて來ようと思うてるのやわ。そやで、あんたに賴んだの。
粂　さうか。そんなら、俺や用意せんならん。三月か。
お里　ええ。
粂　三月なら、もう後、七月や。そしたら、二人で俺の故鄕へ歸ろ。
お里　連れつて來れるか？
粂　うん。行こ行こ。お前、もう丸髷結うたらええ。俺にや、今五百圓貯金したるのや。
お里　そんねに澤山？
粂　うん。歸つたら、それで山を買はう、山買うて杉苗植ゑるのや。そしたら、一年たちや二尺になるわ。來年の春が來たら、山いつぱい芽が出る。サツと芽が出たら、もう締めたものや。五百圓が、いつぺんに千圓になる。そしたら。
お里　千圓に？
粂　うん、千圓位ゐ見てる中や。そしたら、田を買うて、家建てて。
お里　家も建てるの？
粂　建てるともい。お里さん、何んど買うてやろか、何が欲しい？
お里　私、もう何んにも入らんわ。（不安さう）

粂　お召しか、小紋縮緬の方が良えか？
お里　私、入らんわ。（ますます不安さうな顏になる）
粂　さうかて、何ぞ入るものがあるやろが？
（お里、默つて俯向いてゐる。）
粂　さうか、三月か、そりやうまい。
（音、谷の方から上つて來る。）
音　中の谷の水飮まうと思うたら、蛭がゐやがつた。あつこの水は、臭うなつたなア。
粂　（默つて立ち上り、うろたへ氣味で）さうか。（と云ふ。また直ぐ坐る。顏赤し）
お里　（前方の景色を眺め）粂さん、あつこにゐる牛は、あれは又次郎さん所の牛やえ。朝鮮牛やもん。
粂　（音を見て、少し媚びた氣持で）蛭がゐよつたてか！
（音、注意深く默つて粂の顏を見詰めてゐる。また、鶯が鳴く。粂の顏いよいよ赤い。）
粂　俺も、もうあの水は飮まんわ。
（音、にやにやと笑ひ出す。粂、そわそわしく前方を向く。）
音　ははア。（とひとり合點貌）
お里　（あたりを見廻し）もう鶯が鳴かへんわなア。どこへ行きよつたのやろ？
粂　（上を仰ぎ）今まで鳴いとつたな。毎日三べん位來よ

るのやが。どこぞそこらに巣かけてあるやろ。
晋　兼公。
兼　うん。
兼　お前、その女に瞞されやせなんだか？
晋　何にい？
晋　瞞されたら、あかんぞ。
兼　阿呆云へ。
（お里、憎しさうに晋ん睥む。その中に慄へて來る。）
晋　そんなら云ふとくが、そ奴ア、仕様のない女やで、お
前、ひつかかつたら駄目ぞ。
兼　何ぜい？
晋　ひつかかつたのか？
（兼、默る。なほ顏赤し。）
晋　何んぢやい、もうひつかかつたのか。お前や、女にの
ろいで駄目わ。
お里　ひと、阿呆にするなッ。（怒聲）
晋　どつちがぢや？　（と笑ふ）
お里　ひと……本當に色魔ッ。
晋　手前ら默つてよ。おい兼公。お前ほんとに、そ奴に瞞
られたのかい？　その女は、淫賣みたいな奴やで、そ奴
の稽古臺になつたら駄目せ。
（兼、晋を見上げて怒る）

晋　お前、俺に怒つてるなア。俺は、お前のため思うて云
うてるのやぞ。何も俺は、やきもち燒いてるのやないぞ。
ええか。
兼　俺の勝手ぢや！
晋　（嘲笑しながら）こりや駄目ん。
兼　（なほも怒り）何んぢやい！
晋　おい、兼公、しつかりせッ。
（兼、默る。）
晋　そ奴を蹴倒せッ。
兼　何にッ！
晋　そ奴を蹴倒してやれッ。
（兼、立ち上つて晋に飛びかからうとする。）
晋　（ますます嘲笑の微笑を浮べ）お前や、阿呆らしゆて、
言葉が云へんわ。あかんあかん。（と横を向く）
（兼、力の入れ所なく突き立つた儘拳を握つてゐる。）
晋　俺を擲打る氣か？　擲打るなら擲打れ。そやけど、そ
奴に瞞されたら八年目ぢや。その我鬼や俺を瞞そとしや
がつたのやが、俺が、あつちやこつちやに瞞してやつた
もので、お前に食ひつきさらしたのや。お前に何ぞ手管
しやがらにや良えがと思ふとつたのやが、とつとやりや
がつて！　くそめ！　おい、お里。
（お里、悲しみと怒りの表情でその場に泣き伏す。兼、

音を見て慄へてゐる。苦悶。）

音　（お里に）お前みたいな奴ア、歸んで來いッ。

（音、辨當の空箱をお里の頭の傍へ投げつける。）

爺　（いかり立ち）俺や、かまふかい。瞞されても良えのぢや。

音　そんなら、ええわ。

爺　抛つとけッ！

音　そんなら云ふが、そ奴ア、俺の子供を産みよるぞ。

爺　何にッ！

音　それでも良けりや、俺も良えわ。勝手にするぢや。

爺　本當うか！（立ち、徐々苦悶）。

お里　嘘やわ、嘘やわ。（と顔を上げて叫ぶ）

音　まだ、そんなこと言かしてやがらア。

お里　嘘やッ嘘やッ。（再び泣き伏す）

音　おい、爺公、怒るな。そんな女なら、今に俺や千人でも世話してやるわ。抛かして了へ。

（爺、なほも慄へてゐる。）

音　俺やお前がそ奴に氣があつたのをうすうす知つてたけど、そんな奴にお前が瞞られたら、それこそ一生臺なしやと思うたで、俺も瞞つといてやつたのぢや。そんな奴ア、そんな手管しやがるのは、定つてるのぢや。

（爺、手を垂れ、呆然としてゐる。）

音　お里、早よ歸ね。

（音、自分の鋸の突き刺した木の方へ歩む。）

（一同沈默、鶏が遠くで鳴く。）

音　爺公、早よ仕事せいよ。

（音、ひとり木を挽きにかかる。）

（爺、なほも動かず。）

音　（爺の方を見て）お前、そんねに惚れてたのか？

爺　………。

音　俺やまた、お前もお前流に瞞つてたのやと思ふとつたのやが。何ンんぢや、阿呆くさい。（木を挽く）

（お里、起き上り、頭の傍の辨當箱を拾ひ、音をめがけて投げつける。）

音　（笑ひながらお里を見て）へん、歸ね歸ね。

お里　色魔ッ、嘘つきッ。

音　口惜しけりや、かかつて來い。

お里　阿呆ッ！

音　今度ア、誰の番ぢや！　うん？　せんど稽古しといて、子供でもころころ産んでくれ、あはははは。（又、木を挽く）

（お里、椿の花を忘れたまま谷の方へ歩く。）

（爺、動かず。）

音　おいお里、辨當の空箱でも持つて歸れ。

音　（お里、消える。）

音　（振り向き）何んぢや、をらんのか、犬みたいな奴やなア。兪公、こつちへ來んか。うん？　あんな奴は、あれで良えのぢや。

（音、鋸を放し、兪の傍へ寄り優しく肩に手をかける。）

音　おい、怒るなよ。あんな奴ア、食はしときや良えのぢや。なア。今に俺ア、もつと良えのを世話してやろ。保證づきのをのう。しつかりせッ。（と肩を叩く）

（兪、音に誘はれるままに鋸の傍へ歩んで行く。）

音　それよか、一緒に東京へ行こ、東京へ。こんな商賣は、ええ加減にきりつけてやめつちまはう。そやなけりや、今に俺ら上つたりや。なア。

（音、木を挽きにかかる。兪、ひとり默々として立つてゐる。）

音　俺や役者になるでなア、そしたら、お前仕事が手につくまで、俺は養うてやるわ。何アんの、二人位ゐ、どこででも食へるが。そんなこたア、へのかつぱぢや。（急に聲色になり）そこへ行きやるは、おかるぢやないか。さう云ふお前は、勘平さんかッ。

（音、ひとり木を挽く。兪、なほ立つたまま谷間の方を見て、ぼんやりとしてゐる。）

音　何を考へてるのや？

（兪、低い聲で）俺や、あ奴が好きや。

（音、鋸から手を放し、ぼんやりとして兪を見上げる。牛が鳴く。どちらも無言。）

兪　（突然）おい。東京へ行こか？

兪　俺も連れてつてくれんか？　いつ東京へ行くのや？

（音、淋しげになほも默る。）

兪　仕事しようか。どれ。

（兪、手に唾をつけ、鋸に手をかける。自分の感情を見せたくないかの如し。）

音　お前、あの女に、そんなに惚れてたのか？

兪　いや、何に……。

（音、首を垂れて默々としてゐる。）

（兪、ひとり木を挽く。）

音　（見上げ）ほんとに惚れてたのか！

（兪の鋸の音ますます激し。間、沈默長し。）

音　（自然自嘲的に）阿呆くさい。何んぢやあんな奴！（立ち上る）おい、お里の奴を、擲打りつけてやれ。

兪　（自分の鋸の齒痕を見詰め）アッ、こりや失敗た　目が大ぶ脫れやがつた。

（二人、默々と竝びながら、木を挽き出す。）

――をはり――

邦枝完二篇

中村仲藏（三幕）

人物

中村仲藏　役者（三十二歲）
おきし岸　その妻（三十歲）
中村傳九郎　仲藏の師匠（六十歲）
お近　その妾（四十歲）
岩田長十郎　浪人（二十八歲）
櫻田治助　作者（三十三歲）
金井三笑　立作者（四十八歲）
尾上菊五郎　初代（五十歲）
中村富八　役者（五十二歲）
中村鶴藏　仲藏の弟子（二十三歲）
その他――群衆、芝居者等。

時代

明和三年秋のはじめ

場所

江戸

第一幕

三圍のほとりに在る中村傳九郎の隱居所。庭を前にした八疊敷くらゐの、茶室がかつた一室。庭には一面に秋草が咲き亂れてゐる。草葦の深々と若青く、下手に柴垣、枝折戶。上手に松の古木が一本。その木の下の古池に、生ひ茂る蘆の葉末を越して、彼方に、銀の帶を展げたやうな隅田川が流れてゐる。

隅田川の上空には、淺草寺の五重塔をほのかに浮き出させて、鎌のやうな三日月が若い。

座敷は廻り緣附で、床の間には芭蕉の「三日月や早や手にさはる草の露」の句を掛け、違ひ棚には女郎花の投入が置いてある。

日は落ちたが、あたりはまだ、まつたく暮れきつてはゐない。が、屋内には靜かに籠行燈がともされて、うらぶれた蟲の音は、一入風情を添へてゐる。

老優傳九郎が、妾のお近に酌をさせながら、夕餉の膳に對つてゐる。

傳九郎　（庭を見ながら）けふは夕立があつたせゐか、庭の草木が、久し振りで生き還つたやうだの。

お近　ほんに、いい按排で御座んした。萩や桔梗は、いく

ら打水をしましても、やつぱり自然の雨に逢ひませんと、いい花を見せてはくれませんから……。

傳九郎　何んと云つても、自然の力ほど強えものはなからうて。おかげでかうしてゐても、體中が伸び伸びするやうだ。酒はよし、庭もよし、この氣安さは、お大名でも滅多に味へることぢやアあるめえ。（お近に猪口を差して）ひとつ、お前も飲んだらどうだ。さすがに宮川の旦那が、自慢でお屆け下すつただけあつて、灘物はまた格別の味がある。

お近　ではひとつ、御相伴いたしませう。（猪口を受けて飲む）

傳九郎　どうだ　こくのあるいい味だらう。灘の酒は、船で揉まれるたんびに、味が出ると云ふことだが、かうして飲むと、一層そんな氣がするな。

お近　わたしなどには、よく判りませんが、どうやらとろりとした味の、いい御酒で御座んすねえ。

傳九郎　古い御贔屓は有難えものだ。足をわるくしてから舞臺を引いて、かうした隱居の身になつても、時をりは思ひ出して下さると見えて、何やかやとのお心添へ、身に沁みて、勿體ねえやうなことばかりだ。

お近　（傳九郎に猪口を返して、酌をする）宮川の旦那様は、お目に掛るたんびに、親方がもう五年も働けたらと、そればつかりを、口癖のやうに惜しんで御座んす。

傳九郎　いや、そいつを云つてくれるな。役者に年なし。六十五と云へばまだ舞臺ぢや使へる體だが、去年稽古場で怪我をしたのがこの身の不運。御贔屓の方達にや濟まねえと思ひながら、片輪の體を舞臺に晒すのがいやさに、ふつつり身を引いてしまつたのだ。もとより藝に飽きたといふわけでもなし、いまだに三座の噂を聞いたり、番附を見たりする度に、舞臺に殘る未練が、腹の底から湧いて來るのを覺えはするが、今更そいつを云つたからとて何んにならう。だが、役者は廢めた後までも、惜しいと云つて戴けるやうなら、何よりの本望といふもの。おれはもうそれだけで、冥加に餘るほど嬉しい氣がしてゐるのだ。（間。床の間の句を讀む）三日月や早や手にさはる草の露――（立つて上手の障子をあける）お近、ここへ來てあの月を見るがいい。人の未練を笑ふやうに、小氣味よく冴えてゐるぢやアねえか。

お近　（緣先に出る）ほんによく冴えた、三日月樣で御座んすこと。

（二人は、蘆の葉末にかかる三日月を見守る。）

（間。）

（遙かに高く雁の聲。）

傳九郎　早えものだなア。きのふまで、蜩の聲を聞いてゐ

たと思ふ間もなく、もう雁が渡つて來る。年を取ると、月日の經つのが、格別速いやうな氣がしてならねえ。

お近　この三圍へ來ましてからまる一年。去年も初雁を聞きましたのは、葺屋町の初日が、間もなく開かうといふ、今頃だつたで御座んせう。

傳九郎　さうだつたの。去年お前と二人、龍願寺の萩を見ての戻りを、仲藏夫婦に送つてもらつた、舟の中で聞いたのを覺えてゐるが、思へば月日の經つのは、嘘のやうに速えなア。

お近　「雁のようこそおいで待乳山」あの時親方が、人眞似だと仰しやつて、お扇子へ書いておやんなすつた句を、仲藏さんは、いまだに大切にしてゐると、いつも云つてで御座んした。

傳九郎　うむ、そんな風流めかしたこともあつたつけなア。(間)だが仲藏と申へば、この月に這入つてから、まだ一度も見えねえやうだが、ひよつとまた、お岸でも煩つてゐるのぢやなからうかの。

お近　さア、わたしも疾うから、氣にしてゐるので御座んすが、この間百本杭で、杵屋のお弟子衆に逢ひました時も、別にそんな話は聞かずにしまひました。――もう今度の番附もきまつた時分ですし、それやこれやで、忙しいので御座んせう。

傳九郎　大きにさうかも知れねえの。何んでもこの秋の葺屋町は、菊五郎が上方へ歸んなさるとかで、由良之助を出すとの噂もあつたやうだが、忠臣藏が出るとなりやア、まづ仲藏のところへは、師直か平右衛門が行つただらう。どちらにしてもあいつには初役、藝氣狂と云はれるだけに、三度の飯も忘れて、役の工夫をしてゐるのかも知れねえ。

お近　必ずさうに違ひありますまい。お岸さんが煩つてゐるのなら、誰かが知らせにまゐります。いつもの仲藏さんの氣性から、いつそ稽古に凝つてゐるので御座んせう。(間。――ふと膳の上に氣付いて)おや、これはうつかりしてゐるうちに、お燗が冷めてしまひました。熱いのと、付け直してまゐりませう。(立上る)

傳九郎　折角の灘の上酒も、燗冷しになつちやア業なしだ。ちと熱めに付けて來てくれ。――おお、それにきのふ、梅里さんがくれた鹽辛があるぢやアねえか。

お近　さうさう、すつかり忘れて居りました。一緒に持つてまゐりませう。

(お近は瓦燈口から去る。)

(傳九郎は、默つて庭を凝視してゐたが、やがて縁先から下り立つて、池の燈籠に灯を入れ、再び座敷に戻る。)

（長き間。蟲の音が靜かに聞える。）

（庭の枝折戸から、春信の繪姿がその儘脱け出したやうな、仲藏の妻のお岸が這入つて來る。傳九郎は氣付かずに、燈籠の下陰に亂れる秋草を眺めてゐる。）

お岸　（徐かに緣先近くへ來る）　御免下さいまし。御免下さいまし。

傳九郎　（お岸を見てびつくりする）　おお、お岸か。

お岸　はい。御無沙汰いたしました。

傳九郎　（お岸を沁々見詰めながら）　よく來たなア。別に誰にも變りはねえか。

お岸　はい。

傳九郎　まア早く、こつちへ上んねえ。

お岸　では御免下さいまし。（上つて下手に坐る）　こちらさまでも、どなたにも、お變りは御座んせぬか。

傳九郎　みんなおかげで健だがの。――お前ひどく、顔色が勝れねえの。何か心配事でも、出來たのぢやねえのか。

お岸　いいえ、別に……

傳九郎　そんならいいが、ふだんから、あんまり丈夫の方でもねえやうだから、今もお近と二人で、お前の噂をして案じてゐたところだ。（奥へ向つて手を叩く）　お近、おいお近。

お近　（銚子と盃とを持つて出て來たが、お岸のゐるのを見て驚く）　まアこれはお岸さん！

お岸　どうも御無沙汰いたしました。

お近　御無沙汰はお互で御座んすが……（沁々見て）　お前さん、この夜道を、わざわざお一人で……

お岸　わざわざといふ譯でもありませぬが、觀音樣へお詣りの歸りを、今戸から渡船で廻つてまゐりました。

お近　それはまア。――では先刻の夕立に、どこぞでお遇ひなさんしたらう。

お岸　夕立に、丁度觀音樣で遇ひましたが、しばらくお堂で休んで居りますうちに、どうやら空も晴れましたので……

お近　（茶を入れながら）　それはよう御座んした。――でも觀音樣からは、川さへ越せば、遠い道ではないやうなものの、日が暮れてからの土手は、滅多に人通りも御座んせぬ。御府内とは打つて變つたこの寂しさ。怖いとも思はずに、よく來て下さんしたねえ。

傳九郎　（手酌で飲みながら）　男なら、すぐさま一杯獻ずるところだが、お岸ではそれもなるめえ。（お近に）　ここはいいから、ひとつ裏の木に生つた、柿でも剝いて持つて來ねえか。

お岸　もうどうぞ、お構ひ下さいますな。

お近　珍らしくもありますまいが、田舍には、田舍の味が

御座んせう。――では直に取つてまゐります。
（お近は奥に入る。）
（間。）
傳九郎　時にお岸。今度の狂言は、もう極まつたらうの。
お岸　はい。實はそれをお知らせにまゐりました。
傳九郎　ほう、その知らせに來てくれたのか。で、今日きまつたばかりかの。
お岸　それが、丁度十五日の日に、極つたので御座んした。
傳九郎　何、十五日に極つたと。すりアもう今日で、五日にもなるぢやアねえか。
お岸　はい。
傳九郎　そいつはちつとも氣がつかなかつた。……なぜもつと速く、知らせてはくれなかつたのだ。
お岸　いつもなら、お役が極ればその日のうちに、お知らせにまゐるので御座んすが、今度ばかりは、兎も角番附の出來るまで待てと、主人にとめられましたので……
傳九郎　ほう、仲藏は、お前が來るといふのをとめたのか。
お岸　はい。
傳九郎　そいつア稀有だの。――さうして狂言は、どんな風に極つたんだ？
お岸　「稚兒模樣近江八景」と、「忠臣藏」のふた立で御座んす。
傳九郎　うむ、ではやつぱり噂の通り、菊五郎は「由良之助」を出すんだな。あの人の由良之助なら極め附だ。こりやアきつと當るだらう。すると仲藏のとこへは、師直が行つたか。それとも平右衞門かの。
お岸　實は主人もわたしも「忠臣藏」が出ると聞きました時は、今親方の仰しやつたお役のうち、どちらかが戴けるものと、極めてゐたので御座んすが……
傳九郎　何？　それぢやアどつちも、お前のうちへは行かねえのか。
お岸　はい。殘念ながら、どちらもほかのお人へ廻りました。――そんな譯合から、主人は、切破詰るまで、親方にお知らせしたくなかつたので御座んせう。
傳九郎　うむ。してお前のとこへは、どんな役が舞込んだのだ。
お岸　五段目の、定九郎一役で御座んす。
傳九郎　何、あの定九郎一役？
お岸　はい。
傳九郎　それを仲藏は、承知で受けて歸つて來たのか。
お岸　三笑さんへの意地づくから、引受けたと申して居りました。
傳九郎　さうか。（間）ではやつぱり三笑は、この春狂言のいきさつを、いまだ根に持つてゐるのだな。卑怯な奴

め。立作者ともあらうものが、何んといふ男らしくねえことをしやがるのだ。（お岸に）定九郎と云へば、お前も知つての通り、名題役者のする役ぢやアねえ。それを無理に押付けて、敵を討つ氣は淺間しい。（無念さうに）仲藏は、なぜその場で、書拔を突返してやらなかつたのだ。
お岸　わたしもそれを申したので御座んすが、ちつとばかりの評判のいいのを笠に着て、役を蹴つたと云はれては、日頃お目を掛けて下すつた、御贔屓樣に申譯がない。憎い犬は撫でてやれ——さう思つて、口惜さをおさへながら、受けて來たと申して居りました。
傳九郎　（獨言のやうに）憎い犬は撫でてやれ！　うむ、仲藏はさう云つたか。
お岸　はい。これもこつちが、小さいばかりの負け戰だ。大きくなれば五分と五分。意地づくでも、今に辱をかかせてやると、身を顫はせて居りました。
傳九郎　（感激して）でもよく辛抱して來たなア。——お岸。仲藏のその辛抱は、きつと三笑を見返すぞ。
お岸　有難う御座んす。わたしも唯、そのことばかりを希つて居ります。
傳九郎　おれは、いい弟子を持つて嬉しい。だが、それだけの覺悟をきめるまでには、どんなに腹で泣いたことか。さぞ胸も、張り裂ける思ひだつたらうなア。
お岸　（胸が一杯になつて）お察しの通り、お役を受取つてまゐりました晩は、お茶一服も口にいたしませんで、口惜がつて居りました。それゆゑ今でも引續き、お稽古に出ますほかは、朝から夜おそくまで、一間の内に、閉ぢ籠つて居りまする。
傳九郎　さうか。——さうしてそののち、何んとかいい工夫が附いたやうかの。
お岸　どうやらまだ、そこまでは漕ぎ着けないやうで御座んす。唯、日頃一途の氣性から、もしもこの工夫が付かないやうなら、江戸の舞臺もこれぎり捨てて、上方の土になる氣だと、きつい覺悟を申して居ります。
傳九郎　（仲藏の氣持を察しながら）そりやアもう、さうなくては叶はねえことだが、一途にあせつても仕方がねえ。——と云つても、初日までには、あとまるまる數へて十日足らず、いまだに工夫が付かねえとあつては、さぞかし毎日、切ねえ氣持でゐることだらう。一時も速く、氣の晴れるやうな、いい工夫をさせてやりてえなア。
お岸　わたしも明け暮れ、そのことばかりを案じて居りますが、何を申しますにも女の身、氣だけはあせりながら、さて舞臺のことになりますと、何んとしやうも御座んせぬ。

傳九郎　そりやアお前が、氣を揉むのも尤もだが、月に懸つた雲同樣、風の吹くのを待つよりほかに仕方があるめえ。――きのふまでのおれだつたら、自分の弟子に、こんないやな思ひをさせるんぢやアねえが、何をいふにも、今はかうした隱居の身の上、お前もさぞかし、腑甲斐ねえ師匠だと思ふだらうが、辛抱してくれねえよ。

お岸　勿體ない。どうしてそんなことが御座んせう。これもみんな、降つて湧いた主人の災難、今も仰しやる通り、月に懸つた雲で御座んす。やがて晴れたら、笑つて見る日がまゐりませう。

傳九郎　芝居道ばかりとは限らず、所詮は眞直な者の勝つのが、世のためしだ。己の性根の曲つてゐるのに氣が付かず、人をひが目で見るやうな三笑などに、いいことがあつてたまるものか。（間。手酌で續けて飮む）　さうしてお前は、その願掛に、觀音樣へ來なすつたのだの。

お岸　はい。かうなりましては、日頃信ずる觀音樣へ、お願ひ申すより思案は御座んせぬ。座に本讀のありました日から、觀音樣へ、お百度を上げて居りまする。

傳九郎　そいつア豪儀だ。――仲藏は日頃から、藝にかけては、一歩も引く男ぢやねえだけに、いづれ稽古が乘つてくれば、巧え工夫も考へられよう。まアそれを樂しみに、せいぜい側から勵ましてやるがいい。

お岸　有難う御座んす。そのお言葉を力に、吉い日の來るのを待つて居ります。

（傳九郎は三笑を憎むこころの、お岸は良人を思ふこころの、互ひの沈默が續く。）

（お近が、捥ぎたての御所柿を、五つばかり盆に載せて持つて來る。）

お近　どうもお待たせしました。久助に取らせようと思ひましたら、大方また、酒屋へ將棋を差しにでも行つたので御座んせう。いくら呼んでもまゐりませぬゆゑ、低いところを少しばかり、自分で捥いでまゐりました。

お岸　まアこれはお見事な。

お近　田舍の御馳走は、まづこんなところで御座んす。（直ぐに剝きはじめる）

傳九郎　お近。

お近　………。

傳九郎　今、お岸から聞いたのだが、仲藏は、今度五段目の定九郎一役ださうだ。

お近　（驚く）　まア、あの定九郎を！

傳九郎　この春の「釣狐の工藤」に、あいつは三笑の言ひつけを反いたばかりに、上々吉の評判を取つたのだが、あの仕打が、三笑にやアたまらなく癪に觸つてならねえのだらう。そいつを根に持つてやつたのが、今度の定九

郎に違えねえのだ。
お近　仲藏さんはその書拔を、受取つたので御座んすか。
傳九郎　さうだ。――だが、わが弟子の肩を持つ譯ぢやアねえが、今三座の中で、實惡の表看板を揚げさせたら、あいつ程の腕ッこきは二人とあるめえ。その腕達者に、あらうことか、相中役者のやる定九郎を振るとは、三笑も三笑だが、第一に、太夫元の氣が知れねえわ。
お近　ほんにさうで御座んすとも。たとへお作者に、どのやうな意趣遺恨がありませうとも、定九郎などは、斧藏あたりへ廻せば濟むで御座んせうに。なんぼなんでも、仲藏さんがお氣の毒で御座んす。（お岸に）したが、いつそ突返しても濟むやうなあんな端役を、覺悟の上で受取んなすつたとあれば、初日のあくまでには、きつと立つた役にしなさるは知れたこと。お岸さんも、あんまりくよくよしないがよう御座んす。
お岸　はい。今も親方からそのお言葉。ひと筋に觀音樣におすがりして、凶が吉になる日を待つと致しませう。
お近　それがよう御座んす。樂屋で何んと云はうとも、お客樣にさへ賞めて頂ければ、裏で負けても、表で立派に勝てませう。（間。氣を變へて）まアあんまり口惜しいお話なので、柿を剝くのが、お留守になつてしまひました。（剝いて樂燒の皿に入れる）自慢するほどの味でも御座んせぬが、一つ摘んでおくんなさいまし。
お岸　大の好物、遠慮なしに頂戴いたします。（一きれ取つて食べる）
（間。）
（風におくられて、廓の騷ぎが聞えてくる。）
傳九郎　また今夜も、西が吹いてると見えて、廓の騷ぎがよく聞えるなア。
お近　ほんに人の氣も知らないで、のんきな人達で御座んすねえ。
傳九郎　いやさうばかりも云へまいて。三味線彈いて、太鼓叩いて、のんきさうにしてゐながら、腹で泣いてゐる人もあらう。――世の中は樣々だ。
（間。――三人三樣の物思ふ心持。）
お岸　（ふと）もう何時で御座んせう。
傳九郎　さア、間もなく六つ半にならうかの。
お岸　それでは主人も、疾うに芝居から戻つて居りませう。お門口で、おいとませうと思ひながら、つい飛んだ愚痴まで、お耳に入れてしまひました　あんまり更けないうちに、おいとまいたします。
傳九郎　もう歸るとお云ひなさるのか。
お岸　はい。
傳九郎　歸ると云つても、この夜道を、お前一人で歸すわ

けにもゆくめえ。まあ今夜は泊つて、ゆつくり話して行くがいいぢやアねえか。
お岸　いつもならば、さうさせて頂くので御座んすが、今日は留守居の者にも、斷りなしで出てまゐりました。折角ながら、これで御免を蒙ります。
お近　でも、もう竹屋の渡しは御座んすまい。
お岸　はい。お厩河岸まで、土手をまつすぐにまゐります。
傳九郎　(お近に)　それぢアお前、裏へ行つて、駕を頼んでやるがいい。
お岸　いえ、もうそれには及びませぬ。
傳九郎　この夜道を、若え女をたつた一人で、歸せるわけがねえぢやアねえか。まアいいから、こつちへまかせておきねえ。
お近　では、ちよいと待つておくんなさいまし。
お岸　申譯が御座んせぬ。
(お近は奥へ去る。)
傳九郎　それはさうと、お倹や杵屋さんの方では、變りはねえかの。
(間。)
お岸　はい。おかげでどうやら、健で居りまする。
傳九郎　おれもこつちへ引込んでからは、好きな芝居さへ見ずにしまふほど、出不精になつたので、ついどこへも無沙汰勝だ。會つたら、お前から宜しく云つてくんねえよ。
お岸　かしこまりました。よくお傳へ申しませう。
傳九郎　しかし、かうしてゐると、人には義理を缺くやうになるが、年寄の暮しには、至極靜かで罪がねえからの。このあばら屋に、お近と久助の三人きりで、見るものは庭の草木と、上り下りの帆影ばかり。それに近所の人達は、勿體ねえやうに親切だ。人が轉べば、我れ先に踏みつけて行かうといふ、芝居の暮しを長年續けて來た身には、生れ變つた世界のやうな有難え氣がしてならねえ。
お岸　でも親方は、毎日かうしておいでなすつて、寂しいとは、お思ひなさいませんかえ。
傳九郎　その寂しさに慣れたのだらう。唯、年頃贔屓にして下すつた方達から、物を届けて貰いたり、弟子達が、儘にならねえ話を聞いたりした時だけは、もう一度、達者な體に返りてえと、そんな未練も湧いて來るが、今ぢやアそれも、みんな運だと諦めてゐるのよ。
(お近が戻つて來る。)
傳九郎　どうだ、間に合つたかの。
お近　はい、ぢきにまゐります。丁度上野の山下へ、長命寺の和尚さんを、迎へに行く駕籠が出ると申しますので、途中では御座んすが、雷門まで頼みました。

傳九郎　そいつア豪勢都合がよかつた。雷門まで行きさへすりやア、廓の歸りがいくらも來よう。では駕籠の來るまで、もう一つ茶を入れねえ。

お近　はい、はい。（茶を入換へる）

お岸　何から何まで、飛んだお手數をかけまして……

傳九郎　大した手數といふわけぢやアなし、そんな斟酌にや及ばねえ。

お近　（盆の上の柿を紙に包んで、茶と一緒にお岸の前へ出す）久助さへ歸つてくれば、もつと取つて上げるつもりで御座んしたが、生憎と、ほんの少しばかりで、お土産にもなりますまい。お笑ひ草に、お邪魔でも……

お岸　まアこれは、何よりで御座んす。早速歸つて、觀音樣へのお燈物にいたしませう。

（この時駕籠屋が、枝折戸の外へ來る。）

駕籠屋　どうもお待どうさまで。

お近　ああ駕籠屋さんかえ。ちよいと待つておくんなさいよ。（お岸に）まゐりました。

お岸　では折角の御親切、戴いてまゐります。親方もお二人さんとも、どうぞお體をお大事に……。

お近　有難う御座んす。お前さんもどうぞ。

傳九郎　ではお前、さつきの一件は、あんまり心配しねえがいいぜ。

お岸　はい……。

お近　氣を大きく持つて、ゐたがよう御座んす。

お岸　はい。……では御機嫌よう。（庭におりる）

傳九郎　（駕籠屋に）若い衆、女客だ。頼むよ。

駕籠屋　へい。

（お近は枝折戸のところまでおりて來る。）

お岸　（駕籠の中から）御免下さい。

お近　お氣をつけて……。

（お岸をのせた駕籠は威勢よく棒鼻を切る。）

（傳九郎も緣まで出て見送つてゐる。）

（ふと寂しい間）

傳九郎　（座敷へ戻つて）お近、まだ駕籠は見えるか。

（再び空高く雁の聲。）

お近　いいえ、もう芦の蔭に隱れて見えませぬ。

傳九郎　（間）早くいい工夫をさせてやりてえなア。（間）お近。もう一本熱いのを附けてくれ。

お近　はい……。

（二人は猶も、見るともなしに、既に見えない駕籠の行方を見守つてゐる。）

――靜かに　幕――

第二幕

第一場

住吉町の仲藏の住居。

（第一幕目から七日の後である）

秋雨のしとしとと煙る夜明け方。――窓の外に大きな柳のある二階の一室に、歌川豐春が、春の當り狂言「法界坊」の圖を畫いた二枚屛風を背にして、正面の窓際近く、唯一人机にもたれた仲藏が、額に手を當てた儘、吸ひ着いたやうに考へ込んでゐる。――あたりは、樣樣な書籍や畫本が、亂雜に置いてある。

半面を照す行燈の灯影も淡く、時をり窓の障子に、雨に濡れた柳の糸の觸れる音が、如何にも靜かに沁々と聞える。

長い間。

ふと油が盡きて、行燈の灯が消える。それでも仲藏は、机の上を凝視した儘動かずにゐる。

灯が消えると同時に、部屋の中は一度眞暗になつて、仲藏の姿は、闇の中に包まれてしまふ。

間。

闇の中からほくちを打つ音が聞える。と、すぐにほうづきのやうな火の玉が、仲藏の額だけを、ほのかに明るくする。莨に火をつけたのである。吐月峰（はひふき）を叩く音。

やがて莨の火は消えて、再び元の沈默に戻る。

水を打つたやうな間。

明け方の薄明りが、次第に正面の障子を透して差して來る。坐した儘の仲藏が、影繪のやうに浮き出る。明るみまさると共に、それがはつきり見える。

仲藏は端然と形をあらためて、何事かを念ずる心もち。輪廓の正しい、しかも憔悴した顏に、云ひ知れぬ苦痛の色が現れてゐる。

間。

やがて絕望的に、机の上に面を埋める。

仲藏　駄目だ。やつぱりおれは、江戶の舞臺を捨てにやアならねえのか。

（長い間。）

（下手の襖が音もなく開いて、妻のお岸が、影のやうに這入つて來る。しばし仲藏の樣子を見守つてゐたが、やがて傍（そば）に脫ぎすててある袷半纏を取つて、そつと仲藏の背中へ掛けてやる。）

仲藏　（ふと、寂しくお岸を見上げて、默つてゐる。――柳の糸が、はらはらと窓の障子を打つ）

（間。）

お岸　あなた！

仲藏　…………。
お岸　お風邪を引くといけません。
　(長い沈默。)
仲藏　(重い口調で)　お岸！
お岸　はい。
仲藏　治助さんはどうした。
お岸　まだ下で、お寢つてで御座んす。
仲藏　寢てゐるのか。
お岸　はい。
仲藏　(深い沈默。——やがて)　お岸！
お岸　(默って仲藏を見上げる)
仲藏　おれはもう、精も根も盡き果てた。
お岸　まア、なんでそのやうな、短氣なことを仰しやいます。
仲藏　いいや短氣ぢやねえ。——あの三笑の底意地に負けたくねえばかりに、端役の定九郎を、何んとかして一かどの役にしてえと、夜の目も寢ずに考へて來たこの十日あまり。いまだにおれにやア、新しい工夫が付かねえ。(悲痛に)　おれはもう、神佛にまで見離されたのだ。
お岸　(困惑して)　でもまだ、三日といふ日が御座んす。觀音様への日參が叶つて、必ずいいお考への浮ぶ時がまゐりませう。どうかもう、そんな寂しいことは仰しやらずに……
仲藏　そりやアお前に云はれるまでもなく、おれもさう思ひてえのは山々だ。——高が端役の定九郎に、變つた工夫ひとつ出來ねえ、仲藏のていたらくは、何んのざまだと、見物衆に後ろ指をさされた上、三笑の勝ち誇つた面を見るのかと思ふと、おれはもう、身内が顫へるほどたまらなくなる。が、切破詰つた今日になつてさへ、胸に應へる一筋の工夫も湧いて來ねえのだから、所詮は、諦めるより外にあるめえ。
お岸　でも、未練で云ふ譯では御座んせぬが、よんどいい考へがない上は、いつそ三園の御隱居へ、御相談なされては……。
仲藏　いいや、そいつアならねえ。おれを目掛けて斬つて來た太刀は、あくまでおれの太刀で、拂ひ退けるのが道だ。たとへ弟子と師匠の間柄でも、己れが貰つた役の工夫が付かねえで、師匠のところへ馳せ着けたと云はれたら、末代までの恥辱ぢやねえか。おらア名が惜しいばかりに、承知で三園へ行かずにゐるのだ。
お岸　…………。
仲藏　さりとておれが、何もかも投げ出して、相中役者のやる型で、定九郎を勤めたら、やつらは何んといふだらう。ちつたア智慧があると思ひの外、仲藏は下廻りにも

劣る奴だと、横手を打つて笑ふだらう。——お岸、お前も小せえながら江戸役者の女房、立派に覺悟をきめてくれ。おれはこの春狂言の法界坊を最後に、江戸の舞臺を捨てる時が來たのだ。

お岸　そのお心持は、もうよう解つて居ります。捨てる江戸なら、いつでも捨ててまゐりませう。したが、觀音樣の御利益では、つぶれた眼が明いた、澤市のたとへも御座んす。どうか早まつたことを仰しやらずに、少しも餘計、體を休めるやうにして下さいまし。

仲藏　これぞと思ふ工夫が出來て、一度でも舞臺へ立つた後なら、おれはその儘、體が石になつてしまつても、決して未練はねえのだが、この儘一つの工夫も付かずに、江戸を落ちて行くのかと思ふと、女々しいやうだが未練でならねえ。

お岸　………。

仲藏　(狂ふやうに)ああ、おれはこの儘、あいつに負けてしまふのか!

お岸　(袖でおもてを覆ふ)

(血を吐くやうな心持の、長い沈默。石町の明け六つの鐘が、重く空を流れて來る。)

仲藏　お岸!

お岸　はい。

仲藏　お前、泣いてるな。

お岸　いいえ。

仲藏　(再び机にしがみ附くやうに、突俯してしまふ)

(間。)

仲藏　(突然)お岸、酒を持つて來てくれ。

お岸　はい。——でもこの上のお酒は……

仲藏　いいから留めるな。せめて酒でも飮まなけりや、おれは地の底へ引摺り込まれるやうな氣がして、一刻もゐられねえのだ。冷の儘でいい。茶碗に一杯注いで來てくれ。

お岸　そんならやつぱり……。

仲藏　心配するな。仲藏が藝の苦勞に衰へて、その儘死んだと云はれたら、役者一黨の譽になるぢやアねえか。

お岸　はい……。

(お岸は顔を俯せながら立つてゆく。仲藏は唇を嚙んだ儘、机の上を見詰めてゐる。)

(長い間。)

(再び襖が開いて、寢卷の儘の櫻田治助が這入つて來る。)

治助　お早う。

仲藏　(ふと顔を上げる)治助さんか。

治助　(痛ましさうに仲藏を見ながら火桶の側に坐る)ゆ

うべから、ちつとも寢ねえやうだね。

仲藏　うむ。

治助　いくら何んでも、寢なけりや毒だぜ。

仲藏　毒なことも知つてゐるが、どうしても寢られねえのだ。——治助さん、おれはもうこの上の辛抱は、出來ねえやうな氣がして來た。

(間。)

治助　(切るやうな調子で)　萬さん。

仲藏　(默つて治助を見る)

治助　お前、鬘を捨てなさる量見だね。

仲藏　え？

治助　今更おれが云ふまでもなく、仕出しのやうな定九郎を持て餘して、鬘を捨てたと云はれたら、折角腕で仕上げて來た、中村仲藏の今日までの人氣は、一晩のうちに廢つてしまふぜ。

仲藏　…………。

治助　可哀さうに、お岸さんは、下で觀音樣を拜みながら、泣いてゐるぢやアねえか。——萬さん、お前は三笑に叩きのめされた、あの生恥を、どうするつもりなんだ。

仲藏　(悲痛な心持)　治助さん、もうおいてくれ。おれはあいつに負けたくねえばかりに、こんな辛抱もして來たんだ。——そりやアおれが、定九郎一役を、扱ひかねたと評判されたら、これまでのおれの贔屓は、一齊に逃げ出すだらう。が、かうなつたら殘念ながら、それもこれも百年目だ。

治助　ぢやアお前は、大切な芝居道に、大きなヒビが這入つても、仕方がねえと云ひなさるのか。

仲藏　さアそれは……。

治助　役を受取つて歸つて來た時、お前は何んと云つて口惜しがつたのだ。——強い者には、假令理窟で勝つたとしても、負けてゐなけりやならねえのが、これまでの芝居道のしきたり、おれも今日までは、このしきたりの前にやア、髮の毛一筋動かしたこともねえくらゐに、素直にして來たが、今度といふ今度ばかりは、もう我慢にも、素直にしちやアゐられなくなつた。自分一人の役の善し惡しなんざ話ぢやアねえ。おのが片意地を通さうために、藝道のすたれるのも知らねえで、我儘勝手な振舞をされた日にやア、百千の役者が苦しんでも、芝居道は、おつつけ立つて行かなくならう。おれはそれが殘念なばかりに、わざと定九郎を引受けたのだと、あれ程固く云ひ切つたぢやアねえか。——萬さん。おらア子供の時分から、一緒に育つて來ただけに、お前の氣性は、腹の底まで呑込んでゐるつもりだ。もう一息の辛抱だ。初日のあくまで考へて、たとへ及ばねえときまるまでも、鬘を捨てる

ことだけは、恥だと思つて止めてくれ。
仲藏　（新らたなる感激を覺えながら）　濟まねえ、治助さん。おれはお前にさう云はれると面目ねえ。成る程、藝を捨てようとしたのは、おれが惡かつた。この上は死身になつて、あくまでも初手の覺悟……（間）と云つても、こればつかりは、力づくで出來ることぢやアなし……。
治助　そこが辛抱のしどころぢやアねえか。――おれはお前に、濟むの濟まねえのと云つて貰ふより、その苦しさうな顏が、笑顏に變つてくれる日を、どんなに待つてゐるか知れねえのだ。
仲藏　…………。
（この時、酒の仕度を調へて上つて來たお岸が、顫へる手で襖をあけて現はれる。）
お岸　お待たせいたしました。
治助　おお、酒かい。それもよからう。お岸さん、萬さんの氣の晴れるやうに、滿々と注いでおやんなせえ。
お岸　はい。（治助に猪口を差して）治助さんからお一つ。
治助　おれまでが御相伴か。
（お岸は治助に注ぐ。）
（仲藏は自分で德利を取つて茶碗へ注いで一息に飮む。）
お岸　まア、そんな無理をなすつては……。
（間。）
（突然、戸外に當つて人の叫ぶ聲。）
聲　泥棒だ。捕まへてくれ！
（仲藏は酒の茶碗を置いて、正面の障子を颯とあける。）
（夜はまつたく明け放れて、東の空には、霧のやうな小雨を中に、薄日さへ射してゐる。遙かに濱町河岸の彼方まで、一望のもとにあるところ。――そのまつ直ぐの道筋を、一人の男を追つて、五六人の人達が走つてゆく。しかも更に、その後から悠然として付いてゆく、奴蛇の目に、羽二重ぞつきの一人の侍。）
（仲藏は、思はず窓から半身を乘出して、侍の後姿を凝視する。）
（治助もお岸も、共に同じ方を見守る。緊張した間。）
仲藏　（突然、歡喜に聲を顫はせながら）治助さん！　工夫が付いた！
治助　え？
仲藏　（狂喜して）お岸、急いで羽織を出せ。おれはこれから、無心に行くのだ。
お岸　御無心に？
仲藏　いいから早くしてくれ。

(お岸は、隣りの部屋から羽織を持つて來る。)

治助　萬さん、お前大丈夫か。

仲藏　(それには無關心で) ああ、おれは漸く生き還つたやうだ。

(仲藏は鼠のやうに階下へ駈けおりる。)

お岸　あ、お危なう御座んす。

(間。)

(やがて戸外に――)

仲藏の聲　おーい。そこへ行くお武家さまア!

(仲藏は窓下の道を、息せき切つて走つてゆくところ。)

(お岸と治助とは、窓から、微動もせずに見守つてゐる。)

――舞臺ぶん廻る――

第二場

濱町河岸。

下手に、樫の木の生茂つた、細川邸の下屋敷の練塀を少し見せて、上手へ斜めに河岸の全景。

雨上りの空から、朝の日光が心持よく輝いてゐる。その中を、大川を上る眞帆片帆が過ぎる。

前の場に續く時間。

舞臺が廻り切つた時、頬冠りをした一人の男が走り出で、(花道使用の事)まつすぐに、練塀の彼方に消える。と、直ぐその後から五六人の町の者が、「泥棒だ」「太え野郎だ」「早くふんじばれ」などと、口々に罵りながら出て來て、同じく前の男の消えた方へ去る。

間。

同じ道から、古い奴蛇の目を肩に、黑羽二重五ツ紋の尻をからげて、白獻上の帶に朱鞘の大小。素足に、五分月代をしぶきに濡らした侍が、大股に出て來る。と、遠くから仲藏の聲。――

聲　おーい、そこへ行くお武家さまア!

(侍はちよいと立停つたが、再び行きかける。)

聲　おーイ、お武家さまァ!

(間もなく、しどろになつた仲藏が現れる。侍は浪人岩田長十郎である。)

長十郎　(練塀の下へ、傘をつぼめて立停る) 貴樣か、今おれを呼びとめた奴は!

仲藏　へえ、手前で御座います。

長十郎　(油斷なく仲藏を見詰めながら) 何んの用だ。

仲藏　はい、ちとお願ひの筋が御座いまして。

長十郎　(間) うぬは手先だな。

仲藏　(驚く) ど、どういたしまして。手前は決して、左

樣な者では御座いませぬ。
長十郎　手先でもねえ者が、今時何んでおれに用があるのだ。まだ夜が明けたばかりぢやねえか。
仲藏　左樣では御座いますが、ちと旦那樣に……。
長十郎　さうか。ではほんたうに、手先ぢやァねえんだな。
仲藏　どうぞお疑ひ下さいますな。實は手前は、葺屋町の芝居に出て居ります、中村仲藏と申す役者で御座います。
長十郎　何、役者だと？
仲藏　はい、それに相違御座いませぬ。
長十郎　うむ。（沁々仲藏を見ながら）しかしおれはまだ、役者仲間にやァ、交際はねえ筈だがの。
仲藏　仰しやる通り、お目に掛りますのは、今が初めてで御座いますので……
長十郎　その初めてのおれに、願ひなどたァをかしいぢやねえか。
仲藏　それはもう、御不審は御尤もで御座います。お叱りを受けますのは、萬々覺悟の上で、かうしてお後を慕つて、まゐつたので御座いますから。
長十郎　ふうん。世間にやァ變つた奴があるものだなァ。だが斷つておくが、おらァ羽二重ぞつきの裝をしちやァゐるが、金の相談にやァ乘れねえぜ。
仲藏　御冗談仰しやいますな。だが手前は、決して左樣な御無心をしようと、お呼びとめ申したのでは御座いません。
長十郎　そんならどんな相談なんだ。――うむ判つた。貴樣はおれの武藝を見込んで、腕を貸してくれと申すのだな。討つ奴が孝行がつた竹矢來。――當節、敵討なんざ野暮の骨頂だ。そんな不料見は止めにしねえ。
仲藏　これは恐れ入りました。しかし手前は、お武家樣に助太刀を願ふやうな、大きな仇敵を持つては居りませぬ。――實は不躾ながら、あなた樣のそのお召物を、しばらくの間、拜借させて頂きたいので御座います。
長十郎　え？　この着物をか？
仲藏　はい、左樣で御座います。
長十郎　さうして貴樣は、これをどうせうと云ふんだ。
仲藏　芝居で使ひます衣裳の手本にしたいのが望みで御座います。唯から申上げましたのでは、ご合點がまゐりますまいが、手前は今度、芝居道の片意地から、或る難役を背込まされたので御座います。
長十郎　うむ。
仲藏　その役を受取りましてから、丁度今日で十日餘り、殆ど夜の眼も眠ずに、工夫を凝らしてまゐりましたが、これぞと申す、裝形の工夫が思ひ浮ばず、もうこの上は

江戸の舞臺を捨てて、上方落をするより外にあるまいと、家内にも因果を含めて、確い決心をして居りました。ところが、神佛の御加護とでも申しませうか、今が今、手前の眼に映りましたのは、旦那樣のお姿で御座いました。

長十郎　ほう、それからどうした。

仲藏　手前はおかげで、生き還つたやうな氣がしてゐるので御座います。――申上げるまでもなく、旦那樣も御承知のことと存じますが、手前共役者稼業に居ります者の第一に苦心を致しますのは、自分の受取つた役柄を、その役になり切つて、どこまでこなせるかといふことで御座います、自分だけは、どれ程得意で居りましても、御見物衆が舞臺を御覽下すつて、あの有樣は何んだと、お叱りを受けましたなら、役者の身上はもはやそれまで、取返しの付かねえことになつてしまひます。

長十郎　それゆゑ貴樣も、今度座方から受取つた役柄に就て、あつたら苦心を續けて來たと申すのか。

仲藏　左樣で御座います。――もとより見ず知らずのお武家樣へ、この上もない不躾な御無心。無禮討の御成敗を受けましても、決してお恨みの出來る譯では御座いませぬが、手前の心中をお察し下さいまして、何卒この願ひを、お叶へなすつて下さいまし。――如何で御座いませう。お聞き屆けは下さいませぬか。

長十郎　さアてな。それほどの所望なら、聞き屆けぬ分でもねえがの。

仲藏　（取縋るやうに）では、叶へて下さいますか。

長十郎　いや待て。しかし貴樣は、おれの衣服を脱がせて、あとはどうする氣でゐるのだ。

仲藏　御無禮ながら、新らたに換りを仕立させまして……

長十郎　新らたに、出來へると申すのか。

仲藏　はい。

長十郎　はゝゝ、仲藏、貴樣は出世をするぞ。その量見が氣に入つた。

仲藏　へえ……！

長十郎　だが生憎と、おれにやア仕立おろしの着物なんざア、今更用はねえんだ。

仲藏　何んと仰しやいます。

長十郎　何も驚くにやア當らねえ。おれア二本差しにやア違えねえが、お城勤めの左樣然らばと、四角に坐る身分ぢやねえんだ。元を質せば、田安の奉行岩田長九郎の次男坊だが、今ぢやア立派な無頼漢。ゆうべは藝州今日は加賀と、毎晩大名屋敷の賭場を廻つて、かすりを貰つて暮す身の上だ。そのおれが、仕立おろしの衣服を着たつて、どう芽の出ようもなからうぢやアねえか。――實アゆうべも土州の部屋で、唯見て歸りやアいいものを、二

三度續けて張つたばかりに、夜の明け際にやア、すつてんてんの空ッ尻だ。――なア仲藏。貴様も緣があればこそ、おれに無心をするのだらうから、どうだ、物は相談、野暮に着換をくれるなんぞと云はねえで、そんなに欲しい着物なら、身ぐるみ脫いで、この雪駄まで、買ひ取つて貰はうぢやアねえか。

仲藏　へえ……

長十郎　どうだ。色は褪せても、黑羽二重に矢羽根の定紋。筋の通つた代物だぜ。だがかう申したからとて、何も公方樣のお召物、といふ譯ぢアねえのだから、百兩よこせ、などと圖なしのこたア云やアしねえ。親父の形身の、腰の物だけは拔きにして、着物と帶と雪駄まで、――それに今し方、折助部屋で借りて來た、この蛇の目も束にして、二兩にまけてやらうぢやねえか。

仲藏　二兩と仰しやいますか。

長十郎　（鋭く）高いと申すのか。

仲藏　ど、どういたしまして。こちらからお願ひしましたお召物、高い安いの段では御座いません。

長十郎　うむ、さう來るのが當り前だ。――たとへにも、善は急げといふし、それに丁度、小鍋立かなんぞで、一杯やりてえやうな心持がしてゐた時だ。さうと話が極まつたら、急ぐやうだが、早速品物を渡さうぢやねえか。

仲藏　…………

長十郎　どうしたのだ。何も思案することはあるめえ。それともおれを、からかつて見ようと云ふのか。

仲藏　いえもう、決してそんな……

長十郎　ぢやア速くしてくれ、雨上りの地面へ、屈まされてゐたせえか、いやに下ッ腹が痛くなつて來た。腹の蟲が驚くやうな熱いやつを、きゆうッと一杯やりてえんだ。

仲藏　承知いたしました。しかし、ここではどうにもなりかねます。お溫かい物を、一杯差上げたいと存じますし、それに粗末な品でも、お召換をして頂かねばなりません。むさい家では御座いますが、どうぞ手前の宅まで、おいでなすつて下さいまし。

長十郎　貴樣の住居は、この近くか。

仲藏　はい、ぢきそこの、住吉町で御座います。

長十郎　さうか。では半時ばかり、厄介になるぞ。

仲藏　どうぞさうお願ひ申します。見苦しい家では御座いますが……

長十郎　こつちは割下水の長屋住居だ。家の汚ねえのにア驚かねえよ。

（二人は行きかける。）

（そこへ弟子の鶴藏が出て來る。）

鶴藏　親方、お迎ひにまゐりました。

長十郎　（仲藏に）貴樣の家の者か。

仲藏　はい、左樣で御座います。（鶴藏に）このお武家樣を、家までお連れ申すから、お前先へ歸つて、粗相のねえやうに支度をしておけと、お岸にさう云つてくれ。

鶴藏　お上さんも治助さんも、御心配のやうで御座います。

仲藏　今歸つて話すから、心配はいらねえと云つておきねえ。

鶴藏　へえ。ではお先へまゐります。

（鶴藏もと來た道へ去る。）

長十郎　家內の者が、氣を揉んでゐるやうだの。

仲藏　いきなり駈け出してまゐりましたので、心配したので御座いませう。

長十郎　しかしこれで氣が晴れるだらう。——おれも、思ひ掛けねえ商賣をした上に、酒の馳走になれると思ふと、頭の芯まで晴れ晴れしたやうだ。——さ、案內してくれ。

（二人は步きはじめる。）

——幕——

第三幕

市村座の樂屋に於ける仲藏の部屋。

鼠壁、正面に櫺子の附いた窓がある。窓の棚に、赤い實の生つた萬年青の鉢が一つ。上手に置床。觀世音の畫像を掛けて、蠟燭がともつてゐる。

正面の窓下に鏡臺を置く。その側に小形の火鉢、衣裳葛籠、座布團等が雜然と置いてある。

下手に出入ののれん口が附いてゐる。

「忠臣藏」五段目、山崎街道の幕あきに間のない時刻。定九郎の衣裳を着け終つた仲藏が、端然と化粧前に坐して、鏡の中を見詰めてゐる。——五分月代に黑羽二重、白獻上に朱鞘の大小を掴み差にした、岩田長十郎をその儘の形だが、決意が眉宇の間に溢れて、寧ろ悽愴の感がある。

長き間。

仲藏は、ほつと溜息を吐く。と、のれんを分けて、與市兵衞に扮した中村富八が現れる。

富八　親方、お一人ですかい。

仲藏　おお、富八さんか。まア這入んねえ。

富八　へえ。（這入つて）もう親方、仕度はすつかり出來ましたかね。（驚異の眼で、仲藏の扮裝を見てゐる）

仲藏　おかげで、どうにか纏まつたやうだ。——どうだな。

様だけは變つてゐるだらう。

富八　變つた段ぢやアありません。一昨日親方から話を聞いた時にも、今までにねえ着附なので、内心びつくりしてゐましたが、まさかこれ程、様が變つてゐようとは、思つちやアゐませんや。(再び見直して) だがまアよくこれまでに、飛び放れた工夫をなさいましたね。

仲藏　自分で云ふのもをかしいが、まづこれならば、一役にやアなるだらう。――ところで今日はひとつ、きのふ頼んだ、あのイキを外さねえやうにの。

富八　合點でげす。親方のこの様を見ると、何んだか私までが、樂しみになつて來ました。與市兵衞は、この座ぢやア私の持役ですが、今度は一つ、一世一代のつもりでやりませう。

仲藏　十分に骨を折つてくんねえ。この間も云つた通り、まかり間違やア、おれアこれが、江戸の見納めになるんだ。

富八　鶴龜鶴龜。緣起でもねえ。たとへどう間違つたつて、親方の定九郎が、見物に受けねえ筈はありアしません。――この富八が、首にかけても請合まさ。

仲藏　噓にもそんなに賞めてくれるたア有難え。ひとつ、そのイキで舞臺も頼むよ。

(舞臺裏から二打が鳴り渡る。)

仲藏　二打だな。

富八　親方、私アもう揚幕へ行つてますぜ。

仲藏　では萬事頼んだぜ。

富八　合點です。

(富八は出てゆく。)

(間。)

(仲藏は白粉刷毛を取つて、手に塗り始める。)

(緊張した顏付で、治助が這入つて來る。)

治助　今作者部屋ぢやア、お前のこの扮裝を、誰がしやべつたか知らねえが、三笑が聞き付けて大騷ぎだぜ。

仲藏　さうか。もう三笑に云つた奴があるんだな。

治助　どうせ幕さへあきやア、知れずにやアゐねえことだが、つべこべと、うるせえ奴があるもんだ。ひよつとすると、三笑はここへ來るかも知れねえぜ。

仲藏　今更來たつて仕様があるめえ。が、來るといふんなら、來て見るのもよからうよ。おれアどつちにしても、幕が開きやア出てゆく體だ。この場になつて、ダメを出されたところが、どうにもなりやアしねえからなア。

治助　さうだとも。まア何を云ふか、幕のあくまで、聞き流してゐりやアいいんだ。

仲藏　吉凶はいづれ知れよう。どんなものが出來上るかは幕があいてからの勝負だ。

治助　さうだ。かうなつたら、人に遠慮はいらねえから、意地も恨みもみんな忘れて、唯藝のために、思ふ存分働いてくれ。

仲藏　うむ、よく云つてくれた。意地も恨みもみんな忘れて。――さうだ。おれは藝道のために、腕一杯に働きやアいいんだ。たつた一人の三笑などにかまけてゐた、おれが今更恥かしい。

治助　兎も角も、的が大きくなりやアなるだけ、强い弓の引き甲斐があるといふものだ。確かりやつてくれるのを、樂しみにして待つてゐるぜ。

仲藏　右へ行くか、左へ倒れるか。どつちにしてもこの一幕が分れ道だ。

治助　（立上つて）ぢやアいいか。

仲藏　（强く頷く）

（治助は急いで去る。）

（仲藏は再び、鏡の中に映る自分の姿を凝視してゐる）

（弟子の鶴藏があわてて這入つて來る。）

鶴藏　親方、三笑さんがやつて來ました。

仲藏　さうか。來たつて構やアしねえ。

鶴藏　何んだか、ひどく御機嫌が惡く、作者部屋でも、みんなに當りちらして居りました。

仲藏　うむ、さぞ蟲が納まらねえのだらう。

（立作者の金井三笑が、見習作者を一人連れて這入つて來る。）

三笑　堺屋さん。

仲藏　これはおいでなさいまし。

三笑　（極めて皮肉に）お前さん如才もあるまいが、五段目は定九郎だぜ。

仲藏　（むつとしたが、直ぐ平面に返る）よく承知して居ます。

三笑　ぢやア何んだつて、そんな異體の知れねえ裝をしてゐなさるんだ。

仲藏　（憤怒を壓へる心持）

三笑　お前さんも素人ぢやアなからう。芝居道には、芝居道のしきたりがあることぐらゐは、知つて貰はなけりや、困るぢやねえか。

仲藏　そりやア隅から隅までとは、行かねえかも知れませんが、芝居道のしきたりだけは、あらまし知つてる積りです。

三笑　そんならなぜ、定九郎を、定九郎らしくしねえのだ。もしまた、新奇の工夫をしようと云ふなら、一應作者部屋まで、通して貰はざ困るぢやねえか。てんでに好き勝手な眞似をされた日にやア、芝居の掟は反古になつてし

まふぜ。

仲藏　こりやア伺ひませう。いくらお作者でも、そんな無理は通りますまい。役者が己の貰つた役を工夫するのに、いちいち作者部屋の差圖を、受けなきやならねえといふ、そんな掟がいつから三座に出來ましたね。私ア七つの初舞臺から、三十二の今日まで、永年芝居をしてゐますが、そんな掟があるなぞたア、夢にも知らずに通つて來ました。

三笑　ではお前さんは、掟がなけりやア、作者の顏を潰しても、構はねえといふ量見で、今度の工夫をしなすつたのかい。

仲藏　構はねえのは、知れ切つてるぢやアありませんか。大なり小なり、自分の役を自分で工夫するのに、何んの遠慮がいるわけもねえことです。

三笑　（怒氣を含んで）仲藏さん。お前さんがその量見なら、儘にやつて見るがいい。だが、斷つておくが、つまらねえことをして、この一幕を壞したら、氣の毒だが詰腹は逃れねえぜ。

仲藏　仰しやるまでもありません。かうと覺悟をきめてやるからには、やりそくなつたら百年目、その場で責は果して見せます。仲藏も江戸役者のはしくれ。決してお作者の方達に、御迷惑は掛けません。

三笑　その言葉を、必ず忘れなさんなよ。

仲藏　（決然として）御念にやア及びません。

（三笑はつと立つて、荒々しく去る。）

仲藏　（立上つて）鶴、お前揚幕に、盥に水を張つといたらうな。

鶴藏　仕度はすつかり揃つて居ります。

仲藏　柄杓もいいか。

鶴藏　へえ。

仲藏　よし。ぢやアこの蛇の目を、盥の中へ突込んどいてくれ。（長十郎から買ひ取つた蛇の目を渡す）今直ぐに行くから、手落のねえやうにして置きねえよ。

（鶴藏は、傘を持つて去る。）

（仲藏は、置床の觀世音の畫像の前に坐して、しばし祈願をこめる。）

（間。――柝の音が漸く近くなる。）

仲藏　（力強く）よし。

（いきなり尻を端折ると、颯とのれん口から去る。）

（長い間。）

（お岸が、まろぶやうに這入つて來る。そしていきなり、置床の前に坐して、觀世音を拜む。）

（柝の音が小きざみに聞える。――五段目の幕が開いたこころ。）

（長い、しかも緊張した沈默。）
（お岸は合掌した儘、身動きもしない。）
（そこへお近が這入つて來る。）
お近　お岸さん！
お岸　（驚く）まア、これは！
お近　今日は親方の代りもかねて、たつた一人でまゐりました。
お岸　それはまア、ようこそおいでくださいました。わたしも今朝、主人が家を出ます時に、來るではないぞと、きつく念を押されたので御座んすが、居ても立つてもゐられずに、觀音樣のかへりを、そつと廻つてまゐりました。
お近　それはもう、さうあるのが道理で御座んす。――したがまア仲藏さんは、よくあれだけの工夫をなさいましたねえ。
お岸　ではもう、見て下すつたので御座んすか。
お近　花道からの、出を見て居りました。鬘と云ひ、着附と云ひ、あの蛇の目の傘と云ひ、いつもの定九郎とは、似ても似付かぬ晴れやかさ。わたしや思はず、胸が顫へました。
お岸　御見物衆には、どうで御座んした？
お近　どなたもみんな、仲藏さんに引付けられて、聲さへ立てずに見入つてゐました。あのやうな張り切つた舞臺を、わたしやいまだに、見たことが御座んせぬ。
お岸　その張り切つた舞臺が、御眞寶見物に、受けましたやら、受けませんやら、それが案じられてなりませぬ。
お近　お氣遣ひには及びませぬ。三笑さんとの意氣張は、きつとこちらの勝で御座んす。
お岸　どうぞ、さうあつてくれれば、よう御座んすが……
（間。）
（舞臺から、二つ彈の音が聞える。）
（お岸は「はッ」として眼を上げる。）
お近　おお、もう勘平が出た樣子。ではわたしは表へ廻つて、お客樣の御評判を聞いて來ませう。（立上る）
お岸　ほんにまア、有難う御座んす。
（お近は匆々に去る。）
（間。）
（お岸、再び、觀世音の前に合掌する。）
（と、そこへ、血糊に染つた儘の仲藏が、悄然として戻つて來る。お岸と顔を見合せて、二人は無言。）
（長い間。）
仲藏　お岸。
お岸　はい。
仲藏　（寂しく）もう駄目だ。

お岸　ではやつぱり……

仲藏　これだけの苦心をしても、見物は、堺屋の、さの字も云つちやアくれねえんだ。（悲痛に）仲藏の藝も、今日が終りだ！

（沈默。）

（やがて舞臺の方から「わあッ」と云ふ觀衆の聲が起る。間もなく、治助が小踊して飛込んで來る。）

治助　萬さん、おれアこんな嬉しいことはねえ。客席はお前の評判で、湧き返るやうな騷ぎだぜ。

仲藏　治助さん、おれもそいつを、今が今まで、夢に見てゐたんだ。だが、もうかうなつちやア仕方がねえ。冗談だけはおいてくれ。

治助　お前は何を云つてるんだ。あの聲が聞えねえのか。

仲藏　聞えねえ事アねえが、他人を賞めてる聲なざア、聞えねえ方がいいくらゐだ。

治助　ぢやアお前は、あの聲を、他人の評判だと思つてゐるのだな。——喜びねえ。ありやアみんな、お前の定九郎に、醉はされた見物の聲なんだ。

仲藏　（自分の耳を疑ふやうに）ではあれが……

お岸　ほんとうで御座んすか。

治助　こんな時に、嘘を云つてどうするものか。そら、聞きねえ。堺屋アと云つてる聲が、あんなによく聞えるぢやアねえか。

仲藏　（耳を澄す）おお。（狂喜する）そんならやつぱりおれの藝を見物衆は見てくれたのか！

（お岸は感極まつて、觀世音の前に泣き伏す。）

（鶴藏が菊五郎を案内して來る。）

鶴藏　親方、音羽屋さんがお見えになりました。

仲藏　おお、これは……

菊五郎　仲藏さん、お喜びに上りました。

仲藏　有難う御座います。

菊五郎　思ひも掛けない、素晴らしい定九郎を見せて戴いて、おかげであたしは、上方への、いい土産が出來ました。

仲藏　飛んだことを仰しやいます。音羽屋さんに賞めて頂けるとは、夢のやうで御座います。

菊五郎　いづれあとで、ゆつくりお目に掛かりますよ。

仲藏　どうも恐れ入りました。

（菊五郎は出てゆく。）

（間。）

仲藏　お岸！

お岸　はい。

（二人は感激の涙にむせぶ。）

仲藏　治助さん、笑つてくれるな。みつともねえが、涙が

出てならねえ。

（治助も嬉し涙に胸の迫る思ひ。）

（遠くで「堺屋ア」の聲が盛んに聞える。）

（仲藏はお岸と共に、觀世音の前にひれ伏す。）

――靜かに　幕――

（大正十五年盛夏作）

井底の兄弟（一幕）

人物

櫻井大輔　旗本の長男（二十五歳）

同　次郎　その弟（二十三歳）

時代

徳川の初期――寛永の末

場所

武藏野の一部に在る古井戸の底。既に埋立ててから相當の歳月を經たものと見えて、井底には土や落葉が一杯になつてゐる。勿論水は少しもない。

それでも、地上までは四五間の距離があるらしい。上から差して來る微光の中に、井戸側に生えた青苔などが、重くなめらかに光つて見える。

狩獵姿の大輔、次郎の兄弟が、各〻少しづつ傷いた體を、この井戸の底に横へてゐる。既に落ちてから、一晝夜くらゐの長い時間を經たものらしく、疲れ切つた二人は、髷も衣服も亂れた儘になつてゐる。あたりには大小だの、折れた弓矢だのが取散らされて、兄弟が井戸を出ようとするために、あらゆる努力の盡されたことが歷然としてゐる。

早春の眞晝時。

幕が開くと、次郎は端然と坐した儘、腕を組んで、何事かを考へてゐる。大輔は、殆ど骨ばかりになつた兎の片股を、頻りにむさぼり食つてゐる。――かなり長い沈默が續く。やがて、頭上遙かに、のどかな雲雀の聲が流れて來る。

大輔　（突然、井戸側に手を掛けて立上りながら、ぢッと雲雀の聲に聽き入る）ああ、雲雀が啼いてゐる。雲雀が啼いてゐる。（間。暫し伸び上つて空を仰いでゐたが、急に耐へられなくなつて叫ぶ）おーい、助けてくれエ。助けてくれエ。

次郎　（ふと眼をあげて、兄の顏を見守りながら、重い調子で）兄上、また始めるのですか。もう到底駄目です。どうか諦めて、苦しい聲を張上げるのは止めて下さい。

大輔　（次郎には無關心で、雲雀の聲を追ふやうに）何んといふ晴れやかな聲だらう。（間。急に弟の方を振向いて）おい、次郎。お前ももう一度、私と一緒に助けを呼んで見てくれ。

（次郎は兄の顏を見詰めた儘、默つてゐる。）

大輔　どうしたのだ。いやなのか。

次郎　いやです。そんなことをするのは、未練だから止しませう。虫けら同然な鳥にまで、卑怯者だと蔑まれたくはありません。

大輔　でもお前は、まだ私よりも力があるのだ。そこにある竹筒を口に當てて、息の續く限り叫んで見てくれ。

次郎　駄目です。いくら竹筒を口に當てても、この聲では井戸の口までも屆かないに極つてゐます。昨夜から一時ばかり前まで、あんなに助けを呼び續けて來たにも拘らず、唯一人の救助の手さへないのは、既に天が、吾等兄弟を、お見捨てなされたのに相違ありません。これから先、吭が裂けるまで呶鳴つたとて、萬が一にも、この野原の中の古井戸を探し當てて、助けに來てくれる人などはありますまい。――どうか兄上も、今となつて僥倖などを待つよりも、見苦しくないだけの覺悟をなすつて下さい。

大輔　しかし次郎、あきらめる事は、すべてを盡した最後でいいのだ。そんなことを言ふ前に、後生だから、もう一度立上つて、私と一緒に力の限り叫んでくれ。

次郎　私には、袖に縋つて憐みを乞ふやうなことは出來ません。

大輔　（弟を凝視して）ではお前は、命が惜しくはないのか。

次郎　命の惜しくないこともありません。が、それよりも、私はもつと名が惜しいのです。

大輔　名が惜しい？

次郎　さうです。私は卑怯な眞似をして、櫻井の家名や、父上のお顏に泥を塗りたくはないのです。

大輔　しかし、己が力の及はぬ場合、人に助けを求めるのは、決して卑怯ではないぞ。殊に危地に陷つてゐる際、救ひを求めるのは、當然の話ではないか。

次郎　無論それは當然の事です。けれども私は、百里の遠きに向つて、矢を射るの愚は學びたくありません。的のない矢を射ることは、假令卑怯ではないまでも、武士としては、恥ぢなければならない行爲です。

大輔　だが今の場合は、的がない矢を射るのだとは言へまい。兎狩に出た私達が、前夜から行方不明になつたのを知つて、家の者共が尋ねて來れば、それは立派な的ではないか。聲も立てずに斯うしてゐたのでは、假令この井戸の近くを通る者があつても、知らずに過ぎて仕舞ふのは、火を堵るよりも明らかなことだ。さうなつたら、つひ半時前まで叫び續けて來た、一晝夜の努力は、悉く水泡に歸してしまはねばならない。――それにお前だとて、自分を救はうとして、共にこの井戸へ落ちた兄を考へたら、己れの勝手ばかり言へたものでもあるまい。――（急

に哀願的になつて） さ、次郎。そこを考へて、どうかもう一度私と一緒に、立上つて叫んでくれ。

次郎 （默つて兄を見詰めてゐたが、やがて冷靜な調子で）兄上、どうか徒らにあせることだけは止めて下さい。

大輔 （猶も哀願的に） あせるのではない。が、唯かうしてゐたのでは、私達の命は、刻一刻と死地に近着いてゆくばかりではないか。

次郎 しかし、そのやうにあせつたからと言つて、決して良い結果になるものではありません。善かれ惡かれ、來るべき運命は、必ず來ずにはゐないのです。

大輔 ではお前は、運命の儘に、手を束ねて待てといふのだな。

次郎 待たねばならない時が來たのです。もはや今となつては、覺悟の二字より他に道はありますまい。

大輔 いや、ないことはない。それどころか、救ひの手は、既に私達の頭上近くに、來てゐるかも知れない。もしまた來てゐないとしても、來ることを希ふのが本來ではないか。如何なる場合でも、好んで死地に足を踏み入れるは、決して賢者の取るべき態度ではないのだぞ。

次郎 勿論左樣なことは、仰しやるまでもありません。賢者に名を藉りるまでもなく、如何なる愚者でも、好んで死地に足を踏み入れる人間はない筈です。――しかし兄上。武士の家に生れた者には、死よりも更に、大きな苦痛のあることを考へて下さい。

大輔 （憮然として） 名が惜しいといふのか。

次郎 さうです。しかしそれは、單に己れの小さい名だけではありません。廣く武門の名譽に關する重大なことなのです。

大輔 それではお前は、武門の名譽のために、死を覺悟しろといふのだな。

次郎 それが武士の意地だと思ひます。どうか兄上も、この意地だけは捨てないやうにして下さい。

大輔 （稍長き間。きつぱりと） いやだ。私は片意地から生れ出る名譽などよりも、やはり命が惜しい。

次郎 （躊躇しながら詰め寄る） それは兄上、あなたの本心ですか。

大輔 本心だ。――次郎、お前も胸に手を置いて、考へて見るがいい。武士であるといふ、僅かな階級意識のために、生きられる身を、むざむざ死地に陷れることが、どうして堪へられるのだ。

次郎 生きられる身？ あなたは今となつても、まだ女々しい僥倖を待つと言はれるのですか。

大輔 女々しい僥倖ではない。當然來るべきものを待つてゐるのだ。――私にはどうあつても武士であるがために、

死なねばならぬなどといふ、そんな窮屈な考へを持つことは出來ない。たとへ血を吐いて殪れるまでも、救ひを求める心に變りはないのだ。

次郎　武門の名譽を、傷けてまでもと仰しやるのですか。

大輔　武門の名譽などといふ言葉は、戰國時代の大名が、己れの部下の虛榮心を煽るために、殊更生み出した名ではないか。生死の境に立つ身に取つては、一本の藁ほどの價値もあるものではない。

次郎　(暫し兄を見詰めてから)　兄上、あなたは死の怖しさに、亂心されたのだ。

大輔　亂心したのはお前だぞ。お前は虛榮の前に眼が眩んで、命までも粗末にせうとする。

次郎　私は武士の家に生れただけの、正しい勤めをしようとしてゐるのです。

(間。――再び雲雀の遠音が聞えて來る。)

大輔　(ぢッと聽入つて)　次郎。お前の耳には、あの樂しさうな、雲雀の囀が聞えないのか。お前の眼には、若草の萠えてゐる野の影は映らないのか。――ああ、私は生きたい。もはやどんなに卑怯だと蔑まれようと、どんなに未練と嗤はれようと、今は、生きたい望みより外に何にもない。――(突然狂氣のやうに叫ぶ)　おーい、助けてくれエ、助けてくれエ。

次郎　(兄の袖にすがる)　兄上。あなたは、何んといふ淺間しい方なのです。あなたの體を流れてゐる三河武士の血潮は、あなた一人のものではないのですぞ。事に當つて何等の覺悟もなく町人小者にも劣るその有樣は、死に勝る恥だとは思ひませんか。

大輔　私が淺間しい？　どうしてお前には、そんな事が言へるのだ。徒らに武士道の名に縛られて、心にもない痩我慢を繰返してゐる、今の武家生活の方が、どれ程淺間しいか知れたものではない。――己れの心に感じた事を、有體にいふことさへ、身の恥だと思つてゐるなどは、人間本來の心に、鞭を當ててゐるのではないか。――私には、惜しい命を、惜しくないなどと、心にもない僞りを言つてゐることは堪へられないのだ。(悶える)　ああ、私は何んとしても、もう一度あの明るい光に浴したい。そして靜枝の顏が見たい。

次郎　(吐き出すやうに)　何んといふ未練がましいことを言はれるのです。この意地のないあなたが、血を分けたまことの兄だと思ふと、私は胸が張り裂けるやうです。――兄上。どうか氣を落着けて、武士ならば武士らしく、立派に覺悟をして下さい。それがあなたの爲でもあり、引いては家門のためなのです。

大輔　いいや、斷じて私のためではない。しかも家門のた

めなどといふ、空虚な言葉に支配されて、この儘死ぬやうなことがあつたら、それこそ私達は、犬死同様な立場になるのだ。戰場ならばいざ知らず、思ひも掛けぬ過失のために、兄弟二人が井の底に埋れ果てるのは、何んとしても、私には堪へられない。

次郎　ではあなたは、兄としての責任を感じないのですか。

大輔　責任を感じてゐればこそ、一刻も速く助かりたいのだ。

次郎　いや、それは違ひます。責任を感じてゐるのなら、もはや私達の運命の終局は見えてゐる筈です。死に臨んでのその女々しさは、既に責任を感じてゐない、立派な證據ではありませんか。

大輔　お前には、責任といふ言葉の意味が、まだほんたうに判らないのだな。

次郎　判らなくてどうするものですか。判つてゐればこそ、覺悟のない兄上のその態度を、淺間しく思はずにはゐられないのです。

大輔　（詠嘆的に）　次郎、お前はどこまでも、幸福な人間だな。

次郎　幸福？　何が幸福なのです。

大輔　あくまでも、人生を單純に考へてゆかれる、その心持が幸福だといふのだ。私はお前のその單純な氣性がうらやましい。

次郎　そんなことを言つて、ごまかすのは止して下さい。私の氣持が單純であらうと、なからうと、今更あなたに批判して頂く事はありません。私は武士としての、責任を盡して行かうと努力してゐるばかりです。

大輔　その心持が、うらやましいといふのだ。お前は、武士としての責任を盡してゆけばいいのだらうが、私には、それだけの氣持ではゐられない。

次郎　どうして、それだけではゐられないのです。

大輔　私は武士としての責任を盡すよりも、もつと廣く、人間としての責任を盡してゆきたいと思つてゐる。

次郎　人間としての？

大輔　さうだ。武士などといふ、限られた階級意識の、責任感念だけで、終始したくはないのだ。

次郎　兄上は、そんな理窟に言葉を藉りて、飽くまで卑怯な態度を執られようとなさるのですか。

大輔　お前とは、根本の考へが違ふのだから止むを得ない。卑怯だと見るのも、未練だと見るのも、それは見る者の自由に任せる。が、私としては、決して卑怯ではないつもりだ。

次郎　いいえ卑怯です。あなたは唯生きたいがために、色々な理窟をつけて、私に同情を強ひやうとなさるのです。

大輔　お前に同情を强ひたとて、なんになる。成る程、私は生きたい爲に、かうして叫び續けて來た。しかし、立場の違ふお前に、私の行爲を、正當だと認めてくれとは望みはしない。またそれを望んだとて、お前が受入れてくれる筈はないではないか。

次郞　それなら何故武士の家に生れながら、武士の心持を侮辱なさるのです。

大輔　侮辱したのではない。唯、自分の心とは、そぐはないと言つたまでの事だ。

次郞　それも仰しやるには及びません。あなたの卑怯を隱すために、正しいものを破壞されることは心外です。

大輔　正しいものとは、何を指すのだ。

次郞　末代までも名を重んずる、武士の心のことです。

大輔　さうか。では、お前がそれだと言ふのだな。

次郞　私ばかりではありません、父上首め、兄上を除いた櫻井一家の者は、悉くさうなのです。

大輔　名を重んずる者が正しく、命を重んずる者が卑怯だとは、何といふ虛僞の敎へなのだ。——次郞　お前は心の奧底から、それを正しいと信ずるのか。

次郞　勿論です。

大輔　自分の命に對して、少しの疑ひも持つたことはないのか。

次郞　もう諄いことは仰しやらないで下さい。あなたが何十遍繰返して言はれたからとて、私の心には、斷じて卑怯未練は起らないのです。

大輔　(寂しく)　盲目にも、幸福の場合があると聞いたが、お前もそれと同じやうに幸福者だ。

次郞　あなたは、飽くまで卑怯者です。未練に終始してゐる人です。

大輔　お前はそのやうな言葉を弄して、勝利者の位地に立つやうな、快感を味はうといふのだな。

次郞　そんなことは旣に超越してゐます。今更味ふまでもなく、この井戶の底に落ちてから以後の私は、すべてに於てあなたよりも强者です。私は唯、ここまで來ても、まだそのやうに焦慮してゐるあなたが、堪らなく憎くなつて來たのです。

大輔　憎いか。——私はまた、お前のその猪のやうな心持が、氣の毒に思へてならないのだ。

次郞　氣の毒だなどと、假りにも、そんなことは言はないで下さい。私はあなたに憐まれるやうな、弱い人間ではありません。

大輔　では、强い人間だといふのか。

次郞　あなたよりは、遙かに强い人間です。

大輔　どうしてそれが判るのだ。

次郎　言ふまでもありません。第一私は、兄上のやうな女女しい男ではないのです。
大輔　それだから、どうして私より強い人間だと言へるのだ。
次郎　私は死に對して、怖れを抱いてはゐないからです。
大輔　死を怖れないのは、お前が、死の怖しさを知らないからだ。何等の眼覺めることなしに片意地な武家教育を鵜呑にして來たお前は、死を鴻毛の輕きに比することが、世の中で一番強いのだと信じてゐるだらう。しかし、死を肯定することは、寧、生きようとする苦痛よりも、どれ程容易であるか知れたものではない。
次郎　それならなぜ兄上は、容易な死に臨んで、そんな卑怯な態度を執られるのです。
大輔　何んとかして、生きてゐなければならないと思ふからだ。お前も知つての通り、私には結婚して間がない妻がある。その妻に對する責任は、決して私の死に依つて果されるものではない。
次郎　武士が一旦死を覺悟する前に、妻一人が何んでせう。兄上は愛慾に引かされて、世の侮りを、敢て甘受ようとなさるのですか。
大輔　愛慾に引かされる……(間)或はさうかも知れない。が、それは單に、妻を戀ふの心ではないぞ。

次郎　では、責任を果すためだと、言はれるのですか。
大輔　さうだ。それが現在、私の心を支配してゐる企てなのだ。
次郎　嘘です。
大輔　何が嘘だ。
次郎　あなたは、嫂上のためにのみ、生きることを願つてゐるのです。
大輔　どうしてお前に、そんな斷定的なことが言へるのだ。
次郎　嫂上をお貰ひなさるまでのあなたは、今日の様な、覺悟のない方ではなかつたからです。
大輔　死を急ぐばかりが覺悟だといふなら、死を拒む私は、覺悟のない人間だとも言へよう。しかし、そればかりが覺悟ではあるまい。
次郎　武士の覺悟の的が、二つあつてよいものですか。
大輔　さうか。それゆゑ責任を果すためだといふ、私の言葉を信じないのだな。
次郎　當然のことです。
大輔　それなら、無理に信じてくれとは頼むまい。――私とて勿論出來ることなら、お前と同じやうに、武士らしいといふ虚僞の美名に醉ひながら、端然として死に就きたいのだ。その方がどれだけ樂であり、どれだけ立派らしく見えるか知れまい。が、今はそれさへも許されない

立場にあるのだ。
次郎　あなたの心が、執着の絲に繋がれてゐるからです。魂が、うつろになつてゐるからです。
大輔　(無念さうに)次郎。これ程言つても、お前には、まだ私の心が判らないのか。
次郎　判りません。しかも私は、町人小者にも劣つたやうな、そんな心持を、永久に判るやうになりたくないのです。
大輔　(間。――鋭く)次郎。僞りを言ふのは止せ。
次郎　何が僞りです。
大輔　お前は、泣いてゐるではないか。
次郎　(あわてて顔をそむける)だ、誰が泣いてなどゐるものですか。
大輔　泣かない者の眼に、どうして涙が宿るのだ。
次郎　涙ではありません。
大輔　涙でなくて、何んだといふのだ。
(間。――次郎は突然、傍にあつた小刀の鞘を拂つて、無言の儘大輔に突いて掛る。)
(大輔は素速く切先を避けて、確と次郎の手首を摑む)
大輔　な、なにをするのだ。
次郎　(興奮して)私は、あなたに負けたくないのです。
大輔　さうか。しかし私はまだ命が惜しい。(靜かに摑んだ手首を放して)無謀なことは止めてくれ。たとへこの儘、草を嚙んで死ぬ時が來ようとも、それまでは、繼いでおかねばならない命なのだ。お前の小さな英雄心を滿足させるために、むざむざ刺されていいものか。
(次郎は唇を嚙んで、俯向いてゐる。)
(ほがらかに、雲雀の遠音が流れて來る。)
大輔　次郎、あの聲を聞いたか。
次郎　(聲を顫はせて)死を覺悟した者の耳には、鳥の聲などは聞えません。――私は兄上に刄を向けた者です。どうかその刀で、ひと思ひに、私の胸を刺して下さい。
大輔　馬鹿なことをいふな。私はまだ、弟を刺す刀は持たないぞ。
次郎　兄上はこの次郎を、憎いとは思はれないのですか。
大輔　私には、お前の心が哀れめこそすれ、憎いなどとは思へない。
次郎　あなたに刄向ふまでの、不倫を盡してもですか。
大輔　武士道の片意地より外何も知らずに、唯一途に名譽のみを思ひ續ける、その單純な心が憎めようか。――生れて今日まで、私はお前の兄として、心ならずもお前を打つたことはあつた。が、憎みを抱いてしたことは、唯の一度もなかつたのだ。
次郎　なぜ憎んでは下さらなかつたのです。私はあなたに

憎み續けて貰ひたかつた。

大輔　心にもないことは、言はずにくれ。

次郎　心にもないことではありません。日頃兄上が、私を憎んでゐて下すつたなら、私は今日まで、苦しい思ひを繰返さずとも濟んでゐたのです。

大輔　人を憎むことは、己れを憎む事よりも淺間しい。――忘れもしまい。私が十五、お前が十三の年だつた。母上は、かりそめの病に罹られて、遂に明日をも知れぬ御重態になられた時、二人を枕邊へ招んで遺されたのは、兄弟相信ずべしとのお言葉ではなかつたか。私はそれ以來、母上の御遺言を心底深く銘じて、片時も忘れたことはなかつたのだ。――年を重ねる毎に、お前と私との考へは、次第に相去つてゆくのを知つた。しかし、所詮は己れ自身の心にさへ、同時に相反する、二つの氣持が起ることもあるのだ。血を分けた弟だとて、兄の行く道を歩けとは言ひ得なかつた。――お前はお前の心の儘に伸びた。私は私の心の儘に伸びた。そして遂に今日の日が來たのだ。誰の罪だとも言へまい。強ひて言へば、世の中の罪であるかも知れない。その罪を背負つたお前が、どうして憎めようか。

次郎　（萬感迫つて、拳で涙を拂ひながら）兄上、赦して下さい。私は、それ程愛して下さるあなたが、憎くてならないのです。

大輔　憎くてならないと？　お前はまだ、虚僞の教へに盲從してゐようといふのか。

次郎　私が兄上を、卑怯未練だと罵つたのは、武士道の教へに名を藉りて、心の奥底深く受けた恨みを晴したかつたのです。

大輔　恨みとは、何を指すのだ。

次郎　兄上は、私の敵なのです。

大輔　（意外の言葉に興奮して）敵だとは聞捨てならぬ。何故私が、お前の敵なのだ。――さ、それを言へ。

次郎　あなたは自ら氣付かれぬ間に、一人の弟を殺してゐるのです。

大輔　何を言ふのだ。私はお前に、傷ひとつ負はせた覺えはないぞ。

次郎　覺えはありますまい。しかし私はあなたの手に依つて、生命以上のものを、奪はれて仕舞つたのです。

大輔　次郎、そりや一體、何を意味する言葉なのだ。

次郎　（無念さうに）兄上は、私が命にも換へ難いほど愛してゐた、あの靜枝を取つたのです。

大輔　（愕然として）な、何を言ふのだ。靜枝は、跡部丹後殿の媒酌に依つて娶つた、正しい私の妻ではないか。

次郎　勿論、それに相違はありません。しかし、現在あな

たの妻となる以前、靜枝は既に、私と相思の仲にあつたのです。
大輔　（興奮のために吃る）お、おろかなことを言ふな。あ、阿部與七郎の娘靜枝は、左樣に淫ら者ではないぞ。
次郎　さうです。斷じて淫らな者ではありません。それゆゑ父の命に反き難く、泣いて兄上の許へ嫁いだのです。
大輔　嘘を構へて、この兄を苦しめようといふのだな。
次郎　私は旣に、兄上の前に、赦しを乞うてゐる者です。なんであなたを、苦しめようなどと思ふものですか。
大輔　それなら何故、ありもせぬ過去を作るのだ。
次郎　兄上、靜かに考へて下さい。ありもせぬことに、どうして私が、斯程までに苦しみませう。何事も知らずに、嫂上を迎へられたあなたは、私の一言一言を、悉く虛構の事實として却けられますが、如何に愚者でも、戯れに兄の胸に刄を擬しはいたしません――。どうぞこの次郎があなたを恨む心の裡には、切なる思ひのあることだけをお汲み下さい。
大輔　（焦々した氣持で）いやだ。私はどうしても、そんなことを信じたくはない。
次郎　それは曾て、私の嘗めた苦痛です。靜枝があなたの許に嫁ぐといふことを、初めて耳にした時の私は、夢にも思はぬその出來事に、どれ程悶え苦しんだか知れません、きのふまで相思の仲であつた者に、今日からは、目のあたり嫂として仕へねばならない苦しさは、唯々胸が張裂けるやうな思ひでした。――もしも私が、櫻井家の嗣子に生れてゐたらばと思ふ毎に、幾度私の手は、刀の柄を握りしめ、私の足は、あなたの寢間に向つたことでせう。私は、兄上を刺してから後の、嫂上との永い快樂を夢見てゐたのです。
大輔　（遮切る）もう止めてくれ。（悶えながら）そんなことが、どうして信じられるものか。あの貞淑な靜枝が、お前と懇ろであつたなどと、そんな馬鹿氣たことが……
次郎　信じたくないあなたのお心持は、私に容易に肯けます。しかし兄上、私もやはり、その苦しい事實に悶えながら、洩すことの出來ないこの胸の傷を、しかと兩手で抱いて來たのです。憎くてならないあなたを、罵ることも出來ずに、過して來たのです。
大輔　（突然弟の手首を押へて、鋭く）次郎。お前はまさか、靜枝までも、似非武士道の傀儡に使ふのではあるまいな。
次郎　何のためにです。
大輔　お前の片意地を、掩ふためにだ。
次郎　何を言はれるのです。武士が自分の愛してゐる者を、かりにも傀儡などに使つていいものですか。（懷中から

一通の手紙を出して大輔に渡す） 兄上、これでも私をお疑ひなさるのですか。

大輔 （手紙を展いて見る。間。――絞るやうな聲で） こ、これは、靜枝の手跡ではないか。

次郎 さうです。あなたの許に嫁ぐその前夜、私が靜枝から受取つたのです。どうぞ心中をお察し下さい。

（大輔は手紙を默讀してゐるうちに、次第に興奮して來て、やがてそれをビリビリに引裂く。）

次郎 （破れた手紙を奪ひ返して） 何をなさるのです。

大輔 しては惡いのか。

次郎 これは私の物です。あなたに、引裂いてくれと、お渡ししたのではありません。

大輔 引裂きたいから、引裂いたのだ。 （傍にあつた刀を取つて） もう何も言はずと、それへなほれ。

次郎 何をなさらうといふのです。

大輔 私はお前の兄として、不倫の弟を成敗してやるのだ。

次郎 それは迷惑です。私は嫂上の事に就て、不倫と呼ばれる覺えは毛頭ありません。

大輔 その手紙はどうしたのだ。

次郎 これはまだ、私の戀人として生きてゐた頃の靜枝から來たものです。死んであなたの許へ嫁いだ後の嫂上との中には、少しも後ろ暗いところはない筈です。

大輔 何んでもいい。私は兄として、爲すべきことをするまでなのだ。

次郎 では、どうしても斬ると仰しやるのですか。

大輔 その通りだ。

次郎 たとへ兄上でも、私はむざむざ斬られるのはいやです。

大輔 お前は先刻、一思ひに刺してくれと言つたではないか。

次郎 あの時は、あなたの寛い心持に對して、尊敬の念が起つたからです。しかし今はもう、刀の錆と消えることなどは、到底忍びないことです。

大輔 卑怯なことを言ふな。今が今まで武士の道を說き、家名の尊さを述べた言葉を忘れはすまい。私はお前の口から、命を惜しむと言つて、あらゆる惡罵を浴びせられたぞ。その舌の根も乾かぬうちに、今度は己れが死を怖れるとは、何といふ意氣地のないことだ。

次郎 死を怖れるのではありません。私は兄上の誤解を受けながら、むざむざ斬られるのは、いやだと申すのです。

大輔 お前が何んと言つても、私はもはや、この儘に差し置くことは出來ないのだ。

次郎 あなたの前に、懺悔をしてゐる者をも、赦すことは出來ないと言はれるのですか。

大輔　言ふまでもないことだ。左様な懺悔が、正しいと思つてゐるのか。

次郎　（沈默。――決然として）止むを得ません。どこからでもお斬り下さい。私も兄上とは思はず、一人の戀敵としてお相手致します。

大輔　何、相手をする？

次郎　理不盡な刄のもとに、伏したくはないからです。

（その言葉が終るか終らぬうちに、大輔は、眞向から弟に斬つて掛る。）

（次郎は忽ち拔きつれて、兄の刀を鍔際で受け止める。互に疲勞困憊してゐる事とて、その儘、いづれも斬り込むだけの氣力がない。）

（長き間。）

（雲雀の聲が空を流れる。）

大輔　次郎、太刀を引け。

次郎　何故太刀を引くのです。

大輔　いいから、太刀を引いてくれ。

次郎　あなたは今、私を成敗すると言はれたではありませんか。

大輔　（突然太刀を捨てて、弟の手を取る）次郎、赦してくれ。私にはお前を成敗するなどといふ資格はないのだ。

次郎　兄上。

大輔　私はお前のいふ通り、お前と靜枝との幸福を奪つた者に相違ない。この上、兄といふ長者の地位を笠に着て、再び罪は重ねたくないのだ。

次郎　しかし、今となつては同じことです。私にも戀のうらみがあるのと同樣、兄上にも、私に對する憎しみがあるはずです。青春の最期を、妥協に終りたくはありません。

（刀を拾つて兄に渡す。）

さ、お互ひの胸に溢れた、恨みと憎しみとが盡きるまで、息の續く限り斬り合ひませう。

大輔　いやだ。私の心にはもはや、恨みも憎しみも何もない。唯、曠野に月を仰ぐやうな、一脈の寂しさだけがあるばかりだ。

次郎　あなたには、飽くまでも、意地といふものがないのですか。

大輔　曾てはあつた。が、それも今は盡き果てたのだ。

次郎　私はあなたのやうな意氣地なしに、靜枝を取られたかと思ふと、腸を掻きむしられるやうに殘念です。

（次郎は刀を土に徹したまま、ぢつと俯向いて考へる。）

（長き間。――どこからともなく、「おーい」と呼ぶ人聲が聞えて來る。やがてそれが、「櫻井大輔樣」「櫻井

「次郎様」と呼んでゐることが、はッきり判る。）

次郎　（思はず立上つて）兄上、救助の者が來たやうです。
　　（次郎の聲が終るか終らぬうちに、大輔は、いきなり刀を引抜いて、次郎の肩口から、袈裟懸けに斬りおろす。次郎は、ばつたり殪れる。）

次郎　卑怯者！

大輔　卑怯ではない。不倫な戀をした者が受ける、當然の結果なのだ。

次郎　いいえ、卑怯だ。詫びると見せて斬付けるとは、この上もない卑怯者だ！

大輔　もう何もいふな。今日から以後の、お前の苦痛を去つてやるのだ。（上に向つて、聲を限りに叫ぶ）おーい。櫻井大輔はここにゐるぞッ、櫻井大輔はここにゐるぞッ。

次郎　（苦痛を堪へつつ）ひ、ひと太刀でいい。一太刀でいいから報いたい。

大輔　（次郎の聲には耳も藉さずに、絞るやうに叫ぶ）おおい。助けてくれえ。助けてくれえ。
　　（間。）
　　（次郎は大輔の袴の裾を掴んだ儘、落葉の上に打俯してしまふ。）
　　（大輔は、「助けてくれえ」を叫ぶうちに、次第に氣力がおとろへて、次郎の上に折重なつて殪れる。）

　　（雲雀の聲のみが、朗らかに聞える。）

――幕――

（大正十四年十二月作）

通俗震災記（二幕）

人物

萬吉　指物師（二十八歳）
大三　同その弟（二十五歳）
おきち　萬吉の嫂（二十七歳）
おいと　おきちの子（七歳）
おりゑ　萬吉の妹（十九歳）
瀧子　豪商和泉屋清次郎の娘（十八歳）
金八　魚商。萬吉の伯父（五十歳）
三平　小僧（十四歳）
その他、近所の人達、避難民の群衆、警察官等多數。

時日

大正十二年九月一日の正午前後、及び同月四日の夕刻。

場所

日本橋區濱町の指物師萬吉の住居、並びに上野公園東照宮の避難所。

（萬吉一家に對する說明）萬吉の家は、祖父が松平出羽守の贔屓を受けてゐたといふ程の名人の家柄だけに、今でも引續き諸方にいい華客を持つてゐる。濱町では、まづ名の通つた指物師だつた。二年前に長男の仙太郎が、妻のおきちと、その子のおいととを遺して死んだあとは、次男の萬吉と、三男の大三とが、嫂おきちの面倒を見ながら、妹のおりゑに裁縫や三味線などを仕込んで、至極氣樂に暮してゐた。そして萬吉は兄の一周忌が濟んでから、既に半年も經つた今日まで、獨り身でゐては、世間の信用も薄くなる、といふやうな親戚一同の心配から、近く、出ず入らずに、嫂のおきちをその儘、妻に直すことにまで話が極つてゐたのだつた。――斯うした前提のもとに、この戯曲の幕は開かれる。

第一幕

第一場

序幕は萬吉の家である。木口建具その他古くはあるが、昔からの職人の住居だけに、相當に凝つた作りに出來てゐる。――舞臺一杯に正面へ向けて、見世先を裏から見た形に建ててある。觀客席からは見えないが、上

手の奥に物置があり、その上が中二階になつてゐるところ。

屋臺は正面の中程から縦半分に仕切られて、下手が仕事場上手が茶の間になつてゐる。仕事場は、六疊くらゐの、低い板の間。突當りが往來に面した見世口になつてゐて、硝子戸を左右に開いたまん中に荒い簾が懸けてある。簾の下に片寄せて、数個の砥石や、磨桶などが置いてある。――溝板の上に、大きな黒犬が一匹寢ころんでゐる。

仕事場の上手は、裾の三尺ばかりが羽目板、上が壁、壁へ附けて二段の棚が吊つてありそこに色々の道具類や、木切がのせてある。羽目には黒柿や欅の板が数枚と、他の細々した板などが、所嫌はず列んでゐる。

上手の茶の間は八疊で、仕事場より一段高く、正面下手寄に肘掛窓、同じ上手寄に、佛壇と茶箪笥とが塡込になつてゐる。窓の下にはタテに長火鉢が置いてある。

上手は奥まつて、二階と勝手元に通ふ三尺のれん口がある外は、すべて壁になつてゐる。のれん口の柱に、十一時十分を指した六角時計が懸つてゐる。壁の前には二棹の箪笥があり、その上に大きな人形が飾つてある。

穏かに晴れた初秋の日差が、仕事場と茶の間の窓から、部屋の中頃まで流れ込んでゐる。仕事場では、羽目を背にした萬吉が、洋箪笥の仕上をしてゐる。小僧の三平は、往來の方へ向いて鉋の刃を磨いでゐる。

茶の間では、おりゑがおいとのネルの着物を縫つてゐる。

かうした情景のうちに、静かに幕があがる。

萬吉　（洋箪笥の仕上をしながら）さ、漸くこれで仕上りだ。（三平に）お前もけふは飛んだ朔日をしちまつたな。これが他の仕事なら、どんなに立込んでゐたからつて、朔日の休みを棒に振らせるやうな事はねえんだが、何しろ古いお華客の和泉屋さんから、日を切つての頼まれものなんだから、どうすることも出來ねえや。それに、あの綺麗なお嬢さんの、一世一代のお嫁入道具になるんだからなア。まアけふはちつと餘計に小遣をやるから、飯を食つたらゆつくり淺草へでも行つて、お前の好きな、眼玉の松ちやんでも見て來るがいゝや。

三平　でも親方。あたしやもう、日本物は見たかありませんよ。――見るんなら、チヤアレスレイか、大グリフイスの監督したものでなけりや。

萬吉　（笑ひながら）生意氣なことを言やアがら。ＡＢＣさへ讀めねえくせに。

おりゑ　（針を止めて）ところが兄さん、この頃の三平は、

なかなかそんなんぢやないのよ。英語の新聞まで讀めるんだつて云ふから……。

三平　(頭を掻きながら)　ひやかしちや困るなア。英語の新聞なんか讀めやしませんよ。

萬吉　はゝゝ、讀めねえと斷るだけが正直だ。まづお前に讀める英語は、五十錢銀貨に書いてある。あの 50 といふ字ぐらゐが關の山だらう。

三平　ありやア親方英語ぢやない、算用數字ですよ。

萬吉　だからよ。算用數字にしろ何にしろ、あんなところが、お前にやア誂へ向きだらうといふんだ。

三平　そんなに馬鹿にしたつて、これでもあたしやア、W.C とかストップとかいふ字なら、そらで書けるんですぜ。

おりゑ　まアいやだ。W.C てのは、はばかりの事ぢやないの。流石に三平だけあつて、持つてきどころが違ふからいいわ。

萬吉　はゝゝ、これで活動は、西洋物でなけりやイヤだなんて、ごたくを列べるんだから嬉しいや。――まア何でもいいから飯を食つたら、腹減なしに遊んで來ねえ。晩の八時まではお前の體にしてやるから……。

三平　和泉屋さんへは、納めに行かなくてもいいんですか。

萬吉　和泉屋さんは、明朝早く納めることにするからいいよ。(洋箪笥の出來を鑑賞しながら)　やつぱり氣を入れた仕事だけに、ちつたアおつな味が出たやうだな。和泉屋さんの大旦那も、これだけに上りやアほくほくものだらう。何しろこの仕事だけに、まる半月掛つたんだからなア。(おりゑに)　丁度お前や義姉さんが稻毛から歸つて來た、あの翌日に始めて……並の物の三倍も手間を食つたんだからなア。

おりゑ　でもいいわ。お芽出度に使ふ道具を賴まれれば、三年壽命が延びるつて、お父つあんなんかもよく云つてたくらゐだから。

萬吉　そりやアいいとも。壽命なんか延びなくつたつて、氣のいい仕事をすると、胸が清々するだけ儲けもんだ。よく役者が氣のいい役をすると、骨が折れても飯が甘えといふが、あれも丁度こんな氣持がするに違えねえんだらう。(道具箱から煙草入を出して、ゆつくり煙草を喫ひながら獨言のやうに)　黒柿の細工は、どことなく奥床しいところがあるなア。まづこれなら、どこへ持つて出たつて、座敷負のするやうなことはあるめえ。假にお孃さんのお嫁入先が、どんな立派な家だとしたつて。

おりゑ　お婿さんのお里は、商賣屋さんなの。それとももた家?

萬吉　俺もよくは知らねえが、なんでも三井の重役の息子さんだとか云つてたつけ。どうせあれだけのお孃さんを

貰はうと云ふんだから、金持にや違へねえさ。
おりゑ　仕合せだわねえ。縹緻がよく生れて來ると、どこへでも勝手なところへ行けるんだから……。
萬吉　さう極つたもんでねえさ。世の中にや随分スベタでも、金持の奥さんで納つてるのもゐるんだから。――一様にや言へねえよ。
おりゑ　それもさうだけど……。
萬吉（小聲に）三平。もうこつちの仕事はいいんだから、お前もそこいらを片附け始めねえか。
三平　へい、直ぐ片附けます。
（三平は仕事場を片附け始める。）
（稍長い間。――萬吉は盤の埃を拂つたり、手を洗つたりする。）
萬吉　何時だ、おりゑ。
おりゑ　今、十一時十五分。
萬吉　十一時十五分？　ぢやアぢきに、おいと坊も學校から歸つて來るな。
おりゑ　きつと、義姉さんがお不動様の歸りに寄つて、一緒に歸つて來るわ。けふはお座をきめるだけだと云つてたから。
萬吉　今日はひとつ三平の眞似をして、午飯を濟ませたら、おいと坊と一緒に、活動寫眞でも見に出掛けるかな。

三平　親方、行くんならやつぱり帝國館がよござんすよ。トム・ミックス氏の「馬蹄の血烟」を、封切したばかりですから。
萬吉　冗談ぢやねえ。あんな子供に毛唐物なんか見せたつて解るものかな。それこそやつぱり、眼玉の松ちやんの忍術でなけりや、納りやアしねえよ。
おりゑ　いとちやんの御贔屓役者は、松ちやんと、扇太郎の二人切りなんだもの。
三平　だから、もつと西洋物がわかるやうに、仕込んでやらなけりや駄目ですよ。
萬吉　いけねえ、いけねえ。そんなことをして、今に頬ぺタへ紅を塗つて歩くやうな女にでもなつて見ろ。それこそ、死んだ兄貴に申譯がねえや。
三平　親方は見ないでけなすんだから、駄目だ。
萬吉　見ないでぢやアねえよ。見りやア猶のこと、見せられるもんかい。
（三平は板の間を掃いてから、戸外へ出て見世先を掃除する。）
（萬吉は洋箪笥を片隅へ寄せて、茶の間の上り端へ腰を掛ける。）
萬吉（ふと柱時計を見て）十一時二十分か。（おりゑに）大三は醫者からどつかへ、廻るやうなことを、云つてた

かい。

おりゑ　ええ、小さい兄さんは、お午(ひる)までには歸つて來ると云つて出掛けたんだから、別にどこへも廻りやアしないでせう。それに、まだ手の傷がいい方ぢやないんだし。……

萬吉　あいつまた、明治座でも一幕のぞいてゐやアしねえか。

おりゑ　さア。――でも明治は、まだ開いてなかないの。四日とか、五日とかが初日だつて話ですもの。

萬吉　さうか。――だが、醫者だけだとすると、馬鹿に遅いな。

おりゑ　もしかすると、住吉町の貸本屋へ寄つてるかも知れないわ。なんだか、この間借りて來た新派ものは、みんな讀んぢやつたつて云つてたから。……それにしても、もう歸つて來る時分よ。

萬吉　(獨り言のやうに)早く歸つて來りやいいのに。

おりゑ　何か用なの。

萬吉　なアに、別に用ぢやねえけど、あの洋簞笥の抽斗は、あいつが削つてくれたんだから、出來上りのいいところを、早く見せてやりてえやうな氣がするんだ。

おりゑ　(戸外(おもて)にゐる三平に)三平。お前そつちから、小さい兄さんが歸つて來ないかい。

三平　見(め)えませんよ。

おりゑ　もう歸つて來るわ。――それより兄さん、着物を着換へちやつたらどう。

萬吉　うむ、今、ちよいと飯前に、湯へ行つて來ようかとも思つてるんだが……

おりゑ　そんなら着物を着換へて、直ぐに行つてくりやいいわ。そのうち、御飯の仕度もして置くから。

萬吉　ぢやアさうするかな。

(萬吉は茶の間へ上つて、汗ばんだ仕事着を脱ぐ。おりゑが惡い方の簞笥から萬吉の着物を出して着せる。)

(間。)

(伯父の金八が、三平に岡持を持たせて、おもてから這入つて來る。)

金八　(極めて歯切れのいい調子で)今日は。

おりゑ　あら、伯父さん。

萬吉　いらつしやい。めづらしいぢやありませんか。

金八　(三平の持つてゐる岡持を受取つて、そのまま茶の間へあがる)けふは來るつもりぢやなかつたんだがね。あんまりいい鯛(てえ)があつたもんだから持つて來たんだ。(岡持の蓋を取つて)どうだい、うしほと刺身にすりや、家中で食つたつて、ひとかたけにやア食ひ切れねえぜ。

おりゑ　まア、大きな鯛ね。

金八　しかもバチぢやねえよ。三浦三崎の荒海で、江戸のお城を七分三分に睨めながら育つた鯛なんだから、昔なら、頭に葵の御紋が附いてゐようつて代物なんだ。――まだみんな、飯前なんだらうな。

萬吉　今、湯へでも行つて來て、そのうちおりゑに仕度をさせようと思つてたところだから、丁度よござんしたよ。

（おりゑは金八と萬吉に茶を注いで出す。）

金八　折角持つて來ても、飯の濟んだあとなんかぢやア氣が利かねえからね。――でもまアよかつた。下げて來た甲斐があつて。（おりゑに）りゑちやん、今俺が拵へるから、こいつをちよいと臺所へでも持つてつといてくんねえ。

おりゑ　はいはい、ぢやアこのまま、流しへおろして置きますよ。

金八　うむ、さうして置きねえ。

（おりゑは岡持を下げて、勝手元へ去る。）

萬吉　棚から牡丹餅ぢやなくつて岡持から鯛か。――でも、何が仕合せになるか知れませんや。いつもなら、もうそろそろ飯を始めてゐる時分だのに、けふは今し方まで、仕事をしてえたもんだから……。

金八　仕事を？　そいつア朔日早々稼ぐね。――尤もこれからは、おきちと一緒になるとなりやア、おいと坊もお前の子になるやうな勘定だから、これまでのやうに、大ッぴらで大三に助けさせる譯にも行くめえしなア。――まア昔から、稼ぐに追着く貧乏なしといふから、稼ぐに越した事アねえよ。

萬吉　伯父さんは、直ぐそんな方へ取るから降參だ。あつしが今日仕事をしたのは、おきつさんと一緒になる日が近えとかなんとか、そんな譯ぢやアねえんで……（洋箪笥を指して）あれあすこにあるあの洋箪笥を、和泉屋さんから嫁入道具だといふんで、日限で頼まれたもんだから、仕方なしに仕上げをやつちまつたんでさアね。

金八　うむ、和泉屋さんの仕事か、そいつア俺があやまつた。（仕事場へ降りて、洋箪笥へ手を觸れて見る）　黒柿だね。いゝ出來だな、どうも。餘ッ程手間が掛つたらう。

萬吉　丁度半月掛りましたよ。でも、自分ながら良く仕上つたんで、氣持がよござんさア。

金八　なんでも十日ばかり前に、人形町で和泉屋の大番頭さんに會つた時も、さう云つてたつけ。今度指蔦へ頼んだ洋箪笥は、お嬢さんの身の廻りの物を入れるんだから、嫁入道具のうちで、一番肝心な物だなんて。――でも、拵へたお前の氣持がいいやうなら、この上の代物はねえ譯だ。まア何でもいいから、身を入れていい仕事をしてくれりやア、俺までが、世間が廣くなるからなア。

萬吉　どうせ親父の眞似事だから、大したことは出來ませんがね。
金八　眞似事でも、その通りに出來さ。すりやア、名人だといふくらゐのもんだ。まアいつまでもその心掛で、確かりやつてくんねえ。（再び茶の間へ戻る）
（おりゑが番茶の土瓶を持つて來る。）
おりゑ　伯父さんは、濃いお出花が好きだから、今、焙じて來たのよ。
金八　さうか、そいつア有難え。時に、おきちやなんか、みんなは何處へ行つたんだい。
おりゑ　義姉さんは、藥研堀のお不動樣へお詣りに出掛けたの。
金八　お詣りか。――おいと坊は學校だな。
おりゑ　えゝ、けふはお座しらべ。きつと義姉さんと一緒に歸つて來るでせう。義姉さんは、歸りに學校へ廻るんだなんて、言つてたから。
金八　うめえ餌が待つてるんだから、早く歸つて來りやアいいになア。
（間。大川を溯る船の汽笛が聞える。）
おりゑ　兄さん、お湯は。
萬吉　もう湯は止めだ、活動へでも行つて歸つて來てから、ゆつくり行く事にしよう。

金八　活動へ行かうツてのかい。
萬吉　なアにね、飯でも濟ませたら、おいと坊を連れて、ぶらぶらと出掛けるつもりでゐたんですよ。例の松之助の忍術を見に。
金八　そいつアいいな。俺もひとつつき合はうか。
おりゑ　伯父さんは、松之助よりお酒の方がいいんぢやないの。
金八　酒は酒、松之助は松之助で、みんな別口だらうぢやねえか。おきちや坊やが歸つて來たら、ここで一口やつて、それからその方はその方で、あらためて出掛けるんだ。
おりゑ　兩天秤はこすいわ。どつちかひとつでなけりやア。
金八　まアそんなにイヂメルもんぢやねえよ。片つ方はほんの子供のつきあひだ。
萬吉　はゝゝゝ。子供こそいい面の皮だなア。俺一人ぢや足りなくつて、伯父さんにまで、ダシに使はれるんだから。――伯父さん、おいとが不足を言ひますぜ。
金八　違えねえ。ゐなくつて幸だ。
（そこへ戸外に唱歌の聲がのんびり聞えて、小學校の袴を履いたおいとと、おいとの鞄を持つた母のおきちとが歸つて來る。）
金八　やア歸つて來た、歸つて來た。
おりゑ　（見世先まで出掛けて）義姉さん、伯父さんが、

お待兼なのよ。

おきち　まア伯父さん、お珍らしいぢやありませんか。

金八　いけねえぜ、おきつさん。亭主が極つたといふのに、そんなに浮氣をして歩いてちやア。

おきち　まア伯父さんが、冗談ばつかし。（茶の間へ上つて、あらためて挨拶をする）いらつしやいまし。ご無沙汰ばかりしてゐて濟みません。

金八　や、さうあらたまつちや困るよ。俺だつて、御無沙汰の方ぢや敗は取らねえんだから。（おいとに）おいと坊、お前は見るたんびに大きくなるなア。けふは久し振りで、學校か。

おいと　けふはお座しらべで、お稽古は明日つからなの。

金八　さうか。まア一生懸命に勉强するんだぜ。このお正月にや伯父さんがひとつ、すばらしいハイカラの洋服を拵らへてやるからなア。

おきち（おいとに）まアいいこと。それぢやアどうしたつて、勉强しないわけにや行かないねえ。

萬吉　怠けたり、どん〳〵燒ばかり食べたがつたりしてゐりやア、みんな俺が伯父さんとこへ行つて言付けてやるから。

金八　大丈夫だなアいと坊。一生懸命に勉强して、來年は優等になるんぢやねえか。

おいと　あたいなんか、もう三十も本字が書けるわ。

金八　はゝゝ、そいつア豪氣だ。本字を三十書けりやア、俺なんかより餘ッ程學者だぜ。

おきち　おいと、伯父さんが、あんなことを言つてるよ。伯父さんより、お前の方が學者だとさ。

おりゑ　いとちやんのお得意は、「青い眼をしたお人形は——」といふ唱歌なのよ。

金八　さうかい。ぢやアひとつあの唱歌を聞かうぢやねえか。

おいと　お腹が空いたからイヤだア。

金八　お腹が空いた？（柱時計を見て）違えねえ。もうぢき午だ。ぢやアひとつ、伯父さんがおいと坊に、うめへものを食べさせるかな。

おきち　話にかまけて、すつかり御飯の仕度を忘れちまつたわ。

金八　なんにも仕度なんぞいりやアしねえよ。おまんまさへありや、それでいいんだ。

萬吉（おきちに）伯父さんが、拜みてえやうな鯛を持つて來てくれたんだよ。

おきち　おやさう。それは濟みませんねえ、どうも。

金八　どうせお手のものの、有合せだアな。どれ（と立上つて）イキのいいところを、作つてやるかな。——刺身

にして食ふのが一番だらう。

おきち　お刺身は結構ですね。（萬吉に）ねえ。

萬吉　俺ア何でもいいよ。義姉さん達のいい方が……

金八　よせよ萬吉。もう義姉さんはなからうぢやねえか。――祝言こそしなくつたつて、自分の上さんと極つたものを、義姉さんなんか可笑しいやな。

萬吉　（テレ氣味になつて）でも、永え間の口癖だもんだから、つひ……

金八　その口癖が可笑しいんだよ。はゝゝ、構はねえから、名前を呼んだらいいぢやねえか。

（萬吉は一寸おきちの方を見て、バツの惡さうな表情をする。）

金八　（おりゑに）家にや刺身庖刀があつたつけなア。

おりゑ　えゝ、あるわ。この前伯父さんとこから持つて來たのが、――

金八　ぢやアひとつ。皿と俎とを出してくんねえ。うめえ刺身を作つてやるから。

（金八は勝手元の方へ出て行く。）

おりゑ　（おいとに）いと坊もおいで。伯父さんが、お刺身を拵らへるんだから。

（おりゑはおいとを連れて、金八の後から勝手の方へ去る。）

（間。）

（おきちは、おいとの脱ぎ棄てた袴や、學校道具を片着けながら、見世先にゐる三平を呼ぶ。）

おきち　三平、ちよいと。

三平　（急いで來る）へい、なんです。

おきち　お前ちよいとね、三河屋へ行つて、お酒を五合取つて來ておくれよ。

三平　へい。いつものでいいんですか。

おきち　ああ、いつものでいいから、大急ぎでね。

三平　かしこまりました。

（三平は、草履を突掛けて駈けてゆく。）

（間。――萬吉とおきちとの仲に、ちよいと、きまりが惡いやうな「時」が過ぎる。）

萬吉　（獨言のやうに）もうあの鬼辛燒は、なかつたかなア。

おきち　鬼辛燒？　さア、多分大さんが食べちやつたと思ふけど、どうして？

萬吉　あれがあると、伯父さんの酒の肴にいゝからさ。

おきち　さうね。ちよいと蠅帳を見てみませう。（立上つて）あれア濱金のだから、伯父さんの口に合ふんだけど……

（おきちは、さう言ひながら、勝手元の方へ去る。）

（萬吉は茶の間から見世先へ降り立つて、おもてを眺めてゐる。）

（そこへ、左の手に繃帶をして首から吊つた弟の大三が、右手に二三册の貸本を抱へて歸つて來る。）

萬吉　どうしたい。大分遲かつたぢやねえか。

大三　うむ、醫者で待たされたもんだから。

（大三はその儘家に這入つて、茶の間の上り端に腰をおろす。萬吉は仕事場に立つたままでゐる。）

萬吉　まだ傷口の絲は取れねえのか。

大三　もう二三日ださうだよ。何しろ勢でやつた傷だから、見たところさうでもねえやうだが、ひどく深いつてんだからねえ。――もう大概厭々しちやつた。

萬吉　どうせさういふ怪我は、日々と根氣くらべだ。いくら急つたつて、時が來なけりや癒りやしねえよ。

大三　でも氣分が、何ともねえんだから、毎日仕事を爲ずにゐるのも、樂ぢやねえよ。（ふと、仕事場の隅に置いた洋簞笥を見付けて）あいつアすつかり仕上つたね。

萬吉　うむ、今漸く片着いたところだ。おかげでお前の削つてくれた抽斗は、馬鹿に工合がいいよ。（洋簞笥を撫でながら）手間を掛けただけのことはあつたな。

大三　（同じく洋簞笥の側へ來て鑑賞しながら）いいね。やつぱり骨を折つた物は、それだけの甲斐が、品物の上に現れるから豪儀だ。――けふ納めるかい。

萬吉　明朝早く持込まうと思ふんだが、――それにけふは、八丁堀の伯父さんが來て、飯でも食つたら、一緒に出掛けやうつて言つてるんだから。

大三　八丁堀の伯父さんが來てるのかい。

萬吉　うむ、何だか馬鹿に自慢で、大きな鯛を持つて來たよ。今、臺所で刺身にしてら。

大三　そいつア有難えな。あれで伯父さんは、時々氣の利いた事をしてくれるね。

萬吉　はゝゝ、そんなことを言ふとどやされるぜ。

（おいとが、勝手元から駈け出して來る。）

おいと　伯父さんが、こんなに（手で山盛の眞似をして）お刺身を拵らへたよ。

萬吉　さうか、そりやアよかつたな。

おいと　お朔日だから、三平にもやるんだつて。

大三　はゝゝ、三平にもやるのか。

おいと　ああ、どうせ餘るからやるんだつて。

大三　餘るからやるのはいいな。

萬吉　伯父さんの言ひさうなことだ。

（貧乏德利を下げた三平が、歸つて來る。と同時におきちとおりゑとが、大きなチヤブ臺二つに色々の物を載せて、茶の間へ運んで來る。）

三平　お上さん、行つて來ました。
おきち　あ、御苦勞さま。——ぢやちよいとりゑちやん。ここでお燗するから、お銚子へ移して來てくれない。
おりゑ　はい。
（おりゑは三平から德利を受取つて勝手元へ去り、間もなく、燗德利を持つて來て、長火鉢の銅壺へ入れる。）
おきち　大さん大分ゆつくりね。
大三　醫者が混んだんで、すつかり待たされちやつた。
おきち　（笑ひながら）何だか判りやしないわ。お醫者樣をダシにして、また例のところへ寄つてたんぢやないの
大三　冗談言つちやいやだぜ、義姉さん。こんな恰好で、どこへ行けるもんか。
おきち　なんだかねえ。
（金八が手を拭きながら、勝手元から出て來る。）
金八　やア大三、いいところへ歸つて來たな。
大三　やつぱり口果報があるんですね。
金八　ほんたうだ。——時にお前、手を怪我したんだつてなア。
大三　ええ。だけどもう大した事アねえんです。傷口がすつかり着いたんだから、もう二三日經ちやアそろ〳〵仕事にも掛れるでせう。
金八　あんまりあわて者だから、そんな怪我をするんだ。さ、刺身がまづくなるから、みんなしてやつちやはうぢやねえか。
おきち　もう伯父さんのお銚子もついたから。——ぢやアお膳は別にしませんよ。
金八　ああいいとも。お客樣ぢやあるめえし。
萬吉　さ、いと坊はここへ來な。うちの叔父さんの痛い手へ觸るといけねえから。
（三平だけを別にして、一同は二つのチャブ臺を圍んで坐る。）
おりゑ　（銚子を取つて）伯父さん、あたしがお酌しませう。
金八　さうか。（猪口を取る）お前に酌をして貰つちや濟まねえなア。——みんなは俺に構はず飯を始めた方がいいぜ。こつちは勝手にやつてるんだから。
おきち　ぢやア他の人ぢやないんだから、さうした方がいいわ。
萬吉　（おきちに茶碗を出しながら）まつたくこいつア澤山あるね。餘つ程骨を折らねえと、ひとかたけにや食ひ切れねえぜ。
おいと　あたいが、どつさり食べるから大丈夫よ。
金八　これアいいや。おいと坊がそのつもりでやつてくれりや、餘るどころか、足りねえくらゐだ。

大三　仕事もしずにゐて、こんな上等の刺身を食つちやア、勿體ねえやうだね。

金八　そんなに有難がられると、氣が引けていけねえや。──だが、味は確かだらう。

萬吉　うまいね、やつぱり。どうだ、いと坊、頬ぺたが落ちさうだらう。

おいと　おいしいよ。

萬吉　御飯を食べたら、伯父さんと三人で、淺草へ活動を見に行くんだぜ。

おいと　松ちやんを見に行くの？

金八　お前の贔屓役者を見に行くんだ。

おいと　嬉しいな。──お母さんは行かないの？

金八　お母さんは言ふ事を聞かねえから、おいてけ堀だ。

おいと　お母さんも、行つた方がいいんだけど。

おきち　あたしア、お前が歸つて來てから、お話を聞かせて貰ふ方がいいね。あの人込で蒸されちやたまらないもの。

（この時、突然「ごを」といふ地鳴が聞えて來る。そして、一同が顏を見合せると殆ど同時に、「みしり」といふ音を立てながら、家が震動し始める。）

おきち　あ、地震だ。（と叫びながら、半ば立つて、おいとを引寄せる）

おりゑ　（立上つて）義姉さん、どうしませう。

金八　あわてちやいけねえぞ。今外へ出ると、怪我をするぞ。

（この會話のうちに、震動は益々激しくなり、棚の物は落ちる。簞笥は倒れる。そして崩れ落ちる壁の砂烟が家中を暗くする。

おいと　怖いよう。（泣く）

萬吉　伯父さん、もう駄目だ。危えからおもてへ出ませう。

（三平が、いち速く戸外に飛出す。）

萬吉　義姉さん。いと坊に怪我をさせるといけねえ。速くおもてへ出てくれッ。──さ、おりゑも大三も、みんな速くおもてへ出ろ。

金八　（叫ぶ）駄目だ。いま出れば瓦が落ちるぞッ。

萬吉　（金八の手を取つて）家が危ねえんだ。伯父さん、一緒に出て下さい。──大三、おいとの頭へ、布團を被せてやつてくれッ。

（萬吉は、長火鉢の上の鐵瓶の湯をいきなり火の上へあけると、金八を引摺るやうにして、戸外へ出る。「大變だア」「助けてくれ」といふ男女の叫び聲が、各所から起る。）

（一同が戸外へ逃れ去つた後も、家は間斷なしに搖れる。）

萬吉　（觀客からは、姿がはつきり見えない）義姉さんも
　おりゑも、離れちやいけねえぞ。
おきち　大丈夫です。みんな一緒にゐるから。ああいけな
　い。大さん、今家へ這入つちや危ない。
萬吉　どうしようつてんだ。大三。いけねえ、家などへ這
　入つちやいけねえ。
大三　大丈夫だ。ちよいとだから離してくれ。兄さんの拵
　へた洋箪笥を、俺が行つて出して來る。
萬吉　駄目だ。そんなことをして怪我でもしたらどうする
　んだ。
おきち　大さん、どうかそんなことはしないで……
大三　でもあのまま。たま無しにしちやつたら、和泉屋さ
　んに濟まねえぢやねえか。
　（大三は急つて家へ這入らうとする。）
萬吉　止せ……大三。もしか品物に間違ひがあつたら、俺
　が和泉屋さんを、しくじれば濟むんだ。お前の體に間違
　ひがあつたら、どこをしくじつたつて、間に合ふ事ぢや
　ねえぞ。
大三　兄さん、お前は、あんなに骨を折つて仕上げた、自
　分の仕事を壞されても、惜しいとは思はねえのか。俺は
　唯、あの抽斗を手傳つただけだが、それでもあのまま、
　壞して仕舞ふ氣にはなれねえんだ。

　（大三はさう言ひながら、萬吉の留めるのを振拂つて、
　家の中に駈け込む。そして、仕事場の隅にあつた洋箪
　笥に手を掛けると殆ど同時に、めりめりッといふ大音
　響が聞え、續いて家が倒潰する。）
　（舞臺は砂煙のために暗くなる。周圍の雜音に混つて、
　萬吉を首め人々の叫ぶ聲が、騷然と耳を奪ふ。）
　（形容の言葉もない程、物凄い叫喚の聲に掩はれた間
　――やがて、「死」のやうな、凄愴の沈默が流れる。そ
　の一瞬間を經た時、忽ち「火事だッ」といふ聲が聞え
　る。以前に倍した阿鼻叫喚が、舞臺を掩ひ盡す。）
萬吉の聲　もう駄目だ。みんなは速く、八丁堀の家へ逃げ
　ろ。――大三、辛抱してくれ。い、いま俺が、助け出し
　てやるぞッ。
大三の聲　兄さん、裏が開いてる。裏の窓に透があるんだ。
萬吉の聲　よしッ。今裏へ行つてやるぞ。大丈夫だから、
　確りしてろッ。
　（譬へ難い人々の叫び聲が、大濤のやうに、相次いで
　起る。――その叫び聲で繼ぎながら暗黑の舞臺は、第
　一場から第二場へと移る。）

第　二　場

舞臺は、崩潰した「指萬」の家を裏から見た形である。

家臺は、上手奥にあつた物置もろ共、丁度木箱を踏み潰したやうに、下手に向つて倒潰してゐる。が、地面と屋根との空間がない程に、ペシャンコになつてゐるのではない。

柱とか、箪笥とか、火鉢とかの色々の物が、自然に積重なつて、平均三尺くらゐの高さに空いてゐる。

正面に三角形にへし曲つて倒れた、四尺と一間の窓がある。家の中の模樣は、この窓から一番よく窺ふことが出來る。

恐らく、洋箪笥の側まで來た時、そこの眞上にあつた棟が落ちて來て、挾まれたのであらう。窓の方へ頭を向けた大三は、右脚を膝のあたりから棟間に挾まれた儘、倒れてゐる。その周圍には、仕事場で使ふあらゆる道具が、壊れたり、倒れたりして、散らばつてゐる。壁土や、火鉢の灰などが飛んで、砂塵が渦を捲いてゐるため、家の内部はかなり暗い。唯、風に煽られる火事の反射が、呼吸をするやうに、内部への光線を助けてゐる。

暗黒で終つた第一場から、稍明るみをもつた第二場に移つた時、觀客の前には右樣の情景が開展される。暫しの間、大三は脚を棟の下から脱き出さうとして、頻りにもがいてゐる。が、重い棟は、到底大三一人の力ではどうすることも出來ない。

やがて、腰へ鋸を挾んだ萬吉が、崩れた屋根の上を踏み越えて奥から現れる。既に自分の身の危險などは少しも念頭にないらしい。

萬吉　（屋根を降りると同時に）大三！

大三。ああ、兄さんか。――俺は脚をやられてるんだ。どうかして助けてくれ。

萬吉。脚をやられた？　よし、今助けてやるぞ。

（萬吉は半ば開いた窓硝子を破つて、中へ飛込まうとする。と、そのとたんに崩れかけてゐた窓わくが落ちて行手を遮る。）

萬吉　あ、いけねえ。

（そして暫し邊りを見廻してゐたが、いきなり屋根へ飛び上ると、力にまかせて瓦をめくり始める。）

（可なり長い努力の間。――あちこちの騒響が益々劇しくなる。やがて萬吉は十數枚の瓦をめくり終ると、そこから天井を破つて、大三の側に飛び降りる。

大三　（脚を挾まれてゐる棟を指して）こ、これだ。痛えから、速くどかしてくれ。

萬吉　棟だな。よし。（と、手早く腰の鋸を拔き取つて）直ぐだから苦しからうが辛抱してろ。

（萬吉は、直ちに鋸で棟を挽き始める。）

大三　（苦痛を耐へながら）　濟まねえ兄さん、勘忍してくれ。俺が剛情を張つたばかりに、餘計な苦勞を掛けるんだ。

萬吉　（懸命に鋸を動かしながら）　濟む濟まねえのつて時ぢやねえ。俺の仕事を庇つてくれたばかりに、お前はこんなことになつたんぢやねえか。濟まねえなんて言はれると、俺こそ、どうしていいか判らねえくれえだ。

（餘震が、また倒れた家を搖る。）

大三　ああ、堪らねえ痛さだ。骨が微塵に碎けるやうだ。

萬吉　よし、直ぐだ。辛抱しろ。

大三　（無言のまま齒を喰ひしばつて頷く）

（この時、突然おもてから「火が來たぞッ」といふ叫び聲が聞えて來る。萬吉は思はず鋸の手を止めて立上る。）

（あたりが不自然なくらゐ明るくなつて、物の燃崩れる音が手に取るやうに聞えて來る。火の粉が激しく屋根に降りかかる。一度立上つた萬吉は、無言のまま再び腰を据ゑて、殆ど夢中になつて、鋸を動かし始める。）

（再び「危ないぞッ、みんな速く逃げろッ……火が來た火が來たッ」といふやうな聲が聞える。）

大三　（突然）兄さん。

萬吉　………。

大三　俺は死にたくねえ。

萬吉　大丈夫だ。お前一人を見捨てるやうなことはねえぞ。

（黑煙が上手の方から吹込んで來る。）

大三　煙だ！　もう駄目だ。あゝ、もういけねえ。

（萬吉は狂氣のやうになつて、鋸を挽く。漸く棟が切れる。が、大三の脚は關節から碎けてゐて、到底起つことが出來ない。）

萬吉　（兩手で、大三の體を抱へる）　さ、大三。俺の背中へ、確かりつかまれ。どんなことがあつても、俺はお前を置いて行きやアしねえぞ。

（火焔は遂に「指萬」の家に移り、渦卷く火焔が、屋根や窓から透間もないまでに流れ込む。）

大三　（泣きながら萬吉を突放す）　もういけねえ。火が來た。息が苦しい。――俺はあきらめる。兄さん一人で逃げてくれ。

萬吉　馬鹿を言ふな。何の爲にこんな思ひをして、棟まで切つたと思ふんだ。俺一人で逃げるくれえなら、初めからこんな思ひは、しやアしねえぞ。

大三　（身をもだえながら）　ああ、兄さん。――俺だつて助かりてえ。助かりてえが、もう駄目だ。

萬吉　（再び大三の腕を掴んで）　駄目なんて事があるものか。いいから、俺の肩へつかまつてくれ。

大三　（半ば起上つて、直ちに倒れる）　兄さん！

（火煙の渦巻が、激しく寄せて來る。萬吉は、大三の肩に手を掛けた儘、暫し胸を搔きむしられるやうな思ひに悶えてゐたが、いきなり側にある洋箪笥の抽斗を一つ拔き取ると、それを小脇に抱へて「大三、ゆるしてくれ……」と叫びながら、這入つた場所から、屋根の上に飛上る。この時遂に、炎は脚下に迫り、火の粉が落花のやうに萬吉の體に降り掛る。阿鼻叫喚、周圍はさながら地獄の如きうちに、幕がおりる。）

第二幕

上野公園、東照宮鳥居側の避難所。舞臺正面から稍下手寄りに、殆ど舞臺の二分の一を占めるくらゐの、石の鳥居が、斜めに向いて立つてゐる。そこから石疊を連られて、遙か彼方に東照宮の社が在るこころ。

石疊の左右には、幾抱へもあるやうな大きな石燈籠が、二三を殘して、悉く倒れてゐる。そして鳥居や石燈籠の周圍には、多くの避難者の家族が、板切または燒トタン板を屋根にした小屋を掛けて、僅かに雨露をしのいでゐる。濡れた浴衣、シヤツ、おしめ等が、何等の秩序もなしに、手近の樹木に乾してある。鳥居や、倒れなかつた石燈籠には、各行方不明者を尋ねる紙片が、所狹きまでに貼附してある。或は相當に大きな木札や、タオルを利用した旗などを樹ててゐる者もある。

九月四日の午後八時頃。――裸蠟燭と、燒殘りの提燈と、雨上りの空が放つほのかな光とが、僅かに舞臺を闇から救つてゐる。

大鳥居から二間程離れた木立の間に、道路を背にして、極めて貧弱な小屋がある。そこにおきちと、その子のおいとと、和泉屋の娘の瀧子とがゐる。おきちと、おいととは、第一幕目と同じ服裝。瀧子は明石の着物を着てゐる。が、いづれも着のみ着のままで、四日の間火に追はれて放浪した爲、着物は汚れ、髮は亂れて、二日と見られないくらゐに衰へてゐる。おきちはおいとに膝枕をさせたまま、瀧子は風呂敷包に寄り掛つたまま、何もしずにぼんやり坐つてゐる。魚金の印のある提灯が一つ、中央に下げてある。

隣りにも、その隣りにも小屋がある。隣りの小屋には、赤ン坊を抱いた上さんが、赤ン坊に添乳をさせてゐる。傍には、その亭主らしい男が、晝間の疲れで、燒こげだらけの布團に包まつて、死んだやうに眠つてゐる。右樣の情景のうちに幕があく。

瀧子　（力のない調子で）もう何時かしら。

おきち　さア、まだ宵の口だらうと思ひますけど、何しろ時計がないんで、ちつとも時間が判りませんね。

瀧子　（獨言のやうに）今日こそ魚金が、何か良い知らせを聞かせてくれればいいがねえ。

おきち　ほんたうですねえ。――でも、お孃さんのお宅の方は、みんな茅場町の方へお逃げなすつたといふ事ですから、決してこつちで、御心配になつてるやうなことは御座いますまい。昨日も、あの夕方、日比谷公園で、大旦那をお見掛けしたといふ人もあるんですから。

瀧子　いい按配に、みんなが無事でゐてくれさへすれば、あたしの物なんか、何ひとつなくなつたつて、構やしないけど……（泣きたい氣持になつて）もうみんな諦めてゐるんだから……。

おきち　大丈夫ですとも。大旦那樣はふだんから、お慈悲深いので通つておいでなさるくらゐですから、こんな時には、みんなが惡いやうにする筈はありません。伯父とおりゑが毎日探して歩いてゐるうちに、きつと、いい知らせを持つて來るで御座いませう。

瀧子　でも、此處にかうしてゐるうちに、あたしは何だか、このまゝ乞食になつて仕舞ふのぢやないかしらと思ふと、どうしていいか判らないほど悲しくなるわ。

おきち　お孃さんが乞食になる！　そんなことが、どうして想へませう。どうかそんなことは仰しやらないで下さいまし。

瀧子　でもねえ、あたしはあの日に、お琴のお稽古に行つてたばかりに、お父さんやお母さんと、御一緒に逃げられなかつたのだから、今に、道端でお琴でも彈いて暮すやうな女乞食になるのぢやないかしら。

おきち　イヤなことを仰しやいますな。そんなことは萬々なからうと思ひますけど、萬ケ一にも、お宅の方達が見つからないやうなことが御座いましたら、假令他人樣の針仕事をしてでも、お孃さんのお一人くらゐは、あたしがお養ひいたします。――ねえ、お孃さん。もつとお氣を大きく持つて、確かりしてゐて下さいまし。

（この時、一人の警官が下手から登場。）

警官　（おきちの小屋の前に立つて）ここには男はゐないのかね。

おきち　はい、居りますのですが、まだ戻つてまゐりません。

警官　ああ、外出して居るんだね。それならいいが、睡眠をする時には、やはり何かで、外を圍はんといかんよ。中には不心得者が、居らんとも限らんからね。

おきち　はい、有難う御座います。よく氣を付けて休むや

うに致します。
　（警官去る。）
おきち　かうしてゐても、時々お巡査さんが廻つて下さるんで、どんなに氣丈夫だか知れませんねえ。
瀧子　何か惡い人でも來るんぢやないかしら。
おきち　いいえ、大丈夫ですよ。別にどうのつて、いふのぢやないんでせうけど、唯、あたし達が安心するやうに、廻つて下さるんですから。――（おいとの膝枕をそつと外して、おもてへ出る。――空を見上げて）おや、まだお星様が、一つも出てませんよ。今夜また降られたら、この油ッ紙一枚ぢア、保たないかも知れませんね。
瀧子　（同じく外へ出て）ああ、なんだか氣味の惡いほど、空が眞ッ暗ね。早く魚金が歸つて來てくれればいいのに。
おきち　もう何があつても、歸つてまゐりますよ。お孃さんが、どんなに御心配だかといふことも、よく知つてるので御座いますから。
　（この時、かなり遠くから「神田連雀町の平井さん」と連呼しながら、次第にこつちへ近付いて來る聲が聞える。）
おきち　おや、また通りますね。なんですつて。神田連雀町なんかでも、行方の判らない人があるんでせうか。
瀧子　連雀町には、家の親類が一軒あるんだけど……。
おきち　きつと家の伯父なんかも、おりゑと二人で、日比谷や丸ノ内を、あゝやつて呼びながら歩いてるんですよ。――お互に、あゝして歩いてゐて、巡り會つた時は、どんなに嬉しいでせうねえ。
瀧子　（或る希望を感じながら）あたしだつたら、いきなり泣いちまつて、何にも言へなくなるわ、きつと。
おきち　（突然行手に當つて、伯父の金八と、おりゑとが戻つて來るのを發見する）あ、お孃さん、歸つて來ました。
瀧子　まア。――お母さんやなんかどうしたか、あたし早く聞きたいわ。
　（太い竹の杖を衝いた金八と、裾を絡げたおりゑとが、疲れた脚を引摺りながら戻つて來る。金八は、背中に大きな荷物を背負つてゐる）
おきち　まア伯父さん、くたびれたでせう。
金八　なアに、さうでもねえよ。こんな時にや、働ける奴が根限り働くなア、當り前のことだからなア。（兒袋を取つて小屋に這入りながら、瀧子に）お孃さん、御安心下さい。お宅の人達はみんな無事ですぜ。
瀧子　まア、ど、どうしてそれが判つたの。
金八　お宅の燒跡へ行つたら、まだ墨色も乾かねえやうな建札に、一同無事といふ字が書いてあつたんです。
瀧子　（感激に心を顫はせながら）で、みんなは、今どこ

にゐるの。

金八　千葉の別莊ださうです。

瀧子　まア、では千葉へ行つたのね。あたし、速く、お父さんや、お母さんに、お目に掛りたいわ。

金八　そりやア萬事あつしが心得てますから、もう親船へ乘つた氣でおいでなさい。今夜ここへ寢て夜が明けたら、直ぐさま千葉までお送りしますから。

瀧子　（泣く）まア嬉しい。あたし、何と云つてお禮を言つたらいいか。もう胸が一杯になつて……。

おきち　（共に涙ぐんで）でもよう御座いましたね。皆さんが御無事でさへあれば、また後のことは、どうにでもなりますものねえ。――ああ、あたしまでこれで、何だか肩が輕くなつたやうな氣がする。

金八　俺もあの建札を見た時にや、思はず有難涙がこぼれさうになつて、おりゑに、急いで讀ませたんだ。――これで明日、お孃さんを千葉へお連れ申して、大旦那や奧さんが、どんなに歡ぶだらうと思ふと、思つただけでも堪らねえや。

おりゑ　お孃さんのお宅の方が判つたんだから、これで家の兄さん達の事が判つてくれれば嬉しいんですけど……今日も家の燒跡へ行つても、何ひとつ手懸りになるやうなものはないんですもの。――ねえ義姉さん。ほんたうに、どうしたらいいでせうねえ。

おきち　（暗い氣持になつて）さア。兄さんはあの時大さんを助けに這入つてから、どこへ逃げたかと、あたしもそれを案じてゐるんだけどねえ。

金八　（殊更平氣を裝つて）心配することたアねえよ。萬吉にしろ大三にしろ、子供の時分からの職人なんだ。地震や火事で命を落すやうなドヂな事アあるめえ。

おきち　そりやアあたしだつて、大丈夫だとは思つてますけど、唯、だあれも知つてる人がないだけに、どこへ逃げたんだかが判らないもんだから……。

おりゑ　それに大きい兄さんは、ふだんから小さい兄さんの事ばかり思つてゐたんですもの。ひよつとあの時、小さい兄さんが潰されてでもゐたとすれば、きつと火事の事も忘れて、怪我をするまでも夢中になつて、小さい兄さんを助けようとしたに違ひないわ。

金八　そりやアきつと助けたに違えねえ。大三は、カスリ傷ぐらゐ負つたかも知れねえが、今頃は二人とも、ピンピンして、お華客先を見舞に歩いてゐるだらう。

おりゑ　伯父さんは、さういふ風に、いい方にばかり考へるから、安心してゐられるんですけど、これがひよつと、逆になつたとしたらどうして。

金八　鶴龜。そんなことのあらう筈はねえよ。ああして、

八丁堀の家の者も探して歩いてるんだから、おそくも明日一杯にや、居所が知れるだらう。——まアあんまり氣を揉んで、體でも惡くしちやア詰らねえ。待てば海路の日和といふ譬へもあるし、それにお孃さんのお宅のやうな、いい手本もあるんだから、おりゑもおきちも、あんまり心配しねえがいいんだ。

おきち　ほんたうに二人とも、無事でゐてくれればいいけど……。

瀧子　あたしも、よく水天宮様へお願ひして上げますわ。みんなが無事でゐてくれるやうに……。

（突然、おきちの側に眠つてゐたおいとが「怖いよう」と叫びながら、眼を醒して泣き出す。おきちは、驚いて抱き上る。）

おきち　まアお前どうしたの。

おいと　怖いよう。

おきち　何にも怖いことはないぢやないの。——さ、みつともないから、大きななりをして泣くんぢやない。

金八　夢を見たんだな。よしよし。（と、先刻背負つて來た風呂敷包の中から、バナナを一本出して）さ、叔父さんがこれをやるから默んな。——みつともねえ。學校へ行つてる子が、泣いちや可笑しいぢやねえか。

（おいとは泣き止んでバナナを食べる。）

おりゑ　どんな夢を見たんでせう。

おきち　なにね、きつと火事の夢でも見たに違ひないのよ。——ね、さうだろ。

おいと　（首を横に振る）

おりゑ　それぢや、どんな夢？

金八　そんなこたア訊かねえ方がいい。子供に思ひ出させるなア罪だ。——そんな事よりおりゑ、何か腹ツぷさげに、ひとつ食はうぢやねえか。

おりゑ　あたし、なんだかお腹が空かないわ。

おきち　そんな事を言つて、食べずにゐちやア駄目よ。今日は、先刻市役所の人が持つて來てくれた、うどんもあるし、それに、りゑちやんの好きな馬鈴薯も澤山煮といたから、ちつとでもおあがりよ。

おりゑ　義姉さん達は？

おきち　あたしはもう、日の暮れないうちに、お孃さんと二人で濟ませちやつたわ。

おりゑ　さう、ぢやア食べようかしら。

金八　食ひねえ、食ひねえ。こんな時にやア、何でもいいから、腹一杯詰め込んどかなきや駄目だ。

（おきちが立つて、うどんを入れた皿や、玄米の結食や、軍用パンなどを箱の上に出す。二人は直ぐに食べ始める。）

金八　ああ、有難え有難え。こんなうどんでも口へ這入るなア極樂だ。俺がこいつを、（おいとを指して）負つて逃げてた翌日の晩、こいつが背中から、叔父さん何んかおくれよ、お腹が空いたよ、と泣かれた時にや、まつたくどうしていいか、判らなくなつちやつたからなア、食ふ物はおろか、水一杯飲ませてやりたくつても、てんで、雀の涙ほどの水もなかつたんだ。――あのことを思やア、玄米でも何でも、米粒を口に入れられるんだから、勿體ねえくらゐなもんだぜ。

（と、急に上手の方が、がやがやと、騷がしくなる。）

男甲の聲　狂人だ、狂人だ。

男乙の聲　狂人ぢやあるめえ、腹が空いて倒れてるんだらう。

女甲の聲　まア可哀想に、泣いてるぢやないか。

男丙の聲　泣いてるんぢやねえ、怒つてるんだ。うつかり側へ寄ると危ねえぞ。

女乙の聲　大丈夫だよ。あんなに泣いてるんだから、慰めておやりよ。

子供の聲　やア、あんな抽斗なんか背負つてやアがら。

男甲の聲　燒出されて氣が違つたんだらう。よせよせ、棒なんかでぶつちやア可哀想だ。

その男の聲　何をしやがるんだ。俺ア狂人や乞食ぢやねえぞ。

男乙の聲　わア、立ちやアがつた。危ねえから逃げろ。逃げろ。

おきち　まア、何でせう。

瀧子　怖いわねえ。大丈夫かしら。

金八　大丈夫ですよ。こんなところへ、何が來るもんですか。

おりゑ　あれ、なんだかこつちへ來るやうだわ。

おきち　お孃さん內へ這入りませう。もしものことがあるといけませんから。

金八　大丈夫だつて事よ。何か言つて來たら、結貪の一つもやりやアいいんだ。

（その男は、丁度醉拂ひのやうな足どりで、木の間を拔けて、おきち達の小屋の方へ來る。泥だらけになつた單物を端折つて、その上から繩の帶を締め、抽斗を一つ背負つてゐる。頭髮は亂れ、眼は血走つてゐる。隣りの小屋の人達も出て來て、その男を見守つてゐる。）

その男　（步きながら、獨言）俺のことを、狂人だと言つたな。どこが狂人だ。馬鹿にしやがつて。ふざけた事を言やがると、唯では置かねえぞ。（立上つて、背後を振返つて見る）蛆虫ども、もう飽きたとめえて尾いて來ねえな。（再び步き出す）濱町二丁目の、指萬さんを知ら

ねえか。
（この聲を聞くと同時に、おきちはそのまゝ跣足で、飛ぶやうにその男の側に駈け寄る。おりゑも金八もそれに續く。唯、瀧子だけが、小屋の内に殘つて、茫然と佇んでゐる。）

おきち（萬吉の體へ取縋つて）まアあなた。

萬吉（暫くおきちの顏を見詰めてゐたが、氣拔のしたやうな調子で）お前さんは誰だね。

おきち　まア、何を云つてんのよ。あたしぢやないの。

萬吉　あたしぢや判らねえよ。どこの誰だといふんだね。

おきち（泣いて取縋る）まアどうしたといふんだらう。確りして下さいよ。おきちです。おきちですよ。

萬吉（再びおきちの顏を凝視してゐたが、突然叫ぶ）ああ、おきちか。

おりゑ　兄さん、あたしもここにゐるのよ。

萬吉　お前は誰だ。

おりゑ　………。

金八　萬吉。確りしねえか。手前の女房や妹の顏を忘れてどうするんだ。

萬吉　俺や忘れアしねえ。覺えてる。覺えてるけど、俺ア地震なんかが怖えんぢやねえんだぜ。

おきち（金八に取縋つて）伯父さん、どうかして下さいよう。

金八　騷いぢやいけねえ。今俺が靜かに訊いてやるから、待つてるがいい。（萬吉に）萬吉、お前一人か。

萬吉　一人ぢやねえよ。

金八　ぢやア大三も一緒なんだな。大三はどこにゐるんだ。

萬吉　はゝゝ、どこにゐるか見たら判るぢやねえか。（間。自分の背中を指して）ここに寢てるよ。

金八　馬鹿をいふな。そりやアお前、抽斗ぢやねえか。

萬吉　はゝゝ、お前は盲目だね。ここにゐる大三が判らねえとは情けねえ。お前は一體、俺がどんなに苦勞して、大三を助け出したか知りやアしめえ。（抽斗を抱へて金八に見せる）この通り、傷ひとつねえんだ。

おきち　ああ、どうしたらいいだらう。（泣く）ああ、伯父さん、どうしたらいいでせうねえ。

おりゑ　兄さん、確りして頂戴よ。兄さん、お願ひですからよう。

金八（獨言のやうに）大三はやられたんだな。萬吉は、大三の身換りに、この抽斗を持つて來たに違えねえんだ。（萬吉から抽斗を取つて、瀧子に）お孃さん、祭してやつておくんなさい。これの弟は、あなたの洋箪笥を出すために潰されちやつたんです。

瀧子　まア。――あたし、どうしたらいいでせう。

萬吉　（つかつかと、瀧子の傍へ寄つて）おお、お前さんは、和泉屋のお孃さんだね。俺の弟は、お前さんの洋箪笥と一緒に助かつたよ。はゝゝゝ。俺が火の中を潜つて行つて助けたんだ。

おきち　（萬吉に縋つて）あなた！

萬吉　（おきちを抱いて）さ、大三。確り俺につかまつてろ。どんなことがあつても、俺はお前を放しやアしねえぞ。

おりゑ　兄さん！

萬吉　はゝゝゝ。

（萬吉は、眼を据ゑておりゑの顔を見詰めながら、凄い笑ひを續ける。一同は萬吉を中心にして、思ひ思ひの悲しい心持を抱いたまま佇む。）

（遠くで犬の吠える聲が聞える。）

――幕――

（大正十二年九月九日）

盗賊戯談（喜劇）

人物

村井安次郎　唐物屋の番頭（三十歳）
岡部金助　絹商人（四十歳）
他に女中一人

時代

明治初年の晩秋

場所

甲州街道の或る宿場の旅人宿の一室。おもに旅商人を常客としてゐる家だけに、部屋はかなり粗末である。位置は二階で、正面は障子。障子の外は廊下になつてゐる。

左手は、黒光りのした杉戸の押入と壁。

右手は、壁の中程に肘掛窓が切つてある。

その一

幕があくと頭髪をまん中から綺麗に分けた安次郎が、湯上りらしい顔をてかてかさせながら、唯一人火鉢の側に寢そべつて、行燈の下で頻りに手紙を認めてゐる。長い間。――やがて、二十貫もあらうと思はれる程の肥つた女中が、兩手に二つの膳を持つて、急ぎ足に這入つて來る。

女中　お待どうさま。（膳を置きながら）お客さん、まだ手紙書いてんのかね。

安次郎　（その儘）うむ、もういいよ。直ぐにしまふから。

女中　旅へ出ると、そんなにおかみさんが戀しいだんべえか。すかねえのう。

安次郎　はゝゝ、馬鹿を云つちやア困るよ。それどころか、こりやア大切な商用を書いてゐるんだ。

女中　おらが字が讀めねえと思つて、嘘云ふでねえだよ。それ、そこに「片時も忘れかね」つて、書いてあるでねえか。

安次郎　（あわてて手紙を捲く）ちよ、冗談ぢやない。誰がそんなことを書くものか。

女中　はゝゝ、お客さん、隱さねえでもいいだよ。おらアお春さんのやうに、おしやべりでねえだから。

安次郎　うむ、お前さんは愛嬌があつていい。（間）時にどうだね。七番のお客さんは、まだ湯殿に居なすつたかい。

女中　さア、どうかしらのう。

安次郎　御苦勞だが、ちよいと部屋へ行つて、見て來てくれないか。
女中　居たらどういふだね。
安次郎　何も有りませんが、仕度が出來ましたから、直ぐにおいで下さいと云へばわかる。
女中　さう云つたらわかるかね。
安次郎　もう約束がしてあるのだから、さう云へばいいんだ。
女中　そんなら直ぐに招んで來るべい。（燗徳利を鐵瓶の中へ入れて）下が込んでるだから、ここでお燗をするだ。
安次郎　よろしい、お燗は私がここでしてやる。
女中　お客さんを使つちやア濟まねえのう。
安次郎　なアに、そんな斟酌のある方でもあるまい。
（女中急いで正面から去る。）
安次郎　（獨言）あいつ、字が讀めようとは思はなかつた。迂濶千萬、飛んだところを見られてしまつた（再び手紙を展いて、急ぎ二三行書き足して締封をする。——獨言）だが、いくら商賣とは云ひながら、婚禮して、まだ一と月と經たない女房を殘した儘、旅に出るなぞは氣がわるすぎるなア。御時勢代りをしほに、こんな商賣に取つ付いたのが惡かつたのだ。（間。——手紙をふところへ入れる。徳利に手を當てて、燗のつき工合をはかる。やがて猪口へ注いで、味ひながら一口飲む）酒は憂ひのたまははき。地酒でもなんでも、旅の疲れはこれに限る。
（間。）
（女中について、岡部金助が這入つて來る。丁髷を結つてゐる。肥つてはゐるが柔和な男前。）
女中　七番のお客さんを、連れて來ただよ。
安次郎　これはようこそ。さ、どうぞずッとお通り下さい。
金助　御免なさい。（座に着く）
女中　（座布團を出して）お客さん、布團を引きなせえよ。
金助　いや、これは有難う。
女中　では、わしは下へ行つてるだから、何か用があつたら、手を叩いて呼んでくんなせえよ。
安次郎　よしよし。酒が切れたら呼ぶから、心配はいらない。
（女中去る。）
安次郎　御覽の通りで、お招び立てした程の、おかまひも出來ませんが、お近づきのしるしにと思ひまして、おいでを願ひました。さぞ御迷惑でしたらう。
金助　迷惑どころぢやありません。飛んだ御心配をかけまして。……私の方からお招びしなけりやならないのを、先手を打たれたやうな形（すがた）で、恐縮してゐます。
安次郎　いやもうどう致しまして。——さ、けちな田舍料

理ですが、どうかこちらへおいでなすつて……
金助　（膳の前へ進む）
安次郎　構はずお樂に。
金助　いえ、却つてこの方が勝手です。
安次郎　（猪口を出す）　早速ですが丁度つき頃です。ひとつどうぞ。
金助　いや、これはどうも。（受ける）
安次郎　（酌をしながら）　あなたは、大分お强さうですね。
金助　ところが一向見掛倒しです。おつきあひで、五六杯そこそこといふところなんで……
安次郎　どうですか。その格幅で、そんなわけはありますまい。
金助　いや、まつたくです。こんな格幅はしてゐますが、云はば近頃流行の油繪と同じで、遠見だけの代物なんですよ。——あなたこそ、大分おやんなさるでせう。
（以後適當に猪口のやり取りが續く。）
安次郎　さあ、せいぜい二本といふところでせうかな。
金助　二本なら私よりよつぽど兄貴だ。そりアなかなか豪勢ですね。
安次郎　なアに、豪勢といふ程でもありません。唯商賣柄、毛唐人との交際があるものですから、時々あッちの酒をやりますんでね。それでちつとは行けるやうになつたんです。
金助　ははア、あちらのお酒を？　あちらのは、馬鹿に强いさうぢやありませんか。
安次郎　それやもう、强い段は、較べ物になりません。何しろ、火をつけると、燃えるやうなやつがありますからね。
金助　へえ、驚きましたな。するとこつちで云ふ、泡盛のやうなものでせうか。
安次郎　まア大ざッぱに云へばあんな物ですが、味といふ事になると、とても足もとへもおつつきませんね。
金助　そんなにうまい味を持つてゐますか。
安次郎　ほんとうの酒好きだつたら、たまりますまい。第一、少しでいい心持に醉ひますからね。
金助　そいつは豪氣だ。酒はかりでなく、ひとつ米なんかでも、そんな風な物はありますまいか。
安次郎　さア、それまではどうですか。大體異人は米を食ひませんからな。
金助　成る程、これは御最もで……
安次郎　（間。換りの燗徳利を鐵瓶の中へ入れる）　あなたは横濱の方へは、あまりお出かけになりませんか。
金助　左様、まづ三月に一度くらゐは出かけます。
安次郎　矢張御商用で？

金助　左様です。ごく小さな取引ですが、馬車道に、荷を入れてる店があるものですから。
安次郎　あ、さうですか。――しかし甲府からですと、なかなか骨が折れますな。
金助　出るまでが億劫でしてね。八王子から、鎌倉街道を程ケ谷へ出てゆきますが、暑い時分はたまりません。
安次郎　さうでせうとも。不躾ですが、御商賣は、何の方をおやりです。
金助　絹絲を少しばかり取扱つてゐますので……
安次郎　そりやア結構な御商賣ですね。この家では度々お目に掛りながら、ついお訊ねするのもをかしい譯だつたものですから……（鐵瓶から燗徳利を出して）さ、熱いのが付きました。どうぞお干しなすつて。
金助　いや、私からお酌しませう。
安次郎　さかさ事はいけません。そちらからどうぞ。（酌なする）
金助　（干して返す）あなたとは、もうこれで幾度お目に掛りましたらうな。
安次郎　去年の今頃と、今年の六月と、今度とですから、丁度三度目です。
金助　三度目。だが三度が三度とも、同じ時刻にこの宿へ着くといふのも、不思議な御緣ですね。

安次郎　何か前生には、兄弟でもあつたのか知れません。まアそのつもりで、も一つ酌をさせて下さい。
金助　いえ、もう私は。この上はいけません。
安次郎　御冗談ばかり。まだほんの五六杯ぢやありませんか。
金助　この上飲むと、虎になつてしまひます。
安次郎　虎は結構。あなたが虎になれば、私が和唐内になるから大丈夫です。――さ、ひとつ注がせて下さい。
金助　（迷惑さうに受ける）では、この一杯でおつもりにしませう。
安次郎　大丈夫ですよ。及ばずながら、酒の上の介抱なら、どんなにでもしますから。あなたも甲府で、何の某と云はれる絹商人なら、私も日本橋兩替町の唐物屋、富國屋吉右衛門の番頭村井安次郎です。酒は飲んでも、酒に飲まれるやうなことはありませんよ。
金助　それはもう、あなたが酒に飲まれやうとは、決して思ひませんが、私の方は、さつきもお話したやうに、五六杯が精一杯なのですから、ここらでひとつ、御勘辨下さい。
安次郎　はゝゝゝ、お弱い、お弱い。敵ならまだしも、味方にうしろを見せるとは、弱いぢやありませんか。不躾ながら、いくらお飲みなすつても、百圓までの用意はし

てありますよ。
金助　飛んでもない。百圓などと聞くと、私のやうな氣の小さい者はおびえますよ。――しかしもう、何んと云はれても叶ひません。
安次郎　驚きましたね。かうなると、お招びしたお客をさしおいて、自分一人がやるわけにもゆかず、おあづけの恰好は罪ぢやありませんか。
金助　そんなことはありません。戴かないのは、私の手前勝手。どうぞ御遠慮なくおやり下さい。
安次郎　でも、義理がわるすぎますからね。
金助　いえもう。却つてその方が勝手ですから。……
安次郎　（間。――思ひ切つて）ではひとつ、もう一本だけ、飲ませて戴きませうか。
金助　さアどうぞ、お構ひなく。
（安次郎は手を叩く。すぐ先刻の肥つた女中が這入つて來る。）
女中　なんだね、お客さん。
安次郎　（空いた德利を出して）さ、もう一本附けて來てくれ。なるたけ贔屓目に注ぎ込んでな。
女中　旦那が注ぐだから、おらの手心にはいかねえだよ。
安次郎　あの禿頭が注ぐのかい。そいつは往生だ。
女中　でも、このお酒はいいだらう。
安次郎　よくもないが、まア地酒としては出來すぎてるな。
女中　水が割つて無えだからよ。
安次郎　地酒に水を割られてたまるものか。
女中　でも、昔のでいいと云へば、みんな水を割るだ。
安次郎　あきれた家があるものだな。
（女中去る。）
安次郎　いくらご時勢が變つたと云つても、金を出して、水を飲まされちやア、江戸つ子もおしまひですね。
金助　いや、そんな事はざらにありますよ。黄金作りの大小が、一兩出せば買へる世の中ぢやアありませんか。
安次郎　まつたく、何から何まで、ガラリ變つて仕舞つたのだからひどいや。
（女中が德利を持つて來る。）
女中　さあお客さん、持つて來ただよ。
安次郎　これは有難い。（德利を受取る）だいぶ贔屓目に注いでくれたね。
女中　おなじみさんだから、旦那が加減しただ。
安次郎　さうか。（德利を鐵瓶へ入れる）いい事をして置けば、いい報いがあるからなア。
（女中去る。）
金助　しかし、これで色々でせうなア。世の中が變つたために、いい思ひをしてゐる人もありませうし、みじめな

事になつた人もありませうし……

安次郎　それはもう有る無しの段ぢやありません。現に私のやうな者でも、世が世なら、大小を差して歩ける身分ですからね。

金助　へえ　するとお武家で……

安次郎　父は一つ橋様の、お馬役を勤めてゐましたよ。

金助　ほう、すると立派な御直參で。――私などがかうして、御酒のお相手など、出來るわけのものぢやありませんな。

安次郎　なアに、それでも私は次男坊だから、どの道下積の方です。（新らしい德利から獨酌で飮む）

金助　ですがまた、よく速くおあきらめなすつて、髷をお切りなさいましたな。

安次郎　これは一年ばかり、橫濱の佛蘭西五十三番へ住込むために、仕方なしに切つたのですよ。何しろかうなつたら、いくら腕に覺えがあつても、劍道の方は役に立ちませんからね。

金助　御最もで……しかし、橫濱で御修業なすつたのなら、唐物屋さんとしては、この上なしでせう。

安次郎　ところが、その割に眼は利きません。これが劍道の試合といふなら、まづ十人のうち、八人までは打据ゑる自信を持つてゐるのだが。

金助　ははア、するとそちらの方は餘程、御修業をなすつたと見えますな。

安次郎　八歲の時から、家が潰れるまで、如何なる日でも、竹刀を放したことはなかつたくらゐです。それがために、かうして一人旅をしてゐても、恐しいものはありません。

金助　まつたく腕に覺えがお有りなされば何が出て來ても度胸が違ひませう。それに御修業振りも、流石にお武家は違つたものですな。私なども、好きで刀を持つたこともありますが、町人の悲しさに、なかなか思ふやうには使へませんので……

安次郎　好きで刀をお持ちなすつた？　それも賴もしい。するとあなたは、初めから今の御商賣ではなかつたのですね。

金助　五六年前までは、他に商賣を持つてゐました。

安次郎　どういふやうな御商賣を？

金助　お耻かしい事ですから、あからさまには申上げられないので……

安次郎　何で耻かしいことがあるものですか。士農工商、商賣に、一つとして耻しいなどといふものはない筈です。

金助　ところが、その商賣往來にない商賣でして……

安次郎　なに、商賣往來にない商賣？　（考へる）刀を持

つ商賣で、商賣往來にないとは？（間）うむ解つた。失禮ながら長脇差、俠客が稼業ではなかつたのですか。

金助　それなら平氣で申上げられますが、高い聲では云へませんので……

安次郎　はアて。（間）まさかあなたが……

金助　なんだと思ひなさいます。

安次郎　一向に見當が付きません。

金助　實は（聲をひそめて）私は泥棒をしてゐたのです。

安次郎　泥棒？

金助　その通りで。——泥棒も泥棒、私のは人の透を窺つて物を取るやうな、そんなのぢやありません。押込み、强盜、やじり切りを稼いでゐたんです。

安次郎　ぢよ、冗談でせう。あなたのやうな柔和な方に、そんなことが出來るものですか。冗談も、程にして下さい。

金助　いえ、決して冗談ぢやありません。ですが御安心下さい。五年前からすつかり心を入れ換へて、今はもう、御覽の通りの堅氣です。人樣の物は、塵ツ葉一つでも、取るやうなことはしませんから。

安次郎　（金助の顏を凝視して）ほんたうに、そんなひどいことをしてゐたんですか。

金助　念を押されると困りますが、その方では、江戸中に名が通つてゐたものです。——金時强盜と云つたら定めしあなたも御存じでせう。

安次郎　金時强盜？　あの麴町の岩木枡屋へ這入つて、千兩箱を擔ぎ出した？

金助　さうです。あれが私です。

安次郎　（突然笑ふ）それだから冗談だと云つたんですよ。大體あの金時强盜といふのは、もつと色の黑い、瘦形の男だといふぢやありませんか。いくら一人で飲んでゐるからつて、そんなことぢや擔がれませんよ。

金助　はゝゝ、あなたは劍術がお出來なさるから、さう度胸がいいんです。大抵の者なら、名前を聞いただけでも、腰を拔かしてしまひますよ。

安次郎　しかし何う考へたつて、本當には出來ませんね。そのあなたが、押込强盜だなんて。

金助　ではもしか、これが本當だつたらどうします。

安次郎　どうするつて、ない首を二つ上げますよ。

金助　これは驚いた。あなたはよつぽど命を粗末にしますね。先の見えない事に、首を賭けるなんて。

安次郎　ふざけちやいけません。さきが見えすいてゐるから、首を上げると云ふんです。

金助　はゝゝ。やつぱりお武家出は、お武家出だけのことを仰しやる。しかし、首を賭けるなんてことになる

と、おだやかでなさすぎます。が、あなたがそれ程までにお疑ひなら、ひとつ、何かほかの物を賭けて見ようぢやありませんか。
安次郎　面白い。どうせこつちの勝いくさですから、何んでも賭けます。で、どういふ風にして勝負を付けますね。
金助　まづ今晩夜中に、私がこの部屋へ押込みに來るとしませう。
安次郎　押込みに？　これはいい。
金助　で、その時あなたが、私の威勢に恐れたら、何か私に奢つて下さい。あべこべに、打負かされたら、明晩でも、八王子の藝妓を奢りませう。
安次郎　これは益々面白い。私の方は、何か奢るなどといふよりも、あなたが押込みに來て取れる物があつたら、みんな取られようぢやありませんか。その方が事が眞劍になるから。
金助　いや、そりやアいけません。これはあくまでも、冗談にやる事ですから、やはり何か奢りッこぐらゐがいいでせう。
安次郎　よろしい。ではさういふ事にして、今夜是非來て下さい。……しかし、あなたに藝妓を奢らせるのは濟みませんね。
金助　どう致しまして。その御遠慮には及びません。

安次郎　私は前祝ひに、もう一本失禮しませう。
金助　まアせいぜい勇氣を付けといて下さい。
（安次郎は手を叩く。）
金助　では、私はこれで御免蒙ります。色々御馳走になりました。
安次郎　まアいいぢやありませんか。夜中までには、まだ間もありますし……
金助　その前に、一寢入りして置かうと思ひますから。
安次郎　それはどうも。一人で勝手な眞似をしてゐて、申譯がありません。では、後程お待ちしてゐます。
金助　どうぞさう願ひます。
（金助去る。）
（間。）
安次郎　（獨言）　犬も歩けば棒に當るといふ譬へがあるが、居ながらにして奢らせようと云ふんだから、大したものだ。あいつ、俺が口から出まかせに、侍の子だと云つたら、すつかり本氣にしてゐたやうだが、劍術などは、藥にしたくも知らないのだからすさまじい。だが、あいつもよくのめのめと、金時强盜だなんて、あんな嘘がつけたものだな。「退れッ」とかなんとか、俺が怒鳴つて一睨みにしたら、あいつは縮み上つて逃げ出すだらう。おかげであしたの晩は、どんちやん騷ぎが出來るといふ譯

か。はッはッは。まづ前祝ひに、もう一本やるとするかな。

（續けて手を叩く。階下で女中の返事が聞える。）

（徳利を取上げて、殘りの酒を猪口へしたむ。）

そ の 二

同じく安次郎の居間。

午前四時頃。

氣の拔けたやうになつた安次郎が、布團の上に起き上つて、煙草をふかしてゐる。

安次郎　（獨言）驚いたなどうも。寢る目も寢ずに、煙草を喫ひながら、泥棒を待つなんて、こんな馬鹿氣た話があらうか。（間。枕もとの懷中時計を、行燈ですかして見る）もう四時だ。愚圖々々してゐると、夜が明けてしまふぞ。――だがあいつ、口ではあんな大きな事を云つたやうなものの、いざその眞似をするとなつたら、急におぢけ付いたのかも知れない。何しろ、泥棒も泥棒、岩木桝屋へ這入つた金時強盜だとぬかしたのだから、唯のこそ泥の眞似をするのとは、譯が違ふからな。（間）本物でなかつたら、八王子の藝妓を奢るも空々しいや。藝妓が聞いたら、鼻の先で笑ふだらう。（間）おお寒い。火がないせゐか、いやに寒氣がする。來もしない泥棒を待つて、風邪でも引いちやア間尺に合はない。あしたの旅もあることだ。一二時間寢るとするかな。

（安次郎は眠さうに横になると、頭から夜着を被る。）

（長い間。――遠くに鐘の音が聞える。）

（やがて黑裝束に黑の山岡頭巾を被つた強盜が、拔身を提げた儘、正面の障子を開けて這入つて來る。白刃が行燈の光を受けて、見るからに物凄い。）

（強盜は、徐ろに安次郎の枕元へ歩み寄ると、いきなり足を上げて枕を蹴る。）

（びつくりして、安次郎がはねおきる。）

安次郎　（暫し強盜を見詰めてゐたが、急に笑ひ出す）ははゝゝ、どうも巧くお化けなさいましたね。夜中においでなさる約束でしたので、今まで床の上に起きて、お待ちしてゐたんですが、もう程なく夜も明けさうになりますし、それに眠くもなりましたので、今し方横になつたところです。（再び凝視する）なる程、これでは知らない人は、屹度驚くに違ひありません。や、しかし、お上手なものですなア。

強盜　何をつべこべ云やアがるんだ。

安次郎　え？

強盜　え？　ちやアねえ、何をつべこべ云やアがると云ふんだ。

安次郎　冗談いつちやいけません。つべこべつて、あなたを賞めてるのぢやありませんか。
強盗　誰が賞めてくれと頼んだ。俺ア手前に賞めて貰ひに來たんぢやねえ。前の宿場を遊つ時から手前のわらじの切れ具合で、こいつアてつきり百兩上の大鴨と、見込を當てて付けて來たんだ。四の五の云はずに、胴卷ぐるみ、有金そつくり出しちまへ。
安次郎　（少し呆れる）ほほう、こりヤアどうも、セリフまですつかり本物ですね。いや、かうまでとぎがかかつてゐようとは知らなかつた。これならもう金時強盗だと云つても、決して嘘とは云へません。お約束通り、私の方で何か奢りませう。
強盗　（刀を突付ける）やい唐變木、手前にやこの刄物が見えねえのか。さんまや竹光ぢやアねえんだぜ。さつきから聞いてりや、すつかり本物だの、お約束通りだのつて、得體の知れねえ事ばかり云やアがつて、俺アそんなことを聞きに來たんぢやねえんだ。さつさと吐き出しやアがらねえと、刄渡三尺、首と胴とが居所換えだぞ。
安次郎　（手で制しながら）ば、馬鹿おどかしは止しにしませう。もういいぢやありませんか。あなたの御意見が通つて、私が奢るといふことにさへなれば……
強盗　ならねえ。奢るなぞと、そんな子供だましみたいなことで、抜いた白刄がをさまると思ふか。手前の財布から錢を出して奢られるまでもなく、胴卷ぐるみ貰つて行きやア、どう遣はうと、俺の勝手になるんだ。――さ、俺ア遊びや道樂で押込んで來たんぢやねえ。當時忙しい體なんだ。胡魔化しは止して、さつさと出してくんねえ。それとも、いやと云ふなら、腕で取らうか。
安次郎　（怯えて來る）ど、どうもこれは、すつかり話が、違ひますね。あなたが負けたら八王子の藝妓を奢り、私が負けたら、何か奢るといふ、さつきの話とは……
強盗　（刀の平で行燈を叩く）ま、まだそんな下らねえことを、云つてやがるか。俺ア商賣なんだぜ。茶番や二輪加をしてるんぢやねえんだ。
安次郎　（聲が顫へる）そ、それぢやお前さんは、絹絲屋さんぢやなかつたのですか。
強盗　馬鹿め。積つても見ろ。絹絲屋が夜々中、抜身で人の家へ押込みが出來るか。
安次郎　飛んだことになつて仕舞つた。さうとも知らず、冗談ごとだと思ふから、私はお前さんと、あんな約束をしたんです。
強盗　下らねえ愚痴は云はねえもんだ。約束をしたの何のと、手前は大方そんな夢でも見てゐたのだらう。約束どころか、俺ア手前と口をきくのは、今が初めてなんだ。

安次郎　今が初めて？　そ、そんな嘘は云はないで下さい。宵のうちに、約束したればこそ、斯うしておいでなすつたのぢやありませんか。

强盗　馬鹿を言へ。手前は大方、ここの飯盛か何かと、つまらねえ約束でもしやがつたんだらう。人の物を物さうと云ふのに、前以て約束をして來るなんざア、五右衛門様以來、盗人仲間ぢや聞いたことのねえ話だ。そろそろ夜が明けやうと云ふのに、寢ぼけちやいけねえぜ。

安次郎　（益々驚く）ではお前さんは、あの七番に泊んなすつた、私の道連れぢやないのですか。

强盗　七番か八番か知らねえが、こんな泥臭え旅宿へ泊るやうな、そんなんぢやアねえんだ。今が今、裏の雨戸をこぢ開けて這入つて來たばかりの、天下御免のお泥棒様だ。

安次郎　（腰が抜けたやうになる）ああ、もういけない。

（恐ろ恐ろ顔を窺く）なる程、あの絹絲屋さんとは、まるきり顔が違ひます。かうなつたら、何事も運とあきらめませう。

强盗　うむ、あきらめるとは見上げた奴だ。あきらめたら、氣の變らねえうちに、有金一切出しちまへ。

安次郎　有金と申しましても、ほんの五兩足らずしかありません。

强盗　（苦笑する）たつた今。あきらめたと云ひながら、その舌の根も乾かねえうちに、もうのめのめと嘘をつきやアがるか。手前の胴巻にや、少なく踏んでも百兩の金は有ると睨んだんだ。

安次郎　え、百兩？

强盗　さうよ。手前は毛唐人に頼まれて、甲州へ水晶の買出しに行く途中だらう。俺アそこまで突き留めてるんだぜ。——五兩ばかりのはした金なら、いつでもこつちからくれてやらア。

安次郎　と、とんでもないこと。そりやアあなたの人違ひです。百兩なんて滅相な、私共が持てる筈はありません。

强盗　持てる筈は無え？　さうよ。持てる筈の無え物を持ちやアがるから、こんなことになるんだ。他の者ならいざ知らず、金時强盗が斯うと睨んだ目に、寸分の間違えもある譯はねえんだ。どうせ出さずにや置けねえ物なら、痛え思ひをしねえうちに出しちまひねえ。（刀を目の前に突付ける）

安次郎　これは不思議なことを仰しやる。私が先刻約束した人も、金時强盗だと云つてましたが……

强盗　馬鹿を云ふな。金時强盗は天下に一人しきやねえんだ。（いきなり兩肌を脱ぐ。背中一面に金時の文身がある）寢ぼけ眼をよくあいて拜みねえ。自慢ぢや無えが、

この文身は、日本國中にたつた一人なんだぜ。（安次郎の襟首を掴む）やい、蜻蛉のやうに、頭ばかり光らせるのが能ぢやあるめえ。なんとか云へ。それともあくまで命に未練があるなら、仕度をするまで待つてやるから、尋常に立合つて見ろ。

安次郎　ど、どう致しまして。立合ふどころではありません。あなたが正銘の金時様と判つて見れば、もう生命を助けて戴くだけが望みです。

强盗　そんなら有金は隱さず出して仕舞ふんだな。

安次郎　ほんたうなら、差上げられる金ではないのですが、生命には換へられません。お見込み通り、主人の金が手付かずに百圓。そのほか私の金が、合せて六七兩御座います。ですがどうぞ、まだ歸りの旅費も掛りますので、半端だけは、お目こぼしを願ひます。

强盗　うむよし。そつちがさう素直に出るんなら、何も身ぐるみ取らうたア云はねえんだ。――その百兩だけでいいから、速くこれへ出しねえ。

安次郎　（澁々紙へ包んだ紙幣包を、胴卷から取出す）

强盗　（引たくる）ええ未練がましい。さつさと渡さねえか。（枕もとの懷中時計に氣付く）おゝ、手前は珍らしい、懷中時計を持つてるな。

安次郎　（あわてて隱す）いえ、これはほんの安物です。

强盗　はゝゝ、あわてるない。そんな物ア、手前がくれると云つても、持つて行きやアしねえんだ。だがな、もしか俺が立去つから、その時計で五分經たねえうちに、騒ぎ出すやうなことがあつたら、それこそ生命が無えぞ。いいか、そのつもりでゐねえよ。

安次郎　へえ。

强盗　（刀を鞘にをさめる）ぢやア引上げるぜ。眠いところを起こして、濟まなかつたな。

安次郎　へえ、――いえもう。

强盗　はゝゝ、さうでもあるめえ。まアあとを氣を付けねえ。

（强盗は正面から去る）

（安次郎は狐につままれたやうに、ぼんやりしてその後を見送つてゐる。）

（長い間。）

安次郎　（急にわれに還つて、身顫ひをする）あゝ驚いた。あんな凄いのが來ようとは思はなかつた。（間）　だが、あの絹絲屋のやつは、どうしただらう。あいつが早く來てくれなかつたばかりに、思ひも掛けない災難に遭つて仕舞つたんだ。――（泣聲になる）ああ、あの百圓。これから歸つて御主人には何んと云つたらいいだらう。强盗に取られたと云つたのでは濟むまい。（頭を抱へる）

とんだ事になつてしまつたなア。

（間。）

（金助が、先刻の通りの服裝で這入つて來る。）

安次郎　（おそるおそる面をあげる）

金助　（ニコニコ笑ひながら）　唯今はどうもお邪魔さまで……

安次郎　（怨めしさうに）　岡部さん。あなたはなぜ、約束の通り來てくれなかつたんです。

金助　（猶も笑つてゐる）

安次郎　笑ひ事ぢやアありませんぜ。あなたが來てくれないために、私は本物に、百圓といふ大金を、すつかり持つて行かれたぢやありませんか。

金助　あなたが、百圓？　泥棒に？

安次郎　（捨てるやうに）　さうですよ。

金助　それはどうも、飛んだ事になりましたね。だが、なぜ劍術の腕前を出して、叩きのめしてやらなかつたのです。

安次郎　それどころぢやありません。あたしもこれまでに、武者修行をしたりして、隨分凄い奴にも會ひましたが、今のやうな凄い奴は初めてです。ああなると、とても打込む隙などは、あるものぢやありません。

金助　さうですか。ではあなたが、すつかり負かされた譯ですな。

安次郎　負けたの勝つたのつて、そんは冗談事ぢやありませんよ。生命から二番目の百圓さへ……

金助　はゝゝゝ。（懷中から先刻の紙包を取出す）　これですね。

安次郎　（愕然とする）　あ、こ、これをあなたは、ど、どうしたんです。

金助　あなたにお返しするのです。――どうです村井さん。あたしの腕は、大したものでせう。

安次郎　（呆然として）　では、今のはやつぱりあなたですか。

金助　（肌を脱いで背中を見せる）　この文身に覺えがあるでせう。

安次郎　（物も云はずに顫へてゐる）

金助　はゝゝゝ、さア、これであしたの晩は、何を奢つて下さいますね。はゝゝゝ。

安次郎　（半ば安心したやうに、句切、句切に）　では、やつぱり、あなた、でしたか。

――金助の笑聲のうちに靜かに幕――

（大正十四年七月作）

北尾龜男篇

碁どろ（一幕）

主人
妻
娘
客
泥棒

東京山の手。晩春の夜

庭に面した廻り縁付の三間續きの部室。（茶の間、中の間、客座敷）茶の間の緣側の戸袋に眞赤な烏瓜の實が三つ四つ束ねて吊るしてある。茶の間には簞笥、茶棚、火鉢など。中の間には机、書架、鏡臺など。座敷の床の間には掛軸、花瓶、碁盤など。

茶の間に長火鉢を挾んで、主人と妻と娘が、食後の心で坐つてゐる。中の間も座敷も無燈だが、中仕切の襖が見通しにあいてゐるので、薄ら明るい。

しばらくみな無言。

主人　實に馬鹿なやつだ。一體いくら入つてゐたんだ？

妻　たんともなかつたんです。五六圓位でしたらう。

主人　でしたらうつて、自分の財布にいくら入つてゐたか、知らないのか。

妻　知つてゐますよ。五六圓ですよ。（食卓の茶碗を集めなどする）

主人　馬鹿々々しい。たしかに掏られたんだ。

娘　嘘よ、落としたのよ。

主人　落としたことが、どうして分る？

娘　どうしてつたつて……。

主人　落としたことが分つてゐながら、落として來るやつがあるか。

娘　それや無理よ。そんなこと云つたつて……。

妻　婦人席で見てゐたんだから、掏られるやうなことはないんだけれど。

主人　何處で掏られたか分るものか。馬鹿！

娘　落としたのよ、たしかに……だつてあんなに急いんだんですもの、歸りに。ねえ母さん。

妻　うむ。……はるさん、お勝手へ出してくれないか。（茶碗などをのせた盆を卓に置く）

娘　えゝ。

主人　子供見たいなやつだ。活動を見に行つて、蟇口を失くして來るなんてやつがあるものか。いゝ年をして。

娘　ふゝゝゝゝ。まだ云つてゐるわ。（茶碗の盆をもつて立つ）
妻　歸りにお膳布巾をね。
娘　えゝ。（臺所へ去る）
（やゝ間。）
主人　もう行くな、活動なんか……くだらない。
（娘が臺所から出て來て、食卓の上を拭く。）
娘　行くわ。私。
主人　碌なことは見て來やしない。
妻　フゝム！
娘　人のことを云つたつて、父さんだつて隨分……あれぢやないの。ねえ母さん。
妻　いゝから放つておゝきよ。
主人　おれは活動なんかへ行つたことは、一度もないぞ。
娘　それや行くひまがないからだわ、碁をうつたり、活動へ行つたり、一つの體でさう兩天秤は駄目よ。
主人　馬鹿！　おれは活動なんかへ行かんから碁をうつのだ。碁位が何だ。
娘　ぢや私達は碁なんかうてないから、活動へ行くんだわ。
主人　馬鹿なことを云へ。毎日遊んでばかりゐるくせに。
娘　遊んでゐたつて、退屈するときもあるわよ。
主人　遊んでゐるから退屈するのだ。働け。
娘　何を働くの？
主人　……おれは碁をうつけれども、碁で金なんか失くしはしないぞ。
妻　當り前ですさ。
主人　何處でうつたつて、往來や人ごみでうちはしまいし。ゐる程、夢中になりはせん。
妻　まだそんなことを……。盜られたんぢやないつて云ふのに、分らない！
主人　では何うしたんだ？
娘　どうしたか分つてゐる位なら、なくしやしないわ。
主人　だから馬鹿だと云ふのだ！
娘　……母さん、又、あれを見せて上げるといゝわ。父さんに。
妻　駄目だよ、いくら見せたつて。
娘　この間見たいにあやまらしてやるといゝのよ。
妻　あやまつたつて駄目さ、始めれば直ぐ忘れて了ふのだから。
主人　又云つてやがる。馬鹿！
娘　又云つてやがるぢやないことよ。一體何うするの、あの燒け焦がしを？
主人　疊替へすればいゝんだ。
妻　たゞは出來ませんよ。大家さんではしてくれませんよ。

主人　それがどうしたんだ。
妻　だからお金が入るんですよ。
主人　お前に出してくれと云つたか。
娘　疊や蒲團の焼けこがし位ならいゝけれど、もし火事にでもなつたら何うして？
主人　生意氣いふな。馬鹿！
娘　あれ又馬鹿だつて、いやだわ、のべつに馬鹿々々つて……。
（この時、玄關の障子をあけたてする音が聞えるが、三人は氣が付かない。）
妻　はるさん、もうおよしよ、私達が氣を付けてゐるよりほかに仕様がないのさ。
娘　ぢやまるでお守ね、父さんの。
主人　馬鹿を云へ！
娘　あら本當よ。父さん。
主人　うるさい、默れ！
娘　（やゝおどけて）はい。
（茶の間の正面の障子から、客の老人が出て來る。）
客　どうしたんです。ひどく激昂して。
主人　えゝ、どうも馬鹿なやつらで……。
客　おはるさん、何かしくじりなすつたね？
娘　いゝえ、私ぢやないの。父さん、ひとりでおこつてゐるのよ。
客　ひとりで……。ふうん、それぢや氣狂ひだ。
主人　（立つて、客に）まあいらつしやい。（座敷の方に行く）
妻　ねえ太田さん。
客　え？（行きかけて振向く）
妻　お願ひがあるんですがね。一つ。
客　はア。……どう云ふ……？
妻　今日は打つてゐる時は、煙草を我慢してゐてお貰ひしたいんですがね。
娘　ふゝゝ。駄目よ、母さん、そんなこと云つたつて。
主人　（この間に座敷に入つて、床の間から碁盤を出したり蒲團を置いたりなどしてゐる）
客　うむ、それやおはるさんの云ふ通りだ。煙草をとめられちや片なしだ。
妻　打ちながら喫はれちやアこつちが片なしです。あの焼け焦がしを見て下さい。
客　それや知つてゐますよ。
妻　知つてゐるならやめて下さい。たまりませんから。
客　困つたなア！
娘　ふゝゝ。
主人　（座敷から）支出が來ましたぜ。

客　あゝ今直ぐ……。どうも困つたな。
妻　かうして下さい、（頤で中の間を指しながら）そこへ
　煙草盆を置くから、喫ふなら一々そこまで來て。
客　いや、それや大變だ。
妻　大變でもさうして下さい。是非。
娘　つまり喫煙室ね。
客　さうだ。喫煙室だ。
娘　近頃何處でもさうよ。活動だつて、芝居だつて。
客　だけど碁に喫煙室は始めてだ。
妻　新工夫ですよ。さう願ひますよ。
客　まあ御主人ともよく相談して……。
主人　（碁石を弄びながら）何してゐるんです。早く來ま
　せんか。
客　いや、それどころぢやないんだ。
主人　何が？
客　煙草をとめられちまつたんで。
主人　煙草を？
客　うむ、それで喫煙室をこしらへるから、一々そこまで
　出張しろと云ふお達しなんだ。
主人　ぢやまあ出張するとして、早くおいでなさい。
客　出張する？
妻　それ御覧なさい、主人もあゝ云つて……。

主人　そんなやつ等にかまはないで、早く來なさいよ。
客　しかし煙草の方はどうするんです？
主人　いゝから勝手にさしておきなさい。
客　かまひませんか。
主人　かまひません。
客　さうか。ぢやあ……（座敷へ行つて、主人と向ひ合つ
　て坐る）お待ち遠うさま。
　（主人と客、石を置き始める。）
娘　どうするでせう。一々のみに來るか知ら。
妻　……（茶の支度をする）
娘　（茶盆を持つて、座敷に行く）
主人　そこを閉めて行けよ。
娘　（襖をしめて、茶の間に戻る）
客　（石を置きながら）しめた、と。
主人　しめられたか、と。（石を置く）
客　しめました、と。（石を置く）、
主人　（考へながら）はゝア。矢張りしめられたな。では
　こつちもしめろ、と。（石を置く。以下略す）
客　成程。うゝん……今夜は中々むづかしいね。煙草は煙
　草と。
主人　碁は碁と。
客　これは前代未聞だ。煙草は煙草、碁は碁と。

主人　來たな、ではかう、と。
客　やあ、おいでなすつたね。それではこつちもかう、と。
主人　あゝ惡いなあ！　……面倒だ。かう、と行け。
客　煙草は煙草、と。
主人　煙草は煙草、と。
客　喫煙室で、と。
主人　喫煙室で、か。
客　面倒くさい、と。
主人　面倒くさい、か。
客　どうしたものか、と。
主人　どうしたものか、だ。
客　思案がつきた、と。
主人　思案がつきた、か。
客　困つたことだ、と、
主人　困つたことだ、と。
客　けれども、のみたい、と。
主人　私ものみたい、と。
娘　のみたいつて云つてゐるわ。煙草を。
妻　默つておいでよ。
客　はゝア、やりそこなつたな　こいつは。……待つて下さいよ。（腰から煙草入をぬく）
主人　ごゆつくりお考へなさいまし。（盤面を見つめながら、盤の周圍を手探りする）
客　（煙管をぬいて、煙草をつめる）　仕方がない。かう出よう。（煙管をくはへる）
主人　成程。さう覗いて來るか。……おい、おい。
娘　あら呼んでゐるわ。
妻　放つておゝきよ。
主人　かう斬つてやれ。
客　斬られたね。ではかう繼げ、と。
主人　ではかう、と。……おい、おはる。おはる。
娘　はアい。
主人　そこからおれの煙管をもつて來い。
娘　ほら矢張り駄目よ。母さん、あの調子ですもの。
客　煙管を持つて來い、と。
主人　早く持つて來い、と。
客　ついでに煙草盆も、と。
主人　火を入れて、だ。
娘　火を入れて來いだつて、よく氣が付くのねえ。
妻　（默つて四邊を見廻してゐる）
娘　どうするの、母さん。
妻　まあお待ちよ。うるさいねえ、お前も。
娘　あら、私におこつたつて仕樣がないわ。
妻　だから、默つておいでと云ふんだよ。

娘　……

主人　煙管はどうした、と。

客　ついでのことに、と。

主人　おい、おはる。

娘　はアい、たゞ今。母さんどうするのよ。

妻　（烏瓜を見付けて）あゝあれを一つとつておいでよ。あの烏瓜を。

娘　あんなものどうするの？

妻　どうしてもいゝから。……お前はそれがいけないんだよ。とつておいでと云つたら默つて素直にとつて來たらいゝだらう。

娘　（不平さうに立つて、戸袋の烏瓜を一つとる）

妻　（煙草盆をとつて、灰壺に烏瓜を埋める）

娘　それぢやア惡いわ、いくら何でも。

妻　かまやしないよ、さ、かうしてそつと出しておいでよ。

娘　いやだわ、叱られてよ。

客　（石をもつて考へてゐる）

主人　畜生、持つて來やがらない。（立つて、茶の間へ來る）持つて來いと云ふのに何故さつさとしないんだ。馬鹿。（煙草の箱と煙管をとり）煙草盆を出せ。

妻　そこに出てるぢやありませんか。

主人　火は入つてゐるか。

妻　よく御覽なさい。

主人　よし。（煙草盆をもつて座敷に行く）

娘　あとで叱られてよ。母さん。

主人　どうなりましたね？（盤面を見る）

客　閉口さ。かうよりほかに路はない。

主人　でせうな。（煙管に煙草をつめる）

客　弱らかせる、と。

主人　や、こいつはいけない。

（妻と娘、顔を見合せる。）

客　何がいけませんね？

主人　こいつがさ、こいつが、この石が。

客　フヽム、いけたら、こつちが困る。

主人　成程。それもさうかい、と。

客　きんきらきん、と。

娘　母さん、お湯へ行きませう。

妻　お湯？　昨夜行つたばかりぢやないか。

娘　だつて烏瓜が見付かると、又厄介よ。行きませう。

妻　ぢや支度をしておくれ。

娘　（立つて、湯の道具を揃へる）

主人　はてな。

客　何を考へなさる？

主人　まゝよ、かう行つて見ろ。

娘　（支度を終へて）ぢや行きませう。
妻　揃つたかい。
娘　えゝ。
客　弱つたな。……まあ一吹(いつぷく)して、と。
主人　煙草にしよ、か。
娘　大變だ。煙草にするつて云つてゐるわ。早く出ませう。
妻　（立つて、中の間へ出て）あなた、あなた。
主人　何で御座る、と。
妻　ちよいとお湯に行つて來ますからね、留守を願ひますよ。
主人　行つておいでなさいとも、と。
妻　氣を付けなさいよ。戸じまりはして行きますけれど。
客　ごゆるり入つてゐらつしやいまし、と。
主人　板の間稼ぎに氣を付けなさい、と。
娘　母さん、おあしもつて？
妻　あゝ。
（妻と娘、茶の間、正面の障子から去る。）
客　板の間稼ぎ、と。
主人　こつちも板の間稼ぎ、と。
客　も一つ板の間稼ぎ、と。
主人　出直し〳〵、と。
客。それがよかろ、と。

主人　糞、かう行け。
客　それが當り前だ、と。
主人　當り前か、と。
客　こつちも當り前、と。
主人　さて、こゝだ。（考へる。やゝ間）む、かう行かう。
客　さう來たか。
主人　かう來た、と。
客　それならこつちも。
主人　うゝむ、そいつは痛いなア。……ではかうだ。
（少時(しばらく)の間、無言で打ち續ける。上手臺所の障子から泥棒が出て來る。四邊(あたり)を窺ふ。）
主人　やあ推參者めが、と。
客　御參なれ、と。
主人　退りをらう、と。
泥棒　（驚いて、上手へ入る）
客　かう攻め込んでおけば、あとはこつちのものだ。
主人　さうは問屋で卸しませぬ、と。
客　卸して見せる、と。
泥棒　（上手から出て來る。奥を窺ふ。）
主人　卸させませぬ、と。
客　勝手にしやがれ、と。
泥棒　いゝ音だな。（座敷の方に行きかける）いや、あぶ

ねえ、こつちの仕事が先きだ。（箪笥の抽斗に手をかける）

主人　待つた、待つた。

泥棒　（慌てゝ手を引つこめる）

客　怪しからんな。待てとは怪しからん。

主人　待てとおとゞめなされしは、と。かう行かう。

客　かう行かうもないもんだ、と。

泥棒　（そつと箪笥の抽斗をあけ、中から着類をとり出す）

主人　うまい口を見付けたな。

客　見付けたとも、と。

主人　左様々々、さう云ふ風に、と。

客　かう云ふ風に、と。

主人　お稼ぎなさい、と。

客　遠慮に及ばぬ、と。

主人　とつとけ／＼、と。

客　おだてちやいけない、と。

主人　おだてるものか、と。

客　かうしておけば、と。

主人　おつと、よし／＼、と。

泥棒　（この間に取り出した物を大風呂敷に包んで背負ふ）

客　稼いだ／＼、と。

主人　儲けた／＼、と。

客　しこたまとつた、と。

泥棒　（箪笥の上にある鎖のついた金時計をとる）

主人　おつと、それはいかん。それは……。

泥棒　（驚いて時計を落す）

客　いかんも糞もあるものか、と。

主人　そりや聞こえませぬ、傳兵衛さん、と。

客　可哀さうなお俊さん、と。

泥棒　（時計を拾つて、懐ろへ入れる）

主人　それでよかろ、と。

客　文句はあるまい、と。

主人　こつちは困る、と。

泥棒　（上手へ行きかけて）だがいゝ音だなあ！　合戦酣（たけなは）だ。（石の音を聞く）うむ、ちよいと覗いてやらう。（座敷へ忍び寄る）

客　いよ／＼來たな、と。

主人　來たか／＼、と。

客　こつちだ／＼、と。

主人　行くぞ／＼、と。

泥棒　（そつと座敷の襖をあけて覗く）

客　進め／＼、と。

主人　進んでよいか、と

客　よいとも／＼、と。

主人　それでは行くぞ、と。
泥棒（座敷の中に入り、主人の背後から盤面を覗き込む）
客　如何で御座る、と。
主人　斯様で御座る、と。
客　然らばこつちは、と。
主人　高見の見物、と。
泥棒　ふつくらとしたいゝ石ですねえ。
主人　さうですよ、と。
泥棒　燒かない鹽煎餅見たいにそつくり返つてゐちや面白
くないが、これなら打つにも張合がありまさあ。
客　どなたかおゐでだね、と。
主人　おゐでになつたかね、と。
泥棒　失禮ですが互先ですな。
客　互先ですよ、と。
泥棒　それでなくつちや面白くありません。えゝ、碁は互
先に限りまさあ。
主人　よく知つてゐるね、と。
泥棒　へゝゝ。碁にかけちや旦那、かう見えても一人前
でさあ。
客　そいつは頼もしいね、と。
泥棒　成程、その大きな石が攻め合ひになつてゐますね。
うむ、面白いね。

主人　面白いね、と。
客　面白いか、と。
泥棒　かうつと……そこは切れ目だな。
主人　切れ目は切れ目、と。
客　金の切れ目が縁の切れ目、と。
泥棒　あつと、旦那、そつちの旦那、その黒はいけねえ、
そいつは繼ぐの一手だ。
主人　うるさいな。默つてゝ下さい。見物は默つてゐて下
さい。
泥棒　へえ。……あゝいけねえなあ！
客　見てゐるのはかまはないが、口を出してはいけない。
口を出しては……。
主人　岡目八目、助言は無用、と。
客　助言は無用、と。
泥棒　あ、いけねえなア。そ、それを手放して了つては。
主人　うるさいな。
泥棒　うるさかありませんよ。その手を、あ、仕様がねえ
おたんちんだなあ。
主人　おたんちだ、と。
泥棒　だつて旦那、お前さん、その石を。
客　あゝうるさい人だ。よく喋るね。
泥棒　だつて見てゐられねえや。

主人　見てゐられなけれやお歸りなさい、と。
泥棒　ヘボ過ぎらあ、
客　ヘボで惡けれや勝手にしやがれ、と。
泥棒　あゝさうだ。そいつはうめえ。
主人　大きなお世話、と。
泥棒　いや、今の石は大きかつたよ。おいらア正直に云ふよ。
客　おや、ふだん餘り見かけない方だが。
主人　（ちょいと振返つて）成程、お珍らしい方だ、と。
客　これは〳〵始めまして、と。
主人　頰冠りをして、と。
客　眞黒な顏だね、と。
主人　眼ばかりぎよろ〳〵さして、と。
客　髯でもお剃りなさい、と。
泥棒　（背中の荷を一とゆり搖つて）あゝどうもこれは重いな。
主人　大きな荷物を背負つて、と。
客　これは大きな包みだ、と。
主人　定めし重いことだらう、と、
客　降ろして一吹おしなさい、と。
泥棒　へえ、いいえ、さうしてもゐられませんので。
主人　一體あなたはどなたで、と、一つ打つて見ろ。
客　それでは私も、お前は誰だい。と、いきますかな。
主人　では私もお前は誰だい、と。
泥棒　へゝゝ。あつしは泥棒で。
主人　ふうん、泥棒ですか、と。
客　泥棒さんか、と。
泥棒　恐れ入ります。
主人　よくゐらつしやいました、と。
泥棒　お邪魔さまで。
客　どういたしまして、と。
主人　ゆつくり御覽なさい、と。
泥棒　有難う御座います。
客　まあ腰を落付けなさい、と。
主人　腰をおろして、と。
泥棒　ではちよつと御免を蒙むつて。（荷を背負つたまゝ坐り）やれ〳〵、まあこれで……（ゆつくりと盤面に眺め入る）

——幕——

（大正十三年一月作）

死刑囚

被告　強盗殺人犯
裁判長
検事
辯護人
陪審判事甲乙
書記
廷丁
巡査
傍聴人大勢

或る法廷。夏日午前

一段高い裁判官席には兩端に検事と書記。書記は書類に筆を走らし、検事は半ば天井を見上げながら髯を撫でゝゐる。囚人箱には被告が入つてゐる。四十歳位の痴愚な男、然し獰猛ではない。傍に巡査が腰をかけ、辯護人は裁判官席と向ひ合つた卓に腕を拱ぬいてゐる。その背後の傍聴人席には群集が溢れてゐる。廷丁は裁判官席の下の隅に腰かけて扇子を使つてゐる。

狹い空地を隔てた向ふ側の眩ゆい位に一ぱい日を浴びた煉瓦の建物が、正面の二つの窓から見える。それが日の映さないこの法廷を、一層暗く陰欝にしてゐる。

裁判長の卓上には書類が堆高く積まれてゐる。

やゝ間。上手の扉から裁判長と判事甲乙が出て來る。裁判長を眞中に、兩側に判事甲乙が腰を下す。検事、書記、辯護人、被告、廷丁、巡査等皆起立して裁判官を迎へる。

裁判長　（書類をひろげながら）片倉仙造。
巡査　（被告の手錠を外し、箱の扉をあける）
被告　（箱を出て、のろ〳〵と裁判官席の前の小さな卓に向つて立つ）
裁判長　前回の公判に引續いて取調べる……そちらは八重とは古くからの馴染だつたのか。
被告　うゝん。（首を振る）
裁判長　古くからの知合ではないのか。ではいつ頃から知つたのだ？
被告　……春頃から。
裁判長　春頃。今年の春か。
被告　うゝん。（首を振る）
裁判長　いつの春だ。

被告　……去年の……七月十……八日の晩。
裁判長　七月なら夏ぢやないか。それに間違ひないか。
被告　(頷く)
裁判長　何處で知つたのだ。
被告　お八重の店で。
裁判長　八重の店へお前が行つたのか。
被告　(頷く)
裁判長　何しに行つたのだ。
被告　……。
裁判長　その時、八重とどう云ふ話をしたか覺えてゐるか。
被告　(首を振る)
裁判長　覺えてゐない。ふうん。その後も度々行つたか。
被告　(頷く)
裁判長　何度位行つた?
被告　……。
裁判長　行く度に酒を飲んだのか。
被告　(頷く)
裁判長　酒を飲むために行くのか。
被告　(頷く)
裁判長　さうなのか。
被告　(頷く)　、、、、
裁判長　默つてこつくりばかりしてゐたのでは分らない。

私がお前に訊ねてゐるのだから、こちらの問をそのまゝ答へにして了つてはいけない。はつきり云ひなさい……八重の店で飲み食ひして、お前はその勘定をいつも綺麗に拂つたか。
被告　……
裁判長　勘定をしずに出たことがあるだらう。
被告　(きつぱりと)　ない。
裁判長　ない?　そんなことはあるまい。一度位あるだらう。
被告　(頷く)
裁判長　それ見ろ、何度位ある?
被告　……。
裁判長　お前は今年になつてから、毎晩のやうに八重の店へ入りびたつて、散々飲んだり食つたりして、一文も拂はずにゐたと云ふぢやないか。さうか。
被告　……。
裁判長　さうだらう。拂つたことはあるまい。
被告　拂つたこともある。
裁判長　然し證人の松本みつの陳述によると、一度も拂つたことはないと云つてゐるぞ。
被告　そんな……たしかに拂つた。
裁判長　お前と八重とは痴情關係はなかつたか。

被告　（意味が分らないので、裁判長の顏を見上げる）
裁判長　お前は八重と夫婦になりたいと思つたことがあるか。
被告　……。（首を垂れる）
裁判長　八重の店へ通つたのは酒が飲みたいばかりでなく、八重の顏が見たくつてしげ／＼行つたのだらう。
被告　……。（首を振る）
裁判長　さうぢやないのか。然し八重を可愛い女だと思つたことはあるだらう。
被告　……。
裁判長　どうだね。八重と一緒になつて見たいと考へたことがありはしないか。
被告　ありません。
裁判長　ないかね。それぢや何故さう毎晩八重の店にばかり行つたのだ。酒を飲むだけなら、外へ行つてもいゝぢやないか。
被告　（手首で額の汗を拭く）
裁判長　（書類を繰りながら）今年六月二十日の晩にも行つたね。行つたらう？
被告　（頷く）
裁判長　何しに行つたのだ。
被告　飲みに。

裁判長　飲んだのか。
被告　（頷く）
裁判長　どの位飲んだ。
被告　一本。
裁判長　たつた一本きりか。
被告　（頷く）
裁判長　訊き殘したが、一體お前はどの位飲むのだ。どの位飲むと、いゝ心持になるのだ。
被告　一本。
裁判長　つまり二合だね。二合飲んで醉ふのか。
被告　（頷く）
裁判長　さうではなく、八重が一本以上は飲ませなかつたのぢやないか。
被告　……。
裁判長　その晩も一本飲んでおしまひにしたのか。
被告　（頷く）
裁判長　それから何うした。飲んでから。
被告　……。（手首で額の汗を撫でる）
裁判長　そちらは一本飲んで了つてから、もう一本くれと云つたね。……云つたらう。それを八重がくれなかつたので、そちらは何か文句を云ひながら外へ出て行つたさうだな。……さうかい。

被告　……。

裁判長　八重の店を出てからそれから何うした。

被告　……。(手首で汗を拭く)

裁判長　默つてゐては分らない。訊くだけ訊かねば調べはつかんのだから、覺えてゐることだけははつきり云はなければいけない。六月二十日の晩、八重の店を出てから、それから何うした。

被告　……。

裁判長　又近處のバーで飲んだのだらう。

被告　(頷く)

裁判長　何を飲んだのだ。

被告　電氣。

裁判長　電氣?……あゝ電氣ブランのことか。

(傍聽人席に低い笑聲起る。)

被告　(頷く)

裁判長　それを何杯飲んだのだ。

被告　……。

裁判長　あれはたしかコップで飲むのだつたな。何杯飲んだか覺えてゐないか。

被告　知らない。(汗を拭く)

裁判長　飲んでから、その惠比須バーを出て、それから何うした。

被告　(頻りに汗を拭く)

裁判長　(やゝ嚴しく)云はないか。

被告　(首を低く垂れる。汗を拭く)

裁判長　又、その足でひさご屋へ引返したらう。

被告　へえ。

裁判長　その時、八重は店にゐたか。

被告　……。

裁判長　八重は店にゐたか。

被告　……知りません。

裁判長　知らないことはない豫審廷でははつきり申し立ててゐるぢやないか。

被告　……。

裁判長　何うして云はないのだ。豫審で申し立てたやうにはつきり云つたらよからう。

被告　又來やがつた、と云ひました。

裁判長　誰が。八重がか。

被告　(頷く)

裁判長　では八重は店にゐたのだな。

被告　(頷く)

裁判長　お前がその晩、二度目に、八重の店へ行つた時に、八重は店にゐて、お前の顏を見ると、又來やがつた、と云つたのか。

被告　（頷く）
裁判長　然し豫審ではさう云つてをらんね。違ひはしないか。
被告　……。
裁判長　まアいゝ。それからどうした。
被告　……。（汗を拭く）
裁判長　八重に又來やがつたと云はれて、そちらは何と云つた。腹が立つたか。
被告　（頷く）
裁判長　それぢやお前も何か云つたらう。腹を立てゝ默つてはゐられまい。
被告　來て惡いか、と云ひました。
裁判長　來て惡いかと云つた？　うむ、それから。
被告　……。
裁判長　それから何と云つた？　八重が又來やがつたと云つたので、そちらは來ては惡いかと云つた。そしたら八重は何と云つた。
被告　……。金はない……。
裁判長　金はない？　それはもつとあとの事だらう。その前にまだ何か云ひ合つた筈だが。
被告　……。（汗を拭く）
裁判長　一體そちらが二度目にひさご屋に行つたのは、何時頃だつたか覺えてゐるか。
被告　……。
裁判長　そちらが行つた時に外に客はゐたか。
被告　（頷く）
裁判長　何人位ゐたね。
被告　……大勢。
裁判長　大勢ゐた。ふうん。その大勢ゐる中で、お前は八重に金を出せと云つたのか。
被告　……。
裁判長　どうなのだ。
被告　誰もゐない時に。
裁判長　客がみんな歸つて了つてからか。
被告　（頷く）
裁判長　お前が金を出せと云つたら、八重は何と云つた。
被告　……金なんかない。
裁判長　金なんかないと云つたのか。さう云はれてお前はどうした。
被告　……。
裁判長　金を出さなければ家中皆殺しにするぞ、と云つたのぢやないか。
被告　……。（汗を拭く）
裁判長　さうだらう。

被告　さうは云はない。
裁判長　それぢや何と云つたのだ。
被告　金を貸してくれと云つたんです。
裁判長　貸せと云つたのか。ふうん、幾ら貸せと云つたのだ。
被告　一圓。
（傍聽人席から低い笑聲が起る。）
裁判長　一圓貸せと云つたら八重がそんな金はない、と云つたのか。
被告　（頷く）
裁判長　そちらは八重が貸してくれるものと思つて、さう云つたのか、それとも貸してくれないことを承知でさう云つたのか、どつちなのだ。
被告　……。
裁判長　飲み食ひの勘定が散々貸し倒れになつてゐるお前さんに、八重がその上金を貸す筈はないぢやないか。
被告　……。
裁判長　貸さないと斷られて、お前はそれからどうした。
被告　貸さなけれや貸さないでもいゝ、と云つた。
判事甲　（背のない圓い小さな粗末な板敷の椅子を卓の上に取り出す。）
裁判長　（苦笑。椅子に手をかけて）この椅子に覺えがあるか。
被告　（顏を上げる）
裁判長　覺えがあるか。
被告　（につこりして頷く）
裁判長　そちらはこの椅子で八重をどうしようとしたのだ。
被告　……。（首を垂れる）
裁判長　（椅子を前に差出して優しく）これでもつて八重をどうしたのか、そこでやつて見せてくれ。
被告　（手を出しかれてもじもじしてゐる）
裁判長　さア、これでどう云ふ風に八重を打つたか、ちよいとやつて御覽。
廷丁　（立つて來て、裁判長から椅子をとり、被告に持たせる）
被告　（兩手に持つて、ぢつと椅子を眺める）
（傍聽人席に低い笑聲起る。）
裁判長　假にお前の傍に八重がゐるとして、お前はその椅子でどう云ふ風に八重を打つたか、も一度やつて見せてくれ。
被告　（椅子を持つたまゝぢつとしてゐる。額から汗がたらたら垂れる）
裁判長　（やゝ嚴しく）出來んのか。

被告　……。

裁判長　廷丁、君ちよつとこゝへ來て立つて見てくれ。

廷丁　へ。（迷惑さうに立上る）

裁判長　（苦笑）　すまないが、ちよいと被告の傍に立つてくれたまへ。

廷丁　（澁々被告の傍に來る）

裁判長、（被告に）　假にこの人を八重として、お前はその椅子で八重の何處を打つたか、やつて見てくれないか。

廷丁　（吃驚して）　いや、それは。

（後退りする。）

（傍聽人席からどつと笑聲起る。）

裁判長　（苦笑）　大丈夫だ。打ちやせん。大丈夫だ。

被告　（椅子をもつて、ぢつとしてゐる）

裁判長　やらないのか。何故やらないんだ。……よし、廷丁、その椅子を。

廷丁　（ホッとして、被告から椅子をとつて裁判長の前に出す）

判事甲　（椅子を受取つて下に置く）

被告　（額の汗を拭く）

廷丁　（席に戻る）

裁判長　（書類を見ながら朗讀的に）　そちらはこの椅子を兩手に振りかぶつて、八重の頭を一つ打つと、八重はそこへ倒れた。その上へ馬乘りになつて、着物の襟で八重の頸をしめて殺した、と豫審で述べてゐるが、それに相違ないな。

被告　（頷く）

裁判長　（書物を伏せて、辯護人に）　何かお訊ねになることはありませんか。

辯護人　（立つて）　訊ねても恐らく無駄だらうと思ひますが、今年になつてから被告は毎日のやうに被害者八重の店へ入りびたつてゐて、而も勘定は一文も拂はなかつたと云ふのですが、それでゐて八重は別段被告に對して催促がましい強いことも云はなかつたやうに調書に見えてをります。して見ますと、八重と被告との間に情交的の關係があつたやうにも窺はれるのですが、これはどうなるでせうか。

裁判長　それはさつき訊ねて見ましたが、さう云ふことはなかつたやうに云つてゐます。

辯護士　さうですか。それから。（書類を繰りながら）　もう一つ……。いや、もうよろしゆう御座います。どうか。

（腰を下す）

裁判長　では檢事の御意見を。

檢事　（立つて）　本件事實は被告の陳述に依つて見ても明白でありまして、たとへ痴情關係であるにせよ、又は單

なる金錢の出入沙汰であるにしても、被告の憎むべき犯罪行爲には一點酌量の餘地なきものと認めるのであります。然し見受けますところ、被告は聊か普通人の常識から逸してゐるらしい。つまり頭腦に缺陷があるやうにも見えますので、殊に當時の泥醉狀態から考慮しまして、この被告にしてこの犯罪は寧ろ當然かとも心得るのであります。然しながら、多くの場合、かやうな犯罪事實は被告と同等の境遇にあるもの丶常に釀し易い行爲でありまして、本件被告に若し如上の意味で同情の餘地ありとせば恐らく將來の强盜殺人犯被告に對しても、總てこれと同等の恩典に浴せしめねばならぬことになりはしないかと危ぶむのであります。でありますから本檢察官は本件被告に對し情狀酌量すべき點を毛頭認めないのみならず、寧ろ將來斯樣な忌はしき犯罪防止の範例として被告に極刑、即ち死刑を以て相當と認めます。然るべく御判決を。（腰を下す）

裁判長（腕時計を見て、辯護人に）もう正午ですが、辯論は午後に願ひませうか。

辯護人　よろしう御座います。

裁判長（書類を抱へて立上る）

（突然、地鳴りと一緒に屋内激しく搖れ出す。傍聽人席から「地震だ。」と云ふ聲が聞える。ます〳〵激しく搖れる。傍聽人席は總立ちになつてざわめく。下手の扉をあけてなだれ出る。裁判官等みな卓につかまつて、ぢつと腰かけたまゝ天井を見詰めてゐる。被告は卓の下に蹲る。一度やゝ鎭まつたが直ぐ再び一層激しく搖れ返す。物の崩れるすさまじい音が響く。と同時に法廷は前後左右から大音響と共に崩れ落ちる。忽ち人皆埋もれる。白い壁埃が濛々と烟のやうに立ち罩めて、總てを蔽ひ盡す。やゝ間。次第に明るくなると、建物が堆高く崩潰した殘骸の向ふに一面淒慘な荒涼とした外景が現はれる。少時の間、地中のやうな靜けさに滿つ。濛塵全く消え去つた頃に、崩れた建物の中から被告が這ひ出て來る。全身埃だらけになつて、着物の片袖が破れてべろ〳〵してゐる。手足に血が流れてゐる。盛られた殘骸の上に足を投げ出して坐る。夢見心地といふ樣子でぼんやりしてゐる。やゝ間。何處からか低い呻き聲がかすかに聞えて來る。少時續く。被告四邊を見廻す。少し離れた處に片手が現はれる。傍のものを搔きのけるやうに動かす。）

被告（手を見付けて、少時ぢつと眺めてゐたが、立上つて、手の四邊に堆積したものを一生懸命に搔きのける。裁判長が這ひ出る。顏中血だらけになつてゐる。苦し氣に息をする）

被告　(體のまはりを撫で廻してゐたが、やがて破れた片袖をもぎ取つて、裁判長の方へそつと出す)
裁判長　(顔を上げる。やゝ間)あゝお前か。……すまない……すまない。
被告　血が、血が大變です。これで……。
裁判長　うむ……お前も怪我をしたな。
被告　(血の出る手を隱すやうに慌てゝ背後へ廻して、着物で拭く)
裁判長　(よろ〳〵と立上る)
被告　これで血を。(片袖を出す)
裁判長　すまない。有難う。(とつて顔を押へる)
被告　まだこゝにも。……(指す)
裁判長　有難う。(片袖を返す)
被告　(默つてとる)
裁判長　(下手へ行きかける)
被告　旦那。……旦那。
裁判長　(振返る)
被告　私はどうしたらいゝんでせう?
裁判長　え?　……あゝさうか。(緊張する)
被告　(ぢつと裁判長の顔を見る)
裁判長　さうだ。お前は警察へ行け。警察へ。
被告　へい。(お辭儀をする)
裁判長　無論警察へ行かなきやいかん。直ぐ行け。
被告　(恐れ入つて)へい。
裁判長　直ぐだ。いゝか。直ぐ行くんだぞ!
被告　へい。(頭を下げる)
裁判長　(よろ〳〵下手へ去る)
被告　(四邊を見廻して)警察は何處だらう。(一段高い處に上つて、方々を見廻す。やゝ間)警察もなくなつて了つた!

――幕――

(大正十三年二月作)

或る別れ（小品）

父
娘
人妻
隣家の人々　主人、男の子、主人の老母
葬儀人夫甲乙

山の手の或る公園

大正大地震の翌春——花時には稀な晴れた日の午前。
正面と下手にバラック。その間は細い路次で、奥深いバラック長家の心。正面のは入口が路次に面してゐて、(見物には)明りとりの小さな窓のあるはめ板が見えるだけで、下手のよりもやゝ奥まつてゐる。窓には障子がはめてあり、その下に家の端から端に一本の細引が渡してある。下手のバラックは正面の入口の雨戸が半開きになつてゐて、その一枚に「忌中」の札が貼つてある。上手に一本の大きな立派な櫻の樹が、今を盛りに咲き亂れてゐる。そしてこれ等の周圍には樹々の若若しい青葉が繁つてゐる。

櫻の樹の下に一脚のベンチ、そこに葬儀人夫二人が腰かけてゐる。甲は新聞を讀み、乙はぼんやりと地上を眺めてゐる。正面のバラックの前で、娘(二十歳位)が洗濯をし終つた心で、一枚々々絞りながらバケツに入れてゐる。やがてそれを提げ、片手に盥をもつて上手へ去る。

やゝ間。下手から貧し氣な風をした父(五十四五歳)が出て來て、ものを尋れる心でバラックを一軒々々覗きながら、正面の路次の中へ去る。上手から娘が洗濯物を入れたバケツ、盥などを提げて出て來て、窓の下の細引に通して干す。正面の路次から父が出て來る。ふと娘を見る。娘も父を見る。同時に、

父　おゝお雪!
娘　あゝお父さん、……まあ!
父　(喜しさうに)矢張りお前だつたんだな。
娘　まあお父さん。(涙が出る)よくねえ!
父　こゝにゐるのか。さうか、それやまあ何よりだ。達者で何よりだつた。
娘　お父さんもよくねえ。今何處に?
父　麻布の方にゐるよ。なにね、實はきのふ越前堀まで用達に行つたら、途中であの山田の息子さんね、あの新太郎さん、あの人に逢つて、この近處でお前によく似た人

を見かけたと云ふから若しやさうぢやないかと思つて、出かけて來たのさ。
娘　あらさう、兄さんも矢張無事で……？
父　兄さんは矢つ張り……駄目らしいね。
娘　え、駄目？　まだ分らないの？
父　うむ、まだ分らない！
娘　お父さん、その後、あつちへ行つて？　月島へ？
父　うむ、兄さんかお前かに逢ふかと思つてね、先のうちはよく行つて見たけれど、近處で訊いても一向お前等を見かけた人もないので、この頃はもう……。
娘　私、お父さんは兄さんと一緒にゐるとばかり思つてゐたのよ。
父　中々どうして。
娘　月島へも二三度行つて見たけど、まだその頃は何もなくつて、誰にも逢はないし、尋ねやうがないんで……。
父　さうだつたらうとも。で、お前はいつから此處に來てゐるのだい？
娘　（濟まない心で）間もなくでした。
父　さうか。それはまあよかつた。それに此處のバラックは、よそより大へん丁寧に出來てゐるやうだね。これなら寒中さう寒くもなかつたらう？
娘　えゝ、日當りがいゝから。
父　どこだい？　この奥かい。
娘　いゝえ、これ。（指す）
父　これかい、ふうん、これやいゝ。これぢやお日様をひとりで占領してゐるやうなものだ。うん、これや暖かでいゝ！……ふうん、さうかい。
娘　まあどうか。（案内しようとする）
父　いやいゝよ。先きにそれを干して了ふといゝ。どうせ私は用のない體だから。
娘　えゝ、でもまあ……。
父　いゝから早く片付けておしまひ。立つてゐたつて話は出來る。
娘　（態度に表情があって、男物の袷を干す）
父　（感付く。やゝ間）誰かと一緒にゐるのかい。
娘　……えゝ。
父　……何をしてゐる人だい。
娘　……印刷所に出てゐるんです。
父　印刷屋？　職人さんだね。
娘　………。
父　二人きりかい。誰かその人の身よりでも一緒にゐるのかい。
娘　いゝえ、誰も。
父　ぢや二人きりか。ふうん、それならまあ氣樂でいゝが

娘　……。

娘　（洗濯物を干し終る）お父さんは麻布の何處にゐるの？

父　矢張りバラックさ。

娘　ひとりで？

父　あゝひとりだとも！

娘　それぢや此處へ來るといゝわ。六疊一間だけれど、三人位は寢られてよ。

父　うむ、世話になつてもいゝね。外に厄介な人さへなければや。

娘　誰もゐやしないわ。それに晝間は私ひとりきりなんだから。

父　だがご亭主さんが承知してくれゝやいゝが……。

娘　…………。（顏を赤くする）

父　元から知り合ひの人かい？

娘　いゝえ。

父　一體いつから一緒になつたのだね？

娘　あれから間もなく……。

父　何處で？

娘　……何處で、と云ふこともないけれど、一緒に避難してゐて……。

父　全體お前達あの時、どつちへ逃げたのだい？　たしかあの靈岸橋の近處ではぐれて了つたんだが。

娘　おもてゞをかしいわ。家へ入りませう。

父　さうか。ぢやまあ……。（娘と共に去る）

（やゝ間。）

（下手のバラックから主人が半身を出す。）

主人　葬儀屋さん、お待ち遠うさま！

（葬儀人夫立つて、下手のバラックの中に入る。やがて見窶らしい棺桶をかつぎ出す。うしろに主人と男の子、老母出て來る。）

人夫甲　（主人に）染井でしたね？

主人　あゝさう。

老母　（軒下に立つて、合掌しながら南無阿彌陀佛を低唱する）

（人夫あらためて肩を入れて立つ。下手に去る。主人と男の子、無言のまゝそのあとに從ふ。老母ぢつと見送る。やゝ間。ちよいと眼を拭いて家の中に入る。）

（やゝ間。父憂鬱に出て來る。娘、追つて出て來る。）

娘　ねえお父さん、どうしたの？　どうしてさう急に……

父　なあに氣にすることはないよ。會はない前のことを思へば何でもないから。

娘　でもどうして此處へ來るのがいやなの？

父　いやぢやないがね。結構だとは思ふが。

娘　それなら來ることにしたらいゝぢやありませんか。來て下さいよ。ねえ。

父　うむ、だからさうなると、矢張りそれだけお前が餘計苦勞しなけれやならない。

娘　しやしないわ、ちつとも！

父　さうは行かないよ。矢張り別になつてゐた方がお互に氣樂でいゝよ。

娘　お父さんがさうなら仕方がないけれど、私の方はちつともかまはないのよ。

父　うむ、有難う！　どつちみち一人身だから世話になるやうだつたらいつでも直ぐ來られる。（下手の家を指して低聲に）こゝでは誰か亡くなつたんだね？

娘　えゝ、おかみさん。

父　ふうん、氣の毒な！　病氣でかえ？

娘　えゝ、お產のあとが惡るくつてね。

父　ふうん、それや〳〵。こんなバラックで病らつては、さぞ心細かつたことだらう。可哀さうに。……お前も體を氣を付けなよ。え、不養生をしちや駄目だぜ。

娘　えゝ。……ねえお父さん、もう直きお正午だから、ご飯を食べてゆつくりして行つたらどう？

父　うむ、いや、朝のおまんまを食べて直ぐ出て來たんだから、まだ欲しくない。又この次ぎ來た時によばれよう！

娘　さう。ぢや……（帶の間から財布を出して）これでお蕎麥でも食べて行つて下さい。（紙幣を一枚出す）

父　いゝよ、いゝよ、そんな。

娘　でも折角出したんだから。少ないけれど。

父　さうかい。（受取つて）すまないな。

娘　本當にお父さん、こつちはいつでもいゝんですよ。だから氣が向いたら直ぐ越してゐらつしやいな。

父　うむ、世話になるやうだつたら來るけれど、まあ丈夫でゐるうちは成るべく厄介をかけまいよ。……ぢや又來るから。……體を氣を付けなよ。（行きかける）

娘　兄さんの居處が分つたら直ぐ知らして下さい。

父　うむ。（立止つて）多分もう駄目だらうと思ふが。

娘　そんなことあるもんですか。きつと足にまかせて何處か遠くへ逃げて行つてゐるのよ。そのうちにきつと歸つて來る！

父　ふん、歸つて來るとしたら、何處からか女でも引つぱつて來るだらう。

娘　…………。

父　……やつと娘一人を探しあてたと思へば、人のものになつてゐるし……。それやさうとお前、今日私の來たことを云ふのかい、ご亭主に。

娘　………。
父　え、ご亭主さんに、さう云ふかい？
娘　云つちやいけないの？
父　どうともそれやお前の勝手だが、しかし厄介になるなんて云ふことは云はないがいゝぜ。まだ俺だつて樂に一人でやつて行けるんだから。
娘　（悄沈して）　えゝ。
父　お前達の世話にならなくつたつて、まだこれでも立派にやつて行けるよ。ぢや行かう。大じにしなよ。（下手へ行く）
娘　お父さん、お父さんの處は何處？　番地は？
父　今井町だよ。三井さんの屋敷うちでね。そこのバラック第×號と云ふんだ。
娘　ぢやそこへ郵便を出せば屆くのね。さう、有難う。
父　………。（行きかける）
娘　お父さん、そこまで送りませう。
父　なにいゝよ。家が不用心だ。
娘　でも……公園の出口まで行きませう。
父　いゝよ、いゝよ。かまはないでいゝよ。
（二人下手へ去る）
（入れ違ひに下手のバラックから老母が出て來て、戸の忌中札をはがし、丁寧にたゝんで懷ろに入れる。）

（日、あか／＼と照る。）

——幕——

（大正十三年五月作）

『あゝ書けない!』彼（一幕）

劇作家

彼
妻
嬰兒

春の日。
山の手――彼の家。
書齋と茶の間と並んだ二た部室。前は小さな庭。
彼（三十歳位）縁側の柱に凭れて、考へ込んでゐる。
妻（二十二三歳）茶の間で裁縫をしてゐる。その傍に嬰兒が寢てゐる。
よく晴れてゐる。
やゝ永き間。

彼　……をかしい!
妻　(ちよいと顔を上げる。直ぐ又、針を運ぶ)
彼　……どうもへんだ!
妻　何を獨りごと云つてゐるの?
彼　ちつとも閃めいて來ない!
妻　……。
彼　……天氣のせゐだな。
妻　こんなにいゝお天氣だのに?
彼　よすぎていけない。
妻　明るすぎるの?
彼　……。
妻　さうむきになつて考へたつて駄目よ。少し氣を換へてごらんなさい。
彼　……。
妻　散歩でもしてゐらしたら?　しばらく。
彼　面倒くさい!
妻　……。
彼　……今からかう行きつまるやうぢや仕様がないなア!
妻　ゆうべ私の話して上げたテーマ、あれ駄目?
彼　駄目さ、あんなもの。
妻　だつて面白がつてゐたぢやありませんか。あんなに。
彼　駄目だよ。
妻　どうして?
彼　……。
妻　……書けないのね。むづかしいの?
彼　くだらないよ、あんなテーマ。
妻　だつてほかになければ、あれで間に合はしておきなさ

いよ。

彼　いやだよ。あんな馬鹿々々しいもの。……第一、おれの畑ぢやない。

妻　畑が違ふと、矢張り書きにくいでせうね。

彼　そんなことないよ。

妻　むづかしいでせう？

彼　うゝむ。

妻　でも會心のものは出來ないわ。

彼　出來るとも。

妻　ぢや書いたら？……あれを。ゆうべのを。

彼　いやだよ。

妻　ほらご覽なさい。矢張り書けないんぢやありませんか。

彼　くだらねえ。何だ、あんなもの！

妻　……あなたは病氣なのよ。きつと！

彼　病氣？

妻　えゝ。

彼　書けないのが病氣か。

妻　いゝえ、病氣だから書けないのよ。神經衰弱ぢやない？

彼　さうだよ。

妻　さうでせう。

彼　さうさ。おれの神經衰弱はしよつちゆうだ。

妻　でもすら〳〵と書ける時もあるのね。この間のやうに。

彼　うむ。

妻　どうしてさう違ふの？ 書けたり書けなかつたり。

彼　それや頭の調子によるのさ。

妻　神經衰弱でも頭のいゝ時もあるの？

彼　あるさ。輕いやつならかへつて病的に冴えるね。

妻　ふうん。……ぢやこの頃、重くなつたのか知ら。そんなに書けないのは。

彼　……。

妻　自分で氣が付かない？

彼　うむ。

妻　何か藥はないの？ 神經衰弱の。

彼　あるもんか。馬鹿！

妻　どうして？

彼　どうしてつたつて、神經衰弱やヒステリーに藥があつてたまるものか。

妻　たまるものかつて、なければ餘計たまらないぢやないの？

彼　ないんだよ。うるせえな！

妻　……頭の藥ぢや駄目なの？

彼　何だい、頭の藥つて？

妻　よくあるぢやありませんか。そら、健腦丸とか何とかつて、腦の藥が。

彼　馬鹿！
妻　駄目？　あれ。
彼　……呆れたやつだな！
妻　駄目なの？　あゝ云ふ藥は？
彼　昔からよく云ふね。馬鹿につける藥はないつて。
妻　えゝ、それとおんなじ？
彼　冗談云ふな！
妻　……？
彼　馬鹿につける藥があれば、お前につけてやりたいつて云ふ話さ。
妻　……。
彼　馬鹿と神經衰弱に藥はねえ‼
妻　まだあるわよ。
彼　何が？
妻　そらあれ！
彼　何だい、あれつて。
妻　そら、何とかで草津の湯でもつて、唄にあるぢやないの。
彼　あゝ惚れた病ひか。成程、……惚れた病は癒りやせぬ、つてな。
妻　あれにも藥がないわ。
彼　ふゝん、違えねえ！

妻　……。（考へ込む）
彼　まだあるだらう。……もうないかな。
妻　……。
彼　馬鹿と、神經衰弱と、戀愛と、……それから。
妻　默つて！
彼　何だい。
妻　ちよいと默つてゝ。
彼　誰か來たのか。
妻　……。（考へてゐる）
彼　おい、何だよ。
（やゝ間。）
妻　あゝ考へた！
彼　何を？
妻　素敵なテーマ！
彼　また始めやがつた！
妻　こんどは喜劇よ。
彼　どうせ喜劇さ。お前の考へるテーマなら。
妻　ねえ、かう云ふのよ。
彼　よせよ。くだらねえことを。
妻　くだらなくはないことよ。ねえ、ある若い夫婦があるの。
彼　きまつてやがる！　夫は文學者なんだらう。

妻　文學者でも何でもいゝけれど。さうね、矢張り文學者の方が効果はあつてね。
彼　生意氣云ふない！
妻　するとね、その夫は神經衰弱なの。よくつて？
彼　よかアねえよ、ちつとも。
妻　まアさ。それでね。
彼　妻は馬鹿か。
妻　あら、よく知つてゐるわね。
彼　それや知つてゐるさ。
妻　先き廻りしちや駄目よ。默つて聽いてゐなけれやア。
彼　……。
妻　ところがね、ある時、喧嘩をするの、二人が。
彼　夫婦喧嘩の芝居なんかもう古い。駄目だ。
妻　でも喧嘩しなけれやテーマにならないのよ。
彼　だからお前のテーマはいつもくだらねえつて云ふんだよ。
妻　でもそのあとが面白いのよ。兎に角、まあ喧嘩をするでせう。
彼　うむ、する。
妻　してからね。あ、その前に云つておくのは、この二人は自由結婚なのよ。
彼　ます／＼くだらねえ！　自由結婚なんて、現代の言葉ぢやない。
妻　でもよ。
彼　でもよつたつて。
妻　まあ默つてお聽きなさいよ。……分つたでせう？
彼　何が？
妻　その……結婚が。
彼　あゝ自由結婚か。うむ、つまりおれ達見たいのさ。
妻　そこまで云はなくたつていゝことよ。
彼　云つたつていゝやな。
妻　兎に角、愛し合つて夫婦になつたのよ。
彼　憎み合つて、なるやつがあるか。
妻　うるさいのね。一々。
彼　それからどうしたんだい？
妻　だからね。だから喧嘩をしたあとで、考へるの。
彼　うむ、一緒にならなければよかつたつてか。
妻　そんなことぢやないのよ。
彼　ぢやどんなことだ？
妻　つまり夫が神經衰弱でせう。
彼　うむ。
妻　妻が馬鹿でせう。
彼　うむ。
妻　それで……つまり戀愛病に罹つて、結婚したんでせう。

彼　うむ。
妻　そしてそのどれにもつける藥がないでせう。
彼　うむ。
妻　だからこの三つの藥があつたら、自分達はもつと幸福だらう、と思ふのよ。
彼　誰が？
妻　誰でもいゝの。でもまあ矢張り夫（をつと）でせうね。
彼　ふうん、何だか三題噺見たいだな。
妻　面白いでせう？
彼　（まだよく頭に入らないらしく）面白くねえなあ！
妻　いゝ喜劇よ。
彼　ならねえなア！　喜劇なんかに。
妻　なるわよ。うまくさへ書けば立派な喜劇だわ。
彼　（さうらしくも考へる）……。
妻　どう？　お書きなさいよ。それを。
彼　……うむ。
妻　ね。
彼　うむ。
妻　さ、早く！
彼　まあ待てよ。
妻　でもぐづ／＼してゐれや又いやになつちまふわ。
彼　大丈夫だ！

妻　あなたはそれがいけないのよ。直ぐやらないから。
彼　少し考へなけれや駄目だ。
妻　ぢや机へ行つて、お考へなさい。
彼　うむ。
妻　そんな處で考へてゐたつて、纏まりやしないから。
彼　うむ。
妻　さア。
彼　うむ。
妻　さあ早くお立ちなさいよ。
彼　うるせえな。ちつと默つてゐろ！
妻　……。
　　（嬰兒が泣き出す。）
妻　（抱き上げて乳をのませる。産まれてまだ一と月位しか經つてゐない。直き泣きやむ）
彼　（ぢつと考へてゐる）
　　（やゝ間。）
妻　まだ考へ付かない？
彼　……。
妻　（嬰兒を抱いて、緣側に立つて來る）
彼　……むづかしいなア！
妻　難かしいか知ら。
彼　むづかしいさ。喧嘩がむづかしいや。

妻　喧嘩のたねを考へついて?

彼　まだゞ。そいつが中々……。

妻　何かいゝたねはないか知ら。

彼　喧嘩つて云ふやつは、どうも古くさいからなアー

妻　……。

彼　……。

妻　でも……割に書き易いテーマでせう?

彼　書き易くはないよ。ちつとも。

妻　だつて「私戯曲」ぢやありませんか。自分を書けばいいんですもの。

彼　だからむづかしいのだ。……「私小説」なら譯はないがな。

妻　さうか知ら。

彼　……。

妻　……さうね。ドラマだからな。

彼　(ふと嬰兒を見る。やゝ間。立ち上つて)　ちよいと貸して見な。

妻　抱くの?

彼　(嬰兒を抱きとる)

妻　大丈夫?　落しちや大へんよ。

彼　ふゝゝゝ。輕いもんだなあ!

妻　でも日ましに目方がついて來るものね。おそろしい位よ。

彼　……。(嬰兒の顔を見てゐる)

妻　だん〳〵重くなるわ。

彼　輕くなつたらことだ。

妻　……。

彼　おい。

妻　え?

彼　一體これは起きてゐるのか。寢てゐるのか。

妻　寢てゐるのよ。眼をつぶつてゐるぢやありませんか。

彼　眼をつぶつてゐれや寢てゐるのか。

妻　きまつてゐるぢやありませんか。

彼　ふうん。

妻　眼をつぶつて起きてゐるものがあるもんですか。

彼　ぢやしよつちゆう寢てゐるんだな。

妻　さうでもないわ。

彼　でも眼をあいてゐるところを、おれは見たことがねえ。

妻　まさか。盲目ぢやあるまいし。

彼　いや、本當だよ。……大きいか、小さいか。

妻　何が?

彼　こいつの眼さ。

妻　さうね。まあ大きい方ね。どつちかつて云へば。

彼　ふうん、ぢやお前に似たんだな。

妻　口元はあなたそつくりよ。
彼　さうか。
妻　（嬰兒の顏を指しながら）この頰のところから、耳の恰好（かくかう）まであなたそつくりだわ。
彼　嘘つきやがれ！
妻　あら本當よ。訊いてごらんなさい。
彼　誰に？　赤ん坊にか。
妻　みんながさう云ふわ。似てるつて！
彼　似てゐて仕合せよ。似てゐなかつたら、喧嘩のもとだ。
妻　冗談のけて本當に似てゐるのよ。あなたに。
彼　もう分つたよ。
妻　矢張り男だからだわね。
彼　……。
妻　でも不思議なものね。親子なんて。
彼　たしかにおれの子だよ。安心しろ！
妻　あらいやだ！　馬鹿にしてるわ！
彼　だつてあんまり念を押すからよ。
妻　うそよ！　たゞの話よ。
彼　それにしちやア丁寧すぎらア！
妻　……。
彼　……。
妻　よく寢てゐるわ。

彼　……。
妻　寢る方がいゝんですつてね。これ位の時分は。
彼　……。
妻　……。
彼　おい。
妻　え？
彼　ポーンと放（はふ）つて見ようか。
妻　何を？
彼　こいつを。
妻　何處へ？
彼　さうだね。まあこの庭へでも。
妻　（顏色を變へて、慌てゝ嬰兒を抱きとる）
彼　いやか。
妻　……。
彼　ちよいとやつて見たいんだがな。ポーンと！
妻　（怖ろしげに彼を見る）
彼　いやかね。お前。
妻　本當に神經衰弱だわ。あなた！
彼　……。
妻　ひどい神經衰弱だわ！
彼　……。
妻　あゝこはい！　（嬰兒を抱いて身慄ひする）

彼　（憂鬱に縁側へ坐り込む）

（やゝ間。）

（玄關の方で訪ふ聲がする。）

妻　（嬰兒を抱いたまゝ立ち上つて）誰でも斷りますよ。留守だつて。

彼　……。

妻　いゝでせう？

彼　うむ。

妻　（去る）

（やゝ間。）

（妻、出て來る。）

妻　催促よ。出來てゐるだけ下さいつて。

彼　世界社か。

妻　えゝ。

彼　……。

妻　どう云ひませう？

彼　あしたの午前中に速達で送るつて。

妻　あしたの午前？　大丈夫？

彼　うむ。

妻　書けて？

彼　書けるから送るんぢやないか。書けないものがやれるか。馬鹿！

妻　だからそれまでに書けて、と訊くのよ。

彼　お前が雜誌社か。

妻　……。

彼　さう云つて歸せ！

妻　（默つて去る）

（やゝ間。）

（妻、出て來る。）

妻　出來てゐるだけ載いて行くつて、動かないのよ。

彼　……。

妻　ねえ。

彼　……今、これを持つて行かれては困るから、あした一緒に送るつて云へ！

妻　ふゝゝ。どれを持つて行かれては困るの？

彼　……毆るぞ！　貴樣！

妻　（急いで去る）

（やゝ間。）

（妻、出て來る。）

妻　もう一軒行つて、歸りに寄りますが、それまでに。

彼　（大喝）馬鹿！（すた〳〵去る）

妻　（呆れて見送る）

（やゝ間。）

（彼、出て來て、直ぐ書齋の机の前に坐る。）

妻　歸つて？
彼　……。
妻　(嬰兒を寢かせて、裁縫を始める)
彼　おい、茶をいれろ！
妻　はい、珈琲(コーヒー)にしませうか。
彼　……。
妻　たゞのでよござんすか。
彼　……。
妻　(立つて、火鉢の傍に行く)　あゝぬるい！　(火を起しなどする)
彼　(ペンを持つて、少し書き出したが、直ぐつかへて考へ込む。やゝ間。立ち上つて緣側へ出る)
妻　(珈琲の支度をしながら、時々不安氣に彼の方を見る)
彼　(緣側を行つたり來たりする。時々嬰兒の方を見る)
(やゝ間。)
妻　(珈琲をいれる)　はいりましたよ。珈琲。
彼　……
妻　あつちで上るでせう？　(机の上へ持つて行く)
彼　(無言のまゝ步き續ける。次第に跫音(あしおと)が高く急速になる)
妻　(裁縫を始めながら)　靜かにして下さいよ。坊やが寢てるんだから。
彼　(かまはず步く)
妻　そこでさうチラ〳〵されちや困つちまふ！
彼　……。
妻　ねえ、あなた。
彼　何だ？
妻　向ふへ行つて下さいよ。机の方へ。
彼　……。
妻　さめちまひますよ。珈琲が。
彼　……。
妻　折角よく入つたのに。
彼　おい！
妻　何です？
彼　そいつをつれて、お前何處かへ行つてくれないか。
妻　え？
彼　……。
妻　何ですつて？
彼　氣になつて仕樣がない！
妻　何が氣になるの？
彼　赤ん坊がよ。
妻　まあ！
彼　ボーンとやつて見たいんだ！
妻　まだそんなことを！

彼　……。（ちつと嬰兒を眺める）
妻　（急いで嬰兒を抱き上げる）
彼　（矢張り嬰兒を見詰めてゐる）
妻　（恐ろしげに嬰兒を抱きしめて、奥へ行きかける）
彼　おい、何處へ行くんだ？
妻　何處へも行きません。
彼　ならこゝにゐろ！
妻　……。
彼　ちよいと抱かして見ろ、おれに。
妻　いやです！
彼　まア抱かせろ！
妻　いやですよ。
彼　……ボーンとやらないから貸せ。
妻　いけません！
彼　貸せと云ふのに！　（近寄る）
妻　いやです！　いけません！
彼　それはおれのだ。おれに返せ！
妻　何を云つてゐるんです、あなたは。
彼　おれの子供だ。おれにくれ！
妻　……。
彼　さ、よこせ！　（つめ寄る）
妻　（逃げるやうに行きかける）

彼　待て！　（妻の肩をつかまへる）
妻　あなた！　（ふり放す）
彼　何處へ行くんだ？
妻　（顔色を變へ、必死に）　坐つて下さい、坐つて。
彼　坐つてどうするんだ？
妻　落付いて下さい。
彼　落付け？
妻　氣を靜めて下さい！
彼　おれは氣違ひぢやないぞ！
妻　一體どうしたんです？　どうしてそんな急にへんなことを。
彼　何がへんだ？　何もへんぢやない！
妻　さ、坐りませう。ね、坐つてお話しませう。（坐る。途端に嬰兒が泣き出す。再び立つてゆすぶる。中々泣きやまない）
彼　おれが默らしてやらう。貸してごらん。
妻　（坐つて、嬰兒に乳をのませる。泣きやむ）
彼　（妻の背後（うしろ）にちつと立つて、見下ろしてゐる）
妻　（彼の樣子が隙もあらば嬰兒を奪ひ取らうとしてゐるやうに感じて）　あなた、後生だからあつちへ行つて下さい。机の方へ。
彼　何故こゝにゐてはいけないんだ？

妻　何故でも……。

彼　そいつはをかしいな。

妻　（半分泣きながら）私、こはい！

彼　こはい？

妻　こはい！　あつちへ行つて！　あつちへ！

彼　……。

妻　（袂で顔を被つて、しく／＼泣く）

彼　……おれもこはい！（急いで縁側へ出る）

（やゝ間。）

彼　おい。

妻　……。

彼　その赤ん坊をおれの眼につかない處へしまつてくれ！早く……（鋭く）おい！

――幕――

（大正十三年十一月作）

壺坂（一幕）

澤市
お里
その稚兒

壺坂寺のほとり。彼等のすまひ
　春の日。夕ぐれ

お里がしかけてゐた裁縫を片付けてから、あたりを掃き出しなどしてゐると、寢かしてある稚子が眼をさまして泣く。

お里　おや、おつきしたの？　よし〳〵。今直ぐ……。ちよいと待つて下さいね。（片付け終つて坐りながら）さアいらつしやい。（稚兒を抱き上げて乳をのます）

稚兒　（泣きやむ）

お里　（稚兒の頭を撫でながら）おつむがこんなに伸びて……。あしたねんねしてゐる時に、剃つて上げませうね。

（やゝ間。）

（澤市が杖でさぐりながら外から歸つて來る。もちろん盲目である。綺麗に剃つた頭からなま〳〵しい血が少し垂れてゐる。）

澤市　（門口から）お里。

お里　あゝお歸りなさい。

澤市　………。

お里　今日はゐなかつたやうですね。

澤市　何が？

お里　あのいつも吠える犬が。

澤市　あゝ犬か。うむ、犬はゐなかつたけれど……。（上がる）

お里　……どうかしたのですか。

澤市　頭を少し……。

お里　頭を？……あら血が出てゐますよ。どうしたのです？

澤市　あの坂の下で蹴つまづいてね。

お里　あぶない！（紙で血を拭いてやる）

澤市　よろけたはずみに樹の枝でひつかいたのさ。

お里　まあ！　痛さうだ。何か……

澤市　もう血はとまつてゐるだらう？

お里　えゝ、とまつてはゐますけれどね。何か膏藥を……。

澤市　血さへとまればいゝよ。

お里　でも……。（立つて、戸棚の中を探しながら）痛む

でせう？ まだ。
澤市 うむ、けれどこれ位は仕様がない。
お里 ありました。（膏藥を出して來て） さ、これを貼つておきませう。
澤市 （默つて頭を突き出す）
お里 かなり大きい傷ですよ。（白い四角な膏藥を貼る）
澤市 （膏藥をおさへながら） さうかい。
お里 ……觀音さまのお婆さんは今日は出てゐましたか。
澤市 茶みせのかい？
お里 えゝ。
澤市 さあ、どうだつたかな。
お里 聲をかけませんでしたか。
澤市 うむ。
お里 ではまだ休んでゐるのか知ら。
澤市 病氣ださうではないか。
お里 えゝ。……ひとりで不自由だらうに。
澤市 ………。
お里 ……さ、坊や、もういゝでせう。
澤市 何だ、起きてゐるのか、坊は？
お里 母さんご用があるの。
澤市 わたしがお守してゐてやらう。どれ、お出し。（手を出す）

お里 寢かしておきませう。直きだから。（乳房を離して寢かせる）
稚兒 （泣く）
お里 あら又！
澤市 よし／＼、おいで。父さんがだつこして上げよう。
お里 （稚兒を抱き上げながら） この頃は惡い癖で、横にすると直き泣くの。
澤市 さ、父さんだ。父さんのとこへおいで。
お里 （稚兒を渡す）
澤市 （抱きとつて） あゝ來たか／＼。うゝよし／＼。
お里 坐つてゐて下さいよ。あぶないから。
澤市 （半分は稚兒をあやしながら） あゝいゝとも／＼。
お里 父さんのお守はあぶなくつて、眼がはなせない。（奥へ去る）
澤市 ……坊やはいゝ子だねんねしなア、坊やのお守はどこへいたア、あの山越オえて里へ……。
稚兒 （むつかる）
澤市 おゝさうか。いやか、よし／＼、では高い／＼してやらう。（稚兒を高く差し上げて） ほウら高い／＼。高い高い。
（お里が干し物を取込んで、かゝへて出て來る。）
澤市 高い／＼。坊は高いなア！

お里　あら！　又そんな手あらなことを！
澤市　坊は高いぞ！　そら父さんよりも高い。
お里　よして下さい、あぶないから。
澤市　あぶないものか、なア坊や。
お里　いけませんよ。手がすべつたらおつこちるぢやありませんか。坊やが。
澤市　（稚兒を下におろして）やかましい母さんだな。
お里　お守して下さるなら、坐つてぢつと抱いてゐなければ駄目ですよ。
澤市　ぢつとしてゐると退屈して、直き泣くのだよ。
お里　（洗濯物をたゝみながら）そしたら膝の上で、靜かにゆすつてやれば……。
澤市　さうかい。（あぐらの間に入れて、稚兒の兩脇をおさへながらはずませる）よい〳〵よいと。
お里　まあそんな。もつと靜かに。
澤市　あゝよい〳〵と。どうだ、坊や、面白いだらう。
お里　なにが面白いものですか。
澤市　面白いとも。なア坊や。あゝよい〳〵よいと。
お里　あんまりさうすると吐きますよ。お乳を。
澤市　大丈夫だ。坊は強いんだ。あゝよいよい〳〵。あゝよい〳〵と。
稚兒　（聲をたて、笑ふ）

お里　なまくらな、笑つてゐますよ。
澤市　さうか、笑つてゐるか。ふゝゝゝゝ。うれしいのだな。あゝよい〳〵、あゝよい〳〵と。
稚兒　（笑ふ）
お里　まああんなに……。いやな坊や。
澤市　笑つてゐるのかい？
お里　えゝ、あら、あんなにのどを鳴らしてよろこんで……
澤市　あゝよい〳〵、あゝよい〳〵。
稚兒　（笑ひ續ける）
お里　もういゝ加減でやめないと、又しやつくりが出て、苦しいから。
澤市　あゝよい〳〵、あゝよい〳〵。（お里に）笑つてゐるかい？
お里　えゝ、父さんの顏を見ながら、一生懸命に笑つて……
澤市　え、わたしの顏を見て……？　さうか、どんな顏して笑つてゐるのだい？
お里　可愛い顏して……まああの嬉しさうな笑ひやう……
澤市　さうかい、そんなにうれしさうな顏して……。あゝよい〳〵。あゝよい〳〵と。ねえお里。
お里　え？
澤市　可愛い顏と云ふのは一體、どんな顏なのだい？
お里　どんなと云つて……。

澤市　……（稚兒に）坊やには父さんの顔が分るのだな。え？　見えるのだね。……ふゝゝゝ、仕合せな奴だな！

稚兒　（むつかる）

澤市　おゝよし〱。ではそら、よい〱〱、あゝよいよい〱と。

――幕――

（大正十四年一月作）

女よ、氣を付けろ！（一幕）

講演者
夫人
青年
紳士
車掌
（講演中の人物）

黒幕――少し右手寄りに「若き婦人へ」と演題を書いた細長い紙が、掲示臺に貼つてある。

講演者が出て來て、お辭儀してからポーズをとる。

講演者　さて皆さん。今日は「若き婦人へ」と云ふ題目でお話しいたしたいと存じます。本來ならば「早晩起るべき犯罪上の現象に就て若き婦人へ」と、かう申したいのでありますが、それではあまり長過ぎやゝこしいから、もつと簡短にしてくれといふ司會者からの話なので、ではよろしいやうに頼むと答へておいた處、たゞ今見ますと、（ちよいと掲示板を見て）「若き婦人へ」となつてをります。これでも別に間違つてはをりません。しかしかうして見ると、何だか大へん廣汎な問題で、若き女性全般論のやうにも受取れますが、實は決してさうではございません。たゞ今も申し上げた通り、話の中心は極く一小部分のことで、三十分もごしんぼう下さればよろしいかと思ひます。（時計を出して見る）えゝ……そこで……近頃は文化と云ふ言葉が非常に流行してをります。昔は、明治初年頃には文明開化と申しまして、これが又大へんはやつた。何でも彼でも文明開化、文明開化でなければ夜も日も明けなかつたのでございます。しかるにそれが大正の今日では、その文明開化の中二字を捨てゝ、文化と云ふ言葉に縮まつた。矢張りこれも一つは時勢の推移で、私のたゞ今の演題のやうに、忙がしい世の中に長たらしいやつは不便だ、といふ譯で、文明開化を短縮して文化と變形したのであらうと思ひます。勿論意味は同じことでありますが、成程妙なもので、文明開化と云ふと丁髷の明治初年らしい氣がするし、文化と云ふとオールバックや耳かくしを聯想します。そこでこの文化ですが、近頃は又一層、文化々々で、たとへば文化生活、文化住宅、文化食堂、文化燒、これは今川燒で……。それから文化髷、たしかそんな名前の束髪もあるさうで、これは皆さまの方が、おくはしい筈と思ひますが、斯様に町の廣告樂隊みたいに、何でも彼でもブンカ／＼ドン／＼で

……いえ、しやれではございません、實際の話で……。ところが最近、つい四五日前のことでございます。私の友人の一人が紐育に行つてをりますが、そこから時々あちらの新聞を送つて來てくれる。四五日前にも一束屆きましたので、食後ぼんやりひろげてをりますと、ふと「列車內の殺人」と云ふ三面記事に眼がつきました。列車中の殺人は既に數年前、日本にもあつた。尤も犯人はまだ捕縛にならぬやうですが、今日では別に珍らしいことではない。しかし私はその時、何氣なくその記事を讀んで見ますと、甚だ面白い。と云つては語弊がありますが、ちよいとその殺人犯人の心理に、外國人らしい皮肉な惡戯があつたのを、私は大へん興味あることに思つたのであります。しかしこれは、かう云ふ犯罪現象は、亞米利加ばかりではない、佛蘭西にも英吉利にも、或は獨逸にも既に行はれてゐることかも知れないのですが、而も何事も文化ばやりの日本現在の社會狀態から鑑みまして、我が日本內地にも早晩必ず起るべき事件であらうと考へたのであります。それで今日の講演を幸ひ、この話を主眼として申し上げ、且つ皆さまご婦人の方の、殊に若いご婦人方の御注意を喚起したい、自警精神を涵養して戴きたい、と願ふ次第に外ならぬのであります。（時計を出して見る）大へん前置きが長くなりました。ではこれからその新聞記事のお話をいたします。少時ご清聽を……

（講演者、一禮して去る。）

（同時に黑幕が兩方に開くと、進行中の列車の二等室の片側が現れる。濃藍色のクションには右の端に五十位の洋服の紳士、白いチョッキ、眞中に三十前後の夫人。左の端に二十六七の青年。洋服。）

（外は闇の深夜。）

紳士　（新聞を見てゐる。傍に手提鞄がある）

夫人　（雜誌を見てゐる。傍に手提袋がある）

青年　（煙草を喫つてゐる）

（やがて或る停車場に着く。窓の外に驛夫の「なりを、なりを」と云ふ聲が聞える。物賣りの聲が聞える。乘降者の聲や、履物の音が雜然と聞える。）

夫人　（雜誌を膝において、氣が付いたやうに窓の外を見る）

青年　（窓の外を見てゐる）

夫人　（青年に）あのこゝは……？

青年　折尾です。

夫人　あゝ折尾。（再び窓の外を見る）

（やがてプラットホームで發車のベルが鳴る。汽笛が鳴る。機關が一層高く響く。發車。）

夫人　（窓から顏を離して、腕時計を見る。おや！と云つ

た表情。耳にあてゝとまつてゐるのが分ると、青年に）
失禮でございますが、今、お時計は……？

青年　（時計を持つてゐないらしく）今、停車場のが十一時五十分でした。

夫人　十一時五十分。（時計を卷きながら）どうも有難う……。

青年　（紳士の方を偸み見る）

夫人　さういたしますと、もう博多は直きでございますね。

青年　えゝ、もう一時間ばかり。

夫人　でございますね。

青年　……博多で降りるんですか。

夫人　（馴々しき微笑）いゝえ、ではございませんけれど。

青年　（夫人の微笑に全く無關心で眼を離す）

夫人　……長崎までおいでになるのですか。

青年　え？　（曖昧に）えゝ。

夫人　長崎がおくにでゐらつしやいますの。

青年　え、いや、さうぢやないんです。

夫人　私、一二度參りましたが、いゝ處でございますね。長崎は。

青年　えゝ。中々……。

夫人　（やゝ手持無沙汰に）東京でゐらつしやいますの？お宅は。

青年　えゝ、東京です。

夫人　お勤めでございますか。

青年　え？

夫人　お勤めではございませんの？

青年　えゝ、別に。

夫人　ではまだ御在學中でゞも？

青年　えゝ、まだです。

夫人　まあさう……。法科でいらつしやいますか。

青年　え？

夫人　法科でいらつしやいますか。

青年　ホーカ？

夫人　えゝ。

青年　（口の中で）ホーカ……。あゝ法科ですか。

夫人　はア。（ほゝ笑む）

青年　いえ、ぶ、文科です。

夫人　文科！　まあようございますこと！　ご專攻は？

青年　は？

夫人　ご專攻は？

青年　あゝ親爺ですか。

夫人　いえ、ご專攻と申し上げるのですよ。

青年　あゝゴセンコオ。（困る）

夫人　はア。

青年　あてゝごらんなさい。
夫人　（微笑）あてゝ？……さア、當りますか知ら。……さうですねえ、佛文科ですか。
青年　（慌てゝ）えゝさうです。さうです。
夫人　東京でございませう、勿論。
青年　えゝさうです。勿論。
夫人　あら、では私の親戚のものとご同窓でいらつしやいますわ。
青年　（ギクリとして）あゝさうですか。
夫人　勝見と云ふのをご存じでゐらつしやいませう？
青年　カツミ？
夫人　はア、勝見高雄。
青年　（困つて）さア、ちよつと思ひ出せませんが。
夫人　ご卒業はいつでございますの？
青年　僕ですか。
夫人　はア。
青年　さア、落第ばかりしてゐますから。
夫人　まあそんなご謙遜なさらないだつて。
青年　まるで行つたことはないんです。學校へなんか。
夫人　どなただつてさうですわ。親戚の、私の甥なんかも矢張り殆ど出ませんの。
青年　………。（指先に煙草をつまんで、もちもちしてゐる）
（紳士は新聞を膝に落して、睡つてゐる。）
夫人　どうぞおかまひなく。私も戴きますから。（手提袋からやよひを出して啣へ、吸ひ付けたあとのマッチを青年の方に差し出す）
青年　やア、これアどうも。（喫ひつける）すみません。
夫人　（マッチを捨てる）
青年　（故あり氣に紳士の方を偸み見る。寧ろ絶えず紳士の方に氣をとられるのを、ぢつと自制してゐる風である）
夫人　……夜汽車つて、本當に……。
青年　（無意識に）えゝ。
夫人　お好きですの？　旅行は。
青年　えゝ、好きです。
夫人　私も旅行は大好きなんでございますけれど、いつも忙がしい旅ばかりしてゐて……。
青年　はア。
夫人　のんきに好きな處を歩いてみたら、さぞよろしからうと思つて……。
青年　さうですね。
夫人　いつもいつもこんな氣ぜはしい旅ばかりで本當に……
青年　どちらへ？　これから。
夫人　上海へ參りますの。宅があちらにありますものです

から。

青年　はア。

夫人　いやでございますわ。上海なんて。

青年　どうして？　いゝぢやありませんか。上海なら。

夫人　ちつともいゝことなんか……。早く內地に落付きたいと思ふんでございますけれど、矢張主人の任地だもんですから、さうもまゐりませんし。

青年　はア。

夫人　第一、日本人と見ると、馬鹿にしてましてね。あちらの人達が。

青年　さうでせうね。

夫人　いけませんわ。何かにつけて不愉快で。

青年　時々お歸りになるんですか。こつちへは？

夫人　はア、子供がひとり東京にをりますので。

青年　……………。

夫人　小學校のことですから、あちらでもよろしいんですけれど、矢張り何ですか、氣のもんでしてね。三田の塾の方にやつてありますんですよ。丁度私の實家がその近處だもんですから。

青年　はア。さうですか。

夫人　今度は又、父が病氣で、見舞かたがたちよつと。

青年　それはそれは。それでもう……？

夫人　はア、到頭あなたねえ！（黯然とする）

青年　お亡くなりになつたのですか。

夫人　はア。

青年　それやどうも……。

夫人　でももう今年七十九の高齡ですから。

青年　でも矢張りまだ……。

夫人　それやまあいくら年をとりましても、親のことでございますから。

青年　さうですとも。

（やゝ間。）

夫人　（ちよつと窓の外を見て）さつきからのべつに走つてをりますのね。

青年　汽車ですか。

夫人　えゝ。

青年　大方このまゝ直行でせう、博多まで。

（車掌が出て來る。）

車掌　どなたもご面倒ですが、乘車劵を拜見いたします。

（紳士の傍に歩み寄り）もしもし……もしもし。

紳士　（眠つてゐる）

車掌　もしもし。乘車劵を拜見いたします。

紳士　（うつすら眼を開く）

車掌　乘車劵を……。

紳士　う……?
車掌　ご面倒ですが乘車券を拜見いたします。
紳士　うむ。(洋服の上着のポケットを探し、次いで、チヨッキのポケットを探して乘車券を出して見せる)
車掌　(手にとつて、一見してからペンチを入れ、恭しく返す)
紳士　(受けとつて、再び元に納める)
夫人　(帶の間から乘車券を出して、指先きで弄んでゐる)
車掌　(夫人の前に來て)　恐れ入ります。(乘車券を手にとり、一見してペンチを入れて返す)
夫人　(再び帶の間に挾み込む)
青年　(指先きに乘車劵を挾んで出しながら、車掌の來るのを待つてゐる)
車掌　(青年から乘車券をとり、同じやうにペンチを入れて)　有難うございます。(返してから去る)
青年　(紳士の方を偸み見る)
紳士　(葉卷に火をつけ、一と口ふかしたきり指に挾んだまま腕組みして、再びうつらうつらしかけてゐる)
夫人　長崎のどちらへいらつしやいますの?
青年　別にまだ……何處と云つて。
夫人　あら!　では本當のお遊び?
青年　えゝ、まあ……。
夫人　まあ、ようございますねえ!　お羨ましいこと!
青年　いやア、別に……。
夫人　(妙に微笑して)　では……丸山あたりにご逗留?
青年　丸山?
夫人　えゝ。
青年　そんな處へは行きません。
夫人　いらつしやいましよ。どうぞ。
青年　知らないんです。まだそんな處は。
夫人　そんなにお隱しなさらないだつて……。
青年　いえ、本當です。話には聽いてゐますが……。
夫人　話に聽いてゐらして、お出かけなさらないなんてことが……。お若いくせに……、
青年　でもまだ長崎は始めてゞすから。
夫人　だから今度行つてごらんなさいましよ。それや賑かな處ですから。
青年　奧さん、ご存じですか。
夫人　えゝ、知つてゐますわ、丸山公園位!
青年　ぢやご案内を願ひませうか。
夫人　私に?
青年　えゝ、いやですか。
夫人　(微笑)　さア、どう云ふもんでございませうか知ら。
青年　ご迷惑でなかつたら。

夫人　でも私などがご一緒ではかへつて……。
青年　………。（紳士の方を偸見る）
夫人　……私。筑前丸に乗りますのよ。あしたの。
青年　筑……前……丸？
夫人　はア。横濱でエンゲーヂしてまゐりましたの。船室（キャビン）を。
青年　何時（なんじ）ですか。出帆は？
夫人　午後四時。
青年　午後四時！
夫人　……間（ま）がありませんわ。
青年　一と船遅らせるわけには……？
夫人　でも筑前で歸ると云つておきましたから。宅の方へ。
青年　では一と航海あとの筑前と間違つたと云ふことにして……？
夫人　（笑つて）そんな嘘を……。
青年　いけませんか。
夫人　惡い方ねえ！
青年　さうですか。
夫人　……もう一日早いとねえ！
青年　（とぼけて）何が？
夫人　え？（ちよいとまごついて）いえ……。
青年　もう半日あればねえ、せめて……。

夫人　（復讐的に）何が？
青年　出帆が明後日（あさつて）の朝だと丁度……。
夫人　若しくはこの汽車が今頃、長崎に着いてゐると……。
青年　うむ、そしたらきつとお目にはかゝれなかつたでせう。
夫人　私と？
青年　えゝ。
夫人　どうして？
青年　私が乗り合はさなかつたでせうから。
夫人　乘つたと假定してよ。
青年　カテイ？
夫人　えゝ、假定して。
青年　（呟く）分らねえ！
夫人　長崎に永くご滯在？
青年　いゝえ、二三日。
夫人　それから？
青年　それからとは？
夫人　それから何處へゐらつしやるの？
青年　それから……鹿兒島。
夫人　鹿兒島？
青年　えゝ。
夫人　鹿兒島の何處へ？

青年　別にまだ何處とも……。
夫人　隨分出鱈目ね。
青年　出鱈目ぢやありません。
夫人　出鱈目よ。
青年　さうか知ら。
夫人　(ちよつと紳士の方を一瞥してから、青年の方へ少し寄つて)ねえ、何と仰有るの?
青年　え?
夫人　お名前。
青年　島田。
夫人　島田?
青年　いえ、島、島澤です。
夫人　島……ザワ?
青年　えゝ島澤です。
夫人　それから?
青年　島澤ですよ。
夫人　いやな方! それは苗字でせう。
青年　あゝ名前ですか、名前は……武雄つて云ふんです。
夫人　武雄さん? まあ可愛いお名だこと!
青年　島澤武雄です。
夫人　川島武雄さんと一字違ひね。
青年　さうですか。
夫人　さうですかつて、さうぢやありませんの。
青年　(曖昧に)あゝさうですね。
夫人　おいくつ?
青年　二十八です。
夫人　八。まあお若い!
青年　奥さんは?
夫人　私……さア、いくつ位に見えまして?
青年　(率直に)三十……二? 三?
夫人　…………。
青年　(氣が付いて)と云つたのは冗談です。本當は……矢張り二十七八でせう?
夫人　さう見えて?
青年　見えますとも。實際!
夫人　なか／＼烱眼(せいがん)ね。
青年　えゝ、青眼です。青眼にかまへて見ないと、女の年つて云ふものは。
夫人　いやな方! しやれてゐるわ
青年　(眞面目に)しやれぢやない、本當ですよ。
夫人　(釣られて)本當にその位に見えて? 私が。
青年　えゝ、當つたでせう?
夫人　えゝ
青年　青眼でせう?

夫人　なに、セイガンつて？
青年　青眼ですよ、青眼。
夫人　分らない！
青年　あなたが今云つたぢやありませんか。
夫人　私が？
青年　えゝ、青眼つて。
夫人　セイガン、なんて云ひはしない。烱眼よ。
青年　え？
夫人　烱眼！
青年　あゝケイガンか。（分つたやうな顔をする）
夫人　ぢや同じ年ね、あなたと私と。
青年　さうですね。同じ年だ。
夫人　（更に少し青年の方にすり寄つて）なつかしいわ、こんな旅先きで。
青年　（やゝ氣取つて）かう云ふのを戀と云ふのでせうか。
夫人　まさか！（紳士の方を偸見る）
青年　（同じく紳士の方を偸見る）
紳士　（態度をくづさず眠つてゐる）
（青年と夫人、接吻する。）
夫人　（やゝ青年から離れる）
青年　（手の甲で、夫人に隱してそつと口のまはりを拭く）

夫人　あやまるものよ。あなた。
青年　え、何を？
夫人　私にあやまるのが禮儀よ。あんなことをして。
青年　何てあやまるんです？
夫人　失禮しました。とか何とか。
青年　失禮しました。
夫人　（すましてゐる）
青年　あやまりましたよ。
夫人　聞えてゐますよ。斷らなくたつて。
青年　だつてすまし込んでゐるから。
夫人　それや女ですもの、私は。
青年　ぢや女は默つてゐるものなんですか。
夫人　えゝ、マダムだから。
青年　何故無駄です？
夫人　無駄？
青年　男にあやまらしておいて、女が返事をするのが無駄だと云ふのはひどいですね。
夫人　誰が無駄だと云つて？
青年　あなたが。
夫人　私が？……あなたどこへ耳をつけてゐるの？
青年　だつてあなたは今、無駄ですと云つたでせう？
夫人　いゝえ、云ひませんよ。

青年　云ひましたよ。
夫人　云はないと云ふのに!
青年　剛情だなア!
夫人　マダムと云つたのよ。私は。
青年　マダ……?
夫人　マダム!
青年　あゝマダ……ム。(分つたやうな顏をする)
夫人　あやまりなさい。
青年　又あやまるんですか。
夫人　自分で間違つておいて、人を剛情だの何だのつて。
青年　すみません。
夫人　素直ね、あなた。好きよ!
青年　……………。
夫人　(立上って、席を離れる)
青年　何處へ?
夫人　ちよつと。
青年　何處へ行くんです?
夫人　きまつてゐるぢやありませんか。
青年　何が?
夫人　走つてゐる汽車の中にゐて、何處へ行きやうがあるの?
青年　それを何處かへ行きさうにするから。

夫人　おしもよ。
青年　おしも?……あゝさうか。
夫人　分つて?(去る)
青年　(忽ち鋭い狡い眼をして、夫人の後ろ姿を見送り、やがて紳士の方を見る)
紳士　(眠つてゐる)
青年　(立上つて、紳士の傍に忍び寄り、手提鞄をとる)
紳士　(眼をさまして)おい!
青年　シッ! 騷ぐな!(急いでヅボンの背後(うしろ)のポケットからピストルを出して、紳士の胸に擬する)
紳士　撃つ氣か。
青年　聲を立てれば撃つ。靜かにしてゐろ!
紳士　何を馬鹿な。(鞄を膝の上に取上げる)
青年　出せ! それを。
紳士　あ、あつちへ行け。
青年　(いきなり手を伸ばして、鞄を奪ひとらうとする)
紳士　(堅く抱へて放さない)
青年　これだぞ!(ピストルを向ける)
紳士　(相手を馬鹿にして、泰然としてゐる)
青年　出さないな!……よし!(銃口を堅く紳士の胸元に押付けて撃つ。低い鈍い音)
紳士　(一と聲呻いたきり、仰向きに窓へ首を倒す)

青年　(急いで鞄をあけ、中から紙幣の束を出して、自分の洋服のポケットに入れる。それから紳士の洋服の上着のポケットから紙幣入をぬきとつて、それも自分のに突つ込む。四邊を見廻してから紳士の腕を胸のところに組ませて眠つてゐるやうに見せかける。そしておいて元の席に戻り、腰かけながら手のピストルをヅボンのポケットに入れようとして、ふと傍の夫人の手提袋に眼を付け、急いでその中に入れる。然る後、悠然と腰を据ゑて、煙草をくはへ火をつける)

(夫人がハンケチで手を拭きながら出て來る。)

夫人　失禮!

青年　やア。

夫人　お退屈さま!

青年　なアに!

夫人　なアにはないでせう。

青年　…………。

夫人　ひとりでおとなしくしてゐて?

青年　えゝ、極くおとなしくね。

夫人　それは感心!

青年　(紳士の方を偸見る)

(車掌が出て來て、默つて素通りして行く。)

夫人　あの車掌さんハイカラね。

青年　えゝ。

夫人　立派なフエースね。

青年　えゝ。

夫人　何でもえゝね。あなた。

青年　えゝ。

夫人　(窓の外を見ながら)外はまつくらね。凄いほど眞つくらよ。

青年　(平然と)何處かに人殺しでもありさうだな。

夫人　しんの闇つて、こんな晩のことね。氣味のわるい……

青年　あしたの新聞をご覽なさい。きつと何處かの金持が强盜にピストルで殺されてゐますよ。

(汽車の速力が鈍る。)

夫人　どうして分つて? そんなことが。

青年　何だかそんな氣がする。(立ち上つて帽子を被る)

夫人　どうするの? 帽子なんか被つて。

青年　降りるんです。

夫人　降りる?

青年　うむ、あばよ!(急いで去る)

夫人　(呆然として見送る)

(汽車とまる。)

(窓の外に「はかた、はかた」と云ふ驛夫の聲が聞える。)

夫人（窓の外を見る。勿論青年の姿を探してゐるのであるが、見えない）
（物賣りの聲、履物の音、乘降者の聲などが聞える。しかし眞夜中に近い深夜の淋しいガランとしたプラットフォームである。）
（やがて發車のベル、汽笛が鳴り、機關の音が一層高く響く。發車。）
夫人（しばらく窓の外を眺めてゐる。やがて手提袋を取り寄せて中から煙草を出し、ふと眉を寄せ再び袋の中に手を入れ、驚いてピストルを引き出す。顏色が變る。齒がガチ／＼鳴る。ピストルをクッションに投げ出す。紳士の方を見る）
紳士（白いチョッキに鮮血が滲み出てゐる）
夫人　あつ！（逃走意識で立上る。瞬間どぎまぎして、右へ左へ行きかけて、再びクッションにくづ折れるやうに腰をおろす。體が總體に慄へ出す。遠くからピストルを恐ろしげに眺める。どうしたらいゝか、全く途方に暮れる。恐怖と悔恨と口惜しさと、困憊と——）
（講演者が靜かに現れる。）
夫人　おゝ！（立ち上る）
講演者（ほゝ笑みながら）ひどい目に遭ひましたね。飛んだご災難です。
夫人　おろして下さい、汽車からおろして下さい。
講演者　とても／＼。今走つてゐます。降りられません。
夫人　かまはない、かまはないからおろして。（行きかける）
講演者（おさへて）落付きなさい、まあ落付いて。
夫人　落付いてなんかゐられない。こんなひどい目に遭つて、こんなひどい目に。
講演者　あなたが惡いからです。油斷をしたのと、男を甘く見たのが過ちの基です。
夫人　あゝどうしたらいゝんです！（突伏す）
講演者　いゝあんばいに汽車でよござんした。これが船でしたら、あなたは恐らく貞操まで侮辱されたでせうね。
夫人　秘密にして下さい、お願ひです。一切秘密に。
講演者　承知しました。
夫人　私に嫌疑はかゝらないでせうか。この方（紳士）のことは。
講演者　勿論、拘引されるでせう。
夫人　拘引！
講演者　しかし一時の拘引位で濟めば仕合せですよ。この紳士のやうな目に遭つては、それこそつまりませんからね。
夫人　このピストルをどうしたらいゝでせう？　敎へて下

さい、どうしたらいゝか…………。

講演者　どうもしなくつてよろしい。今に警察から來て、持つて行くでせう。

夫人　口惜しい！　こんなものまで押し付けられて、口惜しい！

講演者　かたきをとつたのですよ。皮肉な奴ですね。

夫人　そんな覺えはありません、かたきなんて、そんな。

講演者　いや、あなたがあんまりあの男を甘く見たものだから、安く扱かつたものだから、その腹いせにいたづらをして行つたのですよ。びつくりさせてやらうと思つてね。困らしてやらうと思つてね。

夫人　いゝえ、私はあの男を決して甘くなんか、安くなんか……。

講演者　では純情だつたのですか。誠意だつたのですか。はゝゝゝ。何いけません、男にもいろ／＼ありますよ。まあこれに懲りて、將來を……。ところで、今、移動警察のものが臨檢に來るでせうから、それまで待つてゐて下さい。動いちやいけませんよ。よござんすか。ではご機嫌よう！

（講演者、前へ出て來る。その背後に黒幕が兩方から迫つて、夫人其の他を閉す。）

講演者　さて皆さん、私の話はこれで終りました。皆さんはあの夫人をどうお考へになりますか、しかし決して嗤つてはいけません、全く一時の氣まぐれだつたのですから……。それにしてもこの一時の氣まぐれと云ふやつ、この浮氣の蟲ほど恐ろしいものはありません、どうか皆さんも、あの夫人の醜態に鑑みて、お氣を付けなさつて下さい。では……。

——幕——

（大正十四年二月作）

主人のない母子（一幕）

未亡人　仲子（卅五歳）
その子　一郎（十四歳）
同　　　咲枝（十一歳）

庭に面した座敷。落付きのある中流家庭の模様。庭の下手に満開の八重櫻が、そろ〳〵散り初める頃になつてゐる。

日曜日の午後。晴れてゐる。
椽側の近くに未亡人仲子が裁縫をしてゐる。咲枝の着物である。その傍に咲枝がお手玉の袋を縫つてゐる。
少し離れて一郎が寝ころんで雑誌を讀んでゐる。
少時みな無言。

咲枝　……母さん。
仲子　なあに？
咲枝　出して頂戴。小豆。
仲子　もう縫へたの？
咲枝　えゝ、三つ出來たわ、ほら！
仲子　まあ随分早い！　細かく縫へて？
咲枝　見て頂戴よ。ほら、こんなよ。これでいゝでせう。……ねえ母さんてば。
仲子　どれ拜見。……おや、上手ね。これ母さんのして上げたんでせう。
咲枝　うそよ。母さんのこれよ。それ私のだわ！
仲子　なか〳〵上手ね。あなた！　あら、これや駄目よ。これ一つは落第ね。
咲枝　どうして？
仲子　どうしてつて、こんなに粗くつてはみんなこぼれて了ふわ、小豆が。
咲枝　あら、何ぼ何でもまさかそんな小さな小豆つてありやしないわ。そこからこぼれるやうな小豆つて！
仲子　ふゝゝゝ。そんなおなまさん云つて、こぼれたらどうして？
咲枝　こぼれやしないわよ。
仲子　こぼれますよ。駄目々々。直さなくては。
咲枝　いやな母さん。そつちやふわねえ！
仲子　何です、そつちまふなんて！　何處から聽いて來たの？　そんな言葉！
咲枝　ちやいゝわ。私、自分で出して來るから。（立ち上

ろ）

仲子　いけませんよ。

咲枝　どうして？

仲子　あなたには出せません。

咲枝　うめやに出して貰ふわ。

仲子　まあお待ちなさい。母さんが今、出して上げるから。

咲枝　ぢや早くよう！　ねえ母さん。……ねえ。

一郎　咲ちやん、うるさいな。

咲枝　……ねえ母さんてば！

仲子　少しお待ちなさいと云ふのに分らないの。

咲枝　だつて……。

仲子　いやな方ねえ！　それを直さなけれや上げません。

咲枝　どれを……これ？

仲子　えゝ。

咲枝　どうして？

仲子　又どうしてつて……。そんな粗い縫目の中へ入れたつて、お手玉にならないぢやありませんか。

咲枝　さうか知ら！

仲子　ふゝゝゝ。

咲枝　何笑つてゐるの？　母さん。

仲子　あなたがおなまさん云ふから、をかしいのよ。

咲枝　（咲枝仕方なく袋をほどいて縫ひ直す）

一郎　……母さん。

仲子　はい。

一郎　僕に何か頂戴。

咲枝　あら私にも！　母さん、私にもよ。

仲子　（咲枝に）上げますよ。何です、その云ひやうは……。もつと靜かに仰有い！

咲枝　…………。

仲子　いつも云ふのに、ちつとも分らない！

咲枝　…………。

仲子　一郎さん、今、お時計何時？

一郎　きつかり三時。

仲子　まあ、もうそんなになるの！　（立つて隣室へ去り、やがて盆に菓子を持つて來て、半分を紙ごと針箱の上に置き）咲枝さん、あなたのこれですよ。（殘りを盆のまま一郎に與へて）そんな風をして上がつちやいけませんよ。一郎さん、坐つてお上がりなさい。

一郎　（坐り直しておもてを眺めながら菓子を食べる）

仲子　咲枝さん。

咲枝　なあに？

仲子　うめやに云つてね。お豆腐屋さんが來たら呼んで頂戴つて。

咲枝　はい。

一郎　お豆腐　僕いやだ！
仲子　燒いたのならいゝでせう？
一郎　燒いたんだつて……まづいな！
咲枝　うまいわよ。ねえ母さん。
仲子　あなたこの頃、お豆腐嫌ひになつたのね。せんはよく食べたのに。
一郎　………。
咲枝　母さん、出來たわ、ねえほら。今度はいゝでせう。
仲子　ちよつと見せて。……あゝそれなら上等ね。
咲枝　だから頂戴、あづき！
仲子　えゝ上げますよ。
一郎　母さん。
仲子　何です？
一郎　いつお墓詣りするの？
仲子　お墓詣り！……きまつてゐるぢやないの、毎月。
一郎　矢張り十八日？
仲子　えゝ、さうですよ。
一郎　……ぢやもう花は散つて了ふねえ！
仲子　散るでせうねえ。
一郎　……今頃は矢張り咲いてゐるのか知ら。お寺の櫻も。
仲子　それや咲いてゐますとも。なアぜ？
咲枝　母さん、早くよう、ねえ。

一郎　……お寺詣りしようよ。母さん！
仲子　しますよ。
一郎　いつするの？
仲子　だから十八日がご命日でせう。
一郎　もつと早くさ。それまでに花が散つて了ふもの。
仲子　花なんか散つたつていゝぢやありませんか。お寺へお花見に行くんぢやあるまいし。
一郎　うゝん。この花を持つて行つて上げるのよ。お庭の櫻を。
仲子　もうこんなに咲いて了つたもの駄目よ。もつと蕾のうちでなけれやあ……。
咲枝　母さんてば！　あづきよう。
一郎　どうして駄目なの？　母さん。
仲子　持つて行くまでにみんな散つて了ひますもの。
一郎　散らないやうに持つて行けばいゝ。
咲枝　母さん、早くさあ！
仲子　あなたはうるさいのね。何を云つてゐるの？　さつきから。
咲枝　小豆を頂戴つて云つてゐるのよ。知つてゐるくせに、母さんてばいやな母さん。
仲子　うるさい人！（立つて隣室へ去る。やがて紙袋なもつて出て來て）あんまり一ぱい詰めちや駄目ですよ。固

くなつて手が痛いから。
咲枝　え〻。
仲子　兄(にい)さんのお盆を借りて、あの上でおしなさい。
咲枝　（盆を引きよせて、お手玉を拵へる）
一郎　（ぼんやりおもてを眺めてゐる）
仲子　一郎さん。
一郎　え？
仲子　あなたおもてへ少し行つてゐらつしやい。さう遠くへ行かないで。
一郎　………。
仲子　今日は朝から一ぺんも外へ出ないでせう。毒ですよ。うちの中にばかり引つこんでゐると。
一郎　…………。
仲子　どうしたの？　一郎！
一郎　母(かあ)さん、僕、つまんない！
仲子　……だからうちにばかりゐるからつまらないのよ。少しおもてへ行つて運動してごらんなさい。さうすると氣が晴れるから。
一郎　いやだあ！
仲子　こんなにい〻お天氣になるんだつたら、日比谷公園にでもつれて行つて上げればよかつたわね。
咲枝　行きませうか。これから！

仲子　もう駄目よ、遲いから。また今度！
咲枝　ぢや今度の日曜にね。きつとよ。
仲子　え〻、お天氣がよかつたらですよ。
一郎　日比谷なんかつまんない！
仲子　ぢや何處？　動物園がい〻の？
一郎　いやだあ！　動物園なんか幾度行つたつて同じことだ。
仲子　さうね。ぢや何處がい〻でせう。
咲枝　活動！
仲子　活動はいけません！　母(かあ)さん嫌ひよ、活動なんて！
咲枝　……母(かあ)さん、みんな入れたわ。
仲子　さう。
咲枝　縫つて頂戴。こ〻。
仲子　待つてゐらつしやい。
咲枝　また待つの？……待たしてばつかりゐるのね。母(かあ)さん。
仲子　あとで、ね。晩に拵らへて上げませう。そして今は何(ほか)か外のことをして遊びませう。母(かあ)さんもみんなで。ね、それならい〻でせう。
咲枝　え〻、い〻わ。
仲子　ぢやおしまひなさい。母(かあ)さんもお仕事を片付けるから。（仕舞ひかける）

咲枝　何をして遊ぶの？
仲子　何をしませうね。あなた方で考へて頂戴！
咲枝　ご本のお話がいゝわ。
一郎　つまんない！
咲枝　兄さんは何でもつまらない〳〵つて云ふのよ。ねえ母さん、つまりやしない！
仲子　（片付け終つて）さあもう二人ともつまんないだなんて云はずに、面白く遊びませう、ね、さ、何をしませうね？
咲枝　學校ごつこ！
仲子　學校ごつこ？　今日は日曜なのにご勉強ね。
一郎　學校ごつこなんかいやだ！
仲子　ぢや何がいゝの？　一郎さん、云つてごらんなさい。
一郎　…………。
咲枝　鬪球！
一郎　いや！
咲枝　またいやだつて！
仲子　だから兄さんの好きなことをしたらいゝでせう。云つてごらんなさい。
一郎　なんにもすることなんかないや！
仲子　なんにも……。何かあるでせう。あなたの面白いと思ふこと。
咲枝　母さん、母さん、ねえ母さん！
仲子　おそろしい！　あなたは本當にせつかちね。もつと靜かに云つても、母さんにはよく分るのよ。
咲枝　鬼ごつこしませう。
仲子　鬼ごつこ？　……いやねえ。おうちの中では。
咲枝　ぢやお庭で。
仲子　一郎さんは？
一郎　鬼ごつこなんかつまんない。母さん、あれしよう、この間の晩のお父さんごつこ。
仲子　え！
一郎　お父さんごつこしよう。又、僕がお父さんになるから。
仲子　あれは……　晝間はいけません。
一郎　どうして？　どうして晝間はいけないの？
仲子　どうしてゞもいけません。電氣がついてすつかり戸を締めてからでないと。
咲枝　ねえ、さうよ。
一郎　だつて僕、お父さんになりたいんだもの。
咲枝　だつて兄さんはお父さんになつたつて、私は何にもなりやしないんだもの、つまりやしない！
一郎　咲ちやんは咲ちやんでいゝんだ。お父さんがゐた時だつて咲ちやんは矢張り咲ちやんだつたから。

咲枝　そんなら兄さんだつて、兄さんだつたんぢやないの。
一郎　だつて僕は男だもの。だからお父さんになるんだ！
咲枝　つまんないわ、それぢやア。ねえ母さん。
一郎　母さんが死んだら、咲やんが母さんになるんだ。女だから。
咲枝　いやよ、私！
一郎　いやなら見ておいでよ。僕と母さんとでするから。
咲枝　いやよ〱。
一郎　母さん、しようよ。
仲子　そんなにしたいの、あんなことが？
一郎　えゝ、さあやらうよ。
仲子　ぢやしませう。そのかはりあんまり大きな聲をしないでね。そつと靜かによ。
一郎　えゝ、僕、お父さんよ。
仲子　えゝ、ぢやお父さん。
一郎　（威儀を正して）何？
仲子　晩には何を召上がります？
一郎　さうだね。……何を食べよう。
仲子　牛肉になさいますか。
一郎　鳥がいゝね。
仲子　はい。
一郎　食べに行かうか。

仲子　さう度々？
一郎　度々でもいゝさ。その方がうまいもの。
仲子　ふゝゝゝ。なか〱一郎さん。上手ね、お父さんの假色が。
咲枝　母さん、つまんないわ、私！
仲子　まあ待つてゐらつしやい、今、兄さんがお父さんの眞似をするから見てゐてごらんなさい、面白いことよ。
咲枝　面白くなんかないわ。ちつとも。
一郎　おい咲枝、母さんに云つて珈琲をもつて來ておくれ。
咲枝　知らないことよ！　私。
一郎　咲枝！
咲枝　…………。
一郎　咲枝、持つて來い！　珈琲を。
仲子　珈琲ですか、はい、ちよつと待つて下さい、今生憎お湯がさめてゐますから。
一郎　何故、湯位沸かしておかないんだ！
仲子　うつかりしてゐて。
一郎　病人をつかまへて、うつかりしてゐる奴があるか。おれは病人だぞ！
仲子　一郎さん、そんな大きな聲しちやいけないのよ。もつと靜かに。低い聲で。
一郎　だつてお父さんの聲は大きい！

仲子　でももつと小さな聲で云はなきやあ母さんいやですよ。
一郎　いやならよせ！
咲枝　あら、母さんに向つてあんなこと云ふわ、にいさんてば。
一郎　おい咲枝、お前いゝ子だからお父さんの枕を持つて來てくれないか。
咲枝　私いゝ子ぢやないわよ！
一郎　ぢや惡い子、枕をもつて來ておくれ。
咲枝　どうしませう？　母さん。
仲子　持つて來てお上げなさい。
咲枝　はい。（立つて隣室へ行き、やがて一郎の枕を持つて來る）
一郎　有難う！（枕をして仰向けに寢る）おい、なあさん、檢溫器をとつてくれ。
咲枝　あらいやあだ。母さんのことをなあさんだつて！をかしいわ。
一郎　檢溫器をくれ！
仲子　一郎さん、それはおよしなさい、その眞似だけに。
一郎　くれよ！
仲子　いけません！
一郎　くれつたらくれよ。（足をばたばたやる）
仲子　仕樣のない一郎さんね。（立つて、針箱の中からへらを出して來て）はい、檢溫器。
一郎　（へらを脇の下に挾む）藥をのまうか。
仲子　まだ早うございますよ。
一郎　氷が解けたやうだね。生ぬるくなつて來た。
仲子　さうですか。ぢや代へませう。（ちよつと枕をはづして）はい、氷を入れましたよ。（又、枕をしてやる）
一郎　咲枝、お父さんにキヤラメルを一つくれないか。
咲枝　ないわよ、そんなもの。
一郎　おくれよ、一つでいゝから。
仲子　お上げなさい、咲枝さん。
咲枝　ありやしないわ、母さん、私。
仲子　上げる眞似をすればいゝのよ。
咲枝　眞似？……ぢやはい、キヤラメル。
一郎　有難う。うまい。（脇の下からへらを出して、檢溫器を見る風をしながら）フフム！
仲子　どんなです？　平熱でせう。
一郎　八度七分！
仲子　八度七分？　ぢや又少し上りましたね。
一郎　つけておいてくれ。
仲子　はい。（檢溫表に書く眞似をする）
一郎　（咳をする）おい。

仲子　え？
一郎　今年は親爺(おやぢ)の七年目だな。
仲子　さうですね。
一郎　七週忌と云ふのか。
仲子　えゝ。
一郎　法事をするものなんだらう、七週忌には？
仲子　えゝ、しなけれやいけますまいね。
一郎　うむ、まあいゝや、さう一々面倒臭い！　おれのと一緒にしろ！
仲子　え？
一郎　親爺(おやぢ)の死んだのは九月だつたな！　おれも丁度その頃にはいくだらうから、おれの葬式と一緒に親爺(おやぢ)の法事をすれやいゝ！
仲子　…………。
一郎　おれが死んだつて泣くな。見つともない！　いゝか。
仲子　…………。
一郎　部屋住みでも十五萬石松平美濃守の末孫だ。昔だつたら俺でも大したものだ！
仲子　よくそんなことを覺えてゐるのね、一郎さん。
一郎　泣いたつて仕様がない、死ぬものは死ぬんだ！
仲子　およしなさい、もうそんなこと！　母(かあ)さんいや！
一郎　死ぬものはいゝが、殘るものは困るな。……四十になるやならずで死ぬのは、おれも短い壽命だつたが、お前も早い後家(ごけ)さんだな。
仲子　もうおよしなさい！　一郎、くだらない！
一郎　氣の毒だな、子供も可哀さうだし……。
仲子　氣味の惡い人ねえ！
一郎　咲枝……咲枝！
咲枝　…………。
一郎　咲枝はゐないのか。
咲枝　ゐてよ！
一郎　ゐるなら返事をしろ！
咲枝　威張つてゐるわ、兄(にい)さん。
一郎　咲枝、お前あの天井の板が何枚あるか知つてゐるか。
咲枝　知らないわ、そんなもの！
一郎　勘定して見ろ！　何枚あるか。
咲枝　いやよ、面倒くさい！
一郎　みんなで十三枚だ。そら、こつちのはじから一枚、二枚、三枚、四枚、五枚、六枚。あの眞中に魚(さかな)の眼玉のやうな節(ふし)があるだらう、あすこに。あるだらう？　あれが七枚目だ。丁度眞中だ。向ふから數へても七枚目、こつちから數へても七枚目！　ね、さうだらう。
咲枝　（數へる）

一郎　あの黒い節は、まるで一ツ目小僧のやうだな。
咲枝　一ツ目小僧なんて見たこともないくせに！
一郎　……十三枚か。いやな數だな。不吉な數だ。西洋だつたら……成程、西洋館には天井板はなかつたつけな。
仲子　もういゝ加減におよしなさい、そんなことばかり云ふのなら、もう母さんお相手して上げませんよ。
一郎　あの天井の向ふに何があるか見えるかい？……見えまいな。お前等には。
咲枝　見えなくたつて分つてゐるわ。天井の上はお屋根よ。
一郎　馬鹿！　屋根の向ふだ！
咲枝　屋根の外は空よ！　きまつてゐるわ！
一郎　空か！
咲枝　空よ！
一郎　天國だな！
咲枝　天國ぢやないわ、ねえ母さん。
仲子　母さん知りません、そんなこと！
一郎　あゝ又！　又やつて來るぞ！　おい、金盥の用意をしてくれ！　金盥！（胸をおさへる）
咲枝　あら本當！　え、兄さん。
仲子　うそよ。咲ちやん、馬鹿ねえ、あなた。
咲枝　だつて……。
一郎　今度出たらもうおしまひだ。今度喀血したら最期だと思へ！
仲子　一郎、よさないか。お前は！　母さん本當におこりますよ。
一郎　いよ〳〵お別れだな……握手しよう。（片手を出す）
仲子　馬鹿！
一郎　握手しよう！
仲子　馬鹿な眞似はよしなさいと云ふのに！（一郎の手を打つ）
一郎　握手しよう！
咲枝　私としませう！（手を出す）
仲子　およし、咲枝。お前さんまでがそんな馬鹿なことを！
一郎　いゝからしよう！
仲子　たんとそんなことをしてゐらつしやい。母さん何處かへ行つて了ふから。（立つ）
咲枝　あら、私も！（立つ）
仲子　一郎、母さん外へ行きますよ。あなた獨りでさうやつてゐらつしやい。
一郎　…………。
咲枝　行きませう、母さん。
仲子　ろくな眞似はしないのね。本當に……。
一郎　…………。（ぢつと天井を眺めてゐる）
仲子　まだ云ふことをきかないんですか。起きないんですか。

一郎　起きてどうするの？
仲子　ちやんとおしなさい！　坐つて！
一郎　（起き上る）
仲子　少しおもてを見て來ませう。ご門のとこへ行つて。
咲枝　えゝ、行きませう。
仲子　一郎さんもゐらつしやい！
一郎　僕いや！　うちにゐる！
咲枝　ぢや母さん、二人で行きませう。ね、さ、行きませうよ！　母さん！
仲子　（ぢつと一郎を見下ろしてゐる）困つた人ねえ！
（ぺたりと坐る）……それとも……私が惡いのか知ら！
（憂欝な沈默ひろがる。）

――幕――

（大正十四年四月作）

花束（一幕）

この劇の主人公　青年飛行家
その親友　航空兵大尉A
同　B
老紳士
中老紳士
新聞社々員
新聞社長の娘
同　寫眞班員
その他、ボーイ、來賓大勢。

ある大きなレストランの廣間

諸處に煙草皿や灰皿を載せた小卓がまじつて、無數の椅子に埋まつてゐる。四隅に青々した植木鉢を配し、右手に出入口。正面奥は食堂で、折疊式の扉で仕切る。

やゝ少時間。食堂からテーブル・スピーチの拍手が急霰のやうに起る。續いて「佐久間操縦士の健康を祝して乾盃します」といふやうな聲が聞えて、「佐久間英一君萬歲」の音頭で、怒濤のやうな歡聲が繰返される。高らかな談笑などの少時ざわ／＼した空氣の中に、食器の觸れ合ふ音が一齊に起る。やゝ永き間。

二人の燕尾服のボーイが食堂から出て來て、扉を左右に開いて侍立する。燦爛たる大食堂が見渡される。煙草の煙が薄く漂ふ。卓から離れた來賓が徐々に流れ出て來る。その中にこの劇の主人公である青年飛行家が、特に四五人に圍まれながら前の方に押し出されて來る。來賓はフロックコート、モーニング、タキシード、中には羽織袴、又は制服の陸海軍將校などもまじつてゐる。

すつかり食堂から出きると、ボーイが再び扉を閉ざす。來賓は思ひ／＼の姿勢で大抵椅子につく。二三人づゝかたまつて立ち話をしてゐるのもある。皆、華やかな晩餐に滿喫して陶然としてゐる。何處からかかすかに音樂が聞えて來る。煙草の紫煙が、或は活動寫眞の大砲の煙のやうに、或は「民の竈」からのやうに立ちのぼる。

中老紳士　……どうもえらく蒸しますな。今夜は。
老紳士　左樣。……今日は丑の日ぢや。土用の。
中老紳士　二三日前、ちよつと關西へ行つて來ましたが、

あちらも中々烈しうごわすわい。京都なんかは閉口しました。あの夕凪ぎで。
老紳士　さうでごわせう。暑い處ぢや。あそこは。
來賓の一　佐久間君、こゝへ來たまへ。こゝに椅子があいてゐる。椅子が。
來賓の二　こゝにもある。こゝへおゐでなさい。佐久間さん、佐久間さん。
主人公（まご〳〵して）は、有難う、有難う。
來賓の三（主人公の手をとらんばかりに）まあこゝへ掛けたまへ。お掛けなさい。いろ〳〵その……。（にやにや笑ひながら）お話を承りたいから。
主人公（腰をおろす）
（二三人のボーイが盆にリキユールを載せて、來賓の間を勸めて歩く。）
老紳士（ボーイに）何だね？
ボーイ　ウヰスキーと、ペパアミントでございます。
老紳士　ふうん、わしはタンサンがほしいな。
ボーイ　はい、たゞ今。
中老紳士　一つ貰はうか。その黄色い方がいゝ。（リキユールをとる）
老紳士　好きだな。
中老紳士　あなたも何うですか。暑氣拂ひに。
老紳士　いや、もう頼まれても……。
中老紳士　水なんかよりは餘つ程、ようごわすぜ。
老紳士　いや、もう……。
（ボーイが名刺をのせた小さな銀盆を持つて出て來て、主人公の前に行く。）
ボーイ　この方がちよつとお目にかゝりたいといふことで。
主人公（名刺をとつて）はあ。では何處か別室で……。直ぐ行きますから。
ボーイ　はい。（去る）
老紳士　佐久間さん。最前、お話を聽き漏らしたが、速力といふものは……一時間のぢやね。どれ位でごわす。あんたの飛行機ぢやと。
主人公　百四十哩出ます。フール・スピードで。
老紳士　百四十……ほう！　ぢやとすると一時間に……靜岡へんまではらくぢやな。
主人公　はあ、いや、もつと……豐橋まで……。去年神戸から來る時に、濱松の辨天島の上まで、丁度一時間で來て了ひました。
老紳士　ふうん！　水上機ぢやつたね。あんたのは。
主人公　はあ、しかし水上機でも陸上機でも、さう大して變りありません。速力に。

中老紳士　風の方向で餘程違ひませうね？
主人公　はあ、いや、大した風でなければ……。近頃は強馬力の發動機(エンヂン)を載せますから。
老紳士　あんたのは……六、六……。
主人公　はあ、三百のを二臺つけてをります。
中老紳士　一體その……。ねえ佐久間さん、どんな氣持のもんでごわせうかね、飛んでゐる時は……？
主人公　さうですね。いつもそれを訊かれるんで困るんですが……まあ一番分り易く云ふと、大きな船に乘つてゐるやうなもので……。素晴らしい非常な速力の汽船(ふね)にですね。
中老紳士　つまりその動搖の工合が……？
主人公　はあ、體(からだ)にうけるショックは、丁度あれと似てをります。たゞあれよりもうちつと輕いふは〳〵した感じですけれども……。宙に浮いてゐるんですから。
中老紳士　ふうん……。はゝあ、分つた。ぢやハンモックみたいなものだな。早い話が。
老紳士　ハン……？
中老紳士　ハンモック。ご存知でせう？　あのそれ、よく子供が庭の樹に吊るして、寢ころんでゐるぢやごわせんか。仰向いて本なんか見ながら……。
航空兵大尉B　成程。宙に浮いてゐるな。あれは。

來賓の一　エレヴエーターの工合とも違ひますか。
主人公　はあ、さうです。つまりあれです。エレヴエーターで降りる時の……エレヴエーターにも隨分足ののろいのがありますけれどね。のろいんぢや駄目ですが、早い奴なら、あのすうつとした吸ひ込まれるやうな氣持ですね。すうつとした……。あれなんかまあ……まあ似てゐると云へますね。いくらか。
大尉B　エレヴエーターが停(とま)る時に、下手な奴がやると、ちよつとかうショックをうけませう？　突き戻されるやうな……。あの感じですよ。つまり。着陸して車輪が地面に觸れた瞬間の氣持は。
中老紳士　はゝあ、ぢやあまりいゝ氣持のものぢやごわせんな。あれぢやあ……。（主人公に）それで下を瞰た時はどうですか。飛びながら。眼のまわるやうなことはごわせんか。
主人公　そんなことはありません。絶對に。
大尉B　昔はありましたがね。のろいふらふらした飛行機時代には。
主人公　もう一旦飛び出して了へば、どんな人だつて愉快になれます。いゝ氣持のものです。實際。
來賓の一　（乘り出して）本當ですか。
主人公　本當ですよ。船なんかよりは餘つ程らくです。た

とへば……一番いゝのは高い建物ですね。丸ビルとか三越とか……。あゝいふ高い處の頂邊（てつぺん）に上つて、そこへ寢ころんで下を眺めて見るんですよ。さうすると一番よく分ると思ふんです。飛びながら下を瞰た時の氣持が。

中老紳士　おや、それぢやちつとも愉快ぢやない。氣味の惡いもんですよ。高い處から下を覗くのは。

主人公　それは立つて見るからです。立つて見るから足がすくはれるやうで氣味が惡いんです。横になつて寢ころんで見てごらんなさい。空が足もとに見えたり、家や電車が頭の上を走つたり。

來賓の一　餘計氣持が惡さうだな。そいつは。

主人公　いや、まるで宙返りでもしてゐるやうです。飛行機で。

老紳士　いや、いかん。それや感心せん。

（ボーイが新聞社員と、十二三歳の盛裝した少女を案内して出て來る。少女は美しい大きな花束を抱へてゐる。そのうしろに寫眞班員が續く。）

ボーイ　（主人公に）たゞ今のお名刺の方が、こちらでと仰有いますので。

新聞社員　（機傍に）どうもかういふお席へ甚だ失禮でございますが、特にどうか。

主人公　はあ、私、佐久間です。

社員　私は帝國日報社長の代理でございます。えゝ……この度は空前のご成功でお目出度う存じます。社長が自身およろこびに上がる筈でしたが、生憎據處ない社用で旅行いたしましたので、失禮ですが私が代つて。

主人公　恐れ入ります、どうも。

社員　（少女を前に出して）社長の娘でございます。

少女　お目出度うございます。（花束を捧げる）

主人公　有難う存じます。（花束を受取つて少女と輕く握手する）

（うしろで寫眞のマグネシウムの音が起る。）

社員　（恭しく奉書の巻物を出して讀む）一等飛行機操縱士佐久間英一君は、航空倶樂部主催太平洋横斷飛行競技會に參加して、大正十×年三月、ユンゲル式六百馬力水上飛行機をもつて敢然東京灣を發し、途中幾多の艱難辛苦と闘ひ、而も不撓不屈、遂に未曾有の飛行を完成して當初の目的を貫徹せらる。（寫眞のマグネシウムの音が起る）實にその壯擧たるや、將に有史以來の龜鑑とすべく、又その成功の光輝今や全世界に冠絶す。洵に吾人神洲男兒の本懷名譽之に過ぐるものなし。本社は茲に謹で深厚なる祝賀の微意を表し、併て邦家航空界のため將來倘一層のご努力を望む。（巻き收めて主人公に出す）

（烈しい拍手が起る。）

主人公　(直立不動で)　どうも有難う存じます。微力にも拘らず無事飛行が成し遂げられましたことは、偏に皆様の非常なる御同情と御聲援の賜ものでございます。この後とも何分よろしく御指導をお願ひ申します。

(再び烈しい拍手が起る。それにまじつて「佐久間君萬歳!」といふ叫びが聞える。)

社員　(砕けて)　何れ社長が歸京次第、一夕粗餐を差上げたいと思つてをります。どうぞその節は是非ご出席を。

主人公　は、有難う。伺ひます。

社員　ではこれで失禮いたします。どうも飛んだお妨げを……。皆様、甚だご無禮申し上げました。(少女と一緒に去る。寫眞班員も續く)

主人公　(花束を小卓の上に置いて、元の席に戻る)

來賓の一　あれであしたの新聞に麗々と書きたてるんですな。寫眞入りか何かで。

大尉A　しかしどうです。愉快ぢやありませんか。素晴らしいですよ。何と云つたつて時代の寵兒だ。佐久間君は。ねえ、さうぢやありませんか。

來賓の二　日本が初めて生んだ日本空界の代表者だ。最も名譽ある、最も光輝ある……。

大尉B　實際です。實際、この名譽と功績に價するものは……大勳位は少し恐れ多いが、勳一等をもつて酬いても決してその……決してその……。いや、勳一等が至當だ。

大尉A　至當だ。我輩も同感だ。それは……。然るに、然るにだ。然るに當局はこれに對して、餘りに冷淡すぎやせんかと思ふ。假りにこれが軍部の者だつたら……つまり吾々軍部の者だつたらだな。勿論早速文句なしに戰時並みの待遇をうけるところなんだが、つまり民間操縱士といふ點で、民間といふ點で、非常な損をせんけれやならん。我輩は、我輩自身は光輝ある帝國軍人の名譽を持つとるけれども、その……そのつまり、その一個の私人として、私情の上に於て忍びんのだ。私人として義憤を感じるんだ。我輩は。

中老紳士　尤もなお説だ。日本は肩書の國だからな。肩書さへあれば少々腐つてゐても役に立つ。が、これがなかつたら。

來賓の一　なかつたら、十割の損だ。全く。

來賓の二　十割の損ぢや……結局無しになつて了ふぢやありませんか。無しに。

來賓の一　えゝ、だから結局無しですよ。結局脛一本でさあ、死ぬまで。いや、死んでも脛一本だ。無冠の太夫は。

來賓の三　死んだら墓標一本です。

中老紳士　何とかならんものかね。さう云はれて見ると、成程、航空倶樂部の賞金だけでは、ちとどうも……。何

しろあれだけの大きな仕事なんだから。世界的の。

大尉B　さう、さうであります。實際、とても金錢などに代へられん國家的功勞なんでありますから……。實際。

大尉A　いくら民間の一飛行家でも、功績は功績でありますからな。それを故意に認めなかつたり、官民によつて恩賞に甲乙の差をつけたりするちゆふことは甚だよろしくない。國家としてよろしくない。國家的に嘆かはしい憂ふべきことだと考へるのであります。

大尉B　同感だ。我輩も……。第一、人心を惡化せしめる所以だ。社會機構の不公平ちゆふことは……。

大尉A　いや、我輩は社會機構などについて述べとりはせん。我輩はたゞ一民間飛行家の破天荒な事業の成功に對して當局が餘りに無關心すぎる。あまりに冷淡すぎる、あまりに繼つ子扱ひするちゆふことに……。

來賓の一　いや、お說ご尤もだ。よく分る。ご兩君の仰有ることは、よく分る。よく分るが、しかし當局でも人がゐない譯ぢやない。相當考慮は費やしてゐるんだ。つまり深甚の考慮をね。しかし如何せん、何分前例のない國際的のことですからな。そこも多少考へてやらんといかん。全く始めての事で、總てが全然白紙狀態なんだから……さうでせう？　だからそれでちよつと表彰の方針がつかん形ぢやないかと想像されるんだが、私には……。

大尉A　それならそれで豫め內意位は漏らして然るべきである筈だ。佐久間君に對して。それを今もつて何の沙汰もない。殆ど風馬牛の態度であるちゆふことが、甚だその……。

老紳士　（大きな欠伸をする）

中老紳士　それぢやどうです。議論が出たついでに、丁度いゝ機會（チャンス）だから、一つ今夜こゝへ集つたものが主唱者になつて、然るべく建白でもしては……。

來賓の二　機運促進の意味でね。さういふ內意が當局にあるものとして……。

大尉B　成程。それや大いにいゝですな。朝野の名士がこれだけ一堂に集まるなんて滅多にないことでありますからな。（大尉Aに）どうだい、貴公。

大尉A　勿論贊成だ。さういふ運動を起してこそ、今夜のこの歡迎祝賀會に意義が生じるのだ。大いにやらう。及ばずながら犬馬の勞をとるよ。我輩も。

主人公　いや、もうどうぞそんなことは……。どうもそれぢやかへつて恐縮です。

大尉B　まあ、まあいゝですよ。そんな遠慮をせんだつて……。まあ我輩等に任しておきたまへ。きつと勳章を貰つて上げる。

大尉A　勳一等は怪しいが、旭日重光章……或はちよつと

下がつて、旭日中綬章位は確實だ。しかし君、佐久間君。これが成功したら吾輩等を一夕招待して、慰勞の宴を張らんけれやいかんぜ、大々的に、なあ君。

大尉B　それや貴公云ふだけ野暮だ。第一、賞金五萬圓が默つとらん。吾々が飲む位、一と月二た月流連したつて平氣だ。たかは知れとる。なあ佐久間君。

主人公　（にこ〳〵笑ひながら）　はあ、それやもう……分つてをります。充分その……。

中老紳士　それはまあ、あとの出來た時の事として、第一の問題は……。

大尉B　（てれ隱しに鸚鵡返しに）　第一の問題は……。

中老紳士　誰か文章家はをられんかな。表彰文案の起草委員になる方は……。

大尉B　さうだ。表彰文案の起草委員……。

來賓の二　（中老紳士に）　それはもうあなたに限る。詩經家たるところのあなたを措いて、ほかに人は。

中老紳士　滅相もない。それやお斷りだ。とてもそれや私なんか……。

來賓の一　そんなこと仰有つてはいけませんな。是非ご苦勞を願はんけれや……。

大尉A　（中老紳士に）　ぢやどうか一つ起草委員といふことに……。ご面倒でも。

中老紳士　いや、それや駄目ですよ。實際。本當に書けません。私には。

大尉A　しかし推薦してゐられる方さへあるのでありますから、枉げてお引受を。

老紳士　（大きな欠伸をする）

中老紳士　（頭を掻きながら）　弱りましたね。どうも……。ぢや……ぢや一そかうしたら何うです。實行委員を選擧してね、皆さんの中から五六人。それで萬事はその方々にお願ひするといふことに……。

大尉B　成程！　名案でありますな。ぢや早速發頭人のあなたから、その。

中老紳士　發頭人？　發頭人は少しどうも……。暴力團の首魁ぢやあるまいし。

大尉B　成程。いや、これは失禮。ぢや發起人？　或は發……議者ですか。

大尉A　君、君、そんな發起人も糞もありやせん。問題は實行委員の選擧だ。

大尉B　あゝさうか。成程。（中老紳士に）　では先登にあなたから一つ實行委員に……。

中老紳士　私に？……實行委員？……ふうん、それやまあ……それやまあ成れと仰有るなら成りもするが、それよりは……。

大尉A　まだほかに何かいゝ案がありますか。
中老紳士　どうでせう。たとへ今こゝでなにがしかの實行委員を擧げたところでゞすな。擧げたところで、とても今夜中に萬事解決するといふことは。
大尉B　は、出來んのであります。さうであります。
中老紳士　どうせ相當の日子を要すると思ひますね。然らば寧ろですな。
大尉A　はあ。
中老紳士　寧ろこの際、もつと大々的に團結をして……基礎のある團結をしてゞすな。たとへば……何とか期成同盟會といつた風な、まあそんな風な堂々たる運動方針の下にですな。
大尉B　成程！　それは又一段と妙計でありますな。うむ、成程！　それや成程、お說の通りその方が、それやもう確かにその……。なあ原田大尉、貴公どう思ふ？
大尉A　異議なし。贊成！　つまり佐久間一等飛行機操縱士功績……功績かな。功績表彰期成同盟會つてな風なものでありますな。
中老紳士　左樣。
大尉B　佐久間一等飛行機操縱士功績表彰……か。期成同盟會。成程、いゝね。それやもうそれに限る。堂々としとる！　なあ佐久間君。

主人公　はあ、結構です。
中老紳士　待つて下さい。(考へながら)　佐久間操縱士功績表彰……その功績表彰の功績は蛇足ぢやありませんかね。功績は……。表彰といふ文字があれば、それで分ると思ふが……。佐久間一等飛行操縱士表彰期成同盟會。
大尉A　佐久間一等飛行操縱士功、いや、表、表彰期成同盟會……ですな。
大尉B　うむ、分る〳〵。それでよく分る。
大尉A　ちよつと、ちよつと待つてくれ。しかしさうなると會長を置かにやならんが……。同盟會長ちゆふものを。
大尉B　成程。うむ、しかしそれや勿論……それや勿論置かにやなるまい。(中老紳士に)　置かにやなるまいでせうな？
中老紳士　置いてもいゝでせうな。會の存在をはつきりさせる意味で。
大尉B　はあ、はつきりさせる意味で、勿論置いた方がいい。會の存在を、その……その……。ぢやその第一にその會長を。
大尉A　まあ貴公、默つとれ。少し……。(中老紳士に)　ところで、その人選は……？
中老紳士　左樣。まあどなたか先輩の方に。
大尉A　先輩の方と……。(四邊を見廻してから、老紳士

の前に行つて）恐縮でありますが、あなたに本會々長を
お願ひしたいので……。甚だその恐縮でありますが……。
老紳士　本會？……いや、わしなんかは微力で。はゝゝゝ。
　とてもその器でごわせん。
大尉A　どういたしまして。そんなこと仰有らずに、どう
　か一つ是非ご面倒を。
老紳士　誰も相手にしてくれんでな。わしなんかでは……。
大尉A　いや、そんなことは……。一つ是非。
老紳士　もつと、その然るべき人に頼んだらようごわせう。
　その方が成功の早道ぢや。
大尉A　決してご迷惑はおかけしないつもりでありますか
　ら、たゞその……お名前だけ拜借さして戴きたいので…
　…。是非その……。
老紳士　それなら……文部大臣が見えてをつたやうぢや
　が、あの人に頼んでごらん。
大尉A　はあ、左樣でありますか。（四邊を見廻す）
來賓の二　文部大臣はもうとうに歸られましたよ。食堂か
　らこつちへは入らずに直ぐ。
大尉A　はあ、左樣でありますか。（老紳士に）歸られた
　さうであります。大臣閣下は。
老紳士　ふうん。では……淸水伯爵がよかろ。あの人は世
　話好きだから極く適任ぢや。

大尉A　淸水伯爵。（當惑して）はあ、どんな方でありま
　すか知ら。
　（來賓の中から「淸水さんも歸りました」といふ聲が
　聞える。）
老紳士　歸つたか。さうか。……うむ、さうぢや、參謀總
　長がをつた。あれぢや〳〵。參謀總長に頼め、あの人に。
大尉A　（俄かに姿勢を正して）參謀總長閣下は、さき程
　お歸りになられました。はあ。
老紳士　宮島大將は？
大尉A　宮島閣下も先程、栗山中將閣下とご一緒に。はあ。
老紳士　歸られたか。みんな歸つて了うたな。それでは…
　…森山次官は？　外務省の。
中老紳士　森山君はさつき玄關の方へ出て行つたから、こ
　れも歸つたでせう。きつと。
老紳士　ふうん。……では神村子爵は？
大尉A　カミ……？
中老紳士　（大尉Aに）神村子爵。
大尉A　はあ、カミムラ子爵と……。（大尉Bに）君知つ
　とるか。神村子爵……閣下を。
大尉B　いや、知らん。生憎その……我輩。
來賓の一　神村さんはさつき食堂に居る時、電話がかゝつ
　て來て、何だか忙がしさうにしてゐましたせ。

大尉Ａ　はゝあ。それぢや多分これも……。
老紳士　ではもう誰もをらんやうぢやね。成つて貰ふやうな人は。
（この評議中に、うしろの方からぼつ〳〵、中にはこそ〳〵出て行く來賓が次第に烈しくなる。もう三分の一位しか殘つてゐない。）
中老紳士　さつき警視總監の顏が見えてゐたが……。（四邊を見廻す）
大尉Ｂ　はあ、警視廳のでありますか。
中老紳士（微笑）えゝ、警視廳の警視總監……。歸つたらしい。居られん。
大尉Ａ　……困つたな。どうも……。會長が居らんぢや、どうにも問題にならん。
大尉Ｂ　海軍の寺井閣下はどうだ？
大尉Ａ　いゝけれど、もう居られまい。
大尉Ｂ　あした、役所に行つて頼むのさ。
大尉Ａ　日をあらためて頼み廻る位なら、寺井閣下でなくたつて、もつと……寧ろ總理大臣官邸にでも押しかけた方が有利だ。
大尉Ｂ　成程！　それもさうだな。
中老紳士　ぢやさうしたら何うです？　一そ。
大尉Ａ　さうしたら、とは？
中老紳士　さうするのですよ。此處で居ない人をあれこれ云つてゐるよりはですな。誰でもかまはない。今夜缺席の人だつていゝから、こつちで會長をきめて、副會長が必要なら副會長も置き、それから理事なら理事、幹事なら幹事といふ風にですね。
大尉Ｂ　成程！　はゝあ、面白いね。
來賓の一　天下の名士を片つぱしから物色するのですな。
中老紳士　それを手分けして、一人々々說き廻るのですよ。きめておいて。
大尉Ｂ　成程！　上策ですな。そいつは……うまい作戰だ。
中老紳士　何處でもみんなさうやつてゐるのですよ。ソサイエテーなんていふものは。
大尉Ａ　はあん、ぢやさうしませう。……おい、ボーイ。ボーイはをらんか。……ボーイ。
（ボーイ出て來る。）
大尉Ａ　紙を持つて來てくれ。
ボーイ　半紙でございますか。
大尉Ａ　うむ、何でもよい。
ボーイ　はい。（去る）
老紳士（四邊を見廻して）おゝ、これはこれは、もうみんな……。（欠伸を嚙み殺しながら立ち上る）さあ、ではそろ〳〵……。

大尉Ａ　お歸りでありますか。
老紳士（時計を出して見て）遲くなつた。お先きへご免蒙らう。
大尉Ａ　しかしちよつとご相談願ひたいと思ひますから、ご迷惑でも今しばらくどうか。
老紳士　老人はお役にたゝんでな。
大尉Ｂ　いや、どうか。どうかもうしばらく。
大尉Ａ　ご迷惑ですが、一つ是非お力添へを。
老紳士（澁々椅子に腰を下ろす）
（ボーイが紙を持つて出て來る。）
大尉Ａ（紙をうけ取りながら）その卓をこゝへくれ。
ボーイ　はい。（灰皿などの載つてゐる小卓を、大尉Ａの前に引き寄せる）
大尉Ａ（卓に向つて、萬年筆を執る）
大尉Ｂ（ボーイに）おい、ビールでも持つて來んか。冷たいのを。
ボーイ　さあ。もう時間でございますから……訊いて參りませう。
大尉Ｂ　何處かにあるだらう。二三本徵發して來いよ。
ボーイ　はい。（去る）
（來賓は殆ど去つて了つてゐる。）
大尉Ａ（書いたのを讀む）佐久間一等飛行機操縱士表彰期成同盟會役員候補名簿。
大尉Ｂ　え、なに？……もう一度。
大尉Ａ　佐久間一等飛行機操縱士表彰期成同盟會。
大尉Ｂ　長いな。いや、どうも……。どうしてさう長いんだ？
大尉Ａ　どうしてつたつて……どうもこれ以上……。みんな必要な字ばかりだからな。
大尉Ｂ　ふうん。成程。それにしてもちつと長いな。ちよつと、ちよつと、もう一ぺん讀んで見てくれ。（耳を傾ける）佐久間……。
大尉Ａ　佐久間一等飛行機操縱士表彰期成同盟會役員候補名簿……仕樣がない。これ以上。
大尉Ｂ　一と息には云へんな。（中老紳士に）どうでせう？
中老紳士　ぢやその一等飛行機操縱士をとつて、單に飛行士としたらいゝでせう。或は操縱士とか、航空士とか、單に……。
大尉Ｂ　成程！　うむ、成程、それやもうその方が……。同感ですな、頗ぶる……。
大尉Ａ　簡單明瞭だね、その方が。ぢやさうしよう。……矢張り操縱士がいゝね。佐久間操縱士か？
大尉Ｂ　佐久間君、何うです、君の意見は？

主人公　はあ、結構です、それで。
大尉A　ぢやいよ〳〵會長だ。誰だ、會長は。
中老紳士　ちよつと〳〵。この候補といふ字はいらんでせう。役員候補の候補は。
大尉B　……成程。いらんねえ。いらんよ。それは。
大尉A　仰せの通りだ。消しませう。
大尉B　寧ろ名簿案だね。役員名簿案。
大尉A　いや、餡も皮もいらん。單に役員名簿でいゝ。それより會長をきめてくれ。早く。これこそ一番重大案だ。
大尉B　勿論總理大臣がよからう。正々堂々と。
大尉A　成るかな、總理大臣なんかゞ。
大尉B　成つても成らんでも、そこを頼むんだ。承知するまで頼むんさ。
大尉A　さうか。よし、ぢや會長は總理大臣。（老紳士に）ご異議ありませんか。
老紳士　ありません。
大尉A　（書きながら）は、では副會長。
大尉B　副會長も置くのか。
大尉A　あつた方がよからう。賑やかで。
大尉B　成程！　ぢやまあ順序として、まづ……內務大臣。それとも外務。
大尉A　（老紳士に）如何でせう、內務大臣でよいですか。
老紳士　よいでせう。
大尉A　は、では副會長內務大臣と。（書く）これは一人でいゝか。もう一人置かんでも？
大尉B　二人置くか。成程。一人よりは二人の方がいゝな。ぢやもう一人……かうつと。……うむ、うちの大臣はどうだ。うちの？
大尉A　うむ、そいつはよからう。至極適當だな。では陸軍大臣と。……いや、待てよ。
大尉B　何だ？　いかんか。うちの大臣では。
大尉A　こゝへうちの大臣をもつて來る位なら、いつそこの內務大臣をやめてだな。うちと海軍とを並べた方がよくはないか。軍部兩大臣、右大臣左大臣つていふ工合にかう……。
大尉B　成程！　それも名案だね。（中老紳士に）どうでせう、ご意見は？
中老紳士　結構ですな。至極。
大尉A　（老紳士に）では內務大臣を變更して、副會長を陸海軍大臣二名といふことに。
老紳士　どうぞ。
大尉A　は。（書く）次ぎは理事だ。それとも幹事とするか。職名は？
大尉B　理事と云つた方が立派だな。それや。

大尉Ａ（老紳士に）如何でせう？ 幹事よりも理事の方がよいといふ說がありますが。
老紳士 よいでせう。
大尉Ａ 理事で？……は、では理事。（書く）どん／＼云つて下さい。書きますから。
大尉Ｂ 人數はどうなんだ。豫めその……。
大尉Ａ それはかまはん。若干名ちゆふことにしておいて、すべて人物本位で行く。（氣がついて、中老紳士に）と、いふことにしては如何でせう？
中老紳士 それも理窟ですね。結構です。
大尉Ａ は。（老紳士に）では理事若干名といふことに……。ご承知下さい。
老紳士 承知しました。
大尉Ａ は。ぢやその理事を一つ……。誰ですか。
大尉Ｂ まづ各省の大臣次官…… それから局課長位のところまで何うだ。
大尉Ａ 大臣と課長を一緒にするのか。理事に。
大尉Ｂ いかんかな。一緒ぢやあ……。成程いかんかも知れんな。
大尉Ａ いかんちゆふこともあるまいが…… それなら內閣書記官長、法制局長官、警視總監……なんていふところもいゝぞ。

大尉Ｂ いゝな、そんなところも。（中老紳士に）どうでせう？ そんなところは。
中老紳士 いゝでせう。そんなところで。
大尉Ａ は。ぢやまづ眞つ先きに內務か。（書きながら）次ぎに外務と。大藏、……遞信……農商務。
中老紳士 あゝ君、ありませんよ。それや。
大尉Ａ（吃驚して）え、ない？ 何が？
中老紳士 分立しましたよ。この間。
大尉Ａ …… いや、その……何が分立したんですか。
中老紳士 知らんのですか。
大尉Ａ いや、その……知らんのです。
中老紳士 はゝあ。あゝさうですか。いや、農商務省が二つに分れてゞすな。つまり農。
大尉Ｂ いや、成程。たしかにさうだ。農務省と商工省だ。
中老紳士 いや、農林省ですよ。
大尉Ｂ あゝ農林省。成程。農林省。
大尉Ａ（書きながら低く）どうも軍隊生活をしとると世事に疎くなつて……。えゝと、農務。
中老紳士 いや、農林。
大尉Ａ あゝ農林……。それから商工省ですか。どうも頗る複雜だな。
大尉Ｂ お次ぎが司法、文部。

大尉A　お次ぎが司法……文部と。それから。
大尉B　ザツトオール！
中老紳士　おつと、も一つありますよ。
大尉B　え？　まだありますか。
中老紳士　ありますよ。鐵道省。昔の鐵道院。
大尉A　違ひない、鐵道……と。それから？
大尉B　(不確實に)もうない、今度は……。（中老紳士に）どうでせう、大きな銀行會社の重役なんかは？　つまりあなた方のやうな……その……富豪や實業家を全部網羅して、その……。
老紳士　(進つて)おや、ちよつと、ちよつと見せて下さい。
大尉A　は、どうぞ。(紙を出す)
老紳士　(眼鏡をかけて覗きながら)いや、これは美事だ。素晴らしいもんぢや！
大尉AとB　(同時に)は？
老紳士　すつかり內閣が出來上りましたな。一大內閣が。
大尉B　成程。內閣ですな。いや、妙ですな。
老紳士　短時間にえらいお腕前ぢや。(哄笑)
中老紳士　しかしご兩君、中々お骨折ですな。實際立派な義俠的行爲ですよ。偉いもんだ。
大尉A　なあに！　何でもありません、これ位のことは。

中老紳士　いや、中々どうして……。大變ですよ。第一、その多人數を一人々々訪問して、說き廻るなんて容易なことぢやない。
大尉A　訪問？
中老紳士　えゝ。說き廻るだけでも難事業だのに、一々承諾させせんけれやならんのだからね。實際思ひやられますよ。殊にかういふ人達はみんな眼の廻る程、忙がしいと來てゐるんだから、中々おいそれと簡單に會つちやくれん。散々無駄足をさせて、やつと秘書官か三太夫かゞ取次に出て來ると思へば、後日何れよく伺つておきまして、と來る。これやもう何處でも極まり文句なんです。だがこつちは正直に、もう伺つておいてくれたものと思つて、後日電話か何かで都合をきいて出かけて行くと、伺つておきましたが、何れよく考へさせて戴いて、位のところでていよく追つ拂はれる。そこでこつちは馬鹿だから、馬鹿は馬鹿なりに正直だから、もう考へてくれてあるだらうなんて、いゝ氣になつて出かけて行けば、大臣は近頃非常にご多忙で……。開闢以來、大臣はご多忙にきまつてゐるまさあ、何處の大臣だつてね。それをさう云ふんですよ。大臣は非常にご多忙で、どちら様へも、えゝ、樣づけですよ。丁寧なものです、斷る時には。どちら樣へもさういふことは一切お斷りしてゐますやうな次第で

して、折角のご希望を誠に殘念ですが、とかお氣の毒ですが……つてなことを云つてね。全く始末になりませんよ。あゝいふ連中は。
大尉Ａ　そ、それや一體何の話でありますか。
中老紳士　え？　いや、ご參考までにちよつと、その一席……。はゝゝゝ。
大尉Ｂ　成程！　いや、お說の通りです。は、全くさうであります。
大尉Ａ　貴公、何を感心しとるんだ？
大尉Ｂ　……おい。
大尉Ａ　う？
大尉Ｂ　う、ぢやない。一體、貴公そんなものを書いて、どうするんだ。後生大事に。
大尉Ａ　どうする？……これをか。
大尉Ｂ　まさか吾輩等が、つまり貴公と吾輩の二人でやるんぢやあるまいな。これを。
大尉Ａ　勿論！　吾輩等は現職にある人間だ。現職軍人がこんなことをやつとられるものか。馬鹿な！
大尉Ｂ　それぢや誰が實行するんだ？　誰がその人達を說き廻るのだ？　第一、一生懸命にそんな役員名簿なんかこさへたつて、事實上は空文ぢやないか。反古ぢやないか。
大尉Ａ　空文？　反古？……面を洗つて來い、面を！　貴樣寢ぼけとるな。
大尉Ｂ　寢ぼけとるのは貴樣だ。
大尉Ａ　なあに貴樣だ。貴樣こそ寢ぼけとる。かうしておいて片つぱしから歷訪するんだ。さういふ諒解ぢやないか。始めつから。
大尉Ｂ　だから吾輩それを云つとるんだ。一體、歷訪とは何だ。誰が步くんだ。貴公自身やるつもりか。
大尉Ａ　吾輩が？　馬、馬、馬鹿を云へ！
大尉Ｂ　そら見ろ！　では誰がやるんだ。貴公よりほかに居らんぢやないか、誰も。
大尉Ａ　チヨツ、分らん奴ぢやな。貴樣。
大尉Ｂ　分らんのは貴樣だ。貴樣が分らんのぢやないか。吾輩にはよく分つとる。
大尉Ａ　分つとらんぢやないか。少しも。まあ最初の話を考へて見い、最初の約束を。もう忘れたか。今夜こゝにお集りの諸君と一致の協同動作で。
大尉Ｂ　おい、待て〳〵。そこだ〳〵。
大尉Ａ　何がそこだ？
大尉Ｂ　鈍い奴だな。一體その貴公が相談して、一致の協同動作を執るべき諸君ちゆふものは何處にゐるんだ。その諸君ちゆふものは。

大尉A　何だと！（始めて四邊を見廻す。主人公と、その親友と、老紳士と、中老紳士のほか誰もゐない。大對Bに）貴樣それを知つとつて、何故今まで默つとるんだ！何故吾輩にこんなものを書かした。（書いた紙を破いて捨てる）け、怪しからん奴だ。
大尉B　いや、實は吾輩も今まで知らんかつたのだ。こんな結果にならうとは！
大尉A　知らんで濟むか。侮辱だぞ！　え、侮辱しとるぢやないか、大體。
大尉B　まあ、まあ勘忍せい、仕方がない、これが世間の通例だ。勘忍せい、勘忍せい。
老紳士　（立上る）どれ、おいとませう。はゝゝゝ。いや、遲くまでご苦勞。（去る）
中老紳士　そこまでご一緒に。佐久間さん、ではお先きへ。（續いて去る）
主人公　（立ち上る）どうぞ。失禮しました。
大尉A　無責任な奴等だ！　情けない奴等だ！　よく人間の皮をかぶつとるなあ！
大尉B　（腕時計を見て）お、もう十二時だ。早く行かんと電車がなくなるぞ。
（白い上着に着代へたボーイが、二三人どやどやと出て來て椅子を片付けはじめる。）

大尉B　おい、さあ立て。遲くなる。
大尉A　一體、今夜の司會者はどうしたんだ。司會者は。
大尉B　をらんね。歸つたんだらう。大方。
大尉A　歸つた？……怪しからんぢやないか。客を殘して司會者が先きに歸るちふ法があるか。え、司會者が。
大尉B　司會者のことまで俺は知らんよ。
大尉A　チヨッ！　どいつもこいつも成つとりやせん！呆れ返つた奴等ぢや！
大尉B　もう諦めろ。ちよつとした物のはずみで間違つたんだ。世間にはザラにあることだ。まあ勘辨しろ。
大尉A　糞つたれめ！……おい、何處かで飲み直さう、景氣よく！　俺はたまらん！
大尉B　よし、飲む。行かう。
（主人公には眼もくれず、大尉AとB、足早に去る。）
主人公　（大尉の權幕に押されて挨拶なしそこなつて見送つてゐたが、やがて椅子に腰を下す）
ボーイの一　椅子を片付けます。恐れ入りますが、お立ち下さい。
主人公　椅子？……あゝさうか。（立ち上る）
ボーイの二　時間でございますから、どうぞお引取り下さい。
主人公　時間？……あゝさうか。ふゝゝゝ。何のことだ。

結局、外へ追ひ出されて了ふのか。獨りで……。
（今まで背後の方に一人ぽつねんとしてゐた主人公の親友が傍へ出て來る。）
親友　おい、英ちやん、もういゝんだらう？　行かう。
主人公（吃驚して）何だ、淸ちやん、お前まだゐたのかい。今まで。
親友　うむ、待つてゐたんだよ。銀座を步いて歸らう。
主人公　そいつは濟まなかつたな。遲くまで待たしちやつて……。僕はもうとつくに歸つたと思つてゐたんだよ。君は。
親友　默つて行つちまふやうなことはしないよ。
主人公　有難う、有難う。本當にすまない。待たしちやつて。
ボーイの一　もし〳〵、これをお持ち下さいまし。（花束をとつて出す）
主人公　あゝ花か。（手を出しかけたが）もう萎れちまつたぢやないか。捨てゝくれたまへ。いらないから。
ボーイ　かしこまりました。それぢやお捨て致します。
親友　まだ萎れちやゐないよ。持つて行けよ。折角くれたのに。
主人公　いらないよ。……ねえ淸ちやん、人間なんて花束みたいなものだね。この花束は赤いリボンで結んであるけれど、黑いリボンの奴もあるぜ。え、あるだらう？　しかし赤だつて黑だつて、何方で結ばれたつて、結局花束の壽命は一時的ぢやないか。さうだらう？　人間だつてさうだ。幸福も不幸もさう永くは續かない。一時的だよ。ほんの一時だよ……。
ボーイ〳〵　あかりを消します。（電燈のスウキツチをひねる）
親友　英ちやん。行かう。
主人公　俺はもう飛行機なんかいやだ。……ふん、何てくだらねえ世の中だらう！
（薄暗くなる。）

――幕――

（大正十五年三月作）

鈴木泉三郎篇

生きてゐる小平次（三幕）

人物

小幡小平次　役者
那古太九郎　囃方
おちか　太九郎の女房

時代

江戸時代

第一幕

奥州郡山在あさかの沼の上。陰暦四月の末。暗い樹々をうつした淀んだ水面。葭。白い水草の花。背景に沈んだ色の山々。空は雨を含んで暗いが、山の向ふにはすこしばかりの青空があり、そこから侘しげな光の箭がこの古沼の上に射しかけてゐる。中央に小舟が一艘。そこに小平次と太九郎の二人が釣をしてゐる。静寂。

太九郎　もう何刻なのだらう。

小平次　（無言）

太九郎　（舌打）また切られた。

（鈍い水音がする。）

（長い間。）

太九郎　おゝ！　喰つてゐるぢやないか。何をぼんやりしてゐるんだ。

小平次　（沈思から醒める）あゝ、さうか。

太九郎　大きな鯉らしいな。や、そんな無理をしては駄目だ。

（魚の落ちた音。）

（間。）

太九郎　どうしてあんな風な引きかたをしたんだらうな。おれにはわからねえな。あんな事をすれば切られるに極つてゐるぢやあないか。

小平次　（無言）

太九郎　ほれ。どうだ。この黒鯛のやうな大きな鮒を見て呉れ。（魚を針から外し、餌をつけ直して糸を投げる）えいや、やツこらさに、やつといふて曳きやる、か。（歌ふ）お聲聞くさへ四肢がなゆる……

小平次　（つぶやくやうに續ける）まして添うたら死のずよの……

太九郎　（小平次を凝視する）

（長い間。）

小平次　（急にいら／＼して）全體、今は何刻なのだ。

太九郎　だからさ。（間）七ッ過ぎたかも知れないな。

小平次　日が傾くと淋しいなあ。

太九郎　うん。奥州路はわけても陰氣なのだ。

小平次　（間。獨語）おれは早く江戸へ歸りたい。

太九郎　……そんなに淋しいのか。（笑ふ）

小平次　（間の後）江戸を出てから七十日餘りになる。

太九郎　さうだ。（間）それにお前は旅に馴れないのだからな。

（長い沈默。）

小平次　なあ、太九郎！

太九郎　なんだ。

小平次　おれはお前に頼みたい事があるんだがな……。

太九郎　（小平次を見る）

小平次　お前、腹を立てゝ呉れるな。

太九郎　うん。だが聞いて見ない事はわからねえ。

小平次　實は、おちかさんの事なのだ。

太九郎　おちかさんだと。（間）はて、おれの女房のおちかの事なのだらうか。

小平次　（不安）さうだ。

（長い間。）

太九郎　（不機嫌に）まあ云つて見ねえ。

小平次　うむ。とうから打まけて話さうと思つてゐたことだが……江戸へ歸ればまた折を無くして仕舞ふから。それに……（ふと口をつぐむ）

（長い間。空に時鳥の聲がする。小平次、見上げる。）

太九郎　どうしたのだ。お前の話を待つてゐるんだぜ。

小平次　太九郎！　長い事、腹の中でおれを見下げた奴だと思つてゐただらうな。

太九郎　なぜそんな事をいふんだ。

小平次　申譯が無い。ゆるして呉れ。

太九郎　（煙管を吹く。吸殼、水の中で消える）

小平次　もとより口でわびて濟む罪とはおもつてゐない。察して呉れ。

太九郎　………。

小平次　この年月の友達面も恥しい。どうかかんにんして呉れ。

太九郎　………。

小平次　人の口の端にも露骨にのぼつてゐる今になつて、のめ／＼許せも凄まじいと思つてゐるのだらう。お前のかね／＼の心の中の腹立ちは、おれにはようくわかつてゐるのだ。

太九郎　（冷笑）

小平次　それなのに、またこんな事を云ひ出すんだが……。（間）どうだらうか。（言ひ淀み乍ら）あの、おちかさんをきれいにおれに呉れるわけにはいかないだらうか。

太九郎　なに？　呉れと。

小平次　憎いだらうがな。この長年の馴染にめんじて、おれの女房に呉れるわけに行かないだらうか。

太九郎　おい。あの女はおれの女房なんだぜ。

小平次　さう云はれると一言もないんだ。（間）痩せても枯れても、おれも役者のはしくれだから、こんなをかしな事を、正面切つて持出したくはない。しかし、よくよく思案しつくしての頼みなのだ。察してくれ……（間）お前がだまつてゐて呉れるだけ、おれの苦しい氣持はだん／＼積み重なつて來る。この上、今のまゝでゐたらばおれは氣がちがつてしまふだらう。

太九郎　（冷笑）

小平次　いつそ樂屋の、師匠や仲間の前で、足蹴(あしげ)にでもされ、面の皮を引(ひ)んむかれでもしたら、かへつて心が輕くなるだらう。いつまでも、そッとして置かれるのは辛い。濟まない。申譯がないとおもつてゐる。

太九郎　（間の後、冷やかに）……那古(なこ)の太九郎、もとより名もない芝居の太鼓打だがな。藝人の飯は十六の年から喰つてゐるのだ。女房の淫事(いたづら)を、われから騒ぎ立てられると思ふかい。

小平次　…………。

太九郎　まして分相應の役者狂ひぢやねえか。知らねえ顔をしてゐるよりほか法があるかい。

小平次　なに。役者狂ひだと……。

太九郎　さうよ。

小平次　おゝ！　いかにもおれは役者にちがひないが、まだ友達の女房づれに買はれた事はねえ。

太九郎　なんだと。

小大尉　おちかとおれとの仲は、もう四年越の事ではないか。お前も知つてゐる通り、あの女が杉山半六に死別れて後家になつて以來の事ではないか。おれに緣がうすかつたのか、乃至、力がなかつたのか知らないが、降つて湧いた樣にお前とあの女との祝言があつたのだ。

太九郎　いかにも、おれが手を廻して女房に貰つたんだ。

小平次　そ、その後のことはなんと云つても不義にちがひない、いふまでもなくそれはおれが惡い。だが決して一時の弄(なぐさ)みものにしたのでも、またされたんでもないんだ。もと／＼眞實惚れぬいて、あれはおれから口說(くど)いた女なんだ。

太九郎　……古い事はおれも知らねえ。とにかく今はれッきとした亭主持にちがひねえ。買はれたのは役者の小幡

小平次ぢやねえか。
小平次　やつぱりさういふのか。（間）友達だと思つてゐて呉れるんだとおもつて、この年月苦しい戀を續けて來たのに……さう云はれてはどうも氣が濟まねえ。役者稼業に身をせばめてゐても、これでも男一匹だ。まだ腹の中までくさつてはゐないつもりだ。
太九郎（笑ふ）
小平次　おれは惚れた事のない女に、これまで一度も手を出した事はねえ。愚痴も極道も惚れたればこそのことだ。ついした浮氣ぐらゐなら、何も好んで太鼓打の女房なんぞに手を出すもんか。
太九郎　なに？
小平次　憚りながらこの小平次、眞實の無い情事は決してした事がないんだ。
太九郎（笑ふ）友達の女房を盗んで置いて、船中で引拔いて大見得だな。それは故人の型にでもあるのか、ふざけるな。
小平次　………。
太九郎　盗人たけ〴〵しいとはお前のことだ。
小平次　……言葉が過ぎたかも知れないが、どうぞ許して呉れ。おれはどうかしてゐるんだ。どうか何もかも許してそして、あの女をきれいにおれに呉れ。おれと一緒にさせて呉れ。たのむ！　たのむ。おれにはどうしてもおちかを思ひ切れないんだ。
太九郎　………。
小平次　諦められる戀なら、こんないやなたのみはしない。たのむ。どうぞ何もかも水に流しておれに呉れ。たのむ。
太九郎（間の後）それはおちかと相談の上の事か。（舌打）あゝ、こんな事をきくのではなかつたつけ。
小平次　さうぢやない。お前だつておちかといふ女がどんな性質の女だか知つてゐる筈ぢやないか。あれは心の弱い氣の優しい女なんだ。俺とお前との中にはいつて、年中、おど〳〵と暮してゐるんだ。いまになにか起りはしまいか、どうぞ二人の間が圓く行くやうにと神へ祈つてゐるといふ風の女なんだ。だからこそお前に頼むのだ。おちかは氣が弱く、お前を捨てゝ、俺の處へ飛んで來られるやうな人間ぢやあない。また、俺にしてからがお前を出拔いて、さうした荒事はさせたくもない。お前の力を頼むほか、二人は添ふあてがないのだ。お前と俺は古い友達だ。それに甘えて云ひにくい事をかうしてたのむんだ。お前次第で、あの女も、おれも、地獄から救はれるのだから……。
太九郎　それと入れ交つておれに地獄へ墮ちろといふんだな。勘定が合はねえな。おれはいやだ。どうあつてもい

やだ。いやなこつた。

（長い間。）

小平次　なぜいやなのだ。

太九郎　あの女はな。もう一度よく云つて置くから覺えて置いて呉れろ。あの女はこの太九郎の女房なんだぞ。

小平次　………。

太九郎　いやで一緒になつてゐるのではねえぞ。わかつたか。

小平次　………。

太九郎　お前は全體氣樂人だよ。お前はたゞ手短かに考へてゐるんだらう。外に惚れた男のある女で、腹のくさつた女房で、亭主の面に泥をぬる賣女だから、早く追ひ出したらどうだ、とかうおもつてゐるのだらう。

小平次　………。

太九郎　にくい奴だとおもつた處で、この御治世に刄物三昧も出來ないから、こゝはぐッとさばけて出て、何も肚へ入れて去り狀を渡し、涼しい顏をして、ほかの女でもあとへ入れる方が、當節柄、器量がいゝとでもおもつてゐるのだらう。

小平次　………。

太九郎　ふふ。だが物事はさううまくは行かねえぜ。思つた通りになる世の中なら、おらあ天下を取つてゐらあ。人の好く人われも好くといふが、おちかには憚りながらこのおれも惚れてゐないわけではねえ。ふん。そこに氣のつかなければ不念なお方よ。知つてゐる上だとすれば、ずゐぶんいけ圖々しいといふことよ。

小平次　………。

太九郎　おれから見ればな。いかなおちかも、もうそろそろ眼のさめる頃なのだ。全體、あの女の夢も長すぎたといふものさ。（冷笑）おれはいつもお前を氣の毒だとおつてゐるんだ。おちかの浮氣の相手をしてゐて、いつか捨てられるにきまつてゐる。いゝ話でも江戸を放れる旅といへばきつと外してゐたお前のこれまでのこと。おれは腹の中で、あゝ可哀想なとおもつてゐた。云へば、いろ〳〵損もしてゐるだらう。殊によると出世の蔓もはづしてゐるかも知れない。それもこれも俺の女房のためなんだとおもへば、いづれは氣の毒だつたと、挨拶をしてもいゝと思つてゐたくらゐなんだ。

小平次　（顏色をかへる）

太九郎　おちかに惚れてゐるのはおれも同じだ。可愛がりかたはいくらもあるからな。お前の眼から見れや、惚れてゐる女房なら、もつと大事にしてやりさうなものだとおもつてゐるのかも知れねえ。だがおれにはおれのやりかたがあるんだ。はつきり云つて置くがな。いくらおちか

を手荒くしても、おれもおちかには惚れてゐるのだ。

小平次　………。

太九郎　もしたつて取りたくばお前も役者だ。おちかに俺を捨てさせて見ろ。いゝか。遠慮はいらない。駈け出させて見ろ！　色の諸分、ぬれの手管、力の限りやつて見ろ。おい。二枚目はお前の本役ぢやあなかつたかな。

小平次　お前に云はれるまでもなく、手管も駈引も知らなくはない。が、眞底惚れゝば裏も表もない。おれは生野暮の一本槍だ。その苦しいのが重なつて來たのだ。白痴になつて頼んだのだ。

太九郎　ふん。それはなんともお氣の毒だつたな。まア女の心は女次第。早い話は、俺にもわからない。仕方がない。やるところまでやつて見ようぢやねえか。ずゐぶん腕に撚をかけておちかをおれから取上げて見たらよからう。（間）もうこの話は、これで打切りにしようぢやねえか。

小平次　ぢやあ、どうあつてもきいては呉れないんだな。

太九郎　………。

小平次　ではよし。（間の後）もうたのむまい。

太九郎　………。

小平次　おれも男に生れて、生れて初めての惚れ抜いた女だから、やるところまでやつて見る。（間）きつと女房にして見せる――！

太九郎　………。

小平次　（つぶやくやうに）役者ぐるひと云やがつたな。（間）相手にされざあ仕方がない。惚れた一心、どうなるか見せてやらう。

太九郎　（冷笑）

小平次　女の心は女次第と云つた、その言葉を忘れて呉れるな。

太九郎　自惚の強いのはおれの生れつきだがな。（笑ふ）おちかとおれとはどこまでも鴛鴦さ。

小平次　（青ざめた心持）放鴛鴦といふのもあるからな！

太九郎　（長い間の後）人の嫁御と竹に咲く花、よやとおもへば曲もないと、八幡の唄の文句にもある。小平次。おれはなさけない心持がする。（間）馴染がひにいつてきかせてやるが、必ず深入して浪にさらはれるなよ。海底に捲き込まれて、男一匹鮑に化けるな。ものは潮時がかんじんだぞ。

小平次　きいた風な事をいふな。かうなればおちかは友達の女房ぢや無え。天が下の一人の女だ。惚れた男の力を見てゐろ。

太九郎　だが亭主の神通力を忘れるな。土壇場の龕燈返しといふのもある。魂消てギバに落ちるなよ。

小平次　まあ、せい〴〵鼻毛をのばせ。朝茶の斑猫、寝酒の鴆毒、女房に一服盛られねえやうにしな。
太九郎　なんだと。（顔色をかへる）それはどういふ事だ。
小平次　小平次、もう恥も外聞も知らねえ。添ひ遂げる爲に身一ツあれば、おちかは見事取つて見せるんだ。
太九郎　うむ。さういふ身一ッの大事の命を、……もしなくしたらどうする氣だ。
小平次　もとより命を賭けての事だ。（笑ふ）死身になつてやる事だ。
太九郎　おもしろい。かうしてくれる！
小平次　なんだと！
太九郎　（船板で小平次の額を打つ）
小平次　（叫んで倒れる）
太九郎　この世にはおれが控へてゐる。いゝ加減にあきらめろ！
（打つ。）
（小平次沼の中へ落ち込む。）
（暮色ゝる。）
（風すこし吹く。）
（太九郎、おびえて艪をこぎはじめる。）
（舟首の方から藻にからまれ、血にまみれた小平次が這ひあがつて來る。）
太九郎　畜生！
（亂打し、また沼の中へ突き落す。）
（水音がしづまると、時鳥がしきりに啼くのがきこえる。）
（彼は、薄ぐらくなつた沼の上を見廻し叫び聲をあげる。）
太九郎　おゝ、まだ生きてゐる。（思はず艪を放つと舟はぐる〳〵廻る）おのれ、逃がすものか。（また漕ぐ）

――幕――

第二幕

前の幕から十日ほどの後、江戸、太九郎の家。隅田川近く。夕暮、河の流れる音。中二階の階段。軒に青い釣葱が下つてゐる。ずつと上手に高い隣家の塀。忍び返しの中の松の大樹がこの小家の上からおほひかぶさつてゐる。外は雨が降つてゐる。
おちか、鏡に向つて髪を撫でつけてゐる。
小平次喘ぎ乍ら出て來る。死人のやうな顔に、傷あとが生々しい。門からのぞく。
しばらく外をうろ〳〵してゐる。

やゝ激く雨の音。舞臺すこし暗くなる。

小平次　（低い聲で）おちかさん！

おちか　（耳をすます）

小平次　おちかさん！

おちか　はい……どなた

小平次　あたし！

おちか　だれ？　（立つて小平次を見る。よくわからない）どうぞそこをおあけなすつて。

小平次　（小聲で）あたしだよ。小平次だよ。

おちか　小平次さん？　まあお前……

小平次　ちよつと顏を貸して呉れないか。ちよつとこゝまで出て來てくれ。
（おちか入口をあける。）

おちか　まあどうなすつた。どうした事なの。まアなんといふ風をしてゐなさる。

小平次　やうやくやつて來たんだ……まだ家へもかへらないのだ。

おちか　太九郎は一緒ぢやないんですか。

小平次　うん、おれ一人だ。

おちか　全體どうしたんです。まあ、ひどい傷をして。何か道中で間違ひでもあつたんですか。

小平次　………。

おちか　まあおはいりなさい。誰もゐません。わたし案じ切つてゐたのですよ。

小平次　案じて……太九郎をか、この小平次をか。

おちか　………。

小平次　二人か。

おちか　まあちよつと家へあがつて、とにかくその衣服をどうかしなくては。なんといふ青い顏をしてゐるのでせう。それに怪我をして……

小平次　（笑ひに似た表情）

おちか　お前さん、死んだ人の樣な顏をしてゐますよ。（間）全體、道中で何が起つたの。きかせて下さい。

小平次　うん！　（あせるやうに）おちかさん！　おれは逢ひたかつたぜ。（手をとる）

おちか　（輕い狼狽）あたしだつて……。

小平次　おちかさん、お前の待つてゐる太九郎はもう歸つては來ねえよ。

おちか　歸つて來ないつて……それはどういふわけなの。

小平次　死んだのだよ。

おちか　………

小平次　太九郎は殺されてしまつたんだ。

おちか　本當ですか。だれに。どうして。

小平次　おれにだ。小幡小平次に殺されたんだ。

おちか　………。
小平次　お前、どうする。（手をとる）　おれが太九郎を殺したのだと云つてゐるのに。
おちか　そんな事が。そんな事があるものかね。
小平次　ないとおもふのか。
おちか　でも、お前が。
小平次　おれにそれが出來ないといふのか。
おちか　………。
小平次　やつたのだ。たしかにおれが殺したのだ。太九郎はもう此の世にゐないのだ。
おちか　あゝ！（間の後）お前氣でもちがやしないか。
小平次　おれはお前を太九郎に渡したまゝでは置けないんだ。（間）おれは太九郎を郡山で殺した。あさかの沼へ連れ出して、舟の中で一突きにした。
おちか　………。
小平次　死骸は沼の中へはふり込んでしまつた。ふゝ。沼の中へだぞ。
おちか　（よろめく）
太九郎　……その足でおれはすぐ立退いて來たんだ。この額の傷もその時の傷なのだ。太九郎にな。太九郎に打たれた傷なのだ。（間）おれは打つて打つて、打ちのめされたのだ。（間）彼奴め！

おちか　………。
小平次　まあ、それはいゝ。それで、困つたことに、この事がぢきお上に知れてしまつた樣子がある。
おちか　あゝ、どうしよう。
小平次　お前とおれとの事は、もう久しい事だ。誰も知つてゐる仲だから、お前の事がもとでの爭ひだといふのはすぐわかるだらう。
おちか　（泣く）
小平次　もしおれが今夜にでも召上げられたら、おれはお前と相談の上で殺したのだと申立てる心算でゐる。お前もどうぞその心算でゐて貰ひたい。（間）いゝだらう。
おちか　そんな事が……。
小平次　出來ないと云はうとおもつたのでないだらうな。おちか。そんな不實なお前であるわけはない筈だからな。
おちか　でも。
小平次　おれの口からさう申立てないでも、どうせ世間ではさう評判するだらう。（間）お前、おれが憎くなつたんぢやあるめえな。
おちか　………。
小平次　亭主の敵だとでもおもふか。
おちか　……　……。
小平次　憎いなら殺して呉れ。命は惜しくねえ。命はお前

のためにだけ、ながらへて來たんだ。それともおれを突出してもいゝ。おれは手出しはしやしねえ。

おちか　………。

小平次　その代り、おちかと腹を合せてやつた事だとは、一應云つて見るつもりだ。

おちか　お前……。

小平次　おちかさん。おれはまだ死にたくはねえ。おれはまだ生きてゐたい。お前ともう一度あたゝかな夢を見たい。どうぞおれを不憫とおもつて吳れ。可哀想だとおもつてくれ。

おちか　小平次さん。（泣く）ゆるして下さい。

小平次　おちかさん！　一緒に江戸を逃げて吳れないか。

おちか　……　……。

小平次　もしかうしてゐる內にでも召捕られたら、人も知つたお前との仲、誰も噓とはおもふまいから、磔も獄門もおれ一人では受けない。きつとお前を道連れにして死ぬ。

おちか　………。

小平次　だが、おれはもつと生きのびたい。これからすぐ上方へでも逃げてくれ。

おちか　（泣く）

小平次　二人の男を持つたからには、どうせ末まで無事に濟むわけはない。やるかとるかの爭ひがいつか起るとは、かねて覺悟をしなかつたでもなかつたらう。こゝまで來てしまへば、今更思案をするものはないだらう。太九郎を殺した罪で二人そろつてお仕置きを受けるか。人眼にかゝらないうちに、こゝを逃げて生きられるだけ生きるか。どつちか一ッしかありはしまいではないか。

おちか　あい。

小平次　女敵の太九郎を殺したのも、もと／＼お前を手に入れたいばかりのことだ。どうぞおれと逃げて吳れ。な。逃げてくれ。

おちか　あい。

小平次　惡緣だとおもつて運をおれに預けて吳れ。（泣く）可哀想だと思つて吳れ。

おちか　（泣く）わかりました。お前の心持はよくのみ込めました。生きられるだけ生き、時が來たら一緒に死にませう。

小平次　おゝ、では逃げて吳れるか。

おちか　（うなづく）

小平次　雨もやんだ。もう日も暮れかけた。お前も急いで支度をして吳れ。これからすぐに出掛けるとしよう。こまかな支度は途中でも出來ようから。

おちか　ではさうしませう。待つてゐて下さい。二階の小

簞笥にすこしは金もあるのだから……あれだけは持つて行かう！

小平次　（うなづく）だが、急いで呉れ。

おちか　えゝ。待つてゐて下さい。すぐですから。

（おちか、うちに入り二階へ上つて行く、やゝ間。）

（太九郎、旅支度で出て來る。）

（小平次、土間に蹲る。）

太九郎　（門口で）おちか。おちか。おちか。

（返事がない。）

太九郎　おい。おちか。（舌打。わらぢを取る）やれ／＼、くたびれた。（小平次を見る）誰だ。そこにゐるのは誰だ。

小平次　（だまつて立ち上る）

太九郎　誰だ。（叫ぶ）小平次だな。

小平次　（陰鬱に）うん！

太九郎　おのれ。やつぱり死に切れずにゐたのだな。

小平次　さうだ。

太九郎　（道中差を拔く）

小平次　（絶望的に）やつぱりさうするのか。（間）また殺すつもりか。

太九郎　……　……。

小平次　殺すのなら殺して見ろ。おれは手出しはしねえ。やうやくのことで、よろけよろけ、小石や草の根にさへつまづいて、おれはこゝまで歸つて來たのだ。見ろ、この死人のやうな手を。顏を……。

太九郎　（唸る）

小平次　おれはもう死んでゐるのも同じなんだ。どうともするがいゝ。殺すなら殺せ！

太九郎　………。

小平次　殺さないのか。

太九郎　………。

小平次　身體は死んでも魂は死なねえ。さあ、やつて見て呉れ。

太九郎　……　……。

小平次　（極めて陰鬱に）早く殺せ！

太九郎　（叫ぶやうに）許して呉れ。

小平次　……　……。

太九郎　おれには殺せない。あゝ、おれは恐ろしい。

小平次　……　……。

太九郎　お、おちかは貴様にやる。き、き、きれいにやる。連れていけ。も、もういやだ。おらあ、もいやだ。

小平次　ほんとうか。

太九郎　誰が嘘をいふものか。ほんとうだ。ほんとうだ。（ふるへながら）おれはこはい。おれが負けた。水の上

に見たお前の姿、まぼろしだとばかりおもつてゐたのに……。こゝまでやつて來たとは……生き返つて來ようとは……おゝ！　助けてくれ。許して呉れ。おちかを連れて行つてくれ。

（おちか、二階から下りて來る。）

おちか　あゝ！　お前、太九郎どのぢやないか。お前、やつぱり生きてゐたのか。

太九郎　おちか。

おちか　小平次さん。お前は拵へ事をしたのだね。太九郎を殺したなんて……まあなんといふひどい嘘をいつたんだらう。

小平次　おちかさん。おれと夫婦になつて呉れ。

おちか　お前……そんな……。

小平次　太九郎もさういふのだ。おれと一緒に行つて呉れ。

おちか　そんなことを云つて、お前……。

太九郎　（おちかを見まいとする）行け。行け。行つて呉れ。おれはもう何もかもいやになつた。

おちか　まアお前。わたしはなんだかわけがわからないぢやないか。

太九郎　（つぶやくやうに）いやになつたのだ。こはい。おれはもういやだ。

小平次　行かう。天下晴れて行かう。

おちか　（間）太九郎どのも行けといふのか。

太九郎　………。

おちか　もし。ほんとにわたしに出て行けといふのか。

小平次　おちかさん！

おちか　太九郎どの、お前、わたしと別れるのかい。

太九郎　（おちかを見る）おちか！

小平次　約束だ。おちかさん。（おちかの手を取る）さあ、早く行かう。

太九郎　（思ひ切つて小平次に切りつける）

小平次　（叫んで太九郎に組みつく）

おちか　（小平次の足をとる。小平次倒れる）

太九郎　（馬乗になつて突く）

おちか　さうだ。うまく行つた。嘘つきめ！

太九郎　（小平次の胴へ足をかけて刀を抜きとる）

おちか　咽喉を、咽喉をもう一ツ。

太九郎　だ、大丈夫だ。もう、大丈夫だ今度こそは死に切れたらう。あゝ！

おちか　よかつた。あゝ！　よかつた！　あゝ、こはかつたこと。わたしこんなにふるへる……もうすこしで……

太九郎　たうとう死んでしまつた。（長い間。不意に聲をあげて小供のやうに泣出す）あゝ！　たうとうおれは殺してしまつた。古い友達を殺してしまつた。

おちか　(ぢつと男を見てゐたが、やがて情慾的に抱きつく)

――幕――

第三幕

眞暗でなんにも見えない。海の音がきこえる。舞臺中央に、太九郎とおちかとが何かに腰をかけて息んでゐる。旅裝。

太九郎　(長い沈默の後)　さあ!　そろ〳〵出かけようか。

おちか　もつとやすませておくれ。まだ一ト足もあるけさうもない。

太九郎　我慢をして立つて見ろ。今から參つてしまつては困るぢやねえか。

おちか　そんな邪慳な事をいはないでおくれ。わたしはもう草臥れ切つてしまつたのだから……。

太九郎　おれだつて草臥れてゐるなあ同じだ。だが、朝にならないうちに、次の宿を通つてしまはねえぢやならねえんだ。

おちか　あたし、とてもそんなにはあるけないよ。

太九郎　だからと云つて、こゝにかうしてゐられるとおもふか。

おちか　………。

太九郎　さあ。さあ。立つて見ろ。

おちか　(試みてすぐやめる)　とても駄目だよ。

太九郎　そんな事つてあるかい。おれだつて同じだけあるいてゐるんだ。もつと氣に張を出せ。もつと、しやんとしろ!　さあ、立つて見ろ!

おちか　あたしにはとても出來ませんよ。

太九郎　………。

おちか　あたしはもう根が盡きたんだ。

太九郎　ぢやあ、どうする氣なんだ。

おちか　あたしはいつまでもかうしてやすんでゐたい。

太九郎　そしたら朝になつてしまふぢやねえか。

おちか　朝になつてもいゝ。

太九郎　役人がおれたちを探してゐるのを忘れるなよ。

おちか　あゝほんとに……。(間)　もう幾日こんなおもひをしてあるいてゐるだらう。そして、あと幾日、あと幾年。かうしてびく〳〵あるいてゐればいゝのだらう。

太九郎　もうぢきだ。

おちか　きつと死ぬまでだらう。あゝいやだ。

太九郎　いや。もうぢきだといつたんだ。あと四五日でゆつくり休めるのだ。那古まで行つてしまへばもう安心な

んだ。

おちか　わたしはこゝでもう澤山だよ。（間）まあ、なんといふ暗い晩だらうね。星もない。海の音があんなにきこえるぢやないか。（間）磯の匂ひがするねえ。（間）もうぢき秋が來るんだらう。（間）お前さん、あの時からもう三月になるねえ。

太九郎　あの時のことを云ふなつてことよ。（間の後）おちか。お前はゆうべ旅籠の前の、行燈のかげに立つてゐた男を氣がつかなかつたか。

おちか　氣がつかなかつたよ。あたし……。

太九郎　そいつは小平次にそつくりだつた。（間）おい、小平次は死んではゐねえんだぜ。（間）實は、おれはお前がこはがるとおもつて云はずにゐたんだがな、小平次は生きかへつたのだとよ……。

おちか　そんなばかなこと！

太九郎　いや、ところがほんとなんだ。あいつは不思議な命を持つてゐやがる。あさかの沼でも確かに一度死んだのがあの始末だ。それが生きて江戸までやつて來たやつだ。

おちか　だけれども、あのとき刀で背中から突き透したぢやないか。

太九郎　うん。突き透した、さうして、おれたちは家を逃げ出した。

おちか　……それからかうして三月も旅をし續けなのだからねえ。くたびれるわけだ。

太九郎　だが小平次は手當を受けて息を吹き返したのださうだ。どこかで生きてゐやがるんだ。（間）あいつは殺しても殺しても死なない奴なのだ。あいつは化物だ。

おちか　そんなばかげた事があるでせうか。誰がそんな事をいふの。ばか／＼しいぢやないか。

太九郎　いつかのお寺にかくれてゐたとき、一度町へ出て行つたことがあつた。あの時、山村座の彌七に逢つてきいて來たのだ。おれはそれを今までだまつてゐた。が……それはほんとの事なんだ。

おちか　…………。

太九郎　おれはそして小平次を見たのだ。（間）昨夜、あわてゝ旅籠を立つたのも、役人ぢやあねえ。小平次を見かけたからなんだ。それで夜中にそつと出し拔いたんだ。行燈の影で、そつとおれたちを見てゐたのが、たしかに小平次だつたにちがひねえ。

おちか　……それは間ちがひだよ。こんな處まで來る筈はないぢやないか。（間）だけれど、どんな風をしてゐたの、その男は。

太九郎　顏だけしかわからなかつたがな。眞青な顏をしてゐて、瘦せてな。あいつ、きつとおれたちのあとを尾行

けてゐるにちがひねえ。おれたちのあとを、とうから旅をしつゞけてゐるにちげえねえ。執念深い奴だ。

おちか　そんな事はあるものぢやない。

太九部　いやほんとうだ。おれたちの隙を探してゐるのだ。あいつは蛇のやうな奴だ。いつか怨を晴らさうとしてゐるのだ。（間）それだからおれはいそぐんだ。

おちか　………。

太九郎　……あいつの事だから、どうかしてお前を手に入れる氣なのだらう。おゝ、なんといふやつだらう！

おちか　でも、なんぼなんでも、もう諦めてゐるにちがひないよ。お前、それは眼がどうかしてゐたのだよ。きつと。

太九郎　いや。おれは確かに見たんだ。（間）さあ。早く行かう。まつたく愚圖々々かうしてはゐられねえ。早く小平次の來ねえ處まで行かう。

おちか　だが、もしあいつが生きてゐるとしたら……そんな處つてこの世にあるか知ら！

太九郎　あつてもなくつても、とにかくあるかなくてはならねえのだ。かうしてゐられねえぢやねえか。

おちか　でも、わたしはだめだ。くたびれて、もうあるけないんだもの。

太九郎　小平次がこはくねえのか。

おちか　小平次が生きてゐれば、わたしたちはお仕置を受けないですむぢやないか。わたしたちは人を殺したわけではなくなるんだからね。罪はずつと輕いわけぢやないか。

太九郎　だが、小平次はさうはおもつてゐねえ。おれはあいつが生きてゐるだけこはいのだ。

おちか　また殺してやればいゝぢやないか。幾度でも殺してやればいゝ。

太九郎　あゝ！（間）それがお前の本性なのかも知れねえな。だが、もうおれにはそんなことは出來ねえ。金輪際出來ねえ。

おちか　では小平次に殺されてしまふぢやないか。

太九郎　だからよ、だから早く逃げようといふのぢやねえか。

おちか　でも……小平次はやつぱりわたしも殺す氣か知らん、あのひとが……。

太九郎　………。

おちか　ねえ、お前どう思ふ？

太九郎　知らねえ。お、おれはそんな事を考へてゐねえ。

おちか　きつとわたしはうまく行くとおもふよ。

太九郎　おい、お前はおそろしい女だなあ。あの時、小平次を殺させたのはお前ぢやねえか。あのときお前がおれ

に手を貸したのを考へると、おれはいつも淺間しいさみしい心持がするんだぜ。

おちか　でもお前はあさかの沼の時にも殺しかけたのぢやないか。わたしがどうしないでも、お前一人だつてあの人を殺しかけたぢやないか。

太九郎　うむ。しかし、お前といふものがなければ、あの、かあいさうな小平次をあんな眼に逢はせるやうな出來事はおこりやしねえんだ。

おちか　お前はなんでもわたしのせゐにするのだねえ。

太九郎　ゆるしてくれ。そんな氣ぢやねえのだが……おれもたしかにわるかつたんだ……(間)　だが、もし小平次がおれを殺したあかつきには、今度はお前が、平氣であいつの女房になりさうな氣がするんだ。それがおれは……それがたまらねえんだ。

おちか　ほんとうにお前はこの頃疑ひ深くなつたねえ。いつかも、宿屋の隣の客とわたしが何かをかしいやうに疑ぐつたりして……。

太九郎　どの男もどの男も小平次に見えるんだ。(間)　さあ、そんな事はどうでもいゝ。もうほんとに行くとしようぢやねえか。(間)　おい！

おちか　お前、一度わたしをぎゆつと抱きしめておくれな。ぎゆツと……。

太九郎　………。

おちか　しつかりと抱いて……そしてわたしにもつと元氣を出させておくれな。このまんまではどうしても氣がくじけたやうで立てないよ。もつと氣持を燃え上らせなければ、身體も足もいふ事をきかないもの。(間)　お前、抱いて呉れないの。

太九郎　(抱かうとして驚く)　や！

おちか　どうしたの。そんな聲を出して。

太九郎　おう。(間の後)　い、いま。お前とおれとの間に誰か人が立つてゐたぢやないか。

おちか　をかしな事をいふのだね。氣のせゐだよ。しつかりなさいよ。

太九郎　(手をのべてすぐやめる)

おちか　(間)　ぢや、わたしはいつまでもかうして坐つてゐるよ。もう役人もこはくなし、小平次だつてちつともこはくないのだからね。

太九郎　(嘆息)　むかしはやさしい氣の小さい女だつたのになあ。どうしてそん事を云へるのだ。

おちか　でも、くたびれてしまつたんだもの。からだも足もぐた／＼で。(風の音)　おゝ寒い。(間)　海の方から冷たい風が吹いてくるねえ。

太九郎　冥土(あのよ)から吹いて來るのかも知れねえ。

おちか　寒い。お前、しつかり抱いておくれでないか。
太九郎　いやだ。おれはいやだ。お前との間に、どうも誰かゐるやうな氣がしてならねえ。お前を抱くつもりで、その、變なやつを抱いてしまふやうな氣がする。（間）小平次のやうな奴々だな。
おちか　（笑ふ）
太九郎　お前、手を出しておれにさはつて見てくれ。おれはなんだかふるへて仕様がねえ。
おちか　暗いね。まつ暗だ！（手を出して男の手にすがる。笑ふ）ほれごらんな。なんともないぢやないか。誰もゐやしないぢやないか。
太九郎　おう、冷い手だな。これがお前の手か。
おちか　（無言。間）お前、あつたかい手だね。（もたれる）
太九郎　（無言。いそいでおちかを押し戻す）
おちか　どうしたの。
太九郎　うむ。おれはこはい。（立ち上る）おれは一人で行く。おれは、やつぱりおれ一人で行く。
おちか　わたしを置いて行くの。
太九郎　お前は江戸へ歸れ。（行きかける）おゝ、おれは一人で行かなくてはならない。
おちか　（立つ）こんな處へ置いて行つてしまふつもりなの。不實な事をするぢやないか。
太九郎　仕方がない。（あるきだす）おれは行くのだ。（間）おれは一人で行く。先の長い旅なんだ。
おちか　連れて行つておくんなさいよ。お願ひだから捨てないで……。
太九郎　お前にもつといゝ道連が出來るまでか。
おちか　どうしてそんな事をいふの。（間）このごろときどきへんな事をいひ出すのだね。
太九郎　（駄々として下手の方へあるく）
おちか　（ついて行く）待つておくれ。待つておくれよ。もつとそろ〳〵あるいて下さいよ。さうすればついて行けるのだから……。
太九郎　おれは急ぐんだ。おれは急ぐんだ。
おちか　（あとを追つて行く）

（舞臺人なし。）

（二人のやすんでゐた正面の奥の暗の中から、小平次のやうな旅人があるいて來る。そして、夫婦のあとをとぼ〳〵尾いて行く。やがて暗の中へ消える。）

（長い間。）

（暗黑。）

（海の音。…………）

――幕――

次郎吉懺悔（三幕）

舞臺　文政時代の江戸

主なる人物

鼠小僧次郎吉　平次郎とも云ふ
馬喰町の直吉
分銅伊勢屋四郎兵衛
野田の傳六
御家人　佐倉吉之助
直吉子分　與吉
赤肌の平造
法運寺和尚　無觀
福元亭主　松五郎
直吉女房　おこま
おこま母　おとく
四郎兵衛娘　おくみ
次郎吉妹　このじ
福元女房　おたき
其他

序幕　市ヶ谷八幡下蕎麥屋

文政年間正月晦日夜。市ヶ谷の小さい蕎麥屋。
幕開くと長八、五兵衛、市太郎が入つて來る。三人とも店者風で火事見舞の歸りである。門口ののれんをくゞる時提灯の火を吹き消し、かぶつてゐた手拭をとる事などある。
貸本屋に化けた目明しの馬喰町の直吉が一人で荷を傍へ置いて蕎麥を喰つてゐる。入つて來た三人は賑やかに上へあがる。

松五郎（福元の亭主、六十位）入らつしやいまし。いゝあんばいに鎭りました樣で。
長八　お騷々しい事で、然し二三軒ですみました。
小女　何を差上げます。
長八　熱いのを三杯。
五兵衛　あたしはもりを喰べる。
市太郎　この寒いのによく冷たいのなんか喰べられるね。
五兵衛　でも、蕎麥は冷たいのに限る。
長八　ではもりを一ッ、かけ二ッ。
小女　へい、畏りました。もり付きかけ二ッ。（やがて運ぶ）

直吉　姐さん、お代りだ。
小女　へい。
直吉　お内儀さん、さつきの樣なお客の時には客商賣もいやでございますね。
おたき　女の方であんなのも珍らしうございますねえ。
直吉　あれは有名なのんだくれですよ。あたしは新宿へかうして貸本を背負つて毎日行きますが、髮結のおりんと云つて、仕樣の無い女ですよ。腕はいゝと云ふ事ですがね。
おたき　へえ、さうでせうねえ。とかく腕のいゝと云ふ人には癖のあるもので。
松五郎　（釜前から）わたし共の商賣でも釜前の職人で、達者な奴にはよく手なぐさみに凝る奴とか、女狂ひするとか、喧嘩早いとか云ふのが多うございましてね。
直吉　さうでせうねえ。渡りの職人などはとかくさうなるもので、こちらの樣に大將が自分でやる程堅い事はありません。
松五郎　へゝゝ、どうも。店は小さうござんすが、どうかしてうまいそばをお客樣に上げたいと思ひましてね。
直吉　結構ですよ。（間）いつも御繁昌でねえ。
松五郎　有難う存じます。お蔭樣で。
直吉　出前持の若い衆は幾人です。
松五郎　唯今は一人で。それにあなた、この邊はお屋敷で、出前もほんの近所だけでございますからね。へい、上つたよ。
小女　へい、お待遠樣。（ト直吉に出す）
（消え半鐘の音。）
直吉　消え半鐘ですね。晦日だと云ふのに火事を出してたまりませんね。
松五郎　それにあなたこの不景氣で燒けてはたまりません。でも、貸本屋さんなどは、却つて不景氣の方が御繁昌でせうなア。
直吉　さうも參りませんよ。
おたき　近頃はどんな本が出ますね。
直吉　爲永春水と云ふ作者がひどく全盛ですよ。
おたき　春告鳥や梅ごよみの作者ですか。
直吉　さやうです。二代目の南仙笑蘇滿人です。これがまアひどく出て、あまい處で大もてゞす。
おたき　色つぽいものばかり書く人ですねえ。
直吉　もとは堅い馬琴張りのものを書きましたがこれは不得手です。この春水も以前は貸本屋で、越前屋長次と云つてわたしの樣に荷をかついでゐたんださうで。
松五郎　おやおやさうですかえ。
直吉　講釋師の伊藤燕晉の弟子にもなつたりした人でして

ね、まア道樂者ですな。
おたき　いゝ男でせうねえ。
直吉　處が大ちがひで、なんだか醜男だと云ひますよ。
おたき　それでよくあんな色つぽい事が書けますねえ。
松五郎　お前、そこは商賣だもの。
おたき　商賣でも實地やらなくては書けますまい。
直吉　實地やらないでも、聞いて書いたり空に拵へたりしてゐるんでせうな　實地にしたくもそんなに色男でないから、せめて人情本でも書いて一人で悦に入つて、筆を握つてはにや／＼してゐるんでせうよ。
おたき　あはゝゝ　大きにさうかも知れませんね。
長八　姐さん、代りだよ。
小女　へい。
（外から出前持の平次郎實は鼠小僧次郎吉、道具を擔いで歸つて來る。提灯を帶の間へ挾み、小だらしのない姿、どう見ても氣の利かない擔ぎとしか見えない。よごれた手拭を間拔に腰にはさんでゐる。）
次郎吉　お寒い。親方、今夜は雪ですぜ
松五郎　御苦勞々々、處でもう一つ、佐内坂下の田村樣だ。
次郎吉　へい。あの男やもめの旦那だね。寢酒付のおきまりの出前だ。
松五郎　（笑ひ乍ら）そんな事を云ふもんぢやねえ。あの旦那は古いお得意だ。
次郎吉　山の手の出前は遠くつていやだよ。親方。あつしや、和泉町新道の鳴子蕎麥にも、小船町二丁目の朝日蕎麥にもゐたが、下町にはこんな遠い出前はねえよ。
（直吉ちツと次郎吉を見る。）
おたき　平次郎、お前、すまないがさうしてゐる間に、ちよいと裏の戸袋を直して異れないか。
次郎吉　戸袋がどうかしたんですか。
おたき　外れてしまつたんだよ。
松五郎　そんな事で平次郎をつかつちやいけねえな。擔ぎ一ッでの勤めだから。
おたき　でも無人の家だから勘忍して貰ふさ。
次郎吉　ようがす　釘箱はどこです。
おたき　鼠不入の上にのつてゐるよ。
次郎吉　わけはねえ、直して上げませう。
（入つて行く。）
おたき　平次郎に此の間入口の戸を直して貰ひましたがありや本當にうまいよ。下手な大工より氣が利いてゐるんだよ。
松五郎　此の節は物騷だから締りに氣をつけねえといけねえ。
おたき　鼠小僧にでも入られてはたまらないからね。

松五郎　鼠小僧は大丈夫だが、不景氣になると、とかくこそ〳〵が多いからな。
直吉　鼠小僧つてお内儀さん何です。
おたき　お客樣、鼠小僧を御存知ありませんか。近頃評判の大泥棒ですよ。
直吉　へえ、鼠小僧なんて云ふと、こそ〳〵泥棒のやうですねえ。
松五郎　處が大ちがひ。然し、感心な泥棒で、町家には入らないで、御手許の豐かな御旗本や、御大名屋敷へばかり入るのださうですね。
直吉　へえ。それでまだ捕らないのですかえ。
松五郎　一度捕つたのださうですが、繩拔をされてしまつたさうで。
おたき　大層はしッこい泥棒ださうですがねえ、障子の穴からでもする〳〵と入り込むのだと云ふ事ですよ。
松五郎　まさかさうでもなからうが、とにかく珍らしい泥棒で、毎日々々あつちでもこつちでも百兩二百兩と盜まれるさうですねえ。木挽町の溝口信濃守樣のお中屋敷などへは、圖々しいぢやありませんか三度も入つたさうですよ。そのたんびに大變盜まれるんださうで……。
直吉　へえ。よほど締りがわるいのでせうな。
おたき　なアに、いくら締りがよくつても、駄目なんださうで。
（次郎吉、奥から出て來る。）
次郎吉　お内儀さん、今度は大丈夫ですよ。
おたき　ありがたう。
直吉　（次郎吉を見ながら、わざと驚いた樣に）おや、お前さんは平次郎さんだね。
次郎吉　（直吉を見る、わざと平氣で）どなたかお見外れしまして。
直吉　平次郎さん、わたしだよ。（ちッと見つめて）直吉だよ。餓鬼の時からのいたづら仲間だ。忘れはしまい、直吉だよ。
次郎吉　（きつとなる）
直吉　（抑へる）平次郎さん、久し振で、なつかしいねえ。
おたき　おや〳〵、お客樣はこれを知つておゐでゞすか。
直吉　えゝ、知つてゐる段ではありません、子供のうちの仲よしです。わたしはかうした貸本屋、これはかうして蕎麥屋の擔ぎ、變れば變るものぢやありませんか。
長八　姐さん、勘定だよ。こゝへ置くよ。
小女　へい、ありがたうございます。
長八　ぶら〳〵出掛けようか。
市太郎　行かう。（三人連の客歸る）
松五郎　おたき、毎度有難うござい。

長八　左樣なら。

（次郎吉、腰をかけて煙草を吸ふ。）

直吉　おい、……平次郎さん、さう變な顏をしなさんな。おいらは今日は貸本屋だよ。な、鼻つたらしの友達同志だ。

次郎吉　ぢやア、直さん、今夜は昔の友達か。

直吉　知れた事だ

次郎吉　有難え。恩に着ます。

おたき　何だか味な事を云つてゐるね。

直吉　なアに、ずッと以前、ちよいとした意氣な話で、この男がわたしへ不義理をしてゐたのさ。見かけによらねえ、平公でね。（笑ふ）

松五郎　あいよ、上つたよ。

次郎吉　へい。（提灯に火をつけながら）　ぢやア直さん、今夜はこれで逢はねえのかえ。

直吉　もう二度と逢ひたくねえものだね。

次郎吉　代りをよこす心算ぢやねえか。

直吉　なあに。（考へながら）　そんな氣もねえのだ。

次郎吉　有難え。（道具を擔ぎながら）　ぢやア安心して行つて來ようか。

直吉　すぐ歸るのか知らねえが、己も忙がしい。まア丈夫でゐなせえ。

次郎吉　お前も達者でゐてくんなよ。ぢやあ、さよなら。

（出て行く）

（直吉ぢッと考へてゐる。）

（時の鐘きこえる。）

直吉　（考へ事からさめて）　これはとんだお世話でした。姐さん、置くよ。（ト拂つて荷を擔ぐ）

おたき、小女　有難う存じます。

直吉　……しかしこれでは氣が濟まねえ。

おたき　へ？

直吉　ねえ御亭主、平次郎は佐內坂下の方へ行つたのですね。

松五郎　へえ！　さやうで。ぢきに歸つて參りますよ。

直吉　（かつぎかけた荷を下して）　ちよつと思ひ出した內緒の用がある。すみませんがこの荷をこゝへ置いといて下さいな。

おたき　えゝ、えゝ！　よろしうございますとも。行つていらつしやいまし。

直吉　（前掛を折つてはさみ、尻をはしよつて）　ではぢきに歸つて來ますから。

松五郎　おわかりでせうねえ、すぐ濠側から番小屋の橫を入つた處で……。

直吉　大抵わかつてゐますから……。

（あわてゝ外へ出ようとする。）

（出會頭に作次郎とおよねの二人、若い職人とその情婦の町娘と云ふ體で、こゝへ入るのに打かる。）

およね　あれ、びつくりした。

作次郎　氣をつけろい。

直吉　どうも相濟みません。（早足に去る）

およね　まアほんたうに出會頭でびつくりしたこと。

作次郎　そは／＼したへんな奴だね。（二人中へ入る）

松五郎、小女　いらつしやい。お上んなさい。

（二人、あがる。）

――道具廻る――

佐内坂下空地の場

舞臺端、右から左へ往來で上手から奧に佐内坂へ通ふ心。往來の向ふは溝、その向ふは空地で枯草が生えてゐる。正面は高い崖になつてゐる。處々崩れてゐる。空地下手には枯柳、崖の下に樫の木が二本竝んで立つてゐる。溝の傍に大きな石が一ツころがつてゐる。幕あくとすこし間を置いて、次郎吉蕎麥の道具を擔いで通りかゝる。

下手から「おい、おい。次郎吉。」と云ひながら直吉出て來る。

次郎吉　（だまつてあるいて行く）

直吉　おい、次郎！　己だよ。直吉だよ。

次郎吉　（振り向いて立止る）　なんだ、やつぱりお前か。

直吉　うむ。

次郎吉　ぢやア見逃す氣は無かつたんだな。

直吉　次郎吉、勘忍して呉れ、おいらも目明しの直吉だ。

次郎吉　ではさつきのは糠喜びか。

直吉　（苦しさうに）　さう云はれると己アまつたく情無い。どうか次郎、許して呉れ。己はお前を探してゐたわけぢやアねえのだ。何の氣も無く、はいつた蕎麥屋た。まさかお前に逢はうとは思はなかつた。

次郎吉　然しまアよく己だと云ふ事がわかつたな。

直吉　初めはさつぱりわからなかつた。だがあすこの内儀さんが、お前に戸袋を直させたときなア、今評判の鼠小僧……しかも繩抜をして姿をくらましてゐる大盜人が、建具屋に奉公してゐた事をふいと思ひ出したのだ。

次郎吉　お前に聲をかけられた時、己は百年目だと思つたよ。

直吉　さう云つて呉れるな。己はお前に逢ひたくなかつたのだ。處が因果だ。思ひがけない處で、たうとう逢つてしまつたのだ。

次郎吉　二度と逢ひたくねえと云はれた時は、思はずほろ

りとしたわけだつたが……。

直吉　お前に油斷をさせるつもりで、氣安めに云つたのではない。このまゝ見逃したい。昔馴染の次郎と直でこのまゝ別れてしまひてえと、己はほんたうにさう思つたのだ。

次郎吉　例へちよつとの間でもさう思つて呉れたのは有難え。(道具を道端へ置く) これを擔いで外へ出たとき己は初めて自分が淺間しい奴だと氣がついた。

直吉　淺間しいのは己の事さ。敏つこくつて燕とか仇名を取つたのは餓鬼の内からだ。そいつが身の仇になつて成りたくもねえ目明し稼業だ。年がら年中十手と捕繩をふところへ入れてゐるのも、考へて見る迄もねえ情ねえ渡世ぢやねえか。

次郎吉　情ねえのはおんなじだが、然し直吉！　己は今日が日まで自分のしてゐた事をわるいなどゝはこれつぱッちも思つた事はねえ。大方これからだつてもその通りだらう。金と云ふものは、ある處にはくさるほどあるし、無い處では百の錢でも首を縊る。有り餘る家の金を盜むのは、ちつともわるい事ぢやねえ。

直吉　……だがな、次郎、お前の娑婆も長くはないぜ。今度の詮議の大仕掛けなのはおいらたち仲間でも珍らしいのだ。

次郎吉　うん、それは己も知つてゐるが……(間) だが、己はなんだか一生涯お仕置なんぞ受けねえで濟むやうな氣がしてゐるんだがな。

直吉　鼠小僧と異名をとつて敏つこいのは神業だらうが、縛る方でも拔目はねえや。殊に己は燕直だ、これまでこれと思つた奴を逃がした事は一度も無えぜ。なア次郎公、さつき己はひどく人情にからんでどうしてもお前を縛りたくねえと思つた。それであゝは云つて見たんだが、お前が荷を擔いで出て行くのを見送ると、己はふいと淋しくなつた。おい、こんな心持はわかつてはくれめえな。不人情の話だけれども、幼馴染の直でねえ目明しの直吉が、むら／＼と肚一杯にひろがつたのだ。繩拔をした盜人を眼の前に置きながら逃がしてしまふのはどうも卑怯だと思つたんだ。(間) こいつは一番わけをよく話して、氣よくお繩について貰はなくつちやならねえと思ひかへした。それで、いそいで追つて出て來たんだ。

次郎吉　(冷笑) ふむ。

直吉　このまゝお前を逃がしてしまつたんぢやア、どうも己はお上に對して申譯がねえ。

次郎吉　ふむ、幼馴染は一文にもならねえからな。

直吉　さう見くびつて呉れるな。わづかの手柄にしたくつてお前を縛らうと云ふのぢやねえ……。たゞお上にすま

ないとおもふのだ。

次郎吉　やつぱり同じ事ぢやねえか。

直吉　いゝや。おいらのすまねえと思ふお上は、上役たちで出來上つてゐるものぢやアねえ。人間の世界の事ぢやねえ。己のお上は天だ。おいらの心の中にあるのだ。

次郎吉　（さみしさうに）お前の天と己の天とは、生れた時からちがふんだな。だが己はこのまゝ縛られる氣はねえ。己には己の天陽樣がある。

直吉　ぢやアどうしても己に縛られるのはいやなのだな。

次郎吉　……お前に縛られるのがいやなのではねえ。お前の天に縛られるのがいやなのだ。お上は己はきれえなのだ。上役人はきれえなのだ。

直吉　さうなればお前はたゞの惡黨で、己はたゞの目明しだ。

次郎吉　さうよ。己も男だから、幼馴染を枷にして助けて貰ひてえなどゝ云ふ樣な吝つたれた事は云はねえつもりだ。さりとて逃げも隱れもしねえ。

直吉　（やゝ間の後）ぢやア腕づくで縛れと云ふのだな。

次郎吉　うん。

直吉　子供のうちの仲よしが縛るの縛られねえのと云つて、腕づくでもあるめえが、どれもこれも因縁だらう。（しんみりして）なさけねえ事になるものだな。

次郎吉　直坊、（これもさみしさうに）あの世へ行つたら仲よくしよう。とかく浮世だ。

直吉　（うなづいて）さアつかまへるよと斷つてきつかけもなく手を出すのはこれが初めのしめえだらう。（苦笑ひしながら羽織をとる）男と男の意地くらべだ。負けておめ／＼逃がしはしねえぜ。

次郎吉　うん、一人はこゝの草の露か。

直吉　だが、手前刄物は持つてゐるか。

次郎吉　兇狀持だアな。（ふところから匕首を出す）離した事はねえ。

直吉　拔き合ふ迄は友達同志だ。水盃がしてえものだ。

次郎吉　幸ひ出前の道具があらア。（茶碗を出して）獨身者の夜の內食だ。寢酒を蕎麥屋から取るやつさ。（酌をする）

直吉　首を長くして待つてゐやがるだらう。

次郎吉　違え無え。

（二人は盃をくみかはしてまたしんみりする。）

（沈默。）

直吉　（思はず涙をこぼす）

次郎吉　直吉未練だ。諦めよう！（猪口を地へ叩きつけて破る）

直吉　合點だ。（溝を飛び越えて空地へ渡る）さあ來い。

（短刀を抜く。）

次郎吉　勘忍しねえ。（斬り込む）

（ちら／＼と早春の夜の淡雪ふり出す。）

（直吉次郎吉次第に烈しき立廻り。次郎吉躓づいて轉ぶ。直吉折り重なつて馬乗りになり、短刀を口にくはへ、捕縄を出す。）

次郎吉　うぬッ。

トはね返す。短刀を直吉また持つ。直吉自分の捕縄に足をからまれてよろける。次郎肩先へ斬りつける。直吉叫びながら倒れる。次郎吉今度は脾腹を突くと同時に、直吉は次郎吉の肩を刺す。二人叫んで倒れる。次郎吉また起き返つてもう一度直吉を突く。直吉靜かになる）

（次郎吉苦しさうにうなりながら這つて、溝を渡り、往来までやうやく出てまた倒れる。雪に雨がまじる。上手から辻駕籠出る。駕籠屋、倒れてゐる次郎吉に躓く。）

駕籠屋一　えゝ、こんな處に寢てゐやがつて……（次郎吉うなる）

駕籠屋二　醉拂ひか。（行きかける）

次郎吉　駕籠[illegible]さん、待つて呉れ……苦しい……怪我人だ……その[illegible]籠へのせて呉れ。

駕籠屋一　だめだよ。空ぢやアねえや。

次郎吉　たの、たのむ！

（駕籠、かまはず行きかけると中から垂をはねて分銅伊勢屋四郎兵衛、五十位の立派な商人、顔を見せる）

四郎兵衛　おい駕籠屋さん、とめてくれ。

駕籠屋二　でも旦那、關り合ひになつては……。

四郎兵衛　怪我をしてゐる様子ぢやないか。わしは下りるから早く醫者へ……（駕籠から出る）

駕籠屋一　（澁々提灯で照して次郎吉をのぞく）やツ、大變な血だ。

四郎兵衛　これはまアどうしたと云ふ事だ。ぐづ／＼してはゐられない。と云つてこの邊に醫者は心當りもなし……駕籠屋さん、見付を入ればすぐだから、醫者と云ふよりはわしの家へやつて呉れ。

駕籠屋一　でも、どこの馬の骨だか知れねえのに……。

四郎兵衛　とやかく云つてゐる場合ぢやない。（自分も手傳ひ次郎吉を駕籠の中へ入れる。次郎吉苦しさうにうなる）裏の離れの木戸へつけて呉れ。

四郎兵衛　（雪駄を脱いで帯にはさみ尻をからげながら）おゝ、たうとう霙になつた。駕籠屋さん、さア急いでおくれ。

駕籠屋　へい。

（肩を入れて立つ。雲盛んに降る。）

――幕――

二幕目　分銅伊勢屋離れの場

前幕から一ト月ほど經つた三月初め。麹町分銅伊勢屋の離れ座敷。正面に屋臺、これは障子が閉てゝある。上手に廊下のある心持で、そこから母屋へ通ふ。石井桁の井戸、八ッ手の植込、忍び返しのついた塀、柴折門は下手にある。若樹の山櫻が一本散り遅れて咲き匂つてゐる。午頃の日が障子に照つてゐる。

次郎吉蒲團の上に坐つてぢッと庭を見てゐる。

庭下駄を履いてこゝの一人娘おくみ出て來る。十六ほどの美しい、大家の娘の拵へ。黄八丈襟付縫のある半襟、島田、黒繻子に緋鹿ノ子の腹合せ帶などすべて古風に育つてゐる心持。

おくみ　平次郎さん、氣分はどんな。

次郎吉　おや、これはお孃樣、よいお天氣でございますね。おかげ樣でもう傷もすつかりよくなりました。この分なれば一日二日のうちに起きられさうでございます。

おくみ　無理をなさるといけませんよ。

次郎吉　へい、有難う存じます。然し、旦那樣の篤い御情けで、すんでに死ぬ筈のわたくしがたうとう命を取り止めました。

おくみ　みよりのないお前さんだから、いつまでもこゝにゐなさるがいゝよ。ちつともかまやしないのだよ。（あどけなくませて云ふ）

次郎吉　あんまり御親切にして頂くので罰が當ります。ばちと、申せばお孃樣、今日は三味線の御稽古でなくて、さきほど琴を彈いておゐでゞしたね、

おくみ　もうぢきお師匠さんが來るので、下ざらひをしてゐましたのさ。

次郎吉　今日は琴のお師匠さんがいらつしやるのですか。

おくみ　月二さいで今日と十七に來てくれるのだよ。今熊野をさらつてゐたの。

次郎吉　うと〳〵して聞いて居りましたがよい曲でございますね。

おくみ　お前さん琴はおすきかえ。

次郎吉　わからないながら音曲は何でもすきでございます。ときに、旦那樣は今日はお店でございますか。

おくみ　今朝筒井樣の御邸へ出て今がた歸つて入らつしやつたやうだよ。

次郎吉　筒井樣と申すと、あの御町奉行の？

おくみ　（うなづく）御店の御用でね。十日に一遍ぐらゐ

づゝ參るお邸さ。
次郎吉　さやうでございますか。（間）お孃樣おつかひ申してはＨ譯がございませんが、あちらへおいでなさいましたら、わたくしが旦那樣に、ちよつとお眼に掛りたうございますと仰有つて下さいませんか。晩ほどでもよろしうございます。
おくみ　あい、申しませう。
（仲働お蝶廊下へ出て來る。）
お蝶　お孃樣、隣町の御師匠樣がいらつしやいました。
おくみ　おや、もういらつしやつたの。では平次郎さん、大事になさいよ。
次郎吉　ありがたう存じます。
（おくみ、お蝶入る。）
（次郎吉さみしげに庭を見てゐる。花散る。）
（長い間。）
（前幕の四郎兵衛出て來る。）
四郎兵衛　おう〳〵、この櫻ももう散るな。
次郎吉　これは旦那樣！
四郎兵衛　平次郎どん、どうだね。
次郎吉　いつもながら御深切に有難う存じます。（蒲團から下りる）
四郎兵衛　傷の痛みはどんなだね。

次郎吉　へい、おかげ樣でもうすつかり痛みは止りました。
四郎兵衛　それはよかつた。何かわたしに用ださうだが…
次郎吉　へい。
（座敷にて琴の熊野を彈きはじめる。）
（次郎吉、首を垂れてしばらくだまつてゐる。）
四郎兵衛　どうおしだね。滅法云ひ憎さうだが何か賴みの筋ならばとにかく遠慮なく云ふがいゝよ。お金でも要るのかえ。
次郎吉　と、とんでもないことです。こんなにお世話になつてゐて、なんでお金の御無心なんか出來ませう。
四郎兵衛　ふむ。全體なんだ。
次郎吉　實は旦那樣にお詫を申さなくてはなりません。
四郎兵衛　詫を？
次郎吉　はい。忘れもしません正月晦日。わたくしが佐内坂下で呻つて居りましたのを、御自分の駕籠へ入れて下さいました上に、春とは云つても冴え返つて冷たい霙の降る中をわたくしの身體を御心配下さいましたばかりに、旦那樣が跣足で駕籠傍、氣を失つてしまひましたので勿體無いのも知らずにこゝへ參りました。
四郎兵衛　そのおさらひはつまらないが……それでどんな詫を云ふのだい。
次郎吉　道端で怪我をしてゐたわたくしは、蕎麥屋の擔ぎ、

どこの馬の骨だかわかりません。それを山之手切つての大金持の分銅伊勢屋の旦那樣が御手づからの御介抱を受けました。このお離れに置いて頂いてからかれこれ一ト月、初めにひよいと嘘を申上げたばかりに、今日はあすはと一日のばしにして居りまして、たうとう今までおかくし申してしまひました。……わたくしの肩の突創は、旦那樣遺恨で刺されたのではございません。

四郎兵衞　それを隱してゐたと云ふのか。

次郎吉　それればかりではございませんが、あの晩やはり佐内坂で商人風の男が一人殺されて居りました筈で……。

四郎兵衞　その事は聞きました。どうもわけがありさう故、お前さんをこゝへ置いたのも奉公人に堅く口止して置いたし、駕籠屋にもうまく云つて置いたつもりです。

次郎吉　恐入つた次第でございます。いかにもあの男はわたくしが殺しました。

四郎兵衞　ふむ。やつぱりさうだつたか。だがあれは商人ぢやない、馬喰町の燕直吉と云ふ目明しださうぢやないか。

次郎吉　そこまで御存知の上に、わたくしを今日まで匿まつてゐて下さいまして、自分の咨くさいのに愛憎がつきて參りました。

四郎兵衞　が、どうしてまたお前さん、上役人を手にかけなすつた？

次郎吉　はい、實はあの直吉は、わたくしが手習子朋輩でございます。

四郎兵衞　ふうむ。

次郎吉　友達だとは申しながら、年頃になりましてからは二人の根性があんまりひどい違ひ樣でだん〳〵疎遠になつてしまひまして、會へば昔話も出ましたが、まア往來はとまりました。わたくしは十七八から手弄みを覺えまして、奉公してゐた松平讃岐守樣御抱への木具師、星十兵衞の宅を逐ひ出されまして、いよ〳〵立派に博奕打になり下りました。それに引かへて直吉の方は、これまたあんまり商賣ちがひの目明しになつてしまひました。

四郎兵衞　ではお前の兇狀は、直吉殺しばかりではないと見えるね。

次郎吉　へい。（ためらつたが）旦那樣、お驚きになりませんで……實は何をお隱し申しませう、近頃お耳にも入つて居りませうが、繩拔をしたお尋ね者、鼠小僧と申す泥棒……。

四郎兵衞　なに、鼠小僧？

次郎吉　（恐れ入り乍ら）へい、その次郎太夫がわたくしでございます。

四郎兵衞　（呆れて言葉無し）

次郎吉　平次郎と云ふのは僞り、本名は次郎吉と申しまし

……てどうも面目ございませんが、申上げにくゝつて、ついおかくし申して居りました。

四郎兵衛　どうもたゞの人ではないと思つてゐたけれども、鼠小僧とは氣がつかなかつた。（笑ふ）いやはや、物騒な人を長く家へ置いたものだ。

次郎吉（冷汗を拭いて）どうも面目ございません。これが世間に聞えましたら、泥棒を匿まつた罪でこちらへかかる災難は大抵ではございますまい。それを思ふと氣が氣でなくて、夜もろく／＼寢られませぬ。鷹揚なお世話を受けまして生命を助けて頂きました方へ、恩を仇で返す様の事になつたら死んでも死に切れないと日夜苦しんで居りました。

四郎兵衛（煙管にたばこを詰めながら）なアに、知れたら知れた事だがね。大名屋敷の金用達、方々様へ馴染が多いからどうにかそこは隱密に濟ませる道もまた出來るだらうさ。

次郎吉　へい。どこからどこまで……みぢめなわたしになりました。

四郎兵衛　なんの、お前も聞えた大泥棒……だが、今日は船やどの伊豆屋とかへ妹を迎へにやつたとかぢやないか。

次郎吉　はい、わたくし共は二人兄妹で、親もなく叔父伯母とてもございません。然し、伊豆屋へ預けて置きました妹のこのじは、今年十七でございますが、あれにまで迷惑をかけたくねえと、とうに兄妹の縁を切つてしまひましてわけを話して伊豆屋へ預けました。たまに逢ふのも内緒のことで、此の間わたくしが召上げられました時も、いゝあんばいに妹にはおかまひござんせんでしたくらゐ、然し、このごろはどうして居りますか、參るまではほんたうに氣がかりでございます。

四郎兵衛　だが次郎吉さん、妹さんを呼びなすつてどうする氣だ。

次郎吉　會つて別れを申しまして、實は自訴する心でございます。

四郎兵衛　えゝ！

次郎吉　たゞ心配になるはこのあとのことで、妹がどんな風に暮して行きますか、それが氣になつてなりません。

四郎兵衛　いや、お前さんが自訴して出なさるのが本當なら、そのお子の身のことは心配しなさらないがいゝ。だが、本當に自訴する氣かね。

次郎吉　はい。こちらへ御迷惑かけない様に、傷が直つて一とまづ立退きまして、旅からでも歸つて來たふりをして、自訴してきれいにお仕置を受けようと存じます。

四郎兵衛　ふむ。だが、どうして自訴する氣になんなすつたね。

次郎吉　はい。寢て居りましたその一ヶ月の間、考へ拔きに考へたのでございますが、どうもわたくしは自分のからだがふつ〳〵といやになりました。（間）幼馴染の直吉を殺しましたのはいはゞわたくしの生涯の變り目でございましたらう、妹にも別れを云ひまして、大恩受けたあなた樣へも懺悔をした上は、死んだ直の女房に逢つて、あらひざらひ打まけて話しました上、亭主の敵討、この下手人のわたくしを突き出して貰ふつもりでございます。全體わたくしは生れついての根性曲りで、そのせゐかつい人樣から嬉しいと思ふ程の親切をしみ〴〵受けた事がございませんでした。處が今度なくす命を助けて頂いた上に痒い處へ手の屆くやうなあなた樣の御親切……かうして一ト月餘りを過ごすうち、曲りくねつたわたくしの根性から善心の芽が吹き出したものと見えまして……。（間）本當に眼がさめて見ると立つてもゐられません。心苦しいと思ふにつけても自分のからだが淺間しくなりました。有樣は首でもくゝらうと存じました。

四郎兵衞　とんでもない事だ。

次郎吉　（うなづき）大恩受けたこのお家でそんな眞似もまさか出來もせず、苦しい朝夕を送りましたが、落ちつく先はやはり獄門臺でございます。きれいに自訴して出ようと腹をきめました。

四郎兵衞　なるほど。（暗然として）到らないわたしのおせつかいが本當にお前を改心させたとなるとこんな嬉しい事はない。然しかうなるとわたしの親切などは、どうやら付燒刄だ。わたしの善根の薄つぺらなのが、かへつて恥かしくなりました。

次郎吉　とんでもない事でございます。いやもう生れて二十七年、つひぞこんな心持になつた事がございません。胸の中の焦熱地獄、ぢり〳〵痩せるもそのせゐでございませう。

（下手から小僧金松使ひから歸つて來た心で入つて來る。）

四郎兵衞　御苦勞々々。そして用は足りたか。

金松　へい。このじさんと云ふ娘さんを一緒にお連れ申しました。

次郎吉　さうですか。それはお忝じけでした。どこに居りますか、恐れ入りますが……。

四郎兵衞　早く連れて來て上げな。

金松　へい。（柴折戸の外へ出て）このじさん〳〵！

このじ　はい。（十六七位の大人しい町娘の拵へで出て來る、次郎吉が見てぼんやりしてゐたがやがて）まアお前は？（駈けようとして四郎兵衞に氣がかれる）

四郎兵衞　さアこのじさん。こつちへ來なさい。金松、あ

つちへ行つてな、おくみにちよいと來る樣に云つておくれ。

金松　へい。（去る）

次郎吉　このじ！

このじ　兄さん、逢ひたつた。（縋つて聲を立てゝ泣く）

次郎吉　（しばらくして）心配かけてすまなかつた。

このじ　お前の身狀のわるいのが、お上に知れてお召捕になつてから、どうしてゐなさるかとそればつかり心配してゐましたよ。

次郎吉　わるかつた。御覽、兄さん、こんなに瘦せたよ。

このじ　でもよくまア出て來なすつたねえ。

次郎吉　（四郎兵衞に）妹はわたしが召上げられたのは知つてゐますが、わたしの異名はまだ知りません。（淋しき笑ひ）

四郎兵衞　丁度いゝから聞かせないで、この子はこつちへ引取らうぢやないか。うちのおくみは一人娘でしかも女親もなく育つてゐる。あれの對手の小間使ひ、そのうちいゝ聟金を探してやりませう。

次郎吉　赤の他人のわたくし兄妹を、そんなにして頂きましては勿體ない話ですが、溺れるものは藁でもつかむ、まして大船、わたくしは、これで安心して行つて參ります。

このじ　兄さん、どこへ行きなさる？

次郎吉　このじ、兄さんはな、二三年上方へ行くよ。それでお前に逢ひたかつたのだ。

このじ　でもお前病氣の樣で……。

次郎吉　病氣は大抵直つたんだ。

このじ　折角うれしいと思つたのに。でも上方ならまた逢へるね。

次郎吉　うむ、逢へるとも……。

（顏をそむける。）

（おくみ出て來る）

おくみ　お父さん！　參りました。

四郎兵衞　おゝ、おくみ！　お前に新らしいお友達が出來たぞ。このじさん、芝口へわたしから、使ひを出してよく話すから、今日からでもこの家の子になつておくれ。

次郎吉　お孃樣に御挨拶をしな。

このじ　初めてお目にかゝりまする。向後よろしう！

おくみ　あい、わたしこそ！（につこりする）うれしいねえ。わたしの部屋へおいでなさいな。琴をしらべてゐますから。

（二人の娘寄り添つてゐる。）

次郎吉　旦那樣、これで安心致しました。

四郎兵衞　（これも悲しさうに）緣あつての事だから、生

涯及ばず乍らわたしが引受ける。……（二人を見て）仲
よくしなよ。
おくみ　あい。
このじ　畏まりました。
（につこりする。）
（次郎吉四郎兵衛、顏を見合せる。）

返し　馬喰町直吉宅の場

前幕の翌る朝。佐内坂下で殺された馬喰町直吉の三十
五日の日、直吉の住居。如輪木の長火鉢、佛壇の燈明
其他。家の中は淋しくきれいに片附いてゐる。
長火鉢に凭つて、直吉の女房おこま、子分の岡ッ引與
吉と話してゐる。おこまは深川で女郎をしてゐたきれ
いな女房、いさゝかやつれてゐるが、しつかりしてゐ
る。
與吉　……それで急いで參りました。
おこま　さうですか、いつもながらありがたう。そしてそ
の見當がついたつて云ふのは……？
與吉　親分の殺されてゐなすつた市ヶ谷に福元と云ふ小さ
な蕎麥屋がありますんで。
おこま　なるほど。
與吉　そこに親分が擔いで出た貸本の荷が預けてあつたん
で。
おこま　へえ。
與吉　そのことが早く分れば早く手が廻つたんですが、そ
この亭主が隱してゐやがつたんです。夫婦ともこれは召
上げられてお調べを受けましたが、そこにゐた擔ぎの渡
り者で平次郎と云ふ奴が、どうも臭いんですが。
おこま　その男も召上げられてゐるのかい。
與吉　處がそいつは、親分の殺された時道具を擔いで出た
んですが、道傍へ出前の荷を置いとて逐電してゐるんで
す。
おこま　その出前持が旦那を殺したのかね。
與吉　へえ、そいつが只の鼠ぢやねえ樣なので。福元の亭
主も、殺しのあつた晩、出前の荷を持つて出たのにいつ
までも歸らないし、あつらへた家からはさいそくが來る
んで、變におもつて探しに出ると、佐内坂下の溝の傍に
そつくり道具が置いてあつた。亭主はその道具を持つて
歸つて來たまンま、係り合ひになるのを恐れやがつて、
その若い者のずらかつたのも、親分が本を預けたのも、
道具が現場に捨てゝあつたのも、皆しらねえ顏をしてゐ
やがつたんです。
おこま　どうしてそれがわかつたの。
與吉　現場の溝の中に蕎麥屋の猪口が捨てゝあつたので、

それから足がついたのです。
おこま　そこの夫婦は同類なのかねえ。
與吉　今小ッぴどく調べてゐますが、どうもさうでない樣です。たゞ素人の悲しさに、後難を受けない樣に隱してゐたものらしうございますね。
おこま　出前持の男と事ふのは、全體何者だらうねえ？
與吉　それですがね、どうも近所できいて見ると、小ぎたない、のろりとした奴ださうですが、眼鼻立は小氣がきいてゐたさうです。
おこま　化けてゐたのかね、兇狀持が。
與吉　どうもさうらしいンで。しかもそれが當りがついたので。
おこま　へえ。
與吉　福元の亭主の話しでは、その晩親分がそいつと逢つて、久し振だ、なつかしいとか、仲よささうに話してゐたつてえんで。昔の友達と云ふ風だつたさうでした。
おこま　全體誰なんだらう。
與吉　人相調べで突合せて見ると脊恰好から眼鼻立が、今評判のおたづね者の、鼠小僧といふ奴らしいんです。
おこま　鼠小僧？
與吉　つい二月ほど前につかまつて、その晩すぐ繩拔をした次郎太夫と云ふ神田の遊び人、そいつが江戸中の大名屋敷を片ッ端(はし)から盜んであるいた鼠小僧らしかつたのですね。
おこま　その男を旦那は知つてゐたのかね。
與吉　そいつの育ちは深川で、なんでも一度親分があいつは昔の友達だと云つてゐなすつたのを覺えてゐやした。
おこま　ぢやそいつを召捕る心算(つもり)でやられなすつたのかね。
與吉　さうとよりしか思へないんで。しかし下手人の見當がついたからにはぢツきに敵が討てます。それで喜ばせてあげようと思ひまして、いそいでやつて來ました。
おこま　丁度今日は三十五日、だが、この日にそれを聞いたと云ふのは、やつぱり何か因緣があるんだね。
與吉　氣がつかなかつたがもう三十五日になりますかね。忘れてゐては申譯ねえが、どうかして下手人の當りをつけようと夜も日も飛んであるいてゐたので……お線香を上げさせておくんなさい。
おこま　さぞ旦那がおよろこびなさるだらう。
（與吉線香を立てゝちよつと佛壇を拜む。）
與吉　しかし姐さん、段々お淋しい事でせう。
おこま　ありがたう、なんだか氣が拔けた樣でねえ。
與吉　子供衆はなしお若えし、それにきれいと來てゐるんだ。長く後家を通すのは佛へ操を立てる樣で却つてさう

でないかも知れないね。佛壇の前で云ふ事ではないかも知れないが、一週忌でも過ぎましたら、どこぞいゝ處へ再緣なさるんだね。
おこま（淋しく笑って）こんな婆さんは貰ひ手がありやしないよ。まあ女中奉公にでも出るつもりさ。
與吉　うまく云つてゐでなさる。（もとの座へ來る）時におふくろさまはお變りないかね。
おこま　あい、御かげでね。だが、あたしよりお母さんが力を落してしまつてね。
與吉　さうでせうッて。
おこま　早く老爺に別れてゐて女手一つで育つたせゐかまたは生來のろく出來てゐたせゐか、惡い奴に騙されて、深川へ賣りとばされて……、ずつと年寄に苦勞ばかりかけてゐました。こつちの旦那と馴染を重ねてかうしてやつと堅氣になれて、やれうれしいと思つてたつた二年、またこんななさけない目に會つたんでね、もう〳〵、おふくろは泣いてばかりゐてねえ。
與吉　お氣の毒だなあ。それで今日はお留守かね。
おこま　姪のおくにをつれて小石川のお寺へお參りに行きました。わたしが行くつもりにしてゐたんだけれどね、昨夜ひどくお腹が痛んで今日は氣分が惡いので、代りに詣つてやると出かけました。だが午までには歸つて來るから、ゆつくりして御飯でも喰べて行つておくれな。
與吉　なアに、さうしてはゐられません。その壽麥屋の一件でこれから南のお町までちよいとお使ひに行つて來ねえぢやならねえ。（煙草入をしまひにかゝり）二三日うちにまた伺ひます。いゝたよりをきかせますよ。
おこま　御用の人を引留めもなるまい。ぢやア與吉さん。
與吉　姐さん、あんまりきな〳〵してからだでもわるくしなさらねえで下せえよ。
おこま　なあに、あたしは大丈夫さ。
與吉　そのうち山の神をよこさうから、用の溜つてゐるのを考へて置いて下せえ。
おこま　すみませんよ。おとまさんによろしく、子供衆は皆元氣かえ。
與吉　あい、もうたまらなく元氣で閉口さ。ぢやア左樣なら、おふくろさんにもよろしく願ひます。
おこま　巾聞けます。
（これにて與吉歸つて行く。）
（行きちがひに辻駕籠一挺出る。）
（與吉、ちよいと振返つたが別に氣にせずに入る。）
（辻籠駕は直吉の門にとまる。）
籠駕屋　お客樣、こゝが直吉親分のお宅でございます。
（垂をはねると、次郎吉、分銅伊勢屋で貰ひ受けた衣

服萬端すべて堅氣の拵へ、結城ぞつき、おなんど七子の帶を締め、髮は月代のあるまゝに結び上げ、髭だけは剃つた心持、きれいになつて駕籠から出る。）

次郎吉　どうも御苦勞樣でございました。では駕籠屋さん。

（實體に云つて、駕籠賃を拂ふ）

駕籠屋甲　へい、有難う存じます。おい、お禮を云つて吳んな。

駕籠屋乙　どうも有難う存じます。

（二人、空駕籠を擔いで歸つて行く。）

次郎吉　御免下さいまし。馬喰町の直吉さんの御家はこちらでございませうか。

おこま　はい、さやうで……どちらからお越しで御座います。

次郎吉　へい、折入つてお內儀さんにお話し申上げたいと存じましたが、あなた樣が？

おこま　直吉の女房こまでございます。

次郎吉　では、眞平御免下さいまし。

おこま　さあ〳〵、見苦しい處でございますが……。

（次郎吉中へ入る。）

（おこま、煙草盆、茶など出す。）

次郎吉　どうぞもうおかまひなく。（あたりをそれとなく見廻し、佛壇に氣がつく）

おこま　（妙な人だと云ふ心持）さうして、御用は？

次郎吉　はい、すこし內緒のお願ひで出ましたが、どなたも外には？

おこま　御存じかも知れませんが、主人直吉の三十五日、墓參に出まして家のものはわたくし一人でございます。おかまひなければ御遠慮無く。

次郎吉　あゝ、今日が三十五日になりますか。では線香を上げさせて下さいまし。

おこま　それは御奇特でございます。有難う存じます。

次郎吉　（丁寧に線香を上げ、拜む）さて御新造樣、何をお隱し申しませう。わたくしはこの佛の幼友達で次郎吉と申す稼人でございます。

おこま　えッ。次郎吉さん？

次郎吉　先月晦日佐內坂で果し合ひを致しまして、直吉さんを手にかけた鼠小僧と云ふあぶれ者でございます。（申譯無く云ふ）

おこま　さうしてその下手人のお前さんが何の用でこの家へ？

次郎吉　へい。お亭主の敵を討つてお貰ひ申したくてかうしてやつて參りました。

（やゝ間。）

おこま　（驚いたが靜かに）どうやらいろ〳〵譯ありさう

なお話、まづそれから承りませう。

次郎吉　（おこまの落着いてゐるのに意外な心持で）へい、實はお内儀さん、知つての通りわたくしは嚴しい御詮議を受けて居る身でございますので、蕎麥屋の擔ぎに身を落しまして、市ヶ谷の福元と云ふ家に住み込みました。

おこま　（うなづく）

次郎吉　先月三十日でございました。出前を屆けて店へ歸りますと、中にゐた客の一人が聲をかけました。それがこちらの直吉さんでもう十年近くも交際ひませんが、子供の頃の友達です。なつかしくは思ひましたが、わたしは兇狀持、ちよつとぎつくり致しました。が、直吉さんが案外な出樣で、うまく逃げろと云はない許りに云つて呉れました。その時は久し振で人らしい淚をこぼしました。

おこま　なるほど。

次郎吉　佐内坂下の空地まで參りますと、直吉さんが急いで追つておいでなさいました。

おこま　（うなづく）

次郎吉　……おい次郎。どうもこれでは氣がすまねえ。己はお上の人間だから、どうもこれではお上にすまねえ。よしんば手前をこゝで逃がしても、どうせ長え娑婆はありやしめえ、と云つて素直に縛られもしめえ、世界のちがふ男同志だ。勝つか負けるか出たとこ勝負で威勢よく果し合をしようぢやねえか、黑白二本の二人の道を、どつちか一ッ殘さうぢやねえか、それ、よからうと許り古馴染が、有合ふ出前の猪口で別れの杯を交して置いて、さて匕首を拔き合ひました。（間）惡運とでも云ひませうか、お内儀さん……勝負はわたしが勝ちました。

おこま　（固唾を吞んでうなづく）

次郎吉　わたしも肩を、これ此の通り。（襟をはだけて見せる）深く一突きやられましたが、これはどうにか仲間の者の手當を受けてすつかり直りました。身體の創は直つても、直らねえのは心の傷です。その晩からお内儀さん、わたしの考へが變りました。

おこま　とは？

次郎吉　强請騙りはきらひですからそれは決してやりませんが、鼻つたらしの時分から博奕は打つ、酒は吞む、酒癖がわるくつて喧嘩口論、刃物三昧も度々いたしました。太く短く渡らうと、きめたわけでもありませんが、盜みをするのが面白くつて大名旗本の奧向きを片つぱしから盜んであるきまして、とんだ世間騷がせの眞似もいたしました。あげくの果が、正直なお前樣の御亭主を殺しました。しかもこれが淺間しい事に昔の仲よし、意地にかかつて手にかけましたが、ふつと氣がつくとわけもなく

かうしてのめ〳〵してゐるのが恐ろしくなりました。とても名告つて出るからにはお前様に縛られて、出して貰へば死んだ直吉へまあ言譯にもならうかとおもひまして、創の直つたのを幸に、やうやく今日參りました。（手を突く）

おこま　（ぢつとその體を見てゐる）

次郎吉　何も致しやいたしません。佛の持つてゐた捕繩、それで縛つて下さいまし。

おこま　（なほも次郎吉をみつめてゐる）

次郎吉　もし、お内儀さん！

おこま　（幽かに顔を染める）

次郎吉　どうぞ突出して下さいまし。

おこま　（まじめな顔をして火箸をいぢりながら首をふる）

次郎吉　（驚いて）　それやなぜでございます。

おこま　……聞かない前はとにかくも、今伺つたあらまし、わたしの心は變りました。直吉の心は知つての通り一こく者で、お上大事と思へばこそ女房のわたしの事も忘れてしまつて、お前と命のやりとりをしました。

次郎吉　いや、そんな事はありますめえ。直吉のあれは性分で、曲つた事がきらひですから、あつしを見逃しきれなかつたのです。

おこま　自分の氣持がすむ爲には、わたしなんぞの事は忘れるのです。殊に次郎吉さん、これが意趣遺恨で殺したわけでなく、いはゞ云ひ合して納得づくの運だめしです。殺したのも殺されるのも博奕を打つた樣なもの、あとに持越す恨はありません。

次郎吉　でもそれは……。

おこま　また突出した處で佛も喜びはいたしません。その場限りの果し合ひ、あとひく事ではない。よしんばお前を縛つたつて、お上の事では夫婦も他人だよと、いつも云ひ〳〵してゐたあの人のことですから、草葉の蔭で苦い顔をするでせう。あれは皮肉な人でした。

次郎吉　（うなだれて考へ込む）

おこま　それに次郎さん、男らしくお前さんが、かうしてわたしに縛られようとしてたづねて來て下さいました。わたしや嬉しいと思ひます。

次郎吉　亭主の敵でなくつても、こゝにゐるのは大泥棒です。縛つて出せばお前さんの名は江戸中高くひゞきませう。どうぞ突出しておくんなさい。

おこま　あたしはこれでも女のはしくれ、たとへお前が惡人でも……次郎さん、このまゝ歸つておくんなさいな。

次郎吉　と云つた處で江戸中は、あつしをつかめえようとつて、とても隙はありますまい。まぬけに召上げられはしねえつもりだけれど、まア當分は忍ばねばならず、殊

にこの肩の突創・まだ痛みもあることです。生きてゐる氣がないのですから、逃げ隱れの根も盡きてゐます。それに蟲のきれえな上役人の手で、つかまつたと云はれちア鼠小僧の名折です。どうか縛つておくんなさい。

おこま　おいやでなければこの家へ匿つてもよござんすよ。

次郎吉　えツ。

おこま　わたしはおふくろと二人きり、なんとかごまかして置きませうから。それに次郎さん、わたしが深川にゐた時分、お前、おらんさんの情人だつたねえ。

次郎吉　どうしてそれを。

おこま　可哀想にあの妓は死にました。あたしはあの樓でお葉と云つてゐましたよ。

次郎吉　（まぢ／＼としてゐる）

おこま　さツき見た時、どうも見た樣な人だと思ひましてね、それとなく考へてゐるうち、お前さんが、吸口を頰桁にちよつとあてた樣子、ありやおらんさんの癖そつくりです。その時ひよいと思ひ出しました。

次郎吉　さう云へば思ひ出す、姉女郎のお葉さんか。

おこま　云はれてから思ひ出す樣ぢやア薄情ですねえ。よくおむつまじく菱屋のふうりんを買つてたべてたぢやアありませんか。

次郎吉　（間がわるい樣子）いや、それまで覺えてゐなさるのか。

おこま　（ぢつと次郎吉を見つめる）

（揚幕から、御家人佐倉吉之助、ごろつき赤肌の平造と連れ立つて來る。）

平造　なアに、いそぐ事はありませんや、まアぢわ／＼とやんなさるさ。

吉之助　だが、あの女もさるものだから。

平造　いくら昔の馴染でも、今は堅氣の女なんだからね。わけはねえさ。

吉之助　それに後家にして置くのは勿體ない。

平造　後家といつても一ト月そこ／＼。四十九日までは、魂がほれ、そこいらにうろついてゐるとさ。

吉之助　えゝ、變な聲を出すな。

平造　氣味がわるいと見えますね。どうも弱いお侍さんだなあ。

（門口をあけて。）

平造　お内儀さん、ごめんよ。

（おこま驚いて。）

おこま　誰か來ましたから、お前さん窮屈でも。その三疊へ入つてゐて下さい。

（次郎吉を上手の部屋へ押やる。）

吉之助　誰か客の樣だな。
おこま　いゝえ、かまやしませんよ。田舍の叔父が悔みに來ましてね。（障子をあけて）おやまア佐倉の旦那。（苦い顏をする）
平造　田舍者にしてはいゝ下駄だな。（裏を返して）赤坂の平野屋だ。
吉之助　お藥、ではないおこまさんか。またやつて參つたぞ。
（二人あがる。）
おこま　お上りなさるのは御勝手ですが、今日は亭主の三十五日、いやらしい事は眞平ですよ。
平造　なんのお前さん、あつしがついて來てゐるんだ。いやらしい事なんざアさせるもんか。と、大きにこつちがあやしいがね。（下卑て笑ふ）
おこま　一服したら歸つて下さいよ。
吉之助　（にや〳〵しながら）いやはや、昔の通りだの。亭主が死んだとこいつに聞いて喜びいさんでゐるのだから、四十九日をすませたら身共の家へ早く來やれ。瘦せても枯れても御直參だ。
平造　傘を張るのがうまいつてね。
吉之助　これ、馬鹿を申すな。
平造　間違えた、凧の字だつた。
吉之助　ふざけるな。
おこま　おにぎやかですねえ。
（ト、いやに云ふ。）
吉之助　いやさう云やるな。とにかく死んだ直吉とおぬしが松山屋に出てゐる頃は張り合つた客の吉之助だ。
おこま　昔の事はよしませう。わたしは後家を通すつもりです。
平造　よしねえよしねえ、赤い信女がまた孕みさ。
おこま　そんな事は餘計なお世話さ。（佛壇に向いて線香など上げ、燈明をかんざしでかき立てる）
平造　よう〳〵貞女！
おこま　女郎上りと馬鹿にされ一生ついて廻るのか。（しんみりとして）あゝつく〴〵世の中が詰らない。
吉之助　などゝ云ふやつさ。
平造　なうおこまさん、佛頂面をしてゐねえで、旦那に茶でも上げなせえ。どの道世話になる人だ。
おこま　（つんとして佛壇に向いて立つてゐる）
平造　おい、おこまさん。（袖を引く）
おこま　なんですよ。うるさいねえ。
（振り拂ふ。）

——幕——

三幕目　小石川法運寺の場

前幕から三日目の四月半ごろ。すつかり初夏らしくなつてゐる。小石川法運寺の庫裡。小さき禪寺の心持で、薄暗い土間に樒の葉青く、線香赤く並べた棚。阿伽桶、箒、箕など隅に立てかけてある。上手奥に板戸の閉つた物置、上つた處に圍爐裡が切つてあり、自在に藥鑵がつるしてある。黒びかりのした廣い板敷、廻り縁になつて本堂へ續く心持。奥の方白壁などよろしく。庫裡を出た處に葉櫻しげつてゐる。その向ふ下手奥に卒堵婆を間に合せに編み込んだ要垣、要の芽が赤く吹いてゐる。その中は墓地の心で白張の提灯、塔婆、石塔、すツと下手に墓場へ出入りのちやちな木戸、その前に井戸、庫裡を出た處奥へ押しつけて舞臺中央の邊にちよつとさしかけをこしらへた地藏尊、足許に小石澤山積み、一ツ二ツ繪馬がある。小石の間に無雜作に竹の花立に銀鼠の花をつけた柳の枝がさしてある。木魚の音、銅鑼の音などして本堂では志す人の來てゐる心。寺男の傳六、實は野田の傳六、六十位の老爺、よく禿げてはゐるが小じツかりしてゐる。上り框に腰を下し、煙草を吸ひながら墓參のぢいさん婆さんと話してゐる。ぢいさんばアさんは町家の隱居の拵へにて、人のよささうなる七十位の夫婦。

ぢいさん　なあ婆さん、來年は爲吉の十三年になるの。

ばアさん　さうですよ。それはさつきわたしがをしへて上げたぢやありませんか。

ぢいさん　さうだつたかの。

ばアさん　いかなこつても。忘れてしまつたと見える。

ぢいさん　いやこの節は物忘れをしていけない。

ばアさん　心細くなつてしまひますね、おぢいさんにそんなにまうろくされては。

ぢいさん　大きにお前さんだつても、まうろくしてゐなくもあるまい。

ばアさん　(ムキになつて)なんのわたしが耄碌などしてゐますものか。

ぢいさん　(笑ひながら)いやはや、女の年寄は一酷になつて困る。なア傳六さん。

傳六　えへゝゝ、結構でございますよ。

ばアさん　時に傳六さん、先のおぢいさんはどうしましたね。

傳六　可哀想になくなりました。

ぢいさん　おや／＼、古い馴染だつたが。

ばアさん　幾つでしたらうね。

傳六　もう八十を越してゐましたらう。

ぢいさん　さうなるかね。耳が遠くて話しに骨の折れる人だつたが。
ばアさん　ひとり者でしたね。
傳六　へえ、さやうですよ。なんでもこゝの和尚さんの遠縁とかでねえ。
ぢいさん　さう〳〵！　そんな事をきいたつけ。
ばアさん　傳六さんも彼是一年になるね。
傳六　へえ。早いもので、ざつとさうなりますよ。
ぢいさん　子供はないのかえ。
傳六　へえ。二人ありましたが、餓鬼の内に取られてしめえました。
ばアさん　それは一層諦めがいゝのさ。わたし共では皆大きくして持つていかれてね、六人あつたのが半分になつてしまひました。上の奴なんぞは三十になつて取られました。
ぢいさん　それでも今は二男坊がどうにかやつてゐて呉れますよ。
傳六　いつかいらつしやつた若旦那ですねえ、いや御堅さうで御安心です。
ぢいさん　堅いは堅いが、ばアさんに似てひどく強情でね。
ばアさん　わたしに似て強情もないものだ。さあおぢいさん、ぼつ〳〵出掛けませうか。

ぢいさん　うん出掛けませう。これは傳六さん、今日は和尚さんに逢はずに行きます、よろしく云つて下さいよ。
傳六　畏まりました。丁度奥に何か志す參詣が來てゐまして。
ぢいさん　碧巖の講義をそのうち聞きに參ると云つて下さい。
傳六　畏まりました。
ばアさん　はい左樣なら。
傳六　御免なさいまし。
ぢいさん　さやうなら。

（ぢいさんばアさん歸つて行く。傳六、手桶へ水を汲む。奥から次郎吉、あとから和尚無觀、新しい卒堵婆を持つて出る。）

無觀　いや御手厚い事で恐れ入りました。
次郎吉　有難う御座いました。おかげで氣が淸々しくなりました。
無觀　これ傳六、（卒堵婆を渡して）馬喰町の直吉さんのお墓へ御案内して差上げな。
傳六　へい。（阿伽桶、線香、花など支度をして）お待遠樣でございます。
次郎吉　お世話樣ですね。ではごめん下さいまし。
（和尚に禮をして下手から墓地へ入つて行く。傳六續

いて行く。前幕の與吉、墓地の方を見乍ら土間へ入つて來る。）

與吉　和尚さん！

和尚　おやこれは與吉どん。御墓參か。

與吉　へえ。墓參も墓參ですけれども、實は今墓所の方へ參りました三十がらみの男……。

和尚　おゝ、直吉さんの身寄のものとか云つて、御經を上げて行きました。

與吉　變な事を伺ひますが、何か云つてはゐませんでしたか。

和尚　では御存じない人かな。

與吉　なに、ちよつと知つてゐる男ですがね。

和尚　なんでも直吉どんがあの人が上方へ行つてゐる留守に非業の死をとげたので、聞いてびツくりして不取敢墓參りに來たと、悄れ返つて居なすつた。

與吉　ぶしつけながら御經料は！

和尚　それがの、大した奮發で小判で十兩、別に五兩、これは本堂修覆へ寄附して行きなすつた。

與吉　ちよいとお上の御用ですが、その小判を見せて下さいませんか。

和尚　丁度こゝに持つてゐる。（ふところから紙へ包んだのを出して見せる）

與吉　（小判を裏表かへしてよくしらべ）　いやどうも有難うございました。

和尚　別に仔細はござらぬかの。

與吉　へえ、大丈夫の樣でございます。しかし和尚さん、ちよいとお調べの御用ですが、どこかへあつしをかくして下さい。

和尚　それではそこの板戸の中がよいでせう。だが、門內で不淨の爭ひは出來ませぬ。こゝはこれでも御奉行がちがふのでな。

與吉　百も承知でございます。なアに、樣子を見るだけでございます。おや、もう來る樣だ。ではこゝへ入れて頂きます。どうぞこれで……（口をふさいで見せる）

和尚　（うなづいて奧へ入つて行く）

與吉　（墓地を見ながら物置へ入る）

（ちよつと空舞臺。やゝあつて下手から次郎吉、傳六出て來る。次郎吉さみしさうに葉櫻を仰ぐ。）

次郎吉　おぢいさん。この櫻は八重ですね。

傳六　へえ、牡丹櫻でございます。見事な花をつけましたが、もうすつかり青くなつてしまひました。

次郎吉　葉櫻もかう繁ると憎態ですね。だがこのぷうんと匂ふのはわるくありません。おゝ、あやふく忘れる處だつた。（紙入か金を出して包んでやる）

傳六　これはどうも、有難う存じます。（頂いてしまふ）まア一服なすつていらつしやいまし。

（二人もとの土間へ入り、傳六はしみッたれた座布團を上り框へ敷く。）

次郎吉　（煙草を吸ひ、ちッと考へてゐる）

傳六　（澁茶を出して）あの直吉さんとは古い御縁で……

次郎吉　えゝ、從兄弟同志でございましてね。

傳六　へえ、左樣で……。

次郎吉　（ちらりと傳六を見て）だが傳六、しばらくだつたの。

傳六　（ぎッくりしたが、そつと四邊を見廻して）なんだつまらねえ。親分氣がついてゐなすつたのか。

次郎吉　あんまり妙な廻り合せで、ちよいとわけが分らなかつたが、寺男實は盗人とはとんだ白浪狂言だな。（小さい聲で云ひこれもそろりとまはりへ氣を配る）

傳六　へゝゝ、だがこいつは思ひつきでせう？

次郎吉　うん、いつ頃からだ。

傳六　去年の五月さ。北町奉行の御代替りで、一とッ風呂入れられた日には事だから、どろんをきめて寺男さ。……丁度、先ゐた爺さんが病氣になつた後釜でね。口をぬぐつて抹香くさく、わづかな心付を頂いて、墓の掃除をまめまめしくやりながら、ロン中で鬼の念佛さ。

次郎吉　ふん、しかし直吉が死んで墓參りに來る奴の中に、朋輩の目明し、岡ッ引、手先衆の中で顏でも知つてゐるのが來やしねえか。

傳六　なアによしんば來たつてもかまやしねえ。實は來るかくと思つてゐたら、たつた一人知つてゐるのが來たよ。

次郎吉　それでどうした。

傳六　知らん顏をしてゐやした。

次郎吉　わからなかつたか。

傳六　どうもさうらしい。それに馬喰町のまはりのは知らねえよ。

次郎吉　それもさうだな。それで、もう稼ぎはふつゝりか。

傳六　あア、ふつゝりさ。

次郎吉　怪しいものだの。

傳六　なアにほんの事だ。それに親分己はもう老先短え、いつまでも出來もしなからう。

次郎吉　感心だ。よく氣がついたな。

傳六　時に親分はうるせえぜ。世間では大變な評判だが、なんだつてまた直吉の墓參りだね。

次郎吉　直は餓鬼のうちの仲よしさ。

傳六　それもさうか知らねえが、たゞそれだけでね。

次郎吉　うん、なぜよ。

傳六　親分、當てゝ見ようか。
次郎吉　うん！
傳六　市ヶ谷の下手人だね。（指さす）
次郎吉　龜の甲より年の甲か。
傳六　やつぱりさうかね。
次郎吉　うん。
傳六　やつたお前さんが墓參りして香花を手向けて墓の前で、涙ぐんでゐなすつたのは、全體どう云ふわけなんだ。
次郎吉　すこしわけありで。
傳六　氣に病める程の善人でもありますめえ。
次郎吉　ほんによ。
傳六　時に親分、いゝ處で逢つたんだが、この先の白山下に、とんだ有餘つてゐる家があるがどうだねいやかね。
次郎吉　なんだ、手前もうふつゝりだと云つたぢやねえか。
傳六　ふつゝりさ。しかしお前の顏を見たらむら〳〵としたやつだ。
次郎吉　實は己こそふつゝりやめた。堅氣になつてしまつたんだ。
傳六　（苦笑ひして）駄目だよ。己なんぞは何十度さう思つたか知れやしねえ。尤も働きがねえんだからお前の樣に大袈裟な仕事はしねえけれど、今年六十二になるが、まだやまねえのはこの病さ。

次郎吉　そんな事を云はねえで、きれいさつぱりやめてしまひなよ。己こそきつとやめるつもりだ。
傳六　その堅氣がまア一年も續くかな。（氣がついて）お前さん新らしい情婦が出來たね。
次郎吉　（ぎくりとして）なぜだ。
傳六　惚れた女が出來ると、どうも人間がいやに氣がせまくなるものさ。情婦に苦勞をかけたくなし、いゝ氣なものだが長くたのしみてえからね。己なんぞもさうでしたよ。新情婦の出來る度に改心したもんだ。もうこの年ではおしめえだ。
次郎吉　わるい事は云はねえ。もう後生を願へよ。寺にゐるのが幸だ。これを緣に善人になれ、えゝ！
傳六　なりてえがなれねえね。もうこの年まで入つた病だ。
次郎吉　（悲しく）同病相哀れむか、あゝ、いやな氣持だ。
（ふいと物置の板戸に眼をやる。）
次郎吉　（手眞似で板戸を指し、何だときく）
傳六　（首をふる）
次郎吉　（不審相に首をかしげ）氣のせゐかな。
傳六　どうかしたかね。
次郎吉　いや氣のせゐかも知れねえ。この節氣でもちがやしねえかとおもふほど、つまらねえ事が氣になつてならねえ。

傳六　痛のせゐだね。
次郎吉　夜ねられねえせゐだらう。（間）だがどうも變だ、氣になつていけねえ。
傳六　見せてやらうか。氣がすむだらう。
（立ちかける。）
次郎吉　なアに、別に見たくもねえ。病だ。氣が尖つてゐて、いられねえ事まで感じやがる。はゝゝゝゝ。（淋しさうに）さア、ぼつ〳〵出かけようか。
傳六　いづれゆつくり逢はうけれども、近頃どこだね。
次郎吉　神田だ。新和泉町で肴屋だ。尤も魚は一匹もねえさ。
傳六　よくある奴だ。
次郎吉　和泉屋と云へばわかる。だが傳六、もうこれぎり逢へねえかも知れねえ。
傳六　なぜだ。親分？
次郎吉　そろ〳〵年貢を納めるのさ。
傳六　あゝ鶴龜々々。
次郎吉　ぢやア達者でゐねえ。
傳六　お前もどうぞ達者でゐてくんなせえ。
次郎吉　（出かけようとして、また板戸を見る）どうもいけねえ、この中にはたしかに生き物がゐる。
傳六　鼠か、猫か犬でも入つたかな。

次郎吉　傳六！（威勢よく）すまねえ、見せてくれ。
（傳六板戸をあける。ぱつと中から目つぶしに線香の束を投げつける。）
傳六　やツ。
次郎吉　しまつた。
與吉　次郎吉、御用だ。
（十手でかゝる、立廻りあつて。）
次郎吉　手前なんぞぢやア役不足だ。（烈しく突きとばす。與吉仰向に倒れて頭を強く打つ。次郎吉、素早く飛び出す）
與吉　うぬッ。
（やうやく起きあがり、よろ〳〵としてまたどつたり倒れる。）
（和尙無觀、そつと緣側の奥から覗く。）

――道具廻る――

大詰　湯島六丁目おこま住居の場

前の場と同じ日、夜。
すつかり更けた心持で、夜番の拍子木の音きこえる。
ちんまりした意氣な小家。舞臺奥に向いて出入口、入つて土間。
中に直吉後家おこまの母親おとく、御家人佐倉吉之助

の前に手を突いてゐる。
吉之助　（威丈高になつて）どうだおふくろ、どうしても聞かれぬか。
おとく　聞かれぬと云ふわけでもございませぬが、わが娘とは云ひながら七ツ八ツの子供ではなし、親と云つてもさう押伏せたことも申せませぬ。
吉之助　なに、そんな事があるものか、現在の娘だ。親の威光でうんと云はせるがよいではないか。
おとく　お武家様方のお堅い御家風では、親の云ひつけは理が非でも、子供がきつときくと云ふ事になつて居るかも知れませぬが、わたくし共下賤でございましては、老いては子に從へと申しまして、さうさうは頭ごなしにもなりませぬ。殊にかうしたお話は、なほさら當人任せにするのが、町人の風でございます。
吉之助　ぢやどうあつてもあのおこまはおいらに呉れぬと云ふのだな。
おとく　はい、この儀ばかりは……。
吉之助　さうか、それならそれでよし。おいらの方でも考へがある。
おとく　……と仰有いますと。
吉之助　聞きたくば云つてやつてもいゝ。おこまがおいらをいやがるわけは、外に好いた男がゐるからだ。

おとく　（苦笑ひ）娘も二十五と云ふいゝ婆アで殊には世帶崩しでございます。嫁入前の生娘ではなし、蟲もすこしはございませうから、好いた男の一人や半分無いとも申せませぬ。
吉之助　ふん、ぢや貴樣承知の上か。
おとく　さうとも申しませぬ。
吉之助　たゞの情人ならおいらだつて何もいやにこんなことを云ふのぢやないのだ。おこまがこの頃、引張り込んでゐる男は、和泉屋次郎吉と云ふ遊び人だらうが、それがとんだ兇狀持ちで、とうから目星をつけられてゐると云ふことだぞ。
おとく　（ぎよッとして）近所もございます。そんな馬鹿氣たことを本當にでもされて御覽じろ、飛んだ迷惑をいたします。
吉之助　ではどうあつてもあの男の素性を、知られえと云ひ切るのだな。
おとく　なんぞお間違ひでございませう。
吉之助　ふん、思へば可哀想な母子だな。うかうかしてゐて一緒に繩目の恥を受けるのか。（氣を持たせて）緣なき衆生で仕方がねえ。どりや歸らうか。
おとく　（平氣で）もうお歸りでございますか。とんだ失禮をいたしました。

吉之助　とめるなら今の内だぞ。（わざとらしく笑ふ）　あとで後悔が眼に見える様だ。
おとく　おさうそ様でございました。
（送り出す。吉之助しぶ〳〵歸つて行く。）
（おとく、ぼんやりと考へてゐる。）
（犬の吠える聲。）
（おこま、湯上りの心持できれいに化粧し、仇つぽくぬれ手拭など持つて歸つて來る。）
おこま　おつ母さん、早かつたゞらう。
おとく　ほんにの。いゝお湯だつたかえ。
おこま　あゝ。だがどうも行きつけないせゐか、ながく入りつけてゐる馬喰町のやうなわけには行きません。
おとく　今そこいらであの佐倉の旦那に逢はなかつたか。
おこま　おや、今夜もまた來たの。
おとく　うん、たつた今歸つた處だ。
おこま　いやらしい奴だねえ。
おとく　人様の蔭口は云はぬものだ。なあおこま、わたしやお前にきゝたい事がある。
おこま　あい、なんなりとも。（笑ふ）
おとく　いや、これは本當に大事な事だよ。今佐倉の旦那があゝな事を云ひのこして行つたよ。
おこま　へえ。どんなこと。

おとく　あの此節しげ〳〵來なさる和泉屋さんの事さ。
おこま　あの和泉屋の？
おとく　次郎吉さんとか云ふさうだね。
おこま　………。
おとく　直吉どのが非業の死をとげて、親子二人、その日に困ると案じてゐたのに、あの和泉屋さんがよく面倒見てくれるので、死んだ人にはすまないが、ほかにどうも仕様がないから、見て見ぬふりをして居たけれども、ねえおこま、ありや堅氣の旦那衆かねえ。
おこま　………。
おとく　お前が商賣をしてゐた頃の客人だと云ふので、すつかりそのつもりでゐたけれど、なんだか氣になる事を云はれてね。
おこま　どんな事を云つてゐました？
おとく　あれはお尋ねものゝ兇狀持だと云つてゐたよ。
おこま　えッ。
おとく　お上で目星をつけてゐてね、やがてどうにかされるさうだと……根も葉もない事ではあらうが、取越苦勞は年寄の癖だ。まア〳〵お前が肚に入れてゐさへすればいゝのさ。
おこま　（申譯なく）　おッ母さん！
おとく　（ちッとなる）

おこま　濟みませんでした。心配をかけまいと思つて、なんにも云はずにゐました。かんにんしてお呉んなさい、あの旦那は鼠小僧と云ふお尋ねもの……實は直吉どのを殺したひとです！

おとく　ひえッ、そ、それやお前、本當かい。

おこま　えゝ。

おとく　どうしてそれを知つてゐるのだ。

おこま　當人から聞きました。

おとく　それなのになぜこんな事に、お前、氣でもちがつてゐやしないか。

おこま　阿母さん！

おとく　………。

おこま　惡緣ッて、あるもんですねえ。

（泣く。）

おとく　正氣の沙汰とは思へない、現在の仇敵を旦那に持つてまで、御飯をたべて行かなくてはならない筈はないぢやないか。女郎稼業をさせたばかりに、堅氣になつても手管ばかりで世間を渡る氣か。おい。おこま、あたしや直吉どのに濟まないよ。

（泣く。）

おこま　（しばらくして）　阿母さん、わたしや堅氣ぢやないでせうか。

おとく　當り前さ。心の腐つた女だと、後指さゝれても仕方がないよ。

おこま　さうかねえ。阿母さんにもわからないかねえ。

おとく　御大層ぢやないか。わたしやどうしても本當に出來ないよ。

おこま　あの人が馬喰町へ來て、おらあおたづね者の大泥棒だ。殊に直吉殿の敵だから、どうか縛つて呉れろ、突出しや仇討にもなるのだからと、事を分けて云つてくれました。その懺悔をきいてゐるうち、あまり男らしさにどうも憎からず思ひ込みました。あれは夫の敵だから、お尋者の泥棒だからと、自分で自分に云ひきかせても、たゞつのるは戀しさばかり。ふとした緣でずる〳〵と淋しい同志がかうなりました。地獄の苛責に逢はゞ逢へと、こんな處へ小さな世帶……阿母さん、おこまは氣がちがつてしまつたと、どうぞかにして下さいまし。

おとく　ではどうしてもあの男を諦める事は出來ないのだね。

おこま　はい、そればかりは……。

おとく　お前らしくもない無茶苦茶。（なさけ無く）あゝ、一寸先は闇の世だねえ。

（母子泣き沈む。）

おとく　（涙を拭いて）　いくら泣いてゐたつても仕樣がな

い。思案はあしたの事にしよう。おこまお前もう寢たらどうだ。
おとく　今夜はあの人も來ないだらう。門の締をしておしまひな。
おこま　あい。
おこま　あい、ほんたうにさうしませう。
（戸を締めに行く。）
（上手の障子靜かに開いて次郎吉出る。前の場の通りの姿、羽織はとつてふところに入れてゐる。）
次郎吉　おふくろさん！
おとく　あれツ、びツくりした。
おこま　おや次郎さん、お前どこから入つたのだえ。
次郎吉　裏からだ。引窓から入つたのだ。外はめつぽふいい月だ。
おこま　まア物騷な。
次郎吉　氣をおつけなせえよ。（笑ひ乍らそこへ坐る）
おこま　さうしてどうして今頃になつて、しかも顏色もよくない樣子……。
次郎吉　うん、おこまさん、いよ〳〵御緣もこれまでだ。とうにお仕置を受けてゐる筈なのが、つい三月とのばしてしまつた。思ひ出してもはづかしいことだらけだ。いよ〳〵お別れの時が來ました。

おこま　それはどうして……。
次郎吉　すつかりばれて手が廻つた。
おとく　えツ。ではもう……。
次郎吉　あぶなくなつて仕方がないから、久振で得手をつかつて、ひらりと中へとび込んだのさ。表の道はもう駄目なのだ。
おこま　（おろ〳〵して）ではまつたく手が廻つたの。
次郎吉　うん。今日小石川へ墓參りに行つたら、岡ツ引にとびかゝられた。が、緣もゆかりの無い奴に、縛られるはいやなこつた。惱しくはねえからだだけれど、命はお前に預けてあつて自分のものぢやアないのだから……
（淋しく笑ふ）　さアいよ〳〵時が來た。早く縛つて突出してくれ。
おこま　次郎さん……。
おとく　旦那……。
次郎吉　おかげでたのしい三月の夢を見ました。次郎吉の生涯お前の爲に花が咲いた。もうどうなつても口惜しくない。どうぞ縛つておくんなさい。
おこま　三月と云へば短いけれども、わたしにとつては何十年もなじんだ樣な氣がします。そのなつかしいお前さんをわたしの手では縛れません。罪人を匿まつた罪、どうでのがれる事は出來まい。生れた月日はちがつても死

ぬ日も場所も同じ處で……次郎さん、連れて逃げて下さいまし。

次郎吉　冗談云つちやいけねえ。おッ母さんをどうする氣だ。

おこま　あい。（泣き伏す）

次郎吉　あつしを匿まつた罪は、縛つて出せばきつと許される。ぐづ〳〵してゐて捕方が來ては、味噌も糞もありやアしねえ。さアおこまさん、早く縛つておくんなさい。

（この邊にて、外へ赤肌の平造出る。）

（あとから岡ッ引二三人出る。）

（平造、手眞似で待つてゐろと相圖し、戸の外へ廻る。）

平造　（戸を叩き乍ら）今晩は、お内儀さん、ちよいとお開けなすつて！

次郎吉　いけねえ、手遲れになつちやア大變だ。

（自分にて戸棚をあけ、細引を出して二人の前へ置き、手を廻す。鐘の音きこゆ。）

次郎吉　さアおこまさん、おふくろさんでも、早く縛つておくんなさい。

おこま　阿母さん、縛つて上げておくんなさい。

おとく　わたしにはどうも……。

平造　今晩は。おやすみですか、ちよいとあけておくんなさい。平造です。赤肌の平公です。

次郎吉　（じれて）さア、早く縛つてくんなと云ふのに…

おこま　（悲痛な泣き聲）次郎さん、かんにんして下さいよ。（繩をかける）

次郎吉　さア早く〳〵。

手先一　面倒だ、打抜いちまへ。

手先二　（相圖するとバラ〳〵と大ぜい出る）それッ。

（捕方、戸をふみ破つて入る。）

（次郎吉、おこまに繩をかけさせて立つ。）

捕方　御用だ。

次郎吉　己の事か。

捕方　（たじろぎ乍ら）神妙にしろ！

次郎吉　（哄笑）神妙にしてゐるぢやアねえか。（おこまに）さアしつかりと繩尻をおとんなせえ。

――幕――

八幡屋の娘（一幕）

人物

八幡屋の娘お絹　（二十歳）
勝之助　その弟（九つ）
箕尾敬三　舊家、お絹の戀人（廿六歳）
多代子　その妹（十八歳）
喜代子　その姉（卅三歳）
則重　前記三名の父、盲人（六十三歳）
お道　八幡屋の乳母（四十五歳）

場所

東京

時代

現代

——十月の夜、八幡屋と云ふ大きな商人家の奥二階。舊家らしい立派な落着いた建築。下手に梯子段があつて、そこから出入りする。

正面に窓がある。そこの障子は開け放してあるので、ずつと裏町の人家の屋根が、大きな浪のやうに起伏してゐるのが見える。屋根の上は薄青く月光に濡れて水のやうに光つてゐる。ほんとに水底のやうな澄んだ秋の夜である。——そこは、こゝの娘お絹の部屋になつてゐる。可成り整つた趣味性の下に裝飾されてゐる。華やかな感じが、目立たない程に見えてゐる。

幕があいた時、お絹が、見物には背を向けて、すこし斜に坐つてゐる。肘を窓の上へのせて、その上に俯伏してゐる。しとやかな、すこしは意氣に見える服裝である。赤の入つた友禪と黒繻子の腹合せ帶を胸高にしめてゐる。勿論襟をかけて、前掛をしめてゐる。髮は銀杏返しを房々と結上げてゐる。そして泣いてゐる。いつまでもいつまでも泣いてゐる。——下の部屋で、可成り遠くの方で、長唄の賤機帶を唄つてゐるのが斷續して聞える。これは、見物席の隅から隅まで聞えないでもよい。何か唄つてゐるやうだと云ふ事が見物に感じる程度で結構だ。——淋しい靜かな、長い間がその幽かな音樂で調子づけられて、舞臺に一種の色合が滲み出て來ればそれで何よりである。

乳母のお道が下の梯子段を靜かに上つて來る。とんとんとんと云ふ音が、韻律的に聞える。きりゝとして小柄なしつかり者らしい女。それがこのお絹にかゝると、

眼も鼻もなくしてしまふと云ふやうな調子。物珍らしさうな眼差で、惚々と自分の育てたこの美しい娘を見る癖がある。襟付の縞の着物。茶器菓子盆を持つてゐる。

お道　お孃樣！（いぶかしんで）おや、どうなさいました。

お絹　（顏をあげ、ものうさうに兩手でおくれ毛を掻き上げる。泣き濡れてゐるが、もう涙を納めてゐる）

お道　泣いてゐらつしやいましたね、また。

お絹　いゝえ。

お道　（坐る）――お孃樣！　あなた、ほんとにどうかなさいましたか。この四五日はわたしに内證で、よく涙をこぼしてゐらつしやいますね。どこかお惡いのなら、早く先生に見て戴かなければなりませんよ。

お絹　いゝえ、大丈夫ですよ。いまね、わたしお月樣を拜んでゐたのよ。（外を見る）いゝお月樣ねえ。

お道　（注意深くその後姿を見ながら）下へ行つて御覽になりませんか。箔屋町が來てゐらつしやつて、旦那樣が賤機を浚つてゐらつしやいますよ。ほら……聞えませう。

お絹　えゝ！　聞えるわ。さつきからかうしてこゝで聞いてゐたの。この窓を開けて置くと、ほんとによく聞えて來るわ。かうやつてすこし離れて、あの唄を聞いてゐるとかなしくなるわ。お月はいゝし、靜かな晩だし……

お道　それならよう御座いますが、……お孃樣、昨夜もあなたお床の中で泣いてゐらつしやいましたね。あなたがあんまり悲しさうにしてゐらつしやると、坊ちやんがなんだか淋しさうになさいますよ。どんなお考へ事があるのか知りませんが、あまりくよ／＼なさるとお身體に障りますよ。お顏色がよくありませんよ。

（お絹、ハンケチを頰へ當て、頰杖を拄き。ぢつと月のおもてを見てゐる。）

お道　（茶を勸めながら）あなたがしつかりしてゐらつしやらなければ、ほんとうに困りますよ。この八幡屋の心棒なのをお忘れになつてはいけませんよ。御當主の勝之助樣がまだ八つ九つでは、どこまでもあなたがしつかりなすつてゐらつしやらなければなりません。後見の勇旦那樣が、あゝして堅くやつてゐて下さるから、まアよいと云ふものゝ大根はやはりあなたなのですからね。……この節のやうに、あなたがはつきりなさらないでは、道やは心配で心配でなりません。（間）もしや箕尾さんの事ではないのですか。

お絹　（默つて涙を拭く）

お道　あゝ、ではやつぱりさうだつたのですね。

お絹　ねえ道や！　お前に訊くけれどもね……お前噓を云

つてはいけないよ。

お道　えゝ、えゝ！　嘘など申しますものか。

お絹　ではね、あの、わたしの母さまね。

お道　(不安の様子)　えゝ、母樣が。

お絹　母樣は、どうして亡くなつたの。

お道　さやうで御座います。勝之助樣をお生みになると、それからお肥立がわるくつてどッと床に……

お絹　(遮る)　嘘よ、嘘よ。わたし、この頃、よく母さんの夢を見るわ。母さんはわたしのちひさなころから御病氣で遠くへいらつしやつてゐたのよ。そちらで赤ちやんを生んだのが、勝之助だと云ふけれど、それは嘘ね。あの勝之助はわたしと血を分けた子ではないのね。あれはお父さんの方の親類の子なのよ。

お道　まア、馬鹿げた……

お絹　母さんはいやな病氣が出たのね。それで、田舍へやられてしまつたのね。顏や手が紫色に腫れて、眉が拔けた女の人が、この頃よくわたしの夢に出て來るのよ。それがわたしのお母さまなのよ。

お道　お孃樣……あなた、まあ。

お絹　駄目よ。わたしもう何もかも知つてゐるのですもの……(涙を拭く)　わたしね、十ぐらゐの時に、銀屋敷へ梅を見に連れて行かれたわ。その時そこのお茶屋の座敷に手へ繃帶して頭巾をかぶつた人がゐたわ、あれが今考へると母さまだつたのね。その頃覺えてゐた母さまは、美麗な透き通るやうな美しい方だつたので、この頃までまるで知らなかつたのだけれど……あの時は道や、お前が銀屋敷へ連れて行つて吳れたのでせう。

お道　さあ、わたくし　(おどおどして)　忘れてしまひました。そんな事ありましたかしら。

お絹　隱しても駄目なのよ。道や、お前は嘘吐きだわ。

お道　(うなだれる)

お絹　嘘つきだわ。(泣く)　わたしの母樣には天刑病の血統があつたのね。わたし一人に……わたし一人に……(啜泣く)　勝之助は、あれは養子なのね。ちつとも知らないで、ほんとの弟だとばかり思つてゐたのに……あたしは一人ぼつちなのだね。母樣が死ぬ、父樣も死ぬ、そして、今にわたしにあのいやな病氣が出て、手や足の爪までも……。(美しき手を見る)　氣のせゐか人より白いからだの中に、醜い病氣が入つてゐるのだとおもふと……(慟哭する)

お道　(隱せるだけ隱す心算で不自然に笑つて見せる)　まア可笑しなこと、何かの間違ひですよ。そんなばかな…。

お絹　(お道をちよつと見、やがて立つて手筥を持ち出して、中から手紙を出す)　この手紙を見て下さい。

（お道、それをとり上げて讀む。）
（顏色變る。）
お道　こんな手紙！（せき込んで）こんな手紙、どこからお受取になりました。（差出人を調べる）出した人の名が書いてありません。（消印を見る）麴町……麴町……（考へる）あァわかつた。敬三さんのおうちの方でせう。女文字ですね。（狂ほしく）あすこの姉さんでせう。
お絹　出した人は誰でもいゝのよ。中に書いてあることには爪の垢ほどの嘘もないのですもの。わたしが結婚の出來ない人だと云ふ事を、敎へて吳れたのよ。
お道　あんまりだ、あんまりだ。あすこの家よりほかには、こんなにくはしく先のお內儀さんの事を知つてゐる人はないのですから……あの喜代子さんにちがひない、（殺氣立つて）わたし恨を云つてやります。
お絹　そんな事をすれば恥の上塗りよ。あの敬三さんのことを、思ひ切るやうにとかうした手紙をよこしたのだわ。わたし、もうあの方には生涯逢はないのよ。それで、あちらではきつと安心なすつてゐらつしやるでせう。
（二人泣く。）
（長い間相擁してゐる。）
（階段からこゝの當主勝之助が元氣よくあがつて來る。九つほどのきれいな少年である。）

勝之助　姉ちやん！　お師匠さんが來てゐるからいらつしやいつて。（二人の樣子を見る。二人、涙を拭く）
お道　はいはい。さアお孃樣！
勝之助　姉ちやん、どこかわるいの。
お絹　えゝ、惡いのよ。
勝之助　（姉の顏を覗き込む）どこが痛いの。
（お絹、勝之助を抱き締めて新たなる涙を流す。）
お絹　勝ちやん、お前が羨ましい。（歔欷す）お前が羨ましい……。
勝之助　（驚きて）姉ちやん！
お道　お孃樣！
お絹　乳母や、お前も羨ましいのだよ。誰もかも羨ましい。あたしはもう世の中に生きてゐる空もないのだわ。
お道　まあ……心得ちがひな事をお考へになつてはいけませんよ。お孃樣。
お絹　（泣き伏す）
お道　（共に泣く）
勝之助　（二人の樣子を狐につままれたやうな顏して見比べてゐる。やがて、わけはわからずにしくしくと泣き出して階段の方へあるいて行く）
（長唄の聲、斷續する。）

――道具廻る――

次の場との時間の連續を缺く故に、この道具替りは暗轉にすべきなり。

麹町の靜かな住宅地、箕尾敬三の家。上手寄りに小さな洋館。そこは敬三の書室と部屋を兼ねてゐる。室内は見物席から見えない。ドアがあつて、そこから縁を通つて座敷へ出入りする。

座敷の中は質素な裝飾の方がよい。床の間には若い書家の家らしくない古風な堅苦しい物などもある。それは父親の生活を見せるために飾るのである。

正面奥に格子戸がある。だがそれは障子が閉めてあるので見物席からは見えないでもよい。舞臺に見える部屋は二室。臺所へ通ふ障子が正面にある。下手に門、軒燈など。家の中には父親の則重(盲人)姉娘の喜代子、妹娘の多代子の三人がゐる。喜代子は縫物をしてゐる。白い布で咽喉を卷いてゐる。

多代子は本を讀んでゐる。兩方共束髪。

時刻は八時過ぎてゐる。

喜代子　(多代子に)多代ちやん、何を讀んでゐるの。

多代子　(本から眼を放たずに)死の勝利!

喜代子　死の勝利!

多代子　えゝ!

喜代子　探偵小説?

多代子　いゝえ。

喜代子　面白くつて?

多代子　……(顔をあげて)えゝ(熱心に)それや面白いわ。

喜代子　どんな事が書いてあるの。

多代子　どんな事つて……まあいろ〳〵の事よ。

(則重、火鉢の前にゐてそこから二人の娘たちに聲をかける。)

則重　敬三は遲いなあ。

喜代子　さうですねえ。どうしたのでせう。

則重　今日はどこへ出懸けたのだな。

喜代子　どこでせうか、何も云はずに出て行つて仕舞ひました。

則重　この頃は毎日毎日外へ出てばかりゐるなあ。畫もちつとも描かないやうだが。

喜代子　えゝ、ちつとも描きません。ほんとうにあれはどうかして仕舞ひました。まあ何と云ふ變りやうでせうね、以前の事を考へると、この頃はまるで別人のやうに自墮落になつて仕舞ひましたわ 考へると心配でなりません。あれがこの家の一番大切な人なのですものねえ。横道へでも入られたらば、それこそ大變だと思つて、わたし、

心配でたまりません。

（輕く苦しさうな咳をする。）

多代子　ねえ、姉さま。兄さんは八幡屋のお絹さんが亡くなつてから、どうもすこし變なのですわね。どう思つたのか、ふと旅行をしたり、また歸つて來たり。わたし、兄さんがお氣の毒でならないわ。（間）どうしてあのお絹さんは自殺なすつたのでせうね。やつぱり自分の病氣を苦にしたのでせうか病氣の血統があると云ふのね。

喜代子　（遮るやうに）そんな事はないでせうよ。（神經質な顏をして）何かほかに事情があつたのでせう。

多代子　兄さんはお絹さんが亡くなつたと聞くと、まるで氣が拔けたやうになつてお仕舞ひだわ。わたし、兄さんがほんとうにお氣の毒でならないの。……お絹さんにいやな病氣の血統があると云ふのはなんでも當人さへも知らない事なのだと云ふぢやありませんか。大家のお孃さんだから、あの年に育つまで、たれからも聞く機會がなかつたのでせう。それをもし今になつて知つたとすれば、自殺もしかねないわねえ。（無邪氣に）またそんな事を面と向つて云ふやうな慘酷な人もないでせうけれどもね。どうした機會かで、ふつと知つて仕舞つて、それを嘆いて死んだとしかわたし思へないわ。あんな仕合せな人が、その外に自殺の原因がある筈はないと思ふわ。

喜代子　……（心に悶えながら）どうだかわかりませんよ。それにあの家の血統の病氣の事は、どうせ一度は當人だつて知る事だから、まあ早く聞かして置いて、その運命に踏こたへがつかなければ負けた人ですからね、氣の毒だけれども自殺してゞもそこから逃れるより仕方がないわね。一層、小さな頃からそれを聞かせて置くとよかつた。それにあの病氣は結婚さへしなければ出ないのだと云ふぢやありませんか。獨身者で暮す心算で、この世に踏こたへてゐる方が、まあいゝとわたしは思ふわ。

多代子　でも、あの方と、家の兄さんは許嫁ばかりではなく、お互に隨分熱心に愛し合つてゐたので、お絹さんも一緒になるのを樂しみにしてゐたやうぢやなくつて。

喜代子　（冷淡に）さあどうだか。

多代子　わたし、あのお絹さんのその美しい夢を、めちやめちやに打碎いてしまつた人が憎らしい。人が美しい夢に醉つてゐるのを、何も傍からこはさないでも……

喜代子　ぢやあ、あの人の血統の事を聞かせた人は間違つてゐると云ふのね？

多代子　えゝ、さうだわ。

喜代子　それは貴女がわからないのよ。（捨てるやうに）どうせ一度は知らずにはゐられない事なのぢやありませんか。

（喜代子は恐怖に近い神經質な表情をして縫物をしてゐる。多代子は腑に落ちないやうな顔をしたが、やがてまた默つて本を讀み始める。）

則重　（呟くやうに）――まだ敬三は歸つて來ないのだな（見えない眼を娘たちに向けて）あれは小さい時分から神經の強い奴だつたのだ。この頃の樣子を考へると、一層それが酷いやうだな。だがあれは藝術家なのだから、なるたけあれの心には立入らないやうにしてやりたいなあ。

多代子　ほんとうに阿父さまの仰有る通りね。

喜代子　でもね、書きかけの畫もやめてゐるのですよ。

則重　描きかけの畫と云ふのはどんな畫だな。大きいものかな。

多代子　紫陽花の花が一面に咲いてゐる中に、一匹大きな眞黑な蝶が飛んでゐるの。そしてその花の側に立つてゐる若い女の人が、その蝶が自分の髮の上へ來たので、怖ろしさうに、體をまげて手で顔を隱してゐる處なの。それでね、その女の人の顔はあの八幡屋のお絹さんそつくりなのですよ。

則重　蝶を怖れてゐる女とでも云ふかな。（淋しく笑ふ）何しても不思議な繪だな。

多代子　題は凶兆と云ふのですつて。

則重　きようてう？　凶い兆と書くのかな。

多代子　えゝ！

則重　（うつとりとしてゐながら）彼奴は氣が違ひはしなからうがな。

喜代子　（驚いて）まあお父さん、（おろ〳〵聲で）云ふ事に事を缺いて飛んでもない、不吉な事は云つて下さいますな。

則重　さうだな、そんな事はないな。（淋しく笑ふ）

（喜代子、咳をする。）

（沈默――風の音が強く聞える。）

多代子　まあ、ひどい風の音だこと。今日は一日、ぽかぽかしたいゝお天氣だつたのに。

喜代子　また、あしたは空ッ風が吹くのかも知れないわね。風が吹くとそこら中ざら〳〵して氣持が惡くてたまらないわ。往來なんか眼をあけてあるけないのですもの。それにあしたはお醫者樣へ行く日だから……

多代子　……ほんとうに兄さんはどこへ行らつしやつたのだらう。

則重　……あの、八幡屋の娘が死んで、もうどの位になるな。

喜代子　あれは九月の末でしたから、彼是三月餘りになりますわね。

則重　さうなるかな。早いものだ。（間）敬三は己をどう思つてゐるだらう。

多代子　阿父さんを？……なぜ。

則重　八幡屋の家に天刑病の血統のあるのをわしは知つてゐて、あれと婚約させたのだからな。

喜代子　（遮つて）まあ阿父さん、あなた何を仰有るのですよ。多代子にそんな事を聞かせたつて仕樣が無いぢやありませんか。

則重　隱すにも當らない事だ。あれはわしの罪の一つだからな。

多代子　（驚きながら）どう云ふわけなのです、お父さん。

則重　わしが事業を計畫して失敗した時に、お前達の阿母さんと、あの八幡屋の先の內儀さんと深い知り合だつたので、それを傳手にあすこから金を澤山出して貰つたのだ。その時向ふの要求として、金はいくらでも出しますその代り、今度生れた女の子――お絹と云ふ娘が生れたばかりの頃だつたが、それとあの敬三と配して吳れと云ふのだ。あすこの家の病氣の血統は知つてゐたのだが、どうしても何萬と云ふ金がなくてはならなかつたので、それで承諾したのだ。お前たちの亡くなつたお母さまに、向ふの母親が泣いて賴んだのはお絹の行末だ。あの內儀さんの死際の遺書にも、お絹の事が書いてあつたよ。

（複雜なる沈默。）

（突然格子戸へものの打當るやうな音、やがて格子戸が開く。）

喜代子　敬三が歸つて來たのでせう。

多代子　（立つて迎へに出る）まあびつくりしたわ。兄さん！

則重　どうかしたのかな。

（敬三、そこへ入つて來る。淋しい顏の青年。醉つてゐるので眞青な顏をしてゐる。衣服など處々破れたり泥がついたりしてゐる。）

多代子　まあ兄さん、何て云ふ風をなすつてゐるの。

（敬三、よろけるのを踏しめながら、自分の部屋の方へ行かうとする。）

喜代子　敬さん、どうしたの？

敬三　何が、何がどうしたのです。

喜代子　その衣服はどうしたのです。お前またお酒を飲んで來たのですね。飲めもしないのに、仕樣がないぢやないか。

則重　敬三は醉つてゐるのか。

多代子　兄さん、喧嘩をなすつたのね。

敬三　（そこへ坐る）うん。

喜代子　まあ、誰と喧嘩なんかをしたのです。あぶないぢ

やないの。怪我(けが)でもしたらどうする心算(つもり)?

敬三　怪我をしたつて構ひませんよ。（神經的な高笑ひをする）あははは、可笑(をか)しかつたな。

則重　喧嘩などをしてはいけないな。……酒も過(すご)しては身體に惡い！

喜代子　お前お酒なんか飲めやしないぢやないか。

敬三　……飲まずにゐられないから飲みます。今まで知らなかつた逃げ路を、酒の中から見付け出したと云ふわけです。これから毎日醉拂つて暮すつもりなんだ。

喜代子　まあ、（すこし亢奮して涙ぐむ）お前はなぜさう惡くなつたのだらうねえ。

敬三　なぜです、姉さん。

喜代子　此頃のお前の我儘勝手なのを考へて御覽なさい。

敬三　ふん、馬鹿らしい。

喜代子　何が馬鹿馬鹿しいのです。これ敬三、お前何がそんなに氣に入らない事があるの。

敬三　……誰が氣に入らない事があるつて云ひました。

多代子　まあ兄さん、どうなすつたの。

則重　喜代子、敬三は醉つてゐるのだから、寢かせてやつたらよからう。

敬三　姉さん、姉さんは何故僕の事と云ふとそんなに一々干渉するんです。僕なんかどうならうと大きなお世話ぢやないか。

喜代子　（やさしく）敬さん！　お前まつたくどうかしておいでだよ。そんなに喧嘩腰で……わたしが惡ければあやまりますよ。だけれどもねえ、お前はこの箕尾(みのを)の家の大事な人なのだよ。責任のある人なのだよ。それを忘れてはいけないよ！　（間、涙ぐむ）お父さんは眼を見えなくして仕舞ふ、わたしは夫に死に別れてこゝへ出戻りになつてゐる。多代(たよ)ちやんだつてもう嫁付(かたづ)かせなければならないのにまだ一人(ひとり)でゐる。たつた一人のお前が、この頃のやうに怠けて、仕様のない人間になつてしまつては干渉せずにゐられないぢやないか。……それを何だかんだと云つて、（泣きながら）わたしを邪魔にして。わたしなんぞどうなつてもいゝと思つてゐるんだね。

（苦しさうな咳(せき)をする。）

敬三　（冷笑）またヒステリですか。（笑ふ）然し姉さん誰が僕をこんなに怠け者にしたとお思ひです。誰がこんな自暴(やけ)な人間にしたとお思ひです。姉さんそれはあなたですよ。（發作的に叫ぶ）あなたが僕の妻を殺したのだ。たしかにあなたが殺したのだ。

喜代子　なんですつて？

則重　敬三、お前どうしたのか。

敬三　姉さん、八幡屋のお絹は僕の妻になるべき女だつた

のは、姉さんも知つてゐるでせうね。そのお絹は自殺したのです。何の爲に死んでしまつたか、それを考へて見て下さい。姉さん、姉さんがあの娘に書いた手紙が原因なのです。あなたは慘酷にも、何も知らずに樂しく生きてゐた少女を、突然に背後から深い淵へ突き落したのです。それは何の爲にだ、敬三、お前の爲だ……、ふん馬鹿馬鹿しい。

多代子　（やさしく）兄さん、あなたは今日大變醉つて亢奮してゐらつしやいますから、もうあしたになさいましな。

敬三　お前なんかの知つた事ぢやない。（姉に）僕があの女を妻にしようと思つてゐるのを、姉さんは姉さん一人の考へで、それを裂かうとした手段はあまり慘酷すぎたのだ。姉さんは僕に意見をしてもだめだと諦めてあの娘に手紙を出した。そして、お前には遺傳の業病がある。だから、お前は弟の妻には出來ない、弟は何と云つてもわたしたちは一家を擧げて反對するとまあかうだ。威嚇して無理に先方から離れるやうにしたのだ。ああ、これが僕の姉さんなのだ。何と云ふ惡辣な手段だらう。（間）姉さんはお絹の氣の弱いのをつけ込んで、そして自滅させたのだ。勿論姉さん自身は、あの娘を殺さうとまでは思つてゐなかつたかも知れない。それが極めて淺慮だから、こんな慘酷な結果に成つて仕舞つたのだ。

則重　（おろおろして、然し父親らしく）敬三！　八幡屋の娘はお前の許嫁の女だつたのはわしも知つてゐる。然し、それはお前の母さんとあの八幡屋とは特別な交りのあつた頃に約束した事で、それはお前が十八九の頃に双方相談の上で破約同様にした筈だ。

敬三　破約に――？　（咳くやうに）その頃からの戀なのだ。稚さい頃の仲よしがいつの間にか戀人同志になつて仕舞つたのだ。破約しようとしてももう遲かつたのだ。（父に）先方でも、お絹と僕と結婚する事は最近まで認めてゐた事なのです。（皮肉に）お父さんは事業に失敗して、どうにもならなくなつた時、扶けて奧れた八幡屋の家へ、金の抵當に僕を入れたのですね。當り前なら先方はあんな身代で、こんな家と緣組させる氣は無いだらうが、惡い病の血統があると云ひ傳へられてゐるのを怖れて、大事な一人娘をやりたいと云ひ出したのだ。此方が承知せずにゐられない程、先方へ金の迷惑をかけてゐたのだ。（間）八幡屋の小母さんも氣の毒な人だつた。あんな立派な家に生れて、一人娘でゐながら、養子に入つた亭主には冷遇されて結局は自殺だ。（うつとりと）お絹は何にも知らずに育つたのだなあ。（涙ぐんで）そのお絹も殺された。

喜代子　（鋭く）敬三、聞捨てにならないよ。馬鹿な事をお云ひでない！

敬三　姉さん、あなた方はね、自分たちの幸福と安樂のために僕を苦しめて平氣でゐるのだ。

喜代子　これ敬三、お前にはわたしの心がわからないのかえ。

敬三　姉さんは、わたしを可愛がつてゐるのだと自分の心持を誤つて觀察してゐる。ほんとはさうぢやないんだ。僕を安全に、僕に過ちのないやうにさせて置くのは、僕が可愛いのでもない、自分たちの安全のためなのだ。その爲には他人を犧牲にしてもいいと思つてゐる。お絹を肉體的に殺す、僕を精神的に殺す……僕がお絹無しには生きてゐられないのを知つてゐながら。（泣く）それでお絹を僕から奪つて仕舞つたのだ。

喜代子　敬三、すこしはものを考へてお呉れよ。（涙を拭く）お前の約束を破つたのはそれは惡いけれどもね、この箕尾の家に、惡い病の血統が交つたらば、どうして肉身のものを償ふつもりなの？　お前の後に生れて來るものを考へて御覽、またその次に生れて來るもの丶不仕合せを考へて見て御覽！　お前一人の戀は、小さなものだと思つて呉れなければならないのだよ。

（敬三、だまつて傍を向いてゐる。）

（則重、神經的に中氣のやうに首を振り乍ら、いらいらと何か考へてゐる。）

多代子　（多代子、姉に云ふ。）姉さん、もうおよしなさいよ。兄さんは醉つてゐるのよ。わたしにはよくわからないけれど、兄さんの御心持はよく呑込めるのよ。姉さんだつてもお氣の毒だけれども……（兄に）ねえ兄さん、姉さんはほんとうに皆の身の上ばかりを心配してゐらつしやるのだから、ゆるして上げて下さいよ。お絹さんのことはまつたくお慰めのしやうを知りませんけれども……ねえ兄さん。

（沈默……）

（風すさまじく吹く音がする。）

（敬三、立つて首垂れて書室の方へ行きながら妹に。）

敬三　……僕はもう寢る。床を敷いてお呉れ。

多代子　まあほんとうに……（安心して）さうなさる方がいゝわ。

（敬三、上手へ去る。）

多代子　（やさしく父の肩へ手をかけて）お父さまも、おやすみあそばせな。

（則重うなづく。）

（喜代子、藥瓶を出して、電燈にすかし分量を見乍ら小さいコップについで呑みなどする。咳をする。）

（格子の外で「御免下さいまし」と云ふ女の聲が聞える。）
則重　おい喜代子、お客樣のやうだ。
喜代子　はい。
（喜代子障子をあける。格子の外にゐた婦人中へ入る。八幡屋の乳母お道、小さい丸髷に結つてゐる。前幕の時よりすこし痩せて、眼のふちなどきつく粧ること。風呂敷包みを持つてゐる。）
お道　八幡屋のお道でございます。大變に御無沙汰を致しました。
（則重、おろ／＼として上手へ去る。）
喜代子　（すこし亂れた心持で）まあ、お道さん。さ、お上りなさいまし。どうぞ……
お道　おそれ入ります。
（お道あがる。）
お道　夜分出まして申譯御座いません。
喜代子　どう致しまして。
お道　（手を突いて辭儀をしながら）存じ乍ら大變御無沙汰を致しました。皆樣御揃ひで御機嫌宜しうございますか。
喜代子　有難う。お蔭さまで……
（包の中より七々忌の配り物を出して。）
お道　今日は亡くなつたお孃さまの志しの日でございます。あの節は何かと御世話樣になりましてありがたう存じました。これは、わざッとお印ばかりで御恥しうございますが……。主人からも呉々よろしく申しましてございます。
喜代子　まあ恐入りますね。お門多いのに。
お道　もつと早く出る筈でございましたが、使ひの都合やら何やらで大變時間を遲らせまして……もう八時になりましたでせうか。
喜代子　（時計を見て）八時すこし過ぎました。（茶をすすめながら）わたくしも一度出なければならないのを其後相變らず身體がほんとでないので、ついごぶさたをしてゐます。そして、（云ひにくさうに）なんでせうね、あなたも大層お力落しで、折角あれまでにね。
お道　（ぢつと喜代子を見乍ら）まつたくがつかりして仕舞ひまして……そのせゐかずつと夜分なども睡れませんので……（うつむいて）生きてゐる瀬もございません。
喜代子　（困惑したやうな表情）さうでせうともねえ、然しとんだ事が出來たものですね。
お道　（ふところから袱紗包を出して、中から封を切つた手紙を出して喜代子の前に出す）……これはあなた樣が亡くなつたお孃さまへお遣しの御手紙でございます。お遣

品のやうにして、いつもわたしが持つて居りましたが、見る度に涙でございます。あなたへお返し致さうと存じて持つて參りました。

喜代子　（ぎつくりして顏色を變へて）　わたしの手紙ですつて？

お道　（冷かに）　はい。

喜代子　……（手を伸してそれを取上げようとして、ふと戰慄して眼を据ゑて手紙を凝視してゐる）……

（重い苦しい間。）

お道　これには八幡屋の血統の事が書いてございます。それはあのお孃さんがすこしも御存じ無かつた事ばかりが――しかもほんとの事ばかりが書いてございます。わたくしは十歲ばかりの頃からあのお家で育てられましたので、こちらとの事を何もかも存じては居りますが、こちら樣の御仕打はあんまりななされかたではございませんか。わたくしはお恨み申して居ります。それは宜しうございます。過ぎた事でございます。主人の家の非運を、他所樣へ御訴へ申しましても何うもなりません。……然しあのお孃樣は、わたくしにとつては、可愛いくて可愛いくてならない方なのでございました。一人ぼつちの私には、あの孃さんを實の娘のやうにも思ひ、杖にも柱にも末の望みやら樂しみやらをかけてお育て申したのでございます。そのお孃さんは、このお手紙故に、御亡くなりになつたのでございます。

（喜代子、ぶる〳〵と身體を顫はせて、うなだれてゐる。）

お道　……いろ〳〵お恨みも申さうと存じて伺つたのでございますけれども、（涙を拭きながら）云つてもお孃樣は歸つてはいらつしやいません。（間）　どうもとんだお邪魔を致しました。（しを〳〵して立つ）　ではお暇仕ります。

（喜代子ふと顏をあげて、以下のセリフを早口に鋭く異常に云ふ。）

喜代子　……お絹さんは大變に美しかつた。

お道　（不思議さうに）　はい、あの評判のお孃さまでした。

喜代子　（お道の顏をぢつと見て）　おや、お前さん、まだそこにゐたの。さよなら、さよなら。

お道　ではよろしくどうぞ。左樣なら。

（歸つて行く。）

（――上手の部屋から多代子出て來る。）

多代子　八幡屋のお道さんのやうだつたわね。

（姉が返事をしないのを氣に留めずに、急須へ鐵瓶の湯をさして、また上手の部屋へ入つて行く。）

（喜代子、ぢつと考へてゐる。やがて苦しさうに咳を

する。夢からさめたやうに立つて、ものうげに吸入器を持出し、アルコホルランプへ火を入れる。吸入をかけようとする。霧が出ない。舌打をしてアルコホルランプを取出す。青い火がぽッと燃えてゐる。ぢッとそれを見詰めてゐる。突然に物凄い笑ひを洩す。發狂の症狀が明かになる。突然に吸入器を投げ出し次にアルコホルランプを取つて、これは臺所の方へ投げ出す。そして聲を立てゝ笑ひ、自分も臺所へ入つて行く。アルコホルが流れてそれに火がうつッたのでぱつと臺所の方で燃えたのが見える。物音する。）

（――間。）

（則重、手探りで上手からそろ〳〵出て來る。）

則重　なんだか大變な音がしたな。おや、ひどくきな臭いぞ。おい、喜代子、（煙にむせる）……喜代子はゐないか。

（多代子上手の部屋から出て來る。）

多代子　まアひどい煙だこと。何をくべたの、姉さま。

（臺所を覗き、驚いて聲を立てる。）

多代子　あれ、姉様が、大變よ、兄さん、火事ですよう。

（火、障子にうつゝてぱッともえる。）

（敬三寢着のまゝにて上手よりはしり出る。臺所を覗く。）

敬三　（多代子に）父さんを早く連れて逃げろ。早く、早く……。

多代子　父さん、わたしと一緒に。

（則重、とられた手を振放つてこばむやうに云ふ。）

則重　わしにはかまふな。わしは死んでもいゝのだ。

多代子　まア、父さん！

（多代子、無理に父親を表へ連れ出す。）

（敬三、臺所へ入り、やがて放心したやうに取亂してゐる喜代子を抱きかゝへて來てそこに置き、自分は急いで上手の部屋へ入り、描きかけの油畫を持ち出して來る。それには、お絹が七分通り描けてゐる。喜代子はそこへ坐つてぶつ〳〵一人ごとを云ひながら笑つたりしてゐる。）

敬三　（姉の樣子に氣がつく）姉さん、姉さん！　やあ、氣が變になつたのだな。よし。（姉を片手で抱き起して、外へ連れ出さうとする）

喜代子　（抗ふ）いやだ、いやだ。許して。

（喜代子、弟の手を脫して逃げる。敬三、それを追ふ。喜代子、油畫と相對し激しく恐怖したやうに叫び聲を上げる。）

（近所次第にさわがしくなり、人々の叫び聲など聞え、物のこはれる音けたゝましくなる。）

（娘と、火焰の舌。風のすさまじい音。）
（すべて亂調の中に幕下りる。）

——幕——

ラシヤメンの父（一幕）

人物

加納龍治　アメリカ歸りの男（四十六歳）
同　おくめ　龍治の妻（四十一歳）
同　かよ子　龍治の娘、ラシヤメン（二十一歳）
同　信男　龍治の息、學生（十九歳）
同　市彌　信男等の弟、白痴（十五歳）
同　おやす　龍治の實母（七十二歳）
大村德三　隣の男、教師（三十九歳）
山川鑛吉　龍治の從兄、請負師（四十八歳）
益村勇平　牧師上りの食客（六十二歳）
松井おなつ　かよ子の召使（二十三歳）
シヤアル・ベルジヱ　佛國人、新聞記者（四十歳）

時代
現代――冬の半

場所
赤坂、加納龍治の家
青山御所前の並木道
四谷、シヤアル・ベルジヱの家

第一場　加納の家

赤坂の裏町。階下は三間、二階は二間ほどなるしもた家の心。上手に隣の家の横手見ゆ。二軒の家の間は路地になりゐて往來へ通ふ。正面、見物席に面したる所は緣側になりゐる。上手寄の部屋の向うに、舞臺裏に向きし格子戸あり、一間の玄關あり、玄間をあがりて直に二階へ通ふ階段あり。

室內、床の間の上に、旅行鞄の赤革の大なるが一つ置きあり。壁に米國風のあまり新らしからぬ洋服掛りゐる。この二品、他の調度との調和を破りゐる。

幕開き、緣側近くに、極めて年寄りたる老婆ゐる。この家の主の母、おやすなり。苦の無ささうなる表情、髮は雪の如くに白く、耳も眼もあまりたしかならぬ樣

なり。口の中にて何やら絶えず呟きゐる。炬燵にあたりゐる。
その傍に緣側に腰かけ、やゝ口を開きて空を見てゐる男の子ゐる。老婆の孫の市彌なり。白痴に近き低能兒にて、顏色は不健康に白く、髮の毛も眉も、極めて薄く赤味を持ちてゐる。
——一月末の或る日、午後三時すぎ、空は灰白く曇りゐる。雪もよひなり。
幕開きて暫く二人物言はず。

市彌　お婆ちやん！
やす　（聞えず）
市彌　お婆ちやんてば、よう！
やす　何か云つたかえ？
市彌　アメリカつて、遠いかい？
やす　なんだえ？
市彌　アメリカさ。
やす　アメリカかえ、それは遠いともさ！　海の上を二十日も一ケ月もかゝつて行く處さ。
市彌　ふうん！　ぢやア遠いね。
やす　あアあ！　遠いともさ。
市彌　あたいのお父ちやんはアメリカへ行つてゐたんだね。

やす　さうだよ。
市彌　またアメリカへ歸るのかい？
やす　さアどうだかね。（間）　お父ちやんはどこへ出掛けたのだい。
市彌　知らない。靴を履いて、あるいて行つたあ！　（間）　あのお父ちやん、あたいはきらひだ。
やす　（笑ふ）　きらひだッて。何を云つてゐるんだね、この子は。
（入口の格子開く音す。おくめ登場。堅氣なる内儀風、小意氣なれども大人しげなる女、丸髷に結ひゐる。）
くめ　お母さん、ただ今！
やす　おや、お前さんかえ。大層早かつたよ。
くめ　さうですか。（柱時計を見る）　電車は十分とかゝらないやうですね。
やす　さうかねえ。早いものだねえ。それに若い人は足が達者で……
くめ　あの、かよ子がよろしく申しました。
やす　家にゐたかえ。
くめ　ええ、お風呂から出て、お化粧をしてゐました。
やす　お化粧を？　（無意味に笑ふ）　おやおや、まア。
くめ　あの人はどこかへ參りましたか。
やす　龍治かえ。今がたどこかへ出かけたやうだよ。何と

も云はずに行つたよ。あれも變人だからね。

くめ　さうですか。（暗い顔）　近所でも、ぶらぶら見に行つたのでせうよ。

市彌　帽子を、ぎゆツとかぶつて、あたいをこはい眼で睨んだよ。どんどん出て行つちまツたあ。

くめ　さうかい。

やす　かよ子は來るだらうね。さぞ喜んだことだらう。

くめ　（曖昧に）　ええ。

やす　びつくりしたらうねえ？

くめ　（淋しげに）　ええ。

やす　昨夜知らせてやつたのに、なぜ今朝も來なかつたのだらう？

くめ　（云ひ淀みつつ）　それがね、お婆さん！　をかしなものですねえ、何しろあの子が七ツの時でしたからね、父親と云つても、別に大してなつかしい人でも無いと見えて、あまりよろこびもしませんでした。（これらのセリフの内に、火鉢の前に坐りて煙草を喫み、次に羽織を脱ぎて疊み他の平常着めきたるに着替へなどし、最後に再び火鉢の前に坐りて茶を飲む）信男にしてからがさうぢやありませんか。昨日、父親が十五年振で歸つて來たと云ふ今日、ずんずん學校へ出かけて行つて仕舞つたのですものね。（間）　不實なのでせうかね。

やす　なんの、不實と云ふわけでもないのだよ。かよ子にしてもやさしい子だよ（間）　龍治が西洋へ渡つたのは、信男が幾つの時だつたね。

くめ　（市彌を指して）　この子の生れる年でしたから五ツでしたね。覺えてもゐますまいよ。

市彌　あたいも覺えてゐないや。あのお父ちやん、あたい嫌ひだア！　こはい顔をしてゐるんだもの。

くめ　そんな事を云つてはいけないよ。お父さんだもの、好きもきらひもあるものかね。

（格子戸開く、長男の信男、學校より歸り來る。慶應義塾の制服。）

信男　ただ今！

くめ　あいよ。

（信男二階へあがつて行く。）

やす　信男かい。

くめ　ええ。

やす　もうそんな時間かい。

くめ　三時過ぎましたよ。

やす　おやおや。（笑ふ）　わたしや、まだ一時頃かと思つたよ。

市彌　（獨言のやうに）　お父ちやん、もう歸つて來ないといいなア。

くめ　（聞えないふりをして）　お婆さん！　かよ子はこんな事を云つてゐるんですよ。あのお父さんは、わたしたちがほんとに小さな頃に打捨つて行つて仕舞つて爲たい三昧な事をした人で、その上音沙汰も無しにアメリカあたりへ出掛けて行つて、十五年の間、ロクにたよりもしないやうな、不人情極まる人なのだから、かまひつけない方がいいなんて力んでゐるんですよ。子供たちが大きく成つてから、ぼんやり歸つて來たのは、あんまり蟲がよすぎると云つてゐますよ。

やす　（笑ふ）　今時の若い人は氣が強いからね。まア何と云つても親子だもの。（間）　今日は來るだらうね。

くめ　さア、あの調子では來ますまいよ。

やす　變つてゐるね。だんだん異人さんのやうに薄情になつて行くのかねえ。

くめ　（淋しく笑ふ）　そんな事もないでせうけれど。

（信男。二階より降り來る。和服になりゐる。）

信男　お父さんは、どこかへ行つたのですか。

くめ　ああ、近所の樣子でも見に行つたのらしいよ。あたし、今、仲町から歸つて來たばかりなので。（間）　留守の内に出かけて行つたよ。

信男　さうですか。（間）　ねえ、お母さん、お父さんはアメリカで何をしてゐたのでせうね。

くめ　（不安さうに）　さうさね。まださッぱり話も聞かないけれども。（悲しく）　ろくな事でもなからうさ。

信男　二三日前に、お父さんの事を聞きに來たのは警察の人でせう。

くめ　え？

信男　黑い外套を着た人が、くどく何か聞いて行つたでせう。

くめ　（落着かぬ樣にて）　ああ、さうさう！

信男　あれは警察の人ですよ。

くめ　そ、さうかも知れないねえ。

（沈默。）

信男　お父さんは、もとからあんな顏をしてゐましたか。頰桁に、大きな傷がありますね。

くめ　あんなものはなかつたが……。ねえお母さん！

やす　さうさ！　なんだか人相が惡くなつたやうだね。

信男　寫眞で見たお父さんは、尤も若い内のだからだが、もつと立派な人ですが、逢つて見ると、あまり感じのいい人ではありませんね。（間）　これが自分たちの父親かと思ひます。（間）　姉さんはまだ來ませんか。

くめ　今夜あたりは來るだらうと思ふよ。

信男　姉さんもよろこんではゐないでせう。ふだんから、お父さんの事をよくは云つてゐないのだから。お母さん

はどう思ふか知らないけれども、僕はお父さんが、どう云ふ氣持で、この家へ歸つて來たのかちつともわからない。（間）一寸見ると浮浪人のやうぢやありませんか。
くめ　さうさねえ。まア、見たところ、あんまり景氣がよくつて、日本へ歸つて來たやうでもないね。一文無しになつてゐるらしい。（ほろりとする）あの年になつてあれでは困るとおもふがねえ。
信男　それよりか、よく恥しくもなくこの家へころげ込んで來たと思ひますよ。日本にゐる内も道樂の爲放題で、あげくに妻子を置去りにして……山川の伯父さんがゐなかつたら、路頭に迷つてしまつたかも知れやしない。それで、十五年も打ちやらかしてさ、今頃になつて、ひよつくり歸つて來てここの主のやうな顏をして居る。（間）親と云ふものはあんなものではないとおもひますね。
くめ　それはお前の云ふ通りさ。わたしはとにかく、お婆さんは實の母親ぢやないかね。
市彌　（頓狂なる調子にて叫ぶ）やあ、鳥が飛んでゐらア。（遠方の天を仰ぎつつ）隨分高みだなア。お婆ちやん、見えるかい。
やす　なんだえ？
市彌　鳥！　鳥！　たツた一羽だ。啼いてゐるんだらうなア。でも聞えないや。（笑ふ）ひツ、ひツ、ひツ！

（間。）
信男　なんだかお父さんは妙にそはそはした人ですね。さうかと思ふと、のツそりと陰氣な、苦しさうな處もある。なんだか世間を怖れてゐるやうな、人間を憎んでゐるやうな處が見えるぢやありませんか。
くめ　昔から拗ねた人だつたよ。
市彌　（天を仰ぎ止めず）もうどこかへ行つてしまつた。あアあア！
信男　すこし極端だけれども、僕はお父さんがきらひだなア。あんな自分勝手な、我儘な、粗野な人は！（間）姉さんを外國人の妾になんぞしなければならなくなつたのも、お父さんがわたしたちをかまつて吳れなかつたからだと思ふと……
くめ　（遮るやうに）さう云ふわけでもないさ。
信男　でも、この市彌だつてさうでせう。こんな低能でせう。お父さんは、この子に就ては大責任がありますよ。お父さんの身體に病氣があつたので市彌が生れつきこんななのです。
くめ　（發作的に）もうよしておくれ。お父さんが悪いんぢやない、皆、わたしがわるいんだからね。（ヒステリカルな泣き聲）お前たちにつくづく濟まないとおもつてゐるよ。かよ子をラシヤメンだなんて人に後指さされるや

うにしたのも、わたしがしッかりしてゐなかつたからだよ。みんな、お母さんの業が深いからだよ。

信男　（おづおづと）　お母さん！　僕はそんな意味で云つてゐるのぢやありませんよ。お母さんを責めてゐるんぢやなくつて、ただお父さんが……

くめ　いゝえ、いゝえ、いゝえ！　あたしがね、あたしがわるいんだよ。

やす　なんだえ、何を言ひ合つてゐるのだえ！

市彌　お婆さん！　先刻、飛んでゐたのは何の鳥？

やす　雀か烏さ。

市彌　烏！　烏！　烏！

（沈默。）

（下手寄の、隣家との間の路地より、木戸を開けて、加納龍治のッそりと出て來る。洋服、黒きシャツ、色の蒼白き顔、圓らなる眼瞼しく光り、眉根迫りて太し。分けたる髮、半ば額に垂れ下りゐる。頬に大なる傷痕あり、兩手をポッケットに深く落し、鳥打帽の庇の下より、上眼づかひにぢッと家の中を見る。）

市彌　（おびえたるごとくに）　やあ！　また歸つて來た！　また歸つて來た！

くめ　（立ち迎へて）　おや、お歸りなさい。どこへ行つていらつしやいました。

龍治　（縁側へ腰を下す。太き、低き聲にて）　近所をぶらぶらして來た。

くめ　まアさうですか。隨分變つたでせう。

龍治　まるで變つた！　（パイプを口にくはへて、ぼんやり何か考へゐる）

やす　龍治や！　お前、洋服を脱いで、すこし寛いだらどうだえ？

龍治　ありがたう！　これでいいのです。お母さん！　わたしはいつもかうして洋服を着てゐるのです。

くめ　見付の方へ行つて御覽になりましたか。あの邊、すッかりよくなつたでせう。

龍治　うむ。（考へる）　淸水谷の方へも行つて見た。あすこは昔の通りだつた。（間）　あの路傍樹の櫻の木や、公園の石碑や、松山を見ると、涙ばかりこぼれてならない。（うなだれる）　己は衰へたのだ。

（沈默。）

龍治　あすこに交番があつたが、あれは信男、いつごろ出來たのだな。

信男　昔からあつたのでせう。

龍治　さうかな。（獨り言のやうに）　山王下にも交番があつた。（くめに）　隣の家の人は警察へでも勤めてゐるのだらうか。

くめ　いゝえ。なぜですの？

龍治　なあに、先刻、己が出て行くと、格子を開けてそつと出て來た男があつた。なんだか後を尾行けてゐたやらだつた。

くめ　三十五六の、眼鏡を掛けた人でせう。

龍治　うむ、眼鏡をかけてゐた。

くめ　それならお隣に同居してゐる大村さんと云ふ人ですよ。ひどい近眼の……英語の先生ですよ。ねえ、信男。

信男　大村さんなら、人のあとを尾行するやうな失敬な事はしやしません。あの人は紳士ですもの。

龍治　紳士だと。（冷笑）日本にも紳士なんぞと云ふ人間がゐるかい。（内へ上り、トランクの傍へ行く）おや、お前このトランクを開けたか。

くめ　いいえ、わたしは開けませんよ。市彌でもいたづらをしたのぢやないかしら。ねえお婆さん！

やす　知らないよ。

くめ　ほんとにいけないねえ、市彌！

市彌　あたい、知らないや！

信男　トランクがどうかなつてゐるんですか。お父さん！

龍治　ふむ。己の持物を調べて見た奴がゐるに違ひない。

信男　お父さん！　この家にはそんな失敬な人はゐませんよ。いくらお父さんでも、十幾年も外にゐた人ですからね、その持物を默つて弄るやうな事は無論遠慮しますよ。これから鍵をかけて置いたらいいでせう。

くめ　きつと市彌だよ。

市彌　（空を見ながら）雲！　雲！　雲！

くめ　仕樣がないねえ。

龍治　（ぢつと市彌を見る）この子は生れた時からこんな風に足りないのか。）

くめ　（淋しげに）ええ！

龍治　あの頃己は性の惡い病氣に罹つてゐた。それにひどく酒を飮む頃だつた。そのせゐだらう。己の病氣の爲にこんな子を生ませたと思ふと……（突然笑ふ）馬鹿と云ふものは可笑しなものだな。

信男　可笑しい處ぢやありません。可哀想でなりません。お父さんの罪ですよ。どうしても償へない罪ですよ。

龍治　そんなことがあるものか。（唐突に亂暴なる口調にて）生意氣な事を云ふな。貴樣は親を誣ひるのだな。そんな事をすると承知しないぞ。

信男　誣ひるのですつて、滑稽な。（冷靜に）今、あなたは自分の口で親だと仰有いましたが僕たちはあなたを親だとは思つてゐません。

龍治　なんだと？

信男　十五年も妻子を捨てて置くやうな人は親だと思へま

せんよ。姙娠してゐる妻や老いた母や、稚い子供に、借金を添へて殘して捨てて仕舞つたあなたは、今頃ひよつこり歸つて來て親の權利を主張した處で始まりません。無責任極る事ぢやありませんか。（少しづつ亢奮する）ねえ、僕は平常から口惜しくて堪らない事を今云ひます。それは僕の姉さんと、弟の、この市彌の事なんだ。

くめ　まアなんだねえ信男。よさないかえ。

信男　いいえ、よしません。僕の姉さんはラシヤメンになつてゐる。外國人の妾になつてゐる、姉さんの身體は、人の弄みものになつてゐる。僕は時々それを思ふとたまらない。（泣く）姉さんの身體が僕の學費になつたり食物になつたりしてゐるのだ。一家四人、膝をかこんで食事をしてゐる最中、食ひつつあるものが姉の肉體の搾り汁だと思ふと、食物が咽喉へ詰まるやうな氣のした事は中學三四年の頃から僕あ、のべつなんだ。（獨言のやうに）それは誰のおかげなんだ。無責任な父親のせゐなのだ。弟の市彌が、生れつき白痴なのも、僕等にとつて考へると腸を裂かれるやうな氣持がする。それだつてお父さんの罪惡の結果なのだ。

やす（つぶやくやうに）何だえ、十五年振で歸つて來たのに、いさかひをするなんてことがあるものかね。信男は、もうおだまりよ。

（信男、涙を拭きやがて帽をかぶりて出て行かんとする。）

くめ　どこへ行くのだい？

信男　（沈默。退場）

市彌　（空虚なる笑ひ）行つちやつた！

（長き間。）

龍治　（恐ろしき表情）畜生！　己を怨んでゐるのだな。

くめ　怨んでゐるなんて大袈裟な。そんな事はありはしませんよ。

龍治　（唸る）皆で己を憎んでゐるのだ。船から波止場へ上つた時、棧橋に立つてゐた警官がぢッと己を睨んでゐた。あの眼だ。あの眼だ。（恐ろしげに）やつぱり駄目だ。怨まれてゐるのだ。怨念なのだ。日本へ來てもやつぱり駄目だ。（おくめに）隣の奴は警察の犬ぢやないのだな。

くめ　そんな事はありませんよ。

龍治　噓を云ふときかないぞ。（脅すやうに）犬ぢやなくつたつて、變な眞似をしやがれば……

（沈默。）

（舞臺すこし暗くなる。）

市彌　黒い雲が行つてしまつた。蒼い處がすこし出た。あすこからお星様が出て來る。一ツ、二ツ、一ツ、二ツ、

おしまひに窒一ぱいになる。（間、無意味なる嘆息）ああ。
（格子戸、勢ひよく開く。龍治びくりとす。）
男の聲　あい、御免よ。
くめ　はい。（立たんとする）
龍治　（くめの袂を押ふ）警察で尋ねて來たらな、己のことなぞ知らないと云へ。歸つて來たなどと云ふな。（物蔭へ入る）
くめ　（うなづく）どなたです？
（障子をあける。）
男の聲　お客のやうだね。
くめ　まア、珍らしい、鑛吉さんですね。
やす　鑛吉さんだつて、久振りだねえ。
鑛吉　御無沙汰をしました。
（鑛吉、中へ入る。色の淺黑き、でつぷりした立派な男。請負師。大きな指輪をはめてゐる）
くめ　さアお上りなさい。
鑛吉　お客様かね。
くめ　いいえ。まア、よく……（挨拶す）
鑛吉　大變な無沙汰をしてね、濟みません。どうも忙しいものだから、でも皆丈夫のやうだね。信ちやんもかよ子さんも達者かい。お婆さんも丈夫だね。
やす　鑛吉さん、よく來たねえ。
鑛吉　ああ、近所まで來たもんだから。
やす　まア喜んでおくれよ。龍治が歸つて來たよ。
鑛吉　龍治？　（考へる）龍さんの事かね。
くめ　ええ！
鑛吉　歸つて來たつて。（呆れて）へえ！　ほんとかい。まア。それやいつの事だい？
くめ　昨日ですよ。
（龍治、出て來る。）
龍治　鑛さん！
鑛吉　おお、龍さん！
（二人、凝視してゐる。）
鑛吉　（涙をふく）あア、涙がこぼれやがつた。まアひどく變つたなあ。
龍治　うむ。面目無いよ。會はせる顏はないよ。
鑛吉　よく無事でゐて吳れたな。（感動す）何年になるかなあ。
くめ　丁度十五年ですよ。
鑛吉　久しいものだ。年を寄る筈だ。默つてアメリカへ渡つて仕舞つたので、あとでおくめさんがどんなに苦勞したか知れやアしない。
龍治　（ふと暗い顏）ふむ。

鑛吉　何しても夢のやうだ。お婆さん、やつぱり蟲が知らしたんだね。忙しい中を偸んでここへ寄つていい事をしたよ。

やす　ほんにさ。

くめ　ほんとに鑛吉さんには一方(ひとかた)ならない世話になつてねえ。かよ子が七ッ、信男が五ッ、その上市瀬がお腹(なか)にゐたのですからね。

鑛吉　(はしやいだやうに)　あの頃はおくめさんも水々してゐたがね。(笑ふ)

龍治　(神經質なる鋭き眼差にておくめを見る)

くめ　あんまり苦勞をしたので、一時に二三十も年を寄つてしまひましたよ。もうこんなお婆さんになつて仕舞つては始まりませんねえ。

鑛吉　始まらないッて、何が？

(くめ、鑛吉等笑ふ。龍治傍を向く。)

くめ　この先だつて鑛さんには色んなお世話になるだらうけれど、あの時親子が路頭に迷はずに濟んだのは、まつたくあなたのお蔭ですよ　ねえお婆さん

やす　ほんとうだとも。

鑛吉　だが、龍さんが歸つて來れば、もう安心さ。わたしもこんな浮き沈みの多い商賣をしてゐるので思ふやうな世話も出來なくつて、ほんとに申譯無い、(龍治に)一昨年なんぞもひどい失敗(しくり)をやらかして、米櫃まで差押への札をはられてしまつたのさ。あんな事があつたばかりに、かよちやんを毛唐の處へなんぞやらなくてはならなくなつたんだが……。あとでおくめさんにどんなに恨みを云つたか知れやしない。もう取返しのつかない事で、まつたく面目ないよ。親類で揃つてのめのめかうしてもゐられないやうなわけさ。

龍治　なあに、かへッてそんなに云はれるといい心持がしないよ。(嶮しき表情す)　おい、おくめ、己はお前に禮を云ふぜ。かよ子をラシヤメンにして呉れてなあ。

鑛吉　(不快げに何か云はんとして、口をつぐむ)

龍治　……娘を毛唐の妾にして置いて、自分達はいい思ひをしてゐたのだからな。(神經的なる笑ひ)

くめ　(はらはらして)　何(なに)を云つてゐるんですよ。あなた。

龍治　何も云やしない。己なんぞはこの家へ歸つて來る人間ぢやなかつたのだ。

鑛吉　おい、龍さん……お前、妙な事を云ふぜ。奧歯へ物がはさまつたやうぢやないか。おくめさんが苦勞をしぬいてお前さんの留守をどうやら此處まで切拔けて來たんぢやないか。

くめ　わたしは兎に角、鑛さんに濟みませんよ、いや味のやうにとれるぢやありませんか。

龍治　（突然におくめの横額を打つ。續けて打たんとす）

鑛吉　（おくめを背後にかばふ）何をするんだ。

龍治　何もしやしねえ。己の女房を己が打ッたのだ。

（おくめ、靜かに居ずまひを直し、俯眼して髪など掻き上げゐる。）

鑛吉　（腹立たしげに）馬鹿野郎！　義理も人情も知らねえ奴だ。昔からさうした奴だ。手前が勝手な眞似をして、女房子を路頭に迷はせた事も平氣でゐやがる。恩に着せるんぢやアねえが、己が彼是面倒を見てやつてこそ、かうして歸つて來る巣があるんだぞ。（叫ぶ）なんだな、手前、何かつまらねえ事を考へてゐやがるんだな。（唸る）己と、おくめさんと密通いてでもゐたやうに思つてゐるんだな。

龍治　そんな事を知つた事か、何でも勝手にしやアがれ。

鑛吉　どうしたと。

（鑛吉。龍治を打つ。龍治抗ふ、やがて龍治緣より突落さる。）

くめ　（鑛吉を留める）まア鑛さん、お腹も立ちませうが勘忍して下さいよ。あの人はどうもすこし變なのですから。

鑛吉　生かして置かねえぞ。（なほ、つかみ掛からうとする。おくめ、必死になつて留める）

龍治　（地上に坐りて、ぼんやりと前方を見てゐる。すべて異常なり）

くめ　鑛さん、まア勘辨しておくれよ。唐人見たいなわからない男になつて歸つたのだからね。了簡しておくれよ。

鑛吉　（荒々しく立つ）もうこの家へは來ねえから、馬鹿め。人非人！

（腹立たしげに足踏み鳴らして歸り去る。）

（おくめ、涙をこぼしゐる。）

（長き沈默。）

（市彌、それらの事に無關心に、空を仰ぎ、口のうちにて絶えず呟きゐる。）

龍治　（發作的に感動す）あア、彼奴、行つて仕舞つたな。あれは己が兄弟のやうに一緒に育つて來た從兄だ。たつた一人の從兄だ。あいつも己から逃げた。女房も逃げた。子供も逃げた。己はもう己だけになつた。（泣く）

市彌　やあ、また烏が飛んで行かあ。烏！　烏！　ぎやアぎやア、ぎやア、ぎやア！

やす　龍治や、どうおしだえ。何もそんなに泣く事はないよ。なアに鑛吉の事だもの、また四五日經てばなつかしがつて逢ひに來るよ。お前が變な事を云ふからいけないのだよ。

龍治　（憑き物でもしたらん如くに）……己は縛られるの

だ。あア大變な事をした。己はもう縛られる。（そはそはとあるく）あいつは己を訴へるにちがひない。

（おくめ、おやす、ぢッと龍治を注視す。）

（長き間。）

（舞臺すこし暗くなり、雪降り出づ。）

市彌　雪だ、雪だ。雪が降つて來た。

龍治　（苦しげなる嘆息をして立つ、夢より覺めたるやうにあたりを見廻す）あゝ、もう夕方だな。（惱ましげに）大分暗くなつて來た。

（けたたましく鷄の羽搏きと叫び聲きこゆ。木戸の戸を開き、隣の大村德三驅け込み來る。三十八九の小柄なる滑稽に見ゆる男。髭をはやしゐる。度の强き近眼鏡をかけゐる。）

龍治　（おびえて身がまへをなす）

德三　（息を切らして）確かにこの家だ。早く捕まへなければ……

龍治　畜生！　來たな。

（おくめを突のけて格子戸より急ぎて外へ走り去る。おくめ。呆氣にとられて凝立し、やがて、我にかへりて龍治の後を追ふ。）

德三　（顏を前に突き出し、眼を一ぱいに見張つて）おや、お客樣でしたか。これは失敬。

やす　（思はず立ち上りながら）大村さん、何の御用です。

德三　なアにね、チヤボを鳥屋へ入れてやらうとしたら、雌の方が逃げてね、確かに垣根をくぐつてここの庭へ入つたんです。――手を貸して捕まへて下さいな。（あたりをきよろ／＼見廻す。地の上に龍治がハンケチを落し行きたるを兩手をもつてそつと抑へ、やがて手を引く）なんだ、ハンケチが落ちてゐる。

（市彌、その樣を見て、息を引きて笑ふ。）

（雪、盛んに降り出づ。）

――道具變る――

第二場　青山御所前の竝木道

……時は前の場より續く。雪、小やみになり、あたり薄暗くなりゐる。

舞臺端、上手より下手へかけて落葉したる山銀杏の並木を植ゑたる道路あり。街燈に灯點りゐる。

上手より、龍治のつそりと出で來る。顏蒼ざめて、悲しげに見ゆ。氣持はひどく落着きゐるさまなり。中央の石に腰を下し、頰杖を支きて正面を凝視し、淚ぐみて物おもひゐる。やがて靜かに立ちて行きかける。うしろより、「ちよいと待つて下さい、あなた、あなた！」

と呼ぶおくめの聲きこゆ。

龍治（腕組みをしたるまま振向く）

くめ（息をはずませて追ひつく）まア、あなた。（男にすがりて）どうなすつたのです。どこへ行らつしやるのです。

龍治（ぼんやりとおくめの顔を見下す）

くめ　何を驚いたのです。あれはお隣りの人ぢやありませんか。

龍治（氣抜けしたるやうに）何を驚いたのか己にもわからない。（苦悶の表情あり）まつたく己の頭はどうかしてゐる。あの男が入つて來ると、ふいとひどく驚いたのだが……。

くめ　ほんとに今は大層落着いておゐでなさるけれど、さつきの樣子つてありませんでしたよ。さあ、うちへ歸りませう。何が氣に入らなかつたのだか知りませんが、鑛吉さんと喧嘩したり、わたしを打つたり……（髪や褄を繕ひながら）まアあたし、こんな風をして駈け出して來て、まるで氣狂ひ見たいに。

龍治（靜かに）おくめ、すこし休んで行かう。（中央へかける）己もひどく草臥れた。（やさしく）お前、びつくりしたらうな。

くめ（並びて腰を下す）ええ！

龍治（暗き顔）まあ許して呉れ。長い間苦勞をかけて、たまに歸つて來ると、すぐいろいろ心配させて濟まない。（間）己は腦の工合を大變惡くしてゐるのだ。

くめ（うなづく）

龍治　己は時々、頭の中がぼんやりして、取留めがなくなつて仕舞ふのだ。今は大變落着いてゐる。こんなに靜かな氣分の時は珍らしいのだ。（間）己はどうしても早晩氣狂ひになるのだとおもふ。

くめ　まア、そんな馬鹿なこと。

龍治　いや、氣休めはよして呉れ。お前もさう思つてゐるのだ。（間）おい！　己の眼は光るだらう。

くめ（底氣味惡くおもひつつ）いいえ、ちつとも光りませんよ。

龍治　さうか。この眼は時々、氣味が惡いほどキラキラするのだ。なあ、おくめ、丁度いい折だ。己は正氣の内にお前に話して置く事がある。

くめ　まア正氣の內だなんて、いやですねえ。それにこんな往來で。

龍治　いや、こんないい氣持が三十分で終るか一時間で無くなるかわからないのだから。大事な時間なのだ。（空を仰ぐ）雪もやんだ。（やや間を置きて）かうして二人ぎりで、こんな木の蔭にゐると、二十年も前、まだ一

緒にならなかつた頃を思ひ出すな。
くめ（しみじみと涙ぐむ）ほんたうにあの頃はよう御座いましたね。
龍治　お前、寒くはないか。
くめ　いいえ。（袖を掻合せて寄り添ふ）
龍治　アラスカは寒かつたな。（追想の眼を空に投げつつ）氷の中に、起き伏しして暮してゐた。朝から晩まで雪が降つてゐた。明けても暮れても……
くめ　アラスカと云ふ處にゐたのですか。
龍治　そこで働いてゐた事もあつたのだ。（間）おくめ、お前は己が突然日本へ歸つて來たのをどう思ふ。
くめ（良人を見上げて）どうッて？
龍治　日本の山や川や。もと住んでゐた家や、お前や子供たちがなつかしくなつて歸つて來たのではない。親や妻子がたまにでも戀しくなるやうならばこんな人間にはならなかつたのだ。（間）ああ、考へて見ると皆夢のやうだ。己には惡靈が憑いてゐる。時々それがわるさをする。それが己の腦の工合を狂はせる。丁度子供がおもちやの機械をいたづらするやうに、惡靈が己をいぢり廻す。（嘆息）己はな、お前が考へてゐるより、ずッと無頼漢なのだ。驚く事はない。いいか、驚く事はない。己はアメリカで人殺しをして來たのだ。
くめ（倒れんとする）
龍治（支へる）しつかりしてゐて呉れ。心配することはない。お前たちには迷惑をかけない。己は惡い事を爲盡して來た。もうこの上お前達には迷惑をかけやしない。（急に涙をこぼす）己は胸が輕くなつた。己はこの事を初めて人に話したので、氣が樂々としたのだ。（間）苦しい祕密だつたのだからな。
くめ　まあ、あなた。
龍治　アメリカで己のやつて來た事は、喧嘩や、強請や、博奕や、欺騙だ、丁度酒を飲むやうに、毎日そんな事をやつたのだ。が、それはどうでもいい。己は己の恩人の女房へ懸想した、その横戀慕が叶はなかつたので、ほんの嚇しに出したピストルで、その女を殺した。それから、その亭主も殺した。己は自暴自棄になつたのだ。
くめ（おびえて男にすがりつき、がたがたふるへゐる）
龍治　その男は親切な、人のいい男だつたよ。女もやさしい人間だつた。その夫婦にはひどい世話になつたのだが……それを己は殺した。不思議だ。不思議だ。あれは己がしたのではない。己に憑いてゐる惡靈がさうさせたのだ（涙を拭く）……取返しのつかない事だ。
くめ　あなた。あなた。ほんとですか。
龍治　さうだ。己はおたづね者なのだ。（間）日本へ逃げ

て來たのも、もう警察ではわかつてゐるに違ひない。己は犯罪後、一晩も落着いて寢た事がない。己は、いつも後から追はれるやうな氣持でゐる。住み馴れたアメリカにも居たたまらなくなつて、日本へ逃げて來ても、やはりこの氣持はついて廻つてゐる。己はいつ牢へ入れられるかわからない。いつ絞首臺へ追ひ上げられるかわからない。(間) 俺はまた逃げるのだ。

くめ　まア、あなた!

龍治　今度はもう逢へない。もう一生逢へないのだ。お袋の事も、子供たちの事もなほお前に頼む。お袋はもう耄けてゐる。やがて死ぬだらう。どうかよく面倒を見てやつて呉れ。(間) お前がしッかりしてゐて呉れるのでほんとに安心だ。己は云ひやうのない惡人だ。無頼な夫を持つたお前の不運はなんと云つて慰めていいかわからない。子供たちも可哀想だ。かよ子をラシヤメンにしなければならなくなつたのも、己の罪だ。市彌といふ馬鹿までお前に生ませたのも己の罪だ。なんと云ふ罪の深さだかわからない。己は罪惡の塊だ。お前があんな子まで抱へてこの先長く暮していかなくてはならないとおもふと、ほんたうに胸が裂けるやうな氣がする。己の病氣がもとなのだ。すまない、すまない。(嗚咽) どうかゆるして呉れ。

くめ　そんなにわかつてゐるのなら、なぜ早く改心して下さらないのです。

龍治　今のやうな、正しい氣持でゐる事はめッたにないのだ。己は時々どんな簡單な理窟もわからなくなつて了ふのだ。物を盜む事、亂暴をする事……今の氣持ではまるで夢のやうだが、せずにはゐられなくなるのだ。丁度淫亂な病を持つてゐる女が、苦しみながらよく間違ひをするやうに。(間) どうか、お前は己のことをすつかり忘れて、丈夫で長く暮して呉れ。(跪く) そして己を許して呉れ。

くめ　(龍治と相擁して泣く)

(雪、ひそやかに降り出づ。)

(――長き沈默。)

くめ　(靜かに) あなた。

龍治　うむ。

(やや間あり。)

くめ　自首して下さい。

龍治　いやだ。(力を籠めて) いやだ。

くめ　なぜです。そんな事つてありません。

龍治　(あへぐやうに) 自由でゐたい! 己は自由でゐたい。苦しんでも生きてゐたい。苛まれても生きてゐたい。

くめ　いいえ。それはいけません。どうぞ自首して下さい。

（泣きつゝ）どうぞね……。

龍治　いやだ。（立ちて行きかける）ではもう行くぞ。

くめ　まあ。あなた、どこへ行くのです。

龍治　どこへ行くかわからない。また外國へでも行くかも知れない。日本は息苦(いきぐる)しい土地だ。どこへ行つても、もうお前達には逢へないのだ。足尾の銅山へ姿をくらましたあの時に、死んでしまつたのだと思つて與れ。

くめ　まあ待つて下さい。（間）どうか今夜一ト晩だけ家へ泊つて下さい。

龍治　いやいや、それはよさう。もう警察で眼をつけてゐるのだ。

くめ　そんな事はありませんよ。それは氣のせゐです。

龍治　いや、さうに違ひない。だから……

くめ　でも、トランクも置いてあるでせう。それにどこへ行くにしてもお金が入るでせうが、そこに持つてゐらつしやるのですか。

龍治　（沈默）

くめ　持つてゐないのですね。ああ、それではまた惡い事をする氣になるでせう。

龍治　（頑くなに沈默してゐる）

くめ　ではかうして下さい。家(うち)へ歸るのがいやならば、かよ子の處へ行つて、あれにも逢つてやつて下さい。口癖(くちぐせ)のやうに云ひ暮してゐました。そしてわたしは引き返して、トランクをそこへ屆けませう。そして、かよ子にお金を用立たせませう。出來るだけのお金をこしらへさせますから……惡い事をしないやうにして下さい。

龍治　ああ、あれはラシヤメンになつてゐるのだ。（間）よし、とにかくさうしよう。

くめ　かよ子の家なら今夜泊つてもよいでせう。（子供をすかすやう）ねえ！

龍治　（憂欝に）うむ。とにかく行かうか。（空をあふぐ）また雪が降つて來たな。雨とちがつて濡れもしまい。

くめ　それに遠くもありませんから。

龍治　（默然として）日が暮れて來る、雪が降つてゐる。淋しい夕方だなあ。

くめ　（啜り泣きす）あなた、寒くはありませんか。

龍治　いや。お前、ふるへてゐるな。

くめ　いいえ。

（二人、悲しげに行きかける。）

龍治　（ふと立止つて）もう遠くの方は全く見えなくなつた。並木(なみき)が暗い中(なか)へ消えてゐる。己もあの暗い中へ入つて行くのだ。（間）向うに見えるのはなんだらう。

くめ　なんでもありませんよ。

龍治　あの黑いのは、あれは己の死の影だ。

くめ　何を云つてゐるんですよ。さあさあ、早く參りませうよ。

龍治　おお！　行かう。

（二人、とぼ〳〵と上手へ向つてあゆむ。）

――幕――

第三場　シャアル・ベルジエの家

純洋風の部屋。座敷。

上手と下手に扉(ドア)あり。

正面に大なる出窓あり。カアテン半ば開かれ、ガラス戸の外には夜の闇濃く迫りゐる。窓際に二三本の樹植ゑあるが見え、枝に雪幽かに積りゐる。外は絶えず雪降りゐる。ガラス戸へも折々吹きつける。すこし風ある樣子なり。下手寄に大なる煖爐ありて、火は赤々と燃えゐる。卓、椅子、安樂椅子などすべてよろしく。

正面の窓ガラスに額をよせ、闇に降る雪を眺めゐる女あり。主の妾かよ子なり。春のほつそりとしたる美しき女、髪は外國風に結(むす)びゐる。智識的な才氣走れる顏なれど、云ひやうなき淋しき影あり。絹のシヤツを着、袖の長い衣服をまとひたる外、あまり異國趣味を以て飾られたる服裝にあらず。

上手の出入口より、主シャアル・ベルジエ入り來る。瘦せて美しき佛國人なり。卅六七に見ゆ。流暢なる日本語にて物を云ふ。外出の支度をなしてゐる。

シャアル　かよ子、此處(ここ)にゐたのですか。ペテロは何處へ行きました。

かよ　（振り向かずに）存じません。

シャアル　さう！　それは困りました。かよ子どうかしましたか。

かよ　（振り向く）いいえ。

シャアル　泣いてゐましたね。

かよ　いいえ。

シャアル　さつきペテロに聞きました。お父(とう)さんアメリカから歸つて來ましたこと、ほんとですか。

かよ　ええ！

シャアル　大變結構ですね。もう逢ひましたか。

かよ　いいえ、まだ逢ひません。今ね、丁度訪ねて來たのです。あちらの部屋に待たしてあります。

シャアル　なぜここへ通しませんか。大變にいいではありませんか。御馳走澤山してあげたらよろしいでせう。

かよ　わたし、父に逢ひたくありませんの。どうしようかと思つて考へてゐますの。

シヤアル　どうしてですか。なせですか。
かよ　わたしが子供の頃から、家の人たちを捨ててしまつた父ですもの。わたしたちを捨ててしまつた父ですもの。薄情な人なのですから、わたし、どうもほんとの親のやうな氣がしません。
シヤアル　然し、お父さん逢ひたがつてゐますね。母さん、喜んでゐますか。
かよ　ええ。多分。
シヤアル　早く澤山御馳走して上げたらいいでせう。
（ペテロと呼ばるる谷村勇平下手より入り下る。醉ひゐる。すこしく中氣の氣味ありて、舌もつれ手足の運動に錯誤あり。老人。）
シヤアル　おおペテロ！　今探して居ました。自動車來ませんか。
勇平　今やうやく來ました。
シヤアル　また醉つてゐる　澤山呑んでは大變にいけない。
勇平　なアに、ほんの少しでさ。
シヤアル　かよ子機嫌が惡い。また譃け話して笑はせてやつて下さい。外、雪降つて寒いですね。（かよ子に）　かよ子、わたし、あした神戸へ行くかも知れません。
かよ　また？
シヤアル　ええ、忙しい用が出來ました。神戸へ行けば四五日歸りません。お金上げて置きます。（二三百圓位に見ゆる札を渡す）　お父さんに逢ひません。よく云つて下さい。この部屋あたたかですね。ここへ呼んでお上げなさい。では行きませう。
かよ　（受取りたる札を傍の小さき卓の上に置く）　御機嫌よう。
シヤアル　（微笑、キスを與ふ）
（召使の女、上手より登場　）
かよ　（召使に）　あの、わたしの部屋に母さんと、もう一人男の人が待つてゐるから、此處へ通して下さい。
召使の女　はい。
（主につづきてかよ子、勇平下手より退場す。）
（召使の女、石炭を煖爐の中へ入れ、上手へ去る。）
（――再び、上手より前の場の龍治夫妻を案内し來り、椅子を勸む。）
召使の女　さアどうぞ。
くめ　どうも有難う御座います。
（召使の女、去る。）
（龍治、あたりを見廻しゐる。）
くめ　さあ、あなた。煖爐へ當つたらどうです。この部屋のあたたかいこと。
龍治　（落着かぬ樣子にて、あたりを見廻す）　思つたより

きれいな住居だ。主は佛國人なんだな。何をしてゐる人なのだ。
くめ　何ですか新聞の通信社の人だとかで。學者ださうですよ。歴史とかを研究してゐる人ですつて。
龍治　ふむ。（間）もう出掛けて行つたのだな。
くめ　今出て行つたやうです。
龍治　畜生！（突然立ち上る）
くめ　（ぎよつとして）まア、あなた。
龍治　ああ、いやな氣持だ。（兩手にて頭を支へ、再び椅子に腰を落す）
（沈默。）
（かよ子下手より入り來る。）
くめ　おお、かよ子。お父さんだよ。
かよ　（それには答へずに）母さん、まア寒かつたでせう。雪が隨分降つてゐるわねえ。（父親の方を見ぬやうに坐る）大分積つたやうですね。
くめ　かよ子！　これが父さんだよ。
かよ　（わざと聞えぬ振して）お婆さんはどうなすつてゐて！　寒いので弱つてゐらつしやるでせうね。あ、それから晝間いらつしやつた時、持つて行つて戴かうと思つて。わたしの寫眞が出來たのですよ。それから、先日の買物のお金も持つていらつしやつて下さいな。（最前の紙幣より一二枚取りて渡す）
くめ　（はら／＼しながら龍治に）あなた！　かよ子がこんなに大きくなつたのですよ。
龍治　（ぢッとかよ子を見ゐる）
（龍治、默りゐる。）
くめ　（哀訴するやうに）かよ子！
かよ　（窓の外を見つつ）なあによ！
くめ　お前、お父さんに御挨拶をしないと云ふ事はないよ。
かよ　（初めて父を見る。憎惡の色あり）母さん！　さッきもわたし申したでせう。わたし、父さんにお眼に掛りたくはないのでしたのに、なぜお連れになつたの。
くめ　これ、何を云ふのだい。父さんはまた外國へ行つておしまひになるのだよ。もうこれぎり逢へないのに……（泣く）
かよ　（表情あり）
龍治　あしたは東京にはゐないのだよ。それで、今夜逢はなければ、もうおしまひなのだよ。
かよ　（すこし意外の樣子にて）すぐ歸るのですか。
龍治　歸るのではない。今度は、別の所へ行くのだ。かよ子！　大きくなつたな。ああ、まつたくきれいになつたなあ。
かよ　お父さん！　あなたはなぜわたしたちの親なのでせ

うね。あなた、影が薄いわ。（ふと、ヒステリツクに笑ふ）とにかく、今夜は御馳走しませう。ラシヤメンが御馳走してあげますわ。（戸の方を向きて）益村さん！益村さん！（母に）母さん、あの益村と云ふお爺さんは若い時に牧師だつたのですつて。（笑ふ）妙な牧師だつたでせうね。あんなにお酒ばかり飲んでゐるぐうたらさんが、人にお說教をしたと思ふと可笑しいわね。あの人に頼みませう。御馳走の支度をね。

（かよ子、出で行かんとす。）

（益村勇平入り來る。）

勇平　何か用ですか。

かよ　あア、ムシウ益村、これがわたしの父親の幽靈よ。（神經的に笑ふ）どうぞよろしく。そこで、この幽靈が、また日本からどこかへ行くので、お別れの小さな宴會を開かうとおつしやふのだから。急いで支度をさせて下さいな。お酒の罎を、あなた、見計つて澤山ここへ運ばせて下さいな。

勇平　（にこにこして）や、それは非常な思ひつきだ。素晴らしいや。御親父。わたくしがペテロ益村勇平です。クリスチヤン・ネエムは持つてゐても、御覽の通りめちやめちやな人間です。（かよ子に）そこで奥さん！　喰物はどうします。

かよ　奥さんなんてよして下さい、お父さんの前ではきまりがわるいわ。ラシヤメンと呼んで下さい。（笑ふ）ラシヤメンには臺所の事はわかりやしませんわ。喰物もいやうに頼みます。早くね。

勇平　よろしい。すぐやります。

（勇平去る。）

くめ　かよ子！　お前、そんなに御馳走なんぞいらないよ。お父さん！　あなた、あまりお酒を飲まないで下さい。

（龍治、かよ子の樣子に眼を離さずにゐる。）

かよ　かまふものですか。父さんはお酒癖が惡かつたのですつてね。面白いわ。その方がいいわ。お父さんの幽靈さん！　あなたが日本を逃げて行く時、ちひちやな女の子だつたわたくしが、こんなに素敵な子になつてゐるので驚いたでせう。だつて、ラシヤメンですもの。氣取つてゐたつて仕樣がないわ。あなたがお金を送つて呉れないでせう。それでも生きていかなくてはならないでせう。せち辛い世間ですものね。そこでわたしがラシヤメンになつたの。いろいろわけもあつたのですが、まア醉狂も手傳つたのですね。（笑ふ）ねえ、母さん。

くめ　かよ子や、それはわたしが……

かよ　（指を立てゝ、おどす）母さん默つて！　父さん、ラシヤメンは可哀想でせう。わたし、お父さんに逢ふのは

ね、ほんとは非常にきまりが悪かつたのよ。ラシャメンなんかにならないでも、と思はれやしないかと云ふ考へでね。學校のお友達はわたしがラシャメンだと云ふだけで、ひどくいやがつてゐるわ。（笑ふ）同窓會の通知も呉れないし、手紙を出しても返事も呉れないの。女のお友達なんて、なさけないものね、道で逢つても、知らない風をするわ。きたならしいとか、恐ろしいとか思つてゐるのよ。お父さんはどう思つて。

龍治　（沈默）

かよ　娘がラシャメンになつて嬉しくつて。さうではなくて。

龍治　（よろめき立ちて出で行かんとす）

くめ　どこへいらつしやるのです。

龍治　己を歸して呉れ。己は此家を出たい。

かよ　いけません、いけません。卑怯です。ここにゐらつしやい。

（召使の女、勇平等、食器、酒などを運び來る。）

勇平　さア、御親父！　ここへお坐りなさい。

かよ　お母さん、お父さん。どうぞこつちへ掛けて下さい。ラシャメンのお酒はいやですか、父さん。さうでなければどうぞ。この娘はお酒も飲みます。煙草も吸ひます。さア、お始めなさいな。ペテロ。

翁村　（笑ふ）有難いな。

（召使、一同に酒をつぐ。）

くめ　御主人はお留守らしいが、かまはないのかえ。

かよ　（杯を口へはこぶ）かまふものですか、この位の事をしたつて、何かまふものですか。そんなに不自由なおもひをして、人のなぐさみものになつてゐられると思つて、母さん？

くめ　（悲しげに）それはお前……

かよ　まア、母さん！　そんな顏をしないで頂戴！　陰氣だわよ。父さん！　お乾しなさらない？

龍治　（苦しげに）おい、かよ子！　お前は己を怨んでゐるのかい。

かよ　ええ、まア、さうですね。お父さんがしつかりしてゐたら……（くめ、何か云はんとしてうなだる）お母さんは、父さんと一緒になつたために一生涯、おどおど心配ばかりさせられてゐる。わたしは母さんと同じやうに女ですもの、女として父さんのやうな人を憎みますね。母さんは父さんと云ふ人にめちやめちやにされる。その爲に結婚と云ふものの恐ろしさ、結婚は女を虐げるものだと云ふ考へを起したわたしが、平氣で人の弄みものになつてしまひました。父さんと云ふ人がみんなその根を植ゑてゐるのです。わたしは女として男のあなたを呪ます

よ。母さんの爲に義憤をもらしてゐるのではなくわたし個人としてです。男は、昔から女を虐げます。昔から暴君です。女を愛する、女を尊敬する……。さう云ふ形式で女を虐げます。(間) 男の身體そのものは、女にとつて侮辱そのものです。いくら女たちが一生懸命になつても駄目です。理窟の上からは女の立場を引上げる事は出來ても、事實の上では女は男に蹂躙されるのが本當です。人間の原始から。意識しない屈辱を受けてゐるのが女です。男はその特權を持つてゐる。父さんと云ふ人は、その特權を濫用した人です。その特權を誇張させた人です。(間) 娘をラシヤメンにしました。白痴な子を生ませました。

くめ　かよ子や！　もうお前……

勇平　よウ。大變六ケしい議論で、さつぱりわからない。

(龍治、うなだれてゐた顏をあげて狂暴にウキスキを呷る。)

(かよ子、突然に笑ひ出す。)

かよ　さア、もつと愉快なお話をしませう。(杯をとる) 徐村さん、もつとお飲みなさい。

勇平　(嬉しさうに) さつきから、だまつてやつてゐますよ。わたしは、今の奥さんの演説はよくわからないが、とにかく男は女より質のよくないものだと云ふ事らしいが、どうして中々女だつていけませんぜ。わたしはね、女の爲に牢へ入れられました。

(龍治、おくめ、表情あり。)

勇平　だが。あの頃は樂しかつたなあ (間) 牧師が監獄へ入れられたのだから呆れるでせう。それツきり背教徒ですよ。……監獄から出るとすぐ餡麵麭を買つてむしやむしや喰べたつけな。あの頃だつて、左だつたのだが、その時はひどく甘いものがたべたかつたつけな。ああ、もう一度監獄へでも入れられるほどの元氣が欲しいな。あ (龍治に) あなたなんぞわたしから見ると二十年近くも若い。それは羨ましい事ですぜ。どうです、一番、うんと罪を作つて監獄へでもやられるやうな粹な事をやらかしちや。へへへへへ！

龍治　(酒をあふる) いやな事だ。

勇平　弱蟲だね、そんな了簡では色は出來ないね。

龍治　かよ子、己は面目ない。

かよ　さア、もつと盛んにおあがんなさいな。唄でもうたひませうか。(唄ふ)

いかなれば此くも傷つきし
いかなれば我心破れゆきし？
誰か知る、我涙は謂れなく落つるを

誰か知る、誰か知る。

——三木露風氏作「涙」——

(唄ひやむ。)

(淋しき沈默來る。勇平ひとり酒を飲む。)

(龍治、突然笑ひ出す。立つ。)

くめ　(驚く)　あなた!　どうかしたのですか。

龍治　あははは!　馬鹿げてゐる。ほんとに馬鹿げてゐる。あれは夢なんだ。己は恐ろしい人間ではないんだ。優しい、いい人間だ。警察だつて監獄だつてこはくはない。己は無罪だ。

くめ　あなた、しッかりなさいよ、何を云ふのですよ。

龍治　おくめ、歸らう。

くめ　あなた、今夜は此處へ泊めて貰ふのでせう。

龍治　なあに!　もういゝのだ。(笑ひつつ)　可笑しいなあ、ほんとに可笑しい。

(かよ子、いぶかしげに父を見る。)

くめ　かよ子や、お父さんをもうすこしここへ置いておくれ。わたしは今、家へ歸つてトランクを取つて來るからね。(龍治に)　あなた、もし、家へ歸らない方がいいのでせう、ええ?

龍治　(急に悲しげに)　うむ、うむ。(子供のやうにうなづく)　さうだ。

くめ　(かよ子に)　ぢや、一寸家へ歸つて出直して來るからね。

かよ　俥を云ひつけませう。この雪では大變だわ。

くめ　いいえ、今度來る時は乘つてくるけれど、今はいらないよ、傘と下駄を貸して呉れればいいのだよ。(勇平に)　ちよつと失禮いたします。

勇平　やア、お氣をつけなさい、大變ですな。

くめ　(かよ子に)　ではお前頼んだよ。

かよ　ええ!　(おくめに隨ひて去る)

龍治　(落着かぬ樣子になりて)　ねえ!　お前さんは、人殺しをした事がありますかね。

勇平　人殺しを……へへへへ、まア無いね。

龍治　(眼を据ゑて)　無い?　嘘を吐け。

勇平　嘘ぢやないさ。

龍治　(聲をひそめて)……氣をおつけよ。捕まるぞ。油斷をするなよ。縛られるぞ。

勇平　(氣味惡げに立つ)　さア、わたしも行つて寢ようかな。お客樣はまア御ゆッくり。(立ちて)　ああ、醉つた。

(勇平、退場す。)

(龍治一人殘る。)

龍治　(四邊を恐ろしげに見廻す)　あア、己一人を殘して、

皆行つてしまつた。（狂ほしく） この間に逃げないでは駄目だ。この間に……

（かよ子登場す。）

かよ　（何事もなげに） あら、お父さん一人なの。益村爺さんはどうして。さあ、もつとお飲みなさいよ。

（召使の女登場。）

召使の女　（かよ子に） 奥さま、弟さんがいらつしやいました。

かよ　弟が？

召使の女　（背後に向つて） どうぞこちらへ。

（前幕の信男、ただならぬ面持にて登場す。召使の女、去る。）

信男　姉さん！

かよ　お、信ちやん。お前そこでお母さんに逢はなかつたかい。

信男　逢はない。（父を見る） あア、お父さん！

かよ　母さんはたつた今出て行つたのだよ。

信男　家へ歸つたのかしら。急に用が出來たのでね。

かよ　どんな用なの。

信男　今、警察の人が來てね、お父さんがゐるかと云ふのさ、そしてどんどん家へ上つてお父さんの持物をしらべて行つたのだ。（亢奮して） お父さん！ 警察で調べられるやうな事をしたのですか。

（龍治、激しき表情あり。）

かよ　それでどうして。

信男　そして、まるで僕等を罪人扱ひにして、いろんな失敬な態度で何か云つて調べて行つた。多分、姉さんの處だらうと思つたけれど僕は默つてゐた。……姉さん、ちよつと話しがあるから顔を貸して下さい。

かよ　ここではいけないの。では……（二人、室外へ去る。）

龍治　（狂ほしく） さあ、この間に逃げないでは。女房や子供も警察の手先になつてゐやがる。

（最前、かよ子の置きたる紙幣を卓の上より見出し険悪なる顔をしてあたりを見廻し、それを盗みて、ポケツトへ入れる。同時にドア開き、召使の女、何の氣もなしに果物を積みたる盆を持ちて登場す。）

召使の女　（驚きて果物を床に落す） なんで御座います。

龍治　（女の肩を鷲づかみにする） 貴樣、見たな。（絶望的に手を離して、よろよろと椅子に腰を落し、髪の毛をむしる）

召使の女　（盆を卓上に置き去らんとす）

龍治　（立ち上つて女の手をつかむ、片手に果物ナイフを握りゐる。ぢツと女を睨む） 人にしやべるなよ。人にしやべると……（ナイフを振りあげる） かうするぞ。

召使の女（驚き叫ぶ）あれえ！

龍治　うぬ。

（召使の女、逃げようとする。龍治、狂暴に髪の毛をつかむ。）

召使の女（恐ろしさに聲立たず）わたくし……存じません。何も申しません。あれえ……誰か來て下さい。（叫ぶ）

龍治　畜生！

（強く肩を刺す。女、鋭く聲を立てて倒れ、すぐ起き上り、また倒れる。）

（かよ子、足早に入り來る。これを見て凝立す。）

龍治（血のつきたるナイフをぢツと見る。やがてそれを恐ろしげに投げ捨て、兩手をはげしくこすり、すぐ笑ふ）ひひひひ！

かよ　お父さん！

龍治　やつた、またやつた！

（かよ子上手へ行き、急ぎドアを閉め鍵を下し、更に下手へ走り同じくドアに鍵を下す。）

（ドアの外へ召使等駈け來り集る。）

扉外の聲　どうかしましたか。

扉外の聲（叩く）お開けなさい。どうしました。

かよ（叫ぶ）なんでもないのよ、なんでもないのよ。行つて下さい。あつちへ行つて……

扉外の聲　何だか大變な聲がしました。

かよ（ふるへながら、扉に背をもたせて押へるやうにす）大丈夫です。ちよつとした事です。（はしりて正面の窓をあける。雪降り込む）父さん！　ここから逃げて下さい。

龍治（異常に笑ふ）へへへへ！

かよ（父の手を引く）お願ひです。逃げて下さい。早く逃げて下さい。（召使の女の死骸を抱き起す）おなつ……堪忍しておくれよ。免しておくれよ。こんな蒼い顏をしてゐる。どうか死なないでおくれ。（父に）さア、お父さん、早く逃げて下さい。醫者を呼ばなくてはなりません。早く行かないと、わたしも聲を立てますよ。ドアを開けて人を呼びますよ。（召使の女に）おなつ……しつかりしておゐで。死んではいやよ。死んではいやよ。

龍治（戰慄す）あア、己は……（手についてゐる血を見る。唸るやうに）血だ、血だ。（室内を走り廻る）

かよ　こつちです。こつちです。

龍治（ドアを開けんとす）

かよ　違ひます。そこはいけません。窓からですよ。父さん！

龍治（走りて、上手の戸棚へ突當る。ガラス碎け、響きび

しく立つ）

かよ　父さん、どうなすつたのです。こつちですよう。

龍治　（狂ふ）大變だ　大變だ。

（狂暴に上手より下手へ猛進し、煖爐の石に頭を打當て倒れる。頭碎け、血は眼鼻より噴き出づ。）

（――かよ子叫ぶ。）

（龍治立つ。甚だしくゆるやかに再び前方へ倒れ、煖爐の火かがやける中に上半身を入れ。手もて燃え盛る石炭を搔き出すやうなる運動をなす。）

（やがて半身を火の中に埋めたるまゝ絶命す。物の燻(くすぶ)りたる煙、煖爐より吹き出づ。）

かよ　（これを凝視する數秒時）ああ、父さん！

（喪神して昏倒す。）

――幕――

美しき白痴の死（一幕）

人物

行子　えびす屋と云ふ富める呉服屋の姉娘、美しき白痴（二十五歳）
篤子　行子の妹、虎の門出の當世風な女（二十三歳）
銀次郎　えびす屋の養子、前記二人の夫（三十歳）
貞造　えびす屋の主（五十七八歳）
とみ　貞造の後添（四十五六歳）
純之助　おとみの子（十九歳）
かね　髪結（三十七八歳）
しげ　お針の女（四十歳位）
くめ　女中（二十四五歳）
松太郎　店の者（二十三四歳）
清吉　店の者（二十三四歳）
太市　下男（五十歳位）

第一場

えびす屋の奥、富貴なる樣調度其他に見ゆ。舞臺には二つの部屋を造る。上手は座敷、下手は茶の間にして長火鉢三味線などあり。

×

時は現代。秋のはじめ。午後二時ごろ。
幕開くと、舞臺暫く人無し。
やや間を置きて下手より店の者清吉旅行鞄をかつぎて入り來り茶の間を通りて座敷の隅へ置く。續きて下男太市、大なる行李をかつぎ來り、清吉に渡す。

清吉　（荷物を受取りて中へ運ぶ）よし來た。
（太市去る。店の者松太郎、合財袋を持ち來る。）
松太郎　清どん、もうこれでおしまひだ。
清吉　さうかい。
松太郎　（合財袋を同じく部屋の隅へ置く時、口よりこぼれて寫眞一枚落つ）なんだ、寫眞か。
清吉　誰方の寫眞だい。（覗く）
松太郎　（笑ふ）これは若旦那が御養子に來なすつた時の寫眞だ。
清吉　なるほど、こつちは行子さんだね。美麗だな。これですこし足りないのだとはどうしても思へないね。

松太郎　さうさね。（寫眞をもとへ仕舞ふ）お氣の毒な人さ。あゝして、その時の寫眞を持つてゐるやうでは、白痴は白痴なりに若旦那の事を忘れずにゐるにちがひない。

清吉　まだ何にも知らないのだね。

松太郎　さうだとも、聞かせてありやしないのだよ。

清吉　ぢやア、やつぱり若旦那のお内儀さんの心算で歸つて來たんだねえ。

松太郎　さうだ。（いやな顏をする）どんな氣持だらうな。

清吉　さうさ。だが、いくら美人でもあんなでは困るねえ。このお家なんぞ、金があるからいいやうなものの、さうでない家へあんな娘が生れたら、父無子を幾人も生ませられて、一層氣の毒だぜ。

松太郎　それにしても……（兩人話しつつ去る）

（女中くめ登場。）

（――座蒲團を三ツ四ツ、よき處へ敷き竝べ、煙草盆の用意などなしゐる。）

（姉娘爲子來り、茶の間の長火鉢の前へ坐る。美しき女。勝氣らしき、はきはきしたる物言ひ。束髮。）

爲子　（くめに）おくめ。姉さんが歸つていらつしやつたんだつてね。

くめ　はい、もうお着きでございます。いま表のお座敷にゐらつしやいました。

爲子　（心の落着かぬ様にて）おしげも一緒かい。

くめ　はい、御一緒で御座います。

（くめ、去る。）

（養子銀次郎入り來る。才氣走りたる色淺黑き、冷淡な自我的な處が近代的の如才なき様子に隱されてゐる。）

銀次郎　（爲子に）お行が歸つて來たさうぢやないか。

爲子　ええ！

銀次郎　（そはそはしながら）私は離座敷へ行つてゐるぜ。

爲子　あなた、まだ逢はないの？

銀次郎　うむ。（うす笑ひをなしつつ）氣がとがめてゐるのだ。

爲子　まあ、いやだわ。（インノセントなる笑ひ）でも、どうせ一度はこの氣持を味ふ覺悟ぢやないの。

銀次郎　それはさうだ。でも、今日になつて見ると、いやな氣持がするな。

爲子　（むつとして）では、初めからこんな事にしなければよかつたぢやないの。

銀次郎　だが、あれを離緣しなければお前さんと夫婦にはなれないのだからな。

爲子　夫婦になんぞならないッたつて……。

銀次郎　（遮つて）それはだめよ。第一、そんな身體にな
つたぢやアないか。氣が利かない。（お爲腹を押へる）
お行をあんな低能だと知らないで、ここへ來たわたしな
のだから、あれを離別したつて、別に阿漕な事をしたわ
けでもなんでもありやしない。
爲子　口ではそんな事を云ふけれど、おどおどしてゐらつ
しやるぢやなくツて？
銀次郎　（苦笑す）さう云ふわけではないが、ただ、お行
が何も知らずにゐるので、初めて聞いた時は、どんな樣
子をするかと思ふと、それが可哀想なんだ。
爲子　あなたはまだ姉さんに未練があるのだわ。あなたに
未練があつたつて、姉さんの方では、あんな人だからあ
なたの顔だつて忘れてゐるかも知れなくつてよ。一緒に
ゐた間より、別れてゐた間の方が長いから。
銀次郎　とにかく、わたしは離れへ行つてゐる。（强ひて
笑談のやうに）まあ、あとはよろしく頼むよ。
爲子　たしかにあなたは姉さんが忘れられないのね。（涙
聲にて）あたし、どうしよう、こんな身重でゐて。
銀次郎　おいおい、冗談ぢやないよ、あんな白痴に惚れて
ゐる奴があるものか。
爲子　だつて、美人ですからね。
銀次郎　いくら顔ばかり美麗だつて……（ちよいと爲子の
頬を指にて突く）ねんねえで困るなあ。
爲子　（笑ふ）浮氣をすれば取殺してあげるからいいわ。
たんとなさい。
銀次郎　（笑ひつつ出で行く）
（主の貞造及びその妻おとみ、お針しげ、姉娘行子の
四人、下手より登場。行子とおしげは、今旅より歸り
着きたる樣。）
（貞造は太りたる元氣のよき、いつも酒氣を放れぬ赤
ら顔の男。物言ふとき舌すこしもつれる氣味あり。）
（おとみは小柄の、弱々しき人のよささうなる女、小
さき丸髷に結ひゐる。おしげは忠實なる行子の附添、
實體なる女。）
（行子は、色白く、肉體のすこやかなる、極めて美し
き婦人。されど精神の不具者の持てる、やや悲しげな
る空虛の表情をなしゐる。眼の光り弱く、口許に淋し
き陰あり。輪廓正しく、鼻高く、髮の毛人に優れて黑
く房々として美し。一見艷麗にして人を魅すも、言語
の調子に連絡無く、聲には命なし。丸髷に結ひゐる。）
おとみ　（爲子に）爲ちやん！　姉さんがお歸りになつた
よ。
爲子　あら、お歸りなさい。まア草臥れたでせう。
（行子、ぢつと爲子を見る。微笑。）

行子　鶴ちゃん、大きくなつたことね。
鶴子　え？（袖にて腹を隱すやうに）わたしが？
行子　さうよ！（おとみに）半年見ないと變りますね。（鶴子に）鶴ちゃん、なんだか大人のやうになつてよ。
鶴子　だつて、わたしもう廿三よ。
行子　廿三？（考へて）さうね、わたしが廿五だからねえ。でもあなた、ほんとうに急に變つたやうな氣がするのよ。（笑ふ）
（皆々座敷へ入る。）
貞造　行子！　帶でも取つたらどうだい。秋になつたと云つても、まだ暑いからなあ。
行子　ありがたう。さうでもありませんよ。（小さき扇を出して思ひ出したやうにあふぐ）扇を持つてゐますから。
貞造　さうかい、それはよかつたな。（ふと淋しげに眼をそらす）
行子　おしげも持つてゐますのよ。ねえ、おしげ。
おしげ　はい、持つて居りますよ。
おとみ　おしげ！　お前、草臥れたらうから、勝手に下つておくつろぎよ。
おしげ　ありがたう御座います。
鶴子　（おしげに）神戸でも皆さんお變りないの。
おしげ　はい、よろしくと仰有いました。皆さんお變り御座いません。（間）東京の方が餘程お涼しいやうで御座いますね。
鶴子　さうかねえ。
おしげ　半年振の東京で御座いますから、停車場へ着きましたら、なんでございますか、ぼうツとしてしまひました。矢張り東京の方がズッとよう御座いますね。
鶴子　さうだらうねえ。
貞造　行子はすこし太つたやうだな。
行子　（頬を押へる）ええ、運動しましたから。海へ入らうとしましたけれども、おしげがいけないつて云ふからやめました。須磨の海は隨分水がきれいなのですけれど……。
おとみ　さうだつてね。
行子　空氣もいいし、わたしの身體はもうすつかり直つてしまつたし。
おとみ　ほんとうに、丈夫々々におなりだこと。
（やや間。）
鶴子　姉さん、どうして突然歸つていらつしやつたの。
行子　だつて、歸りたくなつたんですもの。（嘆息して）秋になつたしねえ……。
鶴子　秋になつて歸りたくなつたの。雁見たいね。（笑ふ）

行子　だつて、初めつから半年位の心算(つもり)だつたのですもの。(突然に) 爲ちやんわたし鈎をしてよ。ねえ、おしげ。
おしげ　えゝ、面白う御座いましたね。
行子　面白かつたね。(笑ふ)
爲子　(冷笑) 姉さんにも釣れるお魚がゐて?
行子　(まじめに) ゐてよ。澤山ゐるわ。(悲しさうに) でも二度しか釣れなかつたわ。
爲子　ほんとうに釣つたの。おしげが釣つたのでせう。(からかひ面に) それに違ひ無いわ。
行子　あらひどいわ。(悲しげに) 自分で釣つたのよ。ねえ、おしげ、さうだねえ。
おしげ　(うなづく) さやうですとも。
おとみ　(爲子が何か云はんとするのを遮つて) 行ちやん、お前、お風呂はどうだい。
行子　えゝ! (部屋の中を見廻す。夫の銀次郎を待つ心) まだようございます。
おとみ　着物を着かへて樂におなりなさいな。その方がいいでせう。(微笑) それに、お客様見たいに、そんなにきちんとしてゐてはたまらないでせう。お風呂(ふろ)に入つてからお話をなさい。おしげにもつかはせるからね。
おしげ　いゝえ、わたくしは夜分で結構で御座います。まだ旦那様もお内儀(かみ)さんもおつかひにならないのでございませう。
おとみ　どうせ夕方に立て直すつもりでお前達だけに沸かしたのだから。お行ちやん、入つておしまひなさいよ。
行子　(もぢもぢして) えゝ……あの、(口ごもりながら) まだあちらに御挨拶をしないのですもの。着換へない前に御挨拶をして……。
おとみ　御挨拶を?……あゝ若旦那にかい。
行子　えゝ! まだお眼にかゝりませんから。(間) どうなすつたのでせう。
貞造　銀次郎にはあとでいゝ。かまはないから入つておしまひ。
行子　どこかへ行らつしやいましたか。
おとみ　さア、どうだか。爲ちやん、若旦那は御店かい。
爲子　さうかも知れませんよ。事によると十三丁目へ行つたかも知れません。
行子　さう。ぢや、御免蒙つて……おしげや、離座敷へ行つて着換へてしまはうよ。
おとみ　(驚いたやうに) あ、離座敷でなくてもいゝのだよ。あなたの箪笥はこつちへ來てゐるのよ。(指して) それがさうですよ。
行子　あら、わたしの箪笥がこつちに來てゐるわ。(笑ふ) 用箪笥もあるわ。鏡臺は? (無意味に笑ふ)

爲子　鏡臺も机も來てゐてよ。六疊にちやんと片附けてあつてよ。
行子　六疊に（うなづく）……。では若旦那の簞笥や卓（テーブル）も……？
おとみ（口ごもりつゝ）それは離れにあるけれどもね。
行子　わたしのだけこつちへ來たの？
爲子　さうよ。
行子　どうしてゞせう。
爲子　向うがせまくなつたから。
行子　どうしてゞせう。
爲子　道具がふえたからですよ。
行子　若旦那のお道具がふえたの。
爲子　えゝ！（舌打する）うるさいわね。しつこい人ね。
（行子、不思議さうな顏。）
（おしげ、表情あり。）
おしげ　ではお風呂を頂いてしまひませう。お行さま、さうなさいまし。わたくしがお背中を流しませう。
行子（うなづく）六疊へ行つて着かへませう。
貞造（沈思より醒む）あアそれがいゝ。それがいゝ！
（行子上手の縁より去る。おしげともに續く。）
（三人、顏を見合す。沈默。）
爲子　ねえ、お父さん！　姉さんに今日話すの？
貞造　何を？
爲子　何をツて、わかつてゐるぢやないの。
貞造　あの事か？　それはお母さんから話して貰はう。
おとみ　わたしですか。（眉をひそむ）では、わたしがおしげに云つて、それとなく行さんに話して貰ひませう。
爲子　わたしね、姉さんには云はなくても、よくはないかとおもふわ。あゝ云ふ人だから氣がつかないかも知れませんわ。
おとみ　わたしもさう思ふのですけれどねえ。
爲子　皆で默つてゐませうよ。大丈夫よ。姉さんの事ですから生涯わからないかも知れないわ。
貞造（腹立たしげに）そんな事があるものか。今も道具の置場所の事で、不審（ふしん）さうな顏をしてゐたぢや無いか。お前たちが離れに寢て、姉さんが六疊に寢たならばいくら白痴（はくち）だつて氣がつかない譯があるものか。それに、今日のあんばいでは、大分腦が落着いてゐるやうぢやないか。（うなだれる）なほると云ふわけには行かないものかなあ。
爲子　それは駄目ですよ。性來（うまれつき）なのですもの。
貞造（立つ）わたしにお酒の支度をさせてお呉れ。（不快を追ひ出すやうに頭を振る）店へ行つてゐるからな。
おとみ　はい！

（貞造去る。沈默。）

爲子　ねえお母さん！

おとみ　なんです。（煙管をはたく）

爲子　わたし達のしてゐる事はわるい事でせうか。

おとみ　さア！　どうでせうね。

爲子　どうでせうツて云ふとわるい事かも知れないと思つてゐらつしやるのねえ、母さんは？

おとみ　さう云はれると返事に困るわね。それはあの人の不運なんだから氣の毒は氣の毒ですけれど、どうも、仕方がないぢやありませんか。

爲子　（いら〳〵して）わたしたちは惡い事をしてゐるんぢやないと思ふわ。當然の事をしたのだわ。姉さんはあんな人なのだから、本來ならば初めから結婚なんかさせる方が間違つてゐるのよ。若旦那だつてまさか姉さんの頭があんなだとは知らないから、一度見合をしたきりで結婚なすつたのよ。あとで、腹を立てなすツたのも尤もだとおもふわ。……全體家の人たちがわるいわ。皆、いい加減な事をして、世間を胡麻化さうとしたものだから、今日になつてこんな事になつてしまふのよ。

おとみ　だつて爲ちやん、さうあなたのやうにわたしたちばかりが惡いやうに云つたつて、若旦那とあなたとの間に、まちがひを起しさへしなければ、今度のやうな事にならなかつたんですよ。

爲子　ぢや母さん。わたしたちが淫な事をしたから、仕方がなしに一緒にしたと仰有るのね？

おとみ　さうはつきりとは、云はないつもりですよ。

爲子　わたしが姉さんの夫を寢取つたんだつて、お店の者や世間でも云ひふらしてゐると聞いたけれども……母さんまでがそんな事を云ふなんてあんまりだわ。

おとみ　何もそんな事を今日になつて云ふには及ばないぢやありませんか。世間では何を云はうとかまやしないでせう。どうせ世間では姉さんが氣の毒だつて云ふにきまつてゐますよ。（低い聲で）世間はよく知つてゐますからね。

爲子　（立つ）どうともわたしはかまはないわ。姉さんなんかに結婚させた罪は母さんにだつてあるのよ。

おとみ　（嘲笑）あなた方のお母さんが、あんなお子を生んだのがわるいのですよ。然し、そんな事のなすり合ひは下らないからやめませう。

（爲子、去る。）

（弟純之助、學校の制服を着て歸つて來る。十八九の顏色の優れぬ多病さうな神經質らしき少年。）

おとみ　おや、お歸りかい？

純之助　（汗を拭きながら）たゞ今！　母さん、大きい姉

さんが歸つていらつしやつたんだつてね。

おとみ　あア、今しがた歸つておいでだよ。今朝電報が來て、急に歸つて來たのだよ。

純之助　さう！　どこにゐらつしやつて？

おとみ　いまお風呂だよ、おしげと一緒に……。

純之助　小さい姉さんや義兄さんはどうして。

おとみ　義兄さんは十三丁目へ伺つたのかも知れないよ。小さい姉さんは今までここにゐた。何か用かい。

純之助　いゝえ、あんな人たちに、用なんかはありません。

おとみ　なんだね、そんな事を云ふものぢやないよ。

純之助　かまふものですか。あんな人たちはけだものだから……。

おとみ　これ！（あたりに氣を兼ねて）何を云ふのだよ、お前は？

純之助　だつて母さん！　僕はどう考へても大きい姉さんが氣の毒でしやうがない。大きい姉さんは優しくつてほんとうに無邪氣で、鈍いほどな、天眞爛漫な心を持つてゐる人ですからね。その人の夫を取り上げてしまふなんて、實にいけない事ぢやありませんか。餓ゑ切つてゐるものに、ほんのすこしたべものをやつて、あとを取上げるやうなもので、たべものをやらない以前の方がよつぽど親切ですよ。こんな簡單な事がわからないわけはないのだがなあ。（間）ねえ、母さん。ほんとに大きい姉さんは可哀想な人ですよ。僕は、なんだか昨夜いやな夢を見ましたよ。（間）どうも恐ろしい結果になるやうな氣がして仕様がない。

おとみ　何と云つても、どうも今になつては仕方がない。取返しがつかないからね。

純之助　僕は義兄の顏を見るのもいやだ。こゝの家の財産を目的に養子に來て自分の妻の妹と結婚して本當の妻を離別しようなんて、そんな間違つた事があるものか。

おとみ　そんな事はお前の知つた事ぢやないよ。つまらない事を云つて憎まれるといけないよ。

純之助　かまふもんか。いくら憎まれたつていゝや。こんな不潔な家にはゐないッたつていいんだから。

おとみ　（鋭く）馬鹿を仰有い！　二度とそんな事を云ふときかないよ。

（おとみ去る。）

（銀次郞上手より來る。）

銀次郞　純ちやん、今日は早いね。

純之助　（無愛想に）いゝえ、いつもの通りです。義兄さん、大きい姉さんに逢ひましたか。

銀次郞　いゝや、まだ逢はないよ。

純之助　（皮肉に）逢ふのがこはいでせう。

銀次郎　どうして？
純之助　ふむ。姉さんに逢ふと裁かれるやうな氣がするにちがひないからな。
銀次郎　そんな事は子供の知つた事ぢやない。
純之助　子供だつて低能だつて人間は人間ですからね。
銀次郎　人間でないつて誰が云つたい？
純之助　でも間違へられると大變だからな。ここの家にはけものがゐるさうだから。
銀次郎　なんとでも云ふさ。（間）いまに己の心持がわかる時が來るよ。お前　んなんぞも感傷的な人道主義にかぶれてゐるんだぜ。
純之助　とにかく、僕は背德の人がきらひだ。
（純之助去る。）
銀次郎　（座敷の中をあゆむ）己は爲子が可愛い。だから行子を離別した。（間）其ために行子が不仕合せになるのは可哀想にはちがひない。でもそれまで己の責任だとはおもへない。だけれども、なぜだらう、この妙に物怖ぢがしてゐるのは。
（下手より行子、湯上りの樣にて華美なる浴衣を着、濡手拭にて襟許などなでながら來る。銀次郎を見て、感動を隱し得ず「ああ」と云ひ、走り行かんとして、ふと立ちすくみて相凝視す。）
（銀次郎は目を外す。）
（沈默。）
（行子、そこに手を突きて頭を下ぐ。）
行子　ただ今歸りました。大變長くなりました。
銀次郎　ああお歸りかい。（間）お風呂へ入つたのかい。
行子　あのう、皆が入れ入れと云ひますから、着物を脱いでしまひました。ちやんと帶を締めてゐましたけれど。
銀次郎　大層長かつたね。
行子　すぐ上つたのですわ。お湯が熱かつたので……。
銀次郎　いいえ、須磨の事さ！
行子　あゝ、須磨。
（……行子、ほほ笑みてなつかしげに男に寄り添ふ。つくらざれどもなまめかし。）
銀次郎　（不思議なる誘惑に會ひたる如くうつとりと女を見つゝ肩に手を置く）ほんとに久振だねえ！
（下手より足早に爲子が來かゝりて二人を見る。）
爲子　あら。
（つと座敷へ入る。）
（銀次郎、夢より覺めたるやうに身を退く。）
爲子　何をなすつてゐらつしやつたの。お邪魔でして、姉さん！
行子　いゝえ。（無邪氣に微笑す）

篤子　（銀次郎に）　あなた一寸お話があるのです。離れへいらつしやつて下さい。
銀次郎　うむ。
（二人去る。）
（行子、茫然と夫と妹のあとを見送りゐる。）
（おしげ、下手より來り、行子の足許へひざまづき、涙をこらへてうつむく。）
行子　（ぼんやりおしげを見る）　おしげや、あたしは離れへ行つてはいけないのかしら？
おしげ　えゝ！　もう〳〵決してあちらへ行らつしやるのでは御座いません。
行子　（おしげを離れて踏臺と縁に出でて夫のあとを見送る）
おしげ　（たしなめるやうに）　お行儀！
行子　（腑に落ちぬさまにて）　なあに！
おしげ　あなた、何をそんなに見てゐらつしやいます？
行子　もとのわたしのお部屋が、ちよつと見たいのだけれども……行つてはいけないのかねえ。
おしげ　（こらへ得ずして泣く）
行子　（不審げにおしげを見る）

――道具變る――

第二場

同じ日の夕方。前の場より三時間ほど後。えびす屋の離れ、銀次郎若夫婦の住居。下手一面は庭。井戸あり。石の井桁をめぐらしたり。竹、七八本生えてゐる中に燈籠あり。

篤子、丸髷に結び上げて、髪結のおかね、背後より撫でつけてゐる。

おかね　どうもお待ち遠さまでした。お髪がいゝので、ほんとうに結ひ榮が致しますよ。
篤子　どうも御世話さま！　（鏡の中を覗きつゝ）　よく出來ましたこと。
おかね　ハイカラも大層お似合ひになりますが、あなた、髷はまた一入で御座いますよ。
篤子　（微笑）　姉さんが髷に結つてゐるのを見たらば、急に結つて見たくなつたのでね。（鏡を片づけながら）　姉さんの髪はほんとうに澤山あるのね。
おかね　さよで御座いますね。御容貌もいゝし、勿體無いやうで……（氣がついて笑ふ）　これはとんだ……。
篤子　（笑ふ）　ほんとにさうよ。あの通りすこし變なのですものね。
（おかね、道具を片付けつゝ。）

おかれ　……お可哀想な方でございますねえ。（爲子不快げなる表情をなす）然し、まあどうも仕方御座いません。……今日お歸りになつたさうで御座いますね……。

爲子　えゝ、お午すこしすぎに。

おかれ　急だつたので御座いますね。

爲子　さうよ。あゝ云ふ人のする事はほんとにわからないわね。

おかれ　さうで御座いますね。（道具を片づけ終りて）これは御邪魔致しました。

爲子　もうお歸り？　どうも御苦勞樣でした。ではまた明日どうぞ。

おかれ　畏りました。さやうなら。

爲子　さやうなら。

（おかれ去る。）

（銀次郎緣傳ひに來る。）

銀次郎　丸髷に結つたのかい。

爲子　ええ。今度のはよく出來たでせう。

銀次郎　うむ。なんだかわたしには分らないが。

爲子　薄情ねえ。姉さんが歸つて來たら急に薄情になつたのね。

銀次郎　馬鹿を云つてゐらあ。

爲子　姉さんはお美麗だし、太つてゐるし、殊にああ云ふ人は面白いさうですから。

銀次郎　よさないかい。冗談ぢやないよ。

（爲子笑ふ。）

銀次郎　お前が髷に結つてゐるのを見たらお行が變に思ふぜ。

爲子　かまやしませんわ。もう、どうせわかるのですもの。（腹立たしげに）ほんとにあなた、意氣地無し！　心配で／＼ならないのねえ。

銀次郎　でも、相手が馬鹿だけに、とんでもない騷ぎになるといけないからな。

爲子　でもね、案外聞分けのいい人なのだから、素直に云つてきかせれば、よくわかるかも知れないわ。

銀次郎　（暗い顏）ふむ、どうも……。

爲子　また考へ込むのね。（鼻聲になりて）わたしにも倦きたのでせう。わたしも姉さんのやうに捨てられるのねえ。

（女中登場。）

女中　あの、御膳の御支度が出來ました。

銀次郎　うむ、今行きますよ。

（女中去る。）

爲子　頂いてしまひませうか。

（二人去る。）

(舞臺暫く人無し。)

(下手奥より下男太市出で來り井戸の傍なる燈籠に灯を入れて去る。)

(……淋しき夕風の音。秋のたそがれの靜かなるひと時。)

(行子、庭よりひそかに出で來る。異常なる表情。座敷の中に入り、あたりを珍らしげに見廻す。簞笥、鏡臺、机、すべてを事細かに注視す。)

(戸棚を開く。夜具蒲團等見ゆ。男枕一つ、轉げ出て行子の足許に落つ。ぼんやりと、それを眺めゐる。)

(爲子、上手より來かかる。)

爲子　まア姉さん、何をしてゐるの?

行子　(驚きて枕をもとへ隱し戸棚を閉める)　なにもしてゐやしないわ。

爲子　失禮ぢやないの、なぜわたしの戸棚をあけたの? 人のものをだまつて見るなんて、失禮ぢやありませんか。

行子　こゝはわたしの部屋だつたのよ。

爲子　でも今はあなたの部屋ぢやないのよ!

行子　若旦那のお部屋でせう。(爲子の髷を見る)　あら、爲ちやん、丸髷に結つたの　まア可笑しいわ。

爲子　何がをかしいの?

行子　(笑ふ)　丸髷はお嫁に行つてから結ふものなのに……爲ちやんはまだお嫁に行かないぢやないの?　そんな髮解いておしまひなさいよ。

爲子　餘計なお世話だわ。わたしの髮をわたしが結つたんですもの。

行子　でも可笑しいわ。お解きなさいッてば。

爲子　(行きかける)　あなたこそお解きなさいよ。

行子　(怒る)　わたしみんな知つてゐるのよ。

爲子　(嘲笑)　何を!

行子　髷なんぞこはしておしまひなさいよ。

(爲子の髮に手をかける。)

爲子　(叫ぶ)　何をするのよ。姉さん!

(行子、憎げなる顏をして、爲子の髮をこはさんとする。爲子抗ふ。)

(銀次郎來る。)

銀次郎　どうしたのだ。

爲子　(銀次郎にすがる)　姉さんがわたしの髮をこはすッて云ふのよ。

(行子、爲子にかゝる。銀次郎爲子をかばつて行子を突く。行子緣より落つ。再び起き上る。美しき顏はゆがみて狂暴になりゐる。猛然と銀次郎にかゝる。)

(銀次郎、恐ろしげに身を退らして行子を突く。行子、よろめく。)

（――弟、純之助來る。）

純之助　姉さんをどうするんだ。

銀次郎　お前の知つた事ぢやない。

純之助　姉さんをいぢめてゐるのだな。（怒る。爲子に）大きい姉さんをいぢめると、僕は何をするかわからないぞ。

爲子　生意氣をお云ひでない。

純之助　畜生。

（純之助、爲子を突く。銀次郎純之助の額を打つ。）

純之助　打つたな。

（銀次郎にかゝる。）

貞造　どうしたのだ。

（主、貞造來る。）

純之助　お父さん。（叫ぶやうに）お父さん、大きい姉さんをどうするんです。

貞造　何が。

純之助　大きい姉さんが頭の工合が惡いのは、姉さん自身の罪ぢやないんです。それを、それを……。

（行子、隙を見てまた爲子の髮をつかむ、髮こはれる。お針おしげ出で來り、行子を押へる。）

おしげ　まア行子樣、どうなすつたのです。

行子　（泣き叫ぶ）皆でわたしを……わたしを……。爲ちやんが若旦那を奪つてしまつた。

おしげ　（慰める）こんな事は御座いませんよ。（他の人に）どうぞ暫くこゝへ御置き下すつて……あちらへおいで下さいまし。

（貞造、悲痛なる表情にて默し去る。）

銀次郎　行子、わからない事をするとかうするぞ。

（睨みて手を振あぐ。）

（行子、恐ろしげに身を縮める。銀次郎、爲子を連れて去る。純之助、腕を組み考へゐる。行子聲をあげて泣く）

おしげ　まア行子樣、そんなにお泣きになるものでは御座いません。（稚子に云ふやうに）可笑しいでは御座いませんか。こんなに涙をこぼしてゐらつしやつて、折角お美麗に出來たお化粧が、ほれ、臺無しになつてしまふでは御座んせんか。

行子　（歔欷しゐる）

おしげ　（いたはりつゝ）まア何と云ふ事をなすつたのでせう。爲子さんにあんな事をなさつてはいけないでは御座いませんか。（そつと涙を拭く）

行子　でもね、でもね、爲ちやんはあんまりひどいわ。（泣き上げる）わたし、どうしよう……

おしげ　あとで爲子さんにお謝罪りなすつてお置きなさい

ましよ。

（純之助、顔を上ぐ。）

純之助　おしげ。何も大きい姉さんが悪い事をしたのではないぜ。（腹立たしげに）姉さんが、爲ちやんに詫まる筋はありやしないんだ。

おしげ　それはさうでございますけれどもね。さうおさせ申した方がよろしいので……。

純之助　そんな馬鹿げた事があるものか。わるくない者が、わるい奴の前に頭を下げるなんて、そんな間違つた事があるものか。（怒る）僕は口惜しくつて堪らないんだ。彼奴等の畜生。どうかして姉さんの仇討をしてやるぞ。

おしげ　そんな事を仰有るものでは御座いません。坊ちやんがそんな事を仰有つては、お姉さまがかへつて不仕合せにおなりになりますからね。こちらに理窟がございましても、眞向からそれを振かざしては、かへつて不爲になりますからね。

純之助　（憤然と）お前のやうな微温は、僕はいやだ。僕はあくまであいつ等と闘つてやる。こんな家にはゐなくてもいゝんだ。

（行子、赤子のやうに泣きゐる。母おとみ登場。）

おとみ　まあなんだつてあんな騒ぎになつたのだえ。純ちやん、義兄さんや爲子さんが、ひどく腹を立ててゐるよ。行つて詫つておいでなさい。義兄さんには十三丁目さんがついてゐるのだよ。馬鹿にして歯向つたりすると、とんだ騒ぎになるよ。

純之助　馬鹿云つちやいけません、お母さん！　僕は何も悪い事はしやしない。一體この家の者は、片ッ端徳義心にかけてゐるんだ。

おとみ　生意氣をお云ひでない。（おしげ行子の兩人に）早く御飯を頂いておしまひ！

おしげ　はい。

おとみ　臺所が片付かないから、早くすませておいで。

おしげ　はい、では頂きます。

（おしげ去る。）

純之助　お母さん、僕は、もうちつと此處へ置いて下さい。姉さんに話しがあるんです。

おとみ　また下らない事を云つて、姉さんの氣を立たせるといけないよ。（眼で知らす）飛んだ事になるよ。

純之助　僕はたゞ眞直な事を云ふだけなんだ。別にまちがつた事は云ひやしない。

おとみ　それがいけないのだよ。お前達がなんて云つても、それはたゞの生意氣と云ふものなんだよ。ほんとうに兄さんや爲子さんが腹を立てゝおゐでなさるから、あとで挨拶をしてお置き。えゝ？

（おとみ去る。）

・（長き沈默。）

純之助 （沈思より離れて） 姉さん！ 須磨へお歸りなさい。

行子 （夢見るごとき眼差を以て純之助を見る）

純之助 その方がいゝのですよ。姉さん。

行子 わたし、いつまでもこゝにゐたい。

純之助 でも姉さん・義兄さんはいつまで經つても、再びあなたに返つて來る人ではない。（云ひ含めるやうに） 姉さん、あなたは離縁になつたのですよ。あなたはね、もう義兄さんのおかみさんではないのですよ。

行子 （うつとり聞き流して） わたし、よく覺えてゐるわ。御婚禮の晩を。（部屋を見廻して） こゝに屛風が立ててあつたわ。あの日は、わたし白いおかいどりを着てゐた。若旦那は黑の紋服だつたつけ。（夢を追ふやうに） あの晩は雪が降つてゐたわ。

純之助 そんなことも忘れさせてあげたい。（間） 姉さん、僕も一緒に須磨へ行きませう。僕はからだも弱いし、この家にゐたくない。僕は、後妻の子なのだからゐてもゐないでもいゝのですからね。

行子 さう。（しづかに義弟を見る。信仰ある眼差）

純之助 おしげには氣の毒だけれど、今夜にも此家を出て行きませう。僕は自分の手廻りを纏めて來る。

行子 （ふと悲しげになりて） 純ちやん、わたし一人で行きたいわ。

純之助 そんなことはだめですよ、姉さん。

行子 一人で行きたい。一人で遠い田舎へ行きたいわ。（すこし無邪氣に笑ふ） 須磨はいゝところだもの。

純之助 僕は一緒に行きます。姉さん、ちよつと待つてゐて下さい、鞄へ入用のものを入れて來る。

行子 （うなづく）

純之助 （下手へ、跣足のまゝ去る）

（長き間を置きて、行子ふと立ちあがり、植込をすかして母屋の方を覗ふ。やがて、異常にあたりを見廻しつつ眼をかゞやかせて庭へ下り、植込の蔭へかくれる。）

（おしげ登場。）

おしげ 行子樣！ おや、（あたりを見廻して） どこへ行らつしやつたのだらう。（すこし聲を上げて） 行子樣。

（おしげ去る。）

×

（このあたりより舞臺すこしづつ暗くなり。夕迫りたる心なり。）

（――行子、そつと這ひ出でて、忍び足に庭をあちこちあゆむ。動作すべて無意味に見ゆ。次第に顏蒼ざめ

來り、瞳(ひとみ)は据(すわ)りゐる。)

(――父貞造、上手の植込のうしろより、腕組をなし、そつと出で來り、物蔭に立ちて、ぢつと行子の擧動を眼を放たずに凝眼してゐる。)

×

(行子、何やら口の中に云ひつゝ、下手井戸の傍に近づき、井桁(ゐげた)に手をかけて中を覗く。貞造思はず一歩前へ出る。行子知らず。)

×

(行子、兩腕を組みて胸を抱く樣な姿勢をなす　やがて吸ひ込まるゝ樣に井戸の中へ飛込む。鈍き水の音聞ゆ。)

×

(貞造「あ」と叫びて、井の傍へ走り中を覗き、人を呼ばんとしてあわたゞしく上手へ行き、鋭く物を氣づきたる樣に立止まり、振り返りて井戸の方を見、再び井戸側へ手をかけて中を覗く。)

(――大禍時(おほまがとき)の恐ろしき暗さ次第に濃くなり行く。)

(長き間。)

(貞造、首を垂れて、悄然と井戸を離れ、中央の椽に腰を落す。夢見る人の如し。)

(やがて歔欷し、次第に高く慟哭す。)

(あたり、全く暗くなり、たゞひとり燈籠の灯のみ淋しげにゆらぎゐる。)

――幕――

谷底（一幕）

人物

小島紀三郎　學校講師（三十五歲）
同　年代　その妻（二十三歲）
同　英四郎　紀三郎の弟（二十六歲）
若松淺子　紀三郎の情人　（二十七歲）
同　初枝　淺子の娘　（九歲）
外にホテルの女中

舞臺

山間の温泉場、ホテルの或る部屋。日本座敷だが正面には大きな張出しの窓がついてゐて外は露臺の代りになつてゐる。欄干の下は深い谷である。谷を距てゝ向ふに、迫り懸つて山々が連つてゐる。深い襞から雲が湧いてゐる。日光がそれに遮られて折ふし室内に陰氣な色を作る。

下手は洋風の廣い廊下になつてゐる。廊下に添うてガラス窓がある。白いレエスが懸つてゐる。やはり外は深い谷間である。

室内、窓のそばに布を張つた籐の椅子や小さな卓子もある。そこには山の花が深山瓶に挿して置かれてある。九月のはじめの靜かな午後である。遠く早瀬の音が聞える。

1　紀三郎と年代と英四郎

三人、花合せを一勝負濟ませたところ。年代、札を掻き集めてゐる。

紀三郎　もうやめだ。

英四郎　僕もやめだ。

年代　負けるとすぐ浮き腰になつて仕舞ふのね。ほんとに弱蟲ね。

英四郎　大きな事を云つてゐらあ。嫂さんが勝つなんてこんな間違つた話は無いんだ。

年代　處が續けて二年かうして勝つたんだからどうする事も出來ないでせう。えへん。

紀三郎　嫂公の勝つのは本當の勝ぢやないよ。强くつて勝つんぢやないよ。

英四郎　さうだよ。嫂さんのは出鱈目だからね。盲目蛇でぽか／＼大膽不敵にやるんだからやり切れないや。

年代　あんな負け惜しみを云つてゐるわ。可笑しいわ。敗軍の將兵を語らずつて事を忘れて。

紀三郎　一番弱い嫂公が勝つて、一番強い己れが負けるんだから可笑しいや、なあ英ちやん。
英四郎　一番弱い嫂さんは認めるがね、一番兄さんが強いとは認められないな。
年代　あたしが一番弱いなんてひどいわ。ではもう一年やつて見ませうか。
紀三郎　眞平、もう助けて呉れ、お前のお守はもう〳〵澤山だ。
年代　あんな憎らしい事を仰有つて！　御自分で云ひ出した癖に……。
紀三郎　さあ、お湯へ入つて來ようかな。英ちやん行かないか。
英四郎　僕はさつき入つた。嫂さん行つていらつしやい。
年代　澤山！（タオルを出して渡す）
紀三郎（出て行きながら）もう二三日で引き上げるんだから、お名殘にうんと入つて置いてやらうな。（下手へ去る）

2　年代と英四郎

英四郎　あさつて歸るんですか。
年代　あさつてかしあさつてよ。まだきまらないの。
英四郎　學校は十一日からだからあさつて引上げた方が樂だけれどもな。
年代　九月にならないうちに引上げるはずだつたけれど、兄さんがお尻を落着けてしまつたので……。もうこのホテルにも、土用のうちから續けて逗留してゐる人つたら、わたし共を入れて三組になつてしまつたのよ。
英四郎　この突當りにゐる意氣なお內儀さんを連れて來てゐる人も前からずツとゐるんですか。
年代　いゝえ、あの人はね、たしか若松さんのいらつしやつた日に來たのよ。まだ十日ぐらゐでせう。（間）九月に入るとまるで淋しくなつてしまふのね。
英四郎　これで東京はまだカン〳〵暑い日が照りつゞけてゐるのだから……僕の來た日なんぞはまるで土用の中も同じだつたつけ。
年代　さうでせうね。

3　年代と英四郎と女中

（ホテルの女中出て來る。）
女中　ごめん下さいまし。おや、三階の奥樣は此室ではございませんですか。
年代　えゝ、今日はまだ一度も入らつしやらないことよ。何か御用？
女中　へえ、電報が參りまして。

英四郎　風呂場かも知れないよ。
女中　さやうでございますね。どうも失禮いたしました。
（去る）

4　年代と英四郎

年代　電報だなんて、やつぱり若松さんへ呼び戻されるのかしら、あのかた。
英四郎　さあ！　まさか歸りもしないでせう。
年代　離別なんていやあね。
英四郎　嫂さん、あなたは氣が附きませんね。
年代　何を？
英四郎　若松の淺子さんの事をさ。
年代　淺子さんがどうかしたの。
英四郎　……今度の事は淺子さんの方から主張して別れたんですよ。
年代　それは聞いたわ。
英四郎　そして、別れて家を出るとすぐこゝへ來たんですよ。
年代　えゝ、偶然にね。それまではわたしはお名は伺つてゐたけれどお逢ひしてゐなかつた。わたしに取つてはいいお友達の出來た機會だつたのよ。
英四郎　嫂さん、おめでたい人ですね、あたた！
年代　（晴々としてゐて）さうよ、なぜ？
英四郎　なぜつて、あの淺子さんとうちの兄さんとの關係をまるで疑つてゐないんですか、嫂さん！
年代　（笑ふ）まさかねえ。でもねえ、あたし一度夢を見た事があつたわ。あの方が此の宿へいらつしやつた晩よ。兄さんとあの方と二人でどん／＼山へ登つて行つてしまふの。わたしがあるけないで困つてゐるのを見向きもしないで、仲よささうに手を取り合つて、わたしを淋しい處へ置いて行つてしまふのよ。うなされたわ。その話をしたら兄さんは笑つてゐらつしやつたわ。
英四郎　正夢になりますよ。
年代　（笑ふ）わたし、そんな夢を見て恥しいとおもひましたわ。そんな事を爪の垢ほども思つてゐないのに夢に見たなんて、ほんとに自分に對してきまりがわるくなつたわ。自分ではおもつてゐないなんて巧者な事を信じてゐるのに、自分の氣がつかないうちに、もし淺墓な嫉妬が喰ひ込んでゐたのかしらとおもひましたわ。本當に夢つて思ひもつかない事を思はせるものね。
英四郎　嫂さん、本當にそんな風にしか思つてゐないの。
年代　えゝ、勿論よ。
英四郎　まつたく兄さんと淺子さんとを疑はないの。
年代　（笑ふ）えゝ、まるで想像も出來ないわ。

英四郎　嫂さんは兄さんの結婚前をまるで知らないんだからな。

年代　知つてゐるわ、ようく。

英四郎　知つてゐるものですか。

年代　どつちでもいゝわ。わるい事なら知らないでもいゝわ。それにみんな昔の事ですもの。

英四郎　淺子さんが若松さんと別れた動機にはうちの兄さんがかなり主要な關係者なんですよ。

年代　古いお知合ですから、相談ぐらゐはされたでせう。

英四郎　相談なんぞはされないでせう。兄さん自身としては困つてゐるでせう。

年代　わたしにはちつともわからないわ。英さんの仰有る事が……。とにかく兄さんはそんな方では無いのよ。(笑ふ) 大丈夫よ。大丈夫よ。

英四郎　嫂さんはひどくおめでたいのか、さもなくば僞善者だ。

年代　前の方よ、わたし僞善者ではないわ。でもおめでたいも何もないわ、そんな事を超越して、兄さんは不品行な事なんぞなさるかたではないのをわたしは請合ひますわ。(しつかりと) わたしの旦那樣ぢやないの、英さん!

英四郎　(苦笑) ふむ、いまに嫂さん、手ひどい目に逢ひますよ。

年代　そんな馬鹿なこと! 賭をしてもいゝわ。

英四郎　賭どころの沙汰で濟めばいゝが……僕は何も好んで兄貴の惡口を云ふんではないんです。

年代　それもわかつてゐるわ。わたしを氣の毒におもつて下さるからだわ。それは有難いけれどもね。どうぞ兄さんの事はわたしに任せて置いて頂戴ね。

英四郎　自信がありますか。

年代　自信以上、自信だなんてそも／＼末だわね。

英四郎　淺子さんは鍵のかゝる別風呂を買つてゐますね。

年代　さうよ。(笑ふ) まア英さん、隨分氣を廻す人ね。下らない。

英四郎　僕は根據の無い事は云ひません。

年代　噓と云ふ根據だから駄目! わたしをからかふためにいろんな事を云ふんですもの。(氣をかへて) 散歩に行きませうか。

英四郎　御隨意に! 僕は一人であるきたい。

年代　(微笑) ずゐぶんな方ねえ。ぢや行つていらつしやい。

英四郎　(帽子を取つて) ちよと行つて來ます。

年代　郵便局の方へ行つて?

英四郎　行つてもよござんすよ。手紙ですか。

年代　濟みません、出して下さいな。

英四郎　え丶！（受取る）母さんところですね。毎日出すんですね。

年代　え丶、面白い事を書いたのよ。あなたの悪口なぞも。

英四郎　嫂さんは所謂悧巧者なのかしら。それで親類間にも評判がい丶んだらうなあ。

年代　（ちよいと顔を曇らせる）わたしそんな心算ぢやないんだけれど、わたし、實家の母に早く死に別れてゐるし本當の同胞も無いもんだから皆さんが親身におもへるんだけれど……みんないゝ方ばかしなんですものね。

英四郎　繰返して云ふ、嫂さんはお目出たき人か僞善者だ。（いら／＼して）あ丶たまらないな。（出て行く）

年代　（見送りながら）妙な方だこと。

5　年代

（暫く考へてゐる。雲が通るので室内の光線が薄くなる。年代は小指の爪を齒にあて丶ちつと考へ込んでゐたが、やがておもひ出したやうにその指先を眺め、次に小さな西洋鋏を持出して來て露臺の欄干に腰をかけて爪を剪り初める。）

（雲がすぐ向うの山に大きく湧く。その間から斜に洩れた日光が美しく彼女の横顔を照す。彼女が左手の爪を剪り終つた頃、主人の紀三郎が風呂から上つて來る。）

6　年代と紀三郎

紀三郎　なんだ、そんな處に腰をかけてゐて……あぶないぜ、下へ落ちたら死んで仕舞ふぜ。

年代　（にこ／＼しながら立ち上る）ほんとね。この谷底へ落ちたら一ト思ひね。まだ死にたくないから……。

紀三郎　英公はどこかへ行つたのかい。

年代　え丶！　散歩に行らつしやいました。

紀三郎　とつてやらうか、右を？

年代　え丶！　どうぞ。（鋏を渡す）

紀三郎　左はもう皆剪つたのかい。

年代　え丶、右だけ。

紀三郎　（爪を剪つてやりながら）これんばかりなら鋏で取る程の事は無いぢやないか。爪こすりで擦つて置けばい丶のに。

年代　無くしてしまひましたの。

紀三郎　ぢやア砥草でもい丶のだ。

年代　あの、今ね。英四郎さんがわたしの事を僞善者だつて悪口を仰言いましたわ。

紀三郎　ふん、僞善者かな。

年代　僞善者でなければお目出度い人ですつて！

紀三郎　（ちよつと表情あり）お前がおめでたいつて？なぜ？

年代　なぜとも仰言らなかつたけれど……お母さんへ差上げる手紙をお頼みしたらさう仰言いましたわ。あら痛い。

紀三郎　ごめんよ、お前がぢツとしてゐないものだから…

年代　こんなに深爪を取つてしまつて、まアひどいこと。

（ホテルの女中急いで出て來る。）

7　年代と紀三郎と女中

女中　あの、東京からお電話でございます。こちらへつなぎませうか。

年代　さうね、いゝわ。下まで行つた方が早いから……帳場の方？

女中　いえ、階段の下の方でございます。

紀三郎　家だつたらあさつて歸ると行つてくれ。

年代　はい。

（年代と女中退場する。）

8　紀　三　郎

（籐椅子へ腰を下して煙草を吸つてゐる。新聞を見かけるが、すぐやめて外を見てゐる。）

若松淺子登場。）

9　紀三郎と淺子

淺子　（ひそかに部屋の外から）お一人？

紀三郎　（振返る）えゝ。

淺子　お傍へ行つてもよろしくて？

紀三郎　えゝ。

淺子　（落着かない様子）この部屋はほんとに眺めがよいこと。

紀三郎　まあおかけなさい。

淺子　（紀三郎の前の籐椅子へかける）兄から電報が參りましてね。ぜひ歸るやうにつて！

紀三郎　（ちよつと廊下に氣を配つて）さう。とにかく早く歸つた方がいゝとおもふ。

淺子　でもねえ。わたくし、どうしても若松へは歸りませんわ。兄の處へ當分ゐて、それからどうにかしますわ。

紀三郎　どうにかするつて、一人で暮しても行かれないでせう。困つたなあ。

紀子　困つた困つたてあなた仰言るけれど、わたくしだつて苦しいわ。……わたくしからそろ〳〵逃げようとしてゐらつしやるのね。

紀三郎　そんなことはありません、斷じて。

淺子　奧さまとお仲がよいことね。わたくしおふたりに取つてはほんとに惡魔だわ。奧さまちつとも、御存じないでせうか。

紀三郎　勿論知らないでせう。

淺子　疑つてゐらつしやらないでせうか。

紀三郎　さうの様ですよ。平氣ですよ。全體馬鹿ですからね。

淺子　お可哀想ね。あなたを信じ切つてゐらつしやるのね。あなた、二重に罪を重ねてゐらつしやるのね。

紀三郎　わたしの痛い處へ障るのはよして下さい。煩悶無しでやつてゐるわけでもないのだから。

淺子　ごめんなさい。(沈默)　わたくし考へるとたまらないわ。あなたはわたくしのものではないのだから。わたくしかうしてあなたのものに完全になり切る爲に、離別までして來てゐるのに、あなたはわたくしを追ひ返さうとしてゐなさる。

紀三郎　追ひ返さうなんぞと云ふのではないのです。わたしどもゝ、あさつて歸京するのだから、あなたも東京へ歸る方がよいと云ふのです。

淺子　いゝえ、こんな山の中の事ばかりではないのです。あなた御自身の中にわたくしが入つて行かうとすると、出て行け、この胸の中にはお前の棲むところは無い、歸れ、とかう云ふ風な様子をなさるのです。わたくし、それが……。

紀三郎　そんな事を云つてわたくしをいぢめて、それでおもしろいのですか。

淺子　苛められてゐるのはわたくしです。わたくし、若松の傍へ歸つて、今迄の様な日を送つてゐる事はとても出來ません。わたくし、この事をすつかりあなたの奧様にお話します。そして、そして……。

紀三郎　ばかを仰言い。そんな事……。

淺子　でもわたくし堪りません苦しくつてたまりません。わたくしほんとうにあなたのものになりたい。そしてあなたをほんとにとらなくては……。(突然紀三郎の頸へ手を廻す)

紀三郎　およしなさい、人が來ます。

(廊下へ年代が來かゝりこれを見て凝立する。二人氣がつかない。年代すぐ戻つて行く。)

紀三郎　(無理に女を退ける)　誰か來たやうでしたね。(立つて廊下を見る)　たしかに足音がしたとおもつたが。……氣がつきませんでしたか。

淺子　お氣の故でせう。奧様がこはくてたまらないので、それでそんな錯覺をお起しなさるのでせう。

紀三郎　錯覺かしら。たしかに足音がしたのだが。

淺子　でも誰も見えないぢやありませんか。

（紀三郎、氣づかはしく廊下へまた顏を出す、と、年代はわざと足音をあきらかにして出て來る。）

10　紀三郎と淺子と年代

年代　（紀三郎に）お出かけ？
紀三郎　（間がわるく）うん、電話はどこだつたい？
年代　いゝとこよ。
紀三郎　（不審げに）なんだつて？
年代　いゝとこなの！
紀三郎　家だらう？
年代　いゝえ。
紀三郎　お前の處へかゝつて來たのかい。
年代　えゝ！　わたしのいゝ人からなの。（笑ふ）昔から夢で見てゐた人からなの。早く東京へ歸つて來い、淋しくて死にさうですつて。（笑ふ）
紀三郎　何を馬鹿げた事を云つてゐるんだ。用ぢやなかつたのか。
年代　えゝ、あなたへ御用ぢやございませんでした。
紀三郎　若松さんが來ていらつしやるよ。
年代　あらさう！　（淺子を見る）まアどうも失禮。
紀三郎　（行きかけて）もうすこし前にこの部屋の前まで來たのはお前かい。
年代　（眞劍に）いゝえ、今來たばかり、なぜですの。
紀三郎　なあに！　（間）ちよと球を突いて來る、淺子さんごめんなさい。
淺子　はい、どうも……。

（紀三郎去る。）

11　年代と淺子

二人の女は暫時默つてゐる。年代、晴々とした聲で笑ひ出す。

年代　まあをかしいこと、わたし、だまつてゐたりして！　ごめん下さいましね。ほんとうにうつかり者で……（笑ふ）
淺子　わたくしこそ、ちよつと考へ事をしてゐましたので……（無理に笑ふ）
年代　初枝さんはどうなさいまして？
淺子　お晝前はこのうちの主が湖へ舟を出して釣をするから、お孃さんもおよこしなさいと云つて連れて行つて呉れましたの。もうそろ〳〵戻るでございませうよ。
年代　まアおきついこと。わたしども、あの位の年ごろには、母親を離れてはとてもよそなどへ參れませんでしたわ。殊に旅先などでねえ。

淺子　あの子は妙な子でして、どなたにでもぢきなじんでしまひますのよ。

年代　お母さんに似てゐらつしやるのでせうね。

淺子　（ちらりと見る）あら、わたくしなど至つてお交際下手で、いつも主人に叱られてゐましたの！

年代　でもいろ／＼會へなんぞよくおいでなさいますこと。

淺子　なんだかだと引張り出されまして……。

年代　お美しいので殿方たちがさぞ大切になさいますでせうからねえ。

淺子　あら、（微笑）いやな奧樣ですこと。

年代　（笑はず）主人もよくお噂して居りましたのですよ　お前も一度お眼に掛りに出てお友達にして頂くがよいつて！　お前などはあアいふ風の方と、ちとおつきあひ願はなくてはいけない……（口惜しさを押しつゝんで、一句々々その時の事をおもひ出しながら云ふ）

淺子　（ちよつとは氣の咎める樣子、笑ふ）まあとんでもない。わたくし、でもこんな溫泉場で初めてお眼に掛る事にならうとはまつたく考へませんでしたわ。うれしうございましたこと。

年代　（すこしふるへる聲で）わたくしもほんとうに……よいお友達が出來てこんなうれしい事はございませんわ。

淺子　仲よく致しませうね。

年代　えゝ、えゝ！

淺子　おや、どうかなさいまして？

年代　いゝえ。なぜですの？

淺子　いま身ぶるひなさいましたわ、それにお顏が……。

年代　青うございまして。いゝえ、わたしいつもこんな風で居りますの。あまり丈夫な質でございませんので。

淺子　お弱いさうでございますのね。

年代　主人がさう申しまして？

淺子　えゝ！

（長い間を置いて、淺子靜かに露臺に立つ。）

淺子　先程も申しましたのですが、このお部屋はほんとに見晴しがようございますこと。わたくしどもの座敷などすこしも晴々しませんで……。

年代　先年參りました時は春でして、その時はもつとよろしうございましたわ。この下の方が薄赤く山櫻が咲き連つてゐましてね。（當時を回想する）それからもう四年目になりました。

淺子　旦那樣から伺ひましたわ。（微笑）御新婚の時でございましたさうですのね。

年代　えゝ！　よくいろ／＼な事を御存じですことね。

淺子　(欄干から下を見る) おそろしい様に深い谷ですのね。

年代　水の流れが幽かに聞えませう。勇ましい早瀬の音が……(耳をすます) ほれ、ごうごう云つて居りませう!

淺子　ほんとにね。ここから落ちますと一ト思ひに死ねさうでございますね。(欄干へ腰をおろす)

年代　(自分もかける) かうして掛けてゐて落ちて死んだ方があるさうでございますのよ。

淺子　まあこはい。

年代　尤も醉つてゐらつしやいましたさうですわ。

淺子　而し、造作なく死ねませうね。病氣などで死にます事をおもふと、却つて諦めはようございませうね。

年代　(沈默)

淺子　まア御覽遊ばせ。あすこに太陽があんな淋しい色をして……。

年代　(突然淺子を激しく突く)

淺子　(腰を欄干から滑り落す。身體は向うへ隱れて、辛うじて手でつかまる)

年代　(その手を無理に離させようとする)

淺子　(激しく抗ふ)

年代　(たうとう一念を遂してしまふ)

淺子　(谷底深く落ちる)

年代　(下を覗いて見る。それからぺたりと露臺へ坐つて、放心した様になつてゐる)

(長い間。)

(主人の紀三郎戻つて來る。)

12　年代と紀三郎

紀三郎　なんだ、そんな處に坐つてどうしたんだ。

年代　(無言)

紀三郎　若松の細君、歸つたのかい。

年代　えゝ!

紀三郎　何をしてゐるんだい、そんな處で。

年代　(立上る) なにもしてゐませんの。

紀三郎　變な顔をしてゐるなあ。どうかしたのか。

年代　えゝ、すこし胸がむか/\しましたの。をかしいわね。

紀三郎　何が可笑しいのだい?

年代　(口許だけで笑ふ) なぜでも? あなた、花を採つていらつしやらなかつたのね。手向けの花を!

紀三郎　縁起の惡い事を云ふなよ。ちよつと用をおもひ出したので歸つて來たのだ

年代　(冷笑) 淺子さんにですか。

紀三郎　なあに、學長の處へ急な用をおもひついたのだ。

淺子さん、何か面白い話でもして行つたかね。
年代　えゝ、えゝ、いろ／＼な。（爪を嚙む）
紀三郎　どんな話を？　（探る樣に）己にもすこし分けて聞かせろよ。
年代　（無言爪を嚙んでゐる）
紀三郎　また爪を嚙んでゐるな。幾ら云つてもその癖をやめないな。もう皆剪つたかい。
年代　いゝえ。さうだ。まだ爪を剪り殘してゐたわ、忘れてゐたわ。
紀三郎　取つてやらう。鋏は？
年代　（あたりを見廻す）
紀三郎　こゝにあつた。（爪を剪りはじむ）　剪りにくいなあ。
年代　もつとよく取つて下さいましな。
紀三郎　深爪にするといけないから、この位にして置かう。
年代　もつと深くとつて……。
紀三郎　また怪我をすると痛いぞ。
年代　（急に手を引込ます）　わたし、ひとりで剪るわ。（苛々して）　もつとちやきちやき剪つて下さらないでは。（鋏を取つて剪る）　指の先を剪り取つてしまひませうか。（藥指の先をすこし切る）
紀三郎　あ、ほら見ろ、亂暴に鋏をつかふものだから、それ、血が滴れるぢやないか。
年代　本當に血が滴れること。まだ赤いわ、わたし、もう身體中の血が水の樣に透き通つてゐるかとおもつてゐたのに……まア、こんなに赤いわ。あなた、この指を吸つて。
紀三郎　馬鹿だな。痛いだらう。（ちよつと口で血を吸つてやる）
年代　（笑ひ出す）　似合ふわ。ほんとによく。さんざわたしの血を吸つたのね、あなたは。
紀三郎　冗談云つてゐらあ。
年代　あなた吸血鬼ね。
紀三郎　變な事を云ふなよ。さあ、絆創膏を貼つてお置き。
年代　これまではほんのこれんばかりの創もいとつてゐたの。絆創膏でなほせるほどの創ならいとふほどの事はないわ。可愛らしいくらゐだわ。傷と云ふものが可愛らしいなんて、まつたくおもつてゐなかつたわ。傷ついた心と云ふ言葉がありますね。
紀三郎　（寢ころんで本を讀み初める）　うん！
年代　可愛いものでせうね。心の傷だなんて。傷痕を見て、その傷をおもひ出すなんて云ふのは享樂だわ。わたしね、いまゝで心を傷つけた事などなかつたの。
紀三郎　ふむ、さうかね。（頁をめくる）

年代　傷あとなどの無い瑠璃の様に滑らかなものだつたの。中に金魚が泳いでゐたのよ。美しい金魚が。あなたが。處がその心が一度に見事こはれてしまつたの。中に住んでゐるとおもつてゐたのに、とうに金魚はゐなかつたのだわ。

紀三郎　何だかわけのわからない寢言を云ふなよ。

年代　……心が傷つくなんて云ふのはほんとにたのしい事だわ。傷つくなどと云ふ程度の悲しみは、樂しさの一部分だわ。傷ではないのだもの。まるで虚無になつて碎けてしまつたのだ。

紀三郎　(ふと氣がついて)　お前、何か淺子さんに聞いたのだらう。

年代　いゝえ、聞くものですか。あなた、何も聞きはしませんよ、可笑しいわね。

紀三郎　おい、お前、可笑しいわねを二度云ふぞ、さつきから。

年代　でも可笑しいから。わたし、なんだか笑ひたくつて、笑ひたくつて、そしてふざけて見たいわ。あなた、わたしの心持がわかつて?

紀三郎　ふむ!　(不快)　お前が己の心持がわからないのと同じさ。

年代　さう!　ではやつぱり可笑しいわねですよ。だけれどもわたし、あなたのものよ。いくらわたしが理解ないと仰言つても。わたし、いろんな事を思ひ出すわ。昔の事を、樂しかつた事を。此部屋で最初の夜を送つたのね。まんぢりともしない、おそろしさとたのしさの限りの夜を……。わたし幼さい時から淋しく育つて來たのが、あなたの妻になつてから、まるで世間と云ふものがちがつて見えて來たの。世の中はたのしかつたの。生活は歡喜にみちてゐたの。つまり、世間はあなただつたのね。あなたがわたしの世界だつたのね。疑などと云ふものが世にある事さへ忘れてしまつてゐたのだわ。疑ふと云ふ事が人間を大人にさせる大事な營養だつたのにね。疑ふといふ事をあんまり輕蔑してゐた罰が當つてしまつて……

紀三郎　なんだつて!

年代　(歔欷する)

紀三郎　おい、おい!　可笑しな赤ちやんだなあ。よせよ!　何が氣に入らなかつたのだい。己はお前を可愛がつてゐるぢやないか。

年代　そんな事ぢやないわ

紀三郎　ぢやアどうしたのだい。お前何か己の事を勘ちがひしてゐるのではないかな。

年代　いゝえ。

紀三郎　お前は己の女房だよ。己は生涯お前を見放すやう

な事はないぞ。
年代　そんなお言葉は度々伺ひました。
紀三郎　機嫌を直せよ。そして己に聞き質したい事があつたなら遠慮無く云つて見ろよ。
年代　あなたに質すなんて、そんな勇氣はわたしにはありませんわ。それに、わたしはそんな事をしようなどとおもつてゐませんの。あなたが關係した事實で苦しんでゐるのではございません。
紀三郎　ではなんだい、變な事ばかり口走るぢやないか。
年代　あなた方の事ではないの。わたし自身の事なの。自分が可哀想でもあるし、憎らしくもあるし……可笑しくもあるの。
紀三郎　(抱く)　さあ／＼、機嫌を直せよ。顏にペンキを塗り直さないでは可笑しいぞ。人が變に思ふぜ。
年代　他人などいくら何とおもひませうともかまひませんわ。(夫の腕の中にゐるのにやつと氣がついて、おびえたやうにその手から逃れる)　いやです!　わたしに觸つてはいけません。
紀三郎　なぜだ。
年代　なぜでもです。
紀三郎　己がいやになつたのか。
年代　いゝえ!　好きになりました。以前より一層、前のころはすきだか嫌ひだかわかつてはゐなかつた。あなたの中に入つてゐて、山でも空でも、書物でも鉄でも世の中のなにもかもが、あなたに見えてゐました。すきとかきらひとかいふことを超てゐました。今は、はつきりあなたを愛してゐるのがわかります。昨日まであたしの守護神だつたあなたが、一人の人間になつてわたしに戀ひさせようとしてゐらつしやる。なぜあなたが憎めないのでせう。
紀三郎　己はお前に憎まれるやうな事はしないぢやないか。妙な事を云ふやつだな。
年代　(無言)
紀三郎　(あくまで糊塗してしまふ心算でかゝる)　とにかく誤解なんぞと云ふ事が夫婦の間にあつてはならないね。すべて云ひたい事は云つてしまふのだね。
年代　誤解などは致しません。すこしだまつてゐて下さいまし。わたし、考へたい事がありますの。
(籐椅子にかける。)
(紀三郎本を讀み初める。)
(英四郎と、若松浅子の娘初枝とが出て來る。)
(初枝は厚い髪を房々と短く垂らして、洋服を着てゐる。)

13　年代と紀三郎と英四郎と初枝

紀三郎　初枝さんどこかへいらつしやつたの。
初枝　湖へ！
英四郎　こゝの主人だの子供だので船を出したのですつて！
初枝　母さんは？
紀三郎　もうお歸りになりましたよ。
英四郎　さう！　今、階下で女中が、此室におゐでになるッて云つたので一緒に來たのだけれど……。
初枝　左樣なら。（行きかゝる）
年代　お孃さん！　いらつしやい。こゝへ入らつしやい！
（立つて初枝を抱く樣に部屋へ入れる）　湖はどう？　お魚釣れまして？
初枝　えゝ、すこうし！
年代　すこし捕れたの！　さうですか。面白かつて？
初枝　えゝ！　ずゐぶん面白かつたの。小母さん、今度母さんや皆でまた行つて見ませう。
年代　えゝ、えゝ、行つて見ませうね。母樣や小母さんとね。
初枝　（もぢ〱歸りかける）
年代　もうすこし遊んでおゐでなさいな。母樣すぐまたここへいらつしやいますのよ。
初枝　さう、本當？
年代　えゝ本當ですとも。さア、小母さんと何かして遊びませう。何をしませうね。えゝと。蓄音機をかけませうか。それとも小母さんがダンスを踊つて見ませうか。
初枝　（笑ふ）
年代　ダンス！　知つてゐて。あなたも踊れるでせう。母さんも踊れるでせう。
初枝　えゝ！　母さんの處へ先生がいらつしやるの。ダンス敎へに。あたしね、あたしすこし踊れるの！
年代　さう、小母さんは踊れないのよ。
初枝　ちつとも？
年代　えゝ、えゝ！　ちつとも出來ないのよ。初枝さん、敎へて頂戴な。
初枝　（笑ふ、下を向く）
年代　ね、敎へて頂戴な。
初枝　でもわたし敎へる程は出來ないの。
年代　初枝さんの知つてゐるだけね。さアどうしますの、かうするのですか。（初枝を立たせて手をかける）　一二、三四……。
初枝　（はにかんで）　あたしいやだわ。そして、男と女と踊るのよ。小母ちやん、小父樣に敎へてお貰ひなさいよ。

小父様、お出來になつて？
紀三郎　えゝ、出來ますよ。
英四郎　僕と踊りませう、さア初枝さん！
初枝　いやだわ。あたしいや！
英四郎　なぜです。
初枝　なぜでも！
年代　ではまゝ事しませうか。あなた旦那様で小母さんは奥様よ。奥様は馬鹿なのよ。
初枝　なぜ？　どうして馬鹿なの。
年代　どうしてゞも。生れた時からなのですのよ。
初枝　（笑ふ）
年代　（神經的な哄笑）ほんとに可笑しいわね。
紀三郎　初枝さん、小母さんはね、すこしどうかしてゐるのですよ。おい、年代、初枝さんにお菓子でも上げろよ。
初枝　あたし、お菓子欲しくないの。
年代　お菓子どつさり上げませうね、待つてゐらつしやいよ、お通夜の時にね。
英四郎　お通夜ですつて？
紀三郎　（何となくぎよつとした様子で）ふん下らない事ばかりいふ！
年代　おほゝゝゝ！　さあ〳〵、ほんとに何かして遊びませうよ。お葬ひの眞似しませうか。（座敷の隅の篠のバスケツトを肩に載せて部屋中をあるく）さあ、初枝さん、あなたお棺のすぐ前をおいでなさいな。
初枝　あたしいや！　さやうなら、あたしもう歸るの。
年代　まだ歸つてはいけないのよ。小母さんが面白い事をして見せますからね。（考へて）さうね遊動圓木の眞似しませうか。（露臺へ出て欄干へ乘る）ほら！（あるく）
英四郎　（驚いて）嫂さん！　馬鹿な事およしなさい。
紀三郎　あぶないぢやないか。（腹立たしげに）よせ、よせ！
年代　あなた、あなた、あなたはね……大丈夫踏んで立つてゐるとおもつてゐた大地が急に無くつて、ぽかりと足の下を空にされてしまつた女を見た事があつて？
紀三郎　（不安な豫感で）おい、冗談をするなよ。
年代　例へばかう云ふ風に、身體が宙に浮いてしまつたのよ。さやうなら！
（兩手を開いたまゝ、うしろへ反らせる。足は欄干を外れて逆に谷底へ落ちる。）
紀三郎　あッ！

14　紀三郎と英四郎と初枝

英四郎　嫂さん！

(二人露臺へ飛び出して下をのぞく。)

紀三郎　(狂はしく叫ぶ)　誰か來て呉れ！　早く早く！

(初枝、驚きに打たれてぼんやりしてゐたが、やがてはげしく泣き始める。)

(落日の最後のさびしく明い光が斜に室内に射し込む。)

――幕――

火あぶり（一幕）

人物

津村有年　畫工（四十五歳）
富山くに　その妾（三十六歳）
安田みつ　有年の娘（十四歳）
安田重吉　みつの伯父（三十七歳）
木村火葉　有年の内弟子（二十五歳）

舞臺

現代、十月ごろ。

小石川邊の古い二階家。荒れた庭に樫の木がたつてゐる。茫だの枯れかゝつた雑草だのが一杯にしげつてゐる下手に、こはれた物置がある。靜かな午後の日光がさしてゐる。畫工津村有年、妾のおくにを細い鎖で柱に縛りつけてそれを寫生してゐる。有年は髭だらけの無性つたらしい男。おくには大柄な仇つぽい女、銀杏返しに結つてゐる。

1　有國とおくに

有年　どうも面白くねえ型だなあ。いつもの通りだ。
おくに　またやり直しなの。
有年　うん、どうも面白くねえ。（木炭を擱いて、ちッとおくにを見る）もつと顔をあげて見てくれ。
おくに　かうなの？
有年　もつと。もつと。うしろへ寄り凭つて頤から咽喉をうんと見せて、うんそれでよし。
おくに　この方が樂でいゝわ。その代り眠くなつて來さうだ。
有年　寢てしまつてはいけないぞ。おい、もうすこし首を左へかしげて見てくれ。おつと、その位だ。
おくに　もうちよつと下げさせてくれるとなほ樂なんだけれどもな。あゝ痛い。鎖が喰ひ込んで。
有年　待ちな、いまに樂にさせてやる。（畫き初める。間。）
おくに　ねえ、先生！
有年　うん。
おくに　先のお内儀さんもかうして縛りつけたんだつてねえ。
有年　うん。
おくに　縛られた女の畫ばつかり描いてゐたつて、ちつとも賣れないぢやないの。

有年　うん。
おくに　どうして縛られた女を澤山畫くの？
有年　女は縛られてゐる時が一番可愛いからさ。
おくに　可哀想だからなの。
有年　さうぢやあねえ。女なんぞを、うつかり可哀想だなんておもつて見ろ。ひどい眼に逢はあ。
おくに　ぢやアなぜ縛られた女を見るとかあいくなるの。
有年　なぜだか知らねえ。とにかく女は縛りつけて見ると一番美しい處がわかる。むごたらしく縛れば縛るほどよく見えるよ。少々お多福でも女つぷりが上つて見えらあ。お前でもちよつといゝ女に見えるからな。
おくに　御挨拶だこと。
（間。）
有年　ちよつと、おい、右の足をもつと立てゝ見てくれ。よし。
おくに　先のお内儀さんもよくかうして縛つて置いて寫生したんだつてね。それからあとが大變だつたのだつて！
有年　うん。大變だつたとも。
おくに　火葉さんにみんな聞いたのよ、先生！
有年　手前、火葉と怪しいぜ。
おくに　（表情）御冗談でせう。あゝくたびれた。
有年　いけねえなア、おい、今、足の處を描いてゐるんだ。
おくに　だつてくたびれたんだもの。
有年　もうちつとの辛抱だ。もうすこし右を前へ出してくれ。左を立てゝ！　もつと、もつと。
おくに　足が出ちまふわ。
有年　指の先きをかゞめて呉れ。
おくに　先生！　ちよつと前を合せて頂戴よ、すつかりだらしがなくなつてしまつた。
有年　かまやしねえ。白子屋のおくまが戸棚から出て來たやうなのもわるくねえ。
おくに　（笑ひかけて）お馬鹿さんね。
有年　（眼を放さず白い歯を見せて薄わらひする）
おくに　早く描いてしまひなさいよ。（破廉恥に）早くさ。
有年　いゝよ、もうやめた。（おくにゝ近づく）
おくに　およしなさいよ。お株だよ。今日は柱にしばられてゐるんだよ。
有年　解いてやらう。（繩を解く）
おくに　いやだよ、あたし。ほら、格子が開いた。火葉さんが歸つて來たのよ。
有年　（離れる）畜生！
（外で「ごめん下さい。」と云ふ聲がする。）
おくに　先生！　火葉さんぢやないわ。誰か來たのよ。

有年　（立つて玄關の方へ行く）
おくに　（すつかり繩を脫して自由になり、玄關の方を覗いてから、そつと二階へあがつてゆく）

（舞臺人無し。）

2　有年とおみつと重吉

有年、部屋へ戻つて來る。おみつと重吉と續いて入つて來る。重吉は田舍の商人と云ふ風、おみつは淋しい顏をした怜悧さうな娘、各々挨拶する。

有年　珍らしいぢやないか、重吉さん！
重吉　へえ、どうもたいへん御無沙汰いたしまして。
有年　お內儀さんは達者かい。
重吉　へえ。實はその事でして。
有年　お內儀さんがどうかしたのかね。
重吉　へえ。
有年　どうしたんだね。
重吉　へえ！　どうも、實はこの春から病ひつきまして。
有年　それは大變だね。何の病氣。
重吉　それが傳染病でして。
有年　胸だね。
重吉　へえ。
有年　そんな病氣の出さうな人でも無かつたがな。
重吉　今迄は至つて丈夫な女でしたが……どうもまつたく弱り切つてしめえました。それで御相談に出ましたんですが、このおみつ坊の事ですが……。
有年　ふむ。
重吉　世帶は苦しくなりますし、一人でも口を減らさねえでは藥代が出ませんので……永らく預つてゐたで、わしども實の子の樣におもひますで、手放したくもねえだが、どんなもんでせうかねえ、こちらへ引取つて頂けねえんでせうかとおもひましてね。
有年　ふむ。
重吉　（云ひ憎さうに）うちへ預りましてからもう七年になりましただ。世話やける時はとうに過ぎましたし、さうかつて實の子でねえわしが妹の子だけに、子守ッ子にやるなアいやだアとて、病人が承知しませんので。それで御相談にめえつたわけでして。へえ。
有年　藪から棒に引取れと云はれた處で困るな。これはわたしの子だと云ふもの丶、お前さんのところへやつてしまつたんだから、この世にゐるともゐないとも、それさへ考へない、いはゞわたしの勘定には入つてゐないんだ。まア他人も同じだ。
重吉　他人だと。勿體無え事云はねえ事だ。それに養女に來てゐるのぢやアねえ、あんまり可哀さうだからわし引

取つてゐたゞ。尤もこの七年の間、正月の小遣ひ錢百でも下駄一足でもこれに送つても來なさらねえだから、大方、自分の子だてえ事を忘れてゐなさるんだらうよッてよく笑ひ話にしてゐましたが、今度と云ふ今度は、たゞ笑ひ話でもすまされねえ。一つばし間に合ふだから、これ家にゐねえぢやアわしら困るには困るだが、口減らしてうちのやりくりしねえぢア追つゝきましねえだからね。それに、嬶の病氣は傳染病だから、もしかしてこのおみつ坊にうつりでもした日にあア、死んだ妹に面目ねえさ。お前様にも逢はす顔が無くなるだから……。

有年　そんな事は仕方がないやね。

重吉　薄情な事云はねえものだよ。取返しのつかねえ事になるだから。

有年　とにかく突然やつて來られたつて困らアね。今日はまあ連れて歸つて下さい。そのうち、金を算段していくらか送るやうにするから。

重吉　（むッとして）金貰ひてえから來たとおもひなさるかね。

有年　だつてお前さん、世帶が苦しいから引取れと云ふぢやないか。

重吉　それやさう云ひました。だが、金呉れろと云ひましたかね。

有年　同じぢやないか。

重吉　馬鹿云はねえものだ。わしの云ふのはさうぢやアねえ、今度と云ふ今度は嬶は血吐いたり痰吐いたり、せまい家中が藥の包でぷん〳〵してゐる有様だア。金ありや病院へでもどこへでもやりますさ。それが出來ねえだから、これと同い年を頭に四人の子が病人の寢床のすぐ傍さ床敷いて寢るだ。夜なんざア、家中寢床だ。可怖ねえぢやねえかね、それもわしの子は仕方がねえさ。親子の緣だからね。親ア貧乏で親の病氣引負つたつて因緣かも知れねえさ。だがこのおみつはさうでねえ、津村有年と云つちやア身持わるいが近頃はいゝ金取る浮世繪師の先生だ。しかもかうしてれつきとして東京でくらしてゐなさるだ。その預りもんの子に、病氣うつしてしまつたら、面目なくてなるめえぢやないかね。金ほしいのは二の次だ。大事な預り物だ。疵物にしたくねえが第一だ。今年中に死ぬやら、このまゝでヒクヒク三年五年生きるやら、あの病氣はわからねえと、醫者様は云ひなさる。この先長く今の樣に一緒にして置いてもしもの事あつたら、どうしなさる。

有年　どうも仕方がないぢやないか。お前さんの子にだつてうつるかも知れないんだもの。これにうつッた處が仕方がない。恨みやうがないぢやないか。

重吉　わからない事云ふものでねえ。これはお前様の子だ。實の子だ。子がかあいくはねえだかね。

有年　かあいくないね。

重吉　あきれたもんだ。もうこんな立派な娘になつただから、結構臺所でも何の用達でも出來る。お前様身の廻りさせるに便利でねえか。

有年　なアに、身の廻りの事はして呉れる奴がある。それに己はこの娘を見てゐると、こいつのお母の事をおもひ出していやだ。

重吉　ふん、お前様に苛められ通しで妹の奴死んだゞからな、思ひ出しや後生がわるかんべえよ。

有年　とにかく連れて歸つて貰はう。

おみつ　伯父さん、早く歸りませう。早く歸りませう。あたし、伯母さんの事が心配だから。

重吉　昨夜、この相談すると、これも嬶も、どうしても氣が進まねえ、いやだと云ふさ。わしだつて手離したくねえさ。だがこの子はあまり丈夫でねえだけ病人の傍へ置きたくねえとわし一人云ひ張つて、たうとうかうやつて連れて來たゞ。小さい餓鬼たち、ステンショまで送つて來て、實の兄弟に別れるやうに悄れてゐたゞ。また連れて歸りやさぞ喜ぶだらう……。

有年　それならなほ結構だ。こつちも助かるんだ、なアに、初めつから己の子に生れたなざア運はよくねえんだから、事の序でに、もうすこし大きくして酌婦にでも賣り飛ばしてしまふがいゝ。別に何とも苦情は云やアしないから。

重吉　お前様、正氣だかね。

有年　正氣さ。先の嬶が乘りうつッてゐる樣な娘を引取るなんざア眞平だ。

重吉　呆れたもんだ。まるで鬼のやうだ。わしにはほんとに出來ねえ。

有年　（笑ふ）さうかなア。

おみつ　伯父さん、歸りませう。

重吉　歸らうなア。おみつ、もう今日からお父さんと云へ。こゝにゐる人ア、赤の他人だ。

有年　ふゝゝ！

重吉　何可笑しい！

有年　可笑しいやな。（笑ふ）

重吉　うぬ！（ト飛びかゝらうとする）

おみつ　（抱きとめる）歸りませうよう。

重吉　（ぶる／＼ふるへ乍ら）うん、歸らう。早く歸らう。

（二人歸つて行く、有年ぢツと考へてゐる、日昃る。）

（弟子大村火薬歸つて來る。）

3　有年と火葉

火葉　只今！
有年　（だまつてゐる）
火葉　先生、今こゝを出て行つたのは、松戸の安田さんでせう。
有年　うん。
火葉　ぢやアあの娘さんはおみつさんでしたか。どうも奥さんによく似てゐるとおもつた。惜しい事をした。何しに來たんです、先生！
有年　おみつを引取れと云つて來た。女房が病氣で寢てゐて困るからと。
火葉　斷つたんですね。
有年　さうよ。いやなこつた。
火葉　可哀想に……。
有年　己がか？
火葉　冗談でせう。（ふところから金を出す）よこしましたよ、兩方とも。
有年　宏文堂はいくらよこした。
火葉　七十圓でした。みんなで百十圓あります。
有年　あいつめ、よくよこしたな。ぢやアそのうち二十圓はお前に、此の間借りた分として返す。己に五十圓出せ。あとはあの女に渡して置け。
火葉　えゝ。（金を渡す）奥さんの生きてゐらしつた頃は、いくら金を取つて來ても一文だつて上げた事は無くつて、皆な先生が道樂をしちまつたけれど……此の節はやつぱりお年のせゐで氣が弱くなつたんでせうかね。
有年　馬鹿を云へ。それやア己が今の女に惚れてゐるからだ。
火葉　奥さんには惚れてゐなかつたんですか。
有年　さうよ。あれは己の女房だつたんだ。だから己は惚れてなんかゐなかつた。今の奴はもと〱モデル上りの己の情婦だ。どこの國に、情婦に惚れずに女房に惚れてゐる奴があるもんか。女房と情婦ごツこをしてゐる奴は別だが、本當の女房つて云ふものは辛め抜いて見なくては氣の濟まねえものよ。
（おくに、二階から下りて來る。）

4　おくにと有年と火葉

おくに　火葉さん、お歸んなさい。
火葉　たゞ今！
おくに　お客と入れちがひだつたのね。さつきの人がいつのまにか火葉さんの聲に代つてしまつて、變だとおもつてゐたわ。うと〱しかけてたもんだから。

火葉　お金を渡して置きますよ。

おくに　呉れたの。あなた持つてゐて頂戴よ。同じだわ。

有年（わきを向く）

火葉　でも、わたしが持つてゐると使つてしまふから。

おくに（帯の間へ仕舞ふ）ねえ、先生！　あなた、お金が手に入つたのでまたお出かけぢやないの。

有年　うん。

おくに　出かけるなら、久し振で床屋へ行つていらつしやいよ。二タ月も行かないでせう。

有年　うん。

おくに　序でにお湯へもさ。二十日に一度ぐらゐしか入らない人つてあるかしら。

有年　うん。さうだ、行つて來よう。（立つ）

おくに　今行つて來るの。（手拭を出してくろ）あら、シヤボンが無いや。

有年　シヤボンなんぞ入るもんか。

おくに　でも垢だらけなのに。毎日行くんならいゝけれども……。

有年　いらねえよ。（出て行く。）

火葉　行つてらつしやい。（おくに玄關まで送つて行く。すぐ戻つて來る。）

5　おくにと火葉

おくに　火葉さん、遲かつたのね。

火葉　なにが。

おくに　おつかひがさ。

火葉　一本槍で行つてすぐ歸つて來たんだが。

おくに　でも遲かつたわ。（間）今夜は先生はきつとどこかへ行つてしまつて歸つて來ないよ。ふところに金があるとうちにゐられない性分だからね。

火葉　でも近頃はよほど老い込んだ。以前はあんなもんぢやアなかつた。

おくに　ずゐ分先の奥さんをひどい眼にあはせたんだとね。

火葉　うん、生傷だらけにする事はのべつだつたつけが……でも奥さんはよく辛抱したよ。それにいゝ人だつた。やさしくして呉れたつけ。（しみじみと）可哀想な人だつた。

おくに　お前さん、先の奥さんに惚れてゐたんだね。

火葉　馬鹿云へ。年が十四五もちがはア。

おくに　年のちがひなんぞ當になつたものか。憎らしい。

火葉　痛い。ひどい事をするなア。（立つ）さア、忙しい忙しい、圓玉大師の分を書いてしまはないぢや。

おくに　あら、五日ぶりに二人ぎりになれたのにわたしを打捨(うつちや)つといて畫をかくの。

火葉　だつて、新聞の方がそろ〳〵追ひつかれるんだもの。急ぎの仕事だ。

おくに　ひどいぢやないか。（無理に坐らせる）　誰が仕事なんかさせるものか。

火葉　（苦笑）　手荒だなア。こはれ物、取扱注意だ。

おくに　お前さん、をとゝひの晩歸つて來たのは一時廻つてゐたね。どこへ行つてゐたの。

火葉　友達の處さ。

おくに　どこの。

火葉　神田のさ。

おくに　神田の誰さ。

火葉　文揚社の編輯にゐる小室(こむろ)と云ふ人の處さ。

おくに　ついぞ行つた事のない人のうちぢやないの。

火葉　さうさ。初めて行つたのさ。

おくに　それに十二時過ぎまで遊んでゐたの。

火葉　あア。御馳走になつてね。

おくに　（烈しく）　嘘つき！

火葉　なにが？

おくに　人が知らないとおもつてゐるんだよ。（ふところから手紙を出す）　肉太(にくぶと)に書いてあるけれども女文字だね。

火葉　どれ、お見せ。

おくに　中を一緒にこゝで讀むかい。それなら渡すけれど。

火葉　とにかくちよつと見せなくつちや。差出人はなんと書いてあるんだい。

おくに　どうせ出鱈目さ。

火葉　（素早く手紙を奪ふ）　なんだ、これは牛込にゐる友達ぢやないか。松内と云ふ油畫師だ。

おくに　ぢやア中をわたしと一緒にこゝで讀むかい。

火葉　それは困るさ。どんな用件だかわからないんだもの。

おくに　うまくお云ひな。色文(いろぶみ)だものだから讀めないんだらう。

火葉　そんな事があるものか。（封じ目を見る）　おや、開けて見たな。でなければこんなになるわけがない。

おくに　（だまつてゐる）

火葉　ひどいぢやないか。親展書だぜ。

おくに　見ちやアわるかつたの。

火葉　だつて、だつてわたしが見もしない先に、なんぼ何だつて親展の手紙を……。

おくに　（ほろ〳〵と泣く）

火葉　なんだ、泣くの、泣く事なんぞ無いぢやないか。

おくに　でもあんまりひどいわ。わたしがこんないやな家

にゐるんだつて、あなたに、あなたに……。

火葉　（笑ふ）をかしいぢやないか。泣くなんて！　わかつてゐるよ。

おくに　（涙をふきながら）あアいやだ、いやだ。苦労ばかりさせられて。

火葉　いやならよすさ。

おくに　あら、どの口がそんな事を云ふの。

火葉　この口さ。

おくに　どれ、この口かい。憎らしい。

（物音がする。二人離れる。有年悲痛な顔をして入つて来る。）

6　有年とおくにと火葉

おくに　あら先生！

有年　（だまつて二人を凝視す）

おくに　（破廉恥に）お湯はどうして。今日は休みの日かしら。お湯の休みも二十日ぢやなかつたかしら。

有年　（執拗に立つたまゝだまつて二人をにらむ）

おくに　どうなすつたの。（わざと笑ふ）をかしな先生ね。

（有年は頑固にだまつてゐる。不安。火葉、二階へ上つて行かうとする。）

有年　（叫ぶ）待て！

火葉　（立止る。反射的に）なんです。

有年　（飛びかゝつて二ツ三ツ打つ）

火葉　（有年の胸を突く）

有年　（よろけたがすぐ立ち直つて火葉の胸をとる）

火葉　（有年の手をつかむ）何をするんです。

有年　何だと！　糞ッ。

おくに　先生、どうしたのさ。およしなさいよ。

有年　（火葉を押し倒してなぐる）

（格闘。）

おくに　あれえ、あぶない。火葉さん、早くお逃げよ。

（有年筆洗を取つて火葉を打つ。蜂谷の上から血がたら〱と流れる。筆洗くだけて飛ぶ。）

おくに　（有年に武者ぶりつく）

有年　畜生！

おくに　火葉さん、早く外へ出ておしまひよ。

有年　放せ！

（火葉ぢッと有年を見てゐる。）

おくに　どうしたのさ先生！　何を思ひちがひをしたのさ。

有年　思ひちがひだと。ふん、見ちがひだと云ふのならまだしもだ。貴様、太い女だぞ。

おくに　見つともないわよ。燒餅なんぞ年がひも無い。
有年　（おくにの頰を打つ）
おくに　（叫ぶ）何をするんだい。馬鹿！
有年　己の馬鹿は今初まつた事ぢやアねえ。（髮を摑んで引倒す）よくも嘗めた事をしやがつたな。とうからちやんと知つてゐたんだ。いつか現場を押へてやらうとおもつて待つてゐたんだ。太え奴等だ。
おくに　何を云つてゐやがるんだ。火葉さんを情人にしたのが何がわるいんだ。（有年、火葉にまたかゝらうとする、おくに素早く火鉢の灰に挿してあつた鏝を持ち、火葉をかばふやうにして立ちはだかる）火葉さんに指でもさはつて見ろ。あたしが承知しないぞ。
有年　（火葉に）出て行け、すぐ出て行け。
火葉　ふん！
（冷笑、靜かに出て行く。）

7　おくにと有年

有年　貴樣、己に手むかひするつもりだな。
おくに　當り前だ。
有年　賣女め。（おくにを突き倒して鏝を取上げる、馬乘りになる。手近に前に使つた鎖がある）よし、今度は本式に縛りあげてやらう。（おくにを後ろ手に縛りつける）
おくに　何をしやがる、畜生！
有年　（おくにを突落し、庭の樫の木に縛りつける）
おくに　ふん、何でもするがいゝ。貴樣見たいな、猿のやうな親爺に自由にされてゐるのは、火葉さんの傍にゐられるからなんだ。今ごろ氣がつきやアがつて、うぬぼれめ。
有年　（手拭を持つて來て口を縛る）どうだ、まだしやべりたいか。いゝ氣味だ。よく似合ふぜ。己は貴樣に惚れてゐるのが今日はつきりわかつた。かうして縛りつけるのも惚れてゐればこそだ。有難くおもへ。ふん、いつもモデルにして縛る時は、本當の面白味が出て來ねえが、かうして眞劍にくゝりあげて見ると賣女は賣女だけの味があらア。ふゝ、髮もいゝ工合にこはれやがつた。（鑑賞する樣に）まてよ！　もうすこし顏へ毛が亂れかゝらねえぢやアいけねえ。（傍へ行つて髮の毛を顏へかける）ほういゝ工合だ。これで頰桁へ血がすこしついてゐればなほ面白え。繪の具の色ぢやアつまらねえ。（小刀を持つて來る）どうだ痛いか。（頰を切る。血流れる）これでよし。
（ぢツと見てゐる。亢奮して來る。）
己は今まで縛られた女を何千種畫いて見たか知らねえが、今日の樣にいゝモデルをつかつた事がねえ。貴樣を

姿にして白痴な眼に逢はされたのが却つて得になつた。世の中は何が仕合せになるか知れたものぢやねえな。(考へてゐる) だが憎い畜生だ。さんざ騙しやがつた。(一人言のやうに) 死んだ婦は師匠と間男をしてゐやがつた。それを己は知らねえ風をして暮らして來た。そんな事は一度だつて口に出した事はねえ。女と云ふものはまつたく縛り上げて置くより外仕様がねえものだ。人に煮湯を呑ませる事をなんとも思やがらねえけだものめ。ああ、ぶつ倒れさうだ。(よろめく) どうしてやらう。さうだ。火あぶりにしてやらうか。どうだその足許から火を焚きつけてやらうか。

おくに (もだえる)

有年 (冷笑) 呻つてゐるな。いゝ氣味だ。いやなのか。それともやつて欲しいと云ふのか。

おくに (靜かになる)

有年 火をつけてやらうか。

おくに (ぢつとしてゐる)

有年 (憤然) よし、燒いてやる。

(庭の隅の物置から、炭俵だの木端だのを持ち出しおくにの足許に積む。おくに靜かにしておる。)

有年 どうだ、いよ〳〵貴様を燒き殺すぞ。(物狂ほしく笑ひ叫ぶ) ふゝゝゝゝゝゝ!

(夕ぐれ近くなり、風が來て木の葉を落す。庭の隅から火葉そつと出て來る。)

8 火葉と有年とおくに

有年 よし、さうしてゐろ。今火をつけてやる。己が一代の名畫にして。(立上る) やい貴様の姿が千古に殘るんだ。光榮におもつて靜かにしろ。

(火葉飛びかゝる。有年聲を立てずに倒る。)

— 幕 —

二人の未亡人（一幕）

人物

中川禮子（三十歳）
小沼とき子（二十七歳）
岸田良一（三十五歳）
小間使（十七歳位）
女中（二十五歳位）

舞臺

現代、六月の朝

東京の郊外。廣々と庭を取つた平家の座敷。廻り緣から上手へ通ふ。客の出入はこの上手から緣を傳はつてする。庭には、女竹が澤山茂つてゐる。楓、青桐なども植ゑてある。藤棚などもある。すべて新綠で、座敷の中に蒼暗い影が滿みてゐる程の落着いた、質素な純日本風のあまり大きくない邸宅。庭はさう手入れがしてない。全體にすこし茂り過ぎてゐるくらゐである。午前の澄んだ日が、それらの梢から洩れて、彈力のある新らしい葉の上にちらちらとこぼれてゐる。涼しい微風が支那簾をすこしづゝ動かす。その簾の影に古風な文机がある。書棚がある。そこは今は女主人の書齋になつてゐる。下手向に丸窓がある。卓上電話がある上手が客間になつてゐる。十疊ぐらゐ。枯淡な趣味でどちらかと云へば女性をあるじとする家らしくない錆びた調度で飾られてある。庭いちめん前の日の雨でぬれてゐる。楓の葉はまだ雫を含んでゐる。

あるじの未亡人、書齋で新聞を讀んでゐる。三十歳。聰明さうな靜かな美しい婦人。髮は西洋風に結んでゐる。質實な黑ずんだ好みの衣服。古風な裂地の半巾帶翡翠と本甲と白金とを取合したピン。指輪ははめてゐないけれども、爪先はマニキュアが屆いてゐると云つた感じ。物を云ふときも、物を聞いてゐる時も相手から靜かな眼差を放さない癖がある。その眼の中に、程のいい表情が往來する。それが對手を魅する。しかしすこしも隙が無い。靜かに身邊を守護するには教養の屆いた正しい舉措を以てしてゐる。

小間使　（佛參の花を持つて下手から出て來る）奥樣お花が屆きました。

禮子　さう！（花を見ながら）柳があつたのね。柳にマガレット、妙な取合せね。

小間使　雨が續きましたので、と申譯を云つて居りました。
禮子　でもそんなにわるくも無いわね。あつちへ持つて行つて、水へ挿して置いて頂戴！
小間使　はい。（行きかける）
禮子　大初へ電話をかけて呉れて！
小間使　はい！　十時にはぜひ參るやうに申しました。
禮子　さう！　有難う。（また新聞に眼をやり乍ら）　下駄を出して置いて頂戴よ。
小間使　はい。もうお傘も……黒い方の分をお揃へしてございます。お召物はどう致しませう。
禮子　着物？　（何か考へながら）　さうね！　（間――すぐはつきりして　いゝわ。わたし出すから。
小間使　はい。（去る）
禮子　（新聞を讀みつゞけてゐる。遠くで呼鈴が鳴る。禮子額をあげて、眼は庭の方を見乍ら、耳の注意を玄關の方へやる）
（上手から女中が名刺を盆にのせて來る。）
禮子　お客樣？
女中　はい。（名刺を出し乍ら）　をとゝひ小石川の旦那とおいでになつた方でございます。
禮子　（名刺を弄りながら當惑したやうに考へる）　困つたわね。
女中　あの、お出先だからと申して　お斷りいたしませうか。
禮子　いゝえ。（微笑）　それで困つてゐるのではないの。まあいゝわ。お通しして下さい。
女中　はい。（去る。）
禮子　（立つて、座敷と書齋との間の襖を閉めて自分は奥の居間へ入つて行く）
（舞臺空虚。）
（すぐ上手から女中に案内されて岸田良一が入つて來る。洋服。三十五歳。赤い力んだ顔。大柄なガツシリした紳士。眼鏡や髭もなし。厚い髪をかき上げるやうに分けてゐる。活動的でハキ〳〵してゐる。）
（女中、白麻の座布團を勸める。良一、だまつて敷く。）
（小間使、煙草や灰落しを持つて來る。茶を持つて來る。菓子を出す。すべて無言。）
（やがて良一、一人になる。ハンケチを出して顔を拭く。上着の隱袋から扇を出してあふぐ。靜かに部屋を見廻す。庭を見る。）
（やゝ暫く待たされる。）
（正面から禮子現れる。外出着に着かへてゐる。これも黒っぽい質實な氣の利いた風である。顔も直してあつてすこし白くなつてゐる。年よりジミにしてゐるの

る。)

が、かへつて年より若く見せる。敷居ぎはで靜かに坐

禮子　どうも失禮いたしまして。存じつゝ御待たせいたしました。

良一　いやどうも。お出先の樣に考へましたのですぐおいとま致さうと存じ乍ら……

禮子　いゝえ、あなた。どうぞ御ゆつくり遊ばして。(改まつて)いらつしやいまし。一昨日はどうもとんだ失禮をいたしまして。おかまひ申しもいたしませんで。

良一　いやどうも。恐れ入ります。大變に御馳走になりまして有難う存じました。初めて伺つてあんな永居をいたしまして。

禮子　どう仕りまして。恐れ入ります。兄があの通りお酒を頂くとすこしくどくなりますので、さぞ御迷惑でございましたでせう。

良一　いや、却つてわたしの方がお尻を落着けてしまひまして、御婦人ばかりのお宅ですから、殊に夜分で、早くお暇しようと存じながら、いい心持になつてついどうもとんだ御厄介をかけまして。(短き間)今日は用事でちよいとこの邊へ參りまして、お門を通りましたから、御禮やら御詫やらにちよいと。

禮子　それではどうも！　お堅くて恐れ入ります。

良一　あまりお堅くもないのですが、(笑ふ)極めて氣まぐれですから。

禮子　御同樣でございますわ。(微笑)御存じの通り、早く兩親に別れましたし、あの呑氣な兄と二人、年を寄りました大叔母の手で、あまやかされ切つて育ちましたせゐか、どうもあなた、今にその頃の癖が拔けませんで、つい得手勝手な事ばかりいたします。

良一　(あいまいに)いや、結構です。

禮子　さあ、どうぞお樂におゐで下さいまし。御洋服ですおかまひなく御崩し遊ばして。

良一　いや、これで澤山です。

禮子　それにあなた、急に今朝は晴れまして、……おあつくはございませんかしら。お上着をおとり遊ばしてはいかがでございませうね。

良一　ええ。なアに、すぐおいとまします から。

禮子　まあ、そんなこと仰有らずに。

良一　御出先を喰止めてしまひまして。

禮子　なんの、そんなことを、あなた。今日に限つた事でもございません。用事なのですから……

良一　失禮ですがどちらの方へお出かけですか。

禮子　はい。あのちよつと、墓參に靑山まで……

良一　御佛參に？　(間)今日が御主人の御命日ですか。

禮子　いえ。昨日なのでございます。毎月十九日には、とにもかくにも一度づゝ、花を下げまして青山へ參るのがこの三年間月の行事になつて居ります。昨日はあの降りでございましたので、一日のばして今朝にいたしました。

良一　なるほど。（まじめになつて考へ込む）いや、それなればなほのことお邪魔をしまして。

禮子　いいえ、どうぞ御ゆつくり遊ばして。（手を鳴らす

小間使登場）お茶を……

小間使　はい。（去る。やがて盆の上に茶器を持つて來てまた去る）

（長き間。）

（禮子、急須より茶をつぎ乍ら勸める。）

禮子　本當に御窮屈さうでございますね。どうぞちと御自由におくつろぎ下さいまし。こんな處へおいで遊ばして御遠慮は御損でございます。

良一　いやどうも。（笑ふ。すこしくつろぐ）

禮子　主人の生きて居りました頃は、それでもこんな家にも一部屋だけは、椅子テーブルをおきました間もございましたけれども、どうも日本間にヨオロッパの調度はうつりませんので……

良一　さうですね。

禮子　天井は低うございますし、一層、洋室に直さうかなど申して居りますうちに亡くなつてしまひまして、それからはもう、洋服を召したお客様は三月にお一人あるかなし、親戚の子供が學校の制服で參るくらゐなものですから、つい椅子卓（テーブル）を片付けてしまひまして。とんだ御窮屈なめにおあはせいたしまして。

良一　いいえ。どうも當節の日本の狀態ではいたし方ない事です。洋服を着て出る方が失禮なので。

（やゝ間。）

禮子　あのう……（云ひやむ、眼をふせる）

良一　はあ……（禮子の言葉を待つ）

禮子　あのう。（微笑）わたくしなど、こんなおばあさんでございますから、お羞しいのなんのと云ふ事ではございませんので、かまはず申上げたうございますが……

良一　はあ、わたしもその流儀です。どうぞ仰有つて見て下さい。

禮子　一昨夜、兄があなた様の御伴してここへ參ります三四日前に、わたくしが小石川へ無沙汰見舞に出ましたとき、あなた様のお噂を初めて伺つたわけでございますが……

良一　はあ、なるほど。

禮子　兄はあア云ふかまはない人なので、どん／＼突込んで申されましてね。こんな脂の拔けた未亡人がつい赤い

顔をいたした樣な始末で……(笑ふ) ほんとに可笑しな兄で……

良一　直截な、竹を割つた樣な人ですから。

禮子　竹を割るのも時によりけりでございましてね。嫂はとにかく姪や甥のゐる前で、ずば〳〵と割りつけられましちや赤くならずに居られません。ほんとに逃げ出したくなつてしまひました。(笑ふ) 甥などは兄に似た方で、それに野育ちでございますから、伯母さん、またお嫁に行くの、およしなさいよ、つまらないでせう、なんて申すので、大笑ひいたしました。

良一　(笑ふ) なるほど。それはどうも。

禮子　(やゝ間) そのわたくしの再婚の事を、兄が勸めてくれまして……

良一　はあ。(聲なかすらす) ええ、その事わたしから兄さんに再三お願ひしたのでした。

禮子　なんでございますか兄は氣樂人ですから。足許から鳥の立つやうな事を一人ぎめで申します。しかしわたくしももう三十と申せば小娘ではなし、兄の云ふなりにおいそれとも……ごめん遊ばせ、あなた樣の前で……

良一　どうぞかまはず仰有つて下さい。

禮子　お眼にも掛らない方との縁談を進められもできませず、まあとにかく追て御近付になつた後、わたくしのわるい處もよく知つて頂いてからの御話に　とさう申して戻りました樣なわけでございます。早く申せばあなた樣では、わたくしの外邊のいいところだけ見てゐらつしやるのでございますから……わたくしにいたしましても正直なお話が……三年もかうしてやもめ暮しをいたしますと、どうにもひどくこの呑氣さが身にしみてしまひましてね。もう一度、人に添つて昔のやうな束縛された生活をいたすのもおつくふな氣がいたして。いえ。あなた樣がわたくしを束縛すると申すのではございませんの。(微笑) つまり家庭の正しい制度がおつくうなのでございますね。

良一　それはわかつてゐます。

禮子　そんなわけでそのときはすぐには同意もいたさなかつたのでございます。

良一　御尤もです。

禮子　實は、お聞きでもございませうが、わたくしが未亡人を通すと云ふことは、自分の勝手で申せばわけのないかへつて氣樂な事でございますが、亡くなりました主人の遺志には添ひませんので。

良一　ははあ?

禮子　……歿後出ました遺言狀には、一週忌すぎたら再婚の準備をして、適當な處へ嫁付く樣にと書いてございま

した。これはわたくしを愛して吳れてゐるからのやうに、ちよいとは考へられますが、實はさうばかりでもないのでございますね。

良一　と申すと？

禮子　下らないおしやべりをいたしますが……主人には婦人と云ふものがどうしても信じられなかつたのでございますね。よくこんな事を申しました。女なんて云ふものは亭主と死別れでもすると、當座は死ぬ程泣き悲しむけれどもすぐ忘れてしまふ、未亡人を通すなどは愚な事だ……お前などきつと未亡人を通すと云ふ口だが、忘れてもそれはだめだ。すぐ再婚した方が故人に對して禮儀だなどと……

良一　禮儀ですつて？

禮子　（微笑）つまりかうなのでございますの。自分の妻が、自分の死後未亡人でゐるために性の知れない幾人もの男の自由になるよりは、一人の夫ときまつた男に引渡してしまつた方が氣持がいいとか云ふ意味なのでございますね。つまり、自分が現世に代理管理人を置いて、生き殘してある妻をそれに任せて置く方がいいと申すのでございますね。

良一　（わざとらしく笑ふ）

禮子　主人は若い未亡人などはどうしても貞操など通せるものでないと、至つて手短かにさうきめ込んでしまつてゐたのでございますね。得體の知れない男たちの慰み物に、自分の妻がされるより自分の身代りに、法律上の權利まで持つた良人を持たせて置く方がいいとおもつてゐたのでございますね。生前常談によくこんな事を云ひ云ひいたしましたが、遺言狀に、「一週忌後は他家へ正式に嫁ぐ事」と書いてあつたのを見ますと、實はいやな氣持がいたしました。

良一　なぜでせうか、あなたを可哀想に思へばこその遺言ではないでせうか。

禮子　（さびしさうに眼を庭へやる）いえ、つまり、前申したやうに考へますので、わたくしがはたちで結婚いたして花のやうな若い時代の自由を、すつかり縛つてゐた良人が、死んでからも、わたしの自由を束縛しようとする……と、まあそんな風に取りましたのでした。

良一　すこし考へ過ぎではないでせうか。一體、男と申すものは、そんな風な事は割に考へてゐない筈ですが……

禮子　（微笑）それは男同志でいらつしやるので、あなたは故人の辯護を遊ばすと云ふものでございますね。さう申せば、女と申すものも、故人の考へてゐた樣なものではないのでございますねえ。

良一　しかし、多くの女がさうであつたからこそ御主人の

女性觀も自然そこへ落ちて來たのでせう。あなたには多少不用意の間に皮相的な意見を洩らしてゐたくらゐのもので……事實は、やはり、あなたをおもつてゐたからであるとおもひますが……

禮子　（うなづく）愛してゐて吳れたにはちがひございませんわ。（間）しかし、自由は認めては貰へなかつたのでございますね。生きて一所に居ります間はもちろん、自分の死にました後までわたくしの自由を許さなかつたのでございます。未亡人としての自由と申すのは放恣に流れやすい事でございますけれども、わたくしのこれまでの三年は、事實の上ではまつたく尼でございました。自然、心持を中心といたした生活は眼に見えない處だけに一層尼のやうでございました。たゞなんの關係のない人さまには、そんなじめじめした感じをお與へしないやうに、なるべく晴々として毎日くらして參りましたつもりでございますが……主人はその自由を引くるんで認めて吳れると申すほどの愛しやうではございませんでした。たゞ、しつかりつかんでゐようとする愛でございました。

良一　……左樣、さう云へば男は皆愛の對照物をしつかり押へつけてゐなくては氣がすまないのかも知れませんれ。（間）一體、愛すると云ふのはさうではないでせうか。

禮子　さあ……（微笑）わたくし共にはよくわかりかねますけれども……とにかくわたくしは主人の遺言狀を見まして、すこし不快な氣がいたしました。そして、この事だけは遺言狀を守るまいと存じました。

良一　つまり再婚なさらないと云ふ事ですか。

禮子　ええ。一年後に再婚すると云ふ事をでございますね。

良一　なるほど。

禮子　それで、わたくしの流儀でやらうと存じました。主人の考へてゐた樣な未亡人一流の放恣も勿論いたしません。さりとて、お線香の匂ひでこの邸を一杯にもいたしません。わたくしはいたつて樂な心持で、この心持のつゞくまで、續けて見ようと存じました。

良一　（うなづく）

禮子　そして、三年でも五年でもの後、主人の情が、わたくしの心から薄れてしまひまして、わたくしがもう一度殿方に添つて見たいとおもひ出しましたらば、その時には結婚いたさうと存じました。これは主人の命令でなしに、わたくしの心持からいたすことになるのでございますからね。

良一　勿論さうですとも。

禮子　さうした折、もしわたくしがついした、浮いたふし

だらな事をいたしましたらば、それは人には知れなくとも、亡くなつた主人に對して立派に負けになるのでございますから、そんなまねはいたしませんで、すぐ再婚いたしてしまはうと心にきめて居りました。わたくし共には思つたよりかうした未亡人の生活は苦しいものではございません。(間)そこへ、兄からの話でございました。

良一　なるほど。(緊張する)つまり時が早すぎたのでせうか。

禮子　まあさうなのでございますね。(笑ふ)わたくしは、まだすこしも殿方に添つて、むかしの様な暮しをいたさうとは存じて居りませんでした。それは兄にもよく申しました。今再婚いたせば故人の遺言を守つたのと同じ結果で、たゞ時がすこしのびただけのこと。わたくしの今度の主人になる方は、故人があの世で考へれば、自分の代理管理人で……

良一　(ちよいといやな顔をする)

禮子　それ、ごらん遊ばせ。(微笑)そんな顔をあそばすほど有難くない役廻りをあなたにおさせするのは、申すとわたくしにいたしたところで望ましい事ではございません。

良一　しかし、それは考へ方の相違で、さツきも云ふ通り、亡くなられた方は、そんなつもりであなたの再縁を……

禮子　ところがわたくしには、生前からの關係で、どうも主人はわたしを獨占しなくては濟まないと云ふ一途な心を持つてゐたのが、形をかへて現れたのだとしか存じられませんのですもの。(さみしき笑ひ)まあ、こんな手前勝手な事ばかり申上げて……

良一　すると、このわたくしが、兄さんにおたのみしたことは……

禮子　それでございますね。もし、こんな風にものをひねくれて考へてみる女で、そして故人に對してもこんな風に考へてゐる女だと云ふ事がおわかりになつて、それでも愛想がおつきあそばさなければ……つまり、これからあなたを兄のお友達の一紳士として、當分極めて平凡なおつきあひをつゞけてゐて頂きたいのでございますね。そのおつきあひの爲に、意外にわたくしが再縁を望む心が早まるか、またそのため一層のびるか……それより早くあなた様の方で、そんなにまでしてほしい女ではないのだ、つい手をのばせばとれるとおもつてゐたのだと思召して……

良一　(汗を拭ふ)いや、そんなこと……

禮子　わたくしがいやにおなり遊ばす……さうにも想像出來ますので、さうした節は御縁がなかつたのだと存じ上げるよりは仕方ございません。(長き間。遠くで呼鈴鳴

る。禮子耳をすましたがやがて）もうひとつ、あなたは御初婚でいらつしやいますさうでございますねえ。

良一　えゝ！　さうです。

禮子　それなれば、わたくしの樣なもう盛をすぎた、しかも前の良人の幽靈がついてゐるやうなものでなく、それこそ、今朝咲いた花のやうなお姬樣をおもらひ遊ばしたらよろしいではございませんか。

良一　（やゝ長き間の後）つまりそのお姬樣があなたなのですね。（間）わたしのやうなものになると、戀愛はあとさきもなく咲いた花ではないのです　花に美しさを感じるよりも、實つた果の美しさをよけいに感じます。（間）わたしが求婚した人は、未亡人でなくて處女です。つまり、わたしが考へるあなたはいつも未婚者です。

（長い沈默。）

禮子　（さびしげに眼を相手に注ぐ）わたくしの處女時代……遠い昔の事でございますわね。

良一　わたしには今もさうおもへるのです。

禮子　一度わたくしの胸に棲んだ良人があつたと云ふ事を考へずにおゐでになれるでせうか。

良一　勿論それは考へません。

禮子　さうでせうか。

（小間使登場。）

小間使　奥樣！　お俥は宿へ一度歸しましてもよろしうございますか。

良一　（ゐずまひを直す）

禮子　まああなた。ごゆつくり遊ばして。（小間使に）さうして頂戴。また電話をかけるからつてね。

小間使　はい。（立つて行く）

良一　いえ、わたしはもうおいとまいたしますから。

禮子　それでもまあ

良一　それに今日は、午前に訪ねる筈になつてゐる家へ、これから參るので……（白い時計を出して見る）　また出ますから。

禮子　さやうでございますか。とんだどうも、愚痴をおきかせいたしまして、手前勝手な事ばかしおしやべりいたしまして……どうぞこれにお懲りなく。

良一　また近日伺ひます　あした、ちよつとした會で、小石川のお兄さんにもお逢ひするのです、今日こゝへ出た話をわたしからお話いたしませう。しきりと心配して呉れてゐますから。

禮子　さぞ生利（なまぎき）な女だと思召したでございませうけれど、どうか惡しからず御汲取り下さいまして。

良一　いえ、いろ／＼わかつて、かへつて心持がはつきりしました。では左樣なら。

禮子　失禮いたしました。

（良一立つて上手へ行く。禮子送つて行く。）

（しばらく空虚なる舞臺。）

（もとの處から禮子出て來る。小間使つゞく。そこらを片づける。）

禮子　さツき鳴つた呼鈴は。お客ではなかつたの。

小間使　（おもひ出して）あらまア忘れて居りまして申譯ございません。（帯の間から名刺を出して渡す）この女の方が見えまして……

禮子　（名刺を讀む）小沼とき……聞いたやうな氣もするけれど知らない。どんなひと？

小間使　あの、妙な方でございましてね。二十七八のきれいなひとですけれど。

禮子　あたしに逢ひたいつて？

小間使　へえ、わたくしも初めはさうかと存じましたらば、亡くなつた旦那樣をたづねていらつしやいましたので、旦那樣はもうおかくれになつたと申し上げましたら、嘘だとでもおもつたのでせうか、幾度もきゝ直して、しまひにはお玄關の壁にもたれておゐでになつて、考へてゐらつしやいました。

禮子　どんなひと？

小間使　ちよつとしたおうちの若い奥さんと云つた風な方でございました。三年前になくなつたと申上げますと、眞靑な顏をして、ふら〳〵御門の方へ歸つておしまひになりました。

禮子　わたしに逢ひたいとは云はなかつた。

小間使　奥樣はゐらつしやるのかときゝました。今お客樣でと申上げるとだまつてお辭儀をして歸つておいでゞした。

禮子　（また名刺を見る）誰だらう。

（女中登場。）

女中　おためさん。さつきのお方がまたいらつしやいましたよ。

禮子　わたしに逢ひたいつてかえ？

女中　へえ、奥樣にちよつとお逢ひしたいと仰有いまして！

禮子　さう！　（考へ乍ら）小沼とき！　（間）とにかくお眼にかゝらう！

女中　はい。畏まりました。

禮子　丁寧にお通しするのだよ。

女中　はい。（退場）

禮子　お茶をいれかへて、お菓子も取かへておいで。

小間使　はい。（退場）

（禮子。何か考へ乍ら立つてゐたが、やがて客を迎へ

る心持で、縁を傳はつて上手へ行きかける。客、小沼とき子女中に導かれて入つて來る。禮子を見て會釋する。禮子愛想よく笑ひかける。）

禮子　さあどうぞ。汚るしい處で……

とき子　恐れ入ります。

（とき子、坐る。二十七歲。すこし蒼ざめて、悲しげな顏をしてゐる。涙をこらへてゐるので言葉や指の先がふるへる。大人しき束髮、長い睫毛のある澄んだ瞳、やゝ濃い眉、脊はあまり高くない。聲は低いが朗かである。）

とき子　初めまして。

禮子　初めまして。わたくしが禮子でございます。

とき子　突然にあがりまして。小沼ときと申します。何分よろしく。

禮子　わたくしこそよろしくどうぞ。さあどうぞおあて下さいまし。（團扇をすゝめる）今日は急に夏らしくなりまして。どうぞおつかひ下さいまし。

とき子　恐れ入ります。

禮子　召使ひの者からちよつと承りましたけれども、亡くなりました基四郎をおたづね下さいましたさうで……

とき子　はい。

禮子　主人は、三年前大正△年の二月に病死いたしまして。（間）お名前を伺つた事もあるやうにおもひますけれどもはつきりいたしません。歿しましたのが、つい御知らせ洩れになつたと見えまして……たいそう失禮いたしまして。

とき子　はい。（突然にハンケチを額におほひ、啜り泣きを初める）

禮子　（不審さうに見てゐる）

（女中登場。茶、菓子などもつて來る。）

禮子　（置いて行けばよいと云ふ樣子をする）

（女中去る。）

とき子　（泣きやめようとして幾度も試みる）どうも……どうもとんだ失禮な……取亂した樣子をお眼にかけまして……（眼をおさへながら）どうぞ御ゆるし下さいまし。

禮子　（暗い心持になつてゐる）いゝえ。（間）失禮でございますが、どちらにお住ひでございます。

とき子　赤坂の丹後町でございます。（涙を收める）あの實は先程、こちらの基四郎樣が、もうお亡くなりになつてゐると伺ひましたときには、もう眼の先が深い淵になつてしまひました樣な心持がいたしまして、ついふらふらとこゝの御門を出ましたけれども、思ひ返して、せめて奧樣にお眼に掛つてこの心持を聞いて頂いたらと存じて押して上りましたわけでございます。

禮子　ほんとに、わたくしにそれを聞かせて頂くことが出來ますれば、どんなにうれしいかわかりません。どうぞ御差支へがございませんでしたら……

とき子　でも、わたくしがすつかり申上げましたら、奥さまはきつとわたくしを憎むか、賤しむか遊ばすでございませう。申せばあなたについすこし前まで敵意を含んでゐたわたくしでございますから……

禮子　（微笑）まあ、伺はうではございませんか。（手を叩く。小間使現れる）あのチヨコレートを濃く入れて持つて來ておくれ。

小間使　はい。（去る）

とき子　（やゝためらつた末）……實はお恥しいお話でございますが、亡くなつた方とわたくしとは、あなたがこのお家へお輿入遊ばす年、今から十年前の秋にお別れいたしたそれまでのお交際でございました。御婚禮が十一月五日だつたと存じます。その日の心持を今もよく覺えて居ります。

禮子　まあ！　そんな古いこと。それではあなたはまだほんの可愛いお孃さんでございましたのですね。

とき子　はい。十七でございました。女學校の四年でございました。まだお下げになど髮を結つて居りました日もありましたくらゐ、ほんの小さな娘でございました。あらう事かその小娘が大それた祕密を持つて居りましたのでございますね。その頃甚四郎さんは丁度十歳ちがひの二十七の希望も力も燃え立つやうな若い學士でゐらつしやいました。奥樣もお忘れにはなりますまい。色の白い肩巾の廣い、眉の迫つたその頃のお方を……

禮子　まあ、わたくしの覺えて居りますのは、どちらかと申すと新婚當時のさうした姿より、七年後に、盲腸炎で倒れました時でございますわ。蒼ざめて痩せた、力の拔け切つた頤に髭の粗にのびてゐた衰へた顏でございます。あなたとわたくしとが故人をおもひますときに、もうそれだけのちがひがございますのね。

とき子　盲腸炎でございましたか。（間）わたくしは十年前にお別れしたのち、二三度往來でお逢ひしたぎりでございました。それも若い元氣のいゝ御樣子でございました。そして後に考へますと御婚約が出來たときでございましたらう……その年の春五月でございました。わたくしにから仰有いました。僕はお前とかうしてゐる事が出來なくなつた。その事が家へ知れて兄弟たちからも大變攻撃されたし、父などからもひどく叱られた。それにお前さんはまだほんのねゝさんだ。僕はお前さんが十年經つた時改めて逢ひたいとおもふ。二人が健全でゐたらそのとき結婚しても遲くない。僕は獨身でゐる心算だ……

（ふと笑ふ）まあ、をかしな。そんな夢の樣な事が嘘とはおもへなかつたくらゐ、わたくしは、ばかな小娘だつたのでございますね。

禮子　（うなづく。このとき小間使登場。チョコレートの茶碗を二ツ置いて行く）

とき子　ではきつと十年後まで待ちませう。うん、きつと待つてゐようと二人は堅く約束いたしました。若い元氣のいゝ法學士さんにはこんな嘘は罪でもなんでもなかつたのでございますね。（間）わたくしはその夏はさみしい暑中休暇を田舍の方で兄弟とすごしました。秋になつて、それも十月でございました。碁四郎さんが結婚なさると云ふ事がわたくしの耳へ入りました。（やゝ間）奥さまの御名もその時伺ひました。嘘だ、そんな事はないとおもひましたが、氣になりまして……約束を破つて手紙を出しました。（その時の心持をおもひうかべるやうすをする）二度も三度も返事がございません。（間）四度目に簡單な返事が參りました。こゝに持つて居ります（ふところから出して置く）どうぞ御覽下さいまし。

禮子　（手に取つて讀む。すこしふるへる）

とき子　……（わざと笑ふ）何もかも昔になつてしまひまして、今のわたくしが考へましても、夢の樣な事でございます。しかしわたくしはその時たまりませんでした。しかし自殺をしようのなんのといふ事は考へませんでした。それですぐ折返して御返事を書きました。それはこの五月に仰有つた通り、十年後二十七にわたくしがたりましたら、きつとお眼に掛りに出ますから、その時はわたくしと結婚出來るだけの御心持でおゐで下さい。今度の奥さまはそれまでの奥さまです。例へ幾人お子が出來ても、わたくしは二十七の五月にはきつとあなたと結婚いたします。どんな卑怯な手段でも、どんなわるい事でもいたします。そしてあなたと結婚いたします。（やゝ間）血迷つた十七の娘が、思ひ込んで、氣が狂つたやうなさう云ふ手紙を書きました。そのときは……奥樣！　あなたをどうにかすると殺しかねない決心でございましたのでございますねえ。（笑ふ）をかしな事でございました。

禮子　それからどう遊ばして。

とき子　それからやがて煩ひつきました。前から肋膜が弱うございましたし、肺尖もすこしわるうございました。まあ碁四郎さんはその爲にわたくしを捨てゝおしまひになつたのかとも考へて居りました。（間）そのわたくしの病氣が再發いたしました。熱の高いときは、うはことなど申しましたので、父母も氣がつきましたと見えまして、丁度親戚の——從兄になつて居ります人が福岡大學の病院に居りますので、ぶら〳〵よくなりました翌る年

の夏から、福岡へやられました。十八の病み上りの娘が、十七の失戀した娘の通りのかなしみに衰へた心で、福岡の郊外に病餘を養つて居りましたわけでございます。(間) 十八の娘は十九になり二十になり、健康が再び戻つて參りました。しかしやはり心は病氣以前の通りで、病氣の爲にかへつて中へ塗り込まれてしまひまして、外の變化はすこしも悲しみを直しては吳れませんでした。(長き間) わたくしは東京へ歸つて參つたのが二十二の春でございました。だん／＼月日が經ちまして陰氣な娘が、たうとう今のやうな老孃(オールドミス)になつてしまひました。(微笑) 昨年、福岡の從兄の家内が亡くなりましたので、親戚中で便利な女になつてゐる――雇人よりは安心が出來るといふほどのわけで、わたくしがそつちへ呼ばれて參りました。十年待ちぬいてゐた二十七の五月を福岡で迎へました。十八の時にゐた福岡で……(間) 今年の正月から毎日、わたくしは胸さわぎのした日をくらして居りました――その日が今日だつたのでございます。

禮子　では、十年間、やはりその時の心持でおゐでになつたでせうか。

とき子　はい、(間) だん／＼年が經つと、基四郎さんの御仕打がはつきりわかつて、二十七日まで待つてゐて、その時が來てわたしがたづねて伺つたにしても一度死んだ愛がよみがへる筈はないと存じて居りましたが……まあ、ありやうは意地とでも申すのでございませうか。とにかく十年も苦しんで來た姿を、もう一度お眼にかけて、昔の事をおもひ出して頂からうとさうおもひました。

禮子　主人がこゝに居りましたら、どう云ふ風をするとおおもひになりまして？

とき子　つめたい、取付く島もない御樣子や、笑ひはぐらかさうとなさる御樣子や、なにか質(たち)のよくない事を願ひに出る商人などを叱るやうな御言葉つきで、あたまごなしに追ひ返さうとなさる御樣子まで考へて見ましたが、……どのみちわたくしにとつてよい事があらうとは存じませんでした。しかしかうして胸を轟かせて十年待つてゐたそのころの少女のふけた姿をお眼にかければかあいさうだぐらゐはきつと感じて頂けると存じました。(泣く) その、かあいさうな女だと思つて頂かうために十年も待つてゐたのでございますね。

禮子　(涙をこぼす) さうして辛い御氣持であなたがかうしてたづねておいでになると、主人は三年も前に死んでゐたわけなのでございますね。

とき子　三年前と申せばわたくしは東京に居りましたが、もうお噂をきかせてくれるひとなどは誰も居りませんでした。誰があなた、十七の年に、熱を出して云つたうは

ことと同じ事を、この年月考へてゐるとおもひますでせう？（わざと笑ふ）一昨々日福岡から赤坂へ戻り、とにかくこのお家の前まで參つて見て、もうこゝにゐらつじやらなければお勤め先へたづね、そこでわからなければ古いお知合の存じてゐるのを二三軒たづねるつもりで居りました。こゝまで參つて見ますと中川と云ふ標札が出て居ります。なつかしい昔の御名でございます。何もためらはずに、わたくし御玄關へ立ちました。（手巾を顏に當つ）

禮子　（長い間ののち）あなたの御話を伺つてゐるうちにおもひ出しましたのですが、わたくし共結婚當時にあなたのお噂を幾度か主人や主人のお友達から聞いた樣に存じますわ。主人もきつと心にやましくおもひながら、つらい氣持で折ふしあなたをおもつてゐたにちがひございませんのね。（長い間）形こそちがつて居りますが、主人は二人の妻を持つて居たのでございますね。殊によりますとあなたの方が、わたくしよりも、もつと濃やかに主人と棲んでゐらつしやつたかもわかりません。

とき子　でも、わたくしのは酬いられるものがございません。

禮子　それはわたくしも同じでございますわ。からだの事は別でございますが、主人はわたくしを愛してゐると申すより、わたくしをつかまへてゐよう、自分に隷屬させようとそんな風にばかり考へてゐて、自分ではそれが愛だとおもつてゐたのでございませうね。自然、わたくしがその手からするりと拔けて、別の世界へ勝手に棲んで、そこで勝手に主人との生活を築いて居りましたので……まあつまりわたくしはわたくしで、自由に主人を愛してゐたのでございますね。主人はそんな事をすこしも存じません。丁度、あなたと云ふ方が、遠くで、ひとりで長い月日、主人と夢見てゐる日を今も暮してゐるなどと申すことを、まるで氣のつかない樣に、わたくしの世界にも氣がつきませんでしたの。（微笑）わたくしは主人がきらひではございませんでしたが、主人の手の中へ握られてゐるのはいやでございました。主人はまたさうしなければゐられない人なのですのね。わたしは別に平氣で居りましたの。さう云ふ點では、あなたもわたくしも同じでございますわ。（間）女が本當に男を愛する心持などは、男にはわかりませんのね。（間）女同志でないとねえ。（間）あなたのお話なども、わたくしが女であるためによくお氣持がわかつたのではないでせうか。これが主人でございましたらば……（首をかしげる）どうでございませうねえ。

とき子　さあ！

禮子　して見れば、今日あなたがかうしていらつしつたとき、三年も前に主人が死んでゐたと云ふ事は、御氣の毒のやうで、かへつてその十年間を、一層にがいものにせずにすんだのかも知れませんわ。もしも主人が生きてゐて、そのお氣持がまるでわからなかつたといたしましたら、なんといふむごたらしい事になるでせうか。考へて見るとおそろしいやうでございますね。

とき子　（きつぱりと）でもやつぱりお逢ひしたうございました。

（長い間。）

禮子　でも主人が亡くなりまして、三年かうしてこゝに棲んで居る心持は、十年、若い美しい主人と棲んでゐらつしやつたあなたの御想像のつかない陰氣な侘しいものでございますよ。あなたには十年目と云ふものがおありでした。

とき子　その代り、もう永久になくなつてしまひました。

禮子　でもなまじ主人を知りつくさなかつたあなたの方がどんなにお仕合せでせう。（間）今日は、丁度わたくしが主人の墓參に出る出先なので、ふしぎと申せばふしぎでございますね。

とき子　まあ！

禮子　あなたも御一緒にいらつしやいませんかしら？　もしおいやでなければ。

とき子　ぜひお連れ下さいまし。（間）あのかたの御命日でございますか。

禮子　いえ昨日が命日でございました。雨で一日のばしました。

とき子　御寺を歸りがけに伺つて戻るつもりで居りました。

禮子　靑山の墓地でございますのよ。わかりにくい處で……そして佛參をすませましたらば、またこゝへ御戻りになつて、御晝食でも一緒に頂いて、おいやでなければ、今日はゆる〱なすつていらつしやいましな。

とき子　はい。（間）未亡人が二人できたやうでございますね。（淋しく笑ふ）ではどうぞ……

禮子　（手を鳴らす）

小間使　（登場）お呼びでございましたか。

禮子　えゝ！　このお方と御一緒に出かけるからね、さつきのお花を！

小間使　はい。お俥はどういたしませう。

禮子　もういらないわ。お話ししながら電車で行きますから……

小間使　はい。（退場）

禮子　ふしぎなお墓參りですこと。(微笑) さぞ地の下で驚くことでせう。

小間使　(登場。花を持つてゐる) お花をお玄關へ持つて參つて置きませう。

禮子　あゝ。

小間使　(上手へ去る)

とき子　ではお連れ下さいまし。

禮子　お供いたします。

(二人立つて行きかける。姿が上手に隱れる時、下女が下手から急いで出て來る。)

女中　奧樣! 御電話でございます。

禮子　(また椽側へ姿を現はす) どこから?

女中　あの、小石川のお邸でございます。

禮子　こつちへつないで呉れて!

女中　はい。

禮子　とき子さん。ごめん下さい。すぐ參りますから……

とき子の聲　どうぞ御ゆつくり……

(禮子下手の書齋の卓上電話をとる。)

禮子　(電話に向ひて) もし／＼。はい、禮子です。あら嫂樣? 先日はどうも……(笑ふ) ほんたうにねえ。わたし困つてしまひまして。(笑ふ) えゝゝゝ、(笑ふ) まあ、どうでせう! (笑ふ) えゝ今お墓參りに出ようとして、玄關へ出ました處……(笑ふ) それほどでもございませんの、(間) はい、畏りました。(やゝ長き間) はい、さやうです。兄さまですか。(間) えゝ、客がございましてね、今日はちよいとどうも伺へません (間) あしたではいけません? (間) さうですか。(間) なんですの。此の間の方のことですか。(間) 實は今朝見えましたわ。(間) えゝ、ちよいと門を通つたからと云つて一昨夜の御挨拶にお寄りでしたの。(間) まさかねえ。(笑ひ出す) いやな兄さまねえ、下らない事ばかし。(間) えゝ。實はその事を申上げに出ようと思つて居りましたの。さつきおいでになつたときは、四方山のお話をして、とにかく當分はたゞの御交際ぐらゐにして頂きたいと申上げましたの。(間) えゝ。それで、その時はさうもおもひましたのですがね。まあ、正直に申せば、あの方なら再緣してもよいと存じましたのですわ。(間) 電話で顏が見えませんから。(笑ふ) えゝ! 處が、あの方がお歸りになつたのち、ふとした出來事がありましてね。(間) え? いゝえ、そんな事ではございませんの。わたしの方の出來事でしてね。(間) えゝ。それであの方のお話を、此際きつぱり斷つて頂きたいのですけれど! こちらから兄さんにあとで電話をおかけしようとおもつてゐたところでした。(間) どうつて、

あの方に不足があるわけではございませんの。(間) まあ自分にあぶな氣のなくなるまでは再縁するのは不德義だと存じますから。(間) えゝ、さうおもつてゐましたが、ついした事で、わたしがまだなくなつた中川の事を、生きてゐる人と同じに嫉妬したり……(間) え？ (間) 嫉妬ですの。嫉妬したりね、胸をさわがせたり、なんですか故人の爲にまだすこしは競爭心を持つてゐたり……(間) まあ、妾としてですわ。(間) えゝ、さうなの、それなのに、純粹な心持でわたしを思つてゐて下さる方と再縁するのは、どうもねえ。(間) でも、そのお交際だけと云ふのが、どうしても背景に結婚問題がチラついてゐれば不自然になるもので。(間) いえ、それに時間が一年先か三年先か五年先かわかりませんものね。(間) とにかくいやになりましたから、お斷りして頂きたいの。相變らず我儘を申してすみませんけれど……(間) えゝ。では二三日うちに伺ひます。でも、その前に何にも知らないで、ちよく／＼あの方がたづねてでもいらつしやりはしないでせうか。(間) えゝ。どうぞでは婉曲に……(間、笑ふ) 直截でもいゝのよ。それは兄さんの流儀で結構。(間) はい。畏りました。はいではお嫂さんによろしく。龍ちやんや美保子をよこして下さい。淋しくていけませんから……(間) えゝ。さやうなら。(電話を切る)

(しばらく考へ込んでゐる、ふと夢からさめた樣に、立つて急ぎ足で上手へ行く。)

――幕――

心中の始末（一幕）

人物

宮岡敬子　（二十八歳）
高村嘉太郎　敬子の兄（四十三歳）
大川讓　友人（三十二歳）
同　直子　その妻（二十七歳）
日野鐵三　友人（三十歳）
小山與吉　植木屋の爺（六十三歳）
佐々木くめ　宮岡家の女中（二十一歳）

×

宮岡龍夫　死體となりて出づ
新田春子　おなじく

舞臺

——宮岡龍夫の家。東京の山の手。七間位の住宅。向つて右手に小さき門。門を入りて二三本の若き桐の木の間に外燈の柱など立てり。格子をくゞりて一坪の叩土、土間。上りて三疊——（この内部見えずともよし）三疊を出て廊下、その正面に二階の上り口見ゆ。階段は二三段のぼりて右へ折れゐる樣になりてゐる。（人物昇降する事あり）。廊下を中に挿みて六疊の茶の間。襖にて仕切りて八疊——この二間の前の舞臺端に緣側あり。廻り緣になりて上手奧へ續き、その右側に十疊位の客間あれども見物席より内部見えず。（窓は庭に面し、障子をあけたる時、室内にゐる人物ちよつと見ゆ）二階は六疊に三疊の書齋の心。下の六疊の正面は障子にて、その向うに臺所と下部屋ぢみたる三疊くらゐの室ある心なり。大正十一年二月の午後。

×

幕あく。この家の主人大川讓、廻り緣の角の處にて、白き洗面器にて手を洗ひゐる。女中くめ、下手の茶の間の疊を雜巾にて拭きゐる。バケツは緣側に置きあり。

寒き曇天の光線、陰氣なる舞臺の調子。

大川　（手をふきながら）あゝ、やつと氣持がよくなつた。（つぶやく）まるで、大風のあとのやうだ。
くめ　落ちまして御座いますか。
大川　えゝ、血といふやつは、こびりつくと仲々取れないものだ。（指先を見ながら）やつときれいになつた。
くめ　あとを、アルコホルでお拭き遊ばしたら如何でございます。

大川　なあに。もうさつぱりしました。おくめさん、草臥れたでせう。今朝から働きづめだから。

くめ　いいえ。（何か云はんとしてやめる）

大川　それが濟んだらすこしお休みなさい。

くめ　はい。有難う存じます。

大川　そのうちに奥さんも歸つて來るでせう。どうせ當分忙しいから、ほんとに今のうち、すこし休んで置く方がいゝですよ。

くめ　はい。あの、奥樣どう遊ばしたのでせう。植木屋のおぢいさん、遲うございますこと。

大川　さう！　それより家の奴さん、どうしたんだらう。

くめ　お宅の奥樣は、お買物をなすつておいでになりますからまだでございます。おや……（入口より日野鐵三入つて來る）日野樣のやうでございます。

大川　あゝ、さうだ。日野だ。（玄關の方へ行きかける）早かつたな。

日野　うん。

大川　自動車か。

日野　いや、停車場から車で來た。

くめ　いらつしやいまし。

日野　やあ！　（無器用に）とんだことで。

くめ　（だまつて辭儀し、バケツを持ちて正面の障子より去る）

大川　（長火鉢の側へ座布團敷く）まア坐れよ。（自分も坐る）

日野　（だまつて坐る）……何かい、警察の方はもう濟んだのかい。

大川　うん、たつた今歸つたところだ。醫者だのなんだの、いろんな人でごた／＼してね。

日野　大變だつたな。敬子さんはどうして來ないんだ。

大川　うん、（間）子供でも悪いんぢやないかと思つてゐるんだ。さつき、植木屋の爺さんが迎へに行つた。

日野　あすこまで二時間はたつぷりかゝるなあ。

大川　うん。すぐ出て來れば、晝には來られる筈なんだ。もう三時だらう。

日野　いつからあつちへ行つてゐたんだい。

大川　己もよく知らないが、女中のいふには一昨日ださうだよ。

日野　ふうん。（間）とにかく大變な事が起つたなあ。

大川　うん。

日野　（やゝ間の後）女の家からまだ來ないんだね。

大川　（うなづく）變な家だよ。すぐにでも誰か寄越しさうなもんぢやないか。

日野　（腹立たしげに）さうさ。（間）あの嬢さん、今の

新田の實子ぢやないんだと。
大川　へえ。さうかい。
日野　細君が再嫁して、その連子だとさ。
大川　さうかい。どうも家の奴らが變だとおもつたよ。
日野　死骸は二階かい。
大川　（うなづく）
日野　もう運かしてもいゝのだね。
大川　うん。もうすつかり濟んだ。醫者はうまいね、うまく繃帶するね。
日野　死骸に繃帶するのか。
大川　まだあたゝか味もあつたから……醫者の來たときだね。それに室中血だらけでね。やつと疊を拭いたところだ。
日野　石炭酸の匂ひかい。何か匂ふね。
大川　うん、クレゾールか何か――なんだか手が生ぐさい。
（手の先を嗅ぐ）
日野　一挺のピストルだらう。
大川　うん。先へ女を撃つて、後に自分がやつたのだ。女は畳に倒れてゐた。宮岡は自分の卓の前へ椅子にかけて卓の上に額を押つけて、ピストルを持つた手を前へ投げ出して、左の手をぶら〳〵下げてゐた。（ちよつと形をまねる）

日野　（立ちかけてまた坐る）ふうん……だが、無理心中だとでも思ひはしなかつたらうか。警察で。
大川　いや、大丈夫だ。商賣柄だな、馴れたものだつた。それに思つたより簡單な質問だつたよ。尤も、また何かいつて來るかも知れない。
日野　さう！（間）ちよつと見て來ようか。
大川　うん。不思議だね。女の方は血を流して座敷中一杯に赤くしたが、宮岡は口からすこし血を出してゐたぎり、傷口から顔の半面は血でぬれてゐたが、あとはきれいだつた。
日野　宮岡の足許へ女が倒れてゐたのだね。
大川　あゝ。
日野　（間の後）死ぬ程とは思へなかつたなあ。
大川　己も、二人の死體を見るまではどうしても本當に出來なかつた。
日野　ほかへも知らせたの。
大川　いや、君の處と、細君――敬子さんの出先と、女の家と　―とにかく敬子さんが歸つて來て吳れなくては、親類や何か、どこへ知らせるのかまるで分らないからね。
日野　さうだな。（立ちかけながら）古い友達が段々減るなア。
大川　（やはり立ち乍ら）東京にはお前と己つきりだよ。

日野　うん、さうだ。
（二人、二階にあがつて行く。）
（女中くめ、衣服を斉かへ直して手に茶盆に急須などの茶器をのせて持ち來り、火鉢の猫板の上にのせ、時計を見上げる。）
（玄關の格子あく。くめ、立ちて行く。）
くめ　まあ奧さん！
敬子　（茶の間へ入つて來る、蒼白なふつくりはしてゐるが神經質さうな表情、淋しく落着いてゐる）遲くなつてすみません。（手袋を脫ぎショオルなどとりて渡す）お前さぞ大變だつたらうね。
くめ　えゝ、でも……（泣き出す）
敬子　（だまつてコオトの下前の、膝の處の紐を解く）
くめ　（泣きながらショオルと手袋を上手の座敷の方へ持つて行く）
敬子　（コオトを脫ぐ。うしろよりくめ受取りてこれも隣室の白木の衣桁にかける）
敬子　（火鉢の前に坐りかける）お二階でやつたのだとね。
くめ　はい。
敬子　二階、大川さん、奧さんも……
くめ　いえ、いま日野さんがおいで遊ばして……大川の奧様はお買物なんかいろ〳〵。
敬子　さう！　では。
（立つて二階へ行きかける。）
くめ　坊ちやまは。
敬子　大變いゝの。今朝は七度七分くらゐ。
くめ　それはよろしうございました。……あの、坂下の植木屋、御一緒ではなかつたのでせうか。家へ歸りましたのですか。
敬子　（廊下の方へあるきながら、やゝ高き聲にて）いゝえ、途中で賴信紙を貰ひに郵便局へ寄つて貰つたの。
（二階へあがつて行く）
（下手奧の突當りのヒラキ戸をあけ緣づたひに大川の妻直子、買物の包を持ちて出て來る。）
くめ　あら奧樣！　裏からでしたか。まアびつくりして。
直子　幽靈だと思つて。（小さき聲にて次のセリフを云ひ二階を指す）春子さんの。
くめ　まあいやだ。あんな……
直子　（低く笑ふ）植木屋さんと一緒に坂の處から來たのよ。賴信紙はわたしも貰つて來たのに、お爺さんも敬子さんにいはれて——合せて十五枚あるから、もう一度ぐらゐこんな事が起つても足りるわ。おくめさん、やらない？
くめ　何をでございます。

直子　（苦笑）　なあにね。頼信紙がどつさりあるから、お前さんが心中した時にもこれだけで足りるといふのよ。
くめ　まあ、あんな。（笑ひ出す）　あんな事ばつかし仰有つて、おゝゝゝ。
直子　（苦笑）　皆さんお二階？
くめ　はい。
直子　（風呂敷包を解きながら）　今朝から甘い物をちつともたべないで……壺屋で買つて來たわ。器に入れて頂戴な。
くめ　はい。（見物にうしろ向きにて茶箪笥の前にてその通りになす）
直子　敬子さん、どんな樣子をなすつて。
くめ　（うしろ向きのまゝ）　奥樣でございますか。
直子　えゝ、（間）　泣いてゐらしつた。
くめ　いゝえ。ちつとも。落着いておゐでなさいました。玄關へお入りになつたとき、わたくしの顔を見て、だまつて、さびしさうにお笑ひになりました。（間）　わたくしの方で、つい……お氣の毒で……
直子　（切込むやうに）　泣いたの。
くめ　（泣き笑ひなしながら）　おゝゝ、はい。
直子　（急須の中へ湯をつぎながら。だまりこむ）
くめ　旦那樣もいゝ方でございましたが……

直子　（急にうるみ聲で、然し元氣に）　武ちやん、熱はどうだつて。
くめ　はい、よいあんばいに下つたさうでございます。
（やゝ長き沈默。）
直子　（思ひ出したるやうに）　お爺さん！　お爺さん！
與吉　（障子の向うにて）　へい。
直子　ちよつといらつしやい。お茶をおあがんなさい。（おくめに）　あなたも喰べないこと、うまさうだわ。
くめ　頂きます。どうも恐れ入ります。
（障子より小山與吉出づ。白毛の老爺、印半纏を着てゐる。）
與吉　（閾際で）　どうもご馳走さまで。
直子　くたびれたでせう。もつとこつちへいらつしやい。はい、お茶。
與吉　どうも恐れ入ります。
直子　あなたは甘いものは御宗旨ちがひでせう。まアおつき合ひにね。
與吉　（錆びた朗かな調子）　なアに、わたくしは兩方で……八宗兼學で。
直子　（笑ふ）　それならもうひとつ。
與吉　いえ、もう澤山で……（おくめに）　これはおくめさん。

くめ　おぢいさん、おあがんなさいよ。
與吉　もうこれで十分。なんですかい、二階お客樣ですか。
くめ　えゝ、日野さんて、古いお友達の方、（間）ほんとに、おぢいさんが來て呉れて助かつたわ。わたし、どうしようかと思つたわ。（身ぶるひなす）こはくてもうお二階へ行かれないわ夜になつたらどうしませう。
直子　ほんとにびつくりしたでせうね。うちへ來たときの顏つちや無かつた。
與吉　無理もありませんや。年のいかない娘ッ子が血みどろの死人を二ッと見たんではね。何しても大變な事になつて。（間）あのお孃さん、根つからお若いね。いくつだらう。
くめ　廿二だとかつて。
與吉　へえ、ね。旦那樣は三十……四五だね。
くめ　三十三よ。
與吉　お二人ともナラビか。だが、どうしてまあ、女房子のある人になんか……惡緣だね。きれいな方だつたが、あたしも二三度こちらで見たよ。
くめ　夜、いつか、そらお正月さ。お送りして行つた事があつたぢやないの。
與吉　さう〳〵。一昨年だよ。あの頃からかね。
くめ　いゝえ。（直子の顏を見ろ）あの頃はなんでもなかつた。
直子　いつ頃からなの。おくめさん、知つてゐて。
くめ　（輕い狼狽）よくは存じませんけれど……去年の夏ごろぢやないでせうか。
直子　敬子さんか何か話した。
くめ　いゝえ、奧樣は御存じない事とばつかり思つてゐました。でも、さつきの御樣子で見ると、何もかも心得てゐたといふ風で……この位の事も起るだらうと思つてゐたといふ御樣子で。
直子　えらいわね。とてもわたしなんぞ。
くめ　えらいよりもお可哀想でなりません。
與吉　お前さん、何年になるね、このお邸。
くめ　こちらへですか。十六でした。坊ちやんのお守に上つたんだから。（指を繰つて）六年目よ。
與吉　六年か。初奉公で六年續くとなれば、奧樣びゐきになつてゐるのも仕方がねえ。ね。
くめ　（直子に）あの、新聞へ出るでございませうね。
直子　えゝ。それにお勤め先の關係もあるし、御商賣柄うるさいでせうよ。
與吉　それにあのお孃樣のお家が、あんなに良いお家ぢやね。寫眞なんぞも出ますぜ。
くめ　困つたわね。田舍にも知れてしまふわ。

直子　それやね。（間——笑顔で）お嫁人の邪魔になつて。

くめ（赤くなつて）あら、また奥樣、あんなこと。

直子　當つたでせう。あかくなつたわ。

與吉（笑ひながら）赤くなるうちが花さね。

直子　赤くなつても、お二階のやうに眞赤なのはごめんよ。

（ふと口をつぐむ。そして陰氣になる）おゝ寒い。

（三人沈默。直子炭をつぐ。）

（二階より前の三人、何か話しながら下りて來る。大川、日野、敬子の順。）

與吉（ふり向いて）おゝ、降りていらつしやつた。（茶なのみ切り、茶碗を伏せる）どうも御馳走樣でした。

直子　いゝえ。まだ歸りやしないわね。

與吉　えゝ、えゝ、今晩はずつと居ります

（與吉、くめ、障子より去る。）

直子　まあ日野さん！

日野　やあ、しばらく。

直子　敬子さん！

敬子　……直子さん、どうもいろ〳〵。濟みません。（直子の眼を見ぬやうにしながら）日野さん、大川さん、まあお茶でもあがつて。（自分にて茶の間へ二つ座布團を敷く）

（二人ぼんやり坐る。）

敬子（直子に）本當にすみません、御迷惑をかけて。それに遲くなつて。

直子　遲かつたのね、どうして。

敬子（客の茶を汲みながら）えゝ。（間）すぐにも來られたのですけれど……自信がつかなくて。

直子　え？

敬子　途中がね。（間）途中はとにかく、こつちへ來てね。（間）それでわざとゆりつくしてゐました。どうせもう息が切れてゐるといふし、御めいわくは十分お察ししてゐましたが、あわてゝわたしが歸つて來たゝめに、もう一層、御面倒をかけでもするとね……

直子（よく判らずに）本當に、それもさうだわ。途中で倒れでもすると……

敬子（微笑）えゝ、ほんとに……

（二人の男に茶を勸む。）

日野　あなたを一番心配してゐたが。安心した。（大川に）なあ！

大川　うむ。（間）さうさな、だが、これからだよ。

日野　さうだ、これからだ。

敬子　本當にこれからですよ。（ゆつくりした調子で）死にかけてゐるのなら、飛んで歸つて來ましたが、全く駄目だとなれば、もうこれから後だとおもひましたので。

兄の處へ電話をかけるのもあとにして、あすこの家の者にもよくいはないで、一人で二時間ばかり離れで横になつてゐました。

直子　横に……？　寢てゐたんですか。

敬子　いえ、眠りはしませんが……

直子　えゝ、それはさうですけれども、（考へ込む）よくねえ。

敬子　寢たのだか、倒れたのか、（淋しく笑ふ）でも押入から自分で搔卷を出したりしたから、やつぱり寢たのね。ほゝゝ。

（長き沈默。）

直子　賴信紙あつてよ。打つんでせう。

大川　うむ。（敬子に）どうします、急いで呼ぶ人たちのところ——兄さんが來てからにしますか。

敬子　えゝ、さう致しませう。わかつてはゐますが……

（考へて）病氣ではなし、兄の意見もありませうし、（間）主人の方の親戚とは、まるでおつき合ひをしてゐないし。それも、兄が來ましてからに……靑木さんや鄕さんなどはいゝでせうか。

日野　いや、知らせませう。靑木は來るかも知れん。（直子賴信紙を出す）やア、有難う。

大川　萬年筆持つてゐるか。

日野　いや。

敬子　こゝにあります。ちよつと直子さん、はゞかりさま、その茶簞笥の抽出。

直子　（探す）こつち？

敬子　えゝ。その雜記帳の間に挿んで……えゝ、どうもありがたう。

（受取りて日野に渡す。）

（日野チャブ臺の上にて書く。）

日野　鄕は會社宛がいゝね。

大川　うん。どうせ社宅だから。

日野　（書きながら）北海道はどうしよう。

大川　手紙だと怒るぜ。やつぱり電報がいゝな。さぞ驚くだらう。

直子　（風呂敷包みをあけながら）思ひついただけ買つて來たわ。

敬子　まあ、どうも。それはなに。

直子　墨汁よ。無いでせう。

敬子　えゝ、無いゝ！　だけれどもどうするの。

直子　何か葬式の日の掲示だの、それに知らせにペンでいけない向もあると思つて。

敬子　なるほど。ハガキ、幾枚。

直子　三百枚——印刷屋へハガキを持つて行く方が早いつ

て。閉き封でなくつていゝつて、うちがいふので。
敬子　えゝ、えゝ！　もちろん。
直子　まだ〳〵澤山いるものがあるけれどね。
敬子　まあ、いろ〳〵、ありがたう。
日野　二階あれでは足も踏込めないね。疊もまだぬれてゐるし。
大川　うん。
日野　敬子さん、からだを、あつちへ移さなくてはなりますまいね。（上手を指す）
敬子　左樣ですねえ。
大川　さうだよ、無論さうだ！　人でも來るとても二階へは通せない。
日野　ひとつおろさうぢやないか。
敬子　さう願へますと……
日野　あつちは十疊と、もう一間との間は襖ですね。外せますね。
敬子　えゝ。（間）お通夜などはどうしてもあちらでなくては。
大川　今のうちにおろさう。（直子に）植木屋、呼んでくれ。上着を脱ぐ）
直子　はい。（立ちて行く）
敬子　すみません。

日野　なアに。（上着を脱ぐ）もう血はつきはしまいなア。
大川　どうだかわからないぞ。大丈夫だとおもふが。
日野　三人で抱きおろすならわけはない。（間）あゝ、おれはキリストを十字架からおろしてゐる畫をおもひ出した。
大川　（暗い顏）おれも今さう云はうと思つたところだ。（間）一種のキリストだな。
日野　さうだとも。（間）さあ、やらう。
（直子のあとより與吉出づ。）
大川　（與吉に）すまないが、手を貸して下さいな。いやな役で氣の毒だ。
與吉　なアに。どう仕りまして。
敬子　おぢいさん、いろ〳〵すみません。
與吉　おゝ、奧樣……まあ御挨拶はあとにいたして。ではちよつと。
敬子　どうぞよろしく。あの、二階の押入に夜具が入つて居りますが、あの、敷蒲團へそつとのせておろしましたら、どうでございませうね。
日野　蒲團がよごれますぜ。
敬子　かまひません。主人のでございますから……却つて。
大川　さう。さうしよう。
與吉　荒菰があるといゝんだがな。

敬子　蒲團にして下さいまし。(間) 茣蓙へ寢かすのが本當ださうですが……寒さうで。(笑ふ) 汚れましてもかまひません。

(三人、二階へ行く。)

敬子　(ついて行かうとしてやめる) お手傳ひしないですみません。

大川　いえ、かへつて、その方がよろしい。

(敬子、茶の間へ戻る。)

直子　(ぢつと敬子を見てゐる)

敬子　(さみしい微笑をする)

直子　お察ししますわ。

敬子　(無言――やがて) 敗軍の將兵を語らず、よ。

直子　まあ敬子さん、あなた平氣なの？

敬子　平氣であるわけがありません。ですけれどもね、かうするより仕方がありませんの。十年も一緒にゐたひとが、よそのお孃さんとつれ立つて長い旅に出てしまふ――追駈けて行くか、かうしてゐるか、どつちかですわ。

直子　武ちやんがね、可哀想で……(泣き出す) それで、あたし。

敬子　(泣かない) あの子さへなければ……だけれども、わたしの方が、あの子より可哀想だわ、まあ、いゝわ。(間) これからよ、これからやり直しだ。

直子　本當に氣を落しては駄目よ。しつかりしてゐて下さいよ。

敬子　えゝ……だけれど大丈夫かしら。

直子　なにが、(間) そんな事を云つては心細いわ。

敬子　(なにか追ひのけるやうな仕草をする) いえ大丈夫しつかりしてゐるわ。

(二階にて何か云ふ聲きこゆ。)

敬子　(階段の下まで行く) 大丈夫ですか。

大川の聲　大丈夫！　よし來た。

與吉の聲　旦那……こつち、さうさう。

大川の聲　重いぞ。

(三人にて毛布の上に死骸をのせ持ちて階段より下り來る。日野は頭を大川は足を。與吉は胴を持ちゐる。階段を降り、緣側へ出、廻りて上手へ行く。敬子先へ行き、障子など開ける。)

(死骸の腕はだらりとさがりゐる。)

(上手の窓の障子の中に、敬子等のうごく姿見ゆ。)

(舞臺には直子一人、緣側よりのぞきゐる。くめ、障子より顏を出す。眼を泣きはらしてゐる。)

くめ　旦那樣のですね。

直子　(ふりむく) えゝ。

くめ　あんなになつてしまつて。

（沈默――）
（大川、戻つて來る。）
直子　重かつたでせう。
大川　うん。思つたより重い。それで毛布にした。
直子　今度はすこしかるいわ。
大川　どうだかわからん。死骸といふものは意外に重いから。
日野　（出て來る。手を出して見せろ）やつぱりつく。
大川　うん。にじんでゐたから。
（與吉、出て來る。毛布を持つてゐる。）
大川　では、もうひとつ。
與吉　へえ！
（三人またあがつて行く。）
くめ　今度はお孃さんでございますわね。
直子　えゝ、さう。（間）その次は誰！
くめ　（驚いて）まあ、いやな。また。
直子　（苦笑）わたしよ。わたしの番！
くめ　まア奥さん。（ちよつと笑ふ）
直子　うそよ。
（敬子、沈み切りたる表情にて上手の部屋より出て來る。髮の毛すこし落ちゐる。くめ引込む。）
敬子　やつぱし蒲團の上へのせて貰ひましたの。（きはめて微かなる笑）年寄が來て、なんていひますか。
（二階より再び死骸をおろして來る。與吉、足のかたを持ち、日野胴を持つ。このたびは、顏をすこし見物に見えるやうになす。外國風の髮、魂無き白き頬、白き唇、鼻高く、肉付よき顏。赤きものも交れる華美なる衣服の袖みゆ。裾の方はまつたく毛布に包まれゐる）
（皆々、無言にて線を通り、上手へ行きかける。）
敬子　（突然）あゝ、ちよつと。
日野　（振り向く）え？
（三人とまる。）
敬子　（やゝ口早に）あの、その方のも、あすこへ並べますのでせうか。
日野　えゝ、でなくては……（三人そこへ死骸を置く）どこへやります。
敬子　あの、わたくし、その方に歸つて頂かうと思ひます。
日野　えゝ、歸つて。この人にですか。（死骸を指す）どう？
敬子　こゝはわたくしの家ですから。（神經的に口許をやはらぐ）もう、歸つて頂かうとおもひます。
大川　歸すつてどうするんです。
敬子　この家から外へ――外へ出て頂きたいのですの。
（沈默。）

日野　（不審さうに）死骸を――この春子さんの死骸を、外へ出すんですか。
敬子　えゝ、誠に恐れ入りますが……
大川　それやあいけませんよ。敬子さん！
敬子　（大川をしづかに見る）
大川　あなたの心持はお察ししますがね、ゆるして上げて下さい、もう死んでゐるのですから。
敬子　（うなだれる）
大川　死んでゐるのだから。（間）死骸を恥しめてはいけない。
敬子　いえ、わたしはさういふつもりで申してゐるのではございません。（間）主人の生きて居りますうちは、この方がいつまで遊んでおゐでになつても、それは仕方がございません。（間）また主人とどう云ふ事がありませうとも、まあ、わたくしは氣のつかない風をいたしてをるより仕方ございませんでした。然し、主人が亡くなりませば、もうわたくしの家でございますから、絶交をして頂くのです。
日野　（作りたる笑）絶交つて、死んでしまつてゐるぢやアないのですか。
敬子　どちらでも同じでございますわ。わたくしには、まだ生きてゐらつしやるのです。
日野　では宮岡もまだ生きてゐるのだ。だから、あなたは……
敬子　いえ、宮岡は今朝、亡くなりました。あの二階で……。（間）もう冷たい死骸になつて居ります。いま、わたくしは、あの死人の手をとつてわたくしの頬にぢッとあてゝ見ました。（長い間）氷のやうでございました。（間）主人はたしかに亡くなりました。
（やゝ長き沈默。）
大川　ねえ、敬子さん、ですがね、もうぢきに向うの家の人が來る。さうすれば、當然、これを持つて行きます。ですからそれまであすこへ置いてあげて下さい。
敬子　主人の死體とならべてですか。
日野　離してもいゝですよ。
敬子　いえ、わたくし、ほんとうに我儘を申して申譯ございませんけれど、どうぞこれはこの屋根の下から出して下さいまし。お願ひなのですから。
日野　困るなあ、奥さん！
敬子　本當にすみません。
日野　格子の外へ出すなんて、出來ないなア。
大川　うん。いけない。ねえ敬子さん、向うの家の人が來たときに一緒に死んだ二人の死骸の扱ひに、甲乙をつけたと取られると、あなたが同情を失ふ。第一死者へ對し

ての禮儀でありません。
敬子　わたくしはこの死者には禮儀を持ちません。わたくしは生きてゐるのです。この方も生きておゐでの時、わたくしへの禮儀をお缺ぎになつてゐました。その時は主人の影にかくれてゐらつしやいましたので……。わたくしの良人の影に、このかたが……わたくし、死骸の扱ひに甲乙をつけずに居られません。
日野　でもね、あなたばかりぢやない。かうして我々がゐるのに。ねえ、われ〳〵の立場も考へて見て下さい。そして、考へ直して下さい。
敬子　皆さんにはお氣の毒に存じますの。でもよく考へて頂けば、皆さんだつて主人の親友でこそあれ、このお孃さんの御親友ではないのですから。早く申せばわたくしと、この方との間に起りかけてゐる爭ひには、――友人の女房の方へ加勢して下さるはうが……(冷笑にちかき微笑)
本當ではないのでせうか。
日野　でも、死んでしまへば一列一帶です。そんな、外へ死骸を出すなんて……そんな事はいけませんよ。
大川　それに敬子さん、新聞社からもどうせ人が來るから、もしそんなあなたの態度が、ぱツと世間へ知れると、あなたは同情を失ふばかりぢやない、いやな誤解を招きますよ。
敬子　それは覺悟して居ります。
日野　(やゝ間の後)そんなに感情に馳つてゐるべき場合ではありませんぜ。あなたは今、頭が混亂してゐるから――それは實に我々としても何と云つてあなたを慰めていゝかわからないくらゐの事件だけれどもね。しかしよく落ついて、ねえ、もう一度考へ直して見て下さい。
敬子　感情に馳つてゐるのでせうか。(間)また、こんな事をされても、感情を押へてゐなくてはいけないのでせうか。わたしはずゐぶん……(あぶなく泣きかける、しかし泣かぬ)押へてゐるつもりです。それに、これは感情問題ではございません。
日野　いえ、さうではない。(間)無理はないが。
大川　ふだんのあなたではないよ。
敬子　ふだんのわたしなんぞ。(微笑)そんなものはなにもなりません。
大川　とにかく、先方が來るまで、あすこへ置いときませう、ね。
敬子　(沈默)
日野　玄關でもいゝ。玄關の疊の上へ……(やはらかに)とにかく斷じて外はいけない。
與吉　(直子にそつと)わたくし、ひとつぱしり行つて來ませうか。

直子　（やはり小聲で）どこへ？
與吉　このお孃さんのお邸へです。
直子　さうね。（大川に）あなた、どうしませう。
大川　なに？
直子　植木屋さん、新田さんの處まで行つて見ようかといふのです。誰か早く來るやうに。
大川　（日野に）どうしよう。
日野　（考へて）うむ。（間）だがもう來るだらう。（敬子に）この春子といふ人はね、奥さん、今の新田の主人の子ではないのです。
敬子　（うなづく）存じて居りました。
日野　割合に可哀想なさびしい娘なんですよ。
敬子　でも、わたくしは同情いたさないでも……わたくしがこの方に。
（玄關あく。）
日野　おゝ、誰か來たな。
大川　新田かな。
（敬子、行きかける。くめ、障子をいそぎあけ、玄關へ出迎へに行く。與吉去る。）
敬子　（もとにかへりて）兄です。
大川　いゝ處へ來た。
（高村嘉太郎、やり手らしき紳士、やゝ亢奮せる樣子、モオニングを着てゐる。）
高村　やあ、どうも、皆さん、遲くなつて申譯御座んせん。どうしてもぬけられないで。（妹に）やあ。（大川に）やあしばらく。（日野に）いろ〳〵どうも、此度は。（すこしどもりて）ど、どう云ふんでせうな。（死骸を見る）この方ですね。（間）皆さん、立つてゐて、どうなすつたのです。
（敬子、高村に座蒲團を勸む）
日野　（坐りながら）なあにね、今二階からこれを下したんです。
高村　はあ、なるほど。
大川　（やはり坐り乍ら）
高村　なるほど。二、二階でやつたんですな。
日野　えゝ。それであつちの座敷へ移すとこなんです。宮岡君の方はもう移したのですがね。これをね。
高村　はあ。それはどうもいろ〳〵――
敬子　いえね。兄さん。わたくしが今皆さんにお願ひしてゐたところなのですがね、この方のからだですが、これを格子の外へ出して頂かうと思つて。
高村　外へ。なぜ、どうして。
敬子　どうしてつて。（間）わたし、こゝへ、この家の中へ置くのがいやなんです。

高村　（破裂したやうに）馬鹿ッ。

（皆びくりとする。敬子冷然としてゐる。）

高村　そんな、そんな馬鹿げた事が出來るか。亭主の死骸は座敷へ置いて、その色女だからつて、死んでしまつたものにそんな侮辱が加へられるか。考へろ。馬鹿野郎だなあ。（すこし言葉を愼しんで、やさしくなる）そ、そんな事だから貧乏書生時代から十年も連れ添つて、子まで生んだ大事な男を、よその孃さんに寢取られるんだ。斷然、そんな事はならない。

直子　（結果を氣づかひながら）敬子さんは亢奮してゐらつしやつたのですから……ねえ、敬子さん！

敬子　（さみしき微笑）

高村　さうです。亢奮してゐるんです。間ちがつた事を云つちやいかん。では、ひとつ（他の二人に）お手を藉して頂いて、緣側へ轉がしても置けません。どうか恐入りますが……

（高村立ちて死骸に近づく。）

（日野、大川も立ちかける。）

敬子　（鋭く）兄さん！

高村　（ふり向く）

敬子　やつぱり座敷へ持つて行くんですか。

高村　（やさしく）お前はいゝ。わかつてゐる。それより落着いてゐろ。えゝ？　皆さんにやつて頂いて、靜かに休ませて頂け。

敬子　いえ、休む事はさんざ休みました。でもその死骸を座敷へ置くことはおことわりします。わたくしはいやです。

高村　いやだと。

直子　まア、敬子さん！　（はら〳〵する）男の方たちに任して置きませうよ。

敬子　（しづかに）ありがたう。心配しないで頂戴。（兄に）えゝ。いやです。

高村　どうしても外へはふり出すといふのか。

敬子　えゝ。

高村　（苦笑）馬鹿を云へ、常識をなくしてはいかんよ。

敬子　（さびしく）常識では自分のつれあひの心中の始末を女はどうすればいゝ事になつてゐるのです。敎へて下さい。

高村　まあいゝ。坐つてゐろ。皆さん、おやァちよつと。

（三人死骸に手をかける。）

敬子　（叫ぶ）いけません。（死骸に近よる）どうかよして下さい。

高村　なんだ。（間）なんて云ふ眼附だ。（やさしく）まあ、兄さんがたのむから……そんな無理は云はないで

呉れ、な。

敬子　（かぶりをふる）兄さんこそ。そんな事を仰有らないで、どうぞお願ひですから。（やうやく自分を抑へてゐる）どうぞ……この上、わたしをしくじらせないで下さい。この上わたし、わたしに滅茶苦茶をやらせないで下さい。子供もあるのです。兄さん……（聲はふるへてゐる。しかし泣かず）皆さん、この通りお願ひいたしますから、わたくしのいふ事を通させて下さい。

高村　（やゝ間の後）だけれど敬子！　よく考へて御覧。そんな事は、ほんの僅かな鬱憤を晴らすだけの事ぢやないか。我慢しろ。えゝ。そんな事をしたつて、もうどうにもなりやしないのだから。

敬子　兄さんにはつまらない事でせうけれども、わたくしにはさうではないのです。どうにもならなかつたのは、今までだつたのです。今までこそ。……わたくしがこんな事で我を張るのは、ほかの人には、はしたない詰まらない事でせうけれど――。殊に殿方にわかつて頂かうともおもひません。（眞劍に）直子さん、あなた、考へて見て下さい。

直子　（動搖する心を色にいだす）

敬子　男の方には、たゞわたくしの嫉妬が屍に恥を與へるのだくらゐにしかお思ひになれないのです。こんな事があつてもわたくしたちには、今までこそどうにもならなかつたのです。（間）死んでまで二人の骸が同じ家に、同じ部屋に置かれてあるのを長く一緒にくらした妻が、見てゐられるか、ゐられないか……（泣きたいのを必死にこらへて）どうかわたしの無理を通させて下さい。

大川　困つたなあ。

日野　ぢやあ、かうしよう。もうすこしこのまゝにして置かう。（高村に）ねえ、高村さん、いゝでせう。そして我々もすこし考へて見よう、敬子さんも考へて見て下さい。

高村　うん、それがいゝ。

日野　まつたく考へて見なくてはならない。敬子さん、もうすこし、こゝへ置いて下さい。いゝでせう。

敬子　（うなづく）でも、わたくしは考へ直さないと思つてゐて下さらないと。

高村　それではお前……

日野　（高村をとめる）まア高村さん！　（敬子に）それでよろしい。わたし共が考へ直して、あなたの主張を喜んで入れるかも知れない。わたし共の考へが囚はれてゐるのかも知れないから……

高村　そんな事は無い。

大川　まア。それでいゝでせう。

（一座沈默。敬子堪へられぬやうに椽を踏み上手の部屋へ去る。）

日野　（氣の毒げに見送り乍ら）もうぢき日が暮れる。（時計を見て）僕は、自宅と、序に新田の處へも催促して見よう。

高村　あアさうして下さい。恐縮です。

大川　電話は僕のうちの隣のをつかへよ。（直子に）お前一緒に行つてたのめ！

日野　なに、自働電話でいゝ。

直子　自働電話は遠いのですよ、通りまで行かなくては。どうせわたし、一度自宅へ戻らなくてはならないから。（大川に）あなたも出直して――お召物でも替へて下さい。

大川　うん、さうしよう。今のうちに一寸。（高村に）今朝、あわてゝ飛んで來たぎりで。

高村　（氣の毒げに）いや、まつたくどうも、申譯ありません。

日野　ぢやア一寸行つて來ます。

直子　お供しませう。（高村に）では、すぐ出直して參りますから……

高村　何分どうぞ。敬子があんなですから……

大川　（高村に）すぐ來ます。それまで何か大體の事、敬子さんと相談して置いて下さい。

高村　有難う。どうぞ何分よろしく願ひます。（男二人は表の方へ行く。）

直子　わたし、裏から出ますから。

大川　うん。

（三人とも去る。）

（高村、あたりを見廻して、長火鉢の前へ窮屈さうにあぐらをかく。）

くめ　（障子より出づ）……あら、お湯を沸かしてあるのにお二人とも手もお洗ひ遊ばさないで。

高村　（いたはるやうに）君、今朝は驚いたらう。

くめ　（坐る）はい、まつたくどうも。

高村　當分ごたごたするから、たのむぜ。奥さんは何と云つてもへこたれてしまつてゐるからな。君、ひとつしつかりしてゐて呉れなあ。

くめ　はい。（涙ぐむ）

（――上手の部屋より、敬子出づ。前よりもつと眞青になりゐる。）

敬子　（云ひ淀みながら）兄さん！

高村　なんだ。（間）お前すこし休んでゐたらどうだえ。

敬子　（それには答へずに、やゝ口早に）この死骸を、主人のそばへ置いて上げて下さい。

高村　（安心したやうに）おゝ、考へ直したか。

敬子　（地の底へ引き入れらるゝ如き淋しさあり）……わたしは自分の立場がまるでわからなくなりました。（長き間）今あすこで、主人のさみしい死顔を見ながら考へてゐましたらば、なんですか一切がわかりかけて來たのです。わたしが、この方を外に出す權利を持つてゐるのやら、どうやら。（間）主人のあのさみしさうな死顔が、わたしに最後の命令をしたのでせう。（長き間を置く）主人は、この方無しであのさびしい長い旅はとても出來ますまい。ふだんから人一倍ものをさびしがる性質の方でした。（間）今のわたしにはかうした死骸の始末より、これから先、子供と二人どうやつて暮して行かうかといふ事の方が大問題なのでした。子供とどうやつて折合つて行くかと申す方が本當かも知れません。

（沈黙。）

高村　（夢からさめたやうに）とにかくいゝ、大變にいゝ。ぢやアすぐ移さう。（くめに）おい植木屋の爺さんを呼んで呉れ。

くめ　はい。（去る）

高村　まあ何でもみんな諦めちまへ、なあ。氣を落す事はなんにもないぞ。

敬子　（やゝさげすみたる微笑）えゝ！

（與吉、くめ出づ。）

與吉　では旦那ひとつ。

高村　おゝ、やつて呉れたまへ。

くめ　お二人でようございますか。なんならわたくし……

高村　なにいゝ、いゝ、二人で澤山だ。

與吉　澤山だ。旦那と二人で。

（高村、頭の方を持ち、與吉足の方を持ち上手へ行く。）

（敬子、それを見ぬやうに、崩れるやうに火鉢の前に坐る。）

（入口の格子あく音する。くめそちらへ行く。敬子、込み上げて來る悲しみのために、初めてはげしく嗚咽す。）

くめ　（くめ、戻り來る。）

奥樣！

敬子　（泣きゐる）

くめ　あの、奥樣！

敬子　（見物にや、背を向くるやうにかすれた聲にて）なアに！

くめ　新聞社の方がお二人いらつしやいました。（名刺を渡す）

敬子　（名刺を受取りて、それは見ずに）お通しおし。

くめ　はい。あの、どちらへ？

敬子　（隣の室を指す）

くめ　（茶の間との仕切の襖を閉ぢ、玄關の方へ行く）

敬子　（蹌踉として立ち、見物に顔をかくすやうに袖口にて眼を押へながら、緣側に面したるその部屋の障子を閉づ。これにて舞臺まつたく人影見えずなる）

×

（――やゝ間を置き、音立てぬやうに幕を閉づ。）

附記――萬一この戲曲が上演される事があつたなら、その時の舞臺監督は、作中に現れる二箇の死體を、作り物でなく矢張り役者にやらせさせて呉れなくてはなるまい。かうしたことは、たゞ幼稚な寫實癖であるとして往々郤けられてゐる。が、しかし輕いふはふはとした死體なんぞ、考へて見たまへ、たまらないではないか。もしこのいやな役目をつとめる俳優を得られなかつたならばそのときは……わけはない、上演を見合せるだけの事だ。

――作者――

山芋秘譚（一幕）

人物

毛利照雄（三十歳）
林　清（廿七歳）
海野きく（廿四歳）
その妹あい（廿一歳）
そのほかにカフェの給仕二人。女給三人。客。學生三人。會社員二人。自動車の運轉手。下宿の女房。

第一幕

山の手の西洋料理店。一月末の夜十一時ごろ。外は雪が降つてゐる。中央に鑄物のストーヴが赤く燒けてゐる。客は會社員甲乙と、學生甲乙丙と、詩人林清の三組である。林のゐるテエブルは上手寄で、そこに女給のおきくが立つて笑ひながら話してゐる。その卓はスクリンと棕梠竹とで、ほかの卓との間を遮つてゐる。下手寄に白い石の酒場臺（スタンド）。そこに給仕松井、富田の二人がゐる。金錢登錄器がある。スタンドの傍の長椅子におきみ、およね、おとくの三人の女給が目白押しに並んでゐる。正面にガラス戸があり、その外は往來である。ガラス戸に Café（カフエ） Whale（ホエイル）と金文字で書いてあるのが裏から見える。正面の高い所に丸い時計がある。

學生甲　ところがあいつ松の二十を持つてゐやがつたのさ。
學生乙　（笑ふ）あいつがかい。
學生丙　なつてゐないぢやないか。
甲　もうあいつとはやらないよ。だが初めはいゝ手だつたのだがな。
乙　（笑ふ）さあ。出かけようか。（女給に）おい、君！
女給おきみ　はい。（立つて來る）
乙　（札を渡す）
おきみ　どうも有難うございます。（傳票を書きながら）えゝと……。
甲　おきみさん。君、此の間武藏野館にゐたね。
おきみ　いつ。
甲　つい此の間さ。仲よさゝうにね。
おきみ　嘘よ。鎌をかけようとおもつて。（笑ふ）お生憎様。春になつてから、まだ一度も行きませんよ。

丙　だから恭さ。ねえ、さうだつたね。
甲　さう〳〵！
おきみ　あんな出鱈目をいつて。（釣錢を取つて來る）サンキユ。でも今度のよくつて。
乙　素敵だせ。
おきみ　さう。見たいわねえ。バレンチノね。
甲　（立ち上りながら）……行きたければあの人と行けばいいさ。
おきみ　知らない。いやな小山さんね。たつた一度行つたきりぢやありませんか。
丙　そんなに赤くなるなよ。
乙　（笑ふ）失敬！
おきみ　左樣なら。ありがたう。（學生たちは出て行く）
　本間さん。覺えてゐらつしやい。
　（笑ひ聲。ガラス戸のあいた時、雪の降つてゐる電車道が見える。明るい軒の電燈が、踏みにじつた往來の雪を照してゐる。おきみ、あとを片付ける。）
會社員甲　近頃の學生は花骨牌などを引くと見えますな。
會社員乙　さうだね。盛んのやうですね。
甲　困つたものですな。しかもかう云ふ場所で勝つた負けたの話を、あたり憚らず話して行くのは聞き苦しいですな。

乙　仕方がないですよ。どうも時勢だからね。
甲　わたし共の親戚にも慶應の生徒が一人居りましてな。どうも女の友達と、いや、大びらに、そのな、手紙のやりとりなぞな。往來なぞを連れ立つてあるき廻る位、平氣でしてな。
乙　はは。
甲　それで親父が小言を申しますとな。福澤先生はなるべく多くの人とわけへだてなく交際つて見聞をひろくしろといふ主義だから、それを實行するのだなど屁理窟を申しましてな。町内の若い衆じみたものなどと、諸方を押しあるきますさうで。
乙　なるほど。
甲　喧嘩は致すしな。いやどうも。
乙　地震以來、一般に人氣がわるくなりましたよ。
甲　さう云へば此の間のやうに大きなのがまたあるでせうな。十五日の……。
乙　あれは驚いたですね。僕の友人に氣象臺に出てゐるのがあるが、それの云ふのに、丹澤山の下の、地下を十里ほど下にですね、大きな岩石があつて、火がその下から吹きつけてゐる。その岩石がその火に吹きとばされるかされないかといふ所が千番に一番のカネ合ひなのださうです。

甲　ヘッ。すると、その大きな岩石の下から火が吹きつけて……。
乙　その岩石が動くのですな。ぐら／＼とね。
甲　それでその度に地震がかう度々あるのでせうな。
乙　さうです。さうです。さうらしいですな。新しくそこに火山が出來るか出來ないかといふ點が興味の中心ですな。
甲　興味の。へえ。（すつかり陰鬱になつてゐる）　なるほどな。
乙　この邊一帶、灰に埋もれて、何千年か後に東京がポンペイのやうに世界の一名物になりますかな。（笑ふ）　われわれがカフエにかうしてゐるまゝ化石したりしてな。（笑ふ）
甲　（すつかり情なくなつてゐる。無理に調子を合せて笑ふ）　へえ。そのな。で、その大岩石は丹澤山の下ですな。
乙　やゝ平の場所だ さうで。
甲　平のな。なるほど。（間）　噴き出しませうかな。
乙　（笑ふ）　さあ。わかりませんな。
甲　はあ。（間）　どうせ噴き出すものなら、早くから、噴き切れて仕舞ふといゝですな。（眞面目に）　そのなんですな。その、切開してしまふわけにはいかないでせうかな。
乙　切開？　あゝ、腫物のやうにですか。
甲　えゝ。その破裂しませんうちに、そつと發掘して、その大岩石をな。
乙　さあ。（笑ひ出す）　どんなもんですかな。一つよくきいときませう。
甲　（まじめに）　どうぞ一つ。とにかく、かういふ風に不安な狀態にありますと、社會一般が荒んで、人間がだんだん墮落しますからな。
乙　左様。なんでもアメリカの地震博士は、此の間の日本の、九月一日のやつは、全世界に何千年目とかに現はれる、地勢の大變化の前驅的地震だと云つてゐるさうですな。つまり、地球に驚くべき變化の來る第一齣だらうと……。
甲　うゝむ。（參る）　なある。
乙　氣分でもおわるいですか。
甲　いや、なに。（間）　その雪が降りましても、やはり地震がありませうか。
乙　どうでせうな。それはあるでせうな。まだ降つてゐるかしら。
甲　（考へ込んでゐる）　さやう。
乙　ぽつ／＼出かけませうか。（女給を呼ぶ）　君、傳票を

呉れたまへ。
およね　はい。(盆を受取る) どうもありがたう。
乙　ぢやあ、先刻のお話は、わたしから專務へよく話して見ますから……何と云ひますか。
甲　へえ。
乙　さう。心配なさらないがいゝです。
甲　さやう。何しろ、相手が丹澤山では。
乙　(間) いや、會社の、先程の事です。
甲　あ、なある。何分どうぞ。
およね　(銚子持つて來る) お待遠樣……。
乙　(チップをやる) では出掛けませうか。
甲　へえ。どうも。(立つ)
およね　左樣なら。(送つて行く) またどうぞ。
乙　さやうなら。
およね　(戸を締める) まだどん／＼降つてゐる。大雪になつたわね。(あとを片付ける)
おとく　あしたの朝は電車がとまるわね。
(ストーヴの中へ石炭を投げ込む。)
(おきく、酒場臺の傍へ行く。)
おきく　松井さん。すまない。ウヰスキ。
松井　おい來た。(讀みかけの雑誌を伏せてウヰスキをつぐ)
おきみ　おきくさん、大分たじ／＼だね。
おきく　(笑ひ乍らうなづき、ウヰスキの盆を持つて林のテエブルの傍へ行く) はい。
林　ありがたう。(間) それで、いつからやめるのですか。
おきく　今月一杯とおもつてゐます。
林　殘念だなあ。
おきく　ありがたいわ、さう云つて下さるのはあなただけよ。でも、いろ／＼考へて見ると、つく／″＼いやになつてね。
林　(うなづく)
おきく　わたし、尼にでもならうかと思つてゐるの。
林　尼に……比丘尼ですか。
おきく　えゝ。つく／″＼世の中がいやになつたのですの。
林　(いたましげに) それはどうも、なんと云つたらいゝか、實に……然し、なぜですか、何かそんな動機が……。
おきく　なんだか世の中が、いやになつたのよ。それに、こんなに時々地震があると、なほさらね。
林　あゝ。人生の無情を感じたのですな。その氣持は僕にもわかる。(考へる) うむ。
おきく　とにかくかうした生活が、ふつといやになつて、やめて、しばらく靜かに暮して見たいの。

林 （感傷的に） 殘念だな。この家がさみしくなるですね。
（客が一人はいつて來る、毛利照雄である。流行の洋服。雪だらけになつてゐる。）
およね あら、今晩は。まあ傘なしなの。
毛利 やあ。
おきみ あら、しばらく。お珍らしいこと。お待兼よ。
毛利 何を云つてゐるんだ。（ストーヴの傍へ椅子を運ぶ）あゝ、寒い。
およね ひどい雪ね。どちらのお歸り？
給仕富田 （金錢登錄器の前から） 今晩は。お久し振で……
毛利 おい、富田君。いつもそこでガチヤン〳〵やつて銅貨の勘定をしてゐないで、たまにはこゝまで出て來いよ。
富田 へゝゝゝ。
毛利 笑つて答へずか。おい、おきみ君。
おきみ はい。ホツトウヰスキでせう。
毛利 ちがふ。
おきみ ブラン。ジン。カクテルはこゝに松井が控へて居ります。
毛利 うるせえ。石炭だ。
おきみ 石炭？ あがるのですか。
毛利 お前の亭主ぢやあるまいし石炭を喰ふかい。
おきみ 人を……。（笑ふ） おきくさん。

おきく はい。
毛利 呼ぶには當らない。早く石炭をいれろよ。
おきみ 毛利さんが來て、いぢめていけない。
おきく （すましてゐる）
毛利 おい。石炭だつたら。吝つたれだな。
おとく 今しがた入れたばかりよ。
毛利 もつと入れろよ。どん〳〵。主人のものぢやないか。
おとく （石炭を入れる） 氣前がいゝでせう。
およね おきくさん。
おきく なに。うるさいわよ。
おきみ 毛利さん、おきゝになつて。うるさいわよだと。
毛利 ふん。呆れたものだ。いゝ鹽梅だ。（間） ミスタ松井、どうしたんだい。喫れないのかい。
松井 （笑く乍ら） 何でございます。
毛利 ホツトウヰスキよ。きまつてゐらあ。外は雪だぜ。
およね 御挨拶だわね。（遠のく） 君子危きに近よらず。
おとく すこしお冠なのね。
おきみ おきくさんと此の間喧嘩したのだとさ。
毛利 嘘をつけ。
およね あら。あれつきり。來なかつたの。
おとく うん。それでおきくさんがふさいでゐるのさ。
おきみ お待遠樣。

（毛利、コップを受取つて飲む。）
おきみ　どこで呑んでいらしつた？
毛利　大きにお世話だ。
およね　わたくしどもではとても手に負へない、手負猪だわね。
おきみ　おきくさん、助け船！
林　（おきくに、低い聲で）いゝですか。行かないでいゝですか。
おきく　（煙草を呑みながら聞えよがしに）えゝ。どなたも同じお客様ですもの。ちやほやするにも及びません。
林　（はら〳〵する）しかし、その。
およね　毛利さん。あやまつておしまひなさいよ。
毛利　ふん。
おきみ　痴話喧嘩の飛ばつちりは眞平だわ。
おとく　おきくさんは尼になると云つてゐるのよ。毛利さん。
毛利　勝手になるさ。知るもんか。
およね　強いわね。
毛利　おい。自動車を呼んで吳れ。
おきみ　どこへいらつしやるの。おかへりならまだ早いわよ。
毛利　云ひつけてくれ。ちよつとわきへ行くんだから。急ぐんだよ。
おきみ　ほんたう。
毛利　ほんとだよ。
おとく　あのひとに叱られてよ。わきへ行つたりすると。
毛利　おい。云ひつけてくれ。大急ぎだ。
おきみ　はい。
毛利　およねさん。今日は馬鹿にいゝ女に見えるぜ。
およね　受付けがちがひます。
おとく　口頭ではいけません。書面で……。
毛利　覺えてゐろ。（立つてスタンドの前へ行く）松井君。あまいカクテル。
松井　あまいのは珍らしいんですね。
毛利　共喰ひだがね、類は友を呼ぶさ。
松井　グリコーゲンが缺乏してゐますね。
毛利　さむいからだよ。變な事をいふな。
松井　この雜誌に書いてあるんでさ。（間）馬に角砂糖をやるとね。あたしがローサンゼルスにゐたときにね。
毛利　いつかきいたよ。その馬の話は。
松井　不賓なんだな。話の腰を折るなんて。
（林とおきく、いろ〳〵話してゐる。笑ふ。）
林　さうですか。そんなですか。
（毛利、そつちを覗く。）

毛利　（およねに）誰だい。
およね　林さんといふ、詩人ですとさ。
毛利　あゝ、あれか。此の間の。
およね　（うなづく）
おきみ　（入つてくる）ちき參ります。
毛利　ありがたう。乘せて行つてやらうか。
おきみ　えへん、えへん。
毛利　なんだい、それは。
おきみ　咳拂ひでさあね。ふさがつてゐるのよ。
毛利　下卑たやつだ。
おきみ　（笑ふ）裏店ッ子ですもの。
毛利　（苦い顏）すぐそんな事をいふ。おれも裏店に生れて來たかつた。
おきみ　おきくさんによくさう云つときませうね。
（笑聲。）
林　ぢやあ、左樣なら。
おきく　あら、おつり。
林　いゝです。いゝです。（出て行く）
おきく　ぢやあ、またそのうちね。今月中にぜひね。お別れにね。（迭り出していつまでも外を見てゐる）さやうなら！
毛利　おゝ、寒い。おい、君。そこを締めて呉れたまへ。

おきく　（だまつて外を見てゐる）
およね　毛利さんが寒いのは自業自得だわ。わたしどもこそ災難！
おきく　（しめて仲間の所へ來る）勘忍！
およね　（自分の傍へ坐わらせて手を握る）お前さんがゐないで、毛利さんが自動車さ。
おきく　ふん。（ついと立つて、林のゐたテエブルの上を片付ける）
およね　お二人ともよつぽどどうかしてゐるよ。どうしたの。きかせてよ。
毛利　知らない。知るもんか。
およね　尼になつてもいゝの。あのひと。
毛利　あんな尼、先祖の瞿曇彌が泣かあ。
（自動車の運轉手、入つて來る。）
運轉手　お待ち遠樣！
おきみ　はい。御苦勞樣。（毛利に）參りました。
毛利　（ストーヴの傍の椅子の上へ反線返つてゐる）うん。
（運轉手、出て行く。）
（間。）
（おきく、仲間の椅子へかける。）
おきく　おゝ寒い。

およね　どうぞストーヴへおあたり下さい。
おきく　さつきの話、本當かねえ。
およね　なに。
おきく　丹澤山の下の大岩に、下から火が吹きつけてゐる話さ。
およね　あア、さつきのお客様が話してゐた。
おきく　いやだね。まだ大きなのがあるのか知ら。だがどうでもいゝや。もう世の中がいやになつた。
おとく　早く尼になる方がいゝわよ。
およね　毛利さんの顏を見たら、尼はもう願ひ下げにきまつてゐるあね。
おきく　ひと！
およね　自動車へ乘せてつてお貰ひよ。
おきく　（首をちゞめて舌を出す）
およね　あらッ。
おとく　（驚く）何、地震！　（きよろ〳〵する）
およね　いえ。光り物が……。
おきく　（笑ひ出す）
（運轉手入つて來る。笑つてボーイと話してゐる。）
おきみ　毛利さん。自動車、參つてゐます。
毛利　うん。（間）自動車か。もういらない。返してくれないか。
おきみ　あら折角いひつけたのに。
毛利　（運轉手を見る）あゝ君！　まアこゝへ來たまへ。ちよつと來てあたりたまへ。
運轉手　は。有難うございます。
毛利　松井君。このひとにウヰスキ一ツ。
運轉手　折角ですけれどもわたくしなら、職務中は頂きません。
毛利　飲まない。
運轉手　は。折角でありますが。
毛利　君は軍國主義だね。
運轉手　いゝえ。自分は軍國主義ではありません。
毛利　君は兵隊さんだらう。
運轉手　はい。昨年まで軍隊に居りました。しかし自分は軍國主義ではありません。
毛利　さうか。しかしいゝ男だな。
運轉手　そんなではありませんです。
毛利　そんなでもありませんと……ふむ、なか〳〵頭はいいぞ。メンタルテストは及第だな。（札を出す）失敬だが、車はもういらなくなつた。金は拂ひます。
運轉手　はあ。それなら、お金はよろしいです。
毛利　まあ、さう云はずに、取つてくれたまへ。さあ。（握らせる）

運轉手　どうも、それは……では。（お辭儀して出て行く）
毛利　なんだか棒を呑んだやうな人だなあ。さつぱりしすぎてらア。
（自動車の爆音。）
おきく　まあ。やけにならすわね。（間）毛利さん！
（間）毛利さんてば！
毛利　なんだ。
おきく　（立つて行く）しばらく。
毛利　（苦笑）さうかな。
およね　あら、御覽なさい。もう仲直りよ。
おとく　なんだか癪ね。
おきみ　やつぱり本物ね。あの、うれしさうな事わいの、だわ。
おとく　（笑ふ）あゝ。世の中がいやになつた。
おきく　うるさいわよう。毛利さん。（肩へ手をかける）あなた、おこつてゐるの。
毛利　（だまつてコップを口へはこぶ）
おきく　よう。毛利さん。
およね　毛利さん、何とかいつてやつて下さい。
毛利　およねさん。ちよつと。（招く）
およね　いや。こはいわ。
おきく　毛利さん。
毛利　おい。およねさん。話があるんだ。ちよつとおいでよ。（立つて引つぱる）
およね　（笑ひながら）いやよ。
毛利　おい。およねさん。僕は君に想はれてゐるんだ。とうからだぜ。
およね　いやよ。てれかくしにダシにつかはうてもだめよ。
毛利　（およねを抱く）
およね　あれ、およしなさいよ。おきくさん助けて……あれえ。
毛利　さあ、どうだ。
およね　いやあ。（やつと逃げて行く）
おきく　毛利さん！
毛利　なんだ！
おきく　（低い聲で）ひどいわ。
毛利　なぜ！
おきく　（目を拭く）あんまりだわ。
毛利　よせよ。（手を引きよせる）
おきく　およしなさいよ。（すこし笑ひ乍らもがく。途端によろけてふたりとも椅子ごと仰向けに倒れる）あゝッ。
毛利　あつッ！　あつッ！
（一同、驚いて總立ちになる。）
（二人はストーヴに頭を押着けたまゝ、足をばたばた

やつて起き上らうとあせつてゐる。）
（女給たち、手をとつて引き起す。）
松井　水だ。水だ。頭が燃えてゐる。
およね　おゝ臭い。
おきみ　髪の毛が焦げたんだよ。
富田　（バケツを持つて來る）さあ、どいた、どいた。
松井　はやくかけろ。山火事だ。山火事だ。（二人の頭へ水をかける。）

――幕――

第二幕

前幕のおきくが借間してゐる二階。階下は小さな煙草屋。上手に階段の降り口がある。板間がある。そこに自炊の道具が片よせてある。部屋は六疊。正面に窓がある。古い、きたない障子。前幕から四五ヶ月經つたころ。午後。晴れてゐる。下手寄に黑い處々白く禿げたシックヒ塗の西洋館の裏手の壁が見える。場末の活動寫眞館である。壁には窓がついてゐて、この家を見下してゐる。（幕あきに音樂ヤンキイ・ドードル・ボーイをやつてゐる）

おきく。白いエプロンをかけ手拭を頭にかぶつて、襷がけで部屋を掃除してゐる。紐でしばつた書籍や雜誌が部屋の隅に積んである。机と外された油繪の額が二三枚、障子の外の板の間に置いてある。おきく、その机を部屋の中に入れたりする。

妹のおあい、上つて來る。藝者あがりらしく見えるのを意識してゐる女。

おあい　姉さん！　今日は。
おきく　あゝ。お前の聲らしいと思つてゐたよ。どこへ行つたの。髪結さん？
おあい　うん。（間）エプロンなんかどうしたの。
おきく　これかい。（笑ふ）むかしが、なつかしくなつてね。
おあい　先のがあつたの。
おきく　なあに。階下の娘が隣の活動へ出てゐるんでね。その古を呉れたんだよ。
おあい　ふうん！（間）なあに、この机や本なんか。どうしたの。
おきく　（笑つてゐる）
おあい　誰か越して來るんだね。（火鉢の傍へ坐る。笑ひながら）いやだね。
おきく　なにがさ。（間）あたしいろ〳〵考へたんだよ。（襷のまゝ立膝をして火鉢の前へ坐る）お前。煙草を一

本おくれよ。

おあい　（袂から女持の卷煙草入を出して自分も吸ふ）　あの人、どうして。

おきく　あの人つて毛利さんかい。あれつきりさ。（淋しさうに）　薄情なひとだよ。

おあい　手紙を出したの。

おきく　あゝ。何本も出したんだ。梨の礫さあね。

おあい　ふざけた奴だね。あアいふのら息子ぐらゐ始末にいけないやつはないね。一體金持はきらひさ。

おきく　お前の旦那だつて金持ぢやないか。

おあい　大した金持ぢやないさ。それにあれはお爺さんだあね。ぢき死んぢまわあね。

おきく　だからせい出して可愛がつておやりよ。

おあい　罪だよ。そしたらなほ早く死んぢまふからね。

おきく　（すこし笑ふ）　あすこの店で、いつか火傷をして四五日同じ病院に入つてゐたときぎり、何のたよりもないのだ。それで、あたし此の間ちよつと話した林さんといふ人ね。

おあい　あア。カフエへ來る人だらう。

おきく　（うなづく）　やつぱし、あの人と一緒にならうとおもふの。

おあい　（目を圓くする）　およしよ。あんな貧乏野郎と。それに男つぷりだつて毛利さんの方がずつといゝぢやないの。第一金はあるし……。

おきく　でも、あてにはならないんだもの。（間。涙ぐむ）　それよりどんな人でも實のある人の方がいゝよ。毛利さんなら、例へあの人一人よくつたつて、一緒になれるわけではなし生涯日蔭の身で暮らさなくつては。

おあい　なぜ。（間）　なに、かもふもんかね。當節そんな事つてあるものか。

おきく　（首をふる）　いろ／＼考へてね。柄にない人にいくらのぼせても駄目だし、それにお前、こんなに火傷をして……。

おあい　でもそれだつてあの男のせゐぢやないか。今諦めてしまふのは殘念だよ。せめて、うんと金でもとつてやらなくては……。

おきく　いやだよ。（間）　それに、あたし一人火傷したわけぢやなし。二人とも、ついした途端の災難だもの。强請じみた事はいやだよ。

おあい　姉さん。そんな意氣地のない……それだつて、女が一生、もう妾にも藝者にもカフエにだつて出られやしないだらう。

おきく　（さみしさうに）　なに、髮は伸ばさうとおもへばのびるさ。それに入院の金は向ふで拂つたんだし……。

おあい　だけれど、あれつきりといふ事はないよ。太いけだものだねえ。姉さん、ひとつ怒鳴り込んでやるといゝんだがな。
おきく　下の小父さんもそんな事をいふけれどもね。初めから金にする氣で出來たことぢやなし……。
おあい　姉さん、まだ彼奴に惚れてゐるからいけないよ。
おきく　（間）そんな事はない。
おあい　ないものかね。（間）で、その、林とかいふ人と一緒になるの。
おきく　あゝ！（急に晴ればれして）それやあ親切な人なんだよ。
おあい　一度見た事があるよ。近眼で、こんな厚い眼鏡をかけてゐる人だらう。
おきく　うん。近眼の代りに親切だよ。
おあい　近眼の人は親切たとさ。
おきく　さうかい。
おあい　でも貧的だらう。何をして喰べてゐるの。
おきく　詩人なんだよ。詩を作るんだよ。
おあい　詩つてなに。
おきく　詩さ、詩を知らないの。ほら、劍舞の時に唄ふだらう。
おあい　あゝ知つてゐる。
おきく　だけれど林さんのはちがふんだよ。新體詩だよ。それに童謠だのゝ作者だよ。
おあい　カチユーシヤ可愛や見たいのだらう。
おきく　さうさ。（間）だが、もつと新らしいんだよ。
おあい　そりやさうだらう。粘すゝき見たいのだらう。だけれどあれでお金になるのかね。
おきく　新聞へ月に一度ぐらゐ書くんだとさ。（間）あんまりお金にはならないらしいね。だからわたし内職するよ。
おあい　ばかばかしいぢやないの。そんな人と一緒になるなんて。（間）もう、きめてしまつたの。
おきく　うん。今日來るの。
おあい　今日。近所にゐるのだね。
おきく　あア。今朝から自分で、下宿から少しづつ荷を運んでゐるんだよ。この方がいゝつてさ。階下の人もいゝしね。隣が活動で、音樂がきこえるし……あの人、音樂がすきなんだつて云つてゐたつけ。
おあい　いくら位、稼ぐんだらう。
おきく　新聞へ一度書くと十圓ぐらゐだつてさ。
おあい　でも、月に一度十圓ぢやあ、二人でお飯がたべられないよ。
おきく　なあに、まだはいるんだよ。（間）心配しないで

いゝよ。いゝ人なんだよ。いまにえらくなるよ。
おあい　だけれど貧相な青んぶくれな吝つたれた顔をして
　ゐるぢやないか。
おさく　それやあ文士だもの。仕方がないやね。（間）此
　の間ねえ、わたしの事を詩にうたつたんだよ。（立つて
　探して來る）これだよ。いゝ詩なんだよ。きく子孃に捧
　ぐとはじめに書いてある。（讀む）わが心根を悟りて
　し、この女の眼に胸のうち、彼の、あゝ、女にのみ內證
　の、秘めたる事ぞなかりける。……つまりわたしになん
　でも打あけるつていふんだね。（また讀む）栗色髮のひ
　となるか、赤髮なるか、金髮か、名をだに知らぬ黑髮の、
　夢の名殘りの惜まるゝ、つく〴〵見入る眼差の、無言の
　謎のあたゝかき……。
およね　つまらないね。
おきく　お前にはわからないのだよ。この詩ははじめの方
　がヴルヴールといふ人の詩にそつくりだつて褒められた
　んだとさ。かういふものもあるんだよ。（讀む）ぢいつ
　と顔を見てゐると自分の顔がさみしい。あの顔はかゞや
　く。自分の心は地震だ。といふんだよ。
おあい　それは面白いね。自分の心は地震だなんてね。う
　まいわね。（笑ふ）まあ、いゝや、親切なんなら。
　（階下の女房が階段から顔を出す。）

女房　おきくさん。
おきく　はい。
女房　お客樣だよ。（上つてくる）立派な人だよ。
おきく　ど、どんな人。
女房　洋服を着て、チヨツと髭を生やしたいゝ男だよ。
おきく　毛利さんと云やしないこと。あゝ、どうしよう。
女房　下に待つてゐるよ。いゝ男だよ。
おきく　（ぼうとしてゐる）
おあい　姉さん、しつかりおしよ。とにかくおあひよ。
おきく　あたし、なんだか、胸がむか〳〵して……もどし
　さうになつて來た。あゝ、どうしよう。
おあい　とにかくお逢ひよ。いゝ鴨を逃がしちやばか〳〵
　しいよ。よし、わたしが行く。
おきく　でも、あいちやん……。
おあい　いゝよ。小母さん、階下にゐるの。
女房　店に立つてゐるよ。ぷンと香水の匂ひがするよ。あ
　たしなんだか嬉しいよ。
おあい　よし。（降りて行く）
女房　（續いて降りて行く）
　（おさく、まご〳〵してゐる。襷を外し、頭の手拭を
　取らうとしてやめる。）
　（毛利照雄、モオニングに中折をかぶつたまゝ上つて

來る。）
毛利　おきくさん！　しばらくだつたね。
おきく　毛利さん。（ベタリと坐る）
毛利　來よう來ようと思つてゐたけれども、つい來られないで失敬した。手紙度々ありがたう。
おきく（泣き出す）
毛利（困る）その、いろ〳〵ね、いろ〳〵忙しくつて。それに九州の方へ行つてゐたんだ。九州の大學の博士が、植毛術をやるといふのでね。例の火傷を直しに……。
おきく　でも、手紙の一本位……。
毛利　すまなかつた。（帽子へ手をかけて、またやめる）
おきく（手拭へ手をかけてやめる）どうぞお坐りなさいな。
（座蒲團を出す。階段の上り口におあいが顏を出す。）
おあい　はい。姐さん。お茶！（しつかりやれと手眞似をして、すぐ降りて行く）
おきく（茶を出す）あら、お坐りなさいな。きたないのでお氣味がわるいの。
毛利　いゝえ。なに。（間）なんだか忙しさうだね。引越でもするのかい。
おきく　いゝえ。（荷物を見る）預かり物なのよ。お坐んなさいな。

毛利　うん。（帽子をとつて坐る。後頭部から腦天まで處處火傷のあと。殘りの毛は剃つてある）
おきく（手拭ひをとる。前額の上部に火傷のあと。外も處處禿げてゐる。毛は短く剪つてある。火鉢をへだてゝ坐る）
（二人、暫らく無言。おきく、エプロンをとる。）
毛利（おきくから眼をそらす）久し振だつたね。
おきく（毛利から眼をそらす）よくいらして下さいました。
（無言。）
毛利　すまなかつた。
おきく　あなた。愛想がつきたでせう。（泣く）
毛利（自分の頭へ手をやる）そんなでもない。
（無言。）
毛利　でも思つたよりひどいね。
おきく　あなたも思つたよりひどいわよ。
毛利　うん。だから坊主にしちまつた。
おきく　あたしも……こんなでは、いやになつたでせう。
毛利　そんな事はない。
おきく　あたし、毛が欲しいわ。
毛利　僕も毛がほしい。
おきく　九州へ行つてもやつぱしだめだつたの。

毛利　うん。皮膚の下へ毛を植ゑるのださうだが、駄目なんだ。
おきく　お岩樣の鬘のやうに、ずる／＼拔けるでせうね。
毛利　とにかく、當分駄目なんだ。君、君も氣の毒したなあ。
おきく（眼を拭く）
（ヴァイオリンのデユ・イズ・スパアクリングの曲をはじめたのがきこえる。）
毛利　とにかく、毛がなくなつたからと云つて、さう悲觀するにも當らない。もう泣くのはやめたまへ。
おきく　え＼。（泣き笑ひ）濟みません。あなたの顏を見たら、急に悲しくなつて……。
毛利　あれぎり、もうカフエ・ホヱイルへ行かないんだね。
おきく　だつて、こんなでは……。
毛利　誰か來るかい。ホヱイルから。
おきく　誰が來るものですか。（間）あなたの消息がき＼たいとおもつて、およねさんおきみさんの處へ手紙を出したのに返事もくれません。（間）あなた、時々ホヱイルへ行くでせう。
毛利　行くものか。どこへも出やしないよ。こんな頭で……
おきく　あたし、もう淋しくつてさみしくつてね。二月になればあの店をやめて、あなたの隱れ家をこしらへる約束だつたのに、それもふいになつてしまつてねえ。（間）頭はこんなだし、もう本當に尼になるより仕方がないと……。
毛利　また尼かい。
おきく　毎日泣いてゐたのよ。あのお約束、もうだめだわね。
毛利　なに、そんな事もない。しかし……。
おきく　頭に毛がなくてはおいやでせう。
毛利　いや。僕だつて毛がないのは同じだが……。
おきく　わたし毛が欲しいわ。千本も萬本も生やしたいわ。
毛利　ぢきもとのやうになるよ。ずつとのばせば、女はわからないだらう。入毛でもすれば。
おきく　え＼。でも、火傷の療治の時に切つてしまつたし、それに、この前髮の處だけ大きくとれてしまつたのでね。
毛利　僕はまた後の處をすつかり無くしてしまつたのだ。さうでなければ、前の方ならずつとのばしてもうまくかくせるのだがね。
おきく　ま＼にならないわね。でも……心は、わたしはかはらないわ。
毛利　それやあ、心と毛とは關係がないさ。僕だつて、それは同じだ。
おきく　でも、また生えてるつてお醫者はいふのよ。毛が

生えるのがたのしみだわ。

毛利　だが、おきくさん。毛がないと、人間眞面目になるね。僕は年を寄ると眞面目になる人の心理がやつとわかつた。

おきく　でも、禿でも道樂をする人はいくらもあるわ。現にあの……。

毛利　現にあの誰だい。お云ひよ。誰だい。笑つてゐてはわからない。

おきく　現にね……。さう、さう、妹の旦那も禿てゐるのよ。

毛利　まあそれあ例外はあるさ。（間）それで、僕は、毛髮と戀愛との關係といふ事を、この節しきりに考へるね。毛が、かうしてなくなると、なんだか世の中がつまらなくてしやうがないんだ。どこへ行つても禿頭意識がついてまはつてね。

おきく　あたしもさうだわ。（間）死なうかとおもつたことも幾度もあるわ。

（階段の上り口に、おあいが、洋食屋の出前の道具を持つて上つて來る。ビイルも持つて來る。）

おあい　ちよいと、姉さん！

おきく　はい。（立つ）あらすまないわね。（チヤブ臺を出して毛利の前にならべる）なんにもないのですけれど。

毛利　やあ、どうも。

おきく　おいしくないのですよ、こゝいらのは。

おあい　（上つて來る）いかゞ。おひとつ。（酌をする）姉がいろ〳〵お世話になりまして。

毛利　いや。どうも。

おあい　何分よろしく。姉さん。わたしまたあとで來るわ。

おきく　さうかい。いろ〳〵、すまなかつたね。

毛利　まあ、いゝでせう。

おあい　えゝ。いづれ。あなた、御ゆつくり遊ばして。ごめん下さいまし。

毛利　やあ、さやうなら。

（おあい、降りて行く。）

毛利　君の妹かい。別嬪だね。

おきく　（だまつてゐる）

毛利　どうしたの。

おきく　（間の後）あなた。やつぱりあゝいふ頭を見ると……やつぱりわたしがいやでせう。

毛利　そ、そんな事はないさ。（間）困るなあ。

（階下で何か爭ふ聲がきこえる。）

（おあい、どん〳〵上つて來る。）

おあい　姉さん、來たわよ。あの、なんとかいふ近眼の祐

すゝきが……。

（林淸、行李をかついで上って來る。）

林　（ふう／＼云つてゐる）僕の自由を拘束しては困るです。

おきく　どうしたのです。

林　なに、この人が、二階へ上つてはいけないといふのです。

おあい　いけないと云やあしない。一寸待つて下さいと云つたのです。

林　然し、この二階は今日から僕等二人の城ですからな。（毛利を見る）やあ、君ですか。どうも上等の靴だとおもつた。

毛利　おきく君！　この人は、なに？

おきく　あの、この方は、ほれ御存じでせう。ホエイルへ時々おいでなすつた林さん。

毛利　それは知つてゐるが。どうするのです。こゝへ越して來るのですか。

おきく　實は、あの、その、いろ／＼な……。

林　いゝです心配しないでもいゝですよ。（毛利に）僕はこのおきくさんと結婚したのです。それで、下宿を引拂つて、今日こつちへ移つて來るのです。

毛利　結婚……いやそんな事はない。この女は僕の情婦だ。

林　それは昔の事でせう。あなたとの事はすつかりこの人からきゝました。婦人を玩弄物視してゐてはいけないでせう。あなたは誠意を缺いてをられる。眞面目な戀愛でないのでいけないのです。僕はおきくさんと白熱的な戀愛の道程を踏んで、いよ／＼今日から同棲する事になつたのです。

毛利　君はなんの權利いあつて僕のおきくを……二人は相抱いて火水の中を通つて來た仲ですぜ。おいおきく。だまつてゐてはいけない。

おあい　姉さん。しつかりなさいよ。

林　君のやうな階級の人と、この婦人との戀愛には恒久性がない。一時の慰みものにしようとしてはいかん。僕はこの人を救ふのだ。君はすぐ歸つて下さい。

毛利　君こそすぐかへりたまへ。君は頭に毛が一杯生えてゐるから、ほかに、毛のある婦人を探したらいゝぢやないか。

林　ばかな。

毛利　實をいふと、僕は、以前方々に關係した女のあつた一種の遊蕩兒だが、かうして禿げて以來、飜然とまじめになつて……。

林　それは自發的でない。禿げた故にほかの婦人にきらは

れたからと云つて、このかあいさうなおきくさんを弄ぶのはよくない。

毛利　さういふわけではない。禿げての後、いろ／＼考へると、この女の可憐な心持に強く心がひかれて來たので、それだからこそ、今日かうしてたづねて來たのだ。君はちつとも禿げてゐない。この婦人と僕とは互ひに同じ事情の下に禿げたのである。君こそこの人の毛がない弱點につけ込まうとしてゐる下等な男だ。

林　馬鹿いひたまへ。（おきくに）君、どうかこの人をかへして下さい。

（おきく泣いてゐる。）

毛利　おい、おきく君。君はこの男と結婚するのかい。どうしても結婚するのかい。

おあい　姉さん。よくお考へなさいよ。泣いてゐたつてわからないわ。

林　おきくさんの心持はわかつてゐる。ようく僕はきいてゐる。おきくさんの心に從ふのが一番いゝ。

おきく　濟みません。濟みません。林さん、かにして下さい。わたし、やつぱり……。

林　やつぱりどうです。やつぱり……。

おきく　毛利さんが諦められません。

林　なんですつて。（長い間）あゝ。世の中が眞暗になつた。僕は自分の耳を疑ふ。どうぞ、もう一度云つて下さい。

おきく　ゆるして下さい。やつぱり御縁がないのでせう。

おあい　それやさうだとも。

林　では、すべての約束を取消すのですか。あゝ。（髮の毛をむしる）心臟が裂ける。

毛利　（つぶやく）どうも髮の毛を粗末にする男だ。

林　よし僕も男だ。失戀詩人として打つて出る。この悲痛な體驗を無駄にはしないぞ。あゝ神よ。（泣く）ぢやあおきくさん。僕は君の自由を尊重する。（間）さよなら。（泣く）幸福でゐて下さい。からだを大切にして下さい。

おきく　（泣いてゐる）

林　（毛利に）君！　どうか永久にこの可憐な人を捨てないで下さい。ぢやあ左樣なら。（行李をかついで降りて行く）

おきく　（泣いてゐる）

おあい　たうとう行つてしまつた。（間）すこし可哀想だつた。

毛利　顏に似合はない、さつぱりした男だ。さあ、おきく君！（おあいに）あなたも一杯おやんなさい。

おあい　えゝ。ありがたう。（坐る）姉さん、もうおよしよ。こちらにわるいぢやないの。

（一座しばらく沈默。）
おきく　（立つて窓から下をのぞく）　あゝ、あの人が行李をかついであすこを行く。（間）　林さアん！
おあい　姉さん。およしよ。
おきく　（叫ぶ）　林さアん！　一寸待つて頂戴よう。（手拭をふる）　林さアん。……。ちよつと待つて下さい。すぐ行きます。
（階下へかけ下りる。）
おあい　どうしたんだらう。
毛利　（間の後）　まアいゝ。君、一杯やりませんか。
おあい　（コップを受取る）　どうもすみません。
毛利　（酌をしてやる）　わたしのお酌ではお氣に召しますまい。
おあい　あら。うまく仰有るわ。
毛利　おツ、こぼれましたか。
（おきくあがつて來る。あとから林、また行李をかついで上つてくる。彼はうれしさうである。）
おきく　毛利さん。（はきはきと）　わたし、やつぱり林さんにします。
毛利　なに。
おあい　姉さん、どうしたのさ。
おきく　あたし、お金がなくつても、やつぱり實のある人の方がいゝわ。
毛利　やつぱり毛のある奴の方がいゝのだな。（呻る）　尤もおれもさうだが……。
林　やあ、また來ました。（おきくに）　ぢやあこの行李はどこに置かう。
おきく　この戸棚へ入れませう。（二人で持つて戸棚へ入れる）　机はこゝへ置いてよ。
林　やあ、有難う。あとは夜具だ。
おきく　階下に來てゐるのね。一人では持ち上らないでせう。手傳ひませう。
林　なに、大丈夫です。（下りて行く）
おきく　（下りて行きながら）　わたしにも手傳はして頂戴よ。
毛利　（ぼんやり立ちあがる）
おあい　あら、おかへりですか。
毛利　えゝ！　（間）　なんだか、いやあな氣分がして……
　えゝ、糞ツ。
おあい　そこまで御迷惑でなければ御一緒に參りませう。わたしもどうせ歸りますから。
毛利　（嬉しさうに）　さうですか。ではぜひ。さうして、どこかで一杯やりませんか。
おあい　（笑ふ）　わたしなどお連れ遊ばすと、御身分柄に

障りますよ。

毛利　なに、かまふものですか。（間）禿ッちよろけであなたさへよければどこへでも行きますよ。

おあい　（鼠啼き）わたしはあたまの毛なんかどうでもいい性分ですのよ。さあ、では歸りませう。

（二人、行きかゝる。階下から林とおきく、夜具を細引でしばつたのを二人でかついで來る。）

毛利　きたない蒲團だな。ふん。

（林、ぢつと毛利をにらむ。おきくすまして頭へ手拭ひをかぶる。活動寫眞館で、ムウン・ライトカビラスをやつてゐるのがきこえる。）

――幕――

債家の貢（三幕五場）

人物

三池幸七　金貸（六十七歳）
三池智三郎　その子（二十七歳）
三池美津子　智三郎の妻（二十二歳）
鳥居とよ　幸七の妾（三十歳）
鳥居銀太郎　とよの子（七歳）
香川定剛　事業家（六十三歳）
香川信彥　定剛の子（三十一歳）
香川正之助　信彥の弟（二十四歳）
香川ゆう　定剛の妻（六十歳）
香川てる　信彥等の姉、啞者（三十四歳）
香川千代子　正之助の妹（十七歳）
小野京子　美津子の友だち（二十六歳）
松本文治　三池の手代（三十六歳）
その他醫者二人。係りの役人。
三池の小間使おきん。レストランの女給仕、おなじく客三四名づゝ。人夫四五名、香川の女中
三池の女中。

場割

香川信彥の家
三池の家の庭隅
三池智三郎の部屋
レストランの三階
三池幸七の部屋

時代

現代――十月中頃の數日間

序幕

第一場　香川信彥の家

古い、大きい、どこか貸家建らしいところのある家。牛込の奥。

舞臺には二つの部屋を作る。下手には緣側があつて庭に面してゐる。上手は六疊位で、そこが信彥の書齋になつてゐる。書棚には書物が可成澤山ある。

――下手は廣い座敷で、床が伸べてある。信彥の父親の定剛が寢てゐる。病氣で、死に瀕してゐるのである。家中、どことなく荒れた感じがあつて、不自由らしい處が見える。

時候は秋で、外は雨が降つてゐる。午後二時ごろである。

――信彥は書齋で、机に凭つて何か書いてゐる。三十歲位の痩せた、靑白い顏の男、淋しい、銳い表情をする人。

――定剛の妻（信彥の母親）おゆうが病人の枕許に坐つてゐる。氣遣しさうに病人の顏を見て、時々淚を拭いたりする。六十位の小柄な、元氣の無い年寄である、苦勞をし切つてほと〳〵してゐると云ふ風に見える。

――緣側を傳はつて、信彥の妹の千代子が出て來る。可愛らしい女學生風の娘である。

千代子　（小聲で）母さん！

おゆう　（振向く）

千代子　あの、先生はすぐいらつしやつて下さるつて！

おゆう　さうかい、お家にいらつしやつたのだね。

千代子　えゝ。（母親の後へ坐る）父さん、どんな？　落着いていらつしやるやうね。

おゆう　先刻の頓服が利いたと見えて、今、すこしおやすみだよ。

千代子　さう。（父親を覗き込んで、眼をしばたゝく）

（信彥、次の間から入つて來る。手に賴信紙を二三枚持つてゐる。）

信彥　ぢやあ母さん！　これをすぐ出さなければ。

千代子　あたし出して來るわ。

おゆう　御苦勞樣だね、お前！

信彥　千代子、先生の處へ行つて來たのかい。

千代子　えゝ！　（賴信紙を受取りて立つ）

信彥　ほんとに大變だな。が、まあ仕方が無いや。では序にね、原稿紙を買つて來て吳れないか。

千代子　はい。山屋でいゝのですか。

信彥　あゝ、仕方がない。あしたでも銀座へ序が出來たら、加東屋でまた買つて來て吳れ。今日は間に合せだから、すこしあればいゝ。（獨り言のやうに）今夜中に書かないでは。

千代子　はい。母さん、行つて參ります。

おゆう　あいよ、氣をつけておいでよ。

（千代子去る。）

信彥　（父親の枕許へ坐る）眠りましたね。

おゆう　あゝ、すこし樂になつたと見えるね。

（間。）

（雨の音が聞える。）

おゆう　（つぶやくやうに）仕樣の無いお天氣だね。毎日、毎日。

信彥　道が惡くて出入りに困ります。東京と云ふ街と云ひ

たいが、街ではなくてまるで沼ですね。年々市中の道が悪くなるやうですね。

おゆう　さうかねえ。でも昔から見れば、この邊はよほどよくなつたよ。

（上手から信彦の姉のおてるが入つて來る。啞者である。容貌はそんなに醜くない、色も白い、束髪に結つてゐる。襷をかけてゐる。）

おてる　（手眞似で母親に、病人の樣子はどんなだと云ふ意味をして見せてきく）

おゆう　（やはり手眞似で、今大變にいゝから安心おし、と云ふ形をして見せる）

おてる　（醫者はすぐ來るかと云ふ手眞似をする）

おゆう　（うなづいて見せる）

おてる　（去る）

（長き間。）

（下手から信彦の弟正之助が入つて來る。意氣な樣子をした男である。株式仲買の店員で、道樂者らしい敏ッこさうな人間。）

正之助　（立つたまゝで）父さん、どんなです。今、あすこで千代子に逢つて、大變いけないのだと聞きました。

おゆう　まあお前、どこへ行つてゐたのだえ、四日も五日も。お父さんが病氣だと云ふのに、よくさう底抜に遊びあるいてゐられるねえ。

正之助　（一寸間の惡さうににやりとして）お母さん、今度は遊びぢやなかつたのです。急用が出來て神戸まで行つたのです。店の大將と一緒に……

おゆう　それならさうと、ちよつとハガキでもよこせば、心配しやしないのに……

信彦　（遮つて）お母さん、およしなさいよ、下らない。重病人の枕許で、流連して遊んで來た奴の言譯に、ムキになつて應待してゐなくたつていゝぢやありませんか。

正之助　兄さんまであんな事を云つてゐらあ。ヘッ、信用の無い人間は情無いな。

信彦　正之助！　己はお前がいくら道樂をしたつてかまはない。だがさうぬけぬけした嘘を吐くのだけはよせ。己は嘘を聞くのは大きらひなんだ。己は、嘘をつかれて、その嘘に乘つて平氣な顏をして、あゝさうか、と云つてゐるのは心苦しくて出來ない。お前の云ふ事は、あんまり淺薄過ぎてゐるのでいやになるぜ。正直に女のところへ泊つてゐましたと云へばいゝぢやないか。

正之助　でも、さうでないものは仕方がありません。

信彦　嘘つけ！　いやな奴だな。お前の嘘に乘せられる人はお母さん位のもので己の前では通用しないんだ。神戸へ行つたのと大阪へ行つたのと云ふのは、いつも極り文句

ぢやないか。
正之助　（口の中で）でも本當だから仕方がない。
（病人が呻吟くので、三人が一度にそつちを見る。）
おゆう　（浦剛をすこしずらせてやりながら）お眼が覺めましたか？
定剛　うむ。水が飲みたい。
おゆう　はい。（水を飲ませてやる）
（女中登場。）
女中　先生がいらつしやいました。
おゆう　おや、さうかえ。
（女中に續きて醫師登場。）
おゆう　どうも先生！　お忙しい處を度々おいで頂きまして……
醫師　どう致して。どんな御容體でした。
おゆう　先程、大層苦しみ初めましたので、すぐ使を出しましたのですが、頂いてありました頓服を飲ませましたせゐか、心配しました程も無く、今すこしとろ〳〵と睡りました。それで大分落着いたやうで御座います。
醫師　はあ、なるほど、（診察をしながら眉をひそめて）どうもこれは……。
おゆう　いつもとよほど違つて苦しみが強う御座いましたので、一時はどう致さうかと思ひました。

醫師　（診了す）さうでしたでせう。（考へてゐる）
（おてる、白き洗面器に湯を入れて持つて來る。千代子石鹼タオル等を持つて來る。兩人とも去る。醫師、手を洗ふ。）
醫師　餘程、氣をつけて頂かなくてはいけません。後程、もう一度參つて見ますが、それまでに、お苦しみになりましたら、電話をかけて頂けば、すぐ靑木でも寄越して、注射して見ませう。
信彥　いや、注射はなるべくやめて頂きたい。どうせ苦痛を永引かせるに過ぎないのです。
醫師　さう申せばそんなものですが。
正之助　おや。
定剛　う、う、う……（起き上らうとして半身を起して、すぐ倒れる）
おゆう　どうかなさいましたか。
（沈默。）
醫師　（再び病人に近づく）あ、いけません！
信彥　心臟痲痺ですか。もういけませんか？
（長い間。醫師、胸を診る。）
醫師　……注射してもいけますまい、御氣の毒ですが……。
おゆう　（涙をこぼす）あなた、あなた！
信彥　お母さん！　およしなさい。

（正之助立ちて去る。）

醫師　大變唐突でした。御親戚などをお呼び寄せになる筋は……

信彦　親戚と云つても四五軒で、遠い處は先刻電報を出しました。

醫師　左樣でしたか、それはよう御座いました。

（おてる、千代子出て來る。）

おてる（おう〳〵と泣きゐる）

千代子（母親に）どうしてこんなに早く……母さん、父さんはほんたうにもう助らなくて。（泣く）

信彦　泣いたつて仕方がないよ。おい、やめろ！

醫師　まことに御愁傷です。然し、まつたくお嘆きになつてもいけません、お諦め下さい。この病氣はどんなに手を盡しても、から亢進しては助らないのです。

信彦　いやどうも、あなたにもいろ〳〵御厄介をかけました。（淋しき微笑）わたし共にした處で、よく今日まで持ち續けたと思ひます。强情な人で、生にねばりづよい執着があつたのですから、一ツはそれでこれまで持つたのでせう。

醫師　確かにそれに違ひありません。ではわたくしはこれで失禮致します。

おゆう　これはどうも有難う存じました。（ちよ立つとちかけて、氣がついて）あの、お見送りを御遠慮致します、これで失禮致します。

醫師　御免！

信彦　どうも有難う存じました。

（醫師去る。）

（おてるおい〳〵泣いてゐる。信彦、おてるの袖を引いて、かぶりを振つて見せる。千代子泣きつゝ去る。）

正之助（上手より來る）兄さん、高利貸の三池が來て、逢ひたいと云つてゐますよ。

信彦　三池が。

正之助　取込があるからと云つたら、お父さんが御惡いのですね。ではお兄さんに一寸お眼に掛りたいと云ふのです。まさか催促でもないでせう。

信彦　なんとも知れない。通して貰はう。

おゆう　三池の主人かい。

正之助　さうです、あれが主人でせう、六十位のやせた男だ。

おゆう　あゝさうだよ、また來て下さいと云へばよかつたのに。

信彦　面倒臭い。逢ひませう。

おゆう　さうかい、では。（上手へ去る）

正之助　兄さん！　お父さんの借金はどの位あるのです。

信彦　まだ悉しく調べてないのだが、二三萬は確にあるやうだ。
正之助　皆。高利ですか。
信彦　勿論だ。
正之助　三池のが一番大口でせう。
信彦　うむ。
（――次の間にて、おゆうが「どうぞこちらへ！　取散らして居りまして」など云ふのが聞える。）
（やゝ間。）
おゆう　（登場）
幸七　（おゆうのあとより登場。痩せた六十位の、蒼い顔をした男。光る小さな眼を持つてゐる）どうもとんだお邪魔をしまして。
おゆう　いえ、どう致しまして。
（上手の、信彦の書齋に坐らせ、座蒲團をすゝめる。）
信彦　（書齋へ入つて行く）こんな處で失禮をします。わたくしが信彥で御座います。
幸七　や。これは初めまして、御父樣には久しいお馴染ですが、あなたにはかけ違つて御目にかゝれませんでした。何分よろしく。
信彦　わたくしこそ。……御懇意に願ひました父も、たゞ今亡くなりました。
幸七　（驚く）えッ、もう亡くなりましたか。
信彦　えゝ、たつた今！
幸七　おやおや、御重患だとは承つて居ましたが、それはどうも飛んだ事で、さぞお力落しでせう。
信彦　有難う存じます。
幸七　や、どうもこんな事でしたら、もつと早くに伺へばよかつたのですが、まさか二日や三日のうちに變もあるまいとおもつて延して居りましたので。
信彦　で、御用は？
幸七　……無遠慮に申上げますが、御父樣に御用立てゝあります金子の事ですが……。
信彦　はあ、なるほど。
幸七　實は、こんなにならない中に正式にあなたの名に書き換へて置いて頂く心算でそれで今日伺つたのですが、御死亡と同時に、何とかきれいにして頂ければそれに越した事はありませんし、もしさうでなくば、早速あなたの名にお書き換へを願つて……。
信彦　全體、お家からはどれくらゐ拜借して居りますのですか。
幸七　（手帳を出して見て）えゝと、三口で一萬二千圓になつて居ります。生命保險はたしか大木と云ふ仲間の方へ抵當に入つてゐる筈ですが……。

信彦　さやうですか、ちつとも知りません。

幸七　（鞄から證書を出して）こゝにも書いてある通り、特に相續人のあなたが責任を繼承する事になつて居ります。で、御面倒でも……（他の證書を出して）こちらへ一寸捺印をして頂いて。

信彦　失禮ですが、今も申上げたやうに、父は、たつた今眼を瞑つたばかりなのです。わたくしとしても、多少は頭の中にいろ〳〵な考へが往來してゐる時なのです。顚倒してゐるほどではありませんが、平常とはすこしはちがひますから、かうしたお取引をするのには不適當なのです。それにかうして證文が入つてゐるのですから、御相談した上で、ゆつくりお話をつけませう。どうか今日の處は許して下さい。

幸七　いや、御尤もですが、然し、わけはないのです。ただ、こちらへ、一寸印を押してさへ頂けばよいのですが……。

信彦　それはわかつてゐます。全體、父の借金は、おうちばかりではないのです。御存じの通り父は、失敗を條件とした事業をさんざやつて來た人なので、方々に借財があるのです。それが總額どれ程あるかわからないので、そんな整理もどうせわたくしがやらねばならないのです。長くとは云ひません、初七日が濟めばこちらから伺つていろ〳〵お話をつけますから。

幸七　一々御尤もですが、然し大した御手數な事でもないので……。

信彦　手數をいとふのではないのですが、順序立つて整理したいので、それでお願ひするのです。父はあなたには特にいろ〳〵お世話になつたのですし、それにもう二十年近いお交際なのですから、隨分おうちへ御支拂ひした利息も、多額になつてゐるとおもひます。いはゞ、あなたの御商賣としては、これまで手前では御損はかけてゐなかつたのです。今度、死にましたからと云つて、その日にすぐ、足許から、鳥の立つやうに證書の書換を御請求にならないでも、……勝手なやうですが、さうおもひます。

幸七　では、なんですか、これまでわたくし共へ拂つた利息が多大で、儲けさせてやつてゐたのだから、證書の書換はしないと、かう仰有るのですか。

信彦　（顏色を變へる）誰が書換をしないと云ひました。當人が死んで、すぐ一時間と經たないのだから、せめて初七日過ぎまで待つて呉れと頼んでゐるのではありませんか。

幸七　わたしの方は商買なのだ。事務的に、ぱき〳〵片を付けていかないでは用がだらしなく込み入つて困るので

す。無理な事を頼んでゐるのではないのだ。これはわたくしがあなたに要求する權利を持つてゐるのだ。

信彦　勿論さうでせう。だから君がそんな大きな顏をしてゐられるのだ。然し僕は責任を回避しようとしてゐるのではない。父の死に逢つて、兄弟や母が、すこし取亂しかけてゐるので、僕は心棒を狂はせないやうに、しツかりしてゐる必要がある。葬式の支度もしなくてはならない、金の工面もしなくてはならない、雜誌社へ金を借りに行かなくてはならない。わたしのやうに、哀れな文筆勞働者が葬式一ツ出すのにはどんな苦しみをするかあなたには想像がつかないでせう。わたしは、出來るだけ冷靜にしてゐなければならない立場にゐる。それだけ、頭の中は亂れてゐるのです。書きかけの原稿も、父の死骸を傍に置いて、通夜を兼ねて今夜書き上げて、あした金に替へなくては、差當つて少々必要な支拂にも差支へるのです。こんな事を云ふと、悲鳴をあげたやうで氣恥しいけれども僕の頭の中は多少混亂してゐる、その位の御察しは、つかないと云ふ事はないでせう。

幸七　だから、さつきからお察ししてゐると云つてゐるのだ。然し、一週間後でも今日でも同じやうにたゞ印を押すだけの事なのだから、今して呉れる位の深切があつてもいゝのだ。人に面倒をかけて、そんな底意地わるく、ひねくれないでもいゝとおもふのだ。

信彦　何もひねくれて、あなたに手をかけさせたり、わざと氣をもませるのでもないのです。

（次の間に、父の死骸の傍にゐて兄と幸七の問答を聞いてゐた正之助が突然づか〳〵と幸七の傍まで行き、無言でいきなり幸七の胸倉をとつて撲る。）

幸七　（抗ふ）何をしやがる、亂暴な。

信彦　これ、正之助よせ〳〵！　手荒な事をするな。（苦笑）おい、やめろと云ふのに。（立つて正之助を引き放す）

正之助　（興奮してゐる）餓鬼め！　我利々々亡者だ。何てえ話のわからねえ畜生だ。（またなぐらうとする）

信彦　（とめる）よせ！　馬鹿な。

正之助　なあに兄さん、こんなけだものはなぐるより仕様がない、口で云つたつて通じないんだ。

幸七　（眞蒼になつてゐる、爪で掻いたので、眼の下から血が出てゐるのを拭く）無法な事をしたな、そんな風に出れば、法を以て爭つてやるぞ。人を打てば刑法に觸れるぞ。告訴してやるからさうおもへ。

正之助　何を云つてゐやがるんだ。

幸七　警察へ訴へてやるから、あとであやまるな。

正之助　訴へろとも、驚かねえ。どうせ警察へ訴へるなら

ば訴へ都合のいゝやうに、もう一ツかうしてやらう。
（足をあげて蹴る）

幸七　（鞄を持つて立つ）馬鹿め！　まるで土工か人足だ。覺えてゐろ。あとで靑息を吹くな。（去る）

信彥　（苦笑）よせばいゝのに、手の早い奴だなあ。

おゆう　新佛の傍で立廻りをするなんて、ほんとに亂暴な子だよ、この子は。

正之助　（ぶり〳〵しながら）畜生！　腕の一本も折つびしよつてやればよかつた。

おゆう　馬鹿をお云ひでない。

（下手より千代子來る。）

千代子　まあ、わたしどうするかと思つたわ。小さい兄さん、亂暴だから、あの人を殺してしまふかとおもつてよ。

正之助　（やうやく笑ふ）　まさか殺しはしないがね、時々あんな奴は、なぐつてやらないと冥利がつきるよ。世間を甘く見過ぎてゐるのだから。

信彥　（可笑しさうに笑ふ）

（おゆう下手より去る。）

（おてる出で來り、死人の枕許に坐りて、泣き沈みゐる。）

千代子　兄さん！　原稿紙机の上に置いてよ。貳百枚だけしか買つて來ないわ。

信彥　あア、いゝよ。

正之助　兄さん、どこの原稿なの。

信彥　啄文社の近代小說集の飜譯だ。シュニッツラアを受持つたのだ。あすこの社は前貸を絕對にしないのだから、早く書きあげて持つて行かなくては金にならない。

千代子　もうぢきなの？

信彥　うむ、もう三十枚ほどだ。今晚一晚で出來るんだ。

千代子　出來たら、またわたし持つて行つてあげるわ。

信彥　あゝ賴むよ。だがお前忙しいぞ。あしたは。

千代子　當分ごた〳〵するでせうね。

信彥　うむ。

正之助　兄さん、わたし金はすこし持つてゐるんだよ。

信彥　（ぢつと弟を見る）

正之助　（まぶしさうにして）　今度の葬式の金ぐらゐはある。

信彥　どうしたのだ。

正之助　儲けたのさ。相場で。

信彥　ほんとか。

正之助　噓をつくものか。

信彥　ぢやあ、すこし借りよう。己の手でも三百圓位は出來る。

正之助　とにかく葬式は出來るだけ立派にしてあげよう

よ。方々で大きな事を云つてゐたお父さんなんだから、それが見すぼらしい葬式をされては、いかにも窮乏してゐたのが見え透くからなあ。

信彦　それもさうだ。(間) 敗軍の將を葬るのだからなあ。

正之助　葬の輿ぐらゐは立派なものに乘せてあげよう。金も無いのに自動車で飛ばせるのが好きな人だつた。

信彦　(淋しさうに) ほんたうにさうだ。いつか――己が常朝新聞にゐた時、面會に來て十圓ばかり金を貸せと云ふのだ。自動車代が拂へなくなつたのだね。自動車へ乘つて自動車代を伜の勤め先へ借りに來たのだ (間) さう云ふ人だつた。

正之助　――とにかく尻拔けの計畫ばかり立てゝ、一ツも成功した事がない事業家なんだから…… 根がお坊さん育ちなのだから。

信彦　さうさ！　時代は、かうした人を生存させて置くには、あまり變轉しすぎた。淡水でなければ生きられない生物の周圍が、次第に鹽水に變つて來てしまつたのだ。もう昔の人だよ。當節はこんな風では落伍者になるのは當然だ。

正之助　ほんたうだ。

(おゆう、上手より來る。)

おゆう　(顏色を變へておど／＼しながら) 正之助、巡査が來たよ、三池が引つ張つて來たのだよ。

千代子　(おろ／＼して) まあ、兄さん！　拘引されるのでせうか。

正之助　(苦笑) 三池と云ふ老爺も、年に似合はない馬鹿な奴だな。(上手へ退場)

おゆう　(あとに續きて去る)

千代子　(信彦に) 兄さん、どうしませう。

信彦　(笑ふ) 大丈夫だよ、心配する事は無い。大した事にはなりはしないよ。

千代子　すぐ連れて行かれるのでせうか、わたし心配だわ。見て來よう。(去る)

信彦　(下手の方へあゆむ、死骸の側へ行く。死骸の顏にはもう白布がかけてある。その傍に、姉のおてるが泣き崩れてゐる。信彦は姉の肩に手をかけて、手を張つて見せる。啞は、悲しさうに立つて涙を拭き乍ら、緣側から去る)

(信彦老父の死體の枕邊に坐つて、布をあげてその顏を見る。そして不覺の涙が頰を傳はつて流れるのを片手で抑へて泣く。)

(――雲が低くなつたと見えて、あたりはまた更に薄暗くなり、雨の音が新しく聞える。)

(やゝ間を置いて………。)

―― 幕 ――

二　幕　目

第一場　三池の家の庭隅

前幕の事があつてから八日目。晴れた秋の日の午後。

―正面に西洋館がある。白く塗られてある。それに日光が明るく照つてゐる。その前には楓の木が二三本植ゑてあつて、若葉の頃ならば、洋館の窓から薄青い光線を室内へ注ぐだらうと思はせる。その樹に寄せて、大きく粗末であるが、しツかりしたベンチが置いてある。雨ざらしになつて、色は褪せてゐる。そのベンチの側に籐の古ぼけた肘懸椅子が一つ置いてある。そこは庭の隅で、小高い、日當りのいゝ、ちよつと丘の上のやうな感じのする所である。

―邸は、三池幸七と云ふ金持のそれである。幸七は前幕に出てゐる金貸業である。親の代からの金貸業なのだ。

―洋館の窓には、美しい織出のある濃海老茶のカアテンが懸けてある。その前が出窓のやうになつてゐて、そこに鉢物の草花などがのせてある。その洋館は、幸七の一人息子、智三郎の部屋なのである。高利貸の家と云ふ概念から放れた、柔らかな美しい構造である。洋館から下手の方は母屋へ續いてゐる。

―智三郎は、幕明きに板つきで、正面の長椅子に腰を下してゐる。本が一册膝の上に開いたまゝ伏せてある。文學書であるらしく見える。籐椅子には厚いメリンスの座蒲團がのせてある。

―智三郎は陰鬱な、蒼白い顔をした廿七八の、智的ではあるが淋しい影に滿たされた青年である。唇の間に、思索から來てゐる深い皺がある。ぢつと何か考へてゐる。

どこかで百舌鳥が、きききききと鳴いてゐる。

―下手から、表の美津子が出て來る。靜かな優しい、それが淋しい感じを人に與へる女である。丸髷に結つてゐる。極めて淡い白かと見えるとき色の手絡をかけてゐる。姙娠してゐる。四月目ぐらゐである。あまり目に立つやうな事はなく、美しい姿態を損れてゐない。

美津子　（微笑）また此處にいらつしやいましたね。

智三郎　（振向かず）うむ。

美津子　お考へ事ですのね。

智三郎　（無言）

美津子　（淋しげなる表情、つぎは無く長椅子の背に手をかけ、右の手をあげて髪の髱のあたりの毛を直す）

智三郎　（やゝ間を置いて）こゝへお懸け！

美津子　はい。（云はるゝ通りにする。獨り言のやうに）いゝお天氣ですこと。

智三郎　いゝお天氣だなあ。暖かな日だ。玄關の彼岸櫻が返り咲きをして、哀れな花をつけたよ。

美津子　まあ、さやうですか。

智三郎　かうして日向ぼッこをしてゐると僕はなんだか日光を瀆してゐるもののやうな氣がする。

美津子　（暗い顏）

智三郎　僕などは日光を遮つてゐる資格は無い。お日樣が、あゝして世界中に押し照つてゐる。その光りの惠みを受けてゐる萬物の中で、この僕一人だけは日のめぐみを受ける資格が無いやうな氣がしてならない。僕のからだが、神聖な自然の光りを喰ひとめてゐるのは、一種の横領だ。

美津子　（ちッと夫の手をとり、涙ぐんでうつむく。どうして慰めていゝかわからないと云ふ心持になつてゐる）

智三郎　僕などは生きてゐる資格がないのだ。僕は存在の價値の無い哀れな者なんだ。

美津子　（小さな子にでも云ふやうに）もうおよしなさいね。

智三郎　（妻の手を靜かに避ける）僕がいつもさう思つてゐるのはお前も知つてゐる。かうして日光の前にゐると、一層明瞭にそれを感じるのだ。僕はどう考へても自分の生存が危險なものだとおもふのだ。僕は生れながら自然の意志に逆つて生れてゐる。自然は大きい。自然は自然自身の懷に僕のやうな餘計者を今日まで生存させてしまつた。然し僕には……

美津子　（哀訴するやうに）もう何かお考へにならないで下さいね。

智三郎　僕は恐しい。（ちッと妻を見る）お前が妊娠したのは愈々確實になつたが、その子にも僕の血が傳はつてゐる。さうすれば、僕の母の精神病は、僕を通してその子にも遺傳するのだ。

美津子　（聞くのが非常に辛いと云ふ發作的な手の運動をする）もう、どうぞ、お願ひですから……

智三郎　僕は、美津子お前が氣の毒だ。幾度云つても盡きない誌言を、また云はずにゐられないが僕はお前を戀した。どうしても二人は一緒にならずにゐられなくなつたのだ。僕等が相愛しさへしなかつたら、僕等の間に子は出來ない。さうして、お前も不仕合せな妻、不仕合せな母親にならずに濟んだのだつた。（懊惱す）なぜお前は僕と結婚したのだ。僕の家が代々高利貸なのは、物堅いお前のお父さんがひどくいやがつてゐられたのだ。さうだ、いやがられてゐる家だ。この三池の家の富は、人

の膏血を絞つて出來たのだ。不正な蓄財だ。僕は金に困つてゐる人々の苦しみや艱や、汗や涙や血を、生れた時から喰はせられて大きくなつたのだ。（憎げに）おい、お前はなぜ僕なんぞと結婚したんだい。なぜ嫉妬したんだい。僕はお前が、僕を振捨てゝ吳れたならば今日の苦しさはないのだ。僕の母さんが精神病で死んだ事は、結婚の前にお前に打明けてあつたのだ。遺傳だと云はなかつたのが、わるいと云ふのか。それを以て僕を咎めるのか。

美津子　あなた！　またそれが初まつたのですか。（涙をこぼす）わたくしはね、あなたがどんな方であらうとも、結婚して生涯御一緒にゐずにゐられなかつたのですよ。この三池のお家が、世間からどんなに憎まれてゐようとも、わたしまで憎まれようとも、わたしはあなたを捨てるなどゝはおもひもよらない事なのですよ。ですから、どうぞもうそんな事を考へて下さいますな。

智三郎　（神經的な哄笑をする）……淺薄だよ。淺薄だよ。（ふッと笑ひを納める）僕が情熱を失ふ、僕から肉慾が去つて行く、さうして、精神病の遺傳のある哀れな生きた死骸が一個殘つたと假定する。戀愛などはこの門の外ではあつたが、もう昔の夢になつたと假定する。愛情などゝ云ふものはよその國へでも行かねばならないやうな時が來る。その時お前は僕と結婚した事を悔むのだ。お前は僕を……さうだ、憎み初めるのだ。憎んでも憎んでも飽き足りないと思ふのだ。處女の神聖はこの男が蹂躙した、若さの美しさはこの男が奪つて行つた、そして甘い涙も熱い血も、この生きた骸が吸ひ取つてしまつたのだ、その代りに子と云ふ重い負擔を荷はした。しかも精神病の血統のある子を押付けた。憎い男だ……とさうお前が思ふ時が來るのだ。必ずその時が來るのだ。（落涙す）あゝ、その時はもうぢき來るのだ。僕はお前に濟まない。濟まない。

美津子　（さめ〴〵泣く）

（長き沈默。）

（百舌鳥の聲がきこえる。）

智三郎　（發作的に顏をあげて口ばやに云ふ）百舌鳥が啼いてる。百舌鳥が啼いてる。（美津子を見て、不審さうな顏をする）おや、お前泣いてゐるのだね。（何を泣いてゐるのだらうと考へる。その推理にひどく苦しむが、やがて思ひ出す）あゝ、僕が云つた事がまた氣に障つたのだね。（悲しさうな顏）僕はまたお前を苦しめるやうな事を何か云つたのだねえ。（思ひ出さうとしても思ひ出せないのを苦しむ。強く二三度頭を振る）あア、どうも頭の工合がわるくていけない。（後頭部を平手で叩く）

痛い、毎日痛い。

美津子　（良人が平靜になつたのを喜んで、すこし晴々する）あまり御本をお讀みになつたり、六ケしい事をお考へになるせゐよ。もう當分暢氣になさいましね。また月末になりましたら旅行でもしませう。

智三郎　（暗い顏）うむ、よからう。だがお前はもうそろそろ汽車はいけまい。

美津子　あら、まだ大丈夫だわ。（うつとりと醉つて來るやうな心持で）あのね、もし赤ちやんが男でしたらばね、母がどんなに喜ぶでせう。男の子と云ふものは母は一人も持つた事がないのですからね。

智三郎　（無言。沈んだ表情）

美津子　（ふと心なおびやかされたやうな氣持で口をつぐむ）

（やゝ間。）

（下手から鳥居とよ、登場する。三十ほどの深みのある美しい女。こゝの主い幸七の姿である。主婦代りにいろ〳〵家政を行つてゐる。商賣人らしい處も見える。）

おとよ　あらまあ、美津子さんも此方でしたのねえ。わたくし、若旦那をお探しゝてゐました。

美津子　御用でして？

おとよ　えゝ！（智三郎に）あの、若旦那、お客樣ですが……（名刺を渡す）

智三郎　（名刺を讀む）香川信彦！　よく文學書の飜譯などをしてゐるあの人かしらん？　どんな人ですか。

おとよ　おきんさんの話では、痩せた脊の高い、綺麗な人ださうです。御存じ無い方ですか。

智三郎　あア逢つた事のない人だが……（考へる）親父の處へ來た客ぢやないのかな。間違ひぢやないか知らん。

おとよ　わたしもさう思ひましたので、おきんさんに聞き直して貰つたのですが、初めから若旦那にと云つていらつしやつたさうです。わたしはまた、お友達かとおもひました。

智三郎　いゝえ、知らない人です。とにかく行つて、見ませう。（洋館の方を指して）あすこへ通して置いて下さい。

おとよ　はい。（去らんとする）

美津子　あの、わたくし行つて參りますわ。

おとよ　いえ、わたしは仕かけの用もありますから。

智三郎　いゝや、僕が行く。どうせ行かなくてはならないんだ。

（去る。）

おとよ　（椅子へ腰を下す）まあ、こゝは暖かですのねえ。

(まぶしさうに手をかざして向うを見る)
おや／＼、あすこの松がすこし枯れましたかしら。

美津子　まあ、ほんとね。いやなこと。

おとよ　──松が枯れるなんて氣持よくありませんね。(元氣よく) 植木屋さんを呼んで、明日でも一ツ診察させませう。蟲でもついたのなら療治をしないではいけますまいね。

美津子　さうですわね。(間) 不吉な事でもあるのではないでせうか。

おとよ　(快活に笑ふ) そんな事はありませんよ。まあ美津子さん、お若いのに似合はないで、擔ぎ屋さんですことね。

美津子　(笑ふ)

(下手からゴム鞠が一つ飛んで來て、おとよの傍へ落ちて一つはずむ。)

おとよ　(驚いて) あら！

(鞠の來た方を見る。おとよの連子の銀太郎が威勢よくかけ出して來る。七つになる林檎のやうに赤い頰をした可愛い子供である。)

銀太郎　(可笑しさうに笑ふ) 母ちやん、びつくらしたろ。

おとよ　なんですね、銀太郎さん！　また鞠をはふりますね。お庭ではいけないと云つたぢやないの。

銀太郎　鞠はふりしたんぢやないよ。母ちやんをおどかしてやろとおもつて、はふつたの。

おとよ　そんな事をして、美津子さんのお頭へでも當つたらどうして？　いたづらつ子ねえ。

銀太郎　(鞠を拾つて) いたづらつ子ぢやないよ、僕は。(鞠で美津子の膝を二つ三つ叩く) ねえ小母さん、痛かないねえ、ゴム鞠が當つたつて！

美津子　(可愛らしさうに頰ずりしながら) えゝ、えゝ、痛くはありませんとも。

おとよ　(その樣子を見ながら微笑する) 美津子さんが可愛がつて下さるので、いゝ氣になつてあまつたれますのよ。子供と云ふものはほんとに仕樣の無い……

銀太郎　(鞠を地に當てゝ強くはずませて、次にやゝ遠くへ投げる。鞠は高く一つはずんで洋館の高い窓から中へ飛び込んでしまふ) あらッ。

おとよ　(振向く) どうして？

銀太郎　窓の中へ入つてしまつたの！

おとよ　まあ、洋館の。困つたねえ、お客樣なのに。だからいけないと云ふぢやありませんか。

銀太郎　(しく／＼泣き出す)

美津子　(肩へ手をかけて) あら銀ちやん、可笑しいこと。小母さんが今取つて來てあげてよ。ね、ね、泣くのおよ

しなさい。

――道具變る――

第二場　智三郎の部屋

――前の場に見えてゐた洋館の内部である。室内は日本風に出來てゐる。たゞ天井が高いだけである。疊の上には絨氈が敷きつめてあつて、椅子や卓やその他の調度は西洋風である。押入や出入の襖は、高い天井から吊り下されたカアテンで隱されてゐる。書棚には本や雜誌の合本が、大分澤山詰め込んである。下手に出窓がある。そこが前の場に見えてゐた窓である。前の場は舞臺に向つて左手の方にある心持で装置されてゐる。

――時間は前の場に最後より五分程前の心持である。

幕があくとすぐに香川信彦が小間使おきんに案内されて入つて來る。信彦は序幕の時から見ると、ずつと險しい顏をしてゐる。蒼ざめて鋭い表情をしてゐる。疲れ切つて興奮してゐる人の樣子である。髯もすこし伸びてゐる

小間使　（椅子を勸める）さあどうぞ、お當て下さいまし。

信彦　（無愛想な會釋をする）はあ。

小間使　たゞ今ぢき參ります。

信彦　はあ。

（小間使去る。）

（信彦、部屋の中を見廻し不快さうな色を濃くする。）

（間。）

信彦　（舌打をして、袂から煙草を出して一本くはへて、マチを取上げると、窓からゴム鞠が一つ飛び込んで來て、二つ三つはずむ。信彦ちよつとそれを見て、やがて鞠が落着くのを見屆けると、マチを擦つて煙草へ點け、それからゆつくりと立つて、鞠を拾ふ。そして、窓際から三尺ほど放れた處で立ち止つて、日の當つてゐる戸外を見る。おや、と云ふやうな表情で、ぢつと何か見つめてゐる。）

（襖があく。信彦振向く。）

小間使　（登場、茶を勸める）

信彦　ありがたう。（鞠を卓の上に置く）今、これが窓から飛び込んで來ましたから……。

小間使　（笑ふ）おや、それはどうも。

信彦　……あの、妙な事を聞きますが、こちらの若主人の奧さんは、美津子さんと云ふのですか。

小間使　（無意味な微笑）さやうで御座います。

信彦　では、番町の中野さんのお孃さんですね。

小間使　えゝ、さやうで御座います。

信彦　（意外らしい表情）……さうですか。

（間。）

（小間使、會釋して去る。）

信彦　（腕組をして考へ込む）ふむ。可笑しな事だなあ。

（智三郎登場す。前幕の着物の上に羽織をかけてゐる。）

智三郎　どうもお待たせ致しました。

信彦　どう致しまして。

智三郎　初めまして。

信彦　（辭儀を返して）突然に出まして、失禮を致しました。わたしは香川信彦と申します。父は、あなたの御親父と久しい間の御近付で御座いましたが……。

智三郎　あゝ、左樣ですか。あなたのお名前はよく存じて居ります。書物や雜誌で度々……。

信彦　いや、どうも。（苦笑）實は、あなたがもとの「藝術至上」の同人でいらつしやつたのを、ほんの近頃知りまして。

智三郎　お恥しい次第です。ほんとに餘技文學なのですからね。（淋しく笑ふ）

信彦　それで……（間）今日ふいにお目に掛りに出ましたのはあなたとしても、またわたし自身としてもですが、正直愉快な事ではない……甚だ勝手な事をお願ひに參つたのですが、

智三郎　はあ。

信彦　――わたしの父は、古くからこちらの御主人とお近付に願つてゐたと申すよりは、實は、古くからこちらに「債務」があるのです。

智三郎　（ふと不快が心をかすめる）は。

信彦　ところが父は一週間程前に死亡致しました。御父さんは丁度、父が息を引取ると同時に、わたしの宅へ御いでになりました。

智三郎　（緊張する）はあ。

信彦　申す迄も無い、これは拜借してあつたものゝ事でゞす。父は……滑稽な話ですが、わたしに相談もせずに、父の死後の債務はわたしが繼承すべきだと云ふ證文を差上げてあつたのです。いや、これにはいろ／＼事情もあります。普通、こちらあたりの御取引の條件になつてゐる連帶借用人が有名無實であつたので、御親父は非常に御氣遣ひなすつたらしいのです。

智三郎　（口ごもりながら）あの、失禮ですけれども、わたくしは父の商賣の事はまるで知りませんので、知らないと云ふより、あアした商賣に大反對なので、その點では父を憎んでゐる程なのですから、隨つて御取引の上の、小々した事をわたくしに御聞かせになつても、何にもな

りませんのですが……わたくしは一切口を出しませんので。

信彦　……御尤もです。然し……

智三郎　（遮る）そんなわけですから、あなたがおいで下すつたのも、全然父の商賣とは關係の無い事で――まあ文學上の事でゞもあるかと思つて御目にかゝりましたのです。さうでないと、わたくしも父と同じ商賣をしてゐる人間になります。いくら親子でもそれはいやです。わたくしは、高利を貸して蓄財したこの家に住んでゐるのさへ、非常に辛いのです。實にたまらないのです。

信彦　それはわたしも想像してゐました。

智三郎　……わたくしの苦しみは、恐らくあなたの御想像以上なのです。

信彦　いや、よくわかりました。然しわたしが今日伺つたのは、あなたを御親父同様の商賣人として何かお願ひしようとしたのではないのです。わたしはあなたが文學を研究していらつしやるのを知つて、一個の同志として、御助力を得ようと思つて參つたのです。實は、先達て父の臨終の數分後、御親父がおいで下すつた時に、わたしの弟が――こいつはもうお話にならない單純な人間で、わたしと御親父と話し合つてゐるのを隣室で聞いてゐてどう思つたのか突然三池さんに亂暴な事をしたのです。それで三池さんはそれをひどく憤慨なすつて弟を警察へ拘引させたのです。

智三郎　（顔色をかへる）は、それで？

信彦　生憎係りの警部が御親父のお知り合ひらしく、その爲に曖昧な名目で、弟は二三日警察へ留められました。（涙ぐむ）おやぢの葬式を、どうやらかうやら濟ませた翌る日、やつと歸宅を許されたのです。

智三郎　（痛ましさうな表情、唾を飲む）

信彦　そこまではまだよかつたのです。弟の奴は、馬鹿な奴で、お恥しい話ですが、勤めてゐる兜町の店の金をつかひ込んでゐたのが、一昨日になつて暴露したのです。それがわかると、弟はふいとどこかへ逐電してしまひました。泣面に蜂なのです。（間）父は、事業が好きで、生前から方々へ澤山の負債を拵へてそれで苦しんでゐました。父の事業熱は、わたし共をのべつ辛い目に逢はしてゐたのです。高利を借りる事などは、飯を喰ふやうに當り前のやうにしてゐたのです。死んでしまつたので、いろ／＼の方面へどれ程迷惑をかけたかわかりません。（間）然し、よくしたもので、長い取引をしてゐた金融業者の中では氣の毒な人だと云つて、證文に棒を引いて與れたのも三人ほどあります。また連帶人が進んで引負つてくれたのもあります。そんなこんなであらかたは片

付きさうです。大口は、こちら一件だけになりました。

智三郎　（うなだれてゐる、無言）

信彦　平つたく云へば、わたしは今、頭の中が掻むしられるやうな氣持でゐます。父の死後、三池さんがわたしに負債の事で御要求のなさり方は實に辛辣を極めてゐるのです。しかも、こちらからの負債と云ふのは、單純な借用金ではないのです。こちらの御親父と外の三四人とで、ある會社を組織した時の、その損失の分擔額なので、それを三池さんは、借用證書におさせになつたのです。父は頭の粗笨な人間でしたので、無頓着に貸借關係にしてしまひましたが……當時の事情を知つてゐる人に聞くとそれは、組合員中第一の金持の三池さんが負擔して下すつてもいゝ筈のものださうです。いや、當然さうあるべきだつたのだ、と云ふ事です。（間）何れにしても、父が馬鹿なので、その爲に僕等が苦しむのは仕方ありませんが、今度、父が死んだ上は多少力にもならうと思つてゐた弟が、刑事問題に觸れて逃亡してしまひ、老母と、啞の姉と、まだ子供の妹とを、わたしがペン一本で喰はせて行かうと云ふのは……たゞそれだけならまだしも、その上多額な借金を負はされては、日々喰べる米を芋に代へても暮せなくなるのです。

智三郎　父はそれを知つてゐるのでせうか。

信彦　勿論です。現に目前に幾度か見てゐられます。あなたの御父樣を惡く云つては濟みませんが、今度のわたしの經驗は、わたし自身には苦しさや辛さを超越してしまつて、たゞ驚いてゐるばかりなのです。それほどに冷酷な御督促を受けてゐます。

智三郎　金額は如何程ぐらゐですか。

信彦　一萬二千圓ほどです。生憎そのうち七千圓ほどは來週の金曜が期限なのです。

智三郎　父はみんな返せと云ひますか。

信彦　えゝ！

（――沈默。）

智三郎　（落涙する）

信彦　尤も、返せないのは重々御承知なので、利子だけを入れゝば、もうすこしの間の猶豫をしようと云ひます。然し、その利子は毎月ざつと七百圓ほどです。（間、淋しく笑ふ）とても出來ません。父はとにかく、それぐらゐの金を方々へヘツギを當て〳〵、お拂ひしてゐたのですね。とうに元金以上の金を、いや元金の何倍かを御拂ひしてゐるのです。で、あなたにおすがりして、お父さんのお心持を、すこし和げて頂けるやうに、窮し切つて、おすがりに來たのです。わたしの氣持も御察し下さい。

智三郎　（沈痛なる顏）は。

信彦　實は、あなたが文學や美術の研究家だと云ふので特別の御同情を得られるだらうとおもつて伺ひました……

智三郎　(間を置いて)　わたくしは、父に食はせて、住まはせて着せて貰つてゐるのさへ、汚辱を受けてゐるやうに思つてゐますので、すこしまとまつた金などはまるで貰はない事にしてゐます。もしわたくしが清い財寶を蓄へてゐたなら、喜んであなたの爲に父へ支拂ふのでせうけれど……。

信彦　いや〳〵、それはお志だけでもう十分です。わたしは、お父様の鋭鋒さへ、すこし和げて頂ければ恐らく意外に樂な氣持になれるでせう。殆ど間髮を入れずに責め立てられてゐますので、御親父は、いつぞや弟が亂暴な事をしたので、それをひどく恨んでいらつしやるやうです。返すが〳〵も弟には泣かされます。

(沈默。)

智三郎　(呟くやうに)　わたしの力で出來る事なら……。

信彦　ほんとに御迷惑なお願ひで……。

智三郎　父の商賣には、絕對にわたしは不贊成で、その爲に幾度云ひ爭つたか知れません。この家にゐるのもいやなので、年の中大半は家内を連れて旅行してゐる位なのです。當面、取引上の事に、一寸でも口を出すと、わたしは父の商買を認容したやうになるので……それがいやなので、どんな事でも一切かゝづらはない事にしてゐますが……實に身ぶるひが出ます。いろ〳〵なひどい事をして、鬼のやうな事をして債務者の血を吸つてゐるのでせう。いつぞや何新聞でしたかに、父の事が出ました時などは、わたしがまだ學校時代でしたが、辛くて悲しくて、父がこの商買をやめなければ、自殺してしまはうかとおもひました位です。戀愛さへなかつたら、とうに自殺してゐたわたしかも知れません。

信彦　あなたは矢田陸を御存じでせう。

智三郎　えゝ！　家内の母の從兄弟になつてゐます。御存じですか。

信彦　(曖昧に)　いえ、あのちよつと。

(間。)

智三郎　父は先刻留守でしたが、近所へ行つたのですから、もう歸つてゐる筈です。とにかく、わたしが話して見ませう。

信彦　どうか。苦しまぎれに、あなたへまで迷惑をおかけしましてお恥しく思ひます。

智三郎　いゝえ。

(立つて襖を開ける。と、そこに主の三池幸七が、苦り切つた顏をして立つてゐる。)

智三郎　おや、お父さん！

幸七　（ずいと中へ入る、信彦を尻眼にかけて）香川信彦さんと云ふ客がお前の處においでだとおとよが云つたので、わしも逢ひたいので來た。

智三郎　（氣色ばむ）お父さん！　立聞をしてゐたのですか。

幸七　（平氣で）聞くともなく聞いたよ。（信彦に）や、ようこそ。

信彦　（默禮する）

幸七　（信彦を見下すやうにして）香川さん！　あなたのやり方は汚ない。お坊さんの悴を抱き込まうとしても、さうはいきませんぜ。

智三郎　お父さん！

幸七　（鋭く）これはわしの商買だ。（信彦に）香川さん、とにかくどうにでも早く話をきめて下さい。昨日、あなたに云つた通りにすれば、わたしとしては大讓歩なのだ。

信彦　三池さん！　わたしが毎月七百圓の金を拵へるのを三月も續け得たら、三月後には必ず死んでゐるのに違ひありません。

幸七　（冷笑）

信彦　（哀訴するやうに）どうぞ、もう一度考へて下さい。全體あの負債は。

幸七　また會社の話かね。それは昔の事で、現在は書き換へた證文が口をきゝますよ。

信彦　ではどうしても、すこしも考へてくれる餘地は無いですね。

幸七　（冷笑）まあ、さうです。

信彦　三池さん。（しやがれた聲になる）わたしはあなたを生涯恨みますよ。

幸七　（うそぶく）

信彦　（靜かに）脅し文句ではありませんよ。御子息を此處へ置いて云ふのは可笑しいが、御子息は當然あなたよりあとへ生き殘る人だ。わたしもさうだ。あなたは多くの人を苦しめても、うまく行けば平穩に死ねるかも知れない。が、あなたの一人息子の此智三郎さんは、あなたよりは弱い人だ。わたしは必ず恨みを返すつもりだ。（惡魔のやうな氣持で）あなたには手が出せなくとも、息子さんには氣の毒でも、かうなれば必ず法網をくゞり拔けて、あなたの死後の三池家に、僕のあるだけの才智を絞つて、祟りの網をかぶせるからさう思つてゐなさるがいゝ。

幸七　（冷笑が次第に怒りに代る）ふむ。

信彦　わたしは魔道に墮ちてもいゝ。生きながらの鬼でもいゝ。（あゆむ）では三池さん、金は期日までにはきつとどうにかする。左樣なら、智三郎さん！

智三郎（よろめく）ゆるして下さい。

（信彦、靜かに去る。）

智三郎（極度に煩悶して、兩の手で自分の頭髪を掻きむしり、卓へ突伏して悶えうめく）

幸七（ぼんやりと信彦のあとを見送つてゐたが、無意識に二三歩前へ出る）

智三郎（はげしく自分の髪の毛を引むしる。顔を上げると眼は据つて顔の筋肉は硬化したやうに動かない、齒は白くむき出してゐる）

幸七（息子の異常な様子に氣がつく）どうした。

智三郎（父親の顔をぢつと見る。無表情。やがて引つられたやうに口をゆがめる。笑つたと云ふにはあまり凄い表情である。うめくやうに）うゝゝゝ。

幸七（ぢつと息子の様子を凝視する）

智三郎（憑きものがしたやうな足取で部屋を出て行く）

――幕――

三幕目

第一場　カフエライオネスの三階

――銀座の或るレストランの、塔のやうになつてゐる階上。舞臺上手へ寄せて小さな室を作る。特別室の心で、寢椅子だとか、肘掛椅子だとかゞある。食卓、椅子、鉢の植木、流行の畫家の描いた油畫の小品の掛額その他いろ／＼。

室の上手と正面とに窓がある。そこから下に街の四つ角が見える。綱手に張られた電線、街路樹の下に間斷無い人通り、けたゝましく徂徠する乘物類などが見下せる。

――部屋の出入口は下手に向つてつけられてある。その扉を出て下手へ眞直に廊下。右手は隣の壁。その中ほどにやはり扉がある。ずつと下手寄、舞臺裏に階段がある心。そこから舞臺へ出入りする。

×

前幕から二日目、午後四時頃。秋の日はよほど西へ廻つてゐる、窓から床の上に、黄ばんだ、うすら冷い日射を投げられてある。街のどよめきが、別の世界の物の音でもあるかのやうに、この室の情調とはひどく違つた感じに響いて來る。

×

――室の中には、香川信彦と小野京子とが向ひ合つて坐つてゐる。二人とも打くつろいだ様子である。京子は廿七八に見える美人。ひどく外國好みの髪で、顔なども毛唐の好きさうな當世風な眼鼻立ちである。華美

な、贅澤な服裝。長椅の上へ斜に凭りかゝつてゐる。信彥は女と茶卓を距て、肘掛椅子に背をもたせて煙草を喫んでゐる。

——女給仕が出て來て、紅茶を二人の前へ置く。

京子　あのね、この室の鍵を貸して貰へますね。

給仕　はい。（化粧棚を指して）あそこの抽斗に入つて居ります。（そこから鍵を出して京子に渡す）これで御座います。

京子　（無意味に聲を立てゝ笑ふ）どうも有難う。

給仕　（去らんとする）

京子　あのそれからもう一人、わたしを訪ねて來る方があるのですが……。

給仕　はあ、畏りました。

京子　階下の人には云つてありますが、來たらすぐ通して下さい。小野と聞いて參りますからね。

給仕　はい。（去る）

京子　（呟く）ほんとに遲いこと。

信彥　來るでせうか。

京子　大丈夫來るでせう。來て、びつくりするでせう。

信彥　（默考）

京子　大層考へ込んで仕舞ひましたね。（微笑）御尤もな事ですよ。

信彥　（苦笑）そんなのではありませんが……。

京子　うまく仰有い、寢ても覺めても——でせう。

信彥　（苦笑）

京子　まあ、うまくおやんなさいよ。でもちよいと妙な氣がしないでもないわね。

信彥　あの人が氣の毒だと云ふのですか。

京子　氣の毒と云ふわけでも無いけれども。（間）でもね、兎に角、一人魔道へ引入れると云ふ事は、愉快な氣持がする事ですわ。仲間が殖えるのですものね。

信彥　（淋しげな笑ひ）

京子　あの方が來たら、わたしすぐに歸つてよ。

信彥　えゝ、どうぞ御引取下さい。

京子　まア現金ねえ。仲人も三年經てば用は無しの格ですね。三年どころか對手が來さへすれば、速刻お暇が出るのですから、橋渡しなんて云ふものは、埋らない事ですわね。

信彥　その代り、また何か御用の時埋合せますよ。

京子　まあ生涯、恩に着せますね。あなたのやうな文豪が……

信彥　文豪は無いでせう。

京子　まあさ、その文豪のやうな方が頭を下げて頼むのだから、呼出しの手紙を書いたのです。外の方ならいくら

賄賂を下すつてもいやな事ですね。然し美津子さんと云ふ人は、氣の弱い、意氣地の無い方ですから、うまく行けばいゝがとおもひますわ。(すこし下品な笑ひ)

信彦　そこは自信があるのです。

京子　ほゝゝ、あなたも凄くなつたのね。

信彦　えゝ！　苦勞をしますとね、凄くならざるを得ませんさ。

京子　せい〳〵凄くおなんなさいましよ。

信彦　でも、あなたのやうに凄くなるにはすこし間がありさうです。

京子　御挨拶ですこと。(氣のよさゝうな笑ひ)　でも、わたくしには元手がかゝつてゐますよ。

信彦　伊太利の若き貴族ですかね。

京子　おほゝゝ、そればかりでもありませんさ。

信彦　驚いた。

京子　今更ですか。

信彦　だが奥さん！　あなたは全く徹底してゐますよ、その點だけは敬服します。

京子　他にだつて敬服する處は澤山ありませうよ。

信彦　左様さ。次いでは美貌であること。

京子　あらいやだ、嬉しがらせなら、よそへ行つて仰有い。よその女學校の生徒かなんかに。でなけりや、美津子さんのやうな、うぶな若い人に。わたしなんぞにはもう利目無しです。

信彦　いやはや。(時計を見る)

京子　ひどくお急きになりますこと。氣がもめますか。

信彦　(アイロニカルに)　胸がどき〳〵してゐます。

京子　何時です。四時過ぎましたか。

信彦　十分程過ぎました。來るのかしらん。

京子　大丈夫ですよ。わたしが急に逢ひたいと云つて使ひを出したのですもの、使に畏まりましたと云ふ返事だつたのですからね。尤もね、いくら大丈夫ときまつてゐても、とかく戀路の闇でね、いろ〳〵な疑ひの起るものですわ

信彦　それもさうかも知れません。

京子　でもびつくりするでせうね。あなた、一度も話しなんかした事はないのでせう。

信彦　えゝ、有りません。一昨日、あすこの家へ用事で行つた時にも、窓から庭に立つてゐたのを見ましたし、娘時代だつて此方ではよく知つてゐましたが、先方ではまるで知らないでせうから。

京子　大層、引く手あまたでしたつてね。あなたもその内の一人だつたのね。三池さんに射落されたのを、指をくはへて今日迄見てゐたのね。意氣地無しよ一トロに云へ

ば。でも、これからの方が深刻でいゝわね。まあ、最後の勝利を得るのですね。

信彦　（何か考へ乍ら、生返事をする）えゝ、まあそんな……。

（こゝの對話の間に、女給仕隣室へ入り、やがて出て來る。下手の階段を上つて、他の給仕出て來る。）

女給仕A　こちらに小野さんと云ふ方いらつしやるわね。

女給仕B　えゝ！　二號のお部屋よ。

女給仕A　さう、ありがたう。（退場）

女給仕B　（續いて退場）

（引きちがひに、金モオルの飾のついた服を着た少年の給仕が、一人の女客を案内して來る。前幕の香川美津子である。）

少年の給仕　こちらです。

美津子　（うなづく）

少年の給仕　（信彦等の部屋の扉をノックする）

京子　はい、お入りなさい。

少年の給仕　（扉をあける）お連樣で御座います。

京子　（立ちながら）さあ、どうぞ。

少年の給仕　（美津子に）どうぞこちらへ。

美津子　（スカアフをとりながら）どうも有難う。

少年の給仕　（去る）

美津子　（中へ入る）まあ、京子さん、あたし遲くなつて仕舞つて、ほんとに濟みませんでした。

京子　いゝえ、どう致しまして。御迷惑でしたわね。（美津子が氣がつかない時に信彦に向つて、いたづらつ子のやうな笑ひを見せる）

美津子　（信彦のゐるのに氣がついて）あら。

京子　（かまはずに）さあ、さあ、こちらへ。

美津子　まアわたくし、ちつとも氣がつきませんで。お連の方がいらつしやつたのに。（ちよつと信彦に會釋する）

信彦　（陰氣な、煩悶のある表情、かろく頭を下げる）

京子　美津子さん、この方を御存じなくて。

美津子　（素ばやく再び信彦を見る）えゝ、どこかでお目にかゝつたやうに思へますけれどもどなたでしたか……

京子　香川信彦と云ふ方です、文學者の。

美津子　では一昨日……

信彦　（引き取つて）はあ、一昨日御主人にお目に掛りに出ました香川です。

京子　改めて御紹介致します。こちらが三池美津子さんこちらが香川信彦さんです。何分よろしく

美津子　（不審さうな表情をすぐ收めて辭宜する）初めまして。

信彦　（挨拶する）……どうぞよろしく。

京子　で、濟みましたわね。さあ美津子さん、こゝへお掛けなさい。さア、どうぞこゝへ。
美津子　どうも。
京子　あなた、御迷惑でしたでせう、御用の多い處を。
美津子　いゝえ、わざ〳〵お使ひで恐れ入りました。
京子　旦那樣、御變り無くつて？
美津子　えゝ。（暗い顏）なんですか、二三日工合が惡いので、醫者が參つて居ります。
京子　おや、どこかおわるいのですの。
美津子　平常から病人のやうな人ですが、今度はすこし……やはり神經衰弱なのでせうか知ら、頭の工合がひどくわるいので……。
京子　おや〳〵、ではお頭痛がなさるのですのね。
美津子　（曖昧に）えゝ、まあさうで……。眠れさへすればよくなるのでせうと思ひますので、藥の力で眠らせて居ります。のべつうとうとして居ります。覺めますと工合がわるいので誠に困ります。……
京子　神經衰弱は御新婚とつきものですわ。（笑ふ）
美津子　まあ。（紅くなる）
京子　御心配は入りませんわ。……あの、今日來て頂いたのはね、この香川さんが、是非あなたにお目に掛つてお話ししたい事があると仰有るので、實は、あたくし、御紹介の役なのですよ。
美津子　（當惑したやうな顏）……はあ。
京子　御紹介が濟めば、わたくしはお役御免なのですわ。悉しい事は直にお聞き下さいまし。（立つ）
美津子　あら京子さん、それは困りますわ。あなた、お歸りになるの？
京子　……あのう、いゝえ、階下でお待ちして居ります。御話が濟みましたらすぐまた參ります。自動車の中へ手提を置いて來てしまつて、それを取りに參りますの。
美津子　では、すぐにいらつしやつて下さいね。でないと、わたし困りますから。
京子　大丈夫よ。それに、香川さんは紳士でいらつしやいます。
美津子　（また困つて）まア、わたしそんな意味で申したのではないのですわ。とにかく、あなたがゐて下さらないでは。……でないと、わたくしも。
京子　大丈夫ですのよ、すぐに上つて來ますよ。（笑ふ）そんな赤ちやんのやうな事を仰有らないで、こゝですこしこちらとお話しをなすつていらつしやい。（信彥と眼交ぜする）ね、すぐ參りますわ。（去る）
美津子　（間の惡さうに椅子に腰を下す）
信彥　（ちつと考へ込んでゐる）

（長い、息のつまるやうな間。）

美津子 （立つて扉の方へ歩む）

信彦 （素早く出口をふさぐ） どちらへ行らつしやいます。

美津子 階下へ參ります。

信彦 まあ、ちよツとお待ち下さい。お話しはすぐ濟みます。

美津子 では失禮で御座いますが、わたくし、少々急ぎますので、どうぞ御手短かに。

信彦 畏まりました。

（兩人再び直對して腰を下す。）

信彦 美津子さん！ あなたは矢田隆を御存じですね。

美津子 （顏色を變ふ） はい、あの……

信彦 あれは僕の親友です。今は神戸へ行つてゐます。あなたが三池美津子の名にならない前、中野のお孃さんでいらつしやる頃から、僕は、あなたのお名を矢田を通じて聞いてゐました。御見掛けした事も一再に止まりませんでした。

美津子 （おど／＼した心を隱して） さやうでしたか、まあ。

信彦 ですが、あの矢田と云ふ男も亂暴な奴でしたなあ、あなたも飛んだ御災難でしたね。

美津子 （強ひて微笑す） と申しますと。

信彦 ……飛んだ奴に見込まれて御迷惑をなさいましたね。

美津子 （無言）

信彦 美津子さん、僕はあなたの祕密を知つてゐるのです。貞操と云ふものはもろいものですなあ。

美津子 なんですつて？

信彦 ……汝の名は女なりと云ふ字義通り、三池さんへ御かたづきの前に起つた悲壯な出來事です。平つたく云へば、矢田隆が手籠同樣にあなたを犯したのを僕は知つてゐたのです。あの男は死ぬ程あなたを思つてゐましたが人間はすこし無思慮でした。あなたの拂つた犧牲は、やうやく新郎の三池智三郎氏の生命を安穩にしたのです。矢田はまつたく逆上したやうになつてゐましたからね。その情熱に身をお任せになつたあなたは、やうやくそれで危難を切拔けて相愛の智三郎氏と結婚なすつた。あの頃の事を、僕はよく存じてゐます。

美津子 （蒼白になる） それでどうなさらうと仰有るのです。

信彦 先日、御うちへ出た時、三年ぶりであなたを見ました。今度は矢田で無く此僕が、あなたの容色に迷つたのです。

美津子　（立つ）
信彦　（扉に近づき、靜かに鍵をかふ）
美津子　まあ、何をなさいます。
信彦　小野夫人はもう歸つたのです。あの人は僕に力を藉して吳れました。
美津子　あゝ。（泣き出す）口惜しい。
信彦　御察しします。然し、僕はあなたの口惜しさ以上の苦しさを持つてゐます。ねえ、美津子さん。（手をとる）
美津子　（きびしく撥ねのける）何をなさいます。
信彦　僕は、あなたが好きなのです。
美津子　卑怯な、あんまりです。皆、わたくしの覺えの無い事です。矢田さんと云ふ方は知つてゐますが仰有るやうな忌まはしい關係なんかありませんでした。あなたは云ひ掛りをなさらうとしてゐるのですね。
信彦　（冷笑）云ひ掛りではありません。あなたが、矢田の魔手に倒れた後、口止に送つた手紙と云ふのを僕は持つてゐます。覺えがあるでせうね。
美津子　存じません。
信彦　では、僕はおうちの御主人へその手紙を御見せして筆蹟の鑑定を願はうかしらん。
美津子　あなたはわたくしを强迫なさるのですね。
信彦　さうです。

美津子　なんのお恨みがあるのです。
信彦　恨みよりは目下は抱愛です。
美津子　いゝえ、嘘です。あなたはわたくしを苦しめるのが目的なのです。わたくしや三池を苦しめるのが目的なのです。それはあんまり下等です。
信彦　さうかも知れません。いや、たしかに下等です。
美津子　わたくしは人の妻ですよ。（信彦あゆむ、美津子飛のく）お寄りになると聲を立てますよ。
信彦　御隨意に。こちらは三階で、下へ聞えるには電車の音がうるさ過ぎます。隣の部屋とは壁が厚過ぎます。それればかりではない、あなたが聲を立てれば、或は、僕は此室を引取るかも知れない。然し、僕の持つてゐるあなたの手紙は、平和なあなた方御夫婦の中を裂くかも知れません。よしんば三池氏が外面的にそれを寛しても、二人の精神には、永久の疵がつきますよ。裂痕が入りますよ。
美津子　……主人は今ひどい神經衰弱にかゝつてゐます。どうか此上主人を苦しめては下さいますな。
信彦　仰せまでもありません。然し、それはあなたの御意志次第です。
美津子　わたくしにどうしろと仰有るのですか。
信彦　僕の望みを容れて下さい。
美津子　お斷り申します。

信彦　では御主人を不本意ながら苦しめる事になるかも知れませんが……。

美津子　まあ、あなた。(泣く)

信彦　どうも甚だ殘念です。

美津子　わたし共を苦しめて、何が面白いのです。わたし共のやうな弱い情無い夫婦を苦しめて……。

信彦　それは僕にも分りません。とにかく美津子さん。(捕へようとする)

美津子　(逃れる)　待つて下さい。御相談です。それを賣つて下さい。

信彦　賣つてもよろしいが高いのです。とても……失禮ですが値が折合ひますまい。

美津子　仰有つて下さい、どうぞ。

信彦　駄目です。無駄です。僕の希望はそれではない、あなたの愛を引換へにします。

美津子　いくらわたしが愚かでも祕密を買ふのに、もつと大きな祕密を御渡しは致しません。

信彦　(捕へようとする)

美津子　(避けながら)　たつて無理な事をなさると、この窓から飛び下ります。

信彦　下は敷石です、往來の煉瓦道です。頭が砕けて死にますよ。

美津子　勿論存じて居ります。死ぬ方がましなのですから。その代り、あなたは損をなさいますよ。お金もとれず、わたくしをも失ひますよ、

信彦　あなたが死ぬ。(慘忍な微笑)　それは面白い。あなた自身には氣の毒だが、僕には愉快です。三池の家を亡ぼす血祭りだ。

美津子　どうして三池にそんな恨みがあるのですか。

信彦　三池幸七は父にも僕にも仇敵だ。

美津子　智三郎夫婦とは關係が無さすぎます。あんまりです。

信彦　處があります。三池幸七を内的に苦しめてやるには、あなた方若夫婦から手をつけるのが近道です。

美津子　……脅しに申すのではありませんよ。わたしはほんとにこゝから飛降りますよ。

信彦　(美津子を追ひ廻す)　初めは復讐の手段だつたが、……今はほんとの戀になつたかも知れない。美津子さん僕は、僕は……(悶々する)

美津子　ですから、お金でどうか許して下さい。さうすれば、また後もある事です。

信彦　(狂ふやうに)　いやです、いやです。

美津子　(逃げる)

信彦　(激しく狂暴に追ふ)

美津子　（叫ぶ）どなたか來て下さい。あれえ。

信彥　（美津子を捕へる、爭鬪、美津子の袖千切れて信彥の手に殘る）

（隣室の扉の外に二三人の男女廊下へ出て來る。下手の階下から果物の鉢を持つた女給が出て來る。皆不審さうに顏を見合せてゐる。）

美津子　（追ひ詰められて窓際に凭る）

信彥　（美津子を抱擁する）

美津子　（鋭く叫び、身を飜へして窓から飛ぶ）

信彥　あ。（驚いてよろめき、窓のふちへ手を掛けそこから下を覗き、吸ひ込まれるやうに續いて飛ぶ）

（日、全く落ちて秋らしい靜かな夕空に星がまたゝき初める。）

――道具變る――

大詰　三池幸七の家、主の居間

立派な日本間、上手に簿記臺風の事務机があり、壁にきめ込みにして、三號の金庫がある。部屋の向う側は廊下になつてゐる。廊下の向うはやはりいくつかの室がある。非常に立派な神棚がある。舞臺向つて左手には六疊位の心持の部屋があつて、中央に黑檀の大きな卓が置いてある。それを中にはさんで座蒲團が二つ置いてある。ちよつとした應接につかふ間である。卓の上には硯箱がのせてある。二つの部屋の仕切は襖である。

×

時刻は、前の場の出來事があつてから三四時間經つてゐる。

九時近い。上手の部屋の卓上には、卓上電話に並んでスタンドの電燈が、牡丹色の大きな絹の蓋つけてゐる。そのほか、よき處に電燈が下つてゐる。明るい光が、秋の夜の疊を照らして小波の影を見せてゐる。

×

――主幸七調べ物をしてゐる。その傍に手代の松本文治が手傳つてゐる。文治は三十七八の、痩せた光つた顏の男。すこしも笑ひ顏をしない種類の人間。

幸七　（帳面を片付けながら）では、お前は明日太田と嘉納へ午前中に行つて來て呉れ。

文治　へい。

幸七　午後、役場へ行つて、片つ方のを濟ませる。あさつての晩、代書の今井と春田をどこかで飯でも喰はせてやつてあれを探つて見て呉れ。さうすれば大抵濟むなあ。

文治　へい、さやうです。（帳面を閉ぢ、其上へ算盤をのせる）

（女中登場。）

女中　あの、お客様です。

文治　どなただい。

女中　お名前を幾度聞いても仰有いません。御主人に逢へば分ると云つて玄關に立つておいでゞす。

幸七　どんな人だい。

女中　はい。廿七八の商人體の方で御座います。

幸七　どんな風をしてゐる。貧乏人かい。

女中　なんですか薄寒さうな人です。

幸七　（文治に）お前行つて見て呉れ。商買の事だつたらよく聞いて置いて見な。

文治　へい

幸七　周旋のやうだつたら斷りなよ。大口は手控へにして居りますとか何とか云つてな。

文治　へい。（去る）

幸七　（女中に）お茶を持つて來てお呉れ。

女中　はい。（去る）

幸七　（思ひ出したやうに算盤を取つて、はじきながら考へてゐる。犬の遠吠が聞える）

（正面の障子がそろ／＼と開く。）

（智三郎が影のやうにすつと入つて來る。眞蒼な顔をしてゐる。眼がくぼんで凄い程でめる。頬もこけてゐる。）

幸七　（振向く）どうした、智三郎！　氣分はいゝかい。どんなだい。

智三郎　（そこへ坐る）よく睡ました。然し夢ばかり見てゐました。頭が痛くていけません。

幸七　さうか、もつと寢てゐればいゝのに。

智三郎　美津子はどこへ行きました。

幸七　なんだか夕方銀座まで行くと云つて出たが、まだ歸つて來ないかい。

智三郎　銀座まで……？（考へる）どうも變だなあ。

幸七　どうした。

智三郎　今、彼女の夢を見ました。（あてど無く空を見て考へてゐる）

幸七　（何か云はうとして口をつぐむ）

智三郎　（ふいと、思ひ出したやうに部屋を出て行く）

幸七　（不審さうにあとを見送り、立つて廊下まで出て、息の行つた方を見て、また座へ戻る。嘆息する）

（妾のおとよ登場、湯上りの樣子。）

おとよ　旦那！

幸七　なんだい。

おとよ　お風呂がよく湧いてゐますよ。もう一度お寢みの前にお入りになりませんか。拔いて仕舞ふのには勿體無

い。

幸七　まあよさう。（間）なあ、おとよ。智三郎にも困つたものだなあ。

おとよ　ほんとに、心配で堪りませんね。どこか山の、靜かな所へでも行つていらつしやる方がいゝかも知れません。

幸七　醫者は何と云つてゐるんだい。

おとよ　先生は、もうすこし藥で落着かせてからでないと、うつかり旅行はさせられないと云つていらつしやいます。

幸七　（暗い顏）氣でも違はれたら大變だなあ。あいつのお母のやうな事でもされた日には大事だね。

おとよ　左樣ですね。（女中茶を持つて來てすぐ去る）

幸七　美津子はまだ歸らないか。

おとよ　えゝ、まだです。お珍しい事ですのね。なんですか古いお友達の方が急に逢ひたいと云つておいでになつたのですつて。

（智三郎登場する。）

おとよ　おや、若旦那。

智三郎　お父さん、僕はすこし御相談があるのですが。

幸七　なんだい。

智三郎　……どうも僕は非常に頭を惡くしてゐますので、またすこし旅行でもして來ようかと思つてゐるのです。

幸七　うむ、それはよからう。

おとよ　今も旦那樣とさうお話ししてゐたのですよ。御旅行が一番ですよ。

智三郎　えゝ。

幸七　どの方面だい。今度は。

智三郎　英國へ行かうとおもひます。

幸七　英國だつて？

智三郎　えゝ。內地では駄目です。

幸七　でもそれはあんまり遠いぢやないか。

智三郎　遠い？　さうです、遠いことは遠いのですが、僕の身體の爲には非常にいゝのです。

おとよ　美津子さんはどうなさいますの。

智三郎　美津子も連れて行きます。美津子はさぞ喜ぶでせう。

幸七　だがそれはよく考へて見なくてはいけないね。

智三郎　よく考へて見た後なのです。どうも僕はお父さんと一緒に暮してゐる事は出來ないのです。

幸七　どうして。

智三郎　お父さんと僕とはまるで合はないのです。お父さんの傍に僕が暮らしてゐると、僕はだん／＼衰弱してしまひます。身體も心も弱つて行つてしまひには死ぬか氣

狂ひになるかです。母さんのやうに氣が狂つてあんな死にざまをするに違ひありません。

幸七　おい智三郎、そんな馬鹿な事はありやしないよ。わしと一緒に暮すのがいやならばどうも仕方がないから、外にどこかへ家を建てゝやるから……。

智三郎　いや、それはお斷りします。內地ではとても暮らしてゐられません。――恐しい敵がゐるのです。僕等はいつ殺されるか知れないのです。

おとよ　若旦那！　もうそんな事を仰有らないで、今夜はおやすみになつていらつしやいませんか。

智三郎　いや、大丈夫です。どうもお父さん、僕は恐しくて堪りません。今に僕はどうかされてしまひますね。早く日本を逃げ出さなくては。この家の廻りを、そいつがつけ狙つて、僕の出るのを待つてゐるらしいのです。だから、そッと逃げ出さなくてはいけません。(間)　僕は恐しくてたまらないので、寐ても夢ばかり見てゐます。寐られないのもそれからです、僕の頭の惡いのも、それを心配するからです。

幸七　……一體誰だい、それは。

智三郎　四五人居ますよ。とにかくお父さん、その英國行を許して下さい。さうでないと、どうしても駄目です。それに、もうこの事は、彼奴等が知つてゐるらしいのです。

おとよ　彼奴等つて云ふと。

智三郎　僕を狙つてゐる奴等ですよ。僕の頭の中を透視する奴がゐて、それが彼奴等に敎へるのですね、それで僕の考へてゐる事が先方へよくわかるのです。英國へ行けばその心配は無くなりますからね、頭も身體も自然よくなりますよ。(考へて)　僕はコップへ蠅を伏せた事がありますがね。その時思つたのですがガラスの家をこしらへて、そこへ入つてゐるといゝとおもひますよ。さうすれば、彼奴等が僕の家のまはりをうろ／＼して隙を覗つてゐるのがよくわかりますから。(間)　とにかく、美津子が歸つて來たら、よく話して、最近の船室を買つて置きませう。

おとよ　でも若旦那。美津子さんはもう長い御旅行はいけますまいよ。

智三郎　(ぎよッとする)　えッ、では美津子はどうかしたのですか。

おとよ　いゝえ。ほれ、姙娠しておいでになりますからね。そんな遠くへはいらつしやれませんでせう。

智三郎　(ほッとして)　あゝ、さうですか。なるほど、あれは姙娠してゐましたね。(考へる)　でも、あれだけを置いて行く事は情に於て忍びません。可哀相です。

おとよ　さうですとも。ですから今度の御旅行はやはり近間になすつて、御産があつた後に、遠くへおいでになる方がよろしいでせう。

智三郎　（沈み切つて）あア、ではやはり駄目ですねえ。（立つ。靜かに去る）

幸七　（おとよと顔を見合せる）見てやつておくれではないか。すこし變だ。

おとよ　（不安さうな樣子）ほんとにどうなすつたのでせう。

（おとよ出て行かうとする。と、今出て行つた智三郎がすぐ歸つて來る。）

智三郎　父さん。（はツきした調子で）僕は今、變な事を云ひましたか。

幸七　いや、別に……

智三郎　（後頭部を平手で叩きながら）どうもこゝが痛くていけません。ひどく惡くしてしまひました。取止めのない事を考へてならないのです。何を云つたのだか。（うつとりした眼で）どうも思ひ出せません。（おとよに）どうか氣にしないで下さい。（淋しい微笑）心配をかけて濟みません。

おとよ　（安心して）……あの、おやすみになりませんか。

智三郎　えゝ。藥の力で眠るので、疲れていけません。それに、大分利かなくなりました。お父さん、美津子は可哀相な女です。僕が頭をわるくしてゐるので、それをひどく心配してゐるのですね。（おとよに）此節はあれも痩せましたね。

おとよ　（曖昧に）えゝ、すこし。まだ夏やせがもとへ戻らないのでせう。

智三郎　（ふと落涙する）お父さん、あなたも氣の毒な方です、淋しい方です。

幸七　（わけもなくこれも涙をこぼす）あゝ、ほんとにさうだよ。

智三郎　……ねえ、此商買をやめて下さるわけにはいきませんかね。

幸七　（沈默）

智三郎　いつも云ふ事ですが……そして暢氣にくらして下すつたら、僕たちもどんなにいゝかわかりません。どうせお父さんのあとは、僕には此商買はやれないのですから。

幸七　然し、三十萬に近い貸付金だから回收には間があるし、よその同業者へ讓るとした處で……。

智三郎　いや、同業者へ賣つてはいけません。

幸七　では回收するのを待つより仕方がない。

智三郎　いえ〳〵。とれるだけとつてあとは全部棒を引い

てやつたらば今日か明日でも閉業出來ませう。
幸七　（驚いて）馬鹿な事を云つてはいけないよ。そゝそんな事が出來るものかな。
智三郎　然し、今迄に儲けた金は莫大ですから。
幸七　（腹立たしく）そんな事をしたら、先祖の物を減らすやうになる。申譯無くて出來ない。第一、家の收入と云ふものが無くなつてしまふ。
智三郎　家賃や地代でも月に七八百圓あるでせう。
幸七　それ許り仕様があるものか。とにかくわしの商賣は、わしに任せてお置き。餘計な心配はいらないよ、お前が憎まれるわけはない。世間でいやがられたところでわしだけだ。
（手代文治登場。）
文治　旦那！
幸七　おう、客は歸つたかい。
文治　いえ、まだなんです。香川の信彥さんの弟だと云ふ方ですが。
幸七　なに、香川の弟息子だつて。
文治　へい。いくら用を聞いても云はないで、ぜひ旦那に逢はせろと云ふのです。
幸七　あいつは太い奴だ。己を撲つて留置場へやられた奴だ。
文治　あア、あの男ですか。
幸七　費ひ込みをして逐電してゐるのださうだが、金でも貸せと云つて來たのだらうな。
文治　いえ、さうでも無いやうです。金を返しに來たのだなんて云つてゐましたが……何だか知れたもんぢやありません。
幸七　とにかく逢はう。隣室へ通して呉れ。
文治　へい。（去る）
智三郎　信彥さんの弟ですね。（立つ）おとよさん、美津子はまだのやうですね。
おとよ　もうぢきお歸りでせう。おやすみになりますか。
智三郎　もうすこし起きてゐませう。どうせ寐られないのです。（退場）
幸七　（おとよに）銀太郎は寐たかい。
おとよ　いえ、まだです。もう寐かせてやりませう。（退場）
（下手の部屋へ文治に案内されて香川正之助登場する。憔悴してゐる。落着かない様子。）
文治　（仕切の襖をあけて）お通ししました。
幸七　（うなづく）
文治　（去る）
幸七　（次の間へ入つて行く）やア、今晩は。

正之助　今晩は。(苦笑)　いつぞやは失敬しましたね。おかげでひどい眼に會はされた。
幸七　亂暴な事をしなさるからね。
正之助　まあ、それはいゝ。過ぎた事だ。だが、此處の番頭はコケですね。今の男さ。あたしが金を返すのだと云ふのに、あなたに逢はせて與れないのだ。さんざ手古摺らせやがつた。(ふところから袱紗を出す)……親父の借金、壹萬いくらとか云ひましたね。兄貴がひどく弱つてゐるんだ。そつくり現金で返しますぜ。(札束を出して置く)
幸七　(狡猾に眼を光らす。然し、手は出さない)……えらい景氣ですな。
正之助　木の葉ぢやないんだ。よく見て下さい。たゞやるやうな氣がしないでもないが、親父が馬鹿な事をして置いたのだから仕方がない。
幸七　(冷笑)
正之助　……さア、請取つてお與んなさい。(皮肉に)二三枚多いかも知れないが、多くつても返すには及びませんせ。尤も返す柄でも無いけれど……
幸七　香川さん!　この金では、お父さんの證文は返せません。
正之助　どうして。

幸七　これは不正の金だからね。
正之助　(顏色を變へる)　何んだと。
幸七　(せゝら笑ひして)　店の金をくすねたんぢやないか。ちやんと種は上つてゐるんだ。
正之助　冗談云つちやアいけない。(强ひて笑ふ)　寐惚けた事を云ひつこなしだ。
幸七　とにかくお前さんからは金を請取れないよ。(立つ)用が濟んだら、早く金を持つて歸つて下さい。
正之助　ぢやア返して貰ひたくないんだね。
幸七　お前さんは警察で探されてゐる人なんだよ。密告しないだけがこつちの深切さ。早くそんな金はもとへ返して詫を入れるがいゝ。出つた金を請取つたつてどうせ後には吐き出さなくてはならない。手がかゝつて迷惑だ。
正之助　(脣を嚙む)　勝手にしやがれ。(煙草盆を叩きつける)
幸七　——畜生。
正之助　(金を持つて、素早く室を出て行く)
幸七　(あとを追はうとしてやめ、飛散した火を急いでつまんで拾ひ込む。拾ひ終つて呼鈴を押す)
(智三郎上手へ靜かに姿を現しやがて去る。)
女中　(登場)　はい。
幸七　これ、大變だ。灰だらけだ。雜巾を持つて來て方々

拭いて呉れ。

女中　おや、まあ。

幸七　火はもう拾つた。灰を掃きよせてくれ。どうも亂暴な奴には叶はない。

女中　はい。（退場。やがて荒神箒と塵取を持つて來て掃除よろしく）

おとよ　（慌しく登場する）旦那！　大變な事が出來ました。

幸七　（わけは解らずびつくりする）なんだ、大仰な。びつくりするぢやないか。どうしたのだ。

おとよ　美津子さんが大怪我なすつて、今あの、お玄關へ釣臺で……。

幸七　怪我を……？　どうして。

おとよ　どこからか落ちたのだと云ふ事です、一緒に落ちた人も此處へ連れて來ました。美津子さんはもう口はきけません。も一人の人がはつきりしてゐるので、此處が分つたのです。

幸七　（あわて丶出て行く）

おとよ　（續き去る）

（舞臺暫く空虚。）

（下手から靜に美津子の死骸を運んで來る。續いてすぐ香川信彦を乘せた擔架を持取む。）

（——人夫、手術服を着た醫師、係りの役人など隨ふ

幸七とおとよも續く。おとよは泣いてゐる。）

醫師　こちらの御婦人の方は途中まで息がありましたがもう駄目です。こちらの方はまだ……

幸七　（進つて）この方をうちへ擔ぎ込まれても迷惑します。これは牛込矢來の香川信彦と云ふ者です。

係りの役人　いや、そんな事を云つてもいけない。この人がしつかりしてゐなければ、女の方もどこの人だか分らなかつたのだ。知合ならば猶更です。一兩日は介抱をしておやんなさるがい丶。

幸七　知合と云ふわけでもないので、それに、ちやんと家も知つてゐますから今日にも……

醫師　然し、この人だつて、牛込まで連れて行くまでにどう變が來るか知れやしません、とにかく三池へ連れて行つて呉れい、と云ふので、此處まで運んだのです。まさかすぐに追出しも出來ないでせう

幸七　（未だ何か云はうとする）

おとよ　（氣をもんで袖を引く。幸七默る）

幸七　智三郎を呼んでおいで。

おとよ　でも、もしや逆上でもなさると……。

幸七　い丶から呼んでおいで。

おとよ　はい。（退場）

幸七　（役人に）どうして又、二人ともそんな處から落ちたのでせう。
役人　どうもわざと飛び降りたらしいですね。深いわけがあるやうです。お心當りは無いのですか。
幸七　えゝ、有りません。
信彦　（苦しげにうめいて）……智三郎君！　……智三郎君！
醫者　（やさしく）おきに來る。靜かにしてゐなくてはいけない。
（智三郎登場。）
幸七　おゝ智三郎！　大變が出來たよ。
智三郎　（あたりを見廻して）全體、これはどうしたのです。
幸七　それ、そこにゐるのが美津子だ。
智三郎　（傍へ寄つて肩へ手を掛ける）……美津子！　おい、美津子！
醫師　お氣の毒ですが、途中でいけなくなりました。
智三郎　いけなくなつた？　死んだのですか。（叫ぶ）死んだのではないでせうね。（父親を咎めるやうに）美津子はどうしたのですか、父さん！　（煩悶す）あゝ、やつぱり死んだのだ。
幸七　カフェの三階から落ちたのだ。この香川と一緒に心中したのだ。
信彦　智三郎君！　僕は君の細君を奪つたのだよ。僕等は……。
（一座色めく。）
智三郎　なに、心中だつて。
信彦　……君の最愛の人は僕と心中したんだ。僕はこれですこしは胸が晴れた。苦しめ！　苦しめ！　僕は君の苦しむのを見て死ぬのだ。氣がちがふ程苦しむがいゝ。僕等一家の仇敵、この三池の家へ禍が這ひ込み初めたのだ。あゝ……死んで行くものゝ唯一の復讐をしに、僕はこゝまで運ばれて來た。（叫ぶ）己は三池の一家を呪ふ。己は三池の家を地獄にしたい。うゝ。
醫師　君、興奮してはいけない。ね、ね、靜にしてゐなくてはいけない。
智三郎　（初めは烈しく驚き、次に冷靜になつて、信彦に注視する）
信彦　……己はもうやがて死ぬ。だが……親父の負債をどうしよう。（煩悶す）あゝ、己が死んだら……負債は……負債は　（うつゝのやうに）だが一ッの復讐をすませた。美津子さんは僕と心中したのだ。智、智三郎君、君の細君は僕の手に抱かれて死んだのだ。
智三郎　（思はず近寄つて何か言はうとしてやめ、父を顧

め役人たちに云ふ）わたしはこの男とすこし話がありますので、一寸の間、あちらへ行つてゐて下さい。
幸七　（役人たちに）ではちよつとこちらで。
役人　（智三郎に）では、あとですこし伺ひたい事もありますから……。
智三郎　はい、ぢきに濟みます。
役人　では、あちらで待つてゐます。
（皆續いて退場する。）
（智三郎と信彥殘る。）
（沈默。）
智三郎　（ぢつと考へてゐたが、やがて立つて、父の机の前へ行き、あたりを探して金庫の鍵を探し、金庫を開けてそこから澤山の袋へ入れた證書を出す。それを一々しらべて、中から一ツ拔く。）
信彥　（息をせい〳〵云はせて、苦しげにうめいてゐる。）
智三郎　（靜かに）信彥さん！　香川さん！
信彥　（やうやく眼を開ける）
智三郎　これ、これを見たまへ。これは君の家の負債ですよ。證書ですよ。わかりますか。わかる？　ほれ、二枚ある。心配しないでもいゝ、これは僕がかうして……（破る）破つてしまふ。ね、ね、安心して下さい。安心して……（泣く）
信彥　……智三郎君、ではそれは、僕をゆるすのか。僕を……。
智三郎　親父の責任はわたしが持つ。どうか安心して下さい。どうか……。
（沈默）
信彥　（歯を喰ひしばるやうに煩悶する）
智三郎　どうした、どうしました。
信彥　あゝ、僕は、僕は面目無い。面目無い。僕は卑しい人間だ……君！　美津子さんを殺したのは僕だ。
智三郎　（やさしく慰めるやうにうなづく）
信彥　（譫妄狀態になる）美津子さんは立派な婦人だつた。あの人は命を賭して貞操を守つたのだ。高潔な人だつたのだ。……それを、それを……あア恥しい。顏を隱して吳れ。恥しい。眩しい。隱して……隱してあゝ、許して吳れ……（息絕える）
智三郎　香川さん！（近づいてゆする）香川さん！
（沈默。）
智三郎　あゝ、死んだ。可哀相な人が……。（妻の死骸を抱くやうにして）美津子、お前も死んだのか　可哀相な女よ。なぜ僕を殘して死んでしまふのだ。僕はこの先どうして生きて行けばいゝのだ？　敎へて吳れ！　どうすればいゝのだ！　（慟哭する）お前は死んだ。僕はお前

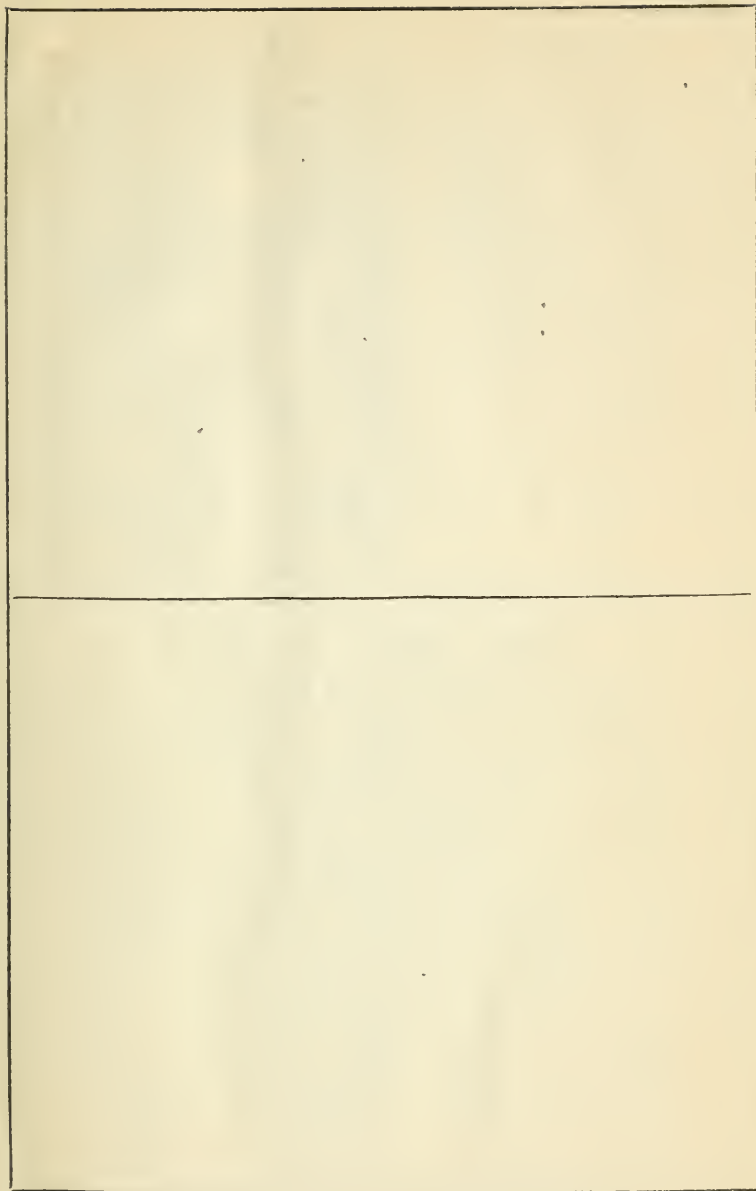
の一生を打砕いたのだ。すべての罪は僕にあるのだ。許してお呉れ。許して。（死骸の上へ折れる。やゝ間）さうだ。死んで行く人へ餞別を……。

（立つて金庫の中の證文を全部取出して、それを火鉢の中へ破り捨て、袂からマチを出して火を點じる。證書はひら〳〵と燃え上る、どこかに遠く犬が遠吠をしてゐる。）

智三郎　（ぢッと火を見つめながら）美津子……ほれ、御覽。美津子、美津子。

（ふと、襲はれたやうに立ち、よろめいて美津子の上へ倒れる。そして物狂はしく泣き苦しむ。）

——幕——

解　說

久米正雄篇解說

久米正雄氏は明治二十四年十一月二十三日長野縣上田に生れた。

氏が數へ年八歳の時に、父君が奉職して居た小學校に火災が起り、御眞影が消失した。父君はその責を帶びて自殺したので、一家を擧げて、福島縣郡山在桑野村に移り住むことになつた。從つて氏の青少年時代は其地に過ごされたわけであつた。材を田園にとつて物される氏の戲曲が、常に東北地方を舞臺として居るのは、其處が氏の故郷であるからにほかならない。

明治四十三年、縣立安積中學校を卒業した氏は、直ちに上京して第一高等學校へ入學した。菊池寛、山本有三、芥川龍之介諸氏と同級であつた。

氏が高等學校に在學中のことであつた、當時學生の人氣を背負つて立つて居た萬朝報が、夏期休暇を利用して學生徒歩旅行といふものを企てその選手を公募した。氏はその競爭試驗みたいなものに應じて、多數學生中から見事選手にえらばれた。東海道であつたかを徒歩で旅行する氏の流麗な紀行文は日毎に滿都の學生の血を湧かせたものであつた。これは、如何に早くから氏が才筆の所有者であつたかを語るよき挿話ではあるまいか。

ついで大正二年、氏は東京帝國大學英文科に進んだ。そして翌年、菊池、山本、芥川、豐島與志雄、山宮允の諸氏と同人雜誌第三次「新思潮」を發刊し大いに創作の道に精進した。この雜誌の創刊號の六號記事に氏は「此頃はしつきりなしに山本と喧嘩をしながら芝居のことばかり考へて居る。」といふ一節がある。これによつても氏が早くから戲曲に志をもつて居たことが看取出來るのである。

氏の努力は空しからず、大正三年三月「牛乳屋の兄弟」(「牧場の兄弟」と改題されて本集に採錄されたるもの)を「新思潮」誌上に發表し得るに至つた。これは氏の長幕物としては處女作であつて、その時代にあつては珍らしく寫實的社會劇の體を備へて居る堂々たる作品であつたゝめ、大いに文壇劇壇の反響を呼び、同年九月、新劇協會の手により有樂座に於て、早くも脚光を浴ぶるの幸運に惠まれた。時に久米正雄氏年齒わづかに二十四歳であつた。これに勢を得た氏が更らに勇を鼓して戲曲の研究と創作とに精進したことはいふまでもない。

大正五年氏は大學の業を終つたが、卒業以前に於て氏は既に作家としての名聲を文壇に唄はれて居たかの觀があつ

た。

卒業後氏はさらに芥川、菊池、松岡讓氏等と相結んで第四次「新思潮」を起し小說に戲曲に旺にその椽大の筆を振ひ、傍ら夏目漱石氏の門に遊んだ。此間に「地藏敎由來」「三浦製絲場主」等が發表されたのであるが、時恰も新創作劇壇の黎明期に際し、氏の戲曲は相次いで舞臺の上に試みられ、わが久米正雄氏は忽ちにして一代の寵兒、劇壇の第一人者となつてしまつた。

氏は、多くの作家が殆ど例外なしに經驗して居る苦難の時代といふものを、その文學的生涯のうちに持つて居ない。これを神秘的なる運命といふものに歸せしむるよりも、編者は氏の豐かなる才能に歸せしむる方が當つて居ると思ふ。久米正雄氏は才能の人である。戲曲に小說に批評に雜文に、寶に行くとして可ならざるなき融通性を備へて居るのが氏である。特に驚くべきはその明朗暢達なる文章である。氏は今日の多くの作家中隨一の文章家であると言つても過言ではあるまいと思はれる。而して戲曲の場合にあつてはこれが變通自在なる白となつて表はれて居る。吾人が本篇の戲曲を通讀して先づ氣附くところは、氏の作品が如何にもヴアラエテイに富むといふ事實である。あらゆる形式、あらゆるテーマが氏の才筆に依つて自在に戲曲化されて居る。喜劇、悲喜劇、農民劇、社會劇、家庭劇、室內劇――此處にも端倪すべからざる氏の融通性の表れがあるのである。然かも之を貫いて輕快なる一脈の明るさがある――氏が一代の流行兒たるまた故なしとしない。

初演年表

一　牧場の兄弟　大正三年九月　於有樂座　新時代劇協會

二　地藏敎由來　大正八年二月　於明治座　井上正夫一派

三　三浦製絲場主　大正九年二月　於帝國劇場　幸四郎勘彌輔導女優劇

四　阿武隈心中　大正十年一月　於有樂座　井上一派及帝劇女優

五　心中後日譚　大正十年十月　於明治座　猿之助、松蔦等春秋座

六　金井博士父子　大正十一年十二月　於有樂座　猿之助、勘彌及帝劇女優

七　夏の日の戀　大正十二年六月　於帝國劇場　宗之助輔導女優劇

八　安政小唄　大正十三年四月　於演伎座　澤田正二郎一座

九　歸去來　大正十三年十一月　於帝國ホテル演藝場
新劇協會

横光利一篇解説

横光利一氏の本籍地は大分縣宇佐郡長峯村字赤尾であるが、生れたのは福島縣東山温泉に於てゞある。明治三十一年三月十七日誕生、まだ三十一歳の青年作家である。

おそらく父君の任地と共に轉々したものであらうか、滋賀縣大津尋常小學校に入學して以來、十ヶ所以上の小學校を渡つて歩いたといふことである。その癖小學校入學以前は東京に在住した記憶があるとのことであるが、いまだ學齢に達しない幼年時のみを過した東京を氏の故郷と呼ぶことは出來ない。小學教育を終るまでの氏には故郷がなかつたわけである。

後、三重縣上野中學校に入學し、今度は卒業するまで同校に在學した。氏がどういふ因縁で上野中學校に入學したかといふと、母堂の生地が三重縣東柘植であつたからのことである。この地は俳聖芭蕉の出身地であつて、氏の祖母にあたる人は芭蕉の生家松尾家から横光家へ嫁したものであつて、その名を松尾はなといつたとのことである。從つてわが少壯戯曲家横光利一氏の血管には、曾て芭蕉翁の血管を流れた血が流れて居るわけである。

氏の中學生活は處を變へずに東柘植の地に引續いて營まれたが故に、氏が少年時代の記憶は主として此地にある。即ち氏の頭にある田舍といへば、三重縣東柘植なので、此意味に於ては、この地を氏の故郷と呼んでもよいかも知れない。

中學卒業後は直ちに上京、早稻田大學英文學科に入學、一時退學したが講義には一向出席しなかつたらしい。在學六年にして政治科に轉科したが、半ヶ年にして父君の死去に會ひ、半途にして學業を廢した。時に年齒二十五歳であつた。此間氏は下宿の一室に籠居して常に創作にいそしんで居たのである。

横光利一氏は「文藝春秋」の同人としてその文壇的活動をはじめ、大正十二三年頃所謂新感覺派の擡頭するや、その淸新潑剌たる作風の小説を引提げて同派の陣頭に立ち、旺に當時沈滯せる文壇を席捲して、新文學の闘將をもつて目さるゝに至つた。

戯曲の處女作「食はされたもの」は大正十三年第一次「演劇新潮」誌上に發表され、翌年二月帝國ホテル演藝場に於て新劇協會畑中蓼坡、伊澤蘭奢の手に上演された。「男と女と男」は大正十五年同じく新劇協會の上演するところと

なつた。

一體氏の戯曲の中心をなすものはそのテーマではなくて、新鮮な白によつて醸し出される感覺的情調である。「笑つた皇后」「食はされたもの」等をのぞけば、その何れの作にも殆ど筋立といふほどのものはない。そして面白いことは本篇に集められた六つの作品のすべてが女と男との關係を取扱ふことに終始して居る點である。男の愛情も女の愛情も一向あてにならぬ。それからそれへ移つてやまない。作者は冷い眼でリアリステキツクにそれを見て居る。作品の底に寂しい何物かゞ流れて居ることを感ぜしめられるのは其處から來て居るのである。要するに氏の鋭敏なる神經の動きについて行き得ない人には氏の戯曲を鑑賞することは困難である。

なほ本篇中「笑つた皇后」は氏の最近の作品である。手もとに材料がないため、詳細なる年表を擧げ得ないことを遺憾とする。

邦枝完二篇解說

邦枝完二氏は明治二十六年一月一日、東京麹町區平河町に生れた。生家は代々田安德川家の馬術指南役であつた。そして父君は和鞍乘馬術に於ける最後の人であつたといふ。母堂は日本橋瀨戸物町の飛脚問屋島九郎兵衞の長女であつたが、氏が三歲の時に歿した。

氏は麹町小學校、商工中學を經て、慶應義塾の文科へと進んだ。けれども元來學究的傾向の強くない氏は、あまり勤勉な學生といふわけには行かず、好んで自由の生活を追ひ、講義に出席することは少かつた。深く永井荷風氏に私淑してその門に遊び、專ら戯曲の研究と創作とに傾倒したのであつた。戯曲「一寸した不安」を永井荷風氏の推薦により三田文學誌上に發表したのもその頃であつた。氏は學業半にも至らぬうちに慶應義塾を退學した。

その後、夜間外國語學校の專修科に通つて伊太利語を學んだ。氏の形に表れた所謂學歷は以上でつきる。

やがて時事新報の文藝記者となつて五年、此間戯曲執筆をたゝず、のち帝國劇場の文藝部に入つた。氏が此處に在任中氏の作品「篠原一座」と「明暗錄」との二篇が宗之助、勘彌等によつて上演された。

著書には戯曲集「邪劇集」「異敎徒の兄弟」「立春大吉」「靑春」、演劇評論集「劇壇獨步錄」「戯曲の見方」小說集「雨中双景」等がある。

以上の小傳によつても窺はれるやうに邦枝完二氏は純粹な都會人である。都會人の血を承け繼いで都會的環境のう

ちに成長した。

次の一文は氏の處女戲曲集「邪劇集」からの切拔であるが、最も雄辯に氏の人となりを語つて居ると信ずる。

「惠み深いお天道樣は、私のやうな不孝者にも、勤勉な人達と同じやうな、有難い御慈悲を與へて下さる。その太つ腹なお惠みに甘えるわけではないが、私は今日も斯うして、日當りのいい朝の窓際に寢ころんだまま、近所の仕込妓が浚ふ稽古三味線の、あぢきない音を聽くともなしに聽いてゐる。

花火からべつたら市、そして木枯が濱町河岸の月夜に吹きそめると、間もなく羽子板に賑ふ藥研堀の市が出る。――」

これが邦枝完二氏の身體から釀し出される雰圍氣である。仕込妓の稽古三味線、花火、べつたら市、濱町河岸、年の市――さういふ情調が氏の作品にも自づと表れて來るのはまた當然である。「中村仲藏」の最初の場にも、「通俗震災記」の指萬の宅の場にもその江戸風な都會情調が遺憾なく描き出されて居るではないか。

長く劇壇の實際に携つて居た氏の戲曲はまた玄人の戲曲である。本篇中のどの一篇をとつても舞臺上の技巧の巧に行き渡つて居ること驚くべきものがある。

「中村仲藏」にあつかはれた傳說は有名な物語であるが、氏は主人公の藝術に對する熱意を主題として、人間の止むに止まれぬ意地を綴り込み、これに新しい生命を吹きこんで居る。

「井底の兄弟」に於ては古い傳統的道德に對して鋭いメスを加へ、人間の本然とそれが如何に矛盾するかを指摘し、結局兄弟と雖も愛慾の爭鬪のまへには、義理と道德とを蹂躪せざるを得ないといふ事實を語つたものである。

「通俗震災記」は作者にとつては、あの忘るべからざる一大災禍の記念であるらしいが、讀者にとつてもまたその頃の記憶をまざ〳〵と思ひ起こさせるものがあると思ふ。けれども此作品の意味は勿論其處にのみあるわけではない。倒れた家の下に壓死せんとする弟を兄が遂ひに見捨てゝ立ち去らなければならなかつた、さうして發狂した。そこに吾等が考へなければならぬ問題があることを看落してはならない。

「盜賊戲談」は作者のウヰットの愉快に表はれた喜劇、併せて維新改革當時の人情風俗を窺ふことが出來ておもしろい。

作品年表

通俗震災記　大正十二年九月作

盗賊戯談　大正十四年七月作
井底の兄弟　大正十四年十二月作
中村仲藏　大正十五年十二月作

北尾龜男篇解説

北尾龜男氏は明治二十五年八月二十五日、赤坂區表町に生れた。四谷石山高等小學校を卒業すると日本橋二十銀行に給仕として勤務月給參圓を給せられた。好學の志に燃ゆる氏は同時に大倉商業學校夜學部に入學したのであつた。此學校で氏は鈴木泉三郎氏と相知つたのである。

氏の文學的生涯は早くから始まつた、そしてその第一步に於て不運であつた。氏は僅に十六歲にして雜誌「江湖」の懸賞募集に應じて小説を投じ見事當選したが、偶々此作が官憲の忌違に觸るゝところとなり、風俗壞亂罪を以つて起訴され、氏は法廷に立つこと三回、遂ひに罰金貳拾圓を科された。ところが災難はこれだけですまなかつた。銀行はために諭旨免職となり、その上生家を追はれて上海の從兄の店に遁れなければならなかつた。然かも氏の文學に對する熱情はこれがために却つて旺になり、上海滯在中函館北海新聞に長篇小説「自然力」八十回を連載したのであつた。

一年にして上海より歸り麴町平河町の母型製作所の字書きとなつた。月給十二圓の生活難と戰ひつゝ氏は此間にも「文章世界」「早稻田文學」「スバル」等に勇敢に小説を書き續けた。また友人鈴木泉三郎氏と共に水野葉舟氏の門に遊んで、文學研究の道に精進した。演伎座に市川壽美藏、中村勘五郎等の「伊勢音頭」を見物して大いに感動し、戲曲に向はんとする志をやゝ起すに至つたのも此頃のことであつた。同年氏は伊勢新聞に長篇小説「煙」百回を執筆して居る。

翌四十四年水野葉舟氏方に寄寓し、同時に「文章世界」の訪問記者となつた。

大正元年八月日本飛行協會創立事務所に入り、同八年六月帝國飛行協會主事となつた。氏に飛行機、飛行家に關する作品があるのは、かういふ經歷があるためである。

氏は大正八年十一月、戲曲「集散」一幕を國民新聞一萬號記念懸賞募集に應じ首尾よく當選して賞金五百圓を贈られた。蓋しこれが氏の戲曲としては處女作であらう。此作は翌九年二月、帝國劇場に於て、松本幸四郎、河村菊枝、初瀨浪子等の手によつて上演され、氏の聲價は大いにあがつた。

ついで大正十年秋には都新聞に長篇小説「空かける人」

百三十五回を書き、十一年末に帝國飛行協會を辭して作家としての生活に入つた。

大正十二年九月、大震災後の演劇復興促進の意味にて高級演劇雜誌發刊を主唱し、時の劇作家協會に提議し、その賛同を得、山本有三氏、能島武文氏と共にその編輯に從事することとなり、翌年一月遂ひに志を貫徹して「演劇新潮」を世の中に送り出した。この雜誌は復興途上の劇壇に實に大きな功績を殘したもので、この事業を主唱した氏の劇壇に對する貢獻は沒すべからざるものである。

大正十三年、都新聞に長篇小說「輝く都會」百八十回を書いた。十四年五月「演劇新潮」の廢刊と共に新潮社を退いたが、同十五年春頃より輕微な神經衰弱症に犯されてゐるとのことである。

本篇に採錄した北尾氏の戲曲はすべて氏が「演劇新潮」の編輯に從事し始めて以後の作にかゝるもののみである。

北尾氏も亦邦枝氏と等しく都會人である、勿論その形は違ふ、氏は苦勞した都會人とでもいつたらあたるかも知れない。都會人らしい才氣を溫かな人情がこまやかに裏づけて居る。「壺坂」、「主人のない母子」、「花束」、何れを見てもうら寂しい、しかも溫い人情がひた〱と讀む人の胸に迫つて來るものがあるではないか。

氏はまたよきユーモリストである。「碁どろ」「女よ、氣をつけろ！」何れも實に愉快なファルスである。勿論「女よ、氣をつけろ！」には現代の輕い生きかたをして居る女に對するゑぐるやうな皮肉があること贅言を要しないのである。

作品年表

作品	年月
碁どろ	大正十三年一月作
死刑四	同　二月作
ある別れ	同　三月作
「あゝ書けない！」彼	同　十一月作
壺坂	大正十四年一月作
女よ、氣をつけろ！	同　二月作
主人のない母子	同　四月作
花束	大正十五年三月作

鈴木泉三郎篇解說

鈴木泉三郎氏は明治二十六年五月十日、東京青山に生れた。

明治三十八年四谷第二小學校高等科二年修業、神田萬世

銀行に奉職し、のち四谷銀行に轉じた。此間大倉商業學校夜學部全科卒業、のち國民英學會に學んだ。大倉商業在學中北尾龜男氏との交友がひらけたのは北尾氏の項で述べた通りである。

氏は藻の花、千山樓などゝ號して早くから短歌、俳句に耽り、水野葉舟氏の門に遊んだ。また當時故片岡市藏の「辨慶上使」を北尾氏と共に見物したのが病み付きとなり、屢々同座大入場、立見場等に通つたといふことであるから、此頃からして氏の芝居に對する愛着はなか〳〵深かつたものと見える。

その頃水野氏の推薦にでもよるものであらう、氏は北尾氏と共に秀才文壇に毎號「東京印象記」を執筆して居たことがある。

大正二年になると銀行をやめて共同火災保險會社に入つたが、その年長篇小說「破傘霙夜話」を博文舘の講談雜誌に發表した。

かくして多難な氏の文學的生涯は漸く進んで行つたのだが、ついで三越吳服店の懸賞脚本に一幕物を投じ選者松居松葉氏等の選ぶところとなり、賞金百圓を贈らるゝや、爾來劇作家たらんとする氏の志望は動かすべからざるものとなつて、故岡村柿紅氏に私淑して愈々戲曲研究に勵んだのであつた。當時雜誌「演藝倶樂部」に豐島屋主人、伊豆巳三郎等の匿名をもつて、「芝居見たまゝ」その他の演藝記事を執筆して居たが、これは後年戲曲家たる氏を造り上げる上に大いに役立つところとなつた。同誌の廢刊後は「演藝畫報」誌上に同樣の雜文を書き續けた。

大正五年共同火災の神戸支店詰を命ぜられたが、居ること半歳にして退職、歸京と同時に當時創立間もなき玄文社に入り、岡村柿紅氏の下に「新演藝」の編輯に從事した。これ氏が文筆に關係せる仕事をもつて生活を維持した最初であつた、時に年二十四歲。

越えて大正八年四月、河田富久子と結婚、同年戲曲「ラシャメンの父」「幸福」等をつくつた。同九年處女戲曲集「ラシャメンの父」を玄文社より發行したが、その二年前に兄茂氏を失つて傷痕いまだ癒えざる氏は更らに弟芳夫氏と死別するの悲みに堪へなければならなかつた。たゞ長女萬里子の誕生によつて氏は暗い心を僅に慰めたのであつた。

爾來氏の詩興は旺に燃えて多くの戲曲が相次いで發表されたが、同時にまた人生の苦惱は氏の身邊に蝟集し來るかの觀があつた。即ち十一年秋母堂を喪つた氏は、既に春より病んで四谷近藤病院に入院加療しなければならなかつた。數ケ月にして退院はしたものゝ、その後は絕えず病む人であつて、死の影は常に氏を脅してやまなかつた。そして大正十三年五月名作「生きて居る小平次」を絕筆として

三十二歳の若さで、大磯小千疊口の丘上に、秋十月の落日を追うて長逝したのであつた。

その生立が語つて居るやうに鈴木氏は頗る惠まれない環境にそのスタートを切つた。そして努力に努力を重さねてたうとうあそこまで來た人である。氏は天分の著しく豐かな人ではなかつたらしい。組織だつた文學的教養をうけて居なかつたことはその略歴を顧れば直ちに頷けよう。此事實が氏の作品全體の發展に異常な形式を與へて居る。學生として文學を研究した作家の初期の作品は既して思想的、内容的な或物はありながら、奔放な藝術的技巧に缺けて居る場合が多い。そして漸く作家としての實際の仕事を修練しつくして、筆力の自由を得た時分には却つて安易な通俗作家になつて了ふ。編者は鈴木氏がまつたくこれと反對な順序を踏んで居ることを指摘したい。初期の作品たる「ラシャメンの父」「美しき白痴の死」等は成程見た眼には面白いに相違ない。けれども生活の波動を其處から強く感ずるといふわけには行かない、それは深い思索の世界に觀客を導いて行くといつた風の力を備へては居ない。それが「山寺秘譚」「ホルカ止む」「生きてゐる小平次」等になるとぐつと生活へ喰ひ込んで來て居る。思索は徹底して來て居る。「生きてゐる小平次」の如きは完成したる藝術であり、大正時代を代表する戯曲の一つといつても敢て過言ではなからうと思ふ。作者の主觀の燃燒が極度に熾烈であつて、然かもその客觀化が完全だからである。史實傳説等を戯曲化することは多くの戯曲家によつて試みられて居る。けれどもその材料が作者自身の生活――勿論實際的生活、思索的生活のすべてを含めての話である――によつて強く呼吸を吹き込まれて居ない以上、出來た作品は藝術とよばれるに價しない。また、その作家の主觀的生活が表現されたる藝術の世界に狂ひなく客觀化されて居ない以上その生活は讀者若しくは觀客に正統に認識され得ない。此意味に於て「生きてゐる小平次」は名作と呼ぶことの出來る作品である。聞くところに依れば此戯曲の題名は發表以前には「死にきれぬ小平次」といふのであつたといふことであるが、實は「死にきれぬ泉三郎」なのである。文學的野心に燃える氏が、漸く擡頭しかけて不治の病にかゝつて、その絶筆として殘した作品、其處にあの戯曲を生かす力が潜んで居るのである。

因に此作品は山東京傳の復讐奇談「安積沼」に材を得たものであることといふまでもない。

鈴木氏は中道に斃れたといふ、然し「生きてゐる小平次」を書いたことによつて氏の藝術は完成したものといつてもよいと編者は思ふのである。

作品年表

八幡屋の娘　大正七年作
初演　大正八年七月　於帝國劇場　澤村宗之助　村田嘉久子等
ラシヤメンの父　大正八年作
初演　大正十四年　於松竹座　井上正夫一座
美しき白痴の死　大正九年作
初演　大正十三年　於中央劇場　木村操一座
高橋お傳　大正十年九月作
初演　大正十年十一月　於明治座　河合武雄、梅島昇等
谷底　大正十年作
初演　大正十四年六月　於松竹座　花柳章太郎、藤村秀夫等
火あぶり　大正十年作
初演　大正十年　於帝國劇場　獨立劇場一座
次郎吉懺悔　大正十一年三月作
初演　大正十二年二月　於市村座　尾上菊五郎一座
二人の未亡人　大正十一年五月作
心中の始末　大正十二年十一月作
山芋祕譚　大正十三年一月作
初演　大正十三年十一月　於日本橋劇場　兄弟座
生きて居る小平次　大正十三年五月作
初演　大正十四年六月　於新橋演舞場　尾上菊五郎
守田勘彌等

（編輯部編）

編輯校訂
責任
吉田甲子太郎
清水義政
佐藤十三郎

日本戯曲全集●第四十七卷
現代篇第十五輯●第八回配本

著作權者代表者檢印

禁無斷上演

昭和三年十月二十五日印刷
昭和三年十月二十八日發行（非賣品）

著作者 久米正雄
横光利一
邦枝完二
北尾龜男
鈴木泉三郎

發行者 和田利彦

印刷者 島源四郎

製本者 高崎鐵五郎

東京市京橋區南傳馬町二丁目
發行所 春陽堂
電話京橋六五 四一二
振替東京一六一七五

東京市小石川區諏訪町五六常磐印刷所印刷